（旧）神速果断のシャープネス～（新）にて、改良版連載中～

一撃必殺！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
（旧）神速果断のシャープネス～（新）にて、改良版連載中～

【Ｎコード】
Ｎ３５４６Ｅ

【作者名】
一撃必殺！

【あらすじ】
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８９９２ｍ／
神速果断のシャープネス（新）連載中。
改良版として、再出発します。

1章　誓約の湖

『見者』は剣の様に切り立った険しい山の頂上に住み、星に最も近い湖を封土としている。

湖の名は『天空の水盤』。湖面は鏡のように澄み渡り、力あるものが覗き込めばすべてを知る事ができる。失われたものや隠されたもの、遠く離れた場所、あるいは過去や未来さえも。

祝福の先触れが知らされたとき、人々は見者の言葉を求め、賛美した。

災厄の来襲が告げられたとき、人々はののしりの声を上げ、責任を問う。

見者は見たものをただ語るのみ。しかし、聞き手は見者に対して強い思いを抱かずにはいられないのだ。

故に見者は必要とされながらも恐れられ、崇められようとも遠ざけられた。

先代の見者は死に、天空の水盤を受け継いだのはわずか１６歳の少女。

彼女が見者となるにはあまりにも……。

＊

「天空の水盤か……」

視界いっぱいに広がる鮮やかな青色にシーグは圧倒されていた。

目の前には広大な湖。湖水は雲ひとつない青空を映し出している。

湖岸を取り囲む森がなければ、空と湖の境界線さえも分からない。

「だけど、肝心の見者は何処にいるんだ?」

湖面を覗き込むと汚れ放題の皮鎧を着た人影と目が合った。

「酷い格好だ」

シーグは苦笑いした。湖に写った少年も同じように肩をすくめる。

湖面は磨かれた鏡よりもはっきりとシーグの姿を写していた。
幼さの残る顔は汗まみれだ。山道を歩いてきたので、黒髪には枝葉が絡みついている。薄手の皮鎧は汗を吸い込んでまだら模様になっていた。腰には細身の剣があり、数本のナイフをベルトに刺している。
見るからに戦士の装備だが、鎧ごしにもわかるほど細身なので決して無骨には見えない。成長期によくある事で、背丈の成長に横幅がついてゆかないのだ。
「鎧がぼろぼろだな。修理するより新調したほうがいいかな」
髪に絡んだ枝葉を払っていると、人の気配を感じてシーグは顔を上げた。額の汗が頬を伝って湖面に落ち、波紋が広がる。
「誰かいるぞ！」
少し離れた湖岸から一人の男がこちらを見て叫んでいる。青色のマントに、節くれだった木の杖を持っている。シーグが手を振って応えると男は驚き、慌てて森の中に姿を消した。
「何だ？」
男が姿を消した辺りから怒鳴り声が聞こえた。そして、鳥が慌てて飛び立ち、枝葉の折れる音がこちらに近づいてくる。友好的な相手ではない。
９人……。いや違う、６人にやたらと大柄なのが１人だ。シーグは足音から予測した。
居場所を宣伝するように移動しているし、手際が悪すぎるので物盗りじゃない。そんなことを考えていると、どたばたとあわただしく森を抜けて壮年の男たちが現れた。揃いの青いマントには金貨を意匠化した紋章がついている。シーグは湖岸から離れた。
「ほう、黒髪か。そうとう若いな……その方がいい」
一番最後に大柄の男、三人分の足音の大男は、１人だけ真紅のマントを羽織っていた。金貨の部分にギラつく金糸を使っている。
ずんぐりとした１０本の指すべてに指に大きな宝石の指輪。そして、杖は金箔が張られていた。腕輪もずっしりとした純金製だが、

マントを止めるブローチだけが青銅で出来た質素なもので、よく見ればそれは商人ギルドの認証だった。
商人で魔術士。金細工を好む大柄な男。シーグは相手の正体に思い当たった。
「おい、お前。名はなんという」
太った男は尊大な態度でたるんだアゴを少しそらせた。その拍子で頬の肉が揺れる。
「シーグだ」
「ああん？　女じゃないぞ。小柄で細いが男じゃないか」
太った男は鼻息も荒く、不機嫌につぶやいた。
「見ればわかるだろう。お前の目は節穴か」
更にいうなら肉団子のくぼみにしか見えないが、と続けそうになったのをシーグは自重した。だが、それだけでも相手を怒らせるに十分だったようだ。太った男は腐ったりんごのような顔色になると、突然金色の杖を振り上げて手近にいた男を殴りつけた。
よろめいていた青マントは、立ち直ると再びもとの場所に戻った。奇妙なことに、取り巻きの青マント達は、ちょうど杖の長さほどの距離を開けて並んでいる。
わざわざ殴られやすい場所に並んでいるのだろうか？
「報告したのはお前じゃなかったか。まあいい。お前の名はそれだけか」
「ただのシーグだ」
「ふん、卑しい『家なし』か」
侮辱の言葉を吐いて、分厚い唇がめくりあがる。どうやら、笑ったようだ。
「そういうあんたは、ガイス・ジュサックだな」
これ以上、顔の肉がうごめくのを見たくないので、シーグは早口に言った。
「ほう、俺も有名になったものだな」
ガイスがカエルのようにゲラゲラと笑うと、他の6人も声を合わ

せて大笑いする。
　俺が噂に聞いたのは悪名のほうだ。と、シーグは心の中でつぶやく。
　手当たりしだいの女好き。常に取り巻きを従えるカエルの王様。シーグはガイス・ジュサックの風評に、縦幅と横幅と奥行きに大差がない男、と付け加えた。
「で、家なしのシーグ。貴様はこんなところで何をしている？」
「用事があるんだ」
　話すのもいやになってきて、シーグは適当に応えた。
「ここは魔術士の封士だぞ。勝手によそ者がうろうろするとは、俺を侮辱しているのか？」
「あんただってよそ者だろ」
「違うな。天空の水盤は俺のものだ」
「どういうことだ？」
　シーグが問いかけると、ガイスはげらげらと笑った。取り巻きの青マント達も横目でそれを確認して大笑いを始める。ガイスが突然ピタリと笑い声を止めると、青マント達もあわてて口を閉ざす。一人だけ笑い続けていたのを、ガイスは杖を振り上げて殴りつけた。
　無茶苦茶な奴だとシーグが呆れていると、ガイスはプルプルと顔に肉を震わせ始めた。さっきよりも顔がどす黒くなっていく。ものすごく怒っているのだろう、とシーグは見当をつけた。
「そうか。結婚を先伸ばしにして、時間を稼ぐつもりだな」
　ガイスはブツブツとつぶやいている。
「何の話だ？」
「あくまでも歯向かうというわけか」
「俺にも分かるように言ってくれ」
　シーグの問いかけにも答えず、独り言をつぶやいているうちに、ガイスの顔が今度はふくらんだ。取り巻きの青マント達も、恐る恐るガイスの様子を見守っている。
「よし、こいつを焼き殺すぞ」

突然、ガイスはシーグに向かって杖を向けた。次の瞬間、拳大の火の玉が飛んでくる。シーグは半歩横に移動するだけでよけた。火の玉は木の幹に当たると、ブシューと情けない音を立てて消えた。

「いきなりだな。頼むから俺の話を……」

ガイスは大上段に杖を振り上げると、気合の声とともに振り下ろした。だが、迫力に反して火の玉はさっきよりも小さい。シーグは足も動かさずに上半身だけ動かしてかわした。

「聞けよ、へたくそ」

「なんだとぉ！」

シーグが余裕を見せて言うと、ガイスは鼻息荒く怒り狂った。再び杖を振り上げる。

「魔術のことはよく分からないが、大振りはやめたほうがいいんじゃないのか？　集中して、正確に狙いを定めてだな」

「ええい、黙れ！」

親切心からの助言に耳を貸さず、ガイスは怒鳴った。

「貴様ら、力を貸せ。陣形を組むぞ」

「え！」

青マントたちは驚きの声を上げる。

「聞こえなかったのか、セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）だ」

ガイスが威嚇するように杖を振り上げると、青マント達はガイスを中心に集合し、懐から赤い板を取り出した。手のひらに乗るほどの大きさで、表面は岩のようにざらついている。生焼きにした魚肉に見えなくもない。

「セブン、なんだって？」

シーグの問いには答えず、ガイスは顔中に血管を浮かべて薄ら笑いを浮かべている。やはり、答えるつもりはないらしい。

魔術士っていうのは、もっと理性的で話せる人間と思っていたけどな。なとど、悠長なことを考えていると背中に痛みにも似た感触が走りぬける。

理由は分からないが、とにかく危険だ。ガイスが杖を振り下ろした瞬間、シーグは危険を感じて倒れこむように横っ飛びに飛んだ。

今度は一抱えもある火球がシーグの立っていた場所を飛んでいった。そして、木の幹に当たると轟音とともに爆発した。幹がえぐれて木がバリバリといやな音を立てて倒れる。

ガイスは続けざまに杖を振り下ろした。今度は、膨れたガイスの顔よりも巨大な火球が飛んでくる。シーグは地面を転がってよけると、火球は湖岸の岩を木っ端微塵に破壊した。爆風とバラバラになった破片が飛んでくる。シーグはうずくまって木の陰に隠れると、とがった石が幹に突き刺さった。破片はガイスたちのほうにも飛んでいった。しかし、目前ですべてが弾き飛ばされる。

一発ごとに大きく、爆発の威力も上がってきている。その上、目に見えない壁まで出来ているようだ。

「これが陣形を組むってことなのか？」

シーグが驚きの声を上げると、ガイスの顔色が黒さを失っていく。怒りが静まったに違いない。

「ふふふ、家なしのシーグ。もはやお前に勝ち目はないぞ」

「残念ながらその通りだな」

ガイスは余裕の笑みを浮かべて、片ひざをついたシーグを見ている。

「今なら土下座して謝れば許してやらんこともない」

「……本当なのか？」

「考えてやるぞ」

シーグはわずかに頭を下げた。その瞬間、ガイスは火球を飛ばしてきた。今度は一抱えほどもある巨大な火球だった。シーグはその瞬間を待っていた。低い体勢から跳躍すると木の枝をつかみ、逆上がりの要領で木の上に飛び上がる。

火球は地面に直撃し、木を根こそぎ吹き飛ばしたが、シーグはすでに隣の木へ身軽に飛び移っていた。そして、地面に着地すると一目散に逃げ出した。

「むう、逃げたぞ。追え！」
だが、ガイスの命令に取り巻きの青マントたちは迷っている。
「俺に歯向かうのか！」
「しかし、これ以上バラバラになっては……」
「ええい、うるさい。さっさと行け」
「陣形が崩れ――」
杖で人間を殴る鈍い音で声が途切れる。次に男のうめき声が続いた。何をしているのか気になってシーグは足を止めた。
「そうか。陣形が崩れてしまう。行くな、離れてはいかん。まだ近くにいるかもしれんからな」
仲間にも酷い扱いをするんだな、と思いながらシーグは耳を澄ませた。だが、尊大で耳障りで大きな声もこうなってはありがたい。しばらくの沈黙の後、ガイスがうなり声を上げた。
「くそ！　ここは天空の水盤だったな。ディテクト（探知）の魔術は使えん。ええい、なぜ誰も俺に言わんのだ！」
いちいち殴るからだ、とシーグは心の中で言った。
「見者め。小癪で腹立たしい小娘だ」
ガイスはいらだっている。シーグは木陰に隠れながら、声がよく聞こえるところまで戻った。茂みの中に潜んで聞き耳を立てる。
「今日は引き上げるつもりだったが気が変わった。あの小娘を引きずってでも連れて帰る。それに、小僧も生かしてはおけん！」
シーグはガイスに感謝したくなった。ガイスたちが水盤の魔術士の所に行く。だったら、後をつけていけばこの広い湖を探す手間が省ける。
「だが、その前に腹が減った。食事にするぞ」
「え？　しかし今は……」
青マントたちの、途方にくれた声が聞こえる。
「ええい、何をぼんやりしている。さっさと準備をしろ」
ガイスは怒鳴り散らして八つ当たりしている。木を殴る乾いた音と、人を殴る鈍い音が湖畔に鳴り響いていた。

1章－2　ノコギリ歯の死神

＊

ガイスの食事は本格的なものだった。
青マント達が懐に手を入れると、銀製の皿にナイフやフォークなどが次から次へと出てくる。ただの紙切れにしか見えないものが、見る間に湯気を立てる肉の塊になった。更に葦のバスケットに入ったパンや果物。金細工の器に入ったゆで卵。泡の立ったクリームに砂糖菓子。グラスに入った氷は溶けずに冷気を放っている。懐から何でもヒョイヒョイ取り出すのは魔術士なら珍しくない。
出てきたものは食器を除いて、見る見るうちにガイスの口の中に消えてゆく。食べるというよりも、流し込むかのよう。シーグにはそっちのほうがよっぽど魔術めいて見えた。
「カエルというよりはヘビの食事だな」
シーグは呆れながら見ていた。うっそうとした森と、入り組んだ湖畔は偵察には絶好の場所だった。こちらからは茂み越しに見えるが、ガイス達からは完全に隠れている。シーグはそこに腰をすえて、ガイスたちが食事を終えるのを待っていた。
これだけ奇襲に向いた場所でのんびりする。それも敵対する魔術師の封土の中で。それは、絶対の自信があるからなのか、それとも単なるバカなのか。果たしてどちらだろう？
シーグは考えをめぐらせて、ガイスは自信過剰な上に大バカだと結論を出した。
「更に嘘つきで性悪で人の話を聞かない。その上大食いで、下品で、ノロマで考えなしだ」
小声で悪態をつきながら、シーグは物陰から観察していた。
守りに絶対の自信があるとしても、敵地の真ん中で敵を逃がし、遠くからでも丸見えの場所でわざわざ休む必要はない。実際に、ほ

かの6人は警戒してきょろきょろと周囲を見回している。食事に没頭しているのはガイスだけだ。まだ食い足りないらしく次々と食事が目の前に追加され、口の中に消えてゆく。

動き出すのはしばらく先だ。待つしかない。

風は緩やかで、空の青を写した湖面を揺らすのはたまに跳ねる魚だけだ。小鳥がピーピーと鳴きながらシーグの近くを飛んでいって木の枝に止まる。

「あわてても仕方がないな」

平和な風景に見とれていると、シーグは汚れきった外套や革鎧が気になりだした。特に汗をべっとり吸い込んだシャツが気持ち悪い。天空の水盤を目指し、山に入って三日。毎日体を拭いているが、体全部を浸すほどの水を手に入れられなかった。今日も一日歩き詰めである。

自分では気にならないが、特に鎧は汗臭くなっているはずだ。革鎧は毎日干すのを怠けると怖気をふるうような悪臭を放つようになる。

一度気にすると、シーグはいてもたってもいられなくなって、大急ぎで皮鎧の留め金をはずした。前後二つに分かれた皮鎧と腰の剣を、風通しがよく日のあたる場所に置く。

人を知らないのか、鳥はシーグが近寄っても逃げなかった。珍しそうにくちばしで皮鎧をつついている。天空の水盤は辺境を通り越して人外の秘境なのだ。

靴を脱ぎ裸足になった。靴下は木の枝にかけ、靴はそろえて反対向きにする。ズボンをひざまで上げると湖の中に足を入れた。さすがに魚は驚いて逃げていった。

「っ……」

あまりの冷たさに声を上げそうになるのを何とかこらえた。雪解けを終えたばかりの湖水は冷え切っている。歩き詰めだった旅路の疲れが、足元から流れ出していくようだった。

シーグは汗をびっしょりと吸い込んだシャツを脱いだ。湖に写る

自分の背中を見て、シーグは顔をしかめる。細い背中を斜めに切り裂く大きな傷跡がある。その傷はかつて骨に届き、内臓をも引き裂いていった。命が助かったことが不思議に思えるほどに大きく、そして深い傷だ。

ずっしりと重いシャツは軽く絞っただけで汗がボタボタと湖に落ちる。シーグはシャツを湖にひたそうとしたところで動きを止めた。背中の傷跡がズキリと痛んだからだ。

危険が迫っている。

周囲には気配も殺意も感じない。いや、だから、異様なのか。鳥の鳴き声も消え、魚は全く跳ねなくなった。まるで、息を殺しているように……。

突然、パシッと水を蹴る音が聞こえた。

後ろだ!

シーグは反射的に振り向きざまに手刀を繰り出す。それが、背後から心臓めがけて迫る白刃の柄に当たったのは、奇跡としか言いようがない。

そのまま、刺客の腕を掴んで体重をかける。体勢が崩れたところへ首に肘を押し付けたまま湖の水面に叩きつけた。続いて、胸の上に膝を乗せて動きを完全に封じる。あまりに軽い手ごたえにシーグは驚き、組み敷いた相手を見つめた。

「女の子?」

それも、10歳になるかならないという子どもだ。水面の向こう側からまっすぐとシーグを見つめている。小柄な体が浅い湖に完全に沈んだので、慌てて引き上げる。水がクッションになって、怪我はないようだ。シーグはホッとした。少女は咳き込みもせず、瞬きもしない。何事もなかったかのようにシーグをじっと見ている。空と同じ澄んだ青色の瞳に正面から覗き込まれて、シーグは我に返った。

「何をするつもりだったんだ?」

「あなたを殺そうとしたの」

年相応の無邪気な声で即答されて、シーグはたじろいだ。
「あと一歩だったのに、おしかったわ。どこがいけなかったのかなぁ？」
女の子は不思議そうに首をキョトンと傾げた。年相応の幼い仕草と、言葉の内容の格差にシーグは唖然とした。大きな青色の瞳、肩まで伸びる銀色の髪は、水を含んで日の光にきらめている。透き通るような白い肌に、飾り気のない純白の貫頭衣。湖の妖精だといわれてもうなずいてしまいそうなほどに可憐な少女だ。
だが、彼女は間違いなく恐るべき暗殺者である。一度命を落としそうになって以来、野生の動物にさえここまで見事に背後を取らせたことはない。
更に彼女の動きはすばやく、突きは正確に心臓だけを狙っていた。体格が同じなら間違いなく殺されていた。いや、歩幅があと少し長ければ、水音も立たず、何が起こったかも知らずに命を落としていただろう。
今もまったく抵抗しないのは、あきらめているのとは違う。隙あらば反撃するべく体に力を残しているからだ。突然湖の中に沈められたのに、水を飲んだ様子は無い。更に手に持ったナイフはしっかりと握り締めたままである。
「あなたの名前は」
「え？」
「始めて会った人には名前を聞きなさいって、サフィリアに教えてもらったの。……あれ？　順番が違うかな。まずは、自分が名乗らないといけないのね」
少女は独り言さえも丁寧で、小川のせせらぎのように心地よかった。
「私の名前は、アイフェ・サムハイン。あなたの名前は？」
「俺はシーグ」
答えながら、シーグは少女の過去にどんな呪われた時代があったのだろうと考えていた。アイフェ（ノコギリ歯）にサムハイン（死

神）。子どもにそんな名前をつけるなんて、まともな親じゃない。
「ねえ、シーグ。私はどうしてあなたを殺せなかったの？」
「……なんで、そんなことを聞く」
「殺しそこねたんだから、殺されないはずがないじゃない。だから、その前にどこが悪かったのか聞いておきたいの。私はうまくやれたと思うんだけど」
「鳥の声が聞こえなくなって、魚が跳ねなくなったのに気づいた。その後に背後で水を蹴る音がしたから」
「じゃあ、ここみたいに静かな森の中じゃなかったら、うまく殺せたのかしら。町の中とか、寝ている最中とか」
「それなら、殺されていた。君は俺の知る限り、一番の暗殺者だよ」
嫌味を言うとアイフェは満足げに微笑む。
「そう、よかった」
何がいいのか、シーグには全く分からない。
「とにかく、ナイフをこっちに渡せ」
「ねえ、お願いがあるの」
「なんだ？」
「殺すなら私のナイフがいいわ。心臓を一突きにしてほしいの」
「……」
「サクッて刺した後に、グイッとえぐるのよ。ザクリ、じゃないわ。そんな雑な刺し方をしたら、殺しそこねたり相手を苦しませたりするでしょ。本当はそんな音は鳴らないはずなんだけど、みんなそう言うの」
アイフェはクスクスと笑ってナイフを離した。ナイフを取り上げたシーグは自分のベルトに納めた。アイフェは笑みを浮かべたままじっと見ている。
「おい、こっちから水音が聞こえたぞ！」
茂みの向こう側からガイスの声がする。
「アイフェ、君はガイスの仲間か？」
少女は首を左右に振った。

「じゃあ、全力で逃げろ。あいつらは見境なしだからな」
シーグはそう言い捨てて、湖から上がるとそろえてあった靴に足を突っ込んだ。そして、皮鎧と剣と靴下を取ると木々の生い茂った方へ駆け出した。ちらりと背後を振り返ると、枝葉の隙間から真紅のマントが見えた。
「女がいただと？　嘘をつけ。さっきのあいつは男だったじゃないか。お前の目は節穴か！」
ガイスの怒鳴り声と殴りつける鈍い音が聞こえてきた。

1章－3　無邪気な暗殺者

＊

逃げるのは簡単だった。
見通しの悪い湖畔は隠れる場所が多い。ガイスは移動が遅い上に、
「まだ見つからんのか！」といちいち大声をあげて場所を知らせる。
これだけ条件がそろっていれば、何度見つかっても逃げ切れるだろう。
「だけど、追いかけっこをするために、天空の水盤に来たわけじゃないんだぞ」
シーグは腹立たしく独り言をこぼして、持っていた皮鎧を茂みに放り投げた。
「こんな森の中をまともに捜索すれば、何日がかりになるか見当もつかない。封土への侵入者を見つければ、見者のほうから会いに来ると期待していたのに。だけど、自分より前に侵入者がいるときている」
シーグはつぶやくのをやめて、髪の毛をグシャグシャとかき回した。
「見者は何処にいるんだ？　せめて方向だけでもわかればなぁ」
「知っているよ」
独り言に返事があったので、シーグは飛び上がらんばかりに驚いた。銀髪に青い瞳という神秘的な暗殺者が木の陰から現れる。
「……どうやってここまで来たんだ？」
「全力で走れって言ったじゃない。だから、追いかけたの。それにまだ、ナイフを返してもらってないもん。人の物を勝手に持っていくのは泥棒って言うんだよ」
アイフェは生真面目な表情で流暢に言った。
「俺の全力疾走についてきたのか」

「ううん。全然追いつけなかった。茂みを突っ切る猪だってあそこまで速くは無いわ。まるで草原を走る馬みたいだったもの」
「じゃあ、どうして」
「走る時はもっと静かにしなきゃ。草が折れているし、葉っぱが散らばっている。その上に声も出すし。これじゃあ、誰でも簡単に見つけられるわ」
「嘘だろ……」
シーグは唖然としてつぶやいた。たとえ１００人からの追っ手に三日三晩追いかけられても、痕跡も見つけさせずに逃げ切ったことがあるからだ。
「ねえ、その荷物をどけて。茂みの枝が傷んでしまうでしょ」
アイフェは強い口調になった。始めて見せる厳しい表情に、シーグは考えるよりも前に剣と鎧を両手に抱えた。アイフェはシーグの前でかがみ込む。そこには小さくて白い花が咲いていた。
「うん、大丈夫ね。折れてない。もうすぐ実がなり始めるころなんだよ」
何から何まで驚かされるが、花を愛おしそうになでる様子を見ていると年相応の普通の女の子に見える。とびきりの美少女なのは違いないが。
「花の名前はなんていうんだ」
「知らないわ。でもね、実を煎じるとね、痺れ薬になるの」
「……」
「飲ませれば一晩は身動きできなくなるし、刃物につけたら心臓の近くをかすめるだけで眠るようにコロリと死ぬの」
妖精のような少女は夢見るような表情で、恐ろしいことを言った。
「ところで、見者の居場所を知っているのか？」
「うん、サフィリアとは一緒に住んでいるの」
正直、何処に連れて行かれるか恐ろしかったがシーグは決意した。
「……そこへ案内してくれないか」
アイフェは顔をしかめて、考え込んでいる。

「俺はサフィリアに用事があってきたんだ」
「殺しにきたの？」
「違う」
「じゃあ、誘拐」
「それも違う」
「だったら、他にどんな用事があるっていうの？」
不思議そうに首をかしげる少女に、シーグはどう説明したものか悩んだ。
「ええと。じゃあ、なんで俺を殺そうとしたんだ？」
「魔術士の封士に勝手に侵入する奴は敵だってサフィリアが言っていたから」
「だったら、ガイスと青マントの男たちはサフィリアの味方なのか？」
「違うよ。特にガイスは殺したい位に腹が立つって言ってたわ。じゃあ、私が殺してこようか。って聞くと、サフィリアが慌てて、あの人たちは絶対に殺しちゃいけないって言ったの。だから、何もしていないわ。でも、代わりにシーグを見つけたの」
「俺は代わりだったのか？」
シーグは嫌味をこめて言ったが、アイフェは元気にうなずいただけだ。
「うん。あなたは強そうだったから。あの人たちから上手に逃げたでしょ」
「強そうで、逃げ足が速いと殺すのか」
「習ったことを試すのはいいことだってサフィリアは言っていたわ。毎日毎日続けることも大切なのよ。シーグを殺しちゃいけないって言われていないし、あなたは封士への侵入者だもの。私は何か間違っているかしら？」
どうにも話がかみ合わないが、幸いなことに理性的ではあるようだ。シーグはしばらく考えてから口を開いた。
「俺はガイスの敵だ。俺はあいつを倒したいと思っている。あいつ

も俺を殺そうとしているんだ。だけど、一人じゃ勝てない。サフィリアもそうじゃないのか？」
「うん、そうだよ」
「だから、俺とサフィリアとアイフェは味方になれると思う。どうかな？」
アイフェはしばらく空を睨んで考え込んでいたが、笑顔でうなずいた。
「きっとそうだね。分かった、案内するね」
話が通じてシーグは安堵のため息を漏らした。
「いけない、忘れるところだった。案内が終わったら、さっきの続きをちゃんとしてね」
「わかった、俺は何をすればいいんだ」
気疲れをしたシーグは適当に答えた。
「女の人を押し倒したら、男の人がやることって決まっているんでしょ？」
「な！」
「よく分からないけど、みんなそう言うの。それに、決めたことをキチンとやらないのはいけない事だってサフィリアが言っていたわ」
シーグが絶句すると、アイフェは人差し指を立てて生真面目に眉をしかめた。
「それにね。死にそこねるのは、殺しそこねるよりもずっと悪いことなの。みんなそう言っていたわ。だから……」
「そんなことはない！」
言葉をさえぎって怒鳴りつけると、アイフェは目を丸くした。
「違うの？」
「絶対に違う」
再び否定すると、青色の瞳からボロボロと涙があふれだす。
「どうしてなの？」
突然泣きだした少女を見て、シーグは戸惑った。
「アイフェ自身はどうなんだ。殺されたくは無いだろう？」

「……分からない」
「嘘だろ……」
予想外の答えに、シーグは言葉を詰まらせた。すると、アイフェは聞いているこっちの胸が痛くなるような声で泣き出した。
シーグは髪の毛をかき回した。意を決すると屈みこんでアイフェの目を正面から見つめる。
「俺は死にそこねたこともがある。人を殺したことも、殺されそうになった事も。だけど、こうして生きている。そして、何があろうとも死にたくない。これからもずっとそうだ」
アイフェはしゃくり上げながらも、涙を止めてシーグをじっと見ている。
「俺はアイフェに生きていてほしい。サフィリアも絶対にそう思っている」
「……本当？」
「絶対にそうだ。疑うのなら、確かめてみればいい」
「シーグも一緒に来てくれる？」
「もちろんだ」
「うん。じゃあ、こっちに来て」
アイフェは泣きじゃくりながら、森の中を歩いて行く。
死神の名を持つ少女は速やかに殺す方法と迷い無く死ぬ事だけを教えられてきたのだ。殺すことも死ぬことも淡々と話すが、生きていて良いのだといわれると途方にくれる。そんな風にアイフェを育てた奴に対して、シーグは言葉にならない怒りを感じていた。

1章－4　かくれんぼ

＊

アイフェはすぐに泣き止んで、鼻歌を歌いながらシーグを案内している。

シーグはアイフェの背後を5歩離れてついていく。それ以上近寄るのが怖かったからだ。びしょぬれのシャツと、染みだらけの皮鎧を身に着け、いつでも剣が抜けるように柄に手をかけている。はた目には怪しげな人間以外の何者でもない事を自覚していた。だが、恐怖感の方が先立つ。気配を感じさせず近寄る存在の恐ろしさを、シーグは久しぶりに思い出していたのである。

「ねえ、もっと近くに来てよ」

「いや、大丈夫だ」

シーグが短く答えると、アイフェは前を向いて再び歩き出した。が、少しするとアイフェはまた振り返った。

「手をつながないと、迷子になるよ」

「平気だ。森の中は歩きなれている」

無愛想に答えると、アイフェはブスッとした表情になって大股に歩き出した。シーグが追いかけると、どんどん速くなってそのうち駆け足になった。

「あ、待て」

「やーだよ」

楽しそうな声と共に、アイフェは茂みの中に飛び込んで見えなくなった。シーグもあわてて茂みに飛び込むが、アイフェはすでにシーグを10歩以上引き離している。大きな木の向こう側に逃げたアイフェを追いかけると、何処にいるのかわからなくなった。周囲を見回すと、来た道を引き返したアイフェがこっちを見ている。そしてシーグに向かって舌を出すと再び茂みの中に飛び込んだ。

足元を調べたが歩いた痕跡も分からない。耳を済ませても、気配を探っても鳥の鳴き声が聞こえるばかり。殺意を抱かないアイフェは完全に森の中に隠れてしまった。

「分かった。手をつなぐから出てきてくれ」

シーグが降参すると、アイフェは気配もなく背中に飛びついてきた。驚きのあまり力いっぱい振り払ったが、アイフェは後方に一回転して着地すると、更に勢いよく走り寄ってくる。シーグは体だけ完全に逃げながら、右手だけを差し出した。すると、アイフェは腕にしがみついてくる。

「捕まえた」

「ちょっと待て！」

シーグはあわてて、アイフェの手を振りほどいた。手首と指の関節を逆に決められそうになったからだ。

「手をつないでいるだけだよ？」

アイフェは不思議そうに小首をかしげる。

「みんながそう言っていたのか」

「うん、逃げないように捕まえるにはこうすればいいって」

「あのな、これは手をつなぐっていわないんだ」

シーグが否定すると、アイフェは涙目になった。どうやら、アイフェにとって『みんな』とは特別な存在のようだ。

「……いや、それでいい」

「手をつながないと、迷子にするよ」

アイフェは一変して、今度はケラケラと笑っている。

「する、だって？」

「うん、そうだよ。飢え死にしたくなかったら、手をつなぐか追いつくしかないんだよ」

楽しそうな笑みが、シーグは恐ろしくて仕方がなかった。怪物の巣穴に飛び込んだときよりも、１０人からの刺客に囲まれたときよりも。

シーグは手に力をこめて、関節を取られないようにした。だが、

隙を見せればアイフェに何をされるか分からない。だから、なるべく腰――つまり剣とベルトのナイフ――を遠ざけながら歩いた。まるで、大人が無理やり引っ張り、子どもが嫌がって後ろに体重をかける。それをちょうど逆にしたような奇妙な格好になった。

その後も、アイフェが足元に抱きついたり、背中に飛び乗ろうとしたりするたびにシーグは身構えた。たぶん、引き倒すか首を絞めるかするつもりだったのだろう。仕方がないので、シーグはアイフェの両手足の動きを完全に封じる妙な抱き方をしながら、駆け足で森の中を進んだ。

はた目には子どもを誘拐しているようだが、アイフェは声を上げて無邪気に喜んでいた。

1章ー5　□×○△

＊

「見者の家はまだなのか？」
「もう目の前だよ」
アイフェは言うが、湖畔の風景が広がるばかりだ。森の木々が突然途切れ、縦横５０歩ほどの草地の広場になっている。湖から真っ直ぐな水路が続く小さな円形の池があるだけだ。何処にも家らしきものは見えない。
「頼む。からかうのはやめてくれ」
「本当だもん」
「だったら、水の中にすんでいるのか？」
そう言ってから、魔術師なら別に不思議ではないな、とシーグは思った。
アイフェはプー、と頬を膨らませるとジタバタと暴れて、シーグの手から逃れた。アイフェが駆け出した方向には、池と水路だけしかない。しかし、シーグは違和感を感じた。
円い池に直線の水路。それは決して自然なものではない。と、アイフェの姿がフッと消えた。シーグが驚いていると、今度は首だけのアイフェが空中に現れてケラケラと笑っている。
シーグが駆け寄って手を差し伸べると、再びアイフェの顔が消えた。そして、シーグの手首の先も切り落としたように見えなくなった。
「早くこっちに来てよ」
アイフェの声につられて前に進むと、水面に顔をひたしたような感触がして、突然目の前にかやぶきの家が現れた。三角屋根、四角の窓とドア。赤レンガの煙突。小さなごく普通の家だった。顔をゆっくりと後ろに引くと、冷たい感触と共に家とアイフェだけが見え

なくなった。
「シーグが半分になった」
再び前進すると家が現れた。アイフェが腹を抱えて、若草の生えた地面を転げまわっている。
「あ、サフィリアが来たよ」
アイフェの声の後にかやぶきの家の扉が開いて、薄い水色のローブを着た女性が姿を現した。年齢は15，6、真っ白で槍のように細い杖を持っている。ほっそりとした体つき、背中まで伸びる淡い金色の髪。大きな碧色の瞳がアイフェを見つけると優しげに細められた。
サフィリアは駆け寄ってくるアイフェを隠すように背中に庇った。
「あんたが、見者。サフィリア・フェルナンディ、だな？」
「近寄らないで下さい」
シーグが聞くと、サフィリアは杖を構えて目つきを険しくした。
「ちょっと待て、何か誤解していないか？」
「していません。あなたが、アイフェをどんな風にここまで連れてきたか、私は水盤を見て知っていますから」
身動き取れないようにアイフェを抱いてきたので、無理やり押さえつけているように見えたかもしれない。シーグは舌打ちをした。見者の封土の中で軽率な行動だったと悔やむ。
「これ以上近寄れば、私も相応の手段をとらせていただきます」
「わかった」
慇懃で形式ばった態度が見えない壁を作っている。無理に近づけば、相手を刺激するだけだ。そう考えてシーグがおとなしく後ろに下がる。サフィリアはようやく表情を和らげた。
「アイフェ、何があったの？　ビショ濡れじゃない」
サフィリアは、背中にへばりついているアイフェに聞いた。そうしていると、仲のいい姉妹のようだ。
「うんとね。湖でね。シーグにね。裸のまま押し倒されて、胸を押さえつけられたの」

「ちょっとま……」
「あなたは黙ってて」
シーグの言葉をさえぎって、眉間を険しくするサフィリア。アイフェは目を丸くして驚いている。
「それからどうしたの。本当のことを教えて」
「う、うん」
サフィリアに押し殺した低い声で問われて、アイフェは泣きそうな顔でごくりと唾を飲み込んだ。
「それでね男が女を押し倒したときにすることは決まっているんだけどええと俺はサフィリアと三人一緒がいいってシーグが言ったの」
アイフェは緊張したためか、深刻な表情で早口で息もつかずに言った。ものすごく違うことを。
「……このぉ」
押し殺した声、肩が小刻みに震えている。それは間違いなく、サフィリアの怒りの深さを表している。
「□×○△！」
シーグは突然のひどい言葉に驚き、いきなり変わった口調にも驚き、次に魔術師の方から距離をつめてきたことに更に驚いた。
「誤解だ」
シーグは池を背に、後ろ飛び下がりながら叫んだ。
「小さな女の子の服を脱がして、胸を押さえていまさら何よ！」
「違う裸だったのは俺の方だ」
サフィリアの表情が更に険悪になってから、全く言い訳になっていないことに気づいた。
「この変態！」
サフィリアはシーグの頭に向かって、槍のように杖を突き出してきた。シーグがしゃがんでかわすと、頭の上に突風が吹き抜け、遥か遠くの木の枝が切断されて宙を舞う。その威力の前には皮鎧など何の役にもたたないだろう。
杖に注意を向けていると、視線の端で金色の髪が急に吸い込まれ

る様に下に向かう。それで、サフィリアの体が沈んだと気づく事ができた。絶妙なタイミングの蹴りがシーグのわき腹を狙う。シーグは横倒しになってよけると、側転の要領で立ち上がり、距離をとった。遅れてシーグの半歩隣をサフィリアがなぎ払った杖が通り過ぎて、地面を深くえぐり土を空に巻き上げる。

「チョコマカと動かないで！」

無茶なことを言いながら、サフィリアはすでに杖を構えなおしていた。

シーグは覚悟を決めて剣を抜いた。錆ひとつない白銀の刃は細く、切っ先が鋭利にとがっている。

武器を見ると、サフィリアは大きく後ろに飛び下がって、杖を地面に突き立てた。そして、口の中で何かをつぶやいている。そして、シーグに向かって殺到する殺意。

「これで終わりよ、変質者！」

更に心に突き刺さるような掛け声があれば、攻撃のタイミングを見誤るはずがない。シーグは後ろも見ずに真っ直ぐに駆け出した。背後から大量の水が落ちてきてシーグを引き倒そうとする。だが、走り出していたためにわずかに足を取られただけですんだ。そして、低い体勢のまま勢いを殺さず前進する。

サフィリアは杖を突き出すが、シーグは前転してかわす。背後の土が砕ける音。跳ね上がるように杖の反対側が目前に迫る。立て続けの連撃をシーグは剣の峰で受け止めた。そして、弾かずに前転の勢いを殺さないまま杖に倒れこむように体重をかける。

「あっ」

小さく叫んでサフィリアが姿勢を崩した。その瞬間を逃さず、シーグは真上に剣を跳ね上げた。杖が激しく回転して宙高く飛ぶ。シーグは返す刀でサフィリアの目前に切っ先を突きつけた。一瞬後、水がなくなった池の中に杖が落ちて乾いた音を立てる。

後ろは一面水浸しだった。後一歩踏み出すのが遅れていたら、シーグは大量の水に押しつぶされていただろう。

「戦ってから言うのも妙だが、俺は敵じゃない」
「どうせ、ガイスの変態仲間なんでしょ」
「絶対に違う！」
大体、それはどんな集団なんだ？　と心の中でシーグは叫んだ。
背後では、水路を伝って湖からすごい勢いで水が流れ込んで、杖を流してゆく。
「じゃあ、どうやって来たのよ。ここには私が招いた人間しか入れないわ」
「魔術を使うならね。だけど、歩いて来る分には関係ないだろ」
サフィリアは一瞬とぼけた表情になったが、次第に顔つきを厳しくしていった。
「うそ……人間が歩いて超えられる山脈じゃないわ」
「裾野を行けばなんとかなる。最短の道でも三日かかったけどな」
「あなた、一体何者？」
サフィリアは険しい表情を改めた。とにかく、話を聞いてくれる状態になったようだ。
「とにかく、俺はあんたの味方だ」
「勝手に封土に進入した人を信じろっていうの？」
「ガイスたちもいるじゃないか」
「ええ、好き勝手に我が物顔で歩いているわ。いつでも、天空の水盤を破壊できる手段を持ったままね。それがどんなに悔しいことか、わかる？」
サフィリアは、瞳を刃のように細めてシーグを睨みつけた。魔術師にとって封土への進入は、よほどの侮辱となるらしい。
「悪い、知らなかったんだ。ここに無断で立ち入ったことも、さっきの言葉もすまなかった」
シーグは謝罪すると、剣を鞘に収めて後ろに下がった。
「……とにかく、敵じゃないって事は分かったわ。アイフェから詳しく聞いてみます」
アイフェはシュンとなってサフィリアをチラチラと見ている。怒

ったサフィリアが本当に怖いのだろう。
「キチンと説明しなさい」
「え、シーグから聞いてよ」
下を向きながら、もじもじとしているのは年相応の子どもの仕草だ。だが、シーグとサフィリアにじっと見つめられて、アイフェはようやく顔を上げた。
「……シーグは味方だよ」
小声でぼそぼそと言った後に、再びうつむいて黙り込んでしまった。
「それじゃ分からないでしょ。キチンと説明しなさい」
「誤解されることを言ったんだから、自分で言い直せ」
「分かったよ……」
シーグとサフィリアに言われて、アイフェは唇を尖らせている。
「ねえ、何処から話せばいいの」
「任せるよ」
「じゃあ、私を押し倒したところからだね」
「……いや、アイフェが俺の背後に忍び寄ったところからにしてくれ」
「うん、わかった。シーグがね、裸になって湖に入っていたの。それを私が覗いていたんだよ」
「ちなみに俺はズボンをはいていたからな」
シーグが付け加えると、サフィリアはプイと顔を背けた。その後もアイフェの微妙に気なる言葉を聞きながら、シーグは池の端に流れ着いた杖を拾い上げてサフィリアに差し出した。
「勘違いしてごめんなさい」
と、サフィリアはうつむいたまま小声で言った。とにかく誤解は解けたようだと安心し、シーグは座り込んだ。
「それでね、シーグの抱き方ってすごいんだよ。いくら暴れても押さえつけられて、私はされるがままだったんだ」
サフィリアは困った表情を浮かべているが、シーグはなんだかど

うでも良くなってきて訂正するのをやめた。

安心すると、疲労感が体中を支配する。ガイスにアイフェ、それにサフィリア。考えてみれば命がけの戦いが立て続けだった。とにかく、今は休んでおくことにしよう。四度目の戦いは避けられないだろうから。

1章－6　青マントの事情

＊

「ふむ、あの小僧め。ここに潜んでおったのだな。のんきに水浴びなどをしておったのか」
湖畔の点々と続く水滴を見て、ガイスは顔をしかめた。
「あの小僧と小娘を捕らえるぞ」
ガイスは鼻息を荒くして重々しく宣言した。6人の青マントたちはガイスからの前、杖の届く範囲で直立している。
「男は殺してもかまわん。だが、女は生かしておけ」
そういい終えると、ガイスはノタノタと3歩かけて後ろを向いた。その瞬間、青マントたちはお互いに顔を寄せて相談を始めた。
「小娘っていうと、2人共だよな？」
「ああ、たぶんそうだ」
「どちらかというと銀髪の方に興味を持っていましたよ」
「だとすると、あの子が11人目なのか？」
「あんなに小さくて、まだ子どもなのに」
青マント達の間に重々しい沈黙が落ちる。
「……とにかく、無傷で捕らえないとな」
ガイスがノタノタと足を動かすと、青マントたちは瞬く間に整列して直立した。
「メティオスマッシャー（隕石の強撃）の名にかけて、奴らを全員生かしておけん！」
ガイスは大仰に杖を振り上げて、行く先を指し示す。そして、大きなゲップを無遠慮にすると、ゆっくり。非常にゆっくりと足を踏み出した。極度の過食で歩くことも難しくなっているからだ。
「ええい、貴様。行くといっておるのだ。手伝わんか！」
ガイスは後ろ向きのまま怒鳴り散らす。青マントの一人があわて

て真っ白な羽を懐から取り出した。それは人の二の腕ほど巨大だった。青マントが羽を持って、ブツブツと何かをつぶやくと、ガイスはすっと宙に浮いたまま前進を始めた。

「ふん、気のきかない奴らだ」

ガイスが尊大にいうと、青マントたちはガイスの後に続きながら、再び集まった。

「生かしておかんというのは、言葉のアヤかな？」

「だろうな。女2人を生かしておくのが正解だ」

「むしろ、皆殺しの中に俺たちが含まれているほうが納得するぞ」

笑えない冗談に、全員の表情が沈んだ。

「ところで、風が出てきたぞ。今度は寒いと言い出すのかな」

「いや、むしろ暑いのかもしれん」

「あの肉厚だからな」

青マントたちは、苦笑を浮かべた。途端に、ガイスの足が地面につきそうになって、青マントたちはあわてて杖を構えなおす。

「ならば、両方準備だけしておくか」

お互いにうなずくと、それぞれ懐から真っ赤な石や、液体の入った水を取り出す。その間も、一刻の無駄もならないとばかりに、早口で話し合う。

「戦いの準備も必要だぞ」

「シーグといったな。あの少年はここでずっと俺たちを観察していた。つまり、いつでも俺たちを襲撃できたんだ」

「それ以前に、ここは見者の封土。今話している事さえ筒抜けだろう」

今まで一言も話さなかった青マントが口を開いた。

「ベクター導師、どうすればいいんですか？」

「対探知防護を使うぞ」

「あの手は使わないんですか？」

「ガイス様に何をしているのかと聞かれて台無しになる」

青マント達は全員が真剣な表情になって、ベクターの言葉に耳を

傾けている。
「しかし、余計な魔術を使うと怒鳴られますよ」
「俺が暑いか寒いかを聞く。もし、魔術をつかったら、同じタイミングで気づかれないようにうまくやれ。できるか？」
「分かりました」
「だけど、敵の前にガイス様の警戒が優先とは、やってられませんよ」
ため息交じりの声に、ベクターを除く全員が肩を落とした。
「余計な口をたたく前に杖を振るんだ。いいな？」
ベクターの押し殺した声にも悲痛な響きがあった。

1章ー7　2つの1番

＊

青マント達がそろって杖を掲げた。すると、水面に大きな波がたって元の池に戻ってしまったので、シーグとサフィリアは顔を上げた。

「気づかれたな」

円形の池を横目で見ながら、シーグはつぶやく。

「正確に言うなら。彼らは最初から気づいていたわ。警戒の必要も感じていたけど、ガイスが邪魔していたの」

言いながら、サフィリアは池にひたしていた杖の先端を引き上げる。

「なんで、わざわざそんな事を」

「魔術を使うのもタダじゃないからよ。彼らが懐から出していた品物を見たでしょう？」

「羽とか、石とか、ビンとか。まるで、子どもの宝箱みたいだな」

シーグの答えに、サフィリアは大きなため息をついた。

「グリフォンの尾羽、噴火口の赤銅、万年雪の純水。材料も貴重だけど、魔術師が加工すれば価値が跳ね上がるの。値段を聞いたら並みの宝石なんて石ころに見えるようになるわ」

「最初に俺が見たときは、焼けた魚みたいな板を持っていたぞ。あれは何なんだ？」

「たぶん、火竜の鱗ね。火の魔術を使うには最高級の触媒よ。1枚でも小さなお城程度なら建つわ」

「……歩く宝物庫ってとこだな」

「どちらかというと兵器庫よ。火竜の鱗を使いこなせれば、見習い魔術師でも家ごと吹き飛ばす事ができるから」

サフィリアは、レンガ造りの自分の家を振り返った。

「奴らなら家ひとつじゃすまないな。ガイスのメティオスマッシャー（隕石の強撃）といえば、大きな城砦をたった7人で破壊したって噂だ」

「悪名の間違いよ。彼らの陥落させた城砦を見たことがある？」

「一度だけな。城壁は砕け散っているし、何もかもが丸焦げになっていた。ドラゴンに襲われたのか、本当に隕石が落ちたんじゃないのかってみんな話していたぞ」

「その上彼らが戦った後は土が乾いた血の色みたいになって、草木が一本も生えなくなるの」

サフィリアは、忌々しそうに口元をゆがめると言葉を続けた。

「城砦を復旧させようと大工を派遣したら、一人残らず血を吐いて死んでしまったわ。今じゃあ、呪われた場所だといわれて誰も近寄らない。彼らは異常なのよ」

最後は悲痛な声となり、言い終えると唇をかみ締めた。

「セブン何とかっていう陣形の事か？　それとも、金にあかせて魔術を使っている事か？」

「両方ともよ。平気で禁忌に手を出すことも、魔術を金で片付けるところも。ついでにいうなら、悪趣味な赤マントも、財産家なのにケチな所も、全く人の話を聞かない所も、食事の時にボロボロとこぼすのも何もかも全部！　尋常じゃないわ」

サフィリアの語気は強くなり、話がどんどんずれていく。

「ともかく、俺は殺す予定のようだ。だが、あんたとアイフェは大丈夫みたいだぞ。話し合いの余地があるんじゃないのか？」

「生き残ったほうがもっと悲惨ね」

「なんでだ？　とって食われるわけじゃないだろう」

「私はガイスに結婚を申し込まれているの。アレと結婚するよりも怪物の胃袋の方がマシよ」

サフィリアは鼻で笑って吐き捨てた。

「……いくらなんでも言いすぎじゃないのか」

女性にそこまで拒否されることが気の毒に思えて、シーグは思わ

ず口を挟む。
「一番腹が立つのは、結婚を申し込んでおいて、私の顔も知らなかった事よ」
　土地や財産が係わる婚姻では別に珍しくないな。と、淡白に考えながらもシーグは黙って聞いていた。
「でも、一番許せないのは、アイフェを私と勘違いして舌なめずりしていた事だわ」
　一番が2つもあるんだなぁ。と、シーグは思ったがやはり口には出さなかった。
「それで、私がサフィリアだって名乗ったらがっかりしていたわ。どういうことか分かる？」
「特殊な好みの持ち主なんだな」
「ただの変質者よ、あの□×……」
　サフィリアは言葉の途中で口を閉ざしてしまった。
「続きを言っても、俺は別に気にしないぞ」
「なんでもありません！」
　大声で言った後にシーグを睨みつける。
「ガイスの妻になった人はみんな死ぬのよ」
「どういう事だ？」
「病気とか、事故とか、理由は色々よ。みんな2ヶ月くらいで死ぬの。びっくりするくらい正確にね」
「だが、偶然に不幸が続いただけかもしれないぞ」
「みんな１０代も半ばの女の子ばかりだったわ。ガイスは結婚相手の死後１月以内に、必ず再婚している。そして、私が１０人目になる予定なの」
　サフィリアは更に勢いづいて、ガイスであるかのようにシーグを睨みつけた。
「いや、よくわかった。戦いが避けられないなら、どう戦うかが問題だな」
　話を戻すとサフィリアの表情がピクリと動く。前かがみになって

大きく口を開いたが、何を思ったか突然背筋をピンと伸ばして無表情になった。
「いきなりどうした？」
「あなたが戦う理由なんてありません。どうか、逃げてください」
言葉遣いまでよそよそしい。
「だけど、俺が厄介ごとを起こさなければ、あいつらはおとなくしていたはずだ」
「どのみち私は、ガイスと結婚するつもりはありません。ただの時間稼ぎに過ぎなかったのですから」
「その時間を奪ったのも俺だ」
「例え、時間があっても私には何も出来ませんした。ですから、何も気にせず立ち去ってください」
「それで、また3日間山道を行けっていうのか？　残酷だな」
「魔術で送れば、近くにある町まで一瞬で到着します。客人を迎えておきながら、何のお構いも出来ないままお返しするのは恐縮ですが、ここは危険です。どうかお引取りを」
礼節を鎧のようにまとって、サフィリアは一息にまくし立てた。
シーグは頭をかきながら、言葉が途切れるまで黙り込んでいた。
「あんた。人を突っぱねるときに、いつもそんな態度になるのか。分かりやすいな」
「余計なお世話です！」
「俺はあんたの力になりに来たんだ」
慇懃な態度を崩して、何かを言いかけたサフィリアを制し、更にシーグは言葉を続ける。
「なので、戦いになるなら、なおさら逃げるわけにはいかない。それに、アイフェのことはどうするつもりだ？」
怒りだすかと思ったら、サフィリアは表情を曇らせた。感情的だが頭は良く回るんだな、とシーグは思った。
「……逃がすつもりです」
「で、その後は？　今、あの子を一人で世の中に放り出せば、殺し

の達人になるだろう。それ以外の生き方を知らないからな。あんたはそれでいいのか？」
「いいわけないでしょ！」
「だったらあんたが生き延びて、あの子のそばにいてやれ」
サフィリアは唇を引き結んで何も言い返さなくなった。シーグは更に髪の毛をかき回しながら続ける。
「それに、あんたに死なれると、こっちとしても都合が悪い」
「どういうこと？」
「見者としての力を借りたいからさ。だから、俺は何があってもあんたを守る。用事も無いのに、わざわざこんな遠くまで来るはずないだろ」
「歩いて来なければ、一瞬で着きます。瞬間転移の魔術を使えばいいのですから」
「俺は魔術師じゃないんだぞ」
サフィリアはポカンとした表情でシーグを見た。
「ひょっとして知らなかったの？」
「何が」
「呼び出す側だけが転移の魔術を使えればいいの。そもそも、転移の魔術で人間じゃない物も運ぶ事があるのよ」
「……あ、言われてみれば」
「……」
サフィリアは呆れた表情でシーグを睨んでいる。
「ねえ、いつになったら始まるの？」
突然の声に、シーグとサフィリアは息を呑み、飛び上がらんばかりに驚いた。両者が目線をわずかにずらすだけで見える場所に、アイフェが近寄ってきていたのだ。先ほどまでの貫頭衣と違って、首元や肩口にレースのついたピンク色のシャツを着ている。ズボンにも繊細な花の柄の刺繍がされており、簡素だがかわいらしい服装だった。肩まで伸びる髪は、赤いリボンで縛って後ろに一まとめにしている。

「いつからそこにいたの？」
「シーグがサフィリアのことを何があっても守るって言った所だよ。その後、２人で見詰め合っていたんだ」
誤解を招きそうな言葉に、サフィリアは肩を落とした。
「アイフェ、あれは睨み合っていたって言うのよ」
「俺は睨んでなかったぞ」
「もう着替え終わったのね？」
サフィリアはシーグに背を向けて、体ごとアイフェに向き直った。口調まで変わっている。
「うん。濡れた服は洗濯物のかごに入れておいたよ。後で洗って干すからね」
「わかったわ。でも、こっそり近寄っちゃだめって言ってるでしょ」
「普通に歩いていたよ。それに、ドアを開けるときは静かにしないとだめなんだよ」
「いい習慣だと俺は思うけどな」
シーグが相槌をうってもサフィリアは無視を続けている。
「ねえ、サフィリア。シーグが何か言っているよ。人の話には返事をしなくちゃいけないんでしょ？」
「あの人の事は、気にしなくていいの」
「えー、そんなの嫌だな」
シーグの方に走り出そうとしたアイフェをサフィリアは優しく、しかし素早く引き止めた。
「いい、アイフェ。世の中にはいつでも例外ってものがあるの。ガイスみたいに危険な人とか、ガイスみたいに特殊な趣味を持っている人とか、ガイス以上のうっかりさんとか、ね」
子どもに語りかける優しい言葉遣いの中に、特大のとげが混じっている事をシーグは感じていた。

1章－8　戦う権利

「ねえ、アイフェ。これもかわいいと思うけど、スカートは嫌いなの？」
「ヒラヒラしたものを着ていたら動きにくいもん」
「また森の中に出かけるつもり？」
「シーグが3人でやるっていったから準備をしてきたんだよ」
「え？　――」
「ちなみに一緒に戦うって意味だからな」
会話が途切れた瞬間に、シーグが口を挟むと、サフィリアが目を吊り上げて振り向いた。
「それぐらい分かっています！　あなたはアイフェまで戦わせるつもりですか」
「もちろん」
シーグが即答すると、サフィリアは再び慇懃さをまとい、目を細めて射るようにシーグを見る。
「あの子はまだ１０歳ですよ」
「だけど強い。森の中なら俺よりもずっと戦いなれている」
「私は反対です」
「ガイスの野郎がアイフェを気に入っているんだろ。相手は商人で魔術師だ。逃げ切れるはずがない」
「私はアイフェを戦わせたくないのです」
「だったら絶対に勝って、アイフェを守り通す自信があるんだな？」
反論できずに、サフィリアは黙り込んだ。
「負けたら、アイフェに未来はない。だから、自分のために戦う権利がある。最も本人が嫌がるなら話は別だけどな」
「私は戦うよ」
アイフェは即答して、何度もうなずいた。だが、サフィリアと目が合うと、後ずさりしながらシーグの背中に隠れてしまった。

「本人はこう言っているようだが？」
不安になって肩を縮めているアイフェの頭をシーグは軽くなでてやった。サフィリアは難しい表情でシーグを睨みつける。
「……分かりました、アイフェにも協力してもらいます」
「やったー」
アイフェは満面の笑顔で両手を挙げて喜んでいる。
「ねえ、シーグ。ナイフを返してよ」
「戦いが始まる前には返す」
サフィリアは後悔するような表情を浮かべていたが、頭を振ってシーグを見据えた。
「だけど、相手はメティオスマッシャー（隕石の強撃）よ。２００人の兵士のこもる城砦都市を7人で、しかもたった1日で陥落させたの」
「投石器の大岩さえも跳ね返し、城壁を木っ端微塵に砕く、だな」
「彼らがその気になったら、天空の水盤。この封土を丸ごと破壊できるの。そんな相手にどうやって戦うっていうの」
「今から考える。えっと、セパン……だっけか？」
「セブン・パワー・インテグレーションよ」
「その、なんとかネーションが最強で隙が無いのなら、俺は生きていないはずだ」
アイフェがシーグの背中から、サフィリアをちらちらと見ている。サフィリアは娘を取られた親のような目つきでシーグを睨みつけた。
「逃げただけじゃない」
「生き残る方法さえ心得ていれば、何度でも戦える。そして、最後に一度だけ勝てばいい」
「簡単に言うわね。具体的にはどうするつもりなの？」
アイフェが腰のナイフをチラチラ見ているのを警戒しながら、シーグは口を開いた。
「まず、ガイスは足が遅い。俺たちがのんきに日向ぼっこしていてもまだ到着しないんだからな。そして命令する奴が自信過剰の大バ

カ野郎。何よりも自分を無敵だって思い上がっている。仲間同士の結束力が無い。威力は強いが、的外れだ。それに、威力を高めるためにやたらと手間がかかっていた。土地全体を破壊するにはずいぶんと時間が必要なんじゃないか？」

シーグの言葉を聞くうちに、サフィリアの瞳から厳しさが消えていった。

「あなたの言うとおりね。他には？」

「ガイスが食事している間、青マント達はそわそわしていた。不意打ちが怖くて仕方が無いみたいだ」

「ディテクション（探知）が使えないから、目隠しされているようなものね。私の封土の中では、他にも水と風の関する魔術もほとんど使えないわ」

「地面をえぐったり、水を降らせたりする魔術だな」

「ええ、そうよ」

サフィリアは少し口を閉ざして考え込んだ。

「魔術の7系統で言うと、一番制限できるのはサモニング（召喚）ね」

「……」

シーグはゲッソリした表情でぼんやりと聞いている。アイフェは背中から抱きついてきて、シーグのナイフを狙って手を伸ばしている。

「イリュージョン（幻覚）を使ったとしても、こちらのディテクション（探知）で十分対処できるわ。だから、これは脅威にならない。むしろ、こちらに有利だわ」

「あのー、もしもし」

声をかけても、サフィリアは口元に手をやって考えに没頭している。シーグはアイフェの膝の後ろに肘を当てて、体勢を崩して遠ざけた。しかし、それは時間稼ぎにもならなかった。

「問題は、ブラスト（噴出）、プロテクション（防護）、エンチャント（付与）、エンハンス（向上）の4系統は影響を受けない。で

も、冷静に考えれば、あなたの言うとおりに十分戦える」
サフィリアは、シーグに向かって笑顔を向けた。だが、シーグはナイフを付けねらうアイフェをあしらうのに手一杯で返事が出来なかった。
「アイフェ、じっとしていなさい！」
「はい！」
サフィリアに強く言われてると、アイフェはビクリと肩を震わせ、その場で正座をして微動だにしなくなった。
すごい威力だ、とシーグは感心した。
「それで、どんな作戦でいけばいいのかしら？」
「説明してくれてなんだが、あんたが何を言っているのか俺にはさっぱりだ」
サフィリアの表情が固まる。アイフェも固まったままだ。シーグはなんだか時間が止まったような気がした。
「……ひょっとして聞いてなかったの？」
「耳には入っていたぞ。だが、俺は魔術に関してはド素人だ。知らんことを聞かされても右から左に抜けるだけだ」
シーグが胸を張って言う。サフィリアの期待に満ちた視線は、呆れたように細められた。
「何処が分からなかったの？」
「ほとんど全部だ。だが、説明してくれたらわかるぞ。たぶん」
どうだか、とサフィリアは小さくつぶやいた。が、それでも気を取り直して口を開いた。
「魔術には7つの系統があるの。まずはディテクション（探知）、次に――」
「一度にたくさん言われても絶対に覚えられん。さっきの……セワンだっけ？」
「セブン・パワー・インテグレーション《七力統合陣》！」
サフィリアが声を張り上げるとアイフェは更にカチカチに固まり、シーグはうるさそうに耳を軽く押さえていた。

「ああ、そんなだった。名前を覚えるのが苦手なんだよ」
「……もう陣形でいいわよ」
「それなら覚えやすい。で、さっきあんたが言いかけたことを説明してくれ。簡単にな」

1章ー9　魔術講義

サフィリアは、少し考え込んでから口を開いた。
「ガイスたちは私達の様子が全く分からないの」
「こっちも同じだろ？」
「違うわね、こっちはディテクション（探知）の魔術を使えるもの」
「だけど、それを防護されているんだろうが」
「使えない事と、防がれる事は違うの」
わけが分からなくなって、シーグは髪の毛をグシャリとかき混ぜた。
「逆に考えてみて。魔術で探知できない場所にガイスたちがいるってこと。彼らの使った探知防護は例えるなら、強大な城壁を作ったり、大きな袋をかぶって歩いているようなものね。何をしているかはわからないけど、何処にいるかを見つけるのは簡単なの」
「じゃあ、あんたがこっそり近づいて、風の魔術で奴らを奇襲するっていうのはどうだ？」
「それは出来ないの。魔術師は特別な感覚があるから。魔術師が近づいて来た時、近くで魔術が使われた時には眠っていても気づくわ」
「殺気みたいなものか」
サフィリアはうなずく。
「だから、魔術師が魔術師を不意打ちするのは不可能なの。出来るとしたら、あなたやアイフェのように魔術師じゃない人間だけよ」
「意外と制約があるんだな。で、警戒しなくていい何とかと何とかの魔術っていうのは？」
「覚えるつもりも無いなら、説明しないわ」
「じゃあ、気になる４つの魔術っていうのは何だ？」
サフィリアの嫌味交じりの言葉をシーグは軽く受け流す。
「正確には魔術じゃなくて、その系統なんだけど――」
シーグは眠たそうにまぶたを閉じて、寝たふりをした。サフィリ

アは大げさなため息をついた。
「簡単に説明するとね、ブラスト（噴出）は対象に向かってエネルギーをぶつける魔術よ」
「つまり、ガイスが放った的外れの火の玉。あんたが正確に打ち込んだ、殺気丸出しの風や水だな」
「何がいいたいことでもあるの？」
「気のせいだ」
「……プロテクション（防護）は魔術や物理的な攻撃から護る時に使うの」
「飛び散った岩の欠片がガイス達の目前で、はじかれたな。それに、さっきの探知防護がそれか？」
「ええ、そしてエンハンス（向上）は魔術の対象になった者の能力を上げることができるわ」
「じゃあ、ガイスが投げる火の玉の威力がどんどん上がっていたのは」
「後ろにいる青マントがエンハンス（向上）で援護していたのね。そもそも、セブン・パワー・インテグレーションは、エンハンス（向上）の効果を極限にまで高める陣形なの。分かった？」
「言葉の意味はよく分からないが、とにかくすごい威力になるわけか」
サフィリアはしぶしぶといった様子でうなずいた。
「最後のひとつがエンチャント（付与）。何かに魔力を加えて変化を起こすことよ。分かる？」
「分からん」
「……青マントが魔術を使ったのにガイスが空に浮いたでしょ。あんな風に人や物に魔術を付与するの」
「他にはどんな事ができるんだ？」
「定義が広すぎて特定できないわね。応用しだいで何だってできる。魔力を帯びた品物を作るときにも使うし、物に魔力を与えたり、小さくしたりできるわ」

「紙が湯気を立てる肉に変わったりしたのはひょっとして、それか」
「温度や状態まで保存できるのは、相当強力なエンチャンター（付与魔術師）よ。応用を順番に言えば、それだけで半日は過ぎるわ」
「じゃあ、戦いに限定すると、どんな使い方があるんだ？」
「そうね、弓から放たれた矢を魔術で固めて仕込んでおくの。すると、矢の威力も方向も保存されていて、解除の呪文ひとつだけで飛んでいくってわけ」
「まるで手品師だな」
「手品だって立派な魔術の技巧なのよ」
「とにかく予想できる範囲だと、ガイスたちはとてつもない威力の魔術を飛ばす上に、無茶苦茶固い壁で囲まれている」
「だけど、何もかもお見通しだったり、私たちが現実を見失うような事、得体の知れない何かを遠くから呼び出したりする事はないわね」
ディテクション（探知）と、イリュージョン（幻覚）と、サモニング（召喚）の事だけど、とサフィリアは小声で続ける。もちろん、シーグは耳を貸さず、腕を組んで黙り込んでしまった。
「どうしたの？」
「勝てるのか、そんな奴に」
「ちょっと待ちなさいよ！　勝ち目があるって言い出したのはあなたじゃない」
シーグはうるさそうに耳を手でふさいだ。
「いや、正直そこまで強烈だとは知らなかった。何でもありで、冗談じゃないくらいに手ごわいじゃないか」
「敵の強さに感心しないで！　そんな暇があったら勝つ方法を考えなさいよ」
「俺は戦士だ。魔術の事を考えるのは仕事じゃない」
「ひょっとしてあなた。男だったら家事はしなくていい。とか思っている人？」
「むぅ……」

黙りこんだシーグを見て、サフィリアは軽蔑の視線を送った。だが、すぐにまじめな表情に戻る。
「魔術は何でも好きなようにできるわけじゃないわ。同時にいくつもの事はできないの。終了したあとには隙ができるしね」
「その理屈は体術と似ているな。だけど、奴らは7人で、7つの事が同時に出来るんだろ。7対3で奇襲も無理。戦う以前の問題だ」
「違うわ。そこがセブ……、陣形の弱点なの。7人分の力を統合しているから、全力なら1つの魔術しか使えないわ。2つ同時がぎりぎりね。3つ以上は魔術同士の相互干渉が強くなるから、ガイスには使えないはずよ。理由を説明してもどうせ右から左でしょ？」
「まあな……じゃあ、敵はあくまで1人。使える魔術は2つなんだな」
「威力は7人前以上だけど、ガイスが率いてるから安定性は半人前以下ね。自分をもてあましている駄々っ子が相手だって思っていいわ。なら、とるべき戦法は――」
サフィリアは口元に手をやって考え込んだ。焦点の合わない視線を中空に飛ばし、小声でブツブツと何かをつぶやいている。
シーグは考えの邪魔にならないように寝転がった。ふと、正座したまま固まったアイフェと目が合う。アイフェは、サフィリアの言うとおりにじっと動いていなかった。まばたきどころか、息もしていない。顔が真っ赤になっている。
「おい、アイフェが大変だぞ」
サフィリアは驚きに肩を震わせて考えを中断した。
「ア、アイフェ。ごめんなさい」
彫像のように微動だにしないアイフェにあわてて駆け寄る。
「体の力を抜いて、息をして。自由にしていいのよ」
「いいの？」
サフィリアの言い聞かせるような声にアイフェは目だけを動かして聞いた。サフィリアが大きくうなずいた。
「ぷはーー」

アイフェはまばたきしながら、深呼吸して呼吸を整えている。サフィリアが心配そうに背中をさすっている。呼吸が整うと、アイフェは一挙動で跳ね上がるとシーグに向かって飛び掛ってきた。シーグはあわてて、ナイフがある腰のベルトを守る。だが、それがまずかった。

「ぐえ！」

下腹部の際どい場所にアイフェの頭突きを受けて、シーグはカエルのつぶれたような声を出した。

身動き取れないシーグが訴えると、アイフェはお構いなしに、満面の笑顔で腹の上に馬乗りになった。

「……離れてくれ」

「やーだ。自由にしていいってサフィリアが言ったんだもん」

「頼む、やめさせてくれ」

サフィリアに懇願すると、怖い目つきで睨まれただけだった。

「際どい場所をぶつけたが、あんたが考えているのとは少し違うぞ」

説明口調で念を押すと、サフィリアはわずかに顔を赤らめた。

「何も思っていません！」

「ねえねえ、ガイスの特殊な趣味って何？　どうして、シーグも同じなの？　際どい場所って何処？」

興味深々の問いにサフィリアは更に顔を紅潮させた。

「それは説明するのが難しいが、つまりだな……」

シーグは痛みをこらえながらゆっくりつぶやく。

「あなたはいちいち口を挟まないでください！」

サフィリアに怒鳴られて、シーグはおどけるように肩をすくめた。

アイフェは驚きに目を見開いている。

「と、まあこんな風に怒るから、この話はやめた方がいい」

「分かったよ。だから、もうサフィリアを怒らせちゃ嫌だよ」

「そうだな。気をつけるよ」

まじめぶって言うアイフェに、シーグは笑いをかみ殺しながら謝った。

「じゃあ、作戦を説明するわよ！」
ほほを軽く叩きながら、サフィリアは叩きつけるようにいった。。
「戦うのは、３人でなんだよな？」
シーグが念を押すと、アイフェが輝くような笑顔を見せた。サフィリアは複雑な表情を浮かべながらうなずく。シーグはナイフを投げて渡してやった。アイフェは空中でナイフを受け止めて、夢見るような表情でナイフを胸に抱きしめる。
「ねえ、誰を殺せばいい？」
「誰も殺さなくていいのよ」
アイフェの問いにサフィリアはさとすように答える。アイフェは納得のいかない様子で、ぶっすりとしている。
「甘い考えは命取りだ。敵は殺せるときに殺しておかないと、最後にはこっちがやられるぞ」
シーグの言葉にアイフェは大きくうなずく。サフィリアは自虐的な笑みを浮かべた。
「ガイス一人を殺したぐらいでは納まらないわ。私が置かれている状況はそれくらいひどいって事よ」
「向かうところ敵だらけってわけか」
「……それでも、私の味方をしてくれる？」
「当然だ。で、どんな戦法でいくんだ」
シーグの迷いの無い声にサフィリアは複雑な表情を浮かべている。
「まずは、彼らの付けているマントを破壊するの」
「ガイスの赤マントに、他の６人の青マントか？」
「そうよ、あれが魔方陣の役割を果たしているの。杖の長さより近くに距離を詰めると自動的に陣形が発動するわけね。赤マントが破壊できれば一番なんだけど、青マントを４枚でも十分効果があるわ」
「金貨の模様が魔方陣なのか？」
「いいえ、あれはたんなるガイスの悪趣味よ」
『悪趣味』に力をこめてサフィリアは言った。
「布の折り方、糸の縫い方に意味があるの。そうね、マントを切り

裂くか、小さな穴を開けるだけでも無効化できるわ。そのためには――」

サフィリアは唇に人差し指を当て、小声で作戦を話し始めた。

1章－10　戦闘開始

＊

「ええい、うっとおしい森だ！　全く進めないではないか」
先ほどシーグやアイフェが通り抜けていった小道で、ガイスは駄々っ子のように杖を振り回している。青マント達は、ガイスからは見えない位置でいっせいにため息を合唱した。
最短距離を行くため、森の中を突っ切るとガイスが言い出したのが足止めの原因だ。森はどんどんと深くなり、木や茂みが密生し始めた。魔術でガイス浮かせても、体を横に倒しても枝葉が必ず引っかかる。見通しの良い湖の上を飛ばせば簡単だったが、それはガイスが怖がるために森を進む以外なかった。
青マント達だけなら、何の問題も無かった。無理に押し込めば、ガイスでも何とか通り抜けられる。だが、お気に入りの真紅のマントや装飾品が木の枝で傷ついたことで怒りだし、ガイスの感情が収まるのを青マント達は待っている。たぶん、何人かは八つ当たりされるだろうと覚悟しながら。
バサバサ……。
わずかに聞こえた鳥の羽音で、青マント達はガイスの周囲に集まった。
「暑苦しいぞ、寄るな」
耳掃除が嫌いなガイスはまだ気づいていない。
「ベクター導師」
「ああ、おそらく敵だ」
ベクターが小声で返事する。耳の遠いガイスに聞こえないよう、うつむきながら早口で。ベクターは水面ぎりぎりを、鳥の群れが向かってくるのを見つけた。
「水鳥が森に向かって飛ぶはずが無い。エンチャント（付与）で操

られている可能性がある。各自、警戒を怠るなよ」
　他の青マントはガイスからは見えないように、手のひらを上下させた。『分かった』の合図だ。バサバサと騒がしい羽音を立てて、水鳥の群れが通り過ぎてゆく。
　すぐ近くに鳥の糞が落ちる。更に泥まみれの水草がマントをかすめるのを見て、ガイスは顔色を変えた。
「プロテクション（防護）を展開しろ。服が汚れてしまう」
「ですが、今は」
「黙れ！　反論するな」
　ベクターを蹴りつけておいて、ガイスは杖を振り上げる。ベクターを含む青マント全員がそろって杖を振り上げた。赤色の壁が出現し、一瞬後には何も見えなくなる。飛んできた糞や水草が空中に張り付いて、ゆっくりと下に向かって垂れている。やがて鳥がすべて通り過ぎると、ガイスは杖をおろす。すると、壁が消えて張り付いていた糞や水草が一斉に地面に落ちた。
「上だ！」
　ベクターの声と、真上にある木の中から黒髪の少年、シーグが現れたのは同時だった。シーグは落下しながらガイスの背中に剣を振り下ろす。誰もが驚き動けない中で、ベクターだけがシーグの動きに対応して杖を突き出した。
「べ、ベクター導師！」
　誰かが驚きの声を出す。続いて、キン、という軽い金属音。剣は完全に弾かれたが、シーグは地面に着地すると、腰のナイフを引き抜き一挙動でガイスに投げつけた。身動きできないガイスに命中する寸前、ベクターがマントを投げ付けナイフからガイスを守った。
　間髪おかずに、シーグはベクターに駆け寄って突きを放つ。ベクターは杖で受け流すと、そのままに杖を反転させシーグの足元をなぎ払う。シーグが小さく横に飛んでかわすと、目の間にはベクターの膝が迫っていた。とっさに、後ろに飛びながら両腕で顔をかばう。それでも、腕の骨が砕けると思えるような衝撃。たたらを踏んで後

ずさるシーグに向かって、ベクターは腕を突き出して叫んだ。
「ヴォルド！」
その瞬間、背筋が凍りついたように痛み、シーグはそのまま後ろに倒れこんだ。すると、三本の小さな矢がシーグの首をかすめて木に突き刺さった。完全に体勢を崩したシーグに、ベクターは杖を向ける。
「うわっ」
背後の悲鳴にベクターが振り向く。すると、銀髪の少女が短剣を振り回し、悲鳴を上げた男のマントを1枚ズタズタに切り裂いていた。ベクターが後戻りすると、少女は「べー」と舌を出して、木の陰に隠れる。ベクターが追いかけて、木の裏を覗き込むがそこには誰もなく、人のいた気配さえも無かった。イリュージョン（幻覚）でも見せられたのかと思ったが、マントはバラバラになっている。
シーグもすでに茂みの向こうに逃げ出した。
青マント達は呆然としていて、ガイスは未だに震え上がって動けない。「キャハハ」という楽しそうな少女の声が遠くから聞こえて来た。

＊

1章－11　チューって何？

＊

首から流れる血は、皮鎧の首元から胸まで赤く染めていた。
「やっぱり、買い直すしかないのかな」
汗と血でまだら模様になった皮鎧を見て、シーグはつぶやいた。
かやぶきの家が見える広場までもう少し、というところで足音が近づいてきた。幻覚の壁を通り抜けて、サフィリアが姿を現す。
「シーグ、大丈夫？」
青ざめたサフィリアは走り寄ってきて、ハンカチでシーグの首元を押さえる。
「おい、水盤の前から離れてもいいのか？」
「大丈夫よ。ガイス達は立ち止まっているから。ねえ、腕も冷やした方がいいんじゃない？」
「いや、冷やすと動きが鈍くなる。こっちは戦いが終わってからだ」
シーグはハンカチを受け取って傷口を押さえた。ハンカチが少しずつ赤く染まってゆく。サフィリアは次に水にひたしたタオルで、シーグの首元と肩口を拭いてゆく。
「もうちょっとで、ガイスのマントに届いたんだがな」
「私のせいで……ごめんなさい」
いきなりの謝罪の言葉にシーグは調子が狂った。
「そんな事はない。あの矢の事。聞いてなかったら、怪我じゃすまなかった。本当に助かったぞ」
「……でも」
サフィリアは急にしおらしくなって、うつむいたままだ。
「別にベクターがあんたの知り合いだって言われても、俺は気にしない」
サフィリアは驚きの表情でシーグを見つめる。

「知り合いだって分かったら、本気を出しにくくなると思ったからだろ？　残念ながら、俺は手抜きができない性分なんでね。怪我をしたのは俺がヘマをしたからだ」
「いつ気づいたの」
「戦ってすぐにな。誰かさんにそっくりで足癖が悪かったし」
シーグの言葉に、サフィリアは一瞬だけムッとしたが再び肩を落とした。
「彼は私に戦いの訓練を付けてくれたの。名前はベクター・フォルナージュ。宮廷魔術師にも、騎士団長にもなれるって言われた天才よ」
サフィリアの落ちこんだ声の中に、誇るような響きがあるのをシーグは聞き取った。
「真上から襲撃したのに、完全に読まれていたな」
「魔術は終了したあとに一番大きな隙ができる。そう教えてくれたのは、あの人だもの。私の作戦を先読みされていたの」
「だけど、何もかもお見通しってわけじゃなかったな。水鳥でかく乱されると気づいていても、糞やら水草やらを落としてガイスに魔術を使わせた時も、背後からアイフェが襲い掛かった時も驚いていた。完全な不意打ちになっていたぞ」
シーグの言葉にサフィリアは顔を上げた。
「つまり、あんたの作戦勝ちってわけだ。これからもこの調子でいこう」
「わかったわ」
サフィリアは笑顔でうなずいた。そこで、サフィリアの瞳が透き通るような碧色だという事にシーグは初めて気づいた。湖岸の風が金糸のような髪をなびかせ、木々の隙間から差し込んだ光に煌く――――。
「ねえねえ、いつになったらチューするの？」
突然の声に、シーグとサフィリアは驚愕して頭上を見た。そこでは、枝に腰掛けたアイフェがじっと2人を見ていたのだった。

「いつからそこにいたの！」
「ずっといたよ」
アイフェは枝から飛び降り、空中で一回転して音もなく舞い降りた。そして、眼を輝かせながら、シーグとサフィリアを交互に見る。
「見つめあった後には、チューするのが礼儀なんでしょ？」
「そんな決まりはありません！」
サフィリアが顔を赤くして、アイフェを怒鳴りつけた。そしてプイと背中を向けると、いそいそと家の方に歩いてゆく。
感情しだいでずいぶん言葉遣いが変わるんだな、とシーグは思った。
「ねえ、どうしたの？」
「湖の水に用事があるんだろ。水盤を使うんだし」
シーグはなんだか面倒な気分になって適当に答えた。
「さっきの言葉だけど、意味をわかって言ったのか？」
「なんのこと？」
「……いや、なんでもない」
口に出すのも恥ずかしくなって、シーグは額を押さえた。
「あ、チューのことだね。意味は知らない。でも、みんなそう言うの」
アイフェの言う『みんな』とは、日ごろどんな話をしていたのだろうか、とシーグは思った。
「ねえ、チューって何？」
「別に知らなくてもいい」
「でも、シーグもサフィリアも知っているんだね。世間の常識は私も知っておくべきなんだよ」
シーグはどうやって誤魔化したものかと考えた。少し考え込んでから口を開く。
「その事を口にすると、サフィリアが大激怒するぞ」
アイフェはビクリと肩を震わせた。
「ものすごく怒るって事？」

「いや、その程度じゃすまないな。とてつもなくて、すさまじくて、しかも終わりがない。自分で考えてもあんまりだと思う。恐ろしいくらいに悲惨だ……」

オドロオドロしい雰囲気を出しながら、ゆっくりと言葉をつむぐとアイフェはどんどんと深刻な表情に変わっていった。子ども特有の、豊かな想像力を総動員しているのだ。シーグが真っ直ぐ見つめると、アイフェはゴクリと唾を飲み込んで、目をまん丸に見開いていた。

「ぞっ！！」

「ひゃあっ！」

止めとばかりにいきなり大声を出すと、アイフェは爪先立ちになって飛び上がった。ふと、そこで戻ってきたサフィリアと目が合う。すごく気まずい空気が漂った。

「小さな女の子を怖がらせて何を喜んでいるの？　あなたって、やっぱり……」

サフィリアは言葉を切って、気味の悪いもののようにシーグを斜めに睨みつける。

「……なのね」

あまりに長い、十以上の言葉を話せるほどの長い沈黙の後に、サフィリアはポツリため息のようにつぶやく。シーグは腕以上に胸が痛くなり、居たたまれない気持ちになった。

「そろそろ、次の作戦の話をします。家の前まで来てくださいね」

何事もなかったかのように事務的な口調でサフィリアは家のほうを指差した。

1章－12　余計な事

＊

丸い池の縁に、サフィリアは静かに腰を下ろした。シーグも近くに座る。アイフェだけは、「シーグから離れて静かに聞いていなさい」、と言われたので、少し離れて気配も感じさせず、人形のように座っていた。

「青マント達は魔術都市でも寄りぬきのエリートばかりよ」

「不意もうたずに近づくと、返り討ちだな。しかし、なんでそんなに有能な奴らがあんな奴の下で働いているんだ？」

「彼らに拒否権はなかったからよ。いつでもガイスのやり方は金の暴力なの」

「青マント達が気の毒に思えてきたな」

「私達の方がもっと悲惨よ。ガイスを殺したら、ジュサック家がまとめて敵になる。青マントの命を奪うようなことがあれば、魔術都市にいる彼らの一族が黙っていないもの」

「簡単に言うが、生け捕りは一番難しいんだぞ」

サフィリアが唇をかみ締めて、足を止める。シーグは失言だったと後悔した。

「ええと、ガイスの赤マント1枚か、青マント4枚破壊を破壊する。理想どおりにはいかなかったな」

「でも、1枚は確実に破壊したもの。ナイフが刺さったマントもたぶん使えない。だから、フォース・パワー・インテグレーション（四力統合陣）ね」

シーグは、あいた方の手で指を一本ずつ立てながら数を数える。

「……残り5枚だろ？　計算が合わないぞ」

「これを見て」

サフィリアが手を振ると湖面に、『∴』と『∴』が並んで浮かび

上がった。
「これが青マント達が陣形を作る時の立ち位置よ。これを線で結ぶと三角形が出来るわ」
点が線で結ばれて『△』と『▽』になった。
「この三角形を二つあわせると星になるのが分かる？」
「六ぼう星だな」
シーグが答えると、２つの三角が重なり、中央に赤い点が浮かび上がる。
「ガイスの赤いマントは、この２つの三角を繋いで安定させているの。つまり、ボタンやブローチの役割ね。無いと陣形が崩れてしまう」
「なるほど、だから赤マントが一番の目標だったわけか」
「だけど、確実に青マントを１つは破壊した。点が１つ消えたら三角形は消えてしまう」
サフィリアの言ったとおりに湖面の三角が１つ消滅する。
「残りは三角形が１つと、ガイスの赤マント。つまり、合わせてフォース（４人）って事か」
「魔方陣は丸に近いほど安定するの。だから、もう大技は使えないわね。威力は１０分の１以下。もう、天空の水盤全体を破壊する力は無いわ」
「それでも、俺たちを吹き飛ばす程度の威力はあるのか」
「かすっただけでも骨まで燃え尽きるわね。試してみる？」
「……遠慮したいな」
突然、サフィリアが顔を近づけてきたので、シーグは身を引いた。
「だいぶ、血が止まってきたわね」
サフィリアが薬を塗った包帯を巻こうとすると、シーグは大慌てで後ずさった。
「なんで逃げるのよ」
「自分でやる。気にするな」
逃げ腰になったシーグにサフィリアは詰め寄る。

「痛くなんてしないわよ」
「……そうだ、俺は自分で包帯を持っていたんだった！」
「何よ、その変なしゃべり方」
シーグは皮鎧のポケットから緑色に変色した布切れを取り出した。皮から染み出した汚れを吸い込んで、ひどい臭いを放っている。今度はサフィリアが小さく悲鳴をあげて後ずさった。
「それを……使うの？」
「……いや悪かった。その包帯を使わせてくれ」
サフィリアは杖の先に包帯を乗せて、離れたままシーグに差し出した。
「絶対に近寄らないで」
「そこまで嫌がらなくてもいいだろう」
妙に潔癖だな、と思いながらシーグは包帯を受け取った。
薬が体に触れるのが恐ろしい。覚悟を決めて傷口に当てると、毒のはずがないと分かっていても焼けるような熱さを感じ、吐き気がする。シーグはこらえながら、包帯を巻きつける。
「薬がしみるの？」
「大丈夫だ」
アイフェは何が楽しいのか、ニコニコしながらシーグとサフィリアを見ている。
「そうには見えないけど……」
つぶやきながら、サフィリアは杖で湖面を軽く叩く。すると、水面にガイス達の様子が浮かび上がった。ガイスはまだショックで茫然自失の状態にあった。ベクターが口を忙しく動かして、青マント達に指示を出している。
「声が聞こえないぞ」
「読唇術、唇の動きを読みあって会話しているみたいね」
「何て言っているんだ」
サフィリアはしばらくの間、ベクター達の様子を食い入るように見ていた。会話としては奇妙で、誰かが口を開いているのに、邪魔

をするように次の人間が話し始める。身振り手振りが混じっている事もあれば、指を立てたり曲げたりする事もあった。
「断片的だけど……暁の星……六ぼう星、死神、水銀、虚空の城壁」
「なんだ、そりゃ」
「魔術師の隠語よ。『暁の星』は空、六ぼう星は『魔術』、『死神』はそのままね。『水銀』は産み出す。『虚空の城壁』は空気……。いえ、この場合は風かしら」
「意味が分からんぞ」
「分からない様にしているのよ。２人同時に口を開いているのは、片方が意味のない事を言っているの。話す内容だって順番があべこべになっているかもしれないわ。本当と嘘を時間を割り当てて言っているかもしれないし、視線で会話をしている場合もある。隠語じゃなくて仲間内だけの暗号のときもありそうよ」
「頭が痛くなりそうだな。何でそんな面倒な事を？」
「ここが天空の水盤だから、私に常に監視されても分からないようにしてきたのよ。さっきの内容も１０数える時間のホンの一部の内容。それだけ解読するのに、何倍も時間をつかったわ。でも、嘘の情報かもしれない」
「真面目に調べても、かえって混乱させられるだけか」
奇術師の芸のようにすごい速さでやり取りしているベクター達。魔術師っていうのは多芸だな、とシーグは思った。
「攻撃は相手が体制が整う前に。それが戦いの常道なんだが、どう思う？」
「この場合は逆ね。ガイスが立ち直るのを待って、陣形をまとめてもらった方がこちらに有利よ。ベクターが指揮を取ったら絶対に勝ち目はないわ。ううん、あの人が本気になっていたら、すでに私たちは負けているわね。メティオスマッシャー（隕石の強撃）だって城砦を落とす程度じゃ済まなくて、今頃、国の１つも奪っているかも」
敵を褒める暇があるなら、対策を考えるんじゃなかったのか？

と、シーグは心の中でつぶやく。
「で、次に奴らはどう動くんだ」
「陣形に加わるのが４人になって、魔術の威力は落ちたわ。でも、３人は自由に動けるようになったの。つまり、大技と小技の組み合わせになるわけ」
　ベクターが自由に動く。ひょっとして、余計に手ごわくなったのでは？　とシーグは思った。
「この家の周囲は、封土の中でも一番私の力が強くなる場所なの。あらかじめ、張り巡らせたプロテクション（防護）魔術もあるしね。手加減なしで、私が一番得意な雷の魔術を使えば、互角の戦いが出来ると思う」
「勝てるのか？」
「威力では私の方がずっと劣るわね。でも、ガイスたちは４人の魔術を統合する、つまり息を合わせる必要があるの。だから、私の方が速く魔術を展開できるわ。系統と属性を見越した上での対抗魔術を使う。威力の差は手数で押し切るの」
「手加減は出来るのか？」
「威力をうまく調整すれば、それに向こうも守りはするはずだし……」
　サフィリアの流れるような口調は、最後にはどんどんと遅く、小さくなっていった。
「とにかく、勢いを緩めずにたたみ掛けて、小技を出す暇を与えないのか」
　だが、魔術は人間を一撃必殺できる威力がある代わりに、手加減が難しいようだ。だとすると、最後にガイスを捕らえるのは、自分かアイフェがいい。そのためには、接近する必要がある。だけど、アイフェは森の中からともかく、見晴らしのいいひらけた場所で戦えるだろうか？
　そんな事を考えて込んでいると、サフィリアが何か言いたげにじっと見つめている事に気づいた。

「どうした」
「えっ？　ううん……何でもないわ」
サフィリアは慌てて、両手を左右に振った。
「瞬発力で勝負するなら、距離を詰めておいた方がいいのかな」
「その通りだけど。具体的にはどうするつもり？」
「アイフェに協力してもらえば簡単だ」
突然、自分の名前を出されてアイフェはピクリと反応した。しかし、「静かに聞いていなさい」と言われたため、一言も漏らさない。
「どうするつもり？」
「森の中に隠れてもらうんだ。いい作戦だろ？」
サフィリアは軽くうなずき、探るような視線でシーグをじっと見つめる。
「あなたって本当に魔術の素人？　急に物わかりが良くなる時があるけど」
「教え方がいいからだろ。きっと、あんたはいい先生になれるぞ」
「えっ……」
サフィリアは言葉に詰まり、口元を押さえて眼をきょろきょろさせている。
「やっぱり、言いたいことがあるんじゃないか？」
「な、何もないわよ！」
サフィリアは、大声で怒鳴ると肩を怒らせてそっぽを向いた。
また、何か怒らせることを言ってしまったのだろうか。シーグはわけが分からなくて、頭をかいた。
「あいつら、生かしておかん！！」
突然、空気を震わせるようなガイスの大音声。
シーグは横倒しになり、アイフェは正座したまま跳ね上がった。
サフィリアも体勢を崩して、地面に片手を突いている。
「許さん、許さんぞ。奴らは絶対に皆殺しにしてくれる」
ベクターがうなずきかけると、青マント達はガイスからは見えないように、手のひらを上下させた。その後は、全員口を閉ざして動

きを止めた。
　サフィリアが杖で水面をなでると、やかましく怒鳴り散らすガイスの声は消えた。だが、顔中の肉がぶらぶら揺れていたし、口を開くたびに飛び出す唾が水盤の向こうから届きそうな気がして、シーグとサフィリアは後ずさった。
「……まあ、この様子だと戦うに違いないだろうが、逃げられたら厄介だな。魔術師ってのはいつでも煙のように消えられるんだろ？」
「そんな事はないわ。空間に関係する魔術は、簡単に妨害できるもの」
　おどけるシーグに対して、サフィリアは皮肉な笑みを浮かべながら言葉を続ける。
「逃げても逃げても必ず追いつめられる。魔術師同士の戦いは悲惨だわ。例えるなら、お互いに首を絞めあってどっちが先に根を上げるか、競い合うようなものね。一度戦いを始めたら最後、負けた方はもちろん、勝った方でさえ無事では済まないわ」
「……なるほどね」
　また、余計な事を言ってしまった。と、シーグは後悔した。
　水盤では、ガイスが怒鳴り散らしながら青マントを右から順番に杖で殴っている。ベクターだけは3度叩かれたのを見て、サフィリアは目つきを険しくしていた。

1章ー13　フィー！

＊

「来たよ」
アイフェが顔を上げて、森の一点を見つめる。木々を踏み分けてガイス達が出てきた。7人全員が杖の届く距離に集まって、きょろきょろと周囲を見回している。
「そうか。ガイス達からは、俺たちがどこにいるか見えていないんだ」
「幻覚の壁があるものね。それに防護魔術も張っている。だから、ガイスが最初に何をするかは見当はついているわ。耳をふさいでいてね」
サフィリアが杖を構えて呪文を唱え始めと、ガイスも同時に杖を掲げて何かブツブツつぶやきはじめた。
風が吹いたわけでもなく、音が聞こえるわけでもない。だが、シーグにも何か強力な力が満ちてくるのが分かった。周囲の木々から鳥たちが慌てて飛び立ってゆく。
「来たれ、天よりの災厄！」
サフィリアは、声高に叫ぶと杖を真っ直ぐガイスに向ける。
「ヴォルド・ヴェイ・レイ・ザ・アーク！」
杖の先端から、一抱えも黄金色の光条が飛ぶ。目が焼け付くようにまぶしく、空気を焦がす匂いが鼻をつく。まるで、雷が落ちたようだ。アイフェが耳を押さえて、目をぱちくりさせている。
果たして、ガイスは何事もなかったように立っていた。周囲に赤い色の壁が出来て、雷を防いだのだ。
「あの速さの雷を止めたのか？」
「打つ前に気づかれただけよ。大規模な魔術合戦に不意打ちはないの。次、行くわよ」

サフィリアは、今度は下段に杖を構えた。空気が動く気配があって、高い山に登ったときのように耳が聞こえにくくなった。
「切り裂け、風刃。ヴォルド・ヴェイ・アル・グ・ラッド！」
呪文と共に杖を振り上げると、風が地面に三つの爪あとを残しながら、ガイスに向かって殺到する。地面をえぐる溝は深く、刃の長さは身長の倍はあった。ガイスの張り巡らせた壁に直撃すると、周囲の地面が大きくえぐれた。
自分に向けられたときに、どれだけ手加減されていたかをシーグは知った。
「今度は向こうの魔術が来るわ。ブラストの系統、解術の属性、球状の効果範囲」
ガイスが杖を振り下ろすと、背後にあった家が忽然と姿を消した。
「家が消えたぞ！」
「幻覚の壁と、防護魔術を全部消されたわ。家はいつでも出せるから気にしないで」
どうやって？　と思ったがシーグは口には出さなかった。魔術師同士の戦いで、いちいち驚くのは無駄だ。
「じゃあ、私は行くよ」
「お願いね、アイフェ」
サフィリアがうなずくのを見て、アイフェはガイス達から距離をとったまま森の中に走っていった。茂みを隠れながら、背後に回りこんでくれる手はずになっている。ベクターがアイフェを指さすと、ガイスはゆるゆると前進して森から遠ざかった。見通しの悪い森から突然奇襲される事を恐れて、前進したのだ。
ベクターが指示すると、2人の青マントが壁をすり抜けて距離をとった。サフィリアは、呪文もなしに素早く二度杖を振る。すると、青マント達は、風の刃から逃れて再び壁の中に引っ込む。
「あの赤い壁はプロテクションの系統、対物理と魔術の属性、球形の密閉空間を作っているわ。出入りができるのはガイスが認めた人だけね」

「何でも向こうの思い通りなら、お手上げじゃないか」
「違うわ。出入り自由の壁は脆くなるし、何でも止める壁だったら何をぶつけても壊せるの。着脱の簡単な防具は脆くなるし、剣だって受け流さず真正面から受け止めたら折れるでしょ」
「魔術にも万能はありえないわけか」
赤い壁の向こう側でガイスと４人の青マントが杖を掲げて、呪文を唱え始めた。ベクターが何もせずに、懐に手を突っ込んでいるのがやけに気になる。
「さあ、来るわ。ブラスト（噴出）の系統、炎の属性、エンハンス（向上）の系統で増幅」
サフィリアがつぶやくと、赤い壁の外に火の玉が生まれた。
「メティオスマッシャー（隕石の強撃）か」
ガイス達の異名となり、難攻不落の城砦を一撃で破壊した魔術だ。火球はみるみるうちに、大きくなりガイスとシーグ達の間をさえぎる。陽炎ができる真夏のように景色がゆがんで、焼け付くような熱気が届く。まるで、太陽が降りてきたようだ。
「これで、十分の一だって？」
身長の三倍ほどに膨れ上がった火球を見て、シーグは生唾を飲み込んだ。一抱えほどの大きさでも木をなぎ倒す威力を持っていたというのに。
「でも、本当に隕石が落ちてくるのに比べたら、たいした事はないわ」
そんなものと比べるのか？　と、魔術師のスケールの大きさにシーグは呆れる思いだった。
「どうするつもりだ」
「どうしようかしら」
サフィリアは、人事のようにつぶやいて小首をかしげる。
「ただ、見ているだけのつもりか！」
「あら、あなたでも慌てる事があるのね」
シーグが声を荒げると、サフィリアは楽しそうにくすくすと笑っ

た。
「見てるんじゃなくて、待っているの。うーん、この位でいいかな？」
料理の火加減でも確かめるような気楽な口調で言いながら、片手でクルクルと杖を回している。
「魔術の真髄は純粋な威力じゃないわ。系統と属性を組み合わせ、起きる現象に適切な対応をする事よ」
サフィリアはよく通る声で言うと、杖を地面に突き立てた。
「水天の交わり。ウェスト・ヴァル・ナ・フェルナミア」
池の水がゴボリと音を立てて持ち上がり、水の幕が火球の前に展開された。ガイスがバカにするような笑みを浮かべている。ただ、一人ベクターだけは眉をしかめると、真上を見て顔色を変えた。シーグが不思議に思っていると、サフィリアが杖で空を指す。火球のせいで景色がゆがんでよく分からなかったが、ガイス達の真上に透明な何かが浮かんでいる。
それは池の水に数倍する量だった。湖から水がどんどんと集まって更に大きくなってきている。
「さあて、一雨くるわよ。また、耳をふさいでね」
なぜ、雨で耳を？　シーグが疑問に思っていると、サフィリアは大上段から杖を振り下ろした。
すると、水の固まりは滝の瀑布のようになだれ落ちた。ガイスの表情が恐怖に引きつる。そして、水が叩きつけられると同時に、火球が爆発した。耳を両手で押さえていても轟音が耳に刺さる。爆発した熱湯と衝撃波が、張り巡らせた水の壁をも貫いてシーグとサフィリアをも巻き込んだ。
豪雨さながらに温かい水が降って来て、周囲が深い霧に包まれている。
「一体何なんだ？」
つぶやく自分の声も遠くから聞こえる気がする。周囲を見渡すと、サフィリアが片膝をついている。

「フィー！」
シーグは慌てて駆け寄ると、サフィリアは頭を抑えながら体を起こした。
「今、何か言った？」
「……なんでもない。それよりも何が起こったんだ」
「水蒸気爆発。火山でよく起こる現象ね」
「知らん。それよりも、あんたに怪我はないのか？」
「耳の中に水が入っただけよ」
サフィリアは頭を振って、水を被って乱れた髪を押さえつけた。
「分かりやすく言うとね、熱した鉄に水をまくと水蒸気が噴き出すでしょ。煮立った油に水をたくさん注いだら、一度に水蒸気が噴出して爆発するわ。それを、さっきの規模で行うとこうなるわけ。どれも危ないから真似しちゃ駄目よ」
最後のは真似できるわけないだろう、とシーグは思った。そして、サフィリアが立ち上がるために、手を取って引っ張る。
「これからは、火の取り扱いに気をつけるよ」
「水の取り扱いにもね」
サフィリアは、人差し指を立てながら付け足した。
「自分で爆発を起こして巻き込まれるなんて、あんたは問題だらけの先生になれるぞ」
「悪かったわね」
周囲には湯気がもうもうと立ち込めていて、蒸気風呂のようになっている。
「ガイスは蒸し焼きにでもなったのかな？」
想像するんじゃなかったと後悔しながら、サフィリアに目をやってシーグは息を呑んだ。湯を浴びてローブがぴったりと体に張り付いていたからだ。細い肩のラインが肌色に浮き上がって、下着のレースの模様まで透けて見える。うなじには濡れた髪が絡みついていた。サフィリアが無造作に首もとの髪を払い、真っ白なうなじがあらわになる。シーグはあわてて視線をそらした。

「場所は特定できないけど、全員生きているわ。水圧と水蒸気爆発の二段攻撃だもの。赤い壁は完全に破壊できているわ――」

サフィリアはピタリと口を閉ざして、霧の向こうを睨みつけた。

「エンチャント（付与）の系統、変化の属性。ベクターの一番得意な魔術よ」

何でもありの系統で、しかもベクター。シーグは蒸し暑さも忘れて、背筋に冷や汗が流れるのを感じた。

サフィリアは緊張した面持ちで杖を強く握り締めて杖を構えている。

「何をするつもりか知らないけど、先制攻撃を仕掛けるわ」

気合と共に杖を横なぎに振って、風の刃を飛ばす。シーグに放たれたのと同じ、手加減された風が霧を裂いて飛んでいった。風が何かを裂く音がして、サフィリアは青ざめた。

「どうなったんだ」

「うそ、当たった……」

呆然とつぶやいた後に、サフィリアは霧の向こうに向かってフラフラと歩き出し、すぐに走り出した。

「ベクター、無事なの？」

敵に向かって言うにはふさわしくない悲痛な声。その返事は風を叩くようなくぐもった音だった。巨大な旗が風を受けたときにこんな音が鳴る。

しかし、何故？

シーグは正体は分からなくとも、背筋に走る戦慄から死の匂いを感じ取った。

「戻れ。罠だ！」

「え？」

目に涙をためて、不思議そうに振り向くサフィリア。

シーグがサフィリアに飛びついた瞬間、黒い巨大な爪が霧の向こうから迫る。爪が横なぎに振り払われると、霧のかかった空に金色の髪と赤い血しぶきが舞う。

1章－14　空の死神

巨大なカギ爪は皮鎧をやすやすと切り裂いた。シーグは焼け付くような背中の痛みをこらえて振り返る。

霧を割って現れたのは巨大な怪物。コウモリの翼にぎらつく黒い鱗、鞭のようにしなる尾。肉食の爬虫類特有の大きな口と、巨大な鎌を連想させるカギ爪。空を飛ぶ死神のような怪物が霧の向こうに消えていった。

シーグはまだ呆然としているサフィリアの手を引っぱって無理やり立たせた。

「背中を怪我をしたんじゃない？」

サフィリアは、血の気を失って青ざめている。

「鎧で止まったからかすり傷だ。気にするな」

そう言ったものの、実際には出血が多くて傷口が広い。体を動かしている以上止血は無理だ。いつまで、体が満足に動くかがわからない。意識が飛ぶ前に決着をつけなければ。

「そんな顔するなよ。大怪我をしたと思って痛くなるだろうが」

「だけど……」

つぶやき、痛々しい表情で胸元を押さえた後サフィリアは何かを振り払うように首を左右に振った。

「あれはワイバーンよ」

毅然とした表情となって先を続ける。

「鋭い爪と牙は鋼鉄の鎧も引き裂くの。そして、さっきの風の魔術程度なら、硬い鱗で跳ね返してしまうわ」

「呼び出す魔術は使えないんじゃなかったのか？」

「召還したんじゃなくて、ずっと持ち運んでいたの。エンチャント（付与）で小さくして、固めておいたんだわ」

「生き物、それもあんな怪物まで自由自在なのか？」

「魔術師の技量しだいね。ベクターならできるわ」

「……本当に何でもありなんだな」
シーグは舌打ちをした。ワイバーンは霧の向こうに飛び去り、見えなくなった。だが、翼を羽ばたかせる音から、大きく旋回して引き返してくるのが分かる。
「戻って来るぞ」
「雷撃の魔術で打ち落とします。空飛ぶ消し炭にしてあげるわ」
「魔術が完成するまでに一度は攻撃を食らうぞ」
「この霧だもの。近づいてもらわないと、狙いをつけられないわ」
「つまり、俺はワイバーンからあんたを守ればいいわけだ」
シーグの背中を見て、サフィリアの顔が苦しげにゆがむ。
「家事仕事をやらせされるよりはずっと楽だぞ」
シーグが肩をすくめてつぶやく。
「雷撃は霧で放電するから、魔術を打つときには私から離れて……信じてるからね」
「当然だ」
サフィリアは口元に微笑を浮かべた。小さくつぶやき杖を掲げると、目を閉じて呪文を唱え始めた。シーグは剣を構えて霧に目を凝らす。ワイバーンはドラゴンとは違う。空高くから一方的に火の吐息をあびせる事はない。攻撃するなら、必ず剣の届く範囲に降りてくる。
耳に神経を集中させて攻撃のタイミングを図る。一度大きく翼を羽ばたかせ、次に風を切るような音が続く。ワイバーンが滑空して、狙いを定めたのだ。
シーグはサフィリアの前に立って腰だめに剣を構えた。霧を突き破って現れる死神の鎌。猛禽類のカギ爪と同じく、2本の足、計6本の指がサフィリアとシーグをワシ掴みにしようと降りてくる。その爪の一本一本、関節の付け根、鱗の隙間までをもシーグの目は捉えた。自分に向かうカギ爪をよけると同時に、サフィリアを狙うカギ爪に下段から切り上げる一撃を放つ。
金属と金属がぶつかり合った様な鋭い音。サフィリアを狙ったカ

ギ爪が根元から切断されて宙を飛ぶ。だが、剣は刃が欠けて、柄を握る手がしびれてしまった。

サフィリアは返り血が顔にかかり、ワイバーンの起こした風圧に髪を乱されても微動だにせず呪文の詠唱をとめていない。

安心するのもつかの間。背筋に走る戦慄にシーグは頭上を見上げる。ワイバーンの背にはベクターが乗っていたのだ。呪文を唱えながら杖を振り上げ、シーグ目掛けて飛び掛かる。

シーグは体勢を立て直し、しびれる腕を持ち上げベクターの杖を剣で受け止めた。ベクターは軽やかに地面に降り立つ。ワイバーンは痛みの雄たけびを上げながら、体勢を崩して地面に倒れた。

間髪いれずに、シーグはナイフを抜いてベクターの着地点に投げ付けた。ベクターが杖を軽く傾けると、ナイフはそのままの勢いでシーグの頭を目掛けて戻って来る。シーグは首をかしげてかわすと、魔術を使って膠着しているベクターに向けて一挙に距離を詰めた。

ベクターが始めてみせる驚愕の表情。シーグは勝機と見て剣を振りかぶった。が、手に鋭い痛みを感じて剣を離してしまった。

何故？

剣に気をとられた隙に、ベクターは地面に片手をついた。そして、全身のばねを使って、放たれた矢のように突き上げる蹴りをシーグに放つ。シーグはそれをなんとか腕でとめると、蹴りの威力に逆らわず後方に飛びのいた。

シーグの剣は地面を転がりながら湯気を立てている。刀身は赤熱し、ジュージューと音を立てて溶け始めていた。杖を打ちこまれたときに、何らかの魔術が仕掛けられたに違いない。

「本当に芸達者だな、あんたは」

シーグは横目で、ワイバーンが翼をはためかせ上昇しつつあること、サフィリアの呪文が完成間近であることを確認した。

「君はただの戦士ではない。一体何者だ？」

ベクターは息を整えながら、目を細めてシーグを観察している。サフィリアにそっくりな表情だ、と考えているとシーグは一計が閃

いた。
「ただの□×○△だ」
「なに？」
戦闘にふさわしくない言葉に、ベクターは怪訝な表情を浮かべている。
「ついでに、ガイスの変態仲間なんだとさ」
「それはどういう意味だ」
冗談半分の言葉を、ベクターが生真面目に深読みしているその間に、サフィリアは呪文を終了し杖を真っ直ぐワイバーンに向けた。
「しまった！」
ベクターは舌打ちし、杖を真横に構えて短く呪文を唱えた。
「させるか」
一瞬でナイフを抜いて肉薄するシーグに、ベクターは腕を真っ直ぐに向けた。もう片方の腕は杖を複雑な軌道で動かしている。
「スネイル！」
ベクターの掛け声と共に、シーグは横にステップを踏む。その時複数の鋭い衝撃が、鎧を貫き背中に突き刺さった。
「え？」
あまりに意外な出来事に、シーグは思わず背後を振り返る。そこには、翼を打ちながらゆっくりと上昇するワイバーンの姿があった。
「クレスタ！」
続けざまにベクターが叫ぶ。今度は地面に落ちたワイバーンの片足から黒い矢が飛んで来る。シーグは地面に倒れてやり過ごした。矢弾が仕掛けられていたのは、ベクターの腕ではなかったのだ。
「来たれ、天よりの災厄！」
しかし、サフィリアはまぶたを開きワイバーンを見据える。すでに魔術は完成しつつあった。ベクターは苦渋の表情を浮かべながら、杖で地面をつく。だが、それがどんな魔術であろうとも、サフィリアの放つ雷撃の威力を止められるはずはない。シーグは勝利を確信した。

「ヴォルド・ヴェイ・レイ・ザ――」

杖の先にまばゆい光が宿り、今まさに黄金の雷が打ち出されようとしている。ベクターは地をけって飛び上がった。杖につかまったまま、シーグの頭上を易々と越えてゆく。魔術で空を飛び、ベクターはワイバーンの背に乗る。驚いた事に、自ら雷撃の魔術の真正面に飛び出したのであった。

1章－15　雷の矛先

「え？」

呪文は中断された。すると、光条となって飛ぶはずの雷撃が、杖の先で球状に膨らんでゆく。危険を感じたシーグは立ち上がって、サフィリアに駆け寄ろうとした。

「来ちゃ駄目。離れて！」

サフィリアは苦しそうな声の後に雷撃を放つ。魔術の狙いはベクターからはずれて、ワイバーンの尻尾をかすめただけだった。更に雷撃は霧に放電して、バリバリと音を立てながら蜘蛛の巣のように周囲に広がる。ワイバーンも巻き込まれて雄たけびを上げたが、体勢を立て直すとベクターと共に霧の向こう、ガイス達のいる方向へと姿を消した。

サフィリアは人形のようにぐったりとして膝を突いた。そのまま後ろに倒れこみそうになったのを、シーグが駆け寄って抱きとめる。パチリと小さな火花が散った。

ベクターは雷撃を止めようがないのを知っていた。だから、外させたのだ。サフィリアが誰も殺すわけにはいかないと知った上で。

考えてみれば、何処までベクターは先を読んで戦っているのだろう。

炎と水の魔術がぶつかり合って、霧が発生した事も。見通しの悪い場所で、風の魔術に当たったと思い込ませる事も。ワイバーンに矢弾を仕掛けて、奇襲する事も、すべて一つに繋がった作戦に思える。

ガイスを狙って投げたナイフを、杖でも魔術でもなくマントを投げて止めたのも陣形から自由になるための行動だったのだろうか？

しかも、勝利のためにサフィリアの弱みに付け込み、自分自身さえも盾とすることが出来る。そんな男に一体どうすれば勝てるというのか……。

「シー……グ？」
サフィリアは震える声で問いかけるように言った。視線はシーグのずっと後ろに向けられている。
「まさか、目が見えていないのか？」
「ぼんやりとは分かるわ。自分の魔術に巻き込まれただけ。一時的なものよ」
だが、戦いの中では十分致命的だ。サフィリアの魔術での攻撃は期待できそうにもない。
「ごめんなさい、失敗してしまったわ。あなたが命がけで私を守ってくれたのに……」
「次からは雷の扱いも気をつけるこったな」
「うん」
嫌味をこめて言ったのにサフィリアは反発もしない。シーグは嫌な予感を覚えた。
「もう、降伏しましょう」
「何？」
「あなたは傷だらけじゃない。だから、もうこれ以上戦わないで」
サフィリアは力を失って、シーグの腕に顔をうずめた。
「あなたとアイフェの事はガイスに交渉してみます。天空の水盤と私の魔術師としての力をすべて引き渡せば――」
「ふざけるな。ガイスなんかにあんたを渡せるか！　俺はまだ戦うぞ」
最後まで聞かずに、シーグは怒鳴りつけた。
「でも、私は目が見えないの。戦力にはならないわ」
「だったら、俺が代わりに戦うだけだ。どうすればいい？」
すると、サフィリアは下を向いて何かをブツブツと言っている。
「――して」
「なんだって？　そんなに小さい声だと聞こえないぞ」
「いい加減にしてって言ったの！」
突然、顔を振り上げての悲痛な叫び声にシーグは絶句した。

「よく聞いて。この状態だと、向こうは防護壁の中で閉じこもって身を守っているだけでいいの。そうすれば、ベクターが直接操らなくても、ワイバーンは勝手に私たちを襲うわ。その上、ガイス以外は全員４系統の魔術を同時に使える熟練の魔術師で、びっくりするくらい高性能な魔術の道具を持っているの。だいたい、あなたは剣を溶かされて丸腰当然じゃない。それなのに戦うなんて笑わせないで」

「な！　――」

言い返そうとしたシーグの言葉をさえぎって、サフィリアはすごい剣幕で更にまくしたてた。

「私がやっていてなんだけど、霧の中、視界が通らない場所で探知の魔術は役立たずになるわ。その上目が見えていないから、大規模な魔術に狙いを付けられない。大技で逆転するのは不可能になったの。そうなると人数の差で圧倒的に不利になる。そして、本格的に戦いが始めると、逃げ出すだけでも難しい。今じゃアイフェと連絡も取れないの。だから降伏するなら今以外にないわ、全員が生き延びるためにはね！　こんな最悪の状況なのにあなたはどうやって戦うつもり？」

叩きつけるような勢いと、論理的な回答の波状攻撃にシーグは口をパクパクさせながら圧倒されていた。

「黙っていたら分からないでしょ。ハッキリと言いなさい！」

「これから考える……つもりだった」

教師に説教されている気分で、シーグはボソボソと言った。

「勝ち目もなしで猪突して、犬死するのが格好いいとか思っているわけ？　そんな事をされても迷惑よ。バカなことを言うのもたいがいにしてよね！」

目の焦点はまだ合っていない。それでも息を乱し涙をこぼしながら、サフィリアは切り付けるような勢いで叫ぶ。全くの正論なので、シーグは返す言葉もなかった。ので、妙に冷静な気持ちになったままで沈黙した。

「何とか……いいなさいよ」
　すると、今度は小さな子どものように地面にへたり込んで泣きだした。
　ワイバーンよりも、魔術の雷撃よりもこっちの方が厄介だな。と、考えているとシーグの脳裏に閃くものがあった。雷撃が放たれるシーンを思い返し、それが間違いではないことに気づく。
「ちょっと確認したいんだが」
「何……よ」
「ワイバーンもベクターも雷撃に巻き込まれたよな」
「ええ」
「それに、狙いは外れたけど雷撃が飛んでいったのはガイス達がいる方向だ。霧に放電していたから相当広い範囲に届く。そして、ガイスの張った赤い壁は破壊されていた」
　サフィリアはハッと顔を上げて、ローブの裾で涙をぬぐった。
「続けて」
「ベクターがたった一人で攻撃してきた時、他の青マントは何もしなかった。俺はボロボロで、あんたは目が見えない。そんな状態なのに追撃がない」
「どう思うの？」
　サフィリアは声に張りが戻ってきている。シーグは自分の考えの正しさを確信した。
「ハッタリを仕掛けられたと思う。軍勢が退却や建て直しをする時に、無茶でも攻撃を仕掛けて相手の攻勢を殺ぐんだ。だから、青マント達は攻撃できる状態じゃなかった。今はベクターとワイバーンもだ。そして、あんたの目が見えていない事さえ向こうは知らないと思う。もっとも、さっきの大声は聞かれただろうけど」
「あ……」
　サフィリアは唇をかみ締めてうなだれた。満ちつつあった戦意が衰えてゆく。
　また余計な言葉を言ってしまった、とシーグは舌打ちをした。

「つまり、あと一押しで俺達が勝てるわけだ」
シーグは殊更に気をつけて明るい声を出した。だが、サフィリアの表情はまだ暗い。
「でも、動けるの？　体中傷だらけじゃない」
「鎧が守ってくれたおかげで、傷はどれも浅い」
シーグは穴だらけになった皮鎧を脱いでシャツ一枚になった。遠くから打ち込まれたので、矢弾はどれも鎧で止まっている。１番厄介なのは、ベクターに二度蹴られた腕が少し動かしづらい事だ。サフィリアはまだ本調子ではないらしく上目遣いでシーグを見ている。
「あえて言うなら、泣かれて、叫ばれて、説教されたからな。頭や耳の方が重症だ」
「バカ……」
サフィリアは力なくつぶやいたあと、力強く顔を上げた。
「まずはあなたに武器が必要ね。……そうだわ、ここは天空の水盤。そして、霧の中でこそ効果を期待できる魔術がある」
話すごとに、サフィリアの声はいつもの調子を取り戻してゆく。もう余計な事を言わないように、シーグは口を閉じて霧の向こうに目を凝らした。その先にはベクターたちがいるだろう。
そして、自分たちと同じように作戦を練っているのだろうか？

1章－16　命取りの座

＊

ベクターは、地面に伏せるワイバーンと正面から向き合っていた。血の色をした目が殺意を込めてベクターを睨みつけている。もしも、支配の魔術が効果を失ったときには、ためらいなくベクターに襲い掛かるだろう。

コウモリの羽に漆黒の鱗という外見から、ワイバーンは空の死神という異名を持つ。巨大な体でありながら猛禽類のように舞い降り、かぎ爪は正確に獲物をとらえるのだ。

だが、あの少年。シーグは霧の向こうからの襲撃に気づき、絶好の位置からの攻撃に反撃を加えて逆に手傷を負わせた。

自分にも、同じことができるだろうか？

「ベクター導師」

部下に心配そうに声をかけられて、ベクターは我に返った。

「どうした」

「……いえ、支配の魔術が限界なのかと」

「なぜ、そう思った」

「導師が今にもワイバーンに挑むように見えたので」

そういわれて、杖を握る手に力が入っている事に気づいた。どうやら、あの少年に気を取られすぎているようだ。考えてみれば、先ほどもシーグに興味を持ったがために、対応が遅れてしまった。

「戦いの決着までは大丈夫だ」

後ろを振り返れば、嫌でも最初に完全に目を回し、口から泡を吹いているガイスが目に入る。もう1人が水蒸気爆発のときにガイスを守って気を失っている。その周囲では残る部下たちが心配そうにこちらを見ていた。戦えるのは5人だ。

誰の顔にも疲労の色が見える。不安定なままで陣形を発動し、し

かもそれが爆発を起こした。その後に、サフィリアの雷撃を受けて立ち上がることさえままならない。戦う事が限界なのは、むしろこちらのほうだ。唯一の切り札がワイバーンである。

「それにしても静かになったな」

「聞こえて来た声の内容だと、降伏するのではないか」

ガイスが気絶しているので、声に出して意見を交換している。

「いや、さっきの怒鳴り声はわざとらしかった。陽動という事も考えられる」

「そんな事をする暇があるなら、襲撃してくるのではないか」

「では、向こうも戦える状態ではないのかな」

「逆に、見者の目が見えていないのなら、好機だ。こちらから攻めるべきだろう」

「ベクター導師の手を煩わせる戦士がいるんですよ。誰が戦うんですか？」

様々な意見を出し合っているのを、聞きながらベクターも考えを整理していた。

サフィリアは感情的になっているときに嘘はつかない。目が見えてないのは事実だ。彼女なら間違いなく仲間の安全のために降伏を選ぶだろう。しかし、あの少年は違うはずだ。

戦いの最中に恐怖や迷いが見られず、勝利の機会を逃さなかった。脅威に真っ向から立ち向かい、魔術や怪物に対する戦い方を心得ていた。今度は必ずこちらの状況を見抜くだろう。

１０代も半ばという年齢を考えると、信じられない能力の持ち主だ。そして、素質を見抜き伸ばす稀代の師に習ったのは疑いない。剣と魔術の両方に通じ、いかなる脅威にも立ち向かう。ベクターにはそのような人物には一人しか心当たりがなかった。

イービルスレイヤー（邪悪を制するもの）の名で呼ばれた戦いの達人。ただ一度しか会った事はないが、彼のようになりたいとあこがれ、思い描いて自分なりに鍛えてきた。そして、シーグはベクターが長年思い描いていた理想以上の戦い方をする。

山を歩いてきたとしか思えない姿の少年が現れ、シーグと名乗った時からベクターはずっと引っかかっている。

イービルスレイヤーの故国には、シージペリラス（命取りの座）と予知された赤子がいた。シージペリラス（命取りの座）とは、災厄の時代の訪れを象徴する子どもである。秀でた才能を持ち、多くの命を左右する定めにあるという。敵となるのか味方となるのか、正義の名の下に行われるのか、邪悪な意思によって行われるのかはわからない。そのため、極秘のうちに闇に葬られる事も少なくないという。

今ではその国は滅び、シージペリラス（命取りの座）の行方は知れない。だが、もしも生きていれば丁度１６歳になる。イービルスレイヤーは先代の見者とは親しく、魔術を使えるのにいつも徒歩で天空の水盤に訪れる変わり者だったようだ。

「我々の事が、筒抜けだという事は」

「いや、この距離でなら、探知の魔術が使われた瞬間に分かるだろう」

「見者としての能力は通常の魔術師とは違うのでは？」

会話が中断され、全員の視線が集まったのでベクターは口を開いた。

「見者の能力で最も強いのは『夢見』だが、眠っていなくては使えない。水盤を使った大規模な『遠見』は、準備だけで丸一日かかる。『星見』は星の位置の合う夜にしか効果がない。見者の能力は今とは異なる時間、遠く離れた場所、無数の可能性を見るためのものだ。すべてが今の状況には不向きな能力。通常の魔術師と代わりはない」

「ならば、今は待つしかないという事か」

「こちらが魔術を使えば、余力があると勘違いさせる事ができるのでは？」

「けん制に使えるほどの余力を誰が残しているんだ。今は無駄に魔術を使うわけにはいかん」

再び話し合いが始まったので、ベクターは再び物思いに沈む。

サフィリアが見るのはもっと過酷なものだ。事実、見者の大半は狂気に取り付かれ短命のうちに死んでいる。

例えば夢見では、死んだはずの者が生き延び、苦しみのうちに生きてゆく未来の可能性を見る。聖人と崇められる者の悪事、罪亡き者が罪人として葬られた真実を知ることもある。

歴史が生み出した闇に触れ、感情が織り成す矛盾と怨嗟の中心に立ち、現実と夢の狭間を行き来するのだ。

だから、見者も世俗に係わるのを避ける。人が見者を恐れて遠ざけるのは却って好都合なのだ。外の世界での思い出や友人が多いほどに、苦しみは増すものだから。

サフィリアは何でもないことに目を輝かせ、困っている人の世話を焼きたがり、正しいと信じれば迷いがない。

好奇心と正義感の塊のような少女は、世界中を旅して回って、学校の先生になり、静かな湖畔で家族と暮らすのが夢だと言っていた。

彼女が見者となるには、あまりにも未来への夢がありすぎる。世界の悪夢を引き受けるのは誰よりも向かない。

「見者は、若いが魔術の天才だ。あらゆる系統を使いこなす事ができる。何よりも魔術の展開速度は、ここにいる誰よりも速い。その上、ここは天空の水盤だ」

「ならば、彼女がどう動くか話し合う必要があるな。目が見えないとなれば狙いを定められない。ブラスト（噴出）は、有効とはいえないと思う。どうだろうか？」

気絶したガイスに変わって、ブラストの系統の意見を言った者に、全員がうなずく。

「サモニング（召還）は呼び出すまでに時間がかかる。出現と同時にワイバーンをけしかければ脅威にならないはずだ。それに、支配の魔術は視線に魔力を乗せるからな。今の状況だと、視界の悪さのせいで限界がある」

「視覚を失った魔術師は、離れた対象に魔術を使えない。ディテクション（探知）の系統は、特に視覚に頼る魔術が多いからな。それ

に、この距離では我々の事を調べるのに魔術には頼る必要がない」
「プロテクション（防護）だが、もしも向こうが守勢に回ってくれるのなら好都合です」
部下たちが、それぞれ得意とする系統の意見を順番に出してゆくのを、ベクターは聞いていた。
「エンハンス（向上）なら、あの少年の筋力や敏捷性を強化する事が有効だ。だが、あの細身の体では、ワイバーンと正面から渡り合うほどの強化は無理だろう」
４人が発言を終えると、最後に残ったベクターは口を開いた。
「見者は残る2つの系統を選ぶと、私は考えている。あの少年が武器を持っていれば、魔術師の杖にエンチャント（付与）が施された物だ。ワイバーンだろうが、防護壁だろうが一撃で粉砕でする力があるだろう」
「杖を他人に預けるっていうんですか？」
１人が驚きの声を上げる。それは魔術師ならば誰もが考える事だ。
「彼女ならそうする。だが、一つの杖に込められる魔術は一つだけだ。つまり、どれだけ強力な攻撃であろうとも二度はない。それさえ、受けきれば私たちが勝利する。問題は残る一つの系統。これは天空の水盤で、霧のために視界の悪い状況では最も威力を発揮するだろう」
ベクターの言葉に、全員が理解の表情を浮かべた。
「だから、冷静になれ。向こうの思惑に乗せられるな。我々は守りに徹すればいい。戦えるものが歩けるようになり次第、霧の中にまぎれて各自が攻撃すれば終わる」
「導師、魔術の気配です」
「ディテクション（探知）の系統か。効果範囲は自身」
「なぜ、いまさら探知を？」
「シーグの思考を読むためだろう。やはり、サフィリアは目が見えていないな」
ベクターの不十分な説明にも疑問をはさむものがいなかったのは、

誰もが現状を理解していたからだ。
「今のうちに攻めますか」
「いや、見者の近くで戦うのはまずい。ワイバーンほど大きな標的なら、目が見えなくても当たるかもしれん。まずはシーグをひきつける。杖の力を使わせ、そのまま追い詰めて止めを刺す。もし、見者の元に逃がせば戦いは長引くぞ」
「分かりました」
そこで、ベクターは更なる魔術の気配を感じた。
「エンチャントの系統、風の属性、ブラストの系統を付与。効果範囲は自身」
「何もかも予測どおりですな」
部下の一人が感嘆の声を上げる。
「イリュージョン（幻覚）の系統、幻影の属性。来るぞ、我々はプロテクション（防護）の系統、対物対魔術の壁を展開。私はワイバーンを操り、戦わせる」
ベクターの命令を受け、動けるものは呪文を唱え始めた。
周囲に赤い壁が展開されると同時に、白いヴェールを貫いてシーグが現れた。長剣を槍のように構えて真っ直ぐ突撃し、壁に突き立てる。しかし、衝撃も音もなく、シーグはスッと消えてしまった。
続けざまに真横から次のシーグが現れる。それも、ワイバーンがカギ爪でなぎ払うと、空気に溶けるように消えてしまった。
「イリュージョン（幻覚）の効果範囲はこの霧全体だな」
封土の中でディテクション（探知）が封じられている。影か実体かを確かめるには、魔術そのものを消し去るか、攻撃を加えて霧を揺るがせるしかない。
サフィリアも水蒸気爆発が起きる事を想定し、幻影を霧に投影する事を考えていた。そして目くらましを仕掛ける以上、効果的に視界を奪う有効な手段を取るはずだ。それに対抗する手段も、ベクターの中ではすでに出来上がっている。
ともあれ、これでやっと決着がつくのは間違いない。ベクターは

安堵感さえ感じていた。

1章－17　ガミガミ婆さん

＊

前後左右にわらわらと動く自分自身を見て、シーグはゲッソリとしていた。
「これはたまらないな」
背格好も装備も完全に同じで、つまり背中の怪我が生々しく見える。
その上、鏡とは違ってそれぞれが異なる動きをしているのだ。サフィリアの幻影が見事に働いていて、それがベクターに対する切り札になっている事は分かっている。それでも、気味悪くて仕方がない。
自分そっくりの人間を見たら、死ぬという逸話を聞いたことがある。それが真実なら自分は何十回命を失っても足りないだろう。
シーグは余計な考えを振り払って、サフィリアの作戦を頭の中で思い返した。

＊

「自分の全身を一度確認して、もちろん背中もよ」
サフィリアは手鏡を取り出して、シーグに押し付けた。
「背中？」
「私が最後に見たのは、あなたが皮鎧を付けていて、背中を怪我していない姿なのよ。幻影は全く同じに作らないと、すぐにばれるでしょ」
「俺が確認して、意味があるのか」
聞きながら、シーグは鏡で自分の背中を確認する。傷は骨には届いていないが、出血がズボンも赤く染めている。あまり長い時間は

戦えないだろう。
「探知の魔術があるわ。それで、あなたの思考を読み取るの」
「頭の中をのぞくのか？」
シーグと同様に、サフィリアも表情をゆがめる。
「本当はやりたくないわ。私の考えている事も、あなたに筒抜けになるからお互い様。でもこの場合しょうがないわ。それとも、知られるとまずい事をいつも考えているわけ？」
「別に……」
シーグは頭をかいた。調子を取り戻したのはいいけど、とたんに口が悪くなるのは勘弁してほしい。
「今も私の悪口を考えていたでしょ」
違う、と喉まで出かかったのをシーグは飲み込んだ。真っ向から否定するのは、認めるのと同じ事だからだ。
「準備はいい？」
「心の準備だけは出来たぞ」
サフィリアは杖の先で、シーグの肩口に触れる。すると、唇をかみ締めて痛々しい表情を浮かべた。
（酷い出血じゃない）
サフィリアの声が直接頭に響いてきた。
（だから、エグイとかグロイとか気色悪いとか言うなよ。余計に痛くなるからな）
（言ってません）
（口は開いてないもんな）
サフィリアは一瞬だけ、ムッとした表情を浮かべた。
（自分の体の事は自分で分かる。まだ戦える）
（でも、戦いが終わったら、きっちりと治療をしてよ。夕食を作るから、食べてね。その後二、三日はゆっくり休むのよ）
世話焼きおばさんみたいだな、と考えた瞬間、ゴン！　と鈍い音が鳴ってシーグは目の前に火花が散るのが見えた。
（……思い切り殴らなくてもいいだろう）

（この魔術を使うには、頭に接触するのが一番です。いっそカチ割った方が更に確実という説もありますが、試してみましょうか？）
（……）
（とにかく急いで。子ども時代のことを思い出してどうするの？全身を順番にね。まず足、次は手、肩口をもっと正確に思い浮かべて）
サフィリアの口調、いや思考はどんどんと速くなる。
（汚いシャツを着ているわね。もう、髪がぼさぼさじゃない。帰ったら頭を洗いなさいよ。嫌だ、ズボンも靴もボロボロなのね……）
……うん、終わり）
「まるで、ガミガミ婆さんだな」
仕返しとばかりに口に出して言うと、サフィリアの眉が跳ね上がった。
サフィリアは怖い表情のままで、杖を一回転させた。とっさに身構えたが、それはシーグを狙ったものではなかった。周囲から風が集まってきて、杖の中に吸い込まれていった。そして、シーグが持っていた剣と同じ形に変わってゆく。
「使い方は剣と同じ。振り下ろせば、衝突の瞬間に風の刃が飛びだすから。至近距離なら、ワイバーンの鱗を簡単に貫けるわ。ただし、一度だけよ。その後は、普通の剣と変わらなくなるわ」
シーグは神妙な顔で杖を受け取った。
「魔術師が杖を手放して大丈夫なのか？」
「持っていてもできる事は少ないわ。封土に関連する魔術。つまり、水の属性はつかえる。だから幻影を使ってベクターを混乱させる事かしら」
「じゃあ、俺はどう戦えばいい？」
「ベクターがワイバーンの支配を解き放っていたら戻ってきて。もしもベクターがワイバーンを操っていたなら……」
サフィリアは、辛そうに言葉を切った。
「勝つために必要な事を教えてくれ。隠し事はなしだぞ」

「……そのまま攻めてほしいの。でないと、勝ち目はないわ。これを使って相手の視界を奪えば有利に運べると思う」
サフィリアはローブの裾から拳ほどの大きさの黒い球を3個取り出した。
「なんだこれ？」
「墨を溶かした水を魔術で固めたわ。1つで桶一杯分ね。ぶつければ周囲に飛び散る仕掛けになってるの」
「鳥の糞の次は墨か。全く魔術師の戦いって奴は……」
余計な事を言いそうになって、シーグは言葉を飲み込んだ。
「子どもの喧嘩とでもいいたいわけ？」
シーグが再び構えるとサフィリアは厳しい表情のままで続ける。
「とにかく術者の視界を奪って集中を乱す。そうすれば、支配の魔術は解けるわ。私の思いつく事だもの、ベクターもそこまでは読んでる。幻覚の魔術も何処まで役に立つか。私の目が見えていないから、幻影は不自然な動きをするの。だから、無理はしないで」
魔術師の戦いは、まるでスポーツかゲームのように対応策が決められているように思える。だからお互いに読みやすく、首を絞めあうように戦いが長引く。ならばベクターの裏をかくには……？

1章－18　師弟の戦法

＊

ワイバーンが残った方のカギ爪を振り下ろすと、3体のシーグが巻き込まれて霧に返った。

「俺はあんなヘマな戦い方はしないぞ」

自分が消されるのを見て、シーグは不機嫌につぶやいた。あちこちで動く幻影は明らかに不自然だった。動きがやけに固く、構えが隙だらけに見える。何より、盛り上がった土や草に透ける足が貫通している事もあるし、ひどい時には2人が重なっている。それに、ぬれた地面を歩いているのに、足跡が残らない。何よりも、目が合ったときにあまりにも無反応である。濃い霧でごまかしても、すぐに気づかれるだろう。

シーグは、幻影と同じく不自然な動きになる事を心がけてゆっくりと移動した。少し歩くと霧の向こうに7人の人影が見えた。1番前にはベクターがいる。ナイフを投げれば届きそうな距離だが、相手は防護の壁を張っているはずだ。

シーグは目を中空に浮かせて、横目でベクターを確認しながら移動した。一度ベクターが周囲に視線を送って、目が合った気がしたがシーグは無表情で通した。

ベクターの目が届くところにいるのは落ち着かない。岩場を選んで、シーグはゆっくりとの背後に回っていった。ベクターはワイバーンを操って、あちこちから現れる幻影を攻撃している。完全に背後へ回りこんでズボンのポケットから黒い球を取り出した。同時に、ベクターが背後を振り返って杖をピタリとシーグに突きつけた。シーグが横に跳びのくと、一瞬後に地面が爆発して黒い水を巻き上げる。

「なんで、分かったんだ?」

「君の背中の血は流れ続けていた。幻影とはすぐに見分けがつく」
ベクターの声がワイバーンから聞こえてきたので、シーグはぎょっとした。
「足はもう墨まみれで、一目で本物と分かる。降伏するんだ」
「師弟そろってやる事が同じだな。次はワイバーンの糞でも飛ばすつもりか？」
霧の向こうに逃げようとすると、ワイバーンは翼を羽ばたかせて飛び上がった。風圧に負けて霧が吹き飛び、幻影が次々と消えてゆく。更に、ベクターがシーグの足元を杖で指すと、地面から岩がせりあがってきてシーグの足元をすくい上げる。
岩を小さくしていた魔術を、解除したに違いない。
「君が私の背中に回りこむことも分かっていた。だから、退路には罠を仕掛けている。次は、君の命を奪える罠を発動させる」
ワイバーンはベクターの真上に滞空している。
「やるならさっさとやれよ。あんたのヘタレた罠なんざ全部かわしてやる」
そして、ワイバーンが襲い掛かってくる前に罠を全部使い切ってくれたらうれしいぞ。と、シーグは心の中で付け足す。
「降伏する意思があるなら、杖を捨てて膝をつけ。５つ数える間だけ待つ」
「だから、降伏しないと言ってるだろ」
「１つ！」
「人の話を聞け、お前はガイスか！」
ベクターは返事もせずに、数を数え始めた。
「２つ！」
声が聞こえていない。風も雷も跳ね返す壁なのだから、音をさえぎっても不思議ではない。
「３つ！」
だから、わざわざワイバーンから声が出るように仕掛けをしている。向こうの声も外まで届かないからだ。

そこに付け込む隙はないか？　何が出来る？　どう戦えばいい？
シーグは必死に考えをめぐらせて、閃くものがあった。
「４つ！」
シーグは膝を降り、杖を地面にゆっくりと置いた。５つ目を数えるはずの、ベクターの声が止まる。
その瞬間、低くなった体勢から下手投げで黒い球を投げ付けた。
ベクタが杖を横に払うと、十本近い矢弾が地面から飛んできて、黒い球を打ち落とす。しかし、黒球は爆発すると周囲に墨をぶちまけた。
ベクター達の閉じこもっている防護壁が真っ黒に染まって輪郭を浮き上がらせる。半球形で身長の倍程度の高さ、広さは１０歩に満たない。
「視界を奪っただけでは無駄だ。ワイバーンは自動的に君を襲うぞ。支配の魔術は解除され、もう手加減が出来ない。降伏するのなら、地面に向かって杖の魔術を解き放て」
「目も見えなくて、耳も聞こえないくせに何でも知ったような口をきくなよ」
シーグはなんだか、腹が立ってきた。
ワイバーンは空気を震わせるような咆哮をして、翼を大きくはためかせる。足を踏ん張らないと、風に体を持っていかれそうになる。圧倒的な存在感にシーグは体中の毛が逆立つ思いだった。
「空の死神だかなんだか知らないが、俺の知っている死神の方がもっと恐ろしいぞ」
返事の代わりにワイバーンは真っ赤な目を細めて、シーグを見ていた。

1章－19　士気低迷

＊

「全く見えも聞こえもしませんね。外の様子がまるでわからない」
「ライス、それは全員分かっている」
ベクターの返事に、ライスは恥ずかしげに黙りこんだ。
彼はディテクト（探知）の系統を得意とし、常に状況の報告をする立場にある。
探知の魔術を使って鋭い洞察の結果を口にする事もあるが、分かりきった事を繰り返す時もある。彼自身もそれを自覚しており、いつも恋人に呆れられているのを気にしている。酒の席で「魔術で彼女の髪型や服が変わったことに気づけたらいいんですが」と漏らしていた。
サフィリアと同じくフェルナンディの姓をもち、遠い親戚関係だという。最も、直接会うのは１０年ぶりだといっていたが。
「一瞬だけ解除しますか？　墨を落とせると思いますが」
「それがサフィリアの狙いだ。一瞬でも解除すれば、剣の魔術をこちらに解き放たれる可能性がある」
「ではこのままで」
「ああ、しばらく時間を稼ごう」
ワグナス・グラムファーレはうなずいた。プロテクション（防護）の系統を得意とする一族の出身で、１８歳とこの中では最も若い。雷撃の魔術に対して、ベクターが自分自身を盾とすると言った時、最も難色を示したのが彼だ。従順な態度も、反感の裏返しといえなくもない。
壁を強化するために、エンハンス（向上）を担当しているのは、バイロン・ランカート。ベクターと同じ２８歳だが、ほんの数ヶ月前まで真っ黒だった髪が、今では真っ白になっている。メティオス

マッシャー（隕石の強撃）で城砦を落とし、多くの人の命を奪った事を自分の責任だと痛感しているからだ。

「ワイバーンが興奮しています。まだ戦っているみたいですね」

ルパート・マードックが報告する。サモニング（召還）を得意とする一族の出身で、サフィリアに続くベクターの二人目の弟子だ。今年で２０歳になったばかりだが、多様な才能を持ち、複数の系統の魔術を得意とする。地面に仕掛けた罠や、ワイバーンにしかけた矢弾も彼の手助けがなければ出来なかった。今は、ワイバーンの支配するためにエンハンス（向上）でベクターを補助してくれている。

「時間を稼げればそれで十分だ」

「何から何までお見通しなのですね」

ルパートは感嘆の声をあげてうなずいた。そうであればいいのだが。とベクターは思った。２人は気を失っており、不安材料は消えない。

イリュージョン（幻覚）の系統を担当していたのは、エリアス・ディスペリア。色白で細身で小柄。ひょっとして、彼自身が幻なのではないかと思うほど弱々しい。水蒸気爆発のために気を失ってしまったが、呼吸は安定していて命に別状はないようだ。

ブラスト（噴出）の系統を受け持つのは、フィーンドの姓を持つ誰かのはずであった。だが、ガイスがその地位を占めている。この巨体を浮かすには、何人かの魔術師が必要になる。総力戦に持ち込むときには、気絶した2人を置いたままで挑む事になるだろう。

「シーグが風の魔術をワイバーンに撃った後には、動けるものが総攻撃を加える。もしも、我々に向かって撃ったなら即座に防護壁を張りなおし、ワイバーンに始末を任せる。視線が通れば、ルパートが仕掛けた罠も使えるようになるからな」

「はい」

ベクターの指示にルパートは元気よく返答する。だが、他のものは無言でうなずいたり、「了解しました」と事務的に返答するだけだ。わずか１６歳の少女を寄ってたかって攻め立てることに気が進

まないのだ。そして、勝利しても確実に2人の少女を不幸にするのは確実である。

ベクターは墨に染まった防護壁を睨みつけた。

だが、戦う事をやめるわけにはいかなかった。どのような手段を用いても、勝たなければ意味がないのだから。

1章－20　恐怖の向こう側

＊

シーグは苛立っていた。
ワイバーンはシーグの頭上をぐるぐると飛び回り、突撃の後に空に離脱していく散発的な攻撃を繰り返している。カギ爪で襲い掛かってくる事はなく、高みから長い尾を鞭のように振り回してシーグを狙う。そのせいで、飛び上がっても剣を直接体に届かせる事ができないのだ。
しかも、尻尾はカギ爪よりも厄介だ。なぎ払う攻撃は、大きく動かないとかわせない。そのため傷口はひらき、背中を伝う血の量は増えるばかりだ。
シーグは苦し紛れにナイフを投げ付けたが、ワイバーンの硬い鱗に簡単にはじかれてしまった。
「時間稼ぎというわけか」
多すぎる出血のために、目がかすんでくる。指先がしびれてきた。
（何をてこずっておる）
ぼんやりしてきた頭に、聞きなれた師匠の声が響く。
「悪かったな、不肖の弟子で」
貧血で頭がどうにかしたらしい。そう思いながらも、シーグは返事をした。
（その上、無能でアホウときている。一撃必殺できる手段を持っていながら、見ているだけとはな。笑えない冗談はガリッポソな体格だけにしておけ）
「だけど、相手は空の死神って呼ばれているんだぞ」
（死角となる頭上から突如として襲い掛かるからな。しかし、それはワイバーンの強さでは無い。弱さに無関心でいられるお前の甘さだ。自分の弱点をほったらかしたまま戦うとは正気とは思えん。別

に奴が死神というのではなく、お前が死体になるのに向いているだけじゃないのか？）

幻聴でも師匠はよくしゃべる。シーグは薄笑いを浮かべた。

「そうは言うけど、届く場所に下りてこないんだよ」

（やれやれ、追い詰められないと頭が回らんようだのぉ）

ホッホッホと嫌な笑い声をあげて、頭に響く声が消えた。

「……なんだと？」

もはや、返事はない。空を飛ぶワイバーンの目がギョロリと動き、シーグの背後を睨みつけた。視線を追いかけると、霧の向こうからとぼとぼと危なっかしい足取りで歩いてくる人影がある。

サフィリアだ。

「バカ、何で来た」

「え？　こっちに来いって大声で言ったでしょ」

シーグは舌打ちをした。師匠の仕業だ。さっきの声は幻聴ではなかったのだ。ワイバーンは大回りに滑空しながら、ゆっくりと方向を変えている。ここで逃げればサフィリアが狙われる。

「ベクター、ワイバーンを戻せ。サフィリアがいる！」

シーグは力の限り叫ぶが、当然届くはずもない。そして、墨で真っ黒になった防護壁のせいで外の様子も見えていない。だから、ワイバーンが何をしようとしているか、分かっていないのだ。

もはや、剣に込められた魔術でワイバーンを倒すより他にない。あるいは防護壁を潰して、ベクター達に挑むか。その両方が敵の思惑通りだったとしても。シーグは唇をかみ締めた。ワイバーンは防護壁の向こう側２０歩ほど先で、シーグとサフィリアの方に向き直る。それを見て、シーグは第三の方法が思いついた。

だが、それはあまりにも危険すぎる。もし、失敗すれば――。

一瞬恐怖が前進を貫いたが、師匠のふざけた笑い声とニヤケ面を思い出すと、シーグは迷いが怒りで吹き飛んだ。

「サフィリア、１０歩前方にベクター達の防護壁がある。そこに水を大量に落とす魔術は命中させられるか？」

「当てるだけなら何とか。でも、杖がないから威力が落ちるわ。あなたにぶつけたくらいが限界よ」

「十分だ。準備していてくれ」

シーグは防護壁に向かって走り出した。ワイバーンの方でも、翼を羽ばたかせて滑空の体勢に入っている。無茶な突撃をしてくるシーグを見て、ワイバーンは標的を移した。尻尾を鞭のようにしならせながら、少し高度を上げた。

「一撃必殺、神速果断――」

シーグは呪文のようにつぶやきながら、地面を思い切り踏みしめて飛び上がった。ワイバーンに向かってではない。ベクターたちを守る防護壁に向かってだ。

半球形の壁を足がかりにして、三段跳びの要領で頂上まで駆け上がった。ワイバーンはシーグに向かって尻尾を振り下ろすが、シーグの四度目の跳躍の方が一瞬だけはやく、尻尾は防御壁に当たって乾いた音を立てただけだ。

空中でシーグとワイバーンの距離はもはや至近、剣が届く範囲となった。しかし、それは同時にワイバーンのカギ爪の攻撃範囲でもある。ギラリと嫌な光を放ち、鋭く突き出されるカギ爪。

しかしシーグはそれを見越した上で、切断した足のほうへ向かって跳んでいたのだ。ワイバーンが体をひねるような形で繰り出したカギ爪は、自然と勢いを失っている。シーグはそのカギ爪に足を乗せると、更に高く飛び上がった。

「勝機は――」

ワイバーンよりも空高く舞い上がり、シーグは剣を大上段に振りかぶった。怪物の真っ赤になった瞳が、混じりけなしの恐怖に細められる。

「恐怖の向こう側にある！」

気合の声と共に、シーグは袈裟切りに剣を振り下ろす。直撃の瞬間、ヴォンと鋭い音が鳴り刃から鋭い風が解き放たれた。風の刃は、ワイバーンの首を完全に切り飛ばし、片翼を切断した。それでも余

波は残っており、真下にあった防護壁に直撃したのだった。
「今だサフィリア、アイフェ」
シーグは落下しながら叫ぶ。そして遅ればせながら、着地の事をまるで考えていなかった事に気づいた。
ワイバーンの体が先に防御壁に激突し、鈍い音を立てた。シーグも着地のために体勢を整えると、突如として足元がなくなった。
「げぼぉお！」
足元から人間離れした叫び声が上がる。シーグはガイスの腹の上に着地したのだ。
血まみれのワイバーンのむくろに、突如現れたシーグ。青マント達は何が起こったのか分からず戸惑っている。当然最初に立ち直ったのはベクターだ。杖を振りかざして飛び掛ってくる。
シーグは反動を付け、腹の弾力を利用して後ろに逃れる。ベクターもガイスの腹を踏み台にしてシーグを追跡してきた。
「ぐぇぇぇ……」
ガイスは口から泡を吹き、目をむいて気を失った。
「ベクター導師！」
他の魔術師たちも後に続こうとしたが、頭上から滝のように水が落ちてきて、巻き込まれてしまった。
「よし」
シーグが逃げながら賞賛の声を上げると、ベクターは屈み込んで大きく跳躍した。一跳びでシーグの頭上に到達し、大上段から杖を振り下ろす。シーグは何とか受け止めたが、あまりの威力に吹き飛ばされてしまった。顔を上げるとベクターはステップを踏んで、すでに真横に回りこんでいる。
今までとは比べ物にならない怪力、人間離れした敏捷性。まるで別人だ。
杖の攻撃に備えて剣をかざすと、ベクターは更に一歩踏み込んで蹴りを放つ。シーグは体を縮めて防御の姿勢をとるが間に合わない。
突き上げる蹴りに体が宙に浮いてしまった。そしてベクターはシ

ーグが着地する前に、距離を詰めてくる。宙に浮いたままのシーグに上段から叩きつける杖の一撃。シーグは、首をかしげて肩で受けるだけで精一杯だった。地面に叩きつけられると、剣は踏みつけられ首元に杖が突きつけられた。

「降伏しろ」

「今度の手品は一体なんだ?」

「エンハンス（向上）で身体機能を強化している。もはや、君に勝ちめはない。降伏しろ」

「どうやらそのようだな」

シーグはにやりと笑みを浮かべた。

「最初に会った時もそうだった。もう、言葉には惑わされん」

杖のとがった側で喉元に狙いを定めた。シーグが抵抗して起き上がろうとすると、ベクターが更に体重をかけて押さえ込む。

万事休するその時に、足音も気配も立てず、霧を切り裂く風のように一人の人影が割り込んできた。

銀色の髪をなびかせ、青色の瞳はただ標的だけを捉える。そして、アイフェはベクターの膝の裏に肘を打ち込んだ。突然の事に、大きく体勢を崩したベクター。押さえ込みを振り払って、シーグは地面すれすれの足払いを繰り出す。ベクターはそれを飛び上がってかわしたが、アイフェが逃げるのを許さない。

片手でベクターの指を逆関節に、もう残る手で腕を逆関節に固めて、自分自身も体ごと回転しつつ倒れこむ。ベクターは弧を描くように投げ飛ばされて頭から地面に落ちた。

いつの間に抜いたのが、アイフェはベクターの首筋にナイフを突きつける。青色の瞳は感情も写さない氷の刃のようだった。

「動けば殺す」

底冷えのする声と、むき出しの殺意にシーグは背筋がぞくりとあわ立った。ベクターも青ざめて即座に杖を手離した。シーグはその杖を遠くに蹴り飛ばす。手に持った瞬間、嫌な事が起きそうな気がしたからだ。

五本の指が無茶苦茶な向きに捻じれていて、腕も曲がるはずのない角度に曲がっている。倍以上もある体格差も、強化された身体機能も関係なく一瞬のうちに敵を無力化する。まさに死神の技だ。

シーグは水の直撃を受けてうめいている青マント達の杖も同じように霧の向こうへ蹴り飛ばしていった。意識があるのは白髪の男だけだ。しかし、ベクターが倒れ、ワイバーンが動かないのを確認すると両手を挙げて降伏の意思を示した。

1章－21　ィヤァァァァー！

「終わった……か」
安心すると、シーグは意識が遠ざかりそうになった。頭を振って気をはっきりとさせる。
「サフィリア。決着がついたぞ、こっちに来てくれ」
シーグはそう言いながらも油断なくベクターと白髪の青マントに剣を向けるのを忘れない。サフィリアは小走りでやって来たが、何もないところでつまずいて転びそうになる。シーグは片手を伸ばして、サフィリアを支えてやった。全身がばらばらになりそうに痛んで目の前が霞む。
「ごめんなさい。傷が痛むんじゃないの？」
「で、これからどうするんだ」
問いには答えず、シーグはサフィリアをせかした。いつまで、意識を保っていられるか自信がなかったからだ。
「とにかく、相手を無力化します。あなた、バイロン・ランカートね？」
サフィリアの問いに、白髪の青マントはうなずく。
「全員の魔術の品を集めて差し出しなさい。まだ目はよく見えませんが、魔術の気配を見逃しはしません。シーグ、杖を返して」
シーグが手に持った剣を渡すと、サフィリアの手の中で元通りの杖に戻った。バイロンは気絶している仲間から、青マントを順番にはずしている。
「シーグ。傷の具合はどうなの」
「俺のはふさがる切り傷だ。それよりも、ベクターの方が心配だぞ」
「何があったの？」
「最後は頭から落ちた。それに、指と腕が捻じ曲がっている」
サフィリアは息を飲み込んで、ベクターの方を見る。アイフェはベクタの喉元からナイフをどけて後ずさった。

「あ、あの……ごめん。サフィリア……」
アイフェは涙目になって、かわいそうなほど小さくなっている。
とても、死神の化身のような働きをしたとは思えない。
「怒ってないのよ、アイフェ。よくやってくれたわ。でも、その人の治療をしたいの」
アイフェは、何度も何度もうなずいている。
「指の応急処置だけは急がないと、変に固まるからな。家の中に治療のための道具はあるのか？」
言っている間に、サフィリアはローブの裾から、手のひらの乗るほどの木箱を取り出した。木箱を杖で叩くと、全てが１０倍ほどにふくらみ包帯や、薬がふんだんに出てきた。湯気の立ち上るお湯と、氷の浮いた冷水の入った桶までである。
「お願い、急いで。魔術師にとって指先は命と同じなの」
「分かった。じゃあ、そっちの青マント達を頼むぞ」
シーグはベクターの傍らに膝をついた。
「君の傷も……軽くは見えないぞ」
「うちの総大将の命令でね。急げってさ。指を戻すぞ。歯を食いしばれ」
布を丸めたものをくわえさせ、シーグは一本ずつベクターの指を戻していった。グキリ、グキリという鈍い感触は、他人のものであっても耐え難いものがある。続いて、抜けた腕の関節もはめてやる。ベクターは歯を食いしばって、悲鳴１つ立てなかった。
「鮮やかなくらいに綺麗に外れているな。指も腕も折れていない。これなら、元通りに直るな」
技をかけた当人を見ると、ベクターとサフィリアを見比べて妙にそわそわしている。何かさせた方が気がまぎれるかもしれない、とシーグは思った。
「包帯は巻けるか？」
アイフェは何度もうなずいた。
「じゃあ、手伝ってくれ」

「うん、分かったよ」
アイフェは飛び跳ねるような動きで、包帯と薬の入った箱を持ってきてシーグの横に座った。その様子は、とても死神を連想させた少女とは思えない。
アイフェは包帯を取り出すとベクターの指に当てて、鮮やかな手つきで治療を始める。
「うまいじゃないか」
「いい殺し方が出来るためには、いい生かし方も知っていなくちゃダメなんだよ」
「……『みんな』がそう言ってたのか」
「そうだよ」
アイフェは嬉々とした表情で言った。『みんな』と呼ばれる人たちは、アイフェにとってよほど大切な人たちだったようだ。年端もいかない少女に、輝くような表情をさせるのだから、きっと明るくて、温かみのある人たちなのだろう。
「ちなみにシーグの背中は血がダラダラだよ。蹴られた腕もブクブクに膨れるね。きっちり洗って治療しないと熱が出て、全身が腐って死んじゃうんだ。頼むから殺してくれって言いたくなる位に、苦み悶えることになるらしいんだよ」
アイフェは楽しい計画を話すように説明した。怪我人の前で言う事じゃないな、とシーグは思った。ベクターも顔をゆがめている。
こういう会話を明るく出来るとは、『みんな』とは尋常ではない人々だったに違いない。
「だからね、拷問の時にはわざと――」
「アイフェ、そこの薬ビンを取ってくれ」
とてもつもなく生々しい方向に話が進みそうだったので、シーグは話をそらした。
「君の師匠はイービルスレイヤー（魔を制するもの）だな？」
突然ベクターに問われて、シーグは一瞬手を止めた。だが、すぐに無言で治療を再開する。

「彼の戦法は常に一撃必殺。剣や杖の一振り、たった一つの言葉でさえ戦況を覆す。君の戦い方は正にその通りだった」
　敗北したというのに、ベクターの声はうれしそうだった。
「単なる嫌がらせ好きの変人だ」
「……それは、師に対する口の聞き方ではないな」
「師匠とさえ呼ばせてくれないんだ。その程度で何かを習ったと思われては困る、貴様に師匠などと呼ばれると虫唾が走るわ！　だってさ。先生と言えば、何から何まで手取り足取り教えてくれると思っておるのか、たわけ！　と言われる」
「……厳しい人なんだな」
「変人だよ」
　控えめに言ったベクターに、シーグは即答した。
「敵にすれば恐ろしく、味方にすれば頼もしいが、近しい者には最も脅威となる男か」
　ベクターは苦笑いしている。
「歩く毒舌、そびえ立つハタ迷惑とも言われていたっけな。よし、これで終わりだ」
　ベクターの肘を固定し終わると、アイフェも指に包帯を巻くのを終えていた。立ち上がると、ふっと気が遠くなる。本当に血を流しすぎたようだ。早く終わらせて、ぐっすりと眠りたい。
　魔術師の武装解除というのは、さぞかしすさまじいに違いないとシーグは思った。とんでもないものが山積みになっていることを想像しつつ振り返ると、人数分の青マントが積み重なっているだけだった。白髪の青マントがガイスの巨体から赤マントをはずすのにてこずっている。
「こっちは、もうすぐ終わるわ」
「……思ったより、簡単なんだな」
「何を考えていたわけ？」
「いや、まあ……」
　ポケットから火の玉や光線や怪物が飛び出すという陳腐なものを

想像していたので、何だか恥ずかしくなった。血の気が足りなくなって、頭がハッキリしないせいだと思いたい。
「わぁー、大変！」
アイフェが気の抜けたような声を出した。
「どうしたの？」
「ねぇねぇ、サフィリア。オヘソ丸出しで、下着がずれてるよ？」
サフィリアのローブはさっきよりもピッチリと体に張り付いている。腹部に縦長のくぼみがあって、胸元の下着のラインが、真横ではなく斜めになっていた。
「シーグ、そんなにジロジロ見たらダメだよ。女の子の裸を見たら男の子は何があっても責任を取らないと駄目なんだからね！」
アイフェが軽く頬を膨らませて、いつになく強い口調で言う。サフィリアは顔を真っ赤にして、胸元を両手で隠した。
「俺は見てない。ちょっ、待――」
「いーけないんだ。いけないんだー」
アイフェ両手を挙げて声高にはやし立てる。サフィリアは涙まで浮かべたので、シーグはうろたえた。
「お、落ち着け。裸なわけじゃない。ローブ越しに肌とかヘソとか下着が透けている程度だ。それに隠れるべきところはしっかり隠れて……」
「キ、キ、キ――」
サフィリアは声にならない声を上げながら耳まで真っ赤になり、ぶるぶると肩を震わせた。シーグは余計な事を言ったのだと気づいたが、もう遅い。
「ィヤァァァァー！」
けたたましい悲鳴が耳を貫き、背筋を切り裂くような戦慄。脅威が来ると分かっていたのにシーグは体が動かなかった。かくして、サフィリアの放った平手うちが絶好の角度で頬に直撃する。シーグは目の前が真っ暗になった。自分が地面にドサリと倒れる音をずいぶん遠くに聞こえてくる。

（まだまだじゃのぉー。フォーフォッフォッフォ）

腹立たしい師匠の笑い声を聞きながら、完全に気を失った。

1章－22　唇の魔術

＊

視界いっぱいに広がるのは鮮やかな夕焼け。
始めてみる『天空の水盤』に、少年は目を奪われていた。故郷では真っ赤な夕焼けは不吉の凶兆である。戦場で流される血、建物が燃える炎を連想させるから。
だけど、天空の水盤の夕焼けは黒や褐色の混じった赤ではない。空も湖も森の木々も鮮やかな朱一色に染まっている。たぶん、ここに住む人は夕焼けを見ておびえる事などないのだろう。
そんな事を考えていると、少年は涙があふれてきた。
「ねえ、どうして泣いてるの？」
振り返った少年は天使が降りてきたのかと思った。だけど少女に羽はなくて、魔術師のローブを着ている。背中まで伸びた薄い金色の髪の毛が夕焼けに映えている。それがとても綺麗に見えて、少女に見とれてしまった。
「なんで泣いているのよ」
金色と朱色をまとった少女が近寄ってくる。
「あ……ええと」
大人びた声だったので、もっとずっと年上の人だと思っていた。横に並ぶと、少年よりも指一本分小さい。自分と同じで、８歳くらいだと少年は思った。
「あのね、とても綺麗だったから」
「何が？」
いきなり聞かれて少年はドキリとした。何を考えているか、気づかれたと思ったからだ。
「ほら、空がね」
「うそね」

やっぱり心の中を見られてしまったのかと思って、少年は戸惑った。

「うれしくて泣く人も見た事あるけど、あなたみたいにベソをかいていないわ」

同じ年頃とは思えないほどにしっかりした言い方に、少年は目をぱちくりさせた。

「どうして泣いていたの？」

「……ええっと」

真剣に悩むが、どうしてだったのか思い出せない。

「何でそこで考えるのよ」

どんどんと強くなる口調に再び涙があふれてくる。

「いちいち、泣かない！」

「……はい」

いきなり拳を振り上げた少女。少年は泣くのをやめた。いや、止めさせられた。その拍子に少年はなぜ泣いていたか思い出した。

「僕はね、いらない子なんだ」

「絶対に違うわ！」

少女は即座に否定した。

「だけど……」

「産まれてきたのに、いらないなんて絶対に間違っている。そんな事はありえないの！」

「……」

すごい迫力で怒鳴りつけられて、少年は黙りこんでしまった。

「なんでそんな事を考えるの？　理由を聞かせなさい」

「えっとね。僕が『しいじぺりあす』だから」

少女の目が神経質に細くなる。間違って答えたときの家庭教師の怖い顔を思い出して、少年は再び泣きたくなった。

「シージペリラス（命取りの座）でしょ！　正確にいいなさいよ」

「ご、ごめんなさい」

少年は両手で顔をかばって逃げ腰になった。とにかく謝り続けれ

ばいい。そうしておけば先生は何も文句をいわないし、殴りもしない。
「どうして、そんな事になったの？」
「ぼくが１３番目の王位継承者だから」
「他に？」
「生まれた年がちょうど国が１６００年目で。あとは……ええっと――」
「２５番目の公爵、５０の所領の主、生まれてから１５０日目の夜に『竜眼』が６００回瞬いたからよ。自分の事でしょ、キッチリ覚えていなさい。それが何だっていうの？」
自分よりもよく知っているのに、なぜ聞くのだろうか。その上に、勝手に話を進めていく。少年はわけが分からなくなった。本当に家庭教師の先生によく似ている。
「それで、みんな怖がるんだよ」
「それって？」
「全部不吉な数字だからだよ……」
「だから何？」
サフィリアは更に詰め寄る。
「……ええっと」
「えっと？」
「……」
「ハッキリ言いなさい。それじゃあ分からないでしょ」
何を怒っているのか分からず、少年は混乱した。
「それでも王子様なの。がっかりだわ」
「……なんで、がっかりするの？」
少年は逆に聞いた。
「あなたが全然、王子様らしくないからよ」
王子じゃなくて公子なんだけど、と少年は思った。
「いい？　王子様っていうのは、もっと威厳があって、颯爽としていて、絵になる人なの」

言葉の意味はよく分からないが、とにかく何かがおかしい事は少年にも理解できた。何より、この少女の名前さえ知らないのだ。
「ハンサムで、背が高くて、足が長くて、白いマントを羽織って、白馬に乗っていなくちゃ話にならないわ」
そんな王子は見た事ないよ。と、少年は思った。だが、それを口にすれば恐ろしい事が起きる予感がする。
「あの……君はだれ？」
「私はサフィリア・フェルナンディ。天空の水盤に住んでいるの。魔術師なのよ」
少女の声はハキハキしていて、自分の名前を言うときに本当にうれしそうな表情になる。少年にはそれがとてもまぶしく見えた。
「何をボーっと私の顔を見てるの。ちゃんと名前は覚えた？」
「えっと、サ……ア」
少女の眉が不機嫌に跳ね上がる。
「ひょっとしてあなたって、人の名前を覚えるのが苦手な子？」
「うぅ……」
その通りなので、少年は落ち込んだ。
「私の事はフィーって呼んで。その代わり、私もあなたの事をシーグって呼ぶからね」
「シーグ？」
「とてもいい名前だと思うわ」
みんなが怖がる名前で少女に呼ばれる。少年はいい気持ちがしなかった。
「だって、シージとペリラスは一つ一つ意味のある言葉なんだから」
唐突に少女は言った。何の事だかさっぱり意味が分からず、少年は首を傾げた。
「ここに書くからよく見て」
少女が地面にかがんで、指で文字を書いてくれたが少年が読める字ではなかった。だが、少女はお構いなしに書いた文字を指差す。
「シージの意味はね。包囲、攻撃、病気、度重なる困難、悩み」

不吉な意味ばかりだ。少年はますます惨めな気分になった。
「でも最後の意味は努力」
そこで、少女は少年の目をじっと見つめた。
「ペリラスの意味は危険、命の危機。でも冒険っていう意味もあるのよ」
少年には冒険という言葉が、とても心地よく感じられた。
「シージペリラスは、危険の象徴じゃないわ。混乱する世の中に立ち向かう英雄の名前なの」
少女は少年の顔を覗き込み、両手を取って更に近寄って来た。大きな碧色の瞳がまるで鏡のように少年の姿を写している。
「今もそうだけど、あなたは本当にたくさんの困難や不幸がやってくる。だけどそれに飲み込まれないで。英雄にはね、不幸な生まれや育ちの人が多いわ。両親がいなかったり、捨てられて動物に育てられる事もあるの。でも、みんな努力して、戦って、勝利を手に入れる。そうして、英雄は伝説や神話になるの。だから、あなたも同じ。困難の向こう側に、絶対にあなたの求めるものがあるわ」
言葉の意味は半分以上も理解できない。それでも、少年は体の底から力がわいてくるのを感じた。
「わかった、シーグ？」
「うん！」
少女は立ち上がった。風が強くなってきて、少女の朱金に染まった髪が羽のように舞い上がる。
「もうすぐ日が暮れるわ。帰らなくちゃ」
少女がどこか手の届かないところに行ってしまいそうな気がした。二度と会えないかもしれない、そうすれば忘れてられてしまうかもしれない。少年は胸が締め付けられる思いだった。どうすれば、この少女ともう一度会えるだろうか？
「そうだ、フィー。約束！」
「え？」
とっさに出た言葉に少女は不思議そうに聞いた。

「次には会うときにはね、君のほしいものを持ってくるよ。何がいい？」

何か繋がりを作っておかなければ二度と会えないような気がする。そうしたら約束を守れない気がして、少年は怖かった。

「じゃあ、花束！」

少女は胸の前で両手を組んで、目を閉じた。

「春の色、春の香り、春の風が詰まった花がいいわ」

そして、両手を空に向かって両手を挙げた。喜びに身を任せてクルクルと軽やかに回る。

「地の果てまでずっと続く花畑で、両手一杯の花束が欲しいの」

「分かったよ。絶対に守るから」

力強い声に少女は我に返った。そして疑う視線を少年に向ける。

「信じられない位にたくさんの花束なのよ？」

「うん！」

「でも、花畑まで持ってこれるの？」

「あ……」

「それに、私は本をたくさん読んだわ。大人にも聞いて回ったの。でも、見渡す限りの花畑なんて誰も知らなかったの」

「うぅ――」

「世界中を探しても見つからないかもしれないわね」

いきなり守りようのない約束をしてしまって、少年は胸に杭が刺さったように痛む。

「――――」

グゥの音も出なくなり、この世の終わりのような表情をしている少年。少女はかける声が思いつかなかった。

「探すよ」

「え？」

「世界中を探しても、絶対に見つけるから」

少年は力強く言った。

「本当？」

「やってみる。努力すればその先に、きっとあるはずだから」
少女は一瞬ポカンとしたが、満面の笑みを浮かべて大きくうなずいた。
「うん、信じてるからね」
突然、少女は顔を寄せると少年の頬にそっと唇を当てた。今度は少年が呆然とする番だった。
「これはね、必ず願いが叶う魔術なの」
夕焼けよりも頬を染めて少女は微笑んでいる。少年は何があっても約束を守ろうと心に誓った。
「そうだ、王子様なんだから今度は白馬に乗ってきて。私のための馬車を忘れちゃダメよ」
少女は人差し指を真っ直ぐに立てて、力説する。
「……でもここは山の上だから、馬も馬車も無理だよ?」
とたんに少女の表情が険しくなった。余計な事を言ってしまったと、少年は激しく後悔した。
「じゃあ、背を伸ばして、ハンサムになっていてね」
「背は……大丈夫だと思う」
「ハンサムの方も努力しなさいよ」
それは努力でどうにかなるものなのだろうか? 少年にはよく分からない。
風はますます強くなり、夕日は湖の向こうに沈んでゆく。空が朱色を失い暗さを増していったが、少女の金色の髪はますます明るく輝いているように見えた。夜の闇の中でも、この少女は輝きを失わないに違いない。
だから、この少女からもらった言葉を目印にすれば何もかもがうまくゆく。少年はそう思ったのだった。

1章ー23　ひやっほう？

＊

暖かくて優しい感触が頬に触れる。鼻をくすぐる清々しい香りに包まれてシーグは目を覚ました。

整理整頓の行き届いた部屋。窓からは、夕暮れ時の空が見え心地よい風が吹き込んでくる。傍らでは、サフィリアがベッドの傍らに頬を預けて寝息を立てていた。夕焼けの色にわずかに染まった髪が、風を受けてシーグの顔に触れる。サイドテーブルには包帯と色とりどりのビンが並んでいる。大半が薬のようだが、そのうち1つは色々なハーブが入ったポプリだ。部屋を満たす香りの正体はこれである。

着ているのは、真っ白なシャツと薄い水色のズボン。腕にも背中にもグルグルと包帯が巻かれている。薬特有のべたつく感触を全身に感じた。毒ではないのだから、と言い聞かせてなるべく意識しないようにする。

ゆっくりと身を起こすと、ひびが入ったような痛みが背中に走った。だが、それはすでに傷がふさがっている証拠だ。魔術師の使う薬だ。特別な効果があるに違いない。

シーグはベッドから抜け出すと、窓まで歩いていった。天空の水盤は、8年前とまるで変わらない夕焼けに染め上げられている。サフィリアと最初にあった日。忘れらない思い出とはいえ、あれほど鮮明に夢を見たのは始めてだ。天空の水盤は夢見の聖地だという。力を持たないものも、過去の夢を見るものなのだろうか。

「ううー……ん」

背後でサフィリアが寝返りをうった。シーグはベッドから薄手の毛布を選んで、サフィリアの肩にかけた。彼女はあの日の事を覚えていない。それどころか、12歳より前の記憶が完全にないのだ。

夢見は多数の魔方陣と様々な薬草を使い、星の巡りを計測し、長年の訓練の後にようやく可能になるという。だが、サフィリアはわずか１２歳で、しかも誰の手を借りる事もなく成し遂げてしまった。たった一人で世界の狂気を覗き込み、一年間を眠ったまま過ごすことになった。

目覚めた後も心は閉じたままで、人形のように無反応だったという。最終手段として、先代の見者が狂気の原因となる記憶をごと消し去ってしまった。

彼女が見者となるには、あまりにも素質がありすぎたのだ。

だが記憶を取り戻す事がないまま、四年のうちに見者にふさわしい力を再び取り戻した。彼女に魔術を捨て、見者への道を諦めさせる事は誰にも出来ない。

「あの娘は頑固者だ。沈み行く太陽に昇れと命じるか、流れ行く川の水に引き返させる方が簡単だな」

そう師匠はそうぼやいていたものだった。そして、「サフィリアには過去の思い出の中にも、未来の道行きにも狂気が待ちうけている」とも。

「あ、シーグ。目が覚めたんだね」

窓の外からアイフェがひょこりと顔を出した。

「治療はアイフェがやってくれたのか？」

「うん、サフィリアと一緒にね」

「ガイス達はどうなった？」

「ええとね、いろんな人が人が来たり帰ったりして……」

アイフェはそこで言葉をとめて考え込んだ。

「よく分かんない」

あとでサフィリアに聞くほうがいいだろう。とシーグは考えた。

「で、アイフェは何をしているんだ？」

「私は晩御飯まで時間があるから散歩をしていたの。湖をぐるりと回ってきたところだよ」

「え？」

水平線が見えるほどの湖畔を一周。それは、散歩どころかちょっとした小旅行ではないのだろうか？　それなのにアイフェは汗もかかず、疲れているようにも見えない。

「ね、シーグ。こっちに来てよ。見てほしいものがあるんだ」

「まさか、湖の反対側とかじゃないよな？」

「すぐそこだよ」

アイフェが窓越しに手を引っ張ってきた。背中が痛くてたまらないので、シーグは窓枠をまたいで外に出た。

「あ、窓から出るのは行儀が悪いんだった」

「……まあ、女の家を勝手に男がうろうろする方が問題だからな。これでもいいだろう」

痛いところをつかれたシーグはとっさに言い訳をした。

「ふーん、そうなんだ。この場合は構わないんだね」

何度も深くうなずいて納得するアイフェ。シーグは少し罪悪感にとらわれた。

湖岸までやってくると、洗濯桶が裏返しにしておかれていて洗濯物が風に翻っている。サフィリアのローブまで一緒に干してあって、ローブ越しに見える小さな布切れはたぶん……。

「顔が赤いよ」

「あのな。洗濯物なんか見せてどうするつもりだ！」

「どうして怒鳴るのかなぁ」

アイフェは軽く膨れると洗濯物の中からボロキレ同然のシャツと、墨の染みでまだら模様になったズボンを出してきた。

「一生懸命洗ったけど、染みが取れなかったんだ。これも一応取っておいたんだよ」

溶けた金属の張り付いた柄に、穴だらけで血の染みがついた皮鎧を差し出す。

「あ、うん。ありがとう」

シーグが素直に感謝すると、アイフェは膨れた頬を元通りにした。

「これは修理しても使い物にならないな。ナイフはどうなった？」

「私が拾って磨いておいたよ」
アイフェは布の包みを差し出す。包みを開いてみると、ナイフには油が塗ってあって、どれもピカピカになっていた。
「新品同然だな」
アイフェは満面の笑みを浮かべて、ナイフを収める革のベルトを渡してくれた。
「水洗いをすると縮むから、お湯を浸した布で拭いて染み抜きをしておいたの」
「すごいな。すぐに武具屋でも働けるんじゃないのか？」
シーグは感心しながら、柄まで綺麗になったナイフと、留め金まで磨かれたベルトを見比べた。
「ねえねえ、シーグ。聞きたいことがあるの」
「何だ」
「正しい順番なら、女の人は押し倒してから裸にするんでしょ？」
「……は？」
とんでもない事が１０歳の少女の口から出たので、シーグは唖然とした。
「その前に服をプレゼントしておくと更にゴキゲンだぜぃ、ヒヤッホゥ。な気分になれるんだって」
「ひやっほう？」
「踊りたくなるくらいの上機嫌という意味なんだよ」
アイフェは人差し指を立てて自信満々に力説する。余計な事を吹き込んだのは、ものすごく特殊な雰囲気を持つ男のようだ。
「プレゼントをした服を着せるなら分かるけど、どうして脱がすのが楽しいのかなぁ」
アイフェは首を傾げて本気で悩んでいる。一方、シーグは頭が痛くて仕方がなかった。
「シーグはどう思う？」
知るか！　と、シーグは心の中でつぶやいた。だが、アイフェは目を輝かせ、興味津々でシーグを見ている。

「それだと、シーグはサフィリアにも私にも責任をとらないとダメでしょ。ねえねえ、何をしてくれるの？」

とにかく、こんな会話はすぐにでも打ち切ろう。シーグは一計を案じた。

「あー……順番を言うなら、そいつはチューをするのが先だとか言ってなかったか？」

「うん、さすがだね。やっぱり、同じ男の人同士のほうがよく分かるんだね」

そんな怪しげな男と一緒にするな。と、心の中でシーグは叫んだ。

「そうか、チューなのか。あーあ。サフィリアになんて言おうかなぁー」

家の方を見て、さりげなくもわざとらしくシーグはつぶやいた。

アイフェの目が丸々と見開かれる。

「何なら、俺からサフィリアに聞いておこうか？　アイフェが知りたがっていたってさ」

アイフェは上目遣いになって考え込む。その後どんどん泣き出しそうな表情に変わっていった。最後には震えあがって、首を激しく左右に振る。

「やだ！　絶対にダメだからね！」

ここまで怖がるとは、過去に一体何があったのだろう。

「だけど、知りたい事はキッチリ調べろってサフィリアは言っていただろ？」

シーグは止めとばかりに更にたたみ掛けた。

「それはそうだけど」

「じゃあ、やっぱり――」

「ダメッたら、ダメ！」

「だけどなぁー」

ぼやきながらも、シーグはこっそり拳を握り締めていた。これからはこの手ではぐらかそう、と心に決める。アイフェは涙目になりながらシーグの腕にしがみついた。

「もし、言ったら指も腕も全部折っちゃうよ」
アイフェは座った目つきでシーグを睨んだ。それが冗談ではないのはすでに実証済みだ。
やっぱり、ほどほどにしておこう。でないと命にかかわる。シーグはそう心に戒めた。

1章―24　誓い新たに

「あれ？」
突然つぶやいて、アイフェは首を傾げて動き止めた。パチパチと忙しくまばたきをして、耳をそばだてている。まるで、小動物のような仕草だ。
「サフィリアが来るよ」
アイフェがつぶやくと家の扉が開いて、サフィリアが出てきた。サフィリアは最初はゆっくりと歩いていたが、途中から小走りになってやってくる。
「何かあったのかな」
「さぁ？」
アイフェはシーグの真似をして、頭をポリポリとかいている。
「アイフェ、洗濯物を片付けて！」
サフィリアが大声で叫ぶ。慌てている理由に気づいて、シーグはあさっての方向を見た。
「えー。日が沈むまで干したほうがいいよ。太陽の光をたっぷり浴びた方がフワフワになるし――」
「いいから、片付けなさい！」
「ねえねえ、シーグも手伝ってよ」
「一人でやりなさい！」
強い口調で命令されて、アイフェは不満に唇を尖らせながら洗濯物をかごの中に取り入れ始めた。
「せっかく洗濯してあげたのに、２人とも怒ってばっかりだよ」
アイフェは不満げにつぶやくと家の中に戻っていった。サフィリアは胸を抑えながら息を整えて、シーグを真っ直ぐ見つめる。怒鳴られるのかと思って、シーグは身構える。サフィリアはムッとした表情になった。
「いちいち、怖がらなくてもいいじゃない。それに私も悪かったと

思っているのよ。その、叩いたりして……ごめんなさい」
「いや、気にしていないから」
と言うよりも、むしろ思い出したくなかった。
「それからありがとう」
「は？」
「とても感謝しているわ。あなたのおかげで天空の水盤も壊されなかったし、ガイスを追い返せた。本当にあなたはすごい剣の使い手ね、ベクターと真正面から戦えた人を始めてみたわ」
手放しの褒め言葉をシーグは頭をかき回しながら聞いていた。
「あなたにはとても大きな借りが出来てしまったわね」
「俺はあんたに――」
シーグはいいかけた言葉を飲み込んだ。
「私に？」
「……あんたの一族に大きな借りがある。俺はそれを返せて、ホッとしている」
「借りって」
「あんたの爺さんに命を救われたんだ。俺が産まれてまもなく、生贄にされる寸前でな」
シーグがそこで黙り込むと、サフィリアは唇に指を当てて考え込んだ。
「じゃあ、シーグっていう名前はひょっとして――」
「そう、シージペリラス（命取りの座）の事だ。まあ、名前と言うよりは呼び名とか、公称とか言った方がいいのかもしれないけど」
「じゃあ、あなたはレイザークの公子なのね」
「正確には、だった、かな。国はもう滅んでいるから」
「でも、どうしてシーグと名乗っているの？」
シーグが黙り込むと、サフィリアは慌てて口元を押さえた。
「ごめんさい。言いにくい事ばかり聞いて」
「自分の生まれをこそこそ隠す事もない、と思ったからだ。だから、あんたも別に気にしなくていいぞ」

そういいながら、シーグは湖の方に目をそらした。忘れている方がいい。自分との思い出は、狂気の記憶と切り離すことができないのだから。

「ねえ、ちょっと気になっていたんだけど」

サフィリアはシーグの横に並んで、シーグの顔を覗き込んでくる。

「私はあなたに会った事があるのかしら？」

「……なんでそう思った」

「ベクターから聞いたけど、あなたはイービルスレイヤーの弟子なんでしょ？　彼はお爺様と親しかったし、何度も天空の水盤にも足を運んでいる。あなたも一緒に来た事はないかしら」

「だったら、自分が一番よく知っているだろう」

「私は１２歳より前の記憶のないの。だから分からないわ」

「そうなのか、そりゃ悪いことを聞いたな」

「別に気にしていないわ。本当の事だしね」

自分の本音を裏切って話すことが、こんなにも辛いとはシーグは知らなかった。

「……ところで、見者としての力には期待していいのか？」

「ええ、それは大丈夫よ。安心して。ベクターが言うには私は筋がいいらしいから」

また、ベクターを引き合いに出すのか。と、シーグは心の中でため息をついた。そして、ベルトのポケットから小さな欠片を取り出してサフィリアの手のひらに乗せる。

「この石が何処のものか調べてほしい」

「レンガの欠片ね。断面が綺麗で色もあせていないわ。割れたのはつい最近ね」

「できそうか？」

「これが海の向こうから来たんじゃないなら、明日のうちに分かるわ。でも、この位なら私じゃなくても調べられるわよ」

「魔術の事はよく分からん。俺だって師匠に言われてやっているだけだから。歩いて天空の水盤に行けと命令したのも師匠なんだ」

「どうして？」
「何を考えているのか分かった事なんか一度もない。まあ、元々変人呼ばわりされるほど、喜ぶような人だしな」
「ひどいわね。恩師に言う事じゃないわよ」
「だけど、変だって言い切らないと、面白がって余計に嫌がらせをしてくる人だからな。言っても別のことをしてくるだけだが」
「一体どういう人なの？」
「だから、変人」
「……」
シーグが断言すると、サフィリアは困った顔をして黙り込んだ。記憶が４年分ないという事は、祖父の記憶もほとんどない。祖父の友人が変人だとすると、色々考えるのは当然だ。
また、余計な事を言ったな。とシーグは後悔した。
「ねぇー、サフィリアー。包丁が見当たらないよー。これじゃー、野菜が切れないよー」
家の中から、歌うような調子でアイフェが叫ぶ。
「研ぎに出しているから、今日は予備の包丁を使って。上の棚にしまってあるわ」
サフィリアも大声で返事をする。
「背が届かないよー。あー、いいやー。ナイフで切るからー」
間延びしたアイフェの声が聞こえなくなり、サフィリアは少し首をかしげた。
「ナイフ？　そんなもの置いていたかしら」
「ひょっとして、戦いの時に使ってたあのナイフの事か」
それを聞いてサフィリアはさっと青ざめた。
「アイフェ、待ちなさい。包丁はすぐに出すから！」
「ええー、使い慣れた道具のほうが綺麗に切れるよー？」
「絶対にダメ！」
サフィリアはやって来たときと同様、走って家の中に戻っていった。

「けたたましいのは相変わらずだな」
シーグは小さくつぶやいて、苦笑いを浮かべた。
湖の向こうに夕日は沈みつつある。８年前と全く代わりのない景色。
あの時は努力しだいで何でも叶うと信じていた。その後も、剣の腕さえ鍛えれば、できない事はないのだと疑いもしなかった。
「春の色、春の香り、春の風が詰まった花。地の果てまでずっと続く花畑で、両手一杯の花束か。白馬に馬車に、背の高いハンサムな王子様」
シーグは語りかけるように続けた。太陽は地平の向こう側に沈み、天空の水盤は夜の色に変わってゆく。
「国は滅んで、俺はただの家なしだ。王子様から更に遠のいてしまったそれに、白馬も馬車もないし、まだ花畑は見つかっていない。花束どころか、持ってこれたのは剣だけだったしな」
現実は厳しく、残酷で、無情なものだ。人々の夢が容易に破れ、無数の誓いが果たされる事なく失われていくのも当然である。ましてや、シージペリラス（死者の座）は災厄の前兆。これまでも世の中はどんどんと悪くなっている。これからは更に悪くなってゆくだろう。
「だけど、花と花畑は探すよ。ずいぶんと遅くなると思うけど。だから、それまで何があってもフィーの事は守るから」
星が輝き始めると、湖面も空を写して銀色の光に包まれていった。

修正・更新などのお知らせ

＊ここでは、評価、感想などで指摘していただいて、修正した部分を載せていきます。
　なるべくストーリーそのものを変えずに、細かい部分だけ変えていこうと思っています。

＊１０／２５　変更

２章－２６～２章－８３まで
誤字脱字の修正を行いました。

『魔法陣』→『魔方陣』に統一
『リーゲル・バックラー』→　『リーガル・バックラー』に統一

＋２章－３４
そのフィーリアの効果で付けられた『二つ名』がダイヤモンド・カッター（金剛石の刃）。
　←
そのフィーリアの効果で付けられた『称号』がダイヤモンド・カッター（金剛石の刃）。

＋二つ名は名声を得ると、呼ばれるようになる。
称号はカタカナで二つの単語の組み合わせ。メティスから贈られる。で統一することになると思います。

（例）
　パイロ・テクニクス（火工術士）、爆裂弾のフレイ。（一部では銀バエ）

メティオ・スマッシャー（隕石の強撃）、歩く恥知らずのガイス・ジュサック（陰で呼ばれ、本人は知らない）
イービルスレイヤー（邪悪を制するもの）、政戦両略の指し手ロディウス・アクテ　（陰では嫌がらせの天才）

＋称号がメティスから与えられた通称。なので1つで統一。一方、2つ名が人々の主観です。

（例）
2章－35
「そして、イービルスレイヤーの弟子でもある。彼はあらゆる嫌がらせの天才と言われていましたが――」
「公式には、政戦両略の差し手だ」
ベクターが言葉をさえぎって訂正する。

2章－56
冥王カラナウス（血まみれ）と呼ばれるようになった。
彼を賢王と称える声が高くなっている。

＋2つ名が複数個ある例です。彼はメティスの国王なので、国から称号を送られる事がない。
混乱を招かないようには気をつけたいと思います。

＋称号が2つあるものもいます。
クリティカル・ウーンズ（致命傷）、リーゲル・バックラー（王の盾）のガリウス・グラムファーレ

＋この三人は、称号を手に入れても、二つ名を名乗るほど名声を得ていない。これから付けられると思います。

プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）、リーザ・オーメント
チェイン・ライトニング（連結する雷撃）、シンシア・フェルナンディ
スペル・エンハンサー（魔術の増幅者）、セーラ・クラウディア

＋名前を奪われ、代わりに付けられたもの。不名誉の証。これも二つ名と同じように使われる。

名なしのマードック
家なしのシーグ
家なしのワグナス

＊8／7　変更

「エステート（封土）」→「封土」に変更
「グラスト（家なし）」→「家なし」に変更

2章－25　「前哨戦」で家なしと対になる「名無し」と言うものが登場します。
・家なし＝家や国を失い、姓を名乗れなくなる。
・名なし＝名前を奪われ、姓しか名乗れなくなる。
の意味です。詳細はまた後の章で。

・誤字脱字の修正を行いました。

特に間接→関節。素で間違ってました（アワワ）

＊７／２８　変更

変更というよりも完全に作者のミスです。すいません。

「２章－８」に変更です。

「アイフェは水色のローブを身に着けている」

この文章そのものが変更で。

「アイフェは水色の貫頭衣を身に着けている。ローブよりもずっと袖が短くて、肩口や腰のヒダのない簡素なつくりをしていた」

「２章－１６」に変更です。

「小さい頃のサフィリアにそっくりだ、とシーグは思った。勝気な態度に、迷いの無い口調。綺麗に切りそろえられた長髪、服装には全く乱れが無い。違いといえば、髪と目が黒色なくらいだ」

この文章の後に。

「不思議な事に、子ども達の中で唯一紺色のガウンを着ていない」

が入りました。

つまり、そろいの服を着ている子ども達の中で、シンシア一人だけがガウンを着ていない。の意味です。

服装で地位や身分を示すという手段を正確に考えずに話を進めてしまいました。それがどんな内容なのかは、「２章－１９にて」。

＊　2章開始に伴って、タイトルを変更します。

タイトルが「誓約の湖」→「神速果断のシャープネス」に変更。
1章が「誓約の湖」、2章が「世界の要」となります。
タイトルそのものが、こうも短期間のうちに変わるとは……。無計画丸出しです。
スンマセン。

これは、評価の返答の中でも触れている外伝を作りたいと思ったからです。
外伝のタイトルは「一撃必殺の戦士たち」になる予定。タイトルを漢字四文字＋αな題名で統一したいというこだわりです。

＊近日変更予定

1章での反省は、描写のくどさでした。全体のテンポを悪くしているという指摘が何点かありました。ひと段落してから読み返すと、なるほど確かに……、と思える部分が見つかってきました。
そのうち、まとめて修正すると思います。

＊変更履歴

7／2

2章開始しました。
タイトルが「誓約の湖」↓「神速果断のシャープネス」に変更されました。
1章のタイトルが「誓約の湖」、2章のタイトルが「世界の要」です

6／18

1章の最初に、「序章」のようなものを付けました。
「水盤の魔術」↓「見者」に変更しました。
誤字脱字等の編集を行いました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2章　世界の要

「すべてを知るもの」と呼ばれる人がいた。
彼はこの世のすべてを見通し、隠された過去も、まだ訪れぬ未来も知っていた。
そして、偉大な魔術師達の助けを借りて、世界中を縦横に飛び回り、戦役を治め、諍いを未然に防ぎ、災厄を遠ざけた。
彼の周囲には人々が集まり、「リンディス」と呼ばれる都市が出来上がった。そこはまさしく光り輝ける理想郷であったという。
飢えた者には食べ物を、着る物さえない者には服を、病める者には薬が与えられた。
他人にしてもらいたいと思うような行為を、誰もが行えば一人残らず幸せになれるのだと、都市に住む全員が堅く信じていた。
「すべてを知るもの」は世界に正しさと真実と誠実さ、平和と平等を実現し広めようとしたのだ。
だからこそ、彼は……。

＊

巨大な水晶球を、向かい合った2人が両手を一杯に伸ばして抱きかかえていた。
目を閉じて瞑想する2人は、鏡に写ったのではないかと思えるほどよく似ていた。10代も半ばのほっそりとした体つきに銀色の髪。透けそうな白い肌に絹のローブをまとっている。違い一人は髪が肩までしかなく、もう一人は床にも広がるほどに長い。
幻術を得意とするディスペリアの一族には、銀の容姿を持つものがよく生まれる。中でも鏡写しのようにそっくりに生まれてくる男女の双児は、例外なく稀代の幻術師となるのだ。
2人の目が同時に開いて、水晶球を床に置いたまま同時に立ちあ

がる。
　髪の短い男の子の名前はエリアス。表情は眠たげで、目にぼんやりと霧がかかっているようで、動作もゆっくりとしていて今にも倒れそうだ。
　髪の長い女の子は機敏な動作で闇に向かって指をさす。すると、突然入り口が現れてベクターが現れた。
「終わりましたわ。入ってください」
　少女は水晶を弾いたような声で言った。
「しかし、アイシャ様。この部屋に一族の以外の者は――」
「私は別に構いませんから」
　ベクターは困った表情を浮かべながら、入ってきた。奇妙な事に部屋の外は明るく光に満たされているはずなのに、中は全く明るくならない。光そのものが切り取られているかのように、入り口で止まっている。
「どうして、人に見られてはいけないのかしら？」
「魔術師の秘儀というのはそういうものです」
「ただ、エリアスの記憶を見せてもらっただけなのよ？」
「秘儀の内容を人に言うものではありませんよ」
　ベクターは感情を交えない声でたしなめる。
「あの水晶球を使えるのは私たちだけで、誰も真似だってできないのに。みんな必死に隠そうとするわ。不思議ね」
　アイシャはクスクスと笑った。
「ディスペリアの一族は、私があなたに近づく事もよく思っていませんよ」
「私は別に気にしていないわ」
　続けてアイシャが軽く両手を合わせると、地面から机と対面する長椅子がせりあがってきた。エリアスはフラフラと長椅子まで歩いていって、音もなく倒れこんだ。同時に寝息を立て始める。
「天空の水盤での戦いは本当に色々あったみたいですね。エリアスが気絶していた場面は、お兄様から聞いて大体分かりますけど」

「私はあなたの兄ではありません」
ベクターは無愛想に答えると、机をはさんでアイシャと向かい合って腰を下ろした。
「そうですね。婚約者ですものね」
アイシャは笑顔でいうと、机を迂回してベクターの横に座った。
「正式に決まってはいませんし、賛成する人は一人もいないでしょう」
「でも、私はそう決めていますわ。１０年も前から」
詠うようにいいながらベクターの腕に自分の腕を絡める。腕の痛みにベクターはわずかに顔をしかめた。
「痛みを消すお薬が必要なら、用意しますわよ？」
「すでに治療は済ませてあります」
「私にできる事はあるかしら」
「今は特に。それよりも、セブンパワーインテグレーション（七力統合陣）を破壊されてしまいました。申し訳ありません」
「構いませんわ。また、作ればいいだけですもの」
「その上、弟君を危険にさらしてしまいました」
「全然気にしていません。それよりも、妹が手荒な事をしたようですね」
アイシャはベクターの腕に頭を預け、包帯に覆われた指に手を重ねた。
「しょせんは治る傷です」
「ガイスが自滅して見者が無事。手順は変わったけど、これでよかったのでしょ？」
「ご協力をいただいたおかげです」
「もしもの話ですよ」
アイシャは上目遣いでベクターの顔をジッと見つめた。
「もしも、天空の水盤が破壊されて、サフィリアがガイスに囚われていたとするわ。あなたはどうしていたかしら」
「あなたこそ、妹君がガイスに狙われている事を知っていたでしょ

う」
「質問しているのは私。ねえ、どうするつもりだった？」
「その時に考えて、後悔の無いように行動したはずです」
「ひょっとして、ガイスと刺し違えるつもりじゃないかって心配していたの。違う？」
無言になったベクターを見て、アイシャはクスクスと笑った。
「本当に、サフィリアの事が心配なのね」
「元弟子ですから」
「本当にそれだけ？」
「もちろんです」
「正しくて誠実で、わけ隔てなく誰とも接する。お兄様が崇拝する『すべてを知るもの』にそっくりね」
「……そうかもしれません」
ベクターは声にも態度にも相変わらず感情を交えない。アイシャはベクターの膝の上に腰掛けて、唇が触れるほどに顔を近づけた。
「先ほどから、ずいぶんと無愛想ですのね」
「性分ですから」
「私の事は嫌い？」
「まさか」
「じゃあ、怒ってらっしゃるの？」
「いえ、とても感謝しています」
ベクターはアイシャを膝から下ろした。その後、更に距離をとって軽く頭を下げる。
「人を遠ざけたくなると、慇懃になるのですね。誰かに似たのか、誰かが似たのか」
無反応なベクターを見て、アイシャは唇を尖らせて大げさにため息をついた。
「いいですわ。お怪我の調子もよくないようですし、今日はゆっくり休んでくださいまし」
「それでは失礼します」

再び頭を下げたベクターは、椅子から立ち上がった。歩き出そうとするベクターの服をアイシャが掴む。
「まだ何か？」
「お手伝いのごほうびにキスをして下さる約束でしたわ。忘れましたの？」
「そうでしたね」
ベクターが膝をつくとアイシャは座ったまま目を閉じて顔を上げる。ベクターは屈み込むと、アイシャの手の甲に軽く唇を触れて再び立ち上がる。
「約束と違いますわ」
「違いません。それでは失礼いたします」
ベクターは断言すると騎士の礼をして、足早に歩いていった。入り口のところで一度振り返って礼をする。アイシャも立ち上がってスカートの裾をつまむと、笑顔で貴婦人の礼を返した。だが、ベクターが姿を消し入り口が消えてなくなるとアイシャは不機嫌に床を蹴飛ばす。
その後すやすやと寝息を立てるエリアスを睨みつけた。そして、エリアスが座っている長椅子に勢いを付けて飛び乗った。衝撃でエリアスの体が盛大に跳ねて頭から地面に落下する。それでも、エリアスは何事も無いように寝息を立て続けていた。
「つまらないわ」
アイシャは不機嫌に吐き捨てて再び床を蹴る。すると、今度は反対側に入り口が出来た。
「ミダス・ジュサック！　そこにいるの」
「はい、ただいま」
アイシャのぞんざいな言い方に、慌てた男の声が答える。入り口に姿を現したのは３０代も半ばの男だ。立派な口ひげを蓄え、均整の取れた体格に青色のチュニックとズボン。服よりも濃い青に染めたマントを着ている。全身青づくめという色彩を除けば、優しげな笑顔を浮かべた伊達男といった風体だ。

「失礼します」
軽くお辞儀をして部屋の中に入ろうとするミダス。アイシャは不機嫌に目を細めた。
「本当に失礼ね」
「は？」
「近寄らないで。秘儀の部屋に入ろうなんて信じられないわ」
呼び出す早々に怒鳴りつけられて、ミダスは目を丸くしている。
「それに、恩知らずだわ。お礼もいえないのかしら」
「いえ、そのような事は。感謝しております。なぜなら――」
「ガイスはどうなりそう？」
言葉をさえぎるように、アイシャはまくし立てる。
「今回の失敗で間違いなくジュサック家の当主の座から転落するでしょう」
「当然の報いね。あの変態は私をいやらしい目つきで見ていたもの。次の当主にはあなたがなるの？」
「はい。アイシャ様のおかげです」
ミダスの愛想笑いをアイシャは鼻で笑った。それでも、ミダスは笑顔を絶やさない。
「ねえ、ミダス。もし、『すべてを知るもの』が再びこの世に現れたら。あなたはどう思う」
「目障りですな」
ミダスは忌々しげに即答した。
「どうして？」
「正義や平等を押し付けられるのは、余計なお世話だからです」
丁寧な言葉で笑顔のままミダスは言った。アイシャは目を細めて微笑む。
「率直なのね。あなたのそういう所は信用できるわ」
「ありが――」
「でも、あなたの事は嫌い」
「……」

アイシャは早口で黙らせる。ミダスの笑みもさすがに固まった。
「いいでしょう。あなたには目障りな人を取り除く力を差し上げます。上手に使ってね」
「ありがとうございます」
「じゃあ、さようなら」
「は？」
「さっさと出て行って。用事は済んだでしょ」
さすがのミダスも笑顔を引きつらせた。その後、表情を隠すために格式ばった深い礼をして頭を上げないまま後ろに下がっていった。
アイシャが軽く床を踏むと入り口が消えてなくなる。
「愛想笑いばっかり浮かべて、つまらない男ね。その上、服が悪趣味だわ。そのうち髭まで青く塗るんじゃないかしら」
アイシャは吐き捨てて、長いすに寝そべった。
「ねえ、エリアスはサフィリアのことをどう思う？」
甘えた声で、床の上で寝息を立てている弟に語りかける。
「『すべてを知るもの』は正しさと真実と誠実さ、平和と平等を広めて、理想郷を作ろうとした。だからこそ、彼は殺されてしまったの。だから、サフィリアに味方する人。シーグも殺されて当然よね？」
当然エリアスは返事をしない。
「それに彼女がいなくなれば。……ねえ、お兄様は私の事をずっと見てくれるでしょ？」
問いかけるように言った後、アイシャは長いすに寝そべってスヤスヤと寝息を立て始めた。薄暗い部屋の中では、巨大な水晶球だけが静かな光をたたえている。

2章―2　死神の夜

＊

シーグは突然目が覚めた。カーテン越しに星明りが部屋の中をぼんやりと照らしている。

ワイバーンに裂かれた傷よりも、すでに完治した背中の古傷が熱を持つ。命の危機が迫っている事をシーグは知った。頬に当たる風が冷たい。誰かが音も無く扉を開いたのだ。

かぶっている毛布を動かさないよう、最小の動きで懐に忍ばせたナイフに手を伸ばす。

寝込みを襲われた時は、刹那の判断と行動が生死を分ける。なによりも、こちらが気づいた事を気づかせてはならない。

シーグは寝息を立てるふりをしながら、扉のある背後に集中した。何者かが近づくのが分かり、部屋の中の風が大きく動く。その瞬間、シーグは飛び起きた勢いで、刺客を毛布を投げ付ける。そのまま勢いを殺さずにナイフを投げ――

「ひゃー」

間の抜けた声にシーグは我に返る。ナイフは刺客を外れて床と毛布を縫い付けた。毛布の中では小さな塊がジタバタと暴れている。

「アイフェ……なのか？」

「そーだよー」

どっと全身に疲労感がのしかかってきて、シーグは座り込みそうになった。床に刺さったナイフを抜き取り、巻きついた毛布を引き剥がした。すると、満面の笑顔を浮かべたアイフェが床に転がる。薄暗い部屋の中でも、少女の白い肌と銀色の髪はそれ自体が光を放っているようだ。手に持っているナイフと同様に。

「えへへー、失敗失敗」

「成功していたらどうなっていたんだ」

寝起きの機嫌の悪さも手伝って、シーグは声も表情も険しくなっていた。
「シーグがね、死んだ事になるの」
「事になる？」
「そうなの。殺すって言っても、ナイフで軽く首筋に傷を付けるだけなんだよ。でも、朝まで殺しに来た人の事を何でも聞かなくちゃならないんだ。サムハイン（死神）の夜っていうゲームなんだよ」
「とんでもないゲームだな」
シーグはため息をついた。
「毎晩やってたのか」
「ううん。それだと眠れないもん。その日に食べ物をくれた人と、仮面をかぶって寝ている人と。それから、扉の前に水差しを置いている部屋は襲ったらダメなんだよ」
「俺はそんな事は教えてもらってないぞ」
「最初の夜はルールを教えずに、不意打ちするのがルールなんだよ」
アイフェはケラケラ笑っている。
「でも、シーグは上手だねぇ。私が失敗したのは初めてだよ」
シーグは手で顔を覆ってうつむいた。
「えー、つまんない。今度は私の部屋に来てよ。いつ殺しに来てもー―」
「止めろ！」
シーグが声を荒げると、アイフェは全身を震わせて硬直した。
「殺すとか殺されるとか。簡単に言うな」
「だけどね、みんなはー―」
「誰かなんて関係ない！」
感情のままに怒鳴りつけてからシーグは激しく後悔した。アイフェは目に涙をためていたからだ。全身を引きつらせ息が出来ないほどに緊張している。シーグは泣き声の大音声を覚悟して身構えたが、アイフェは涙をボロボロと流し始めた。
ぺたりと座り込んで、膝の間に顔をうずめて声も立てずに泣く。

その仕草は感情のままに泣き叫ぶよりも遥かに痛々しい。シーグはどうしていいか分からなくなった。サフィリアを呼びに部屋の外に出ようとすると、アイフェが聞こえないほど小さな声でつぶやく。
「ねえ、どうしてなの？」
アイフェは再び消え入りそうな声を出す。
「……命のやり取りっていうのは、そんな簡単な事じゃないんだ」
「なぜ？」
アイフェは涙を浮かべながらも真っ直ぐに見つめてくる。何がよくて、何が悪いのかわからない。本当に困り果てた表情だ。これ以上何か言えば、考えは『みんな』の事を真っ向から否定する事になる。だが、シーグは適当にはぐらかす事は出来なかった。
「アイフェ、人の命を奪う事や、血を流す事を軽く考えちゃいけないんだ」
シーグはアイフェの前にかがみこんだ。そして頬に流れる涙をぬぐってやる。
「俺には12歳になるまでずっと俺の事を守ってくれた人がいた。命がけで育ててくれたんだ」
「サフィリアみたいな人？」
「そうだな、アイフェにとってはそうなるか。サフィリアの事は好きか？」
「うん」
アイフェは迷いなくうなずく。
「俺もその人の事が。マードックの事がとても好きだったよ。剣の使い方や、森の歩き方、その他に生きのびるために必要な事はなんでも教えてくれた。だけど、ちょうど12歳の誕生日。今晩みたいに、星の光で明るい夜だったよ。俺を殺しにやってきた暗殺者がいたんだ」
「どうして？」
「別に珍しい事じゃないんだ。俺はシージペリラス（命取りの座）だから。俺が死ねば災厄はなくなる。俺が生きていたから、国が滅

んだって信じている奴は多いんだ。暗殺者は俺が眠っているときに部屋の中に忍び込んできた。それでさっきみたいに毛布を投げ付けたんだ。寝込みを襲われたら、そうしろって教えられていたからな。そのあと、ナイフを持って全力でついた」

「ちゃんと、体の中心を狙った？　ナイフは真っ直ぐに差込んで、ねじりながら即座に抜くんだよね」

「ああ、その通りだ。教えられたとおりにやったから、致命傷だったよ。たくさんの血が毛布に染み込んだ。血を吸って重くなった毛布がひとりでに床に落ちて、暗殺者の顔が星明りに照らされたんだ」

シーグは両手で顔を覆った。

「俺がナイフで刺したのは、マードックだった。俺を育てくれた人だったんだよ」

アイフェが、鋭く息を飲み込んだ。

2章ー3　殺した人

「俺が呆然としている間に、マードックは近寄ってきた。理由は分からないけど、泣いていたよ。涙を流しながら俺の肩に手を回して、背中にナイフを突き立てたんだ」
「背中の傷がそうなの？」
「ああ」
「背中から肺と心臓を突き抜ける傷だね。ここは血の流れと呼吸を止める必殺の急所なんだよ。こんなに深く広く切られて何で生きているの？」
　アイフェの言い方には正直胸が痛んだが、とにかく悪気が無い事だけはシーグには分かった。
「ロディウスって人が助けてくれたんだ。世間じゃ、イービルスレイヤー（邪悪を制するもの）って呼ばれている」
「知ってるよ。サフィリアがとても尊敬している人なんだ。怪我も病気も怪物も。人を苦しめるものは何だって倒せるんだって」
「その人が俺の師匠なんだ」
「じゃあ、マードックも助かったの？」
　シーグは首を横に振った。
「本人が生きていたいと思っていなかったからだって。心の方が先に死んでいたんだ」
　アイフェは目をまん丸にしてシーグを見上げた。
「俺はその時に死に損なったんだって長いこと思ってた。でも違っていた。危険が迫ると、考えるよりも先に体が生きるために動くんだな。今まで、いろんな人に生き延びるための力をもらってきたからだと思う」
　シーグはそこでアイフェに向き直った。
「だから、俺は死にたくないし死ぬわけにはいかない。そして、俺に戦い方を教えてくれた人達のためにも、無駄に誰かの命を奪うよ

うな真似をしたくないんだ。わかるか？」
「よく分からないよ」
「……そうか」
シーグはため息と笑い声と混じった呟きをもらした。すると、アイフェが顔に手を伸ばしてくる。
「なんだ？」
「泣いてるよ」
アイフェに言われて、シーグはようやく自分が涙を流している事に気がついた。
「私もね、最初に殺したのが好きな人だったの。二番目に殺したのも、三番目に殺したのもそう。最後に殺した人は一番好きな人だったの」
数を数えるように感情を交えず、淡々とアイフェは言う。
「だけどね、私はその後に誰も殺していないんだよ」
そこまで言ってから、青色の瞳にいっぱいの涙を浮かべた。
「私が一人前になれるように願って、みんな死んでいったんだ。それなのに……」
「アイフェは一人前の働きをしていたぞ。何しろ敵の一番手ごわい奴を倒したんだから」
「誰も殺さなかったのに？」
「サフィリアがそうしろって言ってただろ。あの状況なら、敵を生かしたまま捕らえるのが一番難しい。難しい事を理想どおりにやり遂げるのは立派な事じゃないのか？」
「うん、サフィリアもそう言ってた」
「だったら、みんなもきっとそう思うよ」
アイフェの好きだった人達も含めて誰もが、とシーグは心の中で付け加えた。アイフェはしばらく宙に視線を浮かせて考え込んでいたが、小さくうなずいた。そして、シーグの顔を再び覗き込む。
「ねえ、私は嫌な子なのかな」
「いきなりどうしたんだ？」

「だって、シーグに悲しい思いをさせてしまったもん」
「昔にあった事を思い出しただけだ」
「でも、私のせいなんでしょ？」
シーグが何も言えないでいると、アイフェはクシャクシャに顔をゆがめた。
「……ごめんなさい。シーグ。もう絶対にしないよ。私の事を嫌いならないで」
そして、シーグのシャツを掴んで顔をうずめた。
「絶対にならないよ」
「本当？」
うなずくとアイフェは声を上げて泣き始めた。途方にくれて、息をつまらせていた先ほどとは違う。こらえるのではなく、溜め込んでいた感情を吐き出すような泣き方だった。
命を奪う事を顔色も変えずにいうのに、泣かせた事を気にして、嫌われる事を恐れる。アイフェには感情の働きに奇妙な食い違いがある。
それはアイフェ自身の責任ではない。あまりに人とは違う環境で育ち、忘れようの無い過去を背負っているためだ。だけど、シーグには死んだ人を生き返らせる事も、大切な人の命を奪った事も消し去る事は出来ない。
だから、シーグは何も言えずにただアイフェの頭をなでてやる事しかできなかった。息をつまらせながら、シャツが千切れるくらいに力を入れて、声を上げて泣き続けて。そうこうしているうちに、アイフェは泣きつかれて寝息を立て始めた。
アイフェが身につけた戦いの技は『みんな』が命と引き換えに授けてくれたかけがいの無いものだ。このまま忘れ去る事はできるはずがない。だけど、大切な人の血で汚れた手を、他の誰かの血で洗い流すことはできない。『みんな』のために血を流し続けても、アイフェの苦しみは増すばかりだ。
「本当に、どうすればいいんだろうな」

かける言葉も、出来ることも思い浮かばない。だから、せめて天空の水盤がアイフェに幸せな夢を運んでくれるように。シーグはそう願わずにいられなかった。

窓から差し込む星空は明るく、湖には星明りを受けた霧がヴェールのように漂っている。湖は巨大な銀色の天蓋に覆われているようだ。

2章－4　張り詰めた朝

＊

微かに聞こえてくる小鳥の声。窓の外から差し込む明るい太陽の光にシーグは目を開けた。

朝日が入り込む東側に窓があるのかと思ったがそうではない。窓の外が真っ白に輝いている。湖にうっすらとかかった朝霧に日の光が乱反射しているからだ。積雪の朝はやたらと明るいものだが、その眩しさとは比べ物にならない。

どうやら、天空の水盤では寝坊はさせてもらえないらしい。シーグはベッドの上で起き上がると、アイフェが引っ付いてきた。一晩中、力いっぱいシャツを握り締めていたのでシャツの首もとが腹がみえるほどに垂れていた。そして、ヨレヨレになったシャツは涙やらヨダレやらでベトベトになっている。そこにアイフェが頭をこすり付けて眠っていたので、銀色の髪は跳ね放題で三倍ほどに膨れ上がっている。

「すごい寝癖だぞ」

「うー、そんなに食べられたら首までなくなるよ」

「は？」

「頭は生えてこないんだよぉ」

不思議に思って、アイフェの表情を覗き込むと幸せそうに顔を緩めている。どんな夢か分からないが悪夢ではないようだ。

シーグは大きなあくびをした。アイフェが休みなく寝返りを打ったり、寝言を言ったりしていたせいでシーグはほとんど眠れなかったのだ。

「そろそろ、起きてくれ」

シーグはアイフェを揺さぶった。

「いやん、だめだよぉ」

ねぼけながら妙に色っぽい声で返事をして、更に頭をこすり付けてくる。
「そんなにかじったらヤなの」
「いい加減、俺を寝かせてくれよ」
半分まぶたを閉じながらぼやくと、何かやわらかいものが落ちる音がした。顔を上げると、扉の外にサフィリアが立っていた。
「おはようございます」
サフィリアはスッと目を細めると頭を下げて、ゆったりとした声と動作で挨拶をする。
「あー……よぉ」
シーグは片手を挙げて、弱々しい挨拶をした。しかし、サフィリアは目を合わせようともせず、足元に落ちた服を拾っている。
嵐の前の空、割れる寸前の薄氷、引き絞られた弓。そういったものをシーグは連想した。
「一晩で服がずいぶんと伸びたようですけど、服のサイズは同じでいいですか？」
「そう……ですね」
シーグは顔をこわばらせながら、妙な返事をした。そして、眠っているアイフェを起こすために頭を小突いた。
「おい、あんたの考えているような事はだな」
「……」
サフィリアは無言でベッドの端に服を置いた。
「何も起こってないんだぞ。だから、そんな態度はやめてくれ」
「……」
そして、テキパキとした仕草でカーテンをまとめて窓に手をかける。
「……あの、聞いてますか？」
サフィリアは窓をピシャンと音を立てて開くと、無表情で振り返った。
「ええ、とてもよく聞こえています。敢えて私の考えている事を言

わせていただければ、やましく思う心がないのなら、堂々としているべきですね。狼狽は余計な誤解を生みますから」

明快な返事と共に朝の冷たい風が空気に吹き込んできて、シーグは氷室の中に閉じ込められた気分になった。

「あー。サフィリアだー。おはよー」

冷たい風にアイフェは目を覚ました。しかし、頭の中はまだ夢の途中のようだ。

「アイフェ、こんなところでどうしたの？」

「えへへ、食べられちゃったの」

「あら、そうなの」

ヘラヘラとアイフェは笑っている。しかし、微動だにせず真っ直ぐに見つめてくるサフィリアの態度に表情が徐々にこわばってゆく。そして、最後には泣きそうな表情でシーグを見上げた。

「アイフェ」

「はい！」

呼ばれると同時に背筋を伸ばすと、シーグの膝の上で飛び上がって正座した。シーグは痛みに体勢が崩れる。

「その格好のままは良くないわ。着替えましょう」

「はい！　です！」

今度は手を挙げて返事をする。シーグは横っ面をはたかれて、アイフェと一緒にベッドの下に落ちた。

「アイフェは部屋に戻りなさい。シーグは着替えたら、外で待っていてください。怪我の治療をしましょう」

サフィリアは冷徹な態度を崩さず、礼儀作法の見本のような歩き方で部屋を出て、音もなく扉を閉じると去っていった。

「あれは怒っているんだよな？」

ベッドから這い上がりながらシーグは聞いた。すると、アイフェはブンブンと勢いよく首を横に振った。

「無茶苦茶、怒っているんだよぉー」

アイフェは涙声で叫ぶと、シーグの背中を踏み台にしてベッドを

飛び越えた。そして、バタンと扉を開けると全力疾走で廊下を走っていく。シーグは全身を貫く痛みのためにベッドからずり落ち、しばらく動けなくなった。

2章ー5　魔術の素質

＊

綺麗に折りたたまれたシャツには上質の麻が使われていた。真っ白な生地が使われていて、袖口には銀色の縁取りがあり、首元から胸の上当たりまで紺色の裏打ちが見えるようになっている。

上着や装飾品の組み合わせによっては、園遊会の正装でも通用する素材だ。シーグの持ってきた革鎧と剣をあわせたよりも遥かに高価である。

「動きにくそうな服だな」

シーグはシャツを手にとってつぶやく。黒いズボンは絹が使われていて、ツヤツヤとしていて光沢を放っていた。靴下にも絹が使われており、灰色に近い銀色に染められている。だが、今にも履き潰れそうな革の靴とは明らかに合わない。

よれよれになったシャツを脱いだときにばらばらと包帯が落ちた。アイフェのひどい寝相のせいだ。背中に手を触れると、黒いかさぶたとわずかな血が指についた。痛みもほとんどなく、傷が開いてもこの程度の出血ならほとんど治っている。

１０日は背中の痛みに不自由な思いをすると思っていたのに。魔術の薬の効果にシーグは感謝した。

今着替えれば、血やかさぶたがついて服が台無しになる。そう考えたシーグはシャツを肩に引っ掛けて着替えを抱えると廊下に出た。

扉を開け閉めしても、きしむ音１つ立てない。蝶番を調べてみると、ピカピカに磨かれていた。ナイフと同じ油が塗られている。そして、廊下を歩いても半歩ほどの幅で絶対にきしまない床があった。

入り口の扉も静かに開いたが、どこかでカラカラと乾いた音が聞こえる。鳴子を仕掛けているらしい。

「アイフェの仕業か」

シーグはつぶやいて、慎重に扉を調べた。罠の類は仕掛けていないようだが、星型の不思議な文様が取っ手の裏についていた。こっちは、サフィリアの仕業だろう。

三角屋根の家は昨日見たよりも一回り大きくなっている。ガイスに一旦消された家は杖の一振りで出して、シーグが眠っていた部屋は必要になったからとサフィリアが付け加えたらしい。

何処にでもある三角屋根の家に見えても、これは魔術師の拠点なのだ。そこに、凄腕の暗殺者が改装を施している。そう考えると、シーグには赤レンガの家が得体の知れない要塞に思えてきた。

太陽は昇り始めていて、朝霧は溶けるように消えてゆく。涼しげな風と、柔らかな日差し。天空の水盤は時が過ぎるごとに、景色を変えてゆく。深呼吸をすると、冷たい空気が爽快だった。

「どうして裸なのよ！」

振り返ると、両手いっぱいに薬箱や包帯を持ったサフィリアがいた。視線をわずかに横へずらしていて、不満そうな表情を浮かべている。

「傷の手当をしてくれるなら、どうせ脱ぐんだろ？」

「だからって、そんな格好で歩かないで」

「気になるなら着ようか」

血の着いたシャツを見せると、サフィリアは眉をひそめた。

「別に構いません。見慣れていますから」

「は？」

「変な意味に取らないでよね。私は医師の勉強もしているわ。患者さんを診断する事もあるの。だから、血とか……とか。いちいち気にしていたら、仕事にならないでしょ！」

サフィリアは、微かに顔を赤くしてまくし立てた。先ほどまでの張り詰めた雰囲気がなくなっているので、シーグは一安心した。

「あ……そ。ま、治療と言っても傷はふさがっている。放っておいても直るだろ？」

「ダメよ。魔術で無理やり閉じただけなんだから。天空の水盤から

離れただけでも開くわ」
　サフィリアは荷物を降ろして、湖の水に手を浸してからシーグの背中に手を触れた。シーグはピクリと肩を震わせる。
「痛かった？」
「いや、平気だ」
「本当にほとんどふさがっているわね。魔術の治療で直りが早いのは感応力が高い証拠よ。あなたって、魔術の才能があるのかも」
「魔術師っていうのは誰でもなれるのか」
「フィーリア（感応体）が見つかればね」
　聞き慣れない言葉に首をかしげていると、サフィリアは治療の手を止めず、言葉も止まらない。
「魔術を使うために必要になる物質よ。石や木や金属とか、材質は様々ね。見つかる条件もいろいろよ。血筋による継承、自分の所有物。意図的に見つける事もあれば、偶然に発見される事もあるわね。それに――」
「で、具体的には何なんだ？」
「そうね。私の場合は樫の杖。お爺様の、つまり先代の見者の杖ね。これが血筋の継承」
　言葉の途中で口を挟んだが、サフィリアは機嫌を損ねた様子もなく答えた。
「ガイスの杖は金だったよな」
「ジュサックの一族が保管していた財産だったらしいわ。つまり、所有物ね」
「なるほど。それで、ゴテゴテと金で飾り付けをしていたのか？」
「いいえ、杖以外は単なる悪趣味よ」
「あ……そ。じゃあ、ベクターの持っていたのは何だ？」
「ベクターの場合は宝珠と王勺ね」
　ガイスの時とはまるで違う明るい声でサフィリアは続ける。
「あの人、王子様なの。本物のね」
「へぇ」

偽者で悪かったな、とシーグは心の中でつぶやいた。
「他にも庭の敷石だったり、家の柱だったり。だけど、偶然よりも血筋や土地の繋がりが1番可能性が高いわ。魔術師が一族で構成されるのは、フィーリア（感応体）が血の繋がりで引き継がれるものだからよ」
「だったら、俺には縁の無い話だな。レイザークは戦士の国だったし、魔術師なんて全然いなかったからな」
「それは違うわ。魔術師は夜の影、森の中の緑、風のささやき、湖の一滴のようなもの。誰でもなれる可能性があるし、何処にでもいるの。ただ、自分自身も気づいていないか、姿を隠しているだけ」

2章ー6　結んで、開いて

詠うように言った後、サフィリアは急に無言になった。澄んだ湖ごし見ると、真剣な表情で体に触れるほどに顔を近づけている。そして、ゆっくりと背中全体を撫でるように手の平で触れる。シーグはなんだか落ち着かな気持ちになった。

「化膿もしていないわね。順調に直りそうよ。ところで今日の予定は？」

「特に無いぞ」

と言うよりも、何も出来ないだろう。周囲の景色を見渡して、シーグはそう思った。

「行きたい場所があるなら、一瞬で送ってあげるわ。もちろん迎えにもね。大陸の大きな都市は大体行けるわよ。海の向こうは無理だけど」

いきなり世界中の何処にでもと言われて、シーグは面食らった。

「ええと、じゃあ武具屋に行きたいな。剣とか鎧とか全部駄目になったし」

「魔術都市郡メティスはどうかしら？　冶金術は世界でもトップクラスなの。今日は私もアイフェも行く予定があるし、行きつけの店もあるから」

「そこでいいぞ」

「決まりね。メティスなら天空の水盤と同じで、水と風が主体の封土だから。傷の治療にもちょうどいいわね。ええと、……薬は使ってもいいのかしら。もしも、嫌ならやめておくけど」

「好きにやってくれ」

「分かったわ。包帯に魔術を仕掛けるね。巻き方自体が魔方陣になっているの。だから、絶対にはずさないでよ。それから、メティスの城壁から外には出ないでね」

「んー」

シーグはあくび交じりに間延びした返事をした。
「本当に分かってうなずいているの？」
「実は右から左なんだ」
サフィリアは沈黙すると、手を止めてスッと目を細くした。
「町に連れて行ってくれるのはわかった。で、城壁を出るのと、包帯を取るのがダメなんだな」
嫌な予感に追い立てられて、シーグは何度もうなずいた。
「なら、十分ですね」
涼しい声で言った後に、サフィリアは首筋に冷たい塊を押し付けた。
「ちょ！　待て」
シーグは文字通りに飛び上がった。
「あら、お薬は任せていただいたはずでしょ？」
「こ、氷の塊じゃないか、それ！」
「薬です」
「だったら、なんで隠すんだ」
「そんなに見たければどうぞ」
再びサフィリアが手を開くと氷が姿を消し、かわりに木製の薬入れが現れた。
「一度、手のひらを閉じた時に変わったぞ。大体、木がそんなに冷たいわけないだろうが！」
「そんな事ありませんよ。木だってやろうと思えば結構冷たくできますから」
「中身の薬ならともかく、なんで箱を傷に押し付けるんだ」
「好きにさせてもらえるんでしょ？」
サフィリアがにこやかな笑顔を浮かべると、ピキピキと音を立てて薬入れが凍結していった。それだけにとどまらず、結晶した氷がナイフのように尖ってゆく。
「……出来たら、普通にしてください」
「じゃあ、座ってくださいね」

シーグが降伏するとサフィリアは何事もなかったかのように薬入れを脇にどけて代わりに包帯を手に取った。傷の深さの割には、何重にも念入りに包帯を巻いてゆく。シーグは窮屈そうに体をひねった。

「大げさじゃないか？」

「魔術で無理やりふさいだ傷はすぐに開くの。行く場所がメティスじゃなかったら、この3倍は巻かないといけないところよ」

「それじゃあ、身動きが取れなくなるぞ」

「ワイバーンの爪で怪我をしたのよ。当たり所が悪ければ、魚の開きみたいに真っ二つだったわ」

「魚……ねえ」

「本当なら、一週間はベッドの上から動けないほどの怪我よ。じっとしていて、手元が狂うと一からやり直しだから」

助言どおりにシーグは何も言わず、サフィリアのされるがままになっていた。

「ねえ、その古傷だけど。相当深かったんでしょ」

「ああ、４年前にな」

「内臓にまで届いていたはずよ。よく無事だったわね」

「運が良かったのさ」

「それもあるけど、魔術で直したのね」

「見ただけで分かるのか」

「すぐに分かるわ。金属を溶接したような独特な傷跡だもの。どうやって治療したの？」

サフィリアは古傷の跡を指でなぞった。

「ええと。切って、開いて、結んで、引っ付けた。と言っていた」

「切開した後に、内臓も治療したのね」

師匠に聞いた言葉をそのままに伝えると、サフィリアはブツブツと独り言をつぶやく。

「痛みを消し去るためのイリュージョン（幻覚）、身体維持にエンハンス（向上）、属性も風火地水は最低でも使ったわね。他に何か

言っていた?」
「中身をほじくって、凍らして、引き出して、束ねて、貼り付けて、縫ったそうだ」
気持ち悪くなりながらシーグが言うと、サフィリアは更に考え込んだ。
「凍らせるならブラスト（噴出）、傷の位置を調べるためのディテクト（探知）、縫合にエンチャント（付与）か。相当に本格的で難しい治療だったはずよ。こんな事が出来る魔術師なんて、世界中でも5人といないわ。場所も限られるわね。何処で治療したの?」
ここで、と言いかけてシーグは言葉を飲み込んだ。
「えっと、森の中だったな。小さな川に水が流れていたし、池もあったような」
周囲をチラチラと見回しながら、適当に答える。
「水と風を主にして、火と土の属性も重ねたのね。だとすると、天空の水盤にとてもよく似た場所よ。治療に携わったのは、一人だけじゃないわね。私と似たタイプの魔術師がサポートについたはずよ。ひょっとして私が知っている人かも」
「さ、さあ。俺は気絶していたからな」
似ているどころか、本人だ。シーグは内心で冷や汗をかいていた。
「もうやめてくれよ。昔の怪我を思い出すだろ。そのうち解剖でも始めるつもりじゃないだろうな」
「そんなことしないわよ。でも、こんなに難しい治療をして、何の後遺症も残さずに成功したのが驚きなの」
「失敗するとどうなるんだ?」
「血管や内臓が破裂したり、骨が変形したり。最悪、体中が干からびる事もあるわね」
「ひょっとして、いまやっている治療も同じか?」
「そうよ。特に最後の仕上げで失敗すると、何が起こるかわからないからね」
サフィリアは、青色のインクで包帯の上から不思議な模様と文字

と書き加えた。シーグが微動だにしなくなったのを見て、サフィリアは小さく笑った。

「冗談よ。最悪でも、傷の直りが遅くなるだけだから」

怪我人の前でそういうのは冗談じゃすまないだろ。と、シーグの心の中でつぶやいた。

2章－7　恐れられ、慕われて

「ねえシーグ、夜の事だけど」
朝の張り詰めた空気を思い出し、シーグは思わず表情を硬くした。
「いちいち身構えないでよ。別にあなたに怒っている訳じゃないから」
「そうには見えなかったぞ」
「あんな態度をとったのは、相手がアイフェだからよ」
「というと？」
「あの子って、普通の叱り方じゃ効果がないの。怒っているって意思表示しないと、遊んでもらっているのと勘違いしている事もあるから」
「確かに……」
シーグはなんとなく納得がいった。
「朝から嫌な思いをさせたわね。あなたまで巻き込んで、ごめんなさい」
しおらしく頭を下げられて、シーグはこそばゆい気持ちになった。
「それにしても、困ったものね。１０歳にもなって男の人と同じ部屋で寝るのなんて、はしたない事だわ」
「……ふむ」
納得したふりをしながら、気にしすぎじゃないのか？　とシーグは思っていた。旅をしていれば、大人も子どもも、男女関係なしにざこ寝で眠る事も少なく無い。王族、貴族ならいざ知らず、庶民で１０歳くらいならばそれも許されるとシーグは思う。
サフィリアは違うが、アイフェはむしろ庶民の感覚の方が近いように思える。
「また、何か考えているでしょ」
「別に」
シーグは新しいシャツに首を通して、表情を隠した。

「思った事を口にしたら、私が怒るとか思っているのね」
「実際にそうだろうが」
シーグはシャツの乱れを直しながらつぶやいた。腕を回してみるが、やはり肩や背中が窮屈だ。
「なんですって？」
サフィリアが低いが鋭い声で言う。何やら空気が凍気や雷撃を含んだような気がしてシーグは怯んだ。それを見て、サフィリアはため息をつく。
「私ってやっぱり、人を警戒させたり怖がらせてしまうのね」
それはあるな、とシーグは思った。
「アイフェも私といる事で、窮屈に感じているんじゃないかしら」
「何で、そう思うんだ」
「あの子の寝相が悪いのは身をもって知っているでしょ」
「尋常じゃないな」
「一緒に住み始めた頃、夜中に布団を蹴飛ばすから直しに行っていたの。でも、どれだけ静かに近づいても必ず目を覚ますわ。寝るまで私がそばについていると、ずっと起きているのね。寝たふりをして、私がどこかに行くのを待っているのよ。だったら、こっそり部屋の外から魔術で直そうと思ったら、家の扉全部に鳴子を付けたの。私が部屋を出たらすぐに分かるようにね。一緒に寝るなんて絶対に無理」
サフィリアは一度言葉を止めて、うつむく。そして、周囲の空気まで重たくなりそうなため息をついた。
「だけど、あなたにはそんな様子がないのね」
だけど、夜中にナイフで首筋を切りに来るけどな。と、思いながらシーグは頬をかいた。これをいったら、サフィリアはアイフェを怒鳴り散らすに違いない。
「今でこそ抱きついてきてくれるけど、会ったばかりの時は手の届く距離に近づかなかったの。なのに、あなたはたった一日。ううん、会ってすぐに打ち解けていたわ。だけど、あの子は今だって私に気

を許していないの。私が怖くて仕方が無いから、演技をしているだけかもしれない。あの子はとても頭がいいもの」

「それは違うな。俺にはあんた達が仲のいい姉妹にしか見えないぞ」

驚いて顔を上げたサフィリアの前に、シーグは人差し指を立てた。

「アイフェが指を立てて話すのは、あんたの癖だろ。子どもは嫌いな人の、近づきたくもない人の仕草なんて真似しないぞ」

「そう……かしら？　私はあの子のダメなところを注意してばかりなの。いつでも、アイフェの好きな『みんな』の事を否定して。その度に遠くに離れて行くような気がするわ」

サフィリアらしくない自信を失った張りの無い声。

「間違っている事を間違っていると言うのは悪い事じゃない。俺も昨日の晩、アイフェを怒鳴ったしな。そのときは、涙を浮かべてすくみ上がっていたぞ」

「え？」

「だけど、理由をキチンと話せば聞いてくれた。内容はいまいち分かってないみたいだったけど。伝えたい事だけは伝わったと思う。たぶん、な」

「……」

「意見が食い違う事もあれば、喧嘩をしても別にいいんじゃないか。仲がいいだけが家族じゃないだろ？」

サフィリアは真剣な表情で見つめてくる。瞬きもせず、まじまじと食い入るように見つめられてシーグは気まずくなった。

「何か、へんなことを言ったか？」

そう問いかけると、サフィリアは突然プッと吹き出した。

「なんだ？」

聞いたことには答えず、サフィリアの笑い声はどんどんと大きくなった。そのうち湖に響き渡るような大爆笑になって、目には涙まで浮かべている。

「だって、シーグ。家族に親子って――私たち、昨日会ったばかりなのよ？」

サフィリアが笑い出した理由が理解できて、シーグは頭に血が昇った。
「バカ、違う！　俺の事じゃなくて、あんたとアイフェの事だ！」
怒鳴りつけると、サフィリアは突っ伏して更に笑い始めた。
「妙な事をいって悪かったな！」
シーグは無性に腹が立ってきて大またに歩き出した。すると、うつむいたままのサフィリアがズボンの裾を掴んだ。地面にポタポタと水滴が落ちる。
「ううん、違うの。自分のことが可笑しくて仕方がなくなっただけ」
サフィリアは涙声と笑い声が入り混じった声でつぶやいた。
「本当に、一人で何を悩んでいたのか、馬鹿らしいわ……本当にありがとう」
「あ、ああ――」
怒ったり、からかったり。泣いたと思ったら、今度は笑いだす。シーグにはわけが分からなかった。
言うべき言葉が見つからないでいると、家の扉を開けてアイフェがこっそりと顔を出した。

2章－8　雷神の封土

「ねえ、何かあったの？」
「なんでもないわ。もう着替えたのね？」
サフィリアは目元をぬぐいながら立ち上がった。
「う、うん。いつでも出かけられるよ」
まるで扉を盾のようにして、アイフェは恐る恐るうなずいた。アイフェは水色の貫頭衣を身に着けている。ローブよりもずっと袖が短くて、肩口や腰のヒダのない簡素なつくりをしていた。
「今は何をしているの？」
「朝食の準備をしていたの。果物を切っていたんだよ」
「そう、ありがとう。私もすぐに行くわ」
サフィリアが笑顔で言うと、アイフェは扉を全開にして飛び出してきた。
「言われた通りに切ったの。お父さんウサギリンゴが1番大きくて、ちょっとだけ小さなお母さんウサギリンゴもいるんだ」
人差し指を立てて、誇らしげにいうアイフェを見て、サフィリアはくすくすと笑った。
「なんで、そこで笑うのかな？」
「何でもないわ」
「嘘だね。絶対なんかあるよ」
アイフェはスッと目を細め、唇を尖らせた。
自分達の姿を見ることが出来ればいいのに、シーグは思った。端から見ていると、どう見ても二人が仲のいい姉妹にしか見えないからだ。
「ねえ、シーグ。ウサギリンゴは好き？」
「何だそれは？」
一抱えもあって長い耳の生えたリンゴをシーグは思い浮かべた。
「楽しい想像をしているみたいだけど、ごあいにく様。皮を耳に見

立てて切っただけの普通のリンゴよ」
　リンゴの皮は赤いし、実の色も白くない。それなのに、どうしてウサギなんだろう？　サフィリアの答えにシーグは不満だった。
「普通じゃないよ。兄弟ウサギリンゴと、従兄弟ウサギリンゴがいて、孫妹ウサギリンゴが1番小さいんだからね！」
「そ、そうなの。がんばったわね」
　サフィリアは少し微笑みをこわばらせた。
「頑張って、今までで1番うまく作ったんだからね！」
「ちょっと待って、アイフェ。台所にあるのは、代えの包丁だけよね？」
「そうだよ」
「なのに、どうして1番うまく出来たのかしら？」
　自慢げに胸を張ったまま、アイフェはピタリと足を止めた。
「いつもの包丁よりも、大きくて使いにくいはずよね？」
「え、ええとね」
　アイフェは落ち着きをなくし、キョロキョロと目を泳がせている。
　サフィリアはスッと目を刃のように細めた。
「ナイフを出しなさい」
「い、今は台所にあるんだよ」
「どうしてかしら。いつも肌身離さずもっているでしょ？」
「あは」
「正直に言いなさい」
　笑ってごまかそうとするアイフェに、サフィリアはピシャリと言った。シーグには周囲の空気が冷え冷えと、重苦しく変化したような気がした。
「言ったら、怒らない？」
「怒ります」
　パシリと火花を音を立てて、サフィリアの髪が不自然に揺れる。気のせいではない。サフィリアを中心に草が揺れ、静かだった湖面が動き始める。そして、黒い霧が何処からともなく湧き出してきて、

夕暮れのように周囲が暗くなってゆく。
「ヒエー」
悲鳴をあげて家の中に逃げ込もうとする。だが、家の中から突風が噴き出してきてアイフェを阻んだ。
「ア、イ、フ、ェー」
サフィリアが叫ぶとバタンと勢い良く扉が閉じて、完全に逃げ道をふさいだ。風はどんどんと強くなり、湖は海のように波打っている。黒い霧の中で黄金色の雷撃が走る。
「料理のときに、あのナイフを使っちゃダメっていつも言っているでしょ！」
怒鳴り声と共に、蜘蛛の巣のように縦横に雷がほとばしる。伝説に詠われる嵐と雷の神。タラニスもさながらの姿にシーグは顔を引きつるのをとめられなかった。天空の水盤で、サフィリアの怒りは嵐と雷を呼びだすらしい。
「ご、ごめんなさーーい」
アイフェが謝ると、ピタリと風が止んだ。黒い霧もスッと消え去り、日が差し込んできた。
「朝食にしましょう」
サフィリアはそう締めくくると手で扉を開けて家の中に姿を消した。アイフェは目を白黒させて、へたり込んでいる。腰が抜けたに違いない。
天空の水盤は、元通りの静かでのどかな風景を取り戻している。

2章ー9　なんで？

＊

「なぁ、そろそろ中に入らないか」
「うーー」
アイフェは、子犬のようにうなり声を上げながら、家の中に入るのを渋っている。
「朝食なんだろ。おれは先に行くぞ」
シーグが家の中に戻ろうとすると、アイフェは無言でズボンの裾を掴んでシーグを引き止めた。
「なんだ？」
アイフェはむくれた表情のまま、座った目つきで何も言わない。
「一体どうしたんだ？」
「……あんなに怒らないでもいいと思うんだよ」
確かにあれはやりすぎだと思う。戦場ではナイフだろうが石の欠片だろうが切れるものなら何を使っても気にしない。サフィリアが行儀作法にうるさくなった時には、シーグにも嫌な思い出しかない。
「昨日だって、包丁の場所なんて知らなかったんだよ。食事の準備をするようにいったのはサフィリアなのに」
確かにそれは連絡ミスだ。だが注意されたばかりで、早速破ったとなればサフィリアが怒るのも分からなくもない。答えに困っていると、アイフェは肩を怒らせて、再び口を開く。
「洗濯物の時もだよ」
今度は恨みを込めた視線をシーグにも向けた。そういえば、あの時にシーグもアイフェを怒鳴ってしまった。
「洗った物は良く日のあたる場所に干すんだって言われたんだよ。私は間違っていた？」
「いや」

「じゃあ、どうしてシーグもサフィリアも怒ったの？」
「ええとだな。……つまり、男がいるときには、女性の洗濯物をあまり目のつく場所に置いたらダメなんだ」
「なんで？」
「例えば慎みとか、何とかがだな。色々あるわけだ」
しどろもどろになったシーグを、アイフェはヒタと見据えた。
「男の人のベッドで一緒に寝るとか、チューが何かって聞いて回るようなことと同じ？」
「それだ、その通りだ！」
アイフェの答えに、シーグは我が意を得たりとばかりに大きくうなずいた。
「じゃ、シーグも人の事いえないね。さっき、どうして裸なの、ってサフィリアに注意されていたじゃない」
「う……」
痛いところを突かれて、シーグは言葉につまった。アイフェは頬を膨らませてプイっと横を向いた。
「な、なあ、アイフェそろそろ。朝食に行かないか？」
返事はなく、やけに冷めた横目づかいで見てくる。軽蔑されているのか、嘗められているのか。その両方かも知れない。やけに口の中が乾いて、胸の鼓動が早くなる。そのとき、シーグには脳裏に閃く事があった。
「俺はアイフェが作ったウサギリンゴが見たいな。リンゴはあんまり時間がたつと、赤くなるんだろ。そんなウサギは見たくないなぁ」
「あ！」
それとなく、わざとらしく言うと、アイフェがサッと顔色を変えた。
「せっかく上手に切ったのに。早く行かないとウサギがダメになっちゃう」
アイフェは大慌てでシーグを手を取って、家の中に引っ張った。
「このままじゃあ、ウサギじゃなくて、赤剥けのエテ公になってし

まうよ！」
「それは大変だ」
大慌てのアイフェに引きずられながら、シーグは安堵していた。
そして、戦場の方がよっぽどマシだと思った。

2章－10　三世帯大家族兎林檎

アイフェは扉を蹴破らんばかりの勢いだったが、急停止して両手でノブを持って静かに開ける。その後シーグを引きずってドタバタと家の中に入ると、振り返って両手で音もなく扉を閉じた。アイフェの歪な律儀さにシーグは吹き出しそうになった。

「食堂はこっちだよ」

アイフェの案内で奥へ奥へと引っ張られながら、シーグは違和感を覚えた。

「廊下の幅も長さが変わっていないか？」

「変えたんだよ」

「変えた？」

「昨日の夕食は部屋まで運んだけど、今朝はシーグも食堂に来るんでしょ。大きさを変えないと狭いじゃない？」

「はあ」

シーグは頭をかいた。しかし、ここは怒りで嵐と雷と巻き起こる魔術師の封土だ。魔術に関わって、いちいち考え込むのは無駄だと気持ちを切り替える。

食堂では、サフィリアが金属製のポットから陶器のティーカップに紅茶を注いでいるところだった。木で作られた椅子と机、真っ白なテーブルクロス。パンの入ったカゴやいくつかの皿には、ナプキンがかけられている。絨毯は複雑な模様で足が沈みそうなほど柔らかい。どれもが素人目にも高価なものだと分かる。

「さあ、もう出来ているわ。手を洗ったら、運ぶのを手伝って」

サフィリアが食堂の奥を示した。アイフェが小走りに入って、窪んだ洗い場の上にあるレバーを倒すと壁から水が出てきた。シーグも真似をして、壁から出てくる水で手を洗う。

「これも魔術なのか？」

「そうよ、便利でしょ」

黒い金属板の上では卵焼きがジュージューと音を立て、パンがキツネ色に焼けている。後は食材や皿を並べるための場所と、食器をしまう棚と水場くらいで、両手をいっぱいに伸ばした位の広さしかない。

「ずいぶんと狭い台所だ」

そうつぶやいて、シーグは部屋の中に煤の匂いが全くしないことに気づいた。横ではアイフェが、コテ返しを使って卵焼きを器用に金属板から皿に盛り付けてゆく。

「カマドがないんだな」

「だから、場所がいらないの。灰や煙が飛んでこないから、食堂と近くにできるしね」

サフィリアは、うれしそうに説明する。そして、ポットを置くと中に水を注ぎ込んで指先で軽く突いた。それだけで見る間にポットの水が沸騰し、蒸気を放ち始める。

「それってひょっとして」

「昨日、あなたの剣を溶かした魔術よ。金属を加熱させるんだけど、威力を抑えればこういう使い方もできるの」

「カマドが無いのに、なんで屋根に煙突がついているんだ」

「……」

サフィリアはピタリと動きを止めて無言になった。聞かれたくなかった事のようだ。

「あーー、とにかく便利なのはいいな。さすが魔術師の台所だ」

シーグは適当なことをいいながら、アイフェから皿を受け取った。受け取った食器を入念に調べていると、アイフェが首をかしげた。

「どうしたの？」

「いや、食器には足が生えていないんだな」

シーグにつぶやきに、サフィリアがクスリと小さく笑った。

「詩人はよくそういう話をしているわね。コップに羽を生やすことだってできるけど、足の歩行や翼の飛翔は不安定なの。中身をこぼさずに移動させるのは難しいわ。実際に、エンチャント（付与）の

試験の項目にもあるくらいだもの。それに、この距離なら手で運んだ方が早いでしょ？」

「確かに」

一通り運び終えると、アイフェが小走りにやってきて椅子に飛び乗った。

「アイフェ、行儀が悪いわよ」

「はぁーい」

いい加減な返事にサフィリアは不満そうだった。アイフェはひときわ大きな皿にかけられたナプキンを取った。

「これがウサギリンゴだよ」

「すごいな」

シーグは思わず嘆息した。皿に上に並んでいたのは、大小さまざまなウサギだった。耳の形のでっぱりがあって、小さな手足がついている。目の部分には小さなくぼみがあり、良く見れば小さな口や髭まで表現されていた。

つまんでよく見ると、小指の爪の先に乗りそうな1番小さなウサギにまで細工が徹底されている。一つずつ異なる形で動きが表現されているし、削りカスになったリンゴは茂みに見えるよう盛られている。そのため、皿の上はウサギが飛び跳ねる草原のようだ。

「へへへ、すごいでしょー」

アイフェは椅子の上で半立ちになって、得意げに胸をそらした。

「ちょっと、これって違うわよ……」

一方、サフィリアは皿を見ながら困惑した表情を浮かべている。

「何が？　どう見てもウサギじゃないか」

「言ったでしょ。皮を耳に見立てるだけなの。足も口もつけなくていいの」

「なんでそれがウサギなんだ。むしろモグラに近くないか？」

「そうだよ。こうした方がずっとウサギらしいんだよ」

サフィリアはしばらくの間、額に指を当ててうつむいていた。

「どうしたの？」

「頭でも痛いのか」
「アイフェ、食べ物をおもちゃにしてはダメよ」
サフィリアは冷たさを感じるほどの声で注意した。
「だけど――」
「それによく見て、あんまり時間をかけたからもう赤く変色してきているわ」
「じゃあ、今度から塩水に浸して――」
「アイフェ、私は食べ物で遊んではダメといったの」
サフィリアはピシャリと言い切って反論を封じた。
「もう二度としないで。いいわね？」
「うーー」
アイフェは不満げにうめき声を上げている。
「早く食事にしましょう。今度は紅茶や卵まで冷えてしまうわ」
サフィリアがそう言って、重々しい空気の中で朝食が始まった。
シーグは気まずくて仕方が無かったが、アイフェは１０数える間もなく、シーグに話しかけてきた。
「ねえ、シーグは朝食はいつも何を食べているの」
「……食べない事の方が多いかな」
「えーー。どうして？」
「こんなに簡単に食事を作れないんだ。水をくんでこなくちゃならないし、火を興さなきゃいけないからな」
「おなかが減らない？」
「慣れたからな。それに昼にたくさん食べるようにしているし」
「へえ。じゃあね、じゃあね」
何を言っても感心するアイフェ。サフィリアは一言もしゃべらず黙々と食事を続けていた。

2章－11　生活指導

＊

ぺらぺらと喋り続けたにも関わらず、アイフェは一番早く食事を終えた。手早く自分の食器を重ね合わせると、洗い場まで小走りに持っていった。勢いがついていたので、カチャンと食器が音を立てる。

「こら、アイフェ。もっとゆっくり運んで。食器が割れるでしょ」

「はぁーい」

適当な返事をして、アイフェは走り去ろうとした。

「待ちなさい」

鋭いサフィリアの声に、アイフェは文字通りに動きを止めた。

「ナイフを忘れているわよ。綺麗に洗っておいたわ。荷物の中に入れておきなさい」

「うん」

アイフェはナイフを持って、駆け足で食堂から出て行った。

「もう。しょうがない子ね」

サフィリアは苦笑いを浮かべた。そして沸かしたお湯で自分とシーグのカップに新しい紅茶を注ぐ。

「ずいぶんと少食なのね」

「む」

シーグはうなる様に返事をした。口の中に入れたものを噛んでいたからだ。サフィリアは紅茶の入ったティーカップを口に運んだ。朝食を半分も食べ終わっていないのはシーグだけだ。

「朝の変わりに昼に食べているからな」

口の中の物を飲み込んで、シーグは返事をした。

「ダメよ。朝食はキチンと取らないと。一日の基本なんだから。だから、そんなに痩せているのよ」

「そんなの俺の勝手だろ」
痛いところをつかれて、シーグは不機嫌に答えた。
「医師としての意見よ。伸び盛りの成長期は終わっているみたいだけど、剣を使うには体が細すぎるわ。特に関節を保護できるほどの筋肉がついていないもの。今だって背中の傷よりも、蹴られた腕や、剣を持っていた利き腕のほうが痛んでいるはずよ」
「……まぁな」
「元々骨格が細すぎるし、血の巡りも良くないみたいよ。体温も低過ぎるわ。食事だけはキッチリとらないと、成長しきる前に体が壊れてしまうわ」
「わかったよ」
シーグはすでに腹が一杯になっていたが、サフィリアがずっと見張っているので残せそうにもない。
「今日はアイフェに何を言っても無駄ね。あなたがいるのがうれしくて仕方が無いみたい」
「文字通り雷が落ちたのにな。俺なら逃げ出して、帰って来ないぞ」
「……そんなに酷かった？」
サフィリアは、肩を落として問いかけてくる。軽い悪態に真面目な返事をされて、シーグは慌てた。
「いや、そのなんだ、まあ、アイフェのためにやっているんだ。間違った事じゃないと思うぞ」
「私だって好きでやっているわけじゃないの。それに、最初からあんな叱り方をしなかったわ。あの子が、何でもかんでも聞いてくるようになってからなの」
「ふむ」
「今日はあなたがいるから、機嫌がいいけど。あんな叱り方をしたときは、半日は気まずいままなの。次の日まで持ち越したときもあったからね」
「2人きりっていうのが悪いのかもな」
「そうかしら？」

「一旦気まずくなったら、ずっとそのままになるだろう。3人より多ければ、そんな事にはならない」
「そうね、停戦のときも中立国や第三国のとりなしが必要だものね」
個人の問題を国家問題で比較するのはちょっと違うんじゃないか、と思いながらシーグは相当赤くなったリンゴをほお張った。
「そういえば、さっき入ってくるまでずいぶん時間があったわね。あなたもアイフェに質問攻めにされていたんでしょ？」
「……ああ、アイフェに言い聞かせるのが大変なのは良く分かったよ」
シーグの困った顔を見て、サフィリアは小さく笑った。
「1つ答えると、5つは質問が来るのよ。無理やり黙らせる以外に、いい方法が思いつかないの。私がもっとしっかりしていたら違う方法があるのかしら？」
「さぁ、俺には分からん」
「さっきのリンゴの件だって、本当は怒鳴るような事じゃないわね」
「と、言うと？」
シーグはパンを口に運びながら先を促した。
「むしろ、あの子の才能を見つけて喜ぶべきだったかもしれない。宮廷の調理師でもなければ、短時間でここまで仕上げられないわ」
「じゃあなんで注意したんだ」
「ここは宮廷じゃないし、戦いで使ったナイフを料理に使う戦場でもないの。アイフェのやる事はいつでも行過ぎているか、見当違いだと思わない？」
「まあ確かに」
「あの子は何をやらせても器用にこなすの。いつでも教えた以上に、自分なりの工夫を加えてね。間違いなく天才よ。いつか本格的な技術を身につけるために誰かの弟子に出さないといけないわ。そのときアイフェが今のままで、ましてや暗殺者の常識で行動したらどうなると思う？」
「……考えたくもないな」

「世の中では余計な事をすれば、何もしないときよりも悪くなる事が多いわ。能力をひけらかすのもいい目で見られない。だから、アイフェには社会の常識を知って、自分を抑えられるようになって欲しいの。あの子が本当に自分でやりたい事を見つけたときのために。ね」

サフィリアは、机に肘をついてため息混じりの声を出した。

「だったら、理屈よりも実践だな。それも、ヘマをしたときに痛い目を見なければ体で覚えない。今のままでいいんじゃないのか」

「そう、だと……いいんだけど」

「いっそ、魔術を習わせてみたらどうだ。あんた自身相当な使い手なんだしさ。師弟が一緒に暮らすのは珍しくないんだろ」

「……」

サフィリアはティーカップを持ち上げたままで、動きを止めた。

「才能が無いのか？」

「そんなはずはないわ。十分すぎるくらいにあるはずよ。でも……」

サフィリアは表情を曇らせて、ティーカップの重さに負けたように手を下ろした。また余計な事を言ってしまったのか、とシーグは心配になった。

「シーグー、サフィリアー。そろそろ出発の時間だよー」

「分かったわ。先に外で待っていて」

アイフェに返事をしてから、サフィリアは立ち上がった。空になった食器を重ねて洗い場へ持ってゆく。

「あなたも早く食べてね」

「うぅー……」

残り数口になったパンとリンゴを前にシーグは表情を曇らせた。

「明日の朝はもっと食べやすいものを準備するわ。生クリームとか、スープはどう？」

「嫌いじゃないな。すると、今晩も泊めてくれるのか？」

何気ない質問には、返事の代わりに食器がガチャガチャとやかましい音を立てた。洗い場を見ると、サフィリアが洗い場で倒れこむ

ように突っ伏している。それでも皿が一枚も割れていないのはたいしたものだ。
「おい、どうしたんだ」
「へ、平気よ。ちょっと足を滑らせただけ」
「サフィリア、すごい音がしたよ。どうしたの？」
アイフェが食堂に飛び込んできて、心配そうにサフィリアの顔をのぞきこむ。
「あれー、お顔が真っ赤っ赤ー。熱でもあるの？」
「な、なんでもないわ。シーグ、あなたがいていいのは、怪我が治るまでよ。キッチリ最後まで患者の面倒を見るのが、医師の責任なの。治療も最後まで見ないと、包帯をはずして台無しにしてしまいそうだし、食事も放っておくといい加減にするんでしょ。だから、目の届く場所にいてもらうの。それだけよ！」
怒りながら早口にまくしたてるサフィリアを、シーグとアイフェは不思議そうに見ていた。

2章－12　努力と才能

＊

サフィリアがひどく不機嫌になったので、シーグとアイフェは家の外で待っていた。

「一雨きそうだな」

空を見上げて、シーグはつぶやいた。朝には晴れていた空が曇ってきている。風も生ぬるい。

「きっと、サフィリアの機嫌が悪いからだよ。朝からあんなに霧が出ていたし、その後もいっぱい怒らせちゃったもん」

アイフェはうつむきながら、靴の先で土をいじくっていた。肩には何かがぎっしりとつまったカバンをかけている。

「何かサフィリアが喜ぶような事はないかな」

「うーんとね。買い物が好きかな」

「装飾品とか服を買いにいくのか？」

「ううん。いつも野菜とか、調味料とかハーブとか。たぶん、今日の夕方も市場に行くと思うよ」

「買出しか。じゃあ、夕方に荷物持ちでも手伝ってみるかな」

とにかく機嫌を直してもらおう、とシーグは思った。泊めてもらったはいいが、寝床が雷雲の嵐や極寒地獄になったのでは困る。

「ところで、朝早くからメティスに何をしに行くんだ？」

「学校に行くんだよ」

「へえ、何を習っているんだ？」

アイフェは肩にかけたカバンから、紐で止められた羊皮紙の束を取り出した。一つ目を開いてみると、大陸の共通記号が並んでいた。基本的な数字、簡単な記号。大陸の何処でも通用する取り決められた記号である。

行きずりの旅人は入国の一日前にこれらを頭に叩き込むか、要点

を抑えてメモをしておくことが多い。一通り使えれば、町で日用品を買い、飲み食いをする程度なら不自由が無くなるのだ。

１０以下の数字は三本の線の組み合わせで表す。宿屋の看板に描かれている絵柄は様々だが、必ずどこかに『□』の記号が刻まれている。宿と酒場は兼用である事が多いので、ベッドや酒樽を意匠化した記号なのだ。『×』は車輪や蹄鉄を意味し、馬車に関係した記号だ。『†』は武具屋。『Ш』は王冠であり、王の所有物という意味がある。よそ者にとっては、立ち入り禁止と同義である。

アイフェの書いた記号は年齢相応のヘビがのたくったような線だった。

二つ目の羊皮紙をまわして広げていくと、日用的な公用語の会話文が書かれている。先に進むごとに文章が難しく、字が小さくなってゆく。しかし、字体が加速度的に上達していくのがわかった。

「次はこれだよ」

渡された羊皮紙を開くと、難解な文字が目に飛び込んできた。

「ルーン文字……だな」

「王族の公文章の見本なんだって」

どういう勉強の仕方をすれば羊皮紙たったの三巻きで、共通記号から高度なルーン文字になるのだろう。同じことを理解するのに、シーグは百倍は羊皮紙を無駄に使った記憶がある。とにかく、シーグが１２歳のときよりは、今のアイフェのほうが言語能力に優れているのは疑いない。

「それでね今日は、ルーン文字の解読をするんだよ」

「解読？」

「軍の暗号なんだって。あ、昨日ベクターたちがやっていたのにも似ているかなあ」

「ひょっとして、『暁の星』とか、『虚空の城壁』とかいうアレか？」

「そうそう。私もあんまり意味が分からなかったんだ。ちゃんと勉強しないといけないね」

俺はさっぱり分からなかったぞ。と、シーグは正体の知れない敗北感に襲われた。

「まあ、俺は戦士だしな……」

意味の無いシーグの呟きを聞いて、アイフェは首をかしげている。

「あ、そうだ。これが鍛冶屋の地図だよ。包丁を研ぎに出しているのはここだよ」

アイフェがローブのポケットから、羊皮紙に書かれた地図をとりだした。道路が直線で引かれていて、綺麗な字で通りの名が書かれている。共通記号で店が記されてた。『†』のマークに赤色で丸がつけられていた。これだけ丁寧に作られた地図ならば、見間違う事はない。迷ったとしても道行く人に聞きながら確実に到着できるだろう。

「アイフェが作ったのか？」

「えへへ」

シーグの驚きの声の中に、賞賛の意味を感じ取ったらしい。アイフェは満面の笑顔を浮かべている。

「勉強の成果がバッチリ出ているな。これなら、地図屋にも代筆屋にもなれそうだ」

「本当？　うれしいな」

アイフェの戦い以外の才能を目にできたのだ。喜ぶべき事のはずなのに、シーグはやるせない気持ちになるのを止められなかった。自分が必死になって学んだ事が、ずっと年下の少女に一足跳びに簡単に乗り超えられていく。それは、自分の才能と努力した過去が取るに足らないものだと思い知らされてしまう気がするのだ。

「心が狭いな、俺は……」

罪悪感と疲労感に気が重くしながら、シーグは家の壁にもたれかかった。

2章－13　理屈と道理

シーグが落ち込んでいると、サフィリアが扉を開けて姿を現した。昨日とほとんど同じ水色のローブ。違いと言えば、胸には翼を意匠化した紋章が銀糸で縫われていて、黒い腕章を付けている事だ。

「気分が悪いの？」

「いや、なんでもない」

心配そうにサフィリアに聞かれてシーグは壁から身を起こした。アイフェは鼻歌を歌いながら、宝物でも扱うように羊皮紙を丁寧に巻いてカバンの中にしまいこんでいる。

サフィリアは家の前にある小さな池の前に立った。シーグが興味深そうに覗き込むと、サフィリアはよく見える位置を譲ってくれた。

「転移の魔術を見るのは、はじめてなの？」

「ああ。話には聞いていたけどな」

「変ね、ロディウス老師……彼ほどの魔術師なら使えるはずだけど」

「人間には足がついている。だから歩け。ってな。俺を置いてさっさと魔術で跳んで行く事はあったぞ。そういえば、密林の真ん中で放り出されたときは、本当に死んだと思ったな」

「……厳しい修行だったのね」

「爺さんの方針らしいが、弟子を『あびす』？　に突き落として……ええと、帰って来た者だけを『こじん』にすべく『ちょうせい』させるとか言っていたな。どういう意味なんだ、これは」

「え、ええと……」

サフィリアは困った表情で視線をそらした。

「『アビス』は死んだ後に行く場所で、『故人』は死人の事だよ。ちょうせいはたぶん『長逝』だね。殺すって意味があるんだ」

「こら、アイフェ！」

慌てて口をふさごうとしたサフィリアをヒラリとかわして、アイフェは更に続ける。

「だからね、弟子を冥府に突き落として、生きて返ってきたらもう一回殺すって言う意味なんだよ」
「……あの爺さんならやりかねないな」
シーグが頭をかいてつぶやく。どういうわけか、サフィリアは額を抑えている。
気分でも悪いのだろうか？　そうシーグが考えてくると、アイフェが腕を引っ張ってきた。
「ねえねえ、シーグ」
「ん？」
「シーグは命を軽く見たらいけないって言ってたよね。なのに、シーグのお師匠さんは違うの？」
「おいおい、半分冗談で言っているだけだ。俺だって本気に思っていない」
「半分だけ冗談なら、殺すとか言ってもいいの？」
「……良くはないな」
「それに、師匠の事を爺さんって呼んでいいの？」
シーグは言葉に詰まった。サフィリアは難しい表情でうつむいている。
「それに、教えてくれる人を悪く言うのは、いい事なのかな？」
流暢なアイフェの論理にシーグはグゥの根も出なくなった。すると、サフィリアは意を決したように顔を上げた。そして、アイフェの顔を正面から見つめる。
「いい、アイフェ。シーグとロディウス老師の関係は特殊なのよ」
「変ってこと？」
「……違うわ」
一瞬だが、サフィリアがうなずきそうになったのをシーグは見逃さなかった。
「いい、よく聞いてね。学校での教師と生徒の関係と一対一の師弟関係は違うの。学校では勉強する順番があるわよね？」
「うん」

「そして、先生が休んでも別の先生が来て、続きをするの。先生が変わっても、勉強の内容はほとんど変わらないわ」
アイフェは真剣な表情で何度もうなずいている。
「だけど、一対一の師弟関係の場合は違うわ。師匠の判断で弟子に一番あった独特の方法になるの。場合によってはびっくりするくらい信じられない教え方もあるわ」
「じゃあ、死にかけるのがシーグにとって一番だったってこと？」
シーグは複雑な表情を浮かべた。一方、サフィリアはシーグに困った眼差しを送った。
「ロディウス老師は、そう考えたのでしょうね」
「じゃあ昨日の晩、私がシーグを殺しにいったのだって悪い事じゃないよね？」
無邪気に問いかけてくるアイフェ。シーグは「バカ」と小さく叫んだ。すると、周囲の気温がすっと下がった。
「……そんな事をしたの？」
「ご、ごめんなさい」
サフィリアの冷たい声。アイフェは半ば条件反射的に謝った。
「本当に殺すわけじゃないぞ。ゲームだったし、ルールもあるんだ。だから――」
「あなたは黙ってて」
シーグの弁護をサフィリアは即座に黙らせた。
「とにかく、もう二度としてはダメよ」
「う、うん」
無言で見つめられて、アイフェをは青ざめながら生唾を飲み込んだ。だが、徐々に肌寒さが無くなってゆくとアイフェの表情も和らいでいく。サフィリアは一息ついて、言葉を続ける。
「今、アイフェが今しているのは学業。シーグの修行は戦闘技術だわ。アイフェが『みんな』から教えてもらった事も、シーグがロディウス老師から言われたことも学校では通じないの。だから、同じに考えては絶対にダメよ。分かった？」

アイフェは大きくうなずいた。
「そうか。色々と違うんだね」
「そうよ。みんな違うのよ」
サフィリアは言葉を切って立ち上がった。アイフェは「そっかー、そうなんだぁー」と、ブツブツいいながら考え込んでいる。
「どうだったかしら？」
「何の事だ？」
突然聞かれて、シーグは逆に問い返した。
「あなたが言ったでしょ。アイフェにしっかり言い聞かせなさいって」
「そうだったっけ？」
「……本当にいい加減ね」
サフィリアはシーグを睨みつける。アイフェは、うろうろとしながら首をグルグルと動かして考え込んでいる。
「理屈で教え込むと矛盾を探し始めるみたいね。論理に穴がないように詰めないといけないわ。考えなしの発言は却って逆効果ね」
「ふむ」
「さっき、私が言った事にへんなところはなかったかしら？」
「大丈夫だろ」
即答すると、サフィリアは不信感丸出しの視線でシーグを睨みつけた。
「だったら、さっきロディウス老師の事でアイフェに言った事はきっちり修正しておいてよね」
「俺が何か言ったか？」
「ここままじゃあ、初対面のロディウス老師を爺さん呼ばわりするわ。その上、あなたが老師の教えに否定的だって事も伝えてしまうかもしれないわ。そうなると困るでしょ」
「いや、全然」
「え？」
「あの爺さんの場合、否定されたら逆に喜ぶぞ。それに俺が師匠と

呼ばないんじゃなくて、爺さんが呼ばせてくれないんだ」
「……あなたが構わないならそれでいいけど」
「それよりも俺は知りたいんだが」
「どうしたの」
シーグのつぶやきに、サフィリアは生真面目な表情を浮かべた。
「あんなに動き回って、考え事なんてできるのかな」
考え込んだアイフェは、しまいに踊るようにクルクルと回転を始めた。何かをつぶやいているのは相変わらずだ。
「……いつも以上に冴え渡るみたいよ。さあ、ずいぶんと時間を使ってしまったわ。もう出かけましょう」
サフィリアはため息混じりにつぶやくと、杖の先を水の中に浸した。すると、池は空ではなく石造りの天井を映し出した。アイフェも回転するのを止めて、フラフラと頼りなく歩きながらシーグに腕に飛びついた。
「メティスまでいくわよ。早く池の中に入って」
「分かった」
シーグは両手をそろえて、頭を池に方にかがめた。するとアイフェもシーグの真似をして水に飛び込む仕草をする。サフィリアは大げさにため息をついた。
「……言い方が悪かったわね。池の上に足を乗せてくれればいいわ」
「そうなのか？」
「シーグってば、おかしー」
アイフェがケラケラと隣で笑いだした。まだ、目がグルグルと動いていて焦点が合っていない。
「早くして！」
サフィリアはイライラし始めている。シーグは恐る恐る池の上に足を乗せた。氷の上に立っているかのような固い感触で、体は全く沈まなかった。サフィリアもシーグの横に並ぶ。
「魔術都市郡メティス。フェール・リレイに跳びます」
サフィリアは宣言した後に、杖を水面に突きつける。体が内側か

ら歪められる様な感触の後にシーグは目の前が真っ暗になった。

2章－14　英知の都

＊

魔術都市郡メティスの名を知らぬものはない。

大陸で最も豊かで強大。偉大な王と公正な法によって統べられた最大の国家。メティスをして、第二のリンディスと呼ぶものも多い。

国土は温暖で安定した気候に恵まれ、鉱山では金属から宝石に至るまで発掘される。緩やかな海岸線は港を構えるに理想的だ。当然のように様々な産業が興り、交易の要所となっている。

王国の中央を東西に流れる大河アクアランスは常に豊かな水をたたえている。水の道を中心として栄える大小さまざまな都市を経て、大陸中に道は広がってゆく。

すべての道はメティスから始まり、メティスに帰る。陸路も海路も、そして魔術の道でさえ例外ではない。

絶海の孤島、砂漠の果て、密林の中心。辺境の山頂にある天空の水盤。世界中に点在する魔術師の封土は、メティスが統べているからだ。

これほど広大な国家は歴史上他にないが、古来よりこれほど外敵に悩まされてきた土地もない。メティスと呼ばれる前は、カラナウス（血まみれ）というのがこの地の呼び名だった。豊かさを求めて野心的な王たちが何百年にわたって、血で血を洗うような争いを繰り広げた歴史があるからだ。その理由は守るに難く、攻めるに易い地形にあった。

国土の大半は平地であり東西に長細い。東には怪物がうろつく魔境地帯、西には海賊のひしめく海。南北では野心的な王が侵略の機会をうかがっている。四方の脅威に対するため、メティスは勇猛な騎士と聡明な魔術師を組織して防衛に当たっている。もしも、この地に戦いが起こりアクアランスの清流が血に染まるとき、街道に沿

って戦乱が大陸中に広がるのが常なのだ。
魔術都市郡メティスは世界の要。剣と魔術を武器とし、英知の壁に守られ、王の法によって統べられている。

＊

暗転した視界が元に戻ると、シーグ達は石造りの建物の中にいた。足元の床には、さっき見上げていた空が広がっている。サフィリアがもう一度床を叩くと、足元の空は消えて変わりにピカピカに磨かれた鏡になった。鏡は五歩四方の巨大なもので、傷ひとつ無い。今は逆さまになった3人と丸い天井を映し出していた。
「銀じゃないな。金でもないみたいだが……」
シーグが足元を見ながらつぶやいた。
「金と銀の合金、エレクトラム（琥珀金）よ。鏡の材料としては理想的だけど、すごく傷がつきやすいの。ゆっくり足を動かしてね」
「俺の場合は、靴を脱いだ方がよさそうだ」
シーグの革靴は山歩きのために、底に鋭い溝が彫っているからだ。屈みこんで靴を脱いでいると、鏡に写ったローブの裾からサフィリアの白い太ももがチラリと見えてしまった。
素早く目をそらしたつもりだったが、サフィリアがローブを裾を押さえて素早く後ずさる。気まずい空気が流れてシーグは動けなくなった。
「……最っ低」
サフィリアはポツリとつぶやくと早足で歩き始めた。
「急ぐと、鏡に傷がつくよ」
アイフェの言葉に答えず、サフィリアに無言のまま先を出口に向かって急ぐ。シーグは慌てて鏡の上から下りて靴に足を突っ込むと、サフィリアを追いかける。アイフェも小走りでついてきた。
「何がどうなったの？」
「いや、まぁ……」

説明できずに口を濁していると、アイフェが涙目になってゆく。
「違う、違う。アイフェは悪くない。俺が悪いだけだから、泣くな」
「何が悪いの？」
「とにかく、俺が悪い」
そう断言して、シーグはサフィリアの横に並んだ。
「わざとじゃないんだ」
「悪意が無いなら何をしても構わないのですね。とっさに謝罪の言葉も出ないみたいですから」
サフィリアの嫌味にも、シーグはめげずに言葉を続けた。
「許してくれ。いや、許さなくてもいいから、アイフェの前では普通に接してくれないか。不安になって泣きそうなんだ」
サフィリアは突然立ち止まる。
「謝るのは私に悪いと思っているから？　アイフェと気まずいのが嫌なのかしら？」
「両方だ」
正直に答えるとサフィリアは指で軽く額を押さえてから深呼吸をした。シーグはゴクリと生唾を飲み込んだ。
「分かったわ、もう許してあげます」
もっとも軽く唇をかみ締めていたので、全く怒りが収まったわけではなさそうだ。
「何が悪かったの？」
アイフェが首をかしげて、シーグとサフィリアを見比べる。
「もう終わった事よ」
アイフェの頭を撫でてやりながら、サフィリアは優しく言った。
「私だって、アイフェが叱られた事をいちいちみんなに言いふらしたりしないでしょ。むしろ、そんな事をされたら嫌じゃない？」
「うん」
「シーグは謝ってくれたし、私も許してあげたの。だからこの話はおしまい」
「うーん」

アイフェは不満げに唸っていたが、手を叩いて顔を上げた。
「じゃあ、サフィリアもシーグも仲良しなんだね」
複雑な表情を浮かべたのもお構いなしに、アイフェはサフィリアの手を握った。そして、反対側の手を目一杯伸ばしてシーグの手も握った。
サフィリアは苦笑いしている。さっきまでの刺々しさがなくなっていた。
それでも、後でもう一回謝っておこう。と、シーグは思ったのであった。

2章－15　騎士の町並み

＊

石造りの建物を出ると塔の頂上に出た。三階建ての高さから下を見ると、荷馬車と旅人が行き交い道の両側にはびっしりと店が並んでいる。

旅人の常として、シーグは太陽を探した。方位が全く分からなくなっていたからだ。太陽は右手、地平線の向こう側に消えてゆく大河の上にあった。そこから四方を見渡して、空の広さにシーグは驚いた。

国と中心となる都は、例外なく高い城壁に守られている。城壁で都市の広さが限られるために、中央に行くほど建物は高くなり雑多になってゆくものだ。侵略に備えて町並みを迷路のように複雑に入り組ませるので、更に空は狭くなる。だが、シーグたちが今立っている塔以上に高い建物がほとんど無く、道は広くて真っ直ぐだ。城壁には矢の侵入を防ぐほどの高さも、攻城兵器の攻撃に耐えうるだけの厚さもあるとは思えない。

「どうしたの？」

「明るい都だ、と思ってな」

シーグの答えにサフィリアは笑顔になった。代わりに守りが薄っぺらだが、と続けそうになったのを止めた。即座に笑顔が消えるに違いないから。

「今、私たちがいる場所はフェール・リレイ（石突きの中継地）。名前の通りにアクアランス（水の槍）の一番根元になるの」

サフィリアが東側を指差すと大河が見える。小さな一人乗りの漁舟から、外洋に直接出れそうな大型船まで、大小様々な船が浮かんでいた。その後、城壁をかねた水門を経て湖に通じる。続いて、サフィリアは西側に広がる湖を指差した。

「湖の名前はリーゲル・バックラー（王族の盾）。この町は、盾と槍を構えた騎士の姿になぞられているわ」
「とすると、湖の向こう側にある城が騎士の頭ってわけか」
南から来る風が通り過ぎ、サフィリアは髪を押さえつけた。草と太陽の香りがする心地よい風、城塞都市特有のよどみは感じられない。
「湖の両側は小高い丘になっているの。東側の丘が馬の頭。私たちが行く学校があるの」
丘の周囲には大小さまざまな塔がそびえ立っていた。王城と同じく、町の何処からでも見る事ができそうだ。風が治まるのを待ってから、シーグは渡された地図を広げた。サフィリアは風で乱れたアイフェの髪を直してやっている。
「じゃあ、一番下に書いてあるナイトロード（騎士の道）っていう街道は」
「馬の足が歩いている道。つまり、メティスの一番南側を通る街道の事よ。南に通じる陸路ね」
王都の南側に目をやると、白い鎧を連想させる白亜の建物が立ち並ぶ一角があった。
「鍛冶屋があるのはホワイトホース（白馬）区画。つまり、馬の胴体か」
更に南側に目をやると、白や黒の煙を上げる煙突が見えた。建物も北側と比べて色がくすんで見える。白馬というには薄汚れているな、とシーグは思ったがやはり黙っておいた。
「メティスでは塔や湖や煙突を目印にすればいいのよ」
サフィリアはそう締めくくると、後ろを振り返って塔の入り口に杖を向けた。すると、塔の石壁が両側から迫ってきて閉じた。
「扉、じゃないのか？」
「壁のほうが頑丈でしょ？　それに勝手に入ってもらったら困るもの」
当然のことのように、サフィリアは言う。よく見てみると、塔の

何処にも窓も扉も無い。塔の周囲を取り巻くように、螺旋階段があるだけだ。

「ひょっとして、開けるやつによって部屋の中が変わったりするのか」

冗談半分の言葉にサフィリアが目を丸くする。

「なんだ、知っていたのね」

「……」

魔術師の建物はわけが分からず、とにかく油断ならない。ひょっとして階段にも仕掛けがあるかもしれない。シーグは恐る恐る階段に足を下ろした。

そんなシーグを追い越して、アイフェは三段飛ばしに階段を下りていった。踊るような足どりで物音一つ立てない。銀色の髪とローブの裾が軽やかになびいている。中ほどまで降りた後に、振り返ってシーグたちが来るのを待っている。

「そろそろ急がないと、遅刻してしまうわね」

サフィリアも一段飛ばしに階段を下りていった。取り残されたシーグはなんだか気恥ずかしくて仕方が無くなった。

階段をおりきったところで、急にアイフェが引き返して来る。そして、シーグの背中に飛びついた。

「どうしたんだ?」

聞いても何も答えない。更に小さくなって背中の後ろに隠れてしまっている。

「あ、先生」

「サフィリア先生だ!」

通りの向こう側から、元気な声が聞こえてきた。アイフェと同じ年頃の子ども達がこっちに向かって走ってくる。

2章－16　青空授業

合計で10人ほどの子ども達はお揃いの格好をしていた。灰色のローブに紺色のガウン。アイフェと同じように、一杯に膨れ上がったカバンを肩からさげている。だが、肌や髪や目の色は様々だ。交易都市ゆえにメティスには大陸中のあらゆる場所から人が集まるためである。

先頭を走っていた少年はサフィリア飛びついた。重いかばんが勢い余って体に当たったが、サフィリアは一瞬顔をしかめただけだ。その後も続々と子どもたちが集まってくるのを優しい笑顔で迎えている。

「こら、髪の毛を引っ張らないで！」

注意する声にも笑い声が混じっている。サフィリアは興奮する子どもたちに、もみくちゃにされていた。

「なんだ、もう先生になっていたのか……」

少し離れた場所を歩きながらシーグは一人ごちた。アイフェは背中に隠れながらサフィリアを盗み見している。

「構ってくれないから、すねているのか？」

アイフェはムッとして頬を膨らませたが、反論しないところをみると図星のようだ。

「止めなさいよ。先生が痛がっているでしょ」

しっかりした声で、一番年長に見える黒髪の女の子が注意した。その後は、女の子が中心になって、騒ぐ男の子に止めなさいと声をかける。この年代の常として、女の子の方が落ち着いているようだ。

サフィリアが乱れた服装と髪を手で直していると、黒髪の少女がカバンからブラシを取り出して差し出した。

「先生、使ってください」

「ありがとう、シンシア」

少女は笑顔でうなずくと、表情をいっぺんさせた。腰に手を当て、

髪を引っ張っていた少年を睨みつける。
小さい頃のサフィリアにそっくりだ、とシーグは思った。勝気な態度に、迷いの無い口調。綺麗に切りそろえられた長髪、服装には全く乱れが無い。違いといえば、髪と目が黒色なくらいだ。不思議な事に、子ども達の中で唯一紺色のガウンを着ていない。
「戦いがあったって聞いて、みんな心配していたんですよ」
再び笑顔になったシンシアが言うと、子ども達は真剣な表情でサフィリアをじっと見つめる。
「ありがとう。でも、この通りとても元気よ」
サフィリアも一人一人に目を合わせながら、ゆっくりと言った。
「だから、授業も宿題もそのままです」
それを聞いて、半数ほどの子どもが嫌な顔をした。
「ねえねえ、先生！　シーグってどんな人？」
「ワイバーンを真っ二つに切ったんだよね？」
「それにベクター導師よりも強いって、本当？」
交易都市で魔術都市となれば、情報の流れが速いのは当然だ。だが、幼い子ども達にまで噂話が届いている事にシーグは驚いた。
「シーグなら、後ろにいるわよ」
サフィリアの声に子ども達が一斉に振り向いた。１０人分の視線に真っ直ぐに見つめられて、シーグは何気なしにあごを引いて背筋を伸ばす。
「嘘だぁー」
少年の一人が、シーグを指差して言った。
「シーグっていう人は、山より巨大だって聞いたよ」
「馬鹿だな、それはたとえだよ。それでも、熊みたいにでかいって話だぜ」
「でも、二階の天井まで届く大剣を振り回すんでしょ？」
「私は拳でも岩を粉々に出来るって聞いたわ」
「こんなに痩せたのが、ワイバーンに勝てるはず無いよ」
英知の名を持つ都でも、話にとんでもない尾ひれがつくらしい。

子どものいう事だと自分に言い聞かせても、シーグは何だか腹がたってきた。
「みんな止めなさい。本当にその人がシーグです」
サフィリアがたしなめるように言っても、子ども達の不信は収まらないようだった。
「みんなの知っている騎士団は重装備で、巨大なランスを掲げて突撃します。動く壁となり、敵を一挙に押しつぶす戦法が得意なの。だから、騎士の条件も背丈と体格が第一条件に決められているの。でも、それはメティスが平原だからよ。場所によって、戦い方も装備も変化するわ」
「例えば、海軍がそうですよね。カトラス（半月刀）に革鎧ですから」
シンシアが手を挙げて、スラスラと答える。
「そう、揺れる船の上では軽装が理想的なのね。海に落ちたときに泳げる格好なのも重要なの。天空の水盤の場合は、地形が入り組んでいるわ。天井に届く大剣なら木に当たるし、鎧を着ていたら足を取られてしまうの」
路上で、しかも歩きながらの授業が始まっている。ただし、子ども達は真面目な表情で聞き入っていた。
「だったら、ガイスはもとから重装備じゃないか」
「やたらと飾り付けているしな」
「そのせいで負けたんじゃないか」
子ども達の軽口に全員が爆笑した。その後、笑い止んだ子ども達はシーグのそばによってくる。
「兄ちゃん、武器は何なんだ」
「魔術師と戦うのは恐くなかったの？」
「ガイスが子どもを丸呑みにするって本当？」
立て続けの質問によりも、背中でますます小さくなっているアイフェが心配だった。だが、わんさと寄ってくる子ども達から隠れ続けるのは無理だ。

「アイフェがいるぞ」
「あー、本当だ」
次々とシーグの背中に回りこむ子ども達。サフィリアとシンシアは、そろって心配そうな表情を浮かべている。

2章－17　ない事ない事

「みんな呼んでいるぞ」
前に出そうと背中を押しても、アイフェは耳を押さえてシーグの足にしがみついたままだった。
「先生たちと一緒に戦ったんだって？」
「アイフェって、ノコギリ刃の意味なんですって？」
「ベクター導師を最後に倒したって本当なのか？」
「みんな離れなさい、アイフェちゃんが恐がっているでしょ！」
シンシアが一喝すると、全員が一斉に口を閉ざして動きを止めた。そして真っ直ぐ歩いてくる少女の前に、自然と道を開いてゆく。どうやらこの少女は、子ども達の中で一目置かれているようだ。
「始めまして、私はシンシア・フェルナンディと申します」
「俺はシーグだ」
礼儀正しい態度に気圧されながらも名乗りを返す。すると、周囲が急にざわついた。「シージペリラス（命取りの座）の？」「家なしって本当なんだ」と、子ども達がひそひそと話し合っているのが聞こえてくる。名乗った時の反応は何処でも変わらない。そう考えていると、シーグはシンシアの名前の持つ意味に遅ればせながらに気づいた。
「フェルナンディ、だって？」
「ええ。サフィリア先生とは遠い親戚です。そしてメティオスマッシャーの一員、ライス・フェルナンディの妹です。腹違いではありますけど」
昨日の敵の妹。シーグは、反射的に警戒の視線で見下ろした。しかし少女は、正面から対峙して気後れした様子も無く、冷淡でよそよそしい声で続ける。
「天空の水盤での戦いは、色々な思惑が渦巻いてしましたね。レイザークのシージペリラス（命取りの座）に見者。七家のうちの六家

の直系、ジュサック家の当主……」
シンシアは意味ありげに言葉を切って、まずシーグを、次にサフィリアに見つめた。ただならぬ様子を感じて、子ども達は静まり返っている。
「ですが、フェルナンディの一族はあなたにも見者にも敵対するつもりはありません。それだけは覚えておいてください」
子ども達の大半は意味が分からず、ほうけた表情を浮かべている。しかし、サフィリアとごく一部の子ども達は厳しい顔つきで、シンシアの言葉を聞いていた。
これは、彼女一人の言葉ではない。一族の総意なのだ。シーグは今の言葉をもう一度頭の中で繰り返した。
まるでサフィリアが一族ではないかのように聞こえる。それに、敵対するつもりはないが協力もしないと解釈する事もできる。それに、フェルナンディの一族は、と強調したという事は――。
考え込んでいると、シンシアがスッと寄って来て耳元に口を寄せた。
「アイフェちゃんの事は、私に任せてください」
「は？」
急に変貌した態度にシーグは間の抜けた声を出した。
「みんな、昨日の闘いのことをアイフェちゃんに聞きたくてうずうずしています。だから、逃がすなら今のうちです」
「……なるほど」
「それから、昨晩はどうでしたか？」
シンシアは周囲に目配せをして、更に声を小さくする。
「何がだ？」
わざわざ耳打ちするとは、何か重要な事づてに違いない。シーグはシンシアの言葉に集中した。
「昨晩はずっとお姉さまと一つ屋根の下だったでしょ。何も無かったなんて言わせませんヨ？」
妙に尻上がりした口調で、シンシアはささやいた。

「な！」
「後で、正直に教えてくださいね。でないと、ある事ない事や、ない事ない事まで言いふらしちゃいますからネ！」
シンシアは口元を押さえながらウフっと艶のある声を出した。そして、アイフェを隠すようにして横に並んだ。
「シーグさんが、みんなに昨日の戦いの事を教えてくれるんだって」
シンシアの言葉に子ども達は顔を輝かせた。今までの静寂を打ち破り、ワッと声を上げてよってくる。アイフェがシーグの足に力いっぱい爪を立ててきた。
「すげえのと戦ったんだろ！」
男の子が興奮して聞いてくる。
「すげえのってなんだ？」
痛みで目の端に涙を浮かべながら、シーグは逆に聞いた。昨日の戦いは何もかもが凄まじかったので、心当たりがありすぎる。
「馬鹿だな。ワイバーンの事だろ、ワイバーン」
「死神って呼ばれてて、でっかい爪が生えているんだぞ」
「鉄の鎧だって真っ二つなんだって」
「そして、あの二階建ての建物と同じくらいに大きいの」
シンシアが指差した建物にみんなの視線が集中する。その瞬間にシンシアはアイフェの手を引いて走り出す。大通りの曲がり角から路地に入るとき、シーグに向かってウィンクをしてから姿を消した。

2章－18　巨大化、変身、光線

去ってゆく二人を見送って、シーグは一安心した。サフィリアもホッとした様子でシーグに目配せをしてくる。

しかし、アイフェがあれほど子ども達を恐れるとは思わなかった。戦いの最中でも、恐怖どころか動揺さえも微塵も感じさせなかったというのに。何か理由があるに違いないが……。

「それにな、鱗がめちゃくちゃ硬いんだぞ」

「騎士団の人が、何本も槍を折ったんだって」

子ども達は歩きながら、知っている事や自分の意見をかって放題に言っている。どうやら、聞くよりも知っている情報を自慢するほうに夢中になっているようだ。アイフェとシンシアもいなくなっている事にも気付いていない。だったら自分も姿をくらましてやろうか、とシーグが考えたその時。

「恐くなかった？」

「怪我はしなかったの？」

「恐ろしくないはずがない。それに怪我もした。先生に治療してもらったけどな」

子ども達は一度に振り返って、行く手を阻むように寄ってきた。

「ワイバーンって、吠えるんでしょ？」

「ねえねえ、どうやって倒したの？」

答える間もなく、立て続けに質問が飛んでくる。

「兄ちゃんも魔術師なのか？」

「魔術で巨大化して戦うのか？」

「ねえねえ、剣から光線を出せるの？」

子ども達の、特に男の子の奇抜な想像力にシーグは苦笑した。サフィリアは眉をひそめている。

「何であんたみたいな奴がワイバーンを真っ二つに出来たんだよ」

挑戦的な口調でシーグの前に立ちふさがる男の子がいた。身長で

はシーグに頭二つは及ばないし、にきび面で産毛も生え揃っていない。だが、がっしりとした筋肉質で体重ではシーグを軽く上回っている。純粋な力比べなら、すでにシーグには勝ち目はないだろう。生まれながらにして戦士の才能に恵まれていた体格なのは疑いない。

シンシアの時とは違い、子ども達は恐れるように遠ざかってゆく。最初にサフィリアの髪を引っ張っていたのも、いきなり嘘だと叫んだのも、確かこの少年だったはずだ。

「確かに、俺一人じゃどうにもできなかった。魔術の助けがあったからだ」

そういうと、少年は顎をツンと上げていやらしい笑みを浮かべた。人を見下す事になれた尊大な態度だ。

「それに、ベクター導師を倒したのはアイフェなんだろ？」

「ああ」

「で、最後は先生に張り倒されて気絶したんだよな」

少年は鼻で笑った。すると周囲にいる三人の子ども達が追随してゲラゲラと笑う。この年齢で取り巻きを従えているらしい。

「兄ちゃん。実は弱いんじゃないのか？」

さすがのシーグも本気で腹が立ってきた。そのとき、サフィリアが杖で地面を勢いよく突く。カァーンという乾いた音が響き渡る。子ども達全員が口を閉ざし、凍りついたように動きを止めた。完全に石化したのではないか、と疑うほどに静まり返る。

「ジュール。いい加減にしなさい」

サフィリアが静かに言うと、ジュールと取り巻き達は肩をすくめて勝手に先に歩き始めた。彼らが遠ざかるのを恐々と見送りながら、再び子ども達が寄ってきた。

「なあなあ、巨大化したのか？」

再びそう聞いてきたのは、最も背丈の小さな少年だった。シーグは首を横に振る。

「じゃあ、変身は？」

「それもない」

すると、少年はあからさまに残念そうな顔になった。
「いい加減にしなさい。巨大化に変身に、光線だなんて。私はそんな事を教えたつもりはありませんよ」
突然のサフィリアの厳しい言葉に子ども達は信と静まり返る。
「みんなは正しく魔術の特性を理解していないようです。だから、今日は魔術の実習の予定でしたが、通常の授業に変更します」
「ええーー」
子ども達は口をそろえて、不満の声を上げる。
「えー、じゃありません」
サフィリアは腰に手を当てて低い声色を出した。すると、子ども達は一斉に口を閉ざす。
「その代わりに、昨日はどうやって戦ったか詳しく教えてあげるから」
今度は一転して、歓声に包まれる。
「でも、授業中に今みたいな騒ぎになったら、テストにしますからね」
一瞬ピタリと黙り込んだ後に、「はーい」と子ども達が声をそろえて答えた。
「だから、先に教室で待っていなさい。そろそろ急がないと、遅刻するわよ」
子ども達が波を引くように走り去っていく。何人かは、シーグにはにかみながら手を振って微笑みかけた。全員が角を曲がっていくまで見送り、サフィリアシーグに向き直った。
「ごめんなさいね、さわがしい子達ばっかりで」
「しっかり先生やってるじゃないか」
サフィリアはうれしそうな笑顔を浮かべた。
「あなたこそ、ずいぶんと子ども達になつかれていたみたいよ」
「なめられていたの間違いじゃないか？」
言い返すと、サフィリアは言葉に詰まった。そして、口元を押さえて考え込む。

「で、でもみんなと打ち解けていたのは確かよ」
「あ……そ」
否定はしないんだな、と思いつつシーグは頭をかいた。

2章－19　歩く恥知らず

＊

シーグとサフィリアは湖に沿いの道を北へ向かっていた。対岸には、翼を広げた水鳥を連想させる白亜の王城がそびえ建っている。城が壮麗に見えるのは、城壁が低すぎるからだ。そして、湖にも近すぎる。あれでは湖からでも陸からも進入が可能だし、横に広い平城は守りに向かない。

町並みも城の造りも攻めてくれと言わんばかりの構造だ。ここまであからさまな無防備さに、シーグは呆れるのを通り越してむしろ興味がわいてきた。

メティスは英知の壁に守られているのだという。魔術師の住む神秘の都特有の、目には見えない守りが施されているに違いない。湖岸を見つめていると、背後からにぎやかな笑い声が聞こえて来た。

振り返ると、5人連れの少女がサフィリアに手を振っていた。サフィリアと同じ年頃で、赤や緑など、色とりどりのローブを着ている。シーグと目が合うと、はじけるような笑い声をあげる。そして、もう一度手を振ると、お互いに喋りあいながら角を曲がっていった。

「昔ね、一緒に勉強していた事があったのよ」

サフィリアは挙げた手を名残惜しそうに下ろしながらつぶやいた。見つめる先には巨大な塔が立っている。少女達はその塔の中に入っていった。

「あの塔はなんだ？」

三角屋根の細長い塔で、攻城用の投石器なら一撃で折れ飛びそうな構造。メティスの建物はどれも繊細すぎると、シーグは思った。

「魔術の実践ができる場所よ。今日は子ども達をつれてあそこに行く予定だったのよ」

「実践？　フィーリア（感応体）とやらがなければ魔術は使えない

んだろ？」
「あの塔の中は特別なの。感応力のある人間なら、初歩的な魔術なら使えるわ。みんな、自分の系統を見つけたのね」
風火地水が属性で、ディテクト（探知）やイリュージョン（幻覚）が系統だったな、とシーグは記憶を整理した。
「なんで分かるんだ？」
「赤はブラスト（噴出）、緑はプロテクション（防護）。学ぶ系統によって、ローブの色が違うから」
「じゃあ、あんたの場合は何の色なのだ？」
「水色は系統じゃないの。フィーリアを手に入れて、複数の系統を使えるようになると属性の色を身につけるわ。私の場合は水の属性ね。子ども達が灰色のローブと紺色のガウンだったのは、魔術師の初等の段階で、系統も決まっていないから」
「服装と色でその人が何者か分かるわけか。騎士の鎧、王冠や王勺と同じだな」
「そうよ。できる事が多くなるほど、色を混ぜていく事もあるわね。だから、基本的に上の段階に行くほど色が薄くなっていくの。だから、白ローブが一番上になるわ」
「色を混ぜると、黒くなるんじゃないのか？」
「魔術師が司るのは、光の色だから。光は混ぜるほど白くなるのよ」
シーグが首をかしげていると、サフィリアは目を泳がせてしばらく考え込んだ。
「説明が難しいから、天空の水盤で説明するわ。あそこなら、光を操るのは簡単だから。ガウンのほかにも、帽子やマント。指輪やブレスレットなどの装飾品も地位を現すものなの。私の腕章は教員、銀糸の刺繍は封士を持つ魔術師の意味があるわ。だから、湖の東側で不用意に装飾品を着けるのは侮辱になることもあるから、気をつけてね」
シーグは、周囲を見回して道を行くローブ姿の人々を確認した。
確かに年齢が上に行くほどローブの色は薄く、装飾品は目立つもの

になっている。服選びにいちいち難儀しそうだな、とシーグはうんざりした。
「武器や鎧は問題ないのか？」
「ロッド（棒勺）やワンド（杖）と見間違えるようなら問題ね。ナイフや長剣なら大丈夫よ。詳しくは鍛冶屋で聞くといいわ」
サフィリアは、説明しながら人差し指を立ててクルクルとまわしている。
「ってことはガイスの悪趣味な格好はどうなっているんだ？」
シーグの問いにサフィリアは、神経質に指の動きを止めた。
「存在そのものが侮辱なの。歩く恥知らずって事よ！」
「なるほどね」
ガイスのゴテゴテしい装飾に、サフィリアが何度も文句を言っていた理由がようやく分かった。
「そういや、シンシアって子はガウンを着ていなかったな」
「あの子はね、特別なの。魔術師としても、フェルナンディの一族としても、ね」
サフィリアは喜んでいるのか、悩んでいるのか分からない複雑な表情を浮かべた。
「だけど、まだ12歳かそこらじゃないか」
「魔術師を年齢で判断してはいけないわ。あの子はね――」
そこで、サフィリアは、慌てて自分の口を手のひらで押さえた。
「魔術師の個人の情報をむやみに明かすわけにはいきませんから。弟子となるかもしれない子の事はなおさらです」
サフィリアは両手を組んで、眉をへの字にしている。
「へえ、あんたの弟子になるのか」
「あ！」
シーグが独白するとサフィリアは目をまん丸に見開き、今度は両手で口を押さえた。

2章ー20　成敗ーー

「い、今のは忘れてください！」
サフィリアはシーグの首元を掴んで叫ぶ。突然のことに、周囲のローブ姿の人々が何事かと振り返った。
必死の様子で、手に力を込めるサフィリア。シーグは詰め襟の服を着ていたために、ヒモで絡められたように首筋が、いや首の血管が締まった。一瞬してシーグは目の前が真っ暗になる。
「し……ぬ」
シーグが息も絶え絶えに言うと、サフィリアは慌てて両手を離した。平衡感覚が無茶苦茶になっていて、シーグは膝をついた。ゴツンと音が鳴って額が痛む。壁にぶつけたようだ。
「ご、ごめんなさい」
胸元を押さえて咳き込んでいると、今度は大あわてでシーグの襟元のボタンをはずし始める。
「な、何？」
「まずは、呼吸の確保。それから――」
「大丈夫、平気だから、落ち着け！　おぼれたわけじゃない。意識もある！」
叫びながら、サフィリアの手を引き剥がす。大声を出したので、シーグは屈みこんで呼吸を整える。
周囲の人たちは何事かと、遠巻きに見ている。歩いているのは一組の老夫婦だけだ。
「あらまあ。若い人はいいですわねぇーー。お爺さん」
「ワシらの若い頃のようじゃのぉー」
「いやぁですわぁ。お爺さんたら」
二人で声を合わせてフォーホッホッホと笑い、寄り添うようにして、とぼとぼと歩きながら去っていった。その頃になって、ようやく道行く人々は時間が動き出したかのように歩き始めた。

呼吸が落ち着き、霞んでいた視野が元に戻る。サフィリアはシーグの背中をさすってくれていた。

完全な不意打ちとだったとはいえ、女性の腕力で意識を失いそうになった。情けなくなってシーグがため息をつくと、サフィリアは手を止めて肩を落とす。

「ごめんなさい……」

消え入りそうな声。膝の間に両手を挟み、焦燥感を全身にまとってうつむいている。

「そんなに、落ち込む事もないだろう」

「だけど、昨日からあなたにひどい事ばかりしているわ」

出会いがしらに蹴りが飛んできて、最後には平手打ちで気絶。助けに来たというのに、確かにひどい扱いかもしれない。ふと、そう考えているとサフィリアと目が合った。

「いや、気にする事なんて何もないぞ」

シーグは慌てて否定したが、サフィリアは目を伏せてしまった。どうしたものかと迷っていると、背後で地面を蹴る音がした。

「おりゃー」

続いて緊張感の無い掛け声。振り返ると、アイフェが満面の笑顔で飛び蹴りを放ってきた。あわてて左手で受け止めたが、アイフェはシーグの腕を蹴って飛び上がり、空中で一回転すると今度は肘を構えながら落ちてくる。シーグは半歩下がってかわしながら、アイフェの体を両手で受け止める。しかし、体勢を大きく崩して壁に後頭部を思い切りぶつけてしまった。目の中で火花が散る。

「な、何を……？」

頭を抑えて聞くと、アイフェは「成敗ー」と言いながらキャハハーと、笑い声を上げている。通りに角を曲がって、シンシアが大またで近寄ってきた。アイフェを地面に降り立たせていると、シンシアがシーグのすねを思い切り蹴り上げた。

そして、シンシアは慌てるサフィリアの前に立ちふさがった。そして、首に下げたペンダント――銀の台座に、大玉のトパーズ（黄

玉）がはめられた指輪にプラチナ（白金）の鎖を通してある――を手甲のように巻きつけて拳を突き出す。

「先生をいじめると、許しませんよ」

シンシアが声高に叫ぶと、再び道行く人が注目した。アイフェも「許さなーい」と、叫んで拳を頭上に振り上げている。

俺が一体何をした？　シーグは痛みにうずくまりながら理不尽な思いにとらわれていた。

「2人とも止めなさい」

サフィリアが慌てて、アイフェとシンシアを止める。

「だけど、先生は今にも泣きそうでした」

「違うの、シンシア。悪いのは私の方なんだから。シーグ、ごめんなさい」

サフィリアは、ハンカチを取り出してシーグの額を押さえた。

「頭から血は出ていないわ。足は大丈夫？」

「平気だ。なんともないから」

この程度で大げさで騒がれるのが情けない。原因を考えればなおの事だ。シーグは立ち上がると、サフィリアから離れた。

「シンシア、アイフェ。シーグに謝りなさい！」

きつい口調で言われて、ようやくアイフェは笑い声を立てるのを止めた。

「ごめんなさい」

言葉とは裏腹に、シンシアは不満の表情を崩さないまま言った。

「ごめんなさい」

アイフェも、ちょこんと頭を下げて謝った。

「いや、もう気にしていないから」

昨日、今日と思い出したくない、忘れたい事ばかりが加速度的に増えている。シーグは頭を抱えたくなった。

「なぜ、こんな事をしたの？」

「シーグさんが先生を泣かしていると思ったんです。だから、アイフェに止めるように頼みました。一体何があったんです？」

逆に聞かれると、サフィリアは困った表情を浮かべてシーグを横目で見る。

「私が悪いの。それだけよ」

サフィリアの沈んだ声。シンシアは納得していない様子で、突き刺さるような視線でシーグを見ていた。だが、サフィリアが正面を向くと、優しげな表情に改めた。

表情や態度がころころ入れ替わるのは、フェルナンディの一族の特徴なのだろうか？　それなら、むしろ司るのはディテクト（探知）ではなくて、イリュージョン（幻覚）のような気がする。

とにかくアイフェとシンシアが2人でいるときには、特に注意をしよう。シーグはそう思ったのだった。

2章ー21　人見知り

「教室に行かなくて大丈夫なの？」
「はい、先生。少し急げば十分に間に合います」
サフィリアの問いに、シンシアは優等生の見本のような返事をした。
「できたら、一緒にアイフェちゃんを送って行きたいのですけど。構いませんか？」
「ええ、ぜひお願いしたいわ」
シンシアとアイフェはお互いに手を繋いで、シーグの十歩ほど前を歩きだした。
「2人は仲がいいんだな」
「ええ、あの子にはいつも助けられているの。アイフェも最初から怖がったりしなかったわ」
「人によって、そんなに態度が違うのか？」
「ええ。普通の人見知りだと、知らない人相手には誰にも怖がるはずなんだけどね。年齢とか性別とか、体格とかも関係するはずなんだけど、それもよく分からないの」
サフィリアは腕を組んで首をひねっている。
「私は慣れだと思っているの。だから、メティスは怖いところじゃないって何度もいい聞かせているわ。その上で、実際に歩かせて安全な場所だって理解するまで続けるつもりよ。そうしたら、いつかきっと慣れると思うから」
「慣れる、ねぇ……」
サフィリアの言っている事は、理屈に合っているとシーグも思う。だが、その一方で何か頭の片隅に引っかかるものがあるのも事実だった。
「昨日は、火の玉やらワイバーンやらが飛び交う中で平然としていたじゃないか」

「そこが不思議なの。昨日はガイス達が現れたでしょ。合計7人もいたのに怖がらなかったわ」
「俺を含めたら8人だろ。それに、俺の偵察をする前はガイス達の後をつけていたみたいだしな。人見知りをする子どもが、自分から好んで人の後を付け回すかな」
「確かに……そうね」
サフィリアは首筋に絡む金髪を指に巻きつけている。
「あんたが頼んだ、って事はないか？」
「まさか、そんな危険な事をさせないわ！」
言い終えてから、サフィリアは軽く頭を振った。
「いいえ、昨日はずいぶんと危ない事をさせてしまったわね。でも、本当はそんなことをさせたくないの」
「なるほどね」
アイフェは並外れた才能をいくつも持っている。例え何に興味を持ったとしても、望む仕事に就けるに違いない。
だが、戦いの技術をアイフェに授けるために死んでいった『みんな』の事を忘れるのは難しそうだ。『みんな』を手にかけたナイフを常に手放さないのが、その心の内をあらわしているように思う。
平穏で平凡な日常を送るようにと、サフィリアは願っている。だが、そんな生活に不向きな人間もまた多く存在する。サフィリア自身も理想を追い求め、ひた向きに突っ走る性格だ。そして、恵まれた才能と向上心を持つ子どもを、周囲が放っておくことは無い。
「どうしたの？」
「なんでもない」
適当に答えると、サフィリアが疑いのまなざしを向けてくる。シーグは周囲を見渡して、別の話題を探した。
「ほら、見てみろよ。アイフェがキチンと挨拶しているぞ」
すれ違う人にシンシアが挨拶すると、アイフェもそれにつられて挨拶している。礼儀正しい2人の少女を見て、誰もが親しげな表情を浮かべた。後ろを行くシーグとサフィリアにもにこやかな笑顔を

向ける。
「そうね、人通りの少ない場所なら平気みたいね」
「たくさんの人が苦手なのか……な？」
いろいろな事を考えながら歩いていると、シーグは足元の石を蹴飛ばしてしまった。硬貨よりも小さな石ころだったが、アイフェが敏感に反応して振り返る。石ころが道の端に当たって動きを止めるのを確認すると、アイフェは再び前を向いた。
北へ行くほど道は広く、塔は高くなってゆく。建物も細やかな彫刻の施された格調の高いものに変わっていった。中央に噴水がある広場。脇に設けられた大理石のベンチでは、老若男女様々な人々が本を広げたり、議論を交わしたりしている。薄い色のついたローブを身にまとっている者が一挙に増えたのは、この区画にいるのが高い階級に属する魔術師だからに違いない。
この景色を見ているだけで、何やら厳粛な気持ちになる。学びの園と呼ぶにふさわしい場所だった。
ここでは、明らかにシーグ達は浮いていた。２人の女の子に、ローブを着ていない少年。そして、サフィリアと同じ薄い色のローブを着ているのは、３０を超えた壮年の人ばかりだ。
サフィリアはアゴを引いて背筋が伸びたように見えるし、シンシアは動きがぎこちなくてキョロキョロとしている。シーグもいつの間にか、襟元をいじっている事に気づいた。人々の好機と不信の視線が集中する中で、アイフェだけが軽やかな足取りで歩いている。
これは、明らかにただの人見知りではない。シーグは考えをめぐらせる。昨日からのアイフェの行動を思い返していて、閃くものがあった。
シーグはベルトのナイフに手を伸ばす。
「どうしたの？」
サフィリアは驚いてシーグの顔と手元を見比べている。
「いいから、黙って見てろよ」
シーグは抜き打ちの勢いでナイフをベルトから抜き放つ。その瞬

間、アイフェは神速の反応を見せた。振り返り、懐のナイフを抜き、１０歩の距離を一瞬で詰め、心臓目掛けて突き出す。それらの動作が瞬きするほどの一瞬に行われたのだ。

シーグはアイフェの肩を押さえて、ナイフを寸前で止めていた。攻撃も、場所も予測していたにも関わらず、シーグは背中に冷や汗が流れていた。シンシアは呆然としており、サフィリアは青ざめている。アイフェ自身が、何が起こったか一番わかっていないようだ。シーグを見上げて目をぱちくりさせていた。

2章ー22　恐怖の正体

「い、一体何を！」
戸惑いと怒りが入り混じった声で、サフィリアが怒鳴る。シーグはナイフをしまった。
「アイフェは戦闘中の緊張感のままで町を歩いている」
「何が言いたいのよ」
今度は咎める口調でシーグを睨みつける。だが、サフィリアを無視してアイフェに問いかけた。
「町は怖いか？」
「そんな事ないよ。人はみんな優しいし、武器なんていらないんだよ。メティスはね、平和の国で法律がきっちりしているから」
アイフェは、すらすらと答えた。ただし、視線はサフィリアとシンシアの間を行ったりきたりする。明らかに他人の受け売りだ。シーグは膝をついてアイフェを正面から見つめた。
「自分自身ではどう思っているんだ」
シーグの問いに対し、苦しそうに言葉を詰まらせる。
「怖いのか？」
「違うの。でもね……」
「でも？」
シーグが促すとアイフェはナイフを胸に抱くように小さくなった。そして、怯える視線でサフィリアを見る。サフィリアの方でも、そんな風に見られるのが衝撃的だったのか、唇を引き結んで言葉を失ってしまった。すると、今度はアイフェのほうがそわそわとし始める。
これでは、らちが明かないと判断してシーグはアイフェの肩を掴んで、自分の方に向き直らせた。
「ちなみに、俺はさっきのアイフェが怖かったぞ。あんまり、踏み込みが鋭かったからな。攻撃がくるってわかっていたけど、油断し

たらやられてた」
戦いの技術を褒められて、アイフェは笑顔になった。
「それに、サフィリアに睨みつけられるのも怖いぞ」
続いてシーグはこっそりと耳打ちをする。
「なんていうかな、体が凍りつきそうになるというのか、心臓が止まりそうになるのかな？」
アイフェの瞳に同意の色が浮かんだ。シーグは小さく笑ってから、声の大きさを元に戻す。
「どんなに親しい人だって、好きな場所だって怖い時は怖いんだ。だから、別に隠さなくていい」
アイフェは上目づかいでもう一度サフィリアに目配せをする。
「私も知りたいわ」
促されてからもしばらく迷い、アイフェはようやく顔を上げた。
「……怖い、よ」
「でも、それは――」
何かをいいかけたサフィリアをシーグは手で制した。
「あそこにいる人は怖いか？　噴水の近くで本を読んでいる人だ」
アイフェは首を横に振る。
「じゃあ、三人組で話し合っている人達は？　今、こっちに向かって歩いてくる人は？」
薄紫のローブをまとった壮年の男がゆっくりと近づいてきた。すぐ近くを通り過ぎるとき、アイフェと目が合った。薄紫のローブの人は不思議そうな表情を浮かべたまま去っていく。
「木の根元で居眠りをしている人、向こう側で楽器を弾いている人、その先で絵を書いている人はどうだ？」
広場にいる人々の事を順番に聞いていくと、アイフェはずっと首を横に振り続けている。
「じゃあ、さっき会った子ども達は？」
アイフェは申し訳なさそうに小さくうなずいた。
「全員が怖いわけじゃないのね」

サフィリアは口元を押さえて考え込んでいたが、「あっ」と小さく叫んだ。
「ひょっとして、音が怖いの？」
サフィリアの言葉にシーグはうなずいた。
「アイフェは耳が良すぎる。だから、俺達に聞こえない雑音が耳に入る。それも、十歩以内。一挙に間合いを詰めて、襲いかかれる距離になると、気になって仕方がないんだ」
「どうして気づいたの？」
「家の中の床も音がならないように改造している。俺が小石を蹴り飛ばしたら、最初から最後まで石の動きを目で追っていた。それに、子ども達に囲まれた時に一番取り乱したからな」
サフィリアは深刻な表情で髪を引っ張っている。
「それなら、どうしてシーグさんと私は平気なんですか？」
今まで黙っていたシンシアが口を開いた。
「俺が最初に会ったときには、ガイスから隠れるために足音も気配も忍ばせていた。シンシアはゆっくりと歩くし、騒いだりもしない。だから、アイフェも安心できるんだ」
話し合い納得しあっている中で、当の本人のアイフェだけが不思議そうに3人を順番に見回していた。
「もしもそうなら、子ども達の中に連れて行くのはアイフェにとってつらい事だったのね」
サフィリアは、目元を押さえてため息のように独白した。
「そうだな、もっと静かな環境で少しずつ人を増やしていくのがいいと思う」
「じゃあ、勉強会なんてどうでしょうか？」
シンシアが明るい声で提案した。
「私の友人を数人招いて、静かな場所で集まるんです。もちろん、騒がしい男子は連れてきません。それなら、アイフェちゃんも平気だと思います」
「そうね、いいアイデアだわ。お願いできるかしら？」

「もちろんです」
シンシアは胸の前で両手を打ち鳴らしてうなずいた。

2章ー23　ダメだしシンシア

サフィリアが手を伸ばして頭をなでると、アイフェはうれしそうに微笑んだ。
「ごめんね」
「何が？」
謝罪の言葉にもアイフェは首を傾げるだけだった。
「アイフェの事、気づいてあげられなかったわ。今度から、もっと静かな場所に行きましょう。どこか行きたい場所はある？」
「市場！」
アイフェが即答する。サフィリアは一瞬考え込んだ。
「夕方になると静かね。それに人通りの少なくなるわ」
「それに、売れ残りの野菜とか果物が安くなるんだよ」
人差し指を立てて力説するアイフェ。サフィリアにもようやく笑顔が戻った。
「じゃあ、パンと卵を買いましょう」
「リンゴ！」
「あとは、ヨーグルトね。だけどそんなにたくさん。重すぎて持ちきれないわ」
「シーグも一緒に来てくれるんだって」
サフィリアは驚きの表情を浮かべ、次にいたらずらっぽく肩をすくめた。
「だったら、重いものをたくさん買いましょうか」
「じゃあ、袋一杯の小麦粉、新しい水ダル、洗濯おけ！」
「そんなに持てないぞ」
シーグの言う事を無視して、サフィリアは微笑みながら先を続ける。
「タンスに新しい部屋なんていうのもいいかもね」
「……部屋？」

困惑に顔をこわばらせていると、サフィリアはクスクスと笑った。
「冗談よ。それに、大きすぎたり、重すぎるものは魔術で小さくするから平気」
部屋が重過ぎるものにはいるのか。そもそも買うこと自体が冗談なのか。魔術師の会話がどこまで本気なのか、シーグには判断も出来ない。
「蜂蜜がほしいよ」
「ミルクも必要ね」
サフィリアとアイフェは歩きながら、代わる代わる必要なものを挙げていく。後をついていこうとすると、シンシアがシーグの腕を両腕で抱えた。
「ちょっといいですか？」
「ああ」
「よかった。じゃあ、少し後ろへいらしてください」
歩みを止めて１０歩ほど離れたとき、シンシアはにっこり微笑みかけた。
「あなたが切れ者であるのは認めます。ですが、デリカシーとは無縁のようですね」
「は？」
にこやかな表情で優しげな口調のまま言う。だから、シーグは言葉の意味に気づくのに遅れた。
「２人きりのときにも、お姉さまのような貴婦人をエスコートするにはふさわしくありませんでした。あなたは湖の方ばかり見ていましたし、会話の内容も魔術の事ばかり。若い男女のものとは思えませんね」
口調も態度も変えないままで、情け容赦なく酷評する。どうやら、この少女はとんでもない猫かぶりのようだ。
「どこで聞いていたんだ？」
「すぐに後ろです」
「それなら、俺が気づかないはず……」

言いかけてから、シーグはすぐに気づいた。
「アイフェがつけていたのか」
「耳がいいのはさっきあなたが言ったとおり。会話の内容は筒抜けでした。でも、最後にはお姉さまを驚かせたようなので、成敗しに現れたという次第です」
シンシアは軽く舌打ちして続ける。。
「あなたがそんな様子では、湖は真っ白な深い霧に覆われていたでしょうね」
「何で知っているんだ？」
「お姉さまが大変な苦悩の中にいるときにはそうなるんです」
「だけど、昨日の戦いには勝ったじゃないか」
「だからこそ厄介なんです。その場の事しか考えていないあなたと一緒にしないでくださいネ」
尻上がりの口調で、シンシアは詠うように辛らつな事を言った。
ただし、目は笑っていない。
「一緒にいたのに気づかなかったんですか。お姉さまの事だから毅然としていたけど、どこか情緒不安定なところがあったでしょう？」
「そういえば、朝から泣いたり笑ったり。急に怒り出したりしていたな」
「……あなたは底なしの鈍感のようですわね」
シンシアはため息交じりにつぶやいて、シーグを睨みつけた。
「とにかく、これ以上お姉さまの悩み事を増やさないでください。アイフェちゃんのことも、新しい発見があったのは認めますが、だけど、今日する必要も、ここでやる必要も無かったでは？　往来でいきなりナイフを抜くなんて。端から見るとただの、ヘ、ン、タ、イ、ですよ」
「うぐ……」
ひるんだシーグ。だが、シンシアは更に追撃を加えた。
「それにナイフを止めるためにいたいけな少女の肩をわしづかみにして、いきなり耳元で囁いたりする。ガイスでもそこまではしませ

んでした。□×○△趣味の変質者に見間違えてしまいそうですわね」
二日続けて、それも示し合わせたようなひどい言葉に、シーグは胸に杭でも打ち込まれたような痛みが走った。シンシアの勝ち誇ったような表情に、シーグは考えるより先に口が開く。
「あんたが化け猫の類だっていうのがよく分かった。優等生に見せかけて、ワイバーンよりも切れる爪を隠し持っているわけだ」
「あーら。あなたこそ、この程度で我を忘れるほど安っぽい男ではないようですわね。もっとも、４才も年下の女の子をあしらえない程度の紳士のようですけど」
シンシアも嫌味に対して嫌味で切り返してくる。
「俺は魔術師を年齢で判断しないことに決めたんだ」
「つまり、私を一人前の淑女と認めてくださるわけですか？」
シンシアはクスクスと笑った。
「淑女の条件は、つつしみや気品だったっけか。猫かぶりと舌先が百人前のあんたなら、うまくやれそうじゃないか」
「褒め言葉としていただきます。メティスの宮廷は、魑魅魍魎の住み着く伏魔殿ですもの」
「あんたの礼節は盾、言葉は牙。舌に毒を塗り、陰謀の巣を編んで獲物を待つわけか。まるであんたは……」
黒い髪と瞳にかけて、黒蜘蛛と言いそうになったのを思わず飲み込んだ。相手がわずか１２歳、それも少女なのだ。
言葉に詰まっていると、シンシアがうつむいて肩を震わせている。シーグの袖に水滴がポトリと落ちる。
「す、すまない。言いすぎた」
「何がですか？」
シンシアは小さなガラス瓶を目元に当てたまま顔を上げた。そして、妖しげな微笑を浮かべて手に持ったガラス瓶を横に振る。中に入った液体が日の光を反射して輝いた。
「戦いが得意なだけの朴念仁かと思っていましたが、なかなかに言葉の運びが巧みですね。最後にどんな言葉を飲み込んだのか気にな

りますけど」
「……」
「口げんかでは女に勝てませんよ。更に言うなら一度喧嘩を吹っかけて、平穏無事に負けられるとは思わない事ですネ」
シンシアはそう言い捨てると、飛び跳ねるような足取りでアイフェとサフィリアのそばに走っていった。
「伏魔殿……か」
シーグは重いため息と共に、自分の髪の毛をクシャリとかき混ぜた。

2章－24　水晶の魔女

（ガイス一人を殺したぐらいでは納まらないわ。私が置かれている状況はそれくらいひどいって事よ）

昨日戦いの最中、サフィリアがそう言っていた。他にも、七家の人間を殺せば七家が黙っていない、魔術師の戦いは首の絞めあいで逃げ場はない、とも。

言葉の意味を考えていくと、メティスにおいてサフィリアの立場がよくないのは分かる。離れて歩いて改めて分かったことだが、道行く人々がサフィリアに向ける視線は好意的ではない。サフィリアが通りすぎると睨みつけるもの、一塊になってこそこそと何かを話し始める者が必ずいる。

見者であるサフィリアやシージペリラス（命取りの座）の自分に対してだけなら分かる。だが、シンシアにもアイフェにも様々な思惑のこもった視線が向けられている。

アイフェはサフィリアと一緒に住んでいて、シンシアは弟子になるかもしれないという。更にシンシアは一族の代表者であるかのような発言までしていた。その一方で、サフィリアはフェルナンディとは切り離されているようだ。つまり、シンシアを弟子にするという事は、シンシアも一族から離反させるという意味になる。そう考えれば、サフィリアが外聞を恐れて慌てたのも納得がいく。

だいたい、ガイスやベクターが天空の水盤に攻めてきた理由もはっきりと分からない。それに、アイフェは一体何者なのだろうか？

何が原因で暗殺者の中で育ち、サフィリアに引き取られることになったのか。

サフィリアは何でもかんでも丁寧に説明してくれるというのに、この４年間にあった事を何も話してくれない。例外はベクターのことだけだ。

いらつく思いにとらわれていると、突然アイフェが振り返ってシ

ーグに笑いかけた。いつもの無邪気な笑顔とは違う。唇を片方だけ歪める妖艶な微笑。そして、青色の目がゆっくりと細められ、唇がゆっくりと開く。

「知りたい事は、私が教えて差し上げますよ」

突然耳元で囁く声。背中の古傷に冷たいものが押し当てられた。シーグは考えるより先に手刀を背後に叩きつける。しかし、手ごたえはなかった。しかし、5歩ほど離れた場所で細身の少女が妖しく微笑んでいる。

「え？」

シーグは思わず驚きの声をもらした。少女があまりにもアイフェにそっくりだったからだ。サフィリアとシンシアがハッと表情を引き締め、アイフェを隠すように立ちふさがった。

背筋の古傷に氷の刃をつきたてられたように痛みだす。マードックに刺されたときの記憶がよみがえり、体が熱くなる。シーグの敵意むき出し視線を、少女はそよ風のように受け流していた。

銀色の髪も白い肌も青色の瞳も、アイフェと違って透き通るような印象があった。付け加えるならば存在感さえも。やけに赤い唇が、雪の上の血の様に映える。純白のローブ。胸には水滴を意匠化した紋章が銀糸で縫いこまれている。メティスの中で重要な地位にある人間のようだ。

「キャァアー」

周囲に巻き起こる悲鳴、続いて人々が駆け寄ってくる。

「アイシャ様！」

「この曲者を取り押さえろ」

色とりどりのローブをまとった男女が、シーグに殺到してきた。このままはサフィリアたちを巻き込んでしまう。シーグは、両手を挙げて無抵抗の意志を見せた。だが、そんな事はお構いなしに怒涛の波のように迫ってくる人々は増える一方だ。

「アイシャ様、下がってください！」

十歩まで近づいて来た者は、杖や指輪をはめた手をシーグに向け

た。
「静まりなさい」
少女の声は決して大きくなかった。しかし、水晶を打ち鳴らしたように、群集の中でもよく響く。３０歩以上離れている人々も、ピタリと動きを止めた。
「ですが、アイシャ様」
「この不埒者は――」
「黙りなさい」
鈴を鳴らしたような澄んだ声に、人々は一瞬で押し黙る。完全に周囲を取り囲まれながら、物音一つしない異様な状況。誰かが唾を飲み込む物音がやけに大きく聞こえた。だが、アイシャは重苦しい沈黙など全く気にすることなくシーグに歩み寄ってきた。
「私はアイシャ・ディスペリア。イリュージョン（幻覚）を司る一族の長です」
姓がサムハインではない。七家の長にしては若すぎる。メティオスマッシャーの一人にも彼女とよく似た少年がいた。様々な疑問がシーグの脳裏に沸き起こる。横目で後ろを見ると、サフィリアもシンシアも一様に緊張した表情を浮かべていた。
シーグは油断なくアイシャを観察した。相変わらず全く物音を立てずに歩く。まぶたを閉じれば、目の前に誰かがいるなど思わないだろう。まるで、彼女自身が幻覚のようだ。
「俺は――」
「シーグ。レイザークのシージペリラスですね」
こちらの言葉を先取りして、アイシャは小首をかしげて微笑んだ。頬に触れるだけのささやかな風なのに、アイシャの髪が大きくなびく。周囲の敵意は爆発しそうなほどに膨れ上がる一方だ。とにかく、この場を収拾すべきだとシーグは思った。
「ご無礼――」
片足を引いて頭を垂れた瞬間に、肩に手が乗せられた。
「そんなに、かしこまらないでください」

背筋を流れる冷や汗に、体中の熱が奪われてゆくのを感じた。いつ間合いを詰められたのか、まるで分からなかったからだ。

「私はあなたに直接会いたいと思っていたのです」

アイシャは、シーグの手を取って立ち上がらせる。サファイアを思わせる深い青色の瞳から、シーグは目を離せなくなった。

「ずっと……ずっと、思っていたのですよ」

耳に心地の良い、詠うような声。首筋に触れる手は絹のような感触で、雪解け水のように冷たい。春の花畑を思わせるようないい香りがする。全身の力が抜けていくような感触に背筋の痛みも溶けるように消えていった。

そして、アイシャの手が背中に回される。頭がぼんやりとしていたシーグは、彼女の意図に気づくのが遅れた。アイシャは目を閉じて、スッと唇を寄せてきたのだ。

唇の端に触れる柔らかい感触と、周囲の空気が凍りついたように緊張するのをシーグは同時に感じた。

2章－24　水晶の魔女（後書き）

この話で、更にシーグのヘタレっぷりが加速したでしょうか？
だけど、男の人生は過去の汚名を返上するためにあると、作者は思っています。これからのシーグ君の活躍と、ヘタレ返上をご期待ください（笑）。

2章―25　前哨戦

シーグはアイシャを勢いよく振りほどいて後ずさった。アイシャがわずかによろめくだけで、周囲のとりまく人々が過敏に感応する。
「お止めなさい」
凛とした声に、周囲のざわめきはピタリと止んだ。
「唇からは外れてしまいました。残念ですわ」
「一体何を――」
「キスですわ」
考えているんだ？　と、問う前にアイシャは言った。その後唇を押さえて、さびしそうにうつむいた。目の端には、うっすらと涙まで浮かべている。
「そんなにお嫌でしたか？」
消え入りそうなはかない声なのに、やけによく聞こえる。周囲からの圧力を伴った敵意に、突き刺さるような殺意も混じりだした。
彼女の一喜一憂に周囲の人々が、特に男達の感情が振り回されている。シーグは軽く舌打ちした。
「……ったく。これだから、騎士の国っていうのは――」
「救いようがありませんわね」
アイシャは人事のように涼しげに言った。目じりに浮かんだ涙を拭いながら、頬を押さえる。はた目にはメソメソと泣いているようだが、シーグの場所からは口元が笑っているのが見えた。
「すばらしいわ。この混乱の中でも心には曇りがなくて、澄み切っているのね」
「……」
押し黙ったシーグにはお構いなしに、アイシャは勝手に話を進めている。
「いえ、だからこそ冷静になれるのでしょうか？　困難の中でこそ自分を失わないのね。本当にベクターにそっくり」

またその名前か。シーグは奥歯をかみ締めた。
「あら、心が揺れたわ。そんなに、ベクターの事はお嫌い？」
「……」
底なしの湖を連想させる青色の瞳が、真っ直ぐとシーグの目を射抜く。
「嫌悪とは違うわね。羨望？　期待？　いいえ、これはむしろ――」
「止めろ！」
「……酷いですわ」
シーグが叫ぶとアイシャは両手で顔を押さえて大げさによろめいた。芝居がかった仕草にシーグはうんざりした。
とその時、横合いから何かが飛んできた。身をひねって受け止めると、それは漆黒に染められた皮手袋だった。
人垣が自然と左右に分かれて、そこから一人の青年が進み出てきた。短く刈った髪に精悍な顔つき。筋肉質の鍛えられた肉体は紛れもない戦士のものだ。そして、堂々とした態度と、人を見下すような視線から貴族だとシーグは判断した。戦士にして貴族、それはメティスにおいては騎士という称号で呼ばれる。そして、騎士が手袋を投げるのは決闘を申し込む時である。
「わが名はガリウス・グラムファーレ。メティスのリーガル・バックラー卿だ。先ほどからの貴様の態度には我慢がならん。アイシャ様への侮辱に対し、私が報復を下す」
ガリウスはよろめいたアイシャを支え、大げさに宣言した。周囲の人々の歓声が熱狂に沸く。決闘どころか、死闘に発展しそうな雰囲気だ。
「侮辱だって？」
いきなり背後に忍び寄って、勝手にキスをしてきて、一方的に話を進める。どちらが無礼なのか、分かりきった事だ。しかし、歓声を上げる人々はそうは思わないらしい。薄笑いを浮かべるアイシャ自身も、内心では馬鹿にしているに違いない。
演劇じみた馬鹿らしい状況に、シーグはため息をついて頭をかい

た。と、横合いから、サフィリアが皮手袋を奪い取った。
「ガリウス卿。この決闘は成立しません。彼は騎士ではありませんよ」
「サフィリア嬢、この男は礼儀というものをわきまえておらんのですぞ！」
凄みのある恫喝にも似た声は、周囲にいる人々もたじろがせる。
しかし、サフィリアはガリウスに毅然と立ち向かう。
「外国から来たばかりの者がメティスの、それも宮廷の習慣に沿わぬからといって即座に糾弾するのですか？　それが世界の要を守るものとして、旅人に対する礼儀だというのですか？」
サフィリアの正論に、ガリウスは言葉を詰まらせた。二人のやり取りに、アイシャは退屈そうにあくびをかみ殺している。その後、どういう神経をしているのか、シーグに向かってにこやかに手を振ってきた。
「この男はアイシャ様を侮辱したのです。貴婦人に涙まで流させたのですぞ」
ガリウスは全く気づかずに熱弁している。
「私にはそのようには見えませんでした。異議があるのなら法に照らし合わせ、正式な手続きの後に罰を求めるといいでしょう。どう思われますか、アイシャ様」
いきなり話を振られて、アイシャは即座に手を引っ込めた。そして、あくびによって潤んだ目元を押さえる。サフィリアの腹立たしげな視線を受けると、アイシャは背伸びをしてガリウスに何かを囁きかけた。
サフィリアは警戒の表情を浮かべ、シーグも何かが飛び出すと心の準備をした。ガリウスが勝ち誇った表情を浮かべて口を開く。
「シーグ、貴様は臆病者だ。『名無し』のマードックに剣を習っただけの事はあるな」
サフィリアは顔をゆがめた。胸を突かれたような小さな声を出して、手袋を取り落とした。シーグは落下する途中の皮手袋をひった

くる。そして、反転して背中を向ける。後に勢いよく体を翻して、ガリウスに向けて投げ付けた。

ガリウスは微動だにしなかった。見えない壁に当たったかのように、シーグの投げた物は空中で動きを完全に止めていた。

「魔術の防御壁か？」

「顔を狙うとは、礼儀も知らんようだな。家なしと名無しの師弟とくれば当然か」

シーグの怒りを込めたまなざしで睨みつけると、ガリウスは口の端を歪めていやらしい笑みを浮かべた。

「それは悪かったな。だったらその軽そうな頭を狙うのは、さぞかし大変な侮辱になるんだろうなぁ」

シーグは大げさにため息をついた。そして、靴下だけになった右足を上げた。ガリウスはいぶかしげに眉をひそめる。

その時、パサリと音を立ててガリウスの頭の上に皮手袋が落ちてきた。防御壁で止められていたのは、シーグのボロボロになった革靴だったのである。

2章－26　デスマッチへの招待

周囲を完全な沈黙が支配した。
辛らつな侮辱に対して、さぞかし壮絶な怒声が来るに違いない。
そう覚悟していたのにシーグは気が抜ける思いだった。
サフィリアもシンシアも。アイシャでさえ、驚きの表情を浮かべて動きを止めて固まっている。
自分は一体なにをやってしまったのだろうか？　当の本人であるシーグだけが理解できず、頭をかくしかできなかった。
「ま、まさか」
「リーガル・バックラーの守りを……」
周囲にいる人々は口々につぶやき目を見開いている。
「き、貴様ぁー」
ガリウスがわなわなと震えながら、頭の上に乗っていた皮手袋をむしり取った。そして、反対の手を上に掲げて唾を飛ばしながら叫ぶ。
「成敗してくれる。来たれ、アヴェンジャー（報復者）！」
すると、突然ガリウスの手に幅広の刀身を持つ剣が現れた。柄には巨大なエメラルドがはめ込まれている。
「おいおい、ガリウス卿。丸腰同然の相手に切りかかるつもりか？」
シーグもナイフに手を伸ばした。ガリウスは返事をせず顔を真っ赤にして歩を進めた。
「決闘は挑まれた側が場所や条件を決めるんだっけ。だったら、仕方がないな」
シーグは腰を落として、相手の出方を伺った。ガリウスの刀身は青白い光を放っている。名のある魔剣に違いない。受けきれないなら、かわすしかないが……。
「そこまで！」
突然、アイシャがシーグとガリウスの前に割って入った。手には

ナイフが握られている。シーグはギョッとして、腰のベルトを探った。いつの間にか、ナイフが一本抜き取られている。

「リーガル・バックラー卿、ガリウス・グラムファーレ。路上の私闘とは、あなたほどの騎士にふさわしい舞台ではありません」

アイシャは右手でシーグを左手でガリウスをしめした。

「それは、あなたにも同様ですわ。運命の機転たるシージペリラス」

身を乗り出し、サフィリアが口を開こうとする。

「サフィリア・フェルナンディ。よもや、挑まれた決闘まで無効とまでは言いませんわね？」

しかし、完全にアイシャに先制され何もいうことは出来なかった。

「あなた方にふさわしい決着を付けられるよう、私が一切を取り仕切ります」

アイシャは朗々と宣言し手に持ったナイフで指の先を突き、自分の血をナイフに塗りつけた。そして、柄をガリウスに向けて差し出す。

ガリウスは怒りに顔をゆがめていたが手に持った剣を消した。そして、ナイフを受け取り指の先を突く。膨れ上がってくる血の玉をナイフの刃の反対側にこすり付けた。

アイシャはうやうやしく血に染まったナイフを受け取ると、今度はシーグに向かって差し出す。

「受けますか？　レイザークのシージペリラス」

「断りようのない演出をしておいて、よく言えたもんだな」

シーグとアイシャは小声で言い合う。

「でも、受けるのでしょう？」

「……」

シーグの沈黙を承諾と受け取って、アイシャは笑顔になった。

「ナイフの柄を受け取って地面に突き立てなさい。それで、決闘の儀式は整います」

シーグは片膝をついて、ナイフを石畳に振り下ろす。澄んだ音を立てて、血刀は石畳の隙間に真っ直ぐに突き立った。「おお」と周

囲から感嘆の声がもれる。
「決闘の方式は『ヴァンガード』。場所は『アクリアエ・スリス』。日時は本日正午」
「了解した」
ガリウスの言葉にシーグはうなずいた。サフィリアとシンシアがそろって青ざめる。
「あそこを選ぶとは……」
「それにヴァンガードとは」
「容赦なしですな」
「始まる前から勝負はついたようなもの」
群集からはあてつけるような声が聞こえて来た。
ヴァンガードとはよほど厄介な形式で、アクリアエ・スリスではよほど不利になるらしい。それでも、侮辱の応酬で始まった決闘を断る理由など、シーグには思いもつかなかった。
「自分の墓碑銘を考えてくる事だ。名無しの師匠に家なしの弟子となれば、刻む文字が少なすぎるからな」
「俺は靴を探すよ。あんたの頭に乗りそうな、座りのよさそうなやつをな」
シーグの言葉にガリウスは神経質そうに舌打をした。そして、大仰に振り返ると人々を押しのけてこの場から去って行く。周囲を取り巻く人々も散り散りになっていった。
彼らがこの決闘の事を触れて回るだろう。そして、正午になるまでにメティス全域に広がってゆくはずだ。

2章ー27　色々と

しばらくすると、周囲にはアイシャとシーグ。アイフェの前に壁のように立ちふさがるサフィリアとシンシアだけになった。

絵を描いていた人も、本を読んでいた人もいない。広場は完全に無人になったのだ。熟練の軍隊でもこうはゆくまい。

「……んで、この気色悪いはどうすればいいんだ？」

シーグは足元を指差した。ナイフの刃についた血が石畳に染み出してきているので、地面が血を流しているようだ。

「そのままでお願いします。決闘の詳細を記したお触れをこのくらーいの大きさで張り出しますので」

アイシャは楽しそうに両手を一杯に広げて、看板の形を作った。

「ますます騒ぎを大きくするつもりか」

「こそこそやったらつまらないですわ」

音もなく寄って来たので、シーグは飛び下がって逃げた。すると、アイシャは唇を尖らせて頬を膨らませる。

「あんたの本当の狙いは何だ？」

「色々とありますけど」

アイシャは前かがみになって、シーグを上目使いに見つめた。

「まずは、あなたの実力を知りたいですね。メティス最強の戦士として名をはせたベクター卿。魔術の心得もなく、剣と知恵だけを頼みに互角に打ち合ったシーグ。彼の本当の腕前は果たして如何ほどか。巷を騒がせる戦士の実力が今こそ明らかになるのですわ」

アイシャはまるで、演劇の前口上のように言った。

「噂どおりならそいつは熊みたいに巨大で、塔みたいな剣を振り回すらしいじゃないか。期待はずれもいいところだな」

シーグは人事のようにすっとぼけた。

「それは酒場のほら話ですわね。言いなおしますと、良識ある者達はあなたの実力と人柄を自分の目で確かめたいのです。理由はお分

かりでしょ？」
「俺がシージペリラス（命取りの座）だからか」
「その上、あなたはイービルスレイヤー（邪悪を制するもの）の弟子でもあります。敵になっても、味方になっても脅威となる男の、ね。自然と注目は集まりますわよ」
「他にも何か企んでいそうだな」
アイシャは両手で頬を押さえてシーグに流し目をくれてから蚊の泣くような声でつぶやく。
「初対面の殿方に何もかも話すなんて、はしたないですわ」
「笑えない冗談にしか聞こえないな」
「では、冗談はこのあたりにしておきましょうか」
鼻で笑われると、アイシャは姿勢を整え真剣な表情になった。シーグも思わず姿勢を正す。
「正午までずいぶん時間がありますわ。それまで、お茶でもいかが」
「……どこが真面目な話なんだか」
「あら。気になる男性を女性から誘うなんて、勇気がいりますのよ？」
わずかに視線をそらし、初々しい様子で頬を染めてはにかんでいる。白々しいと思いながらも、シーグは一瞬胸が高鳴ってしまった。
「それに、たまには姉妹で水入らずというのもいいと思いますの」
姉と視線が合ったアイフェは飛び上がって驚いた。そして、巣穴に逃げ込むウサギのように、サフィリアの背中に完全に隠れてしまう。
「あなた達も一緒にどうですか？」
アイシャに声をかけられると、シンシアとサフィリアは敵でもみるような表情で身構えた。
「アイフェにはこれから授業があります」
「私もそろそろ教室に行かないといけませんから」
「では、シーグ。あなたは？」
腕を取ろうと手を伸ばしたアイフェから、シーグは更に距離を置

いた。
「俺も、鍛冶屋に行く用事があったな」
「あらあら。すっかり、嫌われてしまいましたのね」
全員に断られ、アイシャは悲壮な声色でつぶやいた。しかし、目だけは笑っている。
「分かりました。正午を楽しみにしていてください。それでは、皆さんごきげんよう」
アイシャはローブの裾をつまんで優雅に礼をすると、道の端に立つ木に向かって歩いていく。人間一人が隠れるには幹が細すぎる。しかし、木の後ろに回りこんだアイシャはすっと姿を消してしまったのである。

2章－28　野心と名声

「さて、と。何からはじめるかな」
シーグはのん気につぶやいて、まずは地面に転がったままの自分の靴に足をつっ込んだ。
「シンシア。あなたは早く教室に行って。アイフェ。あなたもここからなら、先生のところまで大丈夫ね？」
「でも……」
「行きなさい」
サフィリアの命令口調に、アイフェはピクリと体を震わせた。シンシアもこの場に残りたそうだったが、しぶしぶと道を引き返していった。アイフェも、途中何度も振り返りながら広場を横切った先にある塔の中に入っていった。
サフィリアは厳しい視線で地面に刺さったナイフを睨みつけている。独り言をつぶやいているところを見れば、必死に何かを考えているのだろう。
アイフェもシンシアも見えなくなった頃、サフィリアは顔を上げた。
「あなたは自分が何をしたか分かっているのですか？」
「何って、決闘の申し込みだろ」
敬語の中に不穏な気配を感じながら、シーグは地面を蹴って靴のずれを直した。
「魔術師同士の闘争に。メティスの政争に自分から足を踏み入れたのですよ」
言葉遣いは硬く、口調が張りつめてゆく。本格的に腹を立てている証拠だ。
「それなら、昨日の騒ぎでとっくに覚悟はしているぞ」
「全く違います。昨日とは異なり、あなた自身が争いの種をまいたのですから」

「土がいいからよく育ちそうだな」
シーグは短剣の刺さった石畳を見下ろしてつぶやいた。
「ふざけないでください！」
声高に叫ばれて、シーグはうるさそうに耳を押さえた。
「そうは言うけどなぁ。あのお姫さんは、何があっても俺に喧嘩を吹っかけるつもりだったみたいだぞ」
「私がメティスへ誘ったりなんかしたから……」
サフィリアは急に勢いを失ってうつむいた。「また、お姉さまをいじめた！」とシンシアが怒鳴る様子がシーグの脳裏によぎった。
「あんたのせいじゃない。俺はシージペリラスだ。生まれた時から、暗殺やら生贄やらの危険があった。その上、名無しのマードックと、イービルスレイヤーの弟子だ。どこの都市に行ったって、決闘の１つや２つは起こったぞ」
「だったら、どうして世の中に出てきたんですか。隠れていれば、名前を捨てていれば平和に暮らせたでしょう？」
「……」
シーグは沈黙し、頭をかいて顔を隠した。
「そうだ。ロディウス老師なら、あなたを守ってくれるはずよ」
「無理だな。爺さんのところからは自分で飛び出してきたんだ。それにあの爺さんなら、逆にいい訓練だってけしかけそうだぞ」
シーグは冗談交じりに行ったが、サフィリアは真剣そのものだ。
「とにかく、決闘を取り消してください。元々、ナイトロード卿に庇護を求めに行くつもりでした。彼ならうまく取り計らってくれるはずです」
「誰だ、その人は？」
「名前はジェイナス・マードック。今はアイフェの先生をしてくれています」
「マードックだって？」
「ええ、その……彼の祖父です」
『名無し』のとは言いにくいのだろう。サフィリアは言葉を濁し

た。
「おいおい、俺はマードックへの侮辱を晴らしに行くんだぞ。それなのに、一族の力を借りて取り消すのか？　とんだ恥さらしじゃないか」
「ですが、今ならまだ間に合います。ジェイナス卿は三騎士の最古参ですから、きっとガリウス卿をいさめて――」
「余計な事をしないでくれ」
シーグは声を大きくして、サフィリアの言葉をさえぎった。
「……なんですって？」
「余計な事だって言ったんだ。俺だって男なんだ。人並みの野心がある。自分の力を試したくなったり、手柄を欲しがるのは当然だろ」
サフィリアはポカンとしてシーグの顔を眺めている。
「昨日はベクターで、今日の相手は位の高い騎士みたいじゃないか。名声を売るにはもってこいの機会なんだからさ。邪魔はしないでくれ」
手柄や名声と聞いて、サフィリアの表情が険しくなってゆく。
「そんなものに命をかけるだけの価値があると思うの？」
「思うね」
「あなたはバカだわ」
「だったら、世の中の半数はバカなんだろうさ」
シーグが即答すると、サフィリアは唇をかみ締める。
「……分かりました。勝手にしてください」
サフィリアは急に冷めた声になる。そして、背中を向けると足早に広場を横切って去っていった。
「さて、まずは剣を手に入れるかな」
シーグはポツリとつぶやくと、来た道を引き返した。途中で白大理石のベンチの前で立ち止まって口を開く。
「盗み聞きっていうのは、淑女にふさわしい行動なのか？」
シーグが話しかけると、シンシアがベンチの陰から姿を現した。

2章－29　公開処刑の内情

「情報収集といって欲しいですわね」
シンシアは腰に手をあてて不敵に言った。全く悪びれた様子がない。
「いつから気づいていたんですか？」
「勘は鋭いほうでね。あんなにジロジロ見られたら、背中越しでもすぐに分かるよ」
「その割には、あの女に簡単に唇を許したんですね。ひょっとして、わざとですか？」
「……それよりも遅刻しそうなんだろ。急いだ方がいいな」
シーグが早足で歩くと、シンシアも小走りに追いついてきた。
「アイフェとアイシャは、どういう関係なんだ」
「実の姉妹です。そして、産まれたばかりのアイフェを暗殺者に渡した張本人でもあります」
シンシアは腹立たしげに吐き捨てた。
「産まれたばかりだって？」
アイシャの外見を思い出して、シーグは混乱した。彼女はどう見ても、１０代も半ばにしか見えなかったからだ。
「当時４才だったらしいですけどね。あの女はその時から、ずっとディスペリアの当主です」
「なんと、まぁ」
シーグは間の抜けた声で嘆息した。
「一族の相談役になったのは3才。言葉を喋ると同時に、一族の方針に口出ししていたようです。ディスペリアの一族で、銀色の容姿を持って産まれる者は特別な能力を持っていますから」
それで、アイフェの多彩な能力にも納得がいった。魔術師が特別呼ばわりするのだから、よほど正体の知れない力に違いない。シーグは、深く考えない事にした。

「それで、わざとキスされたんですか？」
「ええと……」
「何度はぐらかしても無駄ですよ。ちなみに、この辺りから人通りがどんどん多くなりますけど？」
シンシアは薄笑いを浮かべてから、両手を口元に当てて大きく息を吸い込んだ。
「往来の真ん中、人垣に囲まれた状態。子どもだっているのに、どういう神経でキ――」
「待て！　分かった。答えるから」
シーグが慌てていうと、シンシアは勝ち誇った表情を浮かべた。
「完全に不意をつかれたんだ。ナイフを取られた時も、まるで気配を感じなかった。こんな事は……」
初めてだ、と言いかけたのをシーグは飲み込んだ。
「アイフェと会ってからは何度もある。昨日から勘を狂わされっぱなしだな」
シーグは肩を落としてつぶやいた。
「骨抜きにされた訳じゃなさそうですね」
「どういう事だ？」
「あの女と会ったら、たいていの男はおかしくなってしまうんです。特に唇を許した人は残らずにね」
「残らずってどういうことだ？」
「二桁は軽く越しているって事です。あの女はキス魔なんです。恥知らずの！」
シンシアは、叩きつけるように言った。通りすがりの人々が振り返り、シーグを見ると怪しむ様にひそひそと話をする。たぶん、自分がキス魔だと勘違いされているのだろう。なんとか、話題を変えようとシーグは頭をひねった。
「ヴァンガードっていうのはなんだ？」
「知らずに受けたのですか？」
シンシアは呆れた。とにかく、声の大きさが落ちたのでシーグは

一安心した。
「ヴァンガードは『最前線』の意味があります。前線に立つ戦士のように、自分のあらゆる技術、技巧を使って戦う完全決着の決闘方式です。もちろん、魔術も有効ですわ」
「死人が出そうな決闘だな」
「実際に死者が出ます。それどころか、『畏怖堂々たる公開処刑』とまで言われているのですよ。主君の恋人を誘惑した騎士は、必ず前線送りになる。そして、申し合わせたように帰ってきません。そんなジンクスを皮肉った名前ですから」
つまり、姫がアイシャで前線送りになる騎士が自分という展開をシーグは思い浮かべた。
「なるほどね。たいした演出だな」
「笑い事じゃないでしょう！」
シンシアの声が再び大きくなる。
「じゃあ、アクリアエ・スリスっていうのは何だ？」
「地図上の名前に限定すれば、王城前の広場の呼び名です！」
シーグの質問に対してシンシアは答えた。機嫌は悪いままだったが。
「それはまた、とてつもなく目立つ場所だな」
「メティス中の人々が押し寄せてきますね。たぶん、王族や各国の領事までも。だって、あなたはレイザークの公子なんでしょ？」
「すでに滅んだ国だぞ。政略の捨て駒にもならんだろうに」
「そうとも限りませんけど……」
シンシアは言葉を濁した。
「で、他の意味ならどうなんだ？」
「メティス騎士団の紋章がワシなのはご存知ですよね」
「ああ。そして騎士団長の紋章はグリフォンだな」
「でしたら話が早いですわ。アクリアエは『ワシ』。スリスは『滑走路』の意味があります。広い意味ではメティスの魔術が最大限の効果を発揮する封土全体を指します。魔術師なら、都市の構造を一

目見ただけでわかりますけど」
「やたらと低い城壁や、侵入しやすそうな水路なんかが魔方陣の役割をしているわけか」
シーグの言葉に、シンシアはムッとした表情を浮かべた。そして、突然背伸びをすると、シーグに食い掛かるようにまくし立てる。
「メティスには無駄に高い城壁とか、川を澱ませるだけの水門なんて１つもありません！　建設と維持のために税を搾り取り、都市の反映そのものも妨げます。国を自滅に追いやるだけの無骨な障害物なんですよ！」
「悪かった。俺が悪かったよ。だから、いちいち怒らないでくれ」
シーグは苦笑しながら、シンシアをなだめた。

2章－30　空気の壁

「じゃあ、アクリアエ・スリスのことを詳しく教えてくれ」
シーグがたずねると、シンシアは背伸びを止めて、肩を下ろした。怒りが冷めたわけではなく、心底あきれ返ったように見える。
「アクアランス、ナイトロード。そしてリーゲル・バックラー。彼らは王都を守る三騎士です」
「噂程度には聞いているよ。何でも王都の無敵の守りなんだってな。一撃で百人からの兵士を吹っ飛ばすとか、百人からの騎士が一瞬で姿を現すとか、誰にも突破できない空気の壁が城の周りに張り巡らされるとか。詩人の好きそうな眉唾な話しか知らないが」
「全部真実ですわ。実際にその通りになりますから」
「まさか……」
からかわれているのかと思ったが、シンシアは唇を横に引き結んでいる。
「噂っていうのは大げさに語られるものだと思っていたけどな」
「魔術が関わると、逆転する事もあります」
「なる、ほどね」
「アクアランスはブラスト（噴出）の系統。アクリアエ・スリスの魔方陣に沿って、つまり主要な大通り全体にかけます。例えば、温度を極端に上げたり――」
「火の海にするのか？」
焼き討ちによる陰惨な光景を思い浮かべて、シーグは喉元を押さえた。
「それだと区画ごと魔方陣が滅却しますから。でも、火が燃えるほどじゃなくても人間を無力化するには十分でしょ？」
「つまり、やろうと思えばできるわけか……」
「特に敵が甲冑をかぶっていたら、通りの金属をすべて加熱させたりすると有効ですね。あとは雷を充満させたり。軽装なら、強風を

起こしてリベット（鉄鋲）を飛ばすとか……」
　理論的に話すときの常として、シンシアは淡々と続ける。一方、シーグは惨劇の様子が明確に思い出されて、背筋が寒くなってきていた。
「じゃあ、ナイトロードっていうのは？」
「サモニング（召還）の系統です。城壁の内側ならほとんど何処でも。領内なら大河アクアランス流域の特定の箇所へ移送できます。人でも物でも」
「アクアランスっていうと、東西に突き抜けるあの河だよな」
「ええ、メティスの領土を東西に横断しています。海まで出るなら、ワシの翼でも半日は懸かる距離ですね。ナイトロードの手にかかれば、ほとんど一瞬ですけど」
「軍勢が空を飛ぶなんていうレベルじゃないな。奇襲でも挟み撃ちでも、自由自在というわけだ」
「王都防衛の場合は、物を移動させる方が効果的ですよ。特に一箇所に終結している軍勢の頭上に、煮えたぎった油や溶けた鉛を落とせばいいんです」
「まともな戦いにさえならないな。一方的な……」
　殺戮じゃないか、と続けそうになったのをシーグは飲み込んだ。
「幸いな事に実践の機会はありません。王城にまで敵の侵入を許すという事自体が少なかったので」
「実際にやったことがないから、噂のほうがぬるくなるのか」
「その通りです。だから、国の方でもわざわざ財源を裂いて詩人を雇っています。彼らには、できるだけ大げさに流布するように言っているのですが、陰惨な実例がないことには、効果は薄いようですね」
　淡々と恐怖を振りまく行為を語るシンシア。そういう目的なら、詩人よりも彼女のような口のたつ人を派遣したほうが効果的であるようにシーグには思えた。もっとも、この事が噂になれば、メティスの王都は巨大な処刑場と噂されるに違いないが。

「じゃあ、リーゲル・バックラーっていうのはなんだ？」
「小さな意味では名前の通り王を守る盾。大きな意味では王城を守る壁です。王城の正面口、アクリアエ・スリスの前には城門がありません。夜には跳ね橋を上げて、進入できなくするだけです」
「はた目には正気とは思えない備えだな。しかし、そこを守っているのがリーゲル・バックラーというわけだ」
「彼の手にかかれば、魔術の壁を展開できます。城壁よりも遥かに強固で、高い魔術の壁です」
「その壁は、ひょっとして特定の人だけ自由に出入りが出来るのか？」
「もちろんです。それだけでなく、物質もリーゲル・バックラーの思うままに弾き返したり、透過させたり出来ます」
あらゆる攻撃が弾かれる一方で、城から一方的に矢が打ち込まれる。総崩れとなったところで、壁をすり抜けた騎士が一挙に突撃を開始する。そんな光景をシーグは思い浮かべた。壁を好き勝手に操れるとなれば、守りの堅さは格段に跳ね上がる。
「なるほど。空気の壁ってわけか」
「あなたが挑んだ相手は、そんな強敵なんですよ」
シンシアは再び背伸びをして声を荒げる。
「なるほど、勝ち目はないな」
「楽しそうに言わないでください。って、どうしてそこで笑うのですか！」
あまりに一生懸命な様子にシーグは思わず笑いがこぼれてしまったのだ。それに対してシンシアは益々表情を険しくして、顔に血をのぼらせる。爪先立ちになり、腰に手を当てて全身で怒り主張する。そんな様子にシーグは笑い出すのを堪えるのに全力を注がねばならなかった。
「女性の顔を見て笑い出すなんて、失礼じゃないですか！」
「じょ……」
シンシアの言葉で、ついにシーグの我慢は限界を迎えた。大声で

叫ぶ少女と、急に笑い出した少年を見て、通りを行く人は残らず不審な目を向けていた。

「いい加減笑うのを止めてください！」
シンシアは、ムスッとしてシーグを睨みつけている。確かにいきなり笑い出すのは失礼にもほどがある。
しかし、ませた上に自信にあふれる言動。一人前になろうと必死に背伸びをしようとしている姿が、４年前に会ったサフィリアを思い出させる。あまりに似ている先生と生徒が、シーグには面白く見えてしまったのだ。
「あ、いや。なんだ。そう、単なる思い出し笑いだ」
「気色悪いから止めてください」
「へーいへい」
「……これだけの力を持っているのがメティスの三騎士です。ましてや、アクリアエ・スリスでは彼らの能力は最大にまで高まるのですよ」
「なるほどねぇ」
ふざけた返事にシンシアが、形のいい眉を神経質に上げる。再び加熱しないように、シーグは慌てて口を開いた。
「今教えてくれた事だが、一人でも出来るのか？　それも決闘の形式で、だが」
何かをいいかけたシンシアは、シーグの問いに口を半開きにしたまま動きを止めた。そして、腕を組んで考えてはじめる。サフィリアと同じく、論理的な思考が過熱した感情を即座に冷ますようだ。
「……無理ですね」
「陣形とか、エンハンス（向上）とか、人数とか、そういう問題なのか？」
突然、シーグの口から魔術の用語が飛び出したのでシンシアは驚きの表情を浮かべた。
「どうなんだ？」

「は、はい。その通りです」
「戦場と決闘では戦い方が違うわけか。だったら、壁に戦いを挑む必要はないんだな」
「……本気で戦うつもりなんですか？」
「勝つつもりだ」
迷いなく答えると、シンシアは言葉に詰まった。そして、疑うような視線をシーグに向ける。
「私の知っている事は多くありませんが……」
シンシアは深刻な表情で腕を組んで続けた。
「ガリウス卿はメティスで最強の決闘者だという事です」
「む……」
シーグは思わずうなった。
「あのキス魔は！」
シンシアの声は再び怒りを含んだ。
「頻繁に問題を引き起こします。収拾がつかなくなると、いつも決闘で決着をつける。その時に出てくるのが、ガリウス・グラムファーレなんです」
「ちなみに何戦して、何勝しているんだ？」
「２０戦２０勝。無敗です。決闘方式はすべて『ヴァンガード』。相手が恐れをなして決闘を取り消したものも含めたら、３０回は勝っていますね」
「あ……そ」
「まずは、リーガル・バックラーですべての攻撃を受け止めます。魔術師に対しては前準備もほとんどなく、即座に守りを展開されれば、できる事が極端に減ります。戦士に対してはあらゆる攻撃を止める見えない盾など脅威以外の何者でもありません。今までの決闘は圧倒的な展開だったようですよ。ガリウス卿が守り、最後に攻めて勝った、と。それだけ伝えられています。また、ガリウス卿に近づくことも出来なかった、とも」
「近づけない？」

「リーガル・バックラーの防護を、相手の足元や顔の前に突然発生させるんです。それだけで、十分相手の動きをけん制できます。いつ現れるか分からない障害物を恐れながらでは、まともに戦えるはずがありません」

「……はぁ、なるほど」

王の護衛だけに強いとは覚悟していた。しかし、盾にそんな使い方があって、その上無敗だったとはシーグの予想を遥かに上回っている。

「ですから、今から決闘を取りやめても恥をかくだけで済みます」

シーグの生返事にシンシアは、なだめる様な口調になった。

「その前に確認したいんだが、俺の靴を空中で止めたのは魔術の壁の類なのか？」

「ええ。リーガル・バックラーは王の盾。ガリウス卿の左腕のブレスレットで、血族継承型のフィーリアです。継承者は、魔術の壁を即座に展開する能力を持ち、王を守護するのが使命です」

「バックラー（小型の盾）、か……」

シーグは頭に手をやって思考をめぐらせた。

「ウォール（壁）でもシールド（盾）でもなくて、バックラー（小型の盾）。呼び名の通りならば、両手の平を広げてあわせた大きさかな。防御の範囲は広くないんじゃないか」

「直接見たのは今日が初めてですが、ちょうどその位の大きさでした」

「その上、勝手に飛んできたものから守るってわけじゃないな。そうでなければ、頭の上に手袋が乗るはずがない」

「で、ですが。あれは油断しただけです。実戦の中ではそんな隙は――」

「隙というのは勝手に出来るものじゃない。攻め手が意図的に作るものなんだ。特に勝利を疑わない勝ち慣れた奴には、自分でも気づかない死角が見つかりやすい」

2章－32　力の性質

シーグは頭に手をやりながら、少し考えて口を開いた。
「防護の盾だが、どんな風に出ていた」
「……えっと、どういう意味ですか？」
「止めるだけの盾なら俺の投げた革靴は当たった後に地面に落ちるはずだ。だけど、宙に浮いたままだった。形状を変化できるのか、同時に展開して、受け止めたのか。あるいは、動かして向きを変えたのかもしれない。最も俺には全く見えなかったんだがな」
同時に複数の問いを投げかけられて、シンシアは慌てて目を泳がせた。
「二つ展開していました。正面から止める物と宙で受け止める物と」
「俺が見えなかったのはなぜだ？　ガイスのときは赤く見えていたぞ」
「それは純粋に術者の未熟です。熟練者ほどプロテクション（防護）の効果は透明に近くなりますから」
考えてみれば昨日の戦いでも、ガイスが気を失った後の防御壁は透明だった。
「じゃあ、壁を出入り自由にしたり、動かしたりすると強度が脆くなるのは同じか？」
「理屈の上ではそうなります。数を多く出しても弱くなるでしょうね」
「効果範囲は？　術者からどの程度まで離れて展開できるんだ？　同時に展開できるのは幾つだろうか？　展開に必要な時間は？　展開後の隙はどの程度の時間なんだ？」
シーグの立て続けに問いに、シンシアは唇をかみ締めた。
「できるだけ詳しく知りたいんだが」
「……私には分かりません」
悔しげにうつむいたシンシアには気づかず、シーグは更に言葉を

続けた。
「そうか、じゃあ急に空中に現れた剣。えっと、ラヴェンダーとかいったか？」
「アヴェンジャーです！」
シンシアが大声で訂正した。
「ああ、そういえばそんな名前だったっけ？」
シーグはポリポリと頭をかいた。
「どうしたらそんな間違え方が出来るんですか」
「青かったからじゃないかな、たぶん」
「青い、ですって？」
シンシアは怪訝な表情を浮かべた。
「どうして、あれは空中から出てきたんだ？」
「剣を持ち込むのが禁止されている宴や謁見の間でも、要人を守るためです」
「守れるのか、あれで？」
辛らつな質問に対して、シンシアは再び表情を険しくした。
「アヴェンジャー（報復者）は金属の鎧を紙のように引き裂き、やわな魔術の壁も簡単に貫きます。最強の剣と盾を持っているのが、リーガル・バックラー卿なんですよ」
「いやな。気になったのは刃の切れ味じゃなくて、剣を抜くまでの時間だ。剣の名前を呼んでから、出てくるまでたっぷり3つは数えられたぞ。素人だってもっと速く鞘から抜けると思うけどな」
言葉に詰まったシンシアに、シーグは更に言葉を続けた。
「暗殺者っていうのは、正々堂々と名乗りを上げたりしないし、前から襲い掛かってくるとも限らない。あれじゃあ手遅れにならないかな。それに、剣の形が気になった」
「形……ですか？」
「武器の形態は用途や戦法につながる。ブロードソード（広刃の剣）は刀身の長さと分厚さを生かして叩き切るための武器だ。入り組んでいたり、込み入った場所。つまり宴会場や謁見の間で、要人を守

り通して逃げ延びるには邪魔になると思うぞ。ましてや、自由自在に魔術の盾を作れるんだ。振り回す武器は、自分の盾が邪魔にならないのか。盾を生かすに、切るよりも突く武器の方が向いているんだぞ」

シンシアは次第に真剣な表情になり、シーグの言葉に耳を傾け始めた。

「人間を倒すための武器には、防具を貫くだけの鋭さと心臓に届くだけの長さがあればいいんだ。なのにアヴェンジャーっていう剣は、刃を分厚くして更に魔術で刃を強化している。元々は軽装備の刺客じゃなくて、強靭な怪物を倒すための武器だったと思う」

「……そんな風に考える事が、ロディウス老師の。イービルスレイヤーの教えなのですか？」

「力の使い方を間違えるな、という事は口をすっぱくして教えられたっけな。ええと、例えば『力』は集中するほど強く、分散するほど弱くなる。そして、近いほど、速いほど、要を押さえるほどに強い。遠く、遅く、でたらめなほど弱くなるんだ。剣術も体術も戦術も、みんな力のコントロールに真髄がある。魔術も同じじゃないのか？」

シーグはそこで言葉を切った。シンシアはブツブツと聞いた言葉を繰り返して考えこんでから大きくうなずいた。

「確かに……そうですわね」

「だから、敵に対して必要な情報を知って、条件を整えたら十分勝ち目がある。と、俺は思うんだ」

2章ー33　できる事を

シンシアは再び沈んだ表情でうつむいる。それでようやく一方的に喋りすぎていたことにシーグは気づいた。

ロディウスが言っていた言葉を、シーグは思い出す。

「貴様は自分で思っているよりも、口先で相手を追い詰める。喧嘩を売りつけるときには重宝するだろうが、それ以外は黙っておいた方がいいな」

実際に、昨日から口を開くたびに失言ばかりだ。

「情報ですか……それなら、今まで私が言ったことでは足りませんね」

「そんな事はない。十分役に立ったぞ」

シーグはとにかく余計な事を言うまいと思いながら、シンシアに感謝する。

「だったら私の言ったことだけで、決闘に挑めるのですか？」

「……」

無理だなと思った瞬間、シンシアと真正面から視線があった。スッと目が細くなり、冷めた視線がシーグを射抜く。

「いや、違う！　そんな事はないぞ」

「私は何も言ってませんよ。何が違うんですか？」

シンシアは途端にそっけない態度をとる。周囲の温度が下がったような錯覚をシーグは覚えた。

「私程度の子どもから得られる情報なら、これで十分だってそういう意味ですか？」

「助かったのは助かったんだぞ。そうだな、例えば――」

「否定はなさらないのですね」

「……」

「気遣いはご無用です。実際にその通りの事ですから。私は無知で未熟なんです」

シンシアは叩きつけるように言ってシーグを黙らせた。言葉遣いはよそよそしく、言葉尻にはトゲがある。相当怒っているようだ。何処で間違ったのか、何が一番悪かったのかシーグは悩んだ。一方、シンシアは真剣な表情で考え込んだ後に口を開く。

「私ではあなたに適切な助言を与えられません。ですが、詳しく知っている人に心当たりがあります。その人を引き合わせたのなら、あなたのお役に立てますか？」

「あ、ああ」

シンシアの流暢すぎる言葉がなかなか頭に入ってこず、シーグは生返事をしかできなかった。

「理想的な条件は、魔術と接近戦が得意で、リーガル・バックラーの特性に精通している人ですね」

「そう、だな？」

シーグは問いかけるような言葉尻で答えた。自分が一番よく分かっていなかったからだ。

「一人目はベクター卿です」

またその名前か、とシーグは内心でうんざりした。

「ガリウス卿と同じく、決闘では無敗。あなたの戦い方も実戦の中で理解している。リーガル・バックラーの候補として数えられた事があります。ディテクター（探知者）としてだけではなく、エンチャンター（付与術者）、プルーフ（鑑定士）としても一流です」

「プルーフ（鑑定士）ってなんだ？」

「魔術の道具を鑑定する能力に秀でている者のことです。そのため、魔術の武具をそろえるための助言も得ることが出来ます」

「……へぇ」

「あの。まさか、とは思いますが、魔力の通わない武具で戦うつもりだったんですか？」

「あっはっはー……」

シーグが笑いながら気まずそうに目をそらすと、シンシアは特大のため息をついた。

「前代未聞のヴァンガードになりそうですね。ベクター卿の能力は申し分がありませんが、問題はあなたの心情ですね」
「え？」
「昨日の敵から、助言を素直に聞くつもりになれるかどうかが心配です。ましてや、名前を聞いただけで嫌そうな表情を浮かべていましたしね」
図星なので、シーグは薄笑いを浮かべるしか出来なかった。
「ところで、ベクターはどうしてリーガル・バックラーになれなかったんだ？」
シンシアは深く息を吸い込んだ。また一挙に流暢な言葉が飛び出だろうと、シーグは身構えた。
「正確に言うとならなかった、でしょうね。ベクター卿は実力だけなら、宮廷魔術師にでも、三騎士にでもフォルナージュの当主にもなれます。問題は、あの人も王位継承権を持っていたということですね」
シンシアはここで言葉を止めたが、シーグにはわけが分からない。
「どういうことだ？」
「要人の警護に要人をつければ、余計に刺客を引き寄せることになりますから」
「あ、なるほど」
「……あなた、レイザークの公子なんでしょう？」
シンシアは不審な目で見つめられて、シーグは耳の後ろをかいて黙り込んだ。
「魔術師でも無いのに、魔術の性質をよく知っている。公子のわりには宮廷の事情には疎い。よく分からない人ですね」
「俺にもよく分からん」
ふざけた返答をされて、シンシアはシーグを睨みつけた。
「っとっと。そうしたら、二人目は誰なんだ？」
「ちょっとは自分で考えてください。少し考えればすぐに分かるはずですよ」

シンシアは怒ったようにあさっての方向を見て、シーグの質問をさえぎってしまった。
推理は苦手なんだがなぁー、と思いながらシーグは考えてみた。しかし、シンシアの条件を繰り返し考えてみると、意外にも簡単に。ほとんど即座に答えに行き当たってしまった。
「サフィリアか？」
「正解です」
シンシアは満足げに大きくうなずいた。
「身近に最も頼りになる人がいたのは幸運ですね」
「だけど、さっき無茶苦茶怒らせてしまったぞ」
「端から見ていても、喧嘩別れ以外の何ものでもありませんでしたね」
シンシアは大またに歩いて、シーグの正面に回りこんだ。
「私がとりなして機会をつくります。私は私のできる事に全力で取り組みましょう。ですからシーグさん、あなたは――」
言葉を切ってから真剣な表情でシーグを見つめた。
「一刻も早く、お姉さまと仲直りをする方法を考えていてください」
「……」
「魔術師にとって距離はあって無きがごとしです。魔術師と喧嘩をし続けるには、大陸全土でさえもあまりにも狭すぎますよ」
教鞭のように立てた人差し指を、リズミカルに揺らしながらシンシアは熱弁する。
「分かりましたか？」
「はいはい」
「『はい』は一度で十分です」
「分かりました」
シーグが生返事をすると、シンシアは後ろを振り返った。子ども達と出会ったフェイル・リレイの塔は、気づかないうちにずっと後ろになっていた。
「もう、私は教室に行かないと。シーグさんはこれから鍛冶屋に包

丁を取りに行くのですよね？」
「ああ。何でも行きつけの店なんだそうだ。剣もそこで探そうと思っていたんだが、魔術の込められた品の事なんて全く考えてなかったな」
「店の選択は間違っていません。お姉さまが頻繁に通うのは、そこが魔術に関してメティスで指折りの店だからからです。リーザ・オーメントという人を訪ねてください。凄腕のプルーフ（鑑定士）ですから」
「リーザ……？」
聞き覚えのある名前に、シーグは戸惑った。しかし姓が違う。別人に違いない。
「キチンと覚えられましたか。あなたって名前を覚えるのが苦手なんでしょ？」
「悪かったな」
シーグが声を荒げると、シンシアは楽しそうに笑って手を振った。そして、駆け足で一目散に来た道を引き返していった。黒髪や肩にかけたカバンがにぎやかに跳ねている。
「あの子は策士だな」
シーグは苦笑いをしながらつぶやいた。途中、濃い色のローブを着て懸命に走る少年少女たちがと何度かすれちがった。「走れ、遅刻するぞ」と声を掛け合いながら、みんなシンシアと同じ道を駆けて行った。
子ども達の元気な後姿を見送って、シーグはホワイトホースのある南側に向かって歩き始めた。

2章－34　七家の二人

＊

メティスの王城フォルナージュは、リーガル・バックラーの湖岸に建っている。横に広く、数え切れない尖塔を空に向けた壮麗な城は、翼を一杯に広げて飛び立つ前の白鳥の群れに例えられる。

あるいは、水上の炎とも。

メティスに住むものなら誰でも知っている。夕日が西の空に差し掛かれば、王城は燃えるような紅さに染まる。そして、世界が黄昏に包まれる時に、王城は闇の空に向かって燃え上がる白い炎のように輝くのだ。

フォルナージュの正門に城門は存在しない。跳ね橋を下ろせば、広い入り口が訪問者を迎える。槍を構えた騎士と、杖を携えた魔術師が常に目を光らせてはいるが、城壁は低く湖岸に近い事から侵入は容易に思える。

しかし、不貞を働こうと王城に向かう者は実行の前に発覚し、瞬く間に捕らわれるのだという。悪意を持つものを、決して近寄らせぬ清浄の封土。それも、王城フォルナージュが人の噂に上るときに触れられる事柄だ。

魔術都市郡の中枢を担う建物にふさわしく、王城フォルナージュには神秘的で驚異的な話は数え切れないほど存在するのである。

＊

「ベクター卿」

声をかけられてベクターは振り向いた。彼はアクリアエ・スリスの広場を、王城に向かっている途中であった。

「ワグナス卿か。どうした」

「いやあ、なんだか大変な事になってますねえ」
ワグナスは額に手を当てて、周囲を見回した。アクリアエ・スリスには早くも人が押しかけ、次々と椅子や机やテントが持ち込まれていた。
「人事だな。実の兄の決闘だというのに」
「さすがに耳が早い」
ワグナス・グラムファーレは大げさに驚いて、両手を挙げて見せた。
「すでに噂は飛び交っている。決闘の原因となった広場に、看板が作られているほどだ。王都ではすでに知らないものはないだろう」
「俺が言っているのは、行動の早さですよ。すでに着替えて、謁見の手はずも整えているんですから」
ワグナスは無遠慮にベクターの全身を眺め回した。
上下黒のベストとズボン。襟元から薄紫のダブレットが見えていて、白いマントを羽織っている。灰色などは力を持たないものが身につけるが、宮廷において完全な黒は王に謁見するものや側近だけが許される。王の権力に服従し、自ら力を振るわない事を誓約した証が漆黒であるからだ。
つまり、ワグナスは服装からベクターの用事を推測したのである。そして、それは外れてはいなかった。
「何か、急ぎの用事なのか？」
「いえいえ。昨日の戦いの処分と、今後の身の振り方の報告にあがりました。メティオスマッシャーに所属した元部下としてね」
ワグナスはふざけた仕草で敬礼しながら、にこやかに続ける。
「メティオスマッシャーの解散、フィーリアの剥奪と続いて、晴れて自由の身となりましたよ」
これにはベクターの方が驚き、表情を変えて歩みを止めてしまった。
「それは事実上、一族からの追放ということではないのか？」
「そうともいいますかね」

「罰としては重過ぎる。責任者である私でさえ、有名無実の名誉職をいくつか奪われただけ。実質的な刑罰はないに等しい状況だ」
「まあ、それは『彼女さん』の取り成しの結果、という気がしますが」
ワグナスの軽い口調に、ベクターは憮然とした表情で黙り込んでしまった。
「俺の一族は守る事ばかりに必死になっているんです。何しろ魔術師でもない奴に、セブンパワーインテグレーション（七力統合陣）の防護結界を破られたんですからね。グラムファーレは一度でも失敗すれば、一族から放り出そうって考えが定着しているんですよ」
驚きをもたらした当の本人は人事のように飄々としている。むしろ、ベクターの取り乱す様子を見て楽しそうだ。
「私がうまく取り計らおう。君は自分の役割を十分にこなした。まとめ役である私に責任がある」
「気にしないでください。そもそも一番悪いのはガイスなんですから」
「しかし、それでは……」
ベクターが不満そうにしていると。ワグナスは肩をすくめた。
「俺の方は自由の身になってせいせいしているんです。実はフィーリアを探しに行こうと思っているんですよ」
「それはいい知らせだな。見つかりそうか？」
「ええ。未分化な情報で、信憑性も薄いのですがね、十分に賭ける価値はあると思っています」
「……そんなあいまいな状況で動くとは、卿らしくないと思うが」
「情報を得た場所が何よりも気になっていましてね」
「何処だ？」
「天空の水盤です」
ベクターが驚きの表情を浮かべたのを、ワグナスは満足そうに見守る。
「昨日、俺はあそこで昼寝したんです。その時にね、夢を見たんで

すよ。フィーリアの場所をね」
　ベクターは厳しい表情で首を横に振った。
「ただの一度で、しかも夢。それも、儀式を伴わない昼寝。不明確以前の問題だと思うが」
「そうでしょうか。この四年間で天空の水盤に深く関わった魔術師が、桁外れな確率で立て続けにフィーリアを見つけているんですからね」
「事例としては少なすぎる」
「俺には、数の多い少ないよりも密度と質のほうが気になるんです」
　ワグナスはチラチラとベクターの表情を伺いながら続けた。
「チェイン・ライトニング（連結する雷撃）のシンシア・フェルナンディに、プルーフ・アゲンスト（積層の鑑定士）のリーザ・オーメント、スペル・エンハンサー（魔術の増幅者）のセーラ・クラウディア。参った事に、どれもグラムファーレの一族が誇る結界陣を簡単に突破する能力ばかりなんですよね」
　ワグナスは全く困った様子も無く、それどころか愉快そうに言った。

2章ー35　白の道、赤の道

「あなただって例外じゃない。サフィリアが天空の水盤を継いだ後は一番近くにいて、フィーリアを見つけている。すでに三つ持っている上で、更に見つけられるなんて数十年も無かった事だ。そのフィーリアの効果で付けられた称号がダイヤモンド・カッター（金剛石の刃）。それも、守りだけに徹したリーガル・バックラー（王の盾）を一撃で切断するだけの威力があるときているんですから」

「ワグナス卿。それは口外しない約束ではなかったか？」

ベクターは声を小さくしながらも鋭く注意した。

「していませんよ。俺とあなたしか聞こえていないんだから。対探知防護と音声消去の結界は常時張っていますよ。これでも、グラムファーレのはしくれなんですからね」

「やりすぎではないのか？」

「過剰防衛がグラムファーレの指針、と俺は勝手に思っていますから」

ワグナスの言葉にベクターは生真面目に眉をひそめる。

「自分の一族に対して、いいすぎだぞ」

「いいんですよ。元一族ですから。今日からはめでたく家無しです。あ、そうか。だから、俺の事を『卿』と呼ぶのは変ですよ」

「……」

本来悲壮な事を笑顔でいうワグナスに、ベクターは口を閉じて首を何度も横に振った。

「あなたがそんなに深刻にならないでくださいよ」

「しかし、姓までも奪うとは」

「名無しよりはましですよ」

名前を奪われ一族の所有物とされるのが名無しだ。個人の判断や人格などは認められない。やがて、人の口に上らせるのもはばかられるようになり、次第に忘れ去られてゆく。名無しとは命を永らえ

させた上で、存在だけを殺すという刑罰だからだ。
「何にせよ、行き過ぎた罰には違いない」
「俺は別に気にしていませんが」
「今後の七家全体の賞罰にも関わる。それに、卿……君のような優秀な人材を失うのは惜しい」
「うれしい言葉ですが、外からあれこれ言われて動くような七家じゃないですよ。特にグラムファーレはね」
ワグナスは肩をすくめてつぶやいた。
「で、決闘の話ですけど、どっちが勝つと思います」
「戦いは始まるまで分からない」
「だから、予想するのが面白いんでしょうが。どっちが勝つと思います？」
「……」
黙りこんでしまったベクターを見て、ワグナスは「おやおや」とつぶやいた。
「俺はシーグ君は結構いい線いくと思っています。昨日の戦いでしてやられたというひいき目もあるんですが。名無しのマードックの教えを受けたというのが気になる。彼はシャトランジ（王取り将棋）の達人で、こちらの守りの先を読むんですよね。戦法の読み合いで勝てたためしがない」
「惜しい人物を亡くした」
「本当に惜しい人物ばかりがいなくなりますね。不思議なくらいに」
ベクターに、ワグナスは鼻で笑って皮肉げに言う。
「そして、イービルスレイヤーの弟子でもある。彼はあらゆる嫌がらせの天才と言われていましたが――」
「公式には、政戦両略の差し手だ」
ベクターが言葉をさえぎって訂正する。
「イービルスレイヤーの言葉で、『敵に最も嫌なことをするのが戦略戦術の基本』というのがありましたよね」
ワグナスは全く気にせずに言葉を続けた。

「そう考えると、シーグ君はたいしたものです。よりにもよって手袋を頭の上に乗せるなんてね。俺なら思いつかないし、狙っても出来ません。喧嘩を吹っかける天才じゃないですかね？　さすがイービルスレイヤーの弟子だ」

「敵の平静を奪うのは、戦術としては悪くはない」

「だけどロディウスさんは、味方に対しても楽しい発言をしているそうですよ。公式に記録によると、ね」

ワグナスは笑いをかみ殺している。

「まあ、彼の活躍した時代は、敵だか味方だか分からない連中が盛りだくさんだったらしいですけど。おっと、それは今も同じかな？」

ベクターは外面は冷静さを保ったまま完全に沈黙した。

「腹が立つことがあるのなら、本音を言ってもいいじゃないですか。どうせ誰も聞いていないんだし」

「……」

「一人で抱えているのは不健康ですよ。で、健康的な俺としては自由に生きてみようと思うわけです」

「本当に悔いはないのか？」

「今のところはね」

「魔術師としての力を失うのだぞ」

「力ねぇ……」

ワグナスは空に向かってそびえる塔の群れを見上げた。

「魔術師とは奇妙なものですね。大陸中何処でも一跳びのはずなのに、何処にも行けない。声を遠くに飛ばせるはずなのに、何も言えない。権能のある一族に生まれて、それなりの力を手にしても息苦しくなる一方。その上、真実や理想や意地を貫こうとした者は――」

ワグナスは歩みを止めると同時に、口も閉ざした。

「おっとっと、広場もここで終わりですね」

アクリアエ・スリスと王城の間にも壁はない。ただ石畳の色が、白から薄い赤に変わるだけだ。

「王城に入ることももう出来ないし、俺が魔術を使えるのはここで

終わりです」
「私で力になれることがあれば言ってくれ」
ベクターは赤い石畳の上から言葉をかける。白い道の上に立ち止まったままで、ワグナスは少し考え込んだ。
「俺があえて言う必要も無い事でしょうけど」
「なんだ？」
「サフィリアの力になってやってください」
「……」
ベクターが杖に手をかけたのをワグナスは止めた。
「ただの頼みですよ。杖に誓う必要なんてありません」
「約束しよう」
ベクターが生真面目に言うと、ワグナスは呆れた様子で背を向けた。
「俺は決闘を見届けてから、メティスを発ちます。一段楽したら……っと、魔術の伝言は無理なので、手紙を書きますよ」
「分かった」
白い石畳の向こうに消えてゆくワグナスを見送り、ベクターは王城への道を歩き始めた。

2章－36　シー坊とリー姉

＊

シーグは王都の南、ホワイトホース区画へと向かっていた。区画整理された町並みを白い石畳が真っ直ぐに進む。そこを旅人や商人が途絶えることなく行き交っていた。

シーグが目標とするのは、南側にそびえる塔である。王都には合計6本の巨大な塔があり、6方位に均等に建っていた。それを目印にすれば、サフィリアの言うとおりに迷う事はない。

もしも一緒に歩いていたら、聞きもしないのに塔の由来や役目を説明してくれただろう。人差し指を教鞭のように立てて、流れるような口調で話しながら。

4年前とまるで変わらない仕草を思い出して、シーグは苦笑した。記憶を失うという事は、何もかもが変わってしまうことだと思っていた。考えも、習慣も、行動も別人のようになってしまうに違いないと。

だけど、サフィリアは相変わらず世話好きで、説明好きで、口を開けば説教ばかりだ。

先生にもなっていて、子ども達には慕われて、家も自分の好きなように作り変えている。世界中を回ることだって、今となっては当たり前のようにできるのだ。

ずっと夢見ていた事もそのままで、成りたい仕事について、やりたいことを実現している。

この4年間がどれだけ充実したものであったのか。再会してから一日で十分に分かった。

「ベクター……か」

シーグはつぶやいてから、無意識に舌打ちをした。自分がサフィリアの前から去り、記憶からも消えた4年前からずっと一緒にいた。

戦士であり魔術師でもある。何をとっても自分よりも遥かに卓越している。サフィリアの言葉から判断すれば、きっと良い師匠でもあったのだろう。教えられるばかりで、助けられるばかりで、迷惑のかけ通しだった自分とは違いすぎる。

昨日と今日だけで一体何人の人間が、何度彼の名を口にしたのか数えるのも面倒なほどだ。味方になれば、彼ほど心強い人はいないだろう。しかし、ベクターは今サフィリアに敵対している。

「一体、何がなんだか」

古い町は人の怨嗟を募らせてゆくのだと、ロディウスは言っていた。法と王の権威において非道が行われ、親子で争うようになり、豊かさが心を腐らせるようになる。王国が栄華を極め、醜く朽ちてゆくのはいずれ日が沈むようなものだ、と。

元から悲観的で、欠点には容赦が無く、悪態ばかりついていた。しかし、ロディウスの言葉を笑い飛ばそうとしていた者の口元はたいてい引きつっていて、恐れるように目をそらしていたように思う。

気がつけば、すすの匂いが鼻につくようになっていた。遠くから鉄を打つ音が聞こえてくる。石畳も建物の壁も白から薄汚れた灰色になり、大きな荷物を持っている人や、荷馬車を見ることのほうが多くなった。

皮や油や、色々な物が燃えてる匂い。商業区画特有の匂いが一体に充満している。これを悪臭という人も多いけれど、清潔すぎるメティスの中枢よりもシーグには親しみがあった。

道は複雑に入り組み、建物は高くなり始めた。迷っては大変なので、シーグは懐からアイフェの地図を取り出し、現在地を確認する。行く手には車輪を修理するため、横倒しなった馬車がある。

「すまねえな、兄ちゃん」

道の中ほどまではみ出してい馬車をよけて通ると、初老の職人が馬車の陰から出てきた。

「この近くに酒場はあるかな?」

「この先の四つ角だな。酒樽の並んだ店がある。あそこのエールは

うまいぞ」
　職人は笑顔で、やたら大きな声で答える。
「ありがとう」
　シーグが礼を言うと、職人は大げさに手を振ってくる。その後は、忙しそうに馬車の下にもぐった。通りの形と『×』『□』の記号を地図で確認し、シーグは商業地区を更に奥に向かって進んでゆく。
　地図をよく見てみると、目的地の『†』の周囲にはやけに『Ⅲ』が多い。つまり、王室御用達の鍛冶屋という意味だろう。包丁一本を研ぎに出すだけなのに、ずいぶんと大げさな場所を選んでいる。だが、サフィリアの台所に対するこだわりを思い出し、シーグは納得した。
　その時、背後に付きまとう気配を感じ取った。気づいたそぶりなど見せず足を進めると、追跡者もパタパタとせわしく足を動かして後ろをついてくる。小柄な女性と、シーグは判断した。
　地図を確認するふりをして立ち止まると、追跡者は何かにつまずいたのか、足並みが大きく乱れる。
　間の抜けた追跡者だ、と思いながら歩く。すると、２０歩ほど後ろを相変わらずついてくる。途中で道行く人に、間延びした声で挨拶をする追跡者。
　何だか馬鹿らしくなってきたシーグは、曲がり角を左に入り、その後に更に近くにある路地にもぐりこむ。追跡者をかわす最も初歩的な方法だ。
　少し待っていると、パタパタという足音と共に一人の少女が通りに飛び出してきた。慌てた様子で左右を見回し、どういうわけか頭上や足元の石畳の間を何度も確認している。その様子を見ていれば、刺客でないのは一目瞭然だ。脅かして追い払うことで済まそう。
　シーグは少女の後ろにこっそりと忍び寄った。少女は下水道に通じる小さな排水溝を念入りに覗き込んで、立ち上がったところだった。
「おい！」

「ひやぁー」
少女は悲鳴と共に大げさに両手を挙げて倒れこんでくる。これには、シーグのほうが驚き、慌てて受け止めた。
普通、倒れるにしても声とは逆に逃げるだろうに……。
何もかもが異様な追跡者を相手に、少しでも本気になっていた自分が間抜けに思えた。
すると、少女はクスクスと笑い始めたのである。
「やっぱり、シー坊ね」
赤毛の少女は首をかしげて、背中越しにシーグを見上げた。間の抜けた追跡にその愛称で呼ぶ赤毛の少女。
「リー姉？　いや、リーザ……さん」
「姓だけは変わって、今はリーザ・オーメントっていうの。でも、私を呼ぶときはリー姉のままがいいわ」
リーザは小首をかしげて、優しげに笑みを浮かべた。

2章－37　魂の一撃

「えーと、４年ぶりになるよのね？」
「だから、俺は１６歳だ。今更シー坊はないだろ」
シーグは肩を支えて立たせようとしたが、リーザは更にもたれかかってくる。長く伸ばした赤毛を三つ編みにしていて、着ている服も普通の町娘が着ているような質素なスカート。首元が大きく開いたシャツの上にベストを着ていた。シーグのちょうど肩辺りまでの身長も、顔も４年前とほとんど変わっていない。
「本当に大きくなったわねぇ」
背中を預けたままでリーザは背伸びをした。そして、シーグの額に手を伸ばす。体が更に密着して、相当に際どい体制になってしまった。
「あの、リー姉。どいてくれない？」
「疲れちゃったの？　女の子一人支えられないなんて、情けないぞ」
「女の子って……」
１８歳といえばもう一人前だ。結婚をして家庭を持っている事も珍しくない。
「女の子はね、幾つになっても女の子なのよ」
リーザは目を糸のように細めてころころと笑った。サフィリアやアイフェのように、道行く人を振り返せるような特徴的な容姿ではない。しかし、柔らかな物腰や親しみのある表情。４年経っても忘れていない。消え去ったと思った、記憶の中だけの笑顔が目の前にある。
「うーん、ちょっとは筋肉がついたのかな？」
いきなり、リーザはシーグの腕を抱え込んで、胸板に手を這わせ始めた。道の真ん中でこれほど身を寄せ合っていたら余計な誤解を招きかねない。腕の辺りにやわらかい感触が押し付けられる。
「まだ伸びそうね。私もあと少しだけ大きくなりたかったな」

「リー姉……」
言葉を途中で切って、シーグは慌ててリーザを押しのけた。ぞっとするほどの凄まじい敵意を感じたからだ。
「急にどうしたの？」
リーザは、ほんわかした表情を浮かべている。
「隠れていろ」
シーグは路地にリーザを押し込めた。そして、敵意の発生源である建物をにらみつけた。大きな窓があり、視線を感じたのはそこからだ。あらゆる飛び道具を使うには十分な大きさ。人数はとりあえず一人。今のうちに手を打たなければ。
「まあ、何かあったの？」
「何も無いなら、こんなに慌てない」
「あらまあ、大変」
全然大変そうに見えない仕草と、ノンビリとした声でリーザは慌てている。
自分を狙うとしたら誰がいる？　シーグは考えた。
昨日戦った魔術師達の一族。サフィリアを目の敵にする連中。アイシャや、ガリウスに関わる人々。シージペリラスという事実が知れ渡っただけでも、正義感から命を奪いに来るハタ迷惑な人間も必ずいる。そういえば、ガイスは商人でここは職人地区。手勢を連れて襲い掛かってきても不思議ではない。
心当たりがありすぎて特定できない。だが対象が自分で、リーザが無関係な事は確かだ。
自分一人なら、戦うにしても逃げるにしてもどうにでもなる。だが、のんびり屋のリーザを連れて逃げられる自信など無い。
「リー姉は家に帰れ。この近くなんだろ？」
「うん、すぐ目の前よ」
「じゃあ――」
建物の扉が開いて、筋肉質の男が出てきた。太い眉とびっしりと生えた口ひげ。岩のように無骨な顔。手に持っている大型の武器は

ハンマー。戦闘用のものとは違う。真っ黒に焼けた肌には火傷の跡が多く、服はすすや油にまみれている。

格好から判断するに鍛冶屋に違いない。しかし、隙の無い歩き方から戦士としての技量も相当なものだとシーグは判断した。

「貴様、どういうつもりだ」

開口一番に男は怒鳴りつけてきた。

「街中で敵意を垂れ流しにして、そっちこそどういうつもりだ？」

問いに対し、黙ったまま答えが無い。シーグは呼吸を落ち着けてナイフに手を触れる。

「肉ダルマが大層に――」

「まあ、お父さん」

「――こ……をおお？」

言葉を操れるのか。頭の中まで筋肉のくせに、という言葉の変わりに素っ頓狂な声をシーグは出した。振り返ると、リーザは何度もうなずいている。

「リーザ。無事だったのか。よかったよかった。悲鳴が聞こえたのでお父さん心配したんだぞぉ」

頭の悪そうな声につられて前を向くと、筋肉質の男はとろけそうな笑みを浮かべてリーザに微笑みかけている。

「お父さん？」

そうつぶやいた瞬間、男はピタリと動きを止めた。一瞬後に、仮面でも付け替えたかのように悪鬼の表情となってシーグをにらむ。

「貴様に……」

張り詰めたような敵意が、燃え上がる殺意へと入れ替わっていくのをシーグは感じ取った。

「お父さんと呼ばれる筋合いはないぞ、小僧！」

腕の筋肉が荒縄のように盛り上がってゆく。力いっぱいに握り締められたハンマーの柄がメキリと音を立ててきしむ。そして、殺意が頂点に達した瞬間。男は大振りに振りかぶり、シーグの頭を目掛けてハンマーを投げ付けたのだ。

空気を裂いてうなり、謎の迫力を秘めた鉄の塊。シーグは真横に倒れこむようにして避けた。

ハンマーは激しい音と共に、石作りの壁を簡単に突き破った。更に先の壁までも貫通して、通りを越えた向こう側の建物の壁を破壊して見えなくなった。耳がつぶれるような轟音に、道行く人が何事かと注目する。

シーグは地面に倒れこんでから、受身を取って慌てて一挙動で立ち上がる。大振りの力技を相手にするような回避の方法ではない。だが、鉄槌のもつあまりの迫力故に、紙一重で避ける気持ちなど吹き飛んでしまったのだ。

もう片方の手で、何かを投げ付けられていたら命は無かった。ガイスの放つメティオスマッシャーよりも、こっちの方がよほど圧倒される。

リーザの父は、ゆっくりとシーグに向かって歩いてくる。相手は空手で、身軽さはこちらがはるかに上。いつでも逃げられると頭では理解している。しかし、体の底から湧き上がる戦慄にシーグは全身に汗がにじんだ。正直ワイバーンなど比べ物にならないほどに恐ろしい。

2章－38　父と娘と祖母

「ダメじゃない、お父さん」
場違いなほどのんびりしたリーザの声と共に、張り詰めていた緊張が一度に弾け飛んだ。
「また、建物を壊したりして。みんなびっくりしているわ」
頬を膨らませ、腰に両手を当ててリーザは父親に訴える。
「それに、この人はお客さんよ。サフィリアの変わりに包丁を取りに来てくれたの」
リーザと会話するごとに、通り全体に張り詰めていた暑苦しい圧迫感が引いてゆく。
「あのハンマーだって、投げたりしたら悲しいわ。私が一生懸命作ったのに……」
リーザが声を小さくすると、父親もしょんぼりとした。実際に大きな体や広い肩幅がどうにかなったわけではない。しかし、全身にみなぎり大気までも震わせるような気配が静まったことをシーグは感じ取った。
「取って来る」
リーザの父は短くつぶやくと、自ら破壊した壁の穴に体をねじ込んで建物の中に入った。
「あら、グレイルさん。またですか」
「すまない」
短く無愛想な謝罪をした後、グレイルは向こう側に開いた風穴をくぐって通りの向こうに出て行った。建物の住人は壁の穴から顔をのぞかせた。笑顔がそのまま顔中の皺になったような小柄な老婆だった。老婆は皺の狭間から、小さな目を見開く。まずはリーザを見て、次にシーグの全身を無遠慮に眺めた。
「ああ、なるほど。そういうことかい」
老婆はそれですべて納得したようで、微笑みながら何度もうなず

いている。
「ごめんなさい、お婆ちゃん。起こしてしまった？」
「いいや、ちょうど目覚ましに良かったよ」
「危なくはなかったの」
「大丈夫だよ。最近は二階で寝るようにしているから」
「さすが、お婆ちゃんね」
「ねぇ、リーザや。今度は鉄板でも仕込んでみるかい？」
「いいわね。いっそ、一階全部を壁にしてしまおうかしら」
「おお、それは名案だねぇ」
老婆はヒャヒャと笑い、リーザはウフフと笑う。一方、シーグの表情は引きつっていた。すくなくとも、建物に開いた風穴越しにする会話ではないからだ。
「紹介するわね、こちらがシーグさん」
「ワシはリーザのババじゃよ。母方のな」
それは、一目見たときからなんとなく分かっていた。優しげな声、親しみのわく笑顔。どこか抜けたようでいて、達観した態度。リーザが老いればこのようになると簡単に想像できる。
では、グレイルの母親とはどんな人なのだろうか？　雷雲のように湧き上がる想像力に、シーグは慌てて蓋をした。
「話には聞いているよ。リーザの憧れの男の子なんだねえ」
「憧れ、だって？」
シーグは何となく恐ろしくなって、風穴の向こうを見た。グレイルがハンマーを持って帰ってきているが、まだ声の届く距離ではない。
「ちなみに女の子で憧れている人は、サフィリアさん。リーザのいつもの口癖さね」
「嫌だわ、お婆ちゃん」
老婆はヒャッヒャッヒャッと笑い、リーザは顔を淡く染めて照れている。
なんで、そっちで顔を赤くするのだろうか？　それに普通憧れの

人というのは、年上が相手になるのではないか？　シーグにはよく分からなかった。

やがて、グレイルが壁にあいた穴を潜って戻ってきた。頬を染めるリーザを見て、顔の表情がひび割れるように険しくなってゆく。そして、手がかりに掴んでいた壁のレンガが粉々に破砕した。弁解しても泥沼になるだけのような気がして、シーグは口を閉ざした。

「ねえ、お父さん。包丁はもう仕上がっているかしら？」

リーザが声をかけると、グレイルの炎のような闘気はたちまち霧散した。

「うむ」

「じゃあ、剣は？」

「うむ」

「良かった。間に合ったのね」

「うむ」

「じゃあ、早速試してみましょう」

「うむ」

リーザは手を叩いて微笑むと、グレイルは再び「うむ」とうなずいた。老婆はヒャッヒャッヒャと愉快そうに笑っている。シーグは自分だけが取り残されているように思えた。たぶん、それは気のせいではない。

「シーグ、こっちへ来て。見て欲しいものがあるの」

リーザが腕を抱えようとしたので、慌てて後ずさる。すると、リーザは強引にシーグの手を繋いで家のほうに引っ張った。すると、再びグレイルからは陽炎のような圧力が立ち昇り始める。

構ってもらったらもらったで、今度は殺意混じりの闘気にさらされることになる。この一家と共にいる時、身の置き方について考えねばなるまい。それも速やかに。シーグは頭を必死でひねった。

しかし、戦いのときとは異なり具体的な対策も、場当たり的な対応も全く閃かなかった。無責任にも祖母は楽しそうに笑っているだけだ。娘のそばにいる時間が長い分だけ、父親はマントルピース（

暖炉）のように加熱していく。

徐々に密度を増す熱気にさらされながら、シーグは牧場から引き出されていく牛の気持ちが何となく分かった。

2章－39　剣と技

リーザはグレイルが出てきた建物の前に立った。
「ここが、私達の工房なのよ」
扉の上に『オーメント商会』と、店の名を書いた看板がかけられていて『Ⅲ』の記号がついていた。
「王宮の御用達なのか？」
「お父さんが戦場で王様を助けた功績よ。１０年前だったわね？」
リーザは誇らしげに自分の父親を見上げた。グレイルは腕を組んで、背筋を伸ばす。まるでそびえ立つ戦神の像のようだ。
「怪我をした馬と王様を抱えて、戦場から陣地まで走って助けたのよ」
その様子がごく自然に頭に浮かんで来て、シーグは簡単に納得できた。
「あ……そうなんだ」
「驚かないの？」
シーグの生返事に、リーザが逆に驚いている。その後、リーザは少し残念そうに言葉を続ける。
「そんな芸当が出来たのは、乗っていた馬はポニー（小型の馬）で、王様も当時は子どもで小さかったからよ。いくらお父さんでも、軍馬と鎧兜の大人は一緒に抱え上げられないわ」
「うむ」
「片方が限界よね？」
「う……む」
グレイルは少し戸惑ってからうなずいた。
普通は片方でも不可能である。軍馬は大人６人分の重さはあるし、完全武装の騎士は軽く見積もっても体重が倍になる。
「だけど、酒場では大人になった王様を抱えて逃げたことになっているの」

「うむ」
リーザは楽しそうに笑った。
詩人達はどの程度脚色して、酔っ払い達を喜ばせたのだろうか。軍隊を丸ごと肩に乗せて、伝令の早馬を追い抜いて大陸を横断した。そんな事になっていたとしても、シーグは驚くつもりはない。
建物の中は工房というだけであって雑然としていた。部屋の隅には山積みになった鉱石やマキ、壁には様々なサイズのハンマーや火箸が架かっている。金床に水桶、油のにじんだテーブルや布切れ。部屋中には鉄とススと油の匂いが充満し、熱気が漂っている。
特徴といえば、天井がやたらと高い事だ。グレイルの身長にあわせて作られているに違いない。
「サフィリアの包丁がここにあるのか？」
包丁を研ぐどころか、あらゆる武具を作れそうな設備である。
「それもあるけど、私達からあなたに贈り物よ。気に入ってもらえるとうれしいけど」
リーザはシーグの手を離して部屋の隅に引っ込んだ。一方、グレイルは地面に膝をついて、金床に乗ったままの剣を投げ付けてきた。シーグは空中で柄を掴んで受け止める。
切っ先が正確に顔を狙っていたのは、たぶん偶然ではなかったのだろう。
剣は驚くほど軽かった。反りのついた形はカトラス（半月刀）に似ているが、刀身が遥かに細い。重さで叩き伏せる剣ではない。軽さを生かし、速さで突き、あるいは切る。そのために刃の鋭さを極限にまで追求している。
シーグ自身が理想として描いていた剣だ。しかし、この形状には欠点がある。
「切れ」
グレイルは短く言って、積み上げてあったマキを一つシーグに向かって無造作に放り投げた。それでも投石器から放り投げられたように、唸りを上げてシーグに襲い掛かる。殺意混じりのマキは、そ

うであるが故にシーグの目は明確に捕らえる事が出来た。回転する縦長の形状が止まって見えて、木目とささくれ立った皮の一つ一つまでもが目に焼きつく。

考えるよりも先に、シーグは横なぎの一閃を放っていた。カッと木を硬い物で叩くような音が鳴る。その後、空中でマキが両断されて地面に落ちた。

マキの片方を持ち上げ、グレイルは切断面を確認した。無表情のままだが、眉が少しひそめられる。たぶん、驚いているのだろう。

「ね、言ったとおりでしょ？」

「うむ」

「そりゃそうよ。シーグは普通の剣でワイバーンの足を切断できるのよ。お父さんの鍛えた剣なら、マキぐらい切れて当然じゃない」

「むぅ」

「お父さんったら、全然信じてなかったの。たかが１６歳の青二才にそんなことが出来るはずが無いってね」

リーザは勝ち誇った表情でグレイルを見ている。

「そんな事ができるのは、半生を剣のためにささげた人だけなんだって。シーグはやっぱり凄いわ」

手放しにリーザが褒めると、グレイルの握ったマキがメリメリと音を立てる。あの怪力は、自分が１０生涯分の時間を捧げたとしても身につくまい。そもそも、人間業でさえない。世界は広いのだと、シーグは改めて思い知った。

「お父さんも少しは何か言ってよ」

「む」

リーザに言われても、グレイルは無愛想に口を一文字につぐんだままだ。

「ごめんなさいね。二人だけの時はびっくりするくらい喋るのよ。でも、初対面の人がいるといつもこうなの。人見知りする年でもないのにね」

「……」

リーザが笑いかけても、グレイルはまばたき以外で表情を動かすつもりはないようだ。
「話を戻すけど、もしも10代の若さでそんな達人がいるなら、娘をあげてもいい……」
「む！」
グレイルは地面を踏みしめ、大慌てで立ち上がった。工房全体が揺れて、天井から埃が降ってきた。握っていたマキが完全にへしゃげる。
「とはまでは言ってなかったけど」
「う……む」
グレイルは息が詰まるような唸り声を上げた。
「その剣は使いやすいでしょ。シーグのために鍛えた形なのよ」

2章－40　火神ゴヴァノン

「だけど、刀身が……」

鏡のようだった刃にギザギザの刃こぼれが出来ている。これでは、攻撃を受けただけでも折れてしまうだろう。たった一度しか振ってしないのに、もう使い物にならなくなってしまった。切るという攻撃だけに特化しすぎた剣は、必ず脆さを内包してしまうのだ。

この形状では攻撃を受け止めるなどを論外だ。この剣を使いこなすには、切断する箇所を見抜く洞察力、速く無駄のない斬撃、敵の攻撃全てを受けずにかわす回避力がなければならない。

「さて、問題です。なぜ刃こぼれしてしまったのでしょうか」

「俺が未熟だからだろ」

リーザの問いに自重するように答えると、グレイルが顔を上げてシーグを凝視した。

「じゃあ、剣の何処が問題なのかな。刃こぼれの理由について、材質とか形状、剣の性質をふまえて答えよ。２００字以内よ」

「鉄の強度の実態は、硬度と柔軟性のバランスにある。その特性を剣に生かすには、衝撃を十二分に受け止めるだけの厚さが必要なんだ」

リーザの問いに対して、シーグはすらすらと答えた。考えるまでも無く、今まで何度も頭の中で繰り返してきた言葉だからだ。

「ここまで細く、軽く仕上げると脆くなってしまう。ダイヤモンドでさえ、細く削れば指先で折る事が出来てしまうから」

硬度の高い物体は鋭い切れ味を生み出せる。しかし、物体の柔軟性が伴わなければガラスや陶器と変わるところが無いのだ。強度とは硬度と柔軟性のバランスである。片方だけ極端でも意味が無い。鉄が優れた金属なのは、このバランスが絶妙であるからなのだ。

「それに……」

言葉を続けかけて、シーグは黙り込んだ。

「今何文字だ？」
「私にも分からないわ。数えてないもの」
リーザは無責任に笑った。まあ、どうでもいい事なのでシーグは腹も立たず、なんとなく頭をかいていた。グレイルはのそり、のそりと歩き出しシーグの横、というよりも遥か斜め上――シーグの目の高さがグレイルの肘である――を通り過ぎて工房の奥に消えた。
「合格みたいよ」
「何が？」
リーザは答えず、両手を合わせてニコニコと微笑んでいる。
「お父さんにとって、自分で鍛えて完成させた物は自分の子どもみたいに愛しいの」
ずいぶんとゴッツイ鋼鉄の親子だな、とシーグは心の中だけでつぶやいた。
「だから、武器の特性や使い方を心得ている人にしか渡したくないのね」
「なるほど」
道具が出来るまではもちろん、使われることも気にかける。筋金入りの職人には珍しくない性格だ。シーグから見て、グレイルはそれ以外の何者でもなかった。
「でも、２００文字を越えたあたりから聞くのが面倒になるみたいなのね」
そんな性格で、王宮の御用達の鍛冶屋が務まるのか、シーグには不思議だった。
「だから、私は私の事を何もかも理解してくれる人にもらわれないとダメね。そして、短いけど心に染み渡るような告白をお父さんの前でしてもらわないと。キャッ！」
何が「キャッ」なのかよく分からない。だが、リーザが頬を染めていると、グレイルが沸騰するのは目に見えている。工房が灼熱地獄と化してはかなわない。シーグは話題を変えようと頭をひねった。
「ところで、グレイルさんは魔術師なのか」

「違うわよ。どうしてそう思ったの？」
「あ、いや」
怒りと共に雷雲を呼ぶサフィリアを思い出したからだ。彼女が雷神タラニスなら、グレイルは火神ゴヴァノンと言った所だ。ゴヴァノンは同時に鍛冶を司る神でもあったからまさしくピッタリといえる。
「ちなみに、私は魔術師になったのよ。立派でしょ？」
リーザは胸を張って自慢げにいう。そのせいで、すっかり女性らしい体つきになっている事に改めて気づいた。変わっていないのは身長だけだ。鼻歌交じりにステップなどを踏まれると、胸元の大きく開いた服だけに目のやり場にシーグは困った。
「そうだ、プルーフ（鑑定士）ってどういうことなんだ？」
「魔術の品の鑑定が上手って事よ」
「じゃなくて、どうしてメティスにいるんだ？　４年前サフィリアの前から姿を消すはずだったんだろ」
「うん。でも、戻ってきたの」
「いつから？」
「私は２年間一緒にいるわ。魔術の指南をしてくれたこともあったわね」
「ちょっと待てよ。俺達がサフィリアの前に現れちゃいけないんじゃなかったのか」
「それをいうなら、シー坊も昨日からずっと一緒でしょ？」
「じゃあ、サフィリアの狂気って一体……」
ロディウスに騙されただろうか？　まさか、そんなはずはない……と欠けらも思えないのはどういうことだろう。
ロディウスは口を開けば根拠の無いハッタリと重い冗談と笑えないユーモアに満ち満ちていた。彼の言ったことを深く考えもせずに、すんなり信用してしまったのか不思議でしょうがない。どうしてチラリとも疑わなかったのだろうか。
騙されたなこのアホウめが、と４年越しの大笑いする姿がやけに

明確に浮かび上がる。いや、むしろ最も納得できる展開だ。そうに違いないと、確信さえ持てる。シーグが怒りに打ち震えていると、リーザや悩ましげなため息をついた。

「あーあ。へこむなぁー」

「え？」

「私の事を聞いているようで、全部フィーちゃんの事ばっかり」

リーザはふて腐れた様子で壁にもたれかかった。肩を引き寄せるように腕を組んだので、ますます目のやり場に困る。

「久しぶりに会ったのに、私の事なんてどうでもいいのね……」

「あのな、冗談は――」

怒りに思わず荒くなったシーグの声は尻切れになった。背後に迫り来る気配に冗談では済まない熱を感じたからである。

2章－41　その名はシャープネス

「あら、お父さん」
リーザは軽い足取りで父親の元へ歩いていった。グレイルは片手で剣、もう片方の手に鉄板を持っている。
「何を怒っているの？」
「む！」
リーザが不思議そうに首をかしげると、室内の温度が一挙に下がったような気がした。リーザは父親から剣を受け取ると、刀身から柄までゆっくりと手をかざして確認する。職人の目利きと明らかに違うのは、剣そのものではなくて自分の手の甲を真剣に凝視していることだ。一体何を見ているのか、魔術師のやる事は分からない。
「うん、完璧な仕上がりよ」
リーザが満足げに微笑むと、グレイルは唇を引き結んで黙り込んだ。怒る理由も無いし、気配も静かなまま。たぶん照れたのだろうとシーグは思った。
刀身の形状はさっきと同じ。だだし、刃の部分に浮き上がる波型の文様は、先ほどよりも遥かに美しく仕上がっている。更に刃が鍛えられ、研ぎ澄まされているのだ。
違いといえば柄には翼をかたどった金と銀の細工、持ち手がバスタードソード（片手半剣）のように長い。両手でも持てるが、この刀身の長さでは突く以外では却って使いにくいだろう。
剣は長さに比べてあまりにも細く、繊細な構造だった。武器というよりは工芸品と呼んだほうが近い気がする。
「今度は、この剣を試してみて」
リーザは両手で捧げ物でもするように、恭しくシーグに剣を差し出した。グレイルは眉をひそめて、更に気難しい表情でこっちをみている。突き刺さるような緊張感があるので、照れていないことだけは確かだ。

「だけど……」
「シーグなら大丈夫」
何を根拠に言っているのか、リーザは自信満々だ。
剣も柄も先ほどとは比べ物にならない完成度である。もし、刃こぼれでも起こしたら……職人がたきのグレイルに何をされるか想像もしたくない。
グレイルはもう片方の手で持っていた鉄板をシーグにみせた、そして。
「突け」
と無愛想に言った。
「ちょっと待て、剣がつぶれるぞ」
鉄板はグレイルが持っていればタイルにしか見えないが、リーザならば両手で抱えるほどの大きさがある。厚みは親指の幅ほど。マキを切断するのとはわけが違う。当然鉄板の方が硬く、何倍も重量がある。
「突き貫け」
グレイルは鉄板を天井に届くほどに投げ上げた。放物線を描けば、ちょうどシーグの頭の上になる。
「おい！」
シーグは舌打ちをする。このおっさんは曲者だ。いっそ自分目掛けて思い切り投げてくれれば、その力を利用して突きぬく事もできたのに。
その上、突きは胸の高さから真っ直ぐ繰り出すのが最も威力があるが、背後の壁までの距離が狭く踏み込みの余裕が無い。更に回転しながら落ちる方形の物体は、端を突けば板が回転して力が逃げる。中心を突かねばならない。
鉄の重さを生かすために、地面ギリギリまで落下させる。そして、下段から突き上げる腰ダメの一撃しかない。一瞬のうちにシーグは判断した。考えるというよりも、半ば条件反射に近い。
膝をつき、柄を握る両手も地面に触れるほどに体勢を低くし、鉄

板が落ちてくるのに備える。集中したときの常として、鉄板の回転が止まって見えた。狙うのは中心、ホクロのように小さな錆が浮いた場所。

「一撃必殺、神速果断――」

シーグは呪文のようにつぶやく。すると、頭からつま先まで張り詰めた一本の糸で結ばれたような感覚が走った。そして、鉄板が更に一回転した後、放たれた矢のように頭上に突き上げる一撃を放った。

キン、と針金を弾いたような音。シーグの繰り出した切っ先は、見事に鉄板の中央を貫通していた。そのまま、流れるような動きで剣先を振り下ろすと鉄板はガラガラと音を立てて床を転がっていった。

あっけないほどに軽い手ごたえ。幻でも突いたのかと思ったが違う。あまりに切っ先が鋭く、容易く鉄板を貫いたためだ。

「……刃こぼれひとつ無い」

シーグは信じられない思いで、鏡のような刀身を見た。ガラスの破片よりも鋭く、鉄の強度を遥かに超えている。その上で、小手先だけで剣を操れるほどに軽い。力でも重さでもなく、鋭さと速さと技で刺し貫く。そんなものはただの理想論だと、誰もが笑い飛ばしてた。熟練の戦士も、達人と呼ばれる鍛冶師も、王宮の魔術師でさえもだ。

グレイルは無言でのしのしと歩いて鉄板を拾い上げる。切っ先が貫いた跡を確認し、その後シーグを見た。

「なぜ浅く刺して、剣を払った？」

グレイルがリーザ以外の人に二言以上の言葉を発するのは、これが始めての様な気がする。それが刃こぼれを起こさない剣と同じほど意外で、シーグはとっさに言葉が出なかった。

「なぜだ？」

グレイルの声は苛立つ響きを帯びている。

「人のサイズなら、指から手の甲まで。ワイバーン位の巨大な怪物

でも、指先から肘の長さまで。それ以上刃を埋め込むのは無意味だから」
「なぜだ？」
「骨や内臓を貫いて、その先に刃をもぐらせても効果は低い。背中まで突き破るなんて論外だ。剣が抜けなくて、次の対応が遅れる。速やかに命を奪うにしても……」
シーグは話しながら、無意識のうちに背中の古傷に手を回していた。
「深く突き刺すよりも、剣をまわして傷を抉るか、もう一度攻撃を加えたほうが有効だ」
「うむ！」
グレイルは大きくうなずくと、シーグに向き直って唇の端を吊り上げた。見た目には恐ろしいが、笑った……のだと思う。リーザがニコニコと微笑んでいるから、少なくとも怒ってはいない。
「おーやおやおや」
ノンビリとした声を出しながら、リーザの祖母が部屋の中に入ってきた。そして、全員の顔をゆっくりと見回す。
「合格のようだねぇ」
老婆はヒャッヒャッヒャと笑うと、リーザに細長い包みを渡した。緋色でキメの細かい布だ。何か重要なものが包まれているのだとわかる。
リーザが丁寧に包みを解いていくと、黒銀色の鞘が姿を現した。金属製の鞘に、エナメルが張られている。剣の柄と同じく、各所に繊細な細工がされていた。
「剣の名はシャープネス。鋭い刃、隙のない洞察、明敏な切れ者。その名の意味は様々だけど――」
リーザは言葉を切って捧げ持つように鞘を持った。そして、真剣な表情でシーグを見つめて差し出す。
「果断の心と神速の動きで、必殺の一撃を生み出せる。あなたのための剣よ」

シーグは求められるままに鞘を受け取った。刀身を鞘に収めると、小さな鈴を打ちつけたような心地よい音が鳴る。柄にある翼の細工と、鞘にあるらせん状の模様が合わさり、羽ばたく鳥のよう見えた。

2章－41　その名はシャープネス（後書き）

ようやくここまで来ました。タイトルの由来である『シャープネス』

最初はここまでで、１２０分の予定だったのですけど……。いつの間にやら3倍近くに（笑）

新たな武器を手に入れて、シーグは『ヘタレ』の汚名を返上ができるのか？

2章－42　大切な事

「シャープネス……」
シーグは魅入られたように剣を見つめた。
高いとはいえない背丈、筋肉のつきにくい細すぎる体。戦士の理想とはかけ離れた体格に生まれ、どれほど鍛えても半人前にさえなれなかった。力仕事をした事の無い貴族の子にさえ力比べでは負けた。かといって訓練に打ち込めば、筋肉よりも先に体の筋や関節が悲鳴を上げるのだ。
医師にも、故郷の剣の師にも、同僚達にも。剣を持つなど不相応だと何度後ろ指を指され、笑われたか分からない。
だから力を諦め、技と速さと持久力を追求し、反応速度を鍛えるしかなかった。学ぶ場所を変えて師を選び、体調と相談して訓練を選び、頭を働かせて戦法を選んだ。口先三寸であっても、下らない小細工でも、戦況を有利にするためならば何でも身につけてきた。
１５歳までは無理をした後や寒い日には、数日に渡って体中の痛いが治まらなかった。年齢と共に治まってきたとはいえ、今でも激しい戦いの後はたいてい肩が痛む。
投げナイフはすぐに自分に合っていると分かった。しかし、接近戦のための武器を探しても見つからない。元々、体格が通常の戦士と違いすぎるし、戦法まで独自のものだ。通常の武具があうはずが無い。
だが、手の中には何度も描いてきた理想を遥かに超える剣がある。今まで使ってきたどんな剣よりもしっくりと手になじむ。鉄板をバターのように突き抜く研ぎ澄まされた刃だ。
「気に入ってくれたみたいね。頑張ったかいがあったわ」
リーザは自分の事のようにうれしそうに微笑んでいる。
「どうして……」
「だって。シーグはずっと戦士になりたがっていたでしょ？」

「でも、俺は姿を消したままだった」
「だけど、生きている事は知っていたわ」
「４年間、何の連絡もしなかったんだぞ」
「たった４年じゃない。人間はその１０倍は生きれるのよ？」
リーザは目を細めてコロコロと笑う。
「シーグはずっと戦士になりたがっていたし、私も応援していた。今の私には、ちょうどプルーフ（鑑定士）として能力があって――」
リーザはそこで後ろを振り返った。父と祖母にうなずきかけてから再びシーグを見つめる。
「鍛冶師の父と、細工師の祖母がいたの。だからよ」
「じゃあ、今までずっと俺にために？　いつ戻ってくるかも分からないのに？」
「いつかは戻ってくるって信じてたもの。でも、会った当日にいきなり決闘騒ぎだなんて、さすがに予想もできなかったわ。ましてや相手があのリーガル・バックラー。決闘の方式は『ヴァンガード』なんだもの」
「その……何と言ったらいいのか」
立て続けの出来事にシーグは嬉しいやら戸惑うやらで言葉が出てこなかった。
「感謝しているのは私達の方よ。リーガル・バックラーに挑む決闘者に武器を授ける。それは、プルーフにとっても鍛冶師にとっても名誉な事なのよ。さあ、その剣を身に着けてみて」
シーグはベルトに剣をつけた。左腰に剣があるだけで気持ちが落ち着いた。ほんの一日ほどつけていなかっただけなのに。
「靴がもうダメね」
リーザは三歩ほど下がって、シーグの全身を何度も見渡した。
「シャツとズボンは悪くないね。でも、ベルトはともかく、バックルがいまいちだわ」
サフィリアからもらった服以外の箇所だけを指摘されて、シーグは憮然とした。

「ズボンがベルトと合ってないからかねぇ。でも、使い込んだ革のベルトはエナメルの鞘とピッタリ合うかのぉ」
「じゃあ、それ以外は着替えた方がいいわね」
孫と祖母は無遠慮にシーグを指差しながら相談している。
「……つまり、全部取り替えるということか？」
「当たり前じゃない。決闘は男の晴れ舞台よ。それにふさわしい格好をしないといけないわ！」
リーザは腰に両手を当てて、張り切っている。老婆も何度もうなずいている。
「光沢のあるエナメルの鞘だもの。ズボンは今みたいに濃い色が普通かねぇ」
「あえて薄くしてみると、よく映えるわ。でも、そうすると銀色の鞘が目立たないかな」
女性二人は服の色や形について、真剣に討議している。グレイルはどうでもよさそうだった。それは、シーグも同じである。
「いけない。その前に大切な事があったわ」
「おお、そうじゃった、そうじゃった」
祖母と孫はお互いにうなずいた。そして、リーザは姿勢を正してシーグにゆっくりと歩み寄ってくる。お互いの息が届きそうな距離、リーザの胸元が真下に見えてシーグは空中に目を泳がせた。
「シーグ、私から大切なお願いがあります」
薄いグレーの瞳がシーグを真っ直ぐ見つめてくる。この４年間と素晴らしい剣のためなら何を言われても断るわけにはいくまい。シーグはただならぬ覚悟と共に唾を飲み込んだ。
「お茶をご一緒にいかがですか」
「……は？」
シーグは間の抜けた声を出し、グレイルは声も出さずにシーグをにらみつける。老婆はそんなグレイルの腕を掴んで、工房の奥に引っ込んでいった。
「私とじゃあ、嫌？」

「いや、そんな事は……ないけど」
「決まりね」
リーザは両手をパチンと合わせて満面の笑みを浮かべたのである。

2章ー43　魔術講義2

＊

職人であるオーメントの一家は、一人一人が建物を持っていた。風穴が開いたのが祖母の家、無骨なグレイルの鍛冶場。リーザの工房は大通りに面して建っている。

外面は他と同じ薄汚れたレンガの家だったが、正面に立てば違いが分かる。窓からのぞくカーテンのレース模様。玄関の扉は明るい色に塗装されていて、鳥をあしらったノッカーがついていた。細かいところまで掃除が行き届いている。

入り口の階段には、一段ごとに植木鉢が置かれていて、色とりどりのつぼみをつけていた。あと、数日のうちに開きそうなものもある。

「へぇ、魔術師っていうのは寒いうちに花も咲かせられるのか」

シーグが感心すると、リーザがクスクスと笑った。

「違うわ。雪解けと同時に咲く種類の花なの。インボルグまであと3日ね。それまでには全部咲くはずよ」

「もう、そんな時期なのか」

というよりも、そんな祭りがあったこともシーグは何年もの間忘れていた。

雪解けが進み、鉛色の空が徐々に春の青空に変わってゆく頃。冬眠から覚めた動物達が動き出し、小麦が一斉に芽を出す時期がある。インボルグは、その間に行われる。春の訪れを祝い、豊作を祈願する祭りだ。

この祭りの後には世界中が冬の眠りから目覚める。雪の閉ざされた街道が開くと行商人達は忙しく移動を始め、農夫達は畑仕事に追われることになるのだ。

「さ、早く来て」

リーザに腕をとられて家の前に立つ。勝手に扉が開くのではないかと身構えていると、リーザが手ずから扉を開けた。中に入るのを渋っていると、後ろからリーザがシーグを押しこむ。

手で押すのではなく体ごとぶつかってくるので、リーザの体がピッタリと背中に押し当てられた。

「リー姉！」

シーグは慌てて家の中に飛び込んで、大声を上げる。だが、リーザは何食わぬ顔で玄関の扉を閉じて錠をかけていた。そして。

「入り口で立ち止まるなんて危ないじゃない」

と、鼻を押さえながらシーグを叱る。どうやら、抱きついてきたのではなくぶつかったらしい。

1階は神秘的な雰囲気のあふれる場所だった。壁には黒いカーテンが引かれている。天窓から入ってくる光が唯一の光源だ。

部屋の中には、ガラスの机、両手に乗るほどの水晶球、各所に金糸や銀糸や絹糸を使って織られたタペストリー。どれも光を反射する装飾品ばかりで、光の少なさの割りに部屋の中がぼんやりと明るい。星明りに満たされた、天空の水盤の夜をシーグは連想した。

「月の光が入ってくるようにしているの」

「占い師の家みたいだな」

「正解。だって私は占い師でもあるもの」

「魔術師じゃなかったのか？」

「そうよ、今は細工と編み物の勉強もしているの。後は地理とか植物学がいいかな」

「結局、何になるつもりなんだ？」

「私のなりたいものよ」

リーザは秘密めかして言った。はぐらかされたと思っていると、リーザが振り返る。

「魔術師はね、魔術以外の能力を身につけてはじめて一人前といえるのよ。天文学、言語学、薬学、本草学、錬金術、数学、文学、政治学。ちょっと亜流だけど、剣術とか戦術もそうかな。他にも色々

あるけれどね」
「どうりで多芸なわけだ。だけど、あいまいすぎないか？　一体何を身につけたら一人前なんだよ」
「うーん、一言で説明するのは難しいけど」
リーザは螺旋階段を昇りながら考え込む。
「例えば、魔力の満ちた場所で、火打石とワラを用意するの。呪文を唱えて手を叩く。手順が正しければ、火打石から火花が散ってワラに火がつくの。これが魔術の一番初歩」
「……手で火打石をうった方が手っ取り早いじゃないか」
シーグの呆れた反応にリーザも同意してうなずいた。
「それよりも、少しだけ高等なのがこれよ。ルミエス！」
リーザが両手をパチンと打ち付けると、白い光が生まれた。
「ワラも火も無かったぞ」
「眼に見えないものを使うから、難しいの。空気中には色々なものが含まれているわ。それが正と負の力を持っていて、手を打ちつけせいでぶつかる。目には見えないけど、エネルギーが発生する。それを使っている、らしいのね」
「らしいって？」
「実は私もよく分からないの」
リーザは無責任に言って、シーグのほうに光の玉を放り投げた。手をかざすと受け止めることが出来た。重さはないが、シーグの手に吸い付くように乗った。
「ただ頭の中で、強くイメージする。私の場合は紅い玉と白い玉が衝突する様子を思い浮かべるわ。土も水も空気も、世の中の色々なものが小さな粒で出来ているって分かった。その頃に、いつの間にかできるようになっていたの」
「魔術って、意外といい加減なものだな」
手の上に乗った光の玉を覗き込みながら、シーグは呆れた。指で突くと今度は指の先に団子のように刺さった。
「あら、薬学や冶金術も実際はいい加減よ。火をかけたら、水を加

えたらどうなるかっていう結果しか分かってないの。シーグだって剣術は得意だけど、なぜ剣は使いすぎると折れるの？　どうして体を鍛えたら筋肉がつくか説明できる？　どうして人間は成長するの？」

もちろん、シーグに答えられるはずは無かった。

「世の中の知識ってそんなものなの。なぜ、ハープが体にいいのか、金属がどうして溶けるのか。そんな問いには賢者だってまともに答えられないわ。ただ、そういう事実があるって事だけ。事実を記録して、比べて、順序だてて整理する。そのうち最も効率のいいやり方が見えてくる。だったら、もう一回記録して、比べて、整理するの。それがすべての学問に共通する事よ。だから、一番大切なのは事実をありのまま受け取る事。素直な心がもっとも大切だわ」

リーザはスラスラと答えた。なんだかサフィリアの話を聞いているみたいだ、とシーグは思った。

2章－44　探求と殺戮

「分かる人にしか分からない事を小難しく考える『賢者』より、正しい結果を見据える『見者』のほうが重要なのは当然よね」
リーザはそう締めくくって、部屋の隅にある螺旋階段を上ってゆく。シーグは指先の光を掲げて後ろに続いた。
「話を戻すけど、ワラに油を染み込ませて、完全にガラスで密閉するの。火打石を手で打ち付けて着火するのは無理になったけど、魔術でなら火をつけられるわ。どうなると思う」
「ガラスが熱くなる？」
シーグはろくに考えもせずに答えた。
「違うわ。完全に周囲をふさいで、燃焼させると爆発するの。規模を変えれば、周囲にガラスの破片を飛び散らせることが出来るわ」
「……怪我人が出るな」
「更にガラスの変わりに、魔術の壁を展開する。そして、中身をワラの変わりに燃える気体で満たすの」
「『きたい』ってなんだ？」
「簡単に言うと空気みたいな物のことね。厳密に言うと違うけど」
シーグは耳をふさぎたくなった。魔術師が『厳密』と『簡単』を同時に口にするときにはたいていややこしい話が始まるに決まっている。
「とにかく、更に燃える物を中に入れて密閉する。あとは爆発力を増して火をつける。これが火球の魔術なわけ。火をつけるに向いたもの、何が一番燃えるかを知っていて、有効に使えるほどに威力は増すわ」
リーザは一旦足を止めて、考え込んだ。
「火打石は、片方が鋼、片方がフリント（すい石）なのが一般的なの。だけど、肥料の中に混じっている物と、灰色がかった銀白色の金属ならもっと理想的ね。これを見つけるのは地質学が必要かしら」

「土と金属でどうやって火花を出すんだ？」
「それが無理だから、土や石の中から金属を抽出して、精製する。必要になるのは冶金術ね」
「錬金術と何が違うんだ」
「説明して欲しい？」
「……いや、やめておく」
「よかった。実は私もよく分かってないの」
リーザは口元を押さえてクスクスと笑っている。
「ところで、ガイスの火球は変な音を立てていたでしょ？」
「ああ」
「キチンと火をつけられていないからよ。それと、嫌な匂いがしなかった？」
「いや、そこまでは分からなかった」
「彼はね、臭い水を火球の触媒に使っていたわ。火はつきやすいんだけど、爆発が小さくて悪臭が漂うの」
「魔術の結果を見ただけで、実力が分かるわけか」
シンシアが防護魔術の色について話していたことをシーグは思い出す。
「だからガイスは陰で『歩く恥知らず』って呼ばれていたわ。魔術は惨めだし、服装は悪趣味だからね。基本がまるで出来ていないのを宣伝しているようなものだったの」
リーザは難しい表情になった。
「さて、火球を作るために火竜の鱗と、セブンパワーインテグレーション（七力統合陣）を加えるとどうなると思う？」
「メティオスマッシャーの出来上がりってわけか」
太陽のような炎の塊を思い出して、シーグは肩をすくめた。
「あれだって、最高の状態なら理論的に隕石が落ちて来るくらいの威力を出せるはずなの。ガイスが妨害していたから威力が落ちたのね。幸いなのか、災難なのか分からないけど」
「隕石の威力ってどのくらいなんだ？」

「理論上だけなら軽く見積もっても、王都全体をすり鉢状のクレーターに変えられるはずよ」
言葉を失って黙っていると、リーザは淡々と続ける。
「星のめぐりとか、魔術師の人員とか、陣形を有効に使える地形とかのせいで、いつでも何処でもってわけにはいかないけどね」
「なんだってそんなものを作ったんだ？」
思いもよらず、シーグは責める様な強い声が出てしまった。
「可能だったからしょう、ね」
「どうして」
リーザの問いに納得できず、シーグは再び問う。
「シャープネスも同じよ。何処まで鋭く、軽く出来るか。それを追求したのよ」
リーザの心情を示すように、階段を昇る歩みはどんどんと遅くなっていく。
「より強大で小さく。更に速くに遠くに。魔術の分野でそう願って、探求し続けてたどり着いたのが。セブンパワーインテグネーション（七力統合陣）。そして、メティオスマッシャーだったの」
リーザは胸元を掴んで、苦しそうに言葉を続ける。その態度から、セブンパワーインテグネーション（七力統合陣）はリーザにも関わりがあるとシーグは直感した。そういえば、シンシアにリーザは凄腕のプルーフだと聞いた。また、余計なことを言ってしまったとシーグは後悔する。
「私達魔術師の、プルーフのたどり行く末は、結局は破壊と殺戮の手段なのよ」
「違う」
あまりに悲観的な言葉に、ろくに考えもせずにシーグは答えた。
勢いよくリーザが振り向く。シーグは悔やむ一方で、頭を総動員していうべき事を考えた。
「ええと、そうだ包丁！」
シーグは真っ先に思いついたことを口にして、考えを整理する。

「同じ技術は包丁にだって使えるだろ。力の弱くなった老人や、腕の力が弱い人々とかのためにさ。フィーが欲しがるくらいだから、よっぽど凄い切れ味なんだろ？」

「そうだけど、包丁はお父さんが作ったから、魔術は関係ないわよ」

「ぐぅ……」

またやってしまった、とシーグは悔やむ。しかし一度はじめたからには口を閉ざすわけにはいかない。

「フィーの台所はどうなんだ？　熱くなるポットとか、水の出る壁とかあったぞ。あれは便利だと思うし、みんな欲しがる。そうだ、煙が出ないわけだから、城塞都市の町並みがススまみれにならなくて、みんな喜ぶ……んじゃないかな？」

勢いだけでしゃべり続けるのも限界が来て、シーグの言葉は勢いを失っていった。自分でも何を言っているやら分からない。破壊や殺戮の事を悔やんでいたのに、お湯やススの話をするなんてどうにかしている。

だけど、リーザは楽しそうに笑い始めた。理由は分からないが、とにかく機嫌を損ねたわけではない。シーグはホッとした。

「残念、あれは天空の水盤のような封土だからできるの。普通の土地では出来ないわ」

「え？」

「それに、魔術は手間がかかるわ。かまどや火打石の方がずっと便利なのよね。魔術師が料理のときに使うのはいいけど、料理人がそのために魔術を習うのはどうなのかなー？」

「……」

すっかり機嫌が直っているのは声を聞けば分かる。シーグの仏頂面をみて、リーザは小さく笑った。

「でも、みんなが当たり前のように、簡単に使えるようになれば素敵よね」

2章－45　紳士の心得

感動に打ち震えた様子で眼を輝かせ、リーザは胸の前で手を組む。そして、階段の途中でクルリと振り向いた。螺旋階段は内側ほど段の幅が狭くなるというのに。

「おい、リー姉！」

警告したが手遅れだった。危ないと言おうとした瞬間、リーザは階段から足を踏み外した。

「キャーー」

絹を裂くような悲鳴。危険を予想していたシーグは、すかさずリーザを受け止めることが出来た。光の魔術はリーザの体に押しつぶされると消えてしまった。

「私って、相変わらずドジでしょ」

「いいや、以前にも増してドジだ」

シーグは不機嫌に言い返した。

「周囲が真っ暗になった。目が慣れるまで動かないほうがいい」

正論をぶつけられて、文句を言いかけたリーザは口を閉ざした。

「ごめんね、私って重いでしょ」

「ああ、見た目よりずっと重い」

今度こそ、リーザはムッとした表情になってシーグの額をコツンと小突いた。

「女の子の前では、そういう事は思ってても言わない！　ここでは優しく言葉をかけるのが紳士の心得というものよ」

「言い出したのはリー姉だろうが！」

「ほら、また余計な事を言う。そういう時に黙ってこらえてこそ紳士よ」

リーザは分かりきったことでしょ、といわんばかりに断言する。

シーグは心の中で重々しいため息をついた。言った事に返事をするなと言い、言葉をかけろといったそばから黙れとも言う。この微

妙すぎるやり取りがたまらない。女という生き物は、手前勝手に定めたルールで動いているのかと疑いたくなる。
　不毛に思えたので、シーグはさっさと話題を変えることにした。
「こんなに長い螺旋階段をつけて、よくいままで無事だったな」
「実は何度か足を滑らせているの。建築学的に無茶だったかしら？」
「……昇るときに気をつけろ。それに手すりをつけたら十分だろうが」
「それは名案なんだけど、ちょっと理由があるの」
　ようやく眼が慣れてきて、闇の向こうへと続く螺旋階段が見えるようになってきた。
「しかし、何処まで続いているんだ？」
「１つ上が４階の高さになるわ」
「なんでそんな造りにしたんだよ」
「占い小屋だから、一階を高い天井の吹き抜けにしたかったの。その方が月の光がよく入るから」
　そうえいば、フェイル・リレイ（石突の中継地）の塔にもやけに長い階段がついていた。魔術師の建物は高さが必要なのだろうか？
　なんとかと煙の話が頭をよぎったが、シーグは黙っておいた。
「ねえ、シー坊。足を挫いたみたいなの。上まで運んでくれない？」
「……ったく」
　シーグは舌打しながらも、リーザを抱えあげた。「キャッ」と今度は嬉しそうな悲鳴が上がり、シーグの首にしがみついてくる。
「あんまり引っ付かないでくれ」
「あら、この方が負担が少ないのよ」
「さっきの悲鳴を聞きつけて、グレイルさんが現れるんじゃないだろうな？」
　すると、リーザは気まずそうに顔をそらして無言になった。
「……何でそこで黙る」
　今にも壁を突き破ってハンマーが飛んでくるのではないだろうか、とシーグは心底不安になった。

１０段も上がらないうちに、行き止まりの扉が見えた。リーザを片手で支え、ドアノブに手を伸ばすと今度は勝手に開いたのでギョッとする。

「さ、遠慮せずに入って」

リーザは笑うのをこらえている。

白いタイル張りの床に赤色の絨毯。薄いピンク色の壁紙。明るい黄色のタンスに、水色や朱色の物入れ。部屋の隅にはなぜか巨大な釜が据えられていて、そこだけ雰囲気が違う。天窓からは明るい陽光が入ってきて、部屋を照らしている。

整理が行き届いて、清潔感があって、いい香りが漂っているのはサフィリアの部屋と同じ。違いといえば、この部屋は派手な色の洪水に目が痒くなってくる事だ。部屋に案内されたシーグは何度もまばたきをした。

「じゃあ、そこのベッドまで連れて行って」

窓際に一人で寝るには大きすぎるベッドがあった。ベッドの端から端まである枕や、二つ折りにされている布団。サイドテーブルには、バスローブがなぜか2着折りたたまれている。

「どうかした？」

「……いや、なんでもない」

シーグは殊更に意識しないようにして、リーザをベッドにおろした。「イタタ」と、言いながらゆっくりと腰を下ろすので、体を離そうにも離せない。シーグは逃げ腰になってリーザを支えた。妙な体勢になっているシーグを見てリーザはクスクスと笑う。

「普通、ここで身構えたり照れたりするのは、女の子の役目なんだけどね」

「あのな。俺が勘違いしたらどうするつもりなんだよ。冗談じゃ済まないぞ」

シーグは押し殺した声でリーザをにらんだ。だが、リーザはひるみもしないで顔を近づけてくる。

「どういう勘違いで、どんな事が起きるのかしら？　男の子さん、

1つお姉さんに言ってご覧なさい」
ふざけた言い方に、シーグは両腕を組んで大またに後ろに下がった。リーザは唇を押さえて、上目遣いに見上げてくる。
「フィーちゃん一筋なんだ。ふぅーん」
リーザはふて腐れた声を出して、ベッドに寝転がった。シーグは気まずくなって部屋中を見渡した。閉まったままの窓があったので、開けるためにリーザに背を向ける。
「アイシャと道の真ん中でキスしたって聞いたから、てっきり軽い男になっちゃったのかと思ったわ」
「あのな、ちゃんと避けたぞ。頬にかすっただけだ」
「ほっぺでもキスはキス。フィーちゃんとも、まだなのにぃー」
背中からでも、好奇の視線が槍のような鋭さで突き刺さるのが分かる。
「……」
ここで取り乱してはリーザの思う壺だ。シーグは息を穏やかにして平静を保った。そして、窓を開けて外の空気を吸い込む。

2章－46　チュンチュンとコケコッコー

「え、うそ。もうやっちゃったんだ？」
「な！」
シーグは思わず窓枠から下にずり落ちそうになった。
「ちょっと待って、いつよ。最初に会ったのが8歳で、最後に会ったのが12歳の時でしょ？」
リーザはベッドから起き上がると、指折りながら数えている。
「うわぁー、シー坊ってば進んでる子だったんだ。人って見た目じゃ分からないものだわ。ねね、いつなの？」
「リー姉！」
「何処で？　どうだった？　最初は甘酸っぱいって本当？」
怒鳴りつけても、リーザは興味津々の眼でまくしたてる。暑苦しい視線に圧倒されて、シーグは逃げるように窓枠に肘を預けて外に身を乗り出した。後ろで黄色い嬌声が上がっているのを徹底的に無視する。
窓からは、王都の様子が一望できた。広大な湖リーガル・バックラーの東側には数え切れない塔のそびえる学園地区。西側には壮麗な王城が見える。そして、東へと真っ直ぐと進む水色の槍、アクア・ランス。この位置から見ると、確かに王都は馬に乗った騎士のように見える。
「いや、大きな兜をつけた騎士が、一角獣に跨っているのかな？」
シーグは町並みや各所に立っている塔から、想像力を働かせた。横向きに考えてみるとまるで印象が変わる。
アクアランスが水色の角、学園地区が飛び出した目玉、リーガルバックラーが大きな口。ならば、王城はボウボウに生えた髭だ。馬の体は首から下に見えなくもない。そうすると、角の生えた怪物が大口を開けている。それを、胸の辺りから見下ろしている事になる。
「いい眺めでしょ？」

リーザがベッドから歩いてシーグの横に並ぶ。狭い窓枠に無理やり体を押し込んできた。仕方が無いので、逃げようとすると袖を引っ張ってそれを許さない。押し合いへしあいしているうちに、シーグはおかしな事に気づいた。

「リー姉、足は？」

「治ったわ」

「そんなはずないだろ」

「ん、何の事かな？　キスの話？」

ここで追求したら、再び話は戻すつもりだ。シーグはリーザと視線を合わせないようにした。心地よい風が窓から吹き込んでくる。スス臭い匂いもここまでは上がってこないようだ。遠くに見える山脈は、ほとんど雪の白さを失っている。

「鳥が全然来てくれないの」

「え？」

唐突にリーザはつぶやいた。

「空に近い塔を建てれば、鳥が来てくれると思ったの。毎朝、窓辺に来てくれるとうれしいわ。鳴き声で目が覚めたら、寝坊する心配も無くなるじゃない」

日の出と同時にたたき起こされるぞ、とシーグは心の中で言ってから別のことを口にした。

「鳥だって浮かんだまま眠るんじゃないんだ。高ければいいってもんじゃない。それに、この塔には羽を休める場所が屋根の上くらいしかないじゃないか」

リーザはキョトンとして、シーグを見つめる。

「そういえば、そうね。うっかりしてたわ」

「……とんな鳥に来て欲しいんだ」

「えっとね、チュンチュンとコケコッコー」

「スズメとニワトリか。なんでまた」

よく分からない取り合わせだ。一体何を基準に思いついたのか、シーグには分からない。

「だって、夜明けの定番でしょ。私の知っている吟遊詩人がいつも言っていたわ」

それは農家か都市の外れでの話ではないだろうか？　少なくともこの騒がしい職人地区ではないはずだ。

「半年くらい経つけど、全然窓辺に来てくれないのよね」

「スズメはともかく、ニワトリは飼っていたんじゃないのか？　それも地上で」

「あ、それもそうね」

「……」

なんだか、真面目に話をするのが馬鹿らしくなってきた。

「生物学も習おうかしら、ね」

返事をしないでいると、リーザは窓枠に頭を押し付けて楽しそうに笑う。まずは世間の常識を身につけたほうがいいだろうに、とシーグは思った。

「ねね、スズメはどんな特徴があるの」

「スズメはあんまり高いところにはいかないだろうし、人の背の高さ位に巣を作るからな。2階が限界だと思う」

「え？　でも普段全然見ないわよ」

「スズメは狭いところに入り込めるんだ。指2本分の幅よりもずっと狭い場所にも。だから、普段は巣が見つかりにくい」

「じゃあ、ツバメは」

「都市に寄り付く種類なら、巣を作るのは3階が限界だな。たいていは、一階建ての屋根の陰に巣を作る」

「じゃあ、全然ダメじゃない」

リーザは不満げな表情を浮かべて窓枠にあごを乗せた。女の子というよりもすねた幼児だ。

「ハトなら巣を作るかもな」

「本当？」

シーグがポツリともらすと、リーザは勢いよく跳ね起きた。

2章ー47　おバカさん

「でも、スズメやニワトリみたいに鳴かないぞ」
「ううん、ハトがいいわ。羽が綺麗でかわいいし、手にのせた餌も食べてくれるわよね？」
黒くて薄汚れたのもいるし、指を噛まれるだけだぞ。とシーグは頭の中でつぶやいた。リーザは唇を尖らせ、「クックルゥー、クックルゥー」とハトの鳴き真似をしている。
「足場を作って、雨風を防げるような巣箱を置くんだ。このあたりの温暖な気候なら、年中巣作りをしているだろうな。春が一番いいのは確かだけど」
「木の板で箱や足場を作ればいいのね。他に何か必要かしら？」
「あんまり至れり尽くせりしなくていいよ。あとは、勝手に住みやすいように中を作るから」
リーザは早速窓から身を乗り出して、上下左右を見回している。巣箱を何処に置こうか考えているようだ。
「おい、落ちるぞ」
「ねえ、シーグってどうして鳥のことに詳しいの？」
「城砦防衛のときに飼うんだ。糞は肥料になるし、ハトの乳は栄養満点だからな。それに――」
「ん？」
「いや、気が和むからな」
再び余計な事を言いかけたので、シーグは別のことを口に出した。
「そっか。だったら、たくさん飼ってもいいかな」
「おいおい、この塔を城砦にでもするつもりなのか」
「実は、もう城砦になっているの」
「は？」
冗談だろうと思って、シーグは相手にしなかった。リーザは急に黙り込んで外を見ている。遠くの景色ではなく、眼下に広がる職人

区画をゆっくりと見回していた。
「あら、3人に増えたわ」
「何が？」
「自称、アイシャ様の親衛隊長よ」
リーザがポツリともらした言葉の意味を理解し、シーグは思わず窓から身を乗り出した。リーザの目線の先には、杖を持ってマントを羽織った男たちが建物の陰で寄り集まっている。
「俺を狙っている奴らか？」
「そうよ。あ、こっちを見て、引っ込んだ。あれじゃ、怪しんで下さいって言っているようなものね」
「隊長で3人って事は下っ端がもっといるのか？」
「シー坊と会う前に周囲を見て回ったけど、それらしい人は30人以上集まってきていたかな。魔術師しか数えてないけど」
うかつだったと、シーグは悔やむ。ディスペリアの族長に三騎士の一人。王国の要人を2人も敵に回して、安穏としていられるはずが無かった。ましてや、今は一人ではない。
「うーん、お茶の時間はおあずけかなー」
リーザは悩ましげにため息をついて、窓枠に突っ伏している。
「ありがとう、リー姉。また、決闘の後にでも改めて礼を言いに来るから」
シーグは早口でいいながら、出口に向かって早足で歩く。だが、リーザの手を叩く音と同時に、バタンと扉が閉じてしまった。
「リー姉！」
「シー坊、見て見て。すぐにでも攻めて来そうな勢いよ」
「だから俺がここにいたら、リー姉まで巻き込まれる」
「もう手遅れよ。それに剣を渡したことも正午には皆が知る事になるわ」
言われてから、シーグは自分の頭を引っぱたくようにして髪をつかんだ。ここは権謀術数の吹き荒れる王都。直接にしろ間接にしろ、敵と関わった人間をほうっておくはずが無い。だから、サフィリア

もシンシアを弟子にするという話をあれほど必死に口止めしていたのだ。

自分の事しか、決闘に勝つことしか頭に無かったのだ。己のバカさ加減にシーグは壁に頭を打ち付けたい気分になった。

「シー坊ったら、頭を叩いたらおバカさんになるわよ」

リーザは心底呆れた表情で、服のポケットからクシを出した。

「髪の毛をグシャグシャするなんて、せっかくの男前が台無しじゃない」

そして、背伸びをしながらシーグの頭に触れようとする。そんなリーザの腕をシーグはつかんだ。

「だったら剣は返す。そして、俺をここから追い出せ。今ならまだ間に合う」

「絶対に嫌」

リーザは即答してそっぽを向いた。

「私だってこうなる事くらい予測して、剣を渡したんだからね！」

いつになく、力強い口調だったのでシーグは眼をぱちくりさせた。

「ひどいなぁ。シー坊ってば、私を考えなしの女だって思ってるんだ」

「いや、そんな……」

「そして、胸の大きな女はみんな頭が悪いとでも言いたいのね」

「な！」

なんでそういう話になる、と言いかけたシーグの手をリーザは振り払った。

「敵を作るのを怖がって、プルーフが勤まるはずないわ。それに、王宮御用達の鍛冶師もね。それに！」

と、強い決意を込めた声と共に、リーザは窓のほうに眼をやった。灰色の瞳が強い怒りを称えている。そんな様子を見て、彼女がグレイルの娘なのだとシーグはようやく納得できた。

「女の子の憩いの時間を。ましてや、お茶の時間を邪魔するなんて。絶対に許せないわ！」

リーザは拳を握り締めて宣言する。一方、シーグには一体全体何がどうなればそういう結論にたどり着くのやら、まるで納得できなかった。

2章－48　プルーフの城砦

＊

塔の周囲を行き来する人々は多い。しかし、敵意を持っている者と、ただの通行人との違いは遠目にも分かる。塔を見上げるときに、妙にぎらついた目つきになるからだ。彼らは戦場に同行する浪人の類を連想させた。彼らは戦場跡で武具や金品を死者から剥ぎ取ってゆく。いつでも集団で群れていて、敵が自分達よりも弱いと分かれば容赦が無いのでたちが悪い。おそらく、彼らもその同類だろう。

たとえ、一人でここから逃げ出したとしても、彼らはシーグと接触したリーザを許さないに違いない。

「相手の魔術はここまで届くのか？」

「それは平気。3階までが射程の限界よ。空を飛ぶ魔術を使っても、そこの窓以外からは入れないわ。石造りの頑丈な壁だから、簡単には壊されないしね」

そう言いながら、リーザはタンスの中のものを取り出して床に並べている。

「奴らはいつからいたんだ？」

「シー坊がこの区画に入り込んだときから集まり始めていたわ。たぶん、通りごとにも何人かずつ配置しているでしょうね」

「じゃあ、裏道を行くしかないか」

「ただ裏道を逃げるだけじゃダメよ。自称親衛隊の中に、この地区出身の人が何人もいるから」

「だったら、一点突破してそのまま町の中心地まで走り抜けるのはどうだ？」

「彼らの中には魔術師が混じっているの。思考を飛ばして、相手に伝えられる。つまり、お互いに連絡を取り合えるわけね。いくら速く走っても先回りされるわよ。アイシャの味方は王都中にいるもの。

たまたま近くにいたのが集まってきているだけ。動き回るほど敵は増えるわ」

「衛兵や護民官に連絡するって言うのは？」

「そういう人たちが指揮を取っているんじゃないかな？　だから公には大事にならない規模で抑えているの」

公的に治安を守るべきものが、暴動を操る側にいる。これでは、メティスの王の法とやらも詩人が言うほど正義といえないな、とシーグは思った。道理的に異常であっても、敵にまわるとなれば脅威以外の何者でもない。

「魔術を使って、中心地まで移動するのは」

「あ、それ無理。私ってサモニング（召還）の系統が一番苦手なの」

塔の窓から下を見下ろすと、入り口に１０人ほどの男達がたむろしている。武器や杖を手に持って殺気立っていた。

「リー姉、乗り込んでくるつもりだぞ」

「なら、まずはあれを使ってみましょう」

リーザは部屋の隅に置いてある釜を指差した。底の深い釜で腰の高さまである。その中に、手のひらに乗るほどの大きさで、色とりどりのガラス球が一杯入っていた。見た目にはガラス球と、ただの大釜にしか見えない。しかし魔術師が、それも凄腕のプルーフがこの危機に選んだ品物だ。何か特別な、途方も無い力が秘められているに違いない。

「それを入り口の近くに持ってきてね」

シーグの力では持ち上げるのは無理だったので、絨毯を上を引きずってリーザの近くまで持っていった。

「これは一体なんだ」

「鍋とガラス球よ。見て分からない？」

「確かにその通りだ。で、どんな力が秘められているんだ」

「大釜はシチューなら一度に２０人分は作れるし、ガラス球は光にかざせばキラキラして綺麗なの」

「……他には」

「釜は鉄と青銅の合金で、ガラス球はガラスで出来ているんだけど。あれ？　シー坊、どうしたの」
「いや、自分が戦士だったと思い出しただけだ」
大釜の上に突っ伏しそうになった体と気持ちを、シーグは立ち直らせた。そして、シャープネスの柄に手を伸ばす。
「ダメよ。剣を渡しておいてなんだけど、数に勝る敵に囲まれているなら接近戦は上策とは言えないわ。ましてや、私達は高所を抑えているのよ」
「だけど、あいつ等は上がって来るぞ。迎え撃つしかないじゃないか」
「本気でそういっているの？」
リーザは首をかしげながらシーグの眼を覗き込む。
「呆れた。シーグって兵法書は読んだことがある？」
「一度もない。この４年間、爺さんの弟子になってからは本そのものを読んでないぞ」
「本が無い？　ずいぶんと珍しい教え方をするのね。興味があるわ」
「爺さんの教育方針は後で話し合おう。今はとにかく身の安全が第一だ」
「うーん。メティオスマッシャーと戦って勝ったんだから、このくらいは思いつくと思ったんだけどなあ。私のために取り乱してくれているのなら、うれしいけど。フィーちゃんの場合だったら逆に冷静になっちゃうのかなー。どうなのかなー？」
リーザは当て付けるような口調でぼやきながら、パンと手を叩いて階下に続く扉を開けた。螺旋階段の向こうからは殺気だった掛け声と、階段を昇ってくる荒々しい足音や金属のぶつかり合う音。それらが狭い壁に反響して、やけに大きく恐ろしく聞こえてくる。
「たっぷりひきつけて、ギリギリで大釜をひっくり返すのよ」
「……あ」
なぜ気づけなかったのか。兵法書以前の問題、戦法の初歩の初歩だ。先頭を昇ってくる男が見えた瞬間、シーグは大釜の中のガラス

球を階下に向けてばら撒いた。一段飛ばしに駆け上がる足の下にガラス球が転がり込む。当然のことながら、その男は派手にスッ転んで前のめりに倒れた。

その背後からも、悲鳴や壁にぶつかる音やどんどんと大きく階下に広がってゆくのが聞こえてくる。

見通しも足場も悪い螺旋階段だ。そこを密集して昇ってきただけに、一斉に体勢を崩せば無事で済むはずが無い。しばらくすると、階段を昇る足音ではなく、「重い」「どけ」とお互いにののしりあう声だけが聞こえるようになった。

「死人は出てないだろうな」

「螺旋階段だから途中で壁に引っかかるわ。階段を一段ずつ低めに作っておいたから、怪我で済むはずよ」

「だけど、剣を持っている奴もいたぞ。お互いに刺さらなかったらいいんだがな」

「うーん、そこまで面倒は見れないなー」

のん気に二人で話していると、先頭にいた男がのろのろと立ち上がった。額にあざが出来て、鼻血を流している。手に持った剣は壁にぶつけて、すでに折れていた。

「怪我人を連れて引き上げろ。追撃はしないから」

シーグが言うと、その男は怒りで顔中を真っ赤にしたが自分の折れた剣を見つめて後ずさりを始める。

「油を流して火をつけなかっただけ、ありがたいと思って欲しいわね」

リーザが押し殺した声で言うと、男は青ざめて階段を駆け下りていった。途中で足を滑らせる音がして、「ギャッ」と別の誰かの悲鳴が続く。

「足元に気をつけてねー」

今度は客でも見送るような声を階下に向かって放つ。聞こえてくるうめき声が一瞬だけ大きくなったのは気のせいではないだろう。

「なあ、リー姉。さっきの火と油の話だけど」

「うん、名案でしょ？　何度やってもしつこいようなら、やってみようと思うの。料理用の油だけど、たっぷりあるわよ」
「だけど、そんな事をしたら俺達は息が出来なくなるぞ。煙は上にあがっていくんだからな」
「あ……れ？」
リーザは小首をかしげて考え込んだ。その後、両手を打ち合わせて大きくうなずく。
「確かにその通りね！　うっかりしてたわ。危ない危ない」
リーザはニコニコと笑っている。しばらくの間、お互いにののしる声や足を滑らせる音などが聞こえていた。その後はカチカチと乾いた音を立てながら、ガラス球がぶつかり合って落ちていく音だけが残った。

2章－49　完璧な……

＊

第一の突撃をやり過ごしたシーグは、窓から下を偵察していた。塔の周囲にたむろする人の数は変わらない。それが却って気にかかる。もっと数を頼んで包囲を始めると思ったからだ。攻城においては、威圧感を与えるのが常道である。たいまつを掲げて殺到する人々が脳裏に思い浮かんだが、よく考えれば今は昼だ。とにかく、敵が多数であるよりはずっといい。シーグは窓を閉じた。

「で、リー姉何をしてるんだ？」

「うん、服を選んでいるのよ」

リーザはタンスから取り出した服を順番にベッドの上に並べている。

「だって、今から王都の中心に出るのよ。着替えなくちゃ」

鼻歌交じりに服を体に合わせて鏡の前に立つ。その後、シーグの方を振り返った。

「ね、これはどうかな？」

全体が黒色であちこちにレースの入ったドレス、裾の細いスカート。セットになっているのかヒールの高い靴が床においてある。

「走りにくそうだ」

リーザの質問に適当に答える。そして、考え込んでいると頭に閃くことがあった。

彼らが殺到してこないのは責める必要が無いからだ。正午までシーグをここに釘付けにすればいい。そうすれば、決闘から逃げ出した臆病者という汚名をかぶせる事ができる。

それに、リーザの言う通りなら組織だった動きをするという。戦意だけが過剰で、突き進むしか知らない暴徒よりも更に厄介な敵ということだ。

「じゃあ、こっちは？」
今度は、肩がむき出しになるピンクのワンピースに、白い帽子。手には薄いショールを持っている。リーザはいつの間にか靴下を脱いで素足になっていた。
「寒そうだ」
「季節がまだ早いわね。うーん、難しいなあー。次は……」
「そんな事をしている暇はないだろう」
リーザはムッとした表情になったが、服を選ぶ手を止める事はない。
「女の子のおしゃれに付き合えないなんて、紳士失格だぞ」
「それは俺じゃなくて、塔を囲む奴らに言ってくれ」
「あの人たちは人間失格よ」
今のはちょっと酷すぎないか？　と、シーグは思った。一方、リーザはピンク色の魔術師のローブと、フリルだらけの長袖を深刻な表情で見比べている。
「外の事は気にしないでおきましょうよ。踏み込んでくる心配はないみたいだし」
「俺がいいたいのはそんな事じゃなくて」
「気になるのは時間でしょ？　正午までにアクリアエ・スリスに行けるかどうかって事ね。よしこれで決まり！」
決意を込めてうなずいた後に、リーザは魔術師のローブを手に取った。
「あそこはアイシャの手下がわんさといる場所よ。早く到着しても却って危険だわ。それに、決闘の前にフィーちゃんと会わなくちゃいけないし」
「何でだ？」
ついさっき喧嘩別れをしたことや、シンシアの言葉が頭によぎる。
「昨日の怪我。無理やり魔術でふさいであるだけでしょ。戦うのなら、そのために包帯を巻きなおさないとダメなの」
魔術の事はさっぱり分からないので、シーグは黙りこむしかなか

った。

「簡単に言うと、治癒を優先した場合は激しい運動には耐えられないの。止血用の巻き方に変えないとダメだわ。それは、治療を始めたフィーちゃんじゃないと出来ないの」

やはり、どうあっても決闘の前にサフィリアと会わなくてはならないようだ。シーグは気が重くなった。

「とにかく、慌ててもしょうがないわ。フィーちゃんはまだ授業中だしね。終わった頃に学園地区に着くようにしましょう」

ローブはシンシアやサフィリアとは全く違うデザインで、ローブというよりはマントに近い。その上、ピンク色であちこちにリボンがついている。上半身全体を覆う胴着のような造りだが、肩の部分が大きく開いている。そして腰から下は、前だけ開いたスカートのようになっていた。

あれだけを身につけると、とんでもない格好になってしまう。しかし、シーグの心配は無意味だった。リーザが白のシャツと、ショートパンツを選んでベッドにのせる。ローブの下に着るのだろう。それでも、足が丸見えなのは……。

シーグは頭を振って余計な考えを振り払った。今はそんなことを考えている場合ではない。

「だけど、包囲っていうのは時間が経つほど分厚くなる。突破するなら早いほうがいい」

「それは正規兵が相手の場合よ。だけど、あの人たちは烏合の衆だもの。ある程度集めたほうが足並みを崩しやすいわ」

リーザはフリル付の靴下と、膝まである皮製のブーツ。特大のリボンがついた三角帽子を取り出した。

「よし、これで完璧ね」

俺は脱出する作戦のほうを完璧にしたいと、シーグは心の底から思った。

2章－50　脱出作戦？

どうやって脱出したものか？　シーグはリーザの言葉を思い返す。通りのあちこちに敵が詰めており、お互いに連絡を取り合うことが出来る。更に、中央に行ったら行ったらで新たな敵が現れる可能性もある。

すべてをまとめて考えてしまうと脱出の糸口はまったくないように思える。しかし、リーザは相手は烏合の衆だといっていた。この地区だけでも親衛隊長とやらが3人もいる。包囲網を築くには、正面衝突する戦闘よりもずっと細かく綿密なやり取りが必要になる。まとまりの無い命令系統には必ず穴があるはずだ。

一点突破で包囲を潜り抜けて、速さを生かして行方をくらませればいい。何度もやってきた事だ、一人なら問題はない。だが、リーザを連れてどうすればいいのだろうか。昔から何も無いところでも転んでいた。たぶん、今も変わっていないだろう。

「さて、次はシー坊の番よ」

「は？」

「着替えをしてね」

リーザはタンスの違う引き出しを開けて、中を見ている。

「ちょっと待て、俺に女装でもしろって言うのか？」

リーザは驚きの表情を浮かべて、シーグをまじまじと見つめた。全身を何度も見回した後、どんどんと楽しそうな表情に変わってゆく。

「それって、素敵！」

「いや、違うならいい」

「違わなくていいわ！」

「おい、冗談は――」

「背丈はあるけど、ウェストは私とあんまり変わらないからロングのスカートならほとんど平気ね。胴の長さが足りないのも、腰周り

に何かを巻けば、ほとんどのドレスは大丈夫よ。わー、すごい。結構色々な服が着れるじゃない！」

キャーキャーいいながら、リーザはタンスの中をかき回している。タンスの中をよく見れば、確かに男物の服も混じっていたのだった。

「真面目に聞いてほしいんだけど。私が遊びや時間つぶしでこんなことをやっていると思う？」

シーグが顔を覆って打ちひしがれていると、リーザは急に真面目な表情になった。

「これは変装よ。包囲を突破するためのね。私はこれでもメティスでは名が売れているわ。プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）って言えば、王都で知らないものはいないわ」

リーザのいつに無く冷静で落ち着いた声。言葉の内容にもシーグは興味を持った。

「その一方で、顔はあまり知られていないの。いつも、占い師のだぶだぶのローブを着て、顔を隠しているから、この格好で町を歩いて近所の人しか気づかないわ。お婆ちゃんが、リーザだって思い込んでいる人もいるの。そして、シーグも噂では熊のような大男。つまり、私のお父さんのような人を想像している人がほとんどよ」

「なるほど」

例外といえば、さっき部屋の入り口まで登ってきた男だけだ。それもリーザは声だけ、シーグは姿だけ――黒のズボンと白のシャツを着た小柄な男――しか知っていない。それも、周囲にいる男達にどこまで正確に伝わっているか。いや、伝えたからこそ却って混乱を招いているかもしれない。人間の思い込みは、言葉だけでは簡単に変えられるものではない。

「だから、服を変えるだけの簡単な変装でも有効だとは思わない？」

「確かにその通りだ」

「そして女の二人連れなら、完璧に怪しまれないわ！」

リーザは『完璧』を特に強調して、高々に宣言する。

「……おい！」

「安心して、シーグ。何があってもばれない位に。いいえ、道行く男達が振り返る位の完璧なコーディネイトをしてあげる。フィーちゃんと並んでも、見劣りしないくらいにね！」

リーザは引き出しの中から、パウダーやクリーム。何処から取り出しのか、長髪のカツラなども机の上に並べだした。あまりに本格的な道具にシーグはひるんだ。

「待て！」

「大丈夫。怖いのは最初だけよ。すぐに病み付きになるわ！」

「だいたい、男が化粧したって似合うはずが無いだろ」

「いいえ、男の子の方が肌が強いから化粧のノリがいいの。女の子が嫉妬しちゃうくらいの美人になれるのよ」

「そんなことを言っているんじゃない」

「頑張りましょう」

リーザは両手を体の前で構えて、「ムンッ」っと鼻息も荒く張り切っている。

「嫌だ」

「お願い。やらせて」

「ダメだ」

すると、今度はウルウルと涙目になって、シーグに取りすがる真似をした。

「じゃあ。せめてこの鏡の前でだけ。一回だけでもいいから……」

「脱出のための変装じゃないのか？　遊びや暇つぶしじゃないって言ったのは誰だ！」

「ケチー。別にいいじゃない。減るものじゃないのに」

今度は唇を尖らせてそっぽを向く。しかし、シーグとしても譲るわけには行かなかった。断固とした決意を込めて見据えていると、根負けしたのかリーザはベッドのほうを振り返った。

「着替える」

「は？」

問い返す間もなく、リーザはいきなり服を脱ぎだした。シーグは

ギョッとして、部屋の中から飛び出す。しかし、螺旋階段を3段ほど下ったところで、何かを踏んで足を滑らせてしまった。自分でばら撒いたガラス球である。

「くっ！」

シーグは倒れるに逆らわず、とっさに受身を取ったので怪我も痛む場所もない。ただ、自分が酷く情けなく思えた。自信や自尊心などというものは、簡単に傷だかけになるものだ。女装などをしてしまった日にはこの程度では済まないに違いない。

「大丈夫？」

心配そうに聞いてくるリーザ。返事するのも何だか疲れて、シーグは階段に座り込んでしまった。

「シーグってばー」

「平気だ。さっさと着替えてくれ！」

トコトコと歩いてくる足音が聞こえて来たので、シーグは力いっぱい怒鳴りつけたのである。

2章－51　言葉は剣、装束は鎧

＊

螺旋階段のひんやりした静かな空気。しかし、目を閉じて感覚を研ぎ澄ませれば、突き刺さるような人の気配を感じる。今も入り口に何人かいて、隙あらば駆け上がろうとしてるのは明らかだ。進入口は螺旋階段しかないが、同時に脱出口もここしかない。守るには理想的な地形だが、同時に脱出は困難となる。

「着替え終わったわよ。そろそろ、脱出の用意をしましょうか」

シーグの憂鬱な気持ちを知ってか知らずか、ピクニックの準備でもするような明るい声。シーグは階段を昇って部屋の中に戻る。顔を上げると同時に、シーグは顔を引きつらせた。

「ねね、似合う？」

脇から下、太ももから上が隠れているだけ。それも、上半身のシャツなどはやけに薄い素材で体のラインがピッタリと浮き上がっている。

「ったくなんて格好だ……」

更に眼のやり場に困るような格好になってしまっている。いくらなんでもやりすぎだ、とシーグは思った。

「でかける時はこの上にマントを着るのよ」

「だったら、今着ろよ」

「シー坊ってば、お父さんみたいなことを言うのね」

リーザはクスクスと笑った。そして、素足のままで鏡の前に戻ってクルリと一回転する。

「５０年くらい前の宮廷のファッションは、もっと凄かったのよ。『露出狂の時代』って呼ばれていた時期があってね。もっと大胆で、生地の薄い服が流行だったの。さすがの私も、恥ずかしくて着れないようなものばっかり」

「今だと時代遅れだって言われそうだな」
それは図星だったので、リーザは唇を尖らせて黙り込んでしまった。
「これから何をしたらいいんだ？」
「……」
「脱出するんだろ」
返事をしないリーザに、シーグはさすがにイライラしてきて、語調がきつくなった。
「言葉」
「は？」
「女の子が着替えをしたら、何か気のきいた言葉をかけるのは、千年以上前からも変わってないと思うけどなー」
「知らん。で、何をすればいいんだ」
苛立ち紛れに無愛想に答える。シーグの態度に、リーザは不満げに下を指差した。
「床？　それとも絨毯か？」
「その両方よ。まずは、絨毯を巻いて一まとめにするの」
シーグは五歩四方程度の絨毯の端に屈みこんだ。よく見てみると、円に近い文様はすべて縫いこまれた細かい文字だった。
「これって、魔方陣か？」
「そう。空飛ぶ絨毯なの」
リーザは自慢げに微笑む。そして、両端を二人で持って、ゆっくりと絨毯をまるめていく。下にいるのは、3階程度が射程の魔術師達。高く空を飛んで逃げれば確かに安全だ。
「そうかこれ――」
とっさにリーザのほうを見るが、むき出しの肩や太ももが目に入ってシーグは慌てて目をそらした。
「フィーちゃんの肌ってもっと綺麗よ。雪みたいに真っ白で、絹みたいな手触りなの。女の私でも惚れ惚れしちゃうんだから」
また、からかわれている。シーグはそう思って返事もしなかった。

「フィーちゃんと一緒にいたいのなら、服装や言葉遣いには敏感でなければダメよ」
「……」
「宮廷では言葉が剣、装束が鎧の変わりになるわ。うっかりした言動が、剣で威嚇するくらいの侮辱になるからね」
心当たりがありすぎて、シーグは絨毯を巻く手を止めてしまった。
シーグの心の変化を見抜いた上で、リーザは口を開いた。
「こら、急に止まらないの。えっとね、同時に自分の身につけている服や、超然とした態度が相手の敵意を殺ぐこともあるの。実際に『どうなのか』よりも。『どう見えるか』が重要な場所なのね」
正直係わり合いになりたくない世界だ。いっそ、無関係でいられたらとシーグは強く思う。
「だから、フィーちゃんの横にいたいのなら、ふさわしい装いを身につけなくちゃダメよ。あの子は絶対に宮廷と無縁ではいられないから」
「見者でフェルナンディの一族だからか？」
「それもあるけど、一番の原因は容姿と産まれね」
不思議そうに眉をしかめたシーグを横目に、リーザは続ける。
「母親が王女で絶世の美女だった。更に高名な魔術師を祖父に、公爵を父に持つ。光の中では輝くような、闇の中では透き通るような金髪碧眼の持ち主。産まれた瞬間から、世界中の宮廷人たちの興味の的だもの」
確かに注目を集める外見だとは思っていたが、まさかそこまで大事になっていたとはシーグは知らなかった。
「今じゃ、もう16歳。美人で、頭が良くて、優しくて。更に優秀な魔術師なの。強くて、自信家で、財産家で、ハンサムな男達が放っておくわけないでしょ？」
真っ先にベクターの顔が思い浮かんで、シーグはムカッとした。
そのひょうしに、巻き上げられてゆく絨毯の端が更にズレる。
「ガイスの騒ぎでしばらくおとなしくなっていたけど、フィーちゃ

んの人気って凄いのよ。海を越えた帝国から、后にならないかって話もあった位なんだから」

「どうせ愛妾だとか、何番目かの妻だとか。そんなだろ」

今度はシーグの巻き方が早すぎて、絨毯がシワになったまま巻き込まれていく。

「こういうのって、相性占いに使えるのかしら？」

「どうなんだよ」

「うーん、あんまりいい結果じゃなさそうね」

「そっちじゃない。結婚がどうかって方だ」

シーグがせかすと、リーザは楽しそうに笑う。

「ブー、答えは第一夫人でしたー。ちょっと、絨毯を抑えたままでいてね」

絨毯を巻き終えると、リーザはバラバラに飛び出した端を叩いて直している。シーグは窓の方に眼をやった。ただし、閉まっているので外は見えない。

「ま、一夫多妻が王様の役割って考えている国だもの。後から後から、王妃をめとるんでしょうけどね。私達には向かない国風だわ。他にも、家庭教師として呼ばれたら相手はその国の王子様だったなんて事もあったっけ。一目ぼれされて即座に求婚されたんだけど……」

いつまで経っても続きが聞こえてこないので、横目でリーザを見る。すると、向こうもこっちをじっと見ていた。

「全身が耳になっているわよ」

「で、この巻いたのをどうすればいいんだ？」

シーグはリーザの問いには答えず、逆に問い返した。

「窓際に立てかけて。あなただって、レイザークのシージペリラスとして名乗りを上げた以上、宮廷から無縁じゃ済まないわ。いい？完璧に服を着こなすの。そうすれば、フィーちゃんとお似合いの二人だって認めてもらえて、ライバル達が尻尾を巻いて逃げていくわ」

「綺麗な布っ切れを巻きつけるだけで、そんなに人間の価値が変わるものかね」
「あなたが今日の決闘で勝てば、効果抜群。間違いなしだわ」
シーグの馬鹿にしたような答えに対し、リーザは糸のように目を細くして微笑んだ。

「言っておくけど、別に決闘に勝ったからってフィーちゃんがメロメロになるってわけじゃないわよ」
「そのくらい分かっている！」
名声や手柄のことを口にしたときに向けられた、嫌悪感あふれる表情は忘れられない。
「あの子は決闘や私闘が大嫌いみたいだから、むしろ軽蔑されちゃうかなー」
「……」
しばらくの間、リーザは探るような眼でシーグを見ていた。
「後悔している？」
「いや」
「だったらいいの。じゃ、行きましょうか」
返事に満足したリーザは大きくうなずいた。そして、窓を大きく開け放つ。窓から下を見ると、通りにいる人々は一斉にシーグの方を見上げた。
「無関係な人たちは、みんな逃げたか隠れたみたいね」
「つまり、この近辺で外を出歩いている奴が全てが敵ってわけか」
「そうよ、分かりやすいわね。じゃ、その絨毯を窓の外に出してね」
シーグが丸めた絨毯を窓の外に突き出すと、下からざわめきが聞こえて来た。リーザが絨毯に触れて小さく何かつぶやく。その後、絨毯を外に押し出した。すると、独りでに広がっていって空に浮き上がったのである。ざわめきは驚きの声に変わった。
「これに乗るのか？」
ヒラヒラと揺れる絨毯はなんだか頼りない。試しに手をのせて体重をかけてみると、絨毯は大きく形を歪めてしまった。
「実は人を乗せたことがないのよ」
「なに！」

「ちなみに、ぬいぐるみなら6体まで大丈夫だったわ」
それに一体どんな意味があるのだろう。あまりの期待はずれな性能に、シーグは言葉を失った。
「さて、作戦開始よ」
リーザは張り切った声を出し、鼻息を荒くしてポーズをとった。

＊

窓の外に広がった絨毯を見上げて、ラスティーは舌打ちをした。彼は私設親衛隊『暁の星』の隊長である。アイシャ・ディスペリアのためなら命を投げ出しても構わない。そんな命知らず達を率い、不埒なシーグを成敗に来たのであった。
「空を飛んで、逃げるつもりだな」
「しかし、空を飛ぶ道具はほとんど役に立たないはずでは？」
「バランスを取るのが大変で、失敗ばかりだって話ですよ」
ラスティーのつぶやきに、部下の魔術師が口を挟んだ。
「うむ、確かにそうだ。失敗ばかり続くので、飛行の道具は別名ボーン・クラッシャー（骨折り機）という異名がついているほどなのだ」
ラスティーの博識ぶりに、親衛隊の面々は感心している。
「しかし、相手はあのプルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）だ」
重々しい口調で言ったが、誰もが首を傾げたり、不思議そうに顔を見合わせたりするだけだった。ラスティーは軽く咳払いをして、言葉を付け加える。
「セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）を、マントだけで維持する。そんな真似が出来たのは、プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）の助力があったからなのだ。何が起こっても不思議ではない」
それでも、納得の表情を浮かべたのは魔術師である半分ほどだった。残りの半分は「セ……なんだって？」「プルーンって食う奴か

？」などと、話し合っている。
「どうしますか？」
納得したほうの半分は、ラスティーに指示を求めた。
「うむ、どうしたものかな」
ラスティーは重々しく言った後に絨毯を見上げて黙り込んだ。親衛隊の面々は、ラスティーの考えを妨げないよう、一様に口を閉ざして指示を待った。誰もがまだ若い。ほとんどが１０代も半ば、年長者でも２０歳を超えた程度である。
『暁の星』は数あるアイシャ親衛隊の中でも規模は最大。更に構成員の半数が魔術師であり、最も優れた攻撃力を持っている。今までも、アイシャを侮辱した男を３人。決闘の前に退治した実績もある。
「よし、撃ち落とす。マイリグならギリギリ届きそうだ。マイリグはいるか！」
ラスティーの呼びかけにこたえるものは無かった。
「今日はいません」
「なぜだ」
「絶対に受けなくちゃいけない試験があるって話です」
「……ええい、仕方が無い。では、イッサは何処にいる？　あいつがエンハンス（向上）で強化してくれれば俺でも……いや違う。俺なら届くはずだ」
ラスティーは胸を張って言いなおした。司令官は常に畏怖堂々とした態度をとり、部下を見下すことがあっても、自分を卑下する言葉を吐いてはならないからだ。
「イッサはさっきの突撃で、額を怪我したから帰ったっけ？」
「なんと言う事だ。手を出せないのか」
憎憎しげに空に浮く絨毯をにらみつける。アイシャ様に忠節の姿を見せるまたとない機会だというのに。
「あの……いいですか？」
「貴様、魔術師でないな。生意気にも口を聞くな」

ラスティーが鋭く怒鳴る。手には鎌を持ち、農夫の姿をした男は黙り込んだ。気の毒に思ったのか仲間達が彼の傍に寄ってきた。ボソボソと口を開いた農夫に「あ、そうか」と、周囲の人間が小さく声を上げて、納得の表情を浮かべた。しかし、ラスティーに睨みつけられて一様に沈黙する。

2章ー53　武器調達

絨毯にはちょうど人影らしきものが2つ乗ってゆくのが見えた。
もはや一刻の猶予も無い。そこで、ラスティー重要な事を思い出すことが出来た。寛容さは指揮官の資質だと、10日ほど前に読んだ本に書いてあったのだ。部下の無礼や、発言の自由を許すのも大切なのである。
「おい、貴様。さっき何を言おうとした。聞いてやるぞ」
「あ、いや。いいです」
ラスティーに怯えて、農夫の男は慌てて首を横に振った。
魔術の知識も全く無い男に反発された。その怒りを押し込めて、ラスティーはなるべく柔和な声で語りかける。
「俺の言う事に逆らうな」
しかし、言葉が威圧的だったので、怒りを押し殺したようにしか聞こえない。
「や、や」
「なんだ、早く言え！」
怯えるように口を開いた農夫に、ラスティーは更に問いつめる。
「ゆ、弓矢なら届くんじゃないでしょうか？」
「へ……」
あまりに的確――普通は当たり前――で、盲点――彼自身にとって――な意見にラスティーは間の抜けた声を上げた。魔術師達も一様に言葉を失っている。
「え、ええと。ちょうどそこの露店で安売りをしていたんです」
沈黙に耐えかねて言葉を漏らす農夫。ラスティは我にかえった。
「よ、よし。早速手配しろ。金をやってすぐに走らせるんだ！」
なるべく偉そうに命令を下した。声が震えていたという自覚はあったものの、威厳を保てているはずだとラスティーは一人決めをした。しばらくすると、農夫が駆け足で戻ってきた。手には何も持っ

ていない。
「弓矢はどうした？」
「へ、へい。それが値上がりしたらしいです」
「なんだとー！」
「その上、銀のなんとか団が、目の前で一斉に買い上げて行きました」
「『銀のしとねに眠る君』隊か。くそ、あそこは貴族の道楽どもが多いからな。資源の差が出たか」
ライバルの親衛隊に、先を越された事をラスティーは悔やむ。
「資源って何です？」
「金の事だ！」
尋ねる農夫にラスティは乱暴に答えた。とにかく何か投げるものがあればいい。しかし、石畳はあるが手ごろな大きな石がない。そうだ、石畳を破壊して石つぶてを作ればいい。
「よし、棍棒を買ってこい」
「何に使うんで？」
「石畳を破壊して石つぶてを作る」
自警団に勤めるものや、職人区画に住むもの達がギョッとする。
「別にそこらへんの壁でも構わんぞ」
「そ、それはまずいですぜ」
何人かがなだめるとラスティーは不機嫌になった。隊長の意見に逆らうなど軍隊ならば、刑罰を与えられても当然。自警団に属するものなら、当然の事だと心得ていてもいいはずだ。規律のために決断を下そうと決意した、その時。
「隊長、向こうの雑貨屋に革袋が売ってますよ」
「そんなものが何の役に立つ！」
考えがまとまり掛けていたときに、声をかけられてラスティは八つ当たり気味に叫ぶ。
「砂を詰めて、投げ付けるんでさー。無理ですかね？」
少しの間だけラスティーは動きを止めた。

「そ、そうか。手製のブラックジャックだな」
「なんですかい、それ？」
「うむ、皮や布の袋の中に砂や石を詰めて鈍器にしたものだ。中に入れるものは、別に鉄くずでも構わん。重いほど威力が増す」
質問に対して、ラスティーは機嫌良く知識を披露した。
「弓矢ほど値が張らないから、数をそろえられるな。おい、急いでその雑貨屋に買いに走らせろ。ほかのやつは、中に詰められるものを集めるんだ！」
ラスティーの指示に、『暁の星』の面々は忠実に従って動き出した。『銀のしとねに眠る君』隊はすでに、動き出した絨毯目掛けて弓矢での攻撃を開始している。しかし、弓矢は分厚い絨毯に突き刺さってはいるが、落とすまでには至っていない。
「塔に突入しろ！　上からのほうが狙いが付けやすいぞ！」
弓矢を持った男達が、一斉に塔の中に乗り込んでいくのをラスティーは意地悪く見守った。しばらくすると、足を滑らせ階段を落ちる音や悲鳴が聞こえてくる。
空を飛行するものに対しては、重量のある物体をぶつけてバランスを崩したほうが有効な場合もある。ラスティーは、そう本に書いてあったことを思い出す。だから、シーグを捕らえる手柄は『暁の星』のものだと確信していた。
ホワイトホースの職人区画は、空飛ぶ絨毯を追いかける若者達の異様な熱気に包まれていた。

2章－53　武器調達（後書き）

真のヘタレ、降臨です（笑）

2章－54　冴えたやり方

＊

シーグとリーザは塔の中から空を飛んでゆく絨毯を見ていた。絨毯の上には、人の形に膨らんだ二着のバスローブが乗っかっている。もちろん、リーザが魔術で形作ったものだ。

「手加減なしだな……」

シーグは矢ぶすまとなってゆく絨毯を見ながら、あっけに取られていた。どうやら、彼らはアイシャに逆らうものを生かしておくつもりはないらしい。決闘に行けなかった１０名のうち、一体何人が彼らの手にかかったのだろう。とんでもない親衛隊もあったものだ。

「さあさ、見ている場合じゃないわ。もう、逃げなくちゃ」

リーザは床に手をかけて、あちこちを押している。

「何をしているんだ？」

「ここら辺に抜け道を作っておいたの。あれぇー、何処だったかな？」

リーザは這い回りながら、両手で床を押している。

「抜け道って事は、空洞になっているのか？」

「そうね」

「だったら叩いたらいい。他よりも音が違うはずだから」

「シー坊ってば、偉い！」

リーザは感動の声を上げながら、床を手のひらでぺんぺんと触っている。シーグは呆れながら拳の裏で床を叩いていく。すると、確かに他とは違い、コンコンと軽い音が鳴る場所があった。そこを押し込むと、床が持ち上がって下へ続く穴が現れた。滑車に巻かれたロープまでがついている。

「ここから一階まで直接降りられるわ。みんなが絨毯を追いかけているうちに、裏口から脱出よ」

「すごいな」
シーグは思わず嘆息した。まずは、塔の螺旋階段で侵攻を食い止める。塔に視線を集中させて、絨毯で脱出すると見せかける。その一方で、自分達はそこから生じた死角から逃走するというわけだ。
その時、階下から誰かがガラス球に足を取られて転ぶ音や、悲鳴が聞こえて来た。「たいまつだ！」「カンテラだ！」と怒鳴りあっている声がその後に続く。それを聞いて、リーザはいそいそと革靴やマントや帽子を身につけた。
「リー姉。先に行ってくれ」
「もう、時間が無いわね。私を抱きかかえて降りてよ」
「……大丈夫かな？」
「さっき、私を運んでくれたじゃない。それとも重いから嫌ってわけ？」
「俺の腕力じゃなくて、この滑車がどの程度もつか心配なんだ」
「うーん。ぬいぐるみでなら試したんだけどなー」
「……今度から人間で試してくれ」
シーグはため息混じりにつぶやく。窓の外を見ると、今度は皮袋が空を飛んで絨毯を狙っている。弓矢よりも有効な様子で、絨毯が不安定に揺れている。実際に乗っていたらすでに転落していただろう。
「即席のブラックジャックを作ったのか。ずいぶんと手際がいいな」
「ここは職人区画だもの。必要なものは何でもそろうのよ」
「他には何が飛んでくるやら」
「あの方向だと、車輪とか樽の廃材だと思うよ。途中に宿屋とか馬車の店があったでしょ？」
どういうことだ？　シーグは不思議に思ったがロープを腕に巻きつけて体を固定する。
「よし、大丈夫だ。だたし、ゆっくりだぞ」
飛びつこうとしていたリーザは、不満げな様子でシーグの体に手を回す。滑車がカタカタと音を立てて、シーグとリーザはゆっくり

と降りてゆく。すると、頭上の板がひとりでに閉じた。
真っ暗の闇の中を、滑車の機械的な音だけが木霊している。パンと手を叩く音がして、青白い魔術の光をが灯る。リーザはそれを帽子のリボンに引っ掛けた。片側には石壁、もう片方には黒いカーテンが懸かっている。
「……さっきの話だが、なんでそんな事が分かるんだ？」
「うん。職人区画のみんなに伝えておいたの。今日は空飛ぶ絨毯を打ち落とそうとする人達が来るってね」
「どういうことなんだ？」
「職人にとって、インボルグは棚卸しの季節だもの。いらない物がわんさと出てくるわ。それが売り物になったら素敵だと思わない？」
「この騒ぎも商売の種にしたのか……」
職人の図太さにシーグは脱帽の思いだった。
「そうだ、グレイルさんと婆さんは大丈夫なのか？」
「平気よ。分かれてすぐに、通りの人たちに『そろそろ戦闘開始』って連絡しに行ってくれたから」
「つまり、こうなる事を何もかもお見通しだったわけか」
「うん」
リーザは楽しそうな声で答えた。思いのほか大きな声で、壁に反響する。
「音が奴らに聞こえないかな？」
「一階は黒いカーテンで覆っていたでしょ？　劇場で使うくらいの分厚い幕を何重にも使っているもの。大声で歌ったって外には漏れないわ。どう？　完璧でしょ」
「言う事なしだな。確かに――」
その時、頭上でバキンと鈍い音がしてシーグは体勢を大きく崩した。

2章ー55　逃走経路

高さで言うと、3階の途中あたりだ。落ち方が悪ければ無事では済まない。

「や、やだ！」

リーザが怖がって、シーグにしがみつく。それがとどめとなって、もう一度鈍い音が鳴る。今度は吸い込まれるように下に落ちていった。

「キーー」

リーザは悲鳴さえも出せないほど怯えきっている。シーグは首筋に爪を立てられて痛みに顔をしかめた。しかしその一方、危機に見まわれたときの常で感覚が鋭く研ぎ澄まされてゆく。考えるよりも早く、シーグは開いた手でナイフを抜いた。そして、横に広がるカーテン目掛けて突きたてたのである。

ビィー、と布を裂く音と共に落下の速度が遅くなる。シーグはナイフの角度を調整し、斜めにカーテンを裂いて落ちる速さを調節する。裂けたカーテンの向こうにもカーテンがあった。どうやら、何重にも張り巡らされているらしい。

足に床がついても、リーザは眼を固く結んだままだった。頭上から滑車が落ちてくるのを、シーグは三歩ほど下がってよけた。滑車は砕け散り、火花を散らしながら騒がしい音を放つ。

「一階に到着したぞ」

声をかけるとリーザは眼をぱちりと開く。そして、周囲をきょろきょろと見回した。

「え、なんで？」

「代わりに、カーテンをダメにしてしまったけどな」

「それは別にいいけど……」

カーテンが裂けただけで、どうして無事なのか。リーザはいまいち状況が飲み込めていないようだ。

「ずいぶんと音を立ててしまったな。早く逃げた方がいいと思うが？」

「う、うん」

シーグの提案にリーザはうなずく。そして、帽子のリボンに引っ付いた光の玉を指ですくいあげる。周囲を照らしながら、壁を調べた後にレンガの1つを箇所を力一杯押し始めた。「うーん」とうなりながら、何度も押すが何も起こらない。

「ここを押せばいいのか？」

「うん、お願い。私の力じゃ無理みたい」

シーグも足を踏ん張って全力で押したが、ビクともしない。もしやと思って、一個ずつずらしてレンガを順番に押していくと、ガコンと音を立ててレンガが奥に引っ込んだ。

「……」

「あは！」

リーザは笑ってごまかした後、再び壁を押す。すると、隠し扉が開いて光が入ってきた。荷馬車が通れるほどの広い通りだが、そこには誰もいない。建物越しに表通りから賑やかな物音が聞こえてくる。「矢で俺を狙った」だの「汚ねぇ袋をぶつけやがって」だのと、お互いに叫びあい、罵り合う声。それに混じって何かがぶつかり合う音が響き渡る。

物音だけでも、空飛ぶ絨毯を追いかけているのではなく、大規模な乱闘状態になっているのは簡単に想像できた。そして、通りに伏せてあった人間も自分達の親衛隊に味方するために離れてしまったのだろう。

そこでは3組の親衛隊が、職人達に武器を提供されながら騒ぎを拡大させていっているのだろうか？　シーグがそんな事を考えていると、リーザは鼻歌交じりにスキップをしながら先を行く。

「今度こそ、ゆっくりお茶にしましょう。フィーちゃんも誘って、お茶菓子も用意して。そうだ、学園地区だから見晴らしのいい湖岸がいいわね」

リーザは途中でくるりを振り返って後ろ向きに歩き出した。そして、楽しそうにお茶会の計画を立てている。
「フィーちゃんはミルクと蜂蜜入りの紅茶ね。シー坊は何か希望がある？」
「いや、俺は特に……」
大騒ぎになっている通りを1つだけ隔てた無人の通り。そこをシーグとリーザは散歩でもするように悠々と歩いて行った。
「だったら、季節のハーブを使ってみましょう。私はミントを少し入れて。途中で市場に寄るけどいいかしら」
「ああ」
シーグの生返事に、リーザは大げさにうなずいた。
「じゃあ、決定。目指すは『ウィングス通り』よ」
かくして、2人はホワイトホース区画を後にしたのである。背後に巻き起こる狂騒は止む事を知らない。

2章－56　冥王カラナウス

＊

シェンナ・グラドリガはメティスの13代目の王である。シェンナ王が即位した時、彼こそはメティスを滅ぼす破滅の王と噂された。13代という数字が不吉なある故に。また、彼が即位する際に起きた政争が国中を揺るがせた故に。15歳の若さで即位したが故に。暗いアンバー色の髪と、同じ色の瞳が濁った血の色を連想させるが故に。

即位後にまずは政敵を滅ぼし、次に国の混乱に乗じて一斉に侵略を開始した4方の敵をまたたく間に滅ぼした。その頃には冥王カラナウス（血まみれ）と呼ばれるようなる。戦争での行為があまりにも残虐で、敵に対して容赦が無かったからだ。

例えば、倒した敵兵の首をはねてから、杭に刺して国境地帯に壁のように並べる。仲間達の変わり果てた姿、満ち満ちる腐臭。空を多い尽くすカラスとハエの群れ。冥府の道行きもかくやという、恐ろしい結界を乗り越えられる軍勢などありはしない。更にその年、国境地帯に集中して疫病が流行し戦うより前に敵が総崩れともなった。メティスの魔術師が、呪いを放ってためだと誰もが信じた。

シェンナ・グラドリガの軍勢の行くところは勝利と、死と破滅しかなかった。シェンナの所業には吟遊詩人でさえ舌を凍りつかせ、宮廷詩人でさえ記録に残す事をはばかるほどであったという。

国境紛争はわずか1年、事実上は春のベルテヌ（花祭り）から冬のサムハイン（死神の日）までの半年間で終結する。

次の年、メティスは攻勢に出るのだと大陸中の国々が震え上がった。しかし、インボルグ（収穫祈願の祭り）の後にメティスが挙兵する事は無かったのである。

シェンナは戦争ではなく魔術師の育成に資金を投下し、騎士団の

強化にも力を入れた。先の戦争で功績の高かった魔術師の一族。七家を重用して国の要職につけ、メティスの政治体制を一新した。また、区画を整備して殖産工業を発達させる。

王国がどんどんと豊かになる一方で、王の残虐さは彼の敵と罪人にしか向けられる事は無かった。その事実が国中に浸透した現在は、彼を賢王と称える声が高くなっている。

だが、王城に勤めるものは知っている。シェンナ王は神々のように気まぐれで、闘争と敵を常に求めている。中でも決闘の見物を何よりも好み、『ヴァンガード』が繰り広げられるときには、政務を放棄してでも見物に行くのが常であった。

＊

赤色の道は玉座が終端となる。

アクリアエ・スリスの広場から城門をくぐるまでは赤レンガの道。王城フォルナージュの中では緋色の絨毯が続く。メティス建国以来、かえられた事のない様式だ。しかし、諸外国の大使達は玉座の間へ向かう度に、シェンナ王が冥王カラナウスの二つ名で呼ばれることを思い返させられるという。

ベクターはシェンナ王に謁見するために緋色の絨毯を進んでいた。予想していた通りに、王城の中はごった返している。忙しく動き回る文官武官、王に謁見を拒否されしぶしぶ引き返していく各国の大使。アクリアエ・スリスへと物を運び出す人足達。

ヴァンガードが行われる朝は、王は必ず政務を完全に放棄する。その上で国の中枢を治める者達を好んで集めてサロン（談話会）を開くのだ。そのため、王国の政務はほとんどその機能を失う。王城に勤めるものにとって、決闘の朝は悪夢の続き以外に何者でもない。ましてや、今回のヴァンガードは朝に決定し、正午に決行される。あらゆる予定が台無しになり、混乱している真っ最中なのである。

「ベクター卿、お早いですな！」

キィキィと響く甲高い声に、ベクターは歩みを緩めた。けたたましく足を動かして駆け寄ってくるのは異相の男である。１０才の子どもほどの背丈しかないが、頭だけが異様に大きい。丸い頭はすっかりと禿げ上がっており、眉毛も無い。髭だけが足元に届くまで生えている。きょろきょろと動く大きな眼は、トカゲを思い起こさせる。どちらにせよ、一度見れば忘れられない容姿の持ち主だ。

「ゲイル卿、お久しぶりです」

ベクターは礼儀正しく騎士の返礼を返す。

「礼は不用ですよ。そもそも、私のような者に礼節を尽くしても奇妙にしか見えませんからな！」

ゲイル・グラキエスは甲高い声でカラカラと笑った。すれ違うもの達が好意的ではない表情でゲイルを見てゆく。その後、そそくさと姿を消していくのだった。

彼ほど宮廷には似つかわしくない人間はいない。異相ともいえる容姿、奇抜な発言や言葉遣い。元々は王族に対する反逆の言質を取られ、家なしの罪人となり幽閉されていた。

それがシェンナ王には痛快であったらしい。ゲイルを幽閉した王族を粛清した後、王国の政務の中心に抜擢したのだ。『グラキエス』とは、ゲイルを幽閉した王族の姓である。

文官武官の全員が彼に好意的ではないが、ゲイルなしではメティスの政務が回らない事は疑いはない。特にメティスの殖産興業の発達は、彼なくしては実現はなかったのだ。メティスの今日の繁栄は、彼の手によるものと、ベクターは考えている。

2章－57　戦の季節

「陛下にも困ったものですな！」
ゲイルはネズミのような前歯を出しながらキィキィ声を出す。王を非難する言葉に、２０歩四方にいた人々がそろってギョッとした。
「決闘が起こるたびに、政務が滞ります。これでは、そのうち国が潰れてしまいますぞ！」
わざわざ周囲に伝えようとしているのか、語尾に力を入れながらゲイルは力説する。かといって、言葉に怒りや憤りは混じっていない。むしろ、朗報を知らせるような快活とした声色だ。
「聞けば、決闘の相手はレイザークの公子とか。これも因果応報ですかな！」
「ゲイル卿、いささか口が過ぎるのではありませんか？」
ベクターが嗜めると、ゲイルはにんまりと笑う。
「いささか？　いささかですと！」
自分で言った事がよほど可笑しかったのか。ゲイルはカラカラと声を上げて笑った。
「完全に度が過ぎていると自覚していますぞ！　旧王の時代であれば、幽閉では済まずその場で打ち首でしょうな。酒の席でさえ！」
ベクターは何も言わず、ゲイルと歩調を合わせながら緋色の絨毯を進む。行く手には眼に見えて人が減っていった。始終このような態度なので、賢明な宮廷人はゲイルを避けて通るのである。
その後もこの調子で政務が滞れば、如何に悲惨な未来が訪れるか。ゲイルは息もつかせぬ勢いで楽しげに話していた。見事なまでに行く手に人がいなくなったとき、初めてゲイルは言葉を止めた。そして、「ふぅ、はぁー」と大仰に深呼吸をする。ベクターも内心ホッとした。
２人とも沈黙したまま歩いていたが、玉座の間にはもうすぐという時。

「今年は戦争になりますぞ」
突然の押し殺した声に、ベクターは息を飲み込んだ。
「周囲の４国すべてが剣と槍と研いでおりますからな。連合して一挙に攻めるつもりです」
声は小さいまま、ゲイルは早口で言う。いつもの浮ついた口調ではない。
「連合というからには同盟を？」
「昨年のサムハイン（死神の日）に密約を交わしたとか。自分達を死神に例えているのでしょうな。容赦なく我々の命を刈り立てるつもりですぞ」
玉座の間の扉が見えて来た。全身を騎士鎧に包んだ衛兵が、扉を守っている。巨大な矛槍を構え、鋼鉄の像のように立ちふさがっているのだ。
「挙兵はいつから？」
「早ければインボルグ（収穫祈願の祭り）のすぐ後から、ベルテヌ（花祭り）には本格的に」
ベルテヌ（花祭り）からルーナサ（収穫祭）までは侵略には向き、防衛には不利な季節である。野山に咲く花や草が馬の飼い葉となるし、侵略した国の畑を襲撃して損害を与えつつ、糧食を得ることもできる。更に飢えを満たすために食料を求めて戦う軍勢は士気が高く、怖いもの知らずとなる。一方で、守る側は家族の安否や自分の畑が気になって緊張感が長続きしない。
「陛下はすでにご存知ですよ。気を落とすどころか、事のほか楽しみにしておられる。口には出されませんが……」
衛兵が近くなるほどゲイルの声は小さくなってゆき、最後には聞こえなくなった。
「しかし、あの衛兵は役に立つのですかな！」
急転して、ゲイルはいつものキィキィ声に戻った。
「あれでは歩くのも大仰ですぞ！　ベクター卿、王室の護衛隊の武装についてどう思われる！　私はかねてから疑問なのですよ。かの

リーガル・バックラーも果たして本当に王を――」
「ベクター卿！」
だんだんと大きくなるゲイル声。それを遮るように衛兵が声を張り上げた。距離が２０歩ほど離れていたし、衛兵は兜をつけているために声がくぐもって聞こえにくい。あれでは自分の声が中で反響して、耳が悲鳴を上げていることだろう。
「サロンが開くにはまだ間があります。それまでベクター卿以外は入れるな、と陛下の命令です」
５歩の距離まで詰めと、衛兵は兜の面貌を上げて報告した。
「なんと、いかなる理由ですかな！」
ゲイルが全身で驚きを表現しながら聞く。衛兵は一歩下がって、足元にいるゲイルを直視する。
「理由は知らされておりません」
「了解した」
ベクターが答えると、衛兵はカタンと兜を鳴らして面を上げる。
「しかり！　しかり！　しかり！」
突然の奇声に再び衛兵はカタンと音を立てて下を向く。再び足元にピッタリと距離を詰めているゲイル。衛兵は下がろうと思ったが、後ろは扉なので下がれなかった。
「ならば聞くが、緊急の用件と言えばどうする？　亡国の危機、王の危急にどう責任を取るつもりだ？」
ゲイルはニヤニヤ笑いを浮かべながら衛兵を見上げた。気の毒な衛兵が困惑している。それが甲冑越しにもベクターには分かった。甲冑をけなされて声を張り上げた態度から考えるに、まだ若く生真面目な性格なのだろう。そして、ゲイルはそういう性格の人間を暇つぶしの相手に選ぶのであった。
「では、私は行きますよ。ゲイル卿」
「おお、どうぞ。私はこの衛兵と話しておりますぞ！」
意地の悪い笑みを浮かべるゲイル。衛兵は助けてくれと言わんばかりに、カタンと兜を鳴らしてベクターを見た。しかし、ベクター

はこれも試練のひとつだと考えて、玉座の間へと足を進めたのである。

2章ー58　王の法

＊

人々が想像するシェンナ・グラドリガは、堂々とした体躯の大男である。渇いた血の色の髪と瞳を持つ、悪魔の巨人、と。

しかし、実際には学者を思わせる風貌の持ち主だ。小柄で引き締まった体格からは、冥王カラナウス、不敗の将という印象は全く伺えない。

「来たか、ベクター」

玉座から放たれる落ち着きのある声色にベクターは膝をついて、頭を垂れる。

「頭を上げろ。誰もおらぬ時に礼節など不要だ」

静かで理知的な声。騎士に叱咤激励するよりも、壇上で朗々と言葉を発するに向いている声だ。

「戦争の事はすでに聞いておるだろう」

姿勢はそのまま崩さず、頭を上げたベクターに唐突に問う。シェンナは暗褐色の眼差しで、玉座から見下ろした。

「はい」

「ゲイルに口止めをさせるのは不可能なようだな。特にお前には真っ先に伝わる」

ベクターの答えに、シェンナは目を細めた。どう返事をすべきか迷いがあったので、ベクターは眼を伏せるだけにとどめた。

「それで、お前はどう考える」

「どう、と言いますと？」

「政務の放棄、開戦の理由。利口なお前の事だ、考えている事は山ほどあるだろう」

「私が口を挟むことではありません」

「では、命じる。考えを話せ」

シェンナは口元は皮肉な笑みを浮かべている。答えたくはないが、王の命令となればそうはいかない。ベクターはしばらく考え込んだ後に、口を開いた。

「陛下が政務を放棄されると、国が立ち行かなくなりますから。そして、此度の戦いは平和の時代が長かった分、大規模な攻勢となりましょう。即座に対応をなされるべきです」

「決闘騒ぎで浮かれている暇などはないと？」

「はい」

「では、メティオスマッシャーの魔術師への処罰。それについてはどう思う」

シェンナは声も表情も変えずに先を続けた。ベクターは危険な兆候だと考えていた。彼が感情の起伏をなくす時は、激情を抑えているときだからだ。

「処罰に個人差がありすぎる、と」

「お前は軽く、グラムファーレのワグナスは重すぎる。そう言いたいのか」

「はい」

答えながらベクターは不思議に思った。なぜ、王がここまで細かく把握しているのだろう。

昨日の戦いは、魔術師同士のいさかいである。メティオスマッシャーの処分は七家が決めた事で、王とは直接関係がない。魔術師と封土に関しては、七家が独自の支配体制を持っている。

「ワグナスにはな。褒美をやると、私が直接伝えたのだ」

王のつぶやきに、ベクターは驚きに顔を上げた。すると、満足げな微笑を浮かべた王と目が合う。シェンナは玉座の肘掛に肘をついて脚を組んだ。

「思うままに褒美を取らせる。処罰を免れるために力を尽くす。ともな」

ベクターは納得がいった。王が降した恩情が、ワグナスの身の置き場所を完全に失わせたのだ。

「王が恩賞を与えるといった者を、七家が過剰に罰する。メティスは一枚岩とはいえないようだな、ベクター」
「七家の人員と、封土に関しては七家が独自の判断を下しますから」
「私の言動は権限を越えていたわけか」
「恐れながら」
「つまり、メティスには2つの国があるわけだ。王家と七家。メティスの国土と魔術師の封土」
シェンナは言葉を切った。ベクターの意見を待っているのだ。
「戦時における命令系統の不統一。これは、致命的だと考えます」
「更に付け加えるなら、内部の離反を誘えばメティスは瓦解するな。実現されれば、効率的な戦略だとは思わないか?」
そして、メティスが滅んでも七家は世界に点在する封土に逃げ込めばすむ。そう言いたいのだと、ベクターは直感した。シェンナが唇を歪める。ベクターが何を考えているかなどお見通しなのだ。
「お前なら、言う事を聞かぬ馬はどう扱う?」
「……鞭を打って主人である事を分からせます」
「しかし、ただの馬ではない。知恵がある。誇りがある。翼があるように何処にでも行ける。団結して戦う事を知っている。そして、騎士よりも高い戦闘力を秘めている」
シェンナはベクターの腰の辺り。杖をつるしてある場所を見た。
「何ゆえ王に盲従しなくてはならん?」
「国の根幹は王にあるからです。メティスは王の法によって統べられていますから」
「なるほど、王の法か」
鼻を鳴らすような静かな笑い。4年ほど前、王に追随して笑った大使はその場で首をはねられた。アヴェンジャーを持ったリーゲルバックラー卿によって。

2章－59　王の使命

「魔術都市郡メティス。そもそも統べる王が魔術師ではないのが間違いなのだ」

お前なら適任だと。そう言っている事に、ベクターは気付いた。

「私は王位継承権を手放しております」

「復権してやる事も出来る。メティスは王の法が統べる国だからな」

「ありがたいお話ですが、辞退させていただきたく思います」

ベクターが王位継承権を復活させれば、王族と七家は政争に突入する事になるだろう。シェンナ王を暗殺しベクターを王位につけようとするもの。逆にベクターを暗殺しシェンナ王の地位を安定させようというもの。両者が王城には入り混じって存在しているからだ。

魔術師達の旗印になる事を恐れたからこそ、ベクターは王位を完全に放棄した。ワグナスが速やかにメティスから去ったのも、王宮と魔術師の衝突の火種になる事を恐れたからに違いない。

王命は如何なる例外もなく実行される。法も掟も習慣も倫理も王命の前には意味を持たない。例えそれが気まぐれであっても、間違いであってもだ。

「脆いな。そして、融通が効かない。これが王政国家の限界か」

まるで過去に滅んだ国の事を話す歴史家のような、回避できぬ悲劇の未来を語る予知者のような口調。自分が統治する国、自分の命に関わる出来事だというのにまるで人事だ。

「この体制では頭のいい魔術師を統べるには向かんな。特に未来や真実を口にし、王に歯向かう輩は何もかもを台無しにするものだ」

ベクターは思わず拳を固く握り締めた。見者の、サフィリアの事を言っているのは間違いないからだ。シェンナは玉座から立ち上がってゆっくりと歩いてくる。

「お前はよくやってくれた。見者が大規模な戦乱を事前に予知できなかったのは初めての事だ」

「そして、これからも予知は限定されます。特に『星見』はほとんど機能しないでしょう。『夢見』にしても、自分の過去の記憶を探るに留まるかと」
「異なる時間、無数の可能性を探る事は不可能となったか。ならば、残るは『遠見』だな」
「『遠見』は、距離が遠いほど不明確になります。天空の水盤はメティスの国境地帯から離れていますので、王都の魔術師達のほうが探査には向くでしょう」
「ならば、見者は戦争でまるで役立たずとなったのか」
「はい。それどころか、新しい見者が現れても封土そのものが力を失っています」
「フェルナンディのサフィリア。あれを殺す必要もなくなったわけか。更に、そこまで能力が限定されれば、見者が狂気に陥る事はないわけだ。よかったな、ベクター」
「……」
膝を突いたままのベクターの横を、シェンナは無防備に歩いてゆく。
「天空の水盤自体を破壊しなくてもよかったのか？」
「変わりに天空の水盤から水脈が延びる土地を破壊しました。見者の予知は湖から水脈の通じた場所にしか効果はありません」
「なるほど、そのためのメティオスマッシャー。そして、セブンパワーインテグレーションか。ガイス・ジュサックを利用したわけだ」
「はい」
「敵を騙すにはまず味方から、か。政戦両略の基本だな。此度の戦はこれで勝てる可能性が出てきたぞ」
「私には、見者が役に立たない方が不利に思えます。敵の動きがまるで分かりませんから」
反論したベクターの背後で、シェンナはピタリと足を止めた。
「４方からメティスに攻めてくる敵がいる。お前ならどう戦う？」
「国境地帯に兵を伏せ、防ぎます」

「それでは勝てんな。よく考えろベクター。兵力を集中し、補給線を短くするのが戦略の基本だ」
４方向からの同時進行となれば、兵力を一箇所に集める場所は王都以外にありえない。次の瞬間、シェンナの言いたい事に気付いてベクターは背筋に冷や汗が流れた。
――出兵はせず国土と民を犠牲にし、王都まで侵攻を許す。そして、魔術の守りで一挙に撃滅。後に温存していた兵力を展開して追撃戦を開始する――
「勝てるぞ、ベクター」
シェンナの勝ち誇った声が玉座の間に響き渡る。ベクターは立ち上がり、王を振り返った。
「国民を守るのが陛下のお役目です！」
ベクターは責める口調になるのを抑えられなかった。王の怒りをかう恐ろしさなど、意識のかなたに吹き飛んでしまっていた。
「違うぞ。国に勝利と成功をもたらすのが使命だ。敗北する王に何の意味がある？」
言葉を失ったベクターに、シェンナは酷薄な笑みを浮かべたまま言葉を吐く。
「メティスの国土は東西に長く、４方に脅威を抱えておる。古来より国境で侵攻を留めようとしたために、メティスの主は何度も入れ替わったのだ。その過ちを繰り返すのは愚の極みよ」
「そのための対抗手段が魔術師です。七家を受け入れ、魔術師の育成に力を入れたのではないのですか」
「だが、肝心の魔術師が命令に従わない。服従せぬものは、戦には不要だ」
シェンナは無防備に歩み寄ってくる。とっさに腰に手を伸ばしそうになった自分に、ベクターは自分が一番驚いた。
「私を殺す事はたやすいぞ。お前は玉座の間に杖の持込を許されている唯一の人間だ。そして、周りには誰もいない」
感情のこもらぬ平坦な声、無表情のままシェンナはベクターの肩

に手を置いた。
「それに、三騎士ならいつでも私を殺せるはずだ。アヴェンジャーを持つリーガル・バックラー。王城の何処にでも姿を現せるナイト・ロード。視線と同じ長さの槍を持つアクア・ランス。これほど暗殺に向いた能力はない。よく今まで私の首が繋がっていたものだな」
「……皆、陛下を守るために誓いを立てた騎士です」
搾り出すような声を出すベクターに、シェンナは鼻につくような笑い声を出した。
「言葉は正確に使え。私個人ではなく王をだ。王にふさわしくない者……ではないぞ」
すれ違いざまの声が悪魔の囁きのように聞こえた。
「奇襲を受けたほうが都合が良いのだ。敵が目前に迫れば、内部の不和など消し飛ぶ。敵は1つにまとまり、メティスも1つに結集するのだ。誰にも悟られてはならんぞ。この決闘騒ぎは、よい隠れ蓑になる。アイシャ・ディスペリアもなかなか演出が巧みだ。この戦は勝てるぞ。喜べ、ベクター！」
シェンナは朗々とした声でそう締めくくると、壇上にある玉座に向かって歩き出した。小さな笑い声は玉座に近づくほどに大きくなり、やがては広間全体に響き渡る哄笑となった。

2章－60　ウィングス通り

＊

『ウィングス通り』は王都の東西を貫く中央大通りである。
同時に4台の馬車が行き交うことが出来る大きな道。両端には歩道も付けられている。この通りの大きさに合わせ大陸中の馬車の幅が決められた。そのため、横幅の合わない馬車はメティスの町に入ることさえもできない。更に轍を乱さぬためにも、車輪の幅や材質も厳命に決められているのだ。だから、馬車ギルドの印章のない馬車は余計な審査を求められ、余計な手続きと時間を取られる。何も知らない農夫が自前の馬車でメティスに来たところ、城壁の外からすべての穀物を手で運ぶ羽目になった。そんな話は珍しくない。天秤やマスなども、ホワイトホース職人ギルドでの認証が無いものは、王都では信用される事はない。
他にも商工業の複雑な決まりは必ずメティスを中心に決定される。そのため、大陸中の商人職人達はメティスに訪れて勉強し、技術を学ぶ事が理想なのだ。そして、職人はホワイトホースに工房を構え、商人はウィングス通りに店を出す事を夢見て日夜働く。
街道に雪が残るうちには、大河アクア・ランスから運び込まれた品々が市場に並ぶ。木戸を閉められたままの店も多い。夜になればさすがに人通りも絶える。
だが、インボルグの後に街道の雪が完全に消えれば、陸路からも次々と品物が届き旅人が行き交うようになる。道の両脇に柱のように立つ塔には魔術の光が灯され、昼も夜も関係のない不夜城となるのだ。
そして、その賑わいはサムハイン（死神の日）の夜を迎えるときまで止む事はない。

＊

つまり騎士が乗っているのはユニコーン（一角獣）ではなく、天馬（ペガサス）だったのか。シーグは通りをぼんやりと眺めながら、そう結論を出した。

ウィングス通りは、王都に到着してすぐにフェイル・リレイ（石突の中継地）から見下ろした場所だ。太陽が昇るに連れて人は増える一方で、馬車が忙しく行きかっている。今でさえ、世界中から人が詰めかけてきたのではないかと疑いたくなる。これよりも更に人が増えたら、戦場よりも窮屈でやかましいのではないだろうか。

戦士といっても常に軍勢の中にいるわけではない。軍勢だっていつも戦闘をしているわけではない。なのに、商人はいつでも戦場に勝る喧騒の中に身をおいている。ひょっとしなくても、彼らは戦士よりも遥かに強靭な精神を持っているのかもしれない。

「うーん、どっちにしようかなー？」

少なくともリーザを筆頭に、ホワイトホースの職人達がしたたかであるのはよく分かった。自分の家を襲撃された後なのに、この呑気さはどういうことなのだろう。

「レモングラスと、ネトルはどっちが好き？」

「どっちでもいい」

背中を向けたままでシーグは無愛想に答える。そもそも、比べようにもハーブの事などシーグにはさっぱりだった。

「じゃあ、両方とも頂戴」

リーザは気を悪くした様子も無く、店主に言った。たぶん、「女の子の買い物に付き合えないなんて、紳士失格よ」とでも、言われるのだろう。チラリと後ろを見ると、リーザは真剣な様子で他のハーブを眺めていた。まだ買い物は続くらしい。

「冷たいのと、ほんのり温かいのはどっちがいい？」

「何でもいい」

「うーん、一日経っているし暖かいほうにしましょう。あとは、ラ

ヴェンダーの油も頂戴」

料理ならいざ知らず、ハーブティーに油を入れるのだろうか？考えてみたがよく分からない。たぶん、そういうこともあるのだろう。シーグはひとまず納得しておいた。

再び薬草に見入って黙り込むリーザ。後ろを見ると今度は無愛想な店主と目が合った。リーザの言葉にも、首を上下か左右に動かすだけで一切口を開かない。見るからに気難しそうな、わし鼻の老婆。手に持った杖は節くれだった樫だ。詩人の語る魔術師そのままの姿である。

すくなくとも、肩や足が見えるようなピンク色のマントを着て、三角帽子に巨大なリボンをつけてはいない。店主はまるで無関心だが、道ですれ違う人はたいていリーザを振り返っていた。格好が奇抜な事もあるが、特に男の視線がまとわりつくようだったのは確かである。

そういえば、メティスでは服装に関して細かな取り決めがあるとサフィリアが言っていた。リーザの格好はそれに引っかからないのだろうか。

ぼんやりと考え事をするのも飽きてきて、シーグは何となく馬車道に向かって歩いていった。ゴトゴトと行き交う馬車の群れ、忙しく動き回る旅人。故郷のレイザークとはまるで規模が違う。ウィングス通りには、道のあちこちに排水溝がついている。レイザークと違って雨が降った日に、通りに水があふれる事もないだろう。石畳なので、馬車が泥水を跳ね上げる事も無い。水路も陸路も街道も水道も完備された温暖な都市。

メティスが交易の中心となるのは当然だ。この豊かさが、交易都市として栄えていたレイザークを衰退させていった。そう考えると、シーグは複雑な気持ちになる。

「あー！」

突然、馬車道の向こう側から叫び声が聞こえた。行き交う馬車の隙間から、シーグを指差している2人組みの青年がいた。馬車をか

わしながら通りを横断し、シーグ目掛けて一目散に走ってくる。
何にせよ、好意的ではないのは確かだ。片方の男の額と鼻にアザが出来ているのを見て、シーグはようやく思い出した。
塔を最上階まで駆け上がって足を滑らせた男だ。

2章－61　シャックリと絶壁

2人はシーグしか見ていない。店にいるリーザには気付いていないのだ。ならば、やるべき事は1つしかない。シーグは2人組みに背を向けると、一目散に逃げ出したのである。

「貴様、逃げるか！」

「卑怯者め！」

お決まりの言葉を吐いて追いかけてくる2人。シーグは細い間道の前で立ち止まる。そして、他に自分を追いかけてくるものがいない事を確認した。その後、2人がしっかりと追跡してきている事を確認して、通りに逃げ込んだ。

ずいぶんと寂しい通りだ。唯一開いている店では、眠たそうな男が掃除をしていた。朝だというのに店じまいを始めている。

真っ赤なバラの装飾のついたゴテゴテしい看板。わざとくねらせた字で『マノンの館』とあり、『♀』のマークが刻まれている。2階の一室は窓が大きく開け放たれており、気だるそうに窓枠にもたれ掛かった女性がいた。

その店より奥には長いこと木戸が開けられた形跡も無い建物が続くだけだ。ここなら、誰にも迷惑はかからないだろう。そう考えて、シーグは足を止めた。

「くそ、こんな所に逃げ込みやがって！」

「あ、いた。あんな所に立ってますぜ！」

2人とも、早速息が切れている。ゼイゼイと息を整えながら、シーグから10歩の距離まで近寄ってきた。

「親衛隊『暁の星』。『灼熱の閃光』マイリグ・ブレストだ」

「同じく。『鉄壁の結界』イッサ・ホコブズ」

聞きもしないのに、2人はかってに名乗った。聞いてもどうせ忘れそうなので、シーグは適当に聞き流す。

「名乗りを上げているんだ。お前も名乗れ」

「貴様は、礼儀も知らんのか」
　2人は大声で怒鳴る。いきなり人を追いかけておいて、礼儀も何も無いだろうに。アイシャにキスされた男は軒並みおかしくなると、シンシアが言っていた。この男達もそうに違いない。
「俺の名は、デービス・デスビーだ」
「嘘つけ！」
　シーグが名乗ると、2人は声をそろえて怒鳴った。知っているなら、聞くことも無いだろうに。シーグはなんだか面倒になってきた。
「じゃあ、キンリク・クリンキにしようかな」
「ふざけるな！」
　今度は片方だけ怒鳴る。
「シージペリラス？　……でいいぞ」
　途中で少し戸惑ったのは、逆読みをしようとして分からなくなったためである。
「どうやら、名乗るつもりはないようだな」
　名前はあっていたのだが、真面目でなかったのはその通りなのでシーグは言い訳をしなかった。
「ええと、マッサにイーリグ？」
　シーグが確認するために問うと、「マイリグだ！」「イッサだ！」と2人が同時に声を張り上げる。
「それで、シャックリと絶壁が俺に何の用事だ」
「灼熱だ！」
「待て、これ以上相手にするな」
　いきり立って言い返そうとしたシャックリを、絶壁が止める。だが、どっちがマイリグでどっちがイッサだったのか。からかっている間に、シーグには分からなくなっていた。二人ともお揃いのローブを着ているし、容貌もどこか似ている。とにかく、怪我をしているほうが鉄壁。無傷な方を灼熱と覚える事にしよう。
「貴様、あの包囲網からどうやって脱出したんだ」
「歩いて逃げたんだ」

鉄壁の問いに正直に答えてやったのに、2人とも疑いの眼差しを向けてくる。一度失った信用は簡単には戻らないらしい。
「プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）は何処に行った？」
鉄壁が周囲をキョロキョロと見回している。
「実はあんた達をここにおびき寄せる作戦なんだよ。凄い魔術の罠が準備してあってな」
「なに！」
目に見えて怯える灼熱。一方、鉄壁は落ち着きを払ってシーグを見つめる。
「ハッタリだ。本当に何かを用意していたら、不意打ちをすればいいんだ。俺達に話すわけが無い」
「な、なるほど」
どうやら、灼熱の方は頭に血が昇りやすく、鉄壁がなだめ役になっているようだ。シーグは戦闘の常として、頭を総動員して考えをめぐらせた。
今度は何を言ってからかってやろうか、と。
「レイザークのシーグ！　アイシャ様へ働いた無礼の数々。その身をもって償うがいい」
芝居がかった台詞を吐く灼熱。シーグが肩を上下させてシャックリをするふりをした。すると、灼熱の顔がたちまち赤くなる。そして、顔色とよく似た赤みがかった石を右手で持つ。更に、ローブの袖から長剣ほどの大きさの巨大な松明を取り出した。
どっちがフィーリアで、どっちが触媒なのか分からない。だが、名乗りと道具から判断するに、火が吹き出すのは間違いなさそうだ。
一方、鉄壁はポケットの中から鋼鉄製の手袋を取り出し、左手にはめた。両方とも、明らかに袖やポケットに入らないものを取り出す。物を小さくして運ぶ魔術に違いない。もしも、簡単なら習ってみたいな、とシーグは思った。

2章－62　爆裂！

2人はそろって何かをブツブツとつぶやく。魔術の呪文だ。シーグは足元に落ちていた石を拾って、思い切り投げ付けた。石はカンと音を立てて弾かれる。それを見て、2人はそろってにやりと笑みを浮かべた。

「無駄だぞ」

鉄壁の声は、壁越しに聞くようにくぐもっていた。彼らの周囲に目には見えない魔術の壁が展開されているのは間違いない。一方、灼熱の持つ松明には巨大な炎がともっていた。それはガイスが一人で作ったものよりも、遥かに巨大で荒々しく燃えている。そして、更に巨大に膨れ上がっていくのだった。

鉄壁が守りを固めて、その間に灼熱が攻撃の魔術を最大にまで高めてゆく。攻撃と防御とそれぞれ担当しているのだ。昨日の戦いでもベクター達が同じことをしていたのをシーグは思い出した。

「ふっふっふ、焼き殺してくれる！」

余裕の笑みを浮かべる鉄壁。しかし、2人ともやけに顔が赤くて息が荒い。中は相当暑くなっているのだろう。

どう対応するか、考えるまでもなかった。シーグが片手を上げると、灼熱と鉄壁は用心深く手を見つめる。シーグはその手を軽く左右に振った後に、クルリと振り返ると一目散に駆け出したのである。

「あー、逃げるな！」

今度は灼熱の声が聞こえて来た。後ろを振り返ると、灼熱は松明に炎を灯したままでシーグを追いかけてきている。その後ろにも、鉄壁が続いていた。声が普通に聞こえるのは魔術の壁を取り払ったからだ。

灼熱は走りながらシーグに向かって松明の先を向けた。「今から撃ちます！」といわんばかりの仕草。シーグは曲がり角を折れて、灼熱の死角に逃げ込んだ。

「く……そ！」

背後から聞こえて来たのは、絞り出すような灼熱の声。どうやら、魔術を維持して走るのは相当疲れるようだ。それとも、密閉された空間の中で炎の熱さに当てられたのか。その両方かもしれない。

曲がり角を折れた後、手ごろな大きさの石が2つ転がっているのを見つけた。シーグは走りながらそれを拾うと左右に1つずつ持って立ち止まる。そして、灼熱と鉄壁が追いついてくるのを待ち受けた。

ばたばたとあわただしい足音、荒い呼吸。壁に隠れて見えないが、物音から何歩離れているかさえシーグには正確に分かった。

半瞬の差で投げられた2つの石。1つは炎を巻き上げる松明を弾き飛ばし、もう1つは灼熱の膝にぶちあたる。「ギャッ」と灼熱が声を上げて倒れる。同時に「わー！」と鉄壁が絶望的な悲鳴で叫ぶ。それと重なるようにして、巨大な爆発が2人を包みこんだのであった。

「あら……ま」

予想以上の事態。シーグは石を投げたままの姿で動きを止め、開いた口も塞がらなかった。生ごみを燃やしたような黒煙が立ち上り、悪臭がただよっている。リーザが言うところの『着火失敗』が起こったのだろう。

やりすぎたか、とシーグは悔やんだ。しかし、襲い掛かってきた相手の自爆の面倒まで正直見れない。昨日もそうだったが、魔術師と戦うときは相手の無事を気にかけながら行動する必要がありそうだ。

近づいて灼熱をひっくり返してみると、背中にしか焦げ目がなかった。鉄壁の方は憎憎しげな目つきでシーグをにらみつけている。肩で息をしているが、呼吸音は正常だ。

火に巻かれたときに厄介なのは肺を焼かれる事、そして瞳を焦がしてしまう事だ。それらは火傷と違って完治しない事が多いからだ。

「火の取り扱いには注意しろよ」

シーグが注意すると、鉄壁は悔しそうなうめき声を上げた後に気を失った。2人はそのまま放っておいて、シーグは再び『マノンの店』の前に戻った。すでに木戸は閉まっていて、掃除していた男の姿はない。

「あんた、魔術師かい？」

頭上から気だるそうな女性の声が聞こえてきた。そこでは、相変わらずだらしなく服を着崩した女性が窓枠にもたれかかっている。

「いや、違う」

「あら、よく見たらずいぶんと若いじゃないか」

女性は身を起こして、興味深そうにシーグを見る。

「店先で暴れてすまなかったな」

「別に誰も気にしやしないよ。ここみたいな裏通りなら、死体が転がるなんて珍しくもない。朝のうちはさすがに珍しいけどね」

楽しそうに笑う女性を、シーグは睨みつけた。

「少々焦げているが、軽い火傷だ。医者の知り合いがいるなら、呼んでやってくれないか」

「自分に襲い掛かる敵の心配をするなんざ、頭がおかしいのかい？」

「そうかもな。よく物覚えが悪いといわれるよ」

シーグは無愛想に答えて、きびすを返すと大通りに向かって歩き出した。戦いや死を簡単に笑い飛ばす言葉や、自堕落な態度が不愉快だったからだ。

「あんた、面白い子だね。いつでも『マダム・マノン』を尋ねておいで。いい娘を紹介してやるよ！」

一体何を言っているのやら。シーグは返事をするのも億劫になって、無言のまま立ち去った。

大通りに戻ると相変わらずの人ごみで、馬車が絶えず行き交っていた。そして、リーザはまだ薬草やハーブとにらめっこをしていた。

「ねえねえ、ピリッと辛いのと、甘いのはどっちが好き」

シーグの方を見もしないで、リーザは問う。

「両方嫌いじゃないぞ」

「じゃ、私の好みで。甘いほうね」
「そうしてくれ」
シーグは相変わらず無愛想に答える。そして、再び待ち惚けをしながら、取りとめの無い事を考え始めた。
そのうちにふと、マダム・マノンの言っていた事が頭に染み込んできた。そういえば、鉄壁が――ひょっとしたら灼熱かも知れないが、シーグにはどうでもよかった――「こんな所に逃げ込みやがって！」と叫んでいた。その理由が分かって、シーグは軽く舌打ちをして頭をかいた。
あの通りは娼婦街だったのだ。

2章－62　爆裂！（後書き）

私設親衛隊『暁の星』

屁理屈の1号　ラスティ・クルス
誤爆の2号　「灼熱の閃光」マイリグ・ブレスト
不幸の3号　「鉄壁の結界」イッサ・ホコブズ

でした。

2章－63　4度目の春

＊

買い物が終わった後、シーグとリーザは湖の上にいた。
市場の水路から、リーガル・バックラー湖に漕ぎ出す渡し舟に乗って学園地区に向かっていたのである。
船に上では布の包みが山積みになっていた。中身はほとんどがハープや薬草なので重くはない。しかし、大きくてかさばるものばかりだ。更に、布の包みには黄色や真っ赤な布に花やウサギやら星の模様が縫いこまれている。これは、リーザがあらかじめ準備していた風呂敷なのだ。
なんでも自信作のようで、「かわいいでしょ？」と自慢されてしまった。出来合いはシーグにはいまいち分からないが、これらを持って大通りを歩けば目だって仕方がない。リーザの奇抜な衣装もあって、大道芸人のように見えただろう。だから、船を使って移動するのは、シーグにはありがたかった。
追っ手の事も気になる。ホワイトホースの時とは違い、学園地区にはシーグの姿を見た人間が多いのだ。あまり目立つ行動をしたくない。アイシャの手下たちが、みんな『暁の星』の連中と同じで常識を知らないやつらなら、身を守るだけでも大変だ。
「何を考えているの？」
リーザは船べりに肘をついてシーグを覗き込んでいた。スカートのように広がるマントは座るには適さないようで、まくり上げてしまっていた。更にブーツも脱いでしまっているので、更になまめかしい格好になっている。
船頭は２０歳ほどの男だが、リーザの方にしきりに視線を飛ばして船の操縦がおろそかになっていた。
「シャックリ」

「ん、何？」
シーグが唐突に言うとリーザは、不思議そうに首を真横に傾けた。もぞもぞと体を動かすたびに、いちいち足が目に入る。顔を見ると、今度は胸元がやけに動くのが見えた。なので、シーグは湖の方に目を戻した。
「違った、灼熱だ。それに……確か鉄壁だったな」
「えっと、魔術師の通り名。かな？」
「そう名乗っていたな。そいつらは強いのか？」
「うーん、それだけじゃ誰か分からないわね。名前は？」
シーグは先ほどの戦いの場面を思い起こした
「イ……」
「イ？」
「が、つく名前だったような、気がする」
リーザは船べりに頬をつけて、窮屈そうに足を伸ばした。ゆらゆらと揺れる船に合わせて、マブタが重そうに閉じてゆく。
船頭は再びそわそわしている。あの慌てようは異様だ。たぶん、リーザがマントの下に何もつけていないとでも勘違いしているのだろうか。
「通り名は他になかった？　灼熱の何とか、鉄壁の何とか。っていう感じで」
「なんだ、こういかにも火が飛び出しそうな名前だったぞ。それに絶壁」
リーザは一瞬キョトンとした後、半分寝ぼけた声でけらけらと笑いだした。
「灼熱のシャックリ？　それとも絶壁の灼熱かしら」
「いや、違う。それは俺が勝手に呼んでいただけで実際には……」
喉まで出掛かっているのに思い出せない。風はなく日差しは緩やかで、陽だまりの中にいるように心地よい。そのせいで、妙に眠たく頭がはっきりしないせいでもある。もう少し気に留めておけばよかった、とシーグは悔やんだ。

「ちょっと前の話だけど、『灼熱』と『鉄壁』の二つ名をもつ魔術師がとても優秀な成績で卒業したの。七家以外で、そんな成績を出すのはすごい快挙だったのね。だから、みんなあやかりたくて、真似を始めたわ。だから、今はメティスに１００人くらいその通り名を使っている人がいるんじゃないかしらぁー」

最後の言葉が尻切れになったのは、リーザがアクビをしたからだ。更に頭を船べりに預けたせいで三角帽子がずれる。湖に落ちそうになったのを、シーグは受け止めた。

「おい――」

注意しようとした言葉をシーグは飲み込んだ。リーザは今度こそ本当に眠ってしまっていたからだ。再び視線を感じたので、今度は容赦なくそちらを睨みつける。すると、船頭はびくりと体を震わせて進行方向を向いた。その後もシーグがずっと威圧的な視線を向けていたので、船頭は振り向かなくなった。とたんに、船は速度を上げ揺れも収まって湖の上をすべるように進む。

「まるで観光気分だな」

シーグは大あくびをしながら、湖と空を眺めた。リーガル・バックラー湖は、透き通るような青さで広がっている。天空の水盤と違って空や覗き込んだ自分を映し出さない。同じ湖でも何かが違うのだろうか？

取り留めのない事を考えていると、肩にリーザがもたれ掛ってきた。何度も額をつついたが、リーザはすやすやと寝息を立てて完全に眠り込んでいる。

「相変わらずの寝坊助だな」

ふと、シーグは昔の事を思い出した。

１１歳の春の事。リーザと一緒に天空の水盤を尋ねたことがあった。

今日と同じように、暖かな春の日にカヌーの上で昼寝をしていたリーザはそのまま湖に流されてしまったのだった。

その時天空の水盤にいたのは、シーグたちだけだった。サフィリ

アは覚えたての『遠見』の術を使う。何度も失敗し、道具に使う銀や金の器を次々と取り替えた。それでも無理なので、水の量を変えたり塩を加えたりしながら何度も何度も繰り返した。サフィリアがふらふらになって倒れる寸前、ようやく魔術が成功してリーザの行方を突き止めたのだった。

水鏡に映るリーザは今と同じように、すやすやと眠っていた。

「一度は目が覚めたけど、何処に流れ着いたのか分からなかったの。だから、動かずにじっと待っていたわ。そのうちにもう一度眠くなってきて。また眠ってしまったのね」

見つかったときにも、大あくびをしながらへらへらと笑うリーザ。シーグもサフィリアも腹を立てる以上に呆れてしまって、何もいえなくなってしまったのだった。

その夜にサフィリアは戦乱の兆しがあることを予知する。最後の春の休暇は短かった。

「レイザークが滅んでから、４度目の春……か」

不吉といわれる数字であり、詩人によれば死者が冥府から蘇り復讐に現れるのが４年目だという。

「なぁ、マードック。あんたは何で俺を殺そうとした。そして、何で泣いていたんだ？」

シーグのつぶやきは、湖を渡る風に消されてしまった。三角帽子のリボンが静かに揺れている。

2章－64　ケダモノー！

＊

「おい、到着したぞ」

岸辺に到着した頃には、完全にリーザは眠り込んでいた。肩を揺らそうが、額をつつこうが目を覚まさない。こういう時には、サフィリアと一緒によくいたずらをしたものだ。耳の穴に草を入れたり、まぶたを無理やり開いたり、口に指を突っ込んで変な顔をさせたり。他にも色々なことをしていた。

今から思い出すと、結構恐ろしいことさえした。幼い子どもというのは無邪気だが、残酷というのか加減を知らない。子どもは天使のようだとたとえられる。しかし、いたずらを楽しんでいるときの自分やサフィリアを思い出すと悪魔の使いとしか思えないのだった。その時に、何があっても笑っていたリーザは、間違いなく忍耐の天使である。

いつまでたっても船を出せないので船頭は困っていた。仕方がないので、シーグは荷物を岸にあげ、リーザを抱き上げて船から下りる。ひとまず、リーザを寝かせられる場所に届けてから荷物を取りに戻ろう。

サフィリアの学校は、湖の岸辺に建っていた。林の広がる湖畔に宿屋のような木作りの建物。天空の水盤にあるサフィリアの家を連想させる。違いといえば、広場のあちこちに手作りの遊具があることだ。木馬やトビ台、荒縄で作られたハンモックなどは見慣れたものである。

しかし、理解不能なものもある。たとえば、3階の高さの木に渡された板には小さな泥の足跡がついていた。下から見上げて分かったのだから、当然板の裏側である。そして、焦げ付いた地面の上に、融解した鉄板がひん曲がって転がっていた。

どうやって作ったのか、一抱えほどの幅の穴が刃物で切られたようにまっすぐ垂直へ、底が見えなくなるまで続いていた。その横には、乾いた泥が山盛りになっている。この泥が穴から掘り出されたものなら、軽く見積もっても１０階よりも深くまで続いているだろう。

魔術師の子どもたちが本格的ないたずらに及んだときに、果たしてどうなってしまうのだろうか。広場に残った痕跡から、嫌なことを想像してシーグは回れ右をしたくなった。その時、扉がガラリと開けられる音がした。

「シーグさん」

元気な呼び声と共に、シンシアが建物から駆け出した。髪を跳ね上げ、千切れるように腕を振り回して懸命に走っている。

「無事だったんですね。よかった！」

息を切らせながら、頬を高潮させている。目端に涙を浮かべ、真っ直ぐと見つめてきた。何処までも一生懸命な様子にシーグは苦笑した。だが、視線がリーザに降りていくと、シンシアは目をまん丸に見開いた。その後、口があわあわと動き、見る見るうちに顔中が赤く染まっていく。

リーザの奇抜な格好を見て、恥ずかしくなったのだろうか？

その後、三角になった目でシーグをキッと睨みつけた。そして、今度は歯を食いしばりながら今度は高熱でも出たかのように顔が沸騰しはじめた。

「どうしたんだ？」

「何をしていらしたんですか！」

わなわなと肩を震わせ、唇をかみ締めながらシンシアは切りつけるような視線でシーグを睨む。何で怒っているのか、シーグにはさっぱりわけが分からなかった。

シンシアはいそいそと自分の灰色のガウンを脱ぐと、リーザの体の上に掛けた。それで分かったのだが、リーザの足が太ももまで丸見えになっていたのだ。抱えて歩いている間に、マントがめくりあ

がっていたのである。よく見れば肩の部分も相当着崩れていて、マントを身に付けていないも同然だった。とりあえず、座るにも、人に抱きかかえられるにも向かない衣装であったのは分かった。

「いやな。何って、まあ色々とあったんだが……」

「色々って……」

弁明しようとしたシーグをシンシアは恐怖の眼差しで見上げる。

「スケベ！」

いきなりの糾弾の声にシーグはひるんだ。

「気絶したリー姉様に何をしたのよ！」

「な、何ってなんだよ！」

逆に聞き返すと、シンシアは耳まで真っ赤になった。全身の血が顔に集まったかのようだ。

「変態！　変質者！」

「な、ななな」

突然とてつもない事をまくし立てられて、シーグは舌がもつれた。

「色魔！　淫猥！　女ったらし！」

「ちょっと待て！」

一歩踏み出すと、シンシアは顔中をゆがめて、シーグから飛び下がって逃げた。その拍子にしりもちをつく。

「下品だわ、不潔よ。近寄らないで、ケダモノー！」

息が続く限り、けたたましい声を上げながらシンシアは叫び続ける。シーグは何がなにやらさっぱり分からず、混乱するばかりだった。

「あー、シーグー！」

シンシアの出てきた扉から、今度はアイフェが飛び出してきた。その後に、サフィリアの生徒たちが一斉に飛び出してくる。と、足元からせりあがってくるような炭火のような気配。シンシアは涙目になりながら、首に下げたペンダントを手に巻きつけた。プラチナの鎖が不吉に揺れる。

「来たれ、天よりの災厄！」

聞き覚えのある呪文にシーグは背筋があわ立つ。パチリと火花が飛び散った。間違いない、雷撃の魔術だ。

「お、おい！」

同時にシーグはもう一つの気配を感じた。反射的にリーザの足を下ろしてシャープネスに手を伸ばす。抜くのをためらったのは、背中の古傷が痛まなかったからだ。危機が迫っているわけではない？

そう思った瞬間。一人の老人が突然空中に現れ、シーグとシンシアの間に割り込んだ。そして、杖でシンシアのペンダントを突く。すると、次の瞬間に老人の手にシンシアのペンダントがぶら下がっていたのだった。

2章－65　気付かせる事

「そこまでじゃよ」
老人は優しい声でそう言うと、杖を軽く振る。すると、シンシアはカクンと全身の力が抜けて眠り込んでしまった。老人は優しい手つきでシンシアの頭をなでると、ペンダントを元通りに首に掛けてやった。
「あの子はキレると手がつけられんのでな。こうするのが一番なのだよ」
好々爺の笑みを浮かべて、シーグに話しかけた。黒い帽子を目深にかぶっている。白いシャツに黒いガウンを羽織り、手にほっそりとした青銅の杖を持っている。これだけならば、まるで絵本から出てきた魔術師そのままの姿だ。
だが、胸まで伸びる白髭は三つ編みがされていて、真っ赤な特大のリボンが付けられていた。
「始めまして、少年。私はジェイナス・マードックというものだ」
礼儀正しく名乗り、ヒョイと帽子と取る。頭頂部に一まとめにした髪にも、やはり真っ赤なリボンが巻かれていた。ひょっとして、真っ赤なリボンというのは魔術師にとって重要な装飾品なのだろうか？
「シーグ君でいいのかな」
余計な事を考えていたために、名乗るのが遅れてしまった。シーグは慌てて背を伸ばす。
「失礼をしました。俺……私の名はシーグです」
「礼儀正しい少年だの。ロディウス老師の弟子にしては珍しい」
ジェイナスはカッカッカと笑って、シーグに背を向けた。子どもたちは少し離れた場所でシンシアを心配そうに見ている。だが同時に、恐いものを遠巻きにみるようにシーグには思えた。
アイフェだけはお構いなしにトコトコと歩いてきて、シンシアの

顔を覗き込む。
「寝ているの？」
「おお。そうじゃよ。だけど、すぐに目をさます。誰かシンシアを教室まで運んでくれないかな」
「じゃあ、俺達が」
力仕事だからと進み出た男子たちを女子が慌てて阻んだ。アイフェは恐がって、シーグの背中に隠れる。
「なんだよ」
「男子はシンシアに触らないで！」
「お前らで運べるのかよ」
サフィリアの髪を引っ張っていた大柄な少年――名前はジュールだ――が先頭に立つ。
１２歳を筆頭に、８歳位までの子どもたち。シンシアを挟んで男女、７対８に分かれてにらみ合っている。魔術師でも男女で対立する複雑なお年頃らしい。
「そうじゃの、女子の方にお願いしようか」
ジェイナスが声を掛けた。ほら見なさい、といわんばかりに女子たちが一歩進み出る。一方、男子たちは不満を顔に浮かべたままで引き下がった。
「行こうぜ！」
ジュールが声変わりの時期特有の高い声を出す。すると、男子の一行は教室に向かって歩いていった。女子たちは勝ち誇った笑みを浮かべていたが、地面に伏しているシンシアを見て表情を曇らせた。
「浮遊の魔術を使ったらどうかしら？」
「ダメよ。結界を張るのにすごい時間がかかるわ」
「シンシアちゃんが風邪をひいちゃうわね」
次に一番年下の女の子が手を挙げると、一番年長の女の子がうながした。子ども同士でありながら、すでに出来上がっている上下関係にシーグは舌を巻いた。
「皆で服を引っ張って持ち上げたらどうかしら」

「でも、これはサフィリア先生にもらった大切なローブなのよ」
「そうよ。裾を引っ張った男子にすごく怒っていたわ」
「起きたときに、裾が伸びていたらきっと悲しむわね」
「でも、手足を持って運んだら引きずる事になりそうよ」
身長がバラバラの女の子達は困って黙り込んでしまった。
「俺が抱え起こそうか？」
「男子は黙ってて！」
口を挟んだシーグを8人がそろって怒鳴りつける。あまりの連帯感にシーグは目をぱちくりさせた。
「俺が……男子？」
一方、ジェイナスは事の成り行きを面白そうに見ていた。が、シーグの足にへばりつくアイフェと目が合うと湖岸を指差した。
女子たちは試行錯誤している。その間にアイフェは岸辺と広場を何度も往復して、布の包みを一つずつ持ってくる。ずっとリーザを抱えたままのシーグもさすがに疲れてきた。すると、それが伝わったのかジェイナスは「すまんが、もう少し待ってくれ」と小声で言った。
行ったり来たりするアイフェの様子を、年長の女の子がなんとなく眺めている。その目がまず見開かれて、次にキラキラと輝きだした。その後に、真っ直ぐとシーグを見つめる。
「その布の包みを貸してくれませんか？」
「いいけど。何に使うんだ？」
「シンシアの体の下に敷いて、布の四隅を皆で持つの。大きな男の人をシーツに乗せて、女の人だけでベッドに持ち上げていたのを見たことがあるんです」
「布を即席の担架にするのか。いいアイデアだな」
シーグが感心すると、女の達は笑顔を浮かべた。しかし、リーザは何というだろうか？　自慢していた布が傷んでいたらに困るに違いない。
「破けたら困るから、何枚か重ねてくれ。中身はハーブとか布とか

ばっかりだ。包みは全部解いてもいいぞ」
「じゃあ、年長の４人でシンシアちゃんを運ぶわ。残りの４人は解いた荷物をシーグさんのところに届けて。それで承知？」
年長の子どもが大人びた口調で仕切ると、残る全員が素直にうなずいた。そして、早速それぞれに仕事にとり掛かった。
「ふむ、それじゃあ任せたよ。私たちは教員室にいるからね」
ジェイナスは子どもたちに声を掛けると、シーグとアイフェを促して歩き始めた。背後では子どもたちが分担して、テキパキと作業を始めている。

2章－65　気付かせる事（後書き）

ノートPC故障中につき、更新遅れてします。
デスクトップの方を使っていますが、活動時間は確実に減りそうです。
スピードは落ちそうですが、なんとか更新はしていきますのでよろしくー

2章－66　趣味と主張と哲学

＊

魔術師の教員室。

カビと薬品と、正体不明の様々な物――コウモリの羽や、干した甲虫等々――が交じりあった匂い。何もかもが雑多に積み重ねられたゴミ置きのような場所。ロディウスの部屋を思い出して、シーグは覚悟を決めた。

しかし、ジェイナスに案内されてたどり着いた部屋はきちんと片付いた書斎だった。革張りの分厚い本がズラリと並んでいて、中央にソファーと机。花瓶には新しい花、机にはレース模様のテーブルクロスが敷かれている。

「ご期待に沿えるようなものはしまい込んでおる。女手があると何かと片付いてな」

呆気にとられたシーグを見て、ジェイナスは微笑んでいる。

「ロディウス師はなんでも器用にこなす方だが、整理整頓だけは苦手だったな。君も苦労が絶えなかっただろう」

「……まあ」

リーザをソファーに横たえる。ジェイナスはアイフェに指示を出して、お茶をいれに行かせた。シーグに小さく手を振って、アイフェは小走りに部屋を出て行った。

「あなたも……えっと、その。弟子だったのですか？」

口を濁したシーグを見て、ジェイナスはカッカッカと笑う。

「その様子ではまだ『爺さん』としか呼ばせてもらっていないようだね」

「ええ」

ロディウスから弟子と認められる事は大変な事なのだ。初対面で彼を『老師』『先生』と呼ぶのは禁忌である。それだけで機嫌を損

ねたり、怒鳴り散らしたりするのは当たり前なのだ。尊敬の意味をこめて言ったとしても、ロディウスには知った事ではない。
「リーザは深く眠っておるな」
「大丈夫なのでしょうか？」
「疲れておるだけさ。魔術師、特にエンチャンター（付与術士）の眠りは深いのでな」
座るように促されたので、シーグは軽く頭を下げてからソファーに腰を下ろした。
「その剣を完成させるのにずいぶんと無茶をしたのさ。君のうわさがメティスに届いたのが夕方。それから、朝まで全く眠っておらんのだろう」
ジェイナスは優しい笑みでリーザを見ている。
「ところで、君は私に聞きたいことがたくさんありそうだね」
「はい」
「その前に一つだけ確認しておきたいのだが、いいかね？」
「ええ」
老人は微笑んだ。ゆったりとした動作、無邪気な表情を見ていると最初は奇妙に見えた赤いリボンもこの老人に妙に合っているとシーグには思えた。
「リーザの着ている服は君の趣味かね？」
「……は？」
シーグは間の抜けた声を出した。ジェイナスは少し表情を厳しくした。
「もしも、若い娘に無理やりこんな格好をさせるのが好きなら少し困ったな、と思ってね。いや、仮にも子どもの教育に携わるものとしての意見だよ」
「違います！」
生真面目な表情のままでうなずく。声色に変化がなく、本気なのかからかわれているのか判断がつかない。
「ふむ、本当かね」

「はい」
疑わしそうな声に、シーグは生真面目に答えた。勘違いされてはたまったものではない。
「全く？　全然？　何も感じるところがないと？」
しつこく聞いてくるジェイナスにシーグは言葉を詰まらせた。
「シーグ君！」
静かだが威厳のある声。深い英知を秘めたまなざし。シーグは思わず背筋が伸びる思いだった。
「それはいけない。女性の姿をこんな姿を見て何も思わないとは。若いのに潤いのないことだ。それは人生の楽しみを棒に振るようなものだよ」
しかし、口にした言葉がすべてを裏切っている。
「そう恐い顔で睨まんでもいいだろうに。君にしろ、サフィリアにしろ、こういう事に妙に潔癖だな」
ジェイナスはカッカッカと笑った。その後、表情をあらためる。
「少し真面目な話をするが、シンシアのために少し露出のある服を作ってくれと頼んだのさ。あの子の反応を見たかね？」
「正直、驚きました」
「肌を出す事や、男性に対して苛烈な反応をするんじゃよ。悪気があったわけじゃない。許してやっておくれ」
「過去に何か？」
「まあね。しかし、詳しくは言えんよ。生徒個人の過去を誰にでも言うわけにはいかないからね。まずは親しい人が、ごく自然に少し露出度のある服を着ているところから慣らす。そう思ったのさ。それに君を巻き込んでしまった。申し訳ないことをしたな。一番悪いのは私だよ」
「いえ、そんな。俺は気にしていませんから」
ジェイナスに深々と頭を下げられて、逆にシーグの方が慌てた。
「色々とやりすぎだったね。リーザは私の注文どおりの服を作ってくれたんだよ」

「……」

生真面目にそんな事をいわれて、シーグは再び気が抜ける思いだった。それを反発と受け取ったのか、ジェイナスは少し声量をあげた。

「そりゃ、君達にとってはこういうファッションは懐古主義だろうさ。だけど、私にとっては青春真っ盛り、最先端の流行だったんだよ」

「はぁ」

「世代の食い違いというものは止められないのだね。時の歯車を止めるすべなどないと分かってはいたけど……」

ジェイナスは残念そうにため息をつく。

「しかし、ここまでやるとは。いや、できるとは思わなかったね。メティスの魔術師のローブの基準を守った上で、ここまで肌を露出させるとは。侮れない。当時、様々な服飾に露出の要素が盛り込まれたものさ。しかし、魔術師は神秘の象徴として敬われると同時に恐れられ、遠ざけられていたからね。手をつけられることはなかった。それは今も同じさ」

饒舌になったジェイナスは更に熱っぽく語りだす。

「前に切り込みの入ったローブだが膝より下まで長いのは確かだよ。『膝下より長く』という記述だからね。そして、ショートパンツとロングブーツという組み合わせをする事で、膝を隠すという基準を守りつつも、限界まで太ももを露出している。膝が隠れれば、太ももが当然隠れるという思い込みを逆手に取ったのだね。うむ、見事というしかないな」

哲学者を思わせる表情と、論理的な話し方。情熱さえも含んだ口調は、壇上の講演者を思わせる。ただし、言っている内容があまりにも理解不能だ。

だいたい、その神秘の象徴にピンクと真っ赤の奇抜な服を着せる。その地点で記述を守ったところで意味があるとは思えない。周囲の反発は壮絶なのではないだろうか？　シーグにはその情熱と創意工

夫が、一体何を目指しているのか。さっぱり分からない。
「すばらしい。これは芸術とも呼ぶべきだよ！」
「え？　あ、はい」
シーグのとってつけたような返事に、ジェイナスはがっかりした表情を浮かべたのだった。

2章－66　趣味と主張と哲学（後書き）

制服の『膝下～ｃｍ』の規定はこれでクリアできる！。
そう思っていた時代が、私にもありました（笑）

2章－67　リボンの真相

「芸術なの？」
突然聞こえてきた声に、ジェイナスとシーグは揃って驚いた。ソファーの陰から、アイフェが深刻な表情でリーザを覗き込んでいる。
「い、いつからそこにいた」
「ちょっと前だよ」
「どこから聞いていたんだ」
シーグは思わず声が強くなった。アイフェは目つきを険しくした。
「リー姉さんの事を言ってたときからだよ」
それでは何を聞かれていたのか分からない。
「校長先生と何を話していたの？」
逆に質問で返されて、シーグは言葉に詰まった。カエルを見張る蛇のように、アイフェはじっと目を覗き込んでくる。
「変な事……なんだ？」
質問というよりも、念を押すような口調。決して聞いていた話を変だと思ったわけではない。会話の内容ではなくシーグの内心の動揺から、何かやましい事があると確信しているのだ。
「ちょっとリー姉さんの服のことで話しをしていたんだよ」
アイフェは疑いのまなざしをジェイナスに向けた。しかし、好々爺の笑みを浮かべたまま――いつでも微笑みを絶やさないが――アイフェと見つめあう。
「服のことだよ。ちょっと『珍しい服』だけど、かわいいと思わないかな？」
『珍しい服』の場所だけ特にゆっくりと発音する。ジェイナスに促されて、アイフェは首をかしげながらリーザを見ている。しばらくしてから、大きくうなずいた。
「おお、よかった。私とシーグもアイフェと『同じ』ように思うよ」
『同じ』というところに、ジェイナスは特に大きく言った。する

と、アイフェの瞳から猜疑の色が消える。
「だが、外は少し寒い。このままでは風邪を引くかもしれん。それで――」
「毛布だね！」
アイフェは言葉を遮って叫ぶ。ジェイナスが小さくうなずくと同時に、ピュンと風のようなすばやさで部屋を出て行った。シーグがホッと肩をおろすと、出て行ったときと同じ速度でアイフェが引き返してきた。
「な、なんだ。どうした」
驚くシーグの前で立ち止まり、アイフェは少し腰を落としてはにかむ。シーグにはわけが分からない。
「お茶をどうぞ」
丁寧な口調で言った後に、丁寧な手つきで3つのカップをテーブルに並べてゆく。あれだけせわしく動いていたのに、カップの水面は波一つ立てていなかった。
「ごゆっくりしてください」
空になった盆を胸に抱え、アイフェはジェイナスを真っ直ぐに見る。
「とてもよくできていたよ」
ジェイナスの言葉に、アイフェは表情を輝かせる。
「ただ、部屋に入るときと出る時に挨拶を忘れないようにね」
「はーい」
元気に返事をした後に、スキップしながら部屋を出て行った。挨拶もせずに。
「やれやれ」
ジェイナスが微笑みながら吐息をつくと、風の速さでアイフェが戻ってきた。
「しっつれいつかまつりましたー！」
と、入り口で大きな声で叫んでから去っていった。
「失礼しました。なんだけどねぇ」

今度はアイフェは帰ってこなかった。シーグは入り口を見てみたが、アイフェはもう見えなくなっていた。
「油断できないね、本当に。あの子には苦労させられているんじゃないかな？」
「ええ、まあ」
ジェイナスは相変わらず微笑を浮かべている。
「だけど、みんな君の事が気になるようだよ。今日は口を開けば、みんな君の話ばかりしていた。子どもに好かれる性格のようだね」
「からかわれて、遊ばれる素質はあるみたいですね」
シーグは少し不機嫌に言った。ジェイナスは楽しそうに、カッカッカと笑う。その笑い方から考えるに、散々な事を言われていたに違いない。
「恐れられるより、侮られる位の方がいいかもしれないよ。子どもに対してはね。アイフェやシンシアが初対面の、それも男の人にあそこまで懐いたのは始めてだよ」
「そうなんですか？」
「たとえば私などの場合は、最初はみんな恐がって近寄ってこなかった。色々工夫して、一月くらいかけてようやくだったかな。考えてもみたまえ、何だって校長自らこんなひょうきんな格好をしていると思う？」
ジェイナスは髭と頭のリボンを引っ張った。
子どもに対して、そこまで真剣に取り組む。正直なところ『変な趣味の爺さん』と思っていたので、シーグは自分を恥じた。
「やっているうちに楽しくなってね。今では半分、いや大半が趣味だよ。思い通りにやると、問題になるかもしれないね。子ども達の両親に糾弾されるのは避けたいから、自重しているよ。サフィリア先生もやりすぎだ、と最近は特に厳しいしね」
ジェイナスは残念そうに首を横に振っている。
「……」
シーグは、なんだかどうでも良くなってしまった。ジェイナスが

カップを持ち上げたのにあわせて、シーグもカップに口をつける。
暖かく、甘い紅茶。鼻をくすぐる心地よい香り。一息ついてから、思った以上に自分が疲労していることに気付いた。
「ましてや、シンシアとは言い合いまでしたそうじゃないか。それなのに、君のことを本当に心配していたんだ。必死になって、サフィリア先生に訴えていたんだよ。シーグさんの力になってくれってね。だから、サフィリアは今君のために戦いの準備を整えている」
シンシアは約束を守ってくれたのだ。すると、「一刻も早く、お姉さまと仲直りをする方法を考えていてください」と、シンシアに言われていた事を急に思い出した。まだ、何も対策を立てていない。考えてさえいなかった。どうすればいいだろうか？
「おお、ちょうど帰ってきたみたいだね」
「な！」
シーグは危うく、口の中の紅茶を吐き出すところだった。
「詳しくは本人から聞くといい。色々と考えていたようだったからね」
「一体何処に？」
「君の後ろの魔方陣だよ。ほら、到着だ」
ソファーの後ろにある魔方陣が光を放つ。すると、その一瞬後にサフィリアがそこに立っていた。瞳は閉じたままで、飛び交う微光が金色の髪に舞っている。
リーザが『光の中では輝くような』と、言っていた事をシーグは改めて思い出した。

2章－68　馬力を入れて

神秘的な姿に見とれていると、瞳を開いたサフィリアと目が合った。無表情のまま、じっと見つめられて、シーグはごくりとつばを飲み込んだ。

「よ、よお」

口から出たのは何とも無様な挨拶である。シンシアが聞けばあきれるに違いない。

「シーグ、無事だったのね。怪我はなかった？」

心配そうな表情を浮かべ、胸をなでおろすサフィリア。

「ああ、別に何も」

「そう、よかった」

怒っている様子はない。むしろ表情は明るく、声には張りがある。シーグは胸をなでおろした。この２日間で一番期限がよさそうに見えたからだ。

「ホワイトホース区画で暴動があったと聞いたわ。『暁の星』や『銀のしとねに眠る君』と名乗る、親衛隊の男女が４０人以上逮捕されたらしいの。巻き込まれたんじゃないかって心配したわ」

「まあ、なんというか……」

巻き込まれるどころか、騒ぎの中心。さらに言うなら、騒動の火付け役だったのだ。

「相当大規模な戦いだったようね。突発的な市街戦とは思えないほど、武器が充実していたとか」

「ははは……」

リーザを横目で見て苦笑いするしかなかった。昨日から、行く先々で騒ぎを起こしている気がする。

「物騒な世の中だねえ」

ジェイナスがほのぼのとした表情で、ひげを引っ張った。

「それよりもシーグ。剣を受け取った？」

「ああ」
腰に下げた剣を見せると、サフィリアは微笑んだ。４年前を思い出させる無邪気な表情に、シーグは胸をつかれる思いだった。
「間に合ったのね。昨日連絡したら、今日中に間に合わせるって言ってたけど」
たぶん、水晶玉か水盤か。魔術の手段だろうと、シーグは推測した。
「会ったときにいきなり渡して、ビックリさせるって張り切っていたわ」
驚くどころか、命の危機を感じた。しかし、それを話すのは余計だと思ったのでシーグは口を閉ざした。
「リーザとは昔からの知り合いだったのね」
「ん、ああ」
「何時、何処で知り合ったの？」
「いや、それは……」
その事でリーザと口裏を合わせていない。本当のことを話すのは、サフィリアにはよくないはずだ。いや、その情報はロディウスのハッタリなのか。
しかし確信がない以上、余計なことを言うべきではない。言葉に詰まったシーグを見て、ジェイナスは口元に微かに笑みを浮かべた。
「おお、そうだ。リーザさんが色々持ってきていたよ。きっと、シーグ君の治療に必要なものじゃないかな？」
「そうだわ。ゆっくりしている暇はないわね」
サフィリアは寝息を立てているリーザに近寄った。小さくつぶやきながら、顔に布を近づける。すると、リーザは眉をしかめて呻きながら目を覚ました。
「ううん」
リーザのまぶたは閉じたまま。口は半開きで、首が傾いている。
「ごめんなさい。無理やり起こして」
「私って、いつの間に寝ていたの？」

「船の上だ」
「シーグ君が君をここまで運んでくれたんだよ」
ジェイナスは、再びティーカップに口をつける。
「私ってば、シー坊に抱きかかえられてばっかりね」
それを聞いて、サフィリアはわずかに眉をしかめる。続いて、ソファーから身を起こしたリーザを見て顔全体をゆがめた。
「リー姉。その格好……」
「うん、かわいいでしょ？」
リーザの問いに答えず、サフィリアはシーグを怖い表情で睨み付けた。どうして、自分がにらまれるのだろうか？　シーグにはわけが分からない。
リーザはほほをたたきながら、紅茶を一気飲みする。そして息を大きく吸い込んで、勢いよく立ち上がった。
「うっしゃ！　馬力入れてやるぞー」
鼻息も荒く、力こぶを作ってリーザは宣言した。おっさんみたいな仕草だ、とシーグは思った。グレイルにはさぞかし似合う事だろう。
そのとき、毛布を持ったアイフェが戻ってきた。起き上がったリーザを見上げて、途方にくれた様子で毛布を見る。
「その毛布は私にくれないかな」
ジェイナスは、微笑みながらアイフェに言う。
「寝るの？」
「違うよ。年をとるとね、足を冷やすのが辛くなるんだよ」
毛布を受け取ったジェイナスは、ひざの上に毛布を敷いた。ひざ掛けにするには明らかに大きすぎたが、気にした様子も見せない。
「ねえねえ、馬力入れるって何？」
「頑張るって事よ。シー坊の治療をね」
「シー坊？」
アイフェは楽しそうな声になって、シーグを見ている。
「失礼しまーす！」

今度は4人の女の子たちが、リーザの布の包みを抱えながらやってきた。さすがにこれだけの人がいると、ソファーの回りも窮屈に感じられる。

「みんな、その荷物は薬剤室に運んでくれるかしら。アイフェ、あなたも手伝ってくれる？」

勢いよくうなずく子どもたち。

「あと手伝えそうな子は、シンシアね」

「今、教室で横になっています」

女の子の一人が手を上げて答えた。

「寝てる？」

「ちょっと、興奮してね」

不思議そうに問うサフィリアに、ジェイナスが変わりに答えた。

「じゃあ、目を覚ましたら薬剤室に来てくれるように言って下さい」

「さて、まずは何からはじめようかしら」

リーザは腕まくりをしながらサフィリアに聞く。アイフェも真似して袖をめくる。

「まずは包帯を作りましょう。結界の処理も施さないといけないけど」

「めぼしい物は一通りそろえてきたわよ」

リーザは子どもたちが抱える布袋を指差す。

「お茶の材料じゃなかったのか？」

シーグの問いに、リーザはくすくすと笑う。

「これを全部お茶にしたら、学校のみんなでお風呂に入れるわよ」

ハーブの風呂と聞いて、女の子たちが目を輝かせる。

「ほとんどが全部、治療のために必要なの。だから、色々聞いていたのに」

「すまない」

謝るシーグに、リーザは片頬を膨らませてシーグに軽くにらむ。

「さあ、時間がないわ。早速取り掛かりましょう」

サフィリアに急かされて、女の子たちが部屋を出て行く。後には、

ジェイナスとシーグだけが残された。

2章－68　馬力を入れて（後書き）

ノートPCに続いて、デスクトップも故障しました。
ついでに、洗濯中に物干し棚も真っ二つ。今度は何がつぶれるか……心配です（笑）。
とにかく、更新はなんとかせねば……

2章ー69　女心は理解不能

出て行く女の子たちを見送って、ジェイナスは再びカップを口に持ってゆく。その後、神妙な表情で深いため息をついた。
「ところで、君はサフィリア先生と喧嘩でもしているのかい？」
「え？」
「やはりそうか」
シーグの言葉になっていない返答に、ジェイナスは深くうなずく。
「機嫌がよさそうに見えただろう」
「はい」
「愛想がよくなかったかな？」
「そう思います」
「だからだよ」
「……」
意味不明な言葉のやり取りに、シーグは黙り込むしかできなかった。
「サフィリア先生はね、本当に許せない事があって。だけど、それをやり遂げる必要があるとき、愛想がよくなる。いつも以上に、理知的で、協力的で、手際がよくて、非の打ち所がなくなるんだ」
ジェイナスは、苦い表情になってカップを置いた。それは、決して紅茶が不味かったためではないだろう。
「そんな様子だから、こっちは向こうが許してくれたんだと思い込んでしまう。でも、実際には腹が煮えくり返っていて、一刻も早くすべてを終わらせて係わりを断とうと懸命なだけなんだよ」
ジェイナスは気の毒そうな視線で、シーグを見た。その通りだとすれば、サフィリアは昨日からずっと不機嫌だったのだろうか。朝食のときに見せた表情まで怒りの裏返しだとすれば、サフィリアが何を考えているのかまったく理解不能だ。
「ああなると、とにかく大変なんだ」

「早めに謝罪をしたほうがいいんでしょうか？」
「むぅ……」
ジェイナスは返事をせずに、黙り込んでしまった。
「謝罪で怒りを治めても、許しはしない。彼女はそういう性格だと思うよ。今回の一騎打ちのせいだね？」
「ええ」
「一番の原因は何だと思うね」
「地位と名誉がほしいから戦うと。そう言ったからだと思います」
「む！　うぅむ……」
ジェイナスは目を強く閉じて、言葉も出ないという様子だった。
「それでも、決闘を取りやめるつもりはないのかね」
「はい」
シーグの迷いのない返事。ジェイナスは特大の、それも尾を引くような大仰なため息をついた。更に腕組みをして、眉間にしわを寄せて考え込む。しばらくそうした後に、自信なさそうに口を開く。
「ならば、まずは勝つんだ。それが第一条件だろうね。後は君の誠意しだいだと……思う」
「はい、負けるつもりはありません」
「難儀なことだな。何事も」
ジェイナスは、首を横に振ってつぶやいた。
「ところで、サフィリアの記憶はどうなっているんですか」
「ロディウス老師からは、どう聞いているのかな」
「過去を思い出せば、狂気がよみがえる、と。中でもお前の事を思い出すのが一番厄介だ。だから、姿を消せと」
「ふむ、私もそう聞いている。だがね、記憶を操る魔術というのは不安定で、思ったとおりの結果が出ないものなんだ」
ジェイナスは髭を引っ張りながら続ける。
「サフィリアの記憶を封じる魔術に参加したのは三人。ロディウス老師と先代の見者、つまりサフィリアの祖父だね。それから、ベクター・フォルナージュ」

「老師が口を閉ざしたとなると、何を言っても無駄だな。サフィリアの祖父は亡くなっているし、ベクター卿は恐ろしく口が堅い。真実はまるで分からない。予測するしかないんだね。たとえば、魔術に参加したメンバーから使われた系統を考える。ベクター卿はエンチャント（付与）、そして先代の見者はイリュージョン（幻覚）だと思う」

「ディテクト（探知）ではなく？」

突然口を挟んだシーグを、ジェイナスは驚きの表情で見た。

「すいません」

「いや、感心しているのだよ。魔術のことにはまるで素人なのに理解が早い。そうだね、見者ゆえに得意な系統はディテクト（探知）だ。まるで間逆な能力に思えるが、実際には表裏一体。学ぶことで共通する所は多くてね。イリュージョン（幻覚）というからには実際の治癒ではなく、見せかけ、隠すための手段だ。そもそも、狂気だけを治療する魔術というのは成功したためしがない。というよりも、魔術の及ぶ範囲の外なんだ」

2章－70　魔術講義3

意外そうな表情を浮かべたシーグを見て、ジェイナスは微笑する。習う側が悩んだときに、教えるものが見せる特有の表情だ。
「魔術は負傷に効果がある。骨折の場合も治癒を促進させることができる。だが、歯と脳の治療にはどういうわけかまるで効果がないんだ。痛みを感じないようにすることはできる。記憶を消すこともできるが、以前と同じ状態には戻せない。毒を飲んで、体が蝕まれてから解毒をする。効果があると思うかね？」
「いえ。手遅れだと思います」
「では、毒で蝕まれた箇所を治癒する。それはどう思う」
「可能……だと思います。完治するかは分かりませんが」
「いい答えだね。それと同じなんだ。魔術はあくまで、結果に対する対処。本来持っている能力や現象を後押しするだけ。つまり、魔術は何でもできる奇跡の技なんかじゃない。あくまで学問の延長に過ぎないのさ。取り戻すすべもなく失われたものはどうにもならないんだ。歯を抜くように、記憶を丸ごと消し去ることはできる。金歯のように、仮の記憶を入れることもできる。だが、そういうことをすると、歯並びが歪むように、知識や人格まで変質させてしまう。なのに、彼女にはそれがない。心の傷、狂気というのは虫歯と同じでね、完全に回復させることはできないんだ。奇跡でも起きない限りはね」
ジェイナスは目をつぶったままで淡々と言う。
「じゃあ、サフィリアは一体……」
「狂気に陥った状態を、君は直接見たのかね」
「いえ。俺が最後に会ったときには、もう完全に眠っていました」
「ならば、真実を知っているのは術を施した3人だけだね。今私が言った事はあくまで憶測に過ぎないよ。ロディウス老師は何でもできる人だし、普通の魔術師とは違う。何か特殊な、知られていない

方法を使ったのかもしれない。すまないね、役に立つどころか君を混乱させただけだったかな」

ジェイナスは肩を落として言葉を切った。

「いえ、そんな事はありません」

「この４年間、ベクターがサフィリアに教えたことは普通の師弟と特に変わることはなかった。師も弟子もとびぬけて優秀で、若かったけどね。サフィリアが言うにはベクターの治療は独特だったらしけど」

「どんな風に、ですか？」

ベクターの名は耳にするのも嫌だった。しかし、なんでもありの男がやった独特のやり方。興味がわかないはずがない。

「よく食べ、よく眠り、よく休む。論理的な思考と計画的な行動を心がける。過去をかえりみて悔やまないこと。の３つだそうだよ」

どんな驚くべき方法なのだろうかと期待していただけに、シーグは肩透かしを食らった気分だった。

「それは治療というよりも、格言とか生活習慣のように思えますが……」

「さて、そういう当たり前の行動が魔術を上回る結果や成果を産み出す事もあるからね。奇跡の条件というのは、意外とそういう些細なものの積み重ねだと私は思うよ。逆もまたしかり。当たり前の事をないがしろにして、何もかも駄目にしてしまうこともよくある」

「俺は……俺とリーザはサフィリアの過去ですよ」

「だが、リーザは2年越しで付き合っているが大丈夫みたいだ。それに、思考や感情を自分でコントロールするのが、魔術師の素質のひとつだ。サフィリアがその部分が特に卓越してるのは分かるね？」

何を考えているのかさっぱり分からない。それがシーグの正直な感想だった。

「しかし、完治する見込みのない危険を一生持ち続けるのですか？」

「誰でも何かを抱えて生きているよ。その点では、見たところ君のほうが遥かに深刻じゃないか。骨格は細く、血の巡りも満足ではな

い。サフィリア、記憶を失う前のだよ。と老師に聞いた事をあわせて考えてみると、9歳から14歳まではまともに剣の訓練もできなかったそうじゃないか」
「今はもう大丈夫です」
「じゃあ、シージペリラス（命取りの座）という生まれは？」
「それは、これからどうにかします」
シーグは何でもない事のように言った。ジェイナスは「ふむ」とうなずく。
「ひょっとして、ガリウス・グラムファーレとの一騎打ちは、その第一歩なのかな？」
「はい」
「ならば、私に協力できることは何でもするよ」
「いいのですか。あなたも三騎士の一人なのでしょう」
「実を言うと、君に協力すると相当マズイ事になるんだけどね」
ジェイナスは人事のように言った。その後で、口を開こうとしたシーグを制する。
「おっと、断るなんて言わないでほしいな」
「しかし……」
「サフィリアもリーザも君に協力し、子どもたちも君を応援している。それに、君は私の孫が侮辱されるのを止めてくれたんだから」
「セリウスは、俺の剣の師ですから」
シーグは『名無し』として封じられた名を口にした。ジェイナスはそれを聞くと、しばらくの間うつむいてしまった。肩がかすかに震えている。
「その名で呼び、師と言ってくれる人の戦いを見過ごすことなんて、私にはできないよ」
目元を押さえながら、ジェイナスはつぶやいた。

2章－71　致命傷の魔術師

「正直に言うが、君はガリウス卿に近づくことさえできないね」
ナイトロード卿もまた、シンシアと同じ意見のようだ。シャープネスを生かすための戦い方を根本から考える必要がある。そうシーグは考えた
「例のリーガル・バックラーの防御壁のせいですか」
「それもある。しかし、アヴェンジャー（報復者）の方も難物なんだよ」
ジェイナスの言い分からすると、ただ切れ味がいいだけのブロードソード（幅広の剣）ではないらしい。シーグは真剣にジェイナスの言葉に耳を傾けた。
「ガリウスはグラムファーレだ。彼らは結界陣の一族と呼ばれていてね、強力なプロテクション（防護）の使い手なんだ。つまり、どういう事だと思う？」
「相反する系統、ブラスト（噴出）も得意なわけですね」
「その通りブラストの系統を一定以上身につけたものを、ブラスターと呼ぶ。そして、更に特化した能力を身に着けた者には別の称号が与えられるんだ。例えば、チェイン（連結）、テクニクス（工術士）、そして、スマッシャー（強撃士）」
「つまりガイスの呼び名、メティオ・スマッシャー（隕石の強撃）は称号なんですね」
「そう。スマッシャーは強力な火球や雷撃で破壊する能力に優れたものに与えられる。だが、ガリウスはウーンズ（負傷士）の称号を持っており、クリティカル・ウーンズ（致命傷）という名で呼ばれている」
「ずいぶんと、物騒な名前ですね」
「効果も物騒だよ。何しろ相手の内臓や脳を直接攻撃できるんだからね」

言葉を失ったシーグを見て、ジェイナスは表情を改めた。
「おっとっと。そんな深刻にならないでおくれ。当然欠点はあるんだよ。例えば、アヴェンジャー（報復者）を手に握っていなくてはならない。そして、射程が短いんだ。ウーンズ全般がそうなんだが、スマッシャーよりもずっと近寄らないといけない。最低でも１０歩、３歩以内が理想だな。直接手で触れられたら、絶望的だと思いたまえ」
しかし、ガリウスにはリーガル・バックラーがある。自由に動かせる魔術の盾。しかも、それはシーグからは見えないのだ。１０歩以上離れた状態でガリウスを倒す。そんな方法をシーグはまったく思いつかない。
「更にウーンズという魔術は厄介でね。相手が負傷していれば、効果が増すんだ。閉じる前の傷をこじ開けるのは簡単なのだよ。しかも、場所はアクリアエ・スリス。魔術の効果が最大まで高まるんだな。今の君だと一睨みで背中から真っ二つだね」
ジェイナスは合わせた手を、パカッと開いた。
「サフィリア先生が決闘を止めようと必死だった理由は、これで分かったかね」
「自分が生贄だと騒がれていた理由も分かりましたよ」
「だけど、私たちは君を祭壇の羊にするつもりはないんだ。私たちの協力を拒むなんて気がなくなったかな？」
「はい。なりふり構っている状態ではないと分かりました」
「よろしい、それでは具体的に作戦を立てようじゃないか。おお、時間を計ったようにばっちりだな」
ジェイナスが入り口に目をやると、両手に箱を抱えたサフィリアが戻ってきた。背後にアイフェとシンシアがついてきている。
シンシアはしょんぼりとしていて、顔を上げられず、シーグの目もまともに見れない様子だった。
サフィリアに背中を押されて、シンシアはとぼとぼと前に出る。
そして、支えでも失ったかのように、カクンと頭を下げる。

「ごめんなさい……」
元気も覇気もない。自信に満ちた態度も何処へいったのか。消え入りそうな声にシーグのほうがむしろ申し訳ない気持ちになった。
「ああ」
気のない返事にアイフェは不満げに唇を尖らせ、サフィリアには怖い視線で睨まれる。ジェイナスの期待に満ちた表情で観察している。この返答だけではシンシア以外が許してくれないようだ、とシーグは悟った。
「もう、気にしてないから」
『もう？』とサフィリアの口が不満げに動き、視線の槍が１０歩先から突き刺さる。少しでも気にした事がそんなに悪いことなのだろうか？　周囲から向けられる三種の視線にシーグは威圧感さえ感じていた。
「とにかく、元気を出してくれよ。あー、なんだ。そんなにしょんぼりされていたら俺が困る。つまり、戦友なわけだしな」
サフィリアは困惑の表情を浮かべ、ジェイナスとアイフェは興味津々な様子で事の成り行きシーグを見ている。
「戦友？」
小さな声でシンシアが問う。
「一騎打ちのために、いろいろ教えてくれたり、行動してくれたりしたんだからな。戦友だ」
シーグは何度もうなずいた。しかし、内心では自分の言ったことに首をかしげていた。
「戦友同士って言うのは、しょっちゅう喧嘩騒ぎをする。決闘やらをするんだ。城砦の中なんて壮絶だぞ。決闘騒ぎなんて毎日のようにある」
サフィリアは怖い目つきはそのままで、眉が歪んできている。ジェイナスは苦笑をこらえていた。どういうわけか、アイフェだけが「おー」と感心している。
実際には自分でも何を言っているのやら、よく分からない。だが、

こういう場合はとにかく、言葉に詰まらず、まくし立てて言い切ってしまうべきだ。理屈や辻褄なんて後回しでいい。馬鹿にされたところで知ったことか。

「剣を向けて切り合っても終わったそばから、涙ながらに抱き合って永遠の友情を誓ったりするんだな。それで綺麗さっぱり、なかったことになる。だから、気になんてしないんだ」

シーグはチラリとシンシアを見た。少女は途方にくれている。立ち直ったわけではなさそうだ。そして、自分に向けられるサフィリアの冷めた視線がシーグにはやけにつらかった。

2章ー72　一致団結

シーグが口を閉ざすと、部屋の中はシンと静まり返った。沈黙の重さがのしかかり、シーグはいたたまれない気持ちになった。よくよく思い返してみると、サフィリアは決闘を嫌っている。たとえ話としては最悪なことを言ったのだと、遅ればせながらに気づく。

「とにかく、気にするなよ。な？」

シンシアとサフィリアの2人を見比べながら、シーグは付け足した。

「そうだよ」

懇願するようなシーグに続いて、突然アイフェが元気よくしゃべりだす。

「サフィリアだって、シーグの事を変態だとか、変質者とか言ったんだ」

これにはサフィリアが顔色を変えた。シンシアは目をぱちくりとさせている。

「それで杖で殴りかかった後に、魔術で水の塊をぶつけたんだよ」

「ア、アイフェ！」

「更に□×〇△だとか言ってたんだもんねー」

サフィリアの制止を無視して、無邪気に話すアイフェ。ジェイナスは耐え切れず、ついに大爆笑をしてしまった。部屋中、いや学校中にさえ響き渡りそうな笑い声にサフィリアの白い肌が紅潮する。

「校長、笑いすぎです！」

「いやいや。しかし、大変な事だな。サフィリア先生」

ジェイナスは目端に涙を浮かべていたし、声がまだ引きつっていた。

「まぁ、済んだことだし。な？」

シーグが言葉を挟むと、サフィリアは肩を怒らせてシーグを睨む。何か言いたげにワナワナと体を震わせたが、無言のままプイとそっ

ぽを向くと手に持った箱をテーブルの上においた。
なるほど普通に怒るとこうなるのか、とシーグは納得した。それなら、再会してからずっと底なしに機嫌が悪かったのではなさそうだ。いや、しかしよく考えれば怒らせてばかりでは意味がない。
今度はシンシアがサフィリアとシーグを見比べて難しい顔をしている。あの様子ではすぐに責められることになりそうだ。落ち込んでいるよりはマシには違いないが。
笑いやんだジェイナスは真剣な表情になった。しかし、こっちはこっちで目が楽しそうだ。
「それとも、君。本当にそう言われる様なことをしてしまったのかな？」
「えっとね――」
「違います！」
アイフェが何かを言いそうになったのを、シーグは先制した。
「ねえ、アイフェ。実際にはどうなのかな？」
しつこく食い下がるジェイナス。アイフェは口を開きかけたが、シーグとサフィリアに同時に睨まれると、慌てて両手で口をふさいだ。
「時間がないので早速はじめましょう」
続いてサフィリアが冷静な声で言い、ジェイナスに背を向けた。
「ああ、そうしてくれ」
シーグもうなずいて、ジェイナスから目をそらす。
「魔術師との戦いで最も不利なのは、魔術師でなければ相手の魔術が見えないということです」
ジェイナスにしゃべる隙を与えないよう、サフィリアは説明を開始する。
「全くというわけじゃなかったぞ。火とか……」
ガイスの赤い壁は例外だと、シンシアが言っていた。しかも相手はプロテクション（防護）を得意とするグラムファーレで、王国が誇る三騎士の一人だ。

「ええと、水とか雷は見えていたぞ」
「だけど、それは実際に具象化してからでしょう？　昨日の戦いで私の雷撃をガイスが当然のように防護できた。そして、私も魔術が完成するずっと前に系統や範囲や効果が分かっていたわ」
「魔術師特有の感覚の話だな。『魔術師が魔術師を不意打ちするのは不可能』だったっけか」
「ええ。その理由は魔術師は魔術の存在を目をつぶっていても感じることができるから。そして目に映れば、色として見えるからなの」
「なるほど。そりゃあ、奇襲は不可能だ。だけど、俺は魔術師じゃないんだ」
「だから、決闘の間だけ魔術師の視覚を身に着けてもらいます」
サフィリアはそこで言葉を止めて、持ってきた箱の中に手を入れた。その間にシーグは魔術に関する情報を思い返した。フィーリア（感応体）を持っていなければ、魔術は使えないはず。しかし、サフィリアが生徒たちを塔に連れて行くと言っていた。
「ええと、フィーリアがなくても特別な場所なら使えるわけか」
「そう。更に正確に言えば、結界を作るの。アクリアエ・スリスは学園地区の塔よりも遥かに強力な封土の中心。理屈の上では十分可能だわ」
サフィリアはリストバントをシーグに差し出した。漆黒の布に六亡星の護符が縫われている。
「これが結界？　ずいぶんと小さいんだな」
請け取ったリストバンドを隅々まで調べる。きめの細かい絹製で、星は金糸と銀糸の組み合わせで作られていた。高価な材質と精緻な刺繍は魔術の品特有のものだが、シーグはなんだか期待はずれな気持ちだった。根拠はないが、結界というからにはもっと仰々しい何かを想像していたのだ。
「小さい分、効果も弱くなるわ。その分、あなたの感応能力にかかっているわけ」
「つまり、大きければ俺の才能がなくてもいいわけか」

「それも考えたんだがね。狭い範囲の結界を決闘場の中に作れば、ガリウスに直接破壊されてしまう。かといって、広範囲に結界を張れば君をよく思わないものたちが結界を破壊して回るだろう。君はそこらじゅうに敵を作っているだろうからね」

いつもの飄々とした声で、世間話でもするようにジェイナスは言った。どうやらこの老人は、真面目な声になったときが一番油断ならないようだ。

「なるほどね。だから持ち運びできる大きさの結界というわけか」

うなずいたシーグは両手で口を塞いだままのアイフェと目が合った。どんどんと顔が赤くなっていくのは、鼻も塞いでしまっているからだ。

2章－73　眉毛、髭、鼻毛

シーグがアイフェを見ると、向こうもまっすぐと視線を合わせてくる。シーグが鼻の穴をぴくぴくさせると、アイフェは「ブッ」とわずかに噴き出した。次に手を使わずに耳を動かすと、アイフェの顔は真っ赤になって、爆発しそうになっている。

かくなる上はとっておきの顔で止めをさそう。そう考えてシーグが自分の目と口に手をかけた時、突き刺さるような二対の視線を感じた。

シンシアは口元を皮肉そうにゆがめているし、サフィリアは彫像のように表情を動かさない。

「あっひゃひゃひゃー」

一方、我慢の限界を突破したアイフェはシーグを指差しながらたたましく笑い出した。だが、冷たい表情の2人にはまったく通じていない。

「アイフェ、一息ついたら静かにしてもらえるかしら？」

「う、ふひ。分かっヒャぉう」

アイフェは言葉にならない答えをして、腹を抱えて転げまわっている。サフィリアはその間に、箱から取り出した燭台をシーグの四方に丁寧に配置していく。そして、パチンと指を鳴らしてろうそくに火をつけてゆく。

「それは戦法ですか？」

サフィリアは底冷えのする声と共にシーグに向き直る。わずかに開いた唇が、ヒビの入った薄氷に見えた。

「まあ、通用したらいいかなぁー……ってさ」

「そうですか、有益だといいですね。さて、私の話を続けても、よろしいですか？」

「あ、ああ」

よそよそしい態度に威圧感のある丁寧な口調。もし、ここが天空

の水盤ならば部屋中が凍結したかもしれない。
ジェイナスはカップを口元に持ってゆきながら、表情を隠している。確か、もう紅茶は空になっているはずである。そのままジェイナスは椅子を回転させながら体勢をゆっくりと入れ替えて、さり気無く窓のほうを向いてしまった。
しばらくすると、笑いつかれたアイフェは「ヒーヒー」と荒い呼吸をしながら、ソファーでぐったりとする。それを見届けて、サフィリアは特大のため息をついた。
「決闘の前に動揺が無いのはいい事ですが、少しは真面目にしてください」
「すまない」
シーグが深く頭を下げた。いろいろな意味で素直に謝っておくべきだと思ったからだ。特大の雷が続くのを覚悟で、床を見つめているとクスクスと小さな笑い声が聞こえた。
顔を上げると、サフィリアが口元を隠して笑いをこらえている。シンシアとアイフェが驚きの表情でサフィリアを見上げ、ジェイナスも横目で観察している。
「昨日もそうだけど、あなたって本当に緊張感が無いのね。いつだって、どんな時にも……」
サフィリアは首を左右に振って、大きく息を吸い込む。
「さっき途中でやめたけど。どんな面白い顔になるのか、決闘が終わったら見せてね」
「あ、ああ」
サフィリアは明るい表情でシーグを見つめた。まさか、これも演技なのだろうか？　油断させて不意を突くつもりなのだろうか？　まさか、今度はいきなり泣き出したりするのだろうか？　シーグは慎重にサフィリアを観察する。
「子どもたち全員の前でよ」
「いや、それは……」
アイフェのような笑い上戸ならともかく、例えばジュール辺りが

白けた場合には居たたまれなくなる。ならば、何か小道具を使って補強すべきかもしれない。もじゃもじゃの眉毛や、ちょび髭辺りが経験上有効だ。１０代前半の男の子にしぼれば、下品な言葉などが笑いのタネになる。しかし、それでは半数以上の女子がいやな顔をするだろうし、サフィリアが一番怖い。ならば、間を取って、鼻毛につけ毛をするのが最も適当だ。

そう結論を出すと、神経質に眉をゆがめたサフィリアと目が合った。

「決闘者をやめて、道化師にでもなるつもり？」

声には少し怒気が混じっている。

「うむ。では、早速はじめようではないか！」

ジェイナスはクルリと椅子を半回転させて、威勢よく宣言した。

シンシアは見下すような視線でシーグを見ている。視線は痛いが、調子を取り戻したのは確かなようだ、とシーグは安心した。

「このリストバンドはどうやって使うんだ？」

「四方にある燭台で結界を張って、アクリアエ・スリスと同じ条件をこの部屋の中につくったわ。後は集中力と的確なイメージだけよ」

サフィリアは説明するときの口調になった。そして、指を鳴らして空中に小さな火を浮かべる。

「この火をよく見て。燃える火ではなく、その背後に何かがあると思い込むの。ガラス越しに景色を見る時に、ガラスのシミと炎の揺らめきが同時に見え――」

「あ、火が赤くなった」

「え！？」

シーグがつぶやくと、サフィリアとシンシアが同時に間の抜けた声をあげた。

「俺が何かへんなことを言ったか？」

「嘘。だって、まだ……」

「サフィリア先生、構わないから次だ。試してみなさい」

「は、はい。分かりました」

ジェイナスに急かされて、サフィリアは拳を閉じる。すると空中の火が消えてしまった。その後、空中にじわじわと何かが浮かび上がってくる。

「緑色の……玉か？」

アイフェを除く全員が深刻な表情でお互いに顔を見合わせている。魔術師がそろって悩んでいるので、シーグは不安になった。険しい表情のまま、無言で目線だけで何かを語り合った後、ジェイナスが椅子から立ち上がった。

2章－74　死行の成果

「ロディウス老師のところで、イリュージョン（幻覚）を使った訓練はしたかね？」
「はい、刃物と怪物と火山を」
それを聞いて、ジェイナスの表情が強烈に引きつる。その後、ふらふらと後ずさって椅子に腰を落とした。
「信じられない。まさか、本当にやるなんて」
ジェイナスは呆然としたままつぶやく。そして、全身を震わせながら両手で顔を覆ってしまった。サフィリアとシンシアは口を横一文字に引き結んでいる。
「何かまずいことでも？」
不安になって聞くと、ジェイナスは何度も顔をこすってから口を開いた。
「刃物の修行だが、飛んでくるイリュージョン（幻覚）の刃を受けるやつだね」
「ええ、怖がって目を閉じたら大怪我をするから、当たっても目をつぶるなって。そうすれば、軽傷ですむから、と」
「怪物は実戦と同じように戦うやつだよね？」
「はい。いろいろな状況下で、戦いの訓練をしました」
「そして、最後は火山に突き落とされるわけだ」
「だけど、イリュージョン（幻覚）なんですよ。実物じゃないんですから」
「……まぁ、君が心からそう信じ込んでいたから無事だったんだ。『無知の純心』ってやつだね。イリュージョン（幻覚）に対するには最強の心構えといってもいい。だけど、そんな事はたわけた理想論だと思っていた」
「あの……そんなに大変なことなんですか？」
あまりの言い方にシーグは不安になってきた。

「君は人間の心や精神がどれだけ脆いのか。そして、イリュージョン（幻覚）の系統が人間にどれだけ恐ろしいことができるのか。まるで分かっていないんだね。自分が攻撃を受けた、倒されたと思うだけで現実にそれ以上のダメージを受けてしまうんだよ」

「はあ」

シーグの間の抜けた答えに、ジェイナスは心底あきれた様子で肩を落とした。

「あのね、シーグ君。それは、実戦よりも危険な事なんだ。人を狂気に追いやる修行、いや苦行なんだよ」

「だけど、これは幻だから。実物ではないから死ぬわけがない。そう聞かされていました」

「いいや、死ぬよ。だって、隠語では『死行』などとあだ名されていた位だから」

どんどんと壮絶になっていく呼び名に、シーグは少しずつ事の深刻さが飲み込めてきた。

「いや、でも有効なやり方なんでしょう？」

「確かにね。その修行はね、精神を鍛える最高の方法を求めて大成された。千尋の谷に突き落として、火の雨を降らせて、昇ってきたものを死ぬまで蹴り落とす。何処まで人間を痛めつけても、立ち直らせることができるかっていう挑戦」

沈んだジェイナスの声に、部屋中に重苦しい空気が立ちこめた。誰もが固唾を呑んで言葉の続きを待つ。

「実施されたのはずいぶんと昔だが、結果的に死者の割合は実戦が子どもだましに見えるほどでね。あんまり残酷なのでメティスでは禁術に指定され、正確な記録さえ抹消されたんだよ。この呪われた理論を大成した魔術師は、自責のあまり自ら命を絶つことを選んだ」

ジェイナスは口元を覆ったままで、シーグを見る。表情は見えないが、瞳には恐怖の色が浮かんでいた。

「高すぎる理想は人を殺す。それは事実なんだよ。少なくとも我々、教育や育成に関わる者が絶対に踏み入れてはならない領域なんだ。

ロディウス老師も恐ろしいことをする」
　何か嫌なものでも振り払うように、ジェイナスは頭を横に振った。そして、自分が振りまいた重苦しい空気に気づいて、ばつの悪い表情を浮かべた。
「悪かったね。君が乗り越えてきた鍛錬を悪く言ってしまって」
「まぁ、あの爺さんならためらわないでしょう。決まりは破るためにあると信じています。そして。生かさず殺さずの達人、生殺しの専門家ですから。たぶん、絶妙のさじ加減で痛めつけてくれたんでしょう。驚くより納得しましたよ」
　あっけらかんと言うシーグ。ジェイナスはようやく厳しい表情を緩めた。
「とにかく、君が大変な試練を乗り越えたことは事実だね。ワイバーンやベクター卿、セブンパワーインテグレーション（七力統合陣）を相手に立ち回れる理由が分かったよ」
　ジェイナスは何時も通りの飄々とした声に戻った。
「それに、早速今回の決闘でも役に立つ。クリティカル・ウーンズに対する方策もとりやすくなったね」
「どうことなんですか」
「うむ。シンシア、どういうことなのかな？」
　ジェイナスに問われて、ぼんやりとしていたシンシアは我に返った。
「ウーンズは、直接的な打撃ではありません。対象者に負傷をしたと勘違いさせて、傷を作り出します。だから、ブラスト（噴出）の系統だけではなくて、イリュージョン（幻覚）の系統に深く関わりがあります」
「その通り、よくできたね。教科書に載っている事そのままだよ」
　ジェイナスはシンシアにうなずきかけた。そして、何かを言いかけたが口を閉じてアイフェを見る。
「アイフェ、もう一度お茶を入れてきてくれるかな」
「うん。いいよ」

飛び上がるようにソファーから立ち上がると、テーブルの上にのったカップを積み重ねている。
「先に、リーザ姉さんに会いに言ってくれるかな。そして、作業は中断してここに来るようにね。なんでも、お勧めのハーブを買ってきてくれたみたいだ。楽しみだね」
「分かったよ！」
元気に返事をするアイフェを見て、サフィリアが表情を厳しくする。
「アイフェ。『分かりました』、でしょ」
「わっかりやしたぁー！」
アイフェはふざけた調子で答えると、サフィリアが口を開くよりも早く教員室から走って出て行った。

2章－75　過激な発言

アイフェが立ち去ったのを確認して、ジェイナスは声を落とした。
「君にはイリュージョン（幻覚）に特別強い耐性があるんだ。アイシャ・ディスペリアに直接触れられても、幻惑されないほどにね。その上で、魔術に対する強い感応力がある。つまり、どういうことになるのかな？」
「どう……と言われましても」
「少し質問があいまいだったね。でも、それがさっき呪文もなしに君が炎に赤色を見た理由なんだよ」
無言のまま答えないシーグ。気を悪くした風も無くジェイナスはうなずいた。
「少し難しかったかな。サフィリア先生、説明してくれるかな」
「はい。シーグ、あなたはイリュージョンに対する耐性があります。耐性があると言うことは、感応力も高くなるという事。つまり、魔術の特性そのものが強くなります。そして、イリュージョン（幻覚）と対になる系統はディテクト（探知）。というわけです」
名前を覚えるだけでも厄介なのに、相互の関係まで言われる。シーグは頭が痛くなってきた。
「ややこしいけど、一つできたら反対の事はできるって事か？」
「簡単に言えばそういうことです」
だったら、最初から簡単に言ってくれよと。そうシーグは思った。今日一日だけでも、魔術やら人やらの名前で頭がパンクしそうになっている。
「面倒くさがらないでしっかり覚えてよ。大事なことなんだから」
サフィリアは言葉遣いを崩して、シーグを睨む。
「大事なことならなおさらわかり易くしてくれよ。何でもかんでも細かく分けないでさ。剣術だったら、剣を突くのと引くのを別々に習っていたら、わけが分からない。魔術だって、最初から系統を半

分にすれば簡単になるんじゃないか？」
　シーグのつぶやきに、サフィリアとシンシアが顔色を変えた。また、何か不味いことを言ったらしい。シーグが頭をかいていると、ジェイナスはカッカッカと大きな声で笑った。
「今の君の言葉を要約すると、魔術を七つの系統に分ける必要は無い。つまり七家が必要じゃないと言っている事も同然なんだよ。そういうことを公然と言い放つのは、ゲイル卿くらいだな」
「はぁ、すいません」
　ゲイルが誰か分からず、シーグはいい加減な謝罪をする。サフィリアは更に表情を険しくした。反対にジェイナスは表情を崩す。
「なるほどねえ。そういうところを見ていると、君がロディウス老師の弟子だって良く分かるよ」
「校長。笑い事ではありませんよ」
　サフィリアはシンシアの肩を持ちながら、厳しい声を出す。
「確かに笑うことではないね。ところで、シンシア。今の事を君はどう思う？」
「校長！」
　今度は咎める様な強い語調。しかし、ジェイナスはそれをあえて無視した。
「七つの属性は研究的には必須だし、教育的には意義があると思います」
　シンシアはここで言葉を止めて、チラリと背後のサフィリアを見た。
「だけど、シーグさんの言うとおりに、魔術を習い始める人には不向きな考え方です。閉鎖的な七家の性格が良く出ていると思います」
　最後にはシーグとの言い合いの時と同じ、皮肉な口調になった。
　サフィリアは困った顔をしているが、ジェイナスは大きくうなずいた。
「なるほど。過激な意見だね」
「はい。だから、発言する相手を選ばないといけないと思います。

だから、校長先生や、サフィリア先生の前でしか言いません」
「シンシア！」
叱り付けられると、シンシアはプイと顔をそらした。サフィリアが更に言葉を続けようとするのをジェイナスが止めた。
「まあ、待ちたまえ。複雑な問題だし、後でゆっくり、たっぷりとシンシアには説教をしよう」
すると、シンシアは今にも噛み付くような険しい表情になった。
「その後、誰を師匠にするか慎重に考えるとしようか。こんな危険な子を何処にでも出すというわけにはいかないからね」
今度は一変して笑顔になった。困っているサフィリアなど気にした風も無く、ジェイナスは出口を確認してからシーグを見る。
「さて、話がそれたね。少し急ごうか。アヴェンジャー（報復者）、あの剣はディスペリアとフォルナージュの一族、つまりエンチャント（付与）とイリュージョン（幻覚）の合作なんだ」
シーグの脳裏に、ベクターとアイシャの姿が思い浮かんだ。『何でもあり』と『正体不明』の2人。シーグにはガリウス当人よりも遥かに恐ろしく思えた。
「アヴェンジャーの刀身は何色だったかね？」
「青色でした」
「へ？」
シーグの答えに、ジェイナスは間の抜けた声を出した。まさか、青色と言うのも禁忌なのだろうか。シーグは不安になった。
「厳密には藍色、なんだがね。まあ、外だったし光の加減で青に見えなくも無いか。藍色はエンチャント（付与）の色なんだ。ブラスト（噴出）は赤、プロテクション（防護）は緑になっている」
「だったら、幻覚は魔術師には簡単に見破れるんですね。色が重なって見える……あれ？　違うか」
昨日ベクターが背中に流れる血から、幻覚を見破ったのを思い出したからである。
「おしい。正解までもう少しだったね。ディテクト（探知）を誤魔

化すのがイリュージョニスト（幻術士）の腕の見せ所なんだ。ブラスト（噴出）をプロテクション（防護）で止めるのと同じことだね。だから、お互いの力比べとなる。じゃあ、お願いするよ」

ジェイナスは言ったが、返事はない。サフィリアはシンシアをじっと見つめている。シンシアはそっぽを向いて体全体で無視していた。

「サフィリア先生、いいかな？」

「え？　あ、はい。分かりました」

サフィリアは手のひらを一度閉じて、次に開いた。すると、空中に派手な色の鱗の魚が現れた。ひれを動かしながら、出口に向かって飛んでゆく。神経を集中させると、魚の周囲に色の膜が見えてきた。

「赤い魚だな。周囲にぼんやりと青い輪郭が見えるぞ」

「え？」

今度は部屋にいる全員が驚きの声を上げた。

「魚は緑色よ。それに、イリュージョン（幻覚）の色は青じゃなくて紫なんだけど」

サフィリアの不思議そうな声に、シーグは目をしばたたかせて、もう一度見る。

「……やっぱり、赤と青に見えるが？」

すると、全員が不審の視線を向けてくる。魔術師が絡むと、色の事を口に出すたびに困ったことがおきるのだろうか。シーグは頭をかいて小さくため息をついた。

「まさか……」

サフィリアの深刻な声色。シーグは何を言われてもいいように心の準備を整えた。

2章－75　過激な発言（後書き）

さて、シーグ君の身に何が起こっているのでしょうか？
答えは、明日ー。

2章－76　お茶の時間

「校長、少し時間をいただいていいですか？」
「いいよ。何でも試してみるがいい」
ジェイナスは軽く請け負った。厳しい表情のまま近寄ってくるサフィリアから、シーグは逃げ腰になる。
「別に変な事はしません」
「だったら、そんな顔をするなよ」
すると、サフィリアはますます表情を険しくした。
「変な顔で悪かったですね！」
「いや、あの……」
「今から私が聞くことに真面目に答えてください」
謝ろうと言葉を探すシーグをほうっておいて、サフィリアは早口にしゃべる。そして、手のひらを上に向けると、色のついた光の玉が浮かび上がった。
「これは何色ですか」
「赤色だろ？」
すると、サフィリアを除いて部屋の全員が不思議そうな表情を浮かべる。
「それって、茶――」
「シンシア、黙ってて！」
厳しい口調に、シンシアは硬直して黙り込んだ。
「次、これは？」
「茶……いや、緑色かな？」
「考えないで、見たままに」
「緑だよ」
「じゃあ、これ」
「青？」
「いちいち人の視線を気にしないで、次！」

「ちょっと、待て。一体何をやらされているんだ。俺は？」
「自然なままで調べないと意味が無いの。何も考えないで」
「そんな無茶な」
シーグが助けを求めるように視線をうろつかせる。薄情にも部屋にいる全員が顔をそらした。
ちょうどその時に、リーザとシンシアが連れ立って戻ってきた。アイフェが持つお盆には、６つのカップが並んでいて、ほのかな湯気を上げている。
「何をしているの？」
ソファーの背もたれに追い詰められたシーグを見て、リーザが不思議そうに問う。
「頼む、助けてくれ」
「ねえ、フィーちゃん。一体――」
キッと振り返ったサフィリアが目が会うと、リーザはピタリと口を閉ざす。アイフェは全身をピクリと振るわせた。
「ごめん。私、無理」
「あたしもむりぃー」
リーザとアイフェは体全体をシーグからそむけると、テーブルの上にカップを並べはじめた。
「お、おい」
「これは美味しそうだね」
「リー姉様。今日は、なんていうハーブを使ったの？」
「んー。秘密よ。当ててみて」
「私もお手伝いしたんだよ」
シーグは情けない声など関係無いかのように、部屋の時間がゆったりと流れてゆく。
「こういう時は、逆らわないほうがいいと思うな」
「おもうんだなぁー」
リーザとアイフェは歌うようにいいながら、小皿に菓子を順番においていく。

「先生の言うとおりにしてください」
「そうだね」
シンシアとジェイナスもそれにならう。
「じゃあ、いくわよ？」
サフィリアの問いに、シーグはカクンと力なくうなずいた。いや、うなだれた。
どんどんと加速していくサフィリアの言葉、シーグは周囲を見ている暇も無くなった。
まずは、光の玉の色を当てさせられる質問。その後は光の板の上に浮かぶ光の数字や文字を当てさせられた。波状攻撃のように続く１００ほどの質問が終わるとサフィリアは立ち上がる。
シャックリと絶壁の２人組みに襲われた時の方がずっと楽だった。そんなことを考えながら、シーグはソファーにぐったりと崩れ落ちた。
「シーグ君、サフィリア先生。一息入れようじゃないか」
「はい」
サフィリアは優雅な手つきで、カップを口元まで持っていった。
「先生、何のハーブか分かりますか。私はレモングラスだと思うんですが」
サフィリアは厳しい表情を浮かべて、シンシアを見る。緊張した空気が漂ったが、サフィリアは目を閉じてハーブティーの香気を吸い込んだ。
「私はネトルにエキナセアだと思うわ」
「正解」
「せーかーい」
リーザとアイフェが答えると、シンシアは驚きの表情を浮かべる。
「でも、レモンの香りがしますよ」
シンシアは目をいっぱいに開いて、リーザを見つめる。
「レモンは絞った汁を少し入れただけなの。大抵のハーブティーに合うからね。ネトル特有の甘い香りに気づくのがポイントよ。ちな

みに、私のだけはレモングラスとペパーミントだけど」
「本当。香りがぜんぜん違うわ」
リーザの差し出したカップを覗き込んで、シンシアがはしゃいだ声を上げる。サフィリアはそれを見て小さく笑ってカップから口を離した。
「レモングラスは目覚ましに一番いいから、今のリーザにはぴったりね。ネトルには造血作用があるから、貧血の時に使うといいわ」
シンシアはサフィリアの言葉を一言一句聞き逃すまいと、真剣な表情で何度もうなずいている。
「それに、エキナセアは免疫力を高める効果があるわね。だから、怪我や病気のときに……」
そこでサフィリアは言葉をとめてソファーにうずくまったままのシーグを見た。
「何をしているの？」
「いや、なんだか近寄りがたくてな」
「とにかく、こっちに来て。リーザはあなたのためにいれてくれたのよ」
「は？」
「体温の向上と血液の循環。両方ともあなたには必要だもの」
「だけど、ハーブっていったら薬みたいなものだろ」
シーグは苦虫を噛み潰したような、情けない表情を浮かべた。

2章－76　お茶の時間（後書き）

お茶会が長くなってしまいました。
ヒントを多数出して、答えは明日です。

2章－77　せきよく、しきま？

「お茶にしているから苦くないし、飲みやすいわよ。毎日の積み重ねで薬よりもずっと高い効果が出るわ」
　リーザは席から立って、わざわざシーグにカップを手渡してくれた。
「だまされたと思って飲んでみて」
「ののめのめ、シーボー」
　アイフェがケラケラと笑う。「コラ」とサフィリアが小さな声で叱る。シーグはリーザに疑いのまなざしを向けながら、恐る恐るカップに口をつける。すると、表情が一変した。
「あ、これはいいな」
「気に入ったのなら、毎日の習慣にするといいわ。ミルクとハチミツもいる？」
　シーグは手渡された小瓶からミルクをダボダボと注ぎ込んだ。それを見て、シンシアとサフィリアがげっそりとする。シーグはさらに一塊のハチミツをドボンとカップの中に入れた。そして、再びカップに口をつける。
「へぇ、ハーブティーって飲みやすいんだな」
「そんなにいれると太るよー」
　アイフェが首をかしげながらシーグに言う。
「その位、別に構わないぞ」
　途端にシーグはアイフェ以外の全員から突き刺さるような視線を感じた。特に後頭部に突き刺さるリーザの視線が痛い。再び、余計なことを口走ってしまったらしい。
「ミルクとハチミツで風味を壊すなんて無粋ですわ。それに薬を嫌がるなんて、まるでお子様ですわね」
　シンシアが嫌味たっぷりに言うと、アイフェが無邪気に笑い出した。

「シーボー、おこちゃまー」
今度は誰も2人をとがめない。無言の中でカップの立てる音だけが部屋に響いている。
「あー、ところでサフィリア先生。調べて分かった結果を教えてくれないか」
重々しい沈黙を殊更に明るい声で破ったのはジェイナスだった。
「はい。校長の考えているとおりに、赤緑色盲でした」
「やはりそうか」
サフィリアの答えに、ジェイナスはうなずく。しかし、シーグも含めてほかの全員が不思議そうな表情を浮かべている。
「せきよく、しきま……色魔？」
アイフェがつぶやくと、シンシアが大きく咳き込む。
「せきりょく、しきもう。だよ」
ジェイナスがゆっくりと発音し、アイフェに言い聞かせている。
「赤、黄、青が単色の場合なら識別ができています。でも、緑や赤系統の色が混じるとほとんど区別が出来ません」
「一体どういうことなんだ？」
不安になったシーグは思わず問いかける。すると、サフィリアは手のひらを上向きに差し出す。すると、サフィリアの家が空中にあらわれた。
「このレンガは何色ですか？」
「赤……だろ？」
「違います。私の家は赤レンガですが、これは色を変えて茶色のレンガにしています」
「あ、なるほど。色が少し暗いな」
「明るい、暗いって。その程度の差ではありませんわ。ぜんぜん違いますよ」
シンシアが不審の表情で問う。しかし、シーグには何がなんだか分からなかった。
「だけど、シーグ君にはそう見える。それが赤緑色盲なんだ。赤や

緑に近い系統の色の識別が難しくなる。サフィリア先生、具体的にはどうだったね？」

「ブラスト（噴出）の赤と、プロテクション（防護）の緑。サモニング（召還）の橙と、エンチャント（付与）の黄。ディテクト（探知）の青、イリュージョン（幻覚）の藍。それぞれの色の混色が識別困難でした。中でも、エンハンス（向上）の紫を場合によっては青や緑と見間違うこともありましたから」

「すると、まんべんなく見えてないんだね。対抗の系統がごちゃ混ぜになっている」

「そんなに深刻なんですか？」

シーグの問いに、ジェイナスは「ふむ」と、深いため息をついて考え込んでしまった。

「説明をするとね、魔術の七系統は光の七色で表される。虹と同じで、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫なんだ。魔術が行われたとき、発せられた色を目で確認して、系統と効果範囲を絞る。そして、状況から使われた魔術を推測するんだ。視力と色覚は魔術師の必須条件といってもいい」

「だけど、俺にはその感覚がないんですね？」

「まったくないわけじゃない。部分的に見えていないんだ」

すると、シンシアが「あっ」と小さく声を上げる。

「そういえば、シーグさんがアヴェンジャーも、ラヴェンダーも青色だって言っていました」

「その場合は藍色と薄紫色が青に見えてしまっていたんだね」

「シーグは病気なの？」

アイフェが心配そうにジェイナスを見上げる

「いや違うよ。そうじゃない。実際に、日常生活で今まで困ったことがあったかい。それどころか、まったく自覚がなかったんだろう？」

「ええ。服を選ぶ感覚が不思議だ。と言われた位です。色が全くあってないと。ですが、これで納得できました」

「だろうね。そりゃあ、芸術家とか職人とか色をよく使う仕事では辛いだろう。でもそれ以外では、日常生活の中では何でもないことなんだ」

「魔術で解決はできないんですか？」

「色を識別する箇所は脳に近くてね。魔術の及ぶ範囲の外なんだよ」

シーグの問いに、ジェイナスは苦渋の表情で首を左右に振る。

2章－77　せきよく、しきま？（後書き）

作者も本当に色弱です。私の場合、しきま？　と言われたのは高校の部活の先輩でした（笑）。

色の事を書く時に気を付け……てきたつもりです。

医者いわく「まともに見えている色はないね」の事。描写では、神様視点とシーグ視点が混じっていたり、近くなっているので、シーグ視点で色の話をしていると、読者側に違和感があるかも……。

もし、違和感があったら指摘お願いします。

2章－78　無理、無茶、無謀

「一体いつからそうだったんですか、全く気づきませんでした」
「産まれた時から、だよ。これは親から子へ伝わっていく、ごくありふれた特徴なんだ」
「だけど、魔術の感覚では深刻なんですね？」
「七家が血統を重視して閉鎖的になり、外部の血を入れなくなった理由の一つだからね」
ジェイナスの言葉に、シーグは肩を落としてうつむいた。
この年にもなって、まだ産まれにたたられるとは思ってもいなかった。それも、産まれながらの事で変えようがなく、魔術の及ぶ範囲外だという。黙り込んだシーグを、部屋にいる全員が心配そうに見つめている。ここで落ち込んでいても仕方が無い。そう自分に言い聞かせると、シーグは大きく息を吸い込んで深呼吸をしてから顔を上げた。
「だったら、仕方が無いな。どうにもならないのなら、どうにかしよう」
矛盾した言葉に全員が不思議そうな表情を浮かべる。
「具体的にはどんな問題が考えられるんだ？」
「対抗する系統の色を認識できない。つまり相手の行動が予測できないんです」
サフィリアは歯切れの悪い口調で言いながら、同情交じりの視線で見てくる。それがシーグには何よりも耐え難い。だから特に気をつけて、明るい声で続けた。
「まあ、何とかなるだろ」
「魔術師との戦いで、次の瞬間に何が起こるのかわからないなんて、目隠しで戦うようなものです」
逆にサフィリアの声は深刻さを帯びている。
「どのみち系統が分かったって、予測なんてできない。俺は魔術の

素人なんだから」
　シーグは軽い口調で言って肩をすくめた。ふざけた様子にサフィリアが目をむく。
「無知を威張ってどうするんですか」
「知らないものは知らないんだから、仕方が無いだろ」
「だったら、今からでも魔術について出来るだけの知識を――」
「無理だ。俺の頭は聞いた名前だってすぐに忘れる位だからな。今日だけでも色々あって、すでに沸騰寸前だ。今聞いた事だって、半分も頭に入ってない」
「必要な知識もなしで魔術師相手に戦いを挑むなんて無謀です！」
「頭でっかちで戦うよりマシだ！」
　シーグとサフィリアの声はいつの間にか怒鳴りあいになっていた。
「ですから、いちいち威張らないでください」
「開き直っているんだよ」
「同じ事です。どちらにせよ、戦う以前の問題です。決闘は取りやめて下さい」
「戦うのは俺だ。勝手に決めつけないでくれ」
「決闘は命がけなんですよ。復讐心丸出しのガリウス・グラムファーレが手加減をしてくれると思っているんですか」
　喧嘩腰になったシーグとサフィリア。その迫力に圧倒されて、シンシアとアイフェは体を寄せ合ってオロオロしている。一方、リーザとジェイナスはカップを片手に加熱していく2人を楽しそうに眺めている。
「だから、勝つって言ってるだろう！」
「気持ちだけで勝てるはずがありません。無理です、無茶です、無謀です！」
「そ、それを気合でどうにかするのが戦士だ」
「アクアリエ・スリスでヴァンガードなんて絶望的な状況が、気合だけでどうにかなるなんて思っているんですか。だいたい、あなたみたいに細身な人が勢い任せで猪突しても程度が知れています！」

「う……だから――」
　怯んで言葉に詰まったシーグ。サフィリアは前傾姿勢になって更にたたみかける。
「リーガル・バックラーは鉄壁の守りです。完全防御の結界の中から放たれたクリティカル・ウーンズで背中から真っ二つ。その後、アヴェンジャーで頭を落とされるのがオチです。干し魚みたいになったあなたを見て、アイシャとガリウスが高笑いをしている様子が今から思い浮かびます」
　アイシャの名前を聞いたアイフェは涙目になり、シンシアはあまりの迫力に目を白黒させている。ジェイナスは「あちゃー」とつぶやいた。リーザはジェイナスの肩をつついて窓の外を指さす。すると、今度は髭のリボンをいじりながら、「あらまあ」と間の抜けた声を出した。
「あなたは一人で、自分のためだけに戦うわけじゃないんですよ。そんないい加減な気持ちと覚悟で――」
「まぁまぁ、落ち着き給え。サフィリア先生」
　ジェイナスがのんきな声で、口げんかに割り込む。
「ですが、校長。これが落ち着いていられますか！」
「周りをよく見てみなさい」
「今はそれどころじゃ――」
「子どもたちが集まってきた」
　子ども、と聞いてサフィリアは周りを見渡した。窓の外や出入り口に子どもたちが詰め掛けているのだ。みんな、張り詰めた表情で部屋の中を見ている。
「あ――」
　シーグとサフィリアは同時につぶやいて、動きを止めた。

2章ー79　ちょっと悔しいから

子どもたちの視線に晒されて、誰も時間が止まったように動けなかった。ただ一人の例外、ジェイナスがカップを下ろす。
「さて、どうしようか」
のんびりとした声と、カチャンという音でサフィリアが我に返った。
「私が子どもたちを教室に連れて行きます」
「変わりに行こうか？」
「私が直接言わないと、子どもたちが納得しません」
「そうだね。じゃあ、お願いしようか」
サフィリアは、唇をかみ締めてシーグを一瞥すると教員室から出て行った。
「さあ、みんな教室に戻って。何があったのかそこで話すから」
子どもたちが教員室のほうをチラチラと見ながら戻っていった。
「すいません」
頭の冷えたシーグは開口一番にジェイナスに頭を下げた。
「まぁ、私に謝罪するより、サフィリア先生ときっちり話し合いたまえ。ものすごい言いあいだったけど、実際には君の考えがあるんだろう？」
「殺意や敵意交じりなら、ブラスト（噴出）。そうでないならプロテクション（防護）。それで、見当がつくと思います」
ジェイナスはうなずく。理解したというより、やはりと納得した様子だった。
「戦士の直感というやつだね。だったら、攻撃と防御の区別だけはなんとかなりそうだ。不利には違いないけどね。だけど、それは我々には理解しがたい感覚なんだよ。魔術師は知識と理論を優先して戦う。そのために、あらゆる弱点と不利を徹底的に撤廃して戦法をたてる。だから、サフィリア先生はああいう物言いになったんだ。

悪気がなかったということは分かるね？」
「はい」
子どもたちに言い聞かせるのと同じ口調。それゆえにシーグは自分が情けなくなった。
「知識の押し付けは、君の戦い方には合わない。だったら、君の戦法を前提に作戦を立てるのがいいと思う。君が質問し、我々が答える。それを徹底しようか」
「手間をかけさせてしまって、すいません」
「いやいや、むしろ我々のほうが謝らないくては。半ば押しかけ気味に協力すると言っているんだからね。この上提案まで押し付けとなれば、目障りにしかならない」
ジェイナスはここで言葉を切って、少し考え込んだ。
「さて、シンシア、アイフェ。君達も教室に戻ってくれるかな」
「何故ですか！」
シンシアは叫ぶように言った。半立ちになって身構えた様子は、威嚇する子猫のようだ。
「私も、サフィリア先生も、リーザさんもまだシーグさんのお手伝いをしなくてはならない。わかるね？」
すると、シンシアは立ち上がって大きくうなずいた。
「分かりました。サフィリア先生がこっちに戻れるように、私がクラスをまとめておけばいいんですね」
ジェイナスはうなずいた後に、アイフェを一瞥した。
「なるべく、穏便にね」
「なるべく、努力します」
ジェイナスの口調を真似して、すました顔でシンシアは答えた。
そして、アイフェの手を引っ張る。アイフェもここに残りたいようだった。だが、もう一度手を引っ張られると、シンシアに従って教員室から出て行った。
その後、しばらく時間を置いてからジェイナスはささやく様に言った。

「あの子はね、アイシャの名前を聞くと尋常じゃない怖がり方をするんだ。サフィリア先生があんな迂闊な事をするとは驚きだね。今日はずいぶんと感情的だし、一体何なのだろう。昨日の戦いの疲れが出たのかな」
「私はなんとなく分かりますよ」
悩むジェイナスに、リーザが楽しそうに言った。
「ほほう、一体どんな理由なんだい？」
「ちょっぴり悔しいから言いたくありません」
「は？」
「へ？」
男2人が間の抜けた声を出すのを見て、リーザはくすくす笑っている。
「ああ、なるほど。そういうことか。さすがは占い師だね。納得、納得」
ジェイナスはひざをたたいて、何度もうなずいた。
「俺にはさっぱり分かりません」
シーグが不思議な表情を浮かべると、ジェイナスとリーザは目配せをして笑っている。
「分からないことを教えてくれるんじゃないんですか」
「何でもというわけじゃない。こういう事には自分で気づかないとね。人に教えられたら意味がない」
憮然とした表情に、ジェイナスはますます笑みを深くする。
「教育者たる者、時には冷たいものなのだよ、時には炎のように燃えあがる熱さも心に秘めている」
つまり寒いか、暑苦しいかのどっちかだけ。道理で教師が時々うざったく思えるわけだ。と、毒を吐きながら、シーグは心の中でふて腐れていた。
「シーグ君。君の成長を心から祈っているからね」
ジェイナスは意地の悪い笑みを浮かべながら、講演者を思わせる堂々とした口ぶりで言い放った。

教師というのは意地の悪い、いたずら好きの人間ばかりなのだろうか？　そう考えたシーグは、過去にあったサフィリアの武勇を思い出し、そうに違いないと納得したのであった。

2章－79　ちょっと悔しいから（後書き）

昨日、デスクトップＰＣのハードディスクが完全クラッシュしました。しばらく、使ってなかったもんなぁー。

変わりに、ノートＰＣが修理から復活。もう、つぶれるのは堪忍してほしいです。

2章－80　必殺の武器と絶対の防御

＊

ジェイナスは、自分の知る限りの情報をシーグに伝えた。
リーガル・バックラーの同時展開は3つまで。自分の周囲10歩以内なら展開できる。全方位の防御壁も即座に張り巡らせることができる。
共に　投石台の岩石も跳ね返し、如何なる刃も受け付けないほどの硬度を持つが、魔力が満ちる直前には色が見える。
アヴェンジャーを呼ぶために必要な時間は、ゆっくりと3つ数えるほど。金属を紙のように切り裂くほど鋭い。
刃にはウーンズの魔術が込められており、かすっただけでも傷口は更に開く。
10歩の距離よりも近づけば、クリティカル・ウーンズ（致命傷）が飛んでくる。傷口があれば、更に大きく裂ける。
クリティカル・ウーンズの詠唱時間は、ゆっくりとひとつ数える程度必要。ただのウーンズ（負傷）であれば一瞬。
「必殺の攻撃、絶対の防御がそろっているというわけだね」
ジェイナスはひとしきり説明を終えると、言葉を止めた。
「鎧は着ているんですか？」
「全身を金属鎧で覆うより厄介だよ。ガリウスの決闘着にはグラムファーレの技術の粋を凝らしてある。ただの服に見えるけど、プレートメイル（板金鎧）よりも硬い。しかも、それは生地に覆われていない首や足元も同様だ。体から指一本分の幅を空けて防御壁が張り巡らせてあると考えればいい。投げナイフ程度では、傷も付けられないだろうね。つまり強い攻撃はリーゲルバックラーで止めて、弱い打撃は当たるに任せればいい。鎧の重量を逆手に取ったり、疲労を誘ったりはできない」

「実際に攻撃を当てた人間はいるんですか？」
「いいや、決闘でガリウスに攻撃を当てた者もいないんだ。おっと、情報の正確さに欠けたね。だから、決闘着の性能はグラムファーレから公式に公表された性能において、だよ。実際には触れたものさえいない」
ジェイナスが絶望的だと言わんばかりに首を振る。シーグは「一人も……ですか」と小さくつぶやいてうなずいた。
「魔術は何を使うんですか？」
「事実上なんでもあり、だろうね。場所がアクリアエ・スリス。触媒も自由自在だ」
「じゃあ、ワイバーンを呼び出したりすると？」
それを聞くと、ジェイナスは目を見張った。
「まさか。あんな真似ができるのはベクター卿だけだよ。それもセブンパワーインテグレーション（七力統合陣）の中にいたから、固めておけたんだ。つまり、ガイスが気絶して陣形が完全に破壊されたからワイバーンが出てきたんだね」
「じゃあ、矢弾を飛ばすのは？」
「あれは、フォルナージュ家の秘儀だからね。我々が真似しても、水や火で小さな爆発が起きる程度だ。戦闘中なら、別の魔術のほうが有効だね」
「杖で打ち込まれると剣が溶けました」
「魔術師の常套手段だね。しかし、シャープネスにはすでにエンチャント（付与）がされている。この状態だと、新しいエンチャントを簡単にかけられないんだ」
「肉体を強化して、人間離れした動きをしていましたが」
「あれも彼にしかできない。普通の人間がやると、強化した身体能力についていけず走ることもできないんだ。ベクター卿は例外中の例外だよ、彼を基準に魔術を考えはいけない。それにサフィリア先生も自分の封土である天空の水盤にいたんだ。風や火や水があそこまで壮絶な速度と密度で君に襲い掛かる事はない」

「……だとすると、何が起こるのか。全然分からないのですが」
「うーん。今更なんだけど、よく生きていたね。昨日の戦いは、数年来の大魔術戦だったんだよ」
「はあ」
シーグの気の抜けた返事を聞いて、ジェイナスは言葉を止めた。そして、髭を引っ張りながら少し考え込む。
「こういう言い方なら分かりやすいかな。もし私がガリウスなら、３歩まで近づかれればウーンズを使うか、アヴェンジャーを振るだろう。５歩の距離なら、クリティカル・ウーンズ（致命傷）を撃つ。１０歩ならばリーガル・バックラーで君の動きを封じにかかる」
シーグが理解の表情を浮かべうなずく。ジェイナスは更に言葉を続けた。
「１５歩ならば、ブラスト（噴出）の系統で火球を撃つ。２０歩ならば雷撃を撃つか、別の魔術を使うか、更に距離を開ける。２５歩ならば、エンハンス（向上）で魔力を増強して更に強力な魔術を撃つ準備を整える」
「３０歩ならば？」
「その辺りで、観客席に出てしまうだろうね。決闘場は半径３０歩の円状だから」
ジェイナスは意地の悪い笑みを浮かべた。シーグが問うのを予想していたに違いない。
「封土の中で触媒も使い放題。エンハンス（向上）を限界までしたらとんでもないね。決闘場の半分くらいを巻き込んで爆発する火球が作れるだろうな」
「そんなことをしたら、自分も巻き込まれるのでは？」
「彼にはリーゲル・バックラーがある。火球を宙にはなっておいて、自分だけ防御壁の中というわけさ。付け加えると防御の展開が一瞬なので、自爆による自滅も期待できない。不安定で危険だが強力なブラスト（噴出）を使い放題ということだ。その点だけではメティオ・スマッシャーよりも厄介だね。基本的に遠ざかるほど不利だ」

「ですが、近すぎても不利になるわけですね」
ジェイナスは苦笑いしながら首を横に振った。
「もし、彼が自分の得意な系統にこだわらなければ、どの魔術を使うか見当も付かない。軽く考えても１００通りは思いつきそうだ。彼の創意工夫しだいだね」
ジェイナスがうなずくと、シーグは腕を組んで考え始めた。しかし、絶望した様子はない。
「シーグ、これも知っておいてほしいんだけど」
リーザが言いにくそうに口を開いた。その様子を見れば、いい知らせでないことは確実だ
「アヴェンジャーと真正面から打ち合うとシャープネスの方が圧倒的に不利なの。魔力は刀身が広いほど強力に込めやすくなるから」
「その心配ないな。正面から打ち合った地点で、力負けして吹っ飛ばされるだろう。その地点で俺の負けが決まっている。勝負あり、の声が決闘場に木霊するわけだ」
気軽に言い放った後に、シーグは嫌な気配を感じて背後を振り返る。ちょうど、無表情のサフィリアが入ってきたところだった。

2章－81　向かう所敵だらけ

背筋に浮かぶ冷や汗、シーグはとにかく口を開いた。
「と、見せかけて油断させつつ。実際には受け流して、身を翻してから反撃にうつったりするんだな。うん」
「負けが決定した後なら、油断も何もないでしょう。ヴァンガードとはいえ、一応審判はいます」
「……」
堅い口調、感情を交えぬ声、協力的ともとれる態度。シーグは助けを求めて、視線をさまよわせた。
「さてと、あれは何処にいったかな？」
ジェイナスは殊更に大声で言いながら立ち上がった。一方、リーザはさりげなくカップを片付け始めている。
「先ほどは、申し訳ありませんでした」
「……いや、俺も悪かったよ。だから――」
「校長」
しかし、サフィリアはシーグの言葉の途中でジェイナスを呼ぶ。
「む、なんだね」
「ご迷惑をおかけしました」
「いやいや。それで、教室のほうはどうかね？」
「シンシアがうまく抑えてくれています」
「そうかそうか。いざとなったら、私が様子を見に行くよ。それから、シーグ君にはガリウス卿の能力について話しておいたからね」
サフィリアとジェイナスの会話はそれで終了した。ジェイナスが逃げを打つときには、聞いてうなずき、提案を出してその場は流すようだ。次の機会には、この方法を真似しようとシーグは思った。
「それで、どうやって戦うつもりなの？」
近寄ってくる壁を思わせる威圧感。シーグはつばを飲み込んだ。
「最後には接近戦で決着をつける」

「アヴェンジャーには、どう対抗をするつもりですか？」
「最初は抜かせないようにする」
シーグの言葉に部屋にいる3人があっけに取られた表情を浮かべた。
「決闘の前に剣を構えるに決まっているわ。ふざけるのもいい加減に――」
「待ちたまえ、サフィリア先生」
サフィリアの押し殺した声に、ジェイナスが鋭い声で介入する。
「できるんだね？」
「確実とはいえませんが、試してみたいことが幾つかあります」
「うん、わかった。それでいこう」
「校長！」
「私は信じるよ。セリウスが試してみたいと言った時、後悔するような手を打ったことはない。シーグ君も同じだと私は確信するね」
名無しとして封じられた名を聞いて、サフィリアは唇を血が出るかと思うほどにかみ締めた。
「それよりも、我々にできることは万全なのかな？」
「はい。フィーちゃんの結界も完成しているわ。私が持ってきた服に縫い付けてあるから、後で着替えてね」
「持ってきた……服？」
肩と太ももの露出が多いピンク色のローブ。三角帽子に真っ赤なリボン。リーザの全身を改めて見回し、サフィリアはおびえる様に呟いた。
「とても似合うと思うわよ」
「今、私が着ているローブじゃだめかしら」
「ダーメ。今からじゃ、間に合わないもの」
困った顔で顔を赤らめるサフィリア。一方、ジェイナスは表情を緩めている。シーグがにらみつけると、コホンとわざとらしく咳払いをした。
「アイシャ・ディスペリアはイカサマの天才だからね。決闘の最中

でさえも、誰にも気づかれることなく幻覚で惑わせる事ができる。実際に過去数度の決闘で介入した、と予測される事態が起こっているんだ」

「魔術師たちが見ているのに、ですか？」

「彼女は特別なんだよ。この王都の中では特にね。だけど、それはサフィリア先生が監視してくれているから安心しなさい。封土の中心でプルーフ・アゲインストが作った結界陣。更にメティス屈指のディテクターだ。十分に対応できるはずだよ。さて、包帯は完成しているようだし、後は脱出方法かな」

「さっき見てきました。子どもたちの作業はもうすぐ終わるはずです」

「あの、脱出って何ですか？」

「うん。実は学園の周囲をすっかり囲まれているんだ。親衛隊『銀の魔女』にね」

ジェイナスは楽しげに言った。シーグの深刻な表情を見て、カッカッカと笑う。

「向かう所敵だらけ、だね。決闘場に向かうだけでも大変だ。おっとっと。一人で出て行くなんて言いっこなしだからね」

ジェイナスは浮かれた声で、口を開きかけたシーグを専制した。

「『銀の魔女』とは何者ですか？」

「自称ではなく、アイシャ・ディスペリアの正式な親衛隊だよ。人数は少ないが、魔術師だけで構成されている。構成要因は、学園地区で君とガリウスの周囲を取り巻いた者たちだ」

アイシャの一挙一動に反応し、軍隊のように規律の取れた行動で広場から去っていった魔術師たち。薄い色のローブを着た壮年の者もいたのをシーグは思い出した。

「相当手ごわいのでは？」

「戦時には魔術で戦う事を前提に組織され、訓練されているからね。おっと、心配はいらない。リーザさんとサフィリア先生がすでに作戦も戦法も考えている。君は遊覧船にでも乗ったつもりでいればい

いさ。子どもたちの話相手でもしながらね」
「……今、なんと？」
何かの聞き間違いかと思い、シーグは問い返した。
「シーグ君、サフィリア先生、リーザさん。シンシアにアイフェに他の子どもたち。えっと、合計で２０人だね。みんな一緒にアクリアエ・スリスに向かう。そう言ったんだよ」
唖然としたシーグの顔をじっくりと眺めて、ジェイナスはますます笑みを深くしたのであった。

2章－82　お医者のお仕事

＊

サフィリアは着替えるために、ジェイナスは子どもたちの様子を見るために。共に教員室を出て行った。

「じゃあ、シー坊はシャツを脱いでね」

リーザは箱の中身を取り出しながら言う。治療をするためだろう、そう考えてシーグはシャツを脱いだ。すると、リーザもマントを脱いでショートパンツと肩の出たシャツという姿になっていた。

「なんで、そっちも脱いでいるんだよ」

「わー。その言い方って、ちょっとエッチー」

リーザはくすくすと笑いながら、箱の中から色の紺色の貫頭衣と、純白のエプロン、純白の帽子を取り出した。

「これに着替えるの。格好を変えた方が気分が出るでしょ？」

リーザは鼻歌交じりに白衣に頭を入れた。緊張感のない様子に、シーグは手で顔を覆った。自分の部屋から脱出するときに、服をやたらと並べていた理由がこれだったのかと呆れていたのである。

「料理でも始めるつもりなのか？」

「確かに帽子はよく似ているわね。でも、これは女性の治療士が着る服なのよ」

手早く着替え、頭に帽子を載せたリーザはクルリとその場で回転した。

「……」

「ほれほれ、何か言うことがあるでしょ」

「血は止まっているから、エプロンなんてしなくても汚れないぞ」

リーザは腰に手を当て、片方のほほを膨らませる。

「冗談のつもり？　だったら、もっとユーモアを働かせて、気の利いたことを言ったほうがいいわよ」

「あのな、敵に周囲を包囲されているんだぞ。何でそんなにのんきなんだ」
「重苦しく悩んで落ち込んだって、相手が手加減してくれるわけじゃないでしょ」
シーグは大仰にため息をついた。すると、リーザは満面の笑顔を浮かべながら近づいてくる。
「さあさ、シーちゃん。お手当ての時間ですよー」
「は？」
「ちょっぴり背中が痛い痛いしちゃうけど、いい子いい子にしていてね」
「……子ども相手に言うようなしゃべり方はやめてくれ」
「患者さんは、お医者さんの言うことに従わないとダメだぞぉー。はい、腕を上げてくださいね。次は前かがみに。うんうん、シーちゃんはお利口さんですねー」
リーザはますます間延びした声を出す。シーグが黙り込んでいると、リーザは背中の包帯をすべて外した。
「わあ、すごい。たった一日でほとんどふさがっているわ。ねえ、包帯はきつくなかった？」
「少し締め付けがあったな。剣を振る時に脇が締まって、息が詰まったんだ」
「これだけ直っていたら、もっと術式を薄くできるわ。ずっと動きやすい巻き方にできそうね。はぁい、背中に塗り塗りしますよぉ」
再び間の抜けた声になって、リーザは背中に手を当てた。シーグは思わず、びくりと全身を緊張させる。
「傷口をオリーブオイルで消毒するだけよ」
リーザは血を洗いながし、ふき取ってから粘つくクリーム状のものを傷口にすり込んでゆく。
「次はお薬を飲んでくださいね」
シーグは神妙な顔つきで、リーザの差し出したカップを持った。
「苦いからって嫌々したら、メッ！　ですよ」

リーザの幼児向けの言葉が益々ひどくなりそうな気がしたので、シーグは一気に飲み干した。甘くて口当たりがよく、あっさりとした喉ごし。予想外の感覚にシーグは目をぱちくりさせた。
「薬……なのか？」
「本当はただの果汁でした」
「あのな」
「薬はまだ慣れない？」
「苦いのと染みるのがどうしてもな。いや、もちろん毒のはずがないって理屈では分かっているんだ。でも……」
「気にしないで。少しずつ慣れたらいいもの。一番いいのは怪我も病気もしないことなんだけどね」
「それよりも、子どもたちを連れて行くっていうのは本気なのか？」
「ええ、そうよ」
リーザは歌を口ずさみながら、一巻きになった包帯やハサミを机の上に並べている。
「だけど、戦いに巻き込むなんて、危ないじゃないか」
「あら。それを言うなら、昨日アイフェも戦ったじゃない。言い出したのはシーグなんでしょ？」
「アイフェは戦う力を持っていた。それに身に着けた力を使いたがっていたから」
「それなら、ここにいる子ども達はみんな同じね」
「庭の鉄板や、泥の山が訓練の成果か？」
「そうよ。年齢通りの子どもだと思ったら、痛い目を見るからね。私たちだって、そうだったでしょ？」
「……サフィリアがよく納得したな」
「ぜんぜん納得してないわよ。戦うのはまだ早いって、それがフィーちゃんの口癖だもん」
「だったら、何で反対しないんだ？」
「子ども達が自分で決めたことだからよ。本気で取り組んで、妥当な計画を立てた場合は、誰の提案でも絶対に軽く見ないの。それが

この学校のルールだからね」
「作戦は、リー姉がたてたのか」
「そうよ。今回の作戦は特に自信があるわ。2年がかりで考えて、準備していたんだからね。ちょっとは信用してくれるかしら？」
ウィングス通りでの見事な手際を思い出し、シーグはうなずくしかなかった。リーザは満足げに胸をそらして何度もうなずいた。
「あの子達はね、七家から爪弾きにされた子ども達ばかりなの。だから、これからも自分で戦っていかないといけないわ」
「孤児って事か？」
「いいえ、ほとんどの子が両親共にそろっているの」
「七家っていえば、メティスでは実力者の集団なんだろ。なのにどうして」
両親がいて、家も裕福なのに自分の子どもを遠ざける。その考えがシーグには理解不能だった。
「だからこそ、かもしれないわね。たとえば、この学校に赤緑色盲の子がいるわ。シー坊よりもずっと軽いんだけどね。そのせいで家族全員がつらい目にあってきたの」
「その程度でか。俺なんか、さっきまで全く気づかなかったんだぞ」
「魔術師の一族には、その程度ですまない事なのよ。時々本気で馬鹿らしくなる事で、人の一生を台無しにするんだもん」
リーザはフン、と鼻息も荒く言い放った。

2章－83　デリカシー

「他の子ども達にも色々事情があるの」
「シンシアはどうなんだ。フェルナンディの代表のような口ぶりで話していたぞ」
「あの子の場合はもっと複雑ね。でも、勝手に子ども達の事を教えられないの。心を開いてくれたら、自分から話してくれるわ。それまで待ったほうがいいの。あれこれ聞くと、絶対に逃げていくからね」
　シージペリラス（命取りの座）の自分を恐れずに子ども達は近寄って来る。その理由がシーグには分かった気がした。そのとき、鼻がむずむずして、シーグは盛大なクシャミをした。
「あらあら。シーちゃん。そんな格好じゃ、お風邪をひきますよー」
　鼻をすすっていると、リーザは再び子どもをあやす口調になった。そして、ジェイナスがおいていった毛布をシーグの肩にかける。
「リー姉はさっきまで、肩と足を出したままでよく寒くなかったな」
「……それって私が肉付がいいから平気。そう言いたいのかしら」
　リーザは腰に手を当て、ほほを膨らませてシーグをにらみつけた。
「だ、誰もそんなこと言ってないだろ。だいたい、リー姉は気にするほど太ってないだろうが」
　リーザは口をへの字にしながらシーグの鼻をつまんだ。
「実は気にしてます！　デリカシーのない事ばっかり言ってると、フィーちゃんに嫌われちゃうぞ」
　そしてシーグが痛みに身をよじり、ソファーに横倒しになるまで容赦なしにひねり上げた。鼻を押さえてうずくまっていると、サフィリアが部屋の中に入ってきた。
　裾が幾重にも折り重なったスカート、ホルダーネック（首紐）のドレスの上に同じ色のガウンを着ている。水色で統一された布地には、きめ細かやかな、刺繍が縫いこまれている。

「わー」
リーザの子どもじみた歓声に、サフィリアはわずかにほほを染める。
「変……かしら」
「逆よ。こんな似合うなんて思わなかったわ。着てみた感想はいかが？」
「ずっと動きやすいわ。これなら、戦いのときにも大丈夫ね。風が強くても寒くなさそうだし」
サフィリアの返答にリーザは不満げに口をゆがめる。
「そうじゃなくて、鏡の前に立ってみた感想は」
「別に装飾品や色の組み合わせも問題なかったわよ」
「……どこかの誰かみたいな言葉ね」
「誰かって？」
サフィリアの問いには答えず、リーザは大仰にため息をついた。
「フィーちゃん。女の子なんだから、おしゃれに気を使わなくちゃダメよ」
「今は周囲を敵に包囲されて、それどころじゃないわ」
「普段だって魔術師のローブか、詰め襟で大人しい色の服ばっかりじゃない。せっかく美人に産まれついて、スタイルもいいのにもったいないなぁ」
そこで、リーザはちらりとシーグを見た。
「今回は、童話に出てくるお姫様をイメージしてみたの。今くらいの時期の湖を背景にしたら完璧ね。シー坊もそう思うでしょ」
「え？」
突然声をかけられて、シーグは我に返った。サフィリアの後姿に姿に見とれていたからだ。振り返ったサフィリアと目が合う。気まずくなって、シーグはとっさに視線を宙に泳がせた。代わりに「コ、ラ」と大きく口を開けてしかめ面をするリーザと目が合った。
「さっきの薬はもう終わっているみたいね。じゃあ、次は――」
サフィリアのつぶやきに、シーグとリーザはそろって顔色を変え

た。
「二人とも、どうしたの」
「……薬だって。ひょっとして、さっき背中に塗ったやつ、か？」
「飲むほうもだけど、それがどうしたの？」
サフィリアが不思議そうに問う。その瞬間、シーグは更に青ざめて口元を押さえた。
「あ、もう。ダメじゃない。大丈夫？」
リーザが背中をさすってくれた。よく考えたら、ただのオリーブオイルがクリーム状のはずがない。そう思いつくと、今度は薬を塗った部分がむずむずしてきた。
「平気だ」
「全然そんな風に見えないわ。フィーちゃん、シーグの前で薬の話は禁止なの！」
リーザは悲鳴じみた声を出す。
「大丈夫。昨日だって、気を失っているときに勝手に薬漬けにされても平気だったんだ。終わったことだし、気の問題なんだ。気合が足りてないだけなんだ」
シーグはうつむきながら、呪文のようにつぶやいて自分に言い聞かせた。
「リー姉様ー」
「この荷物はどこに乗せたらいいの？」
廊下から女の子たちが呼ぶ声が聞こえてくる。
「ああ、もう。ちょっとそこで待ってて」
「……俺は平気だ。リー姉は行ってやってくれ」
「本当に大丈夫？」
「４年前だったら、卒倒して気を失っていただろ。以前よりずっとマシになっているから」
「分かったわ。フィーちゃん。私は船を見てくるから、後はよろしくね」
リーザはそういい捨てると、部屋を出て行った。

「キャー。リー姉様、その服かわいい！」
廊下から数人の女の子たちの悲鳴じみた声が聞こえてくる。
「応援用の服も準備しているのよ。見てみる？」
「本当！　リー姉さま。早く早く」
女の子達の甲高い声がどんどんと遠ざかっていく。シーグは吐き気を無理やり押さえ込み、大きく深呼吸して顔を上げた。
すると、難しい表情を浮かべているサフィリアと目が合う。今日一日で、何度この視線とぶつかっただろう。よく考えれば、さっきの『勝手に薬漬け』はひどい言葉だった。ひとまず謝るところからはじめよう。シーグがそう決意したとき。
「ごめんなさい」
サフィリアに深く頭を下げられて、シーグは目をぱちくりとさせた。

2章－84　宝石と魔方陣

助けを求めて廊下のほうに目をやるが、当然そこにはリーザはいない。気まずくなったシーグはサフィリアに背中を向けてしまった。
「と、とにかく頼むよ。ほら、時間がないんだろ」
サフィリアはシーグの胴に包帯を巻き始めた。しかし、重苦しい沈黙がそのままだったので余計に気まずくて仕方がない。
「リー姉は……」
いつ帰ってくるんだろう。と、言いかけたのをシーグは飲み込んだ。
「この2年間どうしていたんだ？」
「私が出会ったときは、工房にいたわ。鍛冶や細工や織物の仕事のお手伝いをしていたわね」
「一家そろって手に職を持っているんだよな」
「その上、全員が王宮の御用達なの」
サフィリアの声がようやく普段の調子を取り戻し始めた。
「魔術師の品物について知りたいからって、魔術の勉強も始めたがっていたわ。だけど、メティスじゃ6歳から教育機関に入らないと魔術師の講座を受けられないの。だから、私が個人的に教授する程度だったんだけど。飲み込みが早くて、たった2年で8年分の勉強を終わらせたの」
「……のんびりしている様に見えて、妙に頭が切れる人だったからなあ」
「本当にね。たとえば、エンチャント（付与）に必要な魔方陣の術式と物体の結晶構造の理解なんて、そこだけで2年は――」
「ええと。とにかく今は、プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）って呼ばれているんだよな」
「そうよ、メティスの魔術理論を覆す逸材として知らない人はいないわ」

途中で言葉をさえぎった事で気を悪くした風もなく、サフィリアの軽やかな弁舌も、体に包帯を巻く手もどんどんと早くなってきている。腕を上げ下げするシーグのほうが遅れがちになっているほどだ。

「たとえばこの包帯もそうね。メティスの従来の術式よりもずっと効果が高いわ。同じ程度の性能を持つ術式を作るために、ダイヤモンドとサファイアとルビーが必要なんだけど」

「……何だって？」

「理想を言えば親指大の宝石。金糸とかエレクトラム（琥珀金）なんかも、使い方しだいでは有効ね。軽く見積もっても、小さな館が建つかしら」

シーグは包帯の巻かれた両肩に、金貨の山がのしかかってくるような重圧感を感じた。

「宝石や金属の結晶構造が魔方陣とよく似ているの。魔術の品物に、宝石や貴金属が使われるのはそのためね。だけど、リーザは糸と針だけで同じ事が出来るわ。つまり、階層構造、並列循環の魔方陣を作れるの。これってメティスの魔術理論の理想通りの技術なのよ」

「ええと、分かるように説明してくれるか？」

「たとえば、昨日のセブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）。それを実現させた青マントと赤マントはリーザの作品なの」

シーグは肩越しにサフィリアを見る。表情にも声にも賞賛しかうかがえない。

「今まではマントの縫い方や、魔術具の配置でしか魔方陣を作れなかった。だけど、リーザはマントの素材の中にも魔方陣を込められる。つまり、通常の魔方陣よりも一階層分だけ多い三層構造になる。これが、階層構造ね。更に、二層構造で魔方陣を作ると不安定になるけど、三層構造にすると急に安定する。これが並列循環」

「言葉の意味はさっぱり分からんが、小手先で剣を振るのと腰を入れて剣を振り切るくらいの違いがあるのかな？」

「そうね。言い得て妙だわ。実際にリーザに比べれば、私たちの技

術なんて小手先に過ぎないものね」
　少し深刻さを帯びる声色。またやってしまったと、シーグは手で両目を覆った。
「最も布だから、構造がすぐに崩れてしまうのが欠点なのよ。治療用の包帯も探知用のリストバンドも今日一日が限界ね」
「まあ、俺の場合はそれで十分だが。作り直すのが面倒そうだな」
「いいえ、代わりに再注文が殺到するから利潤が安定するそうよ。『薄利多売が商売の秘訣』。これが、オーメント商会の座右の銘らしいわ」
「商才もあるんだな」
「ええ、本当にとんでもない人よ。それなのにピンクのマントに真っ赤なリボンの服なんだもの」
「今は、治療士の格好だそうだ」
「次はどんな格好でくるのかしらね？」
　サフィリアは楽しそうに笑っている。包帯はすでに巻き終えて、今はペンで魔方陣を書いている。薄い包帯越しのペン先の感触がむずむずとする。
「完成よ。どうかしら」
　シーグは腕を回したり、腰をひねったりした。
「うん、窮屈なところはないぞ」
「術式は薄くなっているけど、止血の効果とウーンズに対して防護結界を張っておいたわ」
「そんなことが出来るのか？」
「でも、あくまで少しだけ。過信しちゃだめよ」
　サフィリアは説明しながら、あまった包帯やハサミを箱の中に直してゆく。シーグはシャツの袖に手を通す。
「湖を船で横切って、アクリアエ・スリスまで行く予定よ。校長は遊覧船に乗った気分で。そう言っていたけど、シーグにも子ども達を守る手伝いをしてほしいわ」
「だな。リー姉は切れるけど、たまに抜けているところがあるから

な」
「だから、そこを補助するのが私たちの役目ってわけ」
教員室の窓からは、湖に向かって移動する子ども達の姿が見えた。
そして、廊下からはシンシアとアイフェが走りこんできた。
「サフィリア先生、シーグさん。出発の時間ですよ」
「ですおー」
サフィリアとシーグはお互いにうなずきあって立ち上がった。

2章－85　一撃必殺の心得

＊

湖の波は穏やかで、天頂に向かって昇る太陽の日差しを受けてきらきらと輝いている。その中に立つサフィリアは一枚の絵のようだ。風に吹かれてたなびく金色の髪が、若葉の生い茂る湖岸の緑に映えて見える。

リーザの言っていた通りだ。と、シーグは納得していた。

「シーグ君」

突然リーザに呼ばれて、シーグは我に返った。

「うーむ、ぼんやりするとは余裕だね」

偉そうなしゃべり方をするリーザ。手に持った指揮棒を神経質に揺らし、いかめしい表情でシーグを見ている。口元には少し傾いた付け髭、真上に立った襟は刃のようにとがっている。サフィリアによると、異国の将軍が着る服らしい。

明らかに肩幅があっておらず、服に着られているという印象だ。男性用なので当然似合うはずもなく、文字通りにとってつけた口ひげが更に可笑しさを増している。この格好は湖岸にやってくる子ども達を片端から笑いで撃沈し、しばらく腹を抱えて動けなくしたのであった。

「とってもいい感じに、気がたるんどるのではないか。つまり、リラックスできているということだよ」

よく分からない言葉遣いに、男女二列に並んだ子ども達が大笑いした。戦いの前だというのに、緊張した様子がまるでない。

「さあ、真面目にいくわよ。大切な戦い方の説明をするからね」

リーザは付け髭をむしりとり、いつもどおりの口調に戻った。しかし、真面目というならそのふざけた格好そのものをどうにかするべきだ。シーグは心の底からそう思った。

「戦いの極意は一撃必殺。敵の急所を一撃し、戦闘不能にすればいい」

聞きなれた言葉にシーグは反射的に顔を上げた。

「はい。シーグ君、続き」

「炸裂するほどの威力があれば、魂までも粉砕する事ができる。心が果断であれば、恐怖に惑わされず神速の行動で要を捉える事ができる」

スラスラと口を開いたシーグを、子ども達が不思議そうな顔で見ている。よほど意外であったらしい。

「炸裂粉砕と神速果断。これが一撃必殺を心得とするロディウス・アクテの戦法なの。簡単に言うと相手をビックリさせて、私たちが落ち着いて行動する。それが一番大切って事なのね。ビックリさせる方法は、私とシンシアに任せておいて――」

そこで、リーザは子ども達一人一人の目を順番に見つめていった。

「みんなは慌てない、騒がない、泣かない、怒らない。そして、私やフィー先生の言いつけをよく守って、練習どおりに動くのよ。そうしたら、絶対に安全だからね。承知？」

「はい」

「じゃあ、みんな出発よ」

いかつい軍服で、ピクニックでも出かけるような口調。何もかもが変にしか見えないが、子ども達は素直にしたがって湖岸に浮かんだ船に走りよっていく。

船は子ども達全員が乗れる帆船で、後ろに小さな小船が曳航されていた。男の子が中心になってマストに帆を張る。三角帆は西風にたなびいている。船は風の吹く方向にまっすぐ進めない。だが、三角帆は風に向かって斜め向きに進むことが出来る。

サフィリアは男の子達へ指示を出している。女の子たちは要領で箱を順番に手渡して、船の上に乗せていった。

シーグも何か手伝おうとしたが、「お客様は座ってて」と子ども達に言われて、仕方なく小さな船のほうに座っていた。だから、手

際よくそれぞれの仕事をこなしていく子ども達を眺めているしかできなかった。

「先生、来ました」

見張り役の子どもが大声で報告する。湖岸のあちこちから何艘もの船が現れた。両側から船を挟もうと接近してくる。

「みんな船に乗って。出るわよ」

リーザは、指示を出しながら髪をピンク色のリボンで一まとめにしている。またもや服が変わっている。今度はサフィリアとおそろいのドレス。色だけが違って、明るい黄色になっていた。どうやら、ふざけた軍服の下に着込んでいたようだ。

子ども達が全員船に乗り込むのを確認すると、サフィリアが手をかざした。すると、帆が風をはらんでいっぱいに膨らむ。そして、2艘の船は湖の上を進み始めた。

校舎の入り口ではジェイナスが一人たたずんで、船を見送っている。

「奴等はジェイナス校長に悪さをしないのか？」

シーグは船尾にいるリーザに問いかけた。

「心配は要らないわよ。彼らは学校の中には入らないから」

「なんでだ」

「学校はメティス王国の敷地だからよ。彼らは周囲で見張っていて私たちが出てくるのを待っていたの」

漁船ほどの小さな船に、3人ずつ乗った船が左右から5艘ずつ迫っている。櫂も帆もないのに水上を滑るように速さで快走している。

「……船速は向こうのほうが早いぞ」

「3人の内、1人が魔術で船を動かしているのね。1人が攻撃、1人が防御担当。といったところかしら」

「チャリオット（戦闘馬車）みたいだな」

リーザはパンと手をたたいて、シーグに微笑みかける。

「それはいい表現ね。馬を操る御者、攻撃役の槍もち、弓と盾を持ちかえて使う射手。それぞれ役割分担をするもんね。その長所は？」

「機動力と攻撃力が侮れないんだろ」
「だけど、最近使われなくなったのは欠点があるからよね。さて、何でしょう？」
「……」
「チャリオットの弱点は歩兵以上の機動力があるけど、騎兵未満に過ぎない事。馬車は急な方向転換が難しい事。１人が馬車を操ることで手一杯だから、戦力外になること。本体が構造上もろい事。何でもやろうと欲張りすぎている事よ」

2章－86　銀ババ、三ババ

「さて、みんな聞いて」
「相手はとんでもないミスをしているわ。分かる子はいる？」
「はい」
元気よく手を上げたシンシアにリーザはうなずきかける。
「機動力でも、数でも勝っているのに、左右にばらけて挟み撃ちをしようとしています。そして、私たちは風上を押さえています」
「正解、さすがはシンシアちゃん」
その理屈はシーグにも分かった。水上での風上は、陸上では高地に陣取る有利に匹敵する。風を背に受けて突撃の勢いは増し、飛び道具の射程は延びる。風下ではそのすべてが逆転するからだ。戦うより前に絶好の陣取りを実現し、その長所を生かせる帆船を準備する。リーザの戦略的手腕に、シーグは舌を巻く思いだった。だが心配事もある。
「魔術で風を起こしているのに、風上や風下なんて関係あるのか。敵も風向きを変えられるんだろ？」
シーグがつぶやくと、子ども達の白けた視線が突き刺さった。シンシアは大仰なため息をつき、シーグに向かって立てた人差し指を突きつける。
「風を起こすとか、風向きを変えるなんて大規模な魔術は簡単には使えません。サフィリア先生は風を帆に集めているだけなんです。こんな事は魔術の基礎中の基礎ですよ」
物分かりの悪い生徒を責める教師のような口調に、シーグはげんなりとした。
「悪かったな」
「ええ、とっても悪いですわ」
生き生きとした様子で嫌みったらしく付け加えるシンシア。どうやら、すっかり調子を取り戻しているようだ。

シーグは再び湖に視線をうつした。ならば相手の動きが奇妙すぎる。戦力は集中させ、敵の弱点に一点集中させるのが基本である。兵力をばらけさせる行為は、敵の不意を突く伏兵でもないかぎり逆効果だ。だが、魔術師同士の戦いで不意打ちはありえない。イリュージョン（幻覚）の魔術もサフィリアが見破ることだろう。それなのに、なぜわざわざ左右に分かれているのだろうか。それに、お互いの船の位置関係もどんどん開いていっている。

「『銀の魔女』はね、内部で派閥化しているの」

シーグの内心をお見通しであるかのように、リーザはささやいた。

「大きく分けて三つ、プロテクション（防護）、ブラスト（噴出）、エンチャント（付与）の系統。それぞれ七家から代表者が派閥の中心ね」

「全員女だから、『戦慄の銀ババ』とか『恐怖の三ババ』なんて呼ばれていますわ。ちなみに宮廷でも通じる隠語ですのよ」

シンシアがそばによってきて、楽しそうに付け加えた。メティス（英知）の名を持つ都でも、悪評は子どもの悪口と変わることがないらしい。

「ちょっと待てよ。一艘の船に系統ごとで役割分担をしているだよな」

「だから、人間関係が壮絶なの。更に三人一組のチームごとでも衝突が絶えないみたい。だから、船ごとの連携もとれてないでしょ」

「……戦う以前の問題じゃないか」

「たいていの魔術師の集団はそうよ。縦割りの七家の構造と、横割りな魔術師の構造がそのまま表面化するわけね」

「ばらばらだな。角切り構造とでもいうのか？」

シーグの言葉にリーザはくすくす笑う。

「うまい事言うわね。お互いにけん制しあっているから、細切れになってすり潰されているかも。人間関係がドロドロになっているわね」

「まるでジュースだな」
「原料があんなでは、不味くて飲めた代物ではありませんわね。ですから、さっさと処分してしまいましょう」
言葉に棘を散りばめながら、シンシアが意気込んだ。敵を睨み付ける瞳は高揚感できらきらと輝いている。他の子ども達は多かれ少なかれ、恐怖と緊張が見て取れるというのに。いや1人だけ例外がいた、アイフェだ。2人の仲がいいのも、このあたりの性格の一致のために違いない。
「リー姉様、まずは北側の敵がいいと思います」
「そうね、シンシアちゃんの言うとおりだと私も思うわ」
リーザがうなずくと、シンシアは船尾に足を乗せて5艘の敵船を指差す。
「ジュール、面舵一杯よ。北側の敵に向かって進め！」
「あらえっさっさー」
元気に拳を振り上げ、見当違いな掛け声をしたのはアイフェであった。船の中に子ども達の笑い声が響く。「それをいうなら、アイアイサーよ」と、サフィリアが生真面目に注意している。
「シンシアー、動かすのは、舵じゃなくて帆なんだぜ」
「いいじゃない。気分の問題よ、気分の！」
顔を赤らめて怒鳴るシンシア。ジュールは、それを無視して大人顔負けに太い腕に力を込めて帆を操作した。子どもながらに見事な操船術で、船が北向きに方角を変える。三角帆は西からの風をはらんで、船は更に速度を増した。

2章－86　銀ババ、三ババ（後書き）

中世ファンタジーで、こういう言葉遊びはまずいものでしょうか？それとも、黙っていたら分からないものでしょうか？
実は相当悩みました。ご意見などいただけたらうれしいです。

2章－87　チェイン・ライトニング

「ちょっと失礼します」
シンシアは無遠慮にシーグの肩に手をかけて、小さな船のほうに乗り移ってくる。
「なんで、わざわざ」
「こっちのほうが狙いやすいもの」
言いながらニヤリと笑い、シーグのスネに狙いをつけて荒っぽく足を踏み下ろす。シーグが避けると、「チッ」と耳障りな舌打ちが聞こえた。だが、支えが動いたためにシンシアはよろけて尻餅をつく。
「何を狙っているんだよ」
「エスコートしてくださらないとは、冷たいですわね」
丁寧な口調で責め、すねた視線でにらむシンシア。
「水泳をしたければ、いつでも介錯いたしますよ」
「それはそれはご親切に！」
慇懃に対応するシーグ。シンシアは歯を食いしばって、引きつった笑みを浮かべている。
「先生！　シンシアとシーグさんが喧嘩をしています」
忠実な子どもの1人が帆の近くにいるサフィリアに報告した。目を刃物のように鋭くしたサフィリア。シンシアとシーグはお互いにそっぽを向いてその視線から逃れた。
「朴念仁」
「クソガキ」
背中越しのシンシアのつぶやきに、シーグも小声でやり返す。
小声を聞きつけたアイフェが「ぼくねんじん、って何？」と首をかしげた。それを耳にしたサフィリアの顔つきが更に険しくなる。すると、リーザがパンと手を打った。
「はいはい、そこまで。シンシアちゃん、そろそろ頼むわよ」

「はい、リー姉様」
シンシアは調子のいい返事をすると、首に下げた鎖を外した。そして、銀の台座と黄玉（トパーズ）の指輪をはめると、プラチナの鎖を取り外して指に引っ掛ける。そして、真剣な表情で前方をにらみつけた。すると、それに呼応するように5艘の船でもゴソゴソと人影が動き出す。
「対魔術の防護壁、船の前面に限定して展開」
サフィリアの冷静な声が報告する。最も、結界のない状況ではシーグには全く魔術が見えていない。だが、透明の防御壁という事はそれだけ強力な術者がいるということだ。
「来たれ、天よりの災厄」
シンシアのつぶやきに呼応して、鎖がチリチリと火花を立て始めた。雷撃の球が鎖にまとわりつき、一握りほどの大きさに膨れ上がってゆく。
「ヴォルド・ヴェイ――」
シンシアは大きく振りかぶる。そして、指に巻きつけた鎖を湖に向かって全力で投げつけたのである。
「え？」
シーグは思わずうめき声をもらした。プラチナは金よりも銀よりも高価な貴金属だからだ。
金色の輪となった雷球が飛んでゆく。だが、天空の水盤で見たサフィリアの雷撃とは見るからに威力が違う。雷の筋が轟音と共に空気を焼く事もなく、まるで円盤でも放り投げたかのようにのんびりと飛んでいる。
5艘の船に乗る魔術師の男女は、あからさまに馬鹿にしたような表情を浮かべていた。だが、シンシアは深い笑みを浮かべている。
「レイ・ザ・アーク！」
シンシアが力強く、呪文の最後の一言をつぶやくと金色の円盤が輝き出した。急激に速度を増した雷球は、弧を描いて斜め上から横なぎに船群を通り過ぎた。2艘の船べりと船底を貫通した雷球は湖

の中に消える。
「雷撃を……曲げた？」
シーグは驚きのあまり、声にならない声でうめいた。シンシアの雷球は、彼らの張った防御壁を迂回し、側面から襲い掛かったのである。
雷に撃たれた魔術師がばたりと倒れ、船がゆっくりと沈み始めている。シンシアが手を前方に伸ばすと、湖の中からプラチナの鎖が飛び出してきて指に巻きつく。
シンシアは残った3艘の船をにらみ付けた。もはやあざ笑うものなどなく、引きつった恐怖の表情を浮かべ混乱の真っ只中にあった。
「精神集中が途切れ、真ん中と右の船の防護が終了」
サフィリアが再び淡々と報告する。それを聞いたシンシアは指に絡みついた鎖をほどく。クルクルと回し始めると、チリチリと音を立てて雷撃の球が大きくなる。
「来たれ、天よりの災厄！」
シンシアは横手投げに投げつけた。2艘の船の間に割り込んだ鎖は、空中でぴたりと静止する。ブーンと不気味な音を立てて回転する円盤を目前にして、絶叫を上げながら自ら湖に身を飛び込むものもいた。
「ヴォルド・ヴェイ・レイ・ザ・アーク！」
シンシアが容赦なく呪文を終えると、バチュンと音を立てて環状に雷撃をまき散らした。直撃を受けたものは倒れるか、水の中に落ちた。プラチナの鎖は再びシンシアの手元に戻ってくる。
無事なのは1艘の船に乗る3人だけ。そのほかの全員が湖に落ておぼれる仲間を引き上げ、沈む船から水をかき出すので必死だった。
「戦意喪失、新たな魔術の気配はなし」
淡々と報告するサフィリアの声。しかし、シンシアは最後に残った船をにらみ付けている。だが、瞳には何の感情も浮かんでいない。
「来たれ、天よりの――」

「よせ！」
容赦なく呪文を唱え始めたシンシアの腕をシーグは掴む。パチッと散った火花と、痺れる感触にシーグは顔をしかめた。
「もう、奴等は戦えない。俺たちの勝ちだ！」
痺れて痙攣する手を押さえてシーグは怒鳴った。
「あ……」
我に返ったシンシアは怯えた表情で、シーグの手を見つめている。この空虚な目には覚えがある。そうだ、８年前。天空の水盤を覗き込んだときに見た。
自分を恐れる者を恐れる者の目である。
だから、何をすべきかがシーグにはすぐに分かった。シーグは痺れる手を無理やり上げると、シンシアの額を人差し指で思い切り小突いたのである。

2章－88　ペンペンとペタペタ

「こーら！　先生の言うことを聞けと言われただろうが」
シーグが鼻息も荒く叱ると、シンシアは尻餅をついて目をぱちくりさせている。
「聞きわけのない子どもには、お尻ペンペンの刑と昔から決まっているんだぞ。なあ、サフィリア先生」
「え？　その、ええと」
サフィリアは、わずかに顔を赤くして返答に困っている。たじろぐ恩師を見かねてシンシアが肩を怒らせた。
「女の子のお尻をペタペタなんて破廉恥ですわ」
「おい、勝手に言葉を変えるな」
「どちらにせよ、そんな事を声高に叫ぶなんて。お下劣ですわね」
「お……げ？」
胸に突き刺さる言葉に、シーグは言葉を失った。それを見てシンシアの瞳にきらりといやな光が見えた。
「イッヤー、さわられるー」
シンシアはぶりっ子気味に縮こまると、絹を裂くような叫び声を上げた。それと同時に女の子たちが声をそろえて、「キャー」と黄色い声を上げた。ただ一つ、「うっきゃー」という獣じみた悲鳴はアイフェに違いない。シーグから逃れ、船の前方に集まった女の子たちのために、船が傾く。しかし、すかさず男子たちが船尾に集まって反対側に体重をかけて安定させる。
「ヒューヒュー」
ジュールがはやし立てると、近くに寄ってきた男の子たちも面白がって真似をする。奇妙なところまで息がぴったりだ。シーグはうんざりして無視を決め込んだ。
「ったく。まるでガキだな」
「実際に子どもだもの」

ぼやくシーグに、リーザが可笑しそうに答えた。
「……戦いの最中だって言うのに、やることが幼すぎるって意味だ」
「それにまともに当てられているのは、何処の誰かしら？」
「……」
リーザにも言いくるめられて、シーグは船べりに突っ伏した。背後ではシーグをからかうのに飽きた子ども達が、今度は勝利を喜んで大騒ぎをしていた。もちろん、その中心にいるのはシンシアである。サフィリアに「よくやったわね」と言われ、頭をなでられるとのどを鳴らす時の猫のような表情を浮かべている。ほほえましい光景にシーグは小さく微笑んだ。
しかし、弧を描き時間差をつけて襲い掛かる雷を思い出すと、シーグは背筋が寒くなってきた。
「あれじゃあ避けようがない」
「実は魔術で止めるのも難しいのよ。魔術は終了後に必ず隙が出来るもの」
シーグの独り言に、船尾にもたれかかったリーザが答えた。
「戦士だって回避行動の後に隙があるんだ。真正面からの攻撃をかわせば、時間差をつけて背後や頭上から雷撃が折り返してくるわけだな」
「紙一重で避けたらその瞬間に、雷撃が爆発して環状に広がるわよ。だけど安心して、ガリウスには出来ないわ。あんな真似ができるのは世界中でもシンシアちゃんだけなの」
「何でまた」
「天空の水盤で、フィーリア（感応体）を見つけたからなの。その人たちは、みんな従来の魔術理論が通じないわ。例外の塊なのね」
「何人いるんだ？」
「私とシンシアちゃん。それと、セーラちゃんっていう外国の子。それからベクター卿の４人。この中でもシンシアちゃんは更に特殊なのよ。なんでも、フィーリア（感応体）を２つ同時に見つけたからなんだって」

「なんであんなことが出来るんだ？」
「さあ、私もよく知らないわ。だいたい説明しても右から左なんでしょ」
リーザは小首をかしげて楽しそうに笑っている。
「……俺が出会うのは例外ばっかりだ。かくいう俺も、シージペリラス（命取りの座）だもんな。人のことは言えないか」
「運命の出会いだって思えばいいじゃない」
「は？」
「時代の転機、異能の力を持つ者達が世界の要で出会う。ってね。英雄譚の始まりに使えそうね」
「詩人にでもなるつもりか」
「韻を踏んで、言葉に説得力を持たせるのは、占い師に必要な技術なのよ」
「なるほどねぇ」
湖面に目をやると、南側の船団が一定の距離を置いて並走している。船速では負けているし、アクリアエ・スリスは南側にある。どちらにせよ、戦いは避けられない。さっきの戦いで何かを学んだのか、今度は船同士を寄せていた。
「仲間を助けるつもりがないんだな」
「派閥同士で手柄の取り合いをしているからね。今倒したのが、エンチャント（付与）の系統なんだけど――」
「何でもありの？」
シーグは思わず半立ちになって周囲を警戒した。
「大丈夫よ、気絶して浮いているのがそうだから、大丈夫。もう何も出来ないわ」
リーザはようやくおとなしくなり始めた子ども達のほうを向いた。

2章－89　銀バエの女性

「さて、2戦目と行こうかしら。ジュール、南側の船には誰が乗っているか分かる？」
「銀バエのフレイだぜ。しかめっ面でこっちをにらんでやがる」
「向こうもこっちを警戒して近寄ってこないわ。しばらく距離をとったままにしておいて、作戦を立てましょう」
「アラエッサッサー」
ジュールはふざけた調子で答えた。
子ども達に人間扱いされない女性。一体どんな人かと興味がわいてシーグも船団を見つめた。女性は1人しかいなかった。30代半ばの赤ローブの女性が船団の先頭に立っている。怖い目つきと神経質に刻まれた眉間のしわが印象的だ。チラリと目を移すと、これまた厳しい目つきのサフィリアと視線が衝突してした。これでは、将来が心配だ。
「あー、しかめっ面といえばそうだが。なんでハエなんだ？」
「へぇ、シーグさん。あんたも見えてんのかよ。いい目をしてるんだな」
それはつまり、自分の目を自慢しているのか？　と、シーグは心の中でつぶやいた。ジュールはにやりと笑っている。ぞんざいな態度だが、初対面で馬鹿にされたときよりは遥かに友好的だ。
「始終ヴーンヴーンってうなり声を上げて、ウロウロすんだよ。うざったくてしょうがねえ。それにな、腐ったものを拾い集めちゃ、家の中に溜め込んでやがるんだ」
ジュールがガッハッハと豪快に笑うと、「くっせー」「おえー」と悪乗りした男の子が鼻をつまんで笑う。
「フレイの肥溜め小屋って言ったら、知らないやつはいないぜ！」
悪乗りをした男の子達の中には、顔を真っ赤にして気張る真似をするものも出てきた。女の子達はそれを見て嫌な顔をしている

「専用の硝石を作っているのよ」
不思議そうな表情を浮かべたシーグに、リーザは答えてくれた。
「火球の触媒としては一番理想的なの。だけど、精製するまではものすごい悪臭が漂うから周辺から苦情が殺到しているわ。それでも止めないし、自宅の周囲にハエが飛び交っているの。あの人のせいで王宮御用達の工房の品位が下がっているのよね」
リーザは苛立ちを込めて言った後、我に返った。
「えーと、もっと具体的な話の方はサフィリア先生に聞いてみましょう」
リーザが話をふると、サフィリアはうなずいて子ども達を一瞥した。すると、悪ふざけしていたジュールでさえも黙り込んで注目する。
「彼女はブラストの一族フィーンドの出身。触媒研究の第一人者よ。間違いなく威力の強い、長距離のブラストが飛んでくるわね。考えられるのは、炎と雷。何しろ、あのマイリグとイッサの師匠でもあるから」
はて、どこかで聞いたことのある名前だな。とシーグは首をかしげた。
「げ！　あの中に奴等もいるのかよ」
ジュールは嫌そうに叫び、シンシアは深刻な表情を浮かべた。
「へえ、そんなにすごいのか？」
「息がピッタリ合っていて、攻撃と防護の魔術を使い分けるんですよ。エンハンス（向上）にも秀でていて、２人で力を合わせたらブラストの射程はメティス随一です。私なんて、とても歯が立ちませんわ」
シンシアが押し殺した声と共に首を横に振ると、子ども達の間に動揺が走った。
「いいえ。『銀の魔女』は七家から選抜した人員だけで構成されているから大丈夫。フレイ氏が申請を出したけど却下された位だもの。結局、２人が所属したのは私設親衛隊の『暁の星』。だけど、逮捕

者のリストには彼らの名前はなかったわ。だけど、熱狂的な……あの人の崇拝者だし、どこかに潜伏をして、シーグを狙っているのかも。考えてみれば、うかつだったわね」

親衛隊の名前にも聞き覚えがある。シーグは頭を抱えたが思い出せない。水に揺られる感触と、喉まででかかった様なもどかしさ。ついさっき同時に味わったような気がする。

先ほどまでの賑やかさは何処へ行ったのか、船上はシンとなっていた。

「なあ、リー姉。さっき船に乗った時、似た話をしてなかったか」

「え、ああ。シャックリと絶壁の話ね」

「それだ。ええと……それで、なんだっけ？」

面白そうな会話を聞きつけて、子ども達の興味はサフィリアからリーザに移った。好奇心が先立つと、恐怖が消えてしまうようだ。

「自分で言っておいて、なんだっけはないでしょう。ええと、言いたいのはイがつく名前で、２つ名が『灼熱』と『鉄壁』っていう人の話でしょ。……あれぇー？」

自分で言った言葉を小さな声で繰り返し、リーザは考え込む。

「ひょっとして、『灼熱の閃光』マイリグ・ブレスト、『鉄壁の結界』イッサ・ホコブズ？」

「それだ！　松明と手甲を持っている奴等だろ？」

「そうよ、何で知っているの」

「会ったんだ。ウィングス通りで」

「いつの話よ。ずっと一緒にいたじゃない」

「だから、リー姉が買い物をしている間に、だよ。わし鼻の婆さんの店に行ったろ」

「ええ」

「その時に会ったんだよ」

「いつの話よ。ずっと一緒にいたじゃない！」

「いや、だから、リー姉が買い物をしている間に――」

「リー姉様、シーグさん。会話が繰り返しになっていますわ」

見かねたシンシアがシーグとリーザの間に割ってはいる。そして、2人の顔を順番に見つめた。

「御二人とも冷静になってください。こういう場合には冷静に話し合うことが大切ですわ」

2章－89　銀バエの女性（後書き）

シーグはすっかり忘れていた2人組ですが、皆さんはきっちり覚えていましたか？

ちなみに、私はどっちがどっちか分からなくなってました（笑）

2章－90　私は信じます

シンシアはリーザの横に座ると、人差し指を立ててゆっくりと口を開いた。
「シーグさん、2人と遭遇してまずはどうしたんですか？」
「近くにあった通りに駆け込んだ。すると、追いかけてきた」
「それから？」
「ええと、聞きもしないのに勝手に名乗って、すぐに襲い掛かってきたぞ」
子ども達の好奇心があふれ出す視線に晒されて、シーグはつばを飲み込んだ。
「……いきなりですわね。それで戦ったんですね？」
「いや、逃げた」
期待はずれの答えに、シンシアはガクリと体勢を崩し、恨みがましい目つきで睨む。俺が悪いんじゃないわけじゃないぞ、とシーグは心の中でつぶやく。
「その後は？」
「追いかけてきたから、ええと角を曲がって、石を投げたんだ。2つ。すると奴等は自爆して、焦げてたな。まあ、目や喉は焼けていないから、何日かで治るだろう」
「……つまり勝ったって事ですか？」
「さあ？　気絶したのを放っておいたからな。その後、リー姉のところに帰ったんだ。確か甘いやつを選んだ時だぞ」
「じゃあ、私がハーブ選びで迷っている間に戦って帰ってきたって事？」
「だな」
シーグが満足げにうなずくと、子ども達は不信感丸出しでシーグを見つめている。詩人が歌い上げるような展開を期待していたからである。

その筆頭であるシンシアは大またに船尾から乗り移ってきた。おもわず、シーグは足を引っ込めて縮こまる。それを見てシンシアは更にムスッとした顔になった。

「何で石を投げた程度で自爆するんですか！　相手はプロテクションの達人なんですよ」

「松明に当てて跳ね飛ばして、足に当てたんだ」

「だから、どうやって！」

「こう」

と、シーグは横手投げの仕草をする。シンシアの真っ赤になった顔を見て、投げ方を聞きたかったのではないと遅ればせながらに気づいた。

「落ち着けよ。自分で冷静になれって言っただろ」

言い終えてから、こういう指摘が相手を静めたためしがなかったことをシーグは思い出した。過去の経験通り、シンシアは肩を怒らせて、更に怒気を高めてゆく。

「シンシア、止めなさい」

「こんなふざけた答え。信じられるはずがありません」

諭す口調のサフィリアに対しても、声を緩めないシンシア。相当頭にきているようだ。子ども達もシンシアに煽られて騒ぎ出している。

「私は信じます。シーグならできるわ」

ためらいもなく答えるサフィリア。その一言でシンシアはキョトンとして振り返る。子ども達も一斉にサフィリアを見た。

折りしも、軽やかな風に陽光と同じ色の髪がなびく。帆の下で颯爽と湖の向こう側を見つめるサフィリアに、シーグは目を奪われた。

一方、リーザは顔に両手を当てて頬を染めている。

「フィーちゃんってば、最っ高に素敵……」

ふるふると首を振り、うっとりと嘆息するリーザ。そこで、サフィリアはようやく集中する視線に気づいて振りかえる。

「どうしたの。みんな」

「あん、もう。動かないで」
リーザは色っぽい声を出して、人指し指をクルクルとまわす。最後に船尾の縁を指でつつくと、手のひらに乗るほど大きさのサフィリアが現れた。
「うん、ばっちり再現できたわ。こういう時に、イリュージョン（幻覚）を習っておいてよかったなーって思えるの」
「……こんなにキラキラしてなかったぞ」
更に言うなら風で、スカートの裾が際どいほどに舞い上がっている。
「こういうものは心の目で見るものなのよ」
子ども達が身を乗り出して覗き込んでくると、リーザはパチンと手を鳴らしてイリュージョンを消した。
「リーザ！　魔術を使って何を遊んでいるの！」
「だって、フィーちゃんがあんまり美しくて、女神様みたいなんだもん」
「な……」
リーザがはにかみながら、うっとりと言い訳するとサフィリアは更に顔を赤くした。
「ねえねえ、画家に頼んで絵にしてもらってもいい？」
「あ、あのね」
珍しく言葉に詰まっているサフィリアを、子ども達はもの珍しそうに見ている。
「いいじゃない。別にオール――」
「リーザ！！」
力いっぱい怒鳴ってリーザを黙らせる。子ども達は目をまん丸にしてサフィリアを見上げ、アイフェは両手で耳を押さえて目を回していた。
「い、今はそれどころじゃないでしょ、あっちよあっち！」
怒りではなく恥ずかしさのためだろう。理論的な言葉もそっちのけで、サフィリアは船の進む先を指差した。そこには、新たな船影

がこちらに向かってきている。だが、リーザは逆にほっとしている様子だった。

「来てくれなかったらどうしようかと思っていたわ。丁度、待つのも飽き飽きしていたところよ」

「なんでだ？　このままじゃ、前と側面からの挟み撃ちにあってしまうぞ」

「逆に考えてみて。船速では負けているのよ。並走したりこっちから近づいたら、風上を取れないじゃない。それに向こうはブラストを使わせたら、メティス有数の術者なのよ」

威力、射程、機動力。戦闘における勝利条件はほとんど向こう側にあり、挟撃の危機にも瀕しているという。絶望的といってもいい状況だ。

「大丈夫だって。放っておいても、向こうのほうからこっちにやってくるわ。それを順番に倒せばいいの」

リーザは手をひらひらさせて、けらけらと笑う。

「何だって、敵がわざわざ自分に不利になるようなことをするんだよ。さっきだって、挟み撃ちにしようと動いていたじゃないか」

「あー。シー坊は私の事を信じてくれないんだ。ふーん」

リーザは片方のほほだけを膨らませて、ぶーたれた顔つきでシーグを睨んだ。

2章－91　ギムレットとクロスボウ

「お、本当にこっちに向かってきたぜ」
ジュールが面白そうに報告する。シーグは信じられない思いで、湖を見たが南側の船群が集まったままこっちに向かってきている。
「なんでだ？」
「だけどー。私はー、しんよー、されないー、占い師ー、なのー」
シーグの問いに答えず、リーザは変な歌を歌い出した。しょげた様子で湖面を指でツンツンしている。
「私は最初から分かっていましたわ。ですから、北と言ったんです」
「はっはぁー。俺も分かったぜ」
シンシアとジュールが自信ありげに言う。
すると、子ども達の間から「あ」とか「そうね」という具合に、理解の声が上がってゆく。とうとう最後には、シーグとアイフェだけが首をかしげているだけとなった。
「エンチャント（付与）の系統を倒して残りの系統はなんですか？」
「ええと、ブラストとプロテクションだな」
「その通りです。そして対になる系統の一族は仲が悪いんですわ。顔を合わせば、喧嘩が始まるほどです」
「フェルナンディとディスペリアみたいにか？」
「……実際そうですけど。目の前で言われるとなんだかムッとしますわね」
シンシアは神経質に眉をぴくつかせた。アイシャの顔でも思い出したに違いない。だが、基本が同じで鏡写しの関係となる系統。お互いに対立するのは同属嫌悪なのではないか、シーグはそう思ったが黙っておいた。
「そーよー、シーボーはー、お口がー、わ、る、い、のー」
「……リー姉。その変な歌、頼むから止めてくれ」
「いー、やー、なー、のー、よー」

シーグが心底嫌な顔をすると、リーザは楽しそうに笑いながら体を起こした。
「さ、そろそろ真面目に行こうかしら」
「リー姉様、フレイさんは獲物に群がるハエのようにこっちにたかってきましたわ。次は『殺虫剤』の出番ですのね？」
シンシアの毒舌にリーザは大きくうなずいた。
「さすがシンシアちゃん、みんなに指示を出して準備してね。さて、ジュールは船の配置を正確に教えて」
「先頭が船一つ分前に出ていて、左右両側に船が続いているぞ。先の尖った錐（きり）の形になっているわけだ。お！　しかも、船同士を鎖でつなぎ合わせているぞ」
「ロング・レンジ・ギムレット（長射程の錐の陣）。手ごわい陣形よ」
「陣形っていうと、あれか。昨日の、ガイスが、マントで、セなんとかの……」
言葉になっていない言葉に、サフィリアは呆れたように首を左右に振っていた。リーザは楽しそうに笑って答える。
「セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）はエンハンスの一族ランカートの陣形。ロング・レンジ・ギムレット（長射程の錐の陣）はフィーンドの陣形よ。ブラストの射程を極限にまで高めた陣形なの。だけど、大丈夫。サフィリア先生とシーグが、昨日戦った陣形よりもずっとやりやすいわ」
子ども達はそれで安心した表情を浮かべる。だが、シーグはそうは思えない。かすっただけで人を消し炭にする火球を放ち、理屈の上では王都全体をすり鉢状のくぼみに変えることの出来る陣形。そんなものと比較されても、どこが安心なのかさっぱり分からない。
昨日の戦いにしても天空の水盤の持つ有利と、ガイスの無茶苦茶な采配があったからこその勝利だ。もしも、開けた地形と良好な視界。この2つがそろっていただけでも勝ち目はなかったのだ。
「防護の担当はサフィリア先生ね。大丈夫？」

「ええ」
　自信に満ちた返事をするサフィリア。シンシアの指示通りに、子ども達はそれぞれ箱から道具を取り出している。まずは、４本の大きな燭台を船の四隅に置いて、子どもが２人がかりで押さえつけていた。教員室で、シーグが魔術の色を見れるようにと用意した結界だ。他の子ども達は、箱の中から、木の板を取り出してその上に一抱えもある布の塊を乗せて固定する。
　そして、リーザは長い箱の中から変わった大型の弓を取り出そうとしていた。鍛冶屋の紋章である「†」の両端に弦を張ったような形をしている。だが、リーザがいくら「うんうん」うなっても、その弓は全く箱の中から動かない。
「手伝おうか？」
「うん、これって重くって。船の縁にくぼみがあるでしょ、そこに置いてほしいの」
「ずいぶんと、大きな……弓だよな、これ」
「クロスボウっていうのよ。あ、持ち上がった。すごいなあ。さすがは男の子」
　シーグとリーザは力を合わせて、２台のクロスボウをくぼみの中にはめ込んだ。
「クロスボウって言えば狩猟用の武器じゃないか。それに、こんなに大きくないぞ」
「そのままの形じゃ、戦いには不向きだし、力の弱い人は使えないわ。だからちょっと改良したのよ」
　リーザの指差す場所には、歯車を組み合わせた機械仕掛けがついていた。だが、持ち上げようもない重量は、そもそも力の弱い人には不向きなのではないだろうか。
「ブラスト（噴出）の系統、炎の属性、エンハンス（向上）の系統で増幅」
　メティオスマッシャーのときと同じサフィリアの報告。先頭の船を行く船先に炎が燃え盛りながらどんどんと大きくなっている。一

方、船の上で子ども達もそれぞれの作業を終わらせ、シンと静まり返って指示を待つ。それはよく訓練された戦士のようだった。

サフィリアが手を振ると風は強くなり、船は更に速度を増した。炎を巻き上げるギムレット（錐）は、切っ先をまっすぐと向けながら迫る。

2章－92　炎＋雷　ＶＳ　風＋水

サフィリアがパチンと指をならずと、４つの燭台に同時に火がついた。

「みんな、耳をふさいで伏せていて。大丈夫、絶対に防ぐから」

落ち着いた声で言うと、サフィリアは徐々に大きくなる炎を睨みつけた。「来る」小さく呟いた瞬間、超射程を持つ長弓よりも更に遠い間合いから放たれた火球は、弾道軌道を描いてまっしぐらに迫ってきた。

サフィリアが人指し指と中指を立て、左から右に腕を一閃する。左側から巻き起こる突風に、火球は大きく進路を変えて右側前方の湖面に落ちた。爆発と同時に吹き付ける熱風。細い体が吹き飛ばされるのではないか。そう心配したが、サフィリアは髪をなびかせたまま、颯爽とした姿で前方を見つめていた。周囲には飛び散った水滴が、陽光を受けて降り注ぐ。先ほどイリュージョンで再現した姿そのままだった。

「ほーら、次が来るわ。あんまり見惚れていると、目が潰れちゃうわよ」

リーザはニヤニヤと笑いながら、シーグを正気に戻した。

「……とにかく、すごい爆発だったな」

「爆発、閃光、煙幕を自在に操り、その狙いは正確無比。だから、パイロ・テクニクス（火工術士）の称号を持つの。２つ名は『爆裂弾のフレイ』」

「『クソ爆弾』の間違いだぜ。リー姉」

「あんたは余計に『クソ元気』よね！」

ジュールの元気な声にシンシアが付け加えると、船上に爆笑が満ちた。

「硝石を触媒にした場合はね、爆発力が増すの。メティオスマッシャーほどの威力はないけど、直撃すれば船を丸ごと消し炭にできる

威力は十分あるのよ」
　最後の部分は子ども達に聞こえないように小声になっていた。ロング・レンジ・ギムレットの先端に再び巨大な炎がともる。少し神経を集中させると、シーグの目にも赤い光が炎の周囲を取り巻いているのが分かった。
　再び轟音を上げながら、飛んでくる火球。サフィリアは、上段から腕を振り下ろす。すると火球は急に高さを落として湖面に落ちた。叩きつけられる熱風からリーザは顔を伏せ、シーグは手をかざして顔を守る。
「どんどん、狙いが正確になってきているぞ」
「そうよ、いろんな意味でね」
「風や水で直接攻撃できないのか？」
「有効な打撃を与えるのは、天空の水盤でもない限り無理ね。ここはフィーちゃんの封土じゃないもの」
　近づいてくる船群は3度めの火球を先端にともす。そうして、ゴウと音を立てて打ち出される火球。サフィリアは右から左に腕を叩きつける。すると、火球は大きく左にずれて湖面に直撃した。接近した分だけ爆風は大きく、衝撃も強い。船が大きく揺れたので、子供達は悲鳴を上げた。
　もはや、船群は通常の弓でも届くの射程まで近づいている。先頭に立つフレイの勝利に確信した表情もよく見える。フレイが手で複雑な印を結ぶと、ギムレットの先端に赤い色が広がる。しかし、炎が燃え上がる様子はまるでない。
「今度は雷撃ね」
「ちょっと待て。雷撃は風で向きを変えられるのか？」
「無理よ。だからこそ、シンシアちゃんは手ごわいの」
　リーザは口を開きかけたシーグの眼前に指を突きつける。
「だ、け、ど。フィーちゃんなら大丈夫よ。ほら、よく見て」
　リーザの指差す湖面からゆらゆらと水蒸気が立ち昇っていた。
「火球が全部同じ場所に落ちたのか」

「バッチリ、狙い通りよ」
ロング・レンジ・ギムレットの先頭、フレイが掲げる杖がバチリと大きな火花を立てる。その瞬間、サフィリアは複雑に印を結んで杖で湖面を差す。すると、火球の着弾点を中心に十歩四方の範囲が、まるで砂煙が巻き上げられたかのように霧が急激に立ち込めた。そして、杖をまっすぐに突き出すと、霧の固まりはまっすぐと船群に向かって殺到する。数歩先も見えないほどの濃霧の包まれる寸前、フレイが恐怖の表情を浮かべていたのが見えた。
霧が金色の閃光に染まり、バチンとはじける音。そして悲鳴が聞こえた。
「やったのか？」
「いいえ、さすがはブラストの一族。致命的な自爆は回避したみたいね。みんな、行くわよ。反撃開始！」
リーザの声にいっせいに子供達は顔を上げた。
「左舷に出すわよ。はい、まず１つ」
左側に座る子ども達は、一斉に布をかぶせた板を湖面に下ろした。
「２つ！」
右側の子どもが一斉に右側の縁に体重をかけて船が傾かないようにする。続いて、真ん中に座った子ども達が左側によって一斉に手を打った。すると、板の上に載った布の塊に火が点く。どうしてもうまく火が出なかった場合は、隣の子どもがすばやくもう一度手を打ち付けて点火した。そして、手に持った板を湖に押し出す。５個の板はゆらゆらと湖面を揺れながら流れてゆく。
「３つ」
子ども達は再び、元の三列の位置に戻って座る。
「はい、もう一度。一つ！」
再び、５個の板が湖に下ろされる。「２つ」「３つ」というリーザの掛け声にあわせて、再び火を点された板が押し出されて湖面を滑っていく。
「１０、９、８……」

リーザが数を口ずさんでいる。合計１０個の板が不自然なほどに整然と固まって、乱れなく進んでゆく。サフィリアが風で導いているに違いない。

「３、２、１、０！」

板の群れが霧の丁度手前に差し掛かり、リーザが力強く締めくくる。すると、１０個の板はブシューと音を立て、赤色の煙を垂直に巻き上げた。

2章－93　カラシニコス爆弾

爆発の煙は風に流され、霧を真っ赤に染め上げた。同時に巻き起こる咳とうめき声と泣き声の痛々しい大合唱。

この効果には覚えがある。

「まさか、カラシニコスか」

「正解。よく覚えていたわね」

「シーグさん、知っているんですか？」

リーザがパチパチと手を叩くと、シンシアが興味深々な様子で聞いてくる。子ども達全員の好奇の視線がシーグには痛いほどだった。

「昔、俺も使ったことがあるんだ。ここまで見事な効果じゃなかったけどな」

「フレイ印の硝石のおかげよ」

「敵の道具を使ったのか？」

「だって、すごく性能が高いのよ。使わなくちゃ損じゃない」

「なあなあ。あの爆弾はどうやって作るんだ？」

ジュールが真剣な表情でシーグに聞く。

「ああ、まずは名前のとおりに辛子のこ――」

「シーグ！」

銀の鐘を思い切り打ち鳴らしたようなサフィリアの高い声に、船の上にいる全員が肩をすくめた。

「絶対に教えないでください。みんなも聞いたら駄目よ。こんな危ないもの作るなんて絶対に許しません！」

サフィリアが厳しい口調で、子供達にピシャリと言う。

いや、考え出したのはあんただろうが。と、シーグは心の中でつぶやいた。

１０歳の時、限られた物品――台所用品が中心――を使って敵を撃退する必要があった。とっさの機転を生かし、サフィリアが開発したのが『カラシニコス爆弾』である。その後も、サフィリアのた

ゆまぬ研究と実験――という名の犠牲者リストの中にはシーグとリーザもいる――を経て改良を重ねた結果、精度と威力を増していった。

当時のサフィリアが最後まで克服できなかったのが、爆発に方向性を持たせて調味料の煙を垂直に、広範囲に噴出させる事だった。

だが、その欠点もリーザのアイデアとフレイの硝石によって解決され、サフィリアの風を操る魔術によって完全な性能を持つに至ったようである。成分を変えて更に威力を増した『コロシニスト爆弾』も12歳のときには研究途上だった。しかし、それも大人の実戦でも通用する恐ろしい凶器となるに違いない。

「で、辛子をどうするんだよ?」

しつこく小声で聞いてくるジュール。だが、ものすごく怖い表情で肩を怒らせているサフィリアに気づくと、すごすごと引き下がった。

「油断しないで。一隻だけ霧を抜けてくるわ」

「仲間を見捨てたの間違いじゃねえのか?」

サフィリアの言葉を、ジュールは鼻で笑った。事実はともかく、真っ赤な霧と煙幕を船が抜けてきた。船尾には断ち切られた鎖がぶら下がっている。

乗船している5人全員が、目や口を抑えて苦しそうだ。船首に立つフレイが、苦しそうな表情を浮かべながらも杖を横に振るった。

「プロテクションの系統、対物理防護壁。前方に限定して展開」

サフィリアは、抑揚のない冷淡な声に戻って報告する。シーグの目にも、フレイの前に浮く盾状の光が見えた。一応緑だと認識できる。ブラストとプロテクションが全部ごちゃ混ぜの色に見えるわけではなさそうだ。

「シンシアちゃん。雷撃は届きそう?」

「まだ、少し距離が遠いです」

「かといって、近寄るのは危ないわね」

「色々匂うからなー」

ジュールがゲラゲラ笑いながら付け加える。
「それじゃあ、ジュール君はクロスボウ。シンシアちゃんは点火の準備よ」
「はい」
「あいよ」
子供達は片側によって、シンシアとジュールに船尾への道を明ける。どこまでも整然とした集団行動。一つ一つの動作に対して、役割も動きもあらかじめ決められ、繰り返し練習をしていた事がうかがえる。
「リー姉様、どれを使いますか？」
「煙幕弾頭がいいわね。念のため2発打ち込んで」
シンシアが一握りほどの太さがある矢を込めると、ジュールはクロスボウの引き金に手をかけて照準を合わせた。
「いい？　人じゃなくて船の縁を狙うのよ。サフィリア先生は、風を操ってジュールを援護して」
「んじゃ、撃つぜ。3、2」
ジュールがカウントダウンを開始すると、シンシアがパチンと指を鳴らす。すると、矢の根元がパチパチと火花を立て始めた。
「1、0」
ジュールの掛け声と共に、引き金が引かれて矢が飛び出す。水面ぎりぎりを疾走する矢は、途中で異様な軌道の修正をして船べりに突き刺さった。
「次、矢を込めて」
リーザの指示に従い、シンシアは隣にあるクロスボウに矢を込める。ジュールはごろりと転がって、新しいクロスボウの位置にもぐりこんで引き金に手をかけた。
「次、いくぜ。3」
ジュールが掛け声をかけると、先ほどと同じくシンシアが指を鳴らして火を点ける。その間に、矢を撃ち終わったクロスボウに男女の2人組みが駆け寄った。女の子が本体を抑え、男の子がレバーを

回すと、カリカリと音を立てながら弦が引き絞られていった。
「1、0」
ジュールが撃つと同時に、サフィリアは手を振り下ろす。風に乗って矢は狙い違わずフレイの足元の船首に突き立つ。そこで、フレイはようやく何が起こったが気づいたようだ。杖を振り回して、突き刺さった矢を叩き落そうとするが一瞬だけ遅かった。船にめり込んだ二つの矢は同時に真っ赤な煙を噴き出したのである。その直撃を受けたフレイはゲホゲホと咳き込みながら船の上に倒れる。やがて、その姿も船全体を覆う煙の向こうに見えなくなった。

2章－94　ももかじり

フレイの船は船速を上げた。しかし、煙を発生させる矢が刺さったままなので、いくら逃げても無意味である。やがて、魔術で操られた船は速度を落とし動かなくなった。

「みんなよくやったわ。ひとまず、私達の勝利よ！」

「ヒャッホー」

リーザが宣言すると、ジュールが奇声を上げる。続いて、子供達は一斉に歓声を上げた。狭い船の上で飛び上がったり、お互いに抱き合ったりしたので、船が大きく揺れる。サフィリアはマストに掴まって、なんとか体勢を保っている。呆れた表情と、微笑が交じり合った表情で子供達を見ていた。

「あいつらは、あのまま放っておいていいのか」

「直撃を受けたら、2、3日はまともに言葉も出ないわよ。まっすぐ歩けるようになる頃には、決闘が終わっているわね」

「だったら、後は正面にいる奴等だけだな」

一安心すると、シーグは戦いに決着をつけた道具の数々に興味がわいてきた。

「別々に火をつけたのに、何で同時に爆発したんだ？」

リーザは箱の中からよじり合わせた紐の束を取り出す。

「導火線を使ったからよ。硝石、硫黄、炭の粉をよじり合わせた布の中に混ぜて作るのね。そうすると、小さな爆発をパチパチって起こしながら布が燃えていくの。火が消えにくいし、一定の速さで火種が進むわ。だから、長さを調節したら、爆発のタイミングも自由自在っていうわけ」

リーザやジュールが一定の間隔で数を数えていた理由がシーグには分かった。

「最初に使ったのがカラシニコス機雷。板をはずせば、投げて使う普通の爆弾になるわ。今使った矢はカラシニコス煙幕弾頭ね。矢尻

に工夫がしてあって、突き刺さったら抜けにくくなっているのよ」
「この袋を紐でつなぎ合わせたやつは」
「ポーラーよ。投げつけて、相手に絡みつかせてから煙を噴き出すの。同じ発想で作ったのが、ネット（投網）ね。網を導火線にして、あちこちに小型の爆弾を仕込んでいるの。爆発も煙の噴出も小さいけど、先にネットで一網打尽にしているから効果は抜群よ」
「燃えていくなら、網が破れるんじゃないのか？」
「中に針金が入っているから、強度に問題はないはずよ」
「へえ、色々あるんだなー」
「アイデアも随時受付中。現在開発中の試作品は、親衛隊同士の乱闘騒ぎでも使われてたはずよ」
「……そりゃあ、通りがとんでもない事になったんじゃないか？」
「たぶんね。『樽爆弾』なんて、きっと大変な事になっていると思うわ」
リーザは楽しそうに笑う。それは悪戯をたくらむ子ども時代と同じ表情だった。シーグは西側からゆっくりとやってくる船群に目をやる。まだ、距離は離れていて船首に立つ人の顔もよく見えない。
「今度は風下になるから、爆弾を使うと巻き込まれるな」
「だから、クロスボウを主戦力にする予定よ」
「残りはプロテクション（防護）の一族なんだろ。さっきの威力で貫通できるのか？」
「ここを見て。クイン・クレイン（歯車式巻き上げ機）っていう仕掛けなの。このレバーをまわせば、子どもの力でも強く弦を巻き上げられるわけね。さっきので一段階。最大の三段階まで引き絞れば、完全武装の騎士鎧だって貫通できるわ」
「……子どもが射手なのにか？」
「だって、弦はもう引いてあるでしょ。狙いさえ正確なら、誰が使っても威力は変わらないわ」
シーグは背筋に寒いものが流れた。力のない子どもであっても、遠く離れた所から人を殺せる。長弓と違って射手に高い熟練度が求

められることもない。重量があり連射ができないのが欠点だが、この兵器が世の中に認められれば戦争が様変わりするに違いない。

それも、より陰惨で血みどろな方向へと。

「リー姉、これって」

「うん……だけど今は勝つことだけ考えましょう」

リーザは悲しげな表情。シーグは言うべき言葉を失って黙り込んだ。リーザはパチンと両手でほほを叩くと、勢いよく顔を上げた。

「さあ、次で最後の戦いよ。シーグを決闘場まで送り届けてあげましょう。ジュール、船をまっすぐアクリアエ・スリスの方向へ向けて」

「アイアイサー」

ジュールは元の位置に戻り帆を操作する。風を受けて船が大きく左へ、南へと進路をとる。

「ももかじり、いぱーい」

アイフェが右手を突き上げて元気よく叫ぶ。

「違うわ。桃かじりじゃなくて、面舵。それにこの場合は左側だから『取り舵いっぱい』よ」

サフィリアの説明に、頭をかきながら「エヘヘー」と笑うアイフェ。

「いーや、それ以前にこの船には舵なんてないんだぜ。先生」

ジュールの更なる指摘に、船は再び爆笑に包まれた。

2章－95　20を過ぎたら……

＊

「次はプロテクションの一族グラムファーレか」
「あーら、きちんと覚えていることもあるんですのね」
シーグの呟きに、シンシアは大げさに驚いている。
「一応は……な」
これから、決闘を行う相手の一族。さすがのシーグも忘れたくても忘れられない。
「ひょっとして、ガリウスの関係者が乗っているのか」
「あー、たぶんそうだな。兄ちゃんもちょっくら見てくれよ」
ジュールの『兄ちゃん』呼ばわりが馴れ馴れしく少し気になった。が、シーグは船から身を乗り出して前方を確認した。
「先頭の船に、白髪の人が乗ってるな」
「やっぱり、間違いないな。銀ババの1人だ」
「今度は銀の何なんだ」
「あいつは白ババのエリスだ。銀ババなのに、白いからな」
「……だけど、ババって言うほどの年には見えないぞ」
シーグは白い髪をなびかせる女性を再び見た白髪ゆえに年配という偏見があったが、よく見ればさっきのフレイよりもずっと若く見える。
「ガリウス卿の2つ下の妹ですもの。正確には今年で24歳ですわね」
「それなのに、ババ？」
シーグが聞き返すと、子供達の大半が不思議そうな表情を浮かべた。
「えー、20歳越えたらオバサンじゃないの？」
「だよねー」

子供達の無邪気な会話を聞いて、リーザは石像のようにピシリと固まった。そして、空ろな表情で「私……二年……おばさん……」と途切れ途切れに呟いている。

「あー、それで、えーと。何だっけ？」

シーグはとにかく話題を変えようと思った。

「銀色の髪で産まれたからですわ。つまり、そのディスペリアの一族の特徴と一致するんです」

シンシアは声を潜めたが、アイフェには筒抜けだった。泣くのかと心配したが、視線が合うとにっこりと微笑んだ。アイシャの名前を直接出なければ大丈夫なようだ。

「そのせいで、七家の中でも特別扱いを受けてきたんだよ。絶対にガリウスもそうだぜ。けったクソわりぃ」

ジュールは腹だたしげに言って、湖につばをはき捨てた。

「産まれたときの髪の色が、そんなに重要なのか？」

「肌の色や、目の色もですわ。それでだけで、一族の地位が決まります。血統にあるまじき容貌なら、追放されることもさえあるんですわ」

シンシアは、憎々しげに前方を睨みつけた。

「……そんな考えでよく交易都市に住んでいられるな」

人の交流のあるところ、血の交わりも当然起こるのだ。少なくともレイザークでは、肌の色や目の色で産まれながらの価値が左右されることはなかった。正直、馬鹿らしいとさえ思える。

「だから力を持つ魔術師の大半は封土に引っ込んで、出てこないんです。あんな奴等は――」

八つ当たり気味の口調をシンシアは急に止めた。寂しげな表情を浮かべるサフィリアに気づいたからだ。

「せ、先生の事を言っているんじゃありませんわ。誤解しないでくださいね」

大急ぎで窓拭きしているような仕草を両手でしながら、シンシアは早口でまくし立てた。サフィリアが黙りこみ、リーザが硬直した

まま。喋る者もいなくなり船の中はシーンとしてしまった。途端に、船の上は不安な空気が漂い始めた。戦いの訓練を受けていない、それも子どもなのだ。戦って勝つか、騒ぐか。そうしないと、士気を保つことが出来ないらしい。

「おい、リー姉。しっかりしろ」

声をかけても反応がない。つぶやく声も聞き取れないほど空ろになっている。一方、エリス達の船はどんどんと近づいてきていた。沈黙は子ども達を不安にさせている。

このままではラチがあかない。そう考えたシーグは湖に手を浸した。氷水に手を入れたような感触。シーグはそのまま、両手でリーザ顔を挟んだ。

「キャッ！」

リーザは文字通り飛び上がって我に返った。

「そろそろ、どうやって戦うか指示したほうがいいぞ」

「あ、うん。そうね。じゃあ、相手の船は一箇所に集まっているから、一定の距離を――」

「ちょっと待てよ、リー姉。あいつら、そんなに集まってないぞ」

「え？」

ジュールの指摘に、リーザはキョトンとした。ジュールの指摘どおりに、船群は中央を少し後退させ両翼が2艘ずつ突出していた。

「鶴翼の陣だな。包囲するときに使う陣構えだけど、魔術にもあるのか？」

「そんなはずは……」

リーザが不安げな声を出すと、子ども達はそわそわしてキョロキョロと周囲を見回し始めた。迫る船を見つめていたサフィリアが何かに気づいたのか、表情を更に険しくした。

「シーグ、彼女たちは昨日のマントを見につけていない？」

サフィリアに指摘されてエリスが金貨模様の赤マントを、他の4艘の船にもそれぞれ青マントを身につけているものがいることにシーグは気づいた。

「……昨日の悪趣味マントを着ているぞ。つまり、あの陣形か？」
「セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）よ」

2章－96　シャトランジのルール

「ですけど、杖の長さが陣形を使う時の距離なんですよね。離れすぎていますわ」

シンシアの問いにサフィリアが首を横に振る。

「ロング・レンジ・ギムレットの時、１５人を陣形の内部に入れていたでしょ。リーザ、あの船ってあなたの作品よね。木目と材質が積層構造の魔方陣になっているんでしょ？」

サフィリアの問いにリーザは青ざめたままうなずく。

「だったら、船が杖の代わりになるわね。５つのマント、船上の５人、そして５艘の魔方陣。すべてが三層の積層構造を持っているなら安定するわ。効果も範囲も格段に広がるわね」

「グラムファーレの陣形って、アンチ・コンタクト・シェル（不可触空間の陣）ですけど……」

「そうよ。結界陣の一族は、陣を敷くことで、外部から完全に独立した空間を作り出せるわ。完全防御、時間停止、重力反転、空間凍結。場所を一箇所に固定するなら、おおよそ出来ないことはない。包囲された地点で私たちには何も出来なくなる」

それを聞いて、リーザは何も言えずに、両手を硬く握り締めている。とにかく、予想外の上に絶望的な状況らしい。

「あー、何がなんだかさっぱり分からんのだが」

「魔術の素人は黙っていてください！」

のんびりと挙手して問うシーグに、シンシアはヒステリックに怒鳴りつけた。それに船の上にいる全員がビクリとする。不安で抱き合っている子どもいるし、涙を浮かべている子どももいる。

意味不明な言葉の応酬、中心人物のヒステリー。これほど、集団を惑わせるものはない。このままでは戦う前にバラバラになる。

「とにかく、戦い方を決めてくれ」

「気楽に言わないでください。そもそもあなたは」

更に声を張り上げるシンシアの肩にサフィリアはやさしく手を置いた。
「いいえ、シーグの言っていることが正しいわ」
「ですけど――」
「静かになさい」
押し殺した声と共に、強く肩を握り締められる。シンシアはビクリと体中を震わせて沈黙した。サフィリアが落ち着いた様子で船全体を見回すと、子ども達は落ち着いてサフィリアをまっすぐと見つめる。日ごろの授業の成果が出ているらしい。
だが、今にも破裂しそうな緊張が立ち込めている。それも、恐怖や狂乱が薄皮一枚で封じられているようなものだ。
「相手はどうやって攻めて来るんだ？」
「守りを万全に構えて接近してくるわ。そして、私達の船の周囲を囲んで結界陣を張るでしょう。１０歩４方の距離に三角を描いて配備されれば、打つ手はありません」
「なーるほど。こっちが『シャトランジ（王取り将棋）』だと思っていたら、実は『レギオンシージ（陣取り合戦）』だったってわけか」
どっちのゲームにも親しみがあるらしく、子ども達の大半が理解の表情を浮かべた。
「いい表現ね。とても分かりやすいわ」
賞賛の言葉とは裏腹に、サフィリアは皮肉な笑いを浮かべている。
「だったら、向こうが何のルールだろうが関係がない。こっちはこっちのルールで動くんだ」
シーグの明るい声に、子ども達は不思議そうに顔を上げた。
「だけど、レギオンシージ（陣取り合戦）は相手のコマを取っちゃいけないんだよ？」
アイフェが首をかしげて問う。
「だからそれを取って、陣取りを崩していいんだよ。向こうが必勝の一手を打つ前にな。何しろこっちは『シャトランジ（王取り将棋）

『だ。正面からやり合ったら、コマの取り放題だな。陣取りのコマを置いていくだけの『レギオンシージ（陣取り合戦）』に負ける気はしないぞ」

シーグが大仰にうなずきながら言うと、子ども達は楽しそうな表情を浮かべた。両方のルールが混在する混沌とした盤面を想像しているに違いない。

「というわけで、みんなはクロスボウと爆弾の準備をやってくれ。それでいいな、リー姉」

「ん？　あー、うん」

リーザははっと我に返って、たどたどしい言葉で言った。不安そうな表情を浮かべる子ども達に見られて、リーザは口を開く。

「えーっと、シーグさんはシャトランジの達人の一番弟子だったの。それも、ジェイナス先生のお孫さんで大陸で一番強かった人なのよ」

「すっげーー」

ジュールは羨望を込めた眼差しでシーグを見つめる。シーグにはその視線を痛く感じた。実際は、セリウスからシャトランジの才能はゼロだといわれたからだ。

「あー、ジュールは帆をしっかり操作してくれ。よし、リー姉、サフィリア先生、シンシアは船尾に来てくれ。細かい打ち合わせをするぞ」

「さあ、みんなは作業開始よ」

サフィリアがそう締めくくると、子ども達はワイワイ言いながら、それぞれの作業に没頭し始めた。その中をサフィリアとシンシアが船尾までやってくる。リーザは2人の座る場所を空けて、曳航している船に座るシーグと向かい合った。

「それで、シー坊。どういう作戦でいくの？」

「うん、ここだけの話だがな」

シーグは声をひそめて手招きをした。すると、シンシアとリーザが顔を近づけてくる。

「実は何も考えてないんだ」

「……」
「……」
リーザとシンシアは呆けた顔をして黙り込んだ。
「どうせ、そんな事だろうと思ったわ」
サフィリアだけが、納得した様子で大仰にため息をついた。

2章－97　一時しのぎ的、臨機応変

シンシアはぽかんとした後、一瞬で怒りの形相となった。
「あ、あな、あなたって人は――」
興奮のあまり声にならないシンシアの肩にサフィリアは再び手を置く。
「落ち着きなさい。それに、リーザも明るい表情をして。そうしないと、みんな気づくわ」
だったらあんたも、と言いかけてシーグは黙り込んだ。船に乗ってから、サフィリアはずっと眉間にしわが寄ったままだったからだ。
「……声も落とせ。聞かれるとみんな不安がる」
「それは大丈夫よ。私達の周囲一帯にだけ、消音の魔術をかけたの。会話の内容は外に漏れないわ」
「助かる。ついでに時間がほしい。なんとかなるか？」
「風を調整して船速を落とします」
「よし、急いで打ち合わせをするぞ」
「どう戦うか、ですのね？」
シーグとサフィリアの矢継ぎ早のやり取りを見て、シンシアは落ち着きを取り戻した。
「いや、その前に逃げるっていう選択肢はないのか」
シンシアが今度はいきなりやる気をなくしたような表情になった。
「無理ね。風上を取られている。岸に着くまでに追いつかれるわ」
「だったら戦うか、降伏するか。だな」
「降伏ってどういうつもりですの？」
シンシアは怒りで目が据わっている。返答しだいでは……と、言わんばかりに、プラチナの鎖をチャラチャラさせている。
「やつらの目的は俺だ。シージペリラスで、アイシャとガリウスに喧嘩を吹っかけたからな。俺を引き渡して後は交渉しだいだな。おい、シンシア、リー姉。顔色が悪いぞ」

「そ、そんなことできるわけありませんわ！」
血の気が引いたような顔色でシンシアは怒鳴る。
「だから、声はともかく表情だけは何とかしろよ」
あきれた声でシーグが言うと、アイフェが心配そうにこちらを見ている。それに気づいた何人かの子ども達が手を止めて、シーグのほうを注目した。仕方がないので、シーグは指で鼻を押し上げて、唇をめくり上げて歯をむき出しにする。すると、子ども達は腹を抱えて甲板に転げた。
「ぼーら〝。リ〝ーね〝え〝」
リーザは笑いをこらえながら、体を折り曲げた。だが、サフィリアは心底あきれたという様子でそっぽを向いている。
「ジン〝ジ〝ア〝ぢ〝ゃん〝も〝ニ〝ゴニ〝ゴじでー」
「……本っ気でブン殴りますわよ」
シンシアは歯を食いしばり拳を握り締め、押し殺した声を出す。
シーグは変な顔つきを元に戻した。
「ただの軽い冗談じゃないか」
「おかげ様で、とっても気分が重くなりましたわ」
「……あー、実際問題として戦いは引き際が大事だ。乱戦になれば、勝つか負けるか以外の選択肢はなくなるからな」
急に真面目ぶった状態に戻ったシーグを見て、リーザは更に噴き出しそうになったのをこらえている。
「結論から言います」
サフィリアは息を大きく吸い込んだ。
「エリスにあなたを渡せません。私は戦います。昨日、あなた自身が私に言った言葉。そのままお返します」
「うん、私にもシー坊を見捨てるなんて出来ないわ」
「もちろん、私も同じよ」
目尻をぬぐいながらリーザは言い、シンシアは鼻息も荒く言い放つ。
「あのな、あんたら全員が息まいていたら、みんなも乗せられてそ

の気になってしまうだろ。子どもらに選択や判断の余地なんて無くなるじゃないか」

「だけど、それも士気というんでしょ？」

サフィリアは詭弁じみた言葉を吐く、シーグは驚きで言葉が続かなかった。

「あなたは、負けるつもりで私たちを呼び寄せたんですか？　降伏が馬鹿らしく思える必勝の策があるなら、自信を持って戦いを勧められるでしょう」

珍しく強い口調で言うサフィリア。

「いい作戦でもあるのか」

「それを考えるんでしょ。今から」

「……なるほどね」

どこかで聞いたような言葉に、心当たりのある行き当たりばったりな態度。シーグは頭をかくしかなかった。

「自分で言っておいてなんだが、現実はシャトランジとは違う。パイダーク（歩兵）の一歩で、ルーク（城壁）を砕くなんていうわけにはいかないぞ」

「ですが、あなたは『鉄壁の結界』イッサ・ホコブズを破りました。魔術全般で言えることは、場所の固定、術者の集中が重要ということです。魔術師を自分の足で走らせることが出来れば、魔術の威力と安定は極端に減るということですね。これは魔術師の数が増え、術式が複雑になるほどその傾向が強くなります。心当たりがありますか？」

シャックリと絶壁が簡単に自爆した理由がシーグにはようやく分かった。

「なるほどね。だったら、奴等を引っ掻き回して、一箇所にとどめない事が有効なんだな」

「ですが、彼らの乗っている船はそれ自体が『動く魔方陣』となっています。一箇所にとどまらせないことは有効ですが、自分達の足で走らせる事で集中を乱す事は難しいですね」

「クロスボウを打ち込むのはどうだ？」
「彼らがプロテクションを展開させれば、石の壁よりも硬いでしょう。ただ、普通に撃つだけで貫通するのは困難ですね。それに、先ほどの戦闘の様子は彼らも観察していたはず。ならば、船の縁にもプロテクション展開するのは確実で、矢弾も有効とは思えません」
だったら、ほかに何がある？　シンシアの雷、サフィリアの風と水。機雷、ポーラー、爆弾。順番に考えていって、シーグは思いつくことがあった。

2章－98　発想の転換

「そうだ、ネットが使えるぞ。火をつけて、奴等の防護壁の上にかぶせるんだ。そうすれば、煙幕で視界を奪えるぞ。なおかつ防護魔術の終了と同時に網ごと煙幕が襲いかかる。問題はこっちが風下って事だが」

「ほかに比べて煙の量はずっと少ないから、１０歩以上離れていたらこっちには届かないわね。結構重いけど、大丈夫？」

「１０歩ぎりぎりで届きそうだな。いいぞ。昨日使った墨爆弾より、使い勝手がよさそうだ」

「２０歩以内の距離で敵がプロテクションを解いていれば、私の雷撃が使えますわ。あと、練習中はジュールのクロスボウも同じ距離で的に当たっていました。サフィリア先生の援護があれば、３０歩まではほぼ命中します」

「だけど、カラシニコス爆弾、機雷、矢弾は風上限定か。あんたの風もそうなんだよな」

シーグは腕を組みながら、サフィリアを見た。

「ええ、風下にいる場合は、ディスペル（解術）が有効でしょうね。相手が集中を乱したところに打ち込んで、プロテクションを解除します。届くだけなら距離の限界は２０歩。解術の可能性があるのが１０歩以内。確実性を求めるなら5歩から直接接触。近いほど強くなります」

「ですけど、防護壁の中からなら火球や雷撃は無理でもウーンズ（負傷）の魔術は使えます。不用意に１０歩以内に近づくのは危険ですわ」

サフィリアの言葉に、シンシアが付け足す。

「ウーンズしか、使えないのか？　だって昨日、ガイス達は防護壁の中からメティオスマッシャーを撃って来たぞ」

「あれはフィーンドの秘儀です。ロング・レンジ・ギムレットの時

にも、火球は船首から出ていたわ。威力の高い火球や雷撃は接触して使うと危険だからよ。昨日同じ状況で私は自分の雷撃を受けてしまったけど、フレイが無事だったのはそのためね」
「とにかく、向こうが貝よろしく防護壁の中に閉じこもっている限り打つ手がない。だから、防護壁を弱める、解除するために近づくしかないわけだ」
「だけど、近づけば結界陣の中に入ることになるわ。5艘のうち3艘に囲まれれば終わりよ」
魔術に精通した3人はそれぞれ、厳しい表情のまま黙り込んでしまった。
「ちょっと待て。3艘なのか？」
「ええ、昨日も説明した通りよ。3点以上なければ、図形は作れない、だから結界陣は張れないの」
自分の座っている場所を見て、シーグはニヤリと笑みを深くした。
「だったら二手に別れるってのはどうだ？」
シーグは自分の座っている船を叩いた。それを聞いて、サフィリアは「あっ」と小さく声を上げる。
「で、俺達は相手を3艘倒せばいいわけだ。そうすれば、三角形は作れない」
「青マントならね。結界陣をまとめるには必ず要になる赤マントが必要になるわ」
「だったら、赤マント1枚を破壊すればシャトランゼ（王取り）ってわけか。そのくせに決定打を打つときに、一番の弱点になる赤マントを前に押し出さなくちゃいけないんだ」
「相手は赤マントを中心に陣組みをするはずだし、鶴翼陣は突進を中央で受け止めて左右で包囲するための陣形。こっちが左右に展開すれば一艘ずつ攻撃できます」
「だったら、小型船の役割は近距離戦闘と突破、帆船はけん制ってのが適役かな？」
「そうね。小型船は敵の側面を突破して風上を目指す。帆船は大回

りに距離を保てばいいわ。足並みがそろえば風上からの挟み撃ちになります」
「やつ等がそれに気づいた場合は、小船を強襲してくるな」
シーグとサフィリアはお互いにうなずきあった。
「……ちょっと待ってよ。それじゃあ、小船に乗る人が一番危険な役割じゃない」
「同時に要でもあるわね。小船が撃沈されたら、すぐに降伏すべきね」
「だな」
サフィリアの言葉にシーグはうなずく。この戦法ならば、大型船が乱戦になる前に降伏しやすくなる。
「だったら、私も小船に乗り込みますわ」
「ダメよシンシア。あなたに魔術での操船はできないわ」
「でも！」
「人が乗るほどに船速はおそくなる。勝機を逃さないためにも、あなたは控えていて」
サフィリアの言葉に、シンシアはうめきながらもうなずいた。
「だったら決定ね。私とシーグが小船で出ます。リーザ、ネットと爆弾をいくつか小船に方に移して。すぐに、作戦を実行しましょう」

2章－99　守るべきは

＊

エリス・グラムファーレは焦りを感じていた。

封土から出た水盤の見者。道具作りしか能のないプルーフアゲインスト（積層の鑑定士）。魔術師でさえないシージペリラス（命取りの座）。足でまといの子どもまで引き連れ、最大の敵と見ていたナイト・ロード卿は同乗さえしていない。

こんな状況でありながら、よもやここまでしてやられるとは思いもしなかった。もしも、負けるようなことがあれば……確実にグラムファーレの一族から追放され、現在の地位を失うことになるだろう。

兄をリーガル・バックラーの地位に付け、弟をメティオスマッシャーに参加させる事が出来たのは、自分の銀色の髪が決定打となったからだ。反面、他の一族からの援助は同族からの不審をかった。ディスペリアからの保護と、一族との細いつながり。その二つのバランスで今の自分は成り立っている。

だがアイシャが族長となり、髪が銀色の輝きを失うごとにディスペリアの一族からの援助は少なっている。生まれた時に、光の川のようだと称えられた髪はもはや老人のような白髪となり果てた。

セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）をしくためのマントは5つとなった。それをアイシャはゴミでも投げ捨てるようにエリスに投げ与えたのだ。何も言わずに。

おそらく、今回が最後の機会。これで、失敗すればアイシャは無邪気な笑顔を浮かべながら自分を追い払うだろう。

今まで築き上げてきた地位を、失うわけにはゆかない。体が色を失うよう食事を制限した。水だけで生活したことも数え切れないほどある。そのために、倒れたことは一度や二度ではない。

「エリス様、奴等が動き出しました」
「よし、前進して結界陣の中に閉じ込める」
かすれる喉からエリスは無理やり声を出した。
「その、どちらをですか？」
報告者の戸惑う声を聞いて、エリスは目をそばめて前方を見た。
しかし、前方がまともに前も見えない。正午が近く太陽は高くなっているが、インボルグを過ぎるまでは南東から陽光が差し込む。
「どうなっている？」
「奴等は二手に分かれました。小船には2名、金色の髪の女に、黒髪で細身の男。水盤の見者とシージペリラスと思われます。帆船のほうには、残り全員が乗っています」
「ならば、小船を先に結界陣の中に閉じ込める。メティオスマッシャーを撃退した2人を野放しにはできない」
「了解しました」
湖の反射する陽光が目に刺さるようだ。エリスが苛立ちから髪を引っ張ると十数本が抵抗もなく簡単に抜けた。絶食の無理がたたって子どもを産めない体になった今、一族の中で女としての評価を得ることは出来ない。もはや、親衛隊の活躍だけが、アイシャ・ディスペリアに対する献身だけが自分を今の地位につなぎとめる自分の命綱となるからだ。

＊

シーグとサフィリアは小船に乗り込み左側へ進む。帆船は反対側に進路を取った。
「まったねー」
今から戦いだというのに、アイフェが元気に手を振っている。いや、戦闘だから生き生きしているのかもしれない。
シーグは手を振り替えしながら、こっちに向かってくる船群を確認した。

「なんだか、反応が鈍くないか？」
「こっちが南東にいて、太陽を背にしているからよ」
シーグが怪訝な表情をしていると、サフィリアは痛ましげな表情を浮かべて口を開いた。
「エリス・グラムファーレはね。日光をまともに受けたら、目がほとんど見えてなくなるの」
「病気なのか？」
「違うわ。今の容姿を維持するためよ。食事制限をして髪の色を落として、瞳孔を散大させる薬を目にさしている。そうすると、目が青色に近くなるけど、強い日差しを受けたら失明しかねないわ。ずっと風上に構えていたのも、湖に出たくなかったのね」
「……なんだってそこまで」
「ディスペリアの一族は銀色の髪と青色の瞳を神聖視しているからよ。エリスは子ども時代にね、アイフェそっくりの髪と瞳を持っていたらしいの。だから、特別な力が授かるかもしれないって事で、グラムファーレの一族から引き取られたのよ」
「具体的にどんな弱点がある？」
シーグの容赦のない質問に、サフィリアは辛そうに唇をかみ締めた。
「体は老人のように弱っているわ。特に喉と肺がね。他にも閃光、強風、振動、あらゆる衝撃が体に突き刺さるように痛むはず。攻撃がわずかでもかすったら、終わりね。だから、絶対の防御を心がけると思う。つまり、中央の船だけは攻撃が甘くなるはずよ」
「わかった。絶対に勝って、あの悪ガキどもを連れて行かなきゃな」
「ええ」
シーグが念を押しても、サフィリアの返事は消え入るようで杖を持つ手が震えていた。

2章－100　ちょっくら、行って来るわ

「今の俺は全く魔術が見えない。どうなっているんだ？」
「5隻すべてに球状の防御壁が個別に展開。1人がプロテクション。1人が操船、1人が待機。ウーンズのためと思われます」
「船速は互角なのか」
「瞬間的な加速度と旋回は上、だけど最高速度と持久力では負けるわ。純粋な船の重量と船を操る頭数の差よ」
「だったら、奇襲を仕掛けて短期決戦だ。一番突出した船に寄せてくれ」
シーグはネットを解きながらサフィリアに指示を出した。櫂も帆もない小船は異様な旋回と加速を見せて、鶴翼の陣の先端に向かった。
片翼の2艘のみを残し、ほかの船はシーグの側面と後方に回りこもうと距離を広げる。結界陣に取り込むという作戦を実行するつもりらしい。
「前方2艘、ブラストの系統を詠唱開始。ウーンズです」
「俺の陰に隠れろ」
「え？」
「俺にはウーンズに抵抗力があるんだろ。このまま10歩の距離を開けて突っ込め、ネットを仕掛けるぞ。ギリギリで避けてくれ」
「はい」
無茶な注文にもサフィリアはうなずいた。そして、指を鳴らしてネットの4箇所へ同時に点火した。そして、船べりに手をかけると「行け」と小さくつぶやく。すると、水面から船首が反り返るほどに加速する。敵船は突撃する勢いで距離を詰めてきた。船全体を覆うプロテクション（防護）の性能を信じきっているのだ。
シーグは船首に立って、ネットを前方に向かって勢いよく投げつけた。赤色の煙を吐き出すネットが何もない空中――結界から出た

シーグには見えなかった――球状にかぶさる。それを見て魔術師たちが驚きの表情を浮かべたのが見えた。

「ウーンズ来ます！」

体中に2度、凍えるような寒風を浴びた時の痛みが走る。毛穴を無理やりこじ開けられたような感触。しかし、それだけだ。

「コラプス・ラル・クルスト！」

痛みでわずかに身をよじったシーグの脇から、サフィリアが杖を槍のように突き出して叫んだ。

「ディスペル（解術）成功。手前の船のみ防御壁消失」

サフィリアの報告と同時に宙に浮いたネットが船の中に落ちた。一瞬後にシーグたちの船腹と敵の船首が嫌な音を立ててぶつかる。無理な旋回の勢いもあり、転覆するかと思えるほどに傾いたがなんとか体勢を立て直した。

一方、敵の船はネットが絡まりながら、赤色の煙を出している。逃げ場のない船上は絶叫と咳の満ち満ちる小島と化した。

「いったん距離を――」

「ちょっくら、行って来るわ」

サフィリアの言葉をさえぎり、シーグは唐突に言った。そして、全身をかがめて力をためると船の縁を蹴って湖上に飛び上がった。

「迎えはたのむぞ」

「ええーー！」

心底驚いた甲高い声が後ろから聞こえる。今、サフィリアはどんな顔をしているのだろうか？

相当気になったが、シーグは空中で大きく息を吸い込み、シャープネスを抜く。そして、大上段で両手持ちに構え、船首に集まった3人の頭上を飛び超え船尾に剣を一閃する。

ピッという紙が裂けたような音が鳴った。シーグは振り返りざまに剣を三閃する。魔術師たちは悲鳴と涙と咳が入り混じった、なんともいえない醜態を晒し、とにかく大混乱となっている。呪文を唱える以前の問題で、戦意などすでにない。

シーグは顔を背けながら、船にあるネットを一まとめにする。三箇所で切断され、半分ほどの大きさになったネットを、今度は隣の船に向かって投げつけたのだ。

そして船尾を、後ろ蹴りで思い切り蹴飛ばす。すると、パキッと薄板が割れる心地よい音が鳴った。シャープネスで入れた切れ込みに沿って、船尾から後部の４分の１が分離したのである。

「お邪魔しました」

礼節や好意とは無縁と思える邪悪な――悪戯に成功した子どものような――笑顔を浮かべるとシーグは再び全身をかがめて湖上に跳躍した。

申し合わせたようなタイミングで、サフィリアの乗る船が『後退』してくる。シーグはトンと小さな音を立てて船に着地すると、シャープスを鞘に収めた。

「ただいま。うえー、たまらないな。息を止めていたけど、目には相当染みるぞ。これは」

「あ、あな、あなたねぇ！」

「すまん。打ち合わせになかったが、隙だらけだったもんでな。だけど、一つ沈めたぞ」

首を振って目をこするシーグ。一方、サフィリアは肩で息をしながら青ざめている。

「へぇ。あんたも、慌てた時はちゃんと慌てるんだな」

「……」

座った目つきで激怒の視線を向けられ、シーグは頬をかきながら目をそらした。

「あー……おお！」

シーグはまるで助け舟が現れたような声を出した。敵の船群は包囲をあきらめ、すべるように『後退』してくる。帆や櫂で動く船にはありえない異様な動きは魔術特有の操船だ。

「引き返してくるぞ。距離をあけてく――」

バチン！　とシーグの耳元ギリギリを杖が通り過ぎ、床に叩きつ

けられる。次の瞬間、船が急発進したためにシーグは船尾に思い切り頭をぶつけた。
「最大加速、しっかり捕まってください」
「……手遅れなんですけど」
「船腹が破損。衝突による船全体のゆがみから船速は更に遅く、旋回も自由になりません」
淡々と報告をするサフィリア。何か言い返してやろうと、体勢を立て直すと足につめたい感触が触れた。
「水漏れもしているぞ。いきなり沈むって事はなさそうだけどな」
「1艘は沈没。残る4艘はプロテクションを維持。船速は更に加速、すぐに追いつかれるわね」
「くそ、一艘沈めたら救出に向かうと思ったんだがな」
船の上で咳き込み、あるいは湖に身を投げた仲間を見捨てて追跡を開始している。ネットをかぶった一艘も、ぶすぶすと赤い煙を上げながら船群の一番後ろに続いた。つまり、船群の風下で更に相当距離をあけている。
陣形は鶴翼からエリスの船を中心に三方を守る形となった。

2章－100　ちょっくら、行って来るわ（後書き）

とうとう、大台に乗ってしまいました。

長い、引っ張りすぎ、テンポ、章分けの分量、描写の程度、伏線の張り方、設定の多すぎ、さまざまな指摘を頂いたものも、それも改善できずにいます。

プロット段階で、ストーリーを確実に甘く見ていたと、反省しています。

ただ、急に変えてごちゃごちゃになるよりは、二章だけはいっそこのまま、と判断したため、このまま強行となっています。

次の話に移った時に、反省点を踏まえて書いていきたいと思います。

もうしばらく現在の状況のまま続くことをこの場を借りて、お詫びします。

2章－101　風の使い方

「風上を確保したら挟撃するか合流。当初の予定通りといえばそうだな」

「だけど、その前に追いつかれるわ。時間を稼がないとダメね」

シーグはこっちへと進路を変えた帆船を見ながら、水につかりそうになった爆弾一式を避難させた。そして、布の塊の一つを穴にねじ込む。浸水はマシになったが、徐々にしみこんでくるのは避けられない。

サフィリアは厳しい表情で後方を睨みつけている。眉をひそめて額に皺を寄せ、怖い目つきになるのは魔術師の特徴なのだろうか？

たとえば、ベクター、ガリウス、フレイ、エリス、シャックリに絶壁。みんなそうだった気がする。戦士の手にタコが出来るように、魔術師の目元は引きつってくるものだろうか。

例外はガイスとアイシャ。この2人はいろんな意味で例外だった。リー姉は昔と変わらずのんびりだが……。

「どうしたの？」

視線を感じたサフィリアが、表情を改めてシーグのほうを見た。

「いやなんでもない」

答えると、サフィリアは再びもとの表情に戻って後方を見る。顔つきを切り替えるということは、自分が難しい顔をしているという自覚があるのだろう。

船群は４０歩までに近づき、更に距離を詰めてきている。帆船が到着する前に追いつかれるのは疑いなさそうだ。

「なあ」

「何？」

「あんたの風をぶつけて、奴等の船を遅らせるのは無理か？」

「もうやってます。それでこの速度なのよ」

サフィリアはイライラとした声で怒鳴った。

「そうか。なら、仕方がないな」
シーグは呟いて腕を組む。そして、たいした意味はないと思いながらも、手のひらで染みこむ水すくった。しかし、外に放り出す前に指の間から零れ落ちてしまった。
「なあ」
「何よ！」
「いや……その」
苛立たしげな声に、思いついた冗談が場違いだと気づいたからだ。
「あまり話しかけないで。風向きと操船の両方を維持するのは大変なの」
サフィリアは苛立たしげに答えて、額をドレスの袖でぬぐった。流れた汗が輝きながら風に流されて、すごい勢いで後方に飛んでいった。
それを見て、シーグは脳裏に閃くものがあった。
「なあ」
「もう、いい加減にしてよ！　落ち着いて座ってられないの！」
サフィリアが怒鳴り声を上げると船が大きく傾く。そして、風がゴウと音を立ててシーグの後頭部を打った。昨日、杖で殴られた時とそっくりの痛みだった。
「あ……」
頭を抑えてうずくまったシーグを見て、サフィリアは小さく声を上げた。そして、後方の船群の速度が上がり更に距離が詰まる。
「いや、俺じゃなくてネットを風で飛ばせないか。矢の時みたいにさ」
サフィリアははっと息を呑んだ。そして、すばやく口を動かして2、3言つぶやく。
「無理か？」
「いいえ、大丈夫よ」
サフィリアがうなずいたのを見て、シーグは早速ネットを取り出した。

「向こうは速度を上げているし、風で軌道修正が出来る。射程は３０歩よ」
「そんなに届くのか？」
おりしも後方の船群は３０歩の距離まで迫っている。
「斜め上に投げて。軌道修正はこっちでするから、勢いが一番大切よ」
いい終えると同時にサフィリアはパチンと指を鳴らした。ネットの４隅が火花を散らす。シーグは方向だけ確認すると、全身のばねを生かしてネットを思い切り空めがけて放り投げた。揺れる船の上なので、体勢は崩れるに任せ素直に倒れる。
サフィリアは杖を大きく振り上げ、槍投げでもするように振り下ろした。ゴウとうなりを上げて風が通り過ぎると、ネットがバラバラと広がりながら更に上空に吹き上げられる。サフィリアは中指と人差し指を立て、ネットを指差す。そして、手を勢いよく振り下ろすとネットは
急下降して船群に襲い掛かり、空中――防護壁の上――で広がった。少し遅れて、赤い煙が立ち上り始める。
混乱のためか、船群は一挙に速度を落とした。
「次、行くぞ」
「でも、距離が」
「ネットの方を軽くする。だったらどうだ？」
返答を待たずシーグはシャープネスでネットを半分に切った。
「それなら、４０歩よ。やって」
サフィリアが指を鳴らすと、二箇所に火が灯る。シーグは今度は鉄球投げの要領で一回転してから、思い切り投げつけた。サフィリアが風を操る。距離は更に開いていたはずなのに、十分な余裕を持ったまま船群の真上にひらひらと落ちて、赤い煙を巻き上げていた。
残った半分のネットで三度目の準備をしていると、船群は速度を大きく落としてしまった。
「なんだ、もう終わりか」

次は二回転を試そうと思っていたのに、とシーグは残念に思った。
「今、プロテクション（防護）をディスペル（解術）されたら一巻の終わりだからよ。さあ、早くみんなと合流しましょう」
かくして、シーグとサフィリアは帆船に向かってまっしぐらに船を動かすことが出来たのである。

2章－102　見た、やった、出来た

＊

帆船に合流した時にシーグとサフィリアは、割れんばかりの歓声に出迎えられた。
「あんた、すげえな！」
ジュールが口を開くと同時に、子ども達がわっと押しかけてくる。
「待て、こっちに来るな」
シーグは両手を広げて、必死に静止する。小船はすでに、水浸しになっている。今、乗り込まれると間違いなく沈没するだろう。
「ネットがすっげー飛んだぞ」
「あれって先生の魔術なんでしょ」
「なあ、ちょっとすまないが……」
シーグの懇願など全く目に入らない様子で、子ども達は好き勝手に喋り続けている。
「シーグさん。なんで空を飛べるんだ。あれも魔術か？」
「バカだな、違うよ。あれは船の揺れを利用して……」
「うるっさいわね、いい加減に黙りなさい！」
シンシアが特大の怒鳴り声を上げると、子ども達は一瞬でシンとなった。
「まだ、戦いは終わってないのよ。浮かれるのは早すぎるわ。早くシーグさんに場所を空けなさい」
「助かったよ。シンシア」
シーグが感謝すると、シンシアはきょとんとした。その後、どういうわけか顔を赤くして肩を怒らせる。
「あ、あなたもあなたです。こういう場合は、怒鳴りつけてでも場を収めるべきでしょう。それになのに、あなたの方が気おされてどうするんですか！」

撒き散らされる怒気と怒声の弾幕にシーグは完全に気圧されていて。サフィリアのほうも目を白黒させていた。子ども達も、船の縁ギリギリまで逃げている。

「もう、何をボーっとしているんです。さっさとこっちに乗り移ってください。場所をふさがれて、サフィリア先生が困っているじゃないですか！」

「あ、ああ」

船尾に開いた空白地にシーグは座り込んだ。小船は今にも沈みそうだが、何かに使えるかもしれない。シーグは船尾から垂れるもやい綱を結びつけておいた。

「これから、どうするんだよ？」

ジュールは帆に手をかけながら聞く。

「いったん距離を空けよう」

「わかったわ」

サフィリアはうなずくと手を上に掲げた。すると、帆が大きく風を受けて船が速度を上げてゆく。

背後では、赤い煙は治まっていた。一度防護の魔術を解除して、ネットを湖に放り投げると再び追跡を開始した。やはり、船速では負けている。追いつかれるのは時間の問題だ。

「また、返り討ちにしてやろうぜ！」

ジュールが息巻くと、子ども達は一斉に歓声を上げた。その中心でサフィリアは厳しい表情で、船群の迫る東側を見ている。シーグもまた、同じ思いだった

敵の懐に飛び込み、不意をついて攻撃し、見事に突破して風上を確保した。それだけ相手を圧倒したというのに、一艘の船しか沈められなかった。こっちの小船も使い物にならないので、よく言って痛み分け。不意打ちのタネを失ったことを考えると、実際には競り負けたと言うべきだ。

昨日も今日も、魔術師との戦いでは相手の不意をうち、自爆を誘って撃退してきた。だが守りに専念し、距離を詰める事が必勝の構

えである相手にはそれが通じない。
　風上に位置しても、できる事は小技ばかりで決め手に欠けている。敵の急所を一撃し、戦闘不能につなげる方法がないのだ。おそらく、ガリウスと戦う時にも同じ事が起きるに違いない。
「やつらはかざかみにいて、そくどはわれわれがまさっている。こぶねはなく。もはや、こざいくはできん」
「え？」
　突然の声に振り返るとアイフェが横にいた。後方に目を凝らしながら、ぶつぶつと呟いている。
「やつらはけっていだをかく。さいあくでもこちらがきょりをおけばよいだけだ」
「何を言っているんだ？」
「私じゃないよ、エリスのおばちゃんがそう言っているの。えーっと。はんせんはかぜにたいしてななめにしかすすめぬ。われわれはちょくしんにしんろをとり、やつらにさきまわりをする。ぼうごへきをてんかいせよ。きょりをつめてほういするぞ。おーー」
「なんで分かるんだ」
　シーグの問いにアイフェは額に皺を寄せ、人差し指を立てる。そして偉そうに胸を張りながら、もったいぶった口調で答えた。
「ふっふっふ、毒で死んだの術なのだよ」
「……ひょっとして、読唇術の事か？」
「おお！　だいたい、そんな感じだったなー」
　アイフェはケラケラと笑いながら、頭をぽりぽりとかいた。
　シーグには唇の動きなど全く見えない。透明の防御壁越しに、エリスと隣にいる魔術師が話しているのが分かる程度だ。
「いつの間に覚えたんだ？」
「昨日、サフィリアがやってるのを見たもん。だから、出来るんだよ。えりすさま、めはいたみませんか。たいようはせにあるしんぱいにはおよばん。ありゃ、向き合ったからわかんなくなっちゃった」
「目……それに太陽？」

シーグは正面の空にある太陽と、陽光を受けて煌く湖面を見た。
それと同時に脳裏に閃くことがあった。
「そうか、防御壁を貫くものがあった！」
思わず大声で叫ぶと、船にいる全員の視線がシーグに集まった。
「あーほら、あれだあれを使うんだ。手に持つやつで、手がつくんだ。あー、なんだっけ？」
シーグは握った手を上下に動かしながらリーザに聞いた。

2章－103　手旗とガラガラとおっさん

「手旗かしら」
リーザが自信なさそうに言う。
「違う」
「ガラガラ！」
『手』さえついていないのにアイフェが自信満々に答えた。シーグが首を横に振ると、シンシアが目を輝かせパチンと手を打ち合わせた。
「分かりましたわ。物忘れの激しいおっさんですわね」
「は？」
「あーら、残念。違いましたか。それって、あなた御自身の事ですものね。別に真似なんかではなくて」
口元を押さえ、上品ぶった仕草でシンシアはプッと笑った。
「……ちょっと待てい」
さすがに腹に据えかねたシーグが低い声を出すと、サフィリアが口を開いた。
「シーグ、それじゃあ分からないわ。赤ん坊じゃないんだから、もっと言葉を使ってください」
両側から発せられる師弟の言い方に、シーグは口をパクパクさせた。一体、自分は何だっていうのだろうか。
「単語が思い出せないなら、使い方とか、特徴と色々とあるでしょう。思いつく事を言ってください」
「あ、そうか。ほら、昨日のあれ。俺の背中を見るときにさ。使ったろ」
「まさか、手鏡の事？」
「それだ！　喉まで出掛かっていたんだけどな」
シーグが口惜しさに頭をかくと、サフィリアは目をそらし、シンシアは大仰にため息をついた。

「これでは、むしろおじいさんですわね」
「シーグ、ジジーグ、オヤジーグー！」
アイフェは体を左右に揺らしながら大声で歌いだし、キャハハと笑った。子ども達もそれに釣られて一斉にアイフェにあわせて歌いだす。
助けを求めたがサフィリアは唇に指を当てたまま考え込んでいるし、助けを求めて視線をさまよわせると、頼みのリーザまで楽しそうに笑っていた。
孤独感に打ちひしがれていると、ぶつぶつと呟きながら、何度もうなずいていたサフィリアが顔を上げた。その後、ようやく騒ぎに気づいた様子で、「止めなさい」とひしゃりといって子ども達とリーザを黙らせる。
「とにかく、あなたがいいたいのは光の反射で目をくらませるという事ね」
「……お、おう」
「分かりました。鏡に関しては私が引き受けます」
「ちょっと待て、手鏡で光を反射させるなら近距離じゃなくちゃ意味がないだろ」
「それでは、ウーンズと刺し違える事になるわ。敵に近寄る危険にふさわしい戦果を上げられません。ですから、私に任せてください」
「というか、任せるしかないな。ほら、もう奴等はすぐそこまで迫っている。作戦会議はここまでだ」
敵の接近に船上には緊張と同様が満ちてゆく。
「ジュール、太陽と敵船とこの船が直線になるように位置を修正したら帆を固定、クロスボウを構えて。アイフェは引き続いて、エリスの口を読んでほしいの」
「おう、わかったぜ」
「よう、わかってるぜい」
ジュールはうなずき、アイフェはこぶしを振り上げる。
「私も雷撃の準備をしておきますね。それでいいですか？」

「だな。相手の防護を貫いたら、ありったけの攻撃で一挙に畳み掛ける」
シーグはシャープネスの柄に手をやった。
「じゃあ、他のみんなはいつもどおりね。サフィリア先生がうまくやってくれたら、一斉に攻撃開始よ」
「はい」
リーザの指示に子ども達が返事をする。具体的な指示によって、自分のやるべきことを心得た子ども達は一応に落ち着きを取り戻した。
「その時は私も一緒だよね？」
アイフェはナイフを抜いてシーグに微笑みかける。
「いや……」
言葉をにごらせると、アイフェはブスッとした。仲間はずれになった事に腹を立てる表情だ。
「分かった。だけど、俺の言う事を絶対に聞くんだぞ」
しぶしぶ答えると、アイフェは満面の笑顔でうなずいた。
「うん。えーっと。かいとうしたぞ。やがとんでくる。ぜったいにぼうごをとくな。そうすればやつらがなにをしてもむだだ」
船が方向を南向きに変えると、船尾に小船がガツンガツンと音を立てて衝突する。これでは、相手の船に飛び移る時に邪魔になりそうだ。もやい綱を解いて切り離そうと思ったが、その手をぴたりと止めた。
「なあ、リー姉。オリーブオイルってまだあるか？」
「ええと、ちょっと待ってね」
リーザは脇の辺りに手を入れてゴソゴソとしている。シーグは目のやり場に困って小船を見ていた。内側にまで水の入り込んでいる。油があっても、うまく火が点くか不明だ。
「ええと、2瓶あるわよ」
「よし、こっちに寄越してくれ」
「いいけど、ちゃんと支えてよ」

「支える？」
逸らしていた視線を戻すと、腕全体にズシリと重みがかかってシーグは体勢を崩した。手のひらに乗る小瓶だと思っていたら、一抱えもある巨大なボトルだったのである。
「……なんでこんなに持っているんだ」
「だって大安売りだったんだもん」
処分品をつかまされただけじゃないのだろうか。そもそも高い安いの問題じゃなくて、こんな大量のオイルを一体何に使うつもりだったのかを聞きたい。が、そんな暇もないので、シーグは瓶の中身を小船の中にぶちまけた。
「何をする気なの」
「船を燃やしてぶつける」
「それは名案だと思うけど。ええと、フィーちゃん大丈夫？」
「……風向きと鏡と解術。それだけじゃなくて、船の操作も一度にやれって言うのね」
押し殺したような声にシーグはビクリとした。
「あ、いや。無理だったら別に――」
「いいえ、よい策だと思います。やってみせますから合図をください」
慌てて取り消そうとすると、サフィリアは淡々とした口調となった。むちゃくちゃ怒っているな、とシーグは思った。

2章－104　重力反転（前書き）

『修正・更新などのお知らせ』に変更・修正などの記述を追加しました。

2章－104　重力反転

「さらにそくどをあげろ。りょうよくはさゆうにてんかい。ほういしてとりこめ。しょうめんはとっこうしてうごきをとめろ！」

並列する船群は、陣形を変えた。やや後方に控えるエリスの船。まっしぐらに直進してくるのが1艘。

「た、体当たりですの？」

「考える事は同じだな、今だシンシア！」

我に返ったシンシアがパチンと指を鳴らすと、小船は瞬く間に火を吹き上げる。シーグがシャープネスで、もやい綱を切ると同時に、サフィリアが杖で小船を指し示す。すると、水面を飛ぶようにして船が疾走を開始した。

放たれた火矢のように水面をかける船は、最後には船底が見えるほどに浮上していた。特攻してくる船は、操船する魔術師の心理を物語るように右に左にと揺れたが間に合わない。

爆発するような音を立てて粉みじんになったのは、燃え上がる小船だけであった。周囲に張り巡らされたプロクテション（防護）の魔術はその程度ではビクリともしなかったのである。しかし、船に張っていたオリーブ油が防護壁に飛び散って燃え上がる。

「ジュール、今よ。二連射！」

リーザの指示どおりに、ジュールは立て続けに2つのクロスボウから矢を打ち出した。プレートメイルも貫通する威力があっても、矢はいとも簡単に防護壁にはじかれてしまう。船同士の正面衝突でもビクともしなかった鉄壁の守りだ。その程度では貫けるはずがない。

しかし、どういうわけか。たっぷり一呼吸の時間を置いて、燃え上がっていた炎が船の中に落ちる。防護壁が解除されたのだ。船上の三人は、悲鳴を上げながら湖の中に飛び込んだ。

その間に、クロスボウに取り付いた子ども達はクインクレインを

巻き上げ、次の矢を込めると船の中に引っ込んでいった
残るは3艘。等間隔に3方向に散って、どんどんと距離を詰めてくる。もはや逃げ道はない。戦い、勝利するか、敗北するかだ。
「けっかいじんをてんかい。りばーす・ぐらびてぃー」
それを聞いたリーザが血の気の引いた表情になった。
「みんな、船にしっかりと捕まって。絶対に手を離したらダメよ」
一方、サフィリアはかざした手を下ろす。とたんに帆がしぼんで船の動きが遅くなる。
「おい。何が起こるんだ?」
「重力を逆転させて、私たちを船ごと空に投げ上げるつもりよ」
それを聞き、子ども達はヒッと息を飲み込んで緊張する。
「大丈夫よ。怖いかもしれないけど、何があってもみんなを守るから」
サフィリアがパチリと指を鳴らすと、４つの燭台に再び火が灯る。すると、シーグの目にも緑色に輝く防護壁が見えるようになった。
一方、サフィリアは服の隠しからガラス瓶を取り出した。中は鏡のように輝く銀色の液体で満たされている。
水銀だ。
「いまだ、きょりをつめろ!」
アイフェが言うと同時に、包囲が一斉に縮まってきた。
「水天の交わり。ウェスト・ヴァル・ナ・フェルナミア」
空中で渦を巻きながら、円状に形作られてゆく。瓶の中の水銀が流れ出し水の中に混じる。もはや、水ではなく溶けた金属が輝きを放っているように見えた。最後に両手を広げてゆくと、一抱えもある巨大な鏡が生まれたのである。シーグが今まで見たどんな鏡よりも美しく澄み切っていて、写りこんだ虚像がガラス越しにみえる風景といわれても納得しただろう。
最後に水鏡を胸に抱きしめると鏡が歪曲し、写った風景が押しつぶされたように小さくなった。
一方、エリス達の船は１０歩の距離まで詰めてきている。

「プロテクションの系統、アンチ・コンタクト・シェルの陣形より、リヴァース・グラビティー（重力反転）」

船の周囲でボコボコと湖面があわ立ち始め、散った水滴が空に向かって飛んでゆく。髪の毛が逆立ち始め、全身が空に向かって引っ張られてゆく感覚は強くなっていく一方だ。最終的には三角に囲まれた一帯すべてのものが上に向かって落下してゆくに違いない。

「ね、姉様。船が！」

シンシアがおびえた声をもらした。

「なるほどね、そういう作戦か」

「そうよ。これでいいの」

シーグとサフィリアの自信に満ちた声に、子ども達は目をつぶって船にしっかりとつかまっている。ジワジワと船が持ち上がっていくと、恐慌状態になった子ども達の悲鳴が大きくなる。

例外は、シンシアとジュール、アイフェの3人だ。シーグがうなずきかけるとシンシアとジュールは震えながらうなずいた。アイフェだけは小さく飛び跳ねながら、楽しそうに下を覗き込んでいる。

船が二階の高さまで上昇した瞬間。

「今よ、攻撃開始！」

サフィリアは手に持った鏡をかざした。南東からの日光を反射した鏡は強烈な光線を放つ。それを受けたエリスは体中を引きつらせ、顔を覆って船の上に倒れ伏した。

2章－105　波状攻撃

サフィリアは鏡を回して、もう1つの船に光を浴びせた。
眩しさに目がくらんだ3人は身をよじって、緑色の輝きが失せる。
防御壁が破れたのだ。同時に、浮き上がった船がガクンと大きく傾いた。
「アイフェ、行くぞ」
「おー」
空中に浮いた船から高低差を利用し、シーグとアイフェは船に向かって身を躍らせた。それに対して、慌てて杖を掲げる魔術士。
「させるか！」
シーグは一瞬でナイフを引き抜いて、空中から投げつける。肩口にナイフを受けた魔術師は大きく身をよじって湖の中に落ちた。
船に降り立つと間髪おかずシャープネスを一閃する。そして、次の魔術師の青マントを肩口から切断した。その後に、柄をみぞおちに食らわせて気絶させた。
「おりやぁー」
最後の1人にはアイフェのとび蹴りが顔面に命中した。アイフェは空中で1回転をして船に着地する。よろめく魔術師に駆け寄り、腹に頭突きを食らわせて湖に突き落とした。
その瞬間、サフィリアたちの乗る帆船は落下し、湖面が爆発したかと思えるほど波打つ。サフィリアは水鏡を捨て、杖を振り上げてエリスの船に狙いをつけている。
「ディスペル（解術）成功、防護壁消滅」
サフィリアの声は混乱の最中でもはっきりと聞こえてきた。シーグは船の船首に思い切り体重をかける。そして、沈み込んだ船首が再び反りあがる反動を利用して、十歩の距離を跳躍した。赤マントに狙いを定めていると、エリスが目を閉じたまま杖の石突を船に叩きつける。

「エンチャントの系統、浮遊の属性、円状に展開！」

危機を知らせるサフィリアの声は聞こえたが、意味が全く分からない。

「船が飛び上がるわ、ぶつかるー！」

悲鳴のようなリーザの声と同時に、エリスの船が一挙にせり上がってくる。シーグは慌てて身をひねる。同時に縁に手を伸ばしてつかまる事で、湖に落ちるのを防いだ。だが、甲板から身を乗り出した魔術師が、杖をシーグに向かって構えている。おりしも船は急降下をはじめた。

水面に叩きつけられるか、魔術の標的となるか。どちらもごめんだ。

ならば一か八か、シャープネスを口でくわえるとシーグは両手で船の縁に手をかけた。そして、逆上がりの要領で足を自分の頭上に振り上げる。下段から放たれた強烈な一撃は、魔術師の杖とアゴと同時に蹴り上げたのである。シーグはそのまま勢いを落とさずに船に上に身を乗り上げる。その瞬間、船が湖面に落ちた衝撃で体勢を崩す。

一方、肩ひざをつきながらもエリスを守り、呪文を唱えるもう1人の魔術士。杖の先端には拳大の火球。魔術は完成しつつあり、自爆させれば船上の全員が無事ではすまない。巻き添えでも飛び込もうと覚悟を決めた瞬間。風を切る音と共に、カンと魔術師の杖が吹き飛ばされていった。杖には一本の矢が刺さっている。杖に先端に灯った火球は、湖の中で爆発し周囲に雨のような水滴を降らせた。

その一瞬後に黄金色の円盤が飛んできて、エリスの背後でバチュンと音を立てて爆発する。巻き込まれた2人は体をこわばらせた後に倒れた。

振り返るとクロスボウを構えたジュールと、戻ってくる鎖を指に巻きつけているシンシアがいた。

残る船は1つ。しかし、振り返るとすでに決着はついていた。サフィリアが杖を向けて、プロテクション（防護）をディスペル（解

術）しており、子ども達が一斉にカラシニコス爆弾を投げつけたからだ。魔術師たちは大あわてで爆弾を湖に捨てていたが、とても間に合わない。そのうち、1つが赤い煙を吐き出すと魔術師は動けなくなった。それでも子ども達は、はしゃいだ笑い声と共に容赦なく爆弾を放り込み、船は赤い煙の中に消えた。

湖に蹴り落とされた魔術師は船べりに寄りかかっていて、アイフェに短剣を突きつけられている。そして、空いた手をシーグに向かって千切れんばかりに振っていた。

「触媒とマントを差し出しなさい。抵抗しなければ、危害は加えません」

サフィリアが毅然とした態度で言い放つと魔術師は、しぶしぶといった感じで武装解除を始めた。

「そんなの甘いですわ、こんな奴等フィーリアごと私が焼き尽くしてあげます」

「そうだぜ、串刺しにして湖に沈めてやればいいんだよ」

シンシアが鎖の先から火花を散らし、ジュールがクインクレインをカリカリと音を立てて巻き上げる。それを見た魔術師は青ざめて、テキパキと武装解除を始めたのである。

2章－106　執念の傷

シーグはぐったりとしたままのエリスに歩み寄った。わずかな船の振動に目を覚まし、エリスは眩しそうにシーグを見上げる。

肉の削げ落ちた体、憔悴しきった顔、髪はボサボサで爪はボロボロになっている。今にも死にそうな半病人を思わせ、とても２０代の女性とは思えない。

「もう勝負はついた。じっとしていろ」

警戒よりも痛ましさから出た言葉を無視して、エリスは杖を床に突きたてて体を起こす。そして、敵意をむき出しにしながら呪文を呟き始めた。仕方がないのでシーグはエリスの体を支える杖を蹴り飛ばす。

いとも簡単に体勢を崩し、倒れてくるエリスを支える。思った以上に軽く、子どもほどの体重しかない。髪や瞳の色だけで人をここまで追い詰める。英知の都で魔術師たちは一体何を考えているのだろう。

抑えようのない怒りを感じた瞬間、全身を貫く敵意にシーグの背筋があわ立った。エリスは痩せた体とは思えない怪力でシーグの左腕に爪を立てて、引っかいたのである。

敵意と共に魔術が飛び出してくる。そう思い込んでいたため、シーグは完全に不意をつかれたのだ。

「野郎、何しやがる！」

「止めろ」

叫び声と共に、クロスボウを構えたジュールをシーグは制止した。

「もう、気を失っている」

シーグはぐったりとなったエリスを船に上に横たえた。長袖の服を裂いたときに、爪が折れて４本もの指から血が流れている。本当に最後の力を使い果たしたのだろう。すでに敗北していたと気づいているはずなのに、手傷を負わせるために手段を選ばない。恐ろし

い執念だ。
二の腕から手の甲にかけて薄い裂傷。傷口にはわずかに血がにじんできている。
「シーグ、怪我をしたの？」
すぐ隣まで、船を寄せてきたサフィリアが心配そうに問いかけてくる。
「たいした事ないよ」
シーグは腕を掲げる。まっすぐと走る傷を見てサフィリアは顔色を変えた。
「これから、戦うのはクリティカル・ウーンズ（致命傷）なのよ」
「えーと。だから、なんだっけ？」
「新しい傷はウーンズの効果を上げる。特に広範囲の傷は格好の的になってしまうわ」
「やっぱりこの野郎、生かしちゃおけん！」
ジュールは再び、クロスボウの切っ先の狙いをつける。シーグがその前に立ちはだかると、ジュールは怒りもあらわにいきり立った。
「何でそんな野郎を庇うんだよ」
「もう、気を失っている」
「ですけど、私たちを容赦なく殺そうとしましたわ」
「それで、殺すのか？」
感情を交えない声で問い返すと、ジュールとシンシアは言葉に詰まった。
「後ろを見てみろ」
ジュールとシンシアが振り返ると、子ども達がおびえながら注目している。サフィリアもリーザも首を横に振っていた。
「勢いだけで人を殺そうなんて思うな。後で絶対に後悔するぞ」
ジュールはハッとした表情でシーグをまっすぐに見つめて、肩を落とした。
「ごめんなさい。私がうまくやらなかったから」
シンシアは唇をかみ締めて、うつむいてしまった。

「俺の傷なら大丈夫だ。リー姉と、サフィリア先生が良くしてくれる。そうだろ」
「ですけど……」
「大丈夫だ」
シーグは断言して、うつむいたシンシアの額を突っついた。
「……」
「ほれほれ」
それでも無言のままなので、シーグは更に2度額を人差し指で突く。
「わ、分かりましたわ」
シンシアは両手で顔を庇う。
「ほいほいほいほい」
シーグは今度は両手で4度立て続けに額を強く突いた。今度はシンシアが体勢を崩して尻餅をついた。更に追撃を加えようとすると、シンシアは腕を振り上げて殴りかかってくる。シーグは拳を受け止めて、更に額を押して追い返した。
「もう、いい加減にしてください！」
これ以上やると、本気で怒りそうなのでシーグは手を止めた。
「へーいへい。それからな、ジュール」
シーグが生真面目に言うと、ジュールも真剣な表情で見つめ返してくる。シンシアはふてくされていた。
「この人は女だ。野郎じゃないぞ」
ジュールはポカンとしている。
「……いや、言われなくても分かってるってそんな事」
「あ、そうか。だったらいいんだ」
シーグの緊張感のない返答に、ジュールは心底あきれた様子でクロスボウから手を離した。シーグはエリスの体に赤マントをかけて、帆船のほうに乗り移った。武装解除された魔術師が後は何とかするだろう。
「せっかくいい事言ったのに。今ので台無しだぞ」

「大体にして二言三言多いんですわ。というよりは、口を開けば失言ばかりですわね」
すかさず、シンシアがシーグをこき下ろす。
「俺にはどこかの誰かさんにみたいに、毒舌一閃で仕留めるなんて真似は出来ないからな」
「どういう意味ですの？」
「だから、どこかの誰かさんの話さ」
「あーら、お言葉ですわね！」
「別にあんたの事を言っているわけじゃない。それとも、思い当たる事でもあるのか？」
シンシアが腰に両手を当てて意気込むと、シーグはすっとぼけてあさっての方向を向いた。
「はーいはい。兄妹喧嘩はそこまで。仲がいいのは良く分かったから」
リーザが手を叩きながら割り込む。すると、シンシアは威嚇するネコのように肩を怒らせた。
「こんなのと私の何処が兄妹なんですか！」
「そうやって、すぐにムキになる、と、こ、ろ、よ」
リーザは歌うようにシンシアに言った。
「そう言われれば、似てるかも」
「お兄さん、いいなー」
「シンシアとシーグさんって、髪と目が同じ色なのね」
子ども達はシンシアとシーグと見比べて好き勝手に言っている。
「失礼な、私はこんなボサボサな鳥の巣みたいな頭じゃありません！」
「そーゆー言い方がすでに失礼だ」
「本当のことを言うのが失礼なら、謝罪くらいはして差し上げます。ごめんあそばせ」
「二人とも、いい加減にしなさい！」
再燃しそうな口げんかを、サフィリアの一喝が終わらせた。

2章－107　見えすぎちゃって困る

「シーグ、あなたは急いで傷の治療をしなくてはいけません。ジュール、船をアクリアエ・スリスへ向けて。リーザは治療用の包帯を用意できる？」
「ギリギリ足りそうね。何とかするわ」
「お願いね。アイフェはそこで待ってて船を寄せるから」
「いいよ、私がそっちに飛ぶよー」
サフィリアが杖を向けると、アイフェは船の端ぎりぎりまで寄り、助走をつけてから飛び上がった。
「待ちなさい、アイフェ！」
「おりやー」
制止の声も聞かず、愉快な掛け声と共にシーグに向かって飛んでくる。
ぎっしりと乗りこんでいる狭い船の中、避けるわけにもいかない。シーグは両手を広げて、落ちてくるアイフェを受け止めた。
「ナイスキャッチー。アハハー」
アイフェは無邪気に笑っているが、全員が唖然としていた。
「い、今、シーグさんと同じくらい飛びましたわよね？」
「……いーや、船の反り上がる勢いがついてなかった。俺以上に跳んでいたぞ」
アイフェは腕に捕まり、猿のようにスルスルと登ってシーグの肩の上で立ち上がってバランスを取る。そして、アクアリエ・スリスを指差して叫ぶ。
「南南西に進路を取れー」
「アイフェ、危ないから降りなさい」
「やだよー」
サフィリアの言う事も聞かず、アイフェはシーグの頭にしがみついた。いくら軽いアイフェとはいえ首が痛い。

「大丈夫、大丈夫」
「俺は大丈夫じゃない。それに前が見えないぞ」
「平気、平気」
アイフェは無責任に言い放った。何を言っても聞きそうにないので、シーグは床に腰を下ろした。視線が低くなって、アイフェが「あー」と残念な声を上げる。
「ジュール、風を起こすわ。帆を頼むわよ」
「アイアイサー」
笑い声交じりにジュールが返事をする。風を側面に受けて、三角帆はふくらみ船はゆっくりと進み始めた。後ろを振り返れば、カラシニコス爆弾に咳き込みながらも船を操り、エリスの船の周囲に集まり始めている。他の戦いのあった遥か後方でも、船が動き始めている。しかし、こちらに敵意のある様子はない。湖に落ちたものを助け、咳き込むものを介抱するだけで手一杯のようだ。
子ども達は後方にある船を指差して、はしゃぎながら戦いの功績を自慢しあっている。
「ほら、シー坊。怪我したところを見せて」
リーザは包帯を手に、シーグの腕を取って覗き込んだ。そして、深刻な表情で眉をひそめる。
「そんなに酷いのか？」
「うーん。とても酷い女難の相が出ていますねー」
「は？」
「冗談を言えば相手を怒らせ、優しくすれば更に相手の怒りをかう事になるでしょう。自分に正直になって、本音を言うのが仲直りへの早道。幸せを呼ぶ色は白よ」
「……何だ、そりゃ？」
「占いよ。女性関係にはとんでもない厄日と出ているわね」
リーザは深刻な声で締めくくった。意味が分かっているのか知らないが、背中に張り付いたアイフェがケラケラと笑っている。リーザは血止めをしてから、ゆっくりと包帯を巻いていった。

「で、真面目な話だけど。ウーンズは対象を絞れば、その分威力が増すの。たぶん、背中の傷の事は知っているはずだから、そこを集中攻撃するはず。腕の事は絶対にガリウスに絶対に気づかれないようにしてね。長袖を着て、手の甲を隠す手袋をつければなんとか隠せるわ」

「そんなものまであるのか？」

「たぶん、今頃は届いていると思うんだけどなー」

「届く？」

よく分からなかったが、シーグはとりあえず納得しておく事にした。それよりも、聞きたい事があったからだ。

「さっき、燃え上がっている船にクロスボウを打ち込んで、防御壁が解除したよな。ディスペル（解術）が使われてもいないのに。あれはなんでだ？」

「それは……」

いいかけたリーザは口を閉じて、シンシアを見た。傷口を見るシンシアは口を引き結んで、ひざの上で手を握り締めている。先ほどまでの元気は何処へ行ったのか、痛ましい表情でシーグの腕を見つめていた。

「詳しくはシンシアちゃんが説明してくれるわ。そうでしょ？」

「え、でも……」

目を伏せるシンシアを無視して、リーザは包帯を慎重に合わせてゆく、そして、複雑な文様の描かれた金属のピンで止めてゆく。

「前が見えなかったところに、強烈な攻撃が入ったからです。恐怖心から精神の集中が途切れて、魔術が終了したんです」

「燃えていた程度じゃないか。それなのに見えないのか？」

「あの時には結界の燭台が消えていたので、シーグさんには見えなかったけれども、魔術師の視点では違います。燃え上がる炎の色、点火時に発生したブラストの赤、プロテクションの緑が混じり合ってまともに前も見えなくなっていたんです。ましてや、速度も出ていて船が傾いていたので、最初から混乱していました。強力な魔術

を使えば使うほど、魔術師の視界はふさがれます」
そういえば、昨日の戦いでガイスがメティオ・スマッシャー（隕石の挟撃）を使った時、頭上に展開する水の塊をあっさりと見過ごしていた。ガイスの赤い防護壁の中からだと、更に視界が悪くなっていたに違いない。
「見えすぎても困る、ってわけか」
シーグがもらした言葉に、リーザはくすくすと笑った。
「なんか、そのいい方ってなんかエッチよ」
「見えすぎちゃって、こまーるぅー」
アイフェも面白がって歌いだした。しかし、シーグは考え込んだままじっと動かない。
「どうしたんですの？」
「なるほどね。おかげで吹っ切れたし、いい戦法が思い浮かんだ。それに比べれば、この傷なんて軽いものだ」
心配そうに聞いてくるシンシアに、シーグは力強くうなずいた。
「本当ですか？」
「もちろんだ。本音で話をしろってリー姉に言われたところだからな。おかげで、最初の出方もこれで決まった。シンシアのおかげだ」
まだ不安そうにしているシンシアの頭を、シーグはなでてやった。怒るかと思ったが、らしくもなくされるがままになっている。なので、シーグには思わず悪戯心が芽生えた。
「シンシアって意外に額が広いんだなー。道理で突っつきがいがあり――ぐえっ」
最後がうめき声になったのは、シンシアがシーグの腹を蹴り飛ばしたからだ。耳まで真っ赤にしながら、シンシアは子ども達をかき分けて船首に向けて、大またに歩いていった。
「動かないでよ。包帯がずれるでしょ」
「占いの通りに正直に言ったら、蹴飛ばされたじゃないか」
「それ以前の問題でしょ。占い師にケチをつける人ってたいていそうなのよね」

腹を押さえながらぼやくシーグに、リーザは冷ややかな声で答えた。
「お互いに楽しそうだけど、女の子で遊ぶと後が怖いわよ」
「……その言い方って、すごく誤解されそうだな」
「それよりも、ガリウスには勝てそう？」
「勝負はやってみるまで分からん」
リーザは最後の金具を固定して、心配そうにシーグを見上げた。
深刻な様子を察したのか、アイフェもシーグの背中から降りる。
「こういう時には、嘘でも勝って見せるって言うものよ」
「正直に言うのが幸運を引き寄せるんじゃないのか」
「空元気でも景気よくいかないと、不運を呼び寄せちゃうわ」
一体、どうしろというのだろうか。シーグにはわけがわからない。
「実際のところはどうなの？」
「ガリウスの奴に一杯食わせて、顔を引きつらせてやることは出来そうだ」
岸はどんどんと近づいてくると、アクリアエ・スリスから賑やかな喧騒が聞こえてくるようになってきた。

2章－107　見えすぎちゃって困る（後書き）

「見えすぎちゃって困るぅー」って、元ネタがありましたっけ？
どこかで聞いた記憶があるんですよね。知っている方、教えてください。気になって仕方がない（笑）

→

感想にてお返事いただきました。ＨＯＮさん、名無しさん、ありがとうございます。

2章－108　お祭り騒ぎ

＊

「お祭りか、これは」
船から上陸したシーグは開口一番に呟いた。
アクリアエ・スリスへ続く道の両脇にはぎっしりとテントが立ち並び、食べ物や飲み物を売り出していた。道の脇に少しでも場所があれば机や椅子が置かれている。ゴザを引いて場所を取っていたが、それさえもかなわない者は立ったままである。正午が近いので食事をしている者が多く、酒を飲んで騒いでいる者もいる。
とにかく、何処もかしこも人だらけで、移動すらままならない様子だ。
「こんなところにいても決闘は見えないだろう。何で集まっているんだ」
「もう場所は取れないから、真っ先に試合の結果を聞けるように詰めかけているのよ」
シーグの呟きに、リーザが答えた。
「じゃあ、せっかくここまで来たのに決闘を見れないのかよ」
ジュールがぼやくと、子ども達が「えー」と不満の声を上げる。
「それは大丈夫、お父さん達が場所取りをしてくれているはずよ」
「で、そのグレイルさんは何処にいるんだ」
「あ……れ？」
シーグが聞くと、リーザは頬に指を突き立てて首をかしげた。どうやらそこまで考えていなかったらしい。
「グレイルさんなら、頭3つは飛び出しているだろうけど。探すとなると面倒だな」
そもそも移動する事さえも困難だ。果たして、歩いて決闘場まで行けるかどうかも怪しい。シーグが困っていると。

「どおりぁーー」
　喧騒の中を貫いて大声が木霊した。続いて、大岩が粉砕するようなとてつもない轟音。何事かと人々が振り返る。すると、空を貫く塔の1つが隣の建物にもたれかかる様に傾いた。正体不明の怪異に、群衆は唖然として声を失っている。
「あら、お父さんだわ」
　ただ一人の例外。リーザは両手をパンと叩いてコロコロと笑っている。
「見つかってよかったわ。みんなも場所は分かったわね？」
　返事をするものはいない。さすがのシンシアとジュールも言葉を失っている。
「あの塔を目印にすれば迷わないわよ」
　というよりも、間違えようがないぞ。と、シーグは心の中でつぶやいた。
「じゃあ、ジュールとシンシアはみんなを連れてお父さんのところに行ってくれるかしら」
「なあなあ。途中、店を見て回ってもいいか？」
　真っ先に立ち直ったジュールが言う。それを聞いて、子ども達は全員が目を輝かせ始めた。
「いいけど、小さい子達の面倒を――」
「よっしゃー、行こうぜ！」
　リーザがいい終わる前に、ジュールは男の子達を引き連れて勝手に人ごみの中に飛び込んで姿を消してしまった。こういう場合は、小回りの利く子どものほうが素早い。
「全く、もう。やっぱり、サフィリア先生が言わないと、聞かないわね」
　リーザは片頬を膨らませて、大仰にぼやいた。
「女の子達はシンシアが連れて行ってね。ん、どうしたの、シンシア」
　リーザが声をかけても、シンシアはぼんやりとシーグを。正確に

はシーグの左腕を見ていた。
「シンシア？」
「あ、はい。わかりました」
シンシアは慌てて返事をすると、年長者と年少者の2人組みを作って手を離さないようにと言った。塔が見えなくても大人に聞けばいいことや、はぐれても塔の下で落ち合う事を確認している。だが、アイフェだけは別だった。シンシアが誘っても、サフィリアの背中に張り付いたまま首を横に振るだけだ。矢や魔術が飛び交う戦場よりも、お祭り騒ぎの方が恐ろしいようである。
「じゃあ、アイフェは私たちと一緒に行きましょう」
「とは言っても、果たして決闘場まで行き着けるのかな」
サフィリアとシーグは壁のように立ちふさがる人の群れを見てうんざりした。
「私たち王宮御用達の職人が使う勝手口があるの。王城の庭を経由してアクリアエ・スリスに入りましょう。そこなら、さすがに乱闘騒ぎは起きないわ」
「それは助かる」
シーグは傾いた塔を改めて見直して思いついた事があった。
「ちょっと待てよ、王都に出回っている噂によると、『シーグ』っていう奴はグレイルさんみたいな外見って事になっているんだよな？」
「ええ、そうよ」
リーザはにこやかにうなずく。
「ひょっとして、俺の変わりに襲われたんじゃないのか」
「たぶん、そうね」
「大丈夫なのか」
「いつも、俺は不死身だ！　って言ってたもん。平気よ」
リーザは無責任に言い放った。だが、シーグには襲われたグレイルさんはもちろん、襲ったほうも周囲にいた人や物も心配だった。
「しかし、見事に傾いちゃったわね。また、謝りにいかないといけ

ないなー」
「またって。一度や二度じゃないのか？」
「えっとね……」
リーザは斜め上を見上げながら、指折り数えてゆく。そのたびに、シンシアやサフィリア視線が冷たくなっていくのを感じて、途中で止めた。それでも、４回よりも多いのは疑いなかった。
「あっはっはー。と、とにかく行きましょう」
苦笑いをしながらリーザは湖岸沿いに続く細い道を指差して歩き出した。
「それでは私達も行きます」
シンシアはサフィリアにそういった。そして、シーグの顔をじっと見つめる。
「ん、どうした？」
「が、頑張ってください」
シンシアはそういい捨てると、慌てて頭を下げた。そして、後ろを向いて逃げるように人だかりの中に去っていった。
「何だろうな、一体」
「腕の傷の事、気にしているのよ」
シーグが頭をかきながらもらすと、サフィリアが答える。
「だけど、怪我したのは、油断した俺が悪いんだぞ」
「そこを生真面目に考えちゃうのがシンシアなの。責任感が強すぎるのよ」
誰かさんと同じだな、とシーグは心の中でだけ呟いた。

2章－109　ヒョッヒョッヒョ

＊

細い道は王城と湖の間を縫うようにして続いていた。
小さな門の前には衛兵がいて、シーグ達が近寄ってくるのを見て警戒する。貴族のお付きならともかく、10代の少年少女だけでやって来る場所ではないからだ。しかし、リーザが懐から取り出した印章を見せると途端に態度を変えて扉を開いた。
門の向こう側は別世界だった。石畳は磨り減った様子も、わずかなズレもなく舗装されている。道が交差する場所には、色タイルを使ったモザイク画があった。均等に区画整理された生垣では、草花がのつぼみが膨らみ始めている。美しい彫刻や石のアーチに噴水。湖を一望できるベンチ、対岸には学園区画の塔が見えていた。
ただし、いくら陸地に壁を立てて切り離しても、湖から船で進入するのは簡単そうだった。
「ここは散歩道になっているの。園遊会で知り合った男女が腕を組んで歩く場所なのよ」
少し先を進むリーザは後ろに手を組んで、クルリと振り返る。シーグとサフィリアが並んでいるのを少し離れてから見て、リーザは不満げに首をかしげた。
「フィーちゃんは相変わらず綺麗だけど、シー坊ってずいぶんと服がくたびれたわね」
学園地区ではガリウスと一悶着あって、ホワイトホース区画では親衛隊に襲われる。ウィングス通りではシャックリと絶壁。湖では合計45人の魔術師との戦いを繰り広げた。その結果、黒いズボンは埃にまみれ、泥が飛んでいる。止めとばかりにエリスに袖口を裂かれていて、包帯が見えていた。
「決闘の前に着替えましょう。服はちゃんと到着しているはずなの。

えっと、何処にいるのかな？」

「服」が「何処にいる」などと意味不明な事をいいながら、リーザは庭園のあちこちを見回している。しばらく、背伸びをして額に手を当てて目を細めていたが、「あっ、お婆ちゃん」と小さく叫んで庭園の隅にひっそりと立つ小屋に手を振った。小屋の入り口には老婆が座っている。

「おやおや、リーザ。やっと来たのかい」

老婆は優しい声で答えた。そして、立ち上がって笑顔がそのまま皺になったような顔を更にしわくちゃにしている。

自分のために力を尽くしてくれた。それになのに、考えてみればグレイルさんにも、お婆さんにも感謝の言葉1つ言っていない。名前は何だっただろうか。また忘れてしまったのかと、シーグは不安になった。しかし、よくよく思い出すと名前は聞いた覚えがない。

「あの、先ほどは失礼しました。ろくにお礼も言わないままで」

「おーやおや、初対面の男前に感謝されちまったよ」

シーグが頭を下げると、老婆はヒョッヒョッヒョと怪しげな笑い声を立てた。

「初対面？」

「そう、初対面だよ」

シーグの間の抜けた声。老婆は皺に埋まった目をパッチリと開き、何度も何度もうなずいている。助けを求めるようにリーザを見ると、こちらも口元を押さえて笑っていた。アイフェもいたずらっぽく笑っているし、サフィリアは少し困った表情を浮かべていた。

「ラーダ、男前がお呼びだよ」

ヒョッヒョッヒョと笑いながら、老婆は小屋の中に声をかけた。すると、扉を開けて全く同じ顔の老婆がもう1人出てきたのである。これには、さすがのシーグも驚きに顔を引きつらせた。

それが老婆たちには痛快であったらしく、そろってヒョッヒョッヒョ、ヒャッヒャッヒャと笑い声の合唱を始めた。顔だけでなく、背格好も服も、全く鏡に映したように同じ2人。違いと言えば笑い

声くらいだ。
「おお、おお。かわいそうに面食らっておるわ」
「若い者をからかうのは楽しいのー」
と、お互いにうなずきあい再び笑い始める。シーグが声を失って固まっていると、リーザは腹を抱えて笑いながら、バシバシとシーグの背中叩き始めた。
「お婆ちゃんたちは、双子の姉妹なのよ。安心して、初対面で分かったのはアイフェとフィーちゃんくらいよ。他は全員だまされたから」
リーザは心底面白いらしく、目に涙までためて笑っている。
「何で分かったんだ？」
「なんとなく、雰囲気が違ったから」
サフィリアに言われて、2人を見比べたがシーグにはさっぱり違いが分からない。
「匂いが全然違うんだよ」
アイフェが真面目ぶって言う。だが、犬じゃあるまいしそれで区別がつくはずがなかった。
「ちなみにお父さんはいつまで経っても見間違うし、私もたまに騙されるのよ」
笑い声を収めたリーザは肩で息をしながら答えた。肉親さえも騙されるのに、他人の自分が分かるはずがない。
「ホワイトホースで会ったのがラーダお婆ちゃん、細工師なの。そして、こっちがアイダお婆ちゃん裁縫師で王宮にも出入りしているのよ」
シーグは聞いたそばから忘れそうな気がして不安になった。
「ねえねえ、決闘用の服は小屋の中？」
「そうだよ。早く着替えておいで」
ラーダが場所を空けると、リーザはシーグの背中を押して小屋の中に押し込んだ。小屋の中はこぎれいな造りで、見るからに高価な家具がそろっていた。庭園にある小屋とはいえ、王城の中というの

は別世界なのだ。
　汚れ一つない大理石のテーブルにはワシの紋章が刻まれている。その上に真っ白なズボンと厚手のダブレット（胴着）が一そろい置かれていた。
「だけど、何で下着まであるんだ？」
「汗をかいたと思ったから準備したの。最高品質だから着心地がいいわよ。ちなみに、フィーちゃんと私も同じ素材なの」
「ちなみに、ワシらもな」
　外からヒョッヒョッヒョという笑い声が聞こえてきた。こういう笑い方をするのはアイダさん。ヒャッヒャッヒャがラーダさんだ。
と、シーグは今一度頭の中に名前を叩き込んでおいた。

2章－110　霧と風と

「真っ白だな」
着替え終わったシーグは鏡に映る自分を見てつぶやいた。純白の服に、銀色のボタンが付けられている。
厚手のダブレット（胴着）は刃物をさえぎる事ができそうだ。もっとも、アヴェンジャーの前ではどの程度の効果があるか分からない。手の甲までを隠す手袋と長袖は十分に傷を隠している。魔術を捉えるための結界であるリストバンドだけが純白の装束の中で唯一の黒だ。
鏡から距離を置き、腰だめに構えシャープネスを鞘から払い一閃する。あつらえた様にピッタリの服は、何処も窮屈なところがない。シャープネスを鞘に収めて、小屋の外に出るとリーザが少し顔をしかめて寄ってくる。
「髪がグシャグシャのままじゃない。ほら、少し屈んでよ」
リーザは上着から櫛を取り出した。そして、クシャクシャの髪を直し、服の乱れを甲斐甲斐しく正した。その後、少しはなれてシーグを頭から足先まで見つめて満足げにうなずいた。
「テーマは水上の炎、夜明け直前の白亜の太陽に照らされる霧をイメージしてみたのよ」
リーザは誇らしげに一同を振り返った。
「吹けば飛ぶし、夜明けと共に消えてなくなるって意味か？」
シーグの呟きに、リーザはガクリと肩を落として腰に両手を当てる。
「……いちいち嫌な方に取るのね。霧のように変幻自在、何ものにも捉える事ができない様に。そう思ってデザインしたのよ。フィーちゃん、どう思う」
「儀礼上は問題ないわね。陛下への謁見じゃないもの」
理路整然とした答えに、リーザは不満げにうめく。

「まあ、一応そういう意味もあるんだけど。一目見て、感想はどう」
「ええと……」
サフィリアにじっと見つめられシーグはドキリとした。碧色の瞳にまっすぐと見つめられたのは、睨まれたり、呆れたりした時ばかりだったからだ。
「いいと思うわ」
サフィリアの短い答えは、リーザを更に落胆させた。
「シーグ、格好いいよ。お話に出てくる騎士様みたい」
アイフェがニコニコしながら言うと、リーザは明るい顔でうなずいた。
「うん、アイフェちゃんが一番良く分かってくれているわね」
リーザにほめられて、アイフェはうれしそうに微笑む。しかし、その笑顔が急に凍りついて泣き顔になり、ガタガタと震え出した。突然の事に驚きながらもサフィリアは、表情を厳しくして顔を上げる。シーグもまた、頬をなでるような微風に総毛立つものを感じて風上を見た。
草木の絡みつくアーチの上に、アイシャ・ディスペリアが座っていたのである。
先ほどは蕾であったはずなのに、今では色とりどりの花が咲いていた。インボルグの前だというのに蝶まで飛んでいる。純白のドレスをまとい、靴は履かず素足のまま。銀色の髪を風になびかせ、無邪気な笑顔を浮かべてシーグを見つめていた。
「お待ちしておりました」
川のせせらぎや風の音を思わせる消え入りそうな声。それだと言うのにまるで耳元で囁かれたかのようによく聞こえる。
アイシャはアーチの上から身を躍らせ、音もなく着地した。そして、伸ばした指に蝶を止まらせたままゆっくりとシーグたちのほうに歩いて来る。
幻想的で美しいが現実にはありえない怪しい光景。シーグは警戒を緩めずに、アイフェを庇って前に出た。

「とても、お似合いですわ」
「それはどうも」
「私のドレスは風をイメージして作りました。湖を渡る一陣の風です」
いい終えると同時に庭に風が吹き込み、アイシャの髪とドレスの裾を大きくはためかせた。そして、花は一瞬で散り蝶は強風にさらわれて湖のほうへ流されていった。
「ほめては下さらないの？」
「朴念仁なもので」
シーグのぞんざいな返答など気にした様子もなく、アイシャは言葉を続ける。
「そういえば、王都に広がるこの湖の名もリーガル・バックラー（王の盾）と申します。あなたは湖を覆いつくし、惑わせる幻霧というわけですわね。さすがはプルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）。見事な見立てですわ」
アイシャが微笑みながら言っても、リーザは警戒の表情を浮かべたまま黙っている。
「そういえば、先ほどからの湖上での戦い。本当に見事でした」
「あなたの親衛隊が起こした不祥事ですよ」
サフィリアが強い口調で責めると、アイシャはしおらしくうつむいて、銀色の髪に指に絡ませている。
「本当に困ったものですわ。命令したわけでもないのに。私はおろかな女ですもの。見者のあなたほど世の中の事が見えていないのです」
悲しげに言った後、シーグを見つめてくすくすと笑いだす。
「ですけど、舞い込む困難を打ち払い、ようやくここにたどり着きました。途中、王都の名だたる魔術師を軒並み倒しましたわね。さすがは、シージペリラス（命取りの座）。時代の転機を担うものですわ」
「しっかり見えているようだな」

「王都で起こった事なら、何でも知っていますの」
先ほどの言動も何処へやら、アイシャはしれっとした表情で答えた。
「結構な事だ。それじゃあ失礼する」
シーグは一方的に話を打ち切って歩き出した。アイシャは楽しそうに笑って、後ろ向きに歩きながらシーグの背中にもたれようとする。相変わらず足音もなく、気配を微塵も感じさせない。気色悪さも手伝って、シーグは飛び上がるようにしてアイシャを避けた。
「逃げなくとも良いではありませんか」
「霧は風から逃げるものだからな」
「近ければ強く、遠ければ弱く。そういうではありませんか。私はあなたのそばにいたいのですよ」
「惑わして、騙すためにか？」
「恋や愛というのは、幻想から始まる事もありましてよ」
アイシャは小首をかしげてシーグを見上げる。引き込まれるような青色の瞳からシーグは目を離した。

2章－111　嘘をつく時には

「左腕の怪我は大丈夫ですか？」
それを聞いてリーザが顔色を変えた。
「ご安心ください。ガリウス卿に伝えるつもりはありませんわ」
口を開こうとしたリーザに先んじて、アイシャは早口で言った。
相手の考えを先読みし、行動や言動を封じる。安全な場所にいるつもりでも、気がつけば追い詰められているかもしれない。目の前にいるだけで不安になる。最も敵に回したくない相手だ。
そんなシーグの考えもお見通しと言いたげに、口元を押さえてたアイシャはシーグに微笑みかけている。
「そういう態度をとるところ、本当にベクターにそっくりですわ」
アイシャが何気なく言う。その瞬間、シーグとサフィリアが睨むような視線を向けたのを目だけキョロキョロと動かして見返す。
「すっかり嫌われてしまいましたね」
「ずいぶんとうれしそうじゃないか」
シーグが不機嫌に言うと、アイシャは微笑みながらクルクルと回りだした。そして、身軽に踊ってシーグの前に立ちふさがる。
「ところで、皆様のために特別席を用意しました。私もすぐ近くに席をとっています。みなさんで一緒に決闘を観戦しませんか？」
それを聞いて、サフィリアとリーザは警戒の表情を浮かべている。
「せっかくの申し出ですが――」
「いいんじゃないのか」
断ろうと口を開いたサフィリアを制して、シーグが答える。
「ちょ、ちょっとシー坊。正気なの？」
リーザが疑わしそうに聞いている。
「たぶんな。イリュージョン（幻覚）っていうのはかかった時に自覚があるのか？」
「かかっていないと思わせる事も、かかったと思わせる事もできま

すわ」
　シーグの問いにアイシャは丁寧に答えた。つまり何でもありという事だ。
「だったら、なおの事だな。監視するなら近い方がいい。離れた場所ならインチキを発見しても止めようがない。いつでも目を離さず、手や口の届く範囲にいないとな」
「あ……」
　リーザは口元を押さえて言葉を失い、サフィリアはハッとした表情を浮かべている。
「あらら、失敗しましたか。怒らせて御二人に私から離れてもらおうとしたんですけど」
　アイシャは口元を押さえて楽しそうに微笑んでいる。
「近づいたら近づいたで、何か考えていたんじゃないのか？」
「実はその通りです。ですけど、見者とプルーフ・アゲインストの2人がかりですもの。幻覚の回廊に閉じ込めようとか、眠りの園にご招待しようとか。そんな大掛かりな魔術は通用しませんし」
「じゃあ、会話を引き伸ばして遅刻させる。そこまでいかなくても、思わせぶりな事をいって俺達をイライラさせるっていうのは？」
　アイシャは肩をすくませて小さく舌を出した。
「適いませんね、降参です。もう私には何も出来ませんわ」
「だったら、そこをどいてくれ」
「いいえ、いいえ。せっかくですから決闘場までご案内させてください」
「リー姉、こっちであってるのか？」
　アイシャの申し出をシーグは無視した。
「え？　うん、城壁沿いに行けば扉が見つかるわ。アクリアエ・スリスに抜けるには一番の近道よ」
「じゃあ、行こうか」
　シーグ達が歩き出すと、アイシャは満面の笑顔を浮かべて後に続いた。そして、踊るように飛び跳ねて、シーグの横に並ぶ。すると、

リーザとサフィリアが道の脇に逃れた。
「あんたもしつこいな」
「魔術師でもないのに、色々な事をお見通しですね。どうして分かったのですか？」
嫌がるシーグを無視して、アイシャは勝手に話を進めた。
「嘘を見破るには、騙そうとする相手が何をしたいかを考える、だそうだ」
「嘘をつく時には、騙したい相手が何を望んでいるかを考える。ロディウス・アクテの言葉ですね」
アイシャは口元で両手を合わせて何度もうなずく。
「なるほど、相手が悪かったようです。水盤の見者にロディウスのお弟子。そんな御2人がお揃いなら、小細工も通用しません。かといって、大規模な魔術はお見通しでしょうし……難しいですわね」
「俺にかかわらなければ簡単だぞ」
アイシャは悩ましげに腕を組み、人差し指で唇を押さえている。
そして、うれしそうにシーグを上目使いに見る。
「今度は中間を取って、中細工としましょう。それでよろしいでしょ？」
「よろしくないので、何もしないでくれ」
何を言っても無駄だろうと思っていたので、シーグはいい加減な返事をして扉を開いた。そこは松明の続く薄暗い回廊となっていて、明るい太陽の光が漏れてくるゲートが見えた。その向こうから、人々のざわめく声が聞こえてくる。

2章－112　習慣の違い

＊

アクリアエ・スリスは即席の闘技場となっていた。
直線で５０歩ほどの円形。ジェイナスに伝えられたとおりの造りである。下座は立ち見で人がごった返している。だが、上座には壇が用意され、座席が並べられていた。その壇と壇の間からシーグたちは入ったのである。
壇に近づくほど身なりのいい人々が座っており、同時にシーグに対する苛立ちの視線も厳しくなる。その中にベクターもいた。
「私達の席はあそこですの」
と、アイシャはベクターのいる辺りを指差した。シーグとは対を成すような漆黒の装束を着ており、ベクターもこちらをじっと見ている。リーザの祖母とアイフェは段を上らず、近くにある座席の方に向かっている。そばにいたら怖がるから、そのほうがいいのだろう。アイシャに先導されながらも、視線はベクターから離さない。だが、相変わらずの無表情で何を考えているのか分からなかった。
「遅かったな、名無しのシーグ」
殺気立った声で大柄の男、ガリウスが立ちふさがった。
「来ないかと思ったぞ。臆病風に吹かれてな」
「俺も来れないんじゃないと心配したよ。風向きがままならなくてな」
シーグが適当に言い返すと、ガリウスは目つきを険しくする。剣を持つもの特有の鋭い目つき、魔術士特有の額の皺が浮かびあがる。
「時間ギリギリに来るとはいい度胸だな」
「道が混んでいたんだ」
そっけなく言うと、ガリウスは更に顔を赤くした。どうやら、自分の姉が湖に繰り出したことを知らないようだ。

「貴様は二言目には人を侮辱する男だな。剣を交える最中にまで暴言を吐く」
「どうしましたか？」
今にも掴みかかりそうなガリウスをアイシャの声が止めた。
「決闘の前に陛下のご挨拶をしましょう。ガリウス卿もご一緒にこちらへ」
アイシャに微笑みかけられて、ガリウスは表面上は怒りを抑えた。どうして、いちいちこんなに激怒するのだろうか。不思議に思ったシーグはすぐ後ろを歩いているサフィリアにささやいた。
「なあ、メティスでは決闘の前に罵り合いをしないのか？」
小声で囁くと、サフィリアは信じられないと言う表情を浮かべた。どうやらメティスでは違うらしい。そう言えば、昨日もベクターが簡単に食いついてきたし、シャックリと絶壁が過剰に反応していた。
「元々は隣国だったのに、ずいぶんと文化に違いがあるんだな」
「レイザークではわざわざ作法として教えるっていうの？」
「作法と言うより、習慣だな。自学自習が主だ。俺の場合は『侮辱語録百選』って言う本があってな。それで勉強したのが最初だな」
「なんて物を……。その存在自体が書物と記録に対する侮辱だわ」
「そうそう、それが一番初歩なんだよ。相手の言い回しをそっくり返すっていうのが」
それを聞いたリーザがプッと噴き出す。それを俺にくれたのは、あんただよ。と、シーグは心の中で呟いた。しかも、その本には付箋を剥がした跡があちこちにあって、手垢まみれだったのだ。
「詩人がレイザークの決闘の話をするのを聞いたけど、そんな言い合いの事は詠ってなかったわよ」
「そういえば、俺が聞いた歌でも、怒声とか咆哮とかに言いかえられていたっけ」
「つまり、歌の内容を変えていたって事でしょ。決闘前の侮辱がいつでもどこでも美徳とされているなら、わざわざ伏せる事はないわ」
「なるほど、それもそうだな」

シーグは納得すると、サフィリアは頭痛を抑えるように頭を押さえた。

「さ、御二人はこちらへ」

アイシャは優雅な仕草でシーグとガリウスを闘技場の中、王のいる壇の前に導く。そこで、リーザとサフィリアは足を止めた。

「じゃ、ちょっと行ってくるかな」

決闘前とは思えない軽い口調でシーグは言う。それに対して、サフィリアは一瞬表情を厳しくしたが、胸元を押さえて息を吐く。しばらく、唇をかみ締めて黙り込んでいた。

「とにかく、無事で帰ってきて。子ども達が心配しているから」

「ああ、わかった」

なんだが場違いな言葉だなと、思いながらもシーグはうなずいて闘技場へと歩いていった。

「もちろん、私もフィーちゃんもよ。シー坊、頑張れ！」

リーザが両手に口を当てて叫んだ。そして、サフィリアの背中に抱きついた後に何かをささやく。サフィリアは何かをいいかけたが、その声は観衆の声にかき消された。決闘者の姿を見て群衆がひときわ大きな歓声を上げたためである。

シーグは手を上げて、アイシャについて王の前まで歩いていった。下座からは決闘を見物する観客特有の熱狂的な感情。逆に上座からは冷ややかな視線が突き刺さる。死んだと知らされていたシージペリラス（命取りの座）が生きて、メティスに現れた。上座にはそれを歓迎している者は皆無のようだ。

庶民は占いを気にするが、権力者は予言や予兆を警戒する。それが恩恵を意味する場合であっても例外ではない。その富を横から奪うものがいないか見張らないといけないからだ。

ましてやシージペリラスは災厄の前兆である。この後に、もしも何か厄介ごとが起きるたびに自分のせいだとそしるものが現れるに違いない。だからこそ、手に入れなくてはならないものがある。

2章－113　ヴァンガード開始

「決闘者2名、ただいま参上しました」
シェンナ・グラドリカの正面に進み出たアイシャとガリウスは跪いて王に対する臣下の礼をとった。シーグも膝を落としながら、目の端で賢王と称えられ、同時に冥王カラナウスと恐れられる男を見た。
哲学者を思わせる風貌と、知的な鋭さをもつ瞳。どれも詩人の語る外見とは異なっていた。不吉な数字の下に生まれ、血を思わせる容貌を持ち、内乱と侵略に巻き込まれながらもそのすべてに勝利してきた。小柄であったとしても常勝の将軍、救国の英雄としての覇気が感じられるかと思ったが、それもない。
「勝者には恩賞を取らせる。よい勝負を期待しておるぞ」
略式の玉座の上からシェンナが低い声で言う。その時、背中があわ立つような感触が走りぬけた。
アイシャが笑顔で振り返り、闘技場の中心を指差した。シェンナとアイシャの視線を同時に感じると、正体の知れない不安が全身を支配する。根拠はないが、この2人は同類なのだろうとシーグは考えた。思いもつかない時に、最も効果的な場所から不意をつく。
「怖気ついたか」
いつまで経っても立ち上がらないシーグを見てガリウスが鼻で笑う。シーグは立ち上がってガリウスをじっと見つめた。
自分よりも頭1つは長身でがっしりとした体格。肩幅なら二周り、二の腕の太さなら倍は違う。戦士としてどちらが理想的であるかは素人目にも明らかだ。
集中するとガリウスの全身から魔術の色彩が溢れるのが見えた。全身を覆う緑色は、ジェイナスの言っていた決闘着の防護魔術だろう。左手首が特に明るいのは、ブレスレット状のフィーリア。リーガル・バックラーがそこにあるためだ。

競技ではなく実戦の殺し合いで勝負を制するのは怪物じみた腕力であり、敏捷さは二の次だ。敏捷さは手数で押し切り、攻撃に多彩さを与えて虚をつく事はできる。しかしそれだけでは致命傷を与え、相手を戦闘不能にするにはいたらない。相手は魔術の武具で身を固めた熟練の決闘者。攻撃力と防御力、技量と駆け引きが拮抗し、戦いが膠着した時には必ず腕力と体格の差が勝負を分ける。シーグはそのどれにおいてもガリウスよりも遥かに劣っている。

「シーグー」

その時、背後から甲高い声が聞こえた。声につられて振り向くと、まずは観客席の先頭で他よりも三つ分飛び出た頭が見えた。続いて、黄色の一団がこちらに向かって手を振っている。全員が黄色の手袋を身につけ、男の子はハチマキ、女の子は特大のリボンを身につけていた。

あの格好は、リーザの仕業に違いない。シーグは子ども達に向かってうなずきかけるとガリウスをまっすぐと見つめる。

並み大抵の不利ではないことは分かっていた。正直、恐ろしいとさえ思う。だが、恐怖は不安よりも単純でいい。いつ絡めとられるかを警戒する必要はない。恐怖に対しては背を向けて逃げるか、正面から立ち向かうかの2つだけだ。

そして、立ち向かうと決めてしまえば後は全力を尽くすより他にない。

「見たところ、魔術の品はリストバンドと剣だけのようだな。無手も同然の状態でヴァンガードに挑むとはいい度胸だ。負けたときの言い訳になるとでも思っているのか。それとも、あっさり殺されれば楽だとでも考えているのか？」

ガリウスは勝ち誇った様子で、シーグを挑発した。

メティスでは、決闘前の侮辱のやりあいは無いのではなかったか？　そう思って、闘技場の中心に立つ審判を見た。だが、審判は遠巻きにして、見て見ぬふりをしている。

決闘は血の気の多いもの同士がやるものだ。詩人の望むとおりに

礼儀正しくとはゆくまい。
「あんたこそ、兜をつけなくていいのか。今度は頭のてっぺんに赤色の噴水を作る羽目になるぞ」
シーグがやり返すと、ガリウスは鼻の穴を開いて表情を険しくする。
「油断に漬け込んだまぐれ当たりが二度も続くとは思うなよ」
「だったら、今度はあんたの傲慢に漬け込むとしよう。軽い頭ではなく、黒い腹の方にも気を配ることだな」
「余計なお世話だ。名無しのシーグ、レイザークの野蛮人め。女のような細腕で何が出来る」
ガリウスは唾を飛ばしながらやり返す。
「リーガル・バックラー卿ガリウス。鍋のフタ程度の盾で出来ることは知れているぞ。更にあんたの防御は継ぎ接ぎだらけで穴だらけだ」
ガリウスは怒りで顔を真っ赤にしている。わなわなと唇を震わせた後に大きく息を吸い込んだ。
「死にぞこないのシージペリラスが！」
間を持たせた割には捻りのない言葉、しかも後が続かない。名無し、女のような、野蛮人、そして死にぞこない。その程度がガリウスの目一杯の侮辱らしい。聞き飽きた言葉にシーグはむしろ興ざめしてしまった。
観客席から聞こえるざわめきは大きくなる一方だ。そのため、シーグたちの会話、というよりも侮辱合戦はかき消されている。遠目には怒り心頭して怒鳴るガリウスと、呆れた様子のシーグが対峙しているようにしか見えないのだ。
「剣を抜け、口先だけで勝負を決めるのがヴァンガードではないぞ」
先にけしかけたのはあんただろうが。そう心の中で呟きつつシーグは両手にナイフを握った。
「おもちゃのナイフで俺と戦うのか。腰の剣は飾りか」
「飾りにもならん盾には十分だ、赤毛のガリウス」

シーグは短剣で自分の頭をチョンとつついた。言い返す言葉を失ったガリウスを見て、審判は無言で進み出て両者を見る。片方は両手にナイフ、片方は無手のまま。決闘にはふさわしくない武装のまま向かい合う2人を見た。

「互いに開始線の上に立つように。降伏するか、場外に出れば敗北。以上だ」

審判は明瞭なルールを伝えると3歩下がり壇上を見上げた。王の横まで移動していたアイシャが壇のギリギリまで進み出る。その後ろでは、サフィリアとリーザが並んで座っていた。

アイシャが片手を上げると闘技場の喧騒は波が引くように治まってゆく。先ほどと打って変わってシンとなり、風のない澄んだ湖面のように静まり返った。

その時、申し合わせたように正午の鐘がアクリアエ・スリスに鳴り響く。同時にアイシャは手を勢い良く振り下ろした。

「ヴァンガード開始！」

審判の声と共に歓声が爆発して、打ち付けるような熱狂に闘技場が包まれた。

2章－113　ヴァンガード開始（後書き）

本当にお待たせしました。やっとこさ決闘開始です。
時間で言えば現実世界では三ヶ月くらい経ってますね。文字分量で言っても、文庫本で４００ページ分くらいになってしまうのでしょうか……正直冷や汗ものです。
ここまででも多大な反省がありますが、せっかくなので、目標と一緒に2章の最後でまとめてみます。

2章－１１４　戦闘距離１０歩

互いの距離は１０歩。先手必勝とばかりにシーグは1歩踏み出した。ガリウスが手を挙げると、透き通るように淡い緑色の光を放つ盾が空中に浮かび上がり顔を目掛けて直進してきた。シーグが首を捻って避けると、ガリウスは反対の手を掲げる。今度は右側面から腹を目掛けて緑の盾がぶつかって来る。それを横に飛んで避けると、同時にシーグはナイフを投げつけた。

だがガリウスが唇を吊り上げるだけで胸の前に緑の盾が出現し、ナイフをいとも簡単にはじき返した。ガリウスは勝ち誇った笑みでシーグを見ている。突如背後に発生する気配。シーグは慌てて身を屈めた。背後に飛んでいった緑の盾が頭を掠めて戻ってきたのだ。体勢を立て直した頃には、再び緑の盾が前から迫っている。後方に飛んでよけながらナイフを投げつける。しかし、ガリウスは首をひねるだけでかわした。

ガリウスが鼻で笑うと3枚のリーガル・バックラーは空気に溶けるように消えた。魔術の終了する一瞬の隙。しかし、その間にシーグは新たなナイフを構える事しかできなかった。ガリウスは一歩も動いていない。

『１０歩ならばリーガル・バックラーで君の動きを封じにかかる』

ジェイナスはそう言っていた。踏み込めば１０歩の間合いは後方にも広がる事になるのだ。

全身の力をこめて剣を振るには、重心を固定しなくてはならない。その瞬間だけは魔術を使う時と同様、無防備になるものだ。その時に、全方位から迫るリーガル・バックラーをかわした上で剣を振る。そんな事は、蛇のような体を持っていない限り不可能だ。

「どうした、シーグ。そう逃げていては戦いにならんぞ。剣を抜けばどうだ？」

「お先にどうぞ。俺は年長者を重んじる性格なんだよ、おっさん」

というよりも、抜いたところで却って自分が不利になるだけだ。熟練の戦士は盾を守りだけに使わない。積極的に敵にぶつけて武器を破壊したり、体勢を崩したりする事に使う。シャープネスの細さに付け入り、リーガル・バックラーに剣を集中攻撃されればどうなるか。わざわざ試す気にはなれない。

「観客が退屈している。今度はこっちから行くぞ」

「そりゃあ御親切に」

シーグの軽口に、ガリウスは笑みを深くした。一方的に獲物を追い詰めた時の盗賊の表情だ。これで、王国の騎士とは笑わせる。

ガリウスは前に敵がいるとも思えないほど無防備に足を踏み出した。胸を張ったまま、肩をいからせて堂々と歩く。ふざけた行為にシーグは腹が立ったが、迎え撃つより他にない。

だが、シーグには考えがあった。ガリウスの靴には緑の膜が見えないのだ。つまり、靴は魔術の品ではない。そして、ガリウスはほどんど足を動かしていない。そこに付け入る隙がある。

7歩の距離まで近づいた時、背後に発生する気配。シーグは横っ飛びに避けると同時に、自ら距離を詰めた。

更に一歩踏み出したガリウスの顔と胸を目掛けてシーグは同時にナイフを投げた。当然のように2枚のリーガル・バックラーに弾かれる。そして、シーグはガリウスの足元に矢のように突っ込んだ。攻撃のために頭上から叩きつけるように迫る3枚目のリーガル・バックラー。シーグは飛び込み前転の要領でかわして、ガリウスの側面に転がる。そして、立ち上がりざま地面に落ちたままだったナイフを拾い上げ、ガリウスの靴に向かって投げる。これは予想外であったらしく、ガリウスは慌てて足を上げて避ける。当然、一瞬だが片足立ちになって体制が崩れた。シーグはその瞬間を逃さず、地面に手をついた。そして、絶妙のタイミングで回し蹴り気味の足払いを放つ。昨日、サフィリアに受けた攻撃よりももっと低く、しかもつま先を立てて軸足のカカト上部に突き立てたのだ。

「ぐっ！」

しかし、鈍い音と共にうめき声を上げたのはシーグのほうだった。つま先に鋭い痛みが走る。ガリウスの靴は革張りのサバドン（鉄の靴）だったのだ。ガリウスの全身は文字通り鉄壁の守りだったのである。

ガリウスは崩れた体勢を何とか立て直し、怒りの形相で振り返る。シーグは背筋に冷たいものが流れて後方に飛び上がるようにして逃れた。しかし、ガリウスは大きく踏み出し、腕を一杯に伸ばしてシーグを追いかける。

つかむにはガリウスの踏み込みは3歩足りない。しかし、シーグの魔術の視覚はガリウスの左手に満ちる赤色の光を捉えた。

「ロッツ！」

短いが鋭いガリウスの声。同時にシーグは背中が張り裂けるように痛んだ。

ウーンズ（負傷）だ。

皮が引きつる程度ではない。体の中にナイフを突っ込まれてかき回されたような激痛。傷が開いて血が流れた様子はないが、全身に汗が浮かび体力がごっそりと奪われた。衝撃は湖で受けたものとは比べ物にならない。距離と術者の能力。その両方が違いすぎたせいだろう。

ウーンズの射程はフィーリアから、つまりガリウスの左手から3歩なのだ。踏み出し、手を伸ばせば実際の射程は5歩に延びる。

ウーンズでこの程度ならば、クリティカル・ウーンズ（致命傷）はどの程度の効果があるか想像もつかない。その上、射程距離はアヴェンジャー（報復者）の切っ先から5歩、踏み込みとブロードソードの刀身を考えれば実際の距離は8歩となる。

その時、蹴り上げた足の親指に生暖かい感触を感じた。ウーンズは負傷すれば、その効果は増すという。しかも、足の傷には包帯が巻かれておらず、無防備なままだ。

2章－115　風が背中を

ガリウスはリーガル・バックラーを終了させ、完全に体勢を立て直した。堂々たる体躯でシーグを見下ろしていた。

親指の感覚が麻痺していて、血の流れる生温かさしか感じない。これでは踏み込みも満足に行えない。隙をつき、絶好の攻めをした方が傷つく。そんな不公平さにシーグは歯を食いしばった。ここはいったん距離を取って体勢を――。

逃げ腰になった瞬間、シーグの背中を一陣の風が押した。今まで何度も傷を癒してくれたサフィリアの手が思い出される。

「勝機は恐怖の向こう側にだけあるの。恐怖に背を向ければ勝機が逃げていくわ」

治療するそばから、耳元で容赦のなくかけられるのは教訓ばかり。春一番の大風でも、もう少し穏やかだと思う。

「撤退するのは敵から勝機をかっさらった時だけよ」

怖気ついて逃げたとなれば背中に蹴りの１つも飛んでくるに違いない。シーグはナイフを抜いて構えた。ベルトにあるナイフを合わせても、残り４本。

それに、ここで怯んでは負傷した事を気づかれてしまう。それこそ絶望的だ。ガリウスを正面から見据えると全身に満ちていた焦りと恐怖が静まって、冷静な判断力がよみがえってきた。

距離が３歩なら、自分にとっても攻撃範囲なのだ。ガリウスが踏み込んでウーンズを使う時には、むき出しの手が近くにあるのだ。それに、まだ抜いてもいないアヴェンジャーを恐れてどうする。決闘の開始と同時に、アヴェンジャーを抜かせなかったのは自分の挑発が効果的であった証拠だというのに。一つずつ積み重ねた布石が完全に失われたわけではない。

シーグが前かがみの姿勢から一歩踏み出すと、ガリウスが反射的に後ずさった。岩のようにゴツイ顔つきは相変わらずだが、鋭い相

貌には戸惑いの色が見えた。その視線が一瞬だがチラリと壇上に向けられた。

「恥をかくのが怖いのか？」

図星であったらしくガリウスは大きく一歩後退した。その態度にザワリと観客席が沸いた事で、ガリウスの目が更に落ち着きなく揺れた。一方、観客席はシーンと静まり返っていた。そこから感じられるのは驚愕。学園地区でガリウスの頭上に手袋を落としたときと同じ反応だ。

どうやら、カカトにナイフを立てる以上にガリウスにはこたえているらしい。その事に気づいたシーグは脳裏に閃くものがあった。

「炎の魔術で来い、ガリウス」

シーグは闘技場の隅々まで届くように声高に叫んだ。

「俺のナイフが上か、あんたの魔術か上か。白黒つけようじゃないか」

それを聞いた魔術師のローブを着た男女数人が壇上で立ち上がった。

「決闘では挑まれた方が場所を選べるんだろ。ガリウス、何歩離れてやれば十分なんだ。言ってみろよ」

シーグの挑戦的な言葉で観客席全体――壇上も含めて――怒りの感情が爆発する。

「受けろ、ガリウス卿！」

「思い上がったシージペリラスを倒せ！」

「やつを殺せ、焼き尽くすんだ！」

困った審判は壇上を省みた。だが、ローブを着た男女がそろってアイシャの元に駆けつけた。遠目にも魔術師たちが憤っているのが分かる。アイシャが大きくうなずき、右手を掲げると審判が寄って来た。

「シーグ、ガリウス卿。許可が下りたぞ。魔術師の決闘方式なら、互いの距離は１５歩となるが……」

「ガリウスに選ばせてやれよ。俺は何歩でも構わないんだぞ」

シーグがぞんざいに言うと、ガリウスは屈辱に顔をゆがめた。
「１５歩だ！」
「遠慮するなよ。負けたときの言い訳にもならないぞ」
「後悔させてやるぞ、小僧！　これがヴァンガード（最前線）だということを忘れるな」
そうはき捨てると、ガリウスは背中を向けて去ってゆく。その無防備さにシーグは呆れた。
ふざけた喜劇だ。ヴァンガード（最前線）が聞いて笑わせる。観客の感情に踊らされて、主催者にいちいち指示を仰ぎ、戦いを中断させる。どこが完全決着の決闘方式なのだ。
死臭の溢れる夜闇の中、血の流れる細い川に横たわり、殺してくれと懇願する負傷者の群れ。それこそが戦場の最前線。死神こそが最も慈悲深い神となる地獄なのだ。
勇気と狂気を奮い起こし、民兵や傭兵が開いた血路。そのような呪われた場所に、騎士は従者と詩人を引き連れ馬に乗ったまま悠々と赴く。ハイエナのように戦果だけを狩り取るために赴くのだ。
戦場を選び、時間を指定し、武装を万端に整えて挑む。ラッパの音と共に突撃し、落馬すれば人質となるが身代金で解放される。競技のようにあつらえられた戦場を最前線と呼ぶのが大陸の騎士の流儀のようだ。そんな状況で得られた騎士の栄光や誇り、儀礼や格式などはお笑い種に過ぎない。
ふと、顔を上げると子ども達と目が合った。全方向から浴びせられる敵意と侮蔑の嵐。子ども達の声は全く聞こえないが、黄色の一団がシンシアとジュールを筆頭に、一生懸命に両手を振っている。
シーグは軽く会釈して微笑みかけた。表情を改めた時、自分がずいぶんと難しい表情を浮かべている事に気づいた。
『１５歩ならば、ブラスト（噴出）の系統で火球を撃つ。２０歩ならば雷撃を撃つか、別の魔術を使うか、更に距離を開ける。２５歩ならば、エンハンス（向上）で魔力を増強して更に強力な魔術を撃つ準備を整える』

15歩でさえ、ガリウスに威力の大きな魔術を使わせる事になる。しかし、それこそが望むところだ。小技と小細工だけではガリウスの鉄壁の守りを突破できなかった。相手に大技を使わせ、その足元をすくう事でしか勝機はない。

2章－116　心を攻める影の刃

ガリウスに向き直った頃には、親指の感覚が戻っていた。痛みはあるが骨が折れても、爪が割れてもいない。踏み込みの速度は変わらないが、血が止まったわけではない。すでに薄手の革靴からわずかに血が滲み出している。これに気づかれれば、その地点で負けだ。ガリウスの放つウーンズの一撃で親指がはじけ飛ぶだろう。剣は片手でも振れるが、足は両方揃っていないと踏ん張りが利かない。

１５歩の距離を置いて、シーグとガリウスは向かい合った。審判が両者を見比べて再び手を振り下ろす。闘技場に満ちる歓声が耳が痛くなるほど大きくなった。

同時にガリウスは手を突き出して何かを呟いた。すると、赤い光に包まれた火の玉が左手に現れる。なるほど、魔術の視線を通してみるとどこから見ても危険な爆発物だ。

ブラスト（噴出）の系統。炎の属性、効果範囲は環状。と、言ったところか。

しかし、それでは十分ではない。シーグはゆっくりと5歩下がった。ガリウスがまずはあっけに取られ、次に怒りで顔を真っ赤にする。右手を炎にかざし再び呪文を唱え始めた。今度は紫色――シーグは一瞬だが濃い青色に見間違えそうになった――の光が火球に吸い込まれてゆく。すると、火球はどんどんと大きくなり、一抱えほどの大きさになった。

エンハンス（向上）の系統、対象は炎の魔術だ。なるほど、確かに魔術の流れが手に取るようにわかる。魔術士同士に不意打ちは存在しないというのが良く分かった。

炎にまとわり光は、赤と紫の混じったグロテスクな――シーグには何色だかよく分からない――色に変わっている。気色の悪い色越しなので、ガリウスの顔色が良く分からない。血の気が頭に上る一方だから、益々赤くなっているのだろう。

準備万端整ったと見て、シーグは5歩進んで元の位置に戻った。殺気丸出しのガリウスを見る限り、十分にシーグの丸焼きを作る威力があるに違いない。

ベルトにもうナイフが残っていない。これが最後の小細工となる。

シーグは大またに2歩踏み出して、大上段の構えから両手のナイフを一度に投げつけた。狙いは顔と火球の燃えあがる左手。ガリウスはエンハンスの呪文を中断せずに、飛んでくる2本のナイフを睨みつけた。その瞬間、2つのリーガル・バックラーがナイフの軌道に出現する。ガリウスは火球ごと左手を大きく突き出した。炎と魔術の色が風に打たれたかのように大きく揺らめく。

一方、シーグは更に大またに1歩踏み出した。同時に、振り下ろした両腕を今度は逆に頭上へ振り上げる。シーグの両手から続けざまに2本の光がほとばしったのを見て、ガリウスは両目を飛び出さんばかりに見開いた。

シーグは手首の袖にナイフを隠し持っていたのだ。そして、手品師のような器用さで、4本のナイフをほとんど同時に投げつけたのである。それも、エンハンスを終了し、ブラストを放とうとしていたガリウスにとっては最悪のタイミングで。

ガリウスは歯を食いしばり、更にリーガル・バックラーを発生させた。3種の魔術の同時発動に、ガリウスは頭が引きつるように痛んだ。しかし、リーガル・バックラーは最大で3枚。最後の1本は防ぎようがない。

シーグのナイフは3本までが弾かれた。しかし、最後の1本がガリウスの左胸、心臓目掛けて真一文字に向かう。だが、ナイフはガリウスの服に簡単に弾き飛ばされてしまったのだ。グラムファーレの技術の粋を凝らした装甲服がその程度の攻撃を受け付けるわけがない。

ナイフが弾かれる、キィーンという音。それはガリウス自身にも届いたか分からないほど小さかった。しかし、闘技場にいた誰もがその乾いた音を耳にしたのである。リーガル・バックラーの守りが

3度破られたという驚きと共に。
手に持った火球は一回り小さくなり、周囲に巻きついていた赤と紫の光が空中に溶けてゆく。散り散りになった術者の心を物語っていた。
ガリウスは苦悶の表情を浮かべていたが、熟練の決闘者としての経験が砕けそうな正気を維持させた。シーグが更にベルトに手をやって、空に向けて投げつけている。ガリウスは恐怖のあまり首を動かし、目をギョロつかせて空を見上げた。そして、抜けるような青空の中、頭上目掛けて落ちてくる銀色の光を探した。
しかし、そんなものが見つかるはずがない。空を飛ぶナイフなど、ガリウスの恐怖の中にしか存在しないからだ。
シーグは地面に伏すように低い体勢のまま、神速の勢いで殺到する。ガリウスが再びシーグに視線を移した時には両者の距離はすでに7歩。ガリウスは額に汗を浮かべながら、シーグ目掛けて火球を投げつける。
しかし、シーグ目掛けて放たれた火球は、それ故にシーグの後方で炸裂する事になった。それほどにシーグの突進は素早かったのである。
爆風に背中を押されたシーグは、更に勢いを増しながらシャープネスの柄に手をかける。そして、逃げようと後ずさりするガリウスの膝に、体ごと飛び込むようにして剣を叩きつけた。

2章－117　色彩のひずみ

爆風でうけた衝撃と前のめりの勢いを叩きつけ、シーグは体勢をたて直す。そして、間断おかずにシャープネスを構え直し、下段から腰ダメにガリウスの横っ腹に切りつけた。決定打となるはずの連撃は、服に傷1つもつけられなかった。刀身が放つ黄色の光が、緑の光に完全に取り込まれている。シャープネスのエンチャント（付与）よりも、ガリウスの服にかけられたプロテクション（防護）の魔術が勝っているためなのだ。

鋼鉄のプレートメイル程度の強度ではない。ただの服に見えて、至高の金属であるミスリルに匹敵するのではないかとシーグは思った。

両者の距離はもはや近接。そして、ガリウスの左手に赤色の光が灯る。全身に恐怖が走りぬけたが、シーグは両手でシャープネスの柄を持つと、ガリウスのむき出しの手を目掛けて突きを放った。

ぶつかり合うと見えた剣と手。しかし、ガリウスは魔術を中断して腕を曲げた。シャープネスは、手の甲から肘にかけての切っ先を滑らせる。

今度はシャープネス越しに確かな手ごたえを感じた。なんと、ガリウスの左袖が裂けている。そして、ガリウスの左腕から緑色の光が完全に消えている。もし、フィーリア（感応体）のブレスレットに切っ先を弾かれていなければな、ざっくりと腕を切っていたはずだ。

ガリウスは左手で印を結び気合の声を上げる。すると、空中に存在していた緑の盾はすべて消失した。

一体何が起こったのか。威力で遥かに劣った一撃がなぜ装甲服を破ったのか？

シーグは忙しく頭を動かした。脳裏で思考を進めつつも、研ぎ澄まされた戦士の勘は独りでに戦闘を続けている。魔術終了後の硬直で、動きが鈍るガリウスにシーグは執拗に取りすがる。そして全身

の体重を乗せたシャープネスで、胴全体に押し付けるように切り付ける。

黄色の光が、再び緑色の光に取り込まれて消えてゆく。その光景の中でシーグは、緑色の光にムラがあることに気づいた。シーグはわざと刀身を滑らせガリウスの右肩口、色の薄くなっている部分に軽く剣を滑らせる。

勢いも重さはなく、撫でるような攻撃。にもかかわらず、装甲服の肩口がバラリとほつれてしまった。緑色の光が薄まった程度だが、有効な打撃であったのは確かだ。

弱点は服の縫い目だ。服のつなぎ目、糸でつなげた部分ほど色が薄い。連結部分の装甲が薄くなる鎧と同じ、いやそれよりも小さい部位だが、箇所は多い。切れば布地の表面で歯がすべる。だから、そこだけに集中する突きを当てればいいのだ。

ガリウスは顔色を変えてシーグとの間にリーガル・バックラーを展開する。しかし、シーグは体勢を落とすとリーゲル・バックラーすれすれにこすり付けるような一撃を放った。突きは正確に心臓の真上を捉える。そして、ガリウスの服の胸ポケットを裂いた。それでも、胸の緑色は消えない。どうやら、急所は特に入念に守られているようだ。

ガリウスはリーゲル・バックラーを斜めに3つ。シーグの行方を阻むように仕掛けて距離を置こうとする。それに対して、シーグはベルトに手を伸ばした。もちろん、そこにナイフはない。

しかし、ガリウスは過剰に反応した。十分に距離を空けるより前にリーガル・バックラーを終了させてしまったのだ。その隙をシーグが見逃すはずはない。

靴を狙って突き出した下段の攻撃。それをガリウスが跳び下がってよける。しかし、シーグは切っ先を途中で切り上げたのである。狙いは再び心臓。ガリウスは右腕をかざしてその切っ先を受け止める。しかしシーグは剣を軽く引き、素早く滑らせた。それで、右腕の袖も完全に裂かれてしまう。重さを殺した軽い攻撃。故に防がれ

ても、すぐに軌道を変えられる。腰をいれていないので、小手先で連撃する事もできるのだ。シャープネスの切れ味が合ってこその攻撃である。

「おのれ！」

ガリウスは苛立たしく腕を振り払う。すると、同時に3つリーガル・バックラーが展開した。正面、頭上、左だ。

つまり、背後は気にしなくていい。ならば、後退する道理は無い。

顔を苦痛にゆがめながら、ガリウスは腕を振り下ろす。すると、3つが曲線を描く軌道でシーグに向かって殺到した。油断無く視線を配り、全身の神経を集中させると、飛来するリーガル・バックラーにも色のバラつきが見えた。いや、違う。本来無色であるはずの防護壁に、ヒビにも似た薄い筋が浮いているのだ。

理由は分からないが、戦士の勘がそれを断てと訴える。螺旋を描いて迫るリーガル・バックラー。その軌跡を読み取ったシーグは剣を三閃した。文字通り目にも留まらぬ斬撃。目前にいたガリウスでさえ、銀の光が煌いたのが見えただけだ。

一瞬後、リーガル・バックラーはシャープネスに断ち切られ、光の粒子を残しながら空中で四散した。

恐怖に顔を引きつらせたガリウス。シーグは情け容赦の無く更に取りすがる。

「がー！」

破れかぶれになったガリウスは、シーグに向かって横殴りに拳を叩きつける。中途まで剣を振りかぶっていたシーグはその攻撃を肘で受け止めるしかできなかった。体重と体格の差は歴然であり、真横に吹き飛ばされるシーグ。

しかし、安堵の表情を浮かべる暇さえもガリウスには与えられない。いつの間にか体勢を立て直したシーグは再び剣を構えている。そして、剣舞のように一回転してガリウスの膝の後ろに叩きつけた。

その後、両手で剣を構えなおし、槍のような刺突を放つ。ガリウスは完全に恐怖とらわれて、反射的に叫んでいた。

「グラスト！」
突如、ガリウスの前から緑色の壁が展開した。目前に迫る障壁にシーグは足をかけて勢いに取ったまま後ろに跳び下がる。シーグが着地した時には、ガリウスは直径3歩ほどの防御壁の中にすっぽりと守られていたのである。
シーグの攻撃も八度は当たった。そのうち数度は致命傷を与えるに十分な手ごたえがあったのだ。にもかかわらず、ガリウスはほとんど無傷。１０歩の距離を空けてのにらみ合い。勝負開始の時の距離に戻ってしまったのである。
「ったく、常識はずれの硬さだな。アイアン・スターチュ（鉄の像）とでも名乗ったらどうだ」
「黙れ！」
多少くぐもったガリウスの声が聞こえた。防御壁越しには聞こえないと決め込んでいたためにシーグは驚いた。
そういえば、声は空気を響かせて伝わると聞いたことがある。それに密閉された空間では息が苦しくなるとも。リーガル・バックラーの中では、そんな心配もなくずっと引きこもっていられるらしい。緑の壁を見たが、亀裂も色のひずみも見つからなかった。中に入られている限り、攻撃する方法はない。
「来たれ、アヴェンジャー！（報復者）」
叫び声と共に、ガリウスの右手にブロードソード（幅広の剣）が現れた。何度も追い詰め、致命的な攻撃を加えた事も数知れず。それでもなお、勝利を手にする事はできず。ガリウスはついにアヴェンジャーを抜いてしまう。
そのような状況にもかかわらず、シーグは笑みさえ浮かべていたのである。

2章－118　暴虐の報い

＊

リーガルバックラーの防護壁越しに、シーグとガリウスは向かい合っている。

「魅入っておるな、ベクター」

突然呼びかけられて、ベクターは我に返った。振り返ると、簡易の玉座にもたれかかりながら、シェンナが楽しそうに薄笑いを浮かべていた。楽しそうなのはシェンナと彼の右側に控えるアイシャだけだ。魔術師も騎士も全員表情が引きつっているか、厳しい目をしている。厚顔無恥を公言してはばからないゲイル卿も例外ではなかった。

「馬鹿な！」

声高にそう叫んだのは、グラムファーレ家の長老であった。王の御前であると言う状況も忘れ、フラフラと闘技場に向かって歩き出す。壇上から落ちるギリギリの所で、一族の若者に支えられ、引きずられるように後退した。

「リーガル・バックラーが断ち切られた……だと？　ありえん！」

長老は周りが目に入らぬようで、うわごとの様に繰り返している。結界陣の一族と呼ばれ、絶対の防御を信条としてきたのだ。目の前で起こった出来事は悪夢以外の何物でもないだろう。

「あの様子ではアン・タッチャブル（触れられざる者）は古着屋にも出せませんな！」

我にかえったゲイルが止めとばかりにグラムファーレの装甲服をなじる。子ども並みの背丈に、禿げ上がった巨大な頭という異相の男は、全員の剣呑な視線が集中しても笑うのをやめない。むしろそれを意識して、いつもよりも大きな嬌声と笑い声を上げていた。

「前例が無くもありませんわ。ダイヤモンド・カッター（金剛石の

刃）卿、ベクター。そうでしょ？」
いつの間にか、真横に近寄ってきていたアイシャが楽しそうにささやく。
「……」
ベクターは返事をしなかった。ガリウスを破ったのは非公式の決闘だからだ。もっとも、壇上にいるもので、その勝敗を知らないものはいない。ただ、七家の間では口にする事は禁忌とされている。最も王には知った事ではないようだ。
「それは、水盤の見者に見出されたフィーリア（感応体）の力、つまり魔術の助けがあってのことだ。違うか、ベクター？」
「はい」
シェンナの問いにベクターは明快に答えた。
「しかし、奴は魔術師ではない。そしてシージペリラスの剣にそれほどの力があるようには見えん。どうだ？」
「おっしゃるとおりです」
シャープネスにそんな能力はない。それは誰よりも、ベクター自身がよく知っている。軽さと切れ味だけを極限にまで追求したのがシャープネスだ。グラムファーレの装甲服を貫き、リーガル・バックラーを切断するほどの能力はない。
「されども事実、ガリウスは追い詰められている。その理由を説明できるものはいないのか？」
シェンナの問いに壇上は静まり返る。ただ、現実を受け入れられないグラムファーレ家の長老のうわごとがむなしく響くだけだ。
決闘場ではシーグとガリウスのにらみ合いとなっている。防護壁をはさんでお互いに決定打を欠いているという状況だ。
「シージペリラスには、魔力のひずみが見えているようですわ。そこに剣を当てているようですね」
アイシャは小首をかしげながら答える。それに対して、グラムファーレの長老は正気を取り戻して、気色ばんだ。
「馬鹿な！　見えるはずがない。結界陣の一族の秘儀と奥義を結集

し、何重にも防護し、隠匿し、強化しているのだぞ」
「私にも良く分かりませんわ！」
アイシャは頬を膨らませ、すねた仕草でそっぽを向いてしまった。
「プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）のリーザ・オーメント。あなたなら分かるのではなくて？」
「あ、あ、あ。え、ええ、えええええと？」
アイシャにいきなり問いかけられて、リーザはまずは目をパチパチさせた。次に口元を押さえてワタワタし、最後に首をキョロキョロさせる。そして、助けを求めるようにサフィリアに取りすがった。
「落ち着いて、正直に答えればいいわ」
「え……でも」
サフィリアの答えにリーザは言葉を濁していたが、周囲の視線の圧力に負けて息を吸い込んだ。
「えっと、あの。私、実は少しなら見え……てます」
リーザが消え入りそうな声でつぶやくと、魔術士全員がギョッとした。
「詳しく教えてほしいものだな」
シェンナが更に追求したので、魔術師たちは不満の声を上げられない。
「手をかざして布の繊維や金属の結晶を見ていくと、魔術の流れが分かります。それをたどっていくと、防護のひずみが見えてきます。どれだけ積層に結界や防護を施しても、針の穴ほどのひずみは消えなくて、むしろ数が増えていってしまうんです」
「なるほど、重厚な守りほど穴は増える。完璧な防御というのは、そもそも机上の空論であったわけだな」
シェンナは情け容赦なしに、グラムファーレ家の信条を笑い飛ばした。
「でも、そのやり方では時間がかかりますわ。それに彼は手ではなく、目で見ているようですもの。光の色をたどっているのかしら？」
アイシャは不思議そうに、シーグとガリウスを見ていた。

「まさか、色覚異常だから？」
「そいつらは異常者だ。色そのものの認識がないのだぞ！」
サフィリアの呟きに、グラムファーレの長老が開口一番に否定する。
「違います」
椅子を蹴り飛ばすようにして立ち上がったサフィリアは、怒りをこめた声色で長老に対峙する。両者に挟まれたリーザは、今にも泣き出しそうな表情をしていた。
「色覚異常の特徴は色が見えないのではなく、見える色彩の幅が狭いだけです。ですが、私たちが区別できない色を見分ける時もあります」
「赤緑色盲の人だけが見える色がある。つまり、私たちが見えないように隠したはずの色の違い。それを色覚の異なる彼だからこそ見えている。そういうわけですわね？」
サフィリアの言葉に、アイシャが付け加えた。
「奴らは異常者だ。まともな事など何一つできん」
懲りずに繰り返す魔術師を、サフィリアは嫌悪の視線で睨んだ。
「人間は広範囲の色をとらえすぎています。生物全体で見れば、我々人間の目こそがむしろ異常とも言えるでしょう。そして、一部の動物には人間には感じ取れない音を聞き取ることは立証されています。ならば、色にも同じ事が言えるかもしれない。その可能性を、あなた達は何をもって完全に否定しますか？」
「やつらは変人なのだ！」
「違います。生まれながらの個性に過ぎません！」
サフィリアの論理に対して、長老の言葉はあまりにも幼稚だった。王の手前、アイシャ・ディスペリアもサフィリアの味方をしている。そんな状況下に合って、誰もが口を挟めなくなっていた。そんな状況下に、押し殺したようなシェンナの笑い声が響く。
「それが事実だとすれば痛快だ。七家が毛嫌いし、欠陥と虐げてきた特徴。それが実は魔術の弱点を突く能力であったというわけだな」

シェンナの笑い声。それは静まり返った人々の間をやけに大きく響く。

「それだけではない。オッドアイ、紅毛、巨人症、無痛症。先天的な相違をもつ赤子と、それに連なる家系全体を七家は完全に排除してきた。親しい友や自分の子孫にさえ行ってきた所業の数々。ガリウスは過去の暴虐に対する報いを受けている、そうともとれるか」

シェンナ王が楽しそうに壇上の全員を見回した。長老はこれ以上ないくらいに青ざめていた。

「水盤の見者、ファクト・アイズ（真実の瞳）のサフィリア・フェルナンディ。その意見には興味をそそられる。後日、ゆっくりと話を聞かせてもらうとしよう。お前もそう思っているな、ベクター」

「……はい」

ベクターの返事を聞くと、シェンナは満足げに足を組みガリウスとシーグの決闘に目を戻した。シーグがガリウスの周囲を跳び回っているだけで、何一つ進展はしていないように見える。

「どう思う、ベクター」

「ガリウス卿が追い詰められた、と見ます」

ベクターは小声でささやいた。グラムファーレ家の長老と、興味深々で見つめてくるゲイルに聞こえないようにしたのである。

「その通りだ。相手はロディウス・アクテの教えを伝授されている。奴の手練手管に距離や障害物など意味があるものか。立場を崩し、誇りを傷つけ、観衆さえも利用する。あらゆる隙を見逃さず、戦う前から相手を敗北に突き落とす準備を怠らない。本気で逃れたくば、死ぬしかないのだ」

「イービル・スレイヤー（邪悪を制する者）をご存知なのですか？」

「うんざりするほどな。あれは『嵌め殺し戦法』という」

ベクターの言葉を、シェンナは鼻で笑いながらはき捨てた。

「『千歩誅殺の権謀』、『百歩言殺の口舌』。そして、あれが『十歩封殺の対峙』だ。剣と魔術の境界に陣取り、すばやく間合いを入れ替える。幅広い戦法を持っていながら、自身の戦術が確立されて

いない未熟者は、自分がどのように行動するのかを見失うのだ」
そして、一瞬の迷いを放置するシーグではない。その事をベクターはこの中にいる誰よりも知っていた。
「最後に待つのは『一歩必殺の間合』。シャトランゼ（王取り）だな」
シェンナはこうなる事を予測していたかのように。また、これからどうなるかを知っているかのように、落ち着きを払ったままつぶやいた。

2章－118　暴虐の報い（後書き）

魚類・鳥類・爬虫類は4原色で物を見ているそうです。でも、4原色で見ている人間がいないためどのように見えるか分からないみたいです。（作中でサフィリアが人間が最も見えているようないい方をしていますが、それ自体がすでに大多数の人間の主観に基づいたもの。なので、彼女でさえ偏見持ちと言えますね）

哺乳類の多くは恐竜の時代に夜行性だったので、2原色だそうです。昼に活動するようになった一部の動物は3原色を獲得していて、これが人間の事ですね。

イヌは色が見えないというのは間違いで、赤緑色盲の人と同程度に色が見えているそうです。

夜行性の動物は色覚を持っていない。らしいですね。

中には紫外線が見える生き物もいるとか。あ、エルフとかドワーフは赤外線視力を持ってますね。それに、一部の世界のドワーフは赤緑色盲です。それなのに、優れた芸術家……混色の造形物は作らないのかな？

蝙蝠は、潜水艦のソナーみたいな認識で見ているそうです。これは色どころか、全然違うように世界を認識しているんでしょうね。

生物にもいろいろあって面白いですね。

色覚異常をトリックに使った推理小説も幾つかあるそうです。

私の知っているのは、ソードワールドのデュダシリーズ（主人公がドワーフ）の話だけですけど。

2章－119　デッド・ロック・タクティクス

＊

ガリウスは悪夢を見ている気持ちになっていた。いくら引き剥がしてもシーグは追いすがって来る。完璧な守りの中に入っても、常に付きまとって離れない。

途端、シーグは防御壁に張り付くように近寄り、シャープネスを構える。

「コープス・ロッツ……」

しかし、クリティカル・ウーンズ（致命傷）の呪文が終わるよりも早く、シーグは数歩下がる。それゆえ、ガリウスは呪文を中断せざるを得なかった。それでも、魔術を使ったという事実から、疲労感だけが体に残る。

ウーンズは左腕より3歩、クリティカル・ウーンズ（致命傷）はアヴェンジャーの切っ先より発動する。しかし、全方位に防御壁を展開した今となっては、踏む混む事も武器を突き出すことも出来ない。

防御壁を解除すれば、アヴェンジャーとウーンズを自由に使う事ができる。しかし、１０歩の距離であってもナイフが何度も守りを破っている。接近戦ではシャープネスがリーガルバックラーを両断しているのだ。

すでに、アン・タッチャブルはあちこち切り裂かれている。絶対の守りと信じていたあらゆるものが容易く壊されてゆく恐怖感。その中で、ガリウスは攻撃のために守りを捨て去る事を選べ事はできなかった。

自分はイリュージョン（幻覚）の魔術をかけられていて、実体を持たない刺客に襲われ、踊らされているのではないか。そんな考えにガリウスは支配されていたのである。

一方、シーグは自分が優位であるとは思っていなかった。それはただの見せかけであり、ハッタリとガリウスの勘違いの上に築かれた幻に過ぎない。綱渡りの気持ちで戦っていたのはむしろシーグのほうである。

ガリウスの全方位に張り巡らせた防御壁には、色のひずみも亀裂も存在しなかった。今、シャープネスを振り下ろしても、はじき返されるに違いない。だから、その事に気付かせないために実際に防御壁を攻撃するわけにはゆかなかった。ガリウスの呪文に恐れをなして逃げるふりを続ける必要があるのだ。

『波状蹂躙』。それこそが、戦いが膠着した際にロディウスが用いる戦法である。そして、疲弊した敵に対する『多段速攻』こそが『一撃必殺』への最後の布石となる。

シャープネスを構えて距離を詰めると、ガリウスはアヴェンジャーを手にシーグを睨んでいる。いつもよりも上段に剣を構えるのは、ガリウスの視線が足元に行かないようにするためだ。

革靴はすっかり血まみれで、雨の日にびしょぬれになったような嫌な感触がある。

防御壁解除後の隙に漬け込むのが狙いだ。それに一撃必殺の威力を持たせるには、ささくれ立った警戒心に支配されたガリウスを徹底的に消耗させなくてはならない。

「どうしたリーガル・バックラー卿。観客が退屈しているぞ」

しかし、ガリウスは肩で息をしながら返事もしない。いや、できないのだ。

シーグの魔術の視野は、術者の呼吸に合わせて脈動するアヴェンジャーの光を捉えていた。ガリウスがウーンズを唱えるたび、苦しそうにするたびに、アヴェンジャーの光も途切れ途切れになる。

どうやら、剣を呼び出したままにするだけでも相当消耗するようだ。そして、リーガル・バックラーの連続使用、後に全方位への展

開して維持する。それらが術者の体力を奪っているのだ。
慣れてくれば、魔術の光の明滅から体調や感情の動きまで手に取るようにわかる。これでは、魔術師同士で隠し事などは出来ないだろう。
「その壁をどけてくれよ。決闘らしく剣を交えようじゃないか」
といいつつ、そのまま閉じこもっていてくれとシーグは心の中で叫んでいた。
もし、ガリウスが防御壁を解除して間合いをつめ、ウーンズ（負傷）を足に使ったら負けは確定だ。
そもそも、決闘の最初からアヴェンジャーだけを頼みに挑んでくれば最初の数合で勝負はあった。
あるいは、ガリウスが猪突し、シャープネスの攻撃を受けてもなお踏み込んでくる覚悟があれば勝ち目はない。
周囲に張り巡らせたリーガル・バックラーは、実はガリウスではなくシーグを守っていた。もし、装甲服を盾のように扱い、剣を受けめたり受け流したりする道具と割り切れば、いくらでもシーグの懐に飛び込めたはずなのだ。
ガリウスが魔術に頼り、強力な魔術の品を持ち、それに道具以上の思い入れがあり、絶対の安全を求める。それらがシーグに善戦する結果を与えている。
ガリウスはあくまで魔術師なのだ。理論を集積し無傷のままで、完全な勝利を求める。もしも傷を負うことを覚悟で、踏み込むことを恐れない戦士であればシーグは圧倒されていたはずだ。
例えばベクターと戦った時のように。
「そっちが来ないなら、こっちから行くぞ」
シーグが間合いを詰めると、ガリウスの左手には刺々しい形、ギラつく赤色が光る。クリティカル・ウーンズ（致命傷）だ。
「コープス・ロッツ・カラナ――」
シーグはにやける口元をわざと悔しそうに歪めて背後に跳び下がる。

呪文の次の発音は『ウ』であり、更にもう一文字分だけ呪文があるとシーグは知った。魔力の流れ、口の動き、体の仕草。それらを注意してみれば、魔術発動のタイミングまでが明らかになる。サフィリアが読唇術を身につけているのは、呪文を先読みするためだったのだ。

しかも、魔術の完成ギリギリまでひきつけた方が疲労が増す。シーグは近寄りまた遠ざかる事で、更に二度ガリウスにクリティカル・ウーンズを不発させた。疲労は目に見えるほどになっている。そして、ガリウスの周囲の防護壁に色がつき始めた。魔術の視野で捉える淡い緑色の光が壁に吸い込まれて、変わりに赤色が浮かび上がってきたのだ。

光の輝きが薄く、赤色が最も濃い場所。そこに、先ほどと同じひずみが見えた。シーグはシャープネスを槍のように構えて特攻する。ガリウスは再び、クリティカル・ウーンズの呪文を唱え始める。しかし、今度は勢いを弱めず、体重と全身の力を乗せた渾身の突きを放った。

ガラスが砕け散ったような澄んだ音。同時に鐘を近くで叩かれたかのように耳が痛くなった。そして、まるで水袋が破裂するように、リーガル・バックラーは跡形もなく破壊されてしまったのである。

ガリウスは驚愕と、疲労と、苦痛が混じりあった表情で息を詰まらせた。当然、呪文は中断されている。シーグはその隙に一挙に間合いを詰めて、ガリウスの首筋にシャープネスを突きつけた。アヴェンジャーを持ち上げようとしていた、ガリウスの手が動きを止める。

「審判！」

自分の叫び声が自分の声ではないように、そしてずいぶん遠くに聞こえた。審判は耳を押さえて片目をつぶっている。そして、観客席にいる大半が耳を押さえて、辛そうにしていた。

「審判！」

シーグは更に叫び、ガリウスを睨みつけてベルトに手をやった。

すると、ガリウスのピクリと全身を震わせて左手が動きを止める。リーガル・バックラーの発動は一瞬。しかし、何度現れようとも切断する自信がある。ウーンズは一声。その場合は一歩下がり、自分に突きつけられた左腕を切ればいい。

「審判！」

苛立ちと共に放つ三度目の叫び。審判は、苦しげな表情でシーグとガリウスを見比べている。声が聞こえていないのではなく、戸惑っているのだ。

「殺すまで戦わせるつもりか！」

怒鳴りつけられると、審判は表情を改めた。そして、ゆっくりとした足取りで近寄ってくる。その時に、背中に感じる殺意。振り返ると、ガリウスが呪文を唱えようとしている。『コープス・ロッツ』、それともただの『ロッツ』なのかは分からない。シーグはガリウスから跳び下がりつつ、シャープネスを中段に構えた。

対してガリウスは左手を持ち上げる。ウーンズならば、突き出された左腕を切り飛ばす。シーグは一瞬で判断した。しかし、ガリウスの狙いはシーグの予想を裏切っていたのである。

2章－120　世界の悪意

「ロッツ！」

ガリウスの叫びと共に、突き出された左手の先にいたのは審判だ。審判は目を飛び出さんばかりに見開いて動きを止めた。そして、鼻と口から血を流しながらよろめく。倒れる寸前でシーグが受け止めると、アヴェンジャー（報復者）が空を薙いで襲い掛かってきた。

2人そろって真っ二つにできる斬撃。シーグは審判共々倒れこんで避けた。その時、アヴェンジャーの刀身がわずかに左腕を掠めていった。

瞬間、左手に焼きごてでも当てられたかのように熱くなった。エリスの爪で皮一枚程度に付けられた傷が裂けて血が流れ出す。アヴェンジャーの刃には、ウーンズと同様の効果があるのだ。

ガリウスはぼんやりとしてシーグを見下ろしていた。覇気も生気も尽きた目で、シーグの左腕と足を見つめている。

「コープス・ロッツ・カラナウス」

無機的な、力のこもらない声であったが、呪文は効果は絶大だった。シーグは全身が燃え上がるような感覚に晒される。特に、傷のある箇所が血が沸騰したかのように熱くなった。背中、左腕、足。傷を負った箇所から、血が噴出して真っ白な装束を赤く染めてゆく。

叫び声を上げ、痛みに膝をつきながらもシーグはシャープネスを放さなかった。戦意の衰えぬまなざしでガリウスを睨み、剣を支えにして体を起こす。ガリウスは顔を引きつらせて後ずさった。

「逃げるなよ、ガリウス卿。勝負はまだついていないだろうが」

シーグはかすれた声で呼び止めた。それ以上離れたら剣が届かないだろうが、と心の中でだけ呟く。

全身を血に染めながらも足を引きずって近寄ってくるシーグを見て、ガリウスは恐怖の表情を浮かべて小さく首を振った。

「殺せ！」

誰かが叫んだ声が耳に突き刺さる。それを聞いて、ガリウスが肩を震わせる。

「この世から災厄を消してくれ」

「レイザークの悪魔を冥府に返すんだ」

「シージペリラスを殺せ！」

火が燃え移るように観客席が沸き立った。シーグがすでに追い詰めていたことも、ガリウスが審判を攻撃した事も知らないものはないだろう。だが、ガリウスの反則をなじるよりもシージペリラスが死ぬ事を望んでいる。

災厄の星の下、冥府の数に導かれ、この世に邪悪と乱の訪れを知らせる先触れ。それがシージペリラス（命取りの座）だ。

過去の歴史において、シージペリラスの誕生と共に世界は乱れ、シージペリラスの死と共に世界は安寧を取り戻す。戦乱の世に生きれば、乱を治める英雄となる。しかし、平和の時代に生まれれば、平和を乱す暴君となる。生涯を闘争の中で過ごし、数え切れない死者を作り出してきた。

動乱は１０年前にシェンナ・グラドリカの手によって終結し、メティスはシェンナ・グラドリカの治世の下で繁栄している。ならば答えは簡単だ。このシージペリラスは平和の時代を乱す災厄の象徴である。魔境の縁へと続く『死の道』を遡ってやって来た冥府の使者に違いない。

シージペリラスへの恐れと怨嗟から放たれる負の感情。シージペリラスを葬る正義を信じる熱狂の感情。それらを混ぜ合わせ「殺せ、殺せ」と連呼する人々。割れんばかりに響く怒声と矢のように飛んでくる殺意。それを背にして、シーグは更に一歩進んだ。

「なぜだ……なぜ笑っている」

ガリウスは震える声で問う。そこで、シーグは自分が薄笑いを浮かべている事に始めて気付いた。

「分かりきった事を今更言われたところで、お笑い種だろ」

産まれてきた事が間違いなどと、そんな事は絶対にないと言って

くれた人がいる。
周囲の悪意から守り、生きる力をくれた人がいた。
姿を消してもいつか戻って来ると信じてくれる人がいる。
その人たちの言葉に比べれば、何千何万の声が何を思い、何を叫ぼうとも知った事ではない。
「俺は、俺が慕う人達のように生きる。殺戮者にはならない」
「……訳の分からない事を」
話す間にガリウスは平静さを少しは取り戻したようだ。
「首を落とせ！」
「そうだ」
「二度と生き返らせるな！」
一度も死んでないぞ。と、心の中で呟いてシーグは更に一歩進んだ。満身創痍で足を引きずるシーグを見て、ガリウスはもう後ろに下がらなかった。圧倒的な自分の有利を思い出したからだ。
「思うようにやってみろよ、ガリウス卿。どう転んだってあんたの負けだぜ」
「俺は勝つ、勝たなければならん」
ガリウスはアヴェンジャーを水平に構えて、シーグの首を刈るために横なぎに払った。観客の望みにこたえたということだ。
「勝機は――」
シーグが呟くと共に、無傷な足で渾身の一歩を踏み出した。急に立ち上がったために、首を切断するはずだった刃がわき腹の位置を切断しようと迫る。シーグはその幅広の刃に左肘を叩きつけた。そして、体重を剣に預けて足を踏み込む。
「恐怖の向こう側にある！」
アヴェンジャーは分厚く、重く、ガリウスの全膂力が込められていた。対して、シーグは細く、軽く、上に飛び上がっていた。
途中、わき腹をアヴェンジャーが直撃したが、その攻撃もシーグ体を回転させる手助けとなった。飛び込み刃の根元に近づいていたために、体を浅く切る程度で済んだのだ。

結果、シーグの体は肘と剣を軸にして、軽業師のように空中で一回転したのである。ガリウスは驚きに目を見張っていた。

シーグは着地と同時にシャープネスを両手で持ち、下段から切り上げる一撃を放った。ガリウスは手を上げて、首を守ろうとしたがシーグの狙いはそこではない。

シーグはアヴェンジャーの柄、色彩がひずみがある場所に剣を振り上げたのである。キン、という銀のチャイムを鳴らしたような澄んだ音。後にアヴェンジャーの刀身が柄と分離して遥かかなたに飛んでいく。

「な！」

ガリウスは遠ざかってゆく剣から目を離せなくなっていた。一方、アヴェンジャーに触れた左腕とわき腹から血が噴き出す。しかし、勝機を目にした少年の目には痛みもなくガリウスの隙しか映っていなかった。

次の狙いは首を守るために上げた左腕。

シーグは返す刀でシャープネスを閃かせた。今度は音もなくガリウスのブレスレット、リーガル・バックラーが宙を舞った。ガリウスは手元から離れた2つの道具に気を取られて、もはやシーグを見ていない。シーグは剣を反転させると、柄をガリウスの首元に向かって突き出した。

茫然自失としたガリウスは防御のための動作を一切取れず、喉に柄の一撃を受けて白目をむいた。そして、受身も取れずに後頭部から地面に倒れた。勝利の宣言をするものもなく、闘技場は静寂に包まれたままだ。

2章－121　法の下、王の名において

ガリウスが完全に気を失ったのを見て、シーグは屈みこんで審判を覗き込んだ。鼻と口から血が流れているが、呼吸は安定している。
「サフィリア、来てくれ。この人はまだ生きている」
「分かったわ。あなたも体を楽にしていて」
意外と近くからその声が聞こえてシーグは驚いた。振り返ると、サフィリアが横を通り過ぎて審判の前で屈みこむ。ガリウスが気を失うと同時に、闘技場に飛び出していたのだろう。
「ちょっと、これって」
審判を一目見たサフィリアは眉をしかめた。
「大変なのか？」
「いいえ、軽い鼻血と歯茎の出血よ」
「……なんだって？」
自分の耳がまだ変になっているのだとシーグは独り決めをした。いや、そうしたかった。
「鼻血は布を詰めていたら止まるわ。口は歯槽膿漏からの出血。二、三日痛みが続くでしょうけど、それだけよ。膿が外に出てかえってよかったかも」
「じゃあ、何で気を失っているんだよ」
「びっくりしたからじゃないの？」
「その程度で気絶する奴を何で審判にするんだ」
こんなふざけた奴は倒れてきた時に蹴り飛ばすか、アヴェンジャーの前に突き出してやればよかったのだ。シーグは半ば本気でそう思った。
緊張が抜けると、途端に足元がおぼつかなくなる。ふらついたシーグをサフィリアが受け止めてくれた。
「せっかくの服が血まみれになるぞ」
「つまらない事を気にしないで。あなたの方は本当に重体なのよ。

無理はしないで」
「何とか1人で歩けるから、大丈夫だから」
繰り返すシーグにサフィリアは首を横に振った。
「あなたはクリティカル・ウーンズを受けたのよ。コープス・ロッツ・カラナウス。呪文の意味は、『死体となれ、朽ちよ、血まみれとなれ』。ウーンズの疲労と負傷の拡大、最悪の場合は腐敗。それはしばらくの間続くの。あなたは本当にその通りなりつつあるのよ。それに、わき腹に受けた傷は考えている以上に深いし、腕の傷はまだ避けていっているのよ。それに、足の指を冗談ではなく切り落とす事になるかもしれないわ。治療が遅れたり、無理をすると冗談じゃなくて死ぬわよ」
「……だから、怪我をしている本人の前で、正確すぎる報告は止めてくれよ。本当に気が遠くなりそうだ」
「あのー、たてこみ中のところ、お邪魔します」
今度は横からアイシャがのんびりとした声で聞こえてきた。
「後にしてください。治療が専念します」
「陛下がお呼びですわ。来てください」
「人の命がかかっているのですよ！」
微笑を浮かべて言うアイシャ。サフィリアはヒステリックな声を上げて睨みつけてた。
王に逆らってまで急がないといけないとは、一体全体自分はどうなってしまっているのか。ひょっとして、すでに手遅れなのではないだろうか。不吉な方向に行きかけた思考をシーグは無理やり引き戻した。
「恩賞の話をしなくちゃな、行くよ」
シーグが言うと、サフィリアは責める視線をシーグに向けた。
「今じゃないと、ここじゃないと意味がないんだ」
シーグはサフィリアの体を借りて、体勢を立て直した。シャープネスを鞘に収めようとしたが、自分の血にまみれていたので止めておいた。背筋を伸ばし、まっすぐ歩くだけの事に全身全霊を傾けな

くてはならなかった。
すぐ横にサフィリアが並ぶ、目つきは険しいままだ。それでも、倒れるような事があればすぐに支えてくれるに違いない。
壇上では、まだ審判が勝ちどきを上げていないとか、決闘中に見者が乱入したとか。狂ったように叫ぶ老人がどこかに引きずられていった。
「見事な戦いであった」
アイシャ、サフィリア、シーグが膝を突くと、シェンナ王は口を開いた。静かな声だというのに、闘技場の隅々まで届く。なぜか、シーグはアイシャの声を連想した。
「レイザークのシーグ、お前はロディウス・アクテの弟子なのだな」
「はい」
「このベクターも、イービル・スレイヤーの教えにあこがれる一人なのだ。縁があればお互いに語り合うがよい」
シェンナ王は昨日の戦いを承知した上で言っている。つまり、遠まわしな言い方で、これ以上揉めるなと釘をさしているのだ。
「それでお前が望むのは騎士位か。望むなら隊長を任せても構わん。公爵位と領地でも構わんぞ」
気前のいい申し出に、うらやむ吐息をつくものが多かった。
「なんなら、新たなリーガル・バックラーの地位でも構わんぞ」
全体に聞こえないよう声を小さくしてシェンナは言った。この申し出には壇上にいる者たちがギョッとする。
「望みを言うがよい」
シーグが何を望むのか、闘技場の全員が固唾を呑んで見守っていた。シーグは顔を上げてシェンナをまっすぐと見つめる。
「私は『剣の法廷』に挑む権利を望みます」
闘技場はシンと静まり返った。壇上の全員が意外さに表情をしかめ、下座にいる人々は意味が分からず首をかしげている。
物事の善悪が法によって決着がつけられない、あるいは法によって裁けない事態が発生する事がある。その場合、両者が決闘者を立

てて勝者の言い分を是とする。それが剣の法廷である。
「ならば、騎士位と領地を授けよう。剣の法廷へ挑む権利は、貴族の血族や騎士見習いでも持っておるからな」
「私はまだロディウス・アクテの弟子。未だ、修行中の未熟者ゆえ一箇所にはとどまれず、お仕えする事はできません。陛下を主君と仰ぐ事が出来ぬわが身ではありますが、陛下には決闘者として、私を認めていただきたいのです」
シェンナの言葉に対し、シーグは礼節と静かな声を持って答えた。冥府の使者と思っていた人物が、洗練された宮廷儀礼を用いる事に観衆は驚きを隠せない。
「そして、今日の決闘の発端になった出来事。ガリウス卿がわが師セリウスの名誉を傷つけた事。その言葉を撤回していただければ十分です」
「謙虚な事だな」
両者の会話を理解できるものなら、誰もがシェンナと同意見だった。事実上、有名無実の地位を要求しているからだ。
「認めよう。だが、この決闘の功績として、卿には私から2つ名と称号を贈りたいと思う」
「ありがたく頂戴します」
「わざわざ決闘者としての地位を望むからには、すでに卿自身の訴えがあるのではないか。そうならば、この場で宣言するがよい」
「ありがたきお言葉」
シーグは王に一礼し、立ち上がった。そして、振り返って観衆を一望する。観客たちは沈黙していた。怯えているようにも見えた。それでいい、とシーグは思った。侮られ、不用意に近寄られるよりもずっといい。
「我が生まれ、我が故国、そして我(われ)が慕うものを侮辱し、虐げる者はすべて我が剣の敵となる」
朗々と言った後にシーグは血に染まった剣を掲げた。
「異議あるものは、剣の法廷に挑め！　法の下、王の名において、

レイザークのシーグは如何なる挑戦も受ける！」
シーグの迫力に、観衆は驚きのどよめきに包まれた。その後「シーグー」と呼ぶ声が聞こえた。アイフェだ。それに続いて、観客席の黄色の一団が賑やかに「シーグ」と連呼する。やがてそこから波紋が起きるように闘技場全体に広がっていった。
それは糾弾でもなく、恐怖から来る叫びでもなく、勝者を称える歓声であった。
「どうしてなの？」
サフィリアは半ば呆然としてシーグに問うた。
「この程度の地位なら、あなたがレイザーク最後の公子であるという証を立てれば。それだけで、所領と相応の地位が当然のようについてきたわ。決闘なんかしなくても、王に謁見を求めるだけで、十分に叶えられる程度の事じゃない」
シーグは肩をすくめた。
「廃都の公子が領地なんて持っていても、暗殺者を放つ奴が増えるだけだ。実力で勝ち取らないと意味が無い。３騎士の１人を倒した決闘者となれば、喧嘩を吹っかければ高くつくのは誰にも分かるからな」
「たったそれだけのために。どうして、そんなに苦労しないといけないの？」
「俺はシージペリラスだからな」
「それが何だっていうの」
８年前と同じ怒った表情、全く同じ言葉。だが、シーグの口から出たのは過去とは違っていた。
「俺は名前だけで人を怯えさせ、殺してしまう事だってある。そして、関わった人達を傷だらけにしてしまうんだ。もう、それだけは避けたいんだ」
「そんな世の中のほうがおかしいのよ。生まれだけで人を貶めるなんて、そんな国に、そんな法に何の意味があるって言うの？」
サフィリアは首を横に振り、叫ぶように言った。

「おかしいとか、正しいとか。難しい事は俺にはよく分からない。だけど、俺は……」

フィー、君が。そう言いかけたのをシーグは飲み込んだ。

「俺に良くしてくれた人がいる国で、生きて行きたい。そう思ったんだ」

サフィリアは涙まで浮かべて、シーグを見上げている。かける言葉も見つからないまま、2人は見詰め合ったまましばらく動かなかった。

闘技場を包む喝采は止む事を知らない。

2章－122　狂気の中心

＊

顔に感じるくすぐったい感触でシーグは目を覚ました。
「あら、起きちゃった」
リーザは残念そうに唇を尖らせ、慌てて両手を背中に隠した。
整理整頓された清潔溢れる部屋には、ハーブの香りが漂っている。慣れ親しんではいないが、見覚えのある部屋だ。記憶をたどっていって、シーグは腹立たしげにリーザを見た。
「酷いじゃないか、決闘の後に不意打ちで眠らせるなんて」
「魔術での瞬間移動は体に負担がかかるの。それに、治療には薬を使わなくちゃいけなかったわ。だから、気絶していた方が都合がよかったのよ。アクリアエ・スリス、フェイル・リレイ（石突の中継地）経由、天空の水盤への強行軍。私だってクタクタになっちゃったわ」
つまり、ここは天空の水盤。サフィリアの家の中なのである。
「で、何やってるんだ」
「お化粧よ。やっぱり、シー坊ってば化粧のノリが最高ね」
リーザはそういいながら、背中から白粉のついたパフを取り出し机に置いた。今度は指先につけた口紅を近づけて来た。ベッドの上なので、肘をついて顔を遠ざける。力強く突き出された口紅を、すばやい首の動きで避けた。懲りずに続く3連続攻撃をすべてかわしたのでリーザはムッとする。
「もう、動かないでよ。口裂けお化けになっちゃうわ」
リーザは口紅の容器を置いた。そして脱力したシーグの隙をつき、口に指を突っ込んで左右に広げた。その拍子に喉から頬にかけて、べったりと紅がつく。
「こんな風に」

「らにふるんば（何するんだ）」
「まあ、ひどい顔」
「止めてくれ！」
シーグはリーザの手をつかんで叫んだ。
「ちょっとした冗談じゃない。本気じゃなかったわ」
服の袖で紅を拭こうとしたシーグに、リーザはタオルを差し出した。
「これがか？」
シーグは机の中央にあるのは黒髪のカツラを指差した。それを囲むように所狭しと並んだ香水の瓶や陶器製の容器。とても、冗談のために用意したとは思えない。
「本気なら服も用意していました。リボンとか、ぬいぐるみとか、ブローチや髪留めもいるわね。だけど、今日は顔だけで許してあげる」
リーザは悪戯っぽく笑うと、今度は香水の瓶に手を伸ばした。シーグはベッドから逃げようと足を床につけた。しかし、その瞬間膝が折れて床に尻餅をついてしまう。
唖然とするシーグにリーザは手を差し伸べた。
「あんまり無理しちゃダメよ。三日間も寝ていたんだもん」
「……うそだろ」
しかし、それが冗談ではない事を、治りつつある体中の傷とこわばった足腰が物語っている。シーグはベッドの端をつかんでゆっくりと立ち上がった。それだけなのに、全身の間接が悲鳴を上げている。
「今日はインボルグ（収穫祈願の祭り）なのよ。ほら」
そして、リーザは傍らに立ててある燭台を指差した。大きな蝋燭の炎が黄金色の輝きを放っている。すでに外は真っ暗で、光源は炎だけだ。
インボルクは春の始まりの日、女神ブリジットに感謝する日だ。炎の祭典でもあり、人々はロウソクに火を灯して夜を過ごす。

「今日は未来について占う夜なのよ。そう、だからこそお化粧なのよ！」
　リーザは自信満々に断言する。シーグには何がなにやらわけがわからない。
「化粧の出来具合で将来を占う方法を試そうと思ったの」
「俺は実験台か。弱った怪我人に酷いことをするんだな」
「昔、フィーちゃんと一緒に寝ている私に悪戯したでしょ。その仕返しよ」
「……つまり実験でさえない、ただの嫌がらせだってことだな」
「あら？　あははー」
　リーザは言葉を失って視線を宙に泳がせた。
「ずっと前の事だろ。それに、ここまで酷いことはした覚えは無いぞ」
「眠っていて無防備な女の子を狙うなんて十分酷いわ。それに耳に草を入れて、鼻をくすぐったのよ。一生の傷になっちゃかもしれないじゃない」
「かもって、なってないんだろ」
　シーグはしつこく食い下がった。しかし、リーザは片頬を膨らませて軽く睨む。
「借りには利子がつくの。ざっと4年分、しかも何も言わずに出て行ったんだから。この程度は当然でしょ」
「フィーの分まで俺が引き受けるのかよ」
「当然でしょ。フィーちゃんは覚えてないんだもん。この場合、連帯保証人が償うことになります」
「いつから商人を辞めて、高利貸しになったんだ？」
「利害関係がある以上、責任ははっきりさせなくちゃ。だから、これは商人共通の交渉術です」
　過去にやった事が一体何倍になってかえってくるのだろうか。多すぎる心当たりに、シーグは寒気がした。
「私は何だって覚えているわ。ずっと覚えているんだから、ずっと

……」

リーザは言葉の途中で言葉を詰まらせて、肩を震わせ始めた。

「リー姉？」

また騙すつもりかと顔を覗き込んだが、本当に泣いている。シーグは顔についた紅を拭かず、受け取ったタオルをそのまま返した。

「ごめんなさい。泣くつもりじゃなかったのに」

リーザはタオルに顔をうずめたまま、消えそうな声で言った。

「サフィリアの、フィーの事なんだな」

驚きに顔を上げたリーザ。ボロボロと大粒の涙が頬を流れていく。しゃくり上げながら、何かを言いそうになったがシーグは首を横に振った。

「まずは落ち着いてくれよ。それから話をしよう」

リーザはしばらくタオルに顔をうずめていたが、呼吸を落ち着けて顔を上げた。そして、シーグの顔を見てプッと噴き出した。シーグは紅を伸ばして、頬っぺたの両側に渦巻きを書いていたからだ。

「2、3日は取れないわよ？」

それを聞いたシーグは、紅の色が映えて見えるほどに青ざめた。しかし、肩を震わせて笑うリーザの様子がそれを冗談だと言っている。

「とにかく顔を拭いて。今度は可笑しくて話が出来ないわ」

再びタオルを受け取ったシーグは顔を大雑把に拭いた。すると、リーザが更に大声で笑う。差し出された手鏡を見ると、紅が顔全体に広がっていたのだ。

結局、顔中に延びた紅を拭くために専用の溶液一瓶とタオル3枚を必要とした。全部が終わった後も、リーザは笑いを堪えるためにしばらく時間を必要とした。

「この3日間、フィーちゃんと色々話をしたの。私たちが一緒に過ごした時間の事、シーグの事を中心ね。だけど……」

ここでリーザはいったん言葉を切った。シーグは何も言わずに黙って待っていた。

「フィーちゃんの記憶には封印がかけられているの。狂気に近い記憶が思い出されそうになったら、頭痛が襲って思考を奪ってしまう。そうすると考えに集中できないし、痛みのせいで体の方が思い出そうという行動を拒否するようになっていくから」
「そんな事をして、心が潰れないのか」
「潰れないように自分で思考の範囲を特定するのが一番いいの。だけど、気になった事を忘れるなんて見てみぬふりなんてフィーちゃんにはできないわ」
「何が何でも調べつくして、考えつくす性格だもんな」
「そう。だから、私がそばにいたの。実はベクター卿に呼ばれてメティスに帰ってきたのよ。フィーちゃんの記憶の整理を手伝って欲しいって。私の役割はフィーちゃんの記憶を保障してあげる事。記憶の断片を私が覚えているから安心していいって。安心させてあげて、色々考えないようにするの」
「魔術は関係ないのか？」
首を傾げるシーグに対し、リーザは懸命に言葉を捜す。
「ねえ、シーグ。習慣や思想はみんな違うのに、誕生や死については決まって壮大で神秘的な理由付けがされているのは何故だかわかる」
「それって、神様とか天国とかの事か」
「うん。人間はね、納得できない出来事や、解明できない謎が目の前に現れた時、何かで考えに区切りをつけたくなるの。何でも出来て、何でも知っていて、絶対に変わらない普遍なものを支えにしないと不安になるの。それがたとえば全能の神様なのね。偉大な存在がいて、自分たちを見守り、導いてくれるって」
『何でもあり』と『意味不明』。それを思わせる言葉から、ベクターとアイシャの顔が思い浮かんだ。しかし、『絶対普遍』で『全能な神様』については心当たりが無かった。
「フィーちゃんの場合には、納得も理解も出来ていないのが自分自身なの。だから、彼女を周囲で支える人がたくさん必要になるわ。

記憶を保障する私、記憶を封印するベクター卿、それから記憶を夢の中で操るイリュージョニスト（幻術師）」

イリュージョン（幻覚）という言葉に、シーグは反射的に嫌悪感がよぎった。

「まさかアイシャが、ディスペリアの一族が関わっているのか？」

「それができたらよかったけど、危険だってベクター卿も判断したわ。だからね、フィーちゃんには天空の水盤が必要なの」

「真実を見破るディテクト（探知）の封土だから、イリュージョン（幻覚）の効果も増すってわけか」

「そう。ここで狂気に近い記憶を夢の中で記憶から消したり、あいまいにしたりするの。そうやって、この４年間狂気を避けてきたのね」

「そして、今は俺の記憶をあいまいにしなくちゃいけないんだな」

リーザは首を横に振りかけたが、結局うな垂れただけだった。

「過去に出会った人ともう一度会うときには、一緒に時間を過ごした人と様子を見ながら１つずつ記憶をたどっていくの。問題があれば、頭痛が考えを止めてくれるから。だけどね、フィーちゃんはシーグの事、気付いていたわ」

「いつからだ？」

「直感では一目見た時にね。この時には頭痛がしたから敵だと思ったんだって。ごめんねって、言ってたわ」

「なるほど、だからいきなり蹴りが飛んできたんだな」

「本格的に疑い始めたのは、頭の中をのぞいたとき。子どもの頃のシーグの隣に、私や自分と良く似た子がいたからよ」

「まさか、イリュージョン（幻覚）でベクターを混乱させようとした時か」

うかつだったと自分を呪う。イリュージョン（幻覚）は自分にとっては不吉なのだとシーグは思った。

「確信したのは背中の傷跡を見てから。治療中にシーグが動揺する様子を見て、間違いないって思ったんだって」

「……つまり、全然隠せてなかったんだな。俺は」
「私もシー坊もフィーちゃんに隠し事が出来たためしはないもんね」
頭を覆うシーグに、リーザは懐かしそうに微笑んでいる。
「決闘の日にずっと辛そうだったのはそのせいなの。シーグに腹を立てていたのだってね。半分は頭痛のせいなのに、自分が色々考えたせいなのに。苛立ちをぶつけてごめんねって言ってたわ。残り半分は本気でぶん殴りたい位に腹が立っていたけど、それも私の勘違いだったから、ごめんなさいって」
「じゃあ、俺とフィーはもう会わないほうがいいな。いや、会えないのかな」
「え？」
「だって、謝罪を人に頼むなんて全然フィーらしくないじゃないか。自分で直接言えないから、リー姉に頼んだんだろ」
「……うん。フィーちゃんはしばらくの間、眠ったまま目が覚めないと思う。だけど、シーグと会って話がしたいとは言っていたの。でも、記憶を操る魔術には、星の位置が重要だから。インボルグ（収穫祈願の祭り）、ベルテヌ（夏の到来）、ルーナサ（花祭り）、サムハイン（死神の夜）。記憶の封印をするのは、一年でこの４日間しか出来ないの。だから、シーグの治療を終えてすぐに準備に取り掛かったわ。だから。フィーちゃんもね、シーグにちゃんと会って謝りたかったの。感謝する事も、いっぱいあるのにって。なのにごめんって、それにありがとうって。何度も、何度も言っていたわ」
「そうか」
必死に訴えるリーザに、シーグはぼんやりと呟いて窓を外を見た。
「たぶん、爺さんは知っていたんだな。俺がフィーに会ったらこうなるって」
「イービル・スレイヤーが？」
「だから、インボルグの直前の日を選んだんだ。俺が来なければ、フィーもつらい目に遭わずにすんだのかな」
「違うわ。シーグのおかげで、ガイスを倒せて天空の水盤は無事だ

ったの。それに、子ども達も親のところへ帰れるようになったのよ」
「どういうことだ」
理由が良く分からず、シーグはリーザを見つめた。
「湖上での戦闘で、『銀の魔女』を魔術師をみんなで倒したでしょ。それに色覚異常のシーグがリーガル・バックラーを破った。そのおかげで、生まれつきの違いで一族から追放された人たちの事が見直されるようになったの」
「良く分からないけど、なんで」
「ジェイナス校長の学校にいた子ども達は、みんな親から子へ遺伝した特長が原因で七家から追放された子どもなの」
「全員がそうなのか」
「正確に言えば、血筋で3族似内に属するもの。つまり、自分の子どもがそう判断されたら、自分の子ども全員と自分の父親まで。自分自身がそうなら、自分の兄弟、親、祖父、子ども、孫、までが対象になるの。すでに魔術を身につけていれば、特例が出るけど子どもにはそんな選択肢はないわ」
「……なんだそりゃ」
判断基準もいい加減だと思ったが、疑わしき者や関係者まで完全排除とは開いた口がふさがらない。
「理由は魔術を弱めるって血だって考えられているから。私の赤毛だってそうなのよ」
「毛の色が魔術に何の関係があるんだ」
「分からないけど、とにかく不吉なんだって。だけど、決闘の後から宮廷での態度が変わったわ。これって、シーグのおかげで。ううん、シーグにしかできなかった事なのよ。フィーちゃんがこの4年間で守っていたものを守りきって、理想に掲げて一生懸命やってきた事。それが、シーグのおかげで動き出したのよ」
「そうか」
とにかく、サフィリアにとって負担になっただけではない。そう考えられる事はシーグにとってありがたかった。

「だから、自分が来なかった方がよかったなんて考えないで。それに、時間をかければきっと良くなると思うの」
「どういうことだ」
「私だってね、最初に会ったときは同じようにフィーちゃんがつらそうにしてたの。そして、ベルテヌの後に、眠りについたの。そうしたら、次のルーナサには今みたいに普通に話が出来るようになっていたわ。この2年間で、ずっとたくさんの人と会えたり、ずっと遠くまで行けるようになっていったの。ジェイナス校長の時も眠りにはつかなかったけど、頭が痛んでいたかしら。年4回の深い眠りを何度も繰り返していくうちに、記憶が安定していくのね。だから、きっといつか昔と同じに戻れるわ」
しかし、シーグはそれを信じられなかった。魔術では狂気を取り払えないとジェイナスは言っていたからだ。それに。
「フィーが頭痛を起こすのは、初対面の人に対して誰でもってわけじゃないだろ。町を歩けば自然と人と会うからな」
「ええ」
「ベクターは大丈夫だったんだな」
「うん、そうだけど」
「子ども達や七家の連中。それにグレイルさんの場合は？」
「平気……だったわ」
「グレイルさんは、リーザと会った後に顔を合わせたんだよな？」
シーグがまっすぐ見つめると、リーザは居心地悪そうに目をそらした。
サフィリアが頭痛を起こすのは、自分に近い人間の場合だけだ。リーザはシーグと4年も一緒に過ごした。グレイルはリーザの父親だが、リーザの記憶の整理は先についている。グレイルと会ったのはシャープネスを受け取った時が最初だ。
ジェイナスはセリウスと近しく。セリウスはレイザーク時代の剣の師。そして、彼を紹介してくれたのはサフィリアだ。
自分と深く関係した人に近づくほど、サフィリアの封印は警告の

痛みを伝える。
間違いなく狂気の中心は自分だ。ロディウスの言った通りに。
そして、リーザが両手で顔を覆って再び涙を流し始めた。だから、その答えが間違っていないとシーグは確信した。

2章－123　未来に約束を

自分に関する記憶がちらつくほど、サフィリアを苦しめる。それなのに、なぜロディウスは天空の水盤に導いたのだろうか。それも、わざわざ眠りにつくことが出来るインボルグを選んで。

諦めろと、言いたいのだろうか。それとも、この程度で諦める覚悟なら今のうちに止めろと警告しているだけなのだろうが。

苛立ちにシーグは拳を握り締めた。顔を上げたリーザが再び泣き出しそうなのに気付いて力を抜いた。

「爺さんのやる事だから、何か裏があると思う。すでにヒントも用意されているんだろうな」

「ヒントって？」

「それが何なのか、見当もつかないけどな。だけど、手を伸ばせば届くような事か、考え方を変えるだけで気付けるようなことだと思う」

「どうして、そう思うの」

「爺さんは相手を歯噛みさせたり、悔しがらせたりするのが好きだからさ」

だから、ここで腹を立てたり慌てたりしてはロディウスの思うつぼだ。シーグは気持ちを落ち着けて、体をベッドに横たえた。

「クラトス・ビア」

唐突にリーザは呟いたので、シーグは顔を上げた。リーザは目にたまった涙をぬぐっている。

「レイザークで使われていた城砦の名称だ。何処でそれを？」

リーザは赤茶けた欠片を取り出した。サフィリアに調べるように頼んだレンガだ。

「フィーちゃんがこれを調べた時に出てきた名前なの」

シーグは舌打ちをした。どうやら、ロディウスの出した宿題にはまだ続きがあるようだ。

こんな遠まわしなやり方は本当にロディウスらしい。足元をすくいあげ、更に攻め立てるのが彼のやり方だ。陰険さも相当なもので、冥府の悪魔とは彼のことに違いないと何度も思った。実際に血も涙もないような事さえ平気でやる。恨む気持ちは薄れて感謝をするようになってきているが、尊敬する気持ちなどは到底もてない。

しかし、すべてが終わった時にはいつも何か理由や目的を知る事ができた。理不尽だと腹が煮えくり返り、不満や怒りが爆発しそうになったが、理屈と結果に関して言えば納得だけは出来る程度だ。そうでなければ、４年間も教えを仰ぐ事ができるものか。

「他にもね――」

リーザが続けようとした時、カランと小さな音がしてシーグは飛び起きた。リーザには聞こえなかったようで、不思議そうに首をかしげている。

「鳴子の音だな。扉が開いたら鳴るようにアイフェが仕掛けたやつだ」

「だけど、今は私とシー坊のほかには……」

そこまで言ってからリーザは顔色を変えた。その頃にはシーグはベッドから飛び降りて、脇に置いてある剣をつかんで部屋の外に駆け出していた。廊下に飛び出すと、薄暗い中でもサフィリアの金色の髪がすぐに分かった。壁に手をかけ、ふらつく足取りで歩いている。

呼び止めようと思ったが、シーグは言葉を出せなかった。近づく事をためらっていると、サフィリアは壁にもたれかかってずり落ちてくる。顔から床に落ちそうになったのを、シーグは駆け寄って寸前で受け止めた。

「フィーちゃん、起きたらダメじゃない！」

リーザは駆け寄ってきて、サフィリアの額に手を当てた。深刻な表情をしているので、ただ事でない事はわかった。シーグはサフィリアを抱き上げると、開いたままの扉に向かって歩き出した。

部屋の中は薄暗く、数え切れないロウソクの炎が燃えていた。甘

い匂いの香が炊かれていて、頭がぼんやりとする。床には銀色に光る複雑な文様が浮かび上がっている。中央に置かれたベッド以外には家具も何もない。

ぐったりとしたままのサフィリアをベッドに横たえると、うっすらと目を開いてシーグを見る。それだけで、サフィリアは苦しそうに顔をしかめた。シーグが後ずさると、サフィリアは手を伸ばしてシーグの腕を取った。

「リー姉から色々聞いたわ。私たちって4年間も付き合いがあったのね」

シーグが答えられないでいると、サフィリアは無理に笑顔を作っていた。

「そんな顔をしないで悪いのは全部私なんだから」

「フィーちゃん。寝てなくちゃダメよ」

それでも、サフィリアは体を起こそうとする。仕方なくリーザはサフィリアの背中を支えた。

「私が倒れたのは、天空の水盤で夢見をした後。そして、夢見は今でないとき、ここは違う場所。過去と未来にありうる無限の可能性を見るの。そこできっとあなたの事を見たのね」

「思い出したのか？」

「いいえ。これは推理よ。当時の私の行動、今の私の状態を考えていけば分かるわ」

サフィリアの全身は火がついたように熱い。全身に汗が浮いていて、苦痛の大きさを語っていた。しかし、それでも理論的な思考に揺らぎは無いらしい。

「そこで、あなたについて何かを知ってしまった。封印の正体はそれね」

自分が暴君となって大陸を滅ぼす。その辺りが妥当だとシーグには思えた。レイザークが滅亡した年、親しい人々が死んでゆき、人々が怨みを持って自分を見つめていた日々。世界が無くなってしまえばいいと本気で考えた事など数知れない。

「俺が来なければ、こんな事には……」
「違うわ。私が勝手に見てしまって、受け入れられず忘れたいと思っているだけ。現実にあなたがしたことや、あなた自身のことじゃないの」
そこまで話して限界が来たのか、サフィリアはリーザに寄りかかるようにして崩れた。
「それに、魔術で狂気は治癒できないの。記憶を取り払えるだけ。それも一時的な事。いつか、私自身が向かい合わないといけない時が来るわ。それに、封印を解いてしまえば何の問題もないの」
だが、その向こう側に狂気が封じられている。４年前にサフィリアの心を砕いた真の脅威が待っているのだ。どちらにしても待っているのは破滅以外には無いように思える。そして、発端となったのは自分だ。
「シーグ、自分を責めないで」
長く話したサフィリアは、胸を押さえてうつむいた。
「分かった。だから、もうしゃべるな。また目を覚ました時に聞くから」
しかし、サフィリアは首を左右に振った。
「いいえ、言わせて。もう一度目が覚めたときに、今の記憶が何処まで残っているか分からないから」
サフィリアは焦点の定まらない目つきで手を伸ばす。血の気を失った腕は陶器のように白い。見当違いの方向に伸びた手をシーグはつかんだ。すると、サフィリアは目を閉じて幸せそうに微笑む。
「この４年間、胸にぽっかりと穴が開いたようだったわ。でも、こうしていると違う。私は記憶を取り戻したいの。だから、私はあなたに感謝しなくちゃいけないくらいよ」
「分かった。もう悔やまない。だから、３人で約束した事、果たそうな」
「私は覚えていないわ」
サフィリアが悲しそうに目を伏せたので、シーグは慌てて先を続

けた。
「フィーが先生になって、リー姉は服が作りたくて、俺は世界中を旅して回りたい。3人揃ったら、そんな事ばかりを話していたんだ。フィーは子ども達に色々話したいから、リー姉は世界中の服を見たいから、俺は護衛役を引き受けるって。だからさ、今だって結構叶えられているんだ。記憶は失ったかもしれないけど、自分に正直にやっていったらいい。これからだってきっとうまくいく。だから、もう一回約束しよう」
一息に言った言葉ににサフィリアが小さくうなずいた。だから、シーグはほっと胸をなでおろした。
リーザはベッドの脇に立ててあった樫の杖をサフィリアにもたせた。握る力も無いので、リーザが手をつなぐようにして支える。そして、自分は懐からくたびれて、うす汚れたぬいぐるみを取り出した。
「それ、まだもっていたのか」
手のひらに乗る大きさで、ねずみかウサギかモグラかさえも良く分からない耳の生えた生物。リーザが一番最初につくったというぬいぐるみだ。
「だって、これが私のフィーリア（感応体）なんだもん」
魔術の道具と聞けば、例外なく高価な品物が思いつく。明らかに宝石や貴金属、装飾品と比べると見劣りがした。しかも、今にもバラバラになってしまいそうだ。
「女の子はね、本当に大切なものだったら、ボロキレや糸くずだって宝石よりも価値があるものになるのよ」
その癖に、やたらと高価なものを欲しがるのはどういうことなのだろうか？　シーグにはわけが分からない。
シーグの怪訝な表情を見ると、リーザは生真面目な表情を消して、片頬を膨らませた。
「本当に、男って何も分かってないのよねー」
リーザはあてつける様に言うと、サフィリアが小さく肩を震わせ

て笑っていた。
　剣と杖を組み合わせ、リーザのぬいぐるみがその上に乗る。シーグは軽く息を吸い込んで神妙な表情になった。
「1人よりも2人は勝る。故に2人に誓えば3人の誓いは誰にも妨げられない」
　それはレイザークに古くから伝わる言葉だ。法は未完成で、華々しい文化とも縁が無い。山と森に囲まれた未開の国と呼ばれたが、誓いを神聖なものとして、守り抜く意思だけは大陸の何処の国にも負けはしない。
「俺は、如何なる脅威にも立ち向かう」
「私は、いつか真実に向き合ってみせる」
「私は、ずっと3人で笑いあえるようにがんばるわ」
　お互いに誓いを確認した後、剣と杖とぬいぐるみを軽く打ち合わせて離した。誓いを終えると、サフィリアはぐったりと力尽きた。リーザがやさしくベッドに横たえる。
「シーグ、リーザ。ずっと私の事を気にかけてくれてありがとう」
　最後にそういうと、サフィリアは力を失ってぐったりとなった。眠りについた、というよりも気を失ったというほうが正確だろう。しかし、その表情は穏やかだった。
　闇の中で燃えるロウソクの炎と、窓から差し込む星の光が、誓いを結んだ3人を見守っていた。

　2章　世界の要　完
　3章　一撃必殺の戦士　に続く。

あとがき、反省、目標とか色々

ここまで読んでくださった皆さん。ありがとうございます。
ここから、いきなり読もうと思っている方、ネタバレな所があるのでご注意ください。

長い長い二章がやっと終了しました。自分でもここまで長くなるとは思っていませんでした。合計１２３話。約５ヶ月。現実世界で考えても相当長い……。決闘を申し込んでから、始まるまでも現実で８０日ですね。本当にずいぶんと長い事お待たせしました。

ですけど、いい事もありまして。１２３話での３人の誓いの言葉。あれって、数字が並んでいるおかげで思いついたんです。元は「２人は１人よりも勝る」。聖書の言葉だったと思います。

反省するなら、湖上でのエピソードを入れたのが原因と思っています。ガリウスとの決闘で重要になる間合いに関する話。いきなり、効果範囲の話でガリウスとの決闘が始まると、果たして皆さんに通じるかと悩んだ挙句いれる事にしました。火の玉やら雷撃が飛ぶのは一章でもありましたが、ウーンズとかいう魔術は初登場。初登場でいきなり、上位のクリティカル・ウーンズが出てくるのはどうだろうか？　と思ったからです。

陸上でやると、どうにもうまい組み合わせが思いつかなかったせいで湖での三連戦となったわけです。その分、学校でのチュートリアルも長引く。悪循環になってしまいましたね。

最初のプロットには無いものを入れたので、書いている途中で『決闘前に負けるかも知れん（汗）』と半ば本気で不安になってました。

プロットの詰めの甘さ、設定やルールを物語の中で説明するのが難しさ。それらを痛感しました。
他にも実際に、魔術の基本的なルールもたくさん出過ぎたかな、と思っています。

＋遠ければ弱く、近ければ弱い。
＋魔術の後には隙が出来る。

そして、七家の特殊の陣形や秘儀、主要人物の持っている特殊な能力。

＋ロング・レンジ・ギムレット
＋セブン・パワー・インテグレーション
＋ベクターのホカホカのご飯や、ワイバーンを持ち帰り出来る秘儀。
＋ブラストの一族の、防御壁越しに火や雷を打てる秘儀。

が、色々出ています。皆さん混乱は無いでしょうか？　一章の方が応用、例外の能力を当たり前のように使う。二章のほうがむしろ、魔術の基本事項が多い。……普通は逆なんでしょうね。
もうちょっと、順序だててやるべきだったかな、とか純粋に数減らした方がよかったかな。と、試行錯誤の真っ最中です。そもそも、作者が矛盾に気付いていないなんて事が、……ものすごくありそうですからね。

††††††††††††††††††††††††††††

次に、批評、感想の中から特に守ろうと思った出来事を書き出します。

＊２０００字での更新にこだわりすぎ。
＊そのために、題名を無理やり着けた感じがする。
＊部分、部分描写が足りていない気がする。急ぎすぎてはいないか？

＋目標

日にちを置いてもいいから、一区切りで話をアップする。

作者の更新ペース。また、アクセス数から必要な章と興味を引く章。よけいだった章を勉強するために細かい区分けを行ってきましたが、かえって自分の首を絞めている結果になったと思いました。現状では二章よりも一章の方がなるほど、と思えることが多いんですね。

それに、何処に何が書いてあるか、題名から調べるのが難しい。そんな意見もありました。これは、本当にやめたほうがよさそうです。

＊決闘までが長すぎて、ずいぶんと待たされた。

＋目標

長い目標を掲げた場合でも、短い目標を明確にする。

３章では、２章で匂わせていたとおりに、戦争が始まる予定です。ものすごく長くなりそうな章です。なので、章の中で部に分けて、目標を最初に分かりやすく提示したいと思います。

四天王が１人ずつやってくる理由や、たびたび敵陣営の様子が描写されたりする理由が分かりました。見飽きてしまうと、バカらしいなーなんて冷めた目で見ていましたけど、とっても新鮮な展開ですものね。お約束というのも大切なんだなー。

長い目標に向かって、小出しに横槍が入る事の無いよう。何を目標にするか分かるように、３章は突貫工事でプロットを書き直して

みました。今後、どんどん固めていく予定です。破綻しないように頑張ります。

＊読者に必要な設定と、作者に必要な設定を区分けする。
＊プチエピソードばかりで退屈。

十目標

これに関しては、たぶん繰り返しそうな気配が……。実際に、ストーリーを組むたび、同じ指摘をされています。
純粋なプロットの甘さが出ているんでしょうね。
色の話や、遺伝疾患を追い出す気質などは最終的に必要なんですけど。出すタイミングが調整できたらもっと良くなったかもしれません。他にも、前後を逆にした方が分かりやすかったエピソードなんかもありそうですね。
そう言えば、「なろう」とは違うサイトで、昔評価してもらった作品で「伏線のモザイク画みたい」。つまり、小出しに小さなエピソードが連続して小さく作用する。なるほどと思うけど、読みにくい。なんて指摘をされた事もあります。
そもそも、この章で出す必要ない話もあったかもしれません。その辺りは、下に書いてあるアクセス数を参考にこれからも考えを深めたいと思います。
とにかく、プロット作成が3章の目標でしょうか。
頑張ってみます。何か気付いた事があれば、助言お願いします。

††††††††††††††††††††††††††††††

以下、アクセス数から来る反省など書いておきます。「電家の放蕩」さんの感想の返信で書いているデータがそもそも私の勘違いだ

ったり、８月、９月時点での話をそのまま書いてしまったようです。

＋たとえば、１章－５　□×○△、１章－１１　チューって何？、１章－１２　余計な事。これらはアクセス数が前後に比べて段違いに高いです。

と、感想の返信で書いていましたが、これを書いたの１１月時点では間違いですね。

８月段階では実際にものすごい差だったのですが、全体のアクセスが平均的に高くなって隔たりがなくなったようです。

その前の「戦闘開始」が異様に低いようです。退屈な話だったのでしょうか？

＋「２章－４１　その名はシャープネス」これはアクセス数が周囲より３０％以上多いです。ですがこれ以降、特に「最近引っ張りすぎでは？」の指摘を受けた以降の章では、上下の幅そのものが少なくなっている。

この二週間の間で全体が上昇して、差は低いところと比べても１０％～２０％程度です。

＋「魔術講義」で題をふっている章の場合は、最初は前後より３０％増し、２と３はほとんど変化なしです。戦闘に関係する説明は読み返す人がいる。だけど、話の中にまぎれていて、しかも決闘と関係のない所は前後と比べて平坦、あるいは下回る。つまりテンポを悪くする章、あるいは後回しにしてもよかったかもしれない章、そもそも蛇足だった章、なのかもしれません。

これも、８月時のデータを使っていました。でも１が高くて、２と３が埋もれてしまったのは確かですね。説明を出すタイミングが良くなかったのかな？

＋「2章－15　騎士の町並み」。これも「町の描写は難しかった」との指摘を受けました。アクセス数ではほかよりも20％程度下回っています。皆さんの指摘が数字から読み取る事が出来て、学ぶ事が本当に多いです。

これも差は縮まりましたけど、少ないのは確かですね。こういう描写好きなんですけど、我慢しるべきかもしれない。

†††††††††††††††††††††

＋1章の最初を見て引き返す人は4割程度。これは、今も3ヶ月前も変わりませんね。

そういえば、出だしに用語が一杯出てきて分かりにくいという指摘もありましたっけ。

＋2章ー62「爆裂」

周囲と比べて、＋700程度。単純でも戦闘シーンは延びるのでしょうか。それとも、複雑じゃない戦闘で間抜けっぷりが発揮されているからでしょうか？

＋全体的に8月ごろに比べて緩やかな右肩下がりになっています。

以前はもっと尖った起伏があって、それはそれで面白かったのですが。

時間を置いて、更新してみると違いが見えてくるかもしれません。それとも、逆に安定してしまうものなのでしょうか。

最新話の辺りに変化がありそうですね。数そのものが少ないけど、差も激しい。

＋一章はベクター視点になったところが、アクセス低下。みなさん、ベクターは嫌いですか（笑）

２章－５８「王の法」でずいぶんと落ちていますね。

ベクターは性格がお堅いし、自分の考えに沈みこむから、純粋に読みにくい文章になってしまうんでしょうか？

説明がだらだら続く文章になっている、というのも理由のひとつかもしれません。だけど、私のもともとの文章ってこんな感じです。「小説家になろう」サイトで書くようになってから、ライトノベル調な文章で読みやすかった、という批評があったので、少しは読みやすい文章も書けるようになって来ました。

まあ、それでも堅いに分類される文章でしょうね。

＋とは言うものの、全体的に誤差の範囲を超えていないような気もしますね。ここまで、色々考えてなんですが。難しく考えて、理由付けを無理やりしたくなっている作者の問題、っていうのもありそうです。

もっと時間が経てば、差が見えてくるのでしょうか。なぞです。

＋でも、一挙にアクセスが落ちている所は、納得が出来ますね。展開が無い、読みにくいなどが原因でしょうか。

以下に、各章ごとのユニークアクセスを記載しておきます。

コンマ区切りのＣＳＶです。エクセルで展開できる形式だと思います。

こういうものは２つ以上のものを比較しないと意味があまり無いので、また折を見てアップします。

話別アクセス解析，２００８／１１／１７

，

第１部分：１章　誓約の湖　，２０６４０
第２部分：１章－２　ノコギリ歯の死神，１２２０５
第３部分：１章－３　無邪気な暗殺者，１０９６８
第４部分：１章－４　かくれんぼ，８８４５
第５部分：１章－５　□×○△，１０９７１
第６部分：１章－６　青マントの事情，８４０３
第７部分：１章－７　２つの１番，１０４９２
第８部分：１章－８　戦う権利，９０４５
第９部分：１章－９　魔術講義，９７３１
第１０部分：１章－１０　戦闘開始，７４９５
第１１部分：１章－１１　チューって何？，９１３３
第１２部分：１章－１２　余計な事，９０６０
第１３部分：１章－１３　フィー！，８８７３
第１４部分：１章－１４　空の死神，８００４
第１５部分：１章－１５　雷の矛先，７６１５
第１６部分：１章－１６　命取りの座，８６６６
第１７部分：１章－１７　ガミガミ婆さん，７４７４
第１８部分：１章－１８　師弟の戦法，６６４５
第１９部分：１章－１９　士気低迷，６５９５
第２０部分：１章－２０　恐怖の向こう側，７７４０
第２１部分：１章－２１　ィヤァァァァー！，７８７８
第２２部分：１章－２２　唇の魔術，８８５２
第２３部分：１章－２３　ひやっほう？，７８３７
第２４部分：１章－２４　誓い新たに，７９１８
第２５部分：修正・更新などのお知らせ，５４３７
第２６部分：２章　世界の要，８２５１
第２７部分：２章－２　死神の夜，６２９２
第２８部分：２章－３　殺した人，６０３０
第２９部分：２章－４　張り詰めた朝，５２７７

第３０部分：２章―５　魔術の素質，５９３６
第３１部分：２章―６　結んで、開いて，５７６１
第３２部分：２章―７　恐れられ、慕われて，５７２８
第３３部分：２章―８　雷神の封土，４９２６
第３４部分：２章―９　なんで？，４８４６
第３５部分：２章―１０　三世帯大家族兎林檎，５４６６
第３６部分：２章―１１　生活指導，５３９６
第３７部分：２章―１２　努力と才能，４６８２
第３８部分：２章―１３　理屈と道理，５１７４
第３９部分：２章―１４　英知の都，４９７１
第４０部分：２章―１５　騎士の町並み，４２９２
第４１部分：２章―１６　青空授業，４７９４
第４２部分：２章―１７　ない事ない事，４１７０
第４３部分：２章―１８　巨大化、変身、光線，４７４６
第４４部分：２章―１９　歩く恥知らず，４９７４
第４５部分：２章―２０　成敗ー！，４７６６
第４６部分：２章―２１　人見知り，４７４５
第４７部分：２章―２２　恐怖の正体，４６５４
第４８部分：２章―２３　ダメだしシンシア，４６７６
第４９部分：２章―２４　水晶の魔女，５４１２
第５０部分：２章―２５　前哨戦，４７５５
第５１部分：２章―２６　デスマッチへの招待，４１９４
第５２部分：２章―２７　色々と，３９５５
第５３部分：２章―２８　野心と名声，３９１２
第５４部分：２章―２９　公開処刑の内情，４５６１
第５５部分：２章―３０　空気の壁，４３５６
第５６部分：２章―３１　隙は作るもの，３９２５
第５７部分：２章―３２　力の性質，３９４５
第５８部分：２章―３３　できる事を，４４９７
第５９部分：２章―３４　七家の二人，４４９３

第６０部分：２章－３５　白の道、赤の道，４３３４
第６１部分：２章－３６　シー坊とリー姉，４５２９
第６２部分：２章－３７　魂の一撃，４４５０
第６３部分：２章－３８　父と娘と祖母，４２８９
第６４部分：２章－３９　剣と技，４３８４
第６５部分：２章－４０　火神ゴヴァノン，４５２０
第６６部分：２章－４１　その名はシャープネス，５１７７
第６７部分：２章－４２　大切な事，４３３４
第６８部分：２章－４３　魔術講義２，４３６５
第６９部分：２章－４４　探求と殺戮，４４１０
第７０部分：２章－４５　紳士の心得，４５１３
第７１部分：２章－４６　チュンチュンとコケコッコー，３６６２
第７２部分：２章－４７　おバカさん，４０７１
第７３部分：２章－４８　プルーフの城砦，４０１０
第７４部分：２章－４９　完璧な……，３４７０
第７５部分：２章－５０　脱出作戦？，３９５０
第７６部分：２章－５１　言葉は剣、装束は鎧，４０４３
第７７部分：２章－５２　親衛隊・暁の星，３７３７
第７８部分：２章－５３　武器調達，３９９４
第７９部分：２章－５４　冴えたやり方，３７２５
第８０部分：２章－５５　逃走経路，３３０９
第８１部分：２章－５６　冥王カラナウス，３９７４
第８２部分：２章－５７　戦の季節，３７８７
第８３部分：２章－５８　王の法，３２９９
第８４部分：２章－５９　王の使命，３８０５
第８５部分：２章－６０　ウィングス通り，３８３４
第８６部分：２章－６１　シャックリと絶壁，３８４７
第８７部分：２章－６２　爆裂！，４５７２
第８８部分：２章－６３　４度目の春，３７７７
第８９部分：２章－６４　ケダモノー！，４０３４

第９０部分：２章－６５　気付かせる事，４３２８
第９１部分：２章－６６　趣味と主張と哲学，４２２５
第９２部分：２章－６７　リボンの真相，３７００
第９３部分：２章－６８　馬力を入れて，４０５８
第９４部分：２章－６９　女心は理解不能，３２２４
第９５部分：２章－７０　魔術講義３，３６１６
第９６部分：２章－７１　致命傷の魔術師，３７０２
第９７部分：２章－７２　一致団結，３６５４
第９８部分：２章－７３　眉毛、髭、鼻毛，３６９８
第９９部分：２章－７４　死行の成果，３８１１
第１００部分：２章－７５　過激な発言，４１８３
第１０１部分：２章－７６　お茶の時間，４０１４
第１０２部分：２章－７７　せきよく、しきま？，３９３０
第１０３部分：２章－７８　無理、無茶、無謀，３１３９
第１０４部分：２章－７９　ちょっと悔しいから，３９７２
第１０５部分：２章－８０　必殺の武器と絶対の防御，３６１２
第１０６部分：２章－８１　向かう所敵だらけ，３４１７
第１０７部分：２章－８２　お医者のお仕事，３４６２
第１０８部分：２章－８３　デリカシー，３４４４
第１０９部分：２章－８４　宝石と魔方陣，３３４１
第１１０部分：２章－８５　一撃必殺の心得，３４１８
第１１１部分：２章－８６　銀ババ、三ババ，３１５２
第１１２部分：２章－８７　チェイン・ライトニング，３１２２
第１１３部分：２章－８８　ペンペンとペタペタ，２６６２
第１１４部分：２章－８９　銀バエの女性，３５４１
第１１５部分：２章－９０　私は信じます，３２７４
第１１６部分：２章－９１　ギムレットとクロスボウ，２９６８
第１１７部分：２章－９２　炎＋雷　ＶＳ　風＋水，２９０７
第１１８部分：２章－９３　カラシニコス爆弾，２７６８
第１１９部分：２章－９４　ももかじり，２４３３

第１２０部分：２章―９５　２０を過ぎたら……，２７６２
第１２１部分：２章―９６　シャトランジのルール，２６３１
第１２２部分：２章―９７　一時しのぎ的、臨機応変，２８０４
第１２３部分：２章―９８　発想の転換，２４８９
第１２４部分：２章―９９　守るべきは，２７４６
第１２５部分：２章―１００　ちょっくら、行って来るわ，３１６７
第１２６部分：２章―１０１　風の使い方，２５９１
第１２７部分：２章―１０２　見た、やった、出来た，２６７０
第１２８部分：２章―１０３　手旗とガラガラとおっさん，２６０５
第１２９部分：２章―１０４　重力反転，２９６３
第１３０部分：２章―１０５　波状攻撃，２２０１
第１３１部分：２章―１０６　執念の傷，２５８８
第１３２部分：２章―１０７　見えすぎちゃって困る，２９８１
第１３３部分：２章―１０８　お祭り騒ぎ，２５３５
第１３４部分：２章―１０９　ヒョッヒョッヒョ，２４４９
第１３５部分：２章―１１０　霧と風と，２６４５
第１３６部分：２章―１１１　嘘をつく時には，２０７１
第１３７部分：２章―１１２　習慣の違い，２２８７
第１３８部分：２章―１１３　ヴァンガード開始，２７５１
第１３９部分：２章―１１４　戦闘距離１０歩，２５２６
第１４０部分：２章―１１５　風が背中を，２５１４
第１４１部分：２章―１１６　心を攻める影の刃，２５８１
第１４２部分：２章―１１７　色彩のひずみ，２６８０
第１４３部分：２章―１１８　暴虐の報い，２８９８
第１４４部分：２章―１１９　デッド・ロック・タクティクス，２５９２
第１４５部分：２章―１２０　世界の悪意，２５９１
第１４６部分：２章―１２１　法の下、王の名において，２８０２
第１４７部分：２章―１２２　狂気の中心，２３９８

3章　一撃必殺の戦士

戦いの極意は一撃必殺。敵の急所を一撃し、戦闘不能にすればよい。

炸裂するほどの威力があれば、敵の士気までも粉砕する事ができる。

心が果断であれば、恐怖に惑わされず神速の行動で要を捉える事ができる。

千歩の距離があるならば、権謀を働かせ誅り事によって葬るべし。

百歩の距離があるならば、敵を罵倒し口舌によって翻弄せよ。

十歩の距離まで迫ったのなら、理想の間合いで対峙し、敵の攻撃を完封せよ。

一歩の距離ならばためらう事はない。必殺の一撃を叩き込むがよい。

戦いが膠着したなら、一瞥の視線に洞察を働かせ、一瞬の狭間に権謀を絡め、一挙の行為で覆せ。

時の期をとらえることが出来れば、敵の虚をつき速攻する事ができる。

攻撃が多段であれば思い通りに戦況を動かし、敵を翻弄する事ができる。

緩急を付けた波状攻撃ならば消耗を誘い、疲弊の頂点で敵を蹂躙することができる。

それでも勝てないとわめいたところで、ワシの知った事ではない。

いちいち結果を保証してもらわないと何もできんのか？

――政戦両略の指し

手。イービル・スレイヤーのロディウス・アクテ――

†††††††2章までのあらすじ†††††††

『シージペリラス（命取りの座）』

それは動乱の時代には、邪悪を制し、戦を収め、この世に永く平和の時代を築き上げる救世主である。

しかし平和の時代には、災厄の星の下、冥府の数に導かれ、この世に邪悪と乱の訪れを知らせる先触れとなる。

メティス王、シェンナ・グラドリカの治世にあって、世界は安定の時代を迎えていた。そんな時代であるがため、レイザーク王国の公子として生まれたシージ・ペリラスは、暴君として育つのではないかと恐れられていたのである。故に彼が死に、国さえも滅んだという知らせは世界中に安堵の吐息をつかせたほどである。

しかし、それより4年。レイザークのシージ・ペリラスは『シーグ』と名前を変えて、『天空の水盤』に現れる。そして、魔術師軍団メティオ・スマッシャーと衝突した。

メティオ・スマッシャーはわずか7人で２００人が立てこもる城砦を一瞬で陥落させる。太陽が降りてきたかと思うほどの火球を生み出し、巨石を跳ね返す防護を備え、魔境の怪物を自在に操るのだ。

彼らは、辺境の封土『天空の水盤』を支配しようとたくらんでいた。それも軍団長ガイス・ジュサックが封土に住む魔術師、『サフィリア』を手に入れるためである。ガイスはそれまでも数多くの結婚をしていた。しかし、妻は決まって2ヶ月くらいで死亡する。理由は病気や事故。いい訳は最もだが、そこに邪な意思が存在しないはずは無い。

シーグは天空の水盤にいた2人と共に、ガイス・ジュサックに立ち向かう。

1人はアイフェ・サムハイン。銀色の髪と湖のような青い瞳を持つ、妖精のような可憐な少女。だが、サムハイン（死神）と名づけられ、暗殺者として育てられるという過酷な過去があった。

もう1人は、サフィリア・フェルナンディ。輝く金色の髪と、エメラルドグリーンの瞳。16歳という若さで最大の封土、『天空の水盤』の主となった魔術師である。

『天空の水盤』を支配する魔術師は、水盤の見者と呼ばれこの世で知らぬ事はない。失われたものや隠されたもの、遠く離れた場所、あるいは過去や未来さえも水盤の中に見ることが出来るのだ。しかし、水盤の見者は世界の狂気を覗き込み、心が病み犯される危険と常に隣り合わせである。サフィリアも4年前、12歳の時に狂気に取り付かれ、それ以前の記憶があいまいとなっていた。しかし、魔術の冴えに曇りは無い。

3人は力を合わせて、メティオ・スマッシャーを撃破する。

戦いが終わり、「何故自分に味方をしてくれるのか」と聞くサフィリア。

シーグは言葉を濁し、「あんたの一族に恩があるから」と答えた。

シージ・ペリラスを出現を予知したのは先代の見者、サフィリアの祖父である。災厄の象徴であると、産まれてまもなく殺されるはずだった自分を助けてくれたのが、サフィリアの祖父だったからだ、と。

実際には、シーグとサフィリアは幼馴染であった。しかし4年前、記憶を封じられたためにサフィリアからは、シーグの記憶が失われていたのである。しかも、「狂気の中心はお前だ」と、師であるロディウス・アクテから言い渡されてもいた。そして、師は「サフィリアには過去の思い出の中にも、未来の道行きにも狂気が待ちうけている」という予見じみた不吉な言葉を残していた。

自らは過去を語らず、サフィリアを守ろうと決意するシーグ。

しかし、シーグは自分がどのような存在であるかを心得ていた。生まれながらに恐れられ、疎まれ、命を狙われる。そんな星の下、生きてゆくのがシージ・ペリラスの定めなのである。

メティス王国を訪れたシーグはアイフェにそっくりな少女、アイシャ・ディスペリアと出会う。彼女は、１０代半ばの年齢でありながら、魔術師を統べる七家の一つディスペリアの当主であった。シーグにことさらに興味を示すアイシャ。そして、付きまとう彼女を振り払ったという些細な理由から、リーガル・バックラー卿、ガリウス・グラムファーレに決闘を挑まれてしまう。

決闘の方式は『ヴァンガード』。最前線の意味を持ち、あらゆる手段が許される完全決着の決闘方式である。

サフィリアはシーグを庇い決闘を取り消そうとする。しかし、シーグ自身が手袋をガリウスに投げつけて決闘を成立させてしまった。名誉を求めて決闘を挑んだシーグに、サフィリアは呆れはてて去って行った。

しかし、サフィリアの生徒であるシンシア・フェルナンディからガリウスの事を聞かされる。グラムファーレは結界陣の一族、しかもリーガル・バックラー（王の盾）という誰も破った事のない防御の魔術を使う。更に、アヴェンジャー（報復者）という恐るべき剣を携えた王国最強の決闘者なのだという。

勝ち目はないと断言するシンシアに、シーグはガリウスの弱点をゆっくりと語った。一瞥さえも洞察とし、刹那のうちに勝機をつかむのがシーグの戦法。イービル・スレイヤー（邪悪を制するもの）と呼ばれたロディウス・アクテの教えだからだ。

シーグに勝利の可能性を見たシンシアは、サフィリアを必ず連れ戻す事を約束し、魔術の剣を手に入れるためにリーザ・オーメントを訪ねるようにと提案した。

リーザはサフィリアの親友であり、シーグの幼馴染である。リー

ザはサフィリアから魔術師の手ほどきを受けて、プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）と呼ばれ、魔術の品を作り出すエンチャンター（付与術士）となっていた。４年前、無言で去っていったシーグの事を忘れずに、いつか戻ってくるはずだと信じていた。また、戦士になるといった言葉に疑いも持たず、シーグのために剣を鍛えていてくれたのである。

剣の名は『シャープネス』

鋭い刃、隙のない洞察、明敏な切れ者。その名の意味は様々だが、神速果断を戦法とするシーグのために鍛えられた剣であった。

シャープネスを手に入れた後、シーグはアイシャの親衛隊を自称する一団に立て続けに襲われた。暴徒まがいの彼らをリーザの機転で逃れたものの、街を歩いている時にも火球と防護を得意とする魔術師に遭遇する。

そのすべてを撃破して、サフィリアのいる学園地区にたどり着いたシーグ。そこで、ロディウスの弟子であったナイト・ロード卿、ジェイナス・マードックと会う。彼から魔術の特性とサフィリアの記憶について聞き、やはり自分が狂気の中心であるとシーグは再認識した。

そして、ジェイナスは学校もまた包囲されている事を告げる。今度は、正規なアイシャの親衛隊。戦時には最大の戦力となる『銀の魔女』であった。

しかし、それはリーザの予測するところであった。湖上での戦闘を見越して、すでに準備を万端に整えていたのである。しかも、学校にいる子ども達まで一緒に行くという。最年長では１２歳のシンシア、アイフェは１０歳。最年少では８歳だった。

絶望的と思われた状況だったが、リーザとサフィリアはこの日のために練った戦術を使い。シーグはとっさの機転を生かし、大陸最大の戦力といわれた『銀の魔女』を撃破し、決闘場に到着する。

ヴァンガードはついに始まり、ガリウスと対峙するシーグ。しかし、リーガル・バックラーの守りは固い。圧倒的な攻勢にありなが

ら、自分の方が傷つく事に怯むシーグ。
しかし、その時風が背中を押した。そして、過去のサフィリアの言葉を思い出し、再びガリウスに立ち向かうシーグ。洞察力を生かし、ハッタリを効かせながら、一手ずつガリウスを追い詰めてゆく。ガリウスの卑怯な手段や、観客からの罵声にも負けずに、ついにシーグはリーガル・バックラーを打ち砕いたのであった。
勝利したシーグに恩賞は思いのままだというシェンナ王。しかし、シーグは爵位や領地を自ら断った。求めるものは、ただ一つ『剣の法廷』に挑む権利だけであった。
「我が生まれ、我が故国、そして我が慕うものを侮辱し、虐げる者はすべて我が剣の敵となる」
シーグは群衆の前でそう宣言し、異議のある者のいかなる挑戦も受けると宣言した。彼が求めたのは地位ではなく、自分と自分の周りにいる人々が、『シージペリラス』に対する怨嗟に巻き込まれないようにする事だったのだ。

その3日後、サフィリアは苦痛に襲われていた。狂気の中心であるシーグが、サフィリアの記憶をよみがえらせつつあったからだ。狂気を封じ込めるために、儀式を行い再びサフィリアの記憶を封じ込める事になった。
しかし、サフィリアはそれが一時的なことに過ぎないこと、いずれ狂気に立ち向かわなくてはならないことを告げる。そして、過去を忘れ去るのではなく、昔のように戻りたいと。
そして、シーグ、サフィリア、リーザはそのためにお互いに力を尽くす事を誓い合った。未来を占うインボルグの夜に。

†††††††††††††††
††††††††††††††††

1部　探知の真髄　プロローグ

「――そして、湖にてエリス・グラムファーレを破り、アクリアエ・スリスにてリーガル・バックラー卿を打倒したわけですな」

王城フォルナージュの薄暗い会議室に男にしては甲高い声が響いた。耳障りなキィキィ声といってもよい。それを発するのは、１０歳ほどの子どもの身長に、禿げ上がった頭という異相の男だった。立ち上がると、椅子に座っている時よりも低くなる。そのため、わざわざ用意してきた台に乗っての報告である。

「これが、決闘の日にシージペリラス（命取りの座）が上げた戦功ですぞ」

「ゲイル卿、それは本当のことなのか？」

結界陣の一族、グラムファーレ家の長老が疑う様子を隠さずに言った。

「最後の２人に関しては、良く心得ていらっしゃるはずです。私に代わって報告してくだされば、より正確でしょうなあ」

ゲイルがしたり顔で言うと、長老は顔に血を昇らせた。

会議場で机を囲んでいるのは９名。魔術の七系統をつかさどる七家の代表者がそれぞれ１人ずつ。一族を象徴する色のローブを身につけて座っている。略式の王冠をつけたシェンナ・グラドリカは退屈そうに椅子に身をあずけながらあくびを漏らし、発言するつもりが無い事を示した。それを確認し、グラムファーレの長老は口を開く。

「しかし、にわかには信じがたい。早朝から、正午にかけてのわずかな時間で、メティスの名だたる魔術師達を倒したというのか」

「更に言うなら、七家の誇る秘儀、陣形、親衛隊をことごとく打ち破ってですなあ」

ゲイルの嫌みったらしい言い方に、２名が憎々しげにゲイルを睨む。４名は無表情を通し、残る２人は楽しそうに笑みを浮かべてい

る。
　睨み付けているのは、プロテクション（防護）のグラムファーレ。ブラスト（噴出）のフィーンド。
　先日の戦いで、シージペリラスに最も手ひどく痛めつけられた一族の長である。
　戦時には最高の戦闘力で王城を守護する、はずであった親衛隊『銀の魔女』。魔術の品と、一族の秘術と奥義を使い、もてる最高の技術を駆使しながら完全に敗北した。しかも、相手の武器はカラシや投網であり、全員が年端も行かぬ少年少女。それも、大半が１２歳未満の子どもの寄せ集め。しかも、七家が魔術を弱めるものと決めつけ、追放した子ども達だったのだ。
　大陸最強の戦闘力として、名をはせていた七家の権威は地に落ちたといってもよい。
　無表情を通す４名も内心は穏やかではなかった。
　たとえば、サモニング（召還）のマードック。ディテクト（探知）のフェルナンディ。
　彼らは自分達の立場が悪くなるのを恐れ、口を閉ざして無反応を通している。なぜなら一族の、それも重要な地位にあるものがシージペリラスに助力していたからだ。
「損害は計り知れませんぞ。実際問題としてどうなのですか？」
　ゲイルは王国の財政をつかさどる大臣らしい発言をした。真面目な話をするときにはキィキィ声ではなく、抑揚の聞いた吟遊詩人のような声になる。
「マントは使い物になりません。セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）は修復不可能です」
　エンハンス（向上）を司るランカートの長老は感情を交えぬ声で言った。
「アン・タッチャブル（触れられざるもの）も同じく破壊されました」
　フォルナージュの代表者、ベクターが静かに続けた。２０代中ご

ろの男性で均整の取れた体格、端整な顔立ち。地味な魔術師のローブをまとっているよりも、着飾って宮廷の中心にいる方が似合っていそうな青年だった。

毅然として話す青年をうっとりと見つめているのは、１０代も半ばの少女。銀色の髪に青色の瞳。ぬけるような白い肌に、紅を塗ったような赤い唇。イリュージョン（幻覚）の一族の代表者アイシャ・ディスペリアであった。

ベクターの発言を聞いて、退屈そうに姿勢を崩していたシェンナ王は顔を上げた。ゲイルもトカゲのように大きな目をきょろきょろさせて、会議場の変化を油断無く観察している。

「しかし、リーガル・バックラー（王の盾）、アヴェンジャー（報復者）は修復が可能です」

それを聞いて、フィーンドとグラムファーレの長老は安堵の吐息をついた。

「ベクター卿、修復作業はすぐに終わるのでしょうな？」

「いいえ、時期を失ったために、完了はルーナサ（花祭り）の後になる事でしょう」

「な、なんだと！」

ベクターが淡々と言うと、今度はグラムファーレの長老が怒鳴った。こちらは、怒りで顔がどす黒くなっていた。

「リーガル・バックラーなくして、陛下の御身は誰が守るのだ」

無言のままベクターは答えない。それを見て、フィーンドの長老が額に溝のような皺を作った。

「わざと遅らせるつもりではあるまいな」

それを聞いてフェルナンディの長老は呆れたように首を横に振り、ランカートの長老は机に視線を伏せた。マードックの長老は用心深く両者の対立を見守っている。

これを期にフォルナージュ家の権限を広げようと、ベクターがたくらんでいる。いきり立ったフィーンドとグラムファーレの長老だけが、自分達の妬みから出てきた考えが正しいと信じ込んでいるの

だ。
「ベクター卿、何を企んでいるのか正直に――」
「静まれ」
ずっと口を閉ざしていたシェンナ王が、突然口を開いた。
「で、ですが陛下。魔術に関しては我々の領分ですぞ」
「そうですぞ。これは、七家の問題なのです」
「黙れと言っている」
シェンナは不機嫌に言って、2人の長老を沈黙させた。
「星の巡りが合わぬのだ。そうだろう、ベクター」
長老たちは驚きの表情で王に注目している。会議場に張り詰めた沈黙が漂った。
「ディテクト（探知）、エンチャント（付与）、プロテクション（防護）はインボルグ（収穫祈願の祭り）とルーナサ（花祭り）。イリュージョン（幻覚）、サモニング（召還）、ブラスト（噴出）は、ベルテヌ（夏の到来）とサムハイン（死神の夜）にそれぞれ最大の効果を発揮する。半年毎に星回りによって効力が増減する。そうだな？」
「はい、その通りです」
知識を披露する王に返事できたのはベクターだけだった。長老達はシェンナが突然魔術の知識を披露したことに唖然としていた。アイシャは相変わらずベクターをじっと見つめている。
「ならば、ベクターに非はない。むしろ決闘のすぐ後。インボルグの前に修復の依頼を出さなかった側の責任を問うべきだろうな」
シェンナに痛いところを突かれて、フィーンドとグラムファーレの長老は黙り込んだ。助けを求めるように会議場を見回したが、加勢してくれるものは誰もいない。2人の長老は勢いを失って椅子に腰を下ろした。しかし、口惜しさがそのまま顔色に表れたままである。
声も無く笑う少女にいち早く気付いたのは、シェンナ王とゲイルだった。ベクターはわざと気付かないふりをして正面だけを見つめ

ていた。すると、少女は椅子ごとベクターのそばに寄って、青年の手に自分の手を重ねた。
「アイシャ様、今は会議中ですよ」
咎める厳しい口調で言ったベクターをアイシャは無視して続ける。
「ベクター卿。私、とてもいい案が浮かびましたの」
アイシャの発言に長老たちはそろって、警戒の表情を浮かべた。ゲイルとシェンナは興味深そうに注目しており、無表情なのはベクターだけとなった。
「ねえねえ、聞いてくださる？」
我がままをいう幼児のように体を揺らして、アイシャはベクターに取りすがる。
「アイシャ様。名案であれば全員に聞いていただくべきでしょう。ゲイル卿も気にしておられる」
「あー、いやー。私は別にごゆっくりしていただいても構いませんが」
ふざけた調子で言うゲイルだったが、ベクターが目を細めると、大げさに咳払いをした。
「うむ、いけませんぞ、アイシャ様。ベクター卿も『今は』とおっしゃっておられる。そういうことは、会議が終わってからごゆっくりと――」
キィキィ声で言ったゲイルだったが、自分に刺さる６つの視線を受け止めて口を閉ざした。ただし、目は笑っている。
「それで、名案とは？」
グラムファーレの長老は苛立たしい声色を隠そうともせず、孫ほどに年の離れた少女を睨みつけた。
「はい。プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）のリーザ・オーメント。彼女に助力を仰げばよいと思います。彼女は細かな魔術の流れを読み取り、しかも作り出す事ができるとか。星のめぐりがもたらす魔術の流れも、人工的に作り出せると思いますわ」
アイシャの言葉に長老たちは表情を一変した。

「正気ですか。アイシャ様！」

会議場を揺らす怒号を発したのはフィーンドの長老である。だがアイシャは「キャッ」と小さな悲鳴を上げて、ベクターの背中に隠れてしまった。

「アヴェンジャーはフィーンド。リーガル・バックラーはグラムファーレ。共に七家の秘法なのですぞ！　それを七家の者以外に触れさせよと言われるのか！」

一族の色である真紅に顔を染め上げ、フィーンドの長老は更に声を荒げてた。

「まるでゆでダコですわー。ねえねえ、ベクター。タコって吼えるんですの？」

アイシャはベクターの背中に隠れながらベクターにささやいた。それが聞こえたとは思えないが、フィーンドの長老は怒りで首筋まで真っ赤になっている。

「門外不出の秘儀を七家の外へ出せというのですか！」

グラムファーレの長老は喉をからしながら叫ぶ。

「グラムファーレはウニ頭ー。ランカートは貝の口ー」

返事もせず、アイシャはベクターの背中に隠れたまま不謹慎な歌を続けている。アイシャが返事をしないので、会議場は再び沈黙の幕が下りた。

魔術の品であるためエンチャント（付与）はもちろん、リーガル・バックラーのプロテクション。アヴェンジャーのブラスト。高度な魔術道具であるため特別な儀式も必要になる。ならば、魔力を高めるエンハンス。星めぐりを調べるディテクトも不可欠だ。

技術をプルーフ・アゲインストに提供する必要があるのは、この辺りだろう。ベクターが考えをまとめている間に、長老達の表情が微妙に変化していた。

ガリウス・グラムファーレを決闘に引きずり込んだ張本人であるにもかかわらず、アイシャは。ディスペリアの一族はまるで損害をこうむっていない。その事実に長老達は不満を感じていたのである。

「そもそも、陛下の身を守るものが、必ずリーガル・バックラーを使いこなす必要があるのかしら？」
アイシャが誰に言うでもなく呟いた。
「なんですと？」
「ですけど実際問題として半年の間、陛下を無防備にはできませんでしょ」
グラムファーレの長老は言葉を失って、シェンナ王を見た。
「アイシャ・ディスペリアの言うとおり、ではあるな」
シェンナは楽しそうに唇の端をゆがめている。
「ベクター卿がふさわしいと私は思います」
「なりませんぞ。ベクター卿は自らがフォルナージュの要人。彼自身にも暗殺の危険があるのです」
もっともらしいことを言っているが、実際には自分の一族が所有している地位を手放したくないだけだ。その事には会議室にいる全員が理解していた。
「だったら、シージペリラスがいいかしら。とてもお強いようですもの。それに、レイザークの公子がメティスの王を護衛する。何重もの政治的効果があるのではなくて？」
「それは名案ですな！」
ゲイルは大げさに何度も何度もうなずいている。それを見て、グラムファーレの長老の顔色が更に悪くなった。
「奴はすでに拒否しているではありませんか！」
「気変わりがあるかもしれませんわね」
「そうですな。今一度打診してみましょう。修行の身と言っていたが、メティス国内でも可能やも知れません」
アイシャとゲイルはにこやかに今後の予定を話し合っている。
「ふらりと現れた男に、陛下の身の安全を任せるのか！」
「では、身分の証を立てたり、性格を調べる必要がありますわね」
「あー、調査ならばすでに行っておりますぞ。１０日以内には明らかになる事でしょう」

「さすが、ゲイル卿は抜かりがありませんわ。でしたら、ロディウス老師もぜひメティスにお招きしたいですわね。老師から直接許可をいただければ、シージペリラスも心変わりをするかもしれませんわ」

「あー、それは名案。ならば、ロディウス老師の行方も調査するという事で」

ロディウスの名を聞いて、グラムファーレの長老は青ざめていった。

「へ、陛下」

「身の安全が守れるなら、誰でも構わん」

泣きつくような声を出した長老に、シェンナはぞんざいに対応した。

シージペリラスに王を護衛する地位をゆずる。その場合は、グラムファーレの面目を潰した男に地位を奪われる事になる。しかも、七家が異常者と声高に叫んできた特徴を持つ男だ。更に、彼の師であるロディウス・アクテがメティスに現れるかもしれない。

リーガル・バックラーの修復をする方法もある。だが、その場合は、リーザ・オーメントに七家の秘儀を渡す事になる。ならば、グラムファーレとフィーンドの一族は、他の5家に対して多大な借りを作ることになるのだ。

どちらにせよ傷を負わねばならない苦汁の選択。葛藤の中で、グラムファーレの長老は顔から血の気をどんどんと失っていった。ただならぬ様子を見て、ベクターとフォルナージュの長老が同時に立ち上がった。

「どういたしましょうか？」

アイシャが無邪気に微笑みかけたのが、止めとなった。グラムファーレの長老は胸を押さえて倒れたのである。フェルナンディの長老が深刻な表情を浮かべているのを見て、ベクターは口から泡を吹く長老を抱きかかえた。

「失礼いたします」

軽く頭を下げると、ベクターは会議場の外に駆け出していった。
「ヒーラー（治療術士）を儀式の間へ。急ぐのだ」
フェルナンディの長老が力強く叫ぶ声が遠ざかってゆく。重々しい空気の漂う会議場で、アイシャは開いたままの扉を静かに閉めた。
「さて、あなたはどう判断されますか？」
上目遣いに見つめるアイシャを見て、フィーンドの長老は自分に選択の余地など残されていない事を知った。

1部ー2　真紅の脅威

＊

シーグは脅威を前にして怯んでいた。
生臭さを漂わせるジェリー状の真っ赤な物体は、見ているだけで吐き気を催す。何度も串刺しにして持ち上げるが、どうしても最後の思い切りがつかない。そのために、ぐじゅぐじゅに潰れて更に陰惨な姿と化していた。それが却って周囲に匂いを充満させる結果を招き、水で一挙に飲み下すという最終手段の決断を先延ばしにしていたのである。
「ねえねえ、シー坊。そんなに無理して食べなくてもいいのよ」
赤毛の少女は両ひじを突いて、少年と皿の対峙を見ていた。シーグはフォークを手に、輪切りになったトマトを睨みつけていたいのである。
「残したらもったいないだろ」
「フィーちゃんにそう言われたの？」
どう答えても茶化されるのは目に見えているので、シーグは黙り込んだ。すると、赤毛の少女は机に突っ伏すようにして、シーグの顔を見上げてる。
「ふうん、やっぱりそうなんだ。フィーちゃんの躾がバッチリ行きとどいるってわけね」
「俺は何も言ってないぞ。勝手に決めつけるな」
「じゃあ、違うの？」
「……」
「やっぱり、そうなんだ」
赤毛の少女は勝ち誇った様子でテーブルに置いてあるスプーンを取る。そして、潰れたトマトを掬い上げると一口で食べてしまった。その後、鼻歌まじりでテーブルの上に乗っている皿を積み重ね始め

た。軽快な動きにエプロンが揺れる。すると、エプロンの絵柄――ニンジンを両前足に持ったウサギ――も一緒に飛び跳ねているように見えた。エプロンの隅には、リーザ・オーメントと名前が刺繍がされている。

「さ、お片づけをしちゃいましょう」

シーグが不意打ちを食らった鳥のような表情を浮かべていると、リーザは手を止めた。

「どうしたの？」

「いや、人の食べ残しを……」

「でも、残したらもったいないんでしょ」

「そういう意味じゃなくて」

リーザは首をかしげて、シーグの目をじっと見つめた。忙しく目をしばたたかせた後、「あー」と小さくつぶやいた。

「間接キッスとか気にしているわけ？　シー坊ってば、かーわいー」

リーザは茶化すようにくすくすと笑った。そして、シーグが立ち上がって文句を言うよりも前に皿を持ってテーブルから離れてしまった。シーグは鼻息も荒く椅子に腰掛けた。

幼さの残る顔は苛立ちの感情をそのままに表していた。短くともボサボサになっている黒髪に細身の体格。飾り気の無い襟付きの白シャツを着ているために、細い体つきは折れそうな危うさがあった。成長期によくある事で、背丈の成長に横幅がついてゆかないのだ。

革のベルトには数本のナイフをベルトに刺していて、傍らの柱には細身の剣が立てかけてある。

間違いなく戦士の装備だが彼自身が戦士らしくない体格なので、青二才が無理に武装しているように見えるのだ。それどころか、遠目には女性に間違えられる事さえあった。

シーグもそれを自覚していて、更にコンプレックスさえ持っていた。だから、同年代の女性にかわいい呼ばわりされて、不機嫌になるのは当然だったのである。

「昔は好き嫌いなんて無かったじゃない。どうしたの」

「いや、まあ色々あってな」
「色々って何？」
洗い場から顔をのぞかせたリーザから、シーグは慌てて顔をそらした。目を合わせると、考えている事に気付かれると思ったからだ。
脳裏に焼きついた忌々しい記憶がよみがえってくる。
洞窟の中で、空中に浮いている鎧を見て立ち止まった。松明の明かりをかざしてみると、通路一面に赤色のスライムが広がっていたのだ。色は鎧に近いほど濃くなる。つまり、その色は――。
しばらくすると、洗い場から水を流す音がして、リーザの姿は壁の向こうに消えていた。もしも、先に犠牲者がいなければ自分が溶かされていたかもしれない。シーグは首を横に振って、嫌な記憶を頭から追い出した。
「なあ、それよりも今日はどうするんだ？」
「そうね、一度メティスに帰らないと。色々しなくちゃいけない事があるから」
「じゃあ、俺は残っていた方がいいのかな」
「え、どうして？」
「だって、眠ったままのフィーを1人にできないだろ」
すると、リーザが再び洗い場から顔を出した。そして、咎める視線でシーグを睨みつける。また、何か余計な事を言ってしまったのだろうか。シーグは考え込んだが、答えが見つからない。
「シー坊ってば進んでいる子だけじゃなくて、とんでもないスケベなんだ」
「……ちょっと待て、何でそうなる」
「眠っている女の子と2人きりになって。なー、にー、をー、するつもりなのかなー」
「あのな、リー姉――」
シーグがいい終える前に、リーザは両手で頬を押さえて「キャー」と1人で叫んでいる。何を勝手な事を考えているのか、そう聞きたいのはシーグのほうだった。

「とにかく、無防備な女の子が男性と2人きりなんて犯罪です。それに比べたら、夜這いのほうがまだマシね」
リーザは急に生真面目な声で言った。とんでもないものと比べられて、シーグはムッとした。
「でも、またガイスみたいな奴が現れたらどうするんだ。俺だって、フィーに気付かれず天空の水盤に踏み込んできたんだぞ」
「その心配はないわ。今日はジェイナス校長と、アイダお婆ちゃんが来てくれる予定だもの」
「だったら、最初からそう言ってくれ」
「これから言うつもりだったのよ」
リーザの楽しそうな様子を見て、そんなつもりは無かったに違いない。シーグはそう独り決めをした。
窓の外には、雲ひとつない真っ青な空が広がっていて、澄み渡った湖面が空を映し出している。天空の水盤という名にふさわしい光景だ。サフィリアの心が乱れる時には、天空の水盤には雲と霧が立ち込める。怒りを感じた時には雷雲が満ち、嵐が訪れるのだ。
ならば、今は穏やかな眠りの中にあるに違いない。昨日は一晩泣きじゃくっていたリーザも今日はいつもの様にはしゃいでいる。
サフィリアが目覚めた時にどうなるのか、それは今考えても仕方ない事だ。とにかく、今はサフィリアが言い残してくれた言葉の謎を解かないといけない。
クラトス・ビア。
廃墟となったレイザークの城砦。心当たりを1つずつたずねて歩くしかない。魔境地帯と化し、『死の道』と呼ばれる場所を探索するのは大変な事になるだろう。
「ねえねえ、シー坊。何か言うべき事があるんじゃない？」
皿を洗い終えたリーザが軽やかに飛び跳ねる足取りで戻ってきた。ウサギの絵柄も軽い足取りで踊っているように見える。最も、ウサギが二本足で飛び跳ねる事など無いが。
「朝食、おいしかったよ」

「うーん、それもあるけど別の事」
「何かあったっけ？」
リーザはクルリと一回転したが、シーグはとっさに窓の外に目をやった。
「今日はいい天気だな。雨の心配はなさそうだ。インボルグ（収穫祈願の祭り）の後は晴れが続くしな」
「こーら」
リーザは腰に手を当て、肩頬だけを膨らませてシーグを睨んだ。反対側の頬にはえくぼが浮いている。
「あーそうか、出かける先がメティスだから、ここの天気を気にしてもしょうがないとか、そういうことか。確かにそのとおりだ。リー姉のいいたいことは正しい」
シーグは独り決めして勝手にうなずいていた。
「わざとすっとぼけているでしょ」
「何がだ？　俺は朴念仁なので、はっきり言ってくれないと分からんぞ」
リーザが大げさにため息をつくと、膨らんでいた頬が元に戻った。
「女の子が手作りの服に着替えているのよ。言うべき事があるでしょ」
「かわいいエプロンだな」
良く出来ました、と言わんばかりに深くうなずくリーザ。もっとも、取ってつけたような返答に不満そうではあった。
「素早そうだし、何処にでも入り込めそうだし、土が掘れそうな足をしているし」
シーグが淡々と続けると、リーザの眉が不機嫌に跳ね上がる。
「ちょっと、これはモグラの絵じゃないわよ」
「ウサギだな」
「じゃあ、どうして土を掘るなんていうのよ」
「ウサギだからだ」
説明になっていない説明に、リーザの頬は再び膨らみ始める。

「メティスのウサギは草原を走っているけど、レイザークでは穴を掘って土の下で住むんだ」
「へー、そうなんだ」
リーザは感心しながら自分のエプロンの絵柄を覗き込んでいる。
「ねえねえ、レイザークのウサギもニンジンが好きなのかしら」
「さあ、どうだろう」
「知らないの？」
「だって、何を食べるかを考えるよりも――」
どう食べるか、と続けそうになったのをシーグは飲み込んだ。続きを期待する様子のリーザ。
「あー、だけど二本足で歩くなんて珍しいな。それに、ニンジンを握るなんて初めて見た。さすが、メティスは不思議の国だなー」
さりげなくも、わざとらしく。あさっての方向を見ながら、あてつけがましく言った。しかし、リーザは何も言い返してこない。
どうしたのだろうと思い、振り返ってみるとリーザはエプロンに顔をうずめて立ち尽くしていた。
「り、リー姉……」
声をかけると、リーザは無言で勢いよく洗い場の方に引っ込んでいった。
なんで、そこで泣く？
シーグにはわけが分からない。とにかく、急いで謝った方がいい。
シーグは席を立って、洗い場の方に歩いていった。中を覗き込むと、リーザが鼻歌交じりでハーブの葉をポットに入れていた。
「もうちょっと待っててね、葉が開くのに時間がかかるから」
「……」
「ミルクも蜂蜜もたっぷり用意するから安心していいわよ。んん？どうかしたのかなー」
「……なんでもない」
騙されたと思いながらシーグは引き返した。その時、何かが張りつめるような音をシーグは聞いた。耳鳴りにも似ている。

「なんだこれ？」
シーグが耳を押さえて呟くと、リーザが洗い場から顔を出す。
「あ、ジェイナス校長と、アイダお婆ちゃんが来たのね。シー坊も気付いたの」
「何かが、ピーンと鳴ったような気がした」
「へー、すごいわね。そういえば、テレポート（瞬間移動）の魔術を使うと犬がそわそわしたり、鳥が羽ばたいたりするそうよ」
「俺は人間なんだけどな」
「ええー？」
リーザは意外そうな声を上げると、笑いながら洗い場の中に引き返していった。何か言い返すのも面倒に思えて、シーグは家の外に出る。
赤レンガに煙突のついたかやぶきの三角屋根。湖に隣り合うように建っていて、家の前まで水路が通されている。小さなため池は、覗き込めば、鏡のように空と顔を写し出す。
何処にでもありそうな家だが、これは魔術師の家なのだ。魔術師の意思によって消えたり現れたりするし、好き勝手に廊下を延ばしたり部屋を増やしたりもできる。
詩人などは歩く家や住人を食べる家の事を恐ろしげに歌う。子供だましのほら話と思っていたが、魔術を目の当たりにするとそれが実話なのではないかと、シーグは思えてくるのだった。
耳鳴りがしてから、たっぷり１００を数えた頃、池が不思議な光を放つ。その一瞬後に、池の縁にジェイナス・マードックとアイダ・オーメントが立っていた。
「おはようございます」
軽く頭を下げて挨拶をする。礼儀正しい少年を見て、老人と老婆は顔中を皺だらけにして微笑む。
「おお、シーグ君。怪我の方はよくなったかな」
「はい、もう大丈夫だと思います。すぐにでも、クラトス・ビアを探しに行きたいのですが」

「そうか、そうか」
シーグの言葉に対し、ジェイナスは大げさに何度も何度もうなずく。
「だが、最低でもあと一日はメティスにいる事を勧めるよ。魔術で付けられた傷だからね、封土の外に出れば途端に開くかもしれない」
「はい」
「急ぐ気持ちも分かるが、そんなに早く旅立っては悲しいな。子ども達も君と会いたがっているしね。それに、国王陛下から宴の誘いが来ている」
「シェンナ王が……ですか」
「嫌かね？」
言葉を濁すシーグをジェイナスは興味深そうに見ている。
「いいえ、そういうわけでは……」
ない、とは言い切れない。彼に対して、どうしてそうも嫌悪感を感じるのか、シーグ自身が一番戸惑っていた。
メティス王、シェンナ・グラドリカ。冥王カラナウス（血まみれ）と恐れられると同時に、賢王として慕われてもいる。
彼と対面した時に、体の底から湧き上がる危機感をシーグはどうしても忘れられない。故国レイザークを衰退させ、滅ぼした一因がシェンナ王の判断にあるのは事実だ。複雑な思いはあるが、それでも恨みに思った事はない。
人づてに聞く事と、実際に目の当たりにする事では、感情の働きに差がでるものだろうか。
「シーグー、外で何をしているの。早く家の中に案内してよ」
リーザの声が、考えに沈むシーグを我に返らせた。
「宴の事については、シンシアに詳しく聞けばいい。私はすっかり宮廷から遠ざかってしまったから。昔は本当に良かったのだけどねぇ……」
ジェイナスは疲れたように首を横に振った。そして、過去を懐かしむようにため息をついたのである。

1部－2　真紅の脅威（後書き）

ラビットは、穴を掘ってすむウサギ。穴ウサギ。
ヘアが、野原を走り回るウサギ。野ウサギ、雪ウサギ。

今ではどんな種類もいますが、もともと日本やイギリスでは野ウサギが主だったようです。
ヨーロッパの南部になると、穴ウサギが主になるようです。

気候の差なんでしょうか？　それとも地質かな？

日本は四季の変化が多いが、イギリスは差が小さい。
ヨーロッパは石灰岩質の地形のイメージがあります。日本はそうでもない。

生態と環境の共通項がよく分からないです。インボルグとか、ベルテヌっていうのは北欧の祭りなので、メティスはイギリス的な気候につもりですが……。

この辺りの事を詳しく書いているＨＰや資料、あったら教えて欲しいです。
レイザークの地形と気候を、穴ウサギの天国とするためにご協力を（笑）。

1部ー3　社会学的論議

＊

「本当に便利だねえ」
「でしょー」
洗い場から感動するアイダの声が聞こえてきた。それに対して、リーザが自慢げに受け答えしている。アイダの声は若々しくて、姿が見えないと祖母と孫ではなく親子の会話に聞こえる。言葉遣いが若ければ、姉妹といわれても納得してしまいそうだった。
「この取っ手だけ持って帰っても、水は出ないんだね」
「そりゃそうよ。壁の中に管を通していて、湖から引き上げているんだもん。それに、他の道具も全部封士の中で魔術師が使わないと意味がないの」
「うらやましいねえ。リーザは封士を持ってないのかい？」
「私も欲しいけど、欲しいからもらえるものでもないしね。でも、もしそうなったら一家でそこに引っ越したいなー」
「それはいいねぇ」
リーザとアイダの会話をジェイナスは微笑みながら聞いていた。今日は赤いリボンは着けていない。髭は黒い帯で一纏めにしているし、髪の毛もそのまま垂らしてあるだけだ。机を挟んで正面に座っているのは、物語に出てくるような魔術士。わずかな仕草からも英知を漂わせる老齢の賢者そのものの姿である。
昔は本当によかったんだけど……。
そうジェイナスは呟いていた。老人にとって良き昔の時代。それに、終止符を打ったのが自分かもしれない。ガリウス・グラムファーレの決闘で勝利できたのは、ジェイナスの助力があったからだ。それも七家の一員として、また三騎士の1人であるナイト・ロード卿として自分の立場が悪くなる事を承知の上で。

メティス王国、三騎士。その名は大陸中に鳴り響いている。王都防衛の要であり、戦況を一変させる脅威の力を秘めているのだ。

リーガル・バックラー卿は金城鉄壁。最強の剣と盾を持ち、隙の無い防御で王城を守る。

アクア・ランス卿は疾風迅雷。視線と同じ長さの槍を振るい、いかなる外敵も打ち落とす。

ナイト・ロード卿は神出鬼没。軍勢を率いて、王都のあらゆる場所に姿を現す。

開戦を回避したり、戦争を終結させたりするためには実戦力以上に王国の持つ権威が重要となる。敵に勝機がないと思わせたり、手ごわいと思わせる事ができれば、和平の可能性が高くなるからだ。

シーグはリーガル・バックラー卿を決闘で破る事で、魔術師と三騎士の権威を砕いてしまった。自分の行いが王都防衛の要を揺るがした事を理解していたのである。

「シーグ君」

「はい」

重々しく口を開いたジェイナスにシーグは真剣にうなずいた。

「君には、ぜひ答えて欲しい事なのだが」

「なんでしょうか」

ことさらに声を小さくするジェイナス。何か重要な話に違いない。そう考えたシーグは、何事も聞き逃すまいと身を乗り出した。

「エプロンの下に服を着る事についてどう思う」

「……は？」

シーグは自分の耳がどうかしたのだと思った。ジェイナスの真剣な表情も、今の言葉が聞き間違いだった、とシーグに訴えている。

「エプロンの下に服を着る事について、君の意見を聞きたい」

ジェイナスが真剣そのものの表情。今度は一語ずつゆっくりといったので間違えようがない。

一瞬、リーザの姿が思い浮かんだ。そんな事になると、豊かな胸がエプロンから……。

シーグは慌てて余計な考えを振り払った。
これは魔術師の隠語なのかもしれない。『暁の星』は『空』、『六ぼう星』は『魔術』を意味する。ガウンやローブが身分をあらわし、服の色が所属を決めるのが魔術師の風習だ。通常の基準で判断すれば、勘違いを招く事になるだろう。
というか、すでに自分は勘違いしているのだ。絶対に間違っている。シーグはそう結論を出した。
「すいません、どういう意味でしょうか」
「そのまま受け取ってくれていい。含むところもなければ、隠語を使っているわけでもない」
「……」
「それで、どう思うかね」
「普通だと思いますが、それが何か」
「ふむ」
ジェイナスは思慮深げに髭を撫でた。
「なればその状況下、もしも自らの思いのままになるのなら、君はどのような姿を思い描くかね」
「はあ？」
「習慣でも経験でも倫理でもなく。自らの根源に問いかけた時に、君の心は何を考えるかな。人として、それも特に男性としての思考を自由に働かせた結果にだよ」
哲学者を思わせる思慮深い声色。壇上の講演者を思わせる堂々とした態度は揺るぎない。
シーグはジェイナスの言葉をよくよく考えて、その行為自体が無駄だと思った。重々しい言葉であっても、大したことを言っているわけではないのだ。
「……そんな事よりも聞きたい事があるのですが」
「うむ、その話はあとにしよう。君はどう思うかね。結論を聞きたい」
シーグが話題を変えようと試みると、ジェイナスはしつこく質問

してきた。
「別になんとも」
シーグは相当うんざりしながら、呆れる気持ちを隠さずに言った。しかし、ジェイナスは身を乗り出してシーグと対峙する。それだけを見ると、真剣な教師そのものだ。
「時代の流れや風習、風土の違い。あるいは習慣による倫理観の違いは確かに存在する。しかし、人はそれほど変わるとは思えない。心の底で望む事は変わらないのだ。世代や国境を越えてさえ分かり合える、相互理解の糸口があると思うのだよ」
そういう相互理解で結集する集団に、シーグは所属したいとは思えなかった。大体、世界の半分は敵に回ることだろう。
「で、俺から何を聞きたんです」
「つまり、君は薄着が好きか、嫌いかということだよ。どちらかね？」
ジェイナスは直接的な質問に切り替えてきた。
「時と場所に合わせたものがいいでしょうね。季節の変化もあるでしょう」
「その通りだ。つまり、環境に合わせてエプロンの下に何も着けない民族はいる」
クワッと目を見開き、鋭い眼光を迸らせてジェイナスの口調は熱を増した。一方、シーグはここではないどこかへ逃げたくて仕方がなくなった。
「それも、男性が強要したわけではない。女性自らの選択によってなされ、実践によって歴史的な重みが構築された習慣なのだ！」
畳み掛けるように勢いを増すジェイナス。シーグは頭を抱えたい気持ちを抑えながら考え込んだ。どうやら、根本から切り返さないと延々と妙な会話が続くだろう。すると、脳裏に閃く事があった。
「だけど、火を扱う台所でわざわざそんな格好をしたとは思えませんが。火傷の危険があります」
「ぐぅ……」

図星であったらしく、ジェイナスは途端に勢いを失った。
「いやしかしだね、君。優れた慣習というのは相対的に拡大する傾向が――」
「で、何処なんですか」
言い訳がましく続けるジェイナスの言葉をシーグはさえぎった。
「ええと。たしか風呂……だったかな？」
「それなら、風土や風習以前の問題だと思いますね。違いますか？」
「いや違わない。君の言うとおりだよ」
ジェイナスは「むぅ」とうなりながら、思慮深げに首をゆっくりと上下に振った。
「うむ、見事な論法だ。屁理屈を突き崩す要点を見事に捉えている。君がロディウス老師の弟子であると、改めて認識を深めたよ」
「はあ」
全く誉められた気がしないので、シーグは生返事をした。
「しかし、一方的に理屈を畳み掛けてくる連中には用心してほしい。特に宮廷ではそうやって吊り上げておいて、突き落とすような輩が多いからね。これから君の周囲にはそんな人間が集まってくるだろうから」
ジェイナスは髭を引っ張りながら、窓の外を見ている。
なるほど、とシーグは思った。権力の中枢では、誰もが誰かを追い落とそうと画策している。宮廷は伏魔殿、言葉が剣、装束が鎧になるという。戦士としての技術だけでは、身を守る事はできないのだ。
「もっとも、君にとっては余計な心配だったね。試すような真似をしてすまなかった」
「いいえ、そんな事。心配してくださっている事に、気付きませんでした。これからもご指導をお願いします」
「礼儀正しいというよりも、君は本当にお堅いねえ」
ジェイナスは居心地悪そうに首筋をかいている。その後、「ふむ」とうなずいて表情を改めた。

「ところでぜひとも君に聞いておかなくてはならない。重要な事だ。決して軽く見てはいけない」
「なんでしょうか」
「混浴のマナーについてだよ」
身を乗り出すシーグの耳元にジェイナスはささやきかける。
「入浴中にジロジロ見るのが失礼だと言う女性がいるそうだ。しかし、魅力的なものを真剣に観察するのは芸術家の行為に通じるところがあるし、美しいものを隠匿するのは芸術に対する冒涜とさえも言えると思うのだが、君はどう考えるかね？」
「……」
シーグは何も考えたくなくなった。
「こら、ジェイナス」
リーザの声だと思い、シーグは顔を上げた。
「リー姉、いくらなんでも」
無礼だろうと、続けようとした言葉を飲み込む。声の主はアイダだったのだ。
「若い子に変な事を吹き込むんじゃあないよ」
ゆっくりと聞いてみると、少しリーザよりも音程が低い。しかし、親しみのある柔らかな声は共通のものだった。
「違う。違うよ、アイダ。習慣と環境のもたらす被服の役割について話し合っていたのだよ。驚いたことに、シーグ君の意見は重さと鋭さがある。剣の冴えと言うのは、論法にも通じるのだろうね。論理を身につけると、剣技が鈍るというのは間違いだな。騎士団への教育を見直す必要があると私は考えるよ」
「それはいいけど、あなたの変態趣味を若い子に押し付けるのはやめておきなよ」
「いや、私はね。社会学的な見地から――」
しかし、アイダはジェイナスに最後までしゃべらせない。
「この人が難しい言葉を使って饒舌になるのは心にやましい事がある時。真面目に付き合うから付け上がるの。放っておいたら勝手に

しゃべって、その後勝手に居たたまれなくなって、勝手に静かになるからね」

なるほど、話すに任せて言葉が尽きるのを待つという手段もあるのか。今度からそうしよう。と、シーグは思った。

「シーグ君、真面目な顔で失礼な事を考えていないかね？」

「まさか、そんな事は……」

ありますよ。と、シーグは心の中だけで続けた。ジェイナスは探るような眼差しを向けてきたが、シーグは礼節を崩さず対面した。

「ねえねえ、何の話？」

リーザがこっちに向かって歩きながら、興味深そうに問いかけてくる。両手で持つお盆には、４つのカップが湯気を上げていた。

「ジェイ坊の病気さね。これは死んでも直らないよ」

呆れた様子で言い放つアイダ。シーグは目をパチクリさせて２人を見比べた。

「そういう君はシー坊なんだね」

齢七十を超えながらも、ジェイ坊呼ばわりされた老人は楽しそうに苦笑している。

「私の事は、アイちゃんと呼んで欲しいねぇー」

渋い表情をしたシーグを見て、アイダはヒョッヒョッヒョと笑う。

「校長はいつまで経っても若いんですから。でも、子ども達の前ではいけませんよ」

「サフィリア先生の前でも、だね。本当におっかないから」

リーザはくすくすと笑いながら、盆の上に乗ったカップをテーブルに並べてゆく。

「校長、その発言は教育上ふさわしくありません！」

人差し指を立てて、怖い表情をしながら厳しい声でリーザは言い放つ。すると、ジェイナスは怯えたように目を白黒させた。

「いやいや、サフィリア先生。そうは言うけれどもね……」

「一体、どうだとおっしゃるのですか？」

リーザは腰に手を当てて背筋を伸ばし、スッと目を細めた。そし

て、澄ました表情で一堂を見回す。サフィリアの特徴を捉えた物まねに全員が大きな笑い声をあげた。

1部ー4　シージペリラスの立場

ひとしきり笑った後リーザはカップを並べ、ハチミツとミルクの入った小瓶を置いた。
リーザとアイダもテーブルを囲んでそれぞれのカップを持ち上げた。なので、シーグもハーブティーを飲む。口の中に広がる苦味に、シーグは思わず顔をしかめる。それを見て、リーザは可笑しそうに口元を押さえている。
「悪かったな」
「私は何も言ってないけどなー」
シーグが不機嫌な表情でにらむと、リーザはくすくすと笑い始めた。アイダも小瓶とシーグを交互に見て、納得の笑みを浮かべている。
「無理しなくていいと思うよ」
「シーグ君には果汁の方がよかったのかもしれないね」
ジェイナスが遠慮なしに大笑いを始めたので、シーグは無言でカップを置く。小皿とカップの立てるカチャンという音が大きく響いた。
「そんなに怖い顔をしないでおくれ。そうそう、君に決闘を挑もうという輩なんだがね……」
ジェイナスは緊張感の無い声で言った後、ハーブティーをすすった。
「うーむ、甘い香りだね。あー、これは分かりやすそうだな。シーグ君はどう思う」
「それより、決闘の事ですが」
しかし、ジェイナスはカップで顔を隠したまま答えない。変わりにリーザの期待に満ちた、待ち構えるような視線を感じた。
「おいしいと思います」
短く答えたが、ジェイナスはカップを下ろさない。答えが十分で

はないようだ。
「りんごのお茶でしょうか」
「そんな香りがするね。私はカモミールだと思う。どうなのかな？」
「さすが、校長先生」
リーザは両手を小さく会わせながら喜んでいる。
「シーグもほとんど正解よ。カモミールはりんごの香りがするのよ。だけどこんなに強いかしら。私はもっと薄いと思うけど」
「りんごが……」
腐りかけた、という言葉をシーグは飲み込んだ。
「一番熟した時にこんな匂いがするんだ。その時が一番おいしいらしいぞ」
「へえ、そうなんだ」
ただし鳥がつついて穴だらけの時もあるし、虫が食っている時もあるぞ。とは、しきりに感心するリーザを前にして言えなかった。
「それで、俺に決闘を挑もうという連中の話ですが」
「今はいないよ。安心したまえ」
シーグに聞かれて、ジェイナスはようやくカップから顔を出した。もったいぶっておいて中身の無い返答にシーグは憮然とする。
リーザはくすくすと笑いながら、空になったカップを集めた。そして、アイダと一緒に洗い場の方へ去ってゆく。
「王自身に、君が決闘者となれるよう計らってもらうのは、いい判断だったと思うね。メティスは王政国家で、王があらゆる物事の中心になるから」
「ですが、王の望んだ事がそのまま実行されるわけではないでしょう」
「言いにくい事をずばりと突いてくるね、君は」
「物事は正しく知れと言われていますから」
「だけど、考えた事をそのまま言えば、避けられる争いも呼び込むことになるよ。身をもって知っているんじゃないかな」
その言い方から察するに、ジェイナスも痛い目に会ったのだろう。

ロディウスは権力者を前にすれば、舌に益々油が乗る。君主を民衆の面前で侮辱した後、軍勢を放たれて追撃されたことがあった。それも一度や二度ではない。更に正確に言うなら、招かれた国ではほぼ例外なく指名手配となっている。数少ない例外の国がだんまりを決め込んだと聞いて、「意気地の無いやつだ」とか「面白くもない」と呟いていた。

たぶん、わざとだったのだろう。

「気をつけます」

「ところでシェンナ王……。ああ、いやいや。陛下と言うべきだね公式には」

ジェイナスは少し考えてから尊称に言いなおす。そして、意味ありげな視線をシーグに向けた。生徒の意見を求める教師の態度である。こういう時、いい加減な答えをすると長い説教が始まるに決まっている。そうならないように、シーグは考えをめぐらせた。

陛下は自国、王は他国の人間が使う呼び方だ。そして、ジェイナスは七家の1つマードックの出身である。

「つまり七家の中で、王の地位は絶対視されていない、という事ですか。王の意思や要望にそむくものがいる」

「そのとおり。しかし、王の直下にいる人々。騎士団や文官は君に直接敵対する事はなさそうだ」

「利害や誓いが衝突すれば話は別なのでは？」

「だね。しかし君に敵対すると陛下の機嫌をそこねる、と考えると思う」

誰にも知られず、法に触れる事も無く、邪魔者を排除するためにはどうすればいいか。その答えをシーグはすでに知っていた。

「暗殺が有効ですね」

「正解。その通りだよ」

賞賛しながらもジェイナスは苦いを表情を浮かべている。

「地位を与えておいて失脚させるなどが考えられるけど、君は栄達の道を自ら閉ざした。だから罪無き罪を着せる、なんかも有効かな」

それは剣よりも魔術、戦術よりも謀略の得意分野であるように思えた。

王を絶対視できない情勢でありながら、王の機嫌というあいまいなものに頼らなくてはならない。その上、安全に関する発言は「なさそうだ」や「思う」ばかりだ。

考え込んだシーグをジェイナスは何も言わずに見守っている。

「やはり、一度メティスから去るべきでしょうね」

「それが一番いいのだろうね」

ジェイナスはうなずきながらも、やりきれないといった様子で首を横に振った。

「メティスは君にとって居心地のいい場所にはなれないようだ。利害関係や主義主張が複雑に絡み合いすぎている。目立つ者はどうしても狙い撃ちにされてしまうんだね」

「それも永遠には続かないでしょう。シージ・ペリラスが生きていても、なんの災厄も動乱も起きなかった。そんな事になれば、そのうち忘れられると思います」

「平和が続くほど、君の立場がよくなっていくわけか。とにかく、時間がかかりそうだね」

ジェイナスは難しい顔をしている。彼の長い人生の中でも、平和と呼べる時代はほとんど無かったからに違いない。片づけを終えたリーザとアイダが戻ってきた。

「それじゃ、あの箱の中にいれておけば食べ物が腐らないんだねえ」

「中がすごく冷たくて、氷室みたいになっているのよ」

「うらやましいねえ」

女性には台所には特別なこだわりがあるようだ。戦士が武装に気を使うようなものだろうか。しかし、口に出せば一緒にするなと怒鳴られそうな気がした。

「ああ、そうだ。君も今晩の宴に招待されているからね」

台所の事を話しているリーザに、ジェイナスは突然声をかけた。

リーザはキョトンとして、アイダを見る。

「お婆ちゃんが行くの？」
そんなわけ無いだろうと、シーグは思った。ヒョッヒョッヒョと、楽しそうに笑うアイダも同じ考えに違いない。
ジェイナスはローブの裾から招待状を２つ取り出した。そして、１つをシーグ、１つをリーザに渡す。真っ白な封筒は金粉をちりばめた蝋で封印がされている。
リーザは食い入るように封筒を見つめている。そこに書かれている自分の名前を何度も何度も読み返しているのだ。
シーグの封筒の裏には『レイザークのシージ・ペリラス氏』とあった。しかし、レイザークはすでに滅び、シージ・ペリラスとは呼称にすぎない。だから、この名前の意味するところは『家無しで名無し』、あるいは『滅亡した国の命取りの座』という事になる。自分の存在がどのようなものであるのか、シーグは改めて思い知った気がした。
リーザは封筒から顔を上げて、シーグの顔をまじまじと見つめる。
「なんだ、どうした」
「えええーー！」
問いかけの答えが、ずいぶんと遅れた突拍子の無い悲鳴。けたたましい声に、シーグは心臓が跳ね上がる思いだった。驚いたときの悲鳴が、どれだけ周囲をびっくりさせてしまうか。それを考えるのは淑女の務めじゃないのか、とシーグは思った。
「どどどどうしよ」
「どうって言われてもなぁ……」
シーグはベルトからナイフを取って封を切った。入っていた手紙を広げる。
賢王シェンナ・グラドリカ陛下の在位より１５年。建国王サルファー・グラキエス生誕より、１３６年。メティス建国より１０３番目の年。
他にも王国にとって重要な年から数えて何番目の年であるかが延々と書かれている。それが終わると、今度はインボルグも終わり、

よい日和が続いている。麦が芽を出し今年の豊作が期待される、とか街道の雪は溶け賑やかになる。といった挨拶の前口上が延々と続く。

これも、時期によって決まった言葉を並べているだけだ。公式の手紙はほとんどが形式によって埋め尽くされる。そして、形式ばった書式には特殊なルーン文字が使われていて、シーグにもほとんど読めない。しかし、重要な部分だけは必ず公用語で書かれる。

だから、公文書は読めるようにするよりも、読む場所だけを心得ればいい。難しく書きたい奴だけが、難しく勉強すればいいのだ。

予想通り意味のある内容は最後の一行だけだった。それも、普通に読める言語で書かれていた。

夕刻の七点鍾より、ベクター・フォルナージュの主催にて取りおこわなれる宴へ招待いたします。

シーグはその主催者の名前を見た途端、行きたくなくなってしまった。リーザは両目をこぼれそうなほどに開いて、シーグをまじまじと見つめている。

「とりあえず、日が沈む前に王城に行けばいいみたいだぞ」

苛立ちを押さえながら言った言葉に、リーザが今にも泣きそうな表情になった。ジェイナスは遠慮なしに笑っている。どうやら、見当違いな答えをしたらしい。

「私、城の宴なんて行ったことないわ。着ていく服もないし、フィーちゃんも眠ったままだし。そうだ、お婆ちゃんお願い。ドレスを作って」

「リーザ。半日じゃあ無理だよ。ちょっと考えればわかる事じゃないか」

のんびりと答えたアイダに対して、リーザは更にソワソワし始める。

「服だったら、どこかで買えばいいんじゃないか」

「そ、それもそうね。そうだけど、どうしよう、どうしよう、どうしよう」

リーザはぶつぶつ呟きながら、行き場を失ったねずみのように、部屋の中をうろうろと歩き始めた。更に落ち着きをなくしている。
「今度はどうしたんだ？」
「私、宮廷の礼儀作法なんて全然知らないわ。ジェイナス校長、教えてください」
「かく言う私も３０年は出席していないからねえ。シェンナ王の時代から相当風習が変わってしまったから」
すがりつくように聞かれたジェイナスは、残念そうに答えた。
「私は行ったことさえないねえ。うらやましいよ」
アイダはのんびりと答えながら、笑顔で顔中をしわくちゃにしている。
「シンシアに聞いてみればいいんじゃ……」
ないのか、と言いかけたシーグはリーザにじっと見つめられてひるんだ。リーザは突撃するような勢いで駆け寄ってきて、シーグの右腕を両手で握りしめた。
「そうね、そうだわ、そうしましょう。うん、シンシアちゃんなら協力してくれるわ」
リーザにグイグイと腕を引っ張られて、シーグは仕方なく立ち上がった。
「お、おい。リー姉。そんなに急ぐなよ。せっかく2人とも来てくれたのに」
「いやいや、私達の事は構わないでおくれ。シンシアがメティスで待っているはずだから」
「早速出るんだね。忘れ物はないのかな？」
アイダとジェイナスも止めるつもりはないらしい。
「俺は剣さえあればそれで十分です」
「私も全部ここに入れているわ」
リーザは胸元を軽く叩いた。シーグは柱にかけてあったシャープネスを腰にくくりつける。
「だけど、エプロンを着けたまま出かけるつもりかい」

「あら、いっけない」
リーザは自分の格好を見て大慌てでエプロンを外した。
昨日は足が丸見えのピンク色のローブを着て、大通りを歩いていた。それなのに、今更エプロン1つでどうして慌てるのだろうか。シーグにはいまいちよく分からない。
今のリーザは首元が大きく開いた黄色のシャツの上にベストと、明るい赤色のスカートを着ている。ホワイトホースで再会した時と色違いの格好だ。
「うん、これでよし」
「ローブは着なくていいのか」
「決闘から、まだ日が経ってないもん。魔術士だって分からない格好の方がいいと思うわ。シーグもその剣を見えないようにしたほうがいいわよ」
「布でも巻くのか？　とっさに剣を抜けないようにはしたくないぞ」
「じゃあ、外套を着けたらいいわ。鞘を見えなくしておけば、決闘で使っていた剣だってすぐには分からないはずよ」
リーザは家の奥の方に走っていって、すぐに麻の外套を持ってきた。シーグがそれを身につけていると、ジェイナスとアイダは一足先に外の池の前で待っている。
「ほら、ぐずぐずしないで。早く行きましょうよ」
リーザは浮かれた声で言った。足取りも軽く、笑顔を浮かべている。さっきまで不安で取り乱していたのが嘘のようだ。もしも、天空の水盤がリーザの封土なら土砂降りと雲一つない青空が変わる変わる訪れるのではないだろうか。
リーザに手を引かれて、シーグは前のめりになりながら池の縁に立った。
「サフィリア先生のことは任せておきなさい」
「このスケベジジイが妙な事をしたら、私が黙っていないから。安心しなよ」
「おいおい、それはないだろ」

口げんかをしながらアイダとジェイナスはお互いに笑っている。
「じゃあ、行くよ。メティス王国、フェイル・リレイの塔へ送るからね」
ジェイナスは確認するように言うと、杖を池の中につけた。体中の毛が逆立つような感触がして、目の前が真っ暗になった。

1部ー5　ひたむきに

＊

暗転した視界が元に戻ると、足元にはすべらかな感触。ピカピカに磨かれたエレクトラム（琥珀金）の鏡だ。窓一つない２０歩ほどの広さの丸天井の部屋。確か塔の外見は三角屋根だったはずである。しかし、魔術師が作った建物の細かい事を気にするのは意味が無い。

「気をつけて歩いてね、傷がついちゃうから」

「分かっている」

ゆっくり足を踏み出して、石畳の堅い感触を感じてようやく足元に視線を戻す。すると、リーザが肘を突きながら屈みこんでいる。何か言いたそうに、シーグを見上げていた。

「な、なんだよ」

「どーして上ばっかり見ているのかなー？」

ジーッと見つめられてシーグはたじろいだ。すると、リーザはニターと嫌な笑みを浮かべる。

「シー坊ってばスケベー」

「な！　俺は何も見てないぞ」

「ふーん、やっぱり見たんだ」

リーザは「うっわー」と言いながら両手で口を押さえ、逃げるように距離を置いた。

「勘違いするな」

「わざとじゃない。そうなんでしょ？」

「……あ、ああ」

言いたい事を先に言われて、シーグは生返事をした。

「フィーちゃんは、水盤の見者って呼ばれるくらいだから、よく鏡の上に乗るの。鏡の上ではスカートを押さえるように言っているんだけど、いつも忘れるのね。潔癖なくせに無防備なんだから、見て

いるこっちがハラハラするわ。そういえばこんな事もあったっけ。聞きたい？」

「別に」

「うんうん、よろしい。話して進ぜよう」

リーザはもったいぶった口調でシーグを上目遣いに見つめた。だが、前かがみになると胸元が危うくなるのだ。リーザも十分無防備だと思った。

「あれは確か、二年くらい前ね、海を越えた砂漠の国の王子様が来たの。男前で教養のあるお、う、じ、さ、ま」

シーグは視線を逸らし塔の外に向かって歩き出す。しかし、リーザは後ろ向きに歩きながら勝手に話している。

「フィーちゃんが魔術の手ほどきをしていたの。つまり、手取り足取りよ。だって、そうしないと複雑な仕草や、印を手で組めないわ。って、ちょっと歩くが速すぎる！」

「だったら、前を向いて歩けよ」

シーグはそっけなく答えて、小走りになるほどに足を速めた。リーザも負けじとシーグの顔を覗き込みながらついてくる。

「そして、お互いの息かかるほど近づいた2人。王子様は、急にフィーちゃんの絹のように白い手を取って。キャッ」

リーザは思い切りつまずいた。頭から落ちそうになったのを、シーグは両肩を掴んで支えてやった。

「なんで頭から落ちるんだ。ちゃんと前を見て――」

「そうよ。最後にはフィーちゃんの肩をこんな風に抱き寄せたの。『英知の国の姫よ。あなたの瞳は湖のように澄み、美しい髪は光のようだ』」

シーグの言葉など全く無視したまま、リーザは舞台役者のように大げさに言った。

「『あなたがいない母国に帰れば私は渇きに苦しみ、心は暗闇に満たされ――』キャッ」

リーザは床に尻餅をついて倒れた。うんざりしたシーグが支える

手を離したからだ。もっとも、手のひらほどの高さを落ちただけである。

「酷いじゃない。女の子を放り出すなんて、紳士失格よ。王子様は私にだって紳士的だったわ。もう、続きを教えてあげないんだから」

「そいつが国に帰って、失意のあまりに枯れて萎れたわけだ。不幸な人生にめでたしめでたし」

シーグがそっけなく答えると、リーザは両方の頬を膨らませた。

「残念でした。国に帰ったけど、全然諦めてないみたいよ。今でも頻繁に手紙が届くらしいわ」

「……」

「そうねー。今年もきっと来るわね。そうすると、今年で3回目。王子様も18歳。これはひょっとするとひょっと、す、る、か、も。だって、私から見ても魅力的な紳士なんだもん。フィーちゃんってばうらやましぃー」

リーザは空――この場合は天井――を見上げながら、両手を組んで目を輝かせた。「夢見る乙女のポーズ」、とでもいうのであろうか。

「インボルグが過ぎた後、ベルテヌの前には毎年来ていたわ。すっごいお金持ちで、メティスには大きな船で湖までやって来るの。屋敷が丸ごと引っ越してきたみたいに豪勢で、凄腕の兵士を。じゃなくて、向こうでは『勇士』って呼んでいるんだっけ？　を、何人も連れているの。彼自身も凄腕の勇士なのよ。憧れちゃうわ。女の子の永遠の夢ね。フィーちゃんってば、世界一の幸せ者かもー」

「……」

不機嫌な表情で黙り込んだシーグに対して、畳み掛けるようにリーザは続ける。

「本国では、何百人もの女性が彼に言葉をかけられるのを待っているの。そして、何千人もの人間が彼のために命をかけて動くって――」

「だったら、なんでガイスなんかに好き勝手にやらせていた。なん

で誰もフィーを守ってやらなかったんだよ！」
シーグは苛立ちを吐き出すように怒鳴った。リーザは全身をビクリと振るわせた。自分の声が陰々と石造りの部屋に木霊する。リーザがつらそうにうつむいたのを見て、シーグはようやく我に返った。
ガイスが身につけていた赤マント。セブン・パワー・インテグレーション（七力統合陣）を使うために必要なマントはリーザの手によって作られたのだ。
「ごめん、言いすぎた。今のはベクターの事だ。あの野郎、よりにもガイスに手を貸しやがって」
シーグは舌打混じりに悪態をついたが、リーザの表情は晴れない。
「ううん、そんな事ない。シーグの言う通りよ。私も、フィーちゃんの味方をしなかったもの。それどころか、フィーちゃんの一番大切なものを壊しちゃう物を作ってしまったの」
「いや、だけどリー姉だって悪気があったんじゃないんだろ」
「フィーちゃんのためになるって思っていたわ」
「なら、フィーだって分かってくれる。あいつはいつだって許してくれるんだ」
「うん。私は悪くないってそう言ってくれた。私の力がきっと、いろんな人を助ける事になるって」
シーグは戦々恐々としてリーザの顔を覗き込んだ。慰めが全く効果を表していない証拠に、リーザは目の端に涙を浮かべている。
「だけど、私はシーグとフィーちゃんには……。一番大切な人達を苦しめる事ばかりしてしまったの。ごめんなさい」
リーザは顔を覆って泣き出してしまった。
またやってしまった。とシーグは悔やんだ。余計な事ばかり言う自分の口を、本気で縫い付けたくて仕方がなくなった。だけど、ここで黙り込んでいてはいけない。
「でも、ほら、リー姉。シャープネス！　そうだ、あれが無かったら俺はガリウスに勝てなかったんだぞ。命も無かったかもしれない」
シーグは力強くいいながら、自分でも空々しく思えて気恥ずかし

くなってきた。しかし、やはり黙り込むわけにはいけない。
「あのマントだって、この剣で切ったんだぞ。それで帳消し！　問題なしだ。ほら、なんだ、あれで、これが、なんで、そうだ。うん」
　シーグは奇妙なダンスを踊るように身振り手振りを加えてまくし立てる。
「失敗の原因は一つでも、失敗を取り戻す方法は無数にある。そういう言葉があるじゃないか」
　その後に何か大切な言葉が続いていたような気がするが、シーグは全く思い出せなかった。
「だけど、剣を振るったのはシーグ、あなたよ。私はいつでも見ていただけ。安全な場所でね」
「いや、だけど……」
　万策尽きて、シーグは言葉を失った。同時に身振り手振りも止まる。しかし、リーザは涙を拭いて顔を上げた。
「私がいけなかったのは、きっと恩賞を求めたからよ。プルーフ・アゲインストとしての名声や、王宮御用達のエンチャンター（付与術士）として。ホワイトホースの職人街に、国がもっと投資してくれるようにって。だから、悪かったの。それで、フィーちゃんを助けられなかったんだわ」
　シーグにはリーザのやった事が悪い事だとはまるで思えなかった。突然、リーザは両手の拳を握り締めて勢いよく顔を上げた。
「私、分かったわ。シーグのおかげでやっと分かったの！」
「な、何をだ」
　女性を怒鳴って泣かした奴は、紳士どころか男失格とでも呆れられてしまったのだろうか。シーグは、ごくりと唾を飲み込んだ。
「自分のために。ううん、自分の周りの人や物や、集団でもそう。何かをやって見返りを求めたら、その分だけ重荷が増えていくんだわ。そして、自分でも知らないうちにその重荷が大切な人を傷つけちゃうのよ。本気でその人のためを思うなら、ほかの事は二の次にしなくちゃ。ひたすらにその人のために、今すぐにできる事をひた

むきにしなくちゃダメだわ。こうしたら立場がよくなるとか、いい物や環境が手に入るからとか。それで、今は大切な人の事を後回しにしてもいいんだなんて大間違い。そんな事ばっかりするから、どんどんと勝手に物事が進むんでしまって、自分が何をやっているかも見失うの。そんな事で、水盤の見者の事を。いいえ、フィーちゃんの心を救えるはずが無い！」

リーザは熱弁しながら、拳を振り上げて「馬力を入れる」のポーズを取った。シーグには何がなにやらさっぱり分からない。

「だから、シーグってばスゴイ。のよ！」

「は……い？」

リーザは頬を紅潮させ、息も荒く、シーグの両肩をつかんだ。興奮の理由がまるで理解できないシーグは戸惑うより他にない。むしろ、シーグのほうが泣きたい気分になってきた。

「いい？　シーグ。あなたはね、決闘者の資格だけを求めて、他の事は何も望まなかったわ。それも血筋や生まれなんかじゃなくて、自分の力で手に入れていながら、恩賞も地位もなにも求めなかった」

単に面倒くさかっただけなんだけど。と、思ったがそれは流れ的に言ってはいけない。そもそもこういう場合に、反論は禁物だとシーグは思った。

「無欲だったなら、相手の欲得づくしの行動にも巻き込まれない。だから、どんなしがらみにも縛られないわ。フィーちゃんのために、どんな時だってすぐに駆けつけられるの。だけど、私はメティスの中で地位を得て、立場を作ろうとしたのね。だから、そのうち自分の考えだけで動けなくなっちゃう。だからフィーちゃんに、はね付けられちゃったの。私が味方をすれば、ホワイトホースのみんなにも迷惑がかかってしまう。もう、あなた1人の考えだけで動ける立場じゃないって。その後封土への道を封印して、誰も助けに行けなくしてしまったわ。歩いていったシーグだけが、フィーちゃんに味方できたの」

つまりサフィリアは自分で助けの手を振り払って、自分ひとりで

天空の水盤に引きこもったということだ。自らが七家の一員であり、ジェイナスやシンシアといった知り合いがいる。手を伸ばせば、もっとたくさんの人が味方をしてくれたというのに。

シーグはリーザに対して悪い事を言った思う一方で、サフィリアに対して腹が立ってきた。ガイスの戦いの時に、勝ち目もなしで猪突して、犬死するのはバカだといっていた。それなのに、自分のやっていた事は一体なんだと言うのだろうか。

自分では一方的に手助けや協力をしておいて、恩返しをしたいという人々の意思をはねつける。それは侮辱以外の何ものでもない。

「だ、か、ら。相手が王子様だからって、フィーちゃんを渡したら絶対にダ、メ、よ！」

絶叫じみたリーザの声に、シーグは我に返った。迫力のある視線が突き刺さる。しばらく遅れてからリーザの言葉が頭の中に入ってきた。そして、それが奇妙な矛盾をはらんでいる事に気付いた。

「ちょっと待て。だったら、さっき言ってたのは何だ」

「え？」

リーザは素っ頓狂な声を出した。狂気のような熱意はどこかへ去ったようだ。

「俺には王子様とフィーが引っ付けば幸いみたいに聞こえたけど？」

「あっはは……」

笑ってごまかそうとするリーザ。シーグの方から手を離して、踊るような足取りで遠ざかってゆく。しかし、恐々と振り向いた時にシーグの視線と衝突したので、急いで体ごとあさっての方向を向いた。そして、わざとらしく両手を叩いて正面を指差す。

「ほら、外へ通じる道よ。行きましょう！」

それだけを聞くと、迷宮を潜り抜けた果てに出口を見つけたようだ。部屋は２０歩の距離もないし、エレクトラム（琥珀金）の鏡が放っている光のために、部屋の中はぼんやりと明るい。リーザはシーグの背中をぐいぐいと押した。

「つまり、あれよ。憧れだけじゃ幸せになれないぞ。と、言いたか

ったのよ」
「あ……そ」
「やーん、シー坊。怒らないで。そんな事じゃ――」
「紳士失格で結構だ」
甘えた声をそっけなく遮ると、リーザは片頬を膨らませて1人で勝手に出口に向かって歩き出した。
からかったかと思えば、急に夢見がちになる。泣き出した……のは怒鳴った自分のせいなので反省しているが、その後一方的に喋ったかと思うと、笑い出して、今度はすねる。
やはり、女というのは手前勝手なルールで動いているものなのだ。シーグはそう結論を出した。
リーザが壁の前に立つと、積み重なった石壁が折りたたまれるように両側に広がってゆく。そして、明るい太陽の光が差し込んできた。

1部ー6　引けない戦い

「ああ！」
出口が開くと同時に、リーザは感極まった声を出し両腕を広げて走り出した。
「シンシアちゃーん。会いたかったよー」
リーザはすぐ外に立っていた黒髪の少女に抱きついて、頭に頬ずりまでしている。擦り寄ってくるリーザにシンシアは黒い瞳をまん丸に見開いていた。
「り、リー姉様。一体何があったのですか」
幼さの残る声色と大人びた口調の混じる独特の声。それは12歳という年齢特有のものだった。
「言ってくれなくては分かりませんわ。どうしたのです？」
リーザは答えずに、シンシアの背中に手を回して更に強く抱きしめる。シンシアは顔を赤くして戸惑っているが、嫌がっているわけではなさそうだ。
「んー、髪の毛からいい匂いがするー。もーちょっとだけ、このまんまー」
一方、こちらは単純に甘えた口調と声色。声だけ聞けば、どちらが年長であるか分からない。やがて、リーザは頬ずりするのをやめた。それでも、密着状態であるのには変わりがない。
「シンシアちゃん。今晩、王宮の宴に誘われちゃった。どうしたらいい？」
「それなら、安心してください。私も一緒に行きますわ」
「本当？」
「はい。それに、七家主催の小規模な宴です。陛下も出座されないようですし、格式ばったものにはなりません。儀礼とはいっても、ちょっとした挨拶程度ですね」
「ええと、でも踊ったりするんでしょ。私、何にも知らないわ」

「安心してください。楽団はフェルナンディ家が担当する事になっていますから。すでに、簡単に踊れる楽曲を演奏するように手配してあります。ワルツならば、リー姉様もご存知でしょ？　ドレスの方もいくつか準備しています。気に入ってくだされればいいのですけど。あの、リー姉様？」

シンシアは心配そうに問いかける。自分の肩に顔をうずめたまま、リーザが動かなくなったからだ。

「大丈夫です。ダンスの手ほどきもしますから。私で不満でしたら先生も呼びますわよ。他にも何か不安な事があったらなんでも言ってくださいね。私にできる事なら何でもしますから」

「なんでもしてくれるの？」

「はい、もちろんです」

泣く子をあやす様に必死で言葉をかけるシンシア。うつむいていたリーザは、急にガバッと顔を上げると、もう一度強くシンシアに抱きついた。

「じゃあ、結婚しましょう。シンシアちゃん、大好き！」

「え、え？　……ええー！」

「私のお嫁さんになって！」

「あの、あの、あの」

シンシアは顔をトマトのように赤くして、しどろもどろになっている。最後には助けを求めるようにシーグを見た。

「別に本気じゃないだろ」

ぶっきらぼうに言うと、リーザがムッとしてシーグを睨む。

「んもう、冗談の分からない人ね」

そう言いつつも、シンシアにぴたりと体を寄せたまま離れない。

「こんなにいい子には、かわいい服をたくさん着てもらって、もっとかわいくなってもらわなくっちゃ」

満面の笑顔で言うリーザ。シンシアは少しうつむきぎみになって、はにかんでいる。

「あの……リー姉様の作ってくれた服。私はとても好きですわ。で

すから、私の用意したドレスを着てもっと綺麗になって欲しいのです」

「ありがとう。楽しみにしているわ」

リーザはシンシアの頭を撫でて、最後は髪に口づけをしてようやく離れた。度の過ぎたスキンシップに、見ているシーグの方が気恥ずかしくなった。シンシアのほうでも気まずそうにシーグを見ていて、爆発しそうなほどに顔に血を昇らせた。

「女の子をジーッと見るなんて、やらしー」

リーザにからかうように言われて、シーグはため息を混じりにカクンとうつむいた。だったら、人の面前でするなと言いたい。

「あ、あの。シーグさん」

シンシアはシーグの左腕を見ている。そうする間に今度は見る見る顔色が悪くなってゆく。エリス・グラムファーレに傷つけられ、ガリウスのクリティカル・ウーンズ（致命傷）の魔術により、シーグの左腕は付け根までザックリと裂けてしまった。

その傷を、シンシアは自分のせいだと思い込んでしまっているのだ。

シーグは袖をまくると、腕に巻いた包帯を解いてシンシアの前に突き出した。天空の水盤の治療のおかげでたった3日のうちに傷は完全にふさがっている。もう、白い筋が一本走っている程度だ。

「な、もう直っているだろ」

「傷跡が残りませんか？」

「そうかもな。でも、戦士にとって傷は勲章みたいなものだし」

「怪我が勲章なんて、間違ってます！」

シンシアは声を強い口調で大きな声で反論する。男と女の感覚の違いだろうか。それとも、魔術士は傷に対して特有の考えがあるのだろうか。シーグにはよく分からない。

「だいたい、結界の効果がある包帯を解いてしまうなんて軽率です。魔術で負った傷は簡単にはふさがらないんですよ。それに……」

眉を吊り上げ、目を三角にして必死に訴えるシンシア。しかし、

シーグの視線と正面から衝突すると勢いをなくした。
「……とにかく、屋敷に来てください。もう一度、包帯を巻きましょう」
もっと長い説教を覚悟していただけに、シーグは気がぬける思いだった。まだ、責任を感じているのだろうか。こういう時に、どういう言葉をかけるべきか。この数日失言ばかりだっただけに、慎重になるべきだ。シーグは頭をめぐらせてリーザの言葉を思い出した。
こういう場合は服を誉めるのが定石だという。
シンシアはローブではなく、薄い青色のエプロンドレスを着ていた。スカートが花びらのように何重にもなっていて、あちこちに細かな刺繍がある。リーザと同じように、魔術師に見えない格好を選んでいるのだろう。
エプロン。これもエプロンだ。
リーザが身につけたまま外に出るのをやけに恥ずかしがっていた。なのに、これは一体どういうことなのだろうか。この辺りの理屈がさっぱり分からない。ウサギに何か重要な意味があるとも思えないが……。
いぶかしむシーグの視線に気付いたシンシアは不思議そうに首をかしげた。
「あの、どうかしましたか？」
「ええと、なんだ。その服は良く似合っている、と思うぞ」
ぽつりと言うとシンシアは目を丸くした。その後、唐突に目をそらされてしまった。
ひょっとして、怒らせてしまったのだろうか。そういえば報告は正確に行うべきであり、曖昧さは敵を利する行為だと聞いた事がある。思いつきで言った不明確な言葉は逆効果だったのだろうか。
どうしたものかと考えた瞬間、背後で地面を蹴る音にシーグは全身を緊張させた。
「おりやー」
続いて気の抜けた掛け声。アイフェに違いない。

シーグは一瞬のうちに体を反転させて身構える。正確に鼻を狙った蹴り――振り返らなければ後頭部だった――はシーグの腕によって阻まれた。防御した腕を下ろすと、誰もいない。頭上に目をやったが、青い空が広がっているだけだ。

ならば、一体何処へ？

トン、という着地音は予想だにしなかった場所から聞こえた。自分の背後である。

完全に虚を突かれたシーグは、振り返りざまに足を踏ん張った。それと同時にアイフェは地面すれすれの蹴りをシーグのカカトにぶつけたのだ。シーグはわずかによろめいた後に、手を伸ばしてアイフェを捕まえた。だが、アイフェは目にも止まらぬ速さで手を伸ばし、シーグの指と腕の逆関節を取ろうと力を入れる。シーグはその流れに逆らわず、手首を返して振りほどくとアイフェの両脇に手を入れて背中から抱き上げた。アイフェは足をばたばたさせるが、シーグは両手を一杯に伸ばして体に当たらないようにする。ついに、アイフェはあきらめて静かになった。

「うー、失敗したよー」

アイフェは無念そうに呟いた。だが、成功していたら大惨事である。アイフェはガクリと全身の力を抜いたが、それさえも油断を誘う罠ではないかとシーグは警戒した。

「シーグー、これって肩車と違って面白くないよ？」

「そりゃそうだ。悪さをしないように押さえつけているんだからな」

それにしては奇妙な格好だが、正面を向いたアイフェが体に触れるのは恐ろしくて仕方がなかった。

輝く銀色の髪と抜けるように白い肌の少女。うす緑の動きやすいシャツとズボンを着ている。ここが街中でなければ、森を駆ける妖精と見間違えても不思議ではない。

可憐な外見からは想像もつかないが、あのベクター・フォルナージュを、不意打ちとはいえ投げ飛ばした少女なのである。

アイフェ・サムハインは暗殺者達の間で育ち、名前の通りにサム

ハイン（死神）の技の持ち主である。その上、気配もなく背後に忍び寄るのは、野生の動物以上。しかも、彼女の戦闘技術は日に日に目ざましく成長しているのだ。前回はとび蹴りの後に肘を構えて頭上に落ちてくるだけだった。しかし、今回はとび蹴りの威力をそのまま殺さず、シーグの頭上を飛び越えて背後に回りこんだのだ。その後に放たれた技も、ガリウス・グラムファーレとの決闘で、シーグが見せた足払いときている。

今度は一体何が起こるのか、想像もつかないだけに背筋が寒くなった。空の死神と呼ばれるワイバーンと対峙した時でさえ、これほど恐ろしいとは思わなかったというのに。

「肩車がいいよー」

「もう背後に忍び寄らないって約束しろ」

「ぶー」

アイフェは嫌がって、再び足を振り上げて手を振り回す。約束に抵抗するからには、守るつもりがあるのだ。これは、何が何でも約束させなくてはならない。

「約束しないんなら、俺はアイフェから逃げるぞ。もう、会わないようにする」

「だったら、追いかけるよ。絶対に逃がさないんだから」

事実逃げられる気がしなかったので、シーグはどうしたものかと頭を捻った。

「いきなり人の頭を蹴飛ばそうとするなんてなー。サフィリアが目を覚ました時、なんていうかなー」

アイフェはビクリと全身を震わせて動きを止めた。

「し、しばらく眠ったままだもん。だから、会いたくても会えないんだよ！」

「あ、そ。だったら起きた後に言いつけようか？」

「ええー！」

慌てた声がアイフェの心を語っている。シーグは効果ありと見た。

「やっぱり話そう。うんうん」

あてつけるように言うと、アイフェは肩越しにシーグをジーっと見つめてくる。あまりに必死な形相に、シーグは悪戯心がくすぐられてしまった。

「他にも色々言わなくちゃいけないことがあったっけ。あれとか、これとか、それとか。うわー、色々とあり過ぎるな。えらい事だー」

すると、アイフェはプイとシーグから顔ごと逸らした。さっきのシンシアと同じ仕草だ。

リーザが「あらー」と小さく叫んで、シンシアが責めるように睨んでくる。ただ事ではないと気付き、アイフェの顔を覗き込むと今にも泣き出しそうな顔になっていた。やりすぎた、と後悔してシーグは慌ててアイフェを地面に下ろした。

「悪かった、冗談だ。さっきの事はサフィリアには言わない」

「本当？」

シーグは屈みこみ、アイフェと目線を合わせる。

「本当だ」

「絶対？」

「絶対に言わない」

すると、アイフェはニッコリと笑って、シーグを見上げた。まさか、嘘泣きだったのだろうか？

途方にくれていると、シンシアは呆れる視線で見つめてくるし、リーザは口元を覆って笑うのを堪えている。

そこで、シーグはしてやられた事に気付いた。約束させようとしていたのに、逆に約束させられてしまったのである。

「もう背後にこっそり忍び寄るのは止めろ」

アイフェは再び目線を逸らす。シーグは体ごと回りこんで、アイフェと無理やり目線を合わせた。

「こっそりじゃないもん。いつも通り歩いているだけだもん」

「ぐ……」

シーグは黙るしかなかった。確かにその通りだ。アイフェは普通に歩いていても気配も足音もないのである。

「だったら、いつもいつも道行く人を蹴飛ばしているのか」
「うー……」
アイフェは返答せず、ふて腐れて足元を見ている。
「あのな、サフィリアがこれを聞いたら怒るぞ」
「言わないって言った」
「なんだと？」
「サフィリアには言わないってさっき言った。嘘つきも約束を破るのもいけないことなんだよ」
約束を盾に言質を取って、屁理屈をこねる。さすがのシーグもカチンときた。ここで引き下がる事は絶対にできない。
だったら、俺がリーザに言って、リーザがサフィリアに言えば嘘には……いいや、違う。これでは本当にくだらないただの屁理屈だ。
シーグは深呼吸して考えをまとめた。
「ああ、さっきの事は言わないよ。だけど、これからやる事は別だ。やっちゃいけない事なんだからな」
アイフェはしばらく宙に視線を泳がせていたが、何も言わずますますブーたれた表情になった。理屈の穴を探していたのに違いない。サフィリアの言っていたとおりだ。
「いきなり襲い掛かるのはやめろ。そんな事をされて、喜ぶ奴なんていない」
「その位、分かってるよぉ」
アイフェは恨めしそうにシーグを睨んだ。
……つまり、嫌がっていると分かってやっていたのか、この子は。天真爛漫で邪気のない子だと思っていたが、それは勘違いだったようだ。
いいや、それだって悪くない。事の善悪の判断が自分で出来ているのだ。これは、サフィリアの指導の成果に違いない。
「悪いってことも、嫌がるって事もわかっているのに、どうして何度もやるんだ」
「だって、誰も相手してくれないんだもん。このままじゃあ、切れ

味が鈍るんだよ」
　アイフェは唇を尖らせてつぶやいた。
「見た事を1人で練習するだけじゃあ、全然意味がないんだよぉ」
　アイフェは情けない声を出して、シーグを見上げる。意味がないどころか完璧に身についている。技も鈍るどころか、切れ味が増すばかりだ。１０歳という年齢を考えれば、神業に等しい戦闘能力だと思う。しかし、アイフェには自分がまだまだ不満なようだ。
　もしもレイザークに生まれていたら、自分などとは違って最高の訓練を受けられたはずだ。だが、メティスでは彼女の才能を殺すことしか出来ないのではないだろうか。それはあまりにも惜しい。
「よし、俺の背後からいきなり襲い掛からない。そう約束してくれたら、暇な時に組み手の相手をしてやってもいいぞ」
「本当？」
　これを聞いて、アイフェは目を輝かせた。
「訓練の方が不意打ちよりも楽しいと俺は思うけどな。アイフェはどうだ」
「私もそう思うよ！」
「ちょ、ちょっと待ってよ。シーグ」
　リーザが慌てた様子で話に割ってはいってきた。
「フィーちゃんは、絶対に反対するわよ。アイフェには戦う以外の事をまず身につけてほしいって、フィーちゃんはそう思っているの」
　自分自身も足癖の悪さは相当なもので、出会いがしらに凶器のような足蹴りを放っておいてよく言う。それも、ベクター直伝の足技である。シーグはなんだか腹が立ってきた。
「だからって、中断なんかしたら体が鈍るじゃないか。そうすると、元に戻すのは何倍も大変なんだ。戦士にとって、鍛錬を怠るっていうのは死活問題なんだぞ」
「そうそう。その通りなんだよ！」
　シーグが勢いよく言うと、アイフェは何度もうなずいた。なので、リーザは何も言い返せなかった。シンシアは困った様子で全員の顔

を順番に見回していた。
「じゃあ、約束できるか。人の嫌がるような事はもうしない、って」
「うん！　わかったよ」
アイフェは気持ちいいほど明快な返事をした。その後、首をひねって考え込み始める。
「人の嫌がる事ってどんな事？」
「アイフェが思っているような事だろうな」
シーグが言うと、アイフェは情けない表情を浮かべてシーグを睨む。たくさん心当たりがあるらしい。
「あ、そ。約束できないんだったら、俺もやめよっかなー」
シーグが残念そうにため息をつくと、アイフェはボソボソと何かをポツリと呟いた。
「何か言ったか？　よく聞こえないぞ」
しばらく「うぅーー」とうなっていたが、ついにアイフェはゆっくりをシーグを見る。
「分かった……よ。その代わり、絶対に組み手をしてよね」
「どうせ夕方までやる事がないし、俺も体がなまっていたところだ。受けて立ってやる」
「結局、シー坊が一番楽しみにしてない？」
リーザが呆れたように聞いてくる。
「当たり前だ。浮ついた気持ちで鍛錬なんて、ふざけた事ができるか」
「おお！　その通りだよ」
盛り上がるシーグとアイフェ。リーザは「私は知ーらない」と呟いた。
「体が悲鳴を上げるまで続けるからな」
「おう、どっちかがぶっ倒れるまでやめないぜ、だよ」
レイザークでよく使われていた訓練を始める前の常套句。それを久しぶりに聞いてシーグは面食らった。
「……なあ、どこでそれを覚えたんだ」

「『みんな』が言っていたんだよ」
「その人って、レイザークの出身者じゃないのか？」
「うーん、よく分かんない」
アイフェは体全体と首をひねって考え込んでいる。

1部ー7　フェルナンディの血筋

「ちょっと待ってください」
それまで黙っていたシンシアが慌てて口を開いた。
「シーグさんは、メティス式の儀礼を知っていますか？」
「ええと、決闘場でやったのはダメなのか」
「あれは陛下への謁見の時だけです。いつでも使うと却って不敬と思われます。儀礼は場面によって使い分ける事が大切です」
「面倒だな」
シーグが心底嫌そうな声を出すと、シンシアは厳しい表情になった。
「じゃあ、ダンスの心得はありますの？」
「祭りの時にこうやって踊った事はあるな」
シーグは頭の上で手をひらひらさせた。シンシアは目つきまでも鋭くなる。
「それは勝手気ままに騒いでいるだけではありませんか？」
「そういえばそうかな」
「今まで、女性をエスコートした経験はございますか？」
「宴自体行った事がないぞ」
「……なんですって？」
ついには肩をいからせて、詰め寄ってくるシンシア。シーグは思わず後ずさった。シンシアは、大げさに深呼吸をした後、にこりと上品な微笑を浮かべる。しかし、目は怒りに彩られていた。
「それでは、どうして落ち着いていらっしゃるのか。理由を伺いましょうか」
どんどんと丁寧になっていく言葉遣いに、シーグは根源的な恐怖を感じた。
「まー、なんだ。何とかなるだろうって……さ？」
声が先細りになっていくほどに、シンシアの全身から立ち上る気

配は鋭さを増す一方だ。
「シーグさん」
シンシアの背筋はピンと伸び、完全に静止していた。まるで人形のように動かない。周囲の空気まで動きを止めたような気がする。
「お返事が聞こえませんわ」
「は……い。なんでしょう」
無形にして無音の迫力にシーグのほうも思わず言葉遣いが変わる。
「今宵、初めて宴に出るリー姉様をエスコートできるのはシーグさんしかいません」
怒ってる。ものすごく怒っている時のサフィリアとそっくりだ。髪の色の違いを除けば、４年前のサフィリアがそのまま目の前に現れたようだ。こういう時には真っ先に謝る、のは致命的に違いない。理由も分かっていない状況での的外れな発言、反省もしないうちからの軽はずみな謝罪。それは、サフィリアの怒りをハリケーン級に高めてしまう。
助けを求めてリーザを見ると、フェイル・リレイの塔から見える街の風景を見ている、ふりをしていた。口元に笑みを浮かべて、横目で楽しそうにこっちを観察していた。
「リー姉様の宮廷デビューに泥を塗るつもりですか？」
「いいえ……」
「でしたら、レッスンにお付き合い下さいますね？」
「……はい」
「では、アイフェとの組み手はレッスンの後です」
「ええー！」
シーグとアイフェがそろって不満の声を上げると、シンシアがキッと鋭い視線で２人を睨んだ。
「ぇぇ……」
それだけで、シーグとアイフェの不満の声はしぼむ様に掻き消えてしまったのである。張り詰めた緊張感は、プーと噴き出したリーザの大爆笑で打ち破られた。

「シンシアちゃんってば、ちょっとやりすぎ！」
リーザは腹を押さえて笑いながら、シーグの背中をバシバシと叩いた。
「え？」
シンシアは憑き物が剥がれたようにキョトンとした。そして、縮み上がっているシーグとアイフェを見てハッと我に返った。リーザは更に大きな声で笑いながら、背中をバッシンバッシンと叩く。怪我のあとに痛いような痒いような奇妙な感覚が走る。
「す、すいません。私ったら思わず」
シンシアは顔を真っ赤にした。そして、両手でスカートの裾をつかんでうつむいてしまった。
「宮廷デビューはね、女の子にとっては一生の思い出になる大切な舞台なの。だから、シンシアちゃんは私のために一生懸命になってくれたのよ。そうでしょ？」
リーザの言葉にシンシアは恐縮したままうなずく。
「特に貴族や王族の出身者にとっては、大人の世界の仲間入りを果たす事になるの。だから、万全の準備として、最高の演出を考えるのよ」
「成人の儀式みたいなものか？」
「んー、そんな感じね」
「なるほど」
レイザークにおける成人の儀式はすさまじい。１２歳を迎えた戦士志望の男子は、実戦顔負けともいわれる強行軍と模擬戦を経て初めて一人前と認められる。あまりの苛烈さに脱落するものも多く、死者が出ることさえあったのだ。万全の準備を怠らず、最高のコンディションを整えた者だけが戦士となれる。
そして、メティスの宮廷は言葉が剣、装束が鎧となる伏魔殿だという。
「それは……ただ事じゃないな」
感慨深げに何度もうなずくシーグを見て、リーザは「ん？」と詮

索するまなざしを送ってきた。
「なーんか違う気がするけど……ま、いいか。ねえ、シンシアちゃん、私の事でそんなに気負わなくていいわよ」
「で、ですけど。リー姉様はプルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）として、これから宮廷に深く関わっていかなくては。シーグさんも、メティスにいらっしゃるなら、公式の場での付き合いがずっと続きますわ」
シンシアの言葉に答えずに、顔を見合わせるシーグとリーザ。
「まさか、シーグさんはいなくなってしまうんですか？」
勘の鋭いシンシアは即座に正解を言い当ててしまった。アイフェも驚きに目をまん丸にしている。
「俺は明日にメティスを発つ予定だ」
「そんな……」
シンシアはギュッと唇をかみ締めた。
「メティオスマッシャーとの戦いが5日前。ヴァンガードが4日前なんですよ。体を休める時間が全然ないですわ」
「3日間も寝てたら十分だ」
「いつ決まったんですの？」
「昨日、かな。爺さんに渡されたレンガの欠片をサフィリアに調べてもらったらこの名前が出てきた。爺さんの試練はいつだって唐突なんだ。天空の水盤へ行く日程だってギリギリだった。今回だってゆっくりしていると、到着しても時間切れ。なんて事になっているかもしれないからな。早いに越した事はない」
「一体、何処まで行くんですか」
「クラトス・ビア、と呼ばれている場所だ」
シンシアは何度か口の中で繰り返し、考え込んでいた。
「聞いた事のない名前ですわ。何処の地名なんですの？」
「場所はレイザーク。だけど、地名ってわけじゃないだよ。これは」
「え、どういう事？」
今度はリーザが驚きの声を上げた。

「クラトス・ビアの意味は『戦力の結集』。王族を中心として、戦いの中心になる城砦につけられる通称なんだ。だから、正確な場所は俺には分からない」

人差し指で額に触れながら考え込んでいたシンシアは顔を上げる。

「ちょっと待ってください。レイザークは滅亡前に、王家の人間を仰いで最後まで交戦を続けたと聞いていますわ」

「そうだ。互いの連絡を絶たれて、補給線も寸断されても戦ったんだ」

「でしたら、レイザークの国土には複数のクラトス・ビアが存在した事にはなりませんか？」

「だろうな。俺のいた場所だって、クラトス・ビアって呼ばれていた。俺よりも王位継承位の高い王族は数え切れないほどいたよ」

普通に声を出したつもりだったが、それが余計に悪かったのか。リーザもシンシアも痛ましい表情を浮かべている。アイフェもそれに当てられてか、不安そうにリーザの足に抱きついた。

「……どうやって見つけるつもりですか。現在、レイザークはとても危険な場所ですのよ」

「『死の道』『魔境の廃都』『冥府が常世に現れる場所』だな。噂どおりに怪物のうろつく魔境地帯になっている。だけど、まるで土地勘がないわけじゃない。天空の水盤に行く前に、『星見の座、ガレフ』に登れっていう試練があったんだ」

シンシアはごくりと唾を飲み込んだ。

「レイザークの中枢、王都のすぐ近くじゃありませんか！」

「ま、爺さんの魔術でいきなり送り込まれたんだけどな。でも、こうやって生きている。だから、今度だってうまくやるさ」

「具体的にはどうするつもりですの？」

「心当たりのある城砦を一つずつ調べて回る。それしかないだろう」

徐々に青ざめてゆくシンシアは、唇をかみ締めた。そして、何かを振り払うように頭を左右に振った。そして、胸元に手をやって大きく深呼吸をする。

「非効率的です。そんな方法、認められません」
シンシアは人の変わったような毅然とした声を出した。宴の事で怒っていた時と同じだ。
「だけど、実際に足で探すしかないだろう」
「ディテクト（探知）の真髄は魔術のみにあらず。論理的思考と的確な探求によって真実に近づく事」
シンシアは落ち着いた声で呪文のように唱えた。そして、決意をこめた瞳でシーグをひたと見据える。
「方法はあります。フェルナンディの屋敷には、歴代の水盤の見者が今までに『見た』情報が記されています。その中から、クラトスビアの言葉とつながりのある出来事を調べる。そうしたら、完全ではないにしてもある程度の絞り込みが可能なはずですわ」
「……記録を読んで分かる事なのか？」
「やってみなければ結果も出ません。できる事はなんでもするべきです。フィー姉様が苦しみながらも調べあげて、残した言葉。絶対に無駄には出来ませんわ」
眠りにつく前のサフィリアが思い出される。体が火のように熱く、滝のように汗が流れていた。シーグの名に近づくほど狂気を抑える封印が痛みを与える。それだというのに、故郷であるレイザークのクラトス・ビアについて調べた。眠りについた一番の原因が、シーグの渡したレンガの欠片であったのかもしれない。
「分かった、よろしく頼む」
シーグの言葉にシンシアは力強くうなずく。
「でしたら、まずはシーグさんの腕の包帯を巻きなおします。それから、記録庫を調べて、クラトス・ビアの位置を特定。その後に、リー姉様と一緒に儀礼とダンスのレッスンといきましょう。それでいいですか？」
「任せるよ」
「面倒くさがらないでください」
「そういうわけじゃない。シンシアなら俺よりしっかり考えるだろ

うって思ったからだ」
「え？」
「つまり、シー坊はシンシアちゃんを信用するって事よ」
リーザが付け足すと、シンシアはパッと顔を輝かせた。しかし、喜びを押さえてすぐに思慮深げな表情に変わる。
「従うだけではいけませんわ。シーグさんも考えた事は私に言ってくださいね。戦友ってそういう関係の事でしょう？」
「……なるほど、確かにその通りだな」
「決まり！　でしたら早速行きましょう。ついて来て下さい」
シンシアは一時もじっとしていられないという様子で、一目散に塔の長い階段を駆け下りていった。
「本当にフィーちゃんそっくりでしょ」
リーザは微笑ましげにシンシアの後姿を見守っている。
「だな。だけど、なんであんなにそっくりなんだ？　姉妹や親子以上じゃないか」
「一番の理由は、シンシアちゃんがフィーちゃんに憧れているって事でしょうね。後は環境かな。元々、フェルナンディは宮廷の教育を請け負ってきた一族なの」
「つまり、生まれながらの先生ってわけか」
「その上、学者で魔術師。一族はみんな礼法の達人。その中でもシンシアは特別に優秀な子どもだったの。その上、いい子で大人しくって。だから、あんなにはしゃいでいるのは始めてみたわ」
「なんだか、窮屈そうだな」
「うーん、正直言ってそうかな。だから、フィーちゃんもお人形さんみたいな女の子だったのよ」
「……は？」
「上品で清楚で可憐で。絵にも書けないほどの深窓のお姫様って感じ」
リーザは再び「夢見る乙女のポーズ」になっている。
「通じない冗談はよせよ。そんなわけないだろうが」

１０人がかりで苛められていたシーグ。サフィリアはその渦中にとび蹴りで乱入した。シーグを魔術で宙高く放り投げ、追いかけてくる子どもを落とし穴や投網で一網打尽にしたのである。

負け惜しみにチンチクリンと合唱された仕返しに、『侮辱語録百選』を駆使して２０人に増えた男の子を一度に泣かしてしまった。

ならば一対一で戦えといわれて真っ向から受けて立ち、棒術を駆使して2歳年上のガキ大将を圧倒する。

それこそはロディウス・アクテの語る『一撃必殺の心得』を、完璧なまでに体現した戦いであった。

泥にまみれて汗を散らし、唾を飛ばして毒舌を振りまくサフィリア。それは生気のないただの人形などでは決してなかった。シーグは戦神の化身だと本気で思ったほどだ。

「うーん、思い出しただけで幸せな気分。あーあ、絵に描いてもらっておけばよかったなー」

絵にも書けないんじゃなかったのか、と思ったがこれは余計な言葉になりそうだ。

その後も、シーグが戦士になれるようにと様々な助言や実践を授けてくれたし、セリウスも紹介してくれた。

なによりも、ロディウスの教えが有益である事を目の前で体現してくれた。だからこそ、陰険な師匠の下であっても過酷な修行に耐え抜く事ができたのだと思う。

「うっわー、思い出し笑いでニヤニヤしちゃって。端から見ていたら変な人よ」

「ニヤニヤしているのはリー姉の方だろ」

リーザは口元を押さえながら流し目でシーグを見ている。

「ち、な、み、に。『あの野郎』は宮廷の装飾や調度全般を扱っている一族なの。だから、王城の名前も、建設者の名前を取ってフォルナージュって名付けられたのね。フォルナージュもフェルナンディも、昔から交流が深い一族同士でお互いを結婚相手に選ぶ事が多かったわ。元々一つの家だったし、名前もちょっと似ているでしょ

？」
「……」
リーザが何をいいたいのか予測できて、シーグは憮然とした。
「だから、『あの野郎』さんはフィーちゃんが産まれる前から結婚相手の最有力候補。４年前、フィーちゃんがベクター卿の弟子になった時、これで決まりって誰も疑わなかったわ。だけど安心して、今はシー坊も十分対抗できているから」
「なんだって？」
「進入不可能なはずの天空の水盤に単身で分け入り、ガイスとの結婚を阻止したレイザークの公子様。更に、闘技場に飛び出したフィーちゃんと、観衆の面前で熱っぽく見つめあったりなんかしちゃったりしてー。もう、妬け死んじゃいそう！」
「違う、あれはそういうのじゃない」
「って言われても信じなーい。皆がある事ない事とか、ない事ない事まで噂するのは当然だもーん」
リーザは「イッヤーン」と色っぽい声を上げて、両手で顔を押さえながら頬を染めたりなんかしている。
こういう相手とはまともに関わりあいになるな、と彼女の祖母から言われたばかりだ。なので、シーグは早速無視を決め込む事にした。
体をくねらせるリーザを目の端にも映らないようにすると、石壁にもたれ掛っているアイフェに気付いた。こんな時でさえ、気配を全く感じさせていない。それで、アイフェと組み手の約束をしていた事をようやく思い出した。
「大切な事があるんだから、気にしなくてもいいんだよ」
話しかけようとしたシーグを先制してアイフェは言った。言葉とは裏腹に少女は枯れたようにしょんぼりとしている。
「いいや、絶対に組み手はするぞ」
「いいの？」
「約束だからな。長くは出来ないかもしれないけど、絶対にする。

俺も体がなまっているからな」
「うん」
アイフェは壁から跳ね上がるように走り出した。そして、シンシアの後を追いかけて階段を駆け下りてゆく。
「シーグさん、リー姉様。早く来てください」
「そうだよ。急がなくちゃなんだよー」
シンシアとアイフェが声高に呼ぶ声がフェイル・リレイの塔に木霊する。
「ほら、リー姉。行くぞ」
シーグはリーザを誘い、階段を一段飛ばしに駆け下りていった。

1部－8　王の望み、臣下の希望

＊

ベクターは足を止めた。玉座の間に向かう廊下には人の壁が出来ている。謁見を求める人々はあまりに多く、待合室に入りきらない使者が廊下を塞ぐほどに溢れかえっているのだ。

インボルグが終われば、街道を塞いでいた雪がなくなり、諸国との交流が一度に始まる。しかし、この状況はあまりに異様だ。まさか、再び決闘騒ぎが起こってしまったのだろうか。そのために、シェンナ王が政務を放り出したのかもしれない。もしそうなら、メティスのこうむる損害はただ事では済まない。

「ベクター様！」

武人を思わせる力強い声は、群衆の中から頭一つ飛び出した大男から放たれている。宮廷鍛治士のグレイル・オーメントに並ぶ居丈夫だが、彼は文官である。名前は、タウルス・フォルナージュ。ゲイルの有能にして忠実な副官だ。

「おお、ベクター様」

将軍のように野太い声で、畏怖堂々たる体躯が通る。すると、人々は自然と道が開けた。タウルスを通す時、人々は怯えるように体を縮める。タウルスが顔中を真っ赤にしているからだ。本当は恐縮して赤面しているのだが、傍目には怒り狂っているように見えてしまう。

巨人症であると判断されてからは、一族の中で相当な迫害を受けてきた。そのため、極度の人に対する恐怖を持っている。王国の要職についてからも、いつでも周囲を警戒するビクついた印象は消えない。

もしも、メティス以外の他国に。あるいは、七家にさえ生まれなければ彼には全く違った人生が用意されていたはずなのだ。

「ああ、ベクター様」
タウルスはベクターの前に壁のように立ちふさがった。だが、目にはすがりつくような頼りなさがある。
「お久しぶりです、タウルス卿。何用でしょうか」
大臣の右腕に対するベクターの他人行儀な態度。タウルスはたじろぎ、極太の眉と小さな瞳を辛そうに歪めた。
「と、とにかくこちらへいらして下さい」
共に上賓の礼を用い、互いに敬語を使いあう奇妙な2人組みは玉座の間と逆方向に歩き始めた。タウルスはいそいそと、ベクターはゆったりと歩いているにもかかわらず同じ速度であった。それは、タウルスの歩幅が極端に小さかったからである。

＊

対談用の空き部屋を見つけて、タウルスは逃げ込むように中に入った。部屋は真っ暗だったので、ベクターは光の魔術を使って部屋を明るくした。光を銀の燭台に近づけると、石鹸の泡のような弾力で吸い込まれるように張り付いた。
周囲に誰もいなくなった事で、タウルスは目に見えて肩を落としていた。彼は元々なで肩なのだ。
「タウルス卿」
礼節を崩さぬベクターを見て、タウルスはベクターを寂しそうに見る。捨てられた子犬を連想する目つきに、ベクターは態度を改めた。
「タウルス、忙しそうだな」
「はい、ベルテヌ（夏の到来）までは寝る間も惜しむほどです」
「だが、君達の働きが間違いなくメティスを豊かにしている。陛下に君を推薦して、本当に良かったと思っている」
「ありがとうございます」
「ジェイナス卿も、心から感謝していたよ。学校の設立に力を貸し

てくれたし、子ども達が家に帰れるように働きかけてくれた。百年かかっても無理だと思っていた事が、たった数年で叶ったとね」

「そうですか。そうですか」

ベクターの言葉にタウルスはぺこぺこと頭を下げながら喜んでいる。勲章を受け、爵位を授けられた時にも困ったような表情を浮かべるだけだったというのに。そういえば、自らジェイナスを校長に任命しておきながら、うらやむ様な目つきで見ていた。

王国のためにタウルスを推薦した事は間違いだとは思わない。しかし、彼自身のためには別の道があったのではないかと考えてしまう。タウルスがゲイルの副官になった。そうサフィリアに伝えた時、一瞬だが複雑な表情を浮かべていた。それは、今ベクターが感じている事を予測していたからではないだろうか。

サフィリアはいつでもその人の性格について考える。能力や才能、地位や成果を真っ先に考えてしまう自分にはそれが新鮮だった。

もしも、タウルスの事を事前に相談していれば、彼の人生は彼自身にとってより良いものとなっていたかもしれない。しかし、彼が今の地位になければ学校を作ることはできなかった。その場合、子ども達が銀の魔女を打倒する事もありえず……。

「ベクター様？」

タウルスに声をかけられて、ベクターは我に返った。

「失礼しました。タウルス卿、私に用件とは？」

格式ばった態度に戻ったベクターを見て、タウルスもしぶしぶといった様子で背筋を伸ばす。

「陛下が謁見を拒否されているのです」

それで、廊下にまで使者があふれていたのだ。シェンナ王の気まぐれはいつもの事だが、今回は極めつけである。

「理由は？」

「リーガル・バックラーがなく、守り手もいない。自身の安全が全く保障されておらぬからと」

王の身辺はグラムファーレの一族が護衛する。しかし、ガリウス

は謹慎中、エリスは病床にある。ワグナスは追放されていて、長老は意識不明だ。玉座を守る者、４人がすべて任を実行できる状況ではない。しかも、新たな人員の任用はまだなされていないのだ。

七家の人事権は長老が受け持つ。長老が執務不可能な状況には代理人を立てるがその候補もガリウス、エリス、ワグナスなのだ。

「あなたが傍らにいるなら謁見を続けると、陛下はおっしゃっています。ダイヤモンド・カッター（金剛石の刃）卿がそばにいるなら、何者も恐れる事はない、と」

ベクターは歯を食いしばった。それでは、フォルナージュ家がグラムファーレ家の領分を犯す事になる。七家に分担された義務。それは絶妙なバランスで成り立っているのだ。ただでさえ、フォルナージュは王宮の内部に影響力が強い。そのけん制として、王城の中枢である玉座の間、王国の中心である王の身辺をグラムファーレ家が守護しているのだ。

王国の中枢をフォルナージュが統べるとなると、他の六家すべてが敵に回る恐れさえある。そして、王宮の不均衡は七家が治める世界各国の封土にまで波及する事だろう。

「陛下には困ったものですわね」

突然の声に、タウルスは「ひぃ」と情けない声を上げた。背後を振り向くと、そこにはアイシャ・ディスペリアが立っていた。ベクター自身は気付かなかったし、ベクターと対面していたタウルスも驚いている。

ドアが開いていればタウルスが気付いていたはずだし、魔術を使っていたのならベクターが気付いていた。そもそも、魔術士同士が互いに気付かれぬまま、ここまで近寄るという事が異常なのだ。

魔術の気配を限りなく絶つ事のできる秘術はグラムファーレに存在する。しかし、ここまで見事に気配を絶つ方法は存在しない。新たな秘術を開発したのなら、秘匿するのはそれ自体が他の６家への背信行為とみなされる。

最もそうでありながら、互いに秘密がある事は確かだ。そのため、

自身の一族の封士や結界の中でしか使わないのが暗黙の了解でなっている。

「ご心配なく。あなたの他には、サフィリア、シンシア、シーグ、アイフェの４人しか知りません。みんな、余計な波風を立てる方ではありませんわ」

ベクターの考えなどお見通しと言いたげに、アイシャは微笑んでクルリと一回転した。純白のドレスに、透明な絹のケープをまとっている。銀色の髪はたったそれだけの動作でも軽やかになびいた。弱い魔術の光しかないのに、アイシャの全身は輝いているように見える。

「いかがですか？」

「どちらにせよ、慎むべきです」

「そんなに派手な服ではありませんわ」

「服のことではありません」

「そんな事わかっています」

アイシャは、ツンと唇を尖らせていた。

「ならば――」

「ねえねえ、似合っていますか？」

魔術の事を言及しようとしたベクターを、アイシャの無邪気な声がさえぎった。

「――その魔術に関して、七家に波風を立てぬように配慮をお願いします」

ベクターの方でも強引に言葉を続ける。アイシャは一瞬だけ厳しい目つきでベクターを睨みつけたが、すぐに笑顔に切り替えた。

「あなたが言う事なら、私は絶対にその通りにしますわ」

「命令ではありません。それぞれの一族の内情に口出しは出来ませんから」

「ですけど、私はあなたの望む事に協力してきましたわ。今まで一度だって、あなたの意にそむいた事がありまして？　今回の事だって――」

「私は自分が陛下の護衛をするべきではないと考えています」
アイシャはスッと目を細めて近づいてきた。
「自分の心に嘘をついてはいけませんわ。今、陛下が倒れられればメティスは傾く。何があっても王を守り抜かなくては。そう思ってらっしゃるでしょう？」
「……」
「そして、陛下の心には平穏がなくてはなりません。メティスは王の法で統べられる国ですからね。現在陛下に安心感を与えられるのはあなたとシージ・ペリラスだけなのです。シージ・ペリラスが陛下の護衛につくのと、あなた自身がつくのはどちらが好ましいですか？」
理想だけ言えばグラムファーレ一族の誰かがつく事が望ましいのだ。
「陛下はグラムファーレの守りに不審を抱いておりますわね。それに、長老は倒れる時に代理人を立てませんでしたわ」
アイシャはベクターの考えを読み取っているかのように言葉を続けた。
いや、実際に読んでいるに違いない。だが、どうやって？
ディテクト（探知）の一族フェルナンディでさえ、ここまで正確に心を読むことが出来ない。魔方陣を用意し、最高の触媒を準備し、エンハンス（向上）の補助まで万全に準備する。その上で最高の術者が接触していてさえ、複雑にからみあった人の精神を読み解く事はできない。
天空の水盤で行われる夢見の儀式でさえ、確実ではないという点から言えば例外ではない。夢の代償に見者を狂気に陥れ、不明確な可能性だけで国や人を貶め、時には滅ぼす呪われた術式に過ぎないのだ。
それでも、最も確実に近い方法ということで人々は無条件で信頼する。そして、外れたと知れば怒り狂う。
だから、天空の水盤は破壊されるべきなのだ。そう強く念じた時、

アイシャはメティオスマッシャーを与えてくれた。そして、最後まで抵抗するサフィリアを見て、迷いが強くなっていた時にシーグが現れてガイスを倒してくれた。

リーガル・バックラーとアヴェンジャーの弱点を明らかにしたい。赤毛やオッドアイという特徴で一族から追放する七家の行いを改めるべきだ。

セブン・パワー・インテグレーションを使えるマントは完全に破壊されたほうがいい。

ロディウス・アクテの戦法をこの目でじかに見たい。

何もかもが自分の望んだ通りに運んでいるのだ。それが単なる幸運であるなどとベクターは思えない。そのすべてに彼女の介入があったのは疑いがない。

アイシャは微笑みながらベクターを見つめている。その眼差しをどう受け止めれば良いか分からず、ベクターは更に考えをめぐらせる。

「べ、ベクター卿」

おどおどした声がベクターを我に返らせた。

「邪魔しないでください」

アイシャは険を含んだ表情で声のしたほうを睨みつける。気の毒なほどにビクビクしているタウルスの言いたい事をベクターはすぐに察した。

「とにかく、玉座の間へ向かいます」

「ご一緒しますわ」

「急ぎますので」

腕に取りすがろうとしたアイシャを、ベクターは大またに歩く事で振り切った。隙もなく脇を締めて歩くベクターを見て、アイシャは唇を尖らせた。

とりあえず、今目の前にある出来事を片付ける必要がある。特に物資の流通を滞らせるわけにはいかない。この一年が戦の年になるとすれば、なおの事だ。

1部－9　彼女の風景

＊

フェイル・リレイ（石突の中継地）の塔から出て、大河アクア・ランスにそってシーグ達は東へ向かった。

広すぎる道、繊細すぎる建築物には、軍事的防御力はないに等しい。守るに難しく、攻めるに易い都市だ。

シーグはそう決め付けて街を観察していた。城壁もなく平坦な土地に作られた街は無防備にしか見えない。

アクア・ランスの主流と、網の目のように張り巡らされた水路に沿って、町並みは続いている。

外洋に出てそのまま海を渡れる巨大な帆船が、フェイル・リレイの関所に差し掛かっていた。水門が重々しい音を立てると、櫂が一斉に動き出す。赤色のロープをまとった男が、杖を振りかざすと途端に帆が風をはらんで前進する。魔術師が風を操って船を動かしているのだ。

水門が開かれると一挙に景色が広がった。それはインボルグの前、ほんの四日前とはまるで違う光景だった。

アクア・ランスには大小様々な船が行き交っていた。特に、商業地区であるウィングス通りの近辺には湖岸が真っ白に見えるほどに船がひしめき合っている。それは、まるで白鳥の群れのように見えた。

川岸には様々な品物を並べた店が並んでいる。桟橋が用意してあって、小船を止められるようになっている店がある。中には、完全に水路に張り出した店もあって、船に乗ったまま簡単な食べ物や飲み物が買えるようにしてあった。

それだけにとどまらず、船の上に大量の樽や木箱を詰め込んで、声高に客を呼んでいるものもいる。船に『□』の形が刻まれている

という事は酒売りだ。よもや、宿屋という事はないだろう。
川沿いに建つ建物はほとんどが3階建てに統一されていた。3階の屋根の少し下あたりに、地面と水平に延びるポールがある。そこには、店の看板の役割をする大きな旗が翻っていた。これは船上からでも店が何であるかを分かるようにしてあるのだ。
風が優しく吹きぬけ、流れる水音に活気のある人々の喧騒が混じる。豊かな土と無限とも思える水に恵まれた場所。
「いい街だな」
シーグは思わず呟いた。無防備を皮肉る辛らつな言葉を、いつの間にか忘れている事に驚く。
「当然ですわ。詩人たちが声をそろえて賞賛する世界一の水の都ですもの。この区画の名前はサ・フィールといいます」
「え？」
シーグが驚きの表情を浮かべたのを見て、シンシアはうれしそうに先を続けた。
「4の方位と21の道、知恵と英知、青の光玉。リアには後方に立つ者、道理、原動力といった意味があります。フィー姉様が生まれた事を祝ってこの地区が作られました」
「……なるほどね」
8歳のサフィリアが誇らしく名乗っていたのを思い出す。そして、フェイル・リレイの塔から、メティスを案内してくれた時は楽しそうだった。きっと、この景色を心から好きだったからに違いない。
「この区画は、設計者が利用する人達の声を聞いて、何度も何度も相談して作り上げました。だから、ここは旅人や交易商が使いやすく、人々が住みやすいようにできています」
「だけど、そんな事をして大丈夫なのか？」
シーグの知っている街は、治安維持と要塞化を大前提として、王や将軍が作る。住みやすいように道を広く直線にすれば、敵の行軍も容易になる。水路を一本化して水の便を図れば、要所を押さえられるだけで町全体が無力化してしまうからだ。

「平気です。だって、この区画はフェルナンディが治めていますから」

シンシアは誇らしげにうなずいた。分かりきった事だといわんばかりの自信だ。

「運河の見者、サウザント・アイズ（千の瞳）卿ワイザー・フェルナンディ。鋼鉄の貴婦人、アクア・ランス（水の槍）卿クリスティーヌ・フェルナンディ。この御2人が健在であるうちは、如何なる悪も栄えることはありませんわ」

「アクア・ランスって……3騎士の1人は、女性なのか？」

「そうですわ」

視線と同じ長さの槍を持ち、鋼鉄の貴婦人の2つ名を持つ。それを聞いただけで、なんだか息苦しくなってきた。そして、決闘騒ぎになったのが、リーガル・バックラー卿であってよかった。そんな根拠のない考えがシーグを支配する。

「顔色が悪いですわよ？」

「なんでもない。ええと、魔術の系統だけ聞いていたら、アクア・ランス卿はブラスト（噴出）の一族、フィーンドの出身だと思っていたぞ」

「よく勘違いされますわ。系統はブラストですけど、雷撃に関しては、ディテクト（探知）の系統を修めた者の方が勝るようです」

「なるほど、ね」

シンシアやサフィリアの事を考えると、シーグは無条件で納得できた。つまり、今から赴く場所にはタラニス（雷神）の親玉がいるということだ。

おそらく彼らの住み家は町並みの中で一際大きな塔のある白亜の城。それ自体がすでに一国の城というのに相応しい。海から船で来たものが、メティスの王城だと勘違いしても不思議ではない。遠目にも格式と壮麗さがあふれ出て、ほとばしらんばかりだ。礼節と儀礼の満ち満ちた場所を、鋼鉄の貴婦人が取り仕切っているのだという。しかも、そこは魔術師が統べる建物なのだ。

そんな事を考えると、入ったが最後、無事に帰れないのではないかという思いにとらわれた。
「やっぱり、顔色が良くありませんわ」
「いや、なんでもない」
横からピョコンと顔を出したリーザが、否定するシーグの表情をまじまじと見つめる。
「こーゆー時のシー坊って、結構すごい事を考えているのよ」
リーザがすかさずシンシアに耳打ちした。
「まさか、御二人の事を悪く思っているのですか？」
「ち、違う！　そんな事は……思ってない、ぞ」
図星を当てられてて、思わず叫んだシーグ。しかし、その語尾は消え入るように細っていった。リーザのやっぱりと言わんばかりのニヤけた表情。よく分かっていないアイフェも、何か起こると勘付いたらしい。好奇心丸出しの表情で、キョロキョロしている。
「では、どんな事ですか？」
シンシアは言葉遣いが丁寧になり、声色が尖っている。肩をいからせ、許しませんと全身で表現していた。シーグはぬけるように青い空を仰ぐ。
ジェイナス校長、やはり俺にとってメティスは住みづらい場所のようです。そうシーグは心の中でつぶやいた。
「こうやって、はぐらかそうとしている時もそうなのよ」
「リー姉！」
シーグが睨みつけると、リーザは「キャッ」と小さく叫んでシンシアの背中に隠れる。アイフェも「うきゃ」と叫んでからリーザの背中に張り付いた。
面白がる2対の瞳と、咎めるようなシンシアの黒い瞳。押し負けそうになったシーグだが、よくよく考えたら何も悪い事をしていないのだ。
ふと思いついた事だけで、いちいち謝っていられるか。
道行く人々が何事かと振り返るが、シーグのほうでも負けじと見

つめ返した。しばらく不機嫌に睨みつけていたシンシアだが唐突に顔を伏せた。

「急ぎましょう。時間の無駄です」

そっけなく言って道を先へと進み始めた。取り残された形のリーザとアイフェが、「あら？」「らー？」と途方にくれた声をもらす。シーグが睨みつけると、アイフェを背中に張り付かせたままリーザは逃げ出した。途中、リーザがクルクルと回転を始めると、危なっかしく揺れるアイフェがはしゃいだ声を上げた。

文句を言いたかったが、結局シーグは口を閉ざした。構うとその倍は言い返されるに違いないからだ。

シンシアを先頭に少し離れて歩くシーグ。小さな悲鳴が聞こえて振りかえってみると、回転しすぎたリーザが目を回して尻餅をついていた。放り出されたアイフェも腹を押さえてケラケラと笑っている。

一方シンシアはいそいそと歩く。通り過ぎる船が、陽気に挨拶をよこしても無視していた。途方にくれる船乗りたちにシーグは軽く手を挙げて応えると、船乗りたちは苦い顔をしている。立ち直ったリーザと笑い終えたアイフェは、「おーい、おーい」と倍も陽気に叫び返して両手を振っていた。

元気な声にシンシアはチラリと振り返ったが、シーグと目が合うと更に歩調を速めて遠ざかってゆく。

怒っている。とにかく怒っている。だが、そんなに悪い事をしたとは思えない。たいだい、最近は謝ろうが、下手に出ようが、正直に言おうが結局相手の感情を逆なでしてばかりだ。

敵対する相手と容赦なくぶつかるほうが、友好的な相手と普通に過ごすよりも気が楽に思える。そもそもこの４年間、どうやって戦いを有利に運ぶか、どうやって相手の平静を崩すか。そんな事しか考えてなかったような気がする。

そういえば、ガリウスが言っていた。「貴様は二言目には人を侮辱する男だ」、と。実際に何も考えずに自然に口に出した言葉や、

本物の勘違いが予想以上に相手を浮き足立たせていた。
侮辱をすれば条件反射で決闘をしたがる騎士だ。何を言っても簡単に――。
そこでシーグは思考を止めた。慎重になってみれば、今考えている事でさえ十分すぎるほど過激だ。何気ない言葉が、無意識のうちに相手を苛立たせているに違いない。
何しろ、自分はあのロディウス・アクテの弟子なのだ。たとえ、師匠のほうで弟子と認めていなくても。

1部－10　彼女の望み

「悩んでいるようだね、少年！」
「しょーねん！」
アイフェを背負ったリーザがシーグの顔を覗き込んだ。
「おーやおや、これは煩悶の相が出ておるぞぇぇー」
「ぼぇぇぇー」
リーザは老婆のようにしわがれた声を出す。そうすると、アイダやラーダと区別がつかない。
「ねえねえ、はんもんって何？」
「うーん、とにかく苦しんでるって事よね。実は詳しく知らないんだけど」
不思議そうに問うアイフェに、リーザはいつもの声で自信なさそうに言った。せっかくの重々しさが台無しだ。
「詳しくはシンシアに聞いてきて、私よりもずっと物知りだもん」
「はーい」
アイフェはリーザの背中から降りて、ずっと前を行くシンシアのところへ走って行った。
「煩悶の相が出ておるぞぇー。一つ相談してみんか、若いの？」
再びしわがれた声に戻り、アイダ婆さんそっくりにヒョッヒョッヒョッと笑う。
「知りもしない言葉で何を言っているんだ」
「大体分かっているからいいのよ」
リーザは声を元に戻して、歌うように言った。
占い師というのは正確を無視して、大体で判断してもいい職業のようだ。
「あ、そ。じゃあ――」
どう見えますか、おばさん。そう言いかけた口に張り手を食らわせ、間一髪で飲み込んだ。

やっぱり、そうなのだ。シンシアの言うとおりに、二言三言は余計な事を考えている。

「ねえ、本当に大丈夫なの？　何か悩みがあるのなら聞かせて」

リーザは心配そうにシーグを見上げている。

「大した事じゃない」

「辛い時や悲しい時にはね、絶対に抱え込んじゃダメよ。心はね、歯と一緒なの。何かが挟まっているのに放っておいたら真っ黒になって、二度と元に戻らないんだから」

リーザは反対の手で自分の口を引っ張り、真っ白な歯を「いー」とむき出しにした。

「心が虫食いになるっていうのか？」

「そうよ」

茶化すように言ったシーグだが、リーザは真剣にうなずく。

「すぐに穴だらけになって、全部ガタガタになっちゃうんだから。そうしたら、臭うお口になっちゃう。心も一緒よ。だからね、歯も心もいつでもピカピカですっきりしていなくちゃいけないの。イジイジ悩んでいたっていい事なんて一つもないわ」

だったら、すでに手遅れかもしれない。ちょっと思い返しても、陰湿さをフードのように被っていた時期の方が多いように思える。

「だ、か、ら。それを止めなさいって言っているの。はっきり言いなさい」

リーザは、人差し指でシーグの頬を突き刺した。黙っていると、リーザは更にグリグリと指を押し込んでいく。

「俺は……」

シーグが口を開くと、リーザは人差し指の力を弱めた。

「嫌な奴なのかな」

どうせ笑い飛ばされると覚悟していたが、リーザは真剣な表情のままだ。その方が却って気まずい。

「どうして、そんな風に思うの？」

シージペリラスだから、と言いかけたの抑える。そう過去に口走

った後、サフィリアとリーザに長々と説教をされたからだ。
「ねえ、どうして？」
「いや、まあこの景色を見ていたら気が晴れてきたな、うん」
シーグは空中に目を泳がせた。
「ごまかさないで正直に答えて」
「……」
だけど、正直に言ったら怒るに違いない。かといって、嘘を言っても簡単に見破られそうだ。そうすれば、心底怒らせることになるだろう。大惨事よりは惨事のほうがまだ取り返しがつく。
「俺はシージ・ペリラスだからな」
シーグは覚悟を決めて言った。リーザは前に立ちふさがる。
「今更言われなくても分かっているわ。だから何？」
座った目つきに横一文字の唇、両手は腰に添えられていた。「怒りのポーズ」とでもいうのだろうか。
「痛いめにあって立ち直った人間は強くなる。争いの中にずっと身を置いた人間もだ。俺もそうやって強くなれた……よな？」
「そりゃ、そうよ。大陸最強のメティオ・スマッシャーに、王国最強の決闘者リーガル・バックラー卿を倒したくらいだもん。弱いなんて誰も言わないわ」
自信なさそうに言うシーグにリーザは大きくうなずいた。怒り心頭の態度のまま、同意されるのはなんだか余計に居心地が悪い。
「だけどな、そういう強さって結局は暴力なんだよ。そばにいる相手を盾で打ち付ける様に退けるか、剣の様に切り払ってしまう。いつだって敵を侮辱する事や有効に倒す方法ばかり考えているんだ。そういうやり方しか知らないから、今までのシージ・ペリラスは、覇王や暴君にしかなれなかったんじゃないのか？」
リーザは再び難しい表情でシーグを見ている。
「俺は生き残る事に必死だった。頭を働かせて敵を陥れ、口を動かして平静を乱し、距離を詰めれば隙を探し、止めを刺すために剣を突き出す。ずっとそんな事ばかり考えてきたんだ。フィーみたいに

人に何かを教えるとか、リー姉みたいに物を作るとか。俺には想像も付かない」

「だから、人に会うたびに相手を傷つけたり、不機嫌にさせてしまうって心配なの？　それもメティスを去る理由の一つってわけ」

図星を突かれて無言でいると、リーザが大きく息を吸い込み肩を怒らせて歩いてきた。

「目をつぶって歯を食いしばりなさい！」

言われたとおりにシーグは目を閉じた。歯を食いしばり首に力を入れる。しかし、それ以外の箇所は脱力するのが重要だ。そうすれば、抵抗なく体が吹き飛んで顔への負担が減るからである。

しかし、予想に反して頭の上にパサリと軽い感触があっただけだ。

「キャー、シーちゃんってば、やっぱりかわいいー！」

「お……い」」

目を開けると、赤毛のカツラが頭にのっていた。肩まで伸びる長髪が三つ編みになっている。つまり、リーザの髪型と同じだ。自分の髪型と同じカツラなど必要なはずが無い。つまり、隙を見つけてかぶせるために虎視眈々と機会を狙っていたという事だ。

うんざりとしてはずそうとすると、リーザが背伸びしてカツラに手を伸ばす。

「ダメ、雑に扱うと壊れちゃうでしょ」

「だったら、手を離してくれ」

「イ、ヤ、よ」

リーザは笑い声を上げながら、シーグに寄りかかってカツラを押さえつける。空いた手でわきの下の隠しから化粧用の筆を取り出した。胸元の開いた服でそんな仕草をされると目のやり場に困る。

「おしゃれをしてお化粧するとね、気持ちが明るくなれるのよ」

「それは、女の話だろうが！」

「うーん。じゃあ、せっかくだから私の妹になって。えっとねー、名前は……シージペリラスだからシーラちゃん」

「あのな、いい加減にしろよ」

「イヤよ。だって、私はシー坊とずっと楽しく暮らしていきたいもん」
「……だけど、しょっちゅう怒ってるじゃないか」
「そうね」
「泣いたふりまでするし」
「本気で泣きたくなった時もあるのよ。シー坊ってば結構毒舌だもん」
「う……」
「そ、れ、に。デリカシーはないし、子どもみたいな事言うし、そのくせに子どもに言い負けるし。女の子の気持ちなんて分かってないし、フィーちゃん一筋だし」
「うぐ……」
「お子ちゃまみたいだし、的外れなこというし、紳士じゃないし、食事は遅いし、砂糖とミルクはたっぷりだし、そのくせに太ってもいいとか言うし」
赤毛のカツラをかぶらされ、耳元で度重なる失敗を囁かれシーグは気が重たくなってきた。落ち込んで前かがみになったシーグから、カツラが落ちないようにリーザは更におさえる。そして、ニッコリとシーグに笑いかけた。
「だから、楽しいのよ」
「……意味が分からんぞ」
「別に分からなくていいわ。だけど私はそう思っているの。フィーちゃんも子ども達もシー坊のことを好きだし、誰も嫌いだなんて思ってないわ。あーー、むしろ私たちが嫌っているって、シーグが勝手に勘違いしている事が一番酷いかも。うん、酷い！」
リーザはそう結論付けて、シーグの頬に筆の柄を突き刺した。リーザはぐりぐりと筆に力を入れてゆく。その時、背後で石畳を蹴る音が聞こえ、シーグは背筋に寒気が立った。
「おりやー」
間の抜けた声と共に、飛び上がったアイフェはリーザと同じよう

に頭を押さえつけてきた。そして、人指し指をシーグの顔向けて突き出す。逃れるすべはなく、打撃を抑える方法も思いつかない。

「ぶじゅっ」

トマトが落ちて潰れたような声を上げて、シーグは地面に倒れた。筆の柄とアイフェの指に挟まれた両頬を、刺し貫くような痛みが走る。

「シ、シーグ。大丈夫？」

「あれぇー？」

歯が折れたかのような痛みと、胸が重くなるような情けなさに立ち上がる気力さえも奮い立たない。

「ど、どうしたんですの。シーグさ……ブッ！」

悲壮な声を上げて走りよってきたシンシアは口元を押さえて噴き出した。うつむきながらも横目で赤毛のカツラを見て、まるで咳き込むように笑っているのを隠そうとしている。これでは、むしろ大爆笑された方が気が――。

すると、川のほうから船乗り達が大爆笑する声が聞こえてきた。ゆっくりと川を下っていくところを見ると、一連の行為をすべて見られたに違いない。大爆笑されても気が楽という事はないようだ。

心と歯は同じで、一度砕けると直らないという。だったら、今日の事でひび割れた羞恥心や自尊心というものもそうかもしれない。そんな事を考えていたシーグは、余計に立ち上がる気力をなくていったのである。

沈んでゆく心とは裏腹に、空は何処までも青く風は涼やかだった。

1部－11　彼の跳躍

そんな平和な光景に相応しくない悲鳴をシーグは聞いた。絹を裂くような鋭い悲鳴だ。首を上げて周囲を見回すが、悲鳴を発した人はいなかった。声は遠く、開けた地形のために場所が特定できそうもない。

空耳ではない証拠にアイフェもピクリと反応していた。警戒する小動物のように、一箇所をじっと見つめている。

「聞こえたのか」

「うん、女の人の悲鳴だね。こっちからだよ」

シーグの意図を察したアイフェはすでに走り出していた。

「え、何。どうしたの？」

「話は後だ」

まだ頭に乗ったままの赤毛のカツラをリーザに投げ返して、シーグはアイフェについて川沿いを走る。細い路地に入ったところで、金髪の女性が襲われていた。仮面を被った男が女性から、宝石のちりばめられたスカーフを奪い取ろうとしている。

「そこまでだ！」

シーグが叫ぶと、仮面の男はスカーフを剥ぎ取って、女性を壁に叩きつけた。そして、シーグに向かって腕を突き出す。しかし、ナイフも炎も飛んでこない。シーグは一挙に距離を詰めようと踏み出した。

「ダメ！」

しかし、アイフェがシーグの足にへばり付いて前進を制する。小柄な少女を地面に引きずりそうになって、シーグは慌てて立ち止まる。

「何をするんだ」

「これ以上は進めないんだよ」

アイフェに言われて、ゆっくりと手を伸ばすと固い感触が指先に

触れた。知らずに猪突していれば、ガラス窓に激突する鳥のようになっていただろう。横に手をずらしていったが、路地一杯に広がっている。5個の小石を拾って順番に上に投げてみたが、3階の高さまで壁は続いている。これでは追跡のしようが無い。

金髪の女性に駆け寄って、顔をのぞきこんだシーグは心臓が止まるかと思った。

「フィー？」

いや、よく見ると全然違う。確かに美しい金髪や顔立ちが似ている。しかし、20歳前後のようだし瞳の色がアイフェと同じ澄んだ青色だ。だが、恐怖に揺れる目の焦点が合っていない。だが、意識が朦朧としているわけでもなさそうだ。

「ひょっとして、あなたは目が」

サフィリアとよく似た女性は、怯えた様子で小さくうなずいた。

「どいて下さい、ディスペル（解術）します」

遅れてやってきたシンシアが走りこんできた。そして首のペンダントを拳に巻きつけて、透明な壁に叩きつける。キーンと甲高い音がして、壁が砕けた事をシーグに教えた。

「レティー姉様！」

シンシアは女性の下に膝をついて鳴きそうな声を上げた。

「ああ、その声はシンシアね」

レティーと呼ばれた女性はキョロキョロとして手と視線を空中に泳がせる。頼りなげに動く手をシンシアはしっかりとつかんだ。

「はい、シンシアです。スカーフを奪われたのですね？」

シーグのときとは違って、女性は安心したように何度もうなずく。

「なら、あいつを追いかけて捕まえたらいいんだな」

駆け出そうとしたシーグをシンシアが止めた。

「相手は魔術師です。魔術師の援護なしで勝てるとお思いですか？」

「だけど――」

「確かに私はシーグさんよりも走るのがずっと遅い。それを承知の上で考えがあります」

「よし、分かった」
即答したシーグに、シンシアは逆に面食らった表情になった。不思議そうにシーグを凝視する。
「どうすればいいんだ？」
急かすとシンシアはシーグの背中に飛び乗ろうとした。しかし、アイフェのようにはいかずズレ落ちそうになる。シーグはシンシアの足と手をつかんで、引き上げてやった。
「このまま追いかけてください。リー姉様はレティー姉様をお願いします」
「う、うん。分かったわ」
リーザは急な展開にあたふたしながらもレティーの手を取った。どうやら、シーグ以外は全員レティーとは面識があるようだ。
シーグはシンシアの言うとおりに仮面の男が逃げた道を走っていった。すぐ後ろにアイフェが続いている。
小柄な１２歳の少女とはいえ、その体重で確実に走る速度は落ちる。全力疾走すれば体力も瞬く間に失われてゆくだろう。それに、シンシアを支えるために両手がふさがっているのも問題だ。
しかし、シーグの心配は無用のものだった。急に背中が軽くなっていったからである。
「空中浮遊の魔術を使いました。もう支えてくれなくても大丈夫ですわ」
耳元で聞こえる声。手を離してみると、首に回されたシンシアの両手はそのままなのに重さだけがなくなっている。しかも、シンシアの体は旗がなびくように風に乗っている。
「魔術の援護はお任せください。仮面の男を追いかけましょう」
「了解」
シーグは速度を上げて狭い路地を疾走した。後ろを見ると、アイフェはまだ余裕がある様子でついてきている。
路地をぬけると、そこは大通りになっていた。ウィングス通りほどではないが、道の両側には店が並んでいて人々が行き交っている。

周囲を見回したが、仮面の男は見当たらない。仮面以外の特徴で逃げた男を見つけるのは不可能に近いだろう。

「くそ。これじゃあ、誰が誰だか……」

「いいえ、この通りに魔術師は1人だけ。あの男です」

シンシアは30歩ほど先を歩いている中肉中背の男を指差した。仮面はつけておらず、さっきの格好とは違って薄い橙色のローブを着ている。

シンシアの声が聞こえたはずはない。しかし、橙色のローブの男は仮面で顔を隠してから振り返った。そして、シーグたちの姿を見ると慌てて走り出す。

魔術師は特別な感覚がある。だから、魔術師が近づいて来た時、近くで魔術が使われた時には眠っていても気づく。

シーグはサフィリアの言葉を思い出していた。つまり、シンシアがいる限り魔術師を人ごみの中で見失う事はないのだ。同時に、シーグたちの追跡は必ず気付かれる。通常の物盗りを追いかけるのとは訳が違うだろう。

橙色のローブの男は再び、路地の中に逃げ込んだ。シーグが路地に入ると、仮面の男は前方で何かの呪文を唱えている。

シンシアはそれを見て、悔しそうなうめきを上げた。

「並列展開式、多層十字結界ですわ。半歩毎に8つ展開です。一つずつディスペル（解術）していては間に合いません」

シーグには言葉の意味がさっぱり分からない。なんで、わざわざ複雑な名称をつけるのだろうか。それよりも重要なのはディスペル以外の手段で壁を取り除く事だ。

「シャープネスで切れそうか？」

「ええ、きっと可能です。エンチャントの属性、対象はシーグさん。ディテクト（探知）の系統、魔術探知を付与します」

シーグの意図をシンシアは一瞬で理解して、呪文を唱え始めた。すると、ガリウスと決闘したときと同じくシーグの目にも緑色の光が見えるようになった。5歩に渡って十字が複数立てられている。

そして、十字がゆっくりと回転していて、路地を全体を塞いでいるのだ。しかも、壁の幅は半歩。壁を潜り抜けていくのは時間はかかるし、高さは3階までである。

しかし、緑色の光の中にシーグは赤色のひずみを見つけた。ガリウスと戦った時よりも数は多く、更に大きい。シーグはシャープネスを抜くと、走る速度を落とさず。しかも間断なく8連続の攻撃を打ちこんだ。その狙いは正確に赤色のひずみを貫き、一撃毎に1枚の防護壁を確実に破壊したのである。魔術の壁を破壊した時のキィーンという音が路地の中に反響する。

最後の壁が砕けると同時に、アイフェがナイフを投げつけた。狙いは違わず逃げる仮面の男の背中に突き刺さった。仮面の男はナイフを叩き落とす。刃先に血がついていて、負傷しているのは確かだが浅い。狙いは正確でもアイフェの腕力が弱く、距離がありすぎたのだ。

緑ローブの男はよろめきながら、真っ白な尾羽を取り出した。ワシの羽根に似ているが、その巨大さからシーグはグリフォンだと見当をつけた。

仮面の男が素早く印を結ぶ。すると、男の全身が紫色の光に包まれ足がわずかに浮いた。次にシーグが空いた手でナイフを抜き打ちに投げつける。しかし、ナイフは軌道を大きくそれて路地の壁に当たった。

背中ではシンシアの手がパシリと音を立てて火花を散らす。それを見た仮面の男は地面を蹴って空に飛び上がった。シーグ達は慌てて追いかけたが、仮面の男は、更に壁を蹴って速度を増すと空に逃げ、路地からは見えなくなっていた。

「空中浮遊なのか？」

「いいえ、飛行の魔術です。それも、術者が周囲の空間を歪曲させて空中を移動するタイプ。それ故に飛び道具を封じてしまいます。エンハンス（向上）、エンチャント（付与）、サモニング（召喚）のトリプル・ステイシス（三連均衡）。あんな高等な魔術なんて―

―」

「で、どうする？」

長くなりそうなシンシアの言葉をシーグはさえぎった。

「……近距離からの私の雷撃。それなら何とか」

「だったら、まずは視認だな」

シーグは路地の中を駆け抜けた。大通りに面するために、石造りで3階の建物が続く。だが、その中で一つだけ2階建ての家を見つけた。すると、シーグはシャープネスを鞘に収めて変わりに両手にナイフを持った。

「な、何を――」

「しっかりつかまっていろ。絶対に離すなよ」

シーグは壁に向かって全力疾走する。壁が目前に迫った時、悲鳴を押し殺したシンシアがギュッと背中に抱きつく。シーグは寸前で屈みこむと、全力で垂直に飛び上がった。そして、頂点に達したところで両手のナイフを壁の隙間に突き刺す。更に懸垂の要領でナイフを起点に体を持ち上げると、片手で屋根の端に手をかけた。勢いをつけて反対の手も屋根に手をかけ、再び懸垂の要領で体を上げる。最後には壁を足で蹴って見事に屋根の上に駆け上がったのである。

「な、な、なんですの？」

「もう一丁、行くぞ」

間断おかずシーグは前方にそそり立つ壁に向かって疾走した。

「え？　キ、キ、キ、キ、イヤァーーーー！」

一歩毎にシンシアは悲鳴を漏らし、シーグの跳躍と同時に絶叫した。なぜなら、その勢いで走れば屋根の上ではなく大通りの上に落下するのは確実だったからだ。実際にシーグは壁の窓枠を蹴り、大通りに飛び出してしまった。真下に広がる人々の群れを見ると同時に、シンシアは目を閉じてしまった。

シーグの狙いは旗を掲げるポールであった。両手でポールを握り、疾走の勢いを殺さず蹴上がりの要領で体を押し上げる。その後、ポールに足をかけて跳躍し3階の屋根の上にたどり着いてしまった。

その身軽さには、軽業師さえも目を見張り、盗賊でさえも自分の目を疑ったに違いない。実際に、ポールの軋む音につられてシーグを見たた人々は驚きに目を丸くするか、幻でも見たのかと目をこするかのどちらかであった。

「あいつだ、見つけたぞ！」

空中を移動する仮面の男は見つけたシーグは疾走を開始した。仮面の男の方でもこっちの追跡に気付いたようだ。横に逃げるのではなく、更に上空に舞い上がってゆく。

薄目を開いたシンシアは「ヒッ」と小さく悲鳴を上げた。眼下に広がるのは3階の高さから見える大通り。しかも、シーグは細い幅の石組みの上を走っているのだ。

3階の高さに揃えられた屋根は、シーグにとって地上と変わる事はない。手のひらの長さほどの幅さえあれば走れるし、小指の長さでも普通に歩く事ができるからだ。もしも、家が三角屋根なら追跡はもっと困難になったに違いない。

「大丈夫か？」

「へ、へへ平気です、わ」

全く平気そうではない言葉と、背中越しに感じるシンシアの鼓動にシーグは足を緩めた。仮面の男は空を飛んでいるが、それほど速くはない。どうやら、何かを蹴った反動を利用しないと速度が出ないようだ。

そういえば、ベクターが空を飛んでワイバーンの背中に飛び乗ったときも地面を蹴っていた。

シーグは比較的広くなっている足場を見つけて一度立ち止まった。仮面の男のほぼ真下、直線距離は３０歩。距離で言えば、地上からリーザの塔の窓までと同じくらいある。

「どうする？」

しかし、シンシアはシーグの背中から滑り落ちてへたり込んだ。目の焦点が合っていないのは、呆然としているからだ。

「おい、本当に――」

「す、す、すいません。で、ですけど、もう大丈夫。ですわ」
シンシアは言いながら、顔を手のひらで叩いて首を横に振っている。しかし、息は荒いし顔は青ざめている。大丈夫ではない事は一目見れば分かる。
空中浮遊があれば落ちないので、多少の事は平気だと思っていた。だが、よく考えてみればそんな事はただの屁理屈だ。シーグ自身も理屈で恐怖を克服するのはずいぶんと時間がかかった。そして、シンシアはロディウスの下でそんな訓練を受けてはいない。
「すまない、シンシア。俺が無茶だったな」
「いいえ、私の修行が足りないだけです。それよりも、この距離はブラスト（噴出）の射程外ですわね」
シンシアは、声こそは小さいが、いつもの理知的な口調へと戻っていた。

1部－12　彼女の戦術

「ディスペルはどうなんだ」
「射程外ですし、トリプル・ステイシスが相手では効果が薄いですわ。3重構造で魔術を維持すれば、障壁が構成され――」
「じゃあ、エンハンスをした後に雷撃はどうなんだ？」
「……いくら威力を増しても、空間をゆがめて狙いそのものをはずされては意味がありません。『ロング・レンジ・ギムレット（長距離射程、錐の陣）』などの陣形や、『灼熱の閃光』と『鉄壁の障壁』のように息のピッタリとあったエンハンス（向上）でなければこの距離では効果がないでしょう」
「だけど、近寄りたくてもこれ以上高い建物なんてないぞ」
「でしたら、私たちから近づくしか……」
シンシアの声が段々と小さくなり、戻りかけていた顔色が再び青ざめてゆく。
「無茶はせず、奴の落下地点を見極めるという手もあるな。その後、追跡する」
「間に合いません。レティー姉様を襲った悪党を放っておけませんわ！」
そう叫ぶと、シンシアは両手を広げると力いっぱい自分の両頬を挟みつけた。パッチーンと派手な音がして、青ざめた顔がどんどんと赤みを取り戻していく。そして、決意をこめた眼差しにシーグを見つめる。何か名案が思いついたに違いない。
「私をな――」
声高に叫びかけたシンシアの口を、シーグは大あわてで塞いだ。
「おい、作戦を声高に怒鳴ってどうするんだ。あいつにも聞こえるぞ」
押さえ込んだ手の平ごしに、「げてください」とモゴモゴと言うシンシア。

「投げる？　まさか、あいつに向かってか」
「ええ、空中浮遊の魔術はまだ続いています。私の体重はあってないようなもの。投槍のように飛ばす事ができますわ。その後、羽のように舞い降りて着地する事ができます」
　小声でささやくシンシア。シーグはとても正気の作戦とは思えなかった。
「ディスペルされたらどうするんだ。ここは3階の屋根なんだぞ」
「わ、分かっていますわ」
　シーグが押さえていた口を開放すると、シンシアは押し殺した声を出した。
「危険はお互い様です。トリプル・ステイシス（三連均衡）を維持させつつ、更に魔術を使える人物なんて、メティス全体にだって５０人程度しかいません。あいつがディスペルを、他の魔術を使えば自滅する可能性が高いのです」
　更に確実からかけ離れていくようにシーグには思えた。仮面の男がその５０人中の１人かもしれない。どれほど不安要素があるのか、それは再び血の気を失っていくシンシアを見れば一目でわかる。
「時間がありません。お願いします。あいつは、更に上空に逃げてしまいますわ。急いでください。トリプル・ステイシスは魔術を消去するよりも、術者への直接打撃で集中力を乱す方が有効。これが思いつく限り最大の戦術です」
　仮面の男はすでに４０歩分の距離を離れている。そして、更に真上に飛んでいくようだ。
「分かった。だったら、シンシアを真上に投げるぞ。それなら、ディスペルされても俺のところに落ちてくるからな。絶対に受け止めてやる。あの野郎を打ち落とすことだけに集中しろ」
　シーグが微笑みかけると、シンシアは安堵の笑顔を浮かべて大きくうなずいた。
「もちろんです。私が『ヴォルド』まで呪文を進めたら投げてください」

「わかった。じゃあ、両手を下げて、背筋を伸ばせ。それから体中の力を抜くんだ。その方が投げやすい」

シーグは脱力したシンシアの腰を持ち上げた。手には綿の人形を持ち上げたような感触しかない。重さがないものを投げる事など初めてだ。

シンシアは、シーグには分からない言葉をもごもごと唱えている。

ふと、リーザがぬいぐるみを「高い高い」と言いながら、空に放り投げていたのを思い出した。あの時、地面に落下を繰り返しながら変形し、汚れてゆくぬいぐるみをかわいそうに感じて、真上に投げる方法をリーザに教えたものだ。

大切なのは飛距離よりも安定性を重視する事だ。そのためには重心を安定させ、足の幅を肩幅に固定し、自分の体を轍のように認識する。そして、馬車の車輪が自分の両手。力は膝のバネと脇から生み出し、腕は方向を固定する事に専念する。

シンシアの呪文の詠唱が徐々に大きくなり、聞き覚えのあるくだりに差し掛かった。

「来たれ、天よりの災厄、ヴォルド――」

その瞬間、シーグはシンシアは上空に投げた。狙いは違わず、真っ直ぐと仮面の男に向けて上昇してゆく。そして、１０歩の距離まで近づくと、シンシアは空中で大きく振りかぶる。

「ヴェイ・レイザーク！」

呪文と共にシンシアはプラチナの鎖を投げつけた。その動作のせいで、体が大きく傾いた。しかし、黄金の輪となった鎖は真っ直ぐと仮面の男に向かって飛んでゆく。仮面の男は安定した姿勢のままで片手を振るう。すると、５歩の距離は開いているはずなのに、プラチナの鎖は叩かれたように大きく軌道を変えて落ちていった。

攻撃は失敗だ。だが、それよりもシンシアがシーグは心配だった。投げつけた動作でずいぶんと体が傾いている。そして、何かに触れないと体勢を立て直せないようである。

「絆の雷、黄玉の支柱、白金よ縛鎖となれ。タラニス、デプス、カ

テナート」

シンシアは再び呪文の詠唱を始めた。すると、下へ落ちてゆく鎖が再び軌道を変えて昇ってくる。迫る黄金の輪に向かって再び手をかざす仮面の男。そのため、結果としてシンシアに背を向ける事になった。だが、シンシアはまだ呪文を唱えている。そして、手に持った黄玉の指輪から火花がほとばしり、ナイフほどの大きさの雷の刃が出来上がった。

仮面の男は振り上げた手を勢いよく下ろす。すると、下方から5歩の距離まで迫ったプラチナの鎖は大きく軌道を変えて上に飛んでいった。仮面の男は即座に振り返る。そして、雷のナイフを振りかぶるシンシアを視界におさめた。

やはり、魔術士同士の戦いで不意打ちはありえないのだ。シンシアの魔術の発動を、仮面の男はすでに知っていたのである。

もはや、仮面の男とシンシアの距離は7歩ほどしか開いていない。シンシアの位置は変わりないが、仮面の男が近寄って来ているのだ。その状態にシーグはゾッとした。プラチナの鎖はいつでも5歩の距離で弾き飛ばされていた。という、ことはつまり……。

「シンシア、もういい。降りて来るんだ」

声を聞いて、一瞬だけシンシアはシーグのほうを見た。しかし、再び仮面の男を見据え、傾いた姿勢のままで雷のナイフを投げつけた。

すかさず、腕を振り下ろす仮面の男。しかし、雷のナイフの軌道がはずれることはなかった。そもそも、シンシアは仮面の男を狙ったのではなかったのだ。雷のナイフはプラチナの鎖をめがけて飛ぶ。最初から上空に跳ね上げられて、ゆっくりと落下してきた鎖に投げつけられていたのである。

表情は読み取れないが、仮面の男は驚愕と共に空を見上げた。間断をおかず、突き出した拳をギュッと握り締めシンシアは叫ぶ。

「チェイン・ライトニング！」

バチュン、という鋭い音と共に仮面の男の雷撃の網が降り注ぐ。

それは、あたかも本物の鎖のように仮面の男にまとわりついた。
同時にシンシアは落下を始める。どういう力が加わったのか、クルクルと回転しながら斜めに落ちてくるシンシア。シーグは屋根から身を乗り出して、ギリギリでシンシアを抱きとめた。無理な体勢で受け止めたために両肩に鈍い痛みが走った。
そのせいで、衝撃を完全に抑えることが出来ずに大通りに向かってゆっくりと体勢を崩してゆくシーグ。腕の中にいるシンシアが身を固くした。
トン、という小さな音と共に上昇する感触。シンシアが目を開くと、シーグはポールの上に足を乗せて体勢を立て直していたのだ。
「また、この町の造りに助けられたな」
「フィー姉様の街ですもの」
「こんな事があるって、予知していたのかな？」
「きっとそうですわね」
シーグの冗談にシンシアは明快に答えた。空中戦を行い、回転しながら落ちてきたというのに大した度胸だ。この少女は、歴戦の戦士にも劣らない胆力を秘めているかもしれない。
一方、上空では仮面の男が苦しそうにもがいている。腕を振り上げ、足を蹴り出しても雷撃の網は仮面の男を離さない。むしろ、動き回るたびに雷撃がバチバチとはじけて収束していくのだ。
「雷撃の網は効果が続く限り、決して敵を放しませんわ」
「もしも、自分にディスペルをかけて、解除したら？」
「その時は、自分にかけられた飛行の魔術も一緒に解除させられます。魔術終了後の硬直がありますから、この場合落下して地面に叩きつけられる事になりますわ」
「なるほど。シャトランジ（王取り）ってわけだ」
「いいえ、まだです。見た目は派手ですが、それほどダメージはありません。あくまで、集中力を奪うのが限界ですわ」
シンシアの言うとおり、弱ったハエのように仮面の男はフラフラと降りてきた。そして、シーグ達とは３０歩ほど離れた屋根の上に

着地した。同時に、シーグには良く分からない。変なものが混じりあったような、気色の悪い光に包まれてゆく。
「なんだありゃ？　この間、焦げた鍋を洗ったらあんな色になったが」
「一体何を料理したんですか！　紫と黄色。つまり、エンハンスとエンチャント。肉体強化の属性、対象は自身です」
「飛んで跳ねて接近戦かよ。まるでベクターだな」
「まさか……」
見る見るうちに恐怖に顔を強張らせていくシンシア。手を握り締めた拍子に肩口をつかまれて、シーグは痛みに顔をしかめた。彼女にとっても、ベクターとはただならぬ相手のようだ。
仮面の男はズボンのポケットに手を入れると、そこから剣を取り出した。ガリウスが使っていたアヴェンジャー（報復者）と同じブロードソードだ。刃の表面には雑な文様が刻まれ、やはりシーグには良く分からない濁った色に染まっている。
「いいや、違うな。あの野郎ならもっとうまく戦う」
「だ、大丈夫ですの？」
「俺の戦法は一撃必殺。一瞬で勝負を決めてやるよ」
シーグはシンシアを下ろしながら、気楽に呟いた。そして、仮面の男に向かってゆっくりと歩き始める。
「油断は禁物ですよ」
「へーいへい」
厳しく言うシンシアに、シーグはいい加減な返事をした。
一撃で決められるのではない。一撃で決めなければならない。なぜなら、左腕は使い物にならないし、右腕も鈍い痛みが残っている。まともに攻撃できるのは一度だけだ。しかも相手は肉体強化をした怪力男で、武器は魔力付きのブロードソード。まともに打ち合ったとしたら、勝ち目はない。細身のシャープネスは折れるだろうし、ガリッポソの体格で更に肩を痛めている。力比べ以前の問題だ。

パチリと小さな音を立てて、雷撃の網が完全に消滅する。それと同時に仮面の男がシーグに向かって大またに駆け出す。細い足場をそのまま走ってくるのかと思ったが、シーグの１０歩手前で大きく跳躍した。

シーグは微動だにせず、剣さえも抜かずに仮面の男を待っている。

「シーグさん！」

シンシアの悲鳴じみた声、仮面の男はシーグに向かって大上段に剣を振り上げた。その瞬間、シーグはシャープネスの柄に手を伸ばした。剣を抜き、踏み込み、そして突く。刹那のうちに繰り出された攻撃は、シンシアにも仮面の男にも見えてはいなかった。

振り下ろされる直前のブロードソードの根元に、シャープネスが突き立っていたのである。仮面の男は大きく体勢を崩し、攻撃もできずに横倒しに倒れた。地面に落ちたブロードソードにノロノロと手を伸ばす仮面の男。その眼前でブロードソードは、キンと乾いた音を立てて柄と刀身が割れて離れてしまった。

立ち上がろうとした仮面の男の後頭部に逆手に持ったシャープネスの柄を叩きつける。仮面の男は全身を緊張させた後、ぐったりとなって倒れた。そして、全身を覆っていた魔術の光も消える。やりすぎたと思わないでもないが、意識のある魔術士は何をするか想像もつかないからだ。

「不用意に飛び上がるからだ」

シーグはシャープネスを鞘に収めながらつぶやいた。

肉体強化の弱点は、強化した身体能力をもてあます所にある。足場の悪い場所ではなおの事だ。

そして、強力な武器を持つものはその性能に知らないうちに頼ってしまうのだ。そのため攻撃は精密さを失い大雑把になる。ことさらに隙を作って見せれば、更に単調で直線的にさえなるのだ。

まずは、わざと作った隙を狙わせる。そして、敵の攻撃の軌道をあらかじめ予測して、狙い済ました一点集中の攻撃を放つ。そうすれば、相手の体勢を崩し、同時に武器を破壊する事ができる。肉体

強化をしたベクターに圧倒されてから考え出した戦法である。
ガリウスと仮面の男には有効だった。しかし、当のベクターにはたぶん通用しないだろう。あの抜け目の無い男を相手に、わざと隙を作る余裕があるとは思えない。気を抜いた一瞬の間隙に漬け込まれるだけだろう。あの男に一対一で真正面から勝とうという考え自体を捨てた方がいいかもしれない。
周囲を見回してみると、いつの間にかアイフェの姿がない。確か建物によじ登る直前まではいた。アイフェなら、簡単に登れると思っていたが。
「シーグー」
下から聞こえるはしゃいだ声。大通りではなく路地の方からだ。屋根の上を移動して下を覗き込むと、アイフェが白髪の男を引きずっていた。しかし、１０歳の少女には文字通り荷が重過ぎるようだ。
「その人、大丈夫なのか？」
「うん、手加減したから死んでないよ。折れたり、へこんだり、無くなったりもしてないよー」
相変わらず、恐ろしい事を無邪気に言う。シーグは顔を引きつらせた。
「まさか、道行く人を襲ったのか？」
「違うよ。シーグたちを背中から狙っていたの。だから、私が成敗したんだよ」
アイフェは腹を立てた様子で両手を振り上げた。そのせいで、白髪の男の頭が地面に落ちて、ゴツンと鈍い音を立てる。
「そ、そうか、お手柄だ。ありがとうな」
途端に機嫌を取り戻したアイフェが再び白髪の男を引っ張る。襟元がねじれている様だが、あれでは首が絞まっているのではないだろうか。
白髪なので老人かと思ったが、よく見ればそれほど年をとっていない。どこかで見た顔だと記憶を探っていると、すぐに思い当たる。天空の水盤の戦いだ。メティオ・スマッシャーの１人に白髪の青年

がいたのだ。
「屋根の上にいる者、この声が聞こえれば返事をしろ」
今度は高圧的な声が大通りの方から聞こえてきた。偉そうな物言いに、シーグは返事をする気持ちが失せた。
「私はこの地区の護民官だ。１０数えるまでに返事がないようなら総攻撃を開始する。１０、９……」
ベクターみたいな物言いをする。決闘の日にリーザの塔で、護民官に襲われた記憶も新しい。返事どころか石を投げつけてやりたい気持ちもあるが、さすがにそれは自粛する。
しかし、大都市の護民官なんていう人間は住人よりも必ずわが身を優先して守り、権力者に媚びへつらうものだ。民をとって護官と呼んでやりたい奴らばかりだ。
「とにかく、アイフェはそこで待っていろ。そいつは動かさなくていいからな」
シーグはそういって、再び大通りの方へ移動した。高圧的で偉そうな護民官は相変わらず数を数えている。
「３、２、１――」
「おい、お前らが本当に護民官なら手伝え」
わざとギリギリまで数えさせて、シーグはぞんざいな口調で答えた。屋根から見下ろすと、お揃いのチェインメイルをつけた兵士たちが、これまたお揃いの槍を構えて並んでいた。
「何だと！」
護民官達はシーグを睨みつけ、向けて槍を向けて息を巻いている。
「貴様、無礼な口をきくようなら――」
「よせ、グラーク」
加熱しそうになった護民官を、中央にいる青ローブをまとった男が止める。シーグには青ローブの男にも見覚えがあった。
やはり、メティオスマッシャーの一員だ。間違いない。
「路地で女性を襲って品物を引ったくり、魔術を使って逃走した奴を捕らえた。そいつは、今屋根の上で気絶している。あと１人、俺

達を陰から狙っていた白髪の男を路地裏で捕らえている。あんたらが護民官なら、俺を攻撃するよりもやるべき事があると思うが？」

シーグは嫌味を隠そうともせずに当てつけるように言った。護民官たちは遠目にも怒りを堪えているのが分かるが、青ローブの男はシーグをまっすぐと見つめる。

「了解した。ご協力を感謝する。はしごを持ってこさせよう。しばらくそこで待っていてはもらえないか？」

高圧的なのは相変わらずだが、あくまで冷静で礼節を崩さぬ態度。これ以上不満を表しても自分が惨めになるように思えた。シーグが怒みを持っているのは、レイザークの護民官であって青ローブではない。しかもその護民官たちは、怒みをぶつけたくても、すでにこの世にはいないのだ。

「分かった。よろしく頼む」

シーグが答えると、青ローブは周囲の護民官たちに矢継ぎ早に指令を出している。

青ローブ。それはディテクト（探知）の系統を表す。メティオスマッシャーは七家の人員を使っていた。そして、ここはフェルナンディの治める地区だ。ならば、そこから考えられる青ローブの立場は……。

シーグは屋根の上を引き返した。仮面の男は相変わらず伸びているし、シンシアは座り込んだままだ。

「あいつは知り合いか？」

「ええ、お兄様ですわ」

シンシアは心底安心した様子で息を吐き出した。どうやら、青ローブは悪人ではないようだ。権力者に身を任せるのは、気は進まないが仕方がない。

立ち上がろうとしたシンシアは千鳥足になって、よろよろと歩き出す。屋根の上でそれは危ない。シーグは慌ててシンシアを体を支えた。ほっそりとした肩は、小さく震えている。

「寒いのか？」

口に出してから、失言だったと自分でも思った。しかし、シンシアはそれどころではないようだ。
「い、今になって怖くなってきました。わ、私。とんでもない事をしたんですよね？」
シンシアは空を見上げてシーグの腕に取りすがった。震える手は強く服を握り締める。そのため、肩が少し痛んだが我慢できないほどではない。
「だけど、しっかり戦った」
「お役に立てましたか？」
「俺1人じゃ、あいつを逃がしていたぞ。シンシアの手柄だ」
「ちゃんと、戦えていましたか？」
「サフィリアと一緒に戦っているのを思い出した。本当に頼りになったぞ」
シンシアは恐怖に震えながらも、うれしそうな笑みを浮かべた。憧れの人と同じといわれて、喜ばない子どもはいないのだ。
「も、もう平気ですわ」
「いや、無理はするな。こういう時は、気持ちと呼吸が落ち着くまで休んだ方がいい」
「そ、そうですの？」
「恐怖っていうのは心臓や肺に相当負担をかける。場合によっては呼吸困難になる事もあるんだ。軽く考えずに休んでいろ」
「……はい」
シンシアは脱力してシーグにもたれ掛った。ぐったりとして全身を任せてくる。シーグはシンシアの背中を軽くさすってやった。すると、シンシアは肩に顔をあずけてくる。
心底怖かったのだろう。だったら、何か話しでもして安心させてやるべきだが……。
「戦いの最中だって、心臓が早鐘みたいに高鳴っていたのが背中ごしにも分かったぞ」
「え？」

「今だって、ずいぶんと忙しく動いているぞ。戦いの最中よりも忙しくドクドクいっているくらいだ。疲れは後からいっぺんに来るかもしれないな」
「え？　え？　え？」
「魔術って集中力が必要なんだろ。こんな状態でよく……ってどうした？」
腕に抱きついていたシンシアがスッと手を離して、数歩後ずさる。しかし、まだ足取りがフラフラとおぼつかない。
「おい、シンシア。あんまりウロウロすると落ちるぞ。危ない」
「危ないのは……あなたの方です」
「へ？」
一変して押し殺したような声を発するシンシア。うつむいているので、表情はよく見えない。
「お、おい。シンシア？」
「女ったらし……」
一歩近づくと、拒否の感情を載せた言葉の槍がシーグの胸に突き刺さった。
「な、何を――」
「近寄らないでください。変質者！」
シンシアは大きく息を吸い込んで、真っ赤になった顔を上げてシーグを睨みつけた。そこに秘められた感情の激しさにシーグはたじろぐ。
「色魔！　淫猥！　変態ー！」
サ・フィールの賑やかな大通りに相応しくない大絶叫が響いた。
シーグは言葉さえも失って、目を白黒させるしかなかった。
近くにいた青ローブや護民官はもちろん。世界中から駆けつけた旅人、商人、船人達。周囲にいた何百という人々が、その絶叫を聞いた。そして、何事かと足を止めたのである。

1部―13　好意的な尋問

＊

仮面の男と戦った建物は酒場と兼用の宿屋であった。青ローブの男は準備中の酒場に話をつけて、臨時の詰め所としたのである。

宿屋の主人は嫌がる様子も見せず護民官達を室内に案内した。営業の妨害をしてすまないと、金貨を渡そうとする護民官。宿屋の主人は金貨を受け取る事を拒否し、うまいものを食べていってくださ い、と言う。護民官の方では、勤務中にはそれが出来ないと断っている。それに対して主人は、昼までには腹が減るでしょうと反論していた。

調査を行う護民官に市民は協力的だった。目撃者からの情報提供を求めると、町の人々は嫌がる様子も無く並んで待っている。あえて順番を飛ばそうとするものも無く、急ぐ用事のあるものに先を譲るほどだった。

そんな様子をシーグは信じられない気持ちで見ていた。護民官と市民は対立するものだし、商業通りに住む商人同士は互いにライバルであって互いにけん制の火花を散らす。場合によっては相手の足元を突き崩そうと妨害する事さえある。そういう光景が普通だと思い込んでいた。

しかし、サ・フィールではそんな事は全く無いようだ。絵に書いたような平和の光景にシーグはむずかゆいものさえ感じていたのである。

だから、自分を包囲する3人の護民官の敵意と不審の視線の方がよっぽど慣れ親しんだものだった。

彼らの中ではシーグは犯罪者なのだ。青ローブの妹。つまり、上司の親類。それも12歳の少女に不埒な事をした変質者となっている。

しかも、メティオ・スマッシャーを倒し、リーガル・バックラー卿を一騎打ちで倒したあのシージペリラスであると身元も割れている。そのような恐ろしい変態が剣を持ったまま近くにいる。しかし、罪状が明確ではないから縄をかけるわけにはいかない。

使命感と正義感に燃えつつも、恐怖感を抑えられず、法の働きによって先走りを封じられている。そんな護民官達の葛藤がシーグには手に取るように分かった。

「あんたらも大変だね」

シーグが気楽に声をかけると、護民官は居心地悪そうに垂直に構えた槍を持ち直した。

アイフェはどこかに姿を消してしまった。白髪の男を捕縛するために来た護民官を恐れて逃げたのだろうか？

この奇妙な緊張感を終わらせることの出来る男。青ローブは宿屋になっている2階からゆっくりと降りてくるところだった。彼は泣きじゃくる妹を宿の一室に連れて行って、何か話をしていたようだ。

妹の世話を見るのは悪いとは思わないが、それで部下たちを放っておくのはどうかと思う。順序から言うと、調査の方を重視して、シンシアの事は部下に任せるべきではないだろうか。

困った表情を浮かべているところを見ると、変質者騒ぎが完全に誤解であったとシンシアから知らされたのだろう。青ローブは、明らかに高貴な生まれを匂わせる。この偉そうな男はどんな態度に出るのだろう。先日の戦いで敵対した事もあって、シーグは意地の悪い好奇心をもって待ち構えた。

「申し訳なかった」

偉そうな男が真っ先に頭を下げたのを見て、シーグは面食らった。

「私の妹が誤解を招く発言をしてしまったようだ。その上、確信もなく罪人を拘束するような行為に及んでしまった。重ねて謝罪する」

「別に腹を立てていない。こういう――」

扱いは慣れっこだ。と、言いかけたのを止めた。余計な誤解を与えると思ったからだ。

「――態度で臨んだほうが悪人も震え上がる。街が平和になるだろう」

「そういってくれるとありがたい」

青ローブは親しげに微笑みかけた。黒髪に黒い瞳、色白の細面。シンシアと共通の面影がある。だが、２０代の半ばというには老成した印象があって、クルクルと表情を変えるシンシアとは対称的だった。

上司の態度を見て、部下たちも態度を一変する。取り巻くようにシーグを囲んでいた護民官が壁にそって一列に並んだ。

騎士隊でもあるまいに、ずいぶんと訓練が行き届いている。シーグは少し、あくまでほんの少しだけ青ローブを見直した。同じ一族でありながら、サフィリアを見捨てた。その上で直接敵対した事には違いが無いからだ。

「出来れば、調査の協力をお願いしたい。構わないだろうか」

「もちろんだ」

あんた個人に協力するわけじゃない。サフィリアと似たあの女性。シンシアやリーザと面識のある盲目の女性のためだ。と、シーグは心の中で付け加えた。

シーグは鋭い視線で睨みつけたが、青ローブは涼しげな態度を崩さない。

「ありがとう。私の名はライス・フェルナンディ。サ・フィールの治安を任されている」

「俺の事はシーグと呼んでくれ」

「ではシーグ卿、早速だが事の始まりから聞かせていただきたい」

「卿……だと？」

「そうだ。卿には今宵、陛下から直々に２つ名と称号を贈られると聞いた。そのような名誉を持つものは、王国に５人といないのだよ」

根拠は無いが、その５人のうちにベクターがいるに違いないとシーグは確信した。

つまり、俺はあの野郎の同類になってしまったのか。それが分か

っていたら、断ったのに。
シーグは声には出さない。しかし、うんざりした態度とゲッソリとした表情、うろんなものを見る視線。言葉以外のあらゆる意思表示でライスにメッセージを送った。それが分からないほど愚鈍な男とは思えない。実際に、正面にいた大柄の護民官はムッとしていた。
しかし、ライスは優しげな笑顔と、落ち着いた姿勢を全く崩さない。
『笑う鉄面皮』という言葉が思い浮かんだ。こいつを名前で言うのは腹が立つので、勝手に心の中で呼んでやる。シーグは勝手にそう決めた。
「じゃあ、その仮面の男の事をきかせてほしい」
「分かった」
笑う鉄面皮に聞かれるがままに、シーグは話した。アクア・ランスの川沿いを歩いている時に悲鳴を聞いた事。奪われたスカーフの事、飛行の魔術で空に逃げた仮面の男との戦いの事を伝えた。
その度に笑う鉄面皮は何度もうなずき、その度に河岸にまで調査の手を伸ばす事や、目撃者を探す指示を護民官達に下した。戦いの決着まで話し、言葉を止めたとき護民官は正面にいる1人だけとなった。シーグの正面にいる護民官が口を開いた。
「失礼ですが隊長、この者の言う事をそのまま信頼なさるのは如何かと」
「その心配は無用だ。シンシアの証言と一致しているからね。彼らが口裏を合わせる時間があったかな？」
調査を放っておいてシンシアと先に話したのは、妹をあやすためだけではなかったのだ。涼しい顔をしておいて、2人の証言を突き合わせていたのである。笑う鉄面皮は見かけ以上の曲者だ。裏でこっそりと企まれているように思えて、シーグはなんだか嫌な気持ちになった。背中の古傷もピリピリと痛んでいて、嫌な予感がどうしても消えない。
「余計な進言、失礼致しました」

謝罪する部下にライスは機嫌を悪くした風もなく手を軽く振った。話しているうちに気付いたがこの男は始終笑顔というわけではない。ただ、垂れ目で糸目なだけだ。シンシアは吊り目気味だからむしろ対照的といえる。それに丁寧な言葉遣いといえるが、伝令の報告のような、あるいは文章に記したような、もってまわした言い方で話すのは少しイライラする。

「ただ、一点を除いてね。仮面の男はスカーフを持っていなかった」

「どういうことだ？」

笑う鉄面皮は、表情を変えずに垂れ目のままでシーグを観察している。細目ゆえに目元に浮かぶ表情をつかみ辛い。まさか表情を読まれないように、わざと眠そうな顔をしているのだろうか？　だとしたら、とんでもない曲者だ。感情を読めないのは、気配を感じさせない事と同じほどに厄介に思える。

「レティシア・フェルナンディを襲い、スカーフを強奪した嫌疑が君にある、という事だ」

「何を証拠に？」

「拘束した2人がそう主張しているからね」

「仮面と白髪の事か」

「そうだ。仮面の男の名はルパート・マードック。白髪の男の名はバイロン・ランカート。君も面識だけはあるはずだよ。天空の水盤でね」

つまり仮面をつけていた男、ベクターみたいな戦い方をする男もメティオスマッシャーの一員だったらしい。

「と、いうわけで君を解放するわけには行かなくなった。尋問を開始するので、2階にご同行願おうか。連れて行け！」

垂れた糸目を厳しく引き締めて、ライスは命令をした。大柄の護民官は嬉々とした様子でシーグの肩をつかむ。シーグはただならぬ状況に陥った事にようやく気付いたのであった。

1部－14　糸目、白髪、ベクターもどき

＊

「俺は偶然通りに居合わせただけだぜ」
取調室と化した宿屋の一室で、ルパート・マードックは証言した。気取って肩をすくめようとしたルパートは、辛そうに自分の腕を押さえた。高く飛び上がって地面に転倒した割には、怪我が軽い。空を飛ぶときに周囲の空間を歪めていたので、軽症で済んだようだ。強化した筋力で、自分自身の間接を痛めているようである。
「何のために仮面を持ち歩いていたのだ？」
笑う鉄面皮はさすがに笑顔を引っ込めて、ただの糸目になっていた。
「魔術師の装飾としては問題が無いだろうが」
糸目の問いにルパートは鼻で笑った。一挙一動に、いちいち人を食ったようなところがある。陥れられたという事を差し引いても、いけ好かない奴だとシーグは思った。何でこんな奴が、セリウスと同じ一族なのだろうか。なんだか、名前を呼ぶのも嫌気が差してきた。
戦法こそベクターを真似しているが、形ばかりで根本的になっていなかった。とりあえず、こいつの事はベクターもどきと呼ぼう。
「問題はなくとも、疑わしくはあるな」
「だからどうした？」
文句があるならいくらでも言ってみろという表情のベクターもどき。糸目は返事をせずに、白髪の男に視線を移した。
「バイロン・ランカート。君は何故あんな場所にいた？」
「偶然に居合わせた」
白髪は無愛想に重々しい声を出した。２０代後半だというのに、老人のように見える青年だ。目は落ち窪み、表情は暗く、顔色は悪

い。半病人のような外見をしている。エリスと同じように髪の色で何か一悶着があったのだろうか。

「なぜシージペリラスを、以後彼の事をシーグと呼ぶが、を背後から魔術で狙った？」

ライスはまどろっこしい喋り方をした。最初に「シーグ卿」と呼んだのはこちらを油断させるためだったに違いない。ここにいる人間全員の腹のうちが見えない。シーグは正直うんざりした。とりあえず、こいつの事は糸目と呼ぶことに決める。当然心の中だけだが。

「バイロン、問いには答えて欲しい」

「ルパートが戦っていたからだ。援護するべきだと思った」

「なるほど、それでは何の用事があって偶然路地裏にいたのだ？」

糸目はことさらに「偶然」を大きな声で言った。

「近道をしていた」

しかし、白髪の返答は感情がなく、無機的だった。なんだか、生きたまま魂がぬけてしまったような空虚さがある。やせ細っても、妄執むき出しだったエリスとはそこが大きく異なっていた。

「もう一度聞くが、レティシアからスカーフを奪ったのは君たちではないのだな？」

「違う。俺はそこのシージペリラスがレティシアさんに襲い掛かっているのを見たぞ」

ルパートの発言が嘘である事はシーグ自身が一番よく知っている。しかし、他の誰にもそれを否定できないのだ。

「助けようともせず逃げたわけだな、ルパート。そして、追跡され、補足され、倒された」

糸目の容赦の無い言葉に、ベクターもどきはギリギリと歯を食いしばった。

「ああ、そうさ。ベクター卿を退け、リーガル・バックラー卿を決闘で倒した奴だ。俺1人でどうにかできるはずがないだろう！」

ルパートはシーグを指差し、憎々しげに叫んだ。正確に言うなら追いつくために力を尽くし、最後の一撃を加えたのがシーグで、勝

利の条件を整えたのはシンシアなのだ。しかし、わずか12歳の少女に敗北したとは考えたくないのだろう。虚栄心の強い奴だとシーグは思った。

「だがシーグはルパートがレティシアを襲ってスカーフを奪った、と証言している」

「こいつがそう言っているだけだ。シンシアも実際には見ていないんだろう。俺の言う事とこいつの言う事とどちらを信用するんだ？」

「私が知りたいのは証言の真偽だ。君との付き合いの長さは関係ないぞ、ルパート」

糸目は淡白な顔つきに相応しく、淡々と言葉をつむいだ。一方、ベクターもどきの声と表情にも激情がこもっている。それもシーグへの恨みの感情である。どうやら、ずいぶんと嫌われているようだ。

と、その時。シーグはけたたましい足音が廊下から響くのを聞いた。床を敵のように踏みしめるこの独特の歩き方は……。

「おい、そこのでかいの。扉から離れた方がいいぞ」

シーグは自分を連行してきた大柄の護民官に声をかけた。『でかいの』はわざわざ扉の前に立ちふさがる。シーグが逃げるとでも思っているのだろう。次の瞬間、蹴り破るような勢いで扉が開いて、でかいのの腰に直撃した。運悪くドアノブが腰骨に当たってしまったようだ。

痛みにうめく護民官を見て、シーグはざまあ見ろと思った。2階まで連行されるときに、容赦なく両肩をつかまれたからだ。

「お兄様、どういうつもりですか！」

シンシアは切り付けるように怒鳴りつける。痛がっているでかいのの事など目の端にも入っていない。

「今は任務中だよ、シンシア・フェルナンディ」

糸目は朝の挨拶を返すようにのんびりといった。それに対してシンシアは好戦的な表情を浮かべた。

「ライス護民長官。あなたの仕事は無実の人を陥れる事なのですか」

「物事の真偽を確かめる事だよ。そのために証言を集めている」

目を吊り上げるシンシアに対して、糸目は垂れ目のままで対応する。

「2者以上の証言に整合性があり、そうでありながら他の者との証言と矛盾がある場合。事の真偽を確かめなくてはならない」

事務的な糸目の言葉にシンシアの表情が更に険しくなる。兄が真っ先に話をしてくれたのは、慰めではなく尋問だと気付いたのだろう。目にはうっすらと涙さえ浮かべている。

「シーグさんが、レティー姉様を襲ったと言いたいのですか？」

「ルパートはそう証言している」

「私はシーグさんと一緒にいました」

「しかし、シンシアが目撃したのはレティシアが倒れており、ルパートが姿を消した後だ。証言を修正する必要を求めるのか？」

「……いいえ、その必要はありません。しかし、アイフェなら証言できますわ」

「アイフェの事は現在捜索中だよ。しかし、アイフェの発言だけでは、シーグの不利は変わらない。なぜなら、アイフェ・サムハインは『法廷の権利』を持たないからだ。メティスを統べる『王の法』の基本だよ、わかるね？」

シンシアはハッと顔色を変えた。

「ディスペリアの一族であっても、一族から放逐されたものは法廷に介入する権利を持たないというわけですね」

「その通りだ。更に言うなら、シーグの証言も法的には意味を持ってはいない」

これには、シンシアも意外そうな表情を浮かべた。ルパートは嫌らしいニヤニヤ笑いを浮かべている。

「どうしてですか。先日、決闘者として認められました。『剣の法廷』に訴える権利を持つ者の証言は『理の法廷』でも無視できません」

「いいや、シーグは正確には『決闘者』ではない。今宵、宴において彼に2つ名と称号が授けられる予定となっている。あくまで予定

であり、まだ決闘者ではないのだ。だが、『理の法廷』に訴える権利を持つルパートがシーグの犯罪関与を訴えている。つまり、今シーグを守っているのは、シンシア。君がフェルナンディの一族であり、彼を庇護する証言をしたという事だけだ」

「でも、シーグさんは今晩称号を贈られ、決闘者としての資格を得ます。そうなれば、発言に法の裏づけがつきますわ」

「いいや、それはない。なぜなら、今日の出来事は彼が決闘者になる以前の事件だからだ。それに、法廷に影響力を持つのは、その者の産まれ、功績、人格が高く評価された結果による。法的にあいまいなままの罪状を持つものが、決闘者になることは出来ない」

「それでは……」

「今晩までに彼の無実が証明されなければ、決闘者となる権利さえ失うという事だよ。当然、『理の法廷』では証言できないし、『剣の法廷』に挑む事もできない」

シンシアは蒼白になって唇をかみ締めた。そして、兄を敵でも見るような目つきで睨みつける。一方ベクターもどきは、ざまあ見ろといわんばかりにシーグを見ている。白髪は石像のようにうつむいたまま動かない。

「どうすれば、ルパートの証言を覆せますか」

「『法廷の権利』を持つ者の証言を集める事だね。」

糸目の言葉の後に、階段を昇ってくる3人の足音が聞こえた。1人は男、1人は女、残る1人の足音はずいぶんとたどたどしい。

「ご命令どおりに御二人をお連れしました」

扉の外で護民官が形式的な挨拶を述べる。部屋の中に入ってきたのは、シーグの予想通りの人物。レティシア・フェルナンディと、盲目のレティシアの手を取って導くリーザだ。

「一体どうしたの?」

室内の物々しい雰囲気にリーザは目をぱちくりさせた。

「さて、プルーフ・アゲインストのリーザ・オーメント。あなたもまた称号をもつもの、『理の法廷』において、証言する事ができる」

「シーぼ……シーグが何をしたっていうのよ」
リーザは糸目に食って掛かった。糸目を制してベクターもどきは、ポケットに手を突っ込んだままリーザの前に立ちふさがった。
「レティシア嬢を襲って、スカーフを奪い取ったのさ」
「シーグはやっていないわ」
「しかし、あなたはシンシアと共にレティシアの所に駆けつけた。現場を見ていない」
「それでもよ。絶対にそんな事をする人じゃないもの」
「あいつはシージ・ペリラスだぞ。周囲にいる奴を不幸にする」
「違うわ、シーグに会った人はみんな笑顔になるの。人を不幸にするのはあなたの方よ」
嫌らしい口調で話すベクターもどきに、リーザは理屈も何も無視して喧嘩口調で立ち向かう。
「……つまり、シーグの人格を高く評価している。そう受け取っていいのかな？」
「私自身よりも信用してくれたっていいわ」
挑みかかる勢いで言い放ったリーザ。糸目にそれに対してあくまで事務的に対応する。
「メティスに対するあなたの功績を見るに、その信頼だけでも無視できない。しかし、それはシーグに罪があったときには、あなたにも類が及ぶという事だが？」
「好きにしなさいよ」
「考えてみれば、共犯の可能性だってあるわけだよな。お互いに庇いあっているわけだ」
ベクターもどきは笑うように唇を歪めている。ブラブラとだらしなく体を揺らして歩いてリーザに顔を寄せた。
「あなたがたくらんだ陰謀だって、私は思うけどね」
「その言葉はきっちりと報告しておくぜ。プルーフ・アゲインスト」
「勝手にすればいいわ」
今にも掴みかからんばかりのリーザ。レティシアは不安そうに手

を彷徨わせてリーザの肩に手を置いた。
「いけないわ、訂正して。そんな事を言っては。あなたまで無事ではすまないわ」
「無実の罪でシーグが捕まったなんて。目覚めたフィーちゃんにどうやって説明したらいいの？」
レティシアの焦点の合わない瞳が、リーザを悲しげに見つめている。
「さて、水晶の見者、バリアント・アイズ（異相の瞳）のレティシア・フェルナンディ。あなたの証言も聞きたい」
糸目の高圧的な言い方に、レティシアは怯えてリーザにすがりついた。シーグには糸目がますます嫌な奴に思えた。
「レティー姉様が怖がっています。ご自身の婚約者に対して、そんな言い方は――」
「シンシア、私は護民官なのだよ」
糸目は妹の発言を封じるように強い口調で言い放った。

1部ー15　大嫌い！

「お兄様、あなたは――」

今にも溢れそうな涙を浮かべて、兄を睨みつけるシンシア。そんな少女の肩にレティシアはもう片方の手を置いた。

「シンシア、私は証言します。いえ、させて下さい」

レティシアの毅然とした声と共にリーザの肩を強く握り締めた。それから、深呼吸をするように大きく息を吸って体の前で両手を組んだ。

「ご覧の通りに、私は盲目です。ですが、奪われたスカーフの力を借りて、視野を確保していました。もっとも、スカーフの力を借りている間は魔術の視点が消え、スカーフの力を借りずにいるときには魔術の感覚がよみがえります。その辺りの事情を知った上でお聞きください」

張りのある声と堂々とした態度だが、レティシアの唇がかすかに震えている。婚約者に尋問され、自分の障がいの事を皆の前で口にする。平気であるはずが無いのだ。

シーグは居たたまれない気持ちになった。ガイスに、糸目に、白髪に、ベクターもどき。あの野郎を筆頭にメティオ・スマッシャーにはろくな奴いない。

「最初、私は小さな女の子の声を聞きました。それで、路地の中に入ったのです」

「アイフェじゃねえのか」

ベクターもどきはベクターよりも耳障りな声で言った。

「それは分かりません。声を特定できなかったのです。ただし、通常の声とは違う違和感がありました」

「詳しく教えてほしい」

糸目が聞き返すと、レティシアは先を続けた。

「路地の中に響く声にしては、反響が全くありませんでした。誰も

いない、何もいない空間から突然声だけが現れたように思えたのです」

「なるほど、まるで魔術のようだ」

これを聞いて、ベクターもどきは息を呑みこんだ。

「だ、だが、あんたは魔術の感覚が無かったんだろう」

「そうですね。だから、特定は出来ません」

取り乱す声に対して、レティシアは感情を交えぬ声で理知的に言った。金色の髪に細身の長身。静かだが迷いのない声、何者にも屈せぬ毅然とした態度。シーグはサフィリアの面影を思い浮かべずにいられなかった。

「路地を奥へ奥へと進んだ時、突然背後からスカーフが取り上げられました。足音も聞こえず、ただ気配だけがあらわれたのです。まるで地面に足をつけていないようでした。また、風とは違う空間そのものを歪めた様な異様な感触があったのです」

「なるほど、まるで魔術師のようだ」

糸目は相変わらずの口調で言った。

「スカーフを奪われた事で魔術の感覚がよみがえりました。私はバリアント・アイズ（異相の瞳）。目が見えない代わりに、目に見えぬものを探知する能力に優れています。この意味が分かりますか？」

「魔術の気配を察知すれば、魔術士個人の特定までが可能だというわけだな」

「はい、その通りです」

まるで台詞の決まった芝居のようなやり取りだ。ベクターもどきは目に見えて平静さを失っている。あれでは自分がやったといっているようなものだ。

「……ですが、残念な事に突然の出来事でした。魔術の感覚は戻っているはずなのに、不思議な事に私の周囲で魔術が行われた事さえわかりませんでした」

「サモニングの系統による空間の歪曲が行われたとき、そういう現象が起きる事がある。さて、ルパート何をあせっている？」

ベクターもどきは憎々しげに2人を交互に見回した。
「わざとらしく口裏を合わせて、何が言いたいんだ！」
「尋問しているだけだぞ」
「報告しているだけです」
糸目とレティシアは淡々と答えた。それはシーグの目から見ても空々しかった。シンシアの兄を見る目が希望に満ちたものへと変わってゆく。
「フェルナンディの一族は中立を守るんじゃなかったのか！」
「ルパート、私は護民官だ。法にのっとって証言を集めているだけだよ」
護民官達でさえも冷めた視線になっている。この部屋にいる誰もが、すでにシーグを疑っていなかった。
「ライス、てめえ。俺達に敵対するつもりか今回の事は七家の――」
取り乱しながら、慌てて口を押さえるベクターもどき。糸目の細い瞳が更に細くなった。
「敵対とは何だ。それに今回の事とは。七家がこの事件に関与しているのか？　その発言から、まるで計画されたような印象を受ける。君は偶然通りかかっただけではなかったのか？　今の発言は十分な説明をしてもらわねばならんぞ、ルパート。そして、君自身が容疑者となれば、シーグに対する証言もまた信用性が失われることになる」
糸目で正面から見据え、切り込むような勢いでベクターもどきに迫る。失言に気付いたルパートはたじろいで、後ずさった。途中、ベッドの角に足をすくわれて、床に尻餅をついた。
「ルパートの発言については、私が擁護する」
今までずっと無言であった白髪が突然口を開いた。始終、張り付いたような笑顔だった糸目の表情が引き締まる。
「如何なる権限によって？」
「私自身の地位と功績を持って彼の人格を擁護するのだ。プルーフ・アゲインストがシージ・ペリラスに行った事と同様にな。問題はあ

るまい」

「確かに問題はない、な」

「ならば、護民官長ライス・フェルナンディ。これ以上の追及は私への尋問も同様だ、それは卿の権限を越える」

「確かにその通りだ、バイロン・ランカート。卿は偶然通りかかっただけだったからな」

糸目はわずかに口元を歪めて沈黙した。白髪は自分の役目が終わったとばかりに再びうな垂れる石像と化してしまった。かくして、再び室内には沈黙が下りたのである。

シーグにも少しずつだが、『メティスの王の法』の構造と、自分が陥れられた理由が見え始めてきた。

メティスでは王を中心として法が働く。王が絶対であると同時に、王に直接つながりの強い人間は法に対して影響力が増す。例を挙げれば王家と繋がりの強い一族や、王国への貢献によって称号を受け取った個人が『法廷の権利』を持つ。

そして裁きは『理の法廷』、つまり証言によって強い影響力を持つ。何の地位も持たない人物の証言を打ち消すほどに。また、個人の人格を保証して追及を逃れられるほどに。

ルパートはシーグがレティシアを襲ったと証言している。だが、現在は自らの失言によって容疑者となり、その発言の信憑性がうたがわれた。しかし、バイロンがルパートを擁護する姿勢を見せた。そのために、ルパートの発言は重要視され、シーグは未だ容疑者のままだ。

一方、自分は『法廷の権利』を持たず、ルパートの証言によって打ち消されている。『法廷の権利』を持つシンシアとリーザが擁護してくれているが、その証言は完全に無実を証明するものではない。

つまり、『理の法廷』では、『法廷の権利』を持つものを数多く集めて、擁護されるほど有利になる。だが、双方が『法廷の権利』を持つものを揃えた場合、互いの証言が矛盾していれば裁きが膠着する事になる。丁度、今がその状況だ。

どうりで、『剣の法廷』などというものが必要になるわけだ。決闘によって、矛盾し行き詰まった事の真偽を打破する。そうすれば、虚偽の証言をしたものも無事ではすまない。犯罪者に加担する偽証もまた罪に問われる事になる。だから、人格を擁護する場合には容疑者の身辺を徹底的に調べる事だろう。その動きの中で新たな証言が見つかる事もあるはずだ。

『剣の法廷』は相反する証言をする者達、両方に危険がある。ただひたすらに集め、法廷をだらだらと長引かせることを不可能にする措置。膠着する状況を力技で解決する方法、それが『剣の法廷』なのだ。

そして、王から直接2つ名と称号を得た人物は5人といないようだ。レイザークのシージペリラスは今晩、法の中枢に最も近づく地位を得ようとしていた。それはメティスの権力者にとって、決して無視できぬ存在となることだったようである。

彼らの思惑は順調に行けば、このまま適う事になるだろう。シーグが犯罪者の容疑をかけられているだけで、決闘者の地位を得る事ができなくなるからだ。

『地位を与えておいて失脚させるなどが考えられるけど、君は栄達の道を自ら閉ざした。だから罪無き罪を着せる、なんかも有効かな』

ジェイナスの言葉を思い出す。注意を与えられていながら、敵の罠の中に誘い込まれてしまった事を申し訳なく思い、同時に自分が情けなくなった。そして、決闘の日に協力してくれたあらゆる人たちにもすまないと思う。

この状況をひっくり返すにはどうすればいいのだろうか？　考え込んだシーグは脳裏に閃くものがあった。サフィリアに石の欠片を調べるように頼んだとき、こうも言っていた。

『これが海の向こうから来たんじゃないなら、明日のうちに分かるわ。でも、この位なら私じゃなくても調べられるわよ』

人間を精神を調べる魔術は思い通りに行かないが、物質を調べる事は可能。しかも、サフィリア以外にも可能という事だ。半ばは当

てずっぽうだが、シーグには十分に可能性があると思えた。
「証拠があれば、どうなんだ?」
沈黙の中で突然口を開いたシーグに、部屋にいる全員が注目した。
思ったとおりだ。権力者の好きに出来るとはいっても、目の前にある現実を捻じ曲げるほどではない。仮にも巨大な国家を統べる法律がそこまで無法であるはずがない。
「確たる証拠は、如何なる証言よりも重い。そうだろう」
「その通りだ。シーグ、君の言うことは正しい。それで、どのような証拠が提出できるのだ」
「奪われたスカーフだ。魔術を使えば、物から過去の記憶を探る事ができるはずだ。そうすれば、俺がスカーフに全く手を触れていない事が明らかになる」
シーグの言葉で部屋の中にいる魔術士全員が表情を変えた。白髪ベクターもどきは驚きに、シンシアとリーザは希望を見出したように。
なぜか、レティシアは戸惑っているように見える。糸目だけはあいかわらず無表情で、何を考えているか分からない。糸目は一同を見渡した後、シーグに向き直る。
「過去投影の魔術は『見者』にしか使えない。水盤の見者、ファクト・アイズ（真実の瞳）のサフィリア・フェルナンディは眠りについているはずだ」
「はっ、これだから素人は困るな」
淡々と言った糸目に続いて、ルパートが鼻で笑った。リーザはムッとした表情を浮かべた。シンシアなどはプラチナの鎖を取り出している。それはさすがにまずい。止めようとしたシーグだが、それよりも早く雪のように白い手がシンシアをとどめる。
「私も見者です。スカーフをお持ち頂ければ、私が鑑定しましょう」
「レティ!」
糸目は目を見開いて——それでようやく人並みだったが——声を荒げた。

「その行為を認める訳にはいかない」
「如何なる権限によってですか？」
「フェルナンディの一族の方針を忘れたのか」
今までとは違い、感情的に話す糸目。対して、レティシアは背筋を伸ばして息を吸い込んだ。
「中立なればこそです、ライス。あなたが護民官として法に従って行動するように、私にも見者として真実を見極める義務があります。真実が過ちの中に埋もれてゆくのを見過ごすわけにはいきません」
それは、ルパートが嘘を言ったと結論付けているも同様だった。ルパート自身はもちろん、バイロンでさえ死人のような顔に驚きの表情を浮かべている。
「……レティシア・フェルナンディ。理由はどうあれ、君が一族の方針に反する意思があるという事は確かだ」
ライスは再び感情を交えぬ声に戻った。
「どのように報告していただいても結構です」
レティシアは、よそよそしいともいえる態度で婚約者に答えた。シンシアとサフィリアの2人しか知らないが、フェルナンディの女性がこのような態度を取った時に、その決意を覆した例をシーグは知らない。
「しかし、護民官達に周囲を探索させているが、まだ見つかっていない。ディテクター（探知者）も参加しているにもかかわらずだ。すでに、スカーフはこの区画には無いに違いない」
「貴重な情報ありがとうございます。ならば、リーザ。今となってはあなたが唯一の希望ですね」
「え？」
レティシアの力強い言葉に、リーザが間の抜けた返答をした。
「いいですか。エンチャンターなら、自分の作った魔術の品物を探知する事ができます。スカーフを作ったあなたなら、ディテクト（探知）の魔術で行方を追う事ができるわ」
「で、で、でも、私は探知の魔術なんて使った事がないわ」

急な話の展開にリーザはおろおろしている。
「では、今すぐ覚えてください。触媒は私が最高のものを用意しましょう」
レティシアが取り出した水晶玉を見て、ライスは目つきと顔色を変えて全身を緊張させた。始終、鉄面皮を崩さない男が全身で感情を表すのをシーグは始めてみた。
「それはフェルナンディの、一族のフィーリア（感応体）だぞ！」
「分かっています。ですから、お好きなように報告なさってください。そう言ったはずですよ、ライス」
レティシアは、リーザに水晶玉を差し出した。球形の黒い水晶だが、中で銀色の光が踊っている。まるで、星空を閉じ込めたようだ。じっと見つめていると、吸い込まれてゆきそうな不思議な感覚がある。
「リーザ、私の水晶玉を持って行ってください」
「で、でもこれってあなたの目も同然なんでしょ？」
「あなたの作ってくれた魔術の道具で、私はもう一度世界を見ることが出来るようになりました。今度は私に恩返しをさせてください」
「待てよ、レティシア。そいつら2人はこいつと」
ルパートは無遠慮にリーザとシンシア、シーグを順番に指差した。
「共犯でお前を襲った疑いがある。ライス、こいつらを解放するのは法的にどうなんだ」
「認める訳にはいかない」
ルパートの問いに、ライスは苦々しい声で答えた。
「では、私が保証人になります。リーザ・オーメントと、シンシア・フェルナンディは私が擁護します。そして、私が彼女達の変わりにここに残りましょう。何かあれば、私が責任をとります。それなら問題はないでしょう」
レティシアの決意を込めた言葉に、ライスと護民官達は途方にくれていた。被害者が容疑者と協力者の身柄を擁護する。こんな奇妙な話は誰も聞いた事がないからだ。

「法的には……問題はない」
平静をよそおっているが、ライスの内心には問題が渦巻いているに違いない。
「リー姉様、迷っている時間はもうありません。呪文と印の結び方は私が教えますわ。必要な結界陣も手配します」
シンシアはリーザの手を引っ張って、水晶玉に触れさせた。
「お前まで何を――」
「お兄様のお好きなように報告なさってください！　リー姉様、時間がありませんわ」
シンシアは兄を怒鳴りつけた後、真剣な眼差しでリーザを見る。その眼光の強さに押されるように、リーザは黒い水晶玉を両手で抱えた。
「さあ、急いでください」
シンシアは一刻の猶予の無いという様子で、扉を引きちぎるように開け放つ。
「シーグ、レティー、必ずスカーフを持って帰って来るからね」
「急いで下さい。ここからは時間の勝負ですわ」
リーザを先に行かせてから、シンシアはキッとライスを睨みつけた。
「お兄様のバカ！　頭でっかち！　大嫌い！」
シンシアは唾を飛ばしながらヒステリックに絶叫した。そして、部屋を飛び出して扉を叩きつけるように閉めると、騒々しい足音と共に去っていった。

1部－15　大嫌い！（後書き）

何かとややこしい話になりました。
今回はファンタジー世界の法律の話です。
最近も、とある国で有名俳優の裁判がありました。知り合いの著名人を裁判に招く事で裁判官の心象を良くしようとしたようです。
その国では、あくまで心象が良くなるだけ。間接的な影響はあっても、法的根拠はありません。

メティスにおいては、実際に法的な根拠を持ってしまいます。有名人や名士と知り合いなら、犯罪さえもなかったことに出来てしまう。つまり、地位も何もない平民が貴族を訴えても勝ち目がない。そもそも、王を排斥できる権利を持つものがいない。恐ろしい国です。
法律が未成熟な構造しか持たない時には、権力者の倫理観を高めようという動きが起こることがあります。
騎士道とか、紳士教育。ノブレス・オブリージュとかがその根幹といえますね。『特権はそれを持たない人々への義務によって釣り合いが保たれるべきだ』という考えです。最も、こういう制度は体制が堕落を始めると、逆に制度を悪用する輩が大量に出現します。
こういうのは、たいてい国が傾く予兆といえるのですが……。
という含みがあったのが今回の話。ややこしいので、一応補足させていただきました。

それと、今回は特に主語が変です。シーグによって脳内変換されている名前を一応書いておきます。

糸目、垂れ目、笑う鉄面皮↓ライス・フェルナンディ
白髪↓バイロン・ランカート

ベクターもどき→ルパート・マードック

1章で名前だけ出ていた人たちです。久しぶりに出てきて、こんな呼び名とは、不憫な（＜＿＞）

1部－16　元気の出るおまじない

＊

シンシアが嵐のように去ってゆくと、急に部屋が寂しくなったように感じられる。誰もが言葉を発する事も、身動きをとる事も忘れてしまっていた。

「ルパート。フィーリアを取り出すとは、どうしたのだ？」

何気ないライスの言葉、それに対してルパートは飛び上がらんばかりに過剰に反応した。そして、慌てて手にした輪を背後に隠す。

「な、何でもねえよ」

そんなはずは無い。大げさな態度が言葉を裏切っている。こいつは頻繁に失言をしているに違いない。いくら自分だってここまで酷くない、とシーグは思った。

「ルパート、魔術を使うのなら、私に許可を求めてほしい」

「ちょっとした用事だ」

「許可しよう」

「……もういらん」

事務的に対応するライス。ルパートはへそを曲げてそっぽを向いた。まるで子どもだ。アイフェだって、もっとずっと少し物分りがいい。

「ライス、別室を借りて構わないですか。シーグさんとお話したい事があります」

「許可しよう」

婚約者同士とは思えないよそよそしい会話だ。その原因を作ったのが自分だと思うと、シーグはやるせない気持ちになった。レティシアも平静をよそおっているが、色を失った唇や長いまつ毛が小さく震えていた。

「隠れて魔術を使うかもしれないぜ、てめえの婚約者は特別扱いか

よ」
　ライスはルパートの嫌味を軽く受け流している。
「その心配はない。彼女のフィーリアは、水晶球一つだけだ。それに当然監視はつける、グラーク」
「はい」
　壁際でじっとしていた、でかいのが直立不動の姿勢になった。
「容疑者シーグと、その擁護者レティシア・フェルナンディを監視せよ」
「了解しました」
　グラークもまた、事務的に答えると扉を開けた。また、力任せに肩をつかまれるのかと身構えたが、でかいのは首を軽く振ってシーグを急かしただけだった。
「レティシア様、こちらにどうぞ」
「ありがとう、グラーク」
　でかいのは、体に見合うでかい手でレティシアの手を取った。そして、目の見えないレティシアを部屋の外に導いたのである。足元に何があるか、あと何歩で廊下に出るか事細かに説明しながら手を引く。鎖鎧の大柄な体に似合わない決め細やかさ、レティシアのほうも確かな足取りで優雅に歩く。宴に出座する男女の2人組みとはこんな風なのだろうか。シンシアの言うエスコートにはこれくらいの気遣いが必要なのだろうか。
　隣の部屋の扉に左手をかけたシーグは、痛みに耐えかねて右手で持ち直した。握力がなくなりかけている。シンシアとリーザについてゆけない口惜しさはあったが、今ついていっても足手まといにしかならなかっただろう。
　それに、アイフェと組み手をする約束をしている。何があっても絶対といったが、これではまともに訓練が出来るだろうか。
　入り口の近くで考え込んでいるシーグの横を通り抜けて、グラークは椅子を後ろに引くとレティシアが座る椅子まで導いた。
「失礼いたしました」

グラークは急に人が変わったように敬礼すると、入り口の前で直立不動の彫像と化した。部下が上司に似るというのは本当のようだ。それとも、でかいのはフェルナンディの一族が作り出したゴーレム（魔術人形）の一種かもしれない。

「グラーク、シーグさんと2人でお話をしたいの。いいかしら？」

「了解いたしました。『監視』の命令を受けておりますが、室内にてと命令は受けておりません。よって、室外にて『待機』しております」

グラークは明らかに含みのある言い方をした。

シーグはおや？　と思った。面構えとは違って、何から何まで四角四面の堅物であるというわけではないらしい。

「ありがとう」

レティシアの感謝に言葉に、グラークは堅苦しく敬礼すると回れ右して部屋から出て行った。外に出てからもう一度レティシアに敬礼すると、ゆっくりと扉を閉めた。わざとらしく感じるほどに形式ばっているのは確かだ。

「シーグさん、あなたも座ってください」

「あ、はい」

シーグは間の抜けた返事をしてしまった。部屋の中で2人きりになってしまうと、途端に気まずくなる。サフィリアと似た容姿の女性。しかし、サフィリアとは違って触れれば壊してしまいそうな繊細さがあって、どう接すればいいのか分からない。シーグは4人がけの机の反対側、それもレティシアの対面の椅子を避けて、浅く腰を下ろした。

「そちらではなく、私の隣に来てください」

「……はい？」

「そこでは遠すぎますわ」

「あの……何を……」

シーグが恐る恐る聞くと、レティシアは一瞬キョトンとしてから口元を押さえて微笑んだ。花がこぼれるような笑みにシーグは思わ

ず目を奪われた。ちょっと仕草が本当にそっくりだ。ただし、サフィリアがこんな風に笑うのをシーグは二度しか見た事がない。一度目は8歳の時、花束を持ってくると約束した日。二度目は、ほんの5日前。会ったばかりなのに家族なんておかしいと笑ったときだ。

8歳の時も5日前も、接する回数が増えるたびに険のある怒った表情ばかり見るようになってしまった。

「あなたが戸惑っているのは、私には婚約者がいるからですね」

「いや、その……」

「ですけど、私はあなたの治療をしたいだけです。ご期待には添えなくてごめんなさい」

「え？」

「両肩、特に左側が傷むのでしょ」

盲目の女性に怪我を見抜かれてシーグは面食らった。それもどうして、左肩の方が酷いと気付いたのだろうか。彼女は、戦闘中はもちろん、グラークに両肩をつかまれているときにもいなかったはずなのに。

いや、ちょっと待て。そもそも、婚約者がいるのに期待ってどういう意味だ？

「誤解をしないで欲しいのですが、俺は何も」

「ですけど、そんなに見つめられては気にするなという方が無理です。ライスもあなたの事を厳しい目つきで睨んでいたようだし」

あの糸目が厳しい目つき？　そもそも目が開いているかも分からないし、自分を見ていた事だって気付かなかった。余計な身動きも一切無いので、立ったまま寝ているのかと思うほどだ。いや、それ以前にどうしてレティシアがそこまで詳しく分かったのだろう。ひょっとして、からかわれているだけなのか。

「戯れているわけではありませんよ」

内心を看破するようにレティシアは微笑んでいる。シーグは優しげな笑顔に見とれつつも、この場から逃げ出したくなった。フェルナンディの女性には人の心を透かし見る能力でもあるのだろうか。

「目が見えなくなると、様々なことが分かるようになるのです。声や呼吸、仕草や足音。気配などから。あなたは声を出す時に、少し力が入っているように思います。それに扉を開けるときに手を持ち替えたでしょ」

思い当たる事を言われて、シーグは思わず息を飲み込んだ。それを見て、レティシアは再び上品にクスクスと笑う。今度は微笑を止めるのに苦労してるようだ。余計な事など言っていないのに、なぜだろう。考えてみたが分からない。

「あの、俺が何か妙な事をしましたか？」

「だって、あなたが動きも息も止めてしまうものだから」

レティシアに言われて、シーグは呼吸を再開した。顔がやけに熱く感じられて、心臓が高鳴っている。鼓動の音まで筒抜けなのではないかと思うと、余計に気恥ずかしくなった。

さっき屋根の上で、シンシアに酷い事を叫ばれた事を思い出す。なるほど、顔を真っ赤にして怒るのも当然だ。

「時が移りますわ。治療をしながらでも、お話はできますよ」

レティシアは自ら椅子を引いてくれた。机を回り込むシーグをレティシアは目で追う。端から見ていると、本当に目が見えていないのかと疑いたくなる。

魔術師の常として、レティシアは服の袖から一抱えもありそうな箱を取り出した。中に包帯や布や消毒液が入っているのはわかる。しかし、大粒ルビーやサファイア、銀の板なども一緒に納められている。薬箱というよりは宝石箱の方が近いように思えた。

「完全に見えないわけではありませんよ。明るさや形はぼんやりとですが分かりますから。それに、目が見えなくなってもできる事は以外と多いのですよ」

証拠を見せるように、レティシアは手馴れた手つきで包帯とガラスの瓶を取り出して、机の上に並べ始めた。白く長い指に、小さなピンク色の爪。窓から差し込む微光にも髪は輝いているようだ。

「服を脱いでくれないと、治療が出来ないわ」

「あ、はい。すいません」
シーグは素っ頓狂な声を出して、いそいそとシャツに手をかけた。妙に浮き足立っていると自覚があるのに、奇妙な行動を繰り返してしまう。レティシアは何も言わずに待っている。落ち着きを崩さない態度に、シーグは自分がずっと年下の子どもになったように思えた。
レティシアは肩に手をかざし、次に軽く触れた。
「痛みますか」
「動かさなければ、平気です」
「少し熱を持っています。しばらく冷やしておくのがいいと思うわ。メティスの外なら2、3日は安静に。だけど、あなたは魔術に対する感応力が高いようだから、王都の内側にいるなら、ずっと早く痛みが引くと思います」
「夕方には大丈夫でしょうか？」
「肩よりも上げない状態なら、ほとんど痛みがなくなると思いますよ。あ、宴の事なら心配いりませんよ。とても、静かな曲で踊りますから」
「え、はあ」
実際にはアイフェとの組み手のことしか頭になかったのだ。さすがに、何でもかんでもお見通しというわけではないらしい。
「あの、色々と迷惑をかけてしまったのでは？」
「気にしないでくださいね。あなたにはサフィリアの事や、シンシアの事で本当にお世話になりっぱなしだし。それに、私だってルパートの態度には腹を立てていたのですよ。法廷の権利を持つものが、すすんで人を陥れるなんて」
レティシアは少し声を低くした。それでも、怒りとは無縁の穏やかな声にしか聞こえない。
「そういえば、自己紹介をしていませんでしたね。私はレティシア・フェルナンディ。サフィリアとは従姉妹になります」
道理で容姿が似ているわけだ。最も、実の姉妹でもここまで似て

いる事は少ないが。
「サフィリアの両親も、メティスにいるのですか？」
「いいえ、２人ともいません。母親は病で、父親は行方不明となっていますから」
「不明……ですか？」
この世に知らぬものは無いといわれる見者。ましてや天空の水盤に君臨する魔術師は場所はもちろん、時さえ越えて真実に近づくといわれている。それなのに不明とは。
「どれだけ魔術を使おうとも、分からない事の方が多いのですよ。だけど、サフィリアが見者に、それも天空の水盤にこだわる理由はたぶん父親を探したいからでしょうね」
サフィリアがメティスで何をしていたか、何を考えて魔術師を目指していたのか。シーグは全く知らない。何のためにガイスと戦い、何を守ろうとしたのかもだ。
ただ、ロディウスに命じられるままに天空の水盤に赴いて戦いとなり、試練だからとガリウスとの決闘を避けようともしなかった。結果的に、何事もうまくいっているとみんなは言ってくれている。だが、実際には何がどうなっているのか、これからどうなってゆくのか。自分の行動が周囲にどんな波紋を広げていくのか少しも分かっていないのだ。
今日の目的はクラトス・ビアのヒントを得る事だけだった。それなのに、ジェイナスが事前に警告してくれていたにも関わらず、罪なき罪に陥れようという陰謀に巻き込まれてしまった。
もし、王の法についてもう少し知っていれば。あるいは、ジェイナスの助言をもっと聞いていたら。結果はまるで違っていたのではないだろうか。避けられるはずの厄介ごとに、自分の油断から足を突っ込んでしまったのではないか。
剣を使った戦い。それも部隊を掌握する将軍はなく、戦士として前線に立つ場合は、事前の作戦立案よりも臨機応変な対応がものをいう。可能性を頭の中で反芻するよりも、目の前に広がる現実の中

に勝利への手がかりが隠されているからだ。
だが、権謀術数の渦巻く宮廷の争いは違う。敵は蜘蛛が巣を張るようにあちこちに罠をはっている。そして、罠は殺意や敵意を放つことなく、公明正大な法の陰に隠れているのだ。そして、一つ避ければ次の巣に導き、少しずつ追い詰めていく執拗さも持っている。ベクターもどきと白髪が偶然居合わせたとは思えない。法に詳しいものが事前に何重もの罠を張り巡らせていたのだ。
シンシアとリーザが庇ってくれ、ベクターもどきが失言をし、レティシアが助力を申し出てくれた。それらの一つでもかけていたら、問答無用に牢屋に放り込まれていただろう。そして、決闘者としての権利も得る事はできなくなっていたはずだ。
自分はもう、シージペリラスとして名乗りを上げて世の中に出てしまった。身の置き場と行動を考えてゆかなければ、守るべきものを気付かないうちに壊してしまうかもしれない。
サフィリアは記憶を失ってからも、自分が目指すものを変えなかった。そして、過去には夢物語だったものを確実に現実のものとしている。
何も言わずに去ったのに、４年もの間自分の事を忘れないでいてくれたリーザ。今までどれだけ探しても見つからなかった理想の剣を当然のように与えてくれた。
このメティスには、彼女たちが築き上げてきたものがある。にもかかわらず、何も知らず自分のことしか考えずに行動してしまった。その結果がこれだ。陥れられた当の本人は、何も出来ずに治療を受けているだけときている。
シンシアとリーザは大丈夫だろうか。もし、彼女たちの身に何かあったら――。
嫌な方向に考えが行き始めたとき、トントンと肩を叩かれた。我に返って勢いよく振り返ると、頬に突き刺さるものがあった。レティシアの人差し指だ。
「……」

レティシアは真剣な表情のままで、指を動かさない。その様子を見る限り、冗談とは思えない。これも何か魔術的な意味のある行動なのだろうか。

「あの、頬に何か？」

沈黙に耐えかねてシーグは問いかけた。

「いかがでしょうか？」

何がどうしてどうなのか、むしろシーグのほうが聞きたい気分だった。

「……ええと、魔術には詳しくは無いのですが、これはどういう効果があるものなのですか」

「これは元気の出るおまじないで、絶対に効果があるんですって」

魔術ではなく、おまじない。魔術士らしからぬ行為から、シーグは脳裏に閃くものがあった。

「まさか、リーザから？」

「ええ、そうなの」

シーグは頭を抱えたくなった。リーザは、誰彼構わずに頬を突いて回っているのだろうか。

「困らせてしまっただけのようね。ごめんなさい」

「いえ、そんな事は」

勘の鋭いレティシアは、寂しそうな表情で顔を伏せた。それでも指は頬に刺さったままだ。

「それとも、何か足りないものでもあるのかしら。手首の返しとか、指の動きとか――」

むしろ、タイミングと雰囲気作りが必要だとシーグは思った。生真面目にやられても途方にくれるしかない。

レティシアは心底悩んだ様子で、今度はシーグの頬に五指で触れた。心地よい感触と、思いのほか近づいた顔にシーグは思わず心臓が高鳴る。

「もし、効果があるならライスにも試してみようと思ったのだけど」

「……あくまで、おまじないですから、効果は人それぞれかもしれ

ません」
　真剣に聞かれたので、シーグも生真面目に答えてしまった。
「そう……そうね。きっとそうだわ。ありがとう」
　レティシアは独り言を呟くと、ようやく頬から手を離した。今のは冗談でした。と、急に笑いだすのをシーグは待ち構える。しかし、奇妙な沈黙の中でレティシアは治療を続けていた。
　どうやら、本当に戯れではないらしい。何でもお見通しのように見えて、奇妙なところが少し抜けているようだ。お嬢様らしいといえばそれまでだが。
　とりあえず、リーザが帰ってきたときには余計な事を教えるなと言ってやろう。シーグは心に決めた。そして、リーザの事を笑い飛ばしてやる。シンシアも一緒だから、きっと倍どころか１０倍返しになるだろうが、それでも構わない。だから、絶対に無事で帰ってきてくれ。
　そう考えていると、手の甲に手が添えられた。
「シンシアもリーザも無事ですわ。２人共、とても頼りになりますから」
　理屈も道理も無視した信頼。それは妄信というのではないだろうか。
「大丈夫ですよ」
　迷いもなく断言し、微笑むレティシアを見ていると、心のもやもやとした不安が消えていく。心が暖かくなるような不思議な感情の働きにシーグは戸惑いを隠せなかった。

1部－17　Φの船

＊

「シ……ンシアちゃん。速すぎ――」

リーザは胸を押さえて立ち止まった。息苦しくて声がまともに出ない。

「ごめんなさい、リー姉様でも、あと少しですから」

一方、シンシアの声はいつもと変わりない。息がわずかに速くなっている程度で、わざわざリーザのところまで引き返してくるほどの余裕があった。細くて今にも折れそうな体つきからはとても想像もつかない強靭さだ。

フェルナンディ家の女性は、ほとんど全員が誰もがうらやむ容姿の持ち主だ。スラリと長い足、引き締まったウェスト、鳥のさえずりのような声。真っ直ぐに伸びた背筋に、見とれてしまいそうな優美な動作。

誰もが詩人の語る理想の女性ばかり。初めてフェルナンディの屋敷を訪れたとき、産まれた時から平等じゃないと思ったのを覚えている。

だが、それは間違いだった。

ダイエットのようなものと思えばいい。そうサフィリアに誘われて体験した日課。水練や棒術、ダンス、礼法、歌唱。一日にぎっしりと詰め込まれたスケジュールは並みの人間に耐えられるものではない。

彼女達のスタイルには、当然産まれながらの特徴もある。だが、それ以上に無駄な贅肉の一片をつけるゆとりも無いほどに、徹底的に鍛えられた成果なのだ。

そんな厳しい教育によって完成されつつある少女はとっくに呼吸を整えて、心配そうにリーザを見上げていた。もうすぐ13歳にな

るシンシアにも、フェルナンディの女性としての兆候は見られ始めている。今でも十分に愛らしいけど、一年か二年のうちにびっくりするような美人に様変わりするだろう。

（今だって、宮廷では注目の的だもんね）

幼いながらに物怖じしない態度、洗練された宮廷儀礼。さすがはフェルナンディの淑女だと賛美する声は城下町にまで届いている。更には、『チェイン・ライトニング』の称号をわずか１２歳で得ており、次代のアクア・ランス卿との声も高い。王国最大の戦力である銀の魔女と、ベクター卿の愛弟子であるルパートを魔術で打ち破った事も名声に拍車をかけることだろう。

本来なら雲の上の存在なのだ。産まれながらの地位でも、それ以外のあらゆる事を比べてみても。

「平気ですか、リー姉様？」

「うん、大丈夫。急がなくちゃね」

リーザは高鳴っている胸を押さえた。声は出せるが、心臓が弾けてしまいそうな事には変わりは無い。力を振り絞っても走るには遠く、速足といえる程度だ。

「もう、少しです。あと１００歩も進めば、川に出ますから。そうしたら、船の上で一休みできますわ」

後ろを振り返りながら励ましてくれるシンシア。目的のために懸命になりながらも、優しさを置き去りにしない。それが、リーザには目もくらむほど眩しく映ることがある。

それはシーグやサフィリアも同じだ。自分とは全く目の輝きが違う、何よりも心のあり方が違いすぎる。自らが危機に面した時、あるいは自分が守るべきものが危機に晒された時。閃光にも似た激しさを見せる。そんなものは自分にはない。

レティシアが倒れているとき、自分はそばに歩み寄る事もできなかった。

見ず知らずの人なのに、迷いもせずに戦おうとしたシーグ。そして怒りに燃えるシンシアは、とっさに自分のできる事を考え出して

いた。

それなのに、自分は何もできなかった。恩師も当然の人が酷い目に遭っているのに。それどころか、置いて行かれた事にホッとした自分に気付いた。

銀の魔女と戦った時にも、予想外の事が起きただけで頭が真っ白になって、自分の失敗に落ち込む事しかできなかった。シーグが自分を犠牲に降伏を言った時、サフィリアがそれを否定して代案を示した時、大した考えも無く空元気で従う事しかできなかった。

迷いもなく、即座に行動する彼らを見ていると、自分はやはり凡人なのだと思い知らされてしまう。

サフィリアの元に戻り、シーグの事を待っていたのも過去が懐かしくて、忘れられなかったからだ。あの日々以上に輝いたものを結局見つける事ができず、過去を引きずって悔やんでいる時にベクター卿が呼び寄せてくれた。

記憶を失っても、サフィリアは自分に何一つ妥協はしなかった。水盤の見者の2つ名、ファクト・アイズ（真実の瞳）の称号を得て、学校の先生にもなっている。それも、七家から問題視される子ども達ばかりを集めてだ。

サフィリアから離れても、シーグは自分の生き方を変えなかった。自らがシージ・ペリラスだと名乗りを上げて、身に迫る脅威を打ち払った。そして自分の大切なものを傷つける意図を持つ人間の、如何なる挑戦も受けると宣言している。

だけど、自分はそんな2人の思いにすがり付いているだけだ。心の内に問いかけても、過去の楽しい思い出しか浮かばない。わが身が砕けようとも果たすべき理想なんて思いつかない。だけど2人の理想は未来にある。ためらいもなく、まっしぐらに走ってゆくだろう。

シーグもサフィリアもいつかは自分の手の届かない場所に旅立って行く。シンシアも彼らと同じように去って行く。共に走ってゆけば足手まといにしかならない。

「リー姉様、あれに乗ります」
先を行くシンシアが川辺に浮かぶ帆船を指差した。先日、銀の魔女と戦ったときに使った船よりも2倍以上は大きい。二階建てになっている。帆には大きくフェルナンディ家の持ち物である事を示す紋章が描かれている。『Φ（フィー）』の数字を元に、風と水を意匠化した紋章である。
「私は先に行っていますわ」
シンシアはエプロンドレスの裾をつかむと、若鹿を思わせる軽やかさで一挙に走る速度を上げた。瞬く間に距離をあけて、船にたどり着くと、シンシアは声高に叫ぶ。
「渡板（といた）を下ろしなさい！」
「なんだ、ガキか」
甲板から顔を出した船乗りは、シンシアを見て薄ら笑いを浮かべる。
「聞こえなかったのですか。緊急の任務ですよ」
「何を偉そうに。あのな、これはフェルナンディの船だぜ。お前ごときの命令をなんで聞かなくちゃならないんだ」
2人目の船乗りが顔を出してゲラゲラと笑う。シンシアの表情が表情を失ったのが遠目にも分かった。首からプラチナのペンダントを取り出す。惨事になるかと思えたその時、青ローブの老人が顔を出した。そして、シンシアの姿を見ると顔色を一変させる。
「ガキは家に帰って、おっかさんのおっ――」
ゴンッという鈍い音が二度続いて、船乗り達がうずくまる。老人が杖で思い切り殴りつけたからだ。
「ど、導師なにを？」
「痴れ者めが。無礼者めが。この御方をどなたと心得るか！」
唾を飛ばし怒鳴り散らす老人を見てただ事ではないと思ったらしい。頭を押さえながら船乗り達は逃げるように走り出し、船と河岸の間に渡板がわたされた。
「シンシアお嬢様、本日はお日柄も――」

「船を出します」
平身低頭で姿を現した老人に、シンシアはピシャリという。
「細かい説明は後、追跡の任務です」
「はぁ」
老人は緊張感の抜けた声で答えた。
「ロイド導師、甲板に魔方陣を書くので手伝ってください」
「ははあー。一族の方に名を覚えていただけるとは、恐悦至極の至りにてございまするー」
今にも平伏せんばかりの老人を見て、シンシアはうんざりした表情を浮かべていた。目線を上げると頭を抑える船乗り達はギョッとした表情を浮かべ、老人にならって深く頭を下げた。シンシアは盛大なため息をついた。
「船、に乗、るの？」
ようやく追いついたリーザは、息も絶え絶えの状態で聞いた。ロイドは怪訝な表情でリーザの頭から順番に全身を見回す。幾種類もの感情が入り混じったようだが、見下すような態度であるのは事実だ。一番の理由は赤毛である事に違いないが。
「こちらは、プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）のリーザ・オーメント。私の協力者です」
「お、おお！　あなたのかの有名な。それは失礼いたしました。どうぞこちらへ」
ロイドは態度を一変させた。どうやら、名前や地位で態度を変える人間のようで部下にもそれが伝染している。サフィリアが最も嫌う人種だ。リーザもまた好きになる理由は思いつかなかった。
「おい、お前達。御二人のために茶を入れるのだ。いやいや、この度は――」
「ロイド導師、のんびりしている暇はありません。緊急の追跡といったではありませんか」
「うむ、それではお前達はシンシア様をお助け――」
「今必要なのは魔方陣です。手助けが欲しいのは魔術師のあなたで

すよ、ロイド導師」
　シンシアの甲高い叫び声にも、泣き出しそうな響きがあった。たぶん、心底あきれ果てているのだろう。
「も、もうしわけありませぬ」
　うずくまらんばかりに頭を下げるロイドを見て、シンシアは険しい顔つきのままで『ヴゥー』と息を吐いている。怒り心頭して爆発する寸前だ。一通り息を吐き出した後にシンシアは大きく息を吸い込む。
「あなた達は何か飲み物を。リー姉様は準備が出来たら呼びますから、少しだけ休んでいてください」
　シンシアが吐き捨てるように言うと、頭を下げるロイドを置いたままで船の中に入っていった。ドスンドスンと、舟板の上を荒々しい足音で歩くシンシアを全員が怖いものを見るように見送ったのである。

1部－17　Φの船（後書き）

今まで、殆どの場面上にベクターやシーグがのどちらかがいました。だから、彼女が3人目の視点担当者となります。

しかも、初めての女性視点です。『だ』『である』調をそのまま使ってしまいましたが、違和感ありませんか？

反省、目標ー2

今年最後の日に、全体の反省もかねて再びアクセス数の分析と参ります。
今までの話のネタバレが混じっていますので、ここから下を読む人は気をつけてくださいね。

決闘が終了して、『決闘者』としての地位を得るはずだったシーグ。
称号が法的根拠を持つ前に、シーグを落としいれようと最後の罠を張る、どこかの誰かさん。
……まあ、おおよそ見当はつくと思います。たぶんインボルグの前後に、祭りの日だって言うのに必死に陰謀を練っていたことなんでしょうね。勤勉な事です。

さて、いきなりですが謝罪しないといけません。3章で戦争に突入、といっていましたが、すいません無理です。
戦争のプロットを作っていくと、色々と頭の中に浮かびまして、それが構築し終わるまではちょっと始められなくなりました。たとえば、
剣術、魔術、法律、薬学、特権階級、王様、騎士、戦士、建築物、街道、気候、暦。
これらは、話の中でちょっとずつ順調に小出しにしていっています。
残るは、経済と輸送、国土（地図）、国交、敵、陰謀、歴史的背景等々。
他にも必要なことが多いと思いますが、戦争一つするにも目的とか場所とか必要かなーと考えていると再び横道に。
というわけで、せっかく2章で細かく書いた王都の風景を使って、

メティスの法律の働き。王様の謁見の実況中継を行う事で外交状況の把握。

自分でちまちま作るよりも、キャラクターたちに喋ってもらって、（シーグ君に試練与えて）、キャラに行動してもらった方が生きた世界が作れる、ように思えるんです。

プロットを作っても作らなくても、プチエピソードに傾くのは作者の悪癖ですねえ。

プロの人なんかは、作っておいて割愛してから完成させるんでしょうけど。演出上手な人は、話の大筋を守ったまま世界観も語れるのでしょうけど、私には正直辛いッス……。

という事で、戦争の突入はもう少し先になります。3章1部という表記もそのうち変えてしまうと思います。3章は3章で、ずいぶんと量が増えそうですが、なんとか3章結末までの大筋は作れました。

次に、批評や感想からの反省や改善などです。

＊決闘は正午、なのにずいぶんとあちこち移動してない？

という質問。2章の決闘で、学校の登校時間（だいたい8時位）～決闘の時間（正午）の4時間。王都内部の移動だけで時間が過ぎないだろうか。特に都市の規模を考えた場合。

という問いがありました。それに対する答えが「1部ー9の彼女の風景」です。通常の城塞都市は城を中心に環状に発展しますが、メティスの王都は河川と街道に沿って、東西に長く展開されています。だから南北の行き来、学園地区、ウィングス通り、ホワイトホースは短時間でアクセスが可能。というのが結論です。まあ、それでも4時間でカツカツなのはその通りでしょうけど。

王都の造りが、すでに桶狭間の今川軍のように伸び伸びになってまして、すでに城砦都市とはいえません。

御堂筋沿いにキタとミナミで栄える大阪、見たいな感じでしょうか。東京のようにあちこちに繁華街が点在しているわけでもなく、札幌のように時計塔や広場を中心に広がっているわけでもない。

堺市もそうですね。鉄砲とか刃物の町だった時代は、南北に伸びる街道沿いに、寺社、鍛冶屋、宿場町などが栄える。

阪堺電車の駅の名前が、綾野町、神明町、妙国寺前、花田口、大小路、宿院、寺地町、御陵前（仁徳御陵の御陵です）、東みなと。

堺の港から、宿場町を通って、職人街、商人街へと続いて、そのあちこちに寺社がある。ですから、大阪も堺市も観光地は南北に長いです。商人、職人の都合で発展させると、こうなるのかな？　と思いながら作ってみました。

中世ならスッカスカの守りを、魔術師と3騎士で守っている状況です。こんな構造なら、犯罪者も簡単に逃げられそうですけど、それはそれで魔術師が治安維持に努めている。その治安維持の機能を使って、リーザとシンシアが追跡開始、というのが丁度今やっている話の内容です。

＊二部の話が間延びです。

改めて反省ですね。下に記述していますが、全体を見るとＰＶ６に対して、ユニーク１のヒット数となっています。

これは、２章を連載中だった7月くらいから変わっていません。だいたい「5～6：1」で落ち着いています。つまり、２０００字で無理やり区切っても、５０００時程度でひと段落つけても一人当たり平均5話分を読んでもらえる、といえると思います。話をたくさん読んでもらおうとすれば、２０００字の方が圧倒的に少ないということになります。しかも、なんとなく見てみても、２章のちょうど真ん中辺りが全体的に伸び悩んでいる様子。２０００字更新は結果的に自分の首を絞める結果となっているように思えますね。なので、無理に更新するよりはひと段落して区切る習慣を付けます。

それでも、５０００字を超えるとどうなのか。今度は読みにくくなるのでしょうか。

＊行間を空けてないので、読みにくい

何度か指摘されています。特に携帯からは読みにくいようですね。びっしりと文字が埋まっている。実際に、ＰＣに比べて、携帯のユニークアクセスが少ない状況ですからね。

ですけど、これは現状維持のままで。どうにも作者は字が埋まっている方が読みやすいようなので。それに、空行にもそれなりの法則があるようです。ただでさえ誤字脱字が多いのに、これ以上、気にする事が増えるのはちょっと勘弁ということで。

＊固い文脈

女性視点で話を進めたときに、あらー、と自分でも思ってしまいました。

特にカチカチの思考じゃない人物の視点ですね。文脈が一定調子だとこういう時に選択肢がせまくなるんだな、と。

＋何とか、更新を続けてゆけるのも皆さんの感想やアクセス数のおかげです。

誰かが読んでくれているって安心感は書きたい気持ちを盛り上げてくれます。

批評感想、アドバイスなどをくれた皆さん本当にありがとうございました。

来年も更新がんばりますのでよろしくお願いします。

それでは、よいお年を。

小説全体，，ＰＶ，ユニーク
累計アクセス，，”１，２７３，５７４アクセス”，”２３９，８２９人”
パソコン，，”７５６，９２７アクセス”，”１６７，７４２人”
携帯，，”５１６，６４７アクセス”，”７２，０８７人”

話別アクセス解析，，
，，，

第１部分：１章　誓約の湖　，２６７２７，，
第２部分：１章－２　ノコギリ歯の死神，１５７７９，，
第３部分：１章－３　無邪気な暗殺者，１４０８７，，
第４部分：１章－４　かくれんぼ，１１１７３，，
第５部分：１章－５　□×○△，１４２００，，
第６部分：１章－６　青マントの事情，１０６４３，，
第７部分：１章－７　２つの１番，１３５１６，，
第８部分：１章－８　戦う権利，１１６６４，，
第９部分：１章－９　魔術講義，１２６３６，，
第１０部分：１章－１０　戦闘開始，９５２９
第１１部分：１章－１１　チューって何？，１１７２２
第１２部分：１章－１２　余計な事，１１７８８
第１３部分：１章－１３　フィー！，１１４７８
第１４部分：１章－１４　空の死神，１０２６９
第１５部分：１章－１５　雷の矛先，９７７２
第１６部分：１章－１６　命取りの座，１１１５４
第１７部分：１章－１７　ガミガミ婆さん，９５９２
第１８部分：１章－１８　師弟の戦法，８４２０
第１９部分：１章－１９　士気低迷，８３２８
第２０部分：１章－２０　恐怖の向こう側，９９０１
第２１部分：１章－２１　ィヤァァァァー！，１０１２２

第２２部分：１章－２２　唇の魔術，１１４９３
第２３部分：１章－２３　ひやっほう？，１００３２
第２４部分：１章－２４　誓い新たに，１０１１９
第２５部分：修正・更新などのお知らせ，７２０４
第２６部分：２章　世界の要，１０６８６
第２７部分：２章－２　死神の夜，８０８８
第２８部分：２章－３　殺した人，７７１２
第２９部分：２章－４　張り詰めた朝，６６８８
第３０部分：２章－５　魔術の素質，７６４６
第３１部分：２章－６　結んで、開いて，７４４４
第３２部分：２章－７　恐れられ、慕われて，７３９３
第３３部分：２章－８　雷神の封土，６２８２
第３４部分：２章－９　なんで？，６１４０
第３５部分：２章－１０　三世帯大家族兎林檎，７０５７
第３６部分：２章－１１　生活指導，７０００
第３７部分：２章－１２　努力と才能，５９６９
第３８部分：２章－１３　理屈と道理，６７６６
第３９部分：２章－１４　英知の都，６４７７
第４０部分：２章－１５　騎士の町並み，５５４６
第４１部分：２章－１６　青空授業，６２２１
第４２部分：２章－１７　ない事ない事，５３４５
第４３部分：２章－１８　巨大化、変身、光線，６１９８
第４４部分：２章－１９　歩く恥知らず，６４２２
第４５部分：２章－２０　成敗ーー，６２３１
第４６部分：２章－２１　人見知り，６２０６
第４７部分：２章－２２　恐怖の正体，６０６５
第４８部分：２章－２３　ダメだしシンシア，６１３５
第４９部分：２章－２４　水晶の魔女，７０９３
第５０部分：２章－２５　前哨戦，６２３８
第５１部分：２章－２６　デスマッチへの招待，５４０９

第５２部分：２章―２７　色々と，５０９２
第５３部分：２章―２８　野心と名声，５０７１
第５４部分：２章―２９　公開処刑の内情，５９５２
第５５部分：２章―３０　空気の壁，５７０３
第５６部分：２章―３１　隙は作るもの，５０８２
第５７部分：２章―３２　力の性質，５１１９
第５８部分：２章―３３　できる事を，５９２３
第５９部分：２章―３４　七家の二人，５９１０
第６０部分：２章―３５　白の道、赤の道，５７０２
第６１部分：２章―３６　シー坊とリー姉，５９２９
第６２部分：２章―３７　魂の一撃，５８５１
第６３部分：２章―３８　父と娘と祖母，５６３０
第６４部分：２章―３９　剣と技，５７８７
第６５部分：２章―４０　火神ゴヴァノン，５９６７
第６６部分：２章―４１　その名はシャープネス，７０１８
第６７部分：２章―４２　大切な事，５７０９
第６８部分：２章―４３　魔術講義２，５８０４
第６９部分：２章―４４　探求と殺戮，５８５５
第７０部分：２章―４５　紳士の心得，５９５８
第７１部分：２章―４６　チュンチュンとコケコッコー，４８１３
第７２部分：２章―４７　おバカさん，５３８４
第７３部分：２章―４８　プルーフの城砦，５３９２
第７４部分：２章―４９　完璧な……，４５７９
第７５部分：２章―５０　脱出作戦？，５４２２
第７６部分：２章―５１　言葉は剣、装束は鎧，５４２０
第７７部分：２章―５２　親衛隊・暁の星，５０４７
第７８部分：２章―５３　武器調達，５３０６
第７９部分：２章―５４　冴えたやり方，４８２５
第８０部分：２章―５５　逃走経路，４３９３
第８１部分：２章―５６　冥王カラナウス，５３１２

第８２部分：２章－５７　戦の季節，５１０７
第８３部分：２章－５８　王の法，４４１０
第８４部分：２章－５９　王の使命，５１４８
第８５部分：２章－６０　ウィングス通り，５２３３
第８６部分：２章－６１　シャックリと絶壁，５１４９
第８７部分：２章－６２　爆裂！，６１２７
第８８部分：２章－６３　４度目の春，５１３０
第８９部分：２章－６４　ケダモノ！，５４２２
第９０部分：２章－６５　気付かせる事，５８５４
第９１部分：２章－６６　趣味と主張と哲学，５７９９
第９２部分：２章－６７　リボンの真相，５０３４
第９３部分：２章－６８　馬力を入れて，５６１０
第９４部分：２章－６９　女心は理解不能，４３７５
第９５部分：２章－７０　魔術講義３，４９２３
第９６部分：２章－７１　致命傷の魔術師，５０６２
第９７部分：２章－７２　一致団結，５００６
第９８部分：２章－７３　眉毛、髭、鼻毛，５００２
第９９部分：２章－７４　死行の成果，５１５８
第１００部分：２章－７５　過激な発言，５７３９
第１０１部分：２章－７６　お茶の時間，５４９７
第１０２部分：２章－７７　せきよく、しきま？，５４４６
第１０３部分：２章－７８　無理、無茶、無謀，４２６６
第１０４部分：２章－７９　ちょっと悔しいから，５４９２
第１０５部分：２章－８０　必殺の武器と絶対の防御，４９８５
第１０６部分：２章－８１　向かう所敵だらけ，４６９７
第１０７部分：２章－８２　お医者のお仕事，４７７２
第１０８部分：２章－８３　デリカシー，４７５１
第１０９部分：２章－８４　宝石と魔方陣，４６１０
第１１０部分：２章－８５　一撃必殺の心得，４７７７
第１１１部分：２章－８６　銀ババ、三ババ，４４３１

第１１２部分：２章―８７　チェイン・ライトニング，４４２４
第１１３部分：２章―８８　ペンペンとペタペタ，３７４０
第１１４部分：２章―８９　銀バエの女性，５０４４
第１１５部分：２章―９０　私は信じます，４５９１
第１１６部分：２章―９１　ギムレットとクロスボウ，４２３０
第１１７部分：２章―９２　炎＋雷　ＶＳ　風＋水，４１８４
第１１８部分：２章―９３　カラシニコス爆弾，４０１８
第１１９部分：２章―９４　ももかじり，３５２１
第１２０部分：２章―９５　２０を過ぎたら……，４０５１
第１２１部分：２章―９６　シャトランジのルール，３８９９
第１２２部分：２章―９７　一時しのぎ的、臨機応変，４０４３
第１２３部分：２章―９８　発想の転換，３５６０
第１２４部分：２章―９９　守るべきは，４０１４
第１２５部分：２章―１００　ちょっくら、行って来るわ，４７０５
第１２６部分：２章―１０１　風の使い方，３８９０
第１２７部分：２章―１０２　見た、やった、出来た，３９７５
第１２８部分：２章―１０３　手旗とガラガラとおっさん，３９２６
第１２９部分：２章―１０４　重力反転，４６０６
第１３０部分：２章―１０５　波状攻撃，３２８１
第１３１部分：２章―１０６　執念の傷，３９５１
第１３２部分：２章―１０７　見えすぎちゃって困る，４６１８
第１３３部分：２章―１０８　お祭り騒ぎ，３８７８
第１３４部分：２章―１０９　ヒョッヒョッヒョ，３７７５
第１３５部分：２章―１１０　霧と風と，３９６９
第１３６部分：２章―１１１　嘘をつく時には，３１９５
第１３７部分：２章―１１２　習慣の違い，３６３５
第１３８部分：２章―１１３　ヴァンガード開始，４６５５
第１３９部分：２章―１１４　戦闘距離１０歩，４１３４
第１４０部分：２章―１１５　風が背中を，４１５９
第１４１部分：２章―１１６　心を攻める影の刃，４２２２

第１４２部分：２章―１１７　色彩のひずみ，４４５０
第１４３部分：２章―１１８　暴虐の報い，５１０６
第１４４部分：２章―１１９　デッド・ロック・タクティクス，４４８１
第１４５部分：２章―１２０　世界の悪意，４５１６
第１４６部分：２章―１２１　法の下、王の名において，４９５１
第１４７部分：２章―１２２　狂気の中心，５４３６
第１４８部分：２章―１２３　未来に約束を，４２２９
第１４９部分：あとがき、反省、目標とか色々，４５０３
第１５０部分：３章　一撃必殺の戦士，３４８２
第１５１部分：１部　探知の真髄　プロローグ，４９７２
第１５２部分：１部―２　真紅の脅威，４６３８
第１５３部分：１部―３　社会学的論議，３９４０
第１５４部分：１部―４　シージペリラスの立場，３６１３
第１５５部分：１部―５　ひたむきに，３４８３
第１５６部分：１部―６　引けない戦い，４１４５
第１５７部分：１部―７　フェルナンディの血筋，３６９４
第１５８部分：１部―８　王の望み、臣下の希望，３２８７
第１５９部分：１部―９　彼女の風景，２７５５
第１６０部分：１部―１０　彼女の望み，２７６２
第１６１部分：１部―１１　彼の跳躍，２７６３
第１６２部分：１部―１２　彼女の戦術，３０３２
第１６３部分：１部―１３　好意的な尋問，２０８９
第１６４部分：１部―１４　糸目、白髪、ベクターもどき，２１０６
第１６５部分：１部―１５　大嫌い！，２５１４
第１６６部分：１部―１６　元気の出るおまじない，１９５３
第１６７部分：１部―１７　Φの船，１０６４

1部－18　禁忌の数字

＊

「リー姉様、こちらへどうぞ」
シンシアに呼ばれる頃には、さすがに呼吸が収まっていた。2人の船乗り達もすでに持ち場についていて、用意された椅子で体を休めていたのだ。
甲板に上がると、心地よい風が吹いてくる。高さは変わらないのに、船の上は建物の2階よりもとても高く感じられる。それは頭上に空が広がり、河の流れによって船が少し揺れているためかもしれない。
甲板には『○』の中に赤い『△』が描かれていた。安定と向上を示す最も簡単な魔方陣だ。魔術師を志して勉強するものが、一番最初に学ぶ陣でもある。欠点は確か複雑な術式には耐えられないということだが。
「早速始めましょう。中に入ってください」
シンシアに促されて、リーザは陣形の中に入った。甲板の上に作られた即席の結界。黒墨を使った線をよく見てみると、銀の粉が輝いている場所がある。それは円の縁を等間隔で20箇所と中央の一箇所。東西南北には炎の灯された燭台がある。4の方位と21の点。サ・フィールを表す数字を思い出して、リーザは思わず魔方陣に見入った。
七家にはそれぞれ象徴とされる数字がある。プロテクションの3であるγ（ガンマ）、ブラストの6であるZ（ゼータ）、エンハンスの12であるμ（ミュー）。最後はフェルナンディの21であるΦ（フィー）まで続く。
ブラスト（噴出）やプロテクション（防護）といった魔術の直接的な効果よりもむしろ、結界の構築のほうが正確に七つの系統分か

れている。そして、七家はそれぞれの数字によって秘儀の結界を持っているのだ。

たとえば、グラムファーレのアンチ・コンタクト・シェルは正三角形だ。

フィーンドのロング・レンジ・ギムレットは縦長の二等辺三角形が2つ重なり、6つの点がある。

ランカートのセブン・パワー・インテグレーションは六ぼう星。円と三角の交点、それと中央の一点をあわせた12箇所が主要な点となる。

だから、フェルナンディの結界陣は21の点を有する事は簡単に想像がつく。だが、気になるのは周囲に4つの点を置いていることだ。その合計は25。すなわち不吉の数字であるシージ・ペリラス（命取りの座）である。

結界陣をくむに当たって、13や25の点を置くことは禁忌となっている。事実、魔力が暴走して制御不可能になるからだ。

七家の結界陣を間近で見るたびに感じていた違和感。シャープネスには全く感じないのに、アヴェンジャーやリーガル・バックラーといった七家の魔術の品を見たときに感じていた違和感。その真実は、禁忌としているはずの数字を陣形を使っていた事ではないのだろうか。

そして、4と21はサ・フィールの数字だ。つまり、結界陣を最大限に活用するためには土地への干渉を強くし、禁忌の数字を用いる。

メティオ・スマッシャーの使っていたセブン・パワー・インテグレーションには、その両方が欠けていた。理論上の威力を大きく下回るのは当然だ。

それなら、理論上の威力を出せる場所は世界中に一箇所しかない。更にそこで理論上の威力が実現されたとしたら……？

リーザは心臓を鷲掴みにされたような感触を感じて、全身に寒気が走った。今さらながらにして、自分がどんな目的に加担していた

かを思い知ったからである。
「これは秘儀なのですぞ。詮索するのは止めていただきたい」
ロイド導師が厳しい口調で言った。シンシアも困った表情を浮かべている。
「ご、ごめんなさい」
リーザは慌てて顔を上げた。目線や仕草、取るに足らないと思える一言が無礼に当たる。これが魔術士同士の付き合い方なのだ。知識として知ってはいても、行動に結びつける事が難しい。
「リー姉様、これから行うのは自分と呼応する魔力の方向だけを探知する最も簡単な探知の魔術です。手に触れても構いませんか？」
「ええ」
シンシアはためらいがちにリーザの手を取った。そして、リーザの指を曲げながら魔術の印を結んでゆく。魔術師にとって手と指は命と同様なのだ。シンシアも抱きつかれることには抵抗を示さないが、急に手をつなぐとビックリして振り払う事がある。それは、他の魔術師にとっては共通の感覚なのだ。だからこそ、手を取りあって踊る社交ダンスは、魔術師たちにとって最大の信頼関係を示す事になるという。
「印はこれで大丈夫です。左手にレティー姉様の水晶玉を持ってください」
リーザは自分の手を見つめた。人差し指と中指をだけを立てて親指と薬指と小指をわずかに曲げる形。サフィリアがよく使う指の形だ。
「親指が頭だと仮定して、槍をかざした騎士の姿をイメージしてください。メティスの町の力が、指の形を通じてリー姉様に力を貸してくれます。つまり、メティスの町並みそのものが探知に優れた形なのですよ。王都の形はサウザント・アイズ卿の探知を寄り完全なものとし、アクア・ランス卿の雷がフェイル・リレイから都市の両端に渡って届くのは、メティスの町並みによるところが大きいのです。ところで、リー姉様。ディテクトの系統の分類は分かりますか

？」
「えっと、方向。正確には角度や高さ。位置は距離と階層構造よね」
「階層構造とは何ですか」
「対探知の結界や、鉛や石材による探知の妨害……だったかしら」
「完璧です」
自信なさそうにいうリーザに、シンシアは大きくうなずいた。
「複数の項目を同時に満足する事は困難です。ですから、方向だけを探知していただきます。方向探知の補助として、４方位の燭台がありますわ。リー姉様にはただ印を結び、対象の物品を強くイメージしてください」
「えっと、他に何を気をつければ？」
「とにかくやってみてください。大丈夫、リー姉様ならきっとできますわ」
「う、うん」
リーザは奪われたスカーフを頭に思い浮かべた。布を織るところから始め、宝石を一つずつ縫い付けていった。外見はもちろん、折り目まで思い出せる。それに、一番大粒のルビー。形はいびつだったけど、とても澄んでいた。少し形を整えて磨くだけで見違えるような輝きを――。
「ロイド、西に進路を取りなさい。そして、フェイル。リレイの水門へ連絡、この船が優先で通過できるよう手配しなさい」
シンシアの命令と共に頬に心地よい風が当たる。ロイド導師が杖を振り上げ帆に風を集めているのだ。目を開けると、西側に配置した燭代の炎が大きく燃え上がっていた。
「完璧ですわ」
シンシアの明るい声に、リーザは全身の力を抜く。水晶玉を持った左半身には体の中身がなくなったような空虚さがある。同時にずっしりと肩にのしかかるような疲労感が残る。未熟なまま、感応力もなく、道具に頼って魔術を使ったときにはこんな感覚が残るものだ。

ぶっつけ本番で、大した集中もせずに、魔力探知の魔術を成功させ、その上で決闘に挑めるシーグはやっぱりすごいと思う。感応力の高さは才能だが、集中力は努力によって身につくものだ。剣士としての修行に明け暮れたとしても、やはり魔術師の弟子なのだと思う。

「だけど、何度も使えないわ。たった一回でクタクタだもの」

「では、最少の労力で最大の効果を出しましょう」

「方向しかわからないのに、大丈夫なの？」

「十分な絞込みが可能ですわ。さっきお兄様は『この区画では』と言っていました。サ・フィールの護民官は、ディテクト（探知）の魔術に通じたものも多く、探知の魔術で捜索がしやすいように区画整理されています。ですから、スカーフがあるのはサ・フィールの外です。まずは、フェイル・リレイよりも西に出て、もう一度探知を行いましょう」

「そのときに東を指したらどうするの？」

「即座に護民官に連絡。水門を封鎖して、区画をしらみつぶしに捜索します。相当場所が絞り込めていますから、袋のねずみですわ。南北に短く東西に長いメティスの地形が私たちに味方をしてくれているのですよ」

シンシアは人差し指を立てて熱弁する。一番最初に魔方陣をつくらず、船に向かってまっしぐらに走っていった理由をようやくリーザは理解した。

やみくもに点の捜索を繰り返すのではなく、水路に沿って東西の線上に探知を繰り返す事で範囲を絞り込もうとしているのだ。この方法なら、方角を探知するだけでもスカーフの位置がおおよそ特定できる。

「だけど、どうしてスカーフは移動しているのかしら？」

勝手に動くとも、風に吹かれて飛んでゆくとも考えられない。

「最初から周到に計画され、準備していたのですわ。レティお姉様が襲われた時、あの場所には魔術師は私とリー姉様、ルパートしか

いませんでした。私たちがルパートを見失った時。つまり大通りに逃がした時に、魔術師ではない誰かに手渡したのでしょうね」

シンシアは指を唇に当てて、爪をかんだ。イライラしたときの癖で、爪がボロボロになってしまう。後で綺麗に切りそろえてあげよう。そうしないと、フェルナンディの屋敷に入ったときに、見咎められて叱られてしまう。

「考えてみれば、あえてレティーお姉様を襲った理由も考えつきますわね。バリアント・アイズ（異相の瞳）を被害者に、シーグさんを容疑者に仕立て上げる。ランカート家とマードック家の両者がシーグさんを訴えれば、フェルナンディは中立を保つ。だから、レティーお姉様がシーグさんに協力するはずがないと考えたのでしょう。ずいぶんと込み入った、狡猾で陰険なやり方ですわ」

「だけど、結局は逆効果になったのね」

「ルパートが調子に乗って失言などするからですわ。自業自得です」

「でも、それはシンシアのお兄さんがルパートを追い詰めてくれたからでしょ」

シンシアは爪をかむのをピタリとやめた。そこで、リーザはシンシアが心を乱している一番の原因を知った。苛立ちから酷い事を言った事を悔やんでいるのだ。シンシアは賢い女の子だ。すぐに兄がどのような立場にいるのか、その上で出来うるギリギリの事をしてくれる事に気付いたのだ。

「後で、お兄さんに会いに行きましょうね」

シンシアは今度は唇をかみ締めてうつむいてしまった。そんな仕草は年相応の少女以外の何者でもない。リーザは落ち込むシンシアの前で屈みこんだ。

「大丈夫。ライスさんは優しい人よ。きっと分かってくれるわ」

「でも……」

「私も一緒に行くから」

「本当ですか？」

「レティシアに水晶玉とスカーフを返しに行かなくちゃね」

「……はい」
リーザが頭を軽くなでてあげると、シンシアは幼女のように素直にうなずいた。
「この方向なら、学園地区、ウィングス通り、アクリアエ・スリス、などが候補として考えられますわね」
「それなら、私たちはずいぶんと遅れをとっているんじゃない？」
「ですけど、こちらは魔術士の操るフェルナンディの船。通常の移動手段では、私たちに勝てるものなどいませんわ」
シンシアも自分の一族の名を口に出すとき、サフィリアと同じく誇らしげな態度を見せる。生き生きとした表情に瞳でキラキラと輝かせるのだ。彼女には迷いのない真っ直ぐな視線が一番良く似合う。しかし、シンシアはこんな表情をめったに見せない。
理由は興奮したときに、左右の瞳がわずかに色あいを変えるためだ。左は黒いままだが、右の瞳はわずかに赤みがさす。強い魔術を使うほどに、瞳の色の差が明らかになる。
ただ左右の瞳が違うだけなら、オッドアイ（異色の瞳）と呼ばれ、遺伝的な特徴である。だが、シンシアの場合、怒りの感情や魔術の使用が引き金となって瞳が色を変える。それに故に、魔術師の間では特異な存在とされているのだ。
産まれた時にはなんともなかったが、８歳を超えた辺りから少しずつ瞳の色の違いが出てきたようだ。才能豊かなシンシアは、すでに魔術師としての片鱗を見せていたから一族から追放される事はなかった。しかし神童と呼ばれ、将来を期待されながらも、瞳の色が原因で一族から母子共々白眼視される事になってしまう。詳しくは知らないが、その時に母親から酷い虐待を受けたらしい。
本来ならば、首や肩周りを大きく開けるのが一般的なエプロンドレスである。しかし、シンシアは決して人の前では肌を晒そうとしないから、調節して襟を相当詰めている。エプロンの吊り紐を肩ではなく首の後ろに引っ掛けられるようにしてデザインを変えているので見た目の不自然さはほとんどない。

だが、どれだけ工夫を凝らしても、ベルテヌ（夏祭り）を越えた辺りからは着る服に困るようになる。いくら風通しの良いデザインして、どれだけ薄い素材を使ってもメティスの真夏にはどうしても完全に肌を隠す衣装が不自然だ。そうすれば、シンシアは外出する事さえ嫌がるようになってしまう。

着替える時や、寸法を測るときに下着姿になったシンシアを見た事はある。その時には虐待の傷跡は全く見当たらなかった。サフィリアが天空の水盤に誘って、体の傷を癒したためだ。それでも、心の傷までは消しようがない。依然として、シンシアは肌の露出を極端に避けている。

目の色を原因に父親から見捨てられ、母親からは酷い仕打ちを受けてきた過去もある。それまでもてはやされていた分、フェルナンディの屋敷の中で心の休まるときなどなかったに違いない。

今ではメティスの中でも異能のフィーリアを手に入れ、七家全体に注目されている。その気になれば、フェルナンディの一族に敵対する事もできたはずなのだ。それなのに、腹違いとはいえ兄を尊敬し、義理の姉となるレティシアを慕っている。

細かい事情は知らないが、サフィリアが時間をかけてゆっくりを人間関係を修復していったようだ。眠りについている間に、その関係が破壊されるなどという事はあってはならない。

「リー姉様」

「ん、どうしたの」

突然シンシアに聞かれてリーザは思考を中断させた。そして、とっさに明るい声で答える。黒とわずかに赤みがかった瞳で見つめられると、少しだけドキリとしてしまう。目の色というのは人の感情に直接作用してしまうものだ。

「大丈夫ですか。時々、辛そうな顔をしていますよ」

シーグに色々といっておきながら、自分がこれでは情けない。リーザは腰に手を当てて胸を張った。

「女の子はね、ちょっぴり悩んだ方が魅力的になれるのよ」

自信ありげに言うと、シンシアは一瞬キョトンとしたが、すぐにクスクスと笑い出した。この言葉をシーグが聞けば、理屈に合わないとでもいいたげに、不機嫌な表情を浮かべるだろうか。

船は西に向けて疾走している。フェイル・リレイの巨大な水門が目の前に迫っていた。

1部－19　誓いと恩情のために

＊

「はい、終わりです。窮屈な場所はありませんか」
丁寧に巻かれた包帯を最後に結び付けて、レティシアは問いかけた。
「いえ、大丈夫です」
シーグはぎこちない動きで肩をまわした。レティシアは目をそばめてじっと観察している。
「やはり、どこか苦しいのでは？」
「いえ、そんな事はありません」
気の利いたことも言えず、シーグはシャツに袖を通した。
息が詰まるのとは違う。むしろ、陽だまりの中にいるような、くすぐったさも感じる空気にシーグはどう対応すればいいのかわからない。レティシアは少しの間じっとシーグを見ていたが、急に口元を押さえて微笑した。そして、納得した様子で机の上に並べたビンや余った包帯を直し始める。
意味もなく浮き足立っている事に気付かれてしまったようだ。この女性の前では隠し事など不可能に違いない。そもそも、サフィリアの前で隠し事など通用した事ないし、４年ぶりに再会したリーザにまで心の中を見通されてしまっている。メティスの女性の勘が鋭い事は、噂で聞いていたが、ここまで見事だとは思わなかった。
「シーグさん」
「はい！」
隊長に命令された時のような返事。レティシアはあっけに取られた後にやはりクスクスと笑い出す。シーグはなんだか自分が間抜けな見世物になってしまったような気がした。
「そんなに私の事が怖いですか？」

「いえ、そういうわけではなくて」
「では、ゆっくりとお話でもしましょう。聞きたい事がたくさんあるのでしょう？」
たくさんありすぎて、何を聞けばいいのか迷ってしまう。それに、何かを聞けば余計なことを言ってしまう気がする。この数日間で、こちらからの質問で、何度相手を不機嫌にさせてしまっただろうか。
「そうね、でしたらこうしましょう」
机の上を片付け終え、袖の中に箱を戻したレティシアは唐突に言った。
「私はリーザやサフィリアからシーグさんの事を聞かせてもらっています」
……たぶん、あまりいい印象がないだろう。シーグは何を言われていたのか心配になった。
「一方的に知っているのは不公平ですから、私の話しを聞いてもらえませんか？」
「ええ、お願いします」
というよりも、この気まずい空気を払えるのなら何でも良かった。シーグはレティシアの隣の席を立って対面の椅子に腰を下ろす。
「私の目ですが、１２歳の時までは見えていたのですよ」
一番疑問に思っていた事をずばりといわれて、シーグはギョッとした。
「フィーリアを失ったからです。一族のものではなく、自分自身のフィーリアを。魔術師にとっては体の一部も同然ですから、破壊されたときには体の一部に障がいを得る事がほとんどです。逆に発見する事で、生まれつき全く動かなかった手足や言葉がよみがえる事もありますが」
ここで、レティシアは言葉を切った。シーグの問いを待っているのだ。
「だったらガリウスはどうなっているのですか？　俺は、奴のフィーリアを２つも破壊しました」

この問いにはレティシアのほうが意外な表情を浮かべた。
「あの、すいません。言いにくい事なら……」
「いえ、そんな事はありませんよ。ガリウス卿なら謹慎中ですが五体満足です。リーガル・バックラー（王の盾）もアヴェンジャー（報復者）も一族伝来のフィーリア。それ故に、失っても体に障がいを抱える事はありません」
「そうですか」
ガリウスは戦うために理想的な鍛えられた肉体の持ち主だ。生まれながらの素質があったとしても、鍛えるために不断の努力をしたに違いない。
ホッとする一方で、次の疑問がわき起こった。セリウスはフィーリアを破壊された罪によって、名無しとして一族を追放されたと言っていた。それはつまり……。
「それで、ガリウスはどんな罰を受けるのですか。『家なし』として一族を追放されるか、『名無し』として生きてゆくのではないですか？」
「細かくはまだ決まっていないの」
セリウスを名無しと侮辱した事を理由として始まった決闘。その結果が、ガリウス自身をセリウスと同じ状況に追い込む結果を呼んだ。因果応報といえなくもないが、度が過ぎていると思う。
――俺は、俺が慕う人達のように生きる。殺戮者にはならない――
そう叫んだ矢先に、へたをすれば殺すよりも惨い仕打ちをしてしまった事になる。ガリウスはいけ好かない男だったし、追い詰められれば審判を攻撃する卑怯者でもある。それでもセリウスと同じ目にあわせていいとは思えない。だいたい、決闘を最初にけしかけたのはアイシャ・ディスペリアなのだ。それも、自分を庇うものを馬鹿にしたような態度で。
「自分を責めないでください。シーグ」
優しい声と共にレティシアの手が触れていた。気付かないうちに、右手で左腕に爪を立てていたらしい。

「それに完全にフィーリアが破壊されたわけでないのです。あなたの狙いが正確で、シャープネスの切れ味が鋭かったから、修復が可能だといっていたわ。それにグラムファーレ家は長老が倒れてしまって、ワグナスも出奔したの。直系の人間が極端に少なくなっているから、それほど重い罰を受けないはずよ」
「決闘前に戦ったエリスもグラムファーレの一族ですね。彼女はどうしていますか」
「こん睡状態よ。無理な状況で陣形を使ったものだから」
「あと、ワグナスとは誰の事ですか。今はどうしているのですか」
「メティオ・スマッシャーの1人よ。フィーリアをすべて剥奪されて、メティスから去って行ったわ」
「破壊される場合と剥奪の違いはなんですか」
「フィーリアのつかさどる部位がとても弱くになってしまうわ。急にではないけど、徐々に症状が現れてくるはずよ」
「……」
「自分を責めてはいけないわ」
レティシアは強い口調で言った。だが、驚きではなく懐かしさに胸を打たれてシーグは顔を上げた。
『そんな態度は自分だけじゃなくて、周囲にいる人々まで悲しくさせてしまうんのよ』
力強い言葉が心の中によみがえる。だが、目の前にいるのはサフィリアではなく、その従姉妹の女性だ。
「サフィリアがいつも言っていたのよ。シーグという人は過去を振り返っては、自分を責めてばかりいる。あんな後ろ向きな王子は見た事がないって」
やっぱりろくな噂をされていなかったらしい。
「俺は王子じゃなくて、公子ですよ。それに、正確にはだったです」
「だけど、サフィリアはいつもあなたの事を王子だっていたわ」
「物事は正確に言えって、説教ばっかりしていたくせに」

だいたい、メティスでは内戦が勃発していた時期があった。直系の王族は極端に減っていて、シェンナ王とベクター位しかいなかったはずだ。つまりサフィリアが１０歳前後の時、基準にしていた『王子様』というのは――。

シーグが憮然としていると、レティシアはクスクスと笑いだした。肩を震わせて、必死に堪えている。リーザなら手近にある何かをバシンバシンとひっぱたいていたに違いない。

「サフィリアの理想は王子様。リーザは紳士ね。シンシアはその両方かしら。もちろん、みんなそんな理想を抱くに相応しい魅力的な子達だけど」

レティシアは目に浮かんだ涙をぬぐいながら、ようやく笑うのをやめた。

「ええと、私の目が見えないのはフィーリアを失ったため。そこまでは言ったわね」

「すいません、質問攻めにしてしまって」

「構いませんよ。目が見えなくなって、私はフェルナンディの一族の中で身の置き場をなくしました。いかに私が、サウザント・アイズ卿とアクア・ランス卿の娘だとしても――」

思わず立ち上がったシーグは、机に膝をぶつけてガタンと大きな音を立ててしまった。

「す、すいません」

「いえいえ」

鋼鉄の貴婦人の娘は驚いた様子もなく、のんびりとした口調で微笑んでいるだけだ。

レティシアとサフィリアは従姉妹。つまり、サフィリアはフェルナンディの中枢にいる人物だ。サ・フィールに比べれば、自分の産まれた領地など取るに足らない。この地区だけでも並みの王国にも匹敵する富と繁栄を産み出しているはずだ。

人の事を王子呼ばわりしていたが、サフィリアの方は本物の王女と言っても差しつかえのない身分だったのだ。誕生を祝って町一つ

を造るなんてそれだけでただ事ではない。
そんな事も全く知らず、リーザと共に名前を呼び捨てにして、埃と泥をかぶりながら走り回っていた。
我ながらなんという恐ろしい事をしていたのだろうか。いつも怪我をさせられる側だから良かったものの、怪我をさせたりしていたら国際問題になっていたのではないだろうか。
その時、ガチャリと音を立てて扉が開いた。隙間から『でかいの』の警戒心むき出しの眼光が突き刺さる。
「ああ、丁度良いところでした。グラーク、何か飲み物を持ってきてもらえますか？」
「かしこまりました」
レティシアの注文に、グラークは執事のように礼儀正しく答えた。ガチャリと扉が閉じて、階下に下りてゆく足音が遠ざかってゆく。
「彼は俺達を監視していたのでは？」
「あら、そういえばそうでした」
レティシアはのんびりと答えた。まるで、自分の屋敷の中にでもいるような落ち着きようだ。
婚約者に尋問され、容疑者である自分と同室にいる。しかも、体の一部ともいえるフィーリアを他人に預けたままなのだ。このような状況で平静を保てるなど並みの胆力の持ち主ではない。
伏魔殿のごとき宮廷で、言葉を剣に礼節を盾に挑む淑女たちは強いのだ。なるほど、その頂点に立つ貴婦人が鋼鉄の心を持っていても不思議ではない。シーグが感慨深げにうなずいているのを、レティシアは姿勢正しく待っている。
「す、すいません。何度も話を中断してしまって」
「構いません。たぶん、そんな態度を取って欲しくないから、サフィリアは言わなかったのだと思いますよ」
「と、言いますと？」
「あの子には血族や先生、ライバルはたくさんいました。だけど、メティスに友人はいなかったと思うの。リーザともメティスの中で

はほとんど会えなかったから。あなたたちと一緒にいるときのサフィリアの武勇を聞きましたが、たぶん誰も信用しないでしょうね」

「人形のようにおとなしかったのですか？」

リーザの言葉を借りてシーグは問うた。レティシアは静かにうなずく。

「あの子が激しい所を始めて見せたのは８歳の時。サフィリアが目の見えなくなった私を庇ってくれたのですよ。私を追放するなら、自分もついていくときかなかったの。あの子は私よりも４つも年下だったのに、お姉さんのように頼もしかったわ。あの子が１０歳の頃には、お母様と同じくらい厳しかったわね。見者になるために、必要な知識や魔術の基礎。本が読めないから朗読をしてくれる人を探してきて、書いた文字が見えないから手触りで分かる記号でメモをする方法を見つけてきたり。ぼんやりとだけど見えるから、特定の明るさで見える色と形に敏感になれるようにと訓練させられたり」

レティシアは楽しそうに語るが、それが並大抵の辛さではなかったはずだ。それは、サフィリアの訓練を受けた自分だから良く分かる。

ガリウスとの決闘の時、自分が色覚異常であると簡単に見抜いた。視覚に関する知識があれほど豊富だったのは、従姉妹を助けるために必死に集めた知識の一端だったのだろう。

困っている人を見つければ、わが身を省みずに行動を起こす。何処にいてもサフィリアは変わらないようだ。

「あの子の本質は騎士なのね。きっと」

「俺もそう思います」

「そして、あなたは戦士なのね」

「え？」

思いもよらない事を言われて、シーグは面食らった。戦士に相応しくないと言われたことは星の数ほどだが、戦士といわれたのは初めてだからだ。

「セリウスがいつも言っていました。シーグは兵士にも将軍にも向

かないだろうって」
「シャトランジ（王取り将棋）の腕も絶望的だといわれましたよ」
「攻撃に傾くと王が無防備になるそうですね」
シャトランジの基礎の基礎をまともに守れなかった。盤面の一部だけを見ているとどうしても全体が見えなくなってしまうのだ。
どうやら、セリウスにまでメティスでは笑い話のタネにされていたようである。
「ですけど、こうも言っていましたよ。彼はコマにはなれず、人をコマのように切り捨てる事もできない。だから、最高の戦士になれるだろうって」
「まさか」
戦士に不向きだといわれた事は数知れず。向いているとか、相応しいとか言われた事は一度もない。
「本当ですよ。故人の言葉を欺いて伝えるなんて事はいたしませんわ」
レティシアの言葉が少し、ほんの少しだが尖った。とにかく、気を悪くさせてしまったらしい。だが、サフィリアならこの１０倍はトゲがあるし、シンシアなら牙の上に毒をのせてきただろう。
「騎士は法と大儀のために。戦士は誓いと恩情のために。勇士は信念のために戦う。メティスにはそんな言葉があります。サフィリアやリーザとの約束を守るために、あなたは帰ってきたのでしょう？」
「え、ええ。まあ」
約束とはどっちの事だろうか。世界中を一緒に回るという方ならいい。もしも、花束の方だとしたら……。
いや、『サフィリアやリーザとの約束』といった。だったら、世界を回る方に違いない。
言葉を正確に使うのはフェルナンディの一族。勘違いをするような言い方はしないはずだ。だがレティシアは口元を押さえ、何も言わずにじっとシーグを見ている。
いやいや、あれは面白がっているわけでも、詮索しているわけで

もなくて待っているだけだ。だから、自分が落ち着けば、レティシアは話を進める。そうに違いないと独り決めしていながらも、シーグは顔に血が昇っていくのを止められなかった。

シーグは姿勢を正して椅子に座る。それと同時にレティシアは口を開いた。

「私の目を見えるようにしてくれたのはリーザです。1年前にあのスカーフを作ってくれました。プルーフ・アゲインストとしての最初の作品。サフィリアと一緒になって、完成させてくれたの」

「そうですか」

誰かのために役立つもの、誰かが喜んでくれるものを作り出す。クロスボウや爆弾なんかよりもずっと、サフィリアとリーザに相応しい品物だと思う。

「ですから、リーザやサフィリアと親しい人を助ける事は私自身のためでもあるのですよ」

だから自分を責めるなと、そう言いたいのだ。シーグはグジグジ悩んでいる自分が情けなくなった。

「シンシアやリーザが戻ってきたら何か御礼をしたいと思います。何がいいでしょうか」

「そうですね……」

レティシアが考え込んだ時、階下からゆっくりと足音が近づいてきた。シンシアのときとは違い、ゆったりと重量感がある。でかいのが帰って来たに違いない。

「とりあえず、お茶の時間にしましょうか」

レティシアは再び花がこぼれるような微笑を浮かべた。

1部－20　推理と地形と走査線

＊

船はフェイル・リレイの水門を超えて、湖へと進んだ。王都全体を槍を構えた騎士としてみた場合、王城が頭となる。そして、頭を守る盾が湖となる。それ故に、湖の名もまたリーガル・バックラー（王の盾）と呼ばれている。

空と湖の青が広がる場所で、リーザは再び神経を集中してスカーフの探知を行っていた。

「ロイド、北に進路を取ってください」

一度目の倍ほどの時間をかけた後、ようやくシンシアの声がかかった。力を抜くと同時に、リーザは体がずっしりと重くなる感覚に襲われた。全身が石や鉄に変わったようにも思える。アクア・ランスの区画で行ったよりもはるかに酷い。

「今はゆっくりと休んでください」

シンシアは船乗りの1人に命じて、気持ちよい風の通る場所に椅子を用意してくれていた。倒れるように椅子に腰を下ろすとシンシアがグラスを差し出してくれる。

「これって、アップル・ビネガーよね」

一口つけて、ことさらに明るい声でリーザは言った。疲労回復の効果があるりんご酢にハチミツを加えて水で割っている。甘さとすっぱさが口の中に広がり、体にわずかだが力が戻る。疲労困憊した自分を気遣ってくれているのだと、その気持ちが何よりもうれしかった。

「お口にあいましたか？」

「うん、とても美味しかったわ」

笑顔で言っておきながらも、ハチミツの多さにリーザは少しだけ困っていた。今日の昼食は少しだけ量を控える事にしよう。

「この方向だと学園地区になるのかしら」
「はい。厄介な場所ですわ」
「えっと、たしか湖がイリュージョン（幻覚）の系統に向いているからよね」
流れる水や緩やかな風、豊かな光はディテクト（探知）の系統を研ぎ澄ます。一方、澱みや闇がイリュージョン（幻覚）を強化する。例を上げれば、霧の立ち込める夜の湖がイリュージョンに適しており、明る光が降り注ぐ昼の川がディテクト（探知）に最も向くのだ。
秘密を守る七家の研究所や魔術師の住居。それらが湖の北岸一帯に集中しているのは探知を曇らせる地形の効果による。
天空の水盤でサフィリアが魔術を使うとき、わざわざ家の前に水路を引き込んで池を作る。その理由は少しでも水に流れをもたせて、ディテクト（探知）に向いた環境を作ろうとしたからだ。
「いっそ、アクリアエ・スリスの方面ならよかったのですが。あそこはグラムファーレの封土。三角の結界陣が最も有効に使える場所でしたから」
シンシアは口惜しそうにいいながら再び唇に指を当てた。今にも爪に歯を立てそうな雰囲気だ。心配そうに見ているリーザに気付いて、シンシアは慌てて表情を改める。
「で、でも、収穫はありました。東西に長い王都で南北の軸を捉える事に成功したのですから」
身振り手振りの懸命な言葉。それが励ましと楽観の入り混じったものである事にリーザは気付いていた。この子が冷静さを破って必死になるのは、隠したい感情を振り払うためなのだ。
それではシンシアが取り乱す原因とは何なのだろうか。
リーザは船の進む方向を見つめた。行方には学園地区が広がっている。いくつもの塔が空を貫き、王都の何処からでもその位置を確認できた。東から河を渡ってやってくる船が最初に見つけるのが、学園地区の塔の群れである。
幾人もの魔術師がいて、数え切れない魔術の品がある。更には特

別な魔術の空間が多数存在しているのだ。急に空から人が落ちてきたとか、部屋の家具がすべて天井に張り付いたとか。人ほどの大きさがあるねずみの群れが走り回った噂も、塔の頂上から空に向かって雷が昇っていったという話もある。通常なら起こりえない、超現実的な現象がごく身近に起こる区画。それが学園地区なのである。

そして、探知において方向を定めるには角度や高さ。位置の特定には距離と階層構造の認識が必要となる。

シーグやサフィリアなら直感によって一瞬で思いつくであろう答え。それを一つずつ状況を頭で反芻し、理論的な思考を重ねる事でリーザはたどり着く事ができた。

「厄介というのは、学園地区に塔が多いから。それと魔術師がたくさんいて、魔術の道具がたくさんある。それに、隠し場所が一杯あるからよね」

シンシアは驚いた様子でリーザを見つめた。

「……ええ、湖岸から方向を特定するだけで場所を絞り込む事が難しいのです。それに、塔は権限なくして侵入する事はできませんし、所有権によっては一階層ずつ別々の許可を取らないと強制捜索もできないのです」

「つまり、私の未熟なディテクトなら場所の特定が無理なのね」

「区画までなら十分です。しかし、その中に百を超える塔が立っていて、地下室もあわせれば千を超える部屋が存在するはずですから」

「探知の性能をもっとよくできないかしら」

「いけません。それではリー姉様がもちませんわ。極端な強化によるディテクト（探知）は、術者を発狂させてしまう事もあるのですよ。ましてや、学園地区はイリュージョン（幻覚）の封土、ディテクト（探知）と対抗する系統なのですから」

「無理なのね……」

リーザは呟きながら考え込んだ。こんな時、シーグならどうするだろうか。

どうにもならないなら、どうにかする。そんな無茶苦茶な事を言

ってておいて、実現までしてしまうあの少年は。
魔術の知識などほとんどないくせに、いつでも魔術師の度肝を抜き、それでいて正鵠を射抜く意見を考え出した。その場しのぎに見える機転で、大陸最強のメティオ・スマッシャー、王都防衛の要である銀の魔女、鉄壁の守りといわれたリーガル・バックラー卿を打ち破ってきたのだ。
いつでも物事をがらりと入れ替えるような。根本からひっくり返してしまうような考えを出してくる。つまり、通常と全く逆の考え方をするのだ。
「いっそ、一方向しか探査しない。なんてのは……どおなのかなぁー？」
自信のない声で呟いたリーザを、シンシアは目を丸くして凝視した。片方の目の色が少し赤みを帯びる。ひどく怒らせてしまったのだろうか。正直、ものすごく怖い。
「ご、ごめんなさい。ただの思いつきなの。気にしないで」
「……いいえ、名案です。そうか、そうですわ、それならあの方法が……ちょっと待ってください」
シンシアはすごい速さで何かを呟きながら、ネコのように俊敏に首を動かして周囲を見回した。そして、何度もうなずく。
「四方位すべてを探ろうとするから曖昧になります。いっそ一方向だけに絞ってみましょう。リー姉様、すごいですわ！」
「ええと……何が？」
自分で言っておいて、リーザは何がどうなのかさっぱり分かっていなかった。シンシアは一瞬キョトンとしたが、興奮した様子で口を開く。
「リー姉様には一方向のみに意識を集中していただいて、その間に船全体を回転させるのです。結果的に円状の探査をする事になり、より正確な角度が割り出せますわ」
「あ？　あー……。あ、なるほど！」
リーザはようやく合点がいった。何のことはない、水夫がマスト

から四方を見回すようなものだ。だが、リーザには結界陣の補助なくして探知が使えず、探知は4方に限定されてしまう。だからいっそ船ごと、つまりは結界陣のほうを回転させようというのだ。

「そのためには、もう少し北に出てから。学園地区に近づいてから探知するのが有効ですわ。後にその方角にある建物を地図から割り出して、絞り込みます」

「えっ……と、でもさっきは建物が密集しているからって言ってなかった？」

「ここから先は推理です。今回の事はあらかじめ計画されていたというのを前提に、敵の動きを予測するのですわ。この陰謀に加担しているのは、ランカートとマードック。シーグさんに最も恨みを持っているのは、グラムファーレです。魔術師でない人間に輸送させ、フェルナンディの捜索をかわして、スカーフを最後まで隠匿する。それらも計画済みと考えるべきでしょう。魔術の品の隠匿に有効な手段として、トリプル・ステイシスで結界を作る事があげられます。エンハンス（向上）とプロテクション（防護）、サモニング（召喚）が理想的ですわ」

その3系統を操る一族こそがランカートとマードック、そしてグラムファーレだ。リーザにもようやくシンシアの言いたいことがわかってきた。

「魔術の施設と比べて、その3系統を司る建物だけを特定するわけね」

「更に人材もです。トリプル・ステイシスを安定して使いこなせる人材となれば、メティス内部でも50人程度。更に理想を求めるなら、イリュージョンも加えたフォース・ステイシス（四連均衡）。そうなると、30名にまで絞り込めます。魔術師の配置については、護民官の捜査権限において調べる事が可能ですわ」

「シンシアちゃんってば、すっごぉーい！」

感極まったリーザは思わずシンシアに抱きついた。最も、シンシアの言った事の半分くらいしか理解してはいなかったが。

「あ、あの。リー姉様、ちょっと苦しいです」
「だけど私、シンシアちゃんに胸がキュンってなっちゃったもん。惚れ直しちゃった」
言葉はともかく、別に引き剥がそうとしないのでリーザは更にシンシアに身を寄せた。
「そ、その。ロイド導師に指示を出したいのですが」
「やーよ。私をお嫁さんにしてくれるまで離さない！」
「えっ？」
シンシアは一瞬体をビクリとさせたが、すぐに落ち着きを取り戻した。息がかかるほど近くにいるものだから、深呼吸をして気持ちを落ち着けているのがすぐに分かる。同じ手は通用しないか、とリーザは残念に思った。
「リ、リー姉様、今はそれどころではありません。ふざけるのはもう止めてください」
最後の方は説教をするときの声色に変わっていた。これ以上続けると本当に怒り出すかもしれない。諦めようと思ったとき、シンシアに女性らしい柔らかさを感じた。
「あれ？　シンシアちゃんってば、結構胸が大きくなってきたんじゃない」
「な！」
シンシアは言葉に詰まって、急にジタバタと暴れ出した。悪戯心が芽生えたリーザは逃がすまいと背中を力強く抱き寄せる。
「やっぱり。うっわー、シンシアちゃんてば将来有望かも」
「な、な、な、な！」
一声ごとに平静を無くしてゆく表情。それに伴い顔がどんどん真っ赤に染まってゆく。それと同時に鼓動が爆発しそうに高まっていった。
普段は全く動じないのに、この位のことで取り乱す事がリーザには面白くて仕方がない。
「今度、新しい服を作る時は気をつけなくちゃね。そろそろ大人っ

ぽい服も似合うかも」
「そ、そうでしょうか」
リーザが身を離すと、シンシアは不思議そうに自分の胸元に手をやった。
「どんな服がいい？」
「お、お任せします」
リーザがじっと見つめていると、恥ずかしそうに身をよじって、顔を隠すように背後を振り返った。
「ロイド、急ぎの用事があります。聞こえていますか、ロイド！」
「はい。何用でございましょう」
「調査の協力を仰ぎます。ライス兄――」
シンシアはここで一度言葉を切った。紅潮した顔が途端に青ざめてゆく。
「――ライス護民官長と話をします。急いで連絡を取ってください」
これは思った以上に重症だ。レティシアにも取り成してもらって、仲直りさせなくてはいけない。リーザはそう思った。
ロイドが杖を掲げると、帆が急激に風をはらみ、ゆっくりと北に進路を変えた。東側にジェイナスの学校を見送りながら、学園地区に向かって船は滑るように進んでゆく。

1部－21　砂漠の勇士

＊

玉座の間において、謁見は次々と進んでいった。この調子ならば、早朝の遅れはすぐに取り戻すことが出来るだろう。

使者が深く頭を下げて出てゆくと、玉座の間の巨大な扉が音を立てて閉まる。

シェンナはやれやれといわんばかりに玉座に肘ををつき、ゲイルは次の謁見の準備をしている。そんな中でベクターは考えにふけった。

そもそも、メティスにおいて王との直接対面は儀礼と形式以上の意味をほとんど持たない。大切な話し合いと、調印はすでにゲイルによって完了しているからだ。そのため、メティス国内に配置されている諸国の領事館も縮小の一途をたどっている。大陸すべての国を、ほとんど数日でゲイル自身が直接対面できるためである。

ゲイルが大臣になってから最初に行った事は、七家に属さない魔術師の育成と各国を結ぶテレポート（転移）の経路の構築であった。人と物を大量に運ぶには向かないが、魔術師自身とゲイル・グラキエスを運ぶには十分である。

ゲイル自身、独自で七家に属さない少数の魔術師を組織している。七家を権力の中枢に呼び寄せると同時に、学校を開設して魔術の指導を外部に開放したからだ。ゲイルが保有する魔術師は、それら学校から選抜された人員である。詳細は知らないが、よく組織され訓練の行き届いた魔術師達なのだ。戦うとなれば戦法が明らかになっている『銀の魔女』よりもはるかに手ごわいとベクターは考えている。

力の差を云々する以前に、正体がまるで知れない。不明とはそれだけで人を混乱させ、不安にさせる事ができる。そして、ゲイル以

上に人心を操作する手管に長けた人間をベクターは知らない。
「次は何処の国だ」
退屈そうにシェンナ王は問いかけた。
「フェジュラですぞ」
ゲイルはほとんど即答した。膨大な数の使者の順番を完全に記憶しているのだ。
「海の向こうのオアシス連合か。あの国にはお前にも縁があったな、ベクター」
「留学させていただいたのです」
「追放の間違いではないのか？」
ベクターの答えにシェンナは楽しそうに付け加える。
「お前が魔術を学んだのが、あの地だったな」
「その通りです」
「ベクター卿を育てた国か。お前を見ていると、メティスよりも優れた魔術師がいるようにおもえるな。メティスが戦えば勝てるか？」
シェンナは興味を持った様子で問いかけた来た。こと戦いに関する限りシェンナは貪欲に知識を求めるのだ。
「勝敗は簡単にはつかないでしょう」
「なるほど、つまり少なくとも拮抗するほどの力は持っているわけか」
シェンナは興味深そうに考え込んでいる。
「もしも交戦状態になり、お前がメティスを指揮したとする。どう戦う？」
まさか本気で戦争を挑むつもりとは思えないが、ベクターは慎重に考えた。
「まずは、王都の守りを固めます。そして、拠点を作って防御線を築き上げて国土を防衛します」
「剣であろうと魔術であろうと、戦争の本質は変わらぬわけか。しかし、守ってばかりでは勝てぬな。その点はどうする」
「少数の遊撃隊を組織して、フェジュラ王国の中枢を狙います。特

に要人に対する攻撃は有効であると考えます」
　更に言うなら、フェジュラの封土はオアシスの地下水路の流域に限定されている。そのため、ディテクト（探知）による追跡が困難なのだ。風の属性によるディテクトも有効だが、それも砂嵐の発生により極端に狭まる。そして、フェジュラの探査網が完全に無効化する場所と時期をベクターは知っていた。その隙をついて、中枢を押さえることが出来れば……。
「ほう、軍勢を率いない、か」
　シェンナは面白そうにベクターを観察している。だから、ベクターは表情を消し、思考を打ち払って先を続ける。
「海の向こうとなれば、お互いに挙兵も軍勢の維持も困難になります。小数による迅速な行動こそが求められます」
「魔術士同士の戦いは質と速度が勝負の決め手ということだな」
「質と速度も、数や破壊力と同様、強さの一因であると考えます」
　ベクターは答えをあいまいにした。七家の目指している方針に反する意見だと分かっていたからだ。数と破壊力を結集して戦うのが、メティスの魔術師である。
「要人を狙ってどうする。即位する王、配置される領主、軍勢の指揮官。すべてを殺しつくすのか？」
「いえ。一刻も早く停戦を申し込み、条約を結んで国交を回復させます」
「……つまらんな」
　シェンナは容赦なくはき捨てた。興ざめした様子で玉座の間に体を沈めた。
「ならば、ゲイル。お前はどう考える」
　シェンナ王は質問の矛先を、いやらしい笑みを浮かべる大臣に変えた。
「ベクター卿と同様です。フェジュラは遠方の国ですからな。軍事力は有して使わず。条約を結んで後に、干渉地帯に魔術師を配置してけん制。後に外交折衝による停戦が効果的でしょうな。テレポー

トといっても効果には限界がありますからな」

遠地や魔力の乏しい土地へ向かう時は、朝出発しても到着が昼や夕方になるために、『瞬間』で移動する事はできない。ナイト・ロード卿による王都の移動でさえも厳密に言えば一瞬ではなく、魔術によって思念だけを飛ばして会話する時でさえ時間のずれが存在する。物に関しても重量による制限が厳しく、物質の劣化が必ず起きる。人や思念以外の物を運ぶには元々向かない手法なのだ。

その一方で、テレポートは魔術師にとっては転移先を突き止めるのは優しく、転移先にいる魔術師は空間のゆがみを簡単に察知できる。まずは包囲網を展開する。そして、思念を飛ばして連絡を取りあえる体勢を作る。そうすれば、テレポートを連続して逃げる魔術師を追い詰める事は容易い。サモニング（召喚）に属する空間系魔術に共通して存在する弱点なのである。

体制を整えればテレポートほど暗殺と進入に向かない魔術はなく、確固たる拠点に逃げ帰るのでなければ逃走さえも無意味だ。故に王の警護には常に魔術師を配置する習慣がどの国にもある。そして、国境地帯に封土を作って魔術師を住まわせ監視させているのだ。

「フェジュラからは毎年のように王子がやってきておりましたな。腕利きの勇士で、名はガラドテドリカ・ギムノス。そして、特使として来訪したのがマルガンテドリカ・ギムノス。そうですな、ベクトテドリカ・ラディウス殿？」

「過去の名です」

わざとらしく問うゲイルの言葉をベクターは受け流した。しかし、シェンナは興味をそそられたようである。

「なるほど。メティスから追放された時の名前か。どういう関係なのだ？」

「養子に出されたのですが、それは過去の繋がりです。今の私はフォルナージュ家のベクターですから」

ベクターが訂正すると、シェンナはゲイルに視線を向けた。

「フェジュラにおいて姓は血族を、名の一部が一族をあらわします

ぞ。ギムノスといえば、フェジュラ連合の王室ですな。ちなみに、マルガンテドリカはベクター卿の師匠。肉体強化の魔術を自在に操り、蹴打術を得意とするフェジュラ随一の勇士とか。素手であればこそ、油断のならない相手ですぞ」

「……なるほど、メティスの魔術士とは違いすぎると思っていたが、理由がようやく分かったぞ。それに、私の姓である『グラドリカ』は元々フェジュラとの血のつながりをあらわすものであったな」

シェンナは自分の赤毛を引っ張りながら独白する。

「陛下の祖父母がフェジュラの出身者ですからな。今回の特使にマルガンテドリカを選んだのは、友好的な関係を継続したいと考えているからでしょうな」

ゲイルの長口上にもシェンナはことさらに興味を惹かれた様子もない。

「ちなみに、ベクター卿はフェジュラにおいても最強の勇士であるとの評判のようですぞ」

「騎士であり、勇士であり、魔術師でもある……か」

シェンナは含みのある視線で、無遠慮にベクターの全身を眺めた。

「フェジュラ特使、マルガンテドリカ殿、ご入来！」

衛兵が使者の到着を告げると、シェンナは俄然やる気を取り戻した様子で玉座に座りなおした。そして、音を立てて開く巨大な扉に注目する。玉座まで真っ直ぐと続く真紅の絨毯に立っていたのは3人。布を赤毛の頭に巻き、白地の長衣の上にコートを羽織っている。熱砂の国の住人が好んで身につける服装だ。

全員が樫の木のような痩身の男たちである事にシェンナは興味深そうに目を細め、ゲイルでさえもわずかに表情を変えた。最強の勇士ということで、雲をつくような大男を想像していたからに違いない。

全員がベクターの見知った男達だ。中央にいる壮年の男がマルガンテドリカ。両脇にいる2人はベクターと同年代であり、共に勇士となるために鍛錬に励んだことがある。

しかし、ベクターは心にわきあがる懐かしさを一瞬にして警戒心に切り変えた。もしも、彼らが一斉に王に襲い掛かるようなことがあれば勝ち目がないからだ。剣はもちろん、今は杖さえも持っていない。玉座の間において、攻撃的な道具を持つことは禁じられているからだ。

リーガル・バックラー卿が王の護衛についていたのは、こういう場合に備えてである。正面対決となったときには、リーガル・バックラー（王の盾）の魔術によって王の身柄を守り、アヴェンジャー（報復者）を触媒とした魔術、クリティカル・ウーンズ（致命傷）によって接近を阻むのだ。

そもそも、使者との謁見で、王と護衛と大臣しかいないという状況が異常なのだ。王が一見無防備ともいえる状況下にあることで、魔術の守りが絶対である事を諸国に示しているのである。リーガル・バックラー卿が健在でない今は、本当に王が無防備も同然なのである。

使者たちがターバンを取った。熱砂の国の住人に共通の、燃えるような赤毛である。使者たちは１５歩の距離をおいて膝をついて頭を垂れる。しかし、それでもマルガンテドリカが相手となれば油断は出来ない。例え五体が地に接した状態からでも一瞬のうちに戦闘態勢を整えることができるからだ。

「気を沈めよベクター。使者に対して礼を失するぞ」

シェンナが小声でつぶやき、ベクターは我に返った。横目で見ると、シェンナは薄笑いさえも浮かべて使者を見下ろしている。戦場や決闘場で何度も見た事のある表情。他人であれ、自分自身に対してさえ、死が近づいた時に見せる不吉な笑みだ。

「頭を上げるが良い」

シェンナが命じると、使者たちは顔を上げた。よく日焼けした褐色の肌、彫りの深い顔、砂漠の民に特有の容貌である。

王は面白そうに使者を眺めている。大陸全般で戦いに身をおくものの基準を大きく離れているからだ。なぜならば、熱砂の大地では

鎧兜に身を包む必要もなく、砂地では騎馬も有効とはいえない。軽装対軽装が砂漠の戦いであり、不安定な砂地で平衡感覚を保つことが重要となる。余計な筋肉は動きを損ない、体力を無駄に消耗するだけなのだ。

「メティス王にわが国の王より親書がございます」

ゲイルはマルガンの下に赴き、書面を受け取ると元の位置に戻った。親書にナイフを入れて、中身に軽く目を通す。内容そのものに興味を持たないのは、すでに知っている出来事だったからだろう。

「使者殿には遠方からの訪問、ご苦労であった」

「恐れ入ります」

ゲイルは朗々とした声でねぎらい、マルガンも返礼を返す。儀礼にのっとった挨拶の口上が繰り返される。シェンナは薄笑いを浮かべたまま、使者を見下ろしていた。いつでも襲い掛かって来いと誘っているように見えて、ベクターは気が気ではなかった。

「それでは、今後とも良い――」

「今年も、ガラドテドリカ王子は来訪するのか？」

シェンナは突然問いかけて、ゲイルとマルガンの形式的なやり取りを中断させた。

「はい、よろしくお願い致します」

虚を突かれた様子もなく、マルガンテドリカは答える。シェンナは更に笑みを深くした。

「ご子息は中々の勇士であると聞いている」

「まだまだ未熟者にございます。メティスで多くを学んでくれればと思っております」

「このベクターと戦えばどちらが勝つかな？」

取り様によっては挑発に聞こえる言葉に、ベクターは全身を緊張させた。

「敵いますまい」

マルガンテドリカはあっさりと認めた。これには両脇に控える2人がギョッとする。一方、使者が礼節を崩さないのを見てシェンナ

はため息をついた。
「詮のない事を聞いたな、許せ」
シェンナは謝罪の言葉を言うと、興味を失ったように口を閉ざしてしまった。
「それでは、今後とも良い関係を続けたいと、お伝えくだされ」
「承知しました」
ゲイルが中断した言葉をそのまま続け、マルガンテドリカもまた儀礼にしたがって返答する。その後、いくつかの言葉を交わした後、フェジュラの使者たちは静々と頭を下げて去っていった。
「さすが、お前の師だな。あの程度では微動だにせん」
シェンナは楽しそうにベクターを見ている。一方、ベクターはうっすらと全身に汗をかいている事に気づいた。
「さて、次の謁見は何処の国だ？」
「少しお待ちくだされ」
シェンナの問いに、ゲイルは答えた。そして、歩み寄ってくる衛兵はゲイルに耳打ちをする。衛兵の報告を聞くと、ゲイルはまず驚きの表情を浮かべ、次にニンマリと笑みを浮かべる。大臣の態度から凶報であろうと簡単に想像する事ができた。
「シージ・ペリラスが身柄を拘束されたようですぞ。ルパート・マードックが窃盗の容疑で訴えたそうですな」
シェンナは肘を突いてゲイルがいそいそと戻ってくる間、何かを考えこんでいた。
「ベクター、グラムファーレの長老はどうなっている？」
「はい。ヒーラー達の治療により、意識を取り戻しています」
「なるほどな。決闘者としての地位を得る前に、つぶそうという魂胆か。下らん事をするものだ」
シェンナはクックックと小さく笑っている。
「陛下――」
諭そうとしたベクターをシェンナは手を上げて制した。
「勝手に決め付けるな、と言いたいのだな。なるほど、よく調べな

くてはならん。さて、ゲイル。状況を詳しく報告せよ」
「状況はいささか込み入っておりますぞ。ややもすれば、剣の法廷による裁定が必要になるかもしれませんなぁ」
ゲイルは物言いたげにベクターに一瞥をくれて報告を開始したのである。

1部ー22　風ジィさん

＊

「ねえ、本当に大丈夫なの？」
「ええ。ロイドは生涯を水先案内人として過ごしてきました。王都の水路に関しては彼の右に出るものはいません」
リーザの問いにシンシアは明快に答えたが、顔は緊張し船の外を凝視している。なぜなら、船べりギリギリに2階の窓枠が当たりそうになっていたからだ。
メティスの王都は水の都。主要な部分には必ず水路が通されており、船での行き来が可能になっている。だが、それはあくまで小さなゴンドラ程度の船であり、リーザたちが乗っているような帆船を前提にしたものではない。
リーザとシンシアは抱き合うように寄り添いながら船の両側にそびえるレンガの壁を見つめていた。ゆらゆらと揺れながら右折するために、窓枠との間が指の長さほどしかの隙間しかなくなる事もある、しかし、何とか潜り抜ける事ができた。
「フェルナンディの一族より与えられた船、傷一つつけませんぞ」
ロイドは明るい声で断言する。そこから先は水路が広くなったので、リーザとシンシアはホッとして肩の力を抜いた。
「しかし、進むだけでは意味がないのですよ」
「ご安心ください。絶好の場所がありますぞ！」
ロイドは、すっかり浮かれた様子で請け負った。
方向しか探知できないために、対象から近いほど正確さが増す。湖の真ん中よりも沿岸。更に学園地区の中枢に近ければ近いほど可能性が高まる。しかし、そのためには船を旋回させないといけない。それなのに、ロイドはどんどんと狭い水路を、学園地区の中枢に向かって進んでいるのだ。

角を曲がると太陽の光が入ってきた。すると、左右の窓枠にも花を生けた植木鉢が見られるようになった。中には、蕾をつけたツタを欄干にまとわりつかせている家もある。窓からのぞくカーテンのレース模様に見とれていると、前方に洗濯物が待ち構えていた。壁と壁の間に張り巡らせたロープにタオルやシャツがぶら下がっている。このままでは帆に引っ掛かってしまうだろう。

「ロイドさん、前！」

リーザが悲鳴を上げると、ロイドは前方を見た後にニコニコと微笑んだ。

「あー、いやいや。心配はありませんぞ」

ロイドが杖を指し示すのを目で追いかけると、ロープの両端に女性が現れた。片方の女性が紐を引っ張ると、スルスルと洗濯物が窓の中に消えてゆく。最後には結んでいたロープも解けて、船が通れるようになった。

女性の足元から6歳くらいの女の子が3人、ベランダに飛び出してきた。「せーの」と声を合わせる。

「風ジーさん。明日の天気はなんですかー」

「しばらくは晴れますぞ。風も穏やかでしょうな。しかし、3日後は雨やも知れませぬ」

「ありがとおー」

ロイドが手を振ると、子ども達は欄干の上に飛び乗った。そして、手だけではなく全身を振って見送ってくれた。そんな様子をシンシアはうれしそうに見ている。

「悪い人ではないのですよ」

「え？」

唐突に言われて、リーザは目をパチクリさせた。

「強風の日にはみんなに知らせて回ったり、引っかかった洗濯物を取ってあげたり。それに、天気を当てさせたら百発百中。だから、『風ジイさん』ってみんなに呼ばれて親しまれているんです」

「……ええっと、変わった2つ名ね」

今度はシンシアが目を丸くして、苦笑しながら首を左右に振った。
「正式な名称ではありません。本当の名は『風切の刃、カレント・テクニクス（流れの匠）のロイド・カーティス』です。みんなが親しんで『風ジイさん』って呼ぶものだから、そっちで呼ばせているそうですわ」
ここでシンシアは少し真面目な表情になった。
「悪い人ではないのですよ。フェルナンディの一族に、５０年間も忠節を尽くしてくれています。ただ、ちょっと偏見が強いだけで」
シンシアはすまなそうにリーザを見上げる。赤毛の事で嫌な表情をしたロイドに代わって謝罪してくれているのだ。
「全然怒ってないわ。それにしても、本当に子ども達に好かれているのね」
「手作りの風車を配って歩いたことがあるそうですわ。ジェイナス校長もわざわざ作り方を習いに行ったことがあるとか」
ロイドは後ろを向いて、手を振る子ども達を最後まで見送っていた。わき見をしての操船に少しゾッとしたが、それでも船は真っ直ぐと進んでいる。
『風ジイさん』と呼ばれる老人は楽しそうに微笑んでいる。もしも、自分が『服オバサン』とか呼ばれたら、笑っていられないだろうなぁとリーザは思った。
ここに来るまでに狭い水路を抜け、橋を迂回し、集まった船を退けてたどり着いた。「Φ」の紋章を持つ船が通りかかると、ゴンドラは自ら場所を開けてくれた。先導して船が通りやすいようにしてくれたものもいた。きっとロイドたちのような人々が、街の人の事を考えて日夜努力しているからに違いない。
本当にフェルナンディの一族は町の人々に好かれているようだ。
サフィリアが目覚めた時に、この事を教えてあげよう。きっと喜ぶに違いない。
「シンシア様、まもなく到着いたします」
ロイドが杖を掲げると狭い水路の中に風が起こり、船の速度を上

げた。そして、たどり着いた場所は四方に通路のある円筒形の空き地だった。周囲を４階建て程度の壁に囲まれていて、窓一つもない異様な空間だ。それでも、船が旋回するだけの広さは十分にある。

「それでは始めますぞ」

ロイドに言われて、リーザは慌てて魔方陣の上に立つ。しかし、シンシアはそこで悔しそうに歯を食いしばった。

「待って下さい。魔方陣は船の中央よりもずっと舳先に近く書かれているわ。このまま旋回させれば、魔方陣がずれてしまいます」

シンシアが慌てる理由がリーザには分からなかった。不思議そうな表情が伝わったのか、シンシアが続ける。

「この状態では近距離であるほど、中心点のブレは致命的になります」

熱弁されても、リーザには何がなんだか分からない。シンシアはポケットから羽ペンと棒と紙を取り出した。

「リー姉様はコンパス（円規）をご存知ですね。起こる事は同じです」

棒の先端近くにペンを立ててそのまま回転させる。すると、小さな円が描かれてしまった。

「このように、中心点からずれた状態で軸を回転させると自らが円を描いてしまうのです。角度のズレは尋常ではありません。距離の近さが却ってあだになってしまいますわ」

説明されてもリーザには分かったような、分からないようなもやもやした気持ちになった。綺麗な模様は好きだけど、難しい図形は頭が痛くなる。

助けを求めるように宙に視線を泳がせると、余裕の微笑を浮かべるロイドと目が合った。

「承知しております。だからこそ、この『風溜り』に来ていただいたのです。その魔方陣を中心に、船を旋回させて見せましょう」

「できるのですか？」

「カレント・テクニクスの称号は伊達ではありませぬ。今こそ、フ

ェルナンディに恩義を今こそ返すことが出来ますぞ。思い起こせば苦節５０年――」
「ロイド！」
芝居がかった仕草で言い放つ老人をシンシアはとどめた。
「こ、これは申し訳ありませぬ。お嬢様に対し――」
「とにかく急いでください」
半分泣き叫ぶような勢いで、シンシアは怒鳴りつけた。
「は、ははあー」
ロイドは恐れ入りましたといわんばかりに頭を下げてしまった。
だが、シンシアの切りつけるような視線から逃れるために及び腰になっている。
「そんなに睨んじゃダメよ」
リーザが注意すると少女は振り向いた。キッと細められた目は切りつけるようでありながら、突き刺さるような視線を放つ。わずかに右目が赤みがかっていて、圧倒するような迫力まであった。とても、１２才の少女の目つきとは思えない。
「せっかくかわいい顔が台無しよー。ほ、ほーらプップクプー」
怯みながらもリーザはシーグの真似をして変な顔をした。頬っぺたを両手で押しつぶして、唇をめくり上げて歯をむき出しにしてみる。しかし、シンシアの表情は変わらない。そこでようやく、アイフェと自分は大笑いしていたが、シンシアとサフィリアが呆れていたのを思い出した。
「ぷ、プゥ……？」
案の定、シンシアは身動き一つせずに凝視している。なぜか、リーザには肉食獣に狙われる動物の気持ちが分かったような気がした。
「せっかくの美人が台無しですわよ」
ポツリとシンシアがつぶやく。
「やだぁー。そんな美人だなんて――」
と、頭をかいて照れてから、誉められたわけじゃなくて嫌味だと気づいた。リーザは頭をぽりぽりとかいたまま、気まずい視線をシ

ンシアに送る。
　呆れたシンシアは、疲れたように肩を落としている。その後、目を閉じて首を左右に振ると表情をやわらげた。なんだかリーザは、先生の叱られる出来の悪い生徒になってしまったように思えた。
「ロイド！」
「ははぁーー」
　シンシアの声にロイドはますます頭を下げた。
「お願いしますよ」
　平静を装ったいい方ではあったが、シンシアがイライラしているのは確かだった。怒りを抑えているときは、礼節を鎧のようにまとうのはサフィリアと同じだ。シンシアと違って氷の刃が飛び散るような激しさではなく、氷室からもれ出る冷気のような気配を放っていた。２人共、人の上に立つ威厳と、人を従わせる迫力を秘めているのは確かだ。
　やっぱり産まれながらのお姫様なんだなぁー、とリーザは感心していた。
　ロイドが杖を宙で円を描くように回し始める。すると、奇妙な風が吹き始めた。右頬に当たる風は右から来るが、手を飛ばした所では左側からやってくる。
　すると、シンシアは神妙な表情で考え始めた。風の流れを目で追っていくうちに理解の色が浮かび始め、それがやがて賞賛へと代わっていった。
「なるほど、それでこの構造ですのね。さすがはカレント・テクニクス」
　つぶやいた時には、怒りの感情など吹き飛んでいた。服の袖口から大きな地図と様々な形の定規を取り出した。珍しい道具に、おもわずリーザは注目する。
「なんだか、航海士みたいね」
「そうすると、この場所全体が羅針盤ですね。４方位にある通路は正確に東西南北を示しています。そして、針の役割を果たすのがリ

ー姉様ですわ。この探知の要ですよ」
「あ、うん」
リーザは魔方陣を線を踏まないように足場を念入りに確認した。
「方位を２０分割した探知が限界……時間を均等において回転するのが理想ですわね」
シンシアは、現在地にあたる場所に点をうって、地図に定規を何度も当てている。
「ロイド。速度を均等に保ち、１００数える間に一周させる。これは可能ですか？」
「おお！　仰せの通りにいたしますぞ」
ロイドは張り切った様子で請け負った。そして、こちらはローブの袖から砂時計を取り出して目の前に置いた。
「リー姉様、反応があった時と、消えたときを正確に伝えてください。」
ロイドは両手で杖を持ちなおし、今度は慎重に回し始めた。不自然な風がどんどんと強くなる。吹き溜まりの中に積み重なっていた鳥の羽が、風にあおられて舞い上がる。円筒状に囲まれた壁に沿ってクルクルと回りながら上空に舞い上がっていった。風の音がビュウビュウとなり始めた頃、船はゆっくりと旋回を始めた。緊張しているためか、ギィギィと軋むマストの音までがリーザには聞こえてきた。
「リー姉様、開始です！」
シンシアの声と共に、リーザは腕を一方向に向けた。立てた人差し指と中指で槍をイメージして強く集中する。最初はその方向には何も感じ取ることが出来なかった。時間と共に船はリーザの立つ魔方陣を中心に回転してゆく。船首が少ししか動かず、船尾は大回りにに旋回していった。
そして、５０を数えたとき、リーザは指先に焼け付くような熱さを感じた。丁度、湖の北側の方向をさしているときだった。
「来たわ」

声をかけると、シンシアは甲板に身を伏せて忙しく定規を動かして地図に書き込んでゆく。ゆっくりと5つ数えた時、ふっと指先から熱さが消えた。

「終わりよ」

リーザに言われて、シンシアは地図に長い直線を2つ書き込んだ。

「学園地区の北西、クルア・ハン区画ですわ。ロイドもう十分です。お疲れ様でした」

シンシアがねぎらいの言葉をかけると、老人は大きく息を吐いて肩を落とした。ほんの少しの時間しかたっていないのに、ひどく消耗しているようだ。

「比較的湖岸に近い場所ですね。円形の湾になっている区画で、陸地そのものが少ない。相当な絞込みが可能ですわ。お手柄ですよ、ロイド。あなたがこの場所を案内してくれたからこそです。湖上で探知を行うことに比べれば、１０倍以上は効率的でした。学園地区に深く入り込んだからこそ、この結果が出せたのです」

「それは幸いでしたな。ライス護民官長に連絡を入れておきましょうか？」

「ええ、お願いするわ。今調べた区画から、研究施設を洗い出すように伝えてください」

シンシアは指示を出しながらも、地図を確認して、周りに散らばった道具を片付ける。シンシアは3つの事を同時に手際よくこなしている。最後にクルア・ハン地区だけが見えるように地図を小さく折りたたんだ。

「連絡いたしましたぞ。調べるのに少し時間がかかるとか。ライス護民長官から、いずれ返答があるでしょう」

「では、私たちは移動を開始します」

「それがよいでしょうな。では、これをお持ちください」

ロイドは自分の耳からアクアマリンの宝石がついたイヤリングをはずしてシンシアに向かって放り投げた。宙を飛ぶイヤリングは、風に乗ってふわりとシンシアの手の中に納まる。

「……リー姉様、念話の魔術は使えますか？」
「無理よ。私、サモニング（召還）の系統はまるでダメだもん」
シンシアは唇をかみ締めていたが、しぶしぶといった様子でイヤリングを耳につけた。
「ここからクルア・ハンへは徒歩の方が早く行けますぞ。西の出口から出て、水路沿いに湖に向かいなされ」
「分かりました」
ロイドは杖を振って風を操ると、壁際の通路ギリギリに船を寄せた。錨を下ろしたわけでもないのに、船がピタリと動きを止める。すると、船乗りが出てきて渡板をわたしてくれた。
クルア・ハン区画は学園地区の中で最も入り組んだ場所だ。魔術師でないものが侵入すれば、それだけで不審な表情を向けられてしまう。
しかも、学園地区で起きる怪事件の大半がクルア・ハン地区で発生する。夜霧にまぎれて様々な怪物が徘徊する場所だと噂され、異界に最も近い場所と恐れられている。こういうときでなければ近づきたくない区画だ。
「行きますよ、リー姉様」
「あ、うん」
駆け足になって船を出てゆくシンシア。リーザは考え事を中断し、遅れまいと後について走った。

1部ー22　風ジイさん（後書き）

なんだか、難しい話になってしまいました。
地図もないのにやったので、読者の皆さんには特に混乱があったかもしれません。

測量の技術に、角度から現在位置や目的地を導き出す方法があります。
シンシアがやっていたのはそれと同じです。複数の線の交点から、座標を求めようとしたわけです。

時代劇で忍者がタコに乗って空を飛びますが、あれも測量のために乗っていたとか言う話を聞いた事があります。

タコを目的地から見て、３０度の高さまで上げて、直角三角形の『１（高さ）：２：ルート３』の式で距離を導き出す。そして、目的地の真下までトンネルを掘る時の距離を算出したようです。

『魔術講義２』でこんな台詞がありました。「魔術師はね、魔術以外の能力を身につけてはじめて一人前といえるのよ。天文学、言語学、薬学、本草学、錬金術、数学、文学、政治学。ちょっと亜流だけど、剣術とか戦術もそうかな。他にも色々あるけれどね」

数学と測量と魔術の融合をシンシアがやったわけです。もっとも、ナレーター役のリーザがあの有様、作者もなんとなくしかわかっていないので、数字と図形と専門用語はすべてハショリました。
登場人物は、作者に似るんですね（笑）

＊

ハーブの甘い香りを吸い込んで、シーグは真剣に悩んでいた。何の葉っぱを使っているか、まるで分からないからだ。

今度は口の含んでよく味わってみるが、やっぱり不明だ。そもそもハーブティーなどこの数日以外で飲んだ事はない。

目の前にいるレティシアは目が不自由だとはまるで思えない手つきで優雅にカップを口元に運んでいる。

たぶん、この後に種類とか感想とかを聞かれるに違いない。そこで下手を言えば、呆れさせてしまう。シーグは警戒心と共に、ハーブティーを口に運んだ。どうせ細かい事など分からないのだから、とにかく誉める言葉を捜そう。さわやかな香り、舌触りが良く、飲みやすい。

「いい香りですね」

「はい。それに、舌触りが良くて飲みやすいですね」

そう答えながら、シーグは心の中で舌打ちをした。一度に思いついた事を使い果たしてどうする。元々、冷静さを保ち技を小出しにして、相手の隙を探るのが自分のやり方だというのに。

熱すぎず冷たすぎない温度。色は……微妙な色合いなので何か失言してしまう気がした。そうだ、カップのデザインを誉めるのは悪くない。金色の格子模様が帯のように絡まっている。シーグはカップに洞察力を総動員した。そして、浮き足立ってはいけないと自分に言い聞かせる。

「お口に合いませんでした?」

「いいえ、そんな事は」

シーグは特に気をつけて、ゆっくりと口を開いた。

「とても、飲みやすいです。苦いものは苦手ですから」

お子様みたいだと笑われるのを覚悟で正直に言った。侮られる方が恐れられるよりも、物事を円滑に運べるはずだからだ。

「そう、よかった」

しかし、レティシアはうれしそうに微笑んでカップを置いただけだ。

「彼はお茶をいれるのがとても上手なのです。それだけではなくて、料理全般が得意なのですよ」

あの『でかいの』が厨房に立っている様子を想像する。更にリーザのようなウサギのエプロンなどを着けていて……。シーグは思わず吹き出しそうになってしまった。

「大柄な男性が料理をするのは変な事ですか？」

レティシアは、優しげな目元を少しだけ吊り上げて、シーグを咎めた。

「いえ、そんな事は。ただ、少し変な事を考えてしまって」

「まあ、どんな事かしら？」

興味深そうに首をかしげるレティシア。そんな仕草をすると急に幼く見えるようになる。リーザのように、表情や態度がコロコロ変わるわけではないが、表情や仕草一つで印象がまるで違ってしまう。

「ああ、つまり――」

名前を言おうとしてシーグは名前を覚えていないことに気づいた。

『でかいの』というわけにはゆかない。

「――彼がリーザみたいな格好をしている所を想像してしまって」

「まあ！」

今度はレティシアが吹き出すのを堪える番だった。少しの間、口を押さえて肩を震わせている。

「厨房から出てきた時に、鍛冶屋と間違えられた事があったそうよ」

レティシアは口元に手を当てて、シーグにこっそりとささやいた。なるほど、確かに鍛冶屋も分厚いエプロンを着けている。シーグは『でかいの』が鍛冶屋の格好でハンマーを振りかざすところを想像してみた。

「槍と鎖鎧よりもずっと似合っているように思えます」
シーグは思わず笑い声になるのを止められなかった。レティシアも黙ったままうなずいている。口を開けば笑い声が漏れてしまうからだ。
結構笑い上戸なんだな、とシーグは思った。ひとしきり笑いをこらえた後に、レティシアは姿勢を正した。
「あー、おかしかった。でも、ようやく普通に話してくれましたね。なんだか、決闘に挑む時のようでしたよ」
レティシアは柔らかな微笑を浮かべて、少し考え込んでいる。
「ひょっとして、リーザやサフィリアから色々と言われているのかしら？」
「王族としては礼節がなっていなくて、紳士には程遠い。実際に俺は朴念仁ですから」
「あら、私はそうは思わないわ。だって、サフィリアの言う王子様や、リーザの言うような紳士は物語の中にしかいないと思うし……」
レティシアは、一旦言葉を切ってカップに口をつけた。
「色々と注意してくれるのは、きっと見込みがあると思っているからよ」
「俺がですか？」
シーグは思わず素っ頓狂な声で答えた。
「私の前でずっと緊張していたのは2人。いえ、シンシアを入れて3人ね。彼女たちに言われた事を意識していたからでしょ？」
「……」
シーグは返事をしなかったが、レティシアにはお見通しのようだ。
「助言を真摯に受け止めて、守ろうと努力してもらえる。それはとてもうれしい事だと思うわ。特に自分がお節介だって自覚している時、余計なお世話と思われているんじゃないかって。私はよく不安になります」
「3人ともそう考えているのでしょうか？」
「さあね。知りたければ、自分で聞いてみればいいわ」

そんな突っ込んだ事を、どんな聞き方をすればいいのだろうか。にらまれるか、デリカシーが無いと呆れられる様子ばかり思い浮かぶ。本気で怒っていないのなら、いっそ難しく考えずに言われるに任せるのもいいかも知れない。

悩んでいると、こつこつと廊下を歩いてくる足音が聞こえた。シーグとほぼ同時にレティシアも扉の方を向いた。

規則正しいノックの音を聞いただけで、レティシアはうれしそうに微笑んだ。扉を開けて入ってきたのは糸目だった。シーグは思わず立ち上がって身構える。表情は読めないが部屋に入るのを渋っているのは確かなようだ。

「ライス、そんな所にいたら話が出来ないわ」

レティシアは婚約者のために椅子を引いた。糸目は表情を隠すように軽く頭を下げるとレティシアの隣に腰掛けた。両手を強く組んで、じっと何かを考えて込んでいる。だが、すぐに顔を上げてシーグをまっすぐ見つめた。最も糸目なので、瞳が見えたわけではないが。

「協力をお願いしたい」

「あんたに？　なんで俺が――」

唐突な申し出だったので、シーグは言葉が辛らつになった。余計な事を続けそうになったが、レティシアの手前なので黙り込む。

「シンシアとリーザがスカーフの行方をつかんだ」

「それで2人は？」

シーグは一瞬で気持ちを切り替えて問い返した。

「奪われたスカーフの方向に。おそらく隠れ家に向かっているはずだ」

「俺もそこに向かえばいいんだな」

迷いのないシーグの即答に対して、糸目が驚きの表情を浮かべた。

「俺はどうすればいい。指示をくれ」

糸目は地図を取り出して、テーブルの上に広げた。王都は南北に短く、東西に長い。湖を中心に大通りが外に向かって広がっていた。

その間を小さな裏道が細かく走っている。ライスは湖の北東に位置する雑多な一角を指差した。
「場所はクルア・ハン区画」
それを聞いてレティシアが顔色を変える。
「巨大な爆発が起こったり、行方不明者が出ても『事故』の一言で済ませられるような場所です」
シーグが問いかける視線を向けただけで、レティシアは説明をしてくれた。
「つまり、何が起きても『事件』とは見なされない無法地帯なのだよ」
ライスは重々しい口調で補足した。
「なるほど。で、本拠地は正確には何処なんだ」
「今、絞込みをかけているところだ。情報が入りしだい、シンシアに連絡する。あの子が念話用のイヤリングを持っているからな」
「分かった。すぐに向かう。待ち合わせの場所は何処だ？」
「一旦、フェイル・リレイに出てから学園地区に向かってくれ。先日、君がガリウスに決闘を挑まれた広場を経由して、更に奥へ。湖岸に沿って北に行ってもらえればいい」
糸目は湖に向かってずっと西へ、次に通りに沿って大きく北東へ迂回、最後に北西へ向かう道を示した。
「ここに5階建ての細い塔がある。この宿屋の窓からも見える、あの白亜の塔だ」
ライスが窓の外を指差した。学園地区の北端に聳え立つ塔が見える。先日、リーザの家から見えた塔だ。あの白い尖塔が角のように思えて、王都がユニコーンの形をしていると思ったのだった。
「それじゃあ、時間が掛かりすぎる。俺は最短の距離で行く」
シーグはアクアランスからクルア・ハンまでを直線に指でなぞった。
「速い事には違いないが、通りが入り組んでいる。地元の人間でもない限りは――」

「密林の中でも方向は見失わない。そういう訓練を受けている」
シーグが明快に答えると、糸目は大きくうなずいた。
「ところで、容疑者の俺がここを出ていいのか」
「……レティシア。君がシーグの保証人となってくれれば問題はない」
「分かりました。私がシーグの身柄を保証します」
即座に答えたレティシアを見てライスは肩を落とした。
「……すまない」
消え入るような声を上げたライスの手をレティシアは両手で包み込む。
「あなたには護民官長としての立場がありますから。如何なる時でも立場を忘れない。それと同時に、親しい人を守ろうと全力を尽くす。そんな行動を誇りに思いますよ」
「レティー……」
「私がいつでもあなたの事を信じて、大切に思っていることを忘れないで。私にできる事なら喜んでお手伝いいたしますわ」
見詰め合い、身を寄せ合う婚約者同士。シーグは相当居心地が悪かった。いっそこのまま出て行ってしまおうか、とさえ思う。
我に返った糸目は慌てて姿勢を正す。始終鉄面皮だった男が始めて見せる人間らしい仕草だった。ベクターのように始終偉そうと言う訳ではないらしい。
一方、レティシアは平然とした様子でつないだ手を離さない。むしろ、離れようとするライスを繋ぎ止めているようにも見える。
「何か気をつけることはあるのか？」
「魔術師でない人間が、学園地区にいると目の敵にされる。この腕章を持って行ってくれ。護民官の身分証だ。これを見せ、私の隊である事を伝えれば安全が増す」
つまり、護民官であってさえ安全とは言えない様な場所なのだ。
「ええと、あんたの名前は――」
糸目でも垂れ目でも、鉄面皮でもなくて……何だったっけ？　シ

ーグには全く思い出せなかった。
「護民官長、ライス・フェルナンディだ」
シーグは念のために三度、頭の中でライスの名前を繰り返して席を立つ。頭の中で地図を描き、曲がる通りの数を思い返す。すると、ふと思いつくことがあった。
「護民官長ライス・フェルナンディ。俺からあんたに頼みがある」
「なんだ？」
「俺は今から2人を援護しに行く。だからあんたは――」
真剣な表情で見つめると、ライスも神妙な面持ちで待ち構えている。
「一刻も早く、シンシアと仲直りをする方法を考えてくれ」
「……」
「兄妹げんかをするには、王都全部をあわせても狭すぎるんじゃないのか？」
先日、シンシアに言われた事を思い出しながらシーグは言った。ライスは口元をへの字にして、困った表情をしている。目元に変化はないものの、意外と表情が豊かだ。
「私もそう思うわ。シンシアとは一度ゆっくり話し合う必要があると思うの」
「……分かった」
婚約者の助言に、ライスは困った表情のままでうなずいた。
「それじゃあ、俺は行くぞ」
「あと、一つ。私たちが行方をつかんでいる事を相手にはまだ知らないはずだ。ルパートやバイロンが連絡した様子もない」
つまり、こちらが先に相手を見つければ奇襲が出来るということだ。
「迅速さが勝負ってわけだな」
「君が到着する頃に、必要な情報をシンシアに送る。君がクルア・ハンにつく頃には数箇所に絞り込めているだろう」
「分かった」

シーグは大またで部屋を横切ると、扉を開けた。出る前に仲睦まじく寄り添う婚約者たちを振り返った。とにかく、この2人の関係を自分が壊してしまったわけではない。そんな安心感と共に、シーグは宿屋を飛び出した。

1部ー24　黒き災厄

＊

24番目の使者が去っていった。シェンナ王は上の空で対応し、使者に対して最低限の言葉しか口にしていない。ゲイルの報告が終わってから、シージペリラスのことに気を取られてしまっている様子だ。

衛兵が再び、ゲイルの元に歩いてくる。また、シーグに関する新しい情報が入ったのだろう。しかし、ベクターは興味を振り払って無表情を通した。今の自分では何もする事ができないからだ。

「うーむ、新しい動きがありましたぞ。早速報告いたしましょうか？」

「さて、どうしたものかな。ベクター」

シェンナ王はニヤニヤと笑いながら、ベクターを見ている。

「今は使者との謁見を済ますべきでしょう」

「ほう、シージ・ペリラスのことはどうでも良いのか。『法の剣』の2つ名が泣くぞ」

「気にはなりますが、今の私には何も出来ません」

「なぜだ？」

冗談ではなく不思議そうに問うシェンナ。ベクターは唖然とした。王が法の働きを全く理解していないのだ。

「護衛の任につくものは、主人や自身への侮辱に対する以外に決闘をする事は出来ませんぞ。護衛が主義主張を振りかざせば、主人を巻き込むことになります」

ゲイルの説明を聞きながら、シェンナはアゴをなでている。。

「そして、主人である王が発言すれば、味方したほうが正しくなる。なるほど、王が出しゃばっては迷惑だな」

「恐れながら。陛下は法と正義の象徴でございますからな」

ゲイルは全く恐れた様子もなく、聞き用によっては嫌味とも取れる言葉を吐いた。
「実行者でなくとも良いのか？」
「ベクター卿やフェルナンディの一族をはじめとして、メティスには忠臣がおります。陛下は王道を進まれ、彼らの行いに報いれば良いかと」
「臣は王に仕え、王は王道に従う……か」
シェンナは鼻で笑うように言い放った。
『私個人ではなく王をだ。王にふさわしくない者……ではないぞ』と。そう言っていた時と同じ声色だ。あの時も、皮肉な口調で、苦笑いを浮かべていた。
ベクターはシェンナ王を見ていて時々不安になる。まるで、自身の破滅を望んでいるかのように振舞う時があるからだ。
「とにかく、今はシージ・ペリラスのために、ベクター卿が剣の法廷には立つ事はできませんな」
「ならば勝ち目のない、しかも利のない戦いを挑む者は、メティスにはおらん。つまり、確実にシージ・ペリラスに勝てる手を打ってきたと言うわけか。法の名においてシージ・ペリラスに冤罪を着せる。『理の法廷』の権利を駆使して拘束し、ベクターを私の護衛とする事で『剣の法廷』から歯向かう決闘者を遠ざける」
シェンナはアゴを撫でる手を止めて目を細めた。
「つまり黒幕は、法に詳しく、七家の人事権を握り、七家の直系を動かすことの出来る人物というわけだな」
その条件に当てはまるのは、メティスには七人しかいない。その中からベクターは怪しく微笑む銀髪の少女が真っ先に思い浮かんだ。
「ならば、ルパート・マードックとバイロン・ランカートを尋問いたしますかな。王命によって行えば、真実が明らかになるでしょう」
「無駄だな。もし、真実が明らかになったところで七家同士が互いに責任を問い合い、庇いあって物事があいまいになる。七家の魔術師達は賢明だ。王命をかき消す方法を良く心得ている」

ゲイルの問いにシェンナ王は皮肉な笑みを浮かべている。
「どのみち『剣の法廷』に持ち越しというわけですな。すると、シージ・ペリラスが決闘者となるのは困難――」
衛兵が近寄ってきたので、ゲイルは言葉を止めた。手渡された巻物の帯を解き、中身にざっと目を通す。
「進展がありましたぞ。フェルナンディが盗難品の行方をつかみ、捜索隊を派遣。その中には、かのシージ・ペリラスも混じっているとか」
「フェルナンディには、容疑者探しに容疑者を使う風習でもあるのか？」
シェンナ王は呆れた様子で、ひじ掛けにもたれかかった。
「レティシア・フェルナンディが彼の身柄を保証したそうですぞ。協力者は、シンシア・フェルナンディにリーザ・オーメント」
「『水盤の見者』を欠くが、銀の魔女を倒した面々だな。そして、次は『水晶の見者』か。宮廷を騒がせる姫君のことごとくが奴に味方をしているようだな」
「その通りですぞ。巷ではシージ・ペリラスを稀代の女たらしと噂する者も多いですな。シンシア嬢が往来で、『色魔、淫猥、変態』と叫んだという情報もあります」
ゲイルの言葉にシェンナは小さく肩を震わせている。声もなく笑うのはシェンナの癖なのだ。
「ベクター、シージ・ペリラスは女性関係に問題があったのか？」
「……」
そういえば、シーグは自分でガイスの変態仲間を自称していた。それに、戦いの最後にサフィリアに張り倒されている。
女性の弱みに付け込むような少年には見えなかったが、そもそも外見で人柄を見分けられるはずがない。よくよく考えてみて、ベクターはシーグついて全く知らないことに気づいた。
レティシアは賢明な女性で、ライスという婚約者がいる身だ。軽率な事はするまい。

一方、シンシアは口の悪いところはあるが、意味もなく人を貶めるような事をする少女ではないのだ。
返答に困るベクターを見て、シェンナは更に笑みを深くしている。
「と、報告はここまでですな。急変があり次第報告いたしましょう」
「また、謁見か」
シェンナはおもちゃを取り上げられた子どものように嫌な顔をしている。
「これも朗報といえますかどうか。次の使者はオースピニルでございますぞ」
即座に体を起こしたシェンナを見て、ゲイルは笑みを深くする。
ベクターも思わず姿勢を正した。
オースピニル帝国は、メティスの北東に栄える強大な軍事国家だ。
歴代の皇帝は常に領土拡大をもくろんでいる。アッシュ皇帝がレイザークを滅亡させたのも、メティスへ侵略戦争を仕掛ける足場を築き上げるためだ。
レイザークの抵抗が大きく、最後の一兵までもが勇敢に戦った。
オースピニル帝国は侵略戦争の痛手をこうむり、また焦土と化したレイザークの国土に怪物が住み始めたこともあり、諸外国への侵略はここ4年間行われていない。
しかし、メティスの四方を囲む4国はサムハイン（死神の夜）に結託し、雪解けと同時に侵略をたくらんでいる。その時、最大の敵となるのはオースピニル帝国であろう。
オースピニルはメティスと同様、騎士隊が主戦力であり、国境地帯を突破されれば炎が燃え広がるように侵略を開始する。怯む事を知らず、一致団結して戦場を駆ける騎馬隊は魔術師にとって最も組し難い相手なのだ。
「使者の名は、ザイツェフ・ヴァルス・アルグラッド」
「ほう、帝国の『黒き災厄』。最強の黒騎士殿が自ら訪問するか」
ゲイルの言葉を、シェンナは玉座から身を乗り出して聞いている。
「王都攻略の下見といったところでしょうな」

「どう思う、ベクター？」
「王都の守りは、見た目の地形よりによる軍事的効果よりも、魔術的要素が深く関わります。魔術師が視察に加わらねば、無意味とは思いますが」
「でしたら、十分有意義ですぞ」
ゲイルはベクターの言葉を真っ向から否定した。
「学園地区から有望な魔術師に育ち、私が傘下に加えようとした者。そのうち、２０名以上がオースピニルに流れております。うち、１０名が探知に優れた者たちです。フェルナンディは一番広く門戸を開いておりましたからな」
ゲイルは禿げ上がった頭を撫でながら先を続ける。
「その１０名のうち、７名がインボルグの後に商隊の護衛や、旅行の名目で入国しております。他の三国に関しても、魔術師の起用を推し進めているようですぞ」
ゲイルの言う7名の大半は、おそらくライスの下で護民官として働いていた魔術師に違いない。有能でありながらも、七家との軋轢に耐えかねてメティスから去っていった。魔術のことごとくを七家が統べるメティスは、後ろ盾のない魔術師にとって居心地の良い場所ではない。新参であるにも関わらず、有能とくればなおの事だ。
歴史的な権威は内部の結束を強めはするが、外部からの介入を過剰なほどに排除する。つまり――。
「戦場において、かつての友と相対する事になるかもしれんな、ベクター」
今、まさに考えていた事を先に言われて、ベクターはシェンナを見た。王は虚空を睨みつけ、笑顔を浮かべている。
「少数の戦力による遊撃隊が魔術師にとって天敵なのだな？」
「私はそう考えています」
「元々、『銀の魔女』は王都防衛、『メティオ・スマッシャー』は侵略の尖兵として組織された遊撃隊だったな？」
「その通りです」

「だが、双方がシージ・ペリラスに敗北した。何故だと思う」
「様々な要因が重なった結果でしょう」
ベクターはあえて愚鈍な返答をした。言えば、七家への中傷に繋がるからだ。シェンナは表情を消して、じろりとベクターを睨む。
「もし、王の名において、お前に遊撃隊の組織を命じたらどうする」
シェンナの言葉に、ベクターは肌があわ立つのを感じた。
「今度は、ガイス・ジュサックなどに指揮権を握らせはしない。お前が思うように人員を集め、お前が指揮する遊撃隊を作る。名目は、リーガル・バックラー修復までの王の護衛任務。建前はどうあれ、すぐに戦となるだろうがな」
「陛下の命に従います」
ベクターは殊更に声を抑えて返事をした。心から望んでいた事が思いもよらずに舞い込んできたからだ。
「名案ですな。メティスや七家には従えぬと絶望した魔術師も、ベクター卿個人になら忠誠を誓うかもしれませんぞ」
ゲイルは、王と七家を罵倒するとも取れる危険な発言をした。しかし、シェンナは気にした様子もない。
「つまり、有益な人材の流出を防ぐことも出来るわけだ。ベクター、後に正式の公文書において王命を下す。いつでも、出動が可能なように人員を集めておけ。侵略してくる４国に属する魔術師へ、裏切りを打診する事も認める」
「……かしこまりました」
ベクターは気持ちの高揚を押さえながら、生真面目に返答した。頭の中では、人員と組織の編成が早速、形を作り始めている。
「では、オースピニルの『黒き災厄』を通せ」
シェンナの声と共に、玉座の間の大扉が重々しい音を立てて開いてゆく。
「オースピニル帝国、ザイツェフ・ヴァルス・アルグラッド殿。ご入来！」
謁見の順番は、メティスと関わり深さによって決められる。１０

番より後の国はメティスからは距離の離れた国であり、２０番を超えた辺りからかつて敵対していた国となる。中でもメティスでは不吉の数字といわれている２５番目にオースピニルを配置したこともゲイルの皮肉な采配に違いない。

真紅の絨毯を歩いてやってきたのは初老の老人だった。異名の通りに漆黒のジャーキン（胴着）に身を包んでいる。射るような黒い瞳。真っ白になった髪と髭、びっしりと刻まれた皺は石の彫刻を思わせる。中肉中背ではあるが、背後から風が吹き付けてくるような存在感があった。

噂に違わぬ歴戦の騎士だと、ベクターは判断した。彼の元から、魔術師を招き寄せる。自分にそれほどのカリスマがあるのだろうか。

「メティス王に拝謁たまわり、恐悦至極にございます」

絨毯に膝をついたザイツェフは、重厚なよく通る声で口上を述べた。

「オースピニルに名高き、黒騎士殿に会えた事をうれしく思うぞ」

シェンナの機嫌の良い声に、ザイツェフは益々頭を深く下げた。

「オースピニルとは今後とも親交を深めたいと思う。アッシュ皇帝に、よろしく伝えておいてほしい」

「かしこまりました」

戦争を仕掛けようとする事をおくびにも出さないザイツェフ。それに気づいていながらも白を切るシェンナ。ゲイルは大きな目をぎょろぎょろと動かしながら、両者を見比べている。ベクターもまた、護衛の任務を果たすために『黒き災厄』呼ばれる騎士を用心深く見下ろした。

1部ー25　重なる走査線

＊

シーグは路地を迂回するのが面倒になって、二階の屋根に昇った。壁伝いに山積になっていた樽を足場にして、三段跳びの要領で駆け上がったのだ。着地の時に右手を使ったが、痛みはほとんどない。早速レティシアの治療の効果が現れたのだろうか。

屋根に上ると、湖の北西にひときわ飛び出した白亜の塔が近くなってきた。シーグは方向と現在地を確かめ、地図を頭の中に呼び起こす。合流地点はまもなくだ。

面倒で入り組んだ道は、すべて屋根伝いに乗り越えてきた。狭い路地などは屋根と屋根の幅が狭いので、簡単に飛び越える事ができる。

「あれは、シ――」

誰かに呼び止められた気がして、振り返ったがそこには当然誰もいない。目の前に広がるのは、相当のデコボコがあるものの屋根の道。そして、森の木々のように空に向かって伸びる塔だけだ。曲がりくねった町並みは、都市というよりも密林に近いものがある。

声の主をわざわざ確かめる気も起こらなかったので、シーグは先を急ぐ。

しかし、こうも屋根が走りやすいと強盗の類が逃げやすくて仕方がないだろう。ルパートの逃亡を見る限り、魔術師が空を飛ぶのも容易ではないようだった。屋根伝いに逃げられた場合、どうやって捕まえるのだろうか？

そんな事を考えていると、自分の足音とは異なる物音を聞いてシーグは振り返る。すると、２０歩ほど離れてアイフェがついてきていた。相変わらず唐突に現れる少女である。

「あーあ……」

シーグが立ち止まると、アイフェは残念そうに追跡の足を緩めて、とことこと近づいてくる。
「さっき、俺を呼んだのか」
「そんな事してないよ。こっそり近づいて――」
アイフェは喉でも詰まらせたように、両手で口を押さえた。
「近づいて、なんだ」
「あ、挨拶するつもりだったんだよ」
アイフェは下手な言い訳をした。
「そうか、足で挨拶するつもりだったのか」
「違うよ、手だもん」
シーグのすっとぼけた声に、アイフェはムキになって答えた。
「へぇー、声じゃないんだ」
「うー……」
シーグがジト目で見つめると、アイフェは斜め下に目線を逸らした。後ろめたい気持ちがあるのは疑いない。いきなり行方不明なった事を責めたい気持ちはあるが、とにかく無事でよかった。
「今まで何処にいたんだ？」
「白髪のおっちゃんの様子をこそこそ見張っている奴がいたんだ。その人の後をついていったら、ここに来たんだよ」
昼間でさえ人通りの絶えた路地だった。そんな場所で白髪を見張っていた人物。怪しいどころではない。確実に今回の件に関係する人物だろう。
「そいつらは何処に行ったんだ」
「途中で見失っちゃった」
「振り切られたのか？」
「そんな下手くそじゃないもん。一緒に来たらいい事してあげるよって、臭いおじさん達が近寄ってきたの。それも1人じゃなくてどんどん集まって来るんだよ」
ここは一体どういう区画なんだろうか。シンシアやリーザの事も心配になってきた。

「怖いから逃げて来ちゃった。その後、匂いを追いかけようとしたの。だけど、この辺りは臭いから良く分からなくなったんだ。だけど、シーグの匂いは見つけたの。だから、屋根の上に昇って追いかけて来たんだよ」

シーグは思わず、自分の腕の匂いをかいだ。

「そんなに匂うか？」

「ううん、違うよ。シーグはね、お日様のいい匂いがするよ」

シーグは雲ひとつない空を見上げた。太陽に匂いがあるとは初耳だ。相当離れたところにあるに違いないのに、アイフェの嗅覚は一体どうなっているんだろうか？

「違うよ。お日様に干した草の匂いの事なの！」

アイフェはムキになって言う。だったら、最初からそう言ってくれたらいいのに、とシーグは思った。

「フレイおばちゃんとエリスのおばあちゃんは最悪だったんだよ。体中から甘ったるくて変な匂いがしたんだ」

アイフェは鼻を押さえて顔をしかめている。たぶん、香水の香りが苦手なのだろう。確か、２人ともまだ２０代半ばだったはずだ。年齢の話を聞いたら、またリーザが彫像のように固まるかもしれない。

「とにかく、シンシアとリー姉がこっちに向かっている。だから、アイフェは――」

帰っていろと言いかけて、シーグは黙りこんだ。恨めしそうな顔になって睨んできたからだ。更には今にも泣きだしそうな表情に変わってゆく。

この様子では帰れといってもこっそりついてくるだろう。危険な区画のようだし、いっそついてきた方が安心だ。

「分かった。一緒に来るんだ」

「やったー」

アイフェは飛び上がって喜んでいる。

「だけど、俺の言う事には絶対に従うんだぞ」

「その代わり、私がいい事を言ったら聞かないとダメなんだからね」
アイフェは人差し指を立てて力説する。
「……分かった」
「約束だよ。ねね、男の子と女の子が約束する時は、チューするんでしょ？」
「しない。こういう場合は握手とか指きりだ」
アイフェは信じられないといった様子で目を丸くした。
「約束するたびに指を切るの？　手足合わせても２０回しか出来ないよ」
「切らない！　お互いの小指を結んで約束するだけだ」
「よかったー」
うなずいたアイフェは安心して胸を押さえた。その後、唇を尖らせてつぶやく。
「だったら、最初からそう言ってくれないと分からないよ」
あげ足を取られてシーグは少しムッとした。
「その代わりに約束を破ったら、指を切られるくらいの覚悟が必要って事だ」
「ううーー」
アイフェは自分の小指を見つめて真剣に悩んでいる。
「じゃあ、帰るか？」
「する！」
アイフェは即答して、右手の小指を立てた。シーグも小指を差し出して、アイフェの小指と絡める。
「あたしはー、このしとをー、しょうがいのー、ほりょにしますー」
「そうじゃない！」
「だけど、『みんな』がそういっていたんだよ」
シーグは頭を抱えたくなった。なんだって『みんな』はなんでもかんでも、そっちに話を持って行きたがるのだろうか。その上に間違いだらけだ。
「ねえねえ、シーグ。『ほりょ』って何？」

「それを言うなら『伴侶』だ」
「じゃあ、『はんりょ』って何？」
「後で教えてやる。とにかく、さっさと済ませよう」
「なんて言って約束するの？」
桃色がどうとか言っていた気がするが、シーグにはよく思い出せなかった。
「とにかく、約束を守る。できるか」
「うん、分かったよ」
小指を離した後も、アイフェはじっと自分の小指を見つめている。
「ねえ。約束を破ったら、本当に指を切っちゃうの？」
「あのな、戦いになったら指一本じゃすまない事だって起きるんだぞ」
「ふーん」
アイフェは生返事をした。絶対に分かっていないに違いない。だけど、言葉で説明しても揚げ足を取ったり、矛盾を突いたりされるだけだろう。実際の場面で注意しないと意味がない。
「とにかく、リーザとシンシアに合流しようか」
「うん、こっちだよ」
アイフェはシーグの手を引っ張った。そして、白亜の塔とは見当違いの方向に連れて行こうとする。
「反対方向じゃないか」
「こっちだよ。シンシアとリーザの匂いがするんだ」
「本当なのか？」
疑う口調で問い返すと、アイフェは人差し指と小指を立ててシーグに見せ付ける。約束を守れということらしい。
「間違いないよ。２人共、お乳の匂いがするんだもん。サフィリアも一緒なんだよ」
「な！」
シーグは目を白黒させた。女の人って、そういうことがあるのだろうか？

「みんな牛のお乳から作った石鹸を使っているんだ。サフィリアとリーザが一緒に作ったんだって。ねえシーグ、顔が赤いよ。どうかした？」

「……なんでもない」

自分の馬鹿さ加減に嫌気がさしながら、シーグはアイフェの導く方向について行った。比較的近くに、４階建てほどの円柱の建物が見える。塔にしては太すぎるし、一体何が目的で作られたのかさっぱり分からない。だが、魔術の国の不思議にいちいち付き合っていてはキリがない。

「シンシア見っけ。おりゃー」

アイフェは掛け声と共に屋根から通りに飛び降りた。

「キャー！」

シンシアの絹を裂くような声が聞こえてくる。屋根から下を除くと、尻餅をついたシンシアをリーザが支えているのが見えた。アイフェがとび蹴りで襲い掛かったのかと心配したが、シンシアの前に飛び降りただけのようだ。

目を丸くして驚いているシンシア。楽しそうにケラケラと笑うアイフェの横にシーグは着地した。

「ど、ど、何処から降りてくるんですか」

「屋根から、だな」

「だよねー」

シーグとアイフェは顔を合わせて答える。

「場所を聞いているわけじゃありません。どうしてそんな所にいたんですか！」

「近道だったんだ」

「だよねー」

「屋根の上は道じゃありません！」

シンシアは生真面目な口調で当然の事を言った。これは相当怒っている。助けを求める視線を送ると、リーザは「知ーらない」と、口だけを動かしてあさっての方向に目を逸らした。

「道じゃなくても歩けますよーだ」
ふざけた口調に対してシンシアは目つきを鋭くした。すぐさま、アイフェはシーグの背中に隠れてしまう。シンシアの突き刺さる視線を感じながら、ズルイとシーグは思った。
「屋根の上を歩くなんて、無作法じゃないですか」
「シンシアだって、さっき屋根の上で戦ったじゃないか」
「そーだそーだ。自分だけずっるーい」
アイフェは、シーグの背後から顔だけ出して、無責任に叫んだ。
「あ、あれは、非常事態だったからです！」
「今度は緊急事態なんだ」
「ですけど――」
何かをいいかけたシンシアは耳元を押さえて、黙り込んだ。
「どうしたんだ？」
シーグが問いかけると、リーザが「静かに」と言った。唇に人差し指を当てて声をひそめている。
「……はい、分かりました。結界陣が該当する施設は、合計で5箇所ですね」
独り言をいいながら、シンシアは手に持っていた地図を広げてペンで印をつけていった。5つの点は、クルア・ハン区画のあちこちに散らばっている。
「ええ、ロイド老師の協力で、3箇所までは減らせそうです。1箇所に絞るには最低でも、走査線があと1本必要ですわ。理想だけ言えば、護民官長の位置からクルア・ハンまでの角度が分かればいいのですけど」
つまり、自分が走ってきた線上のことだろう。ぼんやりと考えていると、恐る恐る背中から顔を出しているアイフェと目が合った。クルア・ハンに真っ直ぐと向かう途中、匂いの届く近距離でアイフェと鉢合わせになったという事は……。
「なあ、アイフェ。怪しい奴を追跡した道筋は覚えているか？」
「うん、バッチリ分かるよ」

「よし、シンシア。ちょっと地図を見せてくれ」
「な、何ですか。話しの途中ですよ」
「最後のなんとか線、ひょっとしたらアイフェが辿って来た道で分かるかもしれない」
「どういうことですの？」
シンシアは神妙な表情で、地図をアイフェに手渡す。
「アイフェは、俺達がベクター……」
もどきじゃなくて、名前は何だったか？
「……みたいな戦い方をする、あの野郎を」
「ルパート・マードックです」
シンシアが横から助け舟を出す。
「そいつを倒した建物の裏路地で……。えーと、髪の白い」
「バイロン・ランカート！」
さすがにイライラした声でシンシアは言い放つ。怒っているようだが、気にしている場合ではない。
「を、アイフェが捕らえてくれた。その時、そいつを見張っている怪しい奴を見つけて、追跡してくれたんだ。そうだろ」
「ふえ？」
地図の路地を指でなぞっていたアイフェは、間の抜けた声を出して顔を上げた。
「追跡の途中で相手に気づかれてなかったか」
アイフェは見る見るうちに頬を膨らませてブーたれた表情になった。
「そんなに下手くそじゃないもん」
「分かりましたわ。バイロン卿を観察していた人たちは、アイフェの追跡に気づかなかった。つまり、最も近い道筋で本拠地に帰ったはず。そう言いたいのですね？」
シンシアは即座に怒りを引っ込めて、何度もうなずいている。
「でも、ここで見失っちゃったんだよ」
アイフェはクルア・ハン区画の南端を指差す。

「そこまでで構いませんから、道筋をなぞって下さい」
ペンを渡されたアイフェは定規もなく、立ったままの姿勢なのに地図に綺麗な線を書き込んでゆく。いくつもの路地を迂回して、ジグザグになっている線の大体中央を、一直線になぞってゆく。その方向に該当する点は、一箇所しか存在しなかった。
「護民官長、該当施設は一箇所まで絞り込めました。アビシャル・ホルドの塔です。……はい、私たちはすぐに向かいます。ええ、応援をよろしくお願いしますわ」
シンシアは耳を押さえていた手を離した。その後、口を引き結んで複雑な表情を浮かべている。

「護民官長って、兄さんの事だろう」
「今はお互いに公務についています。任務中は血のつながりなど無関係ですわ」
シーグが問いかけると、シンシアは唇を尖らせてそっぽを向いた。言葉は一人前だが、態度は年相応の子どもだ。
「だったら、公務が終わったらちゃんと話し合えよ」
「ですけど、あの人はシーグさんを犯罪者のように扱ったのですよ」
「だけど、手を尽くしてこうやって開放してくれた」
「保証人はレティーお姉様です。護民官長は決して自分の地位を捨てず、安全な場所から降りてこないのですよ」
レティシアをお姉様といいつつも、ライスの名を出さず、兄とも呼ぼうとしない所にシンシアの怒りがあるのだろう。
「だったら法を守る立場にいる人間が、自分で法を犯すのを許せるのか？」
「……」
「ルパートが失言するように追い詰めたのは誰だ。シンシアが出て行く時だって、護民官に命じて止める事だって出来たはずだ。今だって、自分の立場が悪くなるのを承知の上で、出来る事を協力してくれている。レティシアさんだって、そんなライスだから誇りに思って信頼すると言っていたぞ」
一度にまくし立てると、シンシアはうつむいて黙り込んでしまった。言い過ぎたか、と思ってリーザに助けを求める。しかし、リーザは知らんぷりをしていた。
「シーグさん」
押し殺したようなシンシアの声。
「お、おお。なんだ？」
シーグは上ずった声で返答した。

「あなたの言うとおりですね。シーグさんもレティーお姉様もライスお兄様に怒りを感じていないのなら、御二人の前で私が腹を立てるのはお門違いというものです。分かりました」
シンシアは早口の後に、独り決めして会話を打ち切ってしまった。結局、何がいいたいのかシーグには分からない。理路整然とした口調は、怒りを押さえている時のものだ。意味は分からないが、腹を立てているのは確かである。
「とにかく、アビシャル・ホルドの塔へ向かいましょう」
シンシアは地図を片手にクルア・ハンの奥へと進んで行く。地面に恨みがあるような足取りからも、怒りを静めたようには見えなかった。
「ねえ、アイフェ。狭い道が続くから、４人で並んで歩けないわ。だから、シンシアのそばにいて守ってあげて欲しいの」
「リーザはどうするの」
アイフェは不思議そうに首をかしげている。
「シーグがいるから平気よ」
「おお！　リーザのシーグの変わりに私がなるんだね。つまり、シンシアのシーグになればいいんだ」
「ええと……そう、よね？　お願いできるかしら」
リーザは少し混乱しながらも、アイフェに頼んだ。
アイフェはシーグの全身をマジマジと見つめる。そして、髪の毛をボサボサにかき回し、つま先だって背伸びをした。そして、どういうわけか両手で頬を押さえつける。
「……別に俺の物まねをしろって言ってないぞ」
シーグが念を押すと、アイフェは「ふっふっふ」と偉そうに笑って腰に手を当てて人差し指を立てる。手を離すと、ボサボサの髪はすぐに銀色の河のように戻った。
「こういう事は形から始めるのが大切なんだよ」
そして間違った事を言う時に特有の、自信満々の態度を取った。たぶん、『みんな』の誰かの真似に違いない。

「実行する方が大事だ。ほら、速足のシンシアが通りを曲がってしまうぞ。俺ならそんな事はしない」
「あー！　シンシア、待ってよー」
アイフェは大急ぎで振り返ると、シンシアを追いかけて走っていってしまった。
「子どもの扱いが上手なのね、シーグ兄さん」
突然、リーザがバシンと背中を叩いた。左肩の近くだったので鋭い痛みが走る。シーグは思わず前方によろめいた。
「え、何？」
「いきなり張り倒すからだ。力加減を考えてくれ」
「失礼ね、私は怪力女って言いたいわけ。そんな事じゃあ――」
「紳士失格だろうよ。だいたい、俺は兄さんじゃないぞ」
言葉を先取りされて、リーザは片方だけ頬を膨らませる。
「せっかく、誉めてあげているのに」
「そりゃどうも」
相手をしていてはキリがないので、シーグは速足でシンシア達を追いかけた。左腕は使い物にならないし、右腕の痛みは引いているとはいえ、長丁場の戦いには向かない。アイフェもシンシアも並外れた能力を持ってはいる。しかし、腕力にしろ魔術にしろ、長期的なせめぎ合いとなれば不利になるに違いない。
シンシア達の１０歩ほど後ろに追いつくと、リーザが横に並んだ。そして、シーグの左肩に手をかけて耳元に口を近づけてくる。だから、シーグはーザのほうに体を傾けた。
「うまくやってるじゃない。あの二人はメティス中の教師が手を焼く超問題児なのよ」
「優等生の間違いだろ」
アイフェにも聞こえないように声を小さくしながら、並んで歩く２人から更に５歩距離をおいた。
「優秀すぎるのが問題なのよ」
「……なんだそりゃ？」

シーグにはわけが分からない。能力が高ければ、能力に見合う師匠をつければ良いだけなのに。

「それよりも、さっきシンシアは何をいいたかったんだ？」

腹を立てるのはお門違いといいながらも、明らかに腹を立てているようにしか見えなかった。

「シーグとレティシアの前でライスの事に腹を立てるのはやめる。だけど、シンシア自身はライスの事を許していないって事ね」

ますます、わけが分からない。

「シーグの前では『ライスお兄様』って呼ぶけど、自分は全然許してないって意味。理屈で納得しても、心の中まですぐに変わらないわ」

ジェイナスがサフィリアの性格について、似たような事を言っていた。だがそれは、何も変わっていないという事ではないだろうか。表面だけとり繕いますと宣言しているのは、あてつけにも思える。

「それに、あの様子じゃ気持ちの方だって切り替わっているようには思えないぞ」

絶対に聞こえないようにと、リーザの耳元に近づけてささやく。

「ああやって、発散しているから戦いの前には落ち着きを取り戻すわ。そこを黙って見守ってあげるのが紳士の心得ってものよ」

「つまり、余計な事を言わない方が良かったんだな」

「そんな事はないわ。シーグがさっき言った事で、心の整理がつきやすくなったと思うわ。全然怒らないシーグとレティシアの変わりに、シンシアが腹を立てていたんだと思うから」

人に代わりに腹を立てて、一体何がどうなるのか。だいたい、代理で腹を立てているのに、苛立ちを本人にぶつけるというのはおかしいと思う。

「とにかく、大丈夫ってことだな？」

「とりあえずはね。途中で面倒に思うんだったら、女の子の複雑な心に強引に踏み入っちゃダメよ」

「分かった、気をつける」

「どうだか」
神妙にうなずいたシーグを、リーザは疑いの眼差しで見つめている。すると、先を歩いていたシンシアが急に足を止めた。そして、アイフェが怖がってシンシアの背中に張り付く。ただ事ではないと思って、近づいてみると汚いローブの男がわき道から現れた。
男の体中から放たれる鼻を突くような腐臭に目まで痛くなりそうだ。アイフェは渋面になって鼻をつまんでいる。シンシアは嫌悪と警戒心の混じった様子でアイフェを守るように立ちふさがっていた。
「おい、あんた。何のようだ」
横合いから声をかけられて、汚いローブの男はビクリとして顔を上げた。しかし、シーグとリーザの顔を見て再び余裕を取り戻す。ガリッポソの男と、女1人なら怖いとも思わないのだろう。
「ほう、お前も魔術師じゃないんだな」
一瞥で魔術しかそうでないかを見極める。つまり、この男は魔術師だということだ。男は3本しか残っていない歯をむき出しに、ヒッヒッヒと笑う。歯の間から垂れて来た涎をローブで拭った。元々、どんな色のローブだったのかまるで分からないし、袖の辺りに粘りのある黒い染みが広がっている。
表情は緩んでいるし、目つきもボンヤリしている。歯並びは悪くて、黒や黄色に変色していた。係わり合いにならないほうがいい、とシーグは判断する。
「通してくれ」
威厳のある口調と、断固とした態度を意識する。しかし、ローブの男はヘラヘラしながら行方を阻んだ。更に、物陰からノソリノソリと人影が近づいてくる。見えるだけで4人、みんな同じような格好だ。周囲に満ちる気配から考えると全部でその数倍。アイフェが怖がって逃げ出した理由がようやく分かった。
「派手な魔術は使わない方がいいでしょう。アビシャル・ホルドの塔から近すぎます」
シーグの考えを察して、シンシアが小声でささやく。かといって、

乱闘騒ぎを起こせば物音で気づかれてしまうだろう。逃げるとすると、屋根の上しかない。

アイフェは1人でも屋根の上に昇れる。シンシアはどうにかなるとして、問題はリーザだ。両肩を負傷したままで、シンシア共々屋根まで持ち上げる事はできない。ここには足場になるようなものが何もないのだ。

縮まってくる包囲網をけん制するために、シャープネスの柄に手をかけたが全く効果がない。もしも、自分が戦士に相応しい凄みがあれば、こんな奴らは一睨みで追い返せただろうに。

汚いローブの男は無防備なままで近寄ってくる。そして大きく息を吸い込むと、シーグたちに向かって息を吹き付けた。アイフェが「にゅー」と奇妙な悲鳴を上げながらシンシアのエプロンに顔をうずめた。あまりの不潔さにシンシアは蒼白になっている。

すると、男は急にゲラゲラと笑い出して唾を前に撒き散らした。自分の不潔さが何よりも武器になると知っているのだ。

こういう時には断固とした態度をとる事が重要だ。多数の敵と戦う時に、調子に乗らせて相手のペースにはまってはいけない。むやみに血を流すのは控えたいが、そんな事を言っている場合ではない。シーグはシャープネスを握る手に力をこめた。

覚悟を決めると、男は「ああ?」と間の抜けた声を出してシーグの腕の辺りをまじまじと見つめる。まさか、腕の怪我を悟られたのだろうか。

「て、てめえ。護民官なのか?」

護民官の名を聞いて、驚愕が周囲に広がってゆく。どうやら、後ろめたい事がたくさんあるらしい。

「そうだ。ライス護民官長より命を受け、違法薬物所持者の摘発に来た」

シーグはハッタリを効かせて言ってみた。

「な、なんだと!」

効果は予想以上で男達は逃げ腰になっている。隙ありと考えて、

シーグは次に何を言うべきか頭をめぐらせた。答えはすぐに出た。こいつらは、集団で取り囲むのが一番有効だと思い込んでいる。だったら、すでに立場が逆転していると思わせてやればいいのだ。

「逃げても無駄だぞ。すでに周囲を包囲している。おとなしく縄につけ！」

シーグが鋭く言うと、クモの子を散らすように男達は大あわてで逃げ出した。お互いに押し合って、邪魔になる者を突き飛ばしてでもわれ先に逃げようとする。まるで、ゴブリンのような無様さだ。

脇を逃げていこうとする汚いローブの男に、シーグは鋭い足払いをくれて倒してやった。慌てて起き上がろうとする男のローブを踏みつけて、立ち上がれないように押さえつける。

やがて周囲が静かになると、立ち込めていた悪臭もずいぶんとマシになってゆく。男は恐る恐るシーグのほうを振り向いた。そして、情けない表情で愛想笑いを浮かべている。

「お前ら、ここに住んでいたわけじゃないな」

男の表情が一変する。やはり、と思いながらシーグは思考を総動員して考えをまとめる。

「誰かに頼まれたんだろ。ここに来た人間を追い返すように命令をした奴がいる」

男は顔を逸らしながら道の先にチラリと目をくれた。

「そいつはアビシャル・ホルドの塔にいる。ここに近寄る奴を追い返せと命令されたんだな？」

当てずっぽうが図星であったらしく、男の顔色が変わる。

「な、なんでそれを！」

「調べは全部ついているんだ。フェルナンディの情報網を甘く見るな」

フェルナンディの名を聞いて、更に動揺している。

「……正直に言えば、お前だけ特別に扱ってやってもいいだぞ」

シーグは『特別』を言い聞かせるようにつぶやいた。

「ち、違う。分かった、言う。俺に命じたのはラスティー・クルス

だ」
リーザが「えっ！」と、小さく叫んだ。口からでまかせの名前ではないらしい。
「なるほど、あの野郎か。他には？」
「し、知ら――ッ！」
男は息を飲み込んだ。シーグが一瞬のうちにベルトの短剣を抜いて、男の首筋にピタリと当てたからだ。
「ほっほー、白を切るとはいい根性だな。命がいらんと見える」
「ひぃぃー……ヒッ！　ヒェェー」
シーグの顔をまじまじと見た男は、急に尋常ではない恐れ方になった。理由が分からないので、相手の出かたを待つ。
「あ、あんたは、シージ・ペリラス！」
どうやら、自分の顔はこんなところにまで知れ渡っているようだ。だったら、そこに漬け込んでやる。
「そのシージ・ペリラスが、人間をどう扱うか知らんのか？」
ぶっきらぼうに、気だるそうに言うと、ツーンと鼻を突く臭いがした。どうやら、失禁したらしい。やりすぎたかな、とシーグはちょっとだけ反省する。
「わ、分かった、全部喋る。だから許してくれ」
シーグがあきらめようとした時、男はとうとう降参した。
「俺に命令したのは、ルパート・マードック。もしも、何かあったときには、ラスティーの名前を出せと命令されていたんだ！」
「へえ、他には？」
「知っているのはそれだけだ。だから、命までは――」
シーグはナイフの柄を、男の後頭部に叩き込んで黙らせた。
「シンシア。こいつの証言って効果があるのか」
「ありません。しかし、護民官長……ライスお兄様がこの人の事を調べ上げて、手に入れた証言や証拠には価値がありますわ」
「まどろっこしいんだな。シンシアやリーザが、保証しても無理なのか」

「ありもしない事を無理やり自白させた可能性があるからです」
「たとえば、今みたいにか……なるほどね。そしたらライスが来るまで、こいつをどこかに隠さないとな」
しかし、垢まみれで汚れ放題の男にシーグは触りたくはなかった。助けを求めるように女性陣を見ると、ザザーと音を立てて後ずさる。仕方がないので、シーグは汚れの少ない袖口をつかんで、路地の陰まで引きずっていった。
「これで拭いてね」
リーザが体を遠ざけて、腕を一杯に伸ばしながらハンカチを差し出す。シーグが受け取ると、そそくさと元の位置に戻る。
「か、返してくれなくていいからね！」
「……ああ」
両手を遮る様に振るリーザ。なんだか、シーグはとても嫌な気分になった。
「ところでシーグさん。どうして、この男の事を何でもお見通しだったのですか？」
「なんとなくだ」
いい加減な答えをすると、シンシアは目を三角にした。気になった事はとことん突き詰めないと気がすまないらしい。
「もしも、こうなったら一番困ると思った事を言ってみたんだ。魔術師っていうのは人の――」
弱みに嫌がらせを仕掛けるのが、と言いかけたのを飲み込む。
「敵を有効に追い詰める手段をよく心得ているからな」
言い直してみたが、シンシアはムッとした表情を浮かべている。
「えっと、あいつ等は揃って歯並びが悪くて、顔が緩んでいた。だから、麻薬の類をやっているんだろうと思ったんだ」
「では、ここで待ち伏せしているというのは？」
「すっかり逃げ去った後、急に臭いがなくなっただろ。だから、ここに住んでいるわけじゃなくて、何かの理由で張り込んでいると思ったわけだ。あれだけの人数を集めるからには、何かの目的がある

に違いないからな」
「なるほど、論理的な推理ですね。では、最後にどうしてまだ隠し事をしているって気づいたのですか？」
「いや、全然気づいてなかったぞ」
「……え？」
「知らないなら何も言わないだろうし、知っていたら何か言うだろう。だから、とりあえず脅してみようと思ったんだ。大当たりだったな」
シーグは両手とナイフの柄を入念に拭いた。捨てるのも気が引けたので、ハンカチを男の手のひらに結びつける。この印の事を後で知らせよう。そうすれば、やって来た護民官が人違いをする事もない。
「……ほとんど。拷問ですわね」
「誉め言葉として受け取っておくよ」
軽く聞き流そうとすると、シンシアはスッと目を細めた。
「そうしてください。恐喝魔で、詐欺師、脅迫漢のシーグさん」
シンシアは豊富な語彙を楽しそうに口ずさんだ。
「あのなー、そこまで言う事ないだろう」
「あーら、ただの誉め言葉ですわ。威圧、強要、恫喝、威嚇等の技術に優れた人ですもの。更に付け加えるなら――」
「悪かった、もう許してくれ」
「あら、残念ですわ」
シーグが降参すると、シンシアは残念そうに呟いた。言葉の暴力とはこういう事を言うんだろうな、とシーグは思った。

1部ー27　数の力

＊

「あの塔ですわ」
シンシアが指差した方向には2階建ての塔があった。周囲を5階や6階建ての塔に囲まれており、周囲からは完全に隠れている。その上路地は狭く、空気はよどんでいるし、鉄がさびた様な奇妙な匂いまで漂っていた。
瘴気立ち込める魔境地帯と良く似ている。アビシャル・ホルド（冥府を抱く場所）とはよく言ったものだ。
「見張っているだけでいいのか？」
「サモニング（召還）の系統、空間に関与する魔術は発動の前後に大きな揺らぎが発生します。この距離からなら十分気づく事ができます。ライスお兄様達が来るまで、監視を続けましょう。少人数で魔術師の本拠地に攻め込むのは危険ですわ」
「分かった。それにしても妙な造りだな。入り口が地下に向かう階段とはね」
「魔方陣専用の建物だからです。結界陣を作る時に、決められた箇所以外に窓や扉をつければ魔力がぬけ出てしまいます。それに、探知の魔術は風の属性であることが多く、風通しの良い建物は魔術師にとって隙となるのです」
「つまり、建物自体が魔術のための道具というわけか」
「ええ、魔方陣を一つだけ作るなら円形の広い場所。複数を重ねるなら縦長の階層構造。塔の一階毎に魔方陣を作るのが最適なんです」
つまり、メティスの今にも折れそうな繊細な塔は、軍事的防御力ではなく魔術的な要因を考えて作られているようだ。
「あんまり居心地のよさそうな建物じゃないな」
「魔術的な建築物が住居に不向きなのは確かですね」

「軍事的な建物だって似たようなものだ」
城砦戦において、守る側に一番厄介なのが病気が蔓延する事だ。一箇所に閉じ込められたまま、長期の戦いが続けば城砦の中は怖気を振るような場所となる。しかも、守りを重視した造りは風通しも悪くなるために、不浄な空気が立ち込めてしまうからだ。だが、いくらなんでも鉄格子つきの鉄窓くらいはある。城砦が防ぐのは侵入者、矢や投石だからだ。魔術師の塔になると、更に酷いらしい。
思い返してみればロディウスの隠れ家も、この世のものとは思えない空間になっていた。思い出すだけで吐き気をもよおしそうだ。
シーグは頭を振って余計な事を考えまいとする。
「リー姉様、中はとてつもなく不潔かもしれません。覚悟しておきましょう」
「え、ええ。終わったら、お風呂に行かないとね」
シンシアの押し殺した声に、リーザも緊張した様子でうなずく。
戦闘前の会話としては間の抜けていると思う。しかし、女性たちにしてみれば、当座の敵よりも清潔な環境の方が重要らしい。
「それにしても、ラスティーか。もう一度現れるなんて驚きだわ」
リーザは腕を組んで何度もうなずいている。
「誰なんだ、そいつは」
「シー坊は、さっき知っているように言ってなかった？」
「いや、まあ。知っているふりをした方が効果的だと思ってさ」
シーグが言い訳をすると、シンシアは呆れた様子で目を細めた。
「また、忘れたんですか？」
「ええと……」
思い出そうにも思い出せない。聞いたのに忘れたのか、そもそも聞いた事がないのかも思い出せない。
「私の塔に襲い掛かってきた、自称親衛隊『暁の星』の隊長なのよ。今は牢屋の中って聞いたんだけど」
初耳のような気もするし、聞いた事があるような気もする。シーグが首をかしげていると、シンシアは大げさにため息をついた。

「階層型立体魔方陣の研究者にして、生物学者ですわわ。七家の結界陣に匹敵する独自の陣形を作り出したのです。『灯火の幻術士、ナイト・ウィスプ（夜闇の鬼火）のラスティー・クルス』」

沼地で旅人を迷わせるウィスプ。この薄暗い通りに潜むには、よく似合った称号だ。

「称号付きって事は、『理の法廷』で発言力を持っている事になるのか？」

「はい。だから、確たる証拠を握らなければ裁きが長引いてしまいます。そうなれば、夕刻の七点鍾まで間に合いませんわ」

忘れていたが、こちらには時間制限までついていた。ここで逃げられる事があれば、もはや追跡は不可能であろう。つまり、相手の退路を完全に絶つ戦い方をしなければならない。

「有利といえば、相手がまだ気付いていないって事か」

「付け加えるなら、魔術師でない人間が2人もいるので、奇襲が可能という事ですね。だから、この区画の人々は、魔術師ではない人間が入ってくると目の敵にするのですよ」

無断で封土に入ったときのサフィリアの過剰な反応、学園地区にはじめて入ったときの探るような眼差し。その理由にようやく納得がいった。人々が魔術師を恐れているように、魔術師のほうでも人々が怖いらしい。

「奇襲するなら、塔の周囲を調べておくべきだな。……って、アイフェは？」

シンシアも周囲を見回すが、アイフェの姿はない。リーザは自分のスカートをパンパンと叩いている。そんな所に入り込んだ事があるのだろうか。それ以前に、いちいち調べなくても気づくと思う。

「アイフェの奴。何処に行ったんだ」

苛立たしくつぶやくと、頭のてっぺんをトンと突かれてシーグはとっさに飛び下がった。反射的にシャープネスを抜こうと手が動く。

「ここだよー」

突然の返事に全員が度肝を抜かれた。アイフェは屋根の上に足を

引っ掛けて、コウモリのように逆さ吊りになっていたのである。切り付けそうになったのを、とっさに止めたので肩がひどく痛んだ。
「何をしていたんだ」
「ぶら下がっているんだよー」
アイフェはブラブラと振り子のように揺れ始めた。
「そうじゃなくて、何処に行っていたんだ」
「ちょっぴりお出かけしてたんだ。名前を呼ばれたから帰って来たの」
「俺の指示に従うって、さっき約束した所だろう！」
「まだ、何も言われてないよーだ」
「……」
考えてみると、近くにいろとも、勝手に動くなとも言った覚えがない。
「それに、後ろに立つなって言われたけど、真上はまだだもーん」
アイフェは勝ち誇った様子で屁理屈を言った。
「危ないから降りて来なさい！」
シンシアはハラハラしながら怒鳴りつける。リーザはアイフェの動きに合わせて、手を差し出したり振り回したりしていた。その様子を横目で見たアイフェはケラケラと笑いながら、片足だけで更に大きく揺れ出した。
最後に残った片足が窓枠から離れると、リーザは振り回していた両手で目を覆った。シンシアは慌てて自分のフィーリアに手を伸ばした。
だが、アイフェはクルリと空中で一回転して音もなく着地する。そして、2人の慌てぶりをあざ笑うように悪戯っぽく微笑んだ。アイシャ・ディスペリアにそっくりの表情。ガリウスに決闘を挑まれた時。自分の好きなように周囲を躍らせて、楽しんでいた時の表情だ。
リーザは腰が砕けたように、へなへなと座り込む。足取りも軽く近寄ってきたアイフェに、リーザは言葉もなく抱きついた。どうや

ら、本気で心配していたようだ。泣き出しそうな表情のリーザに対して、アイフェはくすぐったそうに微笑んでいる。
「何処に行っていたんだ」
勝手な行動を叱りつけてやろうと、シーグは声色を落とす。怯むかと思ったが、アイフェは挑み掛かるようにシーグと向かいあう。
「塔の偵察に行ってきたの。襲い掛かるときは敵の状況を調べるの。追いはぎと強盗の基本なんだよ」
そういうものと一緒にして欲しくないが、似たようなものかとシーグは思った。シンシアとリーザは嫌な顔をしている。
「それに、この中で一番身軽で、こっそり動けて、耳がいいのは私だもん」
アイフェは人差し指と小指を立てて突きつけてくる。全く持ってその通りだったので、シーグは言い返せなかった。それを見て、アイフェは勝ち誇ったように腰に手を当てる。
「ふっふっふ。敵を知り、己を知ればやりたい放題なんだよ」
少し違う事を言うアイフェ。何でもかんでも好き放題にすると言われているようで、シーグはなんだか腹が立ってきた。なので、意識して不機嫌な表情を浮かべる。
「人の嫌がる事をしないって約束もしたよな?」
アイフェはピタリと動きを止めた。そして、リーザやシンシアをチラリと見る。どうやら、自覚はあるらしい。
「うー、約束を破ってしまったよー」
アイフェは名残惜しそうに自分の小指を見つめた後、手を差し出した。
「切るんでしょ? 一本目」
「いや。だから、そういう意味じゃなくてだな」
シーグはどう説明したものかと困った。余計な事を言うと、更に誤解を招きそうな気がする。
「ねね、約束って何の事」
リーザが興味深そうに聞いてきた。シーグとアイフェを興味深そ

うに交互に見つめている。
「私ね、シーグの『どれい』になるって約束したんだよ」
「な！」
「へ？」
「え……」
シーグ、リーザ、シンシアは三様に異なる奇声を上げた。
「だから、『ふくじゅー』しないといけないんだよ」
アイフェは打ちひしがれた様子でうな垂れた。
「奴隷に服従って……。一体何の話をしているんですか？」
刃物のような視線と、底冷えのする声でシンシアは糾弾してきた。
「アイフェ、全然違うだろうが！」
「あ、そうだった。『はんりょ』になります、だったね」
アイフェは部分的に訂正して、頭をポリポリとかいている。
「ええーっと、つまり結婚の約束の事よね？」
小首をかしげてリーザは問う。アイフェも真似してキョトンと首をかしげた。
「いや、そうじゃなくてだな」
言っていたのは『捕虜』だし、そもそも意味が間違っていて『伴侶』だ。それ以前に約束の言葉自体がおかしくて……。
何から説明すればいいのやら分からない。
混乱している様子のリーザに、迫力を増してゆくシンシア。ものすごく誤解している。どうすれば、納得させられるのだろうか。
「とにかく、約束を破ったら指を切られてしまうって、約束してしまったんだよ」
悲しそうにアイフェが言うと、シンシアはキッとシーグを睨みつける。
「意味も分かっていない女の子に、何を約束させているんですか！本気なら大問題ですし、冗談だったらタチが悪すぎますわ！」
「そうじゃない、誤解なんだ。シンシア」
「何をどうやったら、こんな事になるんですか！」

それはシーグのほうが知りたい気分だった。及び腰になると、シンシアは詰め寄ってくる。
「お！　塔から人が出てきそうだよ」
アイフェは人事のように塔を指差した。
「後でじっくり話を聞かせてもらいますからね」
シンシアはギリギリと歯を食いしばって、シーグを睨みつけた。
誤解は全く解けていないようだ。
「シー坊ってば。浮気者だぁー」
リーザは笑顔で当てつけてくる。こっちは誤解こそしていないが、面白がっているようである。シーグ達が物陰に隠れてアビシャル・ホルドの塔を観察していると、地下へ続く階段から2人の男が出てきた。
「2人とも魔術師ですわ。ですけど、見知った顔ではありませんね」
「つまり、2つ名も称号も持っていない魔術師って事よ」
シンシアの言葉を、リーザが要約して伝えてくれた。どうやら、ラスティーは塔の中のようだ。
「アイフェ、あいつらの唇を読めるか」
「おう。『あいつら、ていじほうこくはしろといっていたのに――。だから、いったろ。あんなやつらをなんにんあつめたっておなじなんだ――』」
シーグは思わず舌打ちをした。塔の周囲に人を伏せるだけではなく、定時報告もさせていたらしい。ラスティーというのは、意外に用心深い奴のようだ。
「どうやら、救援を待ち続けるわけにはいかないようですね」
シンシアは胸元から、プラチナの鎖を取り出した。アイフェはナイフを抜いたが、リーザはオロオロとしているだけだ。
「落ち着けよ、リー姉。すぐに戦いってわけじゃない。武器は持っているか？」
「う、うん」
「じゃあ、準備しておいてくれ。」

リーザは大慌てで脇の下に手を入れた。取り出した布袋――カラシニコフ爆弾――を落としそうになって体中を緊張させる。布袋は爆発するでもなく、地面に落ちただけだ。辛子とコショウと混ぜ物が、落下したくらいで爆発するはずもない。シンシアが落ちた布袋を拾い上げてリーザに差し出した。その後、気まずそうにシーグを見る。シンシアもこの状況では爆弾がうまく使えるとは思っていないようだ。

「リー姉様は、私のそばから離れないでくださいね」

「ご、ごめんね。大丈夫、大丈夫よ、大丈夫だからね」

リーザは自分に言い聞かせるようにいって、大きく深呼吸している。この様子では戦力として数えない方がよさそうだ。塔から出てきた2人組みは周囲をキョロキョロを見回している。

「『あいつらどこにいきやがった――。にげたんじゃないだろうな――。まさか、らすてぃーさまはほうしゅうはあとばらいにするといっていたぞ――』」

「どうしますか？」

シンシアは塔の方角を睨みつけたまま、シーグに問う。ひとまず怒りは抑えてくれているようだ。もちろん、それは見かけで本心は別にあるに違いないが。

「ひきつけて、気絶させよう」

「私もそれがいいと思いますわ」

だが、2人の男達はシーグとは反対に方向に歩き出した。仕方がないので、シーグは拳の裏で壁をコンコンと叩く。すると、男達は振り返った。

「そこにいたのか出て来いよ」

返事をしないまま黙りこむ。すると、男は面倒くさそうに唾を吐くて、ゆっくりと近寄ってきた。

「まずいな、一人だけしか来ないぞ」

「じゃあ、私がもう1人の頭上から襲い掛かるね」

アイフェは壁に手をかけてスルスルと登っていった。ほとんど隙

間のないレンガの壁を、まるでハシゴのように伝ってあっという間に屋根の向こうに消える。
「リー姉、シンシア少し下がっていてくれ。一瞬で決めるぞ」
少し離れた建物の屋根から、アイフェがこっちをじっと見ている。
「いいか？」
と、小声で言うと、アイフェがうなずく。シーグの唇を十分に読める位置のようだ。一方、男は面倒くさそうに路地に入ってきた。
「3、2、1、それ！」
シーグは物陰から飛び出して、男のみぞおちに膝を突き入れた。ベクターの真似をするのは癪だったが、むやみに両手を使えないので仕方がない。男は「うぐ」、と小さなうめき声を上げて崩れる。もう1人の男の首筋に、頭上から飛び降りたアイフェがとび蹴りを食らわせた。鋭角に首筋にめり込むつま先。その後、背中を踏み台に後方へ一回転して華麗に着地する。非の打ち所のない襲撃だ。
シーグは倒れた男達を物陰に引っ張って、塔の様子を確認した。シンシアとリーザは布で、男達の手を縛っている。拘束する事になれているはずもなく、リーザなどは猿ぐつわをかませるときに、男の首を布で思いきり絞めてしまった。
「きゃっ。ご、ごめんなさい」
気絶した男に律儀に謝罪するリーザ。命に別状はなさそうなので、シーグは特に何も言わなかった。
「さて、これからどうするか」
「そのうち気づかれると思います。小さな建物の中なら、魔術師同士はお互いの存在を感知しあっていますから」
シーグの呟きに、シンシアは明快に答えた。声にも表情にも張りが出る。危機の中でこそ真価を発揮できる素質。レイザークに産まれていたら、いい戦士になれたに違いない。
「魔術士同士の感知力で、人数の把握まで出来るのか？」
「よほどの大人数でなければ、大丈夫です」
「人物の特定は？　つまり2人が塔に戻った事と、シンシアとリー

姉が侵入した事の区別はつくのか」
　リーザは手の平で、男達の全身をゆっくりとなぞっていった。
「この人たちは特殊な魔術も道具も使っていないみたいね」
「つまり、個人の特定は不可能という事ですわね。私たちが塔に侵入してもすぐには気づかれません」
　だったら、正面から一挙になだれ込むべきか。しかし、地下から入り込んで2階に行くまでに体制を整えられるのは愉快じゃない。準備を整えた魔術師は、予想もつかない事をする。
「こういう場合は、退路と正面から挟み撃ちにするべきなんだよ」
　アイフェが突然、話に割り込んできた。
「塔にはね、一つだけ木の窓があったんだ。2階の裏側で、隣の建物に乗り移れる高さなの。たぶん、あいつらの逃げ道だよ」
「だったら、俺とアイフェは2階から襲撃。リー姉とシンシアは少し遅れて地下から進入だな。よくやった、アイフェ」
　誉めてやると、アイフェは目を輝かせた。飛び上がってシーグの肩に抱きついてきた。痛みに身をよじると、アイフェが慌てて手を離す。
「一つの出入り口に一つの窓。一筋の流れを作る構造は、サモニング（召還）の系統に向いた形、ラスティーの得意な系統でもありますわ。空間に作用する魔術で用途は様々ですね。瞬間転移、生物召還、空間歪曲、思念投射――」
　説明してくれるのはうれしいが、シーグには内容がよく分からない。
「一番有効な方法は何だ。シンシアならどうするかで構わないから教えてくれ」
「で、ですけど私は経験も浅くて未熟者なんですよ」
「だけど、俺は完全に素人だし。リー姉は分かるか？」
　リーザは無言のままで、首をブンブンと横に振った。
「という事で、シンシアに頼るしかない」
「分かりました。ラスティーは空間系の達人であり、手段は特定で

きません。ですが、発生は1階になるはずです」
シーグの問いに、シンシアは明快に答えた。
「だったら俺達はどう対するべきだ？」
「塔の構造から考えるに、三階層の積層魔方陣となっているはずです。地下と2階に補助の魔方陣と人員を配置し、1階に設置された魔方陣を強化する。おそらく、ラスティー・クルスも1階の中央にいる事でしょう。この構造では中にいる人数は9人以上21人以下と考えられます」
「なんで、そこまで分かるんだ」
「魔術においては人員の多さだけが力ではありません。適度な数字による均衡こそが魔術を安定させるからです。ただ、結界の中にいるだけでは邪魔にしかならないのです」
シンシアの口調はどんどんと滑りがよくなり、声には熱が入ってゆく。
「陣形を張るには最低3人。それが3階層で最低9人。一方、階層型の魔方陣は平面型よりも構造が弱く、２１の点を使う事が技術上の人数限界となります。結界陣の定義から導き出した、簡単な計算ですわ」
計算も簡単でなければ、定義も意味が分からない。だが魔術に関しては、この中でシンシアが最も優れているのは確かだ。
「せめて地下か、2階の人数が把握できれば特定できるのですが」
「3人いたよ。木戸越しに声が聞こえたんだ」
「6人という事はありませんか？」
「そんなヘマしないもん！」
シンシアが丁寧な言葉で問うと、アイフェがふくれっ面で答える。
「ならば、3・9・3の陣形と予測されます。サモニングのΙ（イオタ）である9を枢軸に置き、両端にプロテクションのγ（ガンマ）である3を配置する。プロテクションによる独立空間の構築。サモニングのセオリーに沿った結界陣となりますわ」
「つまり、堅固って事じゃないのか？」

シーグが弱気な発言をすると、シンシアはニヤリと物騒な笑みを浮かべた。

「常用され、発展し、完成された陣であるのは確かです。その代わりに打ち破る手段も明確ですわ。２階と地下の魔方陣を破壊すれば、中央の陣形もまた効力を弱めますから」

「大体内容は分かったぞ。だったら、俺たちは定石に従って動き、シャトランゼ（王取り）を決めればいいわけだ」

「はい。それが最良の手段と考えます。では、シーグさん。具体的な作戦を決めて下さい」

シンシアはそう告げるとシーグを見つめて口を閉ざした。

1部ー28　挟撃作戦

＊

シーグとアイフェは屋根を伝いながら、アビシャル・ホルドの塔の裏側に移動していた。この周辺の屋根は特に平坦で、普通の道のように歩く事ができる。その一方で、屋根から飛び降りればすぐに通りに姿をくらませることも出来る。退路としてはこれ以上、理想的な場所はない。

作戦は、シーグとアイフェが2階の窓から奇襲、後にシンシアとリーザが侵入するというものだった。シーグは話し合った作戦の内容を思い返す。

魔術が使われると、近くにいる魔術師は眠っていても気がつく。魔術士同士は互いに存在を感知できる。

だが、その感知能力は個人を特定するほどではなく、建物の中での人数把握が限界である。

つまり、奇襲は魔術師ではないシーグとアイフェになら可能だ。そして、塔の中から魔術師が2人出てきているので、シンシアとリーザの2人が侵入しても即座には気づかれない。

事を隠密に運び、塔の2階を沈黙させるのが第一の目標だ。その後に地下を制圧して、1階を叩く。

塔の木戸と屋根は、ベランダのような構造になっていた。住人が外に出て休憩するためか、折りたたまれた椅子が壁に立てられている。

窓はボンヤリと緑色に輝いていた。シンシアから、魔術の視点を与えられているので、魔術の光が見えているのだ。シーグにも迷いなく識別できる単色の緑。つまり、プロテクションの魔術しか仕掛けられていない。遠目には分からなかったが、近づいてみると色のひずみが明らかになった。

シーグは窓の近くに耳を寄せる。話し声が聞こえるが正確な人数が分からない。
「ねえねえ、シーグ。肩車ー」
困っていると、アイフェが服を引っ張ってきた。
「あのな、遊びじゃないんだぞ」
「私なら、部屋の会話が聞こえると思うの。だけど、届かないんだよ」
確かにそうかもしれないので、シーグはアイフェに背を向けて、膝を落とした。すると、アイフェはツツーと背筋に指を伝わせてきた。ゾッとしたシーグは体をくねらせて、アイフェを睨みつける。すると、少女は心配そうな表情を浮かべていた。
「肩車じゃないとヤダ」
「……」
ここで押し問答はしたくないので、シーグはアイフェを抱えようと手を伸ばす。しかし、アイフェは仏頂面で後ろに逃げた。
「ねえ、肩の怪我って大丈夫なの」
「まあ、剣を振ったり肩車するくらいなら全然平気だぞ」
「本当？」
疑いの眼差し。アイフェは怪我の程度まで分かっているようだ。本当に勘の鋭い少女である
「実は結構痛いけど、肩車くらいは大丈夫だ。その代わりにシンシアには内緒にしていてくれよ」
「これは『くちどめりょー』だね。つまり、私たちは『きょーはん』なんだ」
アイフェは人差し指と小指を立てて言う。なんだか違うような気もしたが、まあいいかと思った。アイフェは嬉々としてシーグの背中によじ登る。だが、窓自体が低かったので中腰の不安定な姿勢にならないと、アイフェは窓に聞き耳を立てられない。
「『あいつら、でていったきりかえってこねえな――。おれたちもそとにいきたいぜ――。あーあ、まどくらいあけさせてくれよ――』

。3人とも、5歩向こうだね。集まって話をしているみたいだよ」
ものすごい聴覚だ、とシーグは感心した。
「よし、襲撃するぞ」
シャープネスを鞘走らせると、アイフェは背中から降りてナイフを構えた。シーグは神経を集中させて、緑色のひずみに剣を三閃するカッと小さな音を立てて、木戸は6つに分裂する。シーグは窓枠を乗り越えて塔の中に進入した。驚きに声もなく硬直している3人の男たち。シーグは一挙に距離を詰めると、左手で片方のみぞおちに膝を食らわせ、体勢を立て直す勢いを殺さずにシャープネスの柄を首筋に叩きつけた。崩れる2人が大きな音を立てないように抱きとめてから床に落とす。
最後の1人は逃げ出そうとした所を、アイフェが膝の裏に蹴りを入れた。後ろ手に倒れた所を、首の後ろに短剣の柄を叩きつけて気絶させる。ほとんど物音を立てない見事な手際のよさだった。
「じゃ、私は戻るよ」
アイフェはシーグに声をかけると、窓から外に出て行った。シンシア達と協力して、一階から進入する手はずになっている。
落ち着いて周囲を見回してみると、かび臭く薄暗い部屋には魔方陣の放つわずかな光しかない。
床一面に巨大な『△』の模様があり、周囲に意味不明な模様と文字が規則正しく並べられていた。この魔方陣と、地下の魔方陣を同時に破壊して1階に侵入しなくてはならない。

＊

「お――」
驚いた声と共に、銀色の髪がキラリと輝いて、屋根の上に引っ込んだ。
「アイフェ、かくれんぼをしてる場合じゃないわ」
リーザが小声で呼ぶと、アイフェはしぶしぶといった様子で屋根

から頭を出した。
「はやく降りてきなさい！」
シンシアが押し殺した声で言う。きつく言われたアイフェは、機嫌を悪くした様子で降りてくる。
「遊びじゃないのよ。ふざけないで！」
「だけど、シーグはさっき肩車をしてくれたもん」
腰に手を当てて怒るシンシアに、怯みながらも反論するアイフェ。
「全くあの人は、どこまで緊張感がないんだか！」
「ほらほら、2人とも喧嘩しないで」
「喧嘩じゃありません。アイフェの事を注意しているだけなんです！」
「私は悪くないもん」
大きく息を吸い込んだシンシアに、唇を尖らせて逃げ腰になるアイフェ。
シーグもサフィリアもいない状態で、2人の喧嘩を止められる自信はリーザにはない。ジェイナス校長でさえ、最初は見ているしか出来なかったのだ。お互いに怪我をするような事はしないが、一度こじれると後が長いのである。
険悪になった2人に挟まれたリーザは、とりあえず落ち着け、と自分に言い聞かせた。こういう場合、シーグもサフィリアも目的を持たせて、騒ぎを収めていたはずだ。
「と、とにかく。今は急がないとダメよ」
「ですけど、リー姉様！」
食い下がるシンシアは目の色が赤みがかってきている。機嫌が悪くなってきている証拠だ。
「このままじゃ、塔の中にいるシーグが困っちゃうわ」
シーグの名前を聞くと、シンシアは口を閉ざした。アイフェも表情を改める。そして、2人の間に走った緊張感は氷が解けるように消えてなくなる。出会って数日しか立っていないのに、2人の中ではシーグの存在は相当に大きくなっているようだ。

やっぱり自分に先生は務まらないんだろうな、とリーザは思った。そもそも、サフィリアがいない状態で学校は続けられるのだろうか。

そう考えた時、リーザは心臓をつかまれたような不安を感じた。

この戦いに勝てば、ルパート・マードックが陰謀を働いていたと暴く事になる。そうすると、同族であるジェイナスの立場も変わってくるはずだ。フェルナンディと他の6家の軋轢が強すぎるからこそ、中立的立場の強いマードックからジェイナスが責任者に選ばれていた。その均衡が大きく揺らごうとしている。

学校の中に自分と子ども達だけが取り残される。そんな光景を想像して、リーザは足元が崩れ去るような気がした。

「リー姉様？」

シンシアに問われて、リーザは気を取り直した。アイフェはすでに塔の入り口にいた。物陰に隠れながら、入り口を確認している。リーザも持ったままのカラシニコフ爆弾を握りなおし、アイフェのほうへと歩いていった。

地下への入り口は薄暗い。階段が終わっても奥に続いているようだ。

「ここからじゃ、よく見えませんわね」

アイフェと並びながら、シンシアが階段を覗き込む。

「だけど、風が流れてくるよ」

「つまり、あの2人は入り口を締めずに出てきたという事ですわね」

「ありゃ？」

アイフェが耳を澄ませたので、リーザは動きを止めた。邪魔にならないように息も止める。

「足音は1人だけだ。ウロウロと歩き回っているね。ちょっと倒してくる」

忘れ物を取りに行くような気軽さで、アイフェは階段を下りようとする。シンシアは慌ててアイフェをとどめる。

「魔術の罠があるかもしれません。私も一緒に行きます。リー姉様は後ろからついて来てくださいね」

「う、うん。分かったわ」
階段を下りようとした所で、意を決したようにシンシアは振り返る。
「この状況ではその爆弾は使いにくいと思います。閉鎖された場所では私たちも巻き添えを受けてしまうし、奥に踏み込めなくなるからです」
「あ……」
言われてから始めて、リーザは気づいた。そういえば、自分の塔にいるときにも、火攻めをすると危険だとシーグに言われた。カラシニコフ爆弾が有効なのは、広い場所で風上を押さえている時だ。
しかし、他に役に立ちそうな道具も持っていないし、魔術も使えない。
「私、ひょっとして邪魔なのかしら？」
「ち、違います」
よほど情けない口調だったせいか、シンシアは勢いよく否定してくれた。
「魔方陣を調べてもらったり、魔術の道具を調べてもらったりしてもらわなくては」
「うん、分かったわ。後からついていくから、気をつけてね。無理しちゃダメだぞ」
リーザは意識して明るく微笑んだ。シンシアはアイフェと並んで階段を下りてゆく。
一番下まで降りたアイフェとシンシアは、小声で話し合いながら奥に向かってゆく。そして、シンシアが扉の向こうを覗き込み小さくうなずく。すると、アイフェが地下の部屋に飛び出して行った。
瞬く間に片がついたらしく、部屋の中からアイフェが手招きをしている。シンシアとリーザは塔の地下に侵入した。緑ローブの男が1人、床の上でのびていた。
塔の中は20歩ほどの広さがある円形の空間だった。シンシアの指摘どおりにプロテクションを示す、『△』の文様が刻まれていた。

純粋な緑色の光を放っている事から、罠の存在がないのを確信して手を触れる。
　すると、塔の中にある魔力の流れがリーザには手に取るようにわかった。2階と地下はプロテクション、1階がサモニングの魔方陣だ。
「うん。全部シンシアの言ったとおりよ」
「リー姉様、魔方陣に触れている魔術師の人数は分かりますか？」
「2階に3人、1階に9人、地下は私たちを合わせて3人だけど？」
　それがどうしたのだろうか。すでに魔方陣の形は知っているはずなのに。
「誰も1階から移動していない。つまり、私達の襲撃には全く気づいていないという事ですわ」
「……さすがシンシアちゃん。フィーちゃんがこの事を聞いたら、きっと喜ぶわよ」
　誉めてあげると、シンシアは照れくさそうに頬を染めた。そうしているうちに、1階に続く階段を調べに行ったアイフェが戻ってきた。
「2階には下りる階段があったけど、地下からは1階に上がる階段しかなかったんだ」
　独特の言い回しにリーザは混乱した。一体、どういう意味なのか分からない。
「なるほど。という事は、このまま攻めればシーグさんと挟撃になりますわね」
「うん。それに風が流れてるって事は、戦いが始まればシーグにもバッチリ聞こえるって事だよ」
　アイフェとシンシアはお互いにうなずいて階段に向かって歩いてゆく。何を言われているかわからないまま、リーザは2人の後をついていった。だが、階段を昇ればすぐに理解する事ができた。階段は、1階に続くところで行き止まりになっていたのだ。
　つまり、1階を通らないと2階には行けない構造になっている。

だから、シーグが駆け下りてくれれば前後からの挟み撃ちとなる。
（本当に私って、向いていないみたいね）
鑑定は魔術の力の流れを調べる事と同様に、形や組み合わせのほうが重要になる。自分が触れて気づいた事よりも、はるかに多くの事をシンシアは事前に知っていた。
プルーフ・アゲインスト（積層の鑑定士）などという大層な称号をつけられているが、魔術の品は全部サフィリアやベクター卿の協力で作ったものばかりだ。自分の部屋を城砦化する事や、湖での戦いだって実際にはサフィリアがほとんど考えたものばかりだった。
自分ひとりでは何も分からないし、何も作れない。魔術師としての修行も中途半端だし、平常心を保つ事だってずっと年下の子どもにも敵わない。
このままでは手伝いが出来るどころか、足手まといになるばかりだ。
「リー姉様？」
我に返ると、シンシアが心配そうに顔を覗き込んでいる。
「え、あ、どうしたの」
「大丈夫ですか。なんだか、辛そうですわ」
「あー、ちょっとボーっとしちゃってた？　なれない魔術を使ったかしらね」
「今から、私とアイフェは1階に行きます。リー姉様が魔方陣を破壊したタイミングで飛び込みます。お願いできますか？」
「うん、分かったわ。気をつけてね」
「大丈夫です。すぐにシーグさんが来てくれますから」
「だね！」
シンシアとアイフェは足音を忍ばせつつ、上に向かう階段を昇ってゆく。みんなが遠ざかってゆく事が、リーザ自身の立場を暗示している様に思えた。
リーザは首を横に振って、後ろ向きになっていく思考にフタを閉めた。

魔方陣の構造は単純だ。油をまいてちょっとした火をつける程度で破壊できる。リーザは懐からガラス瓶を取り出すと、魔方陣の上にまいた。そして、手の平を叩いて火をつける。魔方陣の文様が黒くただれてゆき、魔術の力の流れが失われたのが分かった。

それは、塔のいる魔術士全員が知る事となるだろう。

1部ー29　ゼックリと黄色ローブ

＊

階下が急に騒がしくなった。次にバチュンという聞きなれた炸裂音が響く。

シンシアたちが地下から上ってきたのだ。シーグはあらかじめ緩めておいた石畳に、窓枠の木切れを突っ込んでひっくり返した。石畳の一枚が持ち上がってめくれ上がる。これで、魔方陣は無力化したはずだ。

シーグは下に続く階段を三段飛ばしに駆け下りていった。1階では黄金色の輪が縦横に駆け巡った後に、シンシアの手元に戻った。アイフェも、魔術師の下あごに頭突きを食らわせて一人を倒している。床に描かれた魔方陣は2階のものよりも巨大で、五ぼう星の中央に十字の印が刻まれている。

9人の魔術師のうち、すでに3人が床に寝転がっていた。だが残る6人は指で印を結び、呪文を唱えながらシンシアに狙いをつけている。シーグの出現に気づいたものはいない。

部屋の反対側にいるシンシアはシーグの姿を確認すると、アイフェと連れ立って一度、下へ続く階段へと引いていった。

「逃がすな！」

「追いかけるんだ！」

聞き覚えのある声。壁の向こうに目標を失った魔術師達は、手に手に火や雷をもったままシンシアとアイフェを追いかける。

その無防備な背中に向けて、シーグは抜き打ちざまに2本の短剣を投げつけた。狙いは違わず2人の魔術師の背中と太ももに突き刺さる。とても致命傷とはいえない傷だが、手に持った炎が爆発し、雷撃が飛び散る。2人の魔術師は自らの魔術によって自滅してしまった。

シーグは更に2本の短剣を両手で引き抜く。そして、中央で集まっている3人と部屋の端にいる1人に向かって狙いをつける。しかし、構えただけで、情けない声と共に魔術が暴発し、壁際の魔術師はばたりと倒れた。

狙いを変更し、中央にいる3人に向かってナイフを投げつける。しかし、1人が進み出ると手に持った松明を腰ダメに構えた。すると、拳大の火球が3つ飛び出し、空中で立て続けに爆発する。爆風を受けたナイフは軌道をそれて地面に落ちた。松明の先には、新たな炎が生まれてシーグに向かって飛ぶ。

今度は小さな火球で爆発もほとんどない。当たっても戦闘不能とはならない程度だ。しかし、狙いは正確で間断がない。

炎の攻撃を突っ切ったとしても、すでに呪文を唱え始めた魔術士2人には対応できない。シーグもまた、アイフェやシンシアと同じように、階段の陰に隠れるしかできなかった。そして、距離を置いたからといっても大技を使う事もなくシーグに狙いを定めている。

炎を包む魔術の光は透き通るような赤色だった。威力は小さくとも、狙いは正確。他の魔術師は混乱から自爆していたが、彼は冷静なままだ。そして、けん制という役割だけを適格にこなしている。戦いのために魔術を使う事に慣れている。１０歩という制限に縛られたリーガル・バックラーよりも懐に飛ぶ込むのは難しい。

2人の魔術師はマイリグとイッサだ。決闘の日にウィングス通りで襲い掛かってきた連中である。

最後の1人は知らないが、薄い黄色のローブを着ている。色の薄さは魔術師としての地位の高さを表す。おそらくこの男が、ラスティーなのだろう。

「シージペリラス。再びこうやって会えるとは思わなかったぞ！」

まだ額にうっすらと傷が残っているマイリグは、呪文を唱え終えてから言った。松明のような杖の先端には炎が燃え盛っている。そして、背後に立つ男は鋼鉄の手甲を身につけていた。手甲には澄んだ緑色の輝きがある。プロテクションの魔術の準備が万全という意

味だろう。
　見覚えがある男達は、ウィングス通りで襲い掛かってきた2人組みだ。
「お前らはゼックリか」
　マイリグとイッサは一瞬キョトンとした。しかし、すぐにシーグの意図を察して表情が一変する。マイリグは怒りに、イッサのほうは警戒にだ。
「なんだと、俺の名前は――」
　シーグが叫ぶと、松明の男は過剰に反応した。ムキになった声と共に、松明に宿る炎は巨大に膨れ上がる。しかし、その一方で赤色に淀みが生まれた。隙ありとみて、シーグはシャープネスに手をかけて、体勢を低くする。
「口車に乗るな、奴の作戦だ」
　しかし手甲の男、イッサがとどめると、炎は元通りの澄んだ赤色に戻った。この2人には、言葉で攻撃しても無意味のようだ。
「そこの黄色のローブの男がラスティーだな」
　ローブと同じ明るい黄色の光は、床に描かれている魔方陣に吸い込まれていった。十字と星の先端である9つの点が輝き始める。
「そうだ。先日は世話になったな、シージペリラス」
　ラスティーは鼻にかかったような陰湿な声で答えた。アゴを上げて人を見下すような喋り方をする。こういう奴には――。
「黄ばんだローブを着るとは、洗濯の方法を知らんのか？」
　呆れるように言うと、ラスティーは顔に血を昇らせた。魔術の光にも淀みがうまれる。思った通りに誇り高い男のようだ。効果ありと見てシーグは頭を全力で働かせた。
「小便色のローブなんか着ても、惨めに見えるだけだぞ」
　今度は諭すような口調で言いながら、3人の背後に視線を飛ばした。階段から顔をのぞかせたアイフェはシーグの意図を察してくれた。足音を忍ばせてゼックリ達の背後に回りこむ。
　シーグはシャープネスを鞘走らせ、階段の陰から姿を現した。い

つでも逃げられる位置、１０歩の距離を空けて対峙する。これは剣と魔術の狭間の位置取り。互いに次にどう動くかを探り合う拮抗の間合いなのだ。相手が魔術を使えば、シーグは回避に専念する。そうすれば、魔術終了後にできる隙をアイフェが見逃すはずがない。

マイリグとラスティーが切り付けるような目付きで睨んでくるが、イッサは怪訝に顔をしかめて後ろを振り返った。同時にアイフェが下手投げに、手に持ったビンを投げつける。

鉄壁はビンをなぎ払うかのように手を振り下ろす。それと同時に、緑色の光は３人の周囲に広がって魔術の壁を作り上げた。アイフェの投げビンは、壁にぶち当たって砕け散る。中に入っていた液体が壁を伝って床にまで流れてゆくと、わずかな腐臭と共に魔方陣が溶けてゆく。

ビンの中身は強い酸だったのだ。シンシアの入れ知恵に違いない。

魔方陣の一部が形を失うと、小便色の男の周囲に満ちていた黄色い光も空中に散って消えうせた。更にシャックリの杖に灯っていた炎も揺らいで消える。密閉された防御壁の中では、長時間炎を灯せないからだ。リーガル・バックラー（王の盾）の守りと違って、魔術の防御壁は空気を通さないからである。

だが、急に発生させた魔術の壁には白いひずみが浮き上がっている。シーグはシャープネスを構えて突撃する。鉄壁が壁の向こうで呪文を口ずさむと、ヒビが消えてゆくように白い色がなくなっていく。だが、すべてが消えるよりもシーグの攻撃のほうが早い。

その時、ラスティーが腕を大上段から振り落とす。すると、左側に黄色の塊がうまれた。とっさに腕をかざして反対側に飛んだが、黄色の塊はシーグに向かって襲い掛かって来たのだ。

空気に殴りつけられたような衝撃。さしたる威力はなかったが、場所がまずかった。左肩が焼け付くように痛む。ラスティーが更に腕を振り挙げたので、シーグは距離を置いて逃げたが追撃はない。そうしている間に防御壁の白い筋は完全に消えてしまった。

射程は５歩程度。サモニング（召還）ならば防御壁の向こうから

でも攻撃可能のようだ。ルパートが空を飛ぶときに使っていた魔術と同じものなのだろう。

「伊達で小便色、もとい薄い黄色のローブを着ているわけではないようだな」

シーグの言葉は防御壁に阻まれて届かなかったはずである。しかし、ラスティーは怒りに顔をゆがめている。彼もアイフェと同じように読唇術を身につけていたのだろうか。

一方、マイリグの杖は刺々しい赤色の光を放ち始めた。壁越しにも使えるウーンズ（負傷）の魔術だ。シーグは攻撃をあきらめて再び１０歩の距離を置いた。

決定打にならなかったが、他の魔術士すべてを倒し、魔方陣を破壊できただけでも十分というべきだ。シーグは部屋の壁沿いを大回りに走って、アイフェと合流する。

「腕は平気？」

シーグは首をわずかに横に振った。今の状態では左腕はまともに使えないだろう。階段の向こうからシンシアも出てきたので、アイフェは気を利かせてそれ以上何も聞かなかった。

「シンシア、次にあいつらはどう動く？」

いつも明快な少女からは返事がない。振り返るとシンシアのほうが気まずそうに目線を逸らした。

「どうした？」

「な、何でもありません。シーグさんが変な事を言うからです！」

だったら、何でもなくないじゃないか。と、シーグは思った。

「ゼックリの事か。一応、名前は覚えたんだぞ」

「そっちじゃありません！」

「小便色の方か。あれは――」

いい終える間もなく、シンシアがきりつけるような勢いで睨んできた。挑発の言葉は、ラスティーだけではなくシンシアにも影響を

及ぼしてしまったようだ。
「作戦なんだ。それに戦いの最中なんだから細かい事は――」
「あれほど高密度の防御壁でしたら、すぐに限界が来ます。長時間は持ちません。私たちが待っているだけで勝利できますわ！」
シーグの言葉をさえぎって、八つ当たり気味に説明するシンシア。
「その間、何もしないってわけじゃないだろう」
「大した事はで来ません。サモニング（召還）には触媒と魔方陣が不可欠です。ウーンズは射程外。魔方陣を破壊した時点で私たちが有利――」
シンシアの声は徐々に平静を取り戻していったが、最後には自信を失ったように尻切れになった。ラスティーが懐から、キラキラと光るガラス瓶を取り出したせいだ。
ビンの中身が劇薬だったとしても、防御壁を解かないといけないし、そもそも命中しなくては意味がないだろうに。
「アレがそんなに危険なのか？」
「ラスティーが称号を得るきっかけとなった秘術です」
シンシアの声には賞賛の響きがあった。その上、シンシアの視線はラスティーに釘付けになっていた。相手の反応を警戒するためでもあったが、同時に目の前で繰り広げられる秘儀を見逃すまいという思いもあるのだろう。
マイリグが手甲で防御壁に触れる。すると、壁は円形から正方形に変化した。ラスティーがビンのふたを開けると、中から光の粒が飛び出して、防御壁に張り付く。薄暗い部屋の中で妖しく光る粒は、瘴気の沼地に現れるウィスプのように見えた。
そして、マイリグの方が防御壁を撫でるように杖を動かすと、光の粒が集まって幾何学模様へと変化する。床に描かれていたのと同じ、五ぼう星と十字を組み合わせた魔方陣である。
「即時展開型、簡易魔方陣。七家が総出で開発に取り組んでから１００年。実現不可能と言われていた秘儀ですわ」
シンシアは目を輝かせて、夢見心地につぶやいていた。だが、敵

の行動に感動している暇はない。ラスティーはすでに呪文を唱え始めているのだ。敵に対して感心している暇はない。

「で、俺達はどう戦う。厄介ならいっそ逃げるか？」

シーグが強い口調で言うと、シンシアは我に返った。

「私たちが撤退しても、追撃に向いた怪物を召還するだけでしょう。留まって戦うのが最良です。援護してください」

シンシアは自らのフィーリアであるプラチナの鎖を指に絡めた。ラスティーに追いつこうとするように、早口で呪文を唱える。説明好きの少女が言葉少なく口を閉ざすほどの緊急事態のようだ。

そして、魔方陣の真上の渦巻く黄色の光が一挙に収束した瞬間を狙って、シンシアは鎖を投げつけた。突如として魔方陣に表れた黒い塊が、雷に打たれた痛みに身をよじりながら落下する。シーグはすかさず走りこんで、その生き物の首をはねた。同時に後方に飛んで、防御壁の中からウーンズで狙いをつけるシャックリから逃れる。

飛び出してきたのは漆黒の毛皮を持つ狼だった。通常の灰色狼よりも2回りは大きい。首だけになった狼は、恨めしそうにシーグたちをにらみつける。しかし、やがて炭が崩れるように形を失ってゆき、体も消えうせた。

「あれはなんですの？」

青ざめたシンシアは、彼女らしくない素っ頓狂な声を出した。

「闇狼だ。レイザークの魔境地帯の奥深くに住んでいる。普通の狼よりも巨大で、その分凶暴で獰猛なんだ」

「く、首だけでも生きていましたわ」

シンシアの上ずった声が感情を物語っていた。確かに12歳の少女には刺激が強すぎる。と、思ったが10歳のアイフェの方は「おおー」と、興味深そうに目をぱちくりさせていた。

「生命力も強くて、倒しても闇に戻るだけで死にはしない。住処に戻って2、3日で復活するらしい」

シーグはロディウスの言葉を思い出しながら説明する。その時、背後でガタンと大きな音が鳴る。

「ななななな、何あれ？」
動揺以外の何物ではない声。階段を覗き込んでみると、リーザが尻餅をついていた。ただでさえ大きな瞳が、まん丸に見開かれていた。完全に動転している。
「落ちついてください。リー姉様。なんとかしますから」
シンシアはなだめるように言った。青ざめてはいるが、声は元通りになっている。目の前で混乱している人を見ると、却って落ち着きを取り戻すようだ。
「バンパイア（吸血鬼）と似ていますわね。いいえ、魔術や剣が普通に効くところを見ると、それよりはよっぽど対処しやすいですわ」
理論的な意見を口にしているうちに、シンシアは落ち着きを取り戻していった。顔色が悪いのは相変わらずだったが。
「次、来るぞ」
ラスティーが再び、呪文を唱え始めている。シンシアも同じく雷撃の呪文を唱え始めた。緊張した面持ちは相変わらずだが、鎖に収束していくブラストの赤色には淀みはない。
ラスティーとシンシアは同時に呪文を唱え終わった。魔方陣に黒い影が浮かび上がると同時に、シンシアの投げた鎖が大きく弧を描いて飛ぶ。そして、今まさに防御壁から飛びかかろうとしていた闇狼に直撃する。
雷撃を受けた闇狼は、体勢を崩してシーグの前に落ちてきた。ウーンズの射程から完全に外れた位置である。シーグは一歩踏み出して、シャープネスを閃かせるだけで闇狼の首をはねる事ができた。
「数日後に復活とは言っても、この状況では意味がありませんね。更に出現場所も明らかならば、こちらが常に先制攻撃を仕掛けられます」
「具体的にどう戦う？」
「ラスティー・クルスの呼び出す怪物を倒し続ければ、イッサ・ホコブズの張り巡らせた防御壁が解除可能になります。それまで粘るしかありません」

「だけど、光虫で壁の緑色が白く塗りつぶされている。あれじゃ、ひずみの位置がよく分からないぞ」
「そんな……」
シンシアは言葉を濁した。考える間もなく、再び闇狼召還の兆しが見えた。

1部－30　刹那の勝機

＊

7体目の闇狼が、黒い霧となって消えた。
防御壁は相変わらず白色の発光で塗りつぶされており、防御壁が弱まっているかの識別が出来ない。ラスティー達は余裕の笑みを浮かべている。
一方、攻撃の魔術を連発したためにシンシアの肩で息をしていた。シーグも肩の痛みは酷くなるばかりだ。人間ならばともかく、狼が相手ではアイフェの体術やナイフも効果がないだろう。リーザは完全に萎縮しているから、戦力にならない。
「このままでは、不利ですわ」
そういい捨てたシンシアは、呪文をつぶやきながら手の平に透明な石と黒と黄色の粉――硝石と粉末になった硫黄と炭――を乗せる。すると、手の平に拳大の炎が出来上がる。気合の声と共に、防御壁に向かって投げつけた。部屋中に爆発音が鳴り響いて、熱風が吹き付けてくるほどの威力。しかし、壁はビクリともしなかった。
闇狼出現の合間を縫って、触媒を変えながらこれで三度目。だが、効果があったとは思えない。
「並大抵の熱や光では、光虫を散らす事もできないようですわ」
シンシアは額の汗を拭って、肩を落とした。
「シーグさんに色のひずみが見えない事を承知の上で、堅固さを犠牲にして持続時間と耐熱性を延ばしているんです。光の魔方陣にこんな使い方があるなんて、さすがは灯火の幻術師というべきですわ」
落ち着いて感心している暇もなくラスティーは再び呪文を唱え、シンシアもつられるように呪文を唱え始めた。
シンシアが現れる闇狼を手前に押し出してくれているから、シャックリのウーンズの射程外で止めを刺すだけで済んでいる。防御壁

に直接攻撃を加えるにしても、シャックリのウーンズを一度は受けなければならない。今度受ければ、剣を持てなくなるだろう。

完全に敵のペースに巻き込まれている。戦い方を変えないと、このままではジリ貧だ。

黄金の円盤が、大きく弧を描いて闇狼の背後に迫る。しかし、雷撃の魔術は闇狼に当たることなく、空中で四散した。突如出現した魔術の壁が闇狼を守ったのだ。

「マイリグ・ブレストの放つ光が緑色です！」

つまり、いつの間にかウーンズからプロテクション（防護）に切り替えていたようだ。色の事を言われても、シーグには白色と黄色混じりの赤と緑の区別はつかない。シンシアを消耗させて注意力を殺ぐ、その上で赤緑色盲であるシーグの特性をついたのだ。ラスティー達3人の会心の笑みを見る限り、狙ってやった事は疑いない。

シンシアはプラチナの鎖が戻ってくるなり、再び呪文を唱え始めた。しかし、闇狼は低いうなり声を上げながら、体勢を低くした。

「みんな、一度階段まで下がれ！」

アイフェは即座に反応し、シンシアも呪文を唱えながら後退を開始する。しかし、ただ1人だけ出遅れたものがいた。

「リー姉、逃げろ！」

叫んだシーグの頭上を、闇狼は軽々と跳び越してリーザに飛び掛った。恐怖におののく小動物のように、リーザは完全に棒立ちになっている。

閃いた闇狼の爪とリーザの間に、シンシアが立ちふさがった。そして、至近距離から雷撃の魔術を放つ。急ごしらえの雷撃は、衝撃音も威力も今までとは比べ物にならない程に小さかった。闇狼の勢いを殺いだものの、鋭い爪はシンシアの肩口をザックリとなぎ払う。少女は吹き飛ばされて、壁に激突した。

シーグはシャープネスを下段に構えて突撃する。雷撃を受けた闇狼の動きは明らかに遅くなっていた。シーグが下段から切り払うと、シャープネスの鋭さの前に闇狼の首は簡単に宙を舞う。

しかし、シンシアはぐったりとしたまま動かない。リーザは口元を押さえて戸惑うしか出来ないようだ。しかも、魔方陣からは次の闇狼が姿を現し始めている。

「リー姉、シンシアを頼む。アイフェは2人を守ってくれ」

シーグは地下へ続く階段の前に立ちふさがった。ラスティーたちまでの距離は１０歩。しかも、相手は防御壁の中にいたままで、闇狼が無限に湧き出てくるのだ。

次の闇狼は魔方陣から現れた。だが、すぐには飛び掛らずにラスティー達の前に立ちふさがる位置、シーグから5歩の距離で立ち止まって様子を伺っている。なす術もなく見守っていると、更にもう一体の闇狼が魔方陣から現れた。2体に増えた闇狼は互いにけん制するような形でうなり声を上げている。丁度、闇狼たちとシーグとは丁度5歩の正三角形を描くような位置取りになった。

シーグはそこに違和感を感じた。

ベクターがワイバーンを呼び出したときには、一糸乱れぬ連携を取っていた。人間に飼いならせるはずのないワイバーンが、どうして人間を背中に乗せるなどという事をしたのか、シーグには不思議で仕方がなかったのだ。つまり、あれは『なんでもあり』のベクターなればこそ出来たことではないのか。

闇狼は群れで狩りをする事がない。常に一体で行動し、自分の縄張りを極端に意識する。他の生物が縄張りに侵入してくれば、情け容赦なく襲い掛かるのだ。つまり、一糸乱れぬ攻撃にはなりえないはずだ。

そこに付け込む隙はないか？　シーグは必死に頭を働かせた。自分の判断に3人の命が掛かっている。

ラスティーは呪文を途切れさせる事なく続け、魔方陣が輝き始めている。これでは3体目の登場も間もなくだろう。そうすれば、戦い方をどう選んだ所で勝ち目はない。だから、シーグは一か八かの賭けに出ることにした。

互いにけん制しあう闇狼の1体に突撃したのだ。もう片方の闇狼

は、シーグではなくシンシア達に向かって体の向きを変える。やはり、闇狼は仕留めやすいと判断した獲物を真っ先に襲った。

だから、シーグは3歩の距離からシャープネスを振りかぶり、シンシア達に向きを変えた闇狼めがけて投げつけたのだった。さすがの怪物でも、注意を逸らした時は隙ができる。とっさの回避も間に合わずシャープネスに串刺しにされて、闇狼は断末魔のうなり声を上げて床を転がりまわった。

シーグは右手を素早く引き戻し、ベルトのナイフに手を伸ばす。しかし、正面から襲い掛かってくる闇狼には間に合わなかった。

闇狼の常として首筋めがけて真っ直ぐに牙を向けてくる。シーグは左腕をかざして、闇狼の攻撃をふせいだ。噛付かれる事は回避したものの、左腕がザックリと爪に裂かれる。続いて前足で胸を押さえつけながら圧し掛かってきた。地面に倒れたシーグは息が詰まって、意識が飛びそうになるのを何とかこらえる。闇狼は勝ち誇った雄たけびを上げた。口を一杯に広げて白い牙をむき出しに、シーグの首筋めがけて噛付いてくる。

その瞬間こそ、シーグの待っていた勝機だった。右手のナイフを抜くと同時に、闇狼の口を目掛けて拳ごと叩き込んだのである。鋭い牙が腕を裂く痛みも構わずに、上半身の力すべてを振り絞って叩きつける。

肘まで闇狼の口に入り込み、ナイフの切っ先は頭上から飛び出して銀色の輝きを見せている。闇狼はうめき声にならない喘ぎをもらして、ゆっくりと形が崩れていった。

ラスティー達は信じられない、という様子でシーグを見守っていた。狼の口の中に、手を突っ込むという行為に愕然としていたのだ。

もちろん、呪文は中断されている。だから、シーグは消え行く闇狼の口から手を引き抜くと、一挙動で立ち上がり床に転がったシャープネスを手に取った。そして、魔方陣に向かって風のように走って行き、今まさに姿を現そうとしていた闇狼を袈裟切りにしたのだった。

突撃の勢いは殺さずに防御壁から離れようとするが、目の端に赤色に輝く松明のような杖が目に入った。赤い光が爆発するように輝く前に、シーグは素早く後方に逃れた。

ウーンズだ。

血が噴き出して、服の袖を赤く染めてゆく。しかし3歩よりは離れていたために、表面だけの傷で見た目の出血ほど重症ではない。実際に剣を握る力には何の影響も出ていないのだ。

階段のところまで戻ると、リーザが駆け寄ってきた。シンシアは一抱えもある熊のぬいぐるみを枕代わりに気を失っている。アイフェは悔しそうに唇をかみ締めている。戦いの時に役目を与えられない事が心底悔しい様子だ。

リーザは震える手つきでシーグの右腕に包帯を当てた。

「リー姉、大丈夫か？」

「平気よ、それに怪我しているのはシー坊のほうじゃない」

リーザは気丈に言ったが、病人よろしく血の色を失っているのは彼女のほうだった。足もガクガクと震えていて今にも気を失うのではないかと思わせる。シーグはリーザをここに連れてきてしまった事を後悔した。元々、こんな荒事に向いた人ではなかったのだ。

自称のアイシャ親衛隊に囲まれたときに見せた見事な脱出、湖で銀の魔女を打倒したときの采配。どちらも平然と振舞っているように見えたが、本当は相当に無理をしていたのではないだろうか。

「少しだけど血止めの効果があるの。軽く巻いているだけでも、ウーンズに対抗できるだから――」

「リー姉、また闇狼が出てきそうだ」

「出血が多すぎる。こんな治療じゃ間に合わないわ」

リーザは泣き出しそうな声を出した。目尻にはすでに一杯の涙が浮かんでいる。涙がこぼれる時には、押さえ込んでいた感情が一度に噴き出すのではないかと思えた。そして、リーザが急いで巻いた包帯にはジワジワと血がにじんでゆく。

赤色がしみこんで、白色を染めていく。それらを見ているとシー

グの脳裏に閃くものがあった。どうしてこんな基本的なことに気づけなかったのか。

「リー姉、この前使った油はまだあるか？」

「う、うん。まだあるわ。だけど、火は通じないんでしょ？」

「油だとずっと燃える。鉄の板でも石の器でも、ずっと火に当てていたら、そのうちに熱くなるだろ」

この場合に必要なのは、派手な爆発よりも持続的な光と熱だ。魔術の火球よりも、燃え続ける炎が有効なはずである。

「魔術の壁って、熱まで完全に遮断できるのか？」

「さ、さあ。私にはよく分からないわ」

確かめたくてもシンシアは気を失ったままだ。

「よし、やってみてくれ」

「だけど、もしも無理だったら？」

リーザは不安げに言う。

「そしたら、次の手を考える。とにかく試すんだ」

シーグはそう言い捨てて、黄色の光が魔方陣の上に集まって闇狼の姿が現れると同時に駆け出した。

最後には飛び上がって防御壁の上でゆっくりと形を取りつつある闇狼に切りつけた。両断したという確かな手ごたえ。しかし、狙い済ましたマイリグの杖がシーグを狙う。

マイリグの放つウーンズなど、ガリウスに比べれば問題ではない。リーザの包帯さえあれば、簡単に跳ね返せるはずと自分に言い聞かせた。杖の距離からは赤い光が爆発すると同時に、腕全体に痛みが走る。

腕の裂傷から出血が酷くなったのはもちろん、両肩が殴りつけられたように痛みだす。ウーンズは切り傷だけではなく、あらゆる傷を悪化させるらしい。今度は3人ともシーグを用心深く見つめている。多少の事では虚を付くことは出来ないだろう。

その時、リーザがカカシのように突っ立った奇妙な体制、間接が詰まったような固いな動作で長いビンを投げつけた。外すのではな

いかと心配したが、ビンは見事に命中し赤色の液体を撒き散らす。シーグはふと引っかかった。

赤色……オリーブオイルはそんな色だっただろうか？

その答えは鼻を突くような刺激臭だった。シーグは息を止めて大きく距離をあける。そして、肩と腕の痛みも無視して左手で鼻を抑えた。

「こ、これは何だー！」

シーグはリーザに向かって怒鳴りつけた。

「あ！　赤ワインのビンと間違……」

リーザは呟いた後に、慌てて鼻を押さえた。アイフェは、ひっくり返って顔全体を押さえている。ワインが悪臭を放つほどに発酵するとは、一体どんな方法で保存をしていたのか。

「オイルだ、オイル！　この間使っただろうが！」

「わわわわわわ、ごめんなさい」

リーザは泣きそうな表情で、慌てて腕の下に手を突っ込む。今度はうっかりビンを落とすのではないかとハラハラしたが、闇狼の出現位置から大きく離れるわけにも行かない。

実際に、次の闇狼がゆっくりと姿を現し始めている。しかし次の瞬間、誰もが思いもよらない事が起きたのであった。

1部－31　うっかりの効用

出現と同時に闇狼は犬のように情けない悲鳴を上げ、闇の塊からゆっくりと狼の形に変化してばったりと倒れる。床に落ちた闇狼は全身をひくつかせて完全に悶絶している。

人間でさえ鼻をつまむ悪臭だ。闇狼ともいえども、狼の一種。剣よりも雷撃よりも恐ろしい奇襲となったようである。

シーグは慌ててリーザの下に駆け寄った。そして、案の定リーザは取り出した大きな瓶を手を滑らせて落としそうになっている。アタフタと踊りのような奇妙な仕草でビンを追いかけている。そんなリーザとビンを、シーグは体ごと受け止めた。

「ご、ごめんなさい」

「だ、大丈夫……」

じゃないぞ。いろんな意味で、と言いかけたのを飲み込む。正直、全身が引き裂かれるように痛んだが、それを気にしている場合ではない。そうこうしている間に、次の闇狼が出現しやはり同じように悶絶して倒れた。

ラスティー達は何が起こったのかも分からずに完全に混乱している。それは彼らがまとう魔術の光が、大きく揺らめいている事からもわかった。今こそがチャンスだ。

シーグは自分のナイフを引き抜いて、リーザに手渡した。

「これに布に巻いて、火をつけてくれ。俺がオイルを投げたら、アイフェがナイフを投げる。分かったか？」

「う、うん」

深くうなずくリーザ。正直、着火までを今のリーザに任せるのは恐ろしかった。

不安は残るが、この機会を逃すことは出来ない。シーグはビンのフタを開けて、念のためにオリーブオイルである事を確認する。そして、５歩の距離をあけて防御壁に向けて投げつけた。この場合、

四角形の構造が仇となってしまった。てっぺんに乗ったビンからはとめどなくオリーブオイルが流れ出て、防御壁に満遍なく広がった。続いて、火のついたナイフをアイフェが投げつける。

これから何が起こるのかを悟った3人は、一斉に顔色を変えた。同時にオリーブオイルの上にナイフが落ちて、防御壁全体が燃え上がる。

炎にさらされて酢の悪臭は消え去ってゆく。あるいは、鼻が利かなくなっただけなのか。闇狼が目を覚ますのではないかと恐れたが、すでに痙攣さえも弱々しく口からはヨダレが垂れていた。

防御壁の中にも徐々にだが変化が起こり始めていた。魔方陣を形成していた虫達が徐々に光を失って落ちてゆき、魔方陣が消えてゆく。やがて、プロテクションの緑色があらわになり、そこに走るひずみをシーグは捉える事ができた。

シャープネスを構えたシーグを見て、ラスティーとイッサは一挙に青ざめてお互いに抱き合った。防御壁の中では意味もないだろうに、お互いに押し合いへしあいして自分が後ろに隠れようとする。まるでゴブリンのようだ。

それが無駄だと気づくと、ラスティーは懐から宝石をあしらった布を取り出した。レティシアのスカーフだ。マイリグが指先に火をつけて、スカーフに近づけている。

「それいじょうちかよれば、もやすぞー」

パクパクと口を開くラスティーの言葉をアイフェが教えてくれた。シーグにとっては大切な証拠。レティシアにとっては瞳と同じ。そんなものを盾に取られては、身動きが取れない。

イッサは落ち着いた様子でアイフェとシーグと交互に見比べて、口を開いた。

「お？　しゃーぷねすをおいて、このとうからでてゆけ」

アイフェが早速通訳してくれる。

しかし、撤退は事実上の敗北だ。それに、魔方陣を組みなおしたラスティーの追撃があるかもしれない。判断に迷っていると、背後

からリーザの声が聞こえてきた。
うつむいているので泣きべそだと思ったが、よく聞いてみると魔術の呪文である。魔術の気配を察知したマイリグがリーザに目を向ける。同時に、リーザも涙を散らしながら顔を上げた。全身が黄色の淡い光に包まれている。
つまり、サモニング（召還）の系統だ。
「来たれ、クリス・アイリス！」
おっとりとしたリーザには珍しく毅然とした声。レティシアの水晶球を片手に、ラスティーが持つスカーフを指差した。すると、スカーフはラスティーの手から消えうせ、リーザの頭上に現れたのだ。
「で、できたぁーー」
情けない声でつぶやいたリーザの頭にスカーフがヒラヒラと落ちる。リーザはスカーフに視界をふさがされて、「あわあわ」と言いながら右往左往している。絶対に落とさないようにと、両手で水晶球を抱えこんでいるから手を使えないのだ。
シーグは改めてラスティー達に向かって歩き出す。すると今度は、膝をついてシーグを拝み倒すような仕草を見せ始めた。なりふり構わぬ無様な様子を見ていると、なんだか哀れに思えてきて、シーグは攻撃をためらった。
シーグが剣を下ろすと、今度は3人そろって驚いた顔をしつつ、倒れている闇狼を指差している。壁の向こうなので聞こえはしないが、大声で怯えながら、警告の声を発しているようだ。
「……」
呆れる気持ちを抑えつつ、闇狼のいる背後を見る――ふりをしてすぐに視線を戻した。すると、マイリグは杖を構えなおし、壁ギリギリに杖を押し当てていた。火勢は相当に緩やかになっていて、もう少し待てば完全に鎮火しそうである。なるほど、もう少しだけ時間を稼ごうというつもりか。
浅はかな企みに、シーグは同情する気持ちなど吹き飛んだ。振り返りざま緑色に走る白い筋を、シャープネスで寸分違わずに切断す

る。その瞬間、キーンという金属音が鳴り響き、魔術の防御壁は完全に消滅した。

燃え上がりながら落ちてくるオリーブオイルをシーグは素早く後方に下がる事でよけた。しかし、3人は頭上に降りかかる炎の塊を受け止める羽目になる。熱さに悲鳴を上げながら床を転げ回る3人。

オイルはほとんど燃え尽きているし、大半が床に落ちて火勢もそれほどではない。更に、ローブは布製であるにもかかわらず全く燃えず、炎が広がらないのだ。先日のマイリグの自爆備えて防火の魔術でもかけられていたのだろう。放っておいてもそこそこの火傷で済みそうな気がした。

しかし、スカーフで口元を押さえて今にも泣き出しそうなリーザと、興味津々のアイフェを見ているとそうもいかないと思う。

だから、シーグはオイルがしみこんで燃え上がっている部分だけに狙いをつけた。別に手元が狂っても構わん、と思いながら転げ回る3人のローブを切り刻む。狙いは違わず、背中や尻がむき出しになった3人はぐったりと床に倒れこんだ。

「見ちゃダメ！」

相変わらず興味深々なアイフェの目元を慌てて押さえると、リーザは体ごと後ろを向いた。しかし、アイフェがジタバタと抵抗している。

恨めしげにシーグをにらんでくるマイリグとイッサは立ち上がる気力もない様子だ。しかし、念のためと首筋に一撃を加えて黙らせる。最後のラスティーは、止めを加えるまでもなく気を失っていた。

闇狼のほうは相変わらずピクピクと痙攣したまま動かない。下手に刺激するよりは、ライス達が来るのを待って対応を聞いたほうがいいだろう。

シーグはシャープネスを鞘に落とし込んで一息をついた。右手の出血は止まる様子がないので、左手と口を使って動脈の上に布を縛り付けて止血する。

「お、終わったの？」

リーザはアイフェの顔を押さえ込んだまま、緊張した声で聞いてくる。
「ああ。後はライスたちに任せよう」
「そぉー、よかったぁー」
リーザはクタクタと崩れるように座り込んでしまった。脱力するタイミングが少しおかしいと思ったが、細かい事は気にしないでおこう。
リーザは、お気に入りのぬいぐるみであるかのようにアイフェを抱きしめると、銀色の髪に頬を寄せた。アイフェのほうでもうれしそうにリーザに体を預ける。
「ねえ、怪我でもしたの？」
怖いもの知らずの少女は、不思議そうに首をかしげた。
「あはは。安心したら、腰がぬけちゃった」
リーザは泣き笑いのような情けない声で答えた。
「ぬける……？」
アイフェは神妙に呟くと、突然リーザの腰の辺りをじっと見つめた。そして一瞬のうちにスカートに手を伸ばすと、両手で力一杯めくり上げたのである。
「え？　キ、キャーーー」
リーザの悲鳴から遅れて半瞬、今度はシーグのほうが体ごと後ろを向く番だった。
「キャハハハハハハ。アイフェ。コラ。くすぐったい、ダメだったら」
悲鳴は途中からくすぐったそうに笑い声に変わる。それと、リーザとアイフェが転げまわっている音が聞こえてきた。
「え？　うそ、やだ。脱がしたらダメ……ヤン」
リーザの声が差し迫ったものとなり、やけに色っぽくなってきたところでシーグは意を決して振り返った。そして、リーザのスカートから見えているアイフェの足をつかんで無理やり引きずり出す。
「むぅー、以前と何も変わっていないんだよ」

床にぺたんと座り込んだまま、思慮深げに言うアイフェ。
「腰はちゃんとあるし、この間と全部一緒だよ。シャツとパンツがつながった下着で色は――」
アイフェの頭にシーグは容赦なく左手の拳骨を落としてやった。
リーザは慌ててスカートの乱れを直している。シーグと目があうと、顔を真っ赤にしたままでそそくさと後ろを向いてしまった。
「痛いよ、シーグ。女の子を殴るのはいけない事なんだよ」
「スカートの中に頭を突っ込むなんて最低だ！」
不満を顔一杯に浮かべてブーたれているアイフェ。対してシーグは剣呑な表情で睨み返した。
「腰が消えたなんていうから心配したんだよ」
「あるに決まってる！」
「だけど、リーザは無くなったって――」
「言ってない！」
最後まで聞くのもバカらしく思えて、シーグは怒鳴りつけた。
「腰がぬけたって言ってたよ」
「意味が違うだろうが。大体、嫌がる事はしないって約束しただろ」
「最初は笑っていたもん！」
「……」
猛然と言い返してくるアイフェにシーグは頭を抱えたくなった。
実際に最初は楽しそうだったからだ。
アイフェと問答を繰り返す無益さをシーグは改めて思い知った。
サフィリアもこんな気苦労を毎日していたに違いない。だから、シーグは作戦を変えることにした。
「そうか、自分は悪くないのか。それでいいんだな？」
押し殺した声で言うとアイフェは怯んだ。そして、警戒するように黙り込んでしまった。やっぱり悪い事をしたと言う自覚はあるらしい。それを承知の上でやっているのだ。相当にタチが悪い。
「だったら、俺は体調が悪い。だから訓練してもすぐに疲れるな」
「え？」

「アイフェと向かい合って、3つ数える前にヘトヘトになるな。へばったら訓練をやめるっていったっけ？」
「そ、そんなのズルイよ」
「確かにズルイな。でも、時間も別に言ってなかったし、嘘を言っているわけじゃない」
シーグは無法も承知ですっとぼけた。「うヴー」と奇妙なうなり声を上げるアイフェを放っておいて、シーグはシンシアのそばで膝をつく。頭から壁に当たったので心配だったが、呼吸は安定している。肩に当てられたハンカチにも血の跡は親指の先ほどしかない。ほんのかすり傷で済んでいる。詰め襟の服が、闇狼の爪をうまくそらせてくれたのだ。
「お母様？」
意識を取り戻したシンシアは聞いてきた。焦点の合わないボンヤリした瞳でシーグを見ている。
「いや、俺は……」
声を聞いたシンシアは大きく目を見開いて、真っ直ぐとシーグを見た。
「すいません。メティスには、黒髪の人が少ないもので……つい」
リーザの父も黒髪だが、だからといって見間違えるとは思えない。シーグはなんだか情けなくなった。
「戦いは終わったのですか？」
「何とかね」
少し頭を起こして周囲を確認したシンシアは、ギョっと驚いた様子で首を引っ込めた。視線を追いかけると、尻を丸出しにしたままのラスティーが倒れている。せめて、反対向きになるように蹴っ飛ばしておけばよかった。
次にシンシアはシーグの腕を痛ましい視線で見つめている。鋭い切り傷ゆえに出血が多く、流れた血が床に広がっていった。
「まあ、こんなのすぐに治るから」
「……私がうまくやらなかったから」

シンシアは目に涙を浮かべ始めている。他人の怪我なんだから、そんなに気にしなくてもいいだろうに。
「ええと、シンシアの兄さん達は、まだなのかな？」
「でしたら、到着の前にやるべき事があります」
軽い話題のつもりだったが、逆効果だった。シンシアは唇をかみ締めて涙を拭いた。そして、片手をついて無理やり体を起こそうとする。
「おいおい、無理するなって」
「いいえ、状況の把握をしなくてはなりませんから」
「妹が無事だって聞くだけで喜ぶだろうよ」
「私には、協力者として報告の義務があります。護民官長は間もなく到着する事でしょう」
『妹』を『協力者』という言葉で否定し、兄を『護民官長』と言い張る。あくまでも兄弟ではなく、護民官長と協力者して対面するつもりのようだ。底なしの頑固さにシーグは呆れるのを通り越して、感心してしまった。
だが、気持ちの方に体がついてゆくはずがない。無理やり立ち上がったシンシアはすぐによろめいてしまう。その拍子に治療途中だった肩を覆っていた包帯がずれる。瑞々しい肌に走る痛々しい三条の傷跡。それを見て、シーグはシンシアが女である事を強烈に意識した。
シーグは目をそらせながら、シンシアの手を取って立ち上がらせてやった。少女の軽い体なら、左手一本でも十分支えられる。
「無茶をしたって、まともな報告なんかできない。今は大人しく……」
シンシアは彫像のように動きを止め、リーザもまたぽかんと口を開けたまま驚愕の表情を浮かべている。
「……って2人ともどうしたんだ？」
「お、落ち着いて。落ち着くのよ？　ね、シンシアちゃん。分かるでしょ」

リーザは言い聞かせるような、懇願するような声で語りかけている。スカートの乱れを直していたはずなのに、どういうわけか服全体が乱れている。肩や太ももがきわどいところまで見えていて、目のやり場に困る状況だった。

シンシアはリーザの言葉など無視して、つないだ左手をじっと見つめている。その後、シンシアは怪我をした肩を抑えてワナワナと震え始めた。

鳴動する活火山、煮え立ぎる油、千切れ飛ぶ寸前の荒縄。

そんな言葉がシーグの脳裏を駆け巡っていった。間もなく鬼神のような激怒と、タラニス（雷神）の制裁が自分に降り注ぐだろう。

どうにでもなれ、命までは取られないだろう、とシーグは捨て鉢な気持ちになった。

だが、予想に反して緊迫した空気は四散した。それと同時に、シンシアはシクシクと泣き始めたのだ。幼子のようにペタンと膝をついて、両手で顔を覆っている。

「え？」

ませているどころか、倍も年を重ねたようにしっかりしていたシンシア。それが、急に年齢が半分になったような態度。あまりの急変にシーグは呆然とするしか出来なかった。

立ち尽くしているシーグの横を、リーザが慌てて走りぬけていった。シンシアはシクシクと泣きながら、駆け寄ってきたリーザにすがりついた。あんまり強く服を握りしめたので、両肩が更にはだける。

その時、階下が急に騒がしくなった。階段を駆け上がってくる複数の足音。その先頭にいたのは、『でかいの』である。

『でかいの』は塔の中を一望した。視線を移す毎に剣呑になっていく表情。最後に泣いているシンシアを見てから、リーザの肩に自分のマントをかけた。その後に、憤怒の表情でシーグをにらみつける。何かとてつもない誤解をしているようだ。

「何があったのか、説明していただきたい」

押し殺した声での丁寧な言葉遣い。切りつけてくる前の殺意に似た緊張感を感じる。

「違うのよ、グラークさん。シーグは何も悪く……ないわけじゃないんだけど。ええと、そのね」

あいまいな言い方にグラークの表情が余計に剣呑になってゆく。怯えたリーザは舌をもつれさせた。

「俺はシンシアの手をとっただけ――」

グラークの表情がこわばったので、シーグは思わず言葉を止めた。助けを求めてリーザを見るが、なき続けるシンシアをあやしながら自分まで泣き出してしまいそうになっている。アイフェはいつの間にか姿を消していた。

「不都合はないぞ。続けていただこうか」

グラークは、今にも切りかかって来そうな殺意を全身から放っている。何かとてつもない失言をしてしまったようだ。

「いや、それだけだ」

「……手をとっただけ。この証言は本心からの言葉に違いないな？」

ライス顔負けの形式ばった言葉。リーザはおろおろしながら、シーグとグラークを順番に見回している。張り詰めた空気ゆえに、数人が階段を昇ってくる音がやけに大きく聞こえてきた。

ライスは部屋の中の有様を見ると、糸目を徐々に釣り目に変えていった。他の護民官達も似たような反応だ。闇狼2体が痙攣したまま倒れている中で、イッサとマイリグは服がズタズタでラスティーは尻が丸出しだ。

ライスが途方にくれていると、グラークは自分の手袋を引き抜いてツカツカとシーグの下に歩いてきた。この展開には覚えがある。女性の名誉を傷つけたと決闘の挑む、騎士の反応だ。

「静まれ、グラーク。護民官が自分の感情だけで、人を裁くつもりか？」

ライスは厳しい口調で叫んだ。塔の中にピンと張り詰めるよう響きがあった。

「しかし、この男はシンシア様を……」
「シンシアの名誉のためというなら、兄である私のほうが先に決闘を申し込む資格がある」
諭されたグラークは槍の切っ先のような視線で、憎々しくシーグをにらみつける。
「違うか？」
「いいえ、その通りです」
「では、数名を連れて入り口を見張れ」
「了解しました」
無愛想な声で答えると、グラークは階段を降りて行った。
「とにかく、ここを調べてから後に撤収する。君に襲撃の様子を説明願いたいが、構わないか？」
ライスは普段どおりの声に戻っていた。
「では、まずは3階の様子を確認しよう。お前達は2階を調べていてくれ」
ライスが言うと、護民官達はシーグの前後を挟むようにして囲む。手こそ直接出さないが、事実上の拘束である事は間違いない。
「しかし、長官」
「彼は協力者だ」
ライスは淡々とした声で言った。声に力強さはないが、決して譲らぬという意志が現れている。護民官達は、不満げな表情のまま
「もしも、罰に値する行為が確認できれば法に基づいて処断する。それ以上でも以下でもない」
ライスの声はあくまでも事務的だった。

1部ー32　ミラー・イメージ

＊

ぞろぞろと現れた護民官達がアビシャル・ホルドの塔に続々と入ってゆく。

アイフェは彼らをやり過ごすと、屋根の上から飛び降りた。そして、アビシャル・ホルドの塔を振り返る。

「ぶたなくたってもいいじゃない。イーーッッ」

アイフェは塔を振り返って、べーッと舌を出した。もちろん、塔の中にいるシーグに向かってだ。

しばらくの間、あるはずもない返事を待っていた。そして、突然苛立たしげに道に転がっている石ころを蹴飛ばすと、地面に恨みがあるかのように土を踏みしめて歩く。最も小柄な少女の事、足音は小さかった。

勢いよく歩いていたが、一つ目の角を曲がった所で歩調は緩む。名残惜しそうに後ろを振り返り、しばらくそのまま立っていた。だが、誰も追いかけてこない事を確認すると、うつむいたままトボトボと歩き出す。

歩幅はどんどんと小さくなり、歩調も緩やかになってゆく。それもそのはず。腹を立てて飛び出したものの、何処に行くか決めてなかったからだ。完全に歩みを止めてしばらくの間じっとしていたが、突然アイフェは顔を上げて耳をそばだてた。

背後から足音が聞こえてきたからだ。子馬や鹿を連想させる軽やかな音は、シーグが走っている時のものだ。

アイフェは口元を笑顔でほころばせながら、再び歩き出す。足音が近づいてくるにつれて、どんどんと歩調を速めていった。釣られるかのように、自分を追いかける足音もどんどんと速くなる。

「アイフェ！」

背後からかけられたシーグの声。アイフェは、更に逃げ足を速くして角を一つ曲がる。すると、背後の足音も慌てて追いかけてくるのだった。

入った路地は行き止まりになっていた。屋根の上まで逃げてもよかったが、シーグが肩を怪我しているのを思い出す。更に、腕を狼の牙でザックリと切り裂かれているのだ。

すぐに追いついたという事は、治療もしないですぐにでも塔を飛び出してきたに違いない。そうすると、自分のせいで怪我が酷くなったりしないだろうか。アイフェは少し不安になった。しかし、私だって頭をぶたれて嫌な思いとしたんだからと、自分に言い訳をする。

そんな事を考えているうちに背後の足音はどんどんと近寄ってきて、すぐ後ろで立ち止まる。

「何か用？」

サフィリアやシンシアが怒っている時の事を思い出して、そっけなく返答した。すると、背後からは疲れたようなため息が聞こえてくる。その後に続いた頭をかく仕草も、アイフェの優れた聴覚は聞き取った。

本当に困ったときにいつもシーグはこんな風になる。そして、喉の奥で「むー」とうなり声を上げて悩んでいるのが何だか面白い。悪いと思う気持ち以上に、布団にでも包まれたような心地よさを感じてしまうのだった。

「さっきは殴ったりして、すまなかった」

すぐにでも振り返りたい気持ちを抑えてアイフェは極力無関心を装った。

女の子にはそっけない振りを装って、もったいぶらないといけない時がある。リーザがそうレティシアに助言していたのを思い出したからだ。

「アイフェは本当によく戦ってくれた。きっと『みんな』も喜んでいると思うぞ。訓練もきちんとやるからさ、機嫌を直してくれよ」

一番言って欲しい事を言ってもらえて、アイフェは腹の立つ気持ちなど一度に吹き飛んでしまった。

「そこまで言うなら、許してあげても――」

相手をじらす、という思いもどこへやら、勢いよく背後を振り返ったアイフェは恐怖に引きつる。

そこにシーグはいなかった。背後に立っていたのは自分のそっくりの少女、アイシャ・ディスペリアである。

「あら、そんなに似ていた？」

銀色の髪をなびかせ、純白のドレスを身にまとっていた。空気は淀んでいるはずなのに、髪も服も涼やかな風になびいている。まるで、切り取ってきた絵を貼り付けたかのように現実感も存在感もない。

何よりも、背後に立つ人の気配を読み違えた事など、アイフェには一度もなかった。

無邪気に微笑むながら近づいてくるアイシャ。アイフェは顔を引きつらせると、背中を向けて逃げ出した。壁を駆け上がり、後ろを振り返ることなく屋根の上を走る。そして、アビシャル・ホルドの2階に通じる窓を飛び越えて塔の中に入った。

その瞬間、横合いからスッと白い手が伸びて首に絡まってきた。

「逃げたりしたら、お姉さん悲しいわ」

耳元でささやく楽しそうな声に、アイフェは背筋が凍りついた。ナイフを抜き放つと同時に背後に突きを入れる。しかし、まるで手ごたえはなかった。アイシャの腕の感触は確かに首に巻きついたままだ。この位置ならば、どんな体勢でもよけられるはずがないのに。

振り返ると、アイシャの姿は風のように消えていた。変わりに今度は前からスッと手が伸びてきて頬をなでる。慌てて前を向くと、深い青色の瞳が目の前にあった。アイシャ・ディスペリアは額同士が触れるほどに顔を近づけていたのだ。

「――！」

恐怖のあまり声もなく、アイフェは飛びのいた。しかし、逃げた

わけではない。サムハイン（死神）の名を持つ少女は、後退と同時に踏み込み、ナイフの切っ先を突き出したのだ。

しかし、突然アイシャの手に現れたナイフが攻撃を受け止めた。それも刀身ではなく、切っ先の同士が寸分違わず完全に合わさり、拮抗している。心に動揺が走るが、生まれながらに鍛えられた戦闘の勘は即座に次の攻撃を行った。

空いている左手で敵の腕をつかもうとしたのだ。だが、それも完全に受け止められた。アイシャの手は鏡に映る虚像のように、アイフェの動きをなぞり、ピッタリと手の平が重なる。

ナイフの時と全く同じ。鏡に向かって攻撃しているようだ。

「以前よりも、強くなったわね。踏み込みは鋭くて、迷いがなくなっているわ。シーグさんのおかげかしら？」

嬉しそうに誇らしそうに、アイシャは頭を撫でてくる。だが、アイフェには嫌悪感しか浮かんでこない。

「やだ！　離して！」

叫びながら手を振りまわすが、吸い付いたように動かない。しかも、アイシャの自身も鉄像のように微動だにしなかった。

「姉さんにそんな事を言ってはいけないわ」

諭すように優しく言いながら、首筋を撫でる。その途端にアイフェは声が出なくなってしまった。更に呼吸も出来ずまばたきさえも出来ない。顔から始まった硬直は、首から下へと進んでゆく。

自分が石像に変わってゆくような感触。手が動かなくなると、カチンとナイフが床に落ちる音がした。『みんな』がくれた大切なナイフ。かけがえのない品物を視線で追おうとしたが、にこやかに微笑むアイシャに視線も釘付けになったまま動かせない。

「シンシアのお蔭で、塔の中にいる人数が分かりました」

突然聞こえてきたシーグの声。アイフェは目に涙が浮かんできた。助けてシーグ、そう呼びかけようとも声は出なかった。

「なるほど」

階段の方から聞こえてくる声。足音がゆっくりと近づいてきて、

ライスとシーグが2階に姿を現した。
「あそこの窓から侵入しました。あらかじめ、アイフェが周辺を偵察してくれましたから」
ライスとシーグは話しながらゆっくりと歩いてくる。手を伸ばせば届くほどに近くても、気付いた様子はなかった。
「悪い子の姿は見えなくなってしまうの。困った悪戯っ子にはお仕置きが必要なのよ」
アイシャは、妹の頭を撫でながら残念そうに呟いた。
ごめんなさい、もう悪い事はしないから。お願いだから気づいて、シーグ！
叫びたくても声は出ず、涙で前が霞んでゆく。そして、自分の体が冷たくなるにつれて意識が遠ざかってゆく。
助けて……。
最後に心の中で叫び、一滴の涙を落としてからアイフェは気を失った。

＊

呼ばれた気がして、シーグは視線をさまよわせた。足元を見ると、暗がりの中に輝くものが落ちていた。
アイフェのナイフだ。
夢見るような表情で抱きしめ、とても大切にしていたナイフ。
手を伸ばして拾うと、腕にポタリと水滴が落ちてきた。思わず屋根を見上げたが、雨漏りなど見つからない。それに、腕に落ちた水滴には、人のぬくもりがあった。
シーグの脳裏に泣きじゃくるアイフェの姿が思い浮かぶ。ナイフの傍に膝をついて調べてみたが、触れるものはない。
そのとき、頬を掠めて通り過ぎてゆく風を感じた。塔の中から外へ、それも壁際から流れてゆく異様な風。シーグは思わず手を伸ばしたが、風をつかめるはずなどない。

「アイフェ！」
窓から身を乗り出して、突然叫んだシーグをライスは不思議そうに見ていた。

3章－1部　探知の真髄　完

1部－32　ミラー・イメージ（後書き）

3章　1部がようやく終了しました。ここまで読んでくださってありがとうございます。

さて、2部を開始する前に、ずっと更新していなかった短編の方を先に完成させたいと思います。

「BACK」をクリックしてもらって『作者のページ』から『◆小説一覧ページへ』から『玉砕覚悟のファイナルストライク』で繋がります。

更新は明後日『2／1』の予定。

時間の流れで言うと、1章の少し前の話となります。以前更新したのが10月ですから。3ヶ月以上ぶりの更新となりますね。

3章は色々と頂いたアドバイスを踏まえて作った章でしたが、果たして何処まで実践できたものか。

こういう事は、偉そうに言う事じゃないんでしょうけど、作者自身としましては、『ほとんど守れていない』、と反省しています。プロットとか、展開とか……色々ですね。

2章での決闘が、今回の宴とクラトスビア捜索に当てはまり、2部に持ち越しとなりました。一応、大きな戦いに勝利してひと段落ついた、というので、前回よりはマシ……かどうかはここまで読んでくださった皆さんの判断にお任せします。

今回は特に、あらすじに関する評価をたくさん頂きました。よかったというものから、贅肉が多いという意見、事実上途中から読むのは難しい、などなど。とりあえず、理解は可能ということで保留していますが、これもいずれ改変せねばと思っています。3章が終了する頃には、無駄とそうでないものも判断がつくでしょうから。

とりあえず、1章の段階で頂いたものに、「起承転結の起がない」の「単語集や外伝などを作ってみては?」という意見がありましたので、一章の「起」に関わる話を外伝で作る。ここからまずは実行に移してみます。

あと、ネット小説にも書籍にも同じように言えることに、長すぎて、読む気がしない。というものがありました。とりあえず、お試しで短く読めて世界観とキャラクターがつかめる話を作ってみます。短編で仕上げてみる習慣をつければ、構成能力も学べて、長編も引き締まるのではないかと考えているのですが、果たして……。

とにかく、これからもよろしくお願いします。

2部　戦士達の宴（前書き）

外伝が終了しました。『死の道を行く』が実は一番最初に思いついた話です。
ただ、アレを最初に書くとシーグが強い人となりそうなので、後回しにしました。

地形や特性などを生かして作戦を練る、作品全体のテーマを繁栄したつもりなので、もし興味があれば読んでやってください。

次は誰の外伝を書こうかなーと、悩んでおります。誰か、希望がありましたら、ブログの方やメッセージで伝えてください。
それでは、本編開始！

2部　戦士達の宴

ベクター・フォルナージュは大陸の地図を見下ろしていた。壁に掛けられた燭台の炎が、机の上に陰影を作っている。

９人掛けの円卓に広がる大陸の縮図。魔術師が長年かけて完成させた正確な地図であり、国境や山や川が詳細に記されている。

小さな水場や、獣道と同様の抜け道であったとしても、戦略を練るために必要な情報はすべて記されている。極秘とされる魔術師の封土まで記されるこの地図は、メティスでも限られたものしか見ることの出来ない国家機密なのだ。

「では、東方の守りはこの兵力で」

ゲイルは剣の形をした駒を3つ、メティスの東方に配置した。ベクターは眉をひそめた。これでは、国境監視の任務しか行えない。これから、戦争が始まることが予測されているのに無防備も同然の守りである。

「これで、オースピニルの侵略に立ち向かえと？」

「いいえ、即時撤退を命じるつもりですぞ」

ゲイルは何でもない事のように言った。そして、剣の駒を熊手でまとめて無造作に王都まで引っ張る。その行為に抵抗するように、駒が途中で倒れた。ゲイルの腕が短いので、無理な動作になったからだ。しかし、ベクターにはそれが国境を守る騎士達の心情を表しているように思えた。

「失敬、失敬」

ゲイルはおどけた口調で、駒を無理やり引っ張って王都に配置する。ベクターは判断を仰ぐようにシェンナ王を見た。シェンナは面白そうに地図を眺めている。会議や謁見の時に見せた退屈そうな表情はなく、目には好奇心をむき出しにする子どものような輝きがあった。

「それが良いだろう」

シェンナはゲイルから熊手を受け取ると、自らオースピニルの並ぶ騎兵の駒をメティスの国内に引き寄せた。開けた平原の場所に騎兵の駒が並ぶ。しかし、それが現実となったときには畑は踏み荒らされ、家には火がかけられるだろう。

村が戦場となる時には、必ず阿鼻叫喚の地獄絵図となるからだ。

国を守る王自らが国境防衛を放棄し、国民を犠牲にする。王の存在そのものを否定するような行為だ。

ましてや、オースピニルは復讐心に燃えている事だろう。１０年前の戦いでは進軍を阻むために、騎士の首をはねて杭に刺し、国境地帯に壁のように並べたのは、メティスの魔術師なのである。

しかし、シェンナにそう命じられればベクターにはそれに逆らう権限は無い。なぜならメティスは王の法が支配する国家だからだ。

「不満そうだな、ベクター」

「いえ、ただメティスに進入されては不利になると思います」

「では、理由を言え」

シェンナは楽しそうに命令した。

「おそらくオースピニルの尖兵は『黒き災厄』でしょう。ザイツェフの戦術は一貫して、姿をくらませてからの奇襲戦法。メティス国内深くに潜り込まれては、森に潜む狼の群れに対抗するのと同様かと」

「つまり、我々は囲いに追い詰められた羊というわけか。ゲイル、ベクターはお前の作戦が不満のようだ」

「いーやいやいや」

シェンナの言葉に、ゲイルはおどけた様子で首を何度も横に振った。

「これで、ますます自信を持って実行に移す事ができますぞ」

ゲイルは椅子から飛び降りた。そして、ベクターの足元まで走ってくるとあらかじめ用意しておいた台に飛び乗る。

「敵の尖兵は間違いなく『黒き災厄』。その考えは、ベクター卿も同じですな？」

念を入れた問いにベクターはうなずく。ゲイルはこれもあらかじめ用意しておいた捧を手にとってオースピニルの国土を差した。
「オースピニルはわが国よりもはるかにロマンチスト。１０年前に父や恋人を失った者達が、復讐の女神と化しているわけです。それに感化された騎士たちは発情期の馬よりも鼻息が荒いでしょうな。これがどういうわけか分かりますかな？」
「いえ」
ふざけているとしか思えない意見に、ベクターは生真面目に答えた。
「つまり、オースピニルは復讐の機会をザイツェフ１人に独占させぬという事です。ベクター卿はご承知と思うが、オースピニルでは皇帝が病に伏し、皇弟が今回の戦を指揮しています」
その病を放っているのがメティスであり、７家を滅ぼさない限り皇帝の存命はありえない。それが、オースピニル全土でまことしやかに流れている噂だ。
「つまり、この戦の功績はきわめて高い。これからのオースピニルの力関係に大きな影響がでるわけですな」
ようやくベクターにもゲイルの言いたいことが分かってきた。黒き災厄に戦功を上げさせ、前線から遠ざけようと考えているのだ。
「圧倒的少数の相手となれば、いかに砦にこもっているとはいえ、正面決戦を挑んでくるでしょう。これで、ザイツェフの奇策を封じる事ができるわけですな。その上、乱戦のまま追撃戦となればいざ知らず。短期で完勝となれば後続を待って、本国からの命令を仰ぐというのが筋です。それを破る事はザイツェフには出来ませんぞ。砦の防衛を任せる、などという命令が下されるのが妥当と考えますな」
「なるほど、『黒き災厄』を砦に閉じ込めようというわけか」
シェンナは楽しそうに唇をゆがませて口を開く。
「面白い作戦だ。レイザーク王国は、国土そのものが森と魔境に囲まれた天然の城砦であった。しかし、『黒き災厄』の前にあっとい

う間に敗れ去ったのだ。地形にせよ、兵の質にせよ、メティスの戦力がレイザークよりも有能とは思えんからな」

「しかし、これは人道に背く作戦でしょうな。国境地帯が戦場となり、数年は人が住めぬ場所になりますぞ。ようやく１０年前の痛手から回復したところだというのに」

ゲイルは渋い顔をして首を横に振った。１０年前と現在のシェンナの判断を非道というも同然の言葉。しかし、シェンナは肩を震わせて小さく笑っただけだった。

「これと違う方法も一応考えてはあります。つまり、国境地帯で持ちこたえようというわけですな」

ベクターの反応を楽しむように、ゲイルはもったいぶって言った。

「その作戦実行のために、必要条件は？」

「『黒き災厄』の行動を完全に把握する事、ですぞ」

ベクターの問いに、ゲイルは満面の笑みで答えた。先ほどの謁見の最中、王から魔術師の遊撃隊を組織するよう命じられたばかりだ。人員の確保には、ザイツェフの元に流れた魔術師に裏切りを打診する事も含まれている。

つまり、『黒き災厄』の身辺から内通者を出せと言っているのだ。

「それほど猶予はありませんぞ。ザイツェフ卿は明日には帰還する予定とか――」

会議場の扉がノックされたので、ゲイルは口を閉ざした。ゆっくりと扉が開かれ、入って来たのは侍女の格好をした１０代の女性だった。城の召使だろうと誰もが思うに違いないが、魔術師であるベクターには、この女性もまた魔術師であることが分かった。実際には、扉がノックされるずっと前から、魔術師が近づいている事に気づいてはいたのだ。

ゲイルは侍女から一枚の紙片を受け取ってざっと目を通した。

「シージペリラスが証拠を確保し犯人を捕らえたそうですぞ」

シーグの名を効いて、シェンナが興味深そうに地図から目を上げた。

「バイロンと、ルパートはどうなりました」
友と弟子の行方について、ベクターは尋ねた。
「フェルナンディの屋敷に更迭中のようですぞ」
ゲイルは紙片を握りつぶして、壁に掛かっている燭台にかざして燃やしてしまう。
「そして、かのシージペリラスも護送中。シンシア嬢に不埒な行いをした疑いあり、とありますな」
ゲイルが楽しげに報告すると、シェンナは腹の底から大爆笑をした。
「よし、ベクター。急いで、フェルナンディの屋敷に行け。あの男が色魔であるかどうかを確かめて来るのだ」
「私も個人的に興味がありますぞ」
ベクターが戸惑っていると、ゲイルまでもが追従した。少なくとも、王国の運命を左右する会議よりも、個人的な興味を優先するなど一体何を考えているのか。
しかし、いつまでたってもシェンナは大笑いを止めないし、ゲイルはニヤニヤ笑いを浮かべたままだ。
「では、ベクター卿。至急フェルナンディの屋敷に向かっていただきたい」
「大臣。命とあれば従いますが、まずは軍備の配置を考えるべきでは？」
「いやいや、この任務を軽く見て欲しくないですぞ」
「ですが……」
いいかけた言葉をベクターは呑み込んだ。ゲイルは底意地悪く、唇を歪めているからだ。黄色に変色した歯が、ネズミの歯を連想させる。こういう笑みを浮かべるとき、ゲイルは決まって妙案を打ち出すのだ。
「ザイツェフと魔術師を引き離し、寝返りを有効に行うための策略でもあります。陛下にも協力を頂きたい」
「好きにするがいいぞ」

提案を聞くよりも前に、シェンナは無責任に返答した。

「では、早速――」

ゲイルはゆっくりと思惑を話し始めた。当初ふざけた趣向のように見えてたが、ザイツェフと魔術師達を引き離すのに有効な策である事をベクターも認めずにはいられなかった。

そのためにも、フェルナンディの屋敷へと急がなくてはならない。

2部－2　眉毛が一本に繋がる時

＊

シーグは塔で拾ったアイフェのナイフを見つめていた。
「みんな」からもらった大切なもの。アイフェは何があっても手放さそうとはしなかった。取り上げると寂しそうにしていて、返してやると夢見るような表情で胸に抱きしめていた。
その様子から、シーグはリーザがくたびれたぬいぐるみを抱いていたのを思い出す。リーザも常に手放そうとはしなかった。それなのに、アイフェはなぜ塔の中に落としてしまったのか。
鋭い切っ先はピカピカに研がれていて、曇り一つ無い。窓から差し込む陽光を鏡のように跳ね返す。持ち手には丁寧に皮が巻かれていて、松やにが塗られている。使い込まれているが、同時に手入れも行き届いている。店にこのナイフが並んでいたら、シーグは真っ先に手にとる。そして、可能な限りの金銭をはたいてでも手に入れたいと思うだろう。
そして、一陣の風の中に消えていったアイフェの悲鳴。今にも泣きそうで、助けを求める声は聞き間違いだったのだろうか。
ゴーンと大きな鐘の音が響いてきたので、シーグは外を見る。
窓から風が吹き込んで来たので、シーグは顔を上げて外を見た。水しぶき混じりの風が頬に当たった。湖面を裂いて疾走する船からは、王城の様子がよく見えた。
ゴーンと再び鐘の音。澄んだ音はアクリアエ・スリスの方面から、湖を渡って聞こえてくる。決闘の日にグレイルが傾けた塔は、未だにそのままになっていた。３度目の鐘が湖を渡って行った後には、空気を震わせる音が余韻を残してゆく。
正午の三点鍾だ。
アビシャル・ホルドでの戦いの後、護民官達は１５人の魔術師達

を拘束した。ラスティー、イッサ、マイリグをはじめとする生きた証人合計15名。それとあわせて当初の目的であったレティシアのスカーフ。それらを船に乗せて、フェルナンディの屋敷に向かっている途中であった。

窓から吹き込んでくる冷たい風に腕の傷が痛んで、シーグは窓のそばから離れた。リーザが薬を塗り、包帯を巻いてくれたので血は止まっている。いくら浅いとはいえ、狼の牙でついた傷だというのに。魔術の道具がもたらす治癒力のすさまじさに、シーグは舌を巻く思いだった。

その時、扉がノックされた。遠慮がちなで、少しタイミングのずれた音。間違いなくリーザだ。

だが、扉を開けてぬっと顔を出したのはグラークである。縦に長い四角の顔に、扉を塞ぐような体躯。目を横向きの四角形にして、シーグに敵意の視線を向けた。その様子は、西方の蛮族が持つヒーターシールド（方形の盾）を連想させる。彼らは盾に恐ろしげな顔を描く。そして、全身鋼鉄の鎧に身を包み、隊列を組む。そして、じりじりと動く壁となり、戦場を支配する。

平原に一列に並ぶグラークとグラークの顔の盾を想像しかけて、シーグは思考を中断させた。

「そんなに怖い顔しないで。大丈夫だから、ね」

開いた扉の前に立つ、動かざる壁の後ろからリーザの声がした。不満そうなグラークの背中を押しながら、リーザが部屋の中に入ってくる。

「本当よ。シーグってばすっごい紳士なんだから。噂なんて信用しないで、ね、ね」

リーザの言葉にグラークは疑わしそうな視線を隠そうともしない。

「シンシアちゃんの事もちょっとした事故だったの。誤解なんだから、ね、ね、ね？」

小動物のように首をかしげつつ、「ね」の度に距離を詰めて、にこやかに諭すリーザ。これには石壁のような男もたじろいだ。グラ

ークは最後にシーグを一睨みすると、熊のようなゆっくりとした動きで部屋の外に出て行くと扉を閉じる。

途端に部屋全体に満ちていた緊張感が溶けてなくなった。本当に壁がのしかかってくるような圧迫感を持つ男である。閉じた扉を見つめて、リーザも嬉々とした様子で振り返った。

リーザは魔術師のローブに着替えていた。決闘の日に着ていた奇抜なローブではなく、魔術師達が着る灰色のローブに紺色のガウンを羽織っている。たしか子ども達が着ていたのと同じで、見習いの証である。

だが、リーザは高名なプルーフではなかったのか？

疑問に思ってまじまじとローブを見つめていると、リーザは少し頬を染めた。

「あのね、さっきの事は、忘れてね」

「は？」

「ほら、さっき塔で服が脱げそうになっちゃった事。上下一緒の下着だったんだ。だから、アイフェに下を引っ張られたら、上の方まで無茶苦茶になっちゃって――」

リーザは意味不明な身振り手振りを交えて、聞いてもいない事を早口で口走った。そして、勝手に赤くなってゆく。

そもそも忘れて欲しいのなら、話を蒸し返さなければいいと思うが。シーグがそんな事を考えていると、リーザはあちこちに目を泳がせている。

「やー、もー、恥ずかしいところを見られちゃった。いやははは――」

リーザは頭を押さえながら、素っ頓狂な笑い声を上げた。最後には息が続かなくなったのか、声が小さくなっていった。困っているときの常で目がキョロキョロと忙しく動く。

「あーー、ええと、そう。うん。これね、さっき着替えたの」

唐突に行った後、リーザはクルリと一回転した。ローブとガウンの裾がひらりと舞った。いつもは三つ編みにしている髪も、今は無

造作に一くくりにしているだけだ。
「似合う？」
「ああ」
即答すると、リーザは目を三角にしてまじまじとシーグを見つめた。
「本当にそう思う？」
「うん」
「ふーん。そうなんだ。私ってば、こんな地味な格好の方が似合うんだ。ふーん、ふーん」
「……は？」
「この格好ってアクセサリーはつけられないし、髪型まで指定されるから女の子達の間では不評なのよ。もっとおしゃれをしたくて、猛勉強する女の子もいる位なのに。ふーん、ふーん、ふーん」
だからと言って否定したら怒るに決まっている。一体全体、どうしろというのだろうか。シーグにはさっぱりわけが分からない。
「こういう場合はね。それも似合うけど、もっと明るい色が似合うと思うよ、とか言うのいいのよ」
リーザは腰に手を当てて何度もうなずいている。
「そうねー。最低でも君は何を着ても似合う、程度は欲しいかな」
今度は左右に体を揺らして、頬に手を当てながら浮かれている。
「君の赤い色の髪は夕日のようだから、黄昏色のガウンに映えて見えるのだよ」
男の声色を真似しながら、今度は1人芝居を始めた。
「とか言ってもらえちゃったら、満点よね」
「……」
シーグが言葉を失って無言のままでいると、リーザは片方の頬を膨らませた。
「何か言ってよ。1人で騒いでいる私がバカみたいじゃない」
本当にその通りだと言いかけたのを、シーグは心の中で考えるにとどめた。

「そんな事だと、紳士失格だってグラークさんに言いつけちゃうぞ」

つまり、紳士とは事ある毎に言葉を飾り立てて誉めたてる必要があるようだ。そういう事は詩人に任せておけばいいとシーグは思った。戦士として訓練は受けたが、その中で身につけたのは相手を侮辱したり、景気づけに悪態をつく事だからだ。

黙りこんでいると、リーザは両方の頬を膨らませてふて腐れてしまった。コロコロと態度を変えるリーザにどう対応すればいいのだろう。シーグにはよく分からない。こういう場合はさっさと話題を変えるに限る。

おしゃれが好きなリーザがいちいち灰色のローブに、つまり正装に着替えてきた理由は何なのか。

「だったら、俺もこの格好はまずいのか？」

闇狼に食いちぎられてバラバラになった袖を差し出した。アビシャル・ホルドの戦いで、服は埃まみれになっている。朝には真っ白だったシャツも今ではまだら模様になっていた。

船はフェルナンディの城に向かっている。鋼鉄の貴婦人が取り仕切る、宮廷作法が支配する領域。そのような場所に薄汚れた格好で行くのは、戦場に無防備で出かける事と変わらないはずだ。

「あ、うん。そうよ。シー坊のために着替えを持ってきたのよ」

リーザはパチンと手を打った。その後、近くの長いすまで小走りに駆け寄る。転ぶのではないかと心配したが、さすがにそれはなかった。リーザは鼻歌交じりに左脇の下から次々と服を取り出して並べていった。

リーザの脇の下には魔術師の物入れがあって、何でもかんでも入ってしまうらしい。嘘か真か家具や部屋まで入るとサフィリアは言っていた。

黒や白、灰色のシャツやズボン。メティスに来てから今まで用意してもらったものとほとんど代わりは無い。色が似ているのは、虹の七色に例えられる七家の色を避けているからだろう。

リーザの言い方から考えると、立場によって髪型まで決められて

いるようだ。ずいぶんと面倒だな、とシーグは思った。しかし、一度服をそろえ、格好を決めると組み合わせで悩む必要は無い。それはそれで気楽かもしれないと思い直した。剣や鎧だって一度しっくりするものを選ぶと、使えなくなるまで同じままだからだ。

そんな事を考えていると、七色の色をふんだんに使った奇抜なスカートが現れた。

「ちょっと待て、なんだそれは？」

スカートの隣には、四方八方に赤や黄色の羽のようなビラビラが飛び出す極彩色の服が並ぶ。

「これが一番お勧めかな？」

リーザは何度も大きくうなずいている。

「絶対に違うな」

シーグが断言した。リーザは勢いよく振り返り、生真面目な表情になった。

「そんな事ないわ！」

そのわざとらしい仕草と声が本気では無いと言っている証拠だ。シーグは無言のまま冷めた目付きで見つめていると、りーザの口元が徐々に緩んでいった。

「プッ、あはははははは」

我慢の限界がきたらしい。腹を押さえて手をパタパタと仰ぎながら大爆笑している。思ったとおりに嘘、いや冗談だったらしい。

「しかし、すごい服だな。これは」

シーグは熱帯にすむ鳥のように奇抜な服をつまみ上げた。見ているだけで目が痛くなりそうな色彩。お祭り騒ぎの時に身につけていたのだろうか。

「メティスで露出狂の時代って呼ばれていたときに、オースピニルで流行った服なんですって」

だったら、その間に挟まれたレイザークは一体どうなってしまっていたのだろう。重厚や城砦や、勇猛な戦士団が軽薄に彩られている様子を想像して、シーグは頭が痛くなってきた。

「……その時代、世界で一体何が起こっていたんだ？」
何かの流行り病でも蔓延したのか。世界の破滅とか危機的なことでもあって、やけにでもなっていたのだろうか。
「５０年位前は、物凄く平和な時代だったのよ」
リーザは笑いすぎて目尻に涙を浮かべている。だけど声はまだ震えているし、息も絶え絶えになっている。
「みんな幸せで浮かれていたって、ジェイナス校長が言っていたわ」
戦乱の時代はシージ・ペリラスの誕生と共に始まる。いや、正確にはその数年前に人々は恐怖におののき、戦の準備を始めるのだ。互いが互いを裏切るのではないかと監視しあって、緊張感を高めてゆく。
シージペリラスの誕生に前後して戦いは繰り返され、避けられるはずの戦争の火蓋でさえ慌しく切っておとされるのだ。シージペリラスの誕生は何十年の前から予見されていたはずだ。自分は産まれる前から、世界中からどれだけ怨まれてきたのだろうか。
そんな事を考えていると、急に頬をひねり上げられた。
「なーにーを、考えてるのかな」
「……別に」
無愛想に答えると、リーザは唇を尖らせた。そして、眉に人差し指をグリグリと押し付けてくる。
「シーグ君の眉毛が一本に繋がる時は、暗ーい事を考えている時よ」
「……」
「で、そんな風に口を結んでいる時は自分がシージ・ペリラスだからって悩んでいたんでしょ？」
図星をつかれてシーグは黙り込むしかなかった。
「あーあ、目付きまで悪くなっちゃった。えい！」
リーザはシーグの口に人差し指を入れて左右に引っ張った。
「らにふる！」
シーグが抵抗するのもお構いなしに、リーザは更に強く左右に引っ張る。

「んーー、いい顔。せっかく、シー坊のために服を持ってきたのにー」

リーザは歌う様な調子で、満面の笑顔を浮かべている。

「楽しいお着替への時間に、ほんな顔をしちゃらめよ。らいたい、ひとがえりゃん……」

リーザは舌がもつれた様な喋り方になって、ぐったりとシーグに向かって倒れこんできた。口を引っ張られているので、抵抗のしようもなく引き倒される。長椅子の上に押し倒される形で、シーグは尻餅をついた。

「おい、リー姉？」

呼びかけるが、リーザは目を閉じてぐったりとしたままだ。笑顔でむにゃむにゃと何か言っているのは確かだが、言葉になっていない。そのうち、スースーと穏やかな息遣いになってしまった。

「まさか、眠ったのか？」

昔からいつでも何処でも寝てしまう人だった。しかし、いくらなんでも喋りながら眠ってしまうなんて。まさかとは思うが、何かの奇病の一種だろうか。だけど、呼吸は安定しているし、苦しそうな様子もない。

サフィリアもそうだったが、フェルナンディの一族は医術にも秀でているという。ライスに頼んで診てもらうのが一番いいだろう。

シーグはリーザの体の下から抜け出すためにぞもぞと動き出した。しかし、リーザは意外に重たく、肩の痛みのせいもあってうまく抜け出られない。

その時コンコンと扉がノックされたので、シーグは飛び上がらんばかりに驚いた。長椅子からずり落ちそうになったリーザの肩を支えているうちに、扉が開かれてしまったのである。

2部ー3　糸目が一直線になる時

「ふむ」
部屋の中に入ってきたライスは、動じた様子もなくシーグを見ていた。そして、落ち着いた動作で後ろを振り返った。
「グラーク、お前に頼みがある」
「はっ」
忠実な返事と、姿勢を正す物音。シーグは、ゴーレムのような男をけしかけられるのだろうと覚悟を決めた。
「もうすぐ屋敷に到着する。拘束している魔術師達の護送を指揮してくれ」
「かしこまりました」
明快な返答の後に、軽快な足音が去ってゆく。物音だけでも、時計のように規則正しい男だと伝わってくるようだ。
周囲に服が散らばった長椅子。そこで抱き合うようにして倒れているシーグとリーザ。異様な光景を見ながら、何事も無かったかのようにライスは扉を閉じた。糸目が一直線に並んだ無表情。何を考えているのかまるで分からない。
「あの……」
シーグはうめくように声を出した。しかし、ライスは何も言わずに、身動き一つせずに立っている。シーグはとりあえず、リーザの体の下から這い出た。そして、散らばった服を一箇所にまとめて、リーザを長椅子に横たえる。
その様子をライスは黙って見守っていた。壁の一部であるかの様子は、グラークとは別の理由で人間味を感じさせない。
「ふむ」
ライスは唐突に呟いて歩き出した。窓際においてある机と椅子、窓や家具など部屋の様子を入念に観察している。何を考えている変わらない表情で、時折「ふむ」というだけだ。床の上に落ちている

極彩色の服の上下を見たときに、少し目元が動いた。
丁寧に折りたたもうとしたようだが、奇抜で独特なシルエットの服をどう片付けたものかしばらく悩んでいる。だが、結局「ふむ」とうなずくと、リーザに足元に広げて置いた。
その後、船室のクローゼットの中から毛布を出してきて、眠っているリーザにかけた。その後、糸目をシーグのほうに向ける。
「わざとなのかな？」
「え？」
突拍子の無い事を聞かれて、シーグは間の抜けた返答をした。リーザはすやすやと幸せそうに眠っている。
「部屋の状況から考えるに、リーザ嬢を無理やり押し倒したわけではないのは明白だ。君はわざと我々の前で誤解を生むような真似をしているのか、と聞いてるのだよ」
ライスが尋問する時に特有の、事務的で淡々とした口調だった。
「違います」
シーグはため息のように返事をした。何を好んでそんな事をしなくてはならないのだろうか。
「だが、この数日の目撃談を聞く限りとても偶然とは思えないのだよ。天空の水盤の戦いでは、サフィリアに叩かれている。決闘の日にはアイシャ・ディスペリアと往来で口づけを交わしたという。そして、シンシア。決闘の日には学校で、今日はサ・フィールの屋根の上で『女ったらし、色魔、淫猥、変態』などと言う叫び声を上げた。アビシャル・ホルドの塔では服が裂けていたし、リーザ・オーメントの服も乱れていた。これらを総合して考えてみると、護民官長として君をどう扱ったものか悩むところなのだよ」
ここで、ライスは言葉を止めた。感情を読み取れない糸目でシーグの頭から足まで見回した。
「君はどう思う？」
「……誤解です、としか言いようがありません」
「ふむ」

ライスは感情を交えず、人事のようにうなずいた。そして、後ろに手を組んでゆっくりと歩きだした。

「さっきシンシアと話した。シンシアも誤解だと言っている。悪いのは自分だと、懸命に君を庇っていたよ」

ライスはシーグの背後に回りこみながらゆっくりと語り出した。

「だが……」

丁度シーグの背後に回りこんだ所でカツンと強く床を蹴って、少しだけ語調を強くした。両方とも大した音ではない。しかし、ゆったりとした動作の中に混ぜられていたので、やけに大きく聞こえた。

振り返ると顔が見えないように背中を向けて窓に向かって歩いている。表情が見えないだけに余計に迫力がある。

「シンシアは口にも出せないような弱みを握られたので、必死に隠そうとしている。護民官の中にはそう考える者もいてね。だから私は――」

ライスは再び中途半端な所で言葉を切った。そして、コツリ、コツリと規則正しい足音を立ててゆっくりと歩く。常に死角に回りこまれるので、シーグは落ち着かない気分になった。

針のムシロ、蛇の生殺し、真綿で首を絞める。そんな言葉がシーグの脳裏をよぎった。

「だから、私は君を怨むべきか、追い詰めるべきか、あるいは別の方法を選ぶか。本気で悩んだのだよ。考えてみたのだが――」

中途半端な所で言葉を切った。思わせぶりにジワジワと話すのをやめず、

「シンシアが本気で怒っていたなら。今頃私は、消し炭になった君を見ていただろう」

ほんのわずかに大きく鋭さを増した声が、冬の凍気の様に吹き抜ける。

「その時はもちろん、私が消し炭を入念に打ち砕いていたに違いない。更に護民官達の不満を抑えるために、その炭の欠片を更にどうするべきか検討を重ねる必要があった」

口調こそ軽快だが、内容は陰鬱だ。その格差が余計にシーグを嫌な気分にさせた。

「不満をうまく発散させるのも上に立つものの仕事だからね。君はどう思う？」

「……」

なんだって、自分が炭になった後の事まで考えなくてはならないの――。

「結論から言うとだ」

ライスはシーグの思考をさえぎるかのように早口で続けた。今度は突き刺さる刃物のように鋭い。それも、どういうわけか背中から狙われているような危機感を感じるのだ。

グラークは前方から襲い掛かってくるような。例えば、獲物を付けねらう肉食獣のような威圧感があった。

しかしライスには、石や木を値踏みする彫刻師のような静かさがある。同時に獲物を解体する料理人のように容赦がなさそうだ。油断した瞬間にノミやノコギリが突き入れられ、着実に削り取られるのではないか。そんな緊迫感が内側から湧いてくる。

「私は君に感謝し、協力を惜しまない事にした」

「……は？」

予想外の言葉に、とぼけた答えを返すシーグ。友好の証を示すかのようにライスは椅子を引いて、シーグが座りやすいようにしてくれた。

糸目を垂れ目にして、親しげに微笑んでいる。その仕草からは敵意など全く伺えない。しかし、シーグはまだ警戒を解かなかった。この微笑の後に、グラークに連行するように命令したからだ。

「ふむ」

ライスはポツリと呟いて黙り込んでしまった。口を開けば開いたで落ち着かない気分にさせるが、口を閉ざせば内心でどんな事を企んでいるのかと気になる。

「警戒するのは無理もないが、これは私の本心だよ」

シーグがいつまで経っても近づいてこないので、ライスは先に椅子に腰掛けた。そして、敵意とは無縁の表情を浮かべながらシーグを待っている。

仕方がないので、シーグはライスに対面して座った。机に肘をついて身を乗り出してくるライスに対して、シーグは椅子を後ろに引いて距離を保った。

「正直な所。君がシンシアやサフィリアとうまく接しているので、私は驚いている」

シーグが怪訝な表情を浮かべたのを見て、ライスは益々笑みを深くした。

「……怒らせてばかりですが？」

「その程度で済んでいるから、大したものだと思うんだな」

ライスはアゴを撫でながら、苦笑いを浮かべている。

「凛として座し、心の中まで見通す。不要な出来事は謎めかし、はぐらかして、遠ざける。それでいながら、自分が望むことには一切の妥協はしない。それがメティスの女達のやり方なんだよ。女性に尽くそうとする男は数知れないから、それで物事がうまく運ぶわけだ」

「あなたもその1人ですか？」

「そうだよ。さっきは衝突してしまったがね」

仕返しにと、レティシアとの事をからかい混じりに言ったつもりだったがライスはまるで動じない。

「サフィリア、シンシア、レティシアはそんな女性達の最高峰。他人を動かす立場にいる彼女たちが、君に対しては自分たちから近づいて、あれこれと手を尽くそうとする。正直、驚きの連続なんだ。だから、巷には色々な噂が流れているわけだね」

ライスはここで言葉を切った。そして、窓の外に流れてゆく景色を見つめている。

「ふむ、インボルグを過ぎれば、湖の風は冷たさよりも心地よさが勝るな」

ライスは感慨深げに何度もうなずいている。
「噂とは何ですか？」
「君が稀代の女たらし。あるいは女の弱みに付け込む卑劣漢。だいたいそんな内容だな。君がシージ・ペリラスなのだという事の方が、大した問題では無いらしい。大半は君に対する嫉妬が原因なのだろうけどね」
シーグは唖然とした。決闘に勝っていながら、そんな噂が流れるなど想像できるはずもなかった。
「もっとも、たらしこまれるような隙を見せる事も、弱みをそのままにしておくような女性もフェルナンディにはいない。そんな事を考えただけでも気づかれるし、行動に移したとなると想像もしたくないね。何よりも周囲にいる者たちが黙っていない」
つまり、消し炭や入念に打ち砕く辺りが妥当な末路なのだろう。アイシャに対するガリウスの反応を思い出してシーグはゾッとした。ライスは相変わらず楽しそうに窓の外を見ている。
「気を悪くしないで考えて真剣に欲しい。シンシアが泣いたのはなぜだと思う？」
破れた服からむき出しになった肩を見られたこと。それが一番の原因だと思う。
他にも闇狼の牙に裂かれた腕を見た時に悲壮な表情を浮かべていた。自分が怪我した事よりも、人が怪我をした事を自分の責任のように考えるからだ。だから、戦いの最中に気を失っていた事を悔やむ気持ちもあるだろう。
「一番の原因は君が手を握ったからだ」
「え？」
考えもしなかった事を言われて、シーグは驚きの声を出した。
「戦士にも利き腕で握手をしない、という習慣があるだろう。魔術師の場合には手を差し出すと言うのは命を預ける事に等しい行為なんだ。手の届く距離に自ら詰め寄ると言うのも無礼に値する。不意打ちで手をつかむなどもってのほかだ。宮廷人のように距離を置い

た人付き合いが、フェルナンディの女性に求められる態度なんだね。そして、彼女たちはメティスの象徴も同様。つまり、君の行為は往来でフェルナンディの旗に無礼を働くような行為に近いわけだ」

サフィリアと出会った時には全くそんな事はなかった。それにレティシアも隣に座るように言ったし、手に自ら触れてきたではないか。

「レティシアがどうかしたのかね？」

内心をずばりと看破されてシーグは思わず体を起こした。

「いや、その……」

「何かね？」

ライスは親しげな雰囲気から一変して、尋問する時の気配に戻った。細い目からわずかに見える瞳が、茂みの向こうで光る矢じりを想像させる。

「……」

「……」

表情は何一つ変えないのに、周囲の空気だけが凍りつくように張り詰めてゆく。やはり、この人もフェルナンディなのだとシーグは思った。

「……まあ、いいだろう」

長い沈黙の後でライスは呟いた。何がいいのまるで分からない。。

「私だって人の事はいえないからね。メティスを訪れた初日に、つまずいたレティシアを支えた。つまり、君と同じように手を握ったんだ。その結果、決闘騒ぎになって大変だったよ。当時、彼女に求婚する男達は大陸中にいたからね。メティスに同盟破棄を叫ぶ声まであったな。事態を収拾するのに様々な人の協力が必要だったね。場合によっては、私のせいでメティスが滅んでいたかもしれない」

シーグは頭痛がしてきた。手を握っただけで国が滅ぶ。メティス乱れる時には、大陸全土が乱れるものだ。大陸全土の平穏がそれほど脆いものだとは知らなかった。

「と、いうわけで。君とシンシアが仲直りをしてくれない限り、私

の身辺は落ち着かない。今の状況は嵐の前の静けさと言うやつだね。できる事なら、吹き荒れる前に収まって欲しいと思っている」

ライスはここで言葉を切って、アゴをなでて考え込んだ。

「それに戦友同士が喧嘩をするには、フェルナンディの屋敷の中では狭すぎるからね」

言った事をそのまま返されて、シーグは黙り込むしかなかった。

「とはいえ、私にはいい考えが浮かばない。レティシアに相談してから決めることにしよう」

その時、コンコンと扉がノックされた。ライスは表情を引き締めて立ち上がると、慌ててシーグの背後に回りこんだ。

「入れ！」

ライスの厳しい声と共に、グラークが部屋に入ってきた。

「護送の準備が整いました。間もなく、フェルナンディの屋敷に到着します」

「分かったすぐに行く。待っていろ」

ライスは不機嫌な声で言うと、出て行けといわんばかりに首を振った。ぞんざいな対応に対して、グラークは丁重に敬礼をすると扉を閉めて出て行った。

「という事で、私は非常に不機嫌だという事になっている」

ライスは席に戻りながら悪戯っぽい口調で話し始めた。

「シンシアを泣かせた君を、生かして返さない位に憤慨しているんだ。ここだけの話、廊下の向こうには3人の護民官が待機していてね、私が君に襲いかかろうものなら止めに入れるように手配している。たぶん、グラークの仕業だ」

真っ先に決闘を挑もうとした男が自分を守ろうとしている。シーグは何だか奇妙な気分になった。

「彼は私が軽挙に走りそうになるとびっくりするくらい合理的になる。私情を一切捨てて、冷静にも冷酷にも徹する事ができるんだ。グラークがそうなると、護民官達の規律は完璧になる。私が不機嫌でいる限り、護民官達は君に手を出さないだろう。だから、君も態

度を合わせて欲しい」
「どうしろと？」
「私にじっくり尋問されて、すっかり消耗した様子を装っていてくれ。私が最初にとった態度を思い返してくれればいい」
シーグは奥歯をかみ締めて、顔をしかめた。
「いいぞ、その調子だ。君もなかなか演技派だな」
演技ではなくて本当に嫌な気持ちになったのだが、とシーグは思った。
「リーザはそのまま寝かしておいてくれればいい」
「なんとも無いんですか？」
「ああ、ただ単に疲れているだけだよ。今はゆっくり休ませるのが一番だね。ところで、屋敷に到着すれば君を部屋に軟禁する形になる。だが、すぐに侍女が隠し扉から君を誘導する予定だ。急いで私とレティシアも行くからな、そこで昼食にするとしよう」
ライスはほとんど浮き浮きした様子で早口に喋りながら、扉に向かって歩き出した。
「いいか、忘れないでくれ。私にこってりと絞られて、すっかり打ちひしがれたしまったんだからな」
最後に念を押すと、ライスは心底楽しそうに微笑みながら部屋から出て行っていった。
一癖も二癖もある人物。しかも裏表が激しくて真意がつかめない。メティスの住人はレイザークとはまるで違うようだ。戦いの最中よりも疲労を感じて、シーグは机に突っ伏してしまった。背後ではリーザが幸せそうな寝息を立てている。

2部ー4　思いは遠く

＊

ベクターはアクリアエ・スリスの広場から、ウィングス通りに向かって足を進めていた。

城門をくぐる時に、衛兵が船を用意すると気を利かせたが断った。歩きながら考えをまとめたいと思ったからだ。

賑やかな喧騒の溢れる通りを歩いていると、心に思い浮かぶのは、砂漠の光景だ。人のざわめきが、流れる砂の音を連想させるからだと思う。フェジュラで過ごした時代のほうが遥かに短い。それなのにふと気がつくと、埃混じりの乾いた風を思い返している。

フェジュラでの魔術師同士の戦いを思い出し、国境線での戦い方も同じだとベクターは思った。

魔術師による探知網を作り上げ、敵の動きを捉える。サモニング（召喚）に優れた魔術師を配置すれば、大河アクアランスの要所にテレポートで移動できるようになる。そうすれば、侵略者は選択を迫られるだろう。

魔術師を分散させるか、集中させるかだ。

軍勢の中枢に魔術師がいなければ完全な奇襲攻撃が可能となる。姿を消して幻惑すれば、奇襲が行われた事実さえ分からないうちに、指揮官だけを捕らえる事ができる。統率されていればいるほど、中枢が欠けた軍勢は烏合の衆と成り下がるものだ。

イリュージョン（幻術）に対し、ディテクト（探知）を使うならば魔術師を分散させなければならない。そうすれば、一挙に畳み掛けて撃破すればいいだけだ。逆に魔術師を一部隊に集中させたのなら、却って手間がなくなる。つかず離れずけん制して、軍勢の疲弊を待てばよい。

思い通りにゆけば国境地帯で撃退する事ができるだろう。先手を

打つ事ができれば、メティスに侵入する前。レイザークの魔境地帯に止める事も可能だ。森と岩山に囲まれた複雑な地形は、魔術師にとって最も戦いやすい地形である。しかもレイザークの領土のうち、メティス寄りの側にはメティオスマッシャーとして封土破壊のために何度も足を運んだ事もある。

ディテクト（探知）を駆使して状況を探り、イリュージョン（幻覚）を駆使して隠密に行動する。騎士団長とその周辺にいる魔術師のみに対象を絞って攻撃を加え、サモニング（召喚）の系統であるテレポート（瞬間移動）で即時に撤退する。

魔術師の部隊が戦うのは、オースピニルの騎士達ではない。彼らの中枢と命令系統だけに対象を絞って的確に攻撃を加えるのだ。

そうすれば勝てる。

自信と共に、ベクターは知らず知らずの間に拳を握り締めていた。

「ごきげんよう」

突然の頭上からの声に、ベクターは我に返った。ウィングス通りに並ぶ建物のひさしに、アイシャ・ディスペリアが腰掛けている。

銀髪の少女はピンク色のシャツと、水色のズボンを着ていた。服のあちこちに繊細な花の柄の刺繍がされている。それは、天空の水盤に咲く春の花だ。彼女の妹、アイフェ・サムハインが天空の水盤で身につけていた服と同じデザインである。

「どうかしましたか？」

「あなたの妹と見間違えたのです」

「私たちはそっくりですからね」

アイシャはクスクスと笑って、屋根のひさしから飛び降りて、音もなく着地する。少女が2階の屋根から飛び降りてきたのに振り返るものは誰もいない。目の前に立っていたものでさえ、まるで無反応だった。

人ごみを軽やかによけて、アイシャはベクターの腕を取ろうとする。しかし、ベクターは歩みを速めて引き離した。

「ここのところ、ずっと沈みがちだったから心配したのですよ。だ

けど、とても元気になったみたい。安心しました。戦争が近いのでしょ？」

ベクターが眉をひそめると、アイシャはニコニコとして見上げてくる。

「この喧騒の中でする話題ではありません」

「大丈夫」

アイシャは微笑みながらすれ違う人の顔に手をかざした。しかし、全く気づいた様子もなく通り過ぎてゆく。道を行く旅人がベクターの姿など見えないように真っ直ぐと進んできた。すんでの所で避けた時にわずかに肩をぶつけたが、それさえも気づかない様子だ。

何らかの魔術が使われている事は疑いない。注意しようと口を開きかけた時、アイシャはベクターの顔を覗き込んだ。

「不用意に私に近寄らないでください。フェジュラで訓練を受けた者は、背後の気配を反射的に攻撃する事があります」

「私は別に構わないわ」

けん制の言葉など耳に入らない様子で、アイシャはベクターの腕に飛び込んだ。負傷した腕の痛みにベクターは顔をしかめる。

「まだ、治っていないのね。シージペリラスはとっくに元通りなのに」

アイシャはベクターの腕を抱え込んで、遠慮なしにもたれ掛ってくる。

「いつもの事です」

ベクターは元の無表情に戻って、淡々と言った。

「戦えるの？」

「闘士の訓練を受けた者は、指一本でも敵を倒す手段を知っています」

「じゃあ、私とも戦う？」

突然の問いにベクターは言葉を失った。

「だって、私の事を疑っているのでしょ。この数日、メティスで起きた事件は私が全部起こしたって。今だって、私の言葉を疑ってい

るようだし」
　アイシャは問いかけるように、上目遣いでベクターを直視する。空色の瞳がうるんでいるせいか、湖に吸い込まれてゆくような気持ちになった。
「私はあなたを守ると誓っております」
「だけど、王国を守るとも誓っているわね」
　追求してくるアイシャから、ベクターは目を逸らした。
「私は騎士ですから」
　アイシャはベクターの腕を強く握り締めた。腕に走る痛みが自分を責めているように思える。
「国の他にもたくさん誓いを結んでいるじゃない。七家の人々や王国中のいろんな物にもたくさんね」
「騎士とはそういうものです」
「じゃあ、騎士様は具体的にどうするのかしら？」
　アイシャはまだ唇を尖らせている。
「まずは、オースピニルの魔術師の行方を捜します。もし、王国に害する行いをたくらんでいるのなら、捕らえます」
「見つけたとして、ザイツェフ・バルス・アルグラッドの直接の配下の者が混じっていたらどうするのかしら。今は大小合わせて２５カ国の特使が滞在しているのよ。オースピニルの特使として訪問している魔術師の身辺を調べるだけでも大騒ぎ、もしも捕らえれば諸国が黙っていないわ」
　天空の水盤での騒動、ヴァンガードが原因で謁見が遅れていなければ、特使の大半は今頃帰国していたはずである。だが、王都にいた者は滞在を延長したし、帰国の途上の者はわざわざ引き返してきた。彼らはシージペリラスの出現と共に、七家の間に広がる亀裂を見出そうと目を光らせているのだ。
　メティスが統べる封土の大半は、諸外国の領内に存在するためである。もしも、七家に不穏の空気ありと察すれば、封土の返却を求める声を一斉に上げるつもりなのだ。メティスが魔術の秘儀を解放

してから後、魔術師の数は増えつつある。封土への移住を求める魔術師は少なくない。

天空の水盤も厳密に言えば元々のレイザークの領土である。レイザークが滅んでからは、オースピニルの属僚となっている。しかし、レイザークの公子、末席とはいえ王位継承権を持つ者の出現によって、天空の水盤をはじめとする封土の所属が複雑になってきている。もしもシーグが領土を求めればオースピニルを含めた諸国が黙っていなかっただろう。シーグが王より爵位と土地を受け取らなかったのは賢明である。

「特使を一箇所に集める事に関しては、ゲイル卿が解決してくれました。諸国の特使を招いて、今宵の宴を開くと決定したからです。特使たちは準備で城に集合する事でしょう。公式の宴に参加しないとなれば、行方を問いただすことが出来ます。そうすれば、見張りをつけることができます」

「結果、王都に散らばっているのは、国ではなく自分の意思によって入国したものだけが残るわけね。だけど、その理屈だと、潜んでいる魔術師達を見つけられないわね」

「そのためにフェルナンディの屋敷に向かうのです」

「うん、それがいいわね。きっとうまくゆくわ」

「何が心当たりでも？」

ベクターが問い返すと、アイシャは目を細めて妖しく微笑んでいる。問い返そうとすると、アイシャが口を開いた。

「だけど、今宵の宴は、ほんの内部だけの予定だったわね。ベクターが主宰して、シージペリラスと元メティオスマッシャーの和解、七家の繋がりを諸国に示すのが目的だったはずでしょ」

「……ルパートやバイロンが更迭されているので、開催そのものが不可能になっていました。ですから、ゲイル卿が諸国の特使を招くように変えよと」

「七家同士が仲良くやっているのを直接見せ付けるわけね」

アイシャは驚く様子も見せず、楽しそうに聞いている。おそらく、

もう知っていたのだろう。ひょっとすれば、ゲイルと相談して決めたかもしれない。アイシャ・ディスペリアは、４歳の時からシェンナ王やゲイルの政策に助言をしていたからだ。

「ねえ、だったら私たち２人が宴で踊るのが一番だと思わない？」

「無理ですね、長老たちが黙っていません」

「特にタコとウニと貝のお爺様たちがね」

クスクスと笑うアイシャを、ベクターは厳しい目付きで睨んだ。

「冗談です。グラムファーレと、フィーンドと、ランカートの長老達。真っ先に反対するのは彼らね。人前で手をつなぐ程度で何を騒いでいるのかしら」

「私たちは一族を代表する地位にあります。メティスの要人であると同時に、魔術師の模範となる行動を取るのは当然の事です」

「だったら、私がディスペリアの一族をやめたら踊ってくれる？」

「……簡単にやめられるものでは無いでしょう」

「それもそうね。ねえ、ベクター。七家の内輪の事情と、諸国への意思表示。一体どちらが大切？」

「両方です」

「じゃあ私が踊ってくださいって、お願いしたら？」

「比べる性質のものでは無いでしょう。それに――」

「ディスペリアの立場が悪くなる。私の事を気に掛けてくださるわけね」

ベクターは即答すると、アイシャは頬を膨らませた。

「王国の平穏を守るのが、我々の使命です」

「今度は使命なのね。法には従って、大儀まで守らなくちゃならないし。自分で自分をがんじがらめにして楽しい？」

「……」

「いっそ、あなたが王になれば何もかもうまくいくのよ。七家も騎士も一つにまとまるわ。支援してくれる人は多いと思うけど？」

ベクターは立ち止まり、静かな視線でアイシャを見つめた。どこまで本心なのか、確かめようと思ったからだ。アイシャは目を逸ら

すことなくベクターを正面から見つめ返す。澄んだ瞳が妖しげな光をたたえている。

「……それでは内乱になりますよ」

感情を押し殺して、ベクターは問いかけた。

「だったら、戦争に勝ってからでもいいわ。間違いなくあなたは功績を立てるし、シェンナ王は必ず前線に姿を現すものね」

謀殺をほのめかす言葉に、ベクターは全身を緊張させた。この言葉だけでも罪を問うことが出来るからだ。

「そんなに真剣になっては怖いわ」

「冗談ではすむ内容ではありませんよ」

「じゃあ、タコとウニと貝は冗談で済むのね」

「はぐらかさないでください」

「だったら、好きにしたらいいわ。あなたの思うようにしてください」

押し殺した声から逃げるように、アイシャはクルクルと回りながら遠ざかった。追いかけようとしたが、目の前を荷物を背負った商人達が通りがかり、ベクターを阻んだ。行き交う人や馬車の間をすり抜けて、アイシャは通りをまたいで反対側の歩道に上がる。

「法を支配して、誓いを受ける側に立つのが嫌なの？」

喧騒の溢れる賑やかな通りで、遠く離れている。それなのに声は不思議とよく聞こえた。答えないベクターに、アイシャは質問を続ける。

「じゃあ、逆に法や誓いから自由になれたら、あなたはどうしたい？」

アイシャはクルリと振り返って、ひたと見据えてくる。ベクターは答えを返す事ができなかった。

「うん、わかったわ」

急にうなずいたアイシャの前を荷物を満載した馬車が通り過ぎてゆく。その後に少女の姿は幻のように消えていた。。

ウィングス通り特有の喧騒が砂嵐のように聞こえてくる。

フェジュラでは、その日の食べ物どころか飲む水にさえ困った事がある。一杯の水のために、砂が血に染まる事さえ珍しくない国だった。

水を探し出せば、今度は得た水を奪うために現れる侵略者と戦う日々が待っている。魔術師となれば、ただでさえ少ない封土を取り合って争いが起こる。安寧に暮らせる土地が少ないために、オアシスを中心として常に争いが絶えない混迷の国だった。お互いに譲り合って、富を分かち合うにはあまりにも貧しい場所だからだ。

メティスには常に溢れんばかりの水をたたえた水路がある。馬車が走っても埃の立たない石畳。奪い、殺す事が罪であると胸を張っていえる法。法を守護する王がいて、騎士は王を守るという大儀を果たす。戦乱に苦しむ人々が求めて止まないものがここにある。それなのに、気がつくとフェジュラの事ばかりを思い返してしまう。砂漠の国の残酷だが明快な気質を懐かしく思う。

胸に炎、四肢に風、思考に氷を宿す。

それこそがフェジュラの闘士。狂気を解き放ちつつも冷酷に戦う。目指すべきものが決まると、背中を気にする事などなく、まっしぐらに突き進むのだ。敵となれば容赦なく立ち向かい、友となれば最後の水もお互いに分け合う。自身の信念に対して一歩も譲らず、相反するものにはわが身を捨ててでも立ち向かう。

激しい気質は、お互いに同盟を結び、敵対関係にありながらも均衡を保つ大陸の人々とはあまりにかけ離れている。そして、ダイヤモンド・カッターの存在は、七家の間に亀裂しか生まない。自分はメティスから去るべきなのだ。そして、できる事ならあの砂漠の国に帰りたい。

忙しく移動する人々の波の中にたたずんだまま、ベクターは立ち尽くしていた。

2部ー4　思いは遠く（後書き）

久しぶりに更新します。

ずいぶん遅くなってすいませんでした。

これからは、忙しさの合間を縫って、週に1度くらいのペースで更新を続けたいと思います。

2部ー5　風と水の城砦

シーグは船の甲板から、サ・フィールの町並みを眺めていた。帆を完全にたたんでいるのだが、水の流れに乗って大河アクア・ランスを船は一直線に走ってゆく。

メティスには一年を通して、東からの風しか吹かない。だから、アクアランスの大河を上る船は帆を広げて風を受け、川を下る船は流れに任せるだけでいいのだ。穏やかで暖かな風は、メティスに豊かな恵みを与えるだけではなく、交通の便利さも与えてくれている。

やがて、船は大きく北に旋回した。同時に帆を揚げて、東からの風を側面に受けながら船は進んでゆく。行く手にそびえたっているのは、フェルナンディの屋敷だ。

シーグは息苦しさを感じて後ろを見た。するとずらりと並ぶ護民官の一群がいる。アビシャルホルドで捕らえた魔術師達甲板に上げて、監視しているのだ。グラークは前方を見つめたまま、こゆるぎもしない。しかし、背中に岩がのしかかってくるような気配を感じる時がある。全員の注意はシーグのほうに向けられているのだ。

「一種の生殺しだな、これは」

シーグは服の喉元に指を突っ込んで引っ張った。リーザの用意してくれた詰め襟は窮屈でたまらない。肩も真上までは上げられないし、ズボンも屈みこめば膝が痛くなるほどに細く作られている。これでは、まともに剣を振り下ろす事はできない。

宮廷の武器は突きを主体とし、最小の動きで敵の急所を狙うレイピアである。それはこのような堅苦しい格好のままで戦う事を想定しているからなのだろうか。確かに、何枚もの布を重ねて作った胴衣は切る武器に対してもそこそこの耐久力はありそうだ。

帆の近くでは魔術師が杖を振り上げている。すると、船は東に進路を取った。帆を広げたまま風上に向かって進む。本来ならありえない動きも、このサ・フィールではありうる。水路の曲がり角には

時々なだらかな曲線を描く壁が存在する。その後に東側だけが妙に高い壁が延々と続く事があるのだ。そんな場所では北や西からのかすかな風を感じる。サフィールの町の構造が風の向きを操っているのだ。壁に跳ね返った弱々しい風であっても、魔術師が集めれば船を動かすには十分のようだ。

複雑に張り巡らされた水路に、水先案内人の助けをなしに踏み込むのは無謀である。だが、同時にサフィールで風を操る魔術師の助けなしには目的地に到着する事ができない。つまり、侵入者は思うように移動できないし、風を操る魔術師が簡単に妨害する事もできる。

歩いて進入にも道路は狭く入り組んでいる。跳ね橋を挙げてしまえば、船で渡るか泳ぐより他にない。何気なく建てられている建物も、宮殿に近づくほどに高さが違っていて、走り抜ける事はできない。そして、張り出したベランダや高台は弓兵が狙い打つには理想的である。いや、ここは魔術都市だから、炎や雷、風の刃が襲ってくるのだろう。

一見無防備に見える町並みは、水の迷路と風の壁に守られているのだ。

町並みも、要所要所を確認すれば十分に強固である。かといって、レイザークのように大人が何人も手をつないでようやく一周できる柱や、どっしりとした壁の建物ではない。

大きな橋や建物の窓枠には、決まってアーチ状の形状をしている。繊細に見える造りだが、実際には非常に強固なのだ。曲面を支える岩が、楔のように互いにかみ合う。その上、衝撃を分散するので薄くても強固で頑丈な建築物が完成する。

レイザークでもごく一部の城砦に使われていた事がある。投石器や破城槌の突くような攻撃にも、岩を砕いてくり抜こうとする攻撃にも並々ならぬ防御力を持っていた。この工法をレイザークも取り入れようとして、メティスに職人を何人も派遣していたという。

サ・フィールはただ交通の要所として、商人たちのために作られ

ただけではない。王都の東方を守る防衛の要なのだ。アクア・ランスという呼び名は伊達ではない。その優美さに油断すれば、鋭い切っ先が油断なく襲い掛かってくるのだろう。

城砦都市の守りを重視した造りと、交易都市の開けた町並み。本来矛盾するはずのものを、知恵や魔術や技術で見事に整合させた理想の町なのだ。

「つまり、職人泣かせな町なんだな」

シーグは肩をすくめて呟いた。高い理想を実現させるためにあらゆる知恵を結集し、実行するために無茶をやったのだろう。サフィリアの理想的であると同時に実現困難な課題に何度も翻弄された自分と同じように。無茶苦茶だとか理不尽だとか、何度泣きそうになった事だろうか。いや、実際に泣いた事もあったか。

グラークの突き刺さる視線に、シーグは口元をひきしめた。気づかないうちに思い出し笑いをしていたらしい。シーグは護民官達の視線から逃れるために背を向けた。

無茶に見えてサフィリアの言葉が実現できなかった事は無い。理屈だけの理想に見えても、その実は豊富な知識と緻密な計画に裏づけされたものだった。誰もが戦士にはなれないと断言したガリッポソのシージペリラス。それを一人前の戦士になれるように導いてくれた。生まれを呪って落ち込んでばかりいても、不幸になるだけだと叱咤しながら。

このメティスでも彼女は大きな理想があって力を尽くしていたのだろう。それを……。

脳裏に「こーら」と呆れる声がよみがえり、シーグは眉に手を触れた。すると、眉間の皺が深く、眉が一本に繋がっている。これ以上余計な事を考えないよう、シーグは額を3度軽く叩いた。

「開門、開門ー！」

威勢のよい声にシーグは顔を上げた。前方には、王宮と見まがうばかりの巨大な宮殿がそびえたっている。本来大通りが続く道は水路であり、城門の変わりに水門がゆっくりと開いてゆくところだっ

た。

水路は城の中にまで続いており、水門を抜けた船はゆっくりと城の中に入ってゆく。船にも壁にもいくつもの魔術の光が灯されていた。それでも外に比べると薄暗かった。やがて、目が慣れてくるとシーグは驚きに周囲を見渡した。壁も天井も自然の石でできていたのだ。天井から岩のツララが垂れ下がり、何枚もの皿が重なったような岩肌を水が流れてゆく。あちこちにヒカリゴケが生えているために、青白い神秘的な光が周囲に満ちている。

宮殿の下部は巨大な鍾乳洞だったのだ。洞窟の中央には巨大な石柱が天井を貫いてそびえたっており、付け足された螺旋階段が上に向かって伸びている。石柱の大きさから推測するに、宮殿の一番上までつづいているのだろう。繊細な外見とは裏腹に、サ・フィールの宮殿は自然の洞窟をそのまま土台に、巨大な石柱を中枢に据えているのだ。

シーグはあまりの壮大さにしばし我を忘れていた。自然を利用して守りを固めるのは理想といえば理想だが、ここまで桁外れだとは思わなかったのだ。我に返ったのは、自分に近づいてくる重々しいグラークの足音を聞いたからである。

大柄な体で退路を断つように迫ってくる。このまま水の中に落とされるのではないかと、シーグは警戒する。しかし、グラークは無言のままで手に持った剣を差し出した。鞘に掘られたらせん状の模様と翼の細工が、淡い光を受けて輝いている。

シャープネスである。

「これは卿に返す」

グラークは無愛想に言った。

「いいのか？」

「表向きは賓客となっているからな」

という事は、裏で何を思われているのやら……、とシーグはそう思いつつもグラークから剣を受け取った。冷たい金属を手にしたというのに、ふいに手が暖かくなった気がした。鞘を腰のベルトに吊

るすと、体の一部が戻ってきたかのように安堵感が広がる。
今まで細身の剣しか使ってこなかったから、戦闘中に武器が壊れた事は数知れない。身を軽くして逃げるために、自ら投げ捨てた事もあった。武器は所詮物に過ぎないと割り切っていたからだ。
しかし、この剣をそんな風に扱う事はできない。
これはリーザが自分のために作ってくれた剣。グラムファーレと対立する事を覚悟で、彼女の祖母や父親を巻き込んで完成させた剣だからだ。
ガリッポソの自分が、ヴァンガードで勝利し、闇狼と対等に戦えた。腕力の無さを速さで補える剣があればこそ、敵の弱点に向かって一直線に突き進むだけでよかったのだ。ロディウスに受けた修行の成果を遺憾なく発揮できたのは、シャープネスがあったからこそである。
考えてごとをしているうちに、グラークは無造作に背中を向けて歩き出した。剣を持った相手に無防備な姿を晒すとは、警戒心の塊のような男には相応しくない。だが、その真意にシーグはようやく気づいた。グラークは無感情のままだが、その周囲にいる護民官達が横目でシーグを観察していたからだ。
つまり、シーグがやけをおこして暴れるのを待っているのだ。剣を返したのも、逃げるそぶりを見せるのを期待しての事だろう。武装した不埒者を追い詰めるために、護民官が容赦をする必要は無い。
遠まわしの敵意に胸が重くなってきた。いっそ、むき出しの殺意を向けられる方がマシというものだ。
「どうしたものかな……」
うんざりした気持ちを吐き出すようにつぶやくと、サフィリアの事が思い浮かんだ。
何かを指示しながら動き回っているか、腕を振り上げながら熱弁しているか、何かを考え込んで歩きながら独り言を呟いているか。いつでも口も体も忙しく動いていたサフィリア。そんな彼女がメティスでは人形のように大人しくしていたという。

その理由は、自分が不用意に動けば周囲を惑わせると悟っていたからではないだろうか。つまり、この都では余計な事を言わず、無表情を装っているのがいいのだろう。周囲を観察して機会を待ち、ひっそりと動くのだ。

そうしよう、と一人うなずいていると船が完全に動きを止めた。船に乗っている者たちが手早くロープを岸に結び付けて、渡し板を船にかけた。流れるような動作に見とれていると、再び重々しい足音が近づいてきた。

「下船するぞ」

「ああ」

シーグはなるべく無表情にと、気をつけて振り向いた。そして、感情を交えぬ声を出す。すると、グラークは警戒するように顔をしかめた。そして、気味悪そうに後ずさりをしながら、シーグに船から降りるように促す。護民官達もギョッとした様子でシーグを見ていた。槍を持ち直したものもさえいる。

どうやら、無表情なだけでは人形のように振舞うのとは違うらしい。

2部－6　崩された均衡

＊

スカーフを腕に巻きつけると、深い穴に落ちてゆくような感覚がレティシアを襲った。

自分を呼ぶ声がずいぶんと遠く聞こえる。頭の中をかき回されるような感触。ただぼんやりと光を感じていただけの目に色が浮かんで見えてくる。耳鳴りも酷い。視覚が戻るときにはいつもこうなる。

「れ――て――？」

心配そうに自分の名を呼ぶ声も妙に間延びしてゆがんで聞こえてくる。顔中の筋肉が引きつるような感覚が治まるにつれて、耳の痛みも治まってゆく。何度も瞬きしているうちに、色彩が像が結び始めた。

「レティー、大丈夫か？」

ライスが優しい声で問いかけ、のぞき込んでくる。

「ええ、平気よ」

ライスは膝を突いて椅子に座っているレティシアを正面から見つめた。心配げな表情で、色を失った唇をかみ締めている。

いつも優しげな笑みを浮かべており、飄々として周囲に感情を悟らせない。しかし、それはメティスを訪れた後につけた態度だという事をレティシアは知っている。

メティスの人々は物音を立てずに歩き、本心を悟らせない。目が見えなくなったばかりの時、あまりに静かな人々が恐ろしくてたまらなかった。そんな時、ライスの騒々しくも真っ正直な性格に何度も助けられた。

「これが何本か分かるか？」

ライスは指を2本立ててレティシアに聞いた。意識や視覚の状態を確かめる診断法である。

「ちゃんと見えているわ」
「だったら答えるんだ」
レティシアはライスに手を伸ばして、人差し指を立てて頬に突き立てた。
「1本じゃないぞ。本当に見えているのか？」
ライスは生真面目に言って、ますます表情を険しくする。おまじないが再び空振りに終わったようだ。
「2本でしょ。そろそろ爪を切ったほうがいいと思うわ」
ライスは自分の指を確認してレティシアから距離を置いた。だが、心配そうな表情は相変わらずである。
シーグのいうとおりに、タイミングが悪かったのだろうか。元気が出るおまじないと言うからには、気持ちが沈んでいる時に使うものだろうに。リーザが目を覚ましたら、どういう時に使うべきか詳しく聞いてみなくてはならない。
「顔色が悪い、フィーリアを手放していた時間が長すぎたのかな」
「二点鍾から三点鍾の間だけなのよ」
「だけど、呼吸も乱れている。声もいつもと違うようだが」
「視覚を取り戻したばかりだからよ。スカーフを身につけたばかりの時はいつもこうなのよ。すぐに元に戻るわ」
レティシアは安心させようと明るい声で言ったが、ライスは静かに歩きながら状況の説明を始めた。
「血族伝承型だけで、自身のフィーリアを持っていない場合は遥かに安定性に欠ける。手放しただけで、封土の中にいても激しく消耗するんだぞ」
それは魔術師にとって共通の問題である。魔術を使う能力と引き換えに、封土から魔力を得なければ衰弱するのだ。様々な病気にかかりやすくなり、老化が異様に加速しする。フィーリアは封土から魔力を得るための器のようなもの。フィーリアと封土、片方だけが欠けても魔術師にとって生死を分ける問題なのである。
「ましてや、今回ほどフィーリアから距離を置き、しかも他者が魔

術を使用した事は無いだろう。その後スカーフを身につける。つまり、消耗するような行為をしたのは初めてだ。とにかく用心したほうがいい」

ライスは問題点を順番に挙げて結論を導き出した。フェルナンディの一族が半ば無意識に行う理論的な思考だが、それをいちいち声に出すのは止めて欲しい。特に相手の健康状態や個人の事情に関わる言葉に関しては特にだ。

「本当に平気なのよ」

「そうだろうか？」

本心から言ったのだが、ライスは確認するようにじっと見つめてくる。レティシアの主観ではなく、客観的な事実を見つけるまで安心できないようだ。これ以上の心配はかけたくなかったので、レティシアは医者の前の患者のようにおとなしくしていた。

「……確かに顔色は良くなっているようだな。魔術や薬物。あるいは精神集中なども同じだが、五感を鋭敏にするあらゆる手段は体に大きな負担を与えるものだ。今回もその範囲の事だったのか」

ライスは用心深くいいながら、テーブルまで歩いていった。そしてポットから茶をカップに注ぐ。

香りから造血作用のあるネトルと、気持ちをさっぱりさせるレモングラスだと分かる。もっとも、その他にも複数のハーブが入っているようだ。先ほどの心配げな表情から一変し、患者を診断する医者のような真剣な表情でレティシアを観察してる。

ハーブティーに口をつけると、舌にピリリと苦さがはしる。葉が開ききる前に湯を注いで、その上しばらく置いたままにしておいたのだろう。その上、少量だがニンニクまで入っているようだ。風味の調和など無視して、効果がありそうな物を片っ端から入れたのがすぐに分かる。お茶と薬を混ぜたようだとレティシアは思った。

残そうかと思ったが、ライスがじっと見ている。仕方がないのでレティシアは一息に飲み干した。

「呼吸も顔色も元通りだな」

「気分もずいぶんと良くなってきたわ」
それは嘘ではなかった。少々苦かったのは確かだが、水分を補給した事でずっと体が楽になった。何よりもライスが自分を気に掛けてくれているというのが心休まる。
「分かった。しかし、何かあったらすぐに言ってくれよ」
ライスはうなずいて、他人行儀な口調を崩した。ポットから自分のカップに注いで一息に飲み干した。細い目が神経質に歪められた後に、すまなさそうにレティシアを見る。その表情があまりに情けなかったので、レティシアは口元を押さえて笑ってしまった。
「酷い味だな、これは」
「良い薬は苦いものでしょ？」
「薬のつもりはなかった。砂糖や蜂蜜でも入れたらよかったか」
「甘さで味を塗りつぶすよりも、淹れ方を変えたほうがいいわ」
おどけた口調に対して、レティシアは上品に答えた。ライスは苦々しい表情で首を振りながらカップを置いた。途端に表情が一変して、感情を感じさせない無表情となった。
「さっき、王城から連絡が来た」
ライスは懐から金の竜の紋章で銘を打たれた書状を取り出した。季節や天気といった長口上のあいさつの部分を斜めに読み飛ばし、最後の部分でレティシアは視線を止めた。
「諸国の特使を招いての宴、本日夕刻の七点鍾に開催？」
「旧メティオスマッシャーのうち七家出身のもの、この数日でシージペリラスと親交を深めたものは出席されたし」
レティシアの困惑の声に、ライスの吐き捨てるような声が続く。
「七家の総動員した上で外部に向けての宴なんて。グラムファーレの長老がよく賛成したわね」
「してはいないよ、長老は現在意識不明だ。うるさ方が眠っている間に、事を進めようってわけだ」
「シェンナ王らしい強引なやり方ね。長老が目を覚ました後に陛下と衝突するんじゃないかしら？」

「実行するという事は、ゲイル卿が成功の可能性が高いと判断したからだろう。あるいは、揉め事を覚悟してもそれ以上の収穫ありと判断したのか、まだ何かたくらんでいるのか。とにかく、彼のやる事に無駄はないからね。悪手に見える行動の向こう側に何があるのか分からない」

ライスは糸目を油断なく細めて先を続ける。

「王城と謁見の間の守りを担当していたからこそ、グラムファーレは七家で最も強い決定権を持っていた。だが、リーガルバックラーが破壊されているし、直系で動けるものは一人もいないんだ。そのために今日の謁見。つまり、インボルグの後の最も重要な謁見で、陛下を守っていたのはベクターだった。その上、フィーンドの長老が王都の守りをブラスト（噴出）の系統で固めるべきだと吹聴して回っている」

「攻撃的手段で王城を要塞化し、諸国を威圧する。そんな事をしても敵を増やすだけよ」

「フィーンドの長老にとっては、他の六家が目下の敵なのさ。七家の中で同じ考えの者は多い」

「だけど、七家全体と王家のバランスが崩れ始めているわ。その中心にいるのはシーグさんなのね」

レティシアの指摘にライスは静かにうなずく。

「……そうだ。彼が現れてからすべてが変わってしまった。天空の水盤に姿を現してから6日。たったそれだけの間でね。7日目にはメティスが引っくり返っているかもしれないな。諸国が黙っているのは、人々が彼の出現に驚くばかりで対応を決めかねているからだ。特使たちも本国との連絡を急いで取っている事だろうね」

「騒ぎが落ち着いて、シージペリラスへの対応を決めるまでのささやかな平穏ね。いっそ、戦でも起きれば――」

レティシアの呟きにライスはギョッとして体を起こす。言葉の意味が頭にしみこむと、レティシア自身もゾッとした。

乱世の時代には争いの矛先に追いやられ、平治には謀殺の憂き目

を見る。歴代のシージ・ペリラスの末路そのままではないか。
「不穏な事を言ってしまったわ。忘れてください」
レティシアはあわてて言葉を訂正した。
「見者の君が言うと未来の予知にしか聞こえないよ。君のつぶやきが何度現実になったと思う?」
ライスは口元を手で隠して独白する。
「しかし、実際の問題として一度動き出すと止まらないだろうな。今まで停滞していた分だけ特にね。レイザークの公子でシージペリラス（命取りの座）、そしてロディウス・アクテの弟子であるという事が諸国に与える影響も強い。しかも、オースピニルのガイス・ジュサックが率いるメティオスマッシャーを倒し、メティスのリーガルバックラーを破壊した。メティスに現れたその日に、王の名の下に決闘者としての地位を得ることにならなければ、オースピニルの特使が彼の身柄を要求してくることも考えられたわけだ。実際に、今日の騒ぎも彼から決闘者の資格を奪い去る事が目的だったわけだからね」
淡々とした口調で呟いていたライスはハッと表情を変えて、レティシアを見つめた。
「別にレティーの事を責めているわけじゃない。あー、さっきの予知が的中って話も君の事を悪く言うつもりはなくて……」
「分かっています」
「いや、とにかくすまなかった。だいたい、私は二言三言は多すぎるんだ。余計な事ばかり喋ってしまう。いっそ黙っておくべきなんだろうな」
黙っておくべきと言いながらもライスは早口で一挙にまくし立てた。気持ちが高ぶると途端に饒舌になる癖は今も昔も変わっていない。
「公式の場では失敗なんてしていないわ」
「本当にそうかな、君やグラークがうまく取り成してくれている事に後で気づいて悔やんでばかりなんだよ。。場合によっては二、三

日経ってからなんて時もある」
「それでもいいじゃない」
「いつか、取り返しのつかない事をしてしまいそうだな」
「失敗なんて何もしていないわ」
「うーむ」
ライスはうなり声を上げた。そして、喋りすぎた事を悔やむように口をつぐむ。

2部ー7　鋭敏、鈍感

「もしも、サフィリアがこの場にいたら、どうしていたかしら」
レティシアが呟くと、ライスは再び無表情になって考え込む。
「メティスに連れて来たのも、ジェイナス校長の庇護を得る事が目的だったみたいよ。シーグさんを政争には巻き込みたくなかったようだし」
その後にヴァンガードの騒ぎになってしまい、サフィリア自身は狂気に捕らわれて深い眠りについている。
「リーザと引き会わせるつもりもあったようだね。だが、その過程は無意味だよ。今では状況が変わりすぎているから」
「じゃあ、ロディウス老師は何を考えているのかしら？」
「……」
ライスは鼻まで手で覆っている。今、頭が忙しく動いている事だろう。
「申し合わせたようなタイミングで天空の水盤に送り込んだのも、シージペリラスである事を知らしめることも。それ以前にサフィリアの記憶を封印したのもロディウス老師の思惑なんでしょ」
「シーグがサフィリアに預けたレンガの欠片。あれもロディウス老師から渡された物だったんだな。それが原因でサフィリアは眠りについた。君も調べたはずだが、どうだった？」
「ほんの断片的に空とか木とか岩の塊。城壁が見えたわ。高い知能を持っていない生物、たぶん鳥の記憶ね」
「鳥？」
「フクロウよ。真っ白な羽のね」
ライスは怪訝な表情を浮かべている。
「あとはクサリツタが絡みついた城壁が見えたわ」
「フクロウにツタだって？　レイザークは魔境に沈んでいるんだぞ。異形の怪物がうろつき、死の道と呼ばれている最大の魔境地帯なん

だ。なんだって、そんな場所にフクロウがいるんだ。吸血ヅタならいざ知らず、『クサリツタ』は清浄な土と水のある場所にしか生えない。レイザークは、昼なお暗く、瘴気に空さえもかげる場所なんだぞ。大体君の能力なら、1年程度前の状況しか探知できないはずだ」

素っ頓狂な声と共に、身振り手振りを交えてライスは一挙にまくし立てた。目の前で取り乱されては、レティシアは逆に冷静になるしかなかった。

「あの日はインボルグだったもの。星のめぐりで最も探知が強くなる夜。私が力をもてあまして、知らないうちに長すぎる時間軸を設定して深すぎる探知を行ったのかもしれない。もしもそうなら、時間のズレが起きても不思議じゃないの」

「君がそんな初歩的なミスをするとは信じられないが」

「驚くのはそれだけじゃないの。鳥の記憶しかないのに、城壁が大きくなっていったのね。水晶の見者は命あるものの思考の軌跡を辿ることができるのよ。それなのに、人の記憶が全くないのはどういうことかしら」

「・・・・・つまり、君が探知可能な時代に、人が暮らしていなかったと言う事だね。人工物が出来上がっていくのに」

異様な出来事にライスは言葉を失った。死者の道には名前に相応しく恐ろしい話がいくつも存在するからだ。

「何もかも矛盾しているわね。探知ミスだったと考えるのが妥当ね」

「じゃあ、サフィリアは一体何を見たんだ。水盤の見者は未来の可能性を見るんだろ」

「シーグさん、リーザ、サフィリアの3人が城壁の上で星の輝く夜空を見上げていたって」

「ちょっと待てよ、星が見えた、という事は時期の特定ができるか？」

「竜眼が天頂にあったわ」

「つまり、インボルグ（春の収穫祈願）、ベルテヌ（夏の花祭り）、

ルーナサ（秋の収穫祭）、サムハイン（死神の夜）のどれかだな」
竜眼は４つの節に必ず天頂に差し掛かる。星々はすべて東から西へと進み、一年を通して姿を変える。しかし、竜眼は星々の動きを無視して移動するのだ。天の運行に従わず、七色に色を変える竜眼から人々は吉凶を読み取ろうと躍起になってきた。
「自分達の未来を語っていたらしいの。城砦を通る商人の護衛の事とか、近くの開拓村にもっと人を招こうとか、新しい街道を通そうとか。外見は今と同じくらいだったようね」
シーグとサフィリアとリーザが最後にそろったのは４年前。過去の記憶でないのは確実だ。
「魔境に沈んだレイザークで？　だったらそれは・・・・・」
「過去や未来じゃなくて、サフィリアの自身の望みだった可能性が強いわ」
レティシアは悲しそうに首を横に振った。
「フクロウの記憶に星空はなかったのか？」
「あるにはあったけど何しろ鳥の視覚ごしの記憶だから、ウィスプ（鬼火）なのか、光虫なのかも不明な場合があったの。星空が４年以内と仮定して位置の特定をしている途中よ」
「魔境地帯で星空が見えている。しかも鳥の知覚と記憶。そんなものを前提に絞込みを行なったわけか」
ライスは絶望的だ、といいたげに深いため息をついた。
人ならざるものの記憶による過去、個人の希望に色づけされた未来。そんな2点が繋がるとはレティシアにも思えない。
「予測ばかり立てていても、得るものは無いわ。わかっている事から事実を手繰り寄せるしかないわね」
その事実が、探知の完全な間違いで得るものが何もないとしても。と、レティシアは心の中で続ける。
「う、む……」
ライスは重々しいうなり声を上げた。そして、高ぶった感情を抑えるために、ウロウロと落ち着きなく歩き回っている。鏡のように

ゆるぎなく、理路整然としたライスの姿しか知らないものが見れば、自分が幻覚を見せられたと思い込むだろう。
　ゆっくりと部屋を一周した後、ライスは立ち止まってレティシアを見た。
「何？」
「・・・・・いや大した事じゃないんだ」
　ライスは黙りこんでしまった。開きかけた唇の動きから、「チ」や「シ」といった言葉が連想される。少し考えてレティシアは、ライスが何を言いたいか分かってしまった。
「ごくごく個人的な事だ」
「だったら、なおさら相談して欲しいわ」
「しかし、今はメティス全体の事を考えなくちゃいけないし」
　ライスはしきりに口元をこすっている。
「国全体を考える責任のある人が、迷いを抱えたままでどうするの？」
「とは言っても、ルパートやバイロンの事もある」
「七家の問題は私たちだけで片付けられないわ。だから、個人的な問題から解決すべきよ。今後はそれが大きな流れに関わってゆくと思うから」
　ライスは、ウロウロと歩き始める。しばらく考え込んだ後に、ライスはようやく口を開いた。
「・・・・・実はシンシアの事なんだ」
「あの子も宴に呼ばれて、フェルナンディの代表として諸国の特使の前にでるのよ。大切な事じゃない」
　特にあなたにとっては一大事でしょう。とレティシアは心の中で続ける。
「今日の出来事について詳しく話を聞きたいのだけど、報告だと言い切る。相談したくても、義務は果たしたと突っぱねる。調書ならば後で私自身がまとめて提出しますって言うんだ。全く会話にならない。君も聞いただろ・・・・・大嫌いだって」

とうとう足を止めたライスは手近にあった椅子に腰掛けて、疲れたようにうつむいた。大陸広しといえども、言葉だけで彼をここまで追い詰める者はそうはいない。

「大丈夫よ。ちょっとした行き違いがあっただけ。シンシアも勢いで心にもない事を言って、混乱しているだけだよ。心の中では、あなたにもシーグさんにも、申し訳ないと思っているでしょうね」

「その、シーグ君の事なんだが、君はどう思う」

「どうって？」

いきなりの質問にレティシアは首をかしげた。

「つまり、まあ、その、なんだ。シンシアは彼にどのくらい怒りを感じているのかな、ということだよ。和解するのにどの位かかるのだろうか」

歯切れが悪く、早口な口調。何もかもが普段のライスらしくない。シンシアが関わったときには平静であった事など一度もないが。

「遅くても夕の五点鍾までには仲直りしたいと思っているはずよ」

「そんなに早く、か。あいつはシンシアの手を握ったんだぞ」

「もともと、自分でダンスを教えるつもりだったみたいよ。シーグさんとリーザには」

「何！」

ライスは素っ頓狂な声と共に、顔を上げた。

「・・・・・私はそんな話、聞いていないぞ」

ライスは責める様に押し殺した声を出した。そもそも、誰にダンスを教えるかなど、いちいち報告する事でもないだろう。兄がこうも取り乱すとなれば、シンシアにしても言い辛いに違いない。

「シンシアはシーグの事を無茶苦茶に言っていたんだぞ。鈍感で考えなしで、無作法。詰めが甘くて、いい加減。強いのか弱いのか良く分からない。目を離すと、災難に巻き込まれる間の抜けた人。もっと洗練された儀礼を身につけてもらわないと、横に立っているだけでも恥ずかしい。ましてや、フェルナンディの女性には全然相応しくない、とか」

ライスの口調はどんどんと激しさを増してゆく。
「確かに散々な言い方ね」
レティシアは苦笑しながら、これは思った以上に簡単に仲直りできると思った。
シンシアは本当に嫌いな相手を見て見ぬふりをする。気に入らないなら一言で両断、その後は歯牙にもかけないのだ。学校で同じ年のジュール少年を、「うっとおしい」の一言で片付けていた。最近は少しは気になりだしたのか、「面倒くさい奴」「頑固者」となった。湖での戦いの後で「意外と使える男」、と認める一方で「もう少し考えて行動すればいいのに」と言っていた。
ジュール少年は「希望」を込めてもらうのに1年かかった。しかし、シーグには「儀礼を身に付けてもらう」と希望を持った上に具体的な助力をするつもりでもあるようだ。
「あいつはシンシアの手を握ったんだぞ。しかも涙まで流させたんだ」
責めるような口調でしつこく続ける。どうやら、ライスのほうでも不満が溢れているらしい。
「だいたい、本当にダンスを教えるつもりなら、手をつなぐのは遅かれ早かれの問題じゃないか。なんだって、今更泣き出す必要があるんだ」
「大丈夫よ、あなたにもシーグさんにも怒っているわけじゃないと思うから」
シンシアが、怒りを感じているのはおそらく自分自身だ。間違いを犯すことを嫌い、自分の子どもっぽい考えを人一倍嫌う。今は、潔癖さで自分自身を責め立てているのだろう。
「私が一度話をしてみるわ」
「・・・・・それがよさそうだな」
うなずいた後に表情が固まって、右斜め下を見つめる。床には何も見当たらない。
「どうしたの？」

「ベクターがこっちに向かっている。ウィングス通りだな」
スカーフを身につけたレティシアには、視覚と引き換えに魔術師としての感覚が消失しているので分からない。しかし、サ・フィールの西半分にいる魔術師達がベクターの接近を知った事だろう。七家の当主の気配は大きい。特にベクターの気配は抜きん出ていて、地区全体に存在を知らせるほどだ。ダイヤモンド・カッターのフィーリアは、メティスでは夜闇の炎のように目立つ。
そして、ライスは特に探知に優れた魔術師なので、フェイル・リレイに差し掛かるよりもずっと前にベクターの存在を知る事ができる。
「奇妙だぞ」
ライスはポツリともらした。細い目が厳しい光を帯びる。
「先触れもなしにいきなりやってくるなんて。メティス中の魔術師が動揺するじゃないか。ただでさえ、グラムファーレの長老が倒れたばかりなのに」
「何か緊急の用事かしら？」
「それなら先に魔術で連絡をするだろう。そもそも、今は王宮で会議、ゲイル大臣の考えか・・・・・でもなんだって。動揺させて、引っ掻き回すのが目的なのか？　だとすると、つまり」
ライスは断片的な言葉をつぶやきながら、考えの中に沈み込んでゆく。それと同時に顔から表情が消えていった。今、頭の中で幾通りもの考えが駆け巡っている事だろう。
「どちらにせよ、私がフェイル・リレイに向かうべきだな。レティ、後の事は頼んで構わないか」
「ええ、行ってらっしゃい」
護民官長は考えに沈みこんだままで、足早に扉のほうに歩いていった。
「ライス」
「どうした？」
呼び止められたライスは、最小の動きで機敏にレティシアを振り

返った。細い目が一直線になって、感情を全くうかがわせない。
「なんでもないわ。気をつけて」
「ああ」
返事さえも短く切り上げて、ライスは部屋の中から出てゆく。扉の閉じる音共に、レティシアは吐息をついて自分の髪に触れた。
丹念に編みこんだ髪にはサファイアの髪飾りが輝く。身につけているローブも、スカーフが完成した日にライスが揃えてくれたものだ。皆でスカーフを取り戻してくれた日に相応しいと思って着替えたのに気付いた様子もなかった。そもそも、ローブと髪飾りを送った事さえ記憶のかなたかもしれない。
目の見えないところに気が回るのに、どうして目の前の出来事には鈍感でいられるか。物見の塔が遠くを見渡す一方で根元が見えないように、感覚に優れた人には死角ができるものだろうか。
レティシアは立ち上がって、これからやるべき事を頭に思い浮かべた。まずはリーザを起こしてシーグを迎えに行ってもらおう。見知らぬ侍女に案内されるよりも良いはずだ。そして、自分はシンシアと話をしなければならない。

2部－8　破滅のために

＊

客間に一人取り残されたシーグは居心地の悪さを感じていた。
不思議な文様が描かれた絨毯。十人が一度に座れるような長い机、細かな細工のされた樫の椅子。白を貴重とした壁紙に、白いレースのカーテンは何だか目が痛くなりそうだ。
巨大な本棚には整然と本が並び、それでいながら中央には剣術の稽古ができそうな広い空間がある。サイドテーブルには巨大な花瓶があって、両手でも抱えきれないほどの花が生けられている。呆れるほどに広く、埃一つない清潔な部屋。
自然とはかけ離れた空間はまるで異世界のようだ。シーグは入り口からは離れず、部屋の隅の方にあるソファーにポツリと腰掛けていた。最上のもてなしに違いないだろうが、護民官達の威圧的な態度を思い返すと、込み入ったいやがらせの一種だろうかと疑いたくなる。
外の景色でも見て気を紛らわそうかと思ったが、絨毯の上を歩いてカーテンに触れて窓を開けないといけない。その動作のうちに、この部屋の均衡を揺るがしてしまいそうで気が引けたのだ。
非の打ち所のない整然とした部屋というのは、来訪者に威圧感を与えるものらしい。飢えで殺気だった怪物や、部屋の外で構えているいかつい護民官の方がシーグにはくみしやすい相手に思えた。
うんざりしていると、規則正しい足音がゆっくりと近づいてくる。パタパタと忙しく歩くリーザとも、力強く踏みしめるシンシアとも違うが女性のものだ。きっと案内役だろう。
しかし、よくよく考えてみて奇妙だと思った。
移動は隠し扉からだと、ライスは言っていた。それなのに正面入り口からやって来る。部屋の中に入った侍女がいつまでも出て来な

ければ、扉の前の番人が奇妙に思うだろうに。
シーグは警戒しながら椅子から立ち上がってシャープネスの柄に軽く触れた。とはいえ、ここは七家の一つ、フェルナンディの屋敷だ。騒ぎは極力起こしたくない。だから、シーグはシャープネスをベルトから外すと椅子に立てかける。グラークがわざわざ剣を渡したのは、厄介ごとを引き起こすためかもしれないからだ。
扉を規則正しく3度叩く音がして、静かに扉が開かれた。入ってきたのは、十代も半ばの少女だった。小柄な体を白を基調として、淡い色のフリルがたくさんついた服で包んでいる。黒い瞳と黒い髪、メティスの女性とは違う血色の良い肌。レイザークの人間だ。
「あなたがシーグ？」
うなずくと、少女はボンヤリとした瞳でシーグを見つめた。そして、ナイフを持った手をゆっくりと。いや、ノロノロと振り上げた。
「動いちゃだめ」
軽い頼みごとをするような口調、弱った羽虫のような勢いで少女は腕を振り下ろす。シーグはナイフをそのまま手の平で受けた。細やかな銀細工、細身の刀身は手紙の封を切るためもの。柔らかく焼いた肉でさえ綺麗に切れるか怪しい代物である。
黒髪の少女は、黒水晶のような瞳でじっと見つめてくる。少女は受け止められたナイフから手を離して背を向けた。闘志も殺意も感じられないし、そもそも攻撃というには貧弱すぎる。
ひょっとして、これは何かの冗談なのだろうか。何か特殊で複雑なルールがあって、最初に訪れたものを試すのだろうか。噂によるとレイザークには戦士の結社があり、入団を希望する者を日常の最中で突然試練を課すのだという。メティスや魔術師にも同様の習慣があるのかもしれない。
真剣に悩んでいると、少女は椅子に立てかけたシャープネスを手に取って、危なかったしい手つきで鞘から抜いた。細身の剣だったが、少女には重荷であったらしい。正眼に構えようとした振り上げた勢いもそのままに、刀身が黒髪めがけて落ちてゆく。シーグはあ

わててシャープネスの刃を、指でつかんで止めた。すると、少女はぺたりと椅子に倒れ掛かるように腰掛けた。そして、のんびりとシャープネスに向かって手を伸ばしてくる。指を切りそうな無造作な動き。シーグは慌てて少女からシャープネスを遠ざけた。

「危ないじゃないか」

警告すると、再び眠そうな顔でじっと見つめてくる。そして、糸で操られた人形のようにぎこちない動作でシャープネスを指差した。

「私はね、滅ぼして欲しいものがあったから、その剣を作る協力をしたのよ」

「滅ぼす以前に、あんたのほうが先に大怪我をするぞ」

「そうね」

抑揚のない声で答えるとプイとシーグから目を逸らして少女は立ち上がる。そのまま扉を開け、スタスタと歩いて出て行ってしまった。放たれたままの扉から、護民官が怪訝そうな表情を浮かべてシーグを確認した後に扉を閉めた。

一体、何がどうなっているというのだろうか。取り残された格好になったシーグは、呆然としたまま突っ立っていた。

コンコンコンと、外れた調子で壁を叩く音。続いて「あれ、あれ、あれ?」と聞き覚えのある声が壁の向こうから聞こえてきた。今度はリーザに間違いない。

しばらくあちこちを叩く音が響いていたが、慌しい足音と共に遠ざかってゆく。シーグは急いで壁に駆け寄ると、軽く三度叩いた。

「へ?」と間の抜けた声と共に足音が戻ってくる。

「おい、リー姉だろ」

「あ、シー坊?」

壁に向かって問いかけると、くぐもった返事が返ってくる。今度は床の辺りをポコポコと叩く音が聞こえてきた。壁をよくよく見ると亀裂が入っている。それも、本棚の後ろや絵画の額の裏に隠れるようにである。

シーグは亀裂に沿って順番に壁を押していった。キィと小さな音

を立てて壁が扉のように小さく開く。
「おい、リー姉。開いたぞ」
「え、本当？　よかっ――」
ゴツンと鈍い音が響いて、開きかけた隠し扉が勢いよく閉じる。
しばらくしてから、隠し扉を開けてリーザが出てきた。頭を押さえながら、恨めしそうににらんでくる。
「急に開けたらびっくりするじゃない」
「ごめん」
謝る一方で、果たして自分が悪かったのかとシーグは疑問に思っていた。さっきの展開からいうと、リーザの方から勢いよくぶつかっていったのだろう。後頭部を押さえているが、どういう体勢でぶつかればそうなるのか。
「おっかしいなー、いくら叩いても開かなかったのに」
「リー姉の側からは、引かないとダメなんじゃないか」
「へ？」
リーザは扉を開けたり閉じたりしながら、気まずそうに視線を泳がせている。シーグは紳士ならばどういう行動が相応しいかを考えた。しかし、何も思い浮かぶ事はなかった。
「黙っていたら却って気まずいじゃない。いっそ笑い飛ばしてくれたらいいのに」
リーザは片方の頬を膨らませている。紳士たるもの、場合によって人の失敗を笑い飛ばす機転も必要であるらしい。
「それよりも体のほうは大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃないわ。私はフィーちゃんみたいにスタイル良くないもん。レティシアみたいに高貴でもないし、シンシアみたいに可愛くもないし――」
「じゃなくて、急に気を失っただろうが」
「違うよって、言ってくれないんだ」
「・・・・・・」
「いつもの事だもん。気にしないで」

膨らませた頬を引っ込めてリーザはあっけらかんと答えた。しかし、急に前後不覚で眠り込むなど普通では無い。何度もあるようなら、怪我をする事もあるだろう。

「女の子の体のこと色々聞くなんて、シー坊ってばスケベ？」

自分の両肩を抑えて、リーザは「やらしー」と言いながら身を引く。シーグが黙り込むと、態度を一変させて笑顔になった。

「ねえねえ、セーラちゃんと会ったんでしょ。綺麗な黒髪に、黒水晶みたいな瞳の女の子よ」

「無表情でボンヤリした？」

「こーゆー場合は、『おしとやかで奥ゆかしくい』、っていうべきね」

リーザは指を立て、目を三角にして注意する。

「それに、お人形さんみたいに綺麗な子でしょ。純白で可愛い服がとってもよく似合うのよ」

うっとりとした様子で言うリーザ。フリルだらけの服は間違いなくリーザの趣味なのだろう。大人しくしているのをいい事に、着せ替え人形にしているに違いない。

「だけど、何で知っているんだ？」

隠し扉の向こう側からも聞こえるような物音を出した覚えは無い。

「魔術師だからよ。あ、別に魔術を使って盗み聞きしたわけじゃないからね」

「感覚のほうか。だけど建物の中で、個人の特定は無理って言ってなかったか？」

「特別なフィーリアを持っている人は別なの。私やシンシアちゃん、セーラちゃんみたいに天空の水盤でフィーリアを見つけた人はね。あとは5つ以上フィーリアを持っている人もそう。道を歩いているだけで、周囲の魔術師がみんな気づくから」

つまり、力をつけた魔術師は何処にいるのか周囲に筒抜けなのだ。力のある魔術師が人里はなれた場所に住む理由はこの辺りにあるのだろう。

「じゃあ、セーラって子にも特殊な能力があるわけか？」
問いかけると、リーザは「ひゃーー」と言いながらシーグを見ている。
「なんだ？」
「人の名前を一度で覚えるなんて珍しぃー」
「誰かさんと違って、おしとやかで奥ゆかしい人だったからじゃないか」
ふざけた調子で答えると、リーザは目を細めて問い返してきた。
「誰かさんって、誰の事？」
「白髪とか、もどきとか。シャックリとかゼッペキとか・・・・・・」
ションベン色と続けそうになって、シーグは口を閉ざした。
「女性でさえないわね」
リーザは楽しそうにクスクスと笑っている。
「あの子は、スペル・エンハンサー（魔術の増幅者）っていう称号を持っていてね。魔術師のサポート役として超一流なの。七家の秘儀だっていくつか伝授されているんだって。だけど、話しかけてもほとんど返事をしないの。いつもボーっとしているんだもん」
「こういう場合は『物静か』、って言うべきじゃないのか？」
「・・・・・・・・・・・・」
リーザは口をぽかんと開けたまま、黙り込んでしまう。その後、ムッとした表情でシーグをにらんだ。たぶん、小さな事は聞き流すのが紳士の心得だったに違いない。
「ええと、あの子はシャープネスを作る手伝いをしてくれたんだって？」
「誰に聞いたの」
なんとなく聞いてみると、リーザはギョッとした様子で聞いてきた。
「本人がそう言っていた」
「へ、へえ、へえーーーー」

リーザはなんでもない風を装った。もっとも目をキョロキョロさせながらソワソワしているので、あからさまにおかしい。
「他に、何か言っていた？」
「滅ぼしたいものがあるから協力したんだって。どうした、リー姉？」
リーザはさっと顔色を変えて、隠し扉の向こうに逃げ込んでしまった。
「な、何も隠してないわよ。や、やましい事なんて何もないんだから。あはははははは」
必死になって叫んだ後に、乾いた笑い声を上げる。隠し事もあれば、やましい気持ちもあるらしい。
「と、とにかく急ぎましょう。うん」
リーザは勝手に独り決めを決め込むと、隠し扉の奥へ奥へと逃げて行く。これ以上聞いても無理強いになりそうなのでシーグは追求するのをやめた。
「真っ暗だな、平気か？」
「魔術の明かりをつければ大丈夫よ、ルミエス！」
リーザがパンと両手を叩くと、拳大の青白い光が灯る。隠し扉の向こうは壁と壁の間に作られた道。しかも、相当複雑に入り組んでいる。壁に左手をかけて、リーザは歩き出した。
光に照らされた影が、狭い道の中で忙しく形を変えてゆく。シーグには、どれほど深い森の中でも方向を見失わない自信がある。しかし、こうも頻繁に角を曲がっていては、自分の居場所を見失いそうだった。
しかし、リーザは迷うことなくスイスイと角を曲がってゆく。
「こんな道でよく迷わなかったな」
「複雑な道に見えるけど、左手を壁に当てて歩けばいいの。来る時もそれで着いちゃったから」
リーザは壁を指差しながら説明してくれた。なるほど、とうなずいてからシーグは違和感を感じた。

「来る時も左手を壁に当てていたのか」
「そうよ」
「じゃあ、帰りは右手に変えなくてもいいのか？」
「あ・・・・・・れぇ？」
リーザは突然立ち止まって大きく首をひねった。
かくして、シーグとリーザは、元の部屋まで引き返す事となった。

2部ー9　望む事があるなら

＊

レティシアは、シンシアが閉じこもってしまった客間に向かっていた。

フェルナンディの一族ではあるが、シンシアの部屋は屋敷の中には無い。元々正妻の子では無く、髪の色を理由に魔術師としての素養が低いと判断されたからだ。そういう子どもは、魔術師の訓練を受け、淑女としての振る舞いを身につけるために毎日屋敷に通う。

年齢と共に目の色に微妙な変化が起こり、オッドアイであると断定されてからは屋敷に近づく事も禁じられてしまう。結果として、血族によるフィーリアの継承も絶望的となってしまった。

ライスがあれこれと手を尽くしたが、兄の立場を悪くできないとシンシアが自ら身を引いた。そんな折に訪れたのが、ガイス・ジュサックとシンシアの婚約の話である。オースピニルとメティスによる魔術師部隊『メティオスマッシャー』の結成。共闘の象徴として、両国間での結婚が相応しいと考えられたからだ。そこで七家の中で魔術師の素養がない異相の女を、政略結婚に使おうと王国は考えたのである。非道な決定にもシンシアは不満一つ言わずにうなずくだけだった。

真っ向から反対したのは、サフィリアだ。それどころか、ガイスの花嫁として自ら志願する。天空の水盤はオースピニルの領土だから、自分のほうが相応しいと、各国の特使の前で自ら宣言したのだ。ちょうど昨年のインボルグ、各国の特使が王都に滞在していた時である。

それから1年。シンシアはサフィリアの元で学び、フィーリアを見つけて魔術師となった。しかし、フェルナンディの屋敷には帰らず、ジェイナスの学校に住み込みをしている。屋敷に呼ばれた時は

必ず客間に待機し、陽が落ちる前に退出する。公式の場にも所属を示すガウンを身につけることもしない。

フェルナンディの指示に従うこともなく、フェルナンディの威光を借りる事はない。だが、その一方でフェルナンディの名を捨てる事もしない。七家の出身でありながら、自らの判断で七家から離反する。一方でメティスから去ろうともせず、封土に居座っている。そんな態度を無礼だと決め付け、非難する者も絶えなかった。

シンシアは正面きっての侮辱は真っ向から受けてたち、陰口は鼻で笑い飛ばした。実力行使と、魔術の決闘を挑んだ者も数知れない。しかし、同年代の誰一人としてシンシアにかなうものはいなかった。不規則な軌道を描き、自在に形を変えるチェイン・ライトニングに対抗できる魔術師はメティスにも数えるほどしかいない。

「レティお姉様ですね」

客間の前に到着すると同時に、扉越しにシンシアの声が聞こえてきた。帰ってくれと言わんばかりに、足音が遠ざかってゆく。

魔術師の接近を魔術師が見逃す事は無い。ずっと前から気づいていたのだろう。

「シーグさんの怪我は平気よ。もう出血が止まりかけていたわ」

答えると、しばらくの沈黙が下りた。部屋の中に迎えようともしないが、扉の近くから立ち去る事もできないでいるようだ。

「リーザもさっき目を覚ましたわ」

「体は大丈夫なんですか？」

シンシアは不安そうに問いかけてきた。魔術を使った後、決まってリーザは昏倒するように眠りにつき、急な発熱を繰り返すこともある。極端な体調不良を起こすからだ。特にディテクト（探知）とサモニング（召喚）の系統との相性は最悪のようである。

フィーリアの形状は、魔術の発現や封土との係わり合い、魔術による影響などを象徴する。フィーリアが植物であれば封土との調和により安定した力を持つ。金属であれば力強く瞬発力に優れた魔術に向いている。宝石は緻密に構成される術式との相性が強い。

リーザの場合はくたびれた小さなウサギのぬいぐるみだ。糸や布という脆い構造物がフィーリアとなった例は今までに無い。魔術がリーザに対してどんな影響を及ぼすのか、誰にも分からないのだ。糸と布で作られた魔術の品が使い捨てられるように、魔術に関われば ボロボロになってゆく可能性も否定できない。リーザはそれを承知の上で魔術師となった。

「大丈夫よ。今日の昼食は何かって聞いていたの。2人分は食べるかもしれないわね」

「・・・・・そうですか」

遅れた返答に対して、安堵するような声。扉越しにもシンシアがこちらを向いた事がわかる。レティシアは扉にそっと近づいた。

「書状が来たわ。今宵の宴には七家だけではなくて、各国の特使も招く事になったの」

分厚い扉越しにも息を呑む気配が伝わってきた。賢いシンシアはその意味する所に気づいたのだ。

「昨日のヴァンガードと、午前中のアビシャルホルドでの出来事。七家とシーグさんの間で起こった戦いがなんであったか。諸国に返答するのが目的よ」

「シーグさんに『剣の法廷』に挑む権利を与えて、メティスが庇護する事になるのでしょう」

「反対にメティスに仇なすものとして処罰するか」

弱々しい問いに対し、レティシアは冷徹ささえも感じさせる静かな声で答えた。

「そんな、理不尽じゃないですか！」

叩きつけるような勢いの怒鳴り声。地面を蹴りつける音の後に扉にシンシアの気配が近づく。

「フェルナンディはどうするつもりなんですか！」

「平等を守るでしょうね」

「……では、シーグさんを見捨てるつもりなんですか！」

扉の向こうでシンシアが歯を食いしばっている姿が思い浮かびそ

うだ。
「同時にフェルナンディは法の公平さを捨てる事もできないわ。あなた達が取り戻してくれたスカーフで、ルパートとバイロンの虚言が証明できたもの。真実を明らかにして、王宮に報告するつもりよ。この後、どういう展開になるか分かる？」
シンシアの激しい怒りの気配が和らぐ。
「七家は七家の言い分を主張するはずです。お互いの主張と望みが衝突する時、『法廷の権利』を持つ者が何人シーグさんを擁護するかで情勢が動くはずです」
「『法の杖』、イーグル・アイ（鷹の目）のライス・フェルナンディは筆頭に立ってシーグさんの擁護をしてくれるの」
「本当ですか！」
「もちろん、私もよ。シーグさんの無実が明らかになれば、もっと多くの人が賛成してくれると思うわ」
「……私、お兄様にひどい事を言いました」
飛び上がるような明るい声の後に、地の底まで沈みこむような声が続いた。扉越しの声色や気配だけで、感情の動きが手に取るようにわかる。やはり、ライスの妹なのだとレティシアは思った。
「ライスは怒っていないわ。逆に心配して、取り乱していたわよ」
「お兄様がですか？」
「シンシアに何かあったとき、あの人がどれだけ落ち着きを無くすか。ちょっと楽しいくらいよ」
「婚約者に向かって、そんな言い方はいけませんわ」
シンシアはいつもの快活な口調に戻っていた。
「仕返しよ。私が髪も服も変えたの全然気づいてくれないんだから」
「またですか。本当にどうしようもない朴念仁ですね。私が後できっちりと注意しておきますわ。言ったところで効果があるかどうか。そもそも、あの細い目が本当に開いているのかも謎ですしね」
ひどい言い方にレティシアが思わず吹き出すと、シンシアもクスクスと笑い始めた。

「ねえ、シンシア」
「はい」
元気よく明快な返事に却って戸惑う。できる事なら、先延ばしにしたい話題だったからだ。多感な少女が気持ちを落ち着け、考えをまとめるだけの十分な時間をあげたい。しかし、シンシアに自分と同じ後悔をさせたくない。
「シーグさんを昼食に招いたの。シンシアはどうする？」
案の定、シンシアは黙り込んでしまった。
「もしも怒りを感じているなら――」
「シーグさんには申し訳なく思っているのですよ。そもそも私が怒る理由なんてありませんし、本当は謝罪しなくちゃいけない位なんです」
レティシアの言葉をさえぎるように、シンシアは一度にまくしたてた。
「……そうレティ姉様から伝えてくれませんか」
ためらいがちな言葉は、自分の行動や言動が正しいとは思っていない証拠だ。間違いに気づいていながら、見過ごしたとなると後悔は更に大きくなるだろう。残酷だと思っても、レティシアは先を続けた。
「私も同じような思いをした事は知っているわね」
沈黙を了解と受け取って、レティシアは先を続けた。
「メティスに着たばかりのライス。あの人はずっと辺境の封土で育ったから、メティスの魔術師の習慣を知らなかった。倒れそうになった私を支えてくれただけ。その時私が取り乱して泣き出してしまったものだから、ライスが私を侮辱したものだとみんなが勝手に思い込んでしまったの」
自分の感情的な行動が、ライスを危険の最中に放り込んでしまった。その後、いくら声を大にして誤解だと叫んでも誰も聞く耳を持たなかった。
メティスの男たちは、女に対して崇める対象として相応しい貴婦

人である事を要求する。心の中で何を思っているかなど構いもしない。騎士の規範に従って、盾のように立ちふさがって完全な安全を保証するだけだ。自由を求めても、外とのつながりを求めても、貴婦人に相応しくないとあきれるだけなのである。

シンシアに対して、同じ行動にでる男たちはメティスの内外に数え切れない現れるだろう。特使の中には計算ずくでフェルナンディに恩を売りたがるもの。すでにシーグに対抗するべく腕利きの剣士を手配したという情報も入っている。

「ねえ、シンシア。宮廷の中で、私たちは嵐の中の船と同じなの。目をそむければ流れを見失う。舵を離せば翻弄されるだけになってしまう。望む事があるのなら、真っ向から立ち向かわなくちゃいけないわ。立ち止まる事はあっても、逃げてはダメなの。私たち女が一度退けば、男たちが立ちふさがって物事を勝手に運んでしまうから」

再び、重苦しい空気が漂い始める。言い終えたレティシアは、壁に背中を預けた。この話題を自分がぶつける事は卑怯だと思ったからだ。

今年でようやく13歳に届くばかりの少女は、知恵者を自称する者たちを驚かせる事を口にするし、びっくりするくらいに先のことを考えて行動する。

心はとっくに実際の年齢を追い越してしまっているのだ。そして、シンシアは兄に対して好意以上の感情を持っていた。その事に全く気づいていないのは当人だけである。ライスが誇らしげに小さなレディーと言う時に、時々シンシアが泣き出しそうな顔を浮かべていることに気づきもしない。ただ十年にも及ぶ空白を埋めるために懸命に兄として、父親の代わりとしてシンシアのために尽くしているだけだ。

サフィリアと天空の水盤に行ってからは、吹っ切れたのか自然に接してくれるようになった。しかし、今でも心中は複雑には違いないだろう。フェルナンディの屋敷に近づこうとしない理由の一つに

は違いない。
　ライスの後ろめたさから来る優しさが、多感な少女を追い込んではいないだろうか。
「私はどうすればいいのですか？」
「あなたが考えた通りにすればいいわ」
　返事の変わりに静かに扉が開いて、シンシアが顔を出した。ひどく思いつめた表情をして、両手で襟をいじっている。片目の瞳孔がわずかだが朱色に変わっているのは、気持ちが高ぶっているからだ。
「私の目を見ても、全然驚かない人は初めてでした……」
　突然の呟きは意味が不明だったが、レティシアは問い返さずに静かに聞いていた。
「だけど実際には色そのものが良く分かっていなかっただけです。魔術の事も良く分かっていないのにのんびりと構えて。怖いもの知らずかと思ったら、人の顔色を伺って的外れな事を言います。正面きって襲い掛かる脅威には強いのは認めますが、間接的に陥れようとする陰謀にはまるで無防備です」
　声色は叩きつけるような激しさを帯びてゆき、口調は怒涛の勢いとなっている。瞳の朱色は更に鮮やかになっていった。
「言われるままにほいほい誘い出されて、気がついたら首が回らない状況になっているのは目に見えていますわ。見張っていなければ、何をやらかすか分かったものではありません。ああいうボンヤリした人は、メティスにいる間は鎖につないで閉じ込めておくのが一番なんでしょうけど」
　さすがに言いすぎではないかとレティシアは思った。
「そういうわけには行きませんからね。分かりました、私に出来る事をやってみます。これ以上、宮廷で敵を作るわけにはいけませんね」
　シンシアはそう締めくくると、言葉を止めて大きく息を吸い込んだ。閉じたまぶたが開かれた時には、瞳は元の黒色に戻っていた。
「レティー姉様、キョトンとしていますよ。まさか、私が本当にシ

ーグさんを縛り上げるとでも？」
　尻上がりな口調で悪戯っぽく微笑むシンシア。先ほどまでの戸惑いの表情は陰も形もなくなっている。
「準備を整えたら向かいます」
　スカートの裾をつまんで、礼儀正しく挨拶をするとシンシアは軽やかな仕草で部屋の中に引き返していった。わざとらしいほどにさりげなさを振りまく少女に、レティシアは一抹の不安を消す事が出来なかった。

2部－10　法の杖の思惑

＊

フェイル・リレイを守る魔術師が近づいてくるのを見て、ベクターは足を止めた。ここより先は、フェルナンディの守る場所だ。七家の当主ともあろう者が、許可もなく立ち入ってはならない場所である。

「ベクター卿、何事ですか」

護民官の腕章をつけた魔術師は、深刻な表情でベクターに問う。

「王命により、サ・フィールに行かなくてはならない」

「どのようなご用件ですか。ライス護民官長に用事であれば、こちらから出向きます」

なぜ、使者を出さずに自ら訪れたのか。魔術師達をむやみに不安がらせるだけではないか。護民官の怪訝な表情がそう語っている。

「陛下の命令により、行かねばならない」

「しかし、事前の連絡もなく……」

ベクターは王勺と宝珠を差し出した。魔術師にとって命と同義ともいえるフィーリア、それもメティスの至宝を押し付けられて、護民官は困惑した。

「べ、ベクター卿。困ります」

「私は行く」

留めようとする護民官にフィーリアを預けて、ベクターは更に歩みを進めた。周囲にいる魔術師がベクターを取り囲み、フェイル・リレイの水門にいる魔術師達が移動を始める。強行するのなら実力行使も辞さないという態度だ。

しかし、ゆっくりと歩を進めるだけのベクターを前にすれば、誰もが歯がみをして道を譲るのだった。水門へと続く道にとうとう最後の一人が立ちふさがった。背筋を真っ直ぐと伸ばした白髪の老人。

風切の刃、カレント・テクニクス（流れの匠）のロイド・カーティスだ。
「ベクター卿、『法の剣』を名乗るあなたが自ら法を破るのか！」
「王命により行かねばなりません」
「用件を教えていただきたい」
「言えません」
「ならば、書状にて伝えていただきたい」
「できません」
冷淡にこたえるベクターに対し、ロイドは眉を吊り上げた。
「緊急であれば、王命によって号令を出すべきでしょう。何ゆえに、王と法を守る者が自ら規律を破るのか！」
「……」
「むやみに、混乱を広げるような行いを認める訳にはゆきませぬぞ」
空気を震わせるような怒声を無視して歩みを進める。ベクターが横に飛ぶと、さっきまで足のあった場所を三条の空気の刃が裂いた。けん制とはおもえぬ行動に、周囲にいる魔術師たちがどよめきを上げる。
「ロ、ロイド導師。やりすぎでは？」
「メティスの要を守る任をあずかった以上、例外は認めぬ。陛下その人がここに来たとて、私は通すつもりはない。フィーリアを持たぬとはいえ、容赦はいたしませんぞ」
杖を構えたロイドはベクターと対峙した。杖をわずかに傾けるだけで、鋭い風が襲い掛かる。ベクターは体をそらすと、背後の地面が土を巻き上げる。
ロイドに風を扱わせればメティスに並ぶものは無い。魔術を展開する速さなら、天空の水盤にいるサフィリアにも匹敵する。この間合いではどんな魔術を使った所で先制される事は目に見えている。フィーリアの有無など関係ない。魔術に頼らず、自分の身一つで切り抜けなければ。
感覚を研ぎ澄ませば、魔術を展開する前に攻撃の予兆が分かる。

最初に体を切りつけるような敵意、次にロイドの視線と杖を持つ手が動く、最後には魔術の色彩が上空に出現するのだ。周囲を取り巻く群衆を傷つけないために、上空から風を切り下ろす軌道を取るので読みやすく、かわすのは容易だ。

立て続けに放たれた三度の風をベクターは上体を動かすだけで避けた。周囲から驚きの声が上がる。体勢を立て直したベクターに対して、ロイドは杖を垂直に構えて、地面に突き立てる。大規模な魔術を行使するつもりだ。

巻き込まれる事をおそれて、周囲に集まった護民官達は一斉に逃げてゆく。ベクターはロイドに対して横に歩きながら、２０歩の距離をあけて壁を背にした。

ロイドは一瞬だけ眉をひそめたが、呪文の詠唱をとめることは無い。前方に６箇所、薄紅色の球が浮かんだ。ベクターは魔術に対抗するべく、全身に力をためて体勢を低くした。シーグならば、この難局をどう切り抜けるだろうか。

「そこまでだ！」

突然の声に対し、ロイドは杖を水平に傾けた。すると、風の刃は見当違いの方向に飛んでゆき、壁へ届く前にかき消えた。ロイドは姿勢を正すと、ゆっくりと歩いてくる青年に向き直った。

「ライス護民官長。あなたの友人とはいえ侵入者には違いないのですぞ！」

「意味のあることだ、ロイド導師。ここは引いてくれ」

静かだが威厳のある声を放つ老人。ライスは無表情のままで淡々と語る。

「理由を説明していただけぬのですか？」

「今は出来ない。だが、王命が下ったのだ。私はそれに従わねばならん」

ロイドは悔しげにベクターをにらみ付ける。ライスはゆっくりと歩いて、ロイドの肩に手を置いた。

「この事は、後日必ず説明をする。ここは私に免じて引いてはくれ

ないか？」
　ライスが諭すように言う。ロイドは杖の石突で床を打ち、水門の向こう側に足早に消えた。
「さあ、皆も持ち場に戻ってくれ」
　ロイドの魔術から逃げ出していた護民官達は水門のあちこちに散ってゆく。護民官は、慎重な足取りでやってきてベクターに王勺と宝玉を返して逃げるように立ち去ってゆく。
「自分からフィーリアを手放すなんて、自殺行為だぞ」
「……」
　無言のままのベクターを見て、ライスは更に大仰なため息をついた。
「ところで王命ってなんだ？」
「さっきの言い方だと、君の所にも命令が行ったように聞こえたが」
「いいや、来てないよ」
　ベクターの問いに、ライスはニヤリと笑った。
「……屋敷まで行くように、との命令だ。シージペリラスに会って確かめてこいと」
「直接確かめるって、何をだ」
「彼が色魔であるかどうか、だ」
「……はあ？」
　ライスは素っ頓狂な声を上げて、ベクターをまじまじと見つめる。
「彼が色魔であるかどうかを確かめてくるよう命じられた」
「いやいや、そんな言葉を生真面目に何度も繰り返さないでくれ。聞きたくなくてもしっかり聞こえているから。……陛下から他の命令は何もなかったのか？」
「ない」
「なんてこった。メティス中を動かす王命の内容とは思えん」
　ベクターが断言すると、ライスは心底呆れた様子で目元を覆った。しばらく両手で顔をこすっていたが、急に動きを止めてハタと顔を上げる。

「いいや、ちょっと待て。さては、口止めされているんだな。そうだろ？」
「……」
言い淀んだ瞬間にライスの目がスッと細くなった。ベクターは気まずさも手伝って思わず顔を背けた。
「こういったふざけた内容に隠れて何かたくらむのはゲイル大臣のやり口だな」
「すまない、ライス。話すわけにはいかない」
「よーしよし、それなら俺が当ててやる。メティスを混乱させて、捕り物をしようって魂胆だな」
「……ライス」
「大当たりか。だけど、お前は沈黙を守ったわけだし、誓いを破った事にはならないよ」
「いや、私は――」
「それに王命の真意を理解して動くほうがより忠節にかなった行動だといえるな。うむうむ、時に忠節な部下は真意に従って、主と相対する事もあるわけだ。私にとってのグラークやロイド導師がそれに当たる。彼らの行いは時には私と反発する事はあっても、いつだってフェルナンディのためを思って動いている。私は本当にいい部下を持ったものだ。そう思うだろ？　うーむうむう。間違いなくそうに違いないぞ」
言い淀むベクターを制して、ライスは一度にまくし立てた。普段無口な『法の杖』が間断なく畳み掛けるとき、必ず自分に都合のいい方向に持っていこうと考えている時である。
「だから、これから『俺達』が取る行動だって間違いなく――」
「ライス！」
共犯にされる事を恐れたベクターは、大声を上げた。水門にいる護民官達が何事かとこちらを見ている。
「何を考えている。私に何をさせるつもりだ」
ベクターは意識して声を落とした。だが、ライスは水門には背を

向けてニヤニヤと笑っていた。
「企みに一丁乗ってやろうと言うのさ。ただし、主導権はこちらがつかむ」
ライスは声色を落として、ささやく。ベクターは都合のいい契約を一方的に結ばせる邪悪な悪魔を連想した。
「あの人は必ず混乱を振りまく。煙の無い場所にさえところ構わず火をつけて、火の元が何で火事場が何処だったかも分からなくするんだ。人間関係をズタズタに引き裂いて、その後に自分の息のかかった人間を配置する。敵に勝利し続けるために、平気で味方を整地できる人だ。このサ・フィールの中でそんな事をされてたまるか」
「ライス、言葉が過ぎるぞ。誰かに聞かれたらどうする！」
「こういうことは君以外の誰にも言わないよ。レティシアにさえね。それにこれでも腹が立つのを押さえているくらいなんだぞ。大体考えてみろよ。フォルナージュの当主が連絡もなしにここに来れば、混乱が起きるのは当然だった。ゲイル大臣が騒ぎを求めたからには続きがあるんだ。最初の火の手は上げてやった。次の火の手が何処に上がるか、見逃すわけにはいかない。協力するのは構わんが、いいように利用されてたまるか」
「まるで私とロイド導師が争うのを見透かしていたような言い方だな」
「狙い通りに始まって、うまく治まったしたと思っているよ」
「いつから見ていたんだ？」
「君のところに護民官が駆け寄るあたりかな」
つまり、事の最初からだ。散々な言い方と、自分が手の平で転がされていた事を知り、さすがのベクターも腹が立ってきた。
「落ち着けって。騒ぎを最小限に食い止めるためだ。お前だって、５０年もメティスに忠節を尽くした老人をなぎ倒したくなかっただろうが。更に手加減までしていた。フィーリアなしの状況下で手抜きをされて、自分の持ち場で敗北してみろ。再起不能になっちまうぞ。勝ったら勝ったで、メティスの要人を傷つけた責任を取って自

決さえしかねん。最後に自分から２０歩の距離を空けるなんて、ふざけているとしか思えん。魔術なしの状況下で、リガール・バックラーの仮想対決をしていたんだな。シーグと同じ状況なら自分はどう対応するか。そんな事を考えながら戦いを楽しんでいたんだろ」

図星をつかれてベクターは黙り込むしかなかった。

「そういう楽しい事をする時は、必ず誘ってくれ」

「……ライス」

「しかし、ゲイル大臣は揉め事を起こすのが目的だったんだろ。だけど、ロイド導師はフェルナンディに欠かせない人物だし、フォルナージュとの関係が悪化するのも困る」

「レティシアがこの事を知ったらいい顔をしないぞ」

「……彼女は理解してくれるさ」

「シンシアがこの事を知ったら悲しむぞ。あの子はひどく潔癖だからな」

「ぐぅ」

立て続けに言葉をつむいでいたライスは目に見えて怯んだ。言いすぎたか、とベクターは少し後悔した。謝罪の言葉を探していると、ライスは目を更に細くする。

「私は君と違って陰険な陰謀家だからね。公明正大な態度は取り続けられないさ。シンシアだって君の事をずいぶんと気に入っているみたいだ。一応確認しておくが、１４も年下の少女に懸想する事は無いだろうな、ガイスみたいに」

よりにもよって誰と一緒にするのだろう。だが、先ほどは言いすぎたと思っていたので黙り込む。

「ほう、シンシアのような子どもは気にもならんという事か」

「それを言うなら……」

シンシアが君のことを腹違いの兄だって知るまでは、と言いかけてベクターは黙り込んだ。これはシンシア自身から口止めされていたのだった。気づかれないように兄からベクター卿の事を根掘り葉掘り聞くようにしますが許してください、と。当時１０歳の少女と

は信じられないほどの思いつめた表情を浮かべ、苦しみの中にありながら理知的な言葉で。自分の首を絞めてしまうのではないかというほどに、両手で襟元を握り締めていた。

だが当の兄は、シンシアが屋敷に近寄ろうとしないのを「年頃の娘は難しいから」の一言で済ませている。

「あと3年、いや2年もしてみろ。すれ違うだけで男を振り向かせて、話しかけるだけで何人の宮廷人の胸を破ることやら。宴でダンスに誘うために決闘沙汰が起きる事だってあるかもしれんぞ。大体、お前は宮廷で艶やかな女性達の視線を独り占めしているくせに、全く浮いた話の一つも聞かない。ガイス呼ばわりされるのも無理は無いぞ」

「……」

今、自分はそうとう剣呑な表情を浮かべているに違いない。ライスの心から楽しそうな様子がそれを裏付けている。これが無口と控えめで通っているライス・フェルナンディの本性である。伏魔殿と知られるメティスの宮廷でそつなく行なってゆけるのがよくわかる。

これ以上続けるなら、ライスが前後不覚に酔っ払った時の事をレティシアに告げてやろう。そう思っていると、ライスはピタリと口を閉ざした。そして、実に気まずそうにベクターの背後を指し示す。最も口元は笑っていた。

何事だろう、と後ろを振り返ったベクターはその理由に気づいた。フェイル・リレイの塔から、一人の老人がこちらを見ている。周囲には懸命に何かを訴える護民官達の姿があった。

ジェイナス・マードックである。

「ナイトロード卿のお出ましだ。人前で言い争いを続ける若造2人をたしなめにやってくるぞ」

「狙ってやったな、ライス」

フェイル・リレイへテレポート（瞬間移動）で現れる者は必ずフェルナンディに連絡が入る。天空の水盤からの移動となれば、正午の三点鐘までには連絡が入っているはずだし、正確な到着時間もラ

イスは知っていたはずだ。
「ここまで絶好のタイミングとは運が良かったなあ。おい、ションボリするんだぞ」
「一体何を考えているんだ？」
「うちの導師とお前は揉め事を起こしたんだ。それもフェルナンディの守る土地を強行突破しようとした。いくら親友だからって早々に仲良くしたら、部下が腹を立てるだろ。だれかが仲介に入るまでは言い争いをしていなくちゃいけなかったんだ。そして、年長者に諭され、心を入れ替えて共闘する。これこそが形式にかなった方法と言えるだろうな」
　実際にはふざけた口げんかだったが、遠くから見れば言い争っているようにしかは見えなかっただろう。
「ジェイナス卿には口裏を合わせてもらって、いざ任務と行こうじゃないか。俺達が説教をされている間に、ゲイル大臣が次の火の手を上げてくれるだろうさ。だから、２人そろって申し訳なさそうにするんだ。海よりも深く反省して、立ち枯れたスギよりも惨めに見えなくちゃいけないぞ。おー、その表情は実にいいぞ。俺に対する敵意が、遠くからでも伝わってきそうじゃないか」
　本音が表情に出ているだけだ、とベクターは思った。ライスは心にもなく深刻な表情を浮かべながら、楽しそうに言葉を続けている。
　１０年以上の付き合いの中で益々分からなくなってゆく友人を見つめながら、ベクターはメティスの複雑な人間模様を思い知っていた。

2部－10　法の杖の思惑（後書き）

ライスとレティシア。
今、書いてて一番楽しいのがこの2人ですね。

黒いところはあるけど、愉快なライス。
頭がよくて生真面目で優しいけど、ちょっと抜けているレティシア。

年長者の立場にある彼らが、年少のシーグたちをどう導いたり、どんな風に引っ掻き回されたりするのか。
作者も（！）楽しみです。

2部ー11　ドップリと

シーグとリーザは右手を壁に沿わせたまま、暗い隠し通路をようやく抜けた。

「ああ、懐かしき太陽の光よ！」

リーザは大げさに両手を広げて喜んでいる。軽いステップを踏みながら、窓まで駆けていった。さっきまではこの世の終わりのような表情を浮かべていたのに、切り替えの早い事だ。

隠し通路を行く途中、足元を通り抜けていった影があった。リーザはまるで気付かなかったのだが、警戒のためにシーグが魔術の光を借りて照らし出したのがまずかった。

暗闇に光る一対の瞳。その正体は小さなネズミだった。安心するシーグを尻目に、リーザは完全に腰を抜かしてしまう。どうやら、ネズミが大の苦手だったらしい。喉までででかかった悲鳴も出せないくらいで、壁に寄りかかるようにして恐る恐る歩いてきた。自分の足音にさえ怯える始末だったのである。

耳が生えていて、素早く動き、４本足。ウサギとネズミにどれほどの差があるのか、シーグにはよく分からない。機嫌を悪くした時の気性の荒さは、ウサギの方がずっと上だというのに。大体、昔は怪我をしたネズミを素手で捕まえて飼っていた事もあったのだ。泥だらけのネズミを抱きかかえて、連れて帰って治療するのだと頑固に食い下がった。

リーザのフィーリアだって見た目はネズミに似ているように思える。考えてをまとめてから、これは口にしないほうが良いだろうとシーグは思った。

一方、リーザは窓から差し込む光を浴びて、窓枠にもたれかかってネコのように丸くなっている。隠し扉を元通りに直していると、レティシアが開け放たれたままの扉から入ってきた。カップやティーポットが積まれた小さなカートを押していた。手首には宝石をち

りばめたスカーフを巻かれている。目が合うと青い宝石のような瞳が優しげに細められた。
「リーザ、眠ってはいけないわ」
「ぶえ？」
寝ぼけた目付きでリーザは窓枠からズレ落ちた。そして、しきりに頭を振りながら立ち上がる。しかし、足元がおぼつかずにフラフラと後ろに倒れかかかった。後頭部を家具の突起にぶつかりそうになったのを、シーグはギリギリで支える。
「あははー、ありがと」
「笑い事じゃないだろ。そのうち怪我するぞ」
リーザは気まずそうに腰を押さえた。どうやら、すでに手遅れだったらしい。
「寝たらダメなのか」
「昼に眠るのはあんまり良くない事なの」
「だからって倒れるまで無理して起きてなくちゃいけないなんて」
「喉がカラカラだし、お腹もすいているからよ」
リーザは引きつった笑みを浮かべて、チラチラとレティシアのほうを見ている。何か隠しているとシーグは直感した。
「じゃあ、『眠ってはいけない』とはどういうことなんだ。『ヴァンガード』の日にも、フィーは無理にリーザを起こしていただろ」
「あ、あれは私に用事があったから」
「シャープネスを作った事と関係あるのか？」
シャックリでもするかのように息を吸い込んで、リーザは肩をすくませた。どうやら図星だったらしい。
「ちょ、ちょーっと無理しちゃったかな？　ははー」
「いつかフィーみたい。眠ったままになるんじゃないだろうな」
リーザはギョッとした様子で目をまん丸に見開いた。
「へ、平気平気平気。私って、結構頑丈じゃない？」
「なんで自分の事を疑わしそうに答えるんだ！」
頭をかいてごまかそうとするリーザにシーグは怒鳴りつける勢い

でまくしたてた。
「シーグさん」
レティシアの小さいが鋭い声に、シーグは我に返った。
「……ごめん」
レティシアの悲しそうな視線に操られるように、シーグは謝罪した。
「あ、ううん」
リーザは返事にならない返事をして、パチパチと瞬きしながら落ち着き無く視線を泳がせている。
「お茶をお願いしていいかしら？」
「あ、うん」
カートに向かうリーザの庇うようにレティシアが立つ。青い瞳が優しい光をたたえている。心の中までも見通されそうな気がした。
「婚約者のいる人をそんなにマジマジ見ちゃダメよ」
リーザはレティシアの背中から、ヒョイと顔を出した。
「だけど、シー坊が怒鳴り声を上げるなんて、眠っている間にこっそり女の子の服を着せたときくらいよね」
「な……」
言い淀むシーグを先制して、リーザは3つのカップとハチミツとミルクの入った小瓶が乗った盆をテーブルに運んでいった。
「白いリボンがすっごくよく似合っていたの。シンシアちゃんとセーラちゃんと並べたかったなー。それでね、レティー。シー坊ったら寝ぼけたまま気付かずに――」
「あのなあ、いつの話を……」
「5年と5ヶ月前よ」
リーザは両手を押し出すようにして即答する。
「ねえ、レティーは続きを聞きたくなーい？」
「え？　ええと……」
振り返った拍子に目が合うと、レティシアは戸惑っている。
「私の体だけど、きっちり飲んで食べれば大丈夫なの。美味しいも

のをお腹一杯食べて、ぐっすり眠っても全然太らないからありがたいくらい。寝転んだままでダイエットできるなんて、素敵でしょ？」

それは痩せるではなく、『やつれる』の部類なのではないか。魔術の事はよく分からないが、体にひどい負担がかかっているのは確かだ。それに、リーザやシンシアの持っているフィーリアは特別なのだと聞いた。特別な特徴を持つものは、必ず特別の問題が付きまとうものでは無いか。不吉な思いに捕らわれていると、頬にリーザの指が突きたった。

「まあた、嫌な事考えているでしょ」

シーグは思わず自分の額に手を持って行った。一瞬遅れてリーザが左手でシーグの手の甲を突く。続けざま頬に伸びる手を受け止めた。リーザは逃げようとしたが、シーグは両手を握り締めて離さない。

リーザは片頬を膨らませたが、すぐにいたずらっぽい笑顔を浮かべた。

「ねえねえ、この姿勢って端からみると誤解されない？」

シーグが思わず手を離すと、リーザはその隙にシーグの鼻をつまみ上げた。

「ほーれほれ、何か言ってみなさい」

黙りこんだシーグを見て、リーザは勝ち誇った笑みを浮かべた。レティシアは妙に納得した様子でうなずいている。後でライスの頬を引っ張ったり、鼻をつまんだりするつもりなのだろうか。

「さあて、お茶の時間にしましょうか」

リーザはパンと両手を叩いて、シーグの隣に腰掛ける。からかわれた上に、思い切りはぐらかされてしまった。シーグの責める視線など気にせず、リーザはミルクのビンを傾けて紅茶に注ぐ。

「ミルクをかけすぎるのは、無粋じゃなかったのか」

「今回は『カンディ』っていう茶葉を使ったのから。飲みやすくて、ミルクがとてもよく合うのよ」

シーグは自分のカップを持ち上げて香りをかいでみた。今までと

違って、眠くなるような甘ったるい香りや舌が痺れるような味がしない。これなら、喉がカラカラに渇いたときにも舌がひりつくような事はなさそうだ。

「一番値段が安いお茶なんだけど、実は私もこれが一番好きなんだ」

「へえ」

リーザがミルクとハチミツの入ったビンを渡してくれた。シーグがミルクとハチミツを少しずつ入れて味見をする。

紅茶と言うのも武具と一緒で、高ければいいというわけではないのだ。

「あーあ、自分だけ先に飲んじゃったー」

咎めるリーザの声。カップを口につけたままで動きを止めていると、レティシアが微笑みながら席についた。

「ええと」

困っていると、レティシアは口元を押さえてますます笑う。助けを求めてリーザを見ると、ハチミツをカップの中に注いでいる。

「あなた達は本当に仲がいいのね。それが何だか楽しくて」

レティシアは長い人差し指で目元を拭って、自分のカップを手に取って口元に運ぶ。リーザもそれにならったのを見て、シーグも合わせてカップを口に運んだ。再び、レティシアは口元を抑えていた。

「そうだ。リーザ、驚かないで聞いて欲しいのだけど」

「なあに」

「ちょっと大変な事になったから、心構えをして聞いてくれるかしら」

レティシアはゆっくりとした口調で念を押した。シーグも何事かと身構える。

「早く言ってくれないと、余計に不安になるじゃない」

リーザはハチミツのビンをつまんで、不満そうに言う。

「分かったわ。今夜の宴だけどね、内輪だけの小さな集まりじゃなくなったの。各国の特使を呼んで、陛下も王国の重鎮が出座する大掛かりなものになってしまったの」

リーザはピタリと動きを止めた。ビンの中のハチミツがドバドバとカップの中に流れ落ちてゆく。シーグは手を伸ばしてビンを受け取ったが、すでに中身は空になっていた。たぶん、カップの底に指一本分位の厚さで沈みこんでいるはずだ。その間に、リーザはミルクのビンの中身をすべてカップの中にドボンといれた。シーグが止めようとする間もなかった。リーザはいつになく素早い動作で、ミルクとハチミツに、紅茶を混ぜた液体を口で飲み干してしまったのだ。

シーグとレティシアは唖然としてカップに注目した。

「冗談……でしょ？」

リーザの全身はカタカタと震え、声色が上がったり下がったりする。驚いた上に無茶苦茶に動揺している様子である。

「王宮から連絡が来たの。シーグさんとリーザの招待状も改めて贈られてきたわ」

竜の紋章が刻まれた封書は同じだが、今度は金糸で編んだ帯でくくられている。人間の服よりも高価に違いない装いに包まれた手紙を、リーザは恐ろしいものであるかのように見つめている。

シーグはベルトからナイフを抜くと、『シーグ卿』と書かれた封書に切込みを入れて中身を開けた。書面は朝見たものと同じで、ダラダラと挨拶の文章が書かれている。途中、日中に読む事を予測して『湖が鏡のように澄み渡り』といった内容の文章があり、急な変更をわびる文章が書かれていて、3倍は長くなっている。

最後には『夕刻の七点鍾より、ゲイル・グラキエス主催にて取りおこわなれる宴へお越しくださるように』と、締めくくられていた。否定してくれと言わんばかりの視線を送ってくるリーザ。シーグは小さく首を横に振った。

「な、何でーー！」

泣き声のような絶叫が部屋中に響き渡った。あれだけ甘いものを呑み込んだのに、喉はなんともないようだ。

「とりあえず、落ち着けよ」

「そうよ、リーザ。大丈夫だから」
レティシアも席を立ってリーザをなだめる。
「でも、でも、でもでもでも」
だが、意味不明な言葉を早口にまくし立てている。その時、廊下から軽やかな足音が聞こえてきた。最後にバタンと大きな音を立てて扉が全開する。扉を蹴り開けて、シンシア部屋の中に飛び込んできたのだ。フィーリアを手に巻きつけゆだんなく部屋中を見渡している。
「何事ですか？」
「シンシアちゃーん」
リーザはいきなり駆け出した。周囲に気を取られていたために、シンシアは背中からすくい上げられるようにして抱き上げられた。息が詰まるような声を上げたので、肺まで届く衝撃があったのだろう。リーザの背中越しに見えるシンシアの手が苦しそうに宙をつかんでいる。
「おい、シンシアが大変だぞ！」
「え？　あー」
リーザが力を緩めると、シンシアは床に座り込んでしまった。リーザと同じ灰色のローブだが、ガウンは着ていない。この服装がリーザとは異なるシンシアの立場を表している……らしい。
シンシアが顔を上げた拍子に目が合った。なんというべきだろうか。『手を握ってごめんなさい』そんな言葉はひどく間が抜けているように思える。
「へ、平気です。心配しないでください」
シンシアは息を切らしながら、全く大丈夫ではなさそうな声を出す。シーグと目が合うとシンシアは乱れた髪を直して、慌てて立ち上がった。
「とにかく。みんな一度座りましょう」
レティシアはカートからカップを取り出した。シーグは近くのソファーにあった大型のクッションを手にとって、ソワソワしている

リーザに押し付ける。すると、リーザは命綱か何かのように、指を立ててクッションに抱きついた。

落ち着きを無くすと何かに抱きつくのは昔と変わっていないようだ。リーザがいつも持っていたぬいぐるみは、ボロボロにくたびれて目や鼻が取れかかっていた。

シンシアは大回りにシーグを避けて、レティシアの隣の席についた。その後、テーブルクロスを威嚇するようにうつむいている。一目でわかる拒絶の態度だ。

仕方がないのでシーグも席についた。カップの表面が小さな波紋を立てているのを眺めながら、シーグは考えを整理した。

大臣が主催して、王と王国の重鎮、諸国の特使が出席する。そこに外交的な意味があるのは疑いない。急変の原因はアビシャルホルドでの戦いだろう。ルパート・マードックとバイロン・ランカートがレティシア・フェルナンディのスカーフを強奪した。しかも、中立を守るフェルナンディが『理の法廷』の権利を行使してシージペリラスを擁護した。

先日は、アイシャ・ディスペリアを侮辱した事を原因として、ガリウス・グラムファーレとヴァンガードとなった。その途上で、エリス・グラムファーレ、フレア・フィーンドを倒している。更にさかのぼって、天空の水盤ではメティオ・スマッシャーと激突したのだ。この5日で七家の血族すべてとレイザークの公子であるシージペリラスが争った事になる。

「俺が。シージペリラスが諸国の前に姿を現せば、何が起こりますか」

「正直な所、分かりません」

答えたレティシアは体の前で手を組み、真剣な表情でシーグに向き直った。

「最悪の場合は？」

「あなたを罪人として処罰する。それが、この数日シーグさんを落としいれようとしてきた者が望んでいる結末です。天空の水盤でメ

ティオ・スマッシャーを倒した事で、七家の大半があなたに敵意を持っていますから」

「レティー姉様！」

冷淡ともいえる言葉にシンシアが声を上げる。リーザもクッションから顔を上げる。だが、シーグには言葉を飾らずに言ってくれるレティシアがありがたかった。

「公子としてならオースピニルが妥当ですね。４年前の戦いで、レイザークの戦士団は最後まで抵抗しました。シージ・ペリラスとして処分するなら、みんなが見ている場所で死なないと収まりがつかない。何しろ、俺は一度死んでいるはずの身ですから」

「ですが私たちはあなたに無事でいて欲しい。サフィリアも、あなたが政争に関わる事を望んでいなかったの」

「だけど、今は俺が争いの中心になっている。違いますか？」

肯定する代わりに、レティシアは辛そうに目を伏せた。だから、シーグは意識して声を落とす。

「俺はロディウス爺さんに、『大きな都市で喧嘩を吹っかけられたら受けて立て』、と言われてました」

「ロディウス・アクテがそんな事を？」

レティシアは信じられないという風に声を上げた。巷ではロディウスの事を、慈愛あふれた聖人君子と勘違いしている噂が出回っているためだ。

「天空の水盤へは自ら赴きました。ヴァンガードだって、こっちから受けて立ったようなものです。だけど、今日の事は俺がもっと慎重に行動していれば防げた事だと思います。だから、今何が起こってこれからどうなってゆくのか教えてはもらえませんか？」

「私たちがあなたに詳しく語らなかったのは、サフィリアに口止めされていたから。聞けば、あなたは必ずメティスに関わる事になるから」

「すでに頭のてっぺんまでドップリ漬かってますよ」

「お腹の中はミルクとハチミツ漬けだけどね」

茶化す言葉にリーザが便乗してくれた。しかし、レティシアは余計に沈んだ表情になって考え込んでしまう。シーグとリーザは顔を見合わせ苦笑いをするしかなかった。

「そうですね、今の状況では話さないわけにはいかないわ。だけど、サフィリアが口を閉ざしたのは、あなたが罪悪感からメティスに深入りする事を恐れたから。できれば、話さずに済ませられる事を願っていたの」

レティシアはもう一度確認するようにシーグを見つめた。力強くうなずくと、レティシアはゆっくりとした動作で自分の席についた。

「メティオ・スマッシャーの結成、封土の破壊、天空の水盤への攻撃。これらは一つに繋がっています。そして、すべての出来事は、４年前。レイザークの滅亡に端を発します」

レティシアは、ゆっくりとカップを口に運んだ。少しでも話す事を遅らせようとしているような態度だ。

2部－12　触れたくない話題

＊

レティシアはシーグの瞳をじっと覗き込んだ。迷いのない真っ直ぐな視線は彼の強い意志を現している。

普段は頼りなく、些細な事にでも戸惑う。周囲の機嫌を始終気にしていて、動揺するのを女たちにからかわれている。何処にでもいるような、年相応の気弱な少年。しかし、いざ敵対する者が現れると驚くほどの強さと粘り発揮する。ベクター・フォルナージュと打ち合い、魔術師でもないのに魔術に真っ向から立ち向かい、ヴァンガードのルールでリーガル・バックラーを打倒する。すべてが奇跡とも思える結果を導くほどに。

そうでありながら、倒した敵の安否を気にかける一面を持っている。フィーリアを破壊されたガリウスの処分を気にして、倒したばかりの敵であるエリス・グラムファーレに手を差し伸べた。敵に対して非情になりきれない事は物語では美点だが、現実では欠点となる。特に魔術師には、性格の中に隙を見つけ、陰謀をたくらむ者が多い。

例えば、シージペリラスであるという過去を憎むものを玉砕覚悟で送り込む。無防備に近寄り、共倒れを狙う者からシーグは身を守る事ができるだろうか。むしろ相手の事に気をかけ、手を差し伸べてしまうのではないだろうか。

真実を話し、この少年にとって安全な場所と、見守ってくれる人を探すのがいいだろう。サフィリアがここにいればきっとそうしたはずだ。

「封土とは何なのか分かりますか」

「強力な魔術を使うために必要な場所、としか」

「では、天空の水盤、アクリアエ・スリス、サ・フィール。そして、

あなたの師であるロディウス・アクテの住居。これら４つで共通してる事は？」

「……水や風が清浄で、自然が豊かな場所、だと思います」

「その通りです。ですが、アビシャル・ホルドの塔があったクルア・ハン地区も同じく封土なのです」

「あの魔境地帯に似た場所が？」

シーグは驚きの声を漏らした後に考え込んだ。

「ひょっとしてレイザークと隣り合う北東の方角だから、ですか」

「ええ。水脈には風や地や炎よりも強い繋がりがあります。魔境地帯となったレイザークから流れてくる地下水脈はメティスの北東に繋がっていて、クルア・ハン地区は瘴気に包まれる場所となったのです。放っておけば、メティス全土が魔境に没する恐れがありました。そこで結成されたのがメティオ・スマッシャー。彼らの任務は魔境地帯に巻き込まれた封土を完全破壊して、水脈の流れもろとも瘴気の流れを切り離す事でした」

シーグは驚きの表情を浮かべた。シンシアとリーザが心配そうに見ている事にも気づかないほど動揺している。だが、ここで止めるよりは一度に終わらせてしまうほうが良いだろう。

「ですが、レイザークの領土はオースピニルに併合されました。そのためメティスが単独で領土への介入を行なう事ができなかった。結果、オースピニルとメティスは共闘して封土の破壊を行なう事になったのです」

「天空の水盤も、レイザークとメティスの国境地帯にありますね」

「水は高から低へ流れるものだから、高山地帯にある天空の水盤への影響はまだ少なかった。ですが、いずれ浸食を受ける事になったでしょう。水盤の見者の夢見は、水脈の広がりによって強さを増します。周囲の土地を破壊すれば見者としての能力が低下し、サフィリアが狂気に繋がる夢を見なくなります」

それこそ、フェルナンディがメティオ・スマッシャーに協力し、ライスとベクターが自ら望んで志願した最大の理由でもある。

「では、天空の水盤は破壊されるべきだったのですか」
「それは……」
難しい問題と言える。答えを簡単に出せるものではない。返答に困るレティシアを見て、シーグは苦渋の表情を浮かべた。
「極端な封土からの切り離しは、フィーリアの喪失と同じようにはたらきます。天空の水盤を維持する事は、サフィリアの身を案ずる者たちが考えていました」
「ベクターも？」
鋭い視線でレティシアを見るシーグ。押し殺した感情が視線を通じて突き刺さるのを感じた。
「はい。メティオ・スマッシャーの結成を最初に持ちかけたのはベクターですから」
フォルナージュの秘儀を外部に出す事で、彼は自分の立場を相当に悪くしたはずだ。それなのに、不満一つ漏らさない。もともと、不必要な事は喋らない無口な人ではあるが。
「水盤の見者は水脈を通じて大陸中に探知の感覚を伸ばします。魔境地帯の拡大は水盤の見者にとって、自身の病も同様なのです。だから、ベクターはレイザークから繋がる封土を破壊して、サフィリアを守ろうとしました」
天空の水盤によって見つかったフィーリア、『プルーフ・アゲインスト』と『スペル・エンハンサー』。この2つがなければ、封土を破壊する手段はなかった。天空の水盤には意識があって、自らを守るために必要なフィーリアを産み出したのかと思ったほどだ。
「メティオ・スマッシャーの結成をサフィリアは望みませんでした。それが、サフィリアがメティスから離反した理由です」
なぜなら、天空の水盤を守るために他の封土を破壊すれば、魔術師達の居場所がなくなるからだ。メティスは門戸を広げて魔術師を育てていながら、魔術師となったものをメティスから追い出さざるをえなかった。自分が育てた弟子たちを追放し、事実上の処刑宣告を行なったようなものである。ベクターもライスもバイロンも、そ

の事をずっと悔やんでいる。
　シーグは歯を食いしばっていた。リーザが心配そうに覗き込むと、シーグは軽く頭を振ってレティシアに向き直った。
「ベクターはどうしてサフィリアと敵対する事になったんです。そもそも、なぜガイスの言いなりになっていたんですか？」
「メティオ・スマッシャーが旧レイザーク領、すなわちオースピニルの領土を破壊する事を承認する。そのためには条件がありました。オースピニルが軍事的な目的でメティオ・スマッシャーを使用する事。七家の血族を部下として加える事。そして、七家の女性と結婚して血の繋がりを作る事です」
　シーグは驚きの表情を浮かべ、それは苦渋へと変化した。レイザークの滅亡を通じて、自分がサフィリアを追い詰めたのだと思い込んでいるのだ。シーグは真っ先に自分の事を責める人だとサフィリアは常々言っていた。３日前にも、４年前にも。
「その相手に選ばれたのがサフィリアだったと？」
「いえ――」
「最初の候補は私です」
　レティシアの言葉をさえぎって、シンシアはいきなり声を上げた。
「私はオッド・アイです。だから、血族による継承は不可能でした」
「オッド・アイ（奇妙な瞳）……って何だ、目がどうかしたのか？」
　シーグは前かがみになって、不思議そうにシンシアを覗き込んだ。
「目付きの悪さを言っているわけではありませんよ」
「いや、それは分かって――」
　慌てて言い訳をするシーグをシンシアはキッとにらみ付ける。『目付きが悪い』の部分だけ、否定するべきだったのだろうか。
「オッド・アイというのは、左右の眼の色が違う事です！」
　声を荒げるたびに、シンシアの片目は黒みがかった赤に変化している。しかし、色覚異常であるシーグには色の変化が良く分かっていないようだ。眉をひそめ、遠くを見るように目を細めてシンシアの眼を不思議そうに凝視している。

「人の顔をジロジロ見ないでください！」
シンシアは一方的に会話を打ち切って、そっぽを向いてしまった。
シーグは目をリーザとレティシアに泳がせながら、頭に手をやっている。
「そんなに情けない顔をしないでください！」
いきなり、勢いよく振り返ったシンシアはイライラした口調で立ち上がった。そして、腰に手を当てて座っているシーグを見下ろす。
「フィー姉様は私の身代わりとなって、ガイスの婚約者となりました。そして、私が魔術師して生きてゆけるようにフィーリアを見つけてもくれました。はっきり言って、私はあなたよりもフィー姉様に直接お世話にもなって、恩義もあって、迷惑もかけているんです。なのに何一つ役に立ちませんでした。あなたがそんなに情けない顔をしていたら、私はもっと惨めになるじゃないですか！」
「あ、えっと……」
「別に謝罪して欲しいわけじゃありません！」
シンシアは肩をいからせて、話を打ち切った。しかし、結局何も言わずに椅子を押しつぶすような勢いで座った。
「だいたいシーグさんはいつだって――」
「シンシア！」
「ですけど……」
「シンシア」
レティシアが声色を落としてなだめると、シンシアはローブの裾を引きちぎらんばかりに握り締めて黙り込んだ。
「サフィリアは最後まで封土の破壊に反対していました。それどころか、メティオ・スマッシャーの行く先々に、幻覚や霧を作って妨害したのです。ガイスがサフィリアを服従させるために天空の水盤に乗り込み、シーグさんたちと戦いになったのがインボルグの４日前です」
「俺と鉢合わせになるまでガイス達は殺気だっていませんでしたよ。散歩でもしているようでしたが」

「ガイスは婚姻を結ぶ事で、サフィリアを服従させようとしていました。オースピニルでは妻が夫に服従しなくてはなりません。反抗すれば法において罰する事さえ出来ます」

シーグは信じられないという表情を浮かべている。

「一方、サフィリアはガイスを夢の中で改心させようとしました。天空の水盤では、心に最も強く結びついている出来事を夢に見ます。ガイス自身が、自分の妻たちを頻繁に死なせてしまった。その事を後悔する気持ちにかけようとサフィリアは考えました」

「ガイスが自分を悔やむ。ですって？」

シーグはますます顔をゆがめて首を横に振っている。レティシアも同感だった。

サフィリアは最後の最後には人を信じる。どのような人間にも、自分を悔いる気持ちがあると考えるのだ。だが、法によって男女の格差が決定されており、不実を糾弾できない国で育ったガイス。生き方も倫理観も違う彼が、罪悪感に苦しんでいたとは思えない。新しい妻を娶るたびに、マントに金貨の刺繍を増やしていくような男だったのだ。

「それで、夢で改心というのは？」

「天空の水盤で眠るという事です」

シーグは不思議そうに口元に手をやった。

「ちょっと待ってください。ガイスは警戒心だけは強い男でしたよ。どうして天空の水盤で一夜を過ごすことに納得したんですか？」

この問いには、シンシアとリーザが同時に顔を上げた。

「セブン・パワー・インテグレーションでプロテクション（防御）を一晩中展開させるつもりだったようです」

この答えに、シーグは目を白黒させている。レティシアも頬が熱くなってゆくのを抑えられなかった。できれば、最も話題に触れたくなった部分だ。

「あ、あー。それ以上は言わなくても、ね？」

顔を赤くしながら言うリーザに気付かずに、シーグは頭を抑えた。

「ええと、ちょっと待ってください。セブン・パワー・インテグレーションは、杖の長さの距離に集まっていなくては発動しないのでは。それに婚姻の夜って事は、つまり……」
「オースピニルの風習では珍しくない事で、特に初――」
レティシアは、突如感じた魔術の気配に言葉を呑み込んだ。
突然立ち上がったシンシアが炎を上げるフィーリアを投げつける。
シーグは後ろ向きに椅子から転げ落ちて避けた。プラチナの鎖は大きく弧を描いて、シンシアの手元に戻った。
「い、いい加減にしてください。レティー姉様に何を言わせたいんですか！」
シンシアは顔どころか首筋まで真っ赤にして怒っている。
「シー坊のバカバカバカバカバカバカバ」
リーザは目を閉じたまま、クッションを振り上げては何度もシーグに叩きつけている。
「落ち着いて2人とも。私も考えが足りなかったわ」
「姉様は悪くありません！」
「レティーは悪くないわ！」
シンシアとリーザは声を合わせて怒鳴ると、引っくり返ったままのシーグに目も向けず椅子にドカリと腰掛けた。そして、示し合わせたようにカップを口に運ぶ。シーグが申し訳なさそうにクッションから顔をのぞかせると、リーザとシンシアは同時ににらみ付けた。
シーグは肩をすくめて、盾で攻撃から身を守るようにクッションに顔を隠してしまう。
「シーグさ――」
声をかけようとすると、シンシアとリーザが険しい表情と鋭い視線を送ってきた。無言の圧力にレティシアは思わず声を詰まらせる。
「レティー、そろそろ飲まないと冷めてしまうわ」
「そうです。なんでしたら私が入れなおしますわ」
殊更に上品ぶっているのがシーグに対する当てつけであるのは明らかだ。ここでシーグに味方を庇っては、すべての敵意はシーグに

だけ向けられる気がした。
いくら感謝しても足りないほどの恩がある少年は床で縮こまっている。席についたレティシアは。この凍りついたような空気が早く晴れて欲しいと願った。
室内は凍りつくようだが、窓の外からは暖かな日差しが差し込み、河を渡ってくる風が軽やかにカーテンを揺らしている。

2部－13　何とかする

＊

視線の矢が止んだのを確認して、シーグはクッションの盾から顔を出す。

オースピニルには夫婦の床に関して信じられない風習があると噂には聞いていた。要人の暗殺を警戒しての事らしいが、異様であり嫌悪さえも感じる。

サフィリアと再開した時の事が思い返される。アイフェが『3人で一緒に』と間違って言ったとき、サフィリアが過剰に反応した理由はこれなのではなかったか。『変態仲間』呼ばわりされた事にも納得がゆく。

4年ぶりの再会に、詩人が詠うような展開を期待してはいなかった。最初に交わした言葉――いや罵倒というべきか――が改めて胸に突き刺さる。しかも、その理由に気付くのが4日も後になってからとは救いようがない。

『死の道』を走破した時よりも疲労感を覚えながら、シーグはゆっくりと立ち上がった。わざとらしく視線を逸らす2人に何を言うべきか考える。

「私に謝らないでよね」

「絶対に許しませんから」

完全に先制されて、シーグは口を半開きにした。

「私は何も気にしていませんから」

レティシアが心配そうにしているのが余計に辛い。いっそ、激しく怒鳴りつけてくれた方が気が楽だ。

「話を続けます。いいかしら？」

2人の無言を了解と受け取って、レティシアはシーグに向き直った。

真っ直ぐと青色の瞳に見つめられて、シーグは気まずさから目を下に向けた。すると、レティシアも言葉を呑み込んでしまう。気まずい沈黙がしばらくの間流れた。

窓から吹いてくる風は涼やかなのに、なぜか背中には気持ちの悪い汗が浮いてくるばかり。ベクターが何を考えていたか気になるが、ここは話題を変えるべきだ。

「これからどうするべきでしょう」

「様子を見るしかありません。今夜の宴が大きな転機になるでしょう」

レティシアは冷静さを取り戻した声で淡々と答えた。フェルナンディの人々が真実を告げるときの特有の口調だ。

「まず、メティスにおける戦いは、七家同士の『演習』に過ぎなかったと諸国に説明します」

「それで収拾がつくのですか？」

「死者が一人も出ていませんから」

レティシアは簡潔に答えた。

「七家を賛同させ、陛下の名の下に『決闘者』の地位を得ることで法的な裏づけを得ます。そうすれば、オースピニルがシーグさんの身柄を求めてきても、拒否することができるはずです」

レティシアが断言を避けている事にシーグは気付いた。それに、法的な守りとはいえ、陰謀の入り込む可能性はある。メティスにいる限りシージペリラスは厄介ごとの種にしかならないようだ。

「天空の水盤での戦いはどうなんですか。ガイス・ジュサックはオースピニルの人間なんですよ」

オースピニルのアッシュ皇帝は野心的で、何度もレイザークに侵攻を繰り返していた。間違ってもレイザークの公子に対して友好的であるとは思えない。

「外交の話となると、簡単に予測は出来ません。ですが、『決闘者』になれば『剣の法廷』に訴えることができます」

「王の決定に対しても？」

レティシアはうなずいた。メティスにおいて『決闘』がそこまで強い力を持っているとは知らなかった。何が何でもシージペリラスが『決闘者』となる事を妨害する理由が良く分かる。

一方で、違和感も感じる。法の頂点に立つ者が、自分の決定を覆す者の存在を許すだろうか。少し考えて、シーグは嫌な結論にたどり着いた。

「その時、ベクターが王を擁護して『決闘者』として名乗りをあげる可能性は？」

リーザとシンシアが驚きの表情でハッと息を呑む。

「……否定はできません。つい先ほど、ベクターが『リーガル・バックラー』の代理を務めているという連絡が入りました。現状では、七家の決定よりも、陛下の意向に沿う可能性が高いといえるでしょう」

短く答えた後、レティシアは口を引き結んで黙り込んでしまった。王は常に最強の決闘者を手元において、自身の決定に背く者をけん制しているのだ。つまり、リーガル・バックラーは王の身体を警護するに留まらず、王権を守護する存在ともいえるのだろう。つまり、自分はメティスの王政そのものに喧嘩をふっかけていたようなものなのだ。

メティスは王の法が統べる国。リーガル・バックラーに勝っても、王が望めば新たなリーガル・バックラーを任命するだけでは無いだろうか。王の決定に反逆した者が息絶えるまで、決闘を継続させるという行為さえも可能に思える。

決闘が始まったときに、心底楽しそうにしていたシェンナ・グラドリカ。その姿を思い出していると、シーグには更に陰惨な結末が思い浮かんできた。

王が七家と相対しても決闘を続ける事を選べば、自分が内戦の呼び水となる事にさえ繋がりはしないか？

その時に自分は内戦の旗印となり、災厄をまきちらす事になる。まさしくシージ・ペリラス（命取りの座）の末路に相応しい。

シーグは首を横に振って考えるのをやめた。だいたい早合点が過ぎる。その先に行くためにはまずは自分がベクターに勝つ事が条件となるのだから。顔を上げると、レティシアとリーザとシンシアが、そろって心配そうに見ていた。

「……あー、まー、そうだな。何とかなるだろう」

シーグは腕を組んで、何度も大仰にうなずいてみせた。あっけに取られていたリーザはパンと手を叩くと、シーグに向かって身を乗り出す。

「どぉーせ、また何も考えてないんでしょう？」

「実はこれから考えるんだ」

シーグが生真面目にうなずくと、リーザは楽しそうに微笑んだ。

「『何かすれば、何とかなる』だ」

「『何かすれば、何とかなる』ね」

声を合わせて言った後に、シーグとリーザは冷めたカップの中身を一気に飲み込んだ。ミルクとハチミツの甘さが、暗い気持ちを吹き飛ばしてくれるようだった。

最後にリーザの差し出したカップに自分のカップを合わせると、チンと心地よい音がなった。

「何ですか、それは？」

シンシアが呆然としながら聞いた。レティシアも不思議そうに首をかしげている。

「昔ね、困ったときには良くやっていたのよ。フィーちゃんを入れて3人で」

「まさか。フィー姉様が、無計画で行き当たりばったりな事を？」

「前向きで臨機応変と言っていたぞ」

「クヨクヨするな、腹を決めてさっさと動きなさい！　っ口癖だったわよね」

シーグとリーザがそろって答えた。シンシアは信じられないと言う代わりに、首を左右に振っている。

「ねえ、カップを打ち合わせることにはどんな意味があるの？」

一方、レティシアは興味津々な様子で聞いてくる。
「これは景気づけなの。酒場だったらジョッキを力一杯ぶつけるのよ。いい音が鳴るほどいい事があるの」
リーザは両の拳を構えて、胸の前で打ちつけた。その後、「イタタ」言って手の甲を押さえている。
「まあ、それなら陶器よりも銀杯のほうが良かったのかしら。杯の形状を細長くして、二層構造にするの。それから、持ち手の反対側に突起を付けて、真っ直ぐ側面に当てればきっといい音が出るわ。大きさを変えれば、杯毎に音が違ってもっと楽しくなるんじゃないかしら？」
それはすでに乾杯ではない、とシーグは思った。
「楽器で演奏するんじゃないのよ。これはただの『おまじない』なんだから」
真剣に分析するレティシアの言葉に、リーザはケラケラと笑っている。
「うまくゆくように最高の環境を整えるのが、どうしていけないの？」
レティシアに真剣な表情で聞かれて、シーグは返答に困った。一方、シンシアは「フィー姉様がそんな不明確な発言を？　更に酒場の酔っ払いみたいに下品な事を……ありえません」などと呟いている。酔っ払いでなくても乾杯くらいするだろうし、下品とは言いすぎのような気がする。とにかく、少女の理想を打ち砕いてしまったのは確かのようだ。
「あ、このカップってすごく高かったんじゃないの？」
リーザが恐々とカップの周囲を見ている。シーグも心配になって自分のカップが欠けていないかどうか確認した。
「まあ大変。グラークの手作りなのに」
透き通るような白磁に繊細な金の装飾。どうしても骨と筋肉の集合体であるような大男とは結びつかない。
「大丈夫みたいね。今度はグラークに頼んで、簡単には欠けないテ

ィーカップを作ってもらいましょう。材質は何がいいと思いますか？」

カップを眺めながら真剣に問いかけてくるレティシア。はっきりとは言えないが、何かがひどくズレているのは確かだ。

レティシアを間近から見下ろした時、髪型が変わっていて、髪飾りをつけていることに気付いた。瞳と同じ色の宝石が、金色の髪に眩しいほどだ。もしも、サフィリアが身につけていたら――。

「髪が、何か？」

レティシアが髪に手をやりながら不思議そうに問う。

「あー、ええと。その髪飾り、よく似合っていると、思います」

シーグはたどたどしく呟く。レティシアは驚きに目を見張った後、楽しそうにクスクスと笑い出した。

何か奇妙な事を言ってしまったのだろうか？

リーザは腕を組んで「うむうむ」と大きくうなずいている。しかし、シンシアは怖い表情でにらんできた。よく分からないが、紳士の心得とは人によって変わるものらしい。

「他の女性の面影を重ねて誉めるなんて、最低です！」

シンシアに厳しい声で言われて、シーグは飛び上がらんばかりに驚いた。心を読む魔術でも使われたのだろうか。

「いつもいつも、他人に言えないを考えているようですね」

「やーねー」

凄むシンシアと、楽しそうなリーザ。心を読まれた、という恐れからシーグは後ずさって距離をとった。魔術は近づけば強く、遠ければ弱いはずだ。

「な、何で分かったんだ？」

「別に魔術を使ったわけではありませんよ」

今度はレティシアまで看破されて、シーグは壁のギリギリまで逃げた。

「ひょっとして気付いていないのですか？」

「レティー言ったらダメ！」

リーザは両手を振り回し、慌てて止めようとしている。
「ですけど、シーグさんはとても困っていますよ」
「いーの、勝手に困らせておけば良いんだわ」
勝手な言い草に、レティシアは首を横に振った。
「考えている事が唇の動きに出ているのですよ。時には独り言が漏れている事もあります」
シーグは思わず大あわてで口を押さえた。どうりで考えている事が筒抜けになるわけだ。よくよく思い出してみれば、考えを読まれた相手はみんな魔術師ばかり。それも、正面で向かい合っている時だ。
「あーあ、言っちゃった」
「リー姉は知っていたんだな……」
「だって教えたら面白くないもん」
恨めしそうに言うと、リーザは小さく舌を出してレティシアの背中に隠れてしまった。
「それから、ありがとう。シーグさん」
「え、何がですか？」
「この髪飾りはとても気に入っているものだから」
「ああ、どうも」
シーグが間の抜けた返事をすると、「グゥーー」という間延びした音が響き渡った。続いて、「あはははははは」とリーザが気まずそうに大笑いしている。
「そうね、もう昼食にしましょうか」
「私、厨房へ知らせてきます」
シンシアはレティシアにはにこやかに答える。だが、振り返ってシーグを鋭い視線で一睨みしてから部屋を出ていった。シーグはどうしたものかと、頭をかいた。
「大丈夫です。シンシアは、それほど腹を立てているわけではありませんから」
「そうは見えませんが」

だいたい初対面の時から訳がわからなかった。
謎めかしてフェルナンディの立場を語るかと思ったら、妙に明るくて尻上がりな口調で毒舌を吐く。ヴァンガードが決まってからは目を吊り上げて話すようになっていたし、今日になってからは顔を合わすたびに機嫌が変わる。
ふと、レティシアを見るとこちらも深刻な表情を浮かべていた。
「あの、何か？」
「いいえ。とにかく、今は食事にしましょう。私も空腹で倒れてしまいそうだから」
レティシアは優しく微笑みかけると、リーザと一緒になってテーブルのカップを片付け始めた。
『いいえ』と『今は』。その続きには、何がつづくのだろう。すでに失われた王国の公子。その立場がメティスに影響を及ぼす大きさを、シーグは改めて思い知った。

2部－14　イタズラの原則

＊

大またに進むジェイナスを見て、男はギョッとした表情を浮かべてから道を譲った。ジェイナスが完全に通り過ぎるまで、目を合わせまいと極端なほどにうつむいている。

ゲイル・グラキエスを前にした時と同じで、係わり合いになる事を恐れているのだ。ゲイルはシェンナ王に正面きって反論し、ジェイナスは内戦時にシェンナ王と敵対しながらも登用された人物だからだ。また、オースピニルとの戦いにおいて、国境地帯に生首の結界を提案したのはゲイルで、配置を指揮したのはジェイナスである。

そのため、ゲイルの事をカロン（墓守）、ジェイナスの事をレイス（死霊）と陰で呼ぶものも少なくない。

ジェイナスは彫りの深い顔に厳格な表情を浮かべているし、ライスはすっかり打ちひしがれた様子でうつむき加減に歩いている。水門の脇にある小屋の中から扉を閉じる時、一番後ろにいたベクターは、周囲から奇異と恐怖が入り混じった視線が向けられているのを確認した。

「これでよかったのかな？」

「バッチリですよ、導師」

ジェイナスとライスは表情を一変して浮かれた声を出した。

「最後にすれ違ったのは、フェイル・リレイでも屈指の目利きですよ。以前、盗賊の変装を見破ったくらいですから」

「そうか。ワシの演技もまだまださび付いておらぬか」

ジェイナスは再び、いかめしい顔つきになった。ライスはそれを見て大笑いしている。これでは、イタズラに成功して喜ぶ無邪気な子どもと変わりがない。

「そうそう。イタズラと言えば」

ベクターはギョッとして身構えた。振り向いたジェイナスは、背中ごしにニヤリと笑う。この老獪な導師は、心の動きに敏感なのだ。唇の動きや表情を隠しても、心の中をズバリと読まれる事が数知れない。

「最近子ども達のイタズラのレベルが落ちていてな、それを私はひどく心配しているのだよ」

それは果たして心配する事なのだろうか。ライスも不思議そうにしている。

「呆れるほどいい加減で計画もなにもあったものではない。もっとうまいやり方があると教えたくなるほどなのだ」

校長自ら子どもに悪事を指導するのでは大問題だろうと、ベクターは思った。

「つまりな。目的のために一致団結して、計画を練る能力が落ちているように思えるのだよ」

ジェイナスはゆっくりと部屋を歩きながら、説明を続ける。

「大人の裏をかくためには、本格的にしなくちゃならん。逃げ道を確保するのは当然の事だ。家に帰ればそれぞれが孤立するから、大人に対して切り札を持つ事も忘れてはならん。それだというのに、足の遅い子を混ぜておいて、イタズラの最中で置き去りにするのだ。けしからんにもほどがある」

「つまり、仲間意識が薄くなっている、と」

「まさにその通りだ。ワシの子ども時代はこうではなかったぞ。実に嘆かわしい」

「今の時代、このメティスでやるなら、護民官が出動しますからね」

「ならば、サ・フィール周辺は避けなくてはいかんな。アクリアエ・スリスでは騒ぎが大きすぎるし、クルア・ハンでは危険だし。何処がいいと思うかな、ベクター」

「……私には分かりません」

周囲の事を気遣うなら、最初からやらなければいいと思うのだが。

「悲しい事を言わないでほしいな。無邪気なイタズラは子どもの特

権だとは思わないかね？」
　大人の弱みを握って、計画的に悪事を働くのは無邪気ではないだろうに。
　今までジェイナスの子ども時代の武勇伝を何度か聞いたことがある。そのすべてが、イタズラを通り越してすでに事件の域に踏み込んでいるものばかりだったのだ。
「では、『銀の魔女』と戦ったのも、イタズラの延長ですか？」
　声だけは優しげにライスは言った。不穏な気配を感じたのか、ジェイナスは態度を改めてライスと向き合う。
「うちの学校では子どもたちの提案を重んじる方針なのさ。知っているだろう」
「だからと言って、王国最強の魔術師達と戦うなんて無茶苦茶だとは思いますが」
　ライスは声も表情も優しげで、目元だけがわずかに険しい。相当に腹を立てている証拠だ。
「最初に提案を出したのも、計画を本格的に決めたのもシンシアだよ」
「……校長には、それを止める義務があったと思います」
「それは違う。私はむしろ後押しすべきだと考えたんだ」
「ロング・レンジ・ギムレット（長距離射程槍の陣）に、アンチ・コンタクト・シェル（独立空間の陣）。銀の魔女はヴァンガードに向かうシージ・ペリラスに明らかな殺意をもっていた。そんな戦いの中に、子ども達を巻き込んだんですよ」
　超然とした態度を保つ老人に対して、ライスはついに声を荒げた。
「巻き込まれたわけじゃない。自ら選んだのだよ」
　ジェイナスは態度も声色も変えなかった。
「君たちも１６歳でメティスの内戦と、オースピニルの戦いに参加しただろう」
「だからこそ、戦わせたくなかったんです」
　ライスの言葉に、ジェイナスは悲しそうに目を細めた。

「私も同じだったよ。しかし、君たちも戦う事を選んだ」
ライスとベクターを順番に見て、ジェイナスは言葉を続ける。
「レティシアなんて、ほんの１０歳だったじゃないか。しかも、目が見えなくなった痛手から回復もしていなかったしね」
ディテクト（探知）の一族に生まれ、フィーリアを失って盲目となった少女。その未来には秘境とも呼べる封土で生涯を送るか、実力でフィーリアを獲得して一族に戻るか、どちらかしかなかった。
そして、レティシアは地位と立場を勝ち取ったのである。
「子ども達にとって、戦う時期は今しかなかったんだ。無茶でも自分の力で勝ち取らなければ意味がない。封土は減少する一方だし、シンシアとセーラを除いてフィーリアを見つけられたものはいなかった。一族を頼らなければならなかったんだ」
魔術師の家系に生まれ、魔術師となれなかった者は短命である。３０歳に届かないうちに老衰と似た症状で命を落とす者が多く、５０歳まで生き残る事はほとんどない。
１２歳になるまでにフィーリアを得て、封土との繋がりを強化するのが理想だ。しかし、フィーリアの発見も複雑な儀式がなければ成功率は低く、その秘儀は七家にしか使われていない。フィーリアを受け継ぐにしても、一族との血の繋がりが重要となる。
血筋から離れ、土地を失った魔術師には残酷な未来が待っている。魔術師の寿命は長いが、未来を決定付けられる時期は速いのだ。
「今だから言うが、私が学校を作ったのはメティスに反乱を起こす体勢を整えるためだったんだよ」
突然のジェイナスの告白に、ライスとベクターは息を呑んだ。
「一族から追放されたものを集めて、メティスに対して封土を要求できるようにね。そのために、魔術師に対する戦い方を教えていた」
クロスボウや、爆弾、ネット。銀の魔女との戦いで登場した道具の数々にも納得がいった。あまりにも準備が良すぎると思ったが、入念に準備されたものだったのだ。
「これは本来私が言うべき事じゃないんだがね、シンシアは私の考

えに気付いていた。だから、未来に兄と対決するよりも、すぐに銀の魔女と対決する方を選んだんだよ」

「シンシアが？　ですけど、あの子はチェイン・ライトニングの称号を得ているんですよ」

「称号を持つものが、封士に困る事は無い。しかし、友人を捨てて、自分だけいい目を見ることはできない。全員に確実な未来が約束されるまで、何処にも所属するつもりは無い。私の学校にさえね。あの子がガウンを身につけない理由はそこにある。何処にも所属せず、自分の血筋や立場のすべてを利用して、全員が助かる方法を探す。そのための意思表示なんだよ」

この言葉が止めとなったのだろう。ライスは倒れるように椅子に腰を下ろした。そして、重い頭を支えるように額に手をやっている。

「あの子にはしっかりとした考えも意志もある。目的を実現するための実力も備えつつあるんだ。子ども扱いしないで、一人前の大人としてシンシアと話をしなさい。何なら、私も同席しても構わないから」

ジェイナスはライスに言葉をかけてから、ベクターをじっと見つめた。

「さて、今度は私からの質問だよ。法の剣がどうしてフェイル・リレイにいるのかな」

「……王命によりフェルナンディの屋敷に行くように命じられました」

「目的は？」

ジェイナスは真剣な表情、緊張感を帯びた声で聞いてくる。

「シージ・ペリラスの事を調べるようにと」

老人の眼差しが疑いに細められた。言葉を変えてあいまいに答えたことに気付かれたのだ。

「シーグが色魔であるかどうかを確かめてこいと」

観念して答えると、ジェイナスは更に目を細めた。ふざけた答えに対して、あまりに意外な反応だった。

「なるほど、君は王の命令でシーグ君の調査に乗り出したわけか。王命となれば、軽く見るわけにはいかないな。ここは意見を出しあい、慎重に協議を重ねる必要がある。さて、ベクター卿。シーグ君は色魔だろうか？」

「……」

ジェイナスの威厳に満ちた重々しい声に、ライスがキョトンとした表情を浮かべた。その後に、急に生真面目な表情になって身を乗り出す。

「しかし、シーグ君は天空の水盤でサフィリアに平手打ちを受けていました。疑わしいのは事実ですね」

「なるほどな。では、ベクター卿。女性がずぶぬれになって下着まで透けてしまっている。この状況をどう切り抜けるかね？」

「……質問の意図が分かりませんが」

「ベクター卿。まずは通常どのような行動が理想的であったかを挙げ、後にどのような行動が色魔に相応しいかを挙げる。その中で、シーグ君の行動がどちらに偏ったものであるかを考えてゆくのだ」

「客観的な見地からの対比的な論証は、真実への近道ですからね」

ライスまでが生真面目に納得している。どうやら、2人で共謀して自分を笑いものにするつもりらしい。

「私ならマントを女性の肩にかけます」

「うむ、騎士の鑑だな。実に紳士らしい行動と言える」

ジェイナスは深くうなずいている。ただし、表情は不満そうだ。

「ちょっと待てベクター、君はマントを損傷して脱いでいたはずだぞ。その上、片手を怪我していて倒れていたはずだ」

「なんとベクター、ありえない状況を勝手に作り出しては行かんぞ。正確さが欠ければ論証の公平さが失われてしまう。では、その女性が負傷に気付いて治療のために君に触れるほど寄り添った。怪我の治療に専念して、他の物事が目に入っていないようだ。どうするかね？」

「……状況がひどく変化したように思いますが」

ジェイナスは笑いをこらえながらも厳格な表情を保とうと力んでいるし、ライスはすでに肩を震わせている。
「色魔であれば、不埒な行動を取る事でしょうね」
ベクターの反論を封じるように、ライスが冷静に続ける。
「いいや、男児たるもの美しい女性がそのような姿でいれば理性の限界を超えるのは当然の事だ。つまり、色魔でなくとも心を揺るがされる限界が何処であるのか。そこを正確に把握するのが重要だと言えるだろう」
「なるほど、あのベクター卿でさえ心が折れるとなれば、ただ健全であっただけ、という事実が浮かび上がるかもしれませんね」
「で、ベクター卿。君の限界はどのあたりかね？」
「……」
黙りこんでいると、ジェイナスは無遠慮に大爆笑をした。ライスも我慢の限界が来たようで、腹を抱えて笑っている。この小屋は取調室をかねており、どんな大声を上げても外に漏れることは無いだろう。ベクターは何を言われようとも、聞き流そうと考えた。
「さて、実際のところゲイル卿は何を企んでいるのかな。的外れでバカげた意見で油断させた後に、正鵠を射抜く一撃を加えるからな。ロディウス老師を連想させる手管だ」
「私は騒ぎを起こして、地下に潜んだモグラをあぶり出すのが目的だと考えています」
「だったら火の手は間もなく上がるかな」
「あまり盛大に燃やされても困るので、こちらでも動いています」
「さすが法の杖は抜け目が無いな」
示し合わせたように話し合う2人。ジェイナスはすでに現状を把握しているようだ。
「おっとっと。この件に関して君は何も言ってはならない。知っていると思うが、魔術師たるもの言質を取られてはならないんだ。自分自身にさえね」
ジェイナスは優しげにいいながら、椅子にゆっくりと腰掛けた。

2部－15　ナイト・ロード

「お茶の一つも出せないで、すいません」
「いや、十分だ。天空の水盤でアイダから何杯も出された。もうこりごりだよ」
ライスに言葉に、ジェイナスは大儀そうに腹をさすりながらぼやいた。
「しかし、女性というのは分からんな。どうして、暇を見つけてはお茶ばかり勧めるのだろうか」
「レティシアも同じですよ。自分が飲むよりも3倍は勧めてきますね」
「怒っているのかな。あてつけの一種なのだろうか？」
「かもしれません。私の場合は忙しい時に限って飲ませたがるので」
ジェイナスとライスは不思議そうに首をひねっている。
「話す機会が欲しいのでは？」
ベクターが呟くと、ライスはカクンと反対側に首をかしげた。
「話したい事があるなら、言えばいいじゃないか」
「機会を作ろうとしている、らしい」
「らしいって、誰かの受け売りか」
ベクターは言葉を濁らせた。かつてリーザが教えてくれた事を繰り返しただけに過ぎない。理由を問おうとした時、急用ができてそのまま立ち去ってしまった。
改めて考えてみると、ライスの言うとおりであるように思える。
「なるほど、そういう事だったか」
ジェイナスだけは納得して何度もうなずいている。
「どういう意味ですか？」
「おーやおや、イーグル・アイ（鷹の目）の慧眼も女性の心理には働かないのかな」
「ナイト・ロード卿ほど、世慣れていませんから」

ライスは憮然とした様子でやり返した。ナイト・ロード（騎士の道）は三騎士の称号だが、ライスは『ナイト・ロード（夜の帝王）』とあてつけたのだ。これはジェイナスの若き日の武勇伝に付けられた異名である。

「女性遊びに慣れたほうが却って気付きにくいさ。いいかい、商売で飲み物を勧めてくる女性と違って、アイダはね……」

ジェイナスは途中で言葉を切った。理由に気付いたベクターは即座に表情を改める。

女性だって？　と聞きたげにライスはしかめ面になっていた。ジェイナスの目付きが厳しくなってから、ライスは慌てて目を逸らす。

「君たちは何かいいたい事がありそうだな？」

ジェイナスは底冷えのする声と共にベクターとライスを見比べた。

「あ、いや。別に何も。なあ、ベクター？」

逃げ腰になりながら、ライスはベクターに矛先を向ける。

「単なる言葉のやり取りじゃなくて、会話を求めているんだよ」

ジェイナスは元通りの穏やかな言葉遣いに戻っていた。

「……だったら、普通に話しかけてくれれば良いでしょう」

ライスは自分の考えを曲げようとしない。

「その話をまともに聞いていたか。気の利いた返事を返したか、考え直してみなさい。そういう時に彼女がどんな服を着ていたか、どんな装飾品を付けていたか。一つでも覚えているかな」

ライスは目線を逸らして黙りこんでしまった。ジェイナスは困った様子で首筋を撫でている。

「だったら、向き合った事にはならないね。私も同じだ。今朝から忙しさにかまけて、ろくに話もしていなかったな。その後に、突然の呼び出しだ。何とか埋め合わせを考えないとね」

「アイダ・オーメントと天空の水盤。しかも忙しいと来れば、何かの発明ですか？」

「ん、まあ、そう、かな？」

ジェイナスが気まずそうに目配せをしたので、ライスは一瞬で気

付いてしまった。
「しかも、フォルナージュの秘儀まで関わっている。今度は何を作ったんですか？」
新たな発見にライスは目が無いのだ。彼の部屋にはわけの分からない収集物とが山積している。「最初に万能の整理だなを発明して欲しい」と、レティシアがぼやいていた事がある。
ベクターの沈黙を了解と受け取って、ジェイナスは懐から銀色の板を取り出した。
「ベルトのバックル、ですね」
ライスはポケットからハンカチに乗せてから、慎重な仕草で四角い金属の板を眺めた。裏には微細な宝石が幾何学模様を描いている。
「なるほど、携帯型の集積魔方陣ですか」
ライスが感心するのも無理は無い。魔方陣の携帯化は、瞬時展開する魔方陣と並んでメティス百年来の研究課題であったからだ。しかも、メティオスマッシャーが使っていた、セブン・パワー・インテグレーションのマントよりも更に小さい。魔術師の歴史上、最も細密な魔方陣であろう。
「トリプル・ステイシス（三連均衡）を補助するためのアミュレット（護符）。エンハンス、サモニング、エンチャントの組み合わせ。展開が極小範囲の至近。なるほど、防御をかなぐり捨てて、接近戦による一点集中攻撃が目的。発動できるものは多数でも、使いこなせるのはメティスでもほんの数人しかいませんね」
ライスは教授のように流暢に語っている。考えをまとめる時の癖だ。
「さすがだね」
「一応はフェルナンディの端くれですから」
ジェイナスの賞賛に対して、ライスは難しい表情をしたままバックルを見つめている。
「しかも、これは全体のごく一部。複数の部品を並列展開するタイプ。しかし、この造りでは剣の方にも術者自身にも相当な負担がか

かりますね他の部品はなんですか？」
「皮製のベルトとエナメルの鞘だね」
「金属だけでは瞬発力が強すぎるから、付加を受け止める材質を入れたわけですね。ですが、武器の材質が皮や木や宝石でないなら、相当無茶な造りになると思いますが」
「だろうね。しかし、良い道具ほど使い手を選ぶものさ」
「理論どおりに発動すれば、並みの防御壁なら木っ端微塵になる。プルーフ・アゲインストの作品は、プロテクション（防護）の属性にとって天敵ですね。最も、潜在能力を限界まで引き出せた例はないが」
「今回が最初かもしれないと期待するよ」
ライスがバックルをテーブルに置くと、ジェイナスはそのままベクターに向かって押し出した。
「お前らしい攻撃特化の過激な設定だな。今度は何を始めるつもりだ？」
「メティスの外へ行く」
「レイザークだな」
ライスは勝手に結論付けた。これが、メティスの外で戦うための装備であることも、行き先にもすでに気づいていたのだろう。
「２つのフィーリアを封印された状態。残る２つと魔方陣で、トリプル・ステイシスを維持する。桁外れの精神力が必要になるね」
ジェイナスが楽しそうに若者２人を見比べている。
「お前なら可能だな。もし、これが６日も前に完成していれば、天空の水盤での戦いは結果が変わっていたな」
「その推量は無意味じゃないか。このバックルは、オーメント商会の協力があって、天空の水盤で作ったものだよ」
ジェイナスの指摘にライスは苦笑いを浮かべている。
「しかし、ベクター。魔術師が封土の外に出る。しかも、魔境地帯に踏み込むなんて自殺行為だぞ。サフィリアへの誓いに義理立てしているなら止めておけ。お前の無茶を喜ぶはずがない」

魔術師にとって魔境の瘴気は毒の霧と同じである。魔力を得る代わりに、汚染された土地や空気の影響を受けるのはフィーリアをもつ者の定めである。

「夢見ではレイザークに夜空が見えたと聞いた」

「だが、夢見に自分や幼馴染まで出てきた。それでは夢見ではなくて、ただの夢だ。しかも、自分自身の願望を重ねた疑いが強いんだ。もう、ファクト・アイズ（真実の瞳）を夢見を信じる者はいない。フェルナンディの中にさえな」

「実際に確認したわけではない」

「信じる事と妄信する事は違うぞ。メティオスマッシャーとしてレイザークを回った時、すべての封土に魔境化の兆しが見えた。街道や城砦、宿場町の全てが怪物の住処になっていたじゃないか」

「だが、すべて見て回ったわけではない」

「レイザークには、地下水脈が広がっている。水路に毒が広がっていくように、一定以上が魔境化すればとどめる方法は無いんだ。今の状況がどうであれ、いずれは魔境に沈むしかないんだよ」

「……」

黙りこんだベクターを見て、ライスはますます表情を険しくした。

「お前が行くなら、代わりに俺が行くからな」

「待て、ライス。この時期に法の杖が外に出るのは問題だ」

「俺がいなくなっても、貴族連中が困るだけだ。混乱しようとも何とでもなる。だけど、法の剣がいなくなれば誰が国民の権利を守る。『持たざる者達の剣となる』。それがお前の誓いじゃなかったのか？」

ベクターは黙りこむしかなかった。メティスを出る事と、王の護衛となった事。誓いに反する行動の両方を責めているのだ。

「だいたい――」

「結論から言えば、どちらがいなくなっても困った事になるね」

ジェイナスののんびりとした声がライスを制した。老人は困った表情を浮かべて、順番に言い争う2人を見比べる。

「あー、特に困るのはシーグ君だね。非常に微妙な立場にいる。この後、どうするつもりかな？」

「『銀の魔女』が敗北した事も『演習』に過ぎなかったと言いきります。ルパートとバイロンがフェルナンディに行なった罪状を軽くする事を取引材料に、ランカートとマードックに呼びかけます」

「半ば脅しになるね」

ジェイナスは薄笑いを浮かべなら、ライスに先を促した。

「フィーンドは『ロング・レンジ・ギムレット』を破られた。グラムファーレは『アンチ・コンタクトシェル』を破られ、『リーガル・バックラー』を倒されました。だが、『これはあくまで演習であり、内部分裂ではない』、『これら陣形は七家の秘儀の一部に過ぎない』と、七家が口裏を合わせるつもりです。演習において優秀な成績を残したシージ・ペリラスには、陛下がいたく感動して恩賞を渡す結果となったわけですね」

「さて、思い通りに事が運ぶかな」

「ゲイル大臣も賛成だと思いますよ」

「理由は？」

「諸国の特使を交え、陛下の出座する宴を開くのが効果的。そう気付いた矢先に、ゲイル大臣から書状が届きましたからね。更に、『アイシャ・ディスペリアも賛同している』という書面が私個人宛に届きました。ゲイル大臣が不足部分を補ってくれたわけですよ。ヴァンガードで、シーグに2つ名と称号を与えるよう提案したのも、大臣の仕業でしょうね」

つまり、七家の過半数以上が宴にかんして好意的になると考えられる。

ライスは八つ当たり気味に背もたれに体重をあずける。先手を取られたと腹を立てているのだ。王都の東西にあり、対面もせず言葉を交わすこともしない。それでも、ゲイルとライスは常にけん制し、時には共闘することさえある。

「だいたい、お前は王の護衛任務中だ。王命でもない限り、王都の

外には出られないよな？」
　ライスは探るような視線を向けてくる。ベクターは勤めて無表情を装った。
　魔術師の遊撃隊を構成して、メティス東部の防衛を行なう。聡いライスなら、わずかな情報からでもオースピニルとの開戦に気付くかもしれない。
　遊撃隊の組織と、開戦は何が何でも隠さなければならない。喋りすぎたと、ベクターは後悔した。
　更に口を開きかけたライスは、突然耳元を押さえて黙り込んだ。小声で話しながら何度もうなずいている。
　魔術の念話だ。
「網に掛かったぞ。クルア・ハン地区だ」
　ライスは早口でいいながら、勢いよく立ち上がった。ジェイナスがわずかに身を引いたが、ライスは気付いた様子もない。
「場所はアビシャル・ホルドの塔から二区画だ」
　そこは午前中に、レティシアからスカーフを盗んだ者たちが潜伏していた場所である。
「包囲網はすでに完成した。俺達が到着次第に作戦に入る。水門に待たせている快速船で行くぞ」
　迅速すぎる対応。ゲイルが何処に火の手を挙げるかすでに見当を付けていたようだ。速足で歩き出したライスは、勢いよく扉を開け放った。
　ベクターはジェイナスに軽く頭を下げる。そこで、勢いづいたライスはようやく我に返った。ジェイナスは気を悪くした風もなく、ニコニコしている。
「武運を祈っているよ。マードックへの働きかけは、私のほうでもしておくからね」
「ありがとうございます」
　ライスは軽く会釈すると、大股に取調室を出てゆく。イーグル・アイ（鷹の目）のライス・フェルナンディは、視野に捕らえた標的

にまっしぐらに向かい、決して逃す事は無いのだ。

2部－16　レイザークの真実

＊

食前のスープとサラダの皿が給仕によって引かれてゆく。
食事はまだ前菜を終えたばかり。カートを押して去ってゆく給仕たちを、シーグは退却してゆく敵軍の使者であるかのように見守っている。これから始まる本当に戦いが始まると、緊張感を高めているようにレティシアには思えた。
両側を挟まれる形で食卓についたシーグは、スープに口をつけると同時に態度を改めたのだ。
音を立ててスープをすすった瞬間に、両脇から突き刺さる鋭い視線。勘のいいシーグは、2人の気配の変化から自分の無作法に気付く。そして、素早く左右に目を走らせて自分の間違いを正した。
給仕の女性から手渡される食器を剣や盾を見定める戦士の目つきで観察し、油断なく左右に目配せを繰り返す。
そのためか、スプーンでスープを飲む仕草も、サラダをフォークで食べる仕草も、一度見ただけとは思えないほど慣れた手つきになっていった。洞察力の確かさと、学習の速度は相当なものだと思う。これなら、ダンスのほうもすぐに覚えてしまうだろう。
リーザは横目でシーグの様子を探っている。不器用な弟の事をこっそりと笑う姉のようだ。
一方、シンシアは厳しい躾をする母親のようである。シーグの一挙一動を睨み付ける様に常に見守っている。
それなら、自分は一体何者だろうか？
ふと思いついた考えに、レティシアは思わず笑い声が漏れた。食卓についた3人が揃って不思議そうに注目する。
「なんだか、おかしくて。まるでリーザがお姉さんで、シンシアが……」

母親といえば気を悪くするだろうと、レティシアは慌てて言葉を呑み込む。
「シンシアが妹みたいだな、って思ったのよ」
案の定、シンシアはブスッとした表情を浮かべた。うれしい時の照れ隠しの時にもみせる表情だ。怒った時にもよく似ているので、よくよく観察しないと分からないが間違いない。
「じゃあレティーは何？」
リーザは興味津々な様子で聞いてくる。
「私はお母さんかしら？」
本当はお婆さんと思ったのだ。厳しい母親と、イタズラ者の姉をたしなめて一家団欒の食卓を和やかにする役割がきっと必要に違いない。
「それだったら、ライスがお父さんになるわね」
さっきまでの不機嫌はどこへやら、リーザはもうニコニコしている。一方、シーグは嫌そうな表情を浮かべた。天空の水盤での戦いを気にしているのかもしれない。
「私がリー姉で、シンシアはそのままね。だけどレティ、自分の子どもにシーグさんはおかしいわ」
「どう呼べばいいのかしら？」
問い返しながら、幼い時に一度だけ遊んだ『ママゴト』を思い出していた。
「シー坊、よ」
リーザは人差し指を立てて、楽しそうに断言した。
「シー坊……さん？」
たどたどしく言うと、リーザはプッと吹き出した。シンシアは表情はそのままで、わずかに頬を紅潮させている。怒っているように見えるが、あれは笑うのを懸命にこらえているのだ。
「ねえねえ、シー坊さんは何て呼んで欲しい」
「何でもいいよ」
無遠慮に笑うリーザに、うんざりした様子でシーグは答える。

「じゃあ、いっそ3姉妹って事でシーラ――」
「レイザークじゃあ、名前を略すより通称で呼び合うんだ。俊足とか短刀使いとか」
言葉をさえぎって、シーグはまくし立てた。
「ガリッポソさん、とか？」
「……」
仕返しとばかりにリーザが呟くと、シーグはムッとした様子で黙り込んでしまった。口の勝負ではリーザが遥かに上手のようだ。
しかし、『ガリッポソ』とは一体なんだろうか。名前の響きからして植物や鉱物のように思える。しかし、男性がそう呼ばれて嫌がるとなると何か深い意味がありそうだ。後でリーザに聞いてみよう。
「あの、何か？」
じっと見つめていたせいか、シーグは居心地悪そうに聞いてきた。
「いえ、特に何も」
「レティもシー坊も話し方が固いなあ。親子の――」
「そんな事よりも」
ママゴトの配役を指導されたシーグは顔ごと背けて無視していた。リーザは片方だけ頬を膨らませてにらむ。
「レイザークの公子という立場が、メティスではどんな風に働いているのですか」
「それは……」
ライスが七家に対して裏工作を仕掛けているところだ。様々な思惑が混在しているので、正直どちらに転ぶか分からないのが現状である。答えに困っていると、シーグは不安そうな表情を浮かべた。
「大丈夫ですよ。私はよい方向に進むと思っていますから」
不明確で希望的な発言はフェルナンディが忌避するべきものだ。しかし、沈みっぱなしの少年を見ていると、無理にでも元気付けなくてはと思えてくる。
「例えば、天空の水盤の戦いです。もしも、あなた以外の誰かが介入していれば、それだけで外交問題になったのですよ」

シーグとリーザは不思議そうな表情を浮かべている。シンシアだけは納得して小さくうなずいていた。

「天空の水盤はオースピニルの領土です。しかし、それは明確な条約によって決まったものではありません。たった４年前に、侵略によって無理やり手中にしただけの場所でしたから」

リーザも納得してポンと手を打っている。

「魔境と化した地に、オースピニルは移民を行なっていません。つまり、住民の既得権を主張する事もできないのです」

「……どうしてですか？」

シーグは不思議そうに首をかしげている。どうやら冗談ではなく、本気で分かっていないようだ。シンシアは口を半開きにしてシーグをにらんでいる。あきれ果てて説明する気も失せてしまったようだ。

「オースピニルはレイザークの王族に所有権を主張される事を恐れて、すべての降伏勧告を受理しなかった。だから、レイザークの側でも徹底抗戦を余儀なくされたのでしょ？」

シーグは目を丸くしている。仮にも公子の立場にある者が、自国の事情にここまで疎いとは信じられない。王国を代表する者が、戦争の背景も知らないのでは、国民たちも浮かばれない。

「あのね、シー坊は悪くないのよ」

リーザは慌てて口を開いた。

「周囲の人たちも詳しい事を教えてくれなかったし、大怪我をして大変だったの。天空の水盤で治療をして、その後ずっと歩く事だってできなかったんだから。その後、姿を消した時はロディウス老師の所にいたんでしょ？　その後４年間も魔境地帯の真ん中だったの。世の中のことに疎いのは仕方が無いわ」

「ずっと水晶連山に？」

「ええ。たまに町に出ることもありましたが、ほとんど森の中でした。レイザークの事を知ろうとすると、『１００年早いわ。自分の面倒を見れるようになってから他所の心配をしろ』と、怒鳴られたので」

「１００年……ですって？」
あまりに壮大な年数に、レティーは驚きの声を上げた。魔術師であっても、それほどの長きを生きるものは少ないというのに。
「レティー、言葉の例えよ。絶対に本気じゃないと思うわ」
「そういえばそうね」
リーザの言葉にレティシアは納得した。よくよく考えてみれば、現実離れしすぎている。
それにしても、ロディウスに関しては褒め称える噂と、徹底的にけなす噂が混在していて実像が見えてこない。
当時１２歳だった少年を連れ出し、魔境に完全に閉じ込めるとは、まるで人さらいの所業に思える。だが、公子の存在を世間から隠し、絶妙のタイミングで世に送り出したと受け取ることも出来なくはない。
今回の出来事にはロディウス・アクテが深く関わっている。伝説によれば『天を裂く剣、ダイヤモンド・カッター』をメティスの建国王に与えたのも彼だ。時代が大きく揺れ動くとき、要となる人物と接触するのがイービル・スレイヤーである。
だから、シージ・ペリラスがロディウスの弟子となっていたという事実に、メティス中が大きく揺れ動いた。過去の歴史に精通し、予兆を重んじる七家は混乱の極みにあったと言ってもよい。シージ・ペリラスによるダイヤモンド・カッターとリーガル・バックラーの敗北を、メティス滅亡の兆しと予言する者さえいたのだ。
「つまり現在も天空の水盤はレイザークの領土だという事ですか？」
「はい。王族によって降伏の宣言もなく、領土の割譲が行なわれたわけでもありませんから」
「実際にはオースピニルが支配していても、レイザークの領土のままだと？」
「ええ、だからレイザークの公子のあなただけが、メティオスマッシャーの討伐を政治的に正当化できるのです。領土侵犯の名目で」
シーグは納得がゆかない様子だ。

これは、王の法で統治される国々が自らを守るために作った不文律である。王を倒して統治者になれるのなら、誰もが王を打倒しようと考える。だから、王を殺して国を乗っ取った者を諸国は一致団結して王や領主して認めない。王殺しを大陸規模で糾弾する事は、内乱を押さえる事にも繋がるのだ。他国の王権を保護する事が、自国の王の権威を守ることにも繋がるのだ。お互いに戦の絶えない関係でも、奇妙な共存関係で成り立つのが政治である。

逆に王を手中に収める事ができれば、王国は意のままに操る事ができる。シャトランジ（王取り将棋）は、このような暗黙のルールを卓上でゲームにしたものだ。

「もしも、あなたが王国の復興を申し出れば、レイザークの土地に所属する封土へと政治的な介入をされてしまう。だから、七家はシーグさんの存在を疎ましく思っていました。一方で、あなたを諸国に差し出せば、好き勝手に条約を作り出して、レイザークの領土に介入する事ができます。一番手っ取り早かったのは、大義名分の下にメティスの領内で処断する事だった。つまり、ヴァンガードであなたの命を奪う事です」

中立を保つと決めたフェルナンディもこの方針には暗黙のうちに同意していたのだ。一族に逆らう形で、シンシアとサフィリアだけがシーグの味方をしたのである。

「結果としてあなたが勝利し、領地に関しては昨日のヴァンガードであなた自身が否定してしまった。天空の水盤はオースピニル、レイザーク、メティスの何処にも属さない宙に浮いた状態となっています。しかも、その代わりにあなたが陛下から直々に2つ名と称号を受ける事になってしまった。剣の法廷に訴える権利と同時に、メティス内部での発言力が増す。七家にとっては、レイザークが復興する事よりも脅威と言えるでしょう」

「断るべきでしたか？」

レティシアは左右に首を振った。

「陛下の恩情を断れば、不敬とそしられ、更に大きな問題となった

でしょう」
　領土や地位を与えると言い出し、それを望まぬとなれば王が自ら恩賞を与える。王の気前の良さばかりが目に付くが、実際にはシーグを中心に騒乱を呼び込む思惑があったのではないか。
　国内にあえて乱を巻き起こして、潜在的な敵と疑わしき者たちを一挙にいぶり出すのがゲイル大臣のやり方である。そして、今や七家はそれぞれの思惑で暗躍している。
　ルパートやバイロンに命令を与え、アビシャル・ホルドに塔を作って拠点とするのだから、七家の中でも相当の人物が背後に絡んでいるはずだ。シージ・ペリラスを擁護する事が、七家同士に争いを起こす火種となりはしないか。
　黙りこんだレティシアに3人の不安そうな視線が向けられていた。
「ごめんなさい、考え事をしていて」
　レティシアは微笑みかけたが、シーグを除く2人が不安そうにしている。
　『見者』の発言や感情は周囲を巻き込んでしまう。だから、暗い表情をみせてはならない。いつも気にかけているつもりだが、つい忘れてしまう。
　明るい話題を提供しようと頭をめぐらせるが、何も思い浮かんでこない。困っていると、パンと両手を打ち合わせる音が響いた。
「そうだ、シー坊は天空の水盤まで歩いて行ったんでしょ？」
　リーザが明るい口調でシーグに問いかけた。
「爺さんにそういわれたからな」
「何しろ魔境の真ん中を突っ切ったんだもん。困難と激闘の旅だったんでしょ。詩人さんに歌を作ってもらいましょうよ」
「いや、実際にはそれほどでもなかったんだ」
　シーグは頭をかきながら気楽に答えた。浮き浮きした様子のリーザは、カクンと首をかしげた。
「怪物には会わなかったの？」
「ほとんどね。俺は北に大きく迂回してから、水晶連山に入った。

魔境地帯は、レイザークとメティスの国境地帯から南北に広がっていたんだ」

「ちょっと待ってください。どうして、そこまで正確にレイザークの状況を知っているんですか！」

シンシアが素っ頓狂な声で質問した。答えようと振り向いたシーグと目が合うと、我に返ってそっぽを向いてしまう。

徹底的に目を合わせないつもりのシンシアを扱いかねて、シーグは途方にくれている。

「詳しく教えてもらえますか？」

「星見の座ガレフに昇ったからです。あそこからはレイザークの全土を見渡せますから」

「ですが、あそこは魔境の中心地となっているはずでは？」

「俺もそう思い込んでいたのですが違っていました。ええと、レイザークの何処からでも瘴気に霞むガレフが見えますよね」

霧の晴れた日にはメティスの国境からも見えるのだ。死者達の無念の思いが、ガレフを浮き上がらせていると人々は噂している。そのため、『レイザークの墓標』と恐れられている。

「だから、逆に考えるとガレフからも見えているわけです」

シーグの何気ないに言葉に、レティシアは電撃を浴びたような気がした。シンシアも同じように驚きでシーグを凝視している。

「あ、確かに言われてみればそうよね」

リーザだけが、うんうんと首を上下させている。

ごく当たり前の出来事を、見たままに判断しただけ。洞察力以前の問題だ。しかし、レイザークに襲った悲劇と人々の噂話。国境地帯の陰惨な様子から、勝手に決め付けてしまっていたのだ。

レイザークの中央に続く街道は冥府へ続く『死の道』となってしまった。領土のすべてが瘴気に包まれた魔境地帯であり、腹をすかせた怪物がうろついているのだと。

「ガレフからは、何が見えましたか？」

「緑の森や山並みがずっと遠くまで見渡せました。昔、宮廷で見た

ガレフからの風景画とほとんど変わりませんでしたよ」
「レイザークはどうなっているのですか？」
「街道や宿場町のある場所にだけ、魔境になっていました。ええと、石畳や家をゴブリン達が壊したり、ひっくり返したりして、雨水が溜まって腐って空気が淀む。瘴気はそういう場所にだけ広がっているようです」
シーグの言葉に、レティシアは頭が混乱していた。
魔境の瘴気は水脈を通じてレイザーク全土を魔境地帯へと変えた。
それがメティスの魔術師達の結論だ。しかし、シーグの言っている事はまるで違う。いいや、サフィリアの言っていた事と全く一致するのだ。
森は土地を浄化し、土地を豊かにする。根を張り巡らせた地下に独自の地下水脈を作り出す。降った雨は何年もかけてゆっくりと流れた後に、湧き水として地上に現れる。だから地上部分が瘴気に包まれても、地下の水は何年も清浄なまま保たれる。レイザークの全土が魔境に沈むには、長い時間がかかる。街道の走る国境地帯の一部、しかも地上だけを調査して結論を出すのは早すぎる。
今までメティスが調査した魔境地帯は岩塊質の山脈、巨大な河川が走る平原、うっそうとした沼地だけだ。緑豊かで、独自の地下水脈を持つレイザークの土地は同じでは無い。中枢には昔のままの自然が残された場所がある。
だから、メティオ・スマッシャーによる封土の破壊は逆効果になる。今からでも復興にかかれば緑溢れる土地を取り戻す事ができるはずだと。
天空の水盤の夢見や、地下水脈や森の観察記録を元にして、何度も証言したのだ。しかし、七家はサフィリアの自論を歯牙にもかけなかった。見者としての資質そのもの疑う声はフェルナンディの内部では特に強い。
しかし、シーグの証言はサフィリアの自論を裏付け、フェルナンディが間違った前提から結論を出していた事を示している。シーグ

が決闘者の地位を得てから発言を行なえば、その影響力は図り知れない。
聡いシンシアはその事に気づいているようだ。半ば呆然としてシーグを見つめている。
「クサリヅタやフクロウが生息している場所はありましたか？」
恐々と振り返ったシーグに対し、シンシアはサフィリアの夢見について聞く。
「ガレフには数え切れないほどの鳥が住んでいたし、川も水場も昔と変わらなかったぞ」
問いつめる口調にシーグは緊張した面持ちで答えた。
「本当なんですね」
「あー」
「嘘なんですか？」
言い淀むシーグに、シンシアはきつい口調で問い詰める。
「いや、そうじゃなくて」
「じゃあ、どうなんですか！」
イライラと早口にまくし立てるシンシア。勢いに押されてタジタジになったシーグは、大人に怒鳴られて怯える幼児のようだ。なだめようと口を開きかけた時、キュー、という小さな音が響いた。
「いやー、はっはっはっはー。またまた、やっちゃったー」
リーザが腹部をさすりながら大笑いをしている。しかし、シーグは「え？」と怪訝な表情を浮かべた後にシンシアを振り返る。当のシンシアは耳まで真っ赤になってうつむいている。
真剣に首をかしげるシーグの頭部に、リーザは無言で拳骨を落とした。
「とにかく、食事にしましょうか」
レティシアはそう締めくくって、扉のほうを振り返った。給仕の娘は何一つ代わったことなどない様子で、いつもの笑みを浮かべ料理を運んでくる。リーザが鼻をつまみあげるのを、シーグはされるがままになっている。本当に中のよい二人だと、レティシアは思っ

た。

レイザークが魔境に没していないのなら、クラトス・ビアに位置をもう一度考え直す必要がある。サフィリアの夢見を擁護するシーグの発言に、『法廷の権利』を持つ者の支持を取り付ける。そうすれば、サフィリアにきせられた不名誉を撤回し、夢見の信憑性を蘇らせる事もできる。そして、狂気に陥った過去を理由に否定された、不吉な夢見を再検討しなくてはならない。

『４つの影が結集し、王が死ぬ』

もしも、それが真実であれば大陸に大きな動乱が巻き起こる事になるだろう。

2部－16　レイザークの真実（後書き）

ここでシーグが言っている出来事は、外伝の「死の道を行く」で経験した事です。半年以上もかけて、ようやく、本編とつなげる事ができました。

過去と未来を結びつけるのは、簡単に見えて、とても大変な作業でした。

世界観はそのままで、３００年前を舞台にした『イリーガル・ブレイド　～血色の報復者～』の連載を開始しました。

本編では姿を現したことのない、ロディウス・アクテの少年時代を中心に書いてゆきます。

こちらは、短編長でテンポよく話を続けてゆくので、気軽に読んでみてください。

各章の一番下や、目次ページの下にリンクを貼り付けておきますね。

2部ー17　誓いの階位（前書き）

５ヶ月もの間、音信不通のままですいませんでした。
増えてゆく「お気に入り登録」に励まされ、再び書き始める事にしました。まともに連載もしていないのに、続きを楽しみにしてくれている人々がこんなにたくさんいるとは驚きです。
更新はゆっくりなペースになると思いますが、これからもよろしくお願いします。

2部ー17　誓いの階位

＊

風を切って進む小船は、クルア・ハン地区へ向かって快走していた。船はほとんど揺れず、飛ぶような勢いで進んでいる。実際に船底の大半は水の上に出ていて、氷の上を走るソリのように水面を滑走しているのだ。

天空の水盤という最大の封土の力を借りたサフィリアにさえ真似はできない。これは魔力の大きさや触媒の性能ではなく、術者のバランスの取れた技量によってのみ使用可能な高等技術だからである。

水の特徴を熟知した操船術、空気の性質を理解して放たれる雷撃、推理力で精度を増す探知魔術。

フェルナンディの魔術師は、力任せではなく繊細なバランス感覚を必要し、わずかな魔力と触媒で絶大な効力を発揮する。つまり、場所を選ばずに実力を発揮できるのだ。力の源である封土から出てもなお、魔術を戦力として生かすにはフェルナンディの魔術理論に通じた者こそが必要なのだろう。シンシアがルパートを倒したのも、封土と触媒による力技の限界を示しているように思える。

適確に魔術を使うことにかけて、ロイド・カーティスにかなう者はいないだろう。王都が戦場となったとき、風と水を自在に操り、王都のグリム（悪夢）と恐れられていた。ジェイナスがレイス（死霊）、ゲイルがカロン（墓守）と呼ばれるように、戦場で数え切れない敵を倒したからだ。

戦闘力もメティス随一であることは疑いない。もしも場所がアクリアエ・スリスならば、自分やルパートは近づくことさえできない。ヴァンガードを連発していたリーガル・バックラー卿のガリウスさえも、ロイドとの直接対決は慎重に避けていたのだ。

あのシーグなら、どう戦うだろうか。そう考えていると、船が大

きく揺れてベクターは船べりにつかまった。
「揺れますぞ、しっかりつかまって下され」
ロイドは行く先を見つめたまま、厳しい口調で言った。
「今のはわざとだぞ。あのヒヒジジイめ」
ライスは遠慮なしにはき捨てた。
「聞こえるぞ」
「聞こえんよ」
ライスは大声でぶっきらぼうに叫んだ。船の前に立つロイドの背中に叩き付けんばかりの勢いだ。
「場所がサ・フィールで風上だったら冥府の声まで聞き取るが、封土から出て風下にいれば隣で怒鳴っても聞こえないからな」
「耳が不自由なのか？」
「魔術で補っているのさ。だから、大規模な魔術戦が始まると耳が聞こえなくなる」
「ライス、魔術師の個人的な事情を話すのは――」
「良くはないが、いざという時に足並みがそろわないと困るからな」
ライスの独白にベクターは気を引き締めた。彼が警戒を呼びかけるとき、ほぼ間違いなく厄介ごとが起きるからだ。
「クルア・ハンに入ったら大声で話すか、正面に立って話すんだ。唇の動きが読めるようにな。簡単な命令なら、天空の水盤でやった指文字を使え。考案したのがロイドだから絶対に通じる。とにかく、俺のそばから離れるな。その気になったら、ロイドはお前だけを船から放り出す事だってやりかねない。うっかりと魔術に巻き込む事だってやるかもしれん」
「そこまで精密な操作ができるのか」
ベクターは思わず感嘆の声を上げた。
「そこは感心するところじゃないだろう。ロイドはお前をよく思っていないんだ」
「彼の弟子達をメティスの外に追放したのだ。当然の事だろう」
「それなら、俺も同じだ。法の杖と法の剣が決めたことだからな。

理由はもっと個人的な事さ」
「さっき、水門で私が無礼を働いたからか？」
「その無礼に対して、あそこまで過剰に反応したのは何故だ。ヴァンガード顔負けの決闘になりそうだったじゃないか」
「フェルナンディに対する忠義がそこまで深いのだな」
明快に返答するベクターを見て、ライスは深々とため息をついた。
「ヴァレリアの事を覚えているか？」
「ロイド導師の一番弟子だな」
メティス南部の森林地帯で生まれた娘で、メティスの内戦の時に村を失った。防衛のために軍勢が向かったが、間に合わずに村が戦場となってしまう。その時の指揮官がベクターである。
ロイド自身はヴァレリアに対して、すべての財産とフィーリアの継承まで考えていたようだ。フィーリアについてはフェルナンディが、財産にかんしてはフォルナージュが反対し、実現しなかった。
「ヴァレリアは私を怨んでいるだろうな」
「お前はすぐに悪いほうに考える」
「どういうことだ？」
「いわば、お前は命の恩人だろうが。そして、当時のヴァレリアはたった９歳の少女だった」
「つまり、今は１９歳になったわけか」
「……俺は年齢の話をしているわけじゃないぞ」
「では、何を言いたいんだ？」
ライスの事だ、何か裏があるのだろう。ベクターは考えをめぐらせる。
「ヴァレリアがお前に対して、どんな態度を取っていた？」
「避けられていたな。視線さえも合わせようともしなかった」
「相手は１０代の少女だった。その上彼女は、人見知りが激しくて、内気な性格だったよな。直接の会話はなくても、手紙は何度も届いただろうが。どう思う？」
季節ごとに必ず届き、栄達を祝し健康を願う一文が付け加えられ

ていた。公文書のように完全に礼節に叶った形式で、書記官が務まりそうな美しい字で書かれていた。少女の几帳面な性格を現すような手紙だったのを覚えている。

「感謝している。と、伝えたかったのだと思う」

ライスは重たい頭に耐えかねたように、船べりに突っ伏した。

「何をそんなに苦しんでいる？」

「真面目に説明するのがバカらしくなっただけだ」

「私はふざけていないぞ」

「だからだ」

心底つらそうなライスを見て、ベクターは頭を忙しく回転させた。ライスをこれほど苦しめる理由と、オースピニルが魔術師を侵入させたというゲイル大臣の情報。それらをあわせて考えると思いつくことがあった。

「網に引っかかった魔術師とはヴァレリアか？」

ライスは一瞬だけ動きを止め、何気ない風を装って顔を上げる。どうやら、図星のようだ。

「ったく、抜けているのか、鋭いのはよく分からんな。お前は」

「ロイド導師が同乗している理由はそれか」

「さっきまで、風を用いた念話を取り仕切っていたのがロイドだった。隠す事もできなかった」

うかつだったよ。ともらし、ライスは大きなため息をついた。

元々、メティスで学んだ魔術師を偵察に派遣するのは妥当な判断だ。懸念したとおりに、かつての師弟が激突する可能性もある。

「ヴァレリアは現在ミダス・ジュサックの下に配置されている。あのガイスの弟で、青づくめの悪趣味のな。オースピニルの特使として、クルアハン地区に滞在しているんだ」

オースピニルのジュサック家は、アイシャと懇意にしていた。滞在場所として選ぶには無難といえなくもないが――。

ライスはベクターから目をそらしてクルアハンに立ち並ぶ塔を見ている。ライスが無関心な態度を取るときには、決まって興味津々

な時だ。視線に頼らなくとも、魔力の乱れから内心を見破る能力でライスに及ぶものはない。だから、ベクターは思考を中断して平静を装った。

「お前はさっさと結婚を考えろ」

「いきなり何を言うんだ」

「結婚が嫌なら、女と付き合え。立場の問題があるなら、ジェイナス導師に相談すればいい。あの人はその方面に顔が広いから」

「だから、何の話をしているんだ?」

「バイロンもそうだが、独り身でいるとろくな事を考えない。好きな女の一人でも作れ」

「いきなりなんだ。意味が分からないぞ」

「捨て身で誓いを果たそうとするな、と言っているんだ」

「騎士の誓いを軽んじろと言うのか?」

「お前はそのくらいが丁度いいんだ。少しは肩の力を抜いて、だらしなく生きろ」

「サフィリアの夢見の事を言っているのか?」

「それ以外の事も含めてだ!」

ライスが語調を激しくしたので、さすがのロイドも何事かと振り返った。

「とにかく、ひと段落したら付き合え。メティスを去る前にそのくらいの時間は取れるだろう?」

「それは構わないが、お前も人目をはばかる場所に行くのは困るだろう」

婚約者のいる身なのだから、と続けようとしてベクターは止めた。ライスは顔全体を手で覆ってうつむいている。ジェイナス卿の得意な方面と聞いたので勝手に納得してたが、どうやら的外れな事を言ってしまったらしい。

ベクターとライスのやり取りを見て、ロイドは怪訝な表情を浮かべている。

「いいや、なんでもない。ロイド導師、できる限り急いでくれ。相

手は我々の接近に気づいている。何らかの妨害があるかもしれん」

船は速度をさらに上げたが、むしろ揺れは少なくなっていた。早馬とは比べ物にならないほど速く矢のような勢いで進んでいるはずだ。それなのに、風をほとんど感じない。ロイドは風までも操り、船への抵抗を極限にまで減らしているのだ。

前方には薄暗い霧に包まれた町並みが迫ってくる。魔境地帯のように昼なお暗いクルアハン地区は、ディスペリアの一族が統治している。フェルナンディがサ・フィールで探知の力が強くなるように、グラムファーレがアクリアエ・スリスで守りの力が強くなるように、クルアハンではディスペリアのつかさどる幻覚の力が最も強くなる。アイシャが何かをたくらむなら、これ以上ふさわしい場所はない。

クルアハンの瘴気にかすむ塔の群れを見つめながら、ベクターはこの数日間で怪しい行動の目立つアイシャの事を考えていた。シーグとガリウスをたきつけて、ヴァンガードを引き起こすきっかけとなった。リーガル・バックラーを失ったグラムファーレと、アヴェンジャーを失ったフィーンドを追い詰め、ベクターをシェンナ王の護衛につけるよう進言している。それでいながら、王の謀殺をほのめかしていた。彼女の目的は一体何なのだろうか。

そこまで、考えてベクターは先ほどの言葉の意味に気づいた。ライスが珍しく声を荒げて、誓いをいい加減にしろというのはただ事ではない。王とアイシャへ捧げた誓いがぶつかり合うことを、ライスは予感しているのではないか。

ベクターは軽く頭を振って、嫌な考えを振り払った。答えはすでに出ている。悩んだり、迷ったりする性質の問題ではない。フォルナージュの血筋に生まれた以上、王への忠誠は血と肉に刻まれており、破ることは死と同義だ。アイシャを守ると誓っているものの、王への反逆を働くのであれば誓約は無効となる。なぜなら、メティスでは王への誓いが何よりも優先するからだ。

アイシャ・ディスペリアが王に背くのであれば、法の剣が行うべきことは決まっている。

顔を上げると、今度はライスが神妙な表情をしていた。にらみつけるようにして水面を見つめている。
「どうした？」
「いや、何か違和感を――」
ライスは最後までいうことができなかった。大きな衝撃と共に、船を飲み込むほどの大波が襲い掛かってきたからである。

2部ー17　誓いの階位（後書き）

ようやく、戦闘開始。物語も急展開と行きたいところです。
次回の更新は一週間後を予定しています。ここまでは書き終えているので大丈夫です。
ただし、書くのが久しぶりなので設定の矛盾とか、キャラクターの人格が変わっていないか、心配ですねえ。

2部－18　水中の敵

ベクターは外に放り出されないように船につかまった。しかし船体は大きく傾き、水平線が縦になるのが見えた。水の上に投げ出されると分かっていながら、どうすることも出来ない。

「つかまっていてくだされ！」

ロイドは怒鳴り声を上げながら、杖を掲げた。再び大きな衝撃が船を打って息が詰まる。視界が回転すると、再び水平線が真横に広がっていた。ほっとするまもなく船は矢のような勢いで走り出す。

ロイドは波の流れに逆らう事はなかった。もしも、そうしていれば小さな船は粉みじんに砕けていただろう。ロイドは風を集めて、流れに逆らわずに船を弾き飛ばしたのだ。船は空高く舞い、完全に一回転した後に着水したのである。

とっさの機転と度胸、繊細な魔術の操作。そのどれもがそろっていて初めて出来る荒業だ。カレント・テクニクスの称号は伊達ではない。

「くそ、一体何が……」

ライスは頭を抑えて、ひっくり返っている。船を操っているのがロイドでなければ、ライスは船外に放り出されていたのではないだろうか。

「船の下に何かがいて、俺たちを攻撃した」

「相当大きいぞ。ワイバーン級かそれ以上だ。王都の湖にこんな大物がいるなんて聞いたことあるか」

「住んではいない。呼び出した怪物を封印しておく施設が湖岸にある」

「何？」

不審げに向けられるライスの視線を、ベクターは正面から受け止めた。

「とにかく、何が潜んでいるか心当たりがあるんだな」

「アクアランスを渡り、サ・フィールを突破した軍船と戦う事を念頭において集めたものだ。とにかく大きい」

ライスは舌打ちをして杖を握り締めて目を閉じる。ベクターもつられて、水面を覗き込んだ。見えるのはものすごい速度で進む水面だけだ。ロイドは苦しそうに顔をゆがめている。これほどの速度ではそう長く走ることは出来ないだろう。湖岸まではまだ相当の距離がある。

「お前のダイヤモンド・カッターなら、水中どころか壁の中に敵が潜んでいても関係ないんだが……」

ライスは泣き言にしか聞こえない言葉を吐いている。

実際に水中の敵に出来ることは少ない。空に向かってならライスの雷撃やロイドの風の魔術を放てるが、水中に潜む相手には効果がない。ロイドが水を操れるといっても、水面だけのこと。水中深くに潜む敵に直接攻撃は出来ないのだ。そもそも、魔術師は一箇所に止まらなければ本来の実力を出せない。だが、動きを止めれば船ごと餌食になるだけだろう。せめて、敵の正確な位置だけでも把握できれば。

「やはり、こんなに速く動いている状態では、探知の魔術はまともに働かないな。正体も距離も方向もまともに分からん。近づいてきているのは確かだが」

つまり、魔術の狙いを定めることが出来ないということだ。視認できない場所からの奇襲攻撃は、ほとんどの魔術を無力化してしまう。

今度は後方の水面が少し持ち上がった。水面に現れた巨大な背びれは切る帆のような形をしている。それでベクターは怪物の正体に気づいた。

「あれに悩まされるのは、海だけと思ったがな」

「サメの種類によっては淡水でも生きられる」

「背びれから判断するに、普通のサメの軽く5倍はあるぞ」

ライスは糸よりも目を細くして、探る視線でベクターを睨む。

「……速度も相当なものだ。このままではいずれ追いつかれる」
ライスは不吉な報告も正確に行った。ロイドの顔色はどんどんと悪くなってゆく。その瞬間、巨大な背びれが水面に沈んだ。船の下から襲い掛かるつもりだろう。ベクターは懐を探って、ナイフを一本取り出した。太い刀身には、複雑なルーンが刻まれている。
「座っていてくだされ！」
ライスが腰を浮かしたのを見て、ロイドが苛立たしく怒鳴った。その瞬間、船全体が大きくのけぞった。水面を割って姿を現すサメから逃げるように、空に向かって船が跳んでゆく。ベクターは振り向きざま、サメの口に向かってナイフを投げつける。すさまじい水音に混じって、牙を打ち合わせるガチンという音がやけに大きく聞こえた。
船は二階の高さまで飛び上がり、水面を三度はねて走り出した。後方では、サメが滑り台のようにせり上がった水に飲まれて見えなくなっていた。ロイドは水面を斜めに持ち上げ跳び台にし、船を空高く飛ばしたのだ。
「無事に湖岸まで届けて見せますぞ。安心してくだされ」
ロイドは苦渋の声を絞り出して強がっている。しかし、船尾には歯形に削られた跡があった。完全にかわすのはできなかったようだ。船底に水が染み出し、船全体がギシギシといやな音を立てている。これほどの無茶を何度もすれば、船が解してしまうだろう。
「岸に着くころには、爺さんの心臓が止まっているぞ」
ライスは口元を動かさずにつぶやいた。ロイドの体力が限界なのだろう、船体は水面を叩くように荒々しく進んでいる。水を周囲に撒き散らすために、船速は目に見えて遅くなっている。
「勝負を決める時だ」
「そうだな。俺が囮になる。お前が止めを刺せ」
ライスは淡々としゃべった。今度は口の動きを隠さなかったので、ロイドが血相を変える。
「いけませんぞ、ライス様！」

「サメの攻撃といえば、噛み付きや体当たりだ」
「時期フェルナンディの頭首ともなろうお方が……」
先を続けるために息を吸い込んだロイドを無視して、ライスは勝手に先を続ける。
「つまり、お前の剣が届く距離に来る。そこにかけるしかない」
「そのような危険な役目についてはなりませぬ。その役目は私が！」
「ロイド、船の操縦がおろそかになっている。集中しろ」
ライスはロイドに懇願するような、怒鳴りつけるような口調でまくしたてた。ロイドはしぶしぶと操船に集中する。ライスの髪にべったりとへばりついているのは、痰だとベクターは気づいたが、今はそんなことを気にしている場合ではない。
「ライス、その作戦はなしだ」
「なんですと！　ライス様の作戦を――」
「ロイド、頼むから黙っていてくれ」
ライスはため息交じりに怒鳴りつけた。
「さっき、サメにナイフを飲み込ませた」
にらみつけてくるロイドを無視して、ベクターは早口に言った。ライスは固まったように姿勢を正し、目を忙しく動かした。
エンチャンターは自らが作った物の位置を正確に知ることが出来る。聡いライスはそのことに気づいたのだ。
「後方に３０歩。船の後ろを探るようについてきている」
「つまり、その気になればいつでも追いつけるわけだ。俺たちは何をすればいい」
「船を止めて私をおろしてくれ」
「なんですとぉ！」
怒鳴るロイドをライスは完全に無視している。
「……つまり、俺たちに協力できることはないのか」
ベクターが無言のまま黙っていると、ライスはため息混じりにうなずいた。
「船を止めろ。ベクターのいうとおりにするんだ」

「ですが――」
「ロイド！」
有無を言わさない勢いで、ライスが怒鳴った。怒りに顔を引きつらせながら、ロイドは水面に杖を浸す。すると、船はゆっくりと速度を落としてゆく。ベクターはジェイナスから受け取ったバックルを水面にかざして、魔術の呪文を唱え始める。
やがて、バックルを中心にして水が弾力を帯びていった。直径５歩ほどのゼリー状の円の上にベクターは飛び乗った。
「エンハンス、サモニング、エンチャントのトリプル・ステイシス。お得意のトラップを仕掛けるにしても、これではサメの大口では一飲みだぞ。それに、魔力自体が弱すぎないか？」
「行ってくれ、もう時間がない」
ライスがうなずくと、船は静かに動き出す。ロイドが仏頂面でこちらをにらみつけながら、遠ざかってゆく。
ベクターは懐から、さっきと同じナイフを取り出して、指先を軽く突く。小さな血玉が膨れ上がってきて、湖に落ちた。血のにおいでサメをおびき寄せるためだ。ベクターの狙い通り、サメは船からベクターへと進路を変更した。
水面に近づいてくる魔術の気配。命がけの危機だというのに、体中に力がわきあがってくる。それでいながら、湖の表面のように静かに澄み渡っている。
ベクターは膝をつき、なるべく体を小さくした。あれほど巨大な怪物を水上で倒す方法をベクターは持たない。敵の虚に飛び込み、弱点をつくしか方法はない。フェジュラでもそうだった。燃え上がるような熱気と、立っているだけで体中の水分が奪われるほど渇きの中で生きている怪物は、すべて強靭な鱗を持っていた。魔術であれ、武器であれ人間が使う飛び道具が全く通用しないことがほとんどだった。
狩るか狩られるか。勝敗は刹那のうちにきまる。
ついに水面を割って、鋸状の白い牙がベクターめがけて襲い掛か

ってきたのである。

2部－19　最大の悪徳

＊

「馬鹿な、なんで！」
ベクターが成すすべも無く水中に消えたのを見て、ライスは思わず立ち上がった。
「魔術の発動さえありませんでしたぞ」
ロイドも操船を忘れて、叫んでいる。
「にわか仕込みの擬似フィーリアだからか」
「なんですと？」
「ダイヤモンドカッターを封じられて、あいつには使えるフィーリアは2つしかない。プルーフ・アゲインストに作らせた擬似フィーリアを使って、トリプル・ステイシスを維持していたんだ」
「そんな不安定なものでエンハンスとサモニングの系統を使うなど正気の沙汰ではありませんぞ！」
ライスは言葉を飲み込んで、水面をにらみつけた。ベクターならば大丈夫だと、盲信していた自分が恨めしい。
「ロイド、サメの行く先を探知しろ。水の流れを探って、位置をつかむんだ」
「しかし、それでは水面の近くしか探知できません」
「無いよりましだ。くそったれ、今度顔を出したら特大の雷撃を食らわせてやる」
ライスは杖の先がバチリと金色の火花を立てる。
「それでは良くて相討ちですぞ」
ロイドは悲鳴のような叫び声を上げる。
「指をくわえて一方的にやられるよりはましだ。せめて一矢むくいてやる。ロイド、お前は身を守っていろ」
「落ち着いてくだされ、その様な役目はむしろ私が――」

「落ち着くのはお前だ、ロイド」
ライスは激しいが、冷静さを取り戻した口調となった。
「よく考えてみろ、運よく相打ちになった時、私とベクターを救出するのがお前の役目だ。雷撃に巻き込まれるか、牙にやられて負傷しているか知らないが、治療の魔術に秀でたのはお前だ。湖岸に最も早く俺たちを運べるのもな。カレント・テクニクスの名にふさわしい役目を果たせ」
ロイドも落ち着きを取り戻して、ライスの顔をじっと見つめる。
「……申し訳ありませんが手遅れですな。巨大な何かがこちらに向かって浮上中です」
フェルナンディの教えに従って、不明確な部分を隠さずに報告するロイド。しかし、この場合はベクターを飲み込んだサメに決まっている。
「ったく頑固爺め。言い合いになれば、いつも長引くんだからな」
「爺ごときは気合で言い負かさないでどうしますか。それに、シンシア嬢の前でそのような雑な口調はいけませんぞ。あの方は兄上を崇拝しているようですからな」
「……今ではどうだか」
シーグを尋問した時に「大嫌い」と叫んで出て行った後、よそよそしい報告しか受けていない。フェルナンディの女性が心の底から怒っているときに共通の態度だ。
「まあ、そのほうが良かったかもしれん」
ライスは肩をすくめた。時間がないといいつつも、呑気に話をしていることに奇妙なおかしさを感じたからだ。
「接近中です。方向は右側面から正面、距離は３０歩から５０歩の間と思われます」
方向も距離もいい加減にしか分からない。その上、どの角度で進入してくるかも分からない。杖には力が満ちており、呪文ひとつで開放できる。だが、雷撃の射程は２０歩程度幅は5歩もなく、水中の敵には効果が低い。それなのに、どこにどう撃てばいいのかまる

で分からないのだ。
「これじゃあ、目隠しをされているのと同じだな」
つぶやいたライスの脳裏にシーグの姿が思い浮かんだ。彼ならば、霧の中でも逆転した彼ならばこの絶望的な状況でも何か良い方法が思い浮かぶだろうか。
仮定にすぎないが、彼の動物的な直感やリーガルバックラーさえも切り裂くシャープネス。この2つがそろっていれば、作戦の立てようもあったのは事実だ。
ライスは頭を振り払って余計な考えを振り払って、正面に向かって杖を構えた。水面が小さく揺れ、一瞬後には爆音を響かせて水柱が立った。ライスの背後である。
方向もタイミングも逃したライスは、慌てて振り返った。だが、水柱が邪魔でどこにサメがいるのか分からない。そうする間にも、水が降りかかってきて杖からバチバチと火花が散る。魔術の暴走を抑えるだけで、ライスの腕は雷撃を受けた時のように痺れてゆく。
「上ですぞ！」
ロイドが叫ぶと同時にライスは空を見上げた。サメは大きく弧を描き、船を飛び越えて再び湖に落ちていった。再び水しぶきが降りかかり、ライスは魔術を中断せざるをえなくなった。
「くそ、不発か」
ライスは痺れる腕を押さえて、杖を船に落とした。雷撃の魔術の名残として、金色の火花がパチパチと情けない音を立てている。自滅を抑えるだけで精一杯だった。
「水で魔術の妨害をするとは。何者かがあの怪物を操っているのでは？」
ロイドはあたりをキョロと見回した。魔法陣や特殊な触媒の助けがない限り、視線の届く範囲、３０歩以内が支配の魔術の効果範囲だからだ。
「いや、魔術師がいたり、魔術が使われたのなら、とうに気づいている。だいたい、そこまで知能的な行動が出来るなら、船底に現れ

ればよかったんだ。雷撃の魔術を撃つ暇もなく船ごと破壊できただろうからな」

そうなれば、今頃湖の中で魔術の暴走を抑えきれずに自滅したことだろう。

「では、一体？」

「ベクターが何かやっている、とはしか思えないな」

「しかし、彼は飲み込まれて……」

ロイドは言葉を飲み込んだ。魔術の気配が満ちるのを感じたからだ。その瞬間、遥かかなたの水面が割れて、再びサメが空高く飛び上がった。よくよく見ると、サメの体から鋭い刃が飛び出している。５０歩ほど離れた場所に落ちていったが、その時に起きた波で船が大きく揺れる。慌ててロイドは船に杖を立てて、魔術の操船を再開して揺れを止める。

「エンチャントの属性の発動を感じたぞ。トリプルステイシスとは違うようだが」

「一体何が？」

ロイドは呆けたように同じ質問を繰り返したが、ライスにも良く分からない。エンチャントの系統は術者の技量によって無限の可能性を持っているからだ。

サメは再び水上に現れた。体中から突き出る鋼の刃は４本に増えている。飛び上がる元気もすでになく、同じ場所をぐるぐると泳ぎまわった後に腹を見せてひっくり返ってしまった。

ライスとロイドが唖然としていると、サメの喉が不自然にうごめき始めた。しばらく、何かに押し上げられるような動きを見せていたが、内部から鋼の刃が飛び出して、サメの喉元を切り裂いてゆく。そして、中から現れたのはベクターだった。

体全体がうごめく水の幕に覆われている。血の赤に染まった水の幕が陽光を照り返して、幻想的な輝きを放っている。

ロイドは慌てて杖を湖につけ、ベクターの元に船を急がせた。そのせいで、ライスは船底にたまった水の中に尻もちをついてしまっ

た。もっとも、何度も水もかぶった後なのでロープは水を吸い込んでずっしりと重い。

「ベクター？ぉおおー！」

ロイドの呼び声にベクターは顔を上げると、水の幕は支えのなくなったカーテンのように一斉に落ちた。

「治療をいたしますぞぉぉぉー！」

更に速度を増して殺到するロイドと船を見て、ベクターは警戒の表情を浮かべ、逃げ腰になっている。サメに対するときよりも、恐怖しているようにライスには見えた。

ひっくり返ったサメに激突するかと思われた船は、横滑りをしながらベクターから3歩の位置にぴたりと止まる。水しぶきも全く上げない見事な操船である。ただし、急停止したせいで、ライスは船べりにしたたかに頭をぶつけてしまった。

「ベクター？、どこを怪我されました！」

「いや、わたしは何とも――」

「強がっている場合ではありませんぞ！」

興奮したロイドはベクターの肩をつかむと、強引に船に引っ張り込んだ。ベクターは顔をしかめたのは、まだ完治していない手と肩が痛んだに違いない。ベクターが船に乗り込んだ時に、水がはねてライスの顔を打った。

一方ベクターは怪我一つなく、水にぬれている様子さえない。なんだか腹が立ってきたライスはベクターをにらみつけた。

「ロイド導師、サメの血は赤いのだ」

入念に体を調べる老人に、ベクターは生真面目に言う。ロイドは益々顔を真っ赤にした。

「心配をかけたようだが、大丈夫だ」

「し、心配なんぞしておりませんぞ」

ロイドはそっぽを向くと、湖に顔を向けて船の操作を始めた。術者の苛立ちを反映して、船は水しぶきを上げながら湖岸に向かって進んでゆく。

「まあ、無事でよかった。とにかく座れ」
ライスは水浸しになった船に腰掛けながら、ベクターに場所を譲った。
「俺に遠慮なんかする必要はないぞ。疲れているんだろ」
「いや、俺は……」
びしょぬれになったライスを見下ろしたまま、ベクターは結える船の中でも姿勢を崩さない。戦闘の後だというのに、立ち姿が様になっていたのでライスは益々腹が立ってきた。
「この後は、怪物を放った奴らとの戦いとなるかもしれん。今のうちに座って体力を取り戻しておくんだ。さあ、俺のように座れ」
「それをいうなら、濡れたままのほうが体力を消耗するぞ。湖岸の護民官に連絡して、着替えを準備させてはどうだろうか」
威圧的な嫌がらせを正論で返されて、ライスは更に剣呑な表情でベクターをにらんだ。しかし、当の本人はクルア・ハン地区を真剣なまなざしで見つめている。ライスは八つ当たり気味に雑な手つきでイヤリングを取り出すと、念話の魔術を使った。
「住人の避難を開始しろ。アビシャル・ホルドの塔の周辺を最優先だ。それから、着替えを準備してくれ。わたしとベクター卿と、ロイド導師の分だ」
「避難とは大げさではないか？」
「ゲイル大臣があからさまに共闘を申し出ている事態なのに、甘く見ていたな。出遅れたかも知れん」
「大臣から正式の知らせがあったのか？」
「来ていないが、とにかくそうなんだ」
「なるほど」
ベクターはそれ以上追求してこない。
「お前の分の着替えも手配しておいたからな」
「私はこのままでも構わないが」
「……」
嫌味は気づかずに受け流し、それでいながら勘が鋭く、功績を誇

ることもしない。何より腹が立つのは激戦の後だというのに、くたびれた様子が無い。湖を背にした立ち姿はやけ絵になる。

非の打ち所がないというのは、最大級の悪徳に違いない。こういうときには、ゲイル大臣の嫌味丸出しの言葉のほうが気楽に思えてくる。ベクターが宮廷では男に嫌われ、女に慕われるのは間違いなくこのせいだ。ライスは思わず荒々しい鼻息を吐き出した。

2部ー20　更なる脅威

「ライス、何を怒っている？」
「別に。で、どうしてお前は水に濡れてさえいないんだ」
「トリプルステイシスで水の幕を作っておいた」
「サモニングにエンハンスにエンチャント。プロテクションの系統なしではまともな防御壁なんか作れないぞ。文字通りの水の泡じゃないか」
「それで十分だ。中に空気を取り込んで、呼吸が困らないようにできたから」
空気を中に閉じ込めるのだから、水も血も通さないのは当たり前だ。
「だったら、どうして無傷なんだ。サメと水中戦をやらかして、食われたんだろう？」
「食われたのはなく、サメに飲まれた」
「何だって？」
「自ら飛び込んでサメに飲まれたんだ、ライス」
ベクターは聞き取りやすいようにゆっくりと大きな声で繰り返す。
「いや、俺の聞きたいのはそっちじゃない」
「水中戦の方か？　それも正確な表現ではないな。ずっとサメの胃の中にいたから」
言語の先生のように整然と常識外れのことを繰り返すベクター。ライスは怒りを通り超えてバカらしくなってきた。
「水中どころか、体内で戦っていたのか？」
「ああ、体の内部からの攻撃が有効な相手もいるようだな」
フェジュラの闘士は、接触しての魔術攻撃を得意する。怪物に肉薄するために、魔術を身に着けると同時に強靭な肉体に鍛え上げるのはそのためだという。だが、体内に侵入するとは初耳だ。
「フェジュラでは、そんな無茶を教えるのか？」

「いや、砂漠の怪物には有効ではないな。彼らの食べる獲物は岩同然に硬いから、細切れになるまで食いちぎる。その上、飲み込んだあとも喉がすりつぶすような動きをするよるので、意識を保つのも難しい。砂漠のみならず、地上の生物はたいていそうだ。そして、水中にすむ生物は牙は鋭くでも、獲物を丸呑みする傾向がある」

戦法を聞いているというよりは、動物学者の意見を聞いているような気分にライスは陥った。まるで人事のように淡々と話す口調が余計も、学者然としているように思える。

「そう教えてくれたのはライスだろう。いつだったか、巨大な魚の腹から出てきた宝剣やコインや宝石を見せてくれた」

太古の宝物が海底には沈んでおり、巨大な魚が餌と間違えて丸呑みすると話した覚えがある。いつかディテクトとエンチャントの系統で宝探しをしようと提案するライスに対して、ベクターは生真面目に考えてから答えたものだ。

海底は広くディテクト（探知）の限界を超えているし、海中の生き物に対して支配の魔術を継続するのは効率的ではない、と。

冗談交じりの話をしたときにも、この男は怪物との戦い方を考えていたに違いない。

「本来は飲みこまれる寸前に口を破壊するために作った。だが、最初に位置を確認するために飲ませてしまったからな」

「あの短剣が槍の正体か」

「そうだ。正確には４つ又の十字剣だ。接触して魔術で開放すると元の大きさに戻る。エンチャントの応用して作った」

「じゃあ、とっさの判断で口の中に飛び込んだって言うのか？」

「それ以外に方法が思いつかなかったからな」

ライスは顔を覆ってうつむいた。水上でどう戦うか迷っていた自分とは思考の次元が違いすぎる。恐るべきはベクターの発想と応用能力だ。

エンチャントは魔力にあふれた土地を必要とする。そのため、荒涼とした砂漠地帯のフェジュラでは魔術の品を作る習慣はない。闘

士は武器を装備せず、鍛え抜かれた肉体で戦うことを誇りにしているほどなのだ。学者気質で塔に引きこもり、戦う時は後方に立つメティスの魔術師とはまるで違う。

接近し格闘術と魔術を組み合わせた闘士の戦法と、魔術の品を活用して戦うメティスの戦法。両方を身に着けたベクターならではの戦い方だ。ほかの誰にも真似できるものではない。いや、もう一人同じ発想をする奴がいた。

「サメの口に自分から突っ込む馬鹿もいれば、狼の口に手を突っ込む馬鹿もいる。俺には全くついてゆけん」

「狼の口とは、一体誰のことだ？」

「お前さんにそっくりの戦い方をする奴だよ」

「ルパートの事か？」

「……もう何でも構わん」

ライスは船の上で完全に寝そべってしまった。痛くなってきた頭を冷やすために、染み込んできた水に顔を突っ込む。だが、木と松脂の混じった嫌なにおいがしたので、すぐに顔を上げる。しかも、船べりに粘液質の塊が張り付いているではないか。大声を張り上げた時にロイドが痰を飛ばしたに違いない。

「よお、ベクター。お前も一緒にどうだ？」

「いや、私はいい」

腹立たしいほどに丁重な返答をするベクター。げんなりしたライスは、痰がライスのほうに流れてゆくよう、両手で水を押しやった。だが痰はしつこく張り付いて取れない。

かくなるうえはベクターを湖に突き落としてやろうかと、本気でライスが考え始めたその時、クルア・ハン地区からいくつもの影が空に飛び上がった。

鳥のはずがない。林立する尖塔よりも遥かに巨大だからだ。霧にかすむ影はコウモリのような翼、蛇のように長い尻尾を持っている。空を飛翔する死神を思わせるシルエット。

「ワイバーンか！」

ライスは表情を引き締めて起き上がる。
「やはり、閉じ込めた怪物が開放されたようだ」
ベクターは落ち着きを払っている。
「他に何を呼び出しておいたんだ」
「オーガが１０、ゴブリンは２００だ」
「まさか、闇狼もその中に入っているのか？」
「８体いる。私が手配したのは2年前だ。増えていることはあっても減っていることはないだろう」
実体を持たない怪物は、扉で閉じられた建物の内部の制圧。ワイバーンは空中、サメは湖上、オーガとゴブリンは地上。王都のあらゆる戦場を想定してそろえたのだろう。ベクターが関っているだけあって無駄のない編成だ。
「怪物を管理していたのは誰だ」
整然と答えていたベクターが言葉に詰まる。
「アイシャ・ディスペリア、だな？」
ベクターの無言と苦渋の表情が、それが真実であることをライスに教えた。驚きはなかった。ルパートがレティシアのスカーフを奪った時から、高度のイリュージョン（幻覚）を使いこなす魔術師の関与を疑っていなかったからだ。
元々、サ・フィールの中で、気配を悟られず魔術を使えるものなど、一人しかいない。
５体のワイバーンは編隊を組んで、南に向かって飛んでゆく。単体で行動するはずの怪物が群れをまっしぐらに同じ方向を目指すなど以上としか言いようがない。
「ベクター、支配の魔術でワイバーン５体を操ることは可能なのか？」
「触媒と立体型魔方陣の助けがあれば可能だが、効果範囲は３０歩が限界だ」
塔からは魔術の範囲外だし、ワイバーンの背に乗っていれば施設が足りない。ほかに考えられることは……。

「マントで発動させるセブン・パワー・インテグレーションならどうだ？」
「その場合でも、あれほどの速度で動き回っていては魔術の効果は期待できない」
「だったら、どうして」
何が起こっているのかまるで見当がつかない。しかし、魔術の常識を覆すのは、いつもエンチャントとイリュージョンの系統である。ベクターに分からないとなれば、ここでも疑わしいのは一人しかいない。証拠こそ不十分なものの、アイシャ・ディスペリアの仕業だとライスは確信していた。
「ワイバーンはサ・フィールに向かっておりますぞ！」
悲壮な声を上げたロイドは、船の穂先を元来た方向へ向けようと旋回を始める。
「ロイド、進路を変えるな。このままクルア・ハンへ向かえ」
「何ですと！」
「俺たちは怪物の湧き出す場所に向かう。クルア・ハンを抑えなければ、どれだけの怪物が市街に飛び出すか見当もつかないんだ。サ・フィールにはアクア・ランスの発動を申請し、臨戦態勢を整えさせる」
ライスの命令口調にロイドはしぶしぶと進路を北東に戻した。ライスは再びイヤリングを取り出して、立て続けに指示を出している。サ・フィールとフェイル・リレイへ警告を出し、王城に連絡を取ったところで舌打ちをした。
「くそ、陛下は謁見の最中だ。ゲイル大臣は、諸国の大使と会議中。王都防衛の要はグラムファーレ家だが、頭首が倒れていて指揮を取る奴がいない」
本来なら、王の親衛隊長が指揮を執ることになるが、その代理であるベクターも王城から離れている。
「防衛の準備は間に合いそうか？」
「フェイル・リレイのナイトロード卿と、サ・フィールのサウザン

ト・アイズ（千の瞳）卿にサ・フィール防衛の判断を仰いだ。今の状況で出来るのはこれが精一杯だ」

よもや王都の内部から襲撃とは、予想外もいいところだ。王と七家に分散している権限が恨めしい。一本化されてない命令系統では、奇襲に対して後手後手に回ってしまう事になる。

嫌な知らせは立て続けにライスの元に届いた。アビシャル・ホルドの塔から、オーガとゴブリンの群れが湧き出したというのである。興奮する護民官に対し、冷静な声ですぐに援軍に行くことを伝えてからライスは南の空を見上げた。

「現状の王都では、サ・フィールは空からの守りが最も堅い場所だ。我々にとって幸いだといえるだろう」

ライスは感情のこもらない声でつぶやいた。ワイバーンは間もなくサ・フィールに到着する。あそこには、レティシアやシンシアがいるのだ。彼女たちは、間違いなく最も危険な任務を自ら引き受けることだろう。

ワイバーンが王城やウィングス通りへ向かってくれと、思わずにはいられなかった。たとえそれが、法の杖として失格であり、王都の被害が大きくなったとしても、それがライスの偽りのない望みだった。

2部ー20　更なる脅威（後書き）

総合評価が７００点を超えたうれしさで一驚に書き上げました。
目に見える成果があるのは、やる気につながりますねえ。

いきなりですが、王都防衛戦の勃発です。
「2章ー30　空気の壁」以来、名前も出てこなかったアクアランスがようやく登場？

見せてもらおうか、魔術都市郡の性能とやらを

などと、つぶやきながら、作者は設定の復習と執筆を急ぎます。

2部－21　地上ＶＳ空中

なんとなく不安を覚えて、シーグは窓の外に目をやった。背後にあるアーチ型の窓からは青空が広がり、カーテンが風にそよいでいる。

「シーグさん！」

正面にいるシンシアの切りつけるような声で、シーグは我に返った。

「食事中にぼんやりするなんて、行儀が悪いですわ」

黒髪の少女は優雅な手つきでナイフを手に、軽蔑の視線を向けてくる。

テーブルには純白の陶器に盛られた肉料理と、大小さまざまのナイフやフォークが置かれている。ナイフもフォークも一本ずつあれば、十分足りるだろうに。

「どうして、ナイフの背に親指を立てるんですか」

叱り付けるような声につられて、自分のナイフとみんなの手元を見比べる。シーグを除く全員が、ナイフの背を人差し指で押さえていた。不吉な予感を感じたので、いつもの癖で戦いの時の持ち方になったのだ。

慌てて持ちかえるが、どうにも持ちにくい。その上、これでは力を入れにくくて仕方がないだろう。

悩んでいるとシンシアは徐々に表情を険しくしていくし、リーザは興味心身で注目している。ここで余計なことを言えば、４倍返しにされるだけだ。シーグはシンシアとリーザの動きを追おうとしたが、二人ともすでに食べ終わっていた。途方にくれていると、レティシアがシーグに目配せをしながら、空の器の中で何かを切る仕草をしてくれた。

シーグは湯気を立てる肉にナイフを立てると簡単に切れた。ソースに浸されて焼かれた肉はやわらかく、焼いた刃物でバターを裂く

ような感覚だった。口に入れると、とろけるような辛さと甘さが口の中に広がる。

当然だが、魔境地帯で取ってきた肉とはぜんぜん違う。恐ろしく硬くて、火が通りにくく、表面が焦げるか生焼けになるかのどちらかだったのだ。天空の水盤の戦いからこちら、美味しいものばかりを食べている。

もっとも、必ずテーブルマナーが付きまとうので神経が磨り減る思いだ。いちいち監視の目を感じるので、一口を食べるにも気を使う。その上、一度に出される料理はホンの一口か二口なのだ。それをわざわざナイフで切って食べるのだから、面倒で仕方がない。

だが、料理自体は本当に美味しい。一皿一皿が少しずつしかないのが残念だ。

「ねえねえ、今の料理は何を使っているの？」

リーザがニコニコしながら聞く。

「グラークが材料をそろえてくれたの。本当は彼が作ってくれるはずだったんだけど、護民官の指揮で忙しいから」

「ハーブや香辛料をたくさん使っているみたいだけど、シンシアちゃんは分かる？」

「わ、私は分かりません」

リーザの問いに、シンシアは早口で言った後に黙り込んでしまった。いつもは、大量の説明が飛び出してくるはずなのにどうしたことだろうか。

「ヨーグルトも使うといっていたわね」

「お皿の模様も素敵だなー」

リーザは楽しそうに皿を眺めている。赤い花の野草が、互いの茎を絡み合わせて皿の縁に円を作っている図柄である。

「それもグラークの手作りよ」

給仕の女性が皿を引いていくのを、リーザは名残惜しそうに見送っている。

「皿を焼くための窯まで自分で作る懲りようなの。しかも、材料の

土もわざわざ外国から仕入れているの。場合によっては染料や水までね」

「お父さんといい勝負だわ」

リーザはいささかうんざりした様子でつぶやいた。

「そうね、2人とも職人肌だから話が弾むかもしれないわね」

シーグの隣に座るレティシアはにこやかに言った。しかし、言葉少ない2人が盛り上がって会話をしている場面などシーグには想像もつかない。シンシアもリーザも微妙な表情を浮かべていた。

食べ終えると他の3人がやっているようにナイフを器の受け皿に置いた。すると、シンシアが自分のナイフに手を伸ばしたので、シーグは思わず逃げ腰になった。ナイフを手に目を糸のように細められると、得体の知れない迫力がある。

「何か？」

「何でもない」

シーグが慌てて首を横に振ると、シンシアは余計に疑わしそうにシーグをにらみつけた。背筋にピリピリがしびれ、窓の外が気になって仕方がないが我慢する。

「……もう少しナイフを長めに持てば、楽になると思います。人差し指と中指だけで持って、残りの指は添えるだけにしてください」

戦闘用のナイフの場合は、親指と腕の返しが重要なのだが、食事用のナイフではまるで違うらしい。だいたい、あれほどやわらかくなった料理をわざわざナイフで切るというのもおかしな話ではないか。そもそも、ナイフには申し訳程度の刃しかついていない。噛み千切るのに何の不自由もないだろうに。テーブルマナーというのは、戦場のあわただしさとは無縁の場所で生まれたに違いない。

「不満でも？」

「あー、いや。奥が深いな、と思ってな」

シンシアは不機嫌にシーグをにらみつける。リーザが必死で笑いをかみ締めている。シンシアはナイフを持って肉を切るしぐさをして見せた。シーグも慌てて真似をする。

「このようにして脇を締めて、なるべく肩を動かさないようにしてください。手を動かす時には姿勢を崩さないように、食べ物を口に運ぶ時には優雅に――」

ガチャンと音が鳴って、シンシアはナイフを皿に落としてしまった。シーグも真似してナイフを落とした。変わった優雅さもあったものだと思っていると、リーザが「ぴっ」と奇妙な叫び後を上げた。

「どうしたの？」

レティシアの問いに答えず、シンシアもリーザも目を丸くして窓の外を見つめている。シーグとレティシアもつられて、後ろを振り返る。しかし、窓には青空が広がっているだけだ。だが、背筋に走る違和感は増してゆく一方だ。

「何もないわよ？」

問いかけると、シンシアとリーザは口をパクパクさせながら、空の広がる窓の外を指差している。だが、風を切る音にシーグは聞き覚えがあった。

「ワイバーンか」

シーグが椅子に立てかけていたシャープネスを手に取ると、窓ギリギリをワイバーンが通り過ぎていった。翼の巻き起こす風圧が部屋の中に突風となって吹き付ける。給仕役の侍女たちが甲高い悲鳴を上げた。リーザは両手を上げて驚いているが、シンシアは椅子を蹴り倒してシーグの横に並んだ。

「ワイバーンは通常単体で活動します。それなのに集団で行動している。更に、王都の監視の目を逃れて現れるのは異常としか言いようがありません」

おびえを含んだ超えながら、シンシアは報告を行った。あちこちから人々の悲鳴が上がる。突如として現れたワイバーンは、サ・フィール全体を混乱に陥れている。部屋の中でも給仕たちがヒステリックな悲鳴を上げており、リーザのそのうちの一人となっている。

「まあ、大変だわ」

ただ一人、レティシアは口に手を当ててのんびりとした声を出し

た。手元にあったナプキンで口元を拭くと、顔色も変えずに立ち上がる。

「皆さん、落ち着いてください」

レティシアは張りのある声を出すと、騒がしい室内に一本の糸が張られたような緊張感が満ちた。部屋の全員がレティシアに注目するころには瞬く間に混乱が収束していた。熟練の兵団でもここまで見事には行くまい。

「クロスボウ隊と魔術師隊を配置し、防空体制を整えます。ミーナは連絡用のイヤリングを取ってきて。レナは塔内の避難の指揮を取って皆を導くように。護民官には、緊急時の持ち場に着かせ住人を非難を最優先にさせなさい」

一人ひとりの顔を見回しながら、レティシアは指示を出してゆく。明確な命令に悲鳴を上げていた給仕達が瞬く間に正気を取り戻してゆく。

「返事が聞こえませんよ」

「は、はい。了解しました」

「大丈夫。ここは空からの攻撃も想定した城砦。建物の中にいる限り安全ですよ」

レティシアがにっこり微笑むと、広間の空気が目に見えて軽くなった。

指示を受けたものはすばやく、しかし落ち着いた様子で部屋を出て行く。皆を見送った後、レティシアはシーグの横に並んで窓辺へと優雅に歩いてくる。すると、北の方角から新たなワイバーンが跳んでくるのが見えた。殺気立った真っ赤な目がシーグとレティシアをにらみつけた。

「レティー姉さま、危険です」

「大丈夫よ、シンシア。窓枠や塔の間隔は、巨大な怪物の襲来を前提に作られていますから。ただ、防空の体勢が整うまではもう少し時間がかかります。シーグさんには、何か良い考えがありますか？」

落ち着いた様子で言った後に、レティシアはシーグを見つめた。

青色の瞳は静かで理知的な光を立て、恐怖などかけらも見られない。さすがはあの糸目鉄面皮の婚約者だけあって、この人も中々尋常ではない。

「俺も戦います」

「ですけど、相手は空中にいるのですよ。剣で戦うなんて無理です」

シンシアは悲壮な声を出して服を引っ張った。

「浮遊の魔術だ。屋根の上でルパートと戦った時に使った魔術、あれを俺にかけられるか？」

「あ……は、はい。大丈夫です」

「すぐに頼む」

シンシアは戸惑いの表情を一瞬浮かべたものの、シーグに背中に触れて魔術の呪文を唱え始めた。シーグはシャープネスを鞘から抜き放って、魔術の完成を待つ。

ワイバーンは巨大なカギ爪で狙いをつけながら、一直線に滑空してくる。あれなら、飛び上がれば届くほどに近くを通ることになる。

「終わりました。ですけど、この魔術は制御が――」

何かを言いかけたシンシアを背に、シーグは窓枠を蹴って空中に飛び出した。すると、落ちるどころか斜め上に向かって上昇し、シーグは上下さかさまになってしまった。

宙釣りになったような状態のシーグに、翼を羽ばたかせ頭上から襲い掛かる。いや地面が下にあるし、シーグは飛び上がった。だから、ワイバーンは上昇していることになるのだ。上下逆さまの感覚に頭がこんがらがってきたので、深く考えるのを止めた。戦士がやるべきことはいつでも一つ。向かい来る敵を倒すことだけである。

ワイバーンはかぎ爪ではなく、長い首を槍のように伸ばしてシーグに向かって襲い掛かって来た。頭の大きさは一抱えほど、攻撃の軌道は直線の突撃。だから、翼や爪による連続攻撃はない。シーグは一瞬にして攻撃すべき場所を見つけ出した。

シーグは両手でシャープネスを構え、体をひねって下段に構えた。ワイバーンの発達した牙の一本一本が見え、翼の羽ばたきがゆっく

りに見える。
　ワイバーンのカギ爪がシーグの額に触れる寸前、体を曲げると同時に下段からの切り上げる一撃――実際には上下逆になるが――を放った。攻撃はシーグの思い描いていた通りにワイバーンのあごから上を跳ね飛ばす。しかし、誤算もあった。シャープネスは紙と変わらずにワイバーンの鱗を裂いてしまったのだ。予測していた切り上げたによる反動がなく、シーグの目前にワイバーンの首筋が迫っている。とっさに体を丸めたが、完全にかわすことは出来なかった。ワイバーンの翼に背中を打たれ、更に上空に突き上げられる。くるくると回転する視界の中で、首を失ったワイバーンがキリモミしながら、さっきまで食事をしていた塔に激突するのが見えた。
　自分自身も塔に向かって落ちてゆく中で、シンシアの悲鳴とレティシアの指示が聞こえる。リーザはきっとひどく取り乱しているのだろうな、と場違いな考えが思い浮かぶ。方向感覚を見失った中で、何とか衝撃だけでもやわらげようと身を丸めて、塔への激突に備えた。
　ドン、という衝撃は予想外にも柔らかだった。何かが体を包み込み、視界が真っ暗になる。しばらく落ちてゆく感覚があり、視界が開けて青空が見える。シーグは絨毯の上に乗っていたのだ。リーザの占いの塔で、囮として空に放った空飛ぶ絨毯である。
　絨毯は頼りなげにはためきながら、塔の石壁に沿ってゆっくりと落ちてゆく。
　上を見上げると、リーザとシンシアが窓からシーグを見下ろしていた。
「リー姉か。助かった」
　感謝の言葉を言うと、リーザは両手であわただしく何かをかき混ぜるような動作をしている。
「どうした？」
　聞いてもリーザはあわあわと、声にならない声を出しながら首を左右に振っている。とにかく思わしくない事態が起こっているらし

い。
　落下をとめようと思ったが、石壁は隙間なくびっしりと積み上げられていてつかまる場所がない。シーグ自身も足に体重を感じず、ふわふわして平衡感覚をつかむのが難しい。シンシアの魔術がまだ有効なのは確かだが、落下がドンドンと速くなってゆく。
「シーグさん！」
　今度はシンシアが窓枠に足を乗せて、身を乗り出した。姿勢が崩れて今にも落ちてきそうだ。
「危ないぞ」
「いいから、受け止めてください」
　シーグの静止の声を聞かず、シンシアは自ら飛び降りてまっしぐらに落ちてきた。スカートを着ているせいで足が引っかかり、体勢を大きく崩した。くるりと一回転してカカトがシーグの頭に迫る。シーグは上体を曲げてシンシアの膝の裏と背中を支えて受け止めた。シンシアが呪文を叫ぶと、じゅうたんの落下がいきなり緩やかになる。そのために、足元がおぼつかずにシーグたちはもつれるようにして絨毯に倒れてしまった。
　はたして、ぬいぐるみ5体を受け止めることの出来る絨毯はシンシアとシーグを包み込んだまま地上まで落下した。だが、6階の高さからの落下である。シンシアの魔術や、リーザの絨毯がなければ即死だったに違いない。

2部ー22　奇襲と強襲と

「大丈夫ですか？」

シンシアが泣き出しそうな表情で覗き込んでくる。実際には背中から落ちたので、少し息が苦しい。なのに、胸の上にシンシアが載っているものだから、余計に苦しくて仕方がない。

シーグがうなずいてみせると、シンシアはホッとため息をついて肩を落とした。どいてくれと目で訴えたが、今度はうつむいたまま動かない。よく見ると、落下するシンシアを支えたせいでスカートがめくれあがっている。しかも、その中にシーグが手を突っ込んでいる状況なのだ。相手は、手を触れただけで泣き出す少女なのだ。シーグは血の気が引いていく思いがした。

「バカ……です」

シンシアはポツリとつぶやいた後に、苛立たしげに腕を振り下ろした。そこがみぞおちだったので、シーグは目の前が一瞬かすんでしまった。

「あなたは大バカの間抜けの愚か者です。いきなり塔から飛び出すなんて何を考えているんですか！　考えなしのゴブリンよりも輪をかけて馬鹿阿呆ですわ。彼らは少なくとも、恐怖で危険を知っていますものね。オーガの無謀と餌に群がるハエの浅ましさが重なれば、あなたみたいに無茶苦茶で人の迷惑を顧みない行動をするようになるんでしょうね」

嵐のようにまくし立てるシンシアに対して、シーグは苦悶の声を押し殺すだけで精一杯だった。その上、あまりの語彙の多さに頭がついていかなかった。半分ほどだが言っていることが理解できてくると、シーグは腹が立つよりも感心してしまった。

「浮遊の魔術を誰が制御していると思っているんですか」

「……俺じゃあない」

「分かりきったことを言わないでください！」

聞いたのはシンシアではないか、とシーグは心の中でぼやいた。
「それなのにいきなり窓の外に飛び出すなんて、無茶苦茶なことしないでください。ワイバーンに跳ね飛ばされたのが塔の反対側でも、リー姉様の絨毯がなくても、魔術の効果範囲から外れるところでしたわ。少しは考えて行動してください。近ければ強く、遠ければ弱い。剣も魔術も同じだと、そう言ったのはあなたですよ」
一挙にまくし立てた後、顔を真っ赤にしたまま息を乱している。
シーグは今のうちにスカートから手を抜こうとゆっくり移動させていると、シンシアがピクリと全身を震わせた。そして、シーグの胸を踏んで慌てて飛び下がった後に、ギロリと怖い目つきでにらんでくる。一方、シーグは息が出来なくなって、体を折り曲げていた。徐々に顔を赤くなってゆき、泣き出すかと思ったシンシアだが急に空を見上げて表情を引き締める。シーグも背筋の古傷にしびれる感触があって、無理やり体を起こした。案の定、二体目のワイバーンが上空でこちらに向かって方向を変えるために旋回している。
シーグは壁を支えにして何とか立ち上がる。シンシアが心配そうに背中を支えてくれた。
「怪我はないんですか？」
「大丈夫……」
じゃない、と言いたい。実際にはワイバーンの攻撃よりも、シンシアに踏まれた胸と、殴られた腹の方が痛い。
「浮遊の魔術はどのくらいまでなら制御できるんだ？」
「私を中心に２０歩の距離です。落下速度を抑えると同時に、高く飛び上がることが出来ます。その代わりに不安定になりますから、剣を振るときには力んでは回転してしまいます。歩くならともかく、走るほどに強く踏みしめれば浮き上がって体勢を崩してしまいます」
つまり、効果範囲は地上から建物の３階までの高さ。それだけあれば、ワイバーンと戦うのに不自由はない。足元がふわふわと落ち着かないのは困るが、シャープネスがあればなんとかなる。
「ベクターや、もどきはずいぶんと好き勝手に飛び回っていたが、

ああいう風に出来ないのか？」
「あの方達は繊細な魔術の制御が得意ですから。それに、魔術と体勢の調整を一人でやっているから安定するんです。自分で魔術を使用しない限り、不安定なままです」
シンシアはいつもの調子を取り戻して、整然とした口調になっていた。魔術と体勢の制御を共にしなくてはならない。並の人間に出来ない理由がシーグにはようやく分かった。
「シーグさん、建物の中に入れます。避難しましょう」
壁には小さな勝手口と、上半身くらいしか出ない窓があった。周囲は開けた庭になっており、木もまばらにしか植わっていない。ワイバーンが滑空して襲い掛かるには十分な広さがある。
「分かった。シンシアは建物中に入って、魔術の制御をしてくれ」
「逃げないのですか？」
シンシアは唖然としてシーグを見ている。
「空を飛んでいる奴が、わざわざ向こうからやってくるんだからな」
シーグは横目で運河の方を見た。別のワイバーンが停泊した船に攻撃をしたせいで、帆が破れマストが倒れてゆく。人々の悲鳴が耳に痛い。
魔術の雷撃や矢がワイバーンに向かって飛んでいるが、たいした成果を上げていないようだ。
「だから、倒せる時に倒す」
シーグの言葉にシンシアは真剣にうなずいた。
「魔術の制御は視線に乗せて行います。だから、視線から外れれば、まっしぐらに落下するのです。だから、私もシーグさんの横にいます」
シンシアの言葉にシーグは閃くことがあった。
「いや、だからこそ建物の中に避難してくれ。窓から魔術の制御をするんだ。俺が見えなくなっても、外に出たり身を乗り出したりしないでくれ。いいな？」
シンシアは一瞬キョトンとしたが、迫り来るワイバーンを横目で

見てうなずくと、扉を開けて建物の中に入っていった。
シーグが建物から15歩の距離に立つと、ワイバーンは翼を広げて突撃の角度を調整した。塔の壁を掠めるように滑空して、カギ爪でシーグをかっさらうつもりに違いない。怪物の行動はいつでも予測しやすい。
ワイバーンを迎え撃つために剣を両手で持ち、下段に構えた。天空の水盤の時とよく似た状況だ。しかし、サフィリアを背にかばっているわけではなく、シャープネスと魔術の助けがある。
恐れることなど何もない。
ワイバーンはゴウゴウと風切りの音を立てながら、シーグに向かってまっしぐらに舞い降りてくる。ワイバーンの二本のカギ爪が迫る。
シーグは膝を折り曲げ全力で斜め後ろに飛び下がると同時に、下段から切り上げる一撃を放った。
シャープネスはやすやすとワイバーンのカギ爪を切断し、翼の根元を切り裂いていった。鉄と同じほども硬いといわれているワイバーンの鱗も、シャープネスの前には羊皮紙と変わるところはない。足と翼を失ったワイバーンは大きく体勢を崩して庭に落下してしまった。
一方、シーグは塔の二階の窓枠につかまっていた。シンシアの視線から外れたことで、立ち上がろうともがくワイバーンめがけて、シーグは飛び降りた。
空を飛ぶ敵には頭上の敵に対する守りがまるでなっていない。切ってくれといわんばかりに伸びる首に、シーグは大上段に構えたシャープネスを、情け容赦なく叩きつけた。ワイバーンの首は宙を舞い、全身を硬直させた後にゆっくりと倒れていった。
シーグは剣を振り下ろして、血を払うとシャープネスを鞘に収める。エナメルの鞘がキン、水晶をはじいたような軽い音を立てた。
背後でバタンと扉を開ける音がして、シンシアが駆け足でやってきた。

「私、感動しました」
シンシアは賞賛の表情を浮かべ、目を輝かせてシーグを見上げている。聡い少女はシーグが何をしたのか一瞬のうちに気づいていたのだ。
高く飛び上がるためには魔術の力を借りて、落下の勢いを生かすために魔術を解除する。術者の視線からわざと外れることで、魔術の切り替えを理想のタイミングで行ったのだ。
「あ、ああ」
だが、シーグは気まずそうに視線をそらしてしまった。さっき、スカートの中に手を突っ込んだことを思い出してほしくなかったからだ。
「どうしました？」
「あー、いや、なんだ……」
気まずさから思わず口に出た意味不明な言葉に、シンシアは不信な目つきへと変化していく。
「そうだ、ワイバーン！」
心の中を読まれそうな気がして、シーグは慌てて話題を変えた。
シンシアは「そうだ？」と、疑わしい様子でつぶやいた。
「まだ他にもワイバーンは残っている。こんなことをしている暇はなかったんだ」
「あ、はい。これから、どうするべきでしょうか？」
シンシアは元気よくうなずいて、指示を待っている。純粋なまでの態度に、シーグは後ろめたささえ感じた。
「とにかく、川のほうに出て――」
再び背筋にしびれる感覚があって、シーグはシャープネスの柄に手を置いた。シンシアも周囲に油断なく視線を飛ばしている。
「魔術か？」
「はい、サモニングの系統、空間操作の属性。テレポートで何かがここに出現しようとしています」
「どうすればいい？」

「転移個体は一つ。出現場所はシーグさんから左手に１０歩の位置、５つ数えた後に出現です」
シンシアはスラスラとシーグに報告した。なるほど、ここまで筒抜けならばテレポートによる不意打ちなど不可能だ。抜き打ちにシンシアの示した場所に切りつけられるように、シーグは腰だめに構えた。
「え？　え？　え？」
シンシアは急にキョロキョロと周囲を落ち着きなく見回した。
「サ、サモニングの系統、空間操作の属性。転移個体１０以上、私たちの２０歩周囲に散在しています！」
「なんだって？」
「わ、わわ」
シンシアはあたふたとペンダントを取り出している。しかし、軌道を操作できるシンシアの雷撃でもここまで多数の対象を同時に打ち抜けるはずがない。
シーグは自分の浅はかさを呪った。テレポートによる奇襲は不可能と、サフィリアが言ったことを鵜呑みにしていたのだ。少数による奇襲は無理でも、圧倒的な数で行う強襲ならば可能なのだ。
魔術師のシンシアさえも面食らっているので、心理的にも見事な奇襲といえる。転移してくるものが人間でも、それ以外でも、対応など出来るはずは無い。

2部ー23　ホイホイホイホイ

シンシアが慌てて手を滑らせたペンダントを空中で掴み取り、シンシアを横抱きにした。扉を蹴り飛ばし建物の中に飛び込む。ここなら、相手が多数であろうとも対応できるし、送られてきたものが爆発物だろうが、溶けた鉛だろうが関係ない。背後には塔の奥に続く扉もある。退路を確保できているのも理想的だ。

「出現します」

シーグは扉の外に神経を集中させた。しかし、何の変化も起こらなかった。

「不発か」

「いえ、もう転移してきました。ですけど、見えません」

「透明化したり、幻術の可能性は？」

「すでに探知の魔術も併用しています」

「だけど、幻術は探知をだますんだろ？」

「空間を渡る魔術は、発動と維持と終了のすべてに術者に多大な負担を強います。守りを固めるにはトリプルステイシスの併用が必要です。もっとも、例外が一人だけいますが」

「よし、逃げよう」

「え？」

シーグが即断すると、シンシアは目を丸くした。

「何も無いなら警戒しても無駄だ。何かあるなら一箇所に止まれば的になる。送られてきたのが毒ガスや危険な生き物の類や、もっと厄介な相手なら、距離をおくことが有効じゃないのか？」

シンシアの表情が険しくなった。シーグと同じく、厄介な相手としてアイシャ・ディスペリアを連想したからだろう。

「はい。確かにそのとおりです。魔術は術者と対象者が一箇所に止まることで効果が高まりますから」

シンシアを抱えたまま、シーグは建物の奥へと向かった。扉を蹴

り開けて、2階へと続く階段駆け足で昇ってゆく。と、シーグは反射的にシャープネスを鞘から抜き放って構えた。
「きゃっ」
と、鋭く小さな声。剣を構えた時にシンシアの眼前に刃をかざしてしまったのだ。
「あ……」
「気になさらずに。敵ですね？」
シンシアは深刻な口調で問いかけてくる。横抱きにされたままなので、なんだか緊張感がなかった。
「次の部屋、扉の向こう側に何かがいる」
シーグは確信を持てずにつぶやきながら、シンシアをおろす。地に足をつけるときに、何気なくシーグの手をつかむ――正確には自分のフィーリアを取り返した――のでシーグはギョッとした。しかも、よくよく考えれば、横抱きにするというのは、相当微妙な位置に触れていることになるではないか。
甲高い悲鳴を覚悟したが、シンシアは気づいた様子はなく前方にある木の扉をにらみつけている。
「魔術の気配を隠匿しているものがいます。イリュージョン、サモニング、プロテクションによるトリプル・ステイシス。幻術で自らの姿と、空間の穴を隠しているのでしょう」
「つまり、どういうことだ？」
「異空間の陰に隠れて、半分体を出している状態ですわ。防御と隠蔽を兼ね備え、いつでも逃げられるようにしているのでしょう」
「部屋の広さは？」
「縦横に１０歩の四角、高さはシーグさんの背丈の倍ほどです」
「戦うとすれば、どうする？」
シンシアは口元に指を持っていった。カリッと小さな音がしたのは、爪をかんだからだろう。
「幻術を併用したトリプルステイシスですから、魔術の気配を感じても１０歩四方のどこかにいる事しか特定はできません。背後を取

られても私は気づかないでしょう」
「何があっても、絶対に分からないのか？」
「相手がわすかでも動くか、こちらの攻撃が命中すれば見えるかもしれません。術者の力量しだいです」
しかも、トリプルステイシスはディスペル（解除）の魔術の効果が低い。ただし、魔術のバランスを取るのが困難だったはずだ。
「俺ならどうだ」
あ、と口を小さく開いた後、シンシアは忙しく視線を泳がせた。
「はい、シーグさんなら魔術のひずみが見えるかもしれません。あらかじめディテクトの魔術をかけますから、シャープネスで色彩のひずみを切り裂いてください。空間系の系統は不安定ですから、魔術を崩壊させることは簡単です」
「逃げられないのか？」
「魔術師にとってテレポートの追跡は容易です。異空間から引きずり出すことも出来ますし、魔術が解除されたのなら空間の狭間に入り込んで二度を帰ってこれなくすることもできます」
ぞっとするようなことをシンシアは冷淡に言い放った。そして、金の鎖を指に絡めてシーグを横目で一瞥する。
「ディテクトの魔術をシーグさんにかけ、シャープネスで攻撃するのが最良と思います」
「頼む」
シンシアが腕に手を触れて、魔力探知の魔術をシーグにかけてくれた。シャープネスが半透明な光をまとい始め、魔術が正確に働いていることを知らせてくれた。その間に、シーグには術者を動かす方法が思いついていた。
「先制攻撃だ。部屋の右と中央は俺に任せろ。シンシアは左側、膝の高さに雷撃を撃ってくれ。できるか」
「……なるほど、名案ですね」
軽く目が合っただけでシンシアはシーグの意図を理解してくれた。
「いくぞ」

シーグは小声でつぶやくと、扉に向かって剣を縦に一閃した。後に切断した扉の右半分を蹴り飛ばす。扉の片端が回転しながら部屋の右隅に向かって飛んでゆく。シーグは立て続けにベルトのナイフを3本引き抜くと、中央に向かって投げつけた。部屋の左隅にはシンシアのフィーリアが雷撃を帯びて飛ぶ。

三様の攻撃は、部屋を水平にまんべんなく払ってゆく。そして、ナイフのうち2本が何も無い空間で跳ね返った。空中に鏡に反射したような色とりどりの光が舞う。縦長のシルエットは間違いなく人のものだ。

「部屋の中央だ！」

シンシアが手を左から右へ横なぎすると、急転回した雷撃が頭の高さを飛んでゆく。だから、シーグは地にこする程に前かがみになり、両手でシャープネスを構えた。狙うは足元、3色の光が交差する場所だ。シーグには色がよくわからないが、サモニング（召還）の橙と、イリュージョン（幻覚）の藍、プロテクション（防護）の緑のはずである。

色の隙間にシャープネスを突きこむと、色ガラスが砕けたように光が一斉に散らばった。水晶の鐘を打ち鳴らしたようなキィィーンという音が部屋に満ちる。シンシアが右腕を振り下ろすと、黄金の輪は急降下する。

砕けた色ガラスのように光が散ってゆく。現れた人を見てシーグとシンシアは、予想外の事態に息を呑んだ。

「ジェイナス老師！」

「校長！」

素っ頓狂な悲鳴と共に、シーグは下段からの一撃を止め、シンシアは自分の左腕で右腕の動きを抑える。

「ヒョッホォー」

一方、胸まで伸びるヒゲをリボンを結んだ老人は、愉快な叫び声を出しながら太陽を浴びた霞のように姿がかき消えていったのである。

「今のはアイシャが化けていたのか？」
シンシアは返事の変わりに青ざめた顔を何度も横に振る。
「ナイトロード卿のフィーリアは気配が独特です。間違えるはずありません」
「シャープネスで空間を切り裂いて助けられないか」
「出来るはずがないでしょう！　常識で考えてください」
「その常識が俺には分からん。剣で何が出来る？」
「何も出来ません」
「だったら、早く魔術で何とかしてくれ！」
シーグは勢い良くシンシアに言い放つ。
「対応策が考え付いたなら、すでにやっています。私はそんなノロマじゃありません！」
シンシアはひるまず、背伸びして至近距離からシーグを怒鳴りつけた。
「だったら、放っておくつもりか」
「今、悩んでいるんです！　考えているんです！　一生懸命なんです！　魔術は呪文も触媒も必要で剣なんかとは違うんです！　何でもかんでもホイホイホイホイホイホイできるはずがないでしょう。物を知らないんですからちょっとは謙虚さと良識を持って発言したらどうですか！」
シンシアはものすごい早口でまくし立てた。
「な、な……」
なんだか全人格を否定された気がして、シーグは言葉に詰まった。
「いちいちいちいちやかましく叫んだからって解決するはず無いでしょう。何も思いつかない上に、何も出来ないんだからちょっとは静かにして黙っておいてください！」
「……ううぅ」
シーグを完封したシンシアは、すばやくイヤリングを取り出して耳に当てる。アビシャルホルドの塔でライスと連絡を取り合っていたイヤリングだ。

「あー、そう慌てんでもいいよ」
「うるさい！」
シンシアは甲高い声で怒鳴った。
「そう入ってもなあ。ライスは忙しいので、後にしたほうが良いぞ」
「何を悠長な――」
声の主に反撃しようとした窓を見たシンシアは、ぽかんと口を開けた。ナイトロード卿ジェイナス・マードックが窓枠に座っていたからだ。
「若きことは美しく、仲良きことは微笑ましいものよ。怒鳴りあう姿さえも、くたびれた老人にはまぶしく見えるわい」
ホーホッホッホと、ほのぼのとした笑い声をジェイナスは上げる。もっとも、シーグはロディウスの馬鹿にした笑い方を思い出して不快になった。
「こ、校長。どうして」
「いやいや、中々にすさまじい連携攻撃であった。ワシでなければ、今頃異空間の中でぺしゃんこになっておるぞ」
ジェイナスは両手のひらをぴしゃりと叩き、楽しそうに答えた。
「平気なんですか？」
「異空間に引きずりこまれたがな。ナイトロードの秘儀のおかげですぐに戻ってこれた。最も場所がメティスでなければ無理だったのぉ」
「そういうことを聞いているんじゃありません！　なんだって、私たちをだますようなことをしたんですか！」
シンシアは噛み付かんばかりの勢いで、老人に詰め寄る。ジェイナスは落ち着けと両手で意思表示をしながら、シーグに助けを求める視線を送る。しかし、腹立たしいのはシーグも同じだったので、切りつけるような視線を送った。
「落ち着いておくれ、ちょっとした試験じゃよ」
ジェイナスは気まずそうに言い訳をする。だが、シーグは鼻で笑いたい気分になった。教えの名の下になんでも正当化しようとする

のは、ふざけているとしか思えない。シンシアも納得していないようで、全身でそっぽを向いている。唇を尖らせて頬を膨らませている姿は、年相応の少女のものだった。それがなんだか笑えて、表情が緩んでいくのをシーグは止められなかった。

「どうしてシーグさんがニヤニヤするんですか！」

シンシアが怒鳴り声を上げる。真っ赤な肉団子のように顔を膨らませてゆくシンシアを見ているうちに、ジェイナスへの怒りは消えていった。ますますムキになるシンシアから目をそらし、笑いを抑えることが大変だったからだ。

その時、カツカツと調子のずれた足音が階上から聞こえてきた。足音だけなのに、やけに危なっかしい。一段飛ばしに降りているかと思うと、ガッという鋭い音の後にバタバタと慌しい靴音が続く。足音から躓いたのだと分かったのだろう、シンシアが肩をすくめた。

最後に3階に続く扉がドン、とくぐもった音を立てる。それも、扉の取っ手ではなく蝶番の方からだ。「いったー」という恨めしそうな声と共に扉がゆっくりと開く。うつむきながら足を引きずり、腕を押さえて現れたのは予想通りにリーザだった。戦った後の誰よりも満身創痍にみえるのは予想外だったが。

「シンシアちゃん、大丈夫だった？　怪我は無い？」

「はい。平気で――」

返事をする間も与えず、リーザは覆いかぶさるように小柄な少女に抱きついた。リーザの胸に埋まったシンシアはもごもごと何かを言っている。

「シー坊も平気なの？」

「怪我一つ無いぞ」

「良かったぁー」

リーザは半泣きで半笑いの状態になったまま、体中の息を吐き出すような。体中の骨がなくなったように、ずるずると床に崩れてゆく。その代わりに、シンシアがジタバタと暴れ始めた。リーザから離れようとしているもがいているだけと思ったが、指がカギ状に曲

がり苦しそうに宙を掻いている。
「おい、シンシアが溺れているぞ」
「きゃー！」
リーザは素っ頓狂な悲鳴を上げてシンシアを離す。解放された少女はふらふらになっていて、切りそろえた黒髪が跳ね上がっている。ぼんやりした目つきでぺたりと座り込んだ。
「シンシアちゃん、シンシアちゃん」
リーザは頭上の羽虫を追い払うように、両手を振り回している。
「ごめんね、ごめんね、私ったら――」
「平気ですから、本当に何もありませんから」
ゴホゴホと咳き込むシンシアを見て、リーザは涙を浮かべ始める。それを見たシンシアは慌てて立ち上がった。
「ほら、大丈夫ですよ。私は元気ですから」
立ち上がったシンシアは両手を広げたり、小鳥のように跳ねながらリーザをあやしている。これでは、どちらが年上か分からない。
「さてと、シーグ君」
背後からいきなり声がした。ぎょっとして振り返ると、ジェイナスがヒゲを結んだリボンを手でいじっていた。
「ワイバーンを倒しにいこうと思うのだが、協力を頼んでいいかね？」
「ちょっと待ってください。サ・フィールはアクアランスで防空体勢が整っているはずです。これ以上シーグさんが無茶苦茶をする必要はありません」
「無茶……苦茶？」
前半だけならまだしも、後半はひどい言い方だとシーグは思った。
「その件だがね。アクアランスの発射は凍結中だ」
「なぜです？」
「通りや運河の避難が終わっていない。しかも、ワイバーンが飛び回っているせいで、避難は遅れる一方だ。今、アクアランスを使えば、住人に被害が出てしまう。ライスがこの程度のことを見落とす

とは……はてさて」
ジェイナスは含みのある口調でぼやいた。
魔術による防衛は、奇襲攻撃に対して抵抗力がない。それはこの数日間で、魔術と戦ったシーグが身をもって知った事だ。混乱の中で使われる魔術が、味方を傷つける結果につながる事も。
「俺には何が出来ますか」
「君には最も危険な役目を引き付けてもらうよ」
「出来ることはなんだってやります」
「魔術師にそういう言い方は危険だな。ロディウス老師でこりていないのかな？」
いやな事を思い出してシーグがひるむ。ジェイナスはロディウスそっくりにクスクスと笑う。
「ロディウス老師の訓練は実戦以上に危険だからね。それを切り抜けた君の手腕に期待するとしようか」
意地の悪い言葉に、シーグはワイバーン以上の脅威を感じずにいられなかった。

外伝　死の道を行く－１　雄鶏以上、番犬未満（前書き）

割り込み投稿機能がついたので、外伝もこちらに統合します。
外伝に通し番号をふっていないのは、時系列に並べようと考えているからです。
とはいうものの、更新が遅くなるのは勘弁してください。

この話は、本編一章の少し前になります。
完結までは２万８０００時程度。原稿用紙で約７０枚となります。

外伝　死の道を行く－1　雄鶏以上、番犬未満

シーグは、しつこく追いかけてくる怪物にずっと前から気がついていた。

怪物は2本足で歩き、子どもほどの背丈で小太り。泥にまみれた茶色の肌。ブタのような大きな鼻としわだらけの顔に醜悪な表情を浮かべ、石を削って作った粗末なナイフを持っている。

ゴブリンだ。

それでも、シーグは気に病むことはなく、歩く速度を変えることもなかった。なぜなら、ここは『死の道』と呼ばれる魔境地帯だからだ。

街道の脇に生える木々は苦しみにのたうつ様にねじれ、木の葉は乾いた血に似た異様な色をしている。

雪解けは始まったばかりであり、冬の分厚い鉛色の雲はまだ晴れていない。更に灰色の瘴気が霧のようにたち込めているので、昼だというのに夜のように暗い。そのために、腹をすかせた怪物が徘徊しているのは分かりきったことだ。

3体のゴブリンは木や薮の陰に隠れながらついて来る。シーグが目を合わせると「ギャッ」と耳障りな悲鳴を上げて一目散に逃げていった。

「そんなに怖いのか」

少年はおさまりの悪い黒髪を掻きながらつぶやいた。外見でなめられる事はあっても、恐れられる事は初めてだったからだ。

シーグは16歳。だが、童顔のために実際の年齢よりもずっと幼く見られる。背丈は人並みだが、細身の体つきのために遠めには女性に間違われる事も数知れず。現在、身につけている武装も薄手の皮鎧に細身の剣や短剣だけである。

そのため、女の武装だと言われ、物笑いの種にされる事など当たり前だった。彼の師匠であるロディウスも、事あるごとに『ガリッ

ポソ』のシーグと笑い飛ばしている。
だが、別に威張るほどのことでもなかった。なぜなら、5体に増えたゴブリンは急に大胆になって、茂みの陰から出てきたからだ。
ゴブリンは1体ずつならいきり立った雄鶏にも逃げ出すくらいに意気地がない。10体以下なら、犬が吠え立てただけで逃げてゆく。臆病なので、絶対に勝てると思う相手にしか襲い掛かることはないのだ。しかし、やたらと仲間を呼んで数を増やす。そして、数が増えるほどの凶暴に、残忍に、好戦的になっていく。
シーグは立ち止まってゴブリンを正面から睨みつける。ゴブリンたちは一瞬戸惑うそぶりを見せた。だが、後ろに仲間がいるのを確認すると、いやらしい笑みを浮かべて更に近づいてくる。
シーグは柄に手をやって剣を抜く真似をする。ゴブリンはようやく立ち止まった。しかし、ニヤニヤと勝ち誇ったような笑い顔のままだ。
「つまり俺は雄鶏以上、番犬未満ってわけか」
大柄の戦士なら20体。馬に乗った完全武装の騎士なら30体。歴戦の勇者ならば、50体からのゴブリンをひと睨みで追い払うことが出来るという。
どうやら誰もが言うとおりに、自分は戦士にはまるで向いていないらしい。ゴブリンにまでそれを確認されたようで気が重くなった。
だが、足取りまで重くするわけにはゆかない。シーグはゴブリンのことなど気にせずに、道を急ぐ事にした。

＊

枯れた木々の枝葉から重苦しい色の空が広がる。鉛色の分厚い雲に向かってまっすぐに伸びる一枚岩の柱は、空を貫く剣のようだ。まだ相当距離があるはずだが、不思議な事に濁った瘴気の向こうに霞んで見える。
星見の座ガレフ。

かつて、ここが大陸で最も豊かな国であった時代。王国の占星術師が天に近づくために昇り、未来の吉兆を占った場所である。

最もそれは過去の話だ。今ではレイザークは滅び、王都は魔境に沈んだ。国土は疲弊して怪物がはびこり、街道を通る旅人も絶えて久しい。立ち込めた瘴気で木々は枯れ、風は淀んでいる。レイザークの住人はもはや怪物だけとなったのだ。

魔境の瘴気に包まれながらも、遠くから石柱が見えるのは不思議と言うしかない。無念を訴える死者の怨念がそうさせるのだと噂されている

しばらく進むとシーグの前に3体のゴブリンが現れた。こっちは、木を削って作っただけの棍棒を持っている。

背後の5体は待っていましたとばかりに、石の短剣を掲げてにじり寄ってきた。

シーグは剣を鞘走らせた。決闘に挑む騎士のように大仰に抜いて、切っ先を向ける。しかし、ゴブリン達は鼻で笑うだけであった。

「こうみえても、犬よりは強いんだぞ」

シーグはぼやきながら刀身を見つめた。ショートソードと呼ばれる小ぶりの剣。鎧が発達し騎馬戦術が主となった今では、時代遅れとなりつつある。魔術師が魔力を武具に与えるようになったのもそれに拍車をかけた。

その軽さと扱いやすさから村人たちが護身用にもち、騎士などは予備の武器として持つ事がある。だが、戦士を生業とするものが持つ武器としては貧弱すぎる。

「まあ、仕方がないけどな」

シーグは独り言をつぶやいて、剣を鞘にしまった。これにはさすがのゴブリンも意外な表情を浮かべた。シーグはなんでもないかのように、大またに歩み寄る。奇妙な出来事を目の当たりにして、3体のゴブリンはギョッとしてお互いに目配せをする。背後の5体のゴブリンなどは、動きを取れないでいた。

怪物の混乱などお構いしなしに、シーグはゴブリンの正面に立っ

た。3体では番犬未満のシーグと戦うにはためらいがあるらしい。お互いに押し合いへしあいするうちに、一番小柄な一体がシーグめがけて躓きながら突撃してきた。

無様な攻撃をよけざまに、シーグは足を引っ掛けてゴブリンを転ばせた。2体となってしまったゴブリンは更に混乱している。そして、丁度中間の大きさのゴブリンが破れかぶれに武器を振り上げてきた。シーグはそのゴブリンの攻撃をかわすと、前かがみになったゴブリンの肩に足を乗せて軽業師のように直立する。

すると、一番大柄なゴブリンが目をつぶったまま突撃してきた。シーグはゴブリンの肩を踏み台にしてゴブリンを飛び越す。だが、ゴブリンは、そのまま棍棒の一撃を振り下ろした。

ゴブリンの脳天がガンと鈍い音を鳴り響かせた。かくして、3体のゴブリンはシーグが手を出すまでもなくお互いにもみ合い、折り重なって倒れた。

仲間に攻撃を加えたゴブリンは、追いついてきた5体のゴブリンに襲い掛かられていた。仲間を傷つけた報いに違いない。

ゴブリンにも一応の掟があるのだ。例えば、『仲間が殴られたら、とにかく殴り返せ』。だが、その相手が仲間であっても例外ではないらしい。

ゴブリン同士の制裁にも乱闘にも興味がなかったので、シーグは無視した。背後の乱闘騒ぎはずいぶんと長く続いていた。ひょっとしたら、制裁のために殴ったゴブリンも、掟の対象となったのかもしれない。

「ゴブリンは1体見れば、３００体はいるって話だな。見たのが8体だから……この一帯には２２００匹……あれ？」

シーグは歩みを止めて首をひねった。何かがおかしい。

「あ、そうか。1体見れば３０体だったな。桁をひとつ間違えていたんだ」

いくらゴブリンとはいえ、たったの8体が小都市の人口に匹敵する数になるはずがない。自分のうっかりを恥ずかしく思いながら、

シーグはガレフ目指して歩を進める。しばらくすると、再び周囲にゴブリンの気配が満ち始めた。今度は更に数を増やし、茂みに潜んで様子を伺っている。

茂みの影から見えるゴブリンのうち、3体は傷だらけだった。間違いなく、さっきの乱闘に参加していたゴブリンに違いない。だが、警戒心が増した分だけゴブリンは余計に仲間を呼んできている。そう考えている間に更に12体に増えた。

「番犬以上には昇格か」

だからといって喜んでいる場合ではない。目指すガレフはまだ遠くゴブリンの数はまだまだ増えていくに違いない。

ゴブリンは手当たりしだいなんでも食べる。木の皮でも腐った葉でもお構いなしだ。更に食べ物を求めて、そこいらじゅうに穴を掘り、何でもかんでもひっくり返す。そのため街道の石畳は剥がれ、腐敗臭が立ち上る水溜りがあちこちに出来るのだ。

そして、腐臭と湿気と瘴気に満ちた魔境が出来上がる。ゴブリンは自分達の好みに地形ごと作り変えるのである。

ゴブリンの数は20体になっていた。再び武器を構えて、警戒しながら近寄ってくる。囮とばかりに小さな体格のゴブリンが先頭に立たされていた。

「もう一度、散らすかな」

シーグは足元に落ちている石を拾い上げ、真上に投げつけた。ゴブリン達はそろって何事かと空を飛んでゆく石を見上げる。その隙にシーグは更に2つの大きな石と2つの小石を拾って、大きな石を斜め上に投げつけた。

最初に、真上に投げた石がカチンと音を立てて落ちた。小さなゴブリンなどはそれだけで肩をびくつかせる。次に斜めに投げた石が、木の枝葉を貫いて、最も大柄なゴブリンの頭に立て続けに直撃した。大柄なゴブリン――おそらくこの集団のボス――は不機嫌なうなり声を上げ、疑いの視線を仲間に向ける。周囲にいるゴブリンは「俺ではない」と言いたげに、首を横に振っている。

ゴブリンたち全部の視線が離れた瞬間、シーグは親指をはじいて、小石を大柄なゴブリンの後頭部に直撃させた。今度は怒声を上げるゴブリン。人間なら、「誰だ！」とか「ふざけるな！」とか言っているに違いない。

その隙に足音を忍ばせて、シーグはこっそりと移動を開始した。幸いなことに怒り狂う仲間に気を取られて、誰もシーグの事を気にかけていない。茂みの影に完全に隠れたところで、シーグは拳大の石をつかんだ。そして全身のばねを生かし、ボス目掛けて思い切り投げつける。

狙いは外れず、ガンという鈍い音と「グエッ」というううめき声が重なった。ボスはともかく、他の数体のゴブリンはシーグが茂みから石を投げたことに気づいており、ボスに向かって何かしきりに声を上げている。しかし、ボスは聞く耳を持たなかった。

「ガーー！」

と、怪物じみた。いや、怪物らしい怒号を響かせ一番手近にいるゴブリンを真っ先に殴り飛ばした。次に、余計な報告をしたゴブリンが蹴り飛ばされる。だが、それでもなおボスの怒りは収まっていない。

シーグはそこまで確認すると、全力でそこから逃げ出した。背後からは先ほどよりも何倍も大きな騒音と悲鳴が、ずっと長い時間続いていた。

逃げる途中、何体かのゴブリンを見たがシーグよりも騒乱のほうに気を取られて、追いかけてこなかった。だが、しばらくすると騒ぎが更に大きくなっていた。おそらく、興味本位で近づいてきたゴブリンも、手当たりしだいに当り散らされたに違いない。

シーグは魔境の奥地へと進んだ。

外伝　死の道を行く－2　死行は唐突に

＊

魔境の森を奥へと進みながら、シーグは早朝の事を考えていた。
思い返すと、あまりの理不尽さに腹が立ってくる。森から帰ってきた時、師匠であるロディウスに『死行開始』と告げられたのだった。

森は腹をすかせた獣がうろつき、慣れた者でさえ迷う事がある危険な場所だ。大人が恐ろしげに語る童話の多くは、森の危険から子どもたちを遠ざけようという試みに他ならない。
詩人や大人たちが魔境地帯の恐ろしさを語るとき、レイザークの魔境地帯の話を脚色して引き合いに出す。
ロディウスの隠れ家は最大の魔境、水晶連山の麓にあった。ここには、物語に現れる恐ろしい怪物が現実に存在する。
そこから食料を取ってくるのが、師から言い渡されたシーグの日課である。豊かであるが故に、森は危険だ。餌を求めて複数の怪物が縄張りを取り合って、常に小競り合いをしているためである。
以前などは眠りから覚めたドラゴンが空を横切っていって、森の中がシンと静まり返った事があった。しばらくの間は何処からか現れたゴブリンが我が物顔で森をうろつきまわっていた。しかしそのゴブリン達は、戻ってきたワイバーンに追い散らされてどこかへ姿を消す。
ワイバーンは『空の死神』という異名を持った恐ろしい怪物である。だから、ワイバーンの住処の周辺に住む事を他の怪物たちは好

まない。

そして、ワイバーンは大型の獲物を求めて数日がかりで狩りに出かけてゆく。だからワイバーンの動向さえ心得ておけば、魔境地帯は通常の森以上に安全な場所となる。ロディウスはそれを心得ていて、ここを住居に選んだに違いない。

シーグは森から果実や野草をいつもよりも多めにカゴに詰めていた。明日か、明後日にはワイバーンが帰ってくるだろう。しばらくの間、森に出かけられない日々が続くからだ。

魔境での食物は慎重に選ばなくてはならない。魔境の植物には特別強力な毒を持っている種類もあるし、果実に見せた怪物の卵という可能性もあるからだ。

最も恐ろしいのは果物と似ている虫の卵だ。とろけるように甘いのだが種に見えるのが実は卵であり、腹の中で孵った幼虫はやがて宿主を食い殺す。夢中になって食べた後にロディウスに真実を告げられて、シーグは心底恐怖に震える日々を過ごした。

数日後、卵の部分だけ抜いて食べさせたので安全だとロディウスが笑いながら告げたとき、本気で師を怨んだものだ。

ロディウスは木の陰や、空の上。あるいは魔術で透明になって何時何処から監視しているか分からない。ワイバーンの巣穴の近くに迷い込んでしまったときなど、後ろからつけていたのに何も教えてくれなかった。怒り狂って追いかけてくるワイバーンの爪を、木々と茂みの間を縫って逃げている間もずっと見ていたらしい。

一度など、背後から突然姿を現して、杖でしたたかに殴られた時があった。

森の野草を根っこから引き抜いたときである。根こそぎに植物を刈ると、次の芽が生えてこなくなるからなのだ。それは森に住むものの常識なのだという。

知識は豊かで、魔術師としての底は知れないし、戦士としても相当の使い手。あまたの王侯貴族が陣営に招こうとしながらも、叶わなかった賢者。しかし、その正体は偏屈者の性悪爺である。

痛めつけられながらも鍛えられ、日々強くなっているという確かな手ごたえはあるから、感謝する気持ちはかろうじて生まれている。しかし、冗談で人を絶望に陥れて心底楽しんでいるのは確かだ。そんな人物に、尊敬する気持ちなど起こりようがない。

メティス王国の危機を救った時、イービルスレイヤー（邪悪を制するもの）という称号を受けた。しかし、これも人々の期待を大きく裏切っている。

「邪悪とはワシが気に食わないやつの事だ。別に正義を行うというわけではないぞ」

と、言っていた。「だから、ワシの機嫌をそこねると大変な事になる。自分でも想像がつかないくらいだ」、とも。

楽しくなるの間違いだろうに、とシーグは思う。

乱世において敵にすれば恐ろしく、味方にできれば心強い。しかし、平和の時代には身近にいるすべての人の脅威となる男。

詩人がそんな評価をしている理由を、シーグは心の底から納得していた。

冬も終わりに近づいており、雪解けも順調に進んでいる。凍結した川の表面を、岩で砕いて水を汲む必要もなくなった。吐く息が白さを失い、雪がなくなるのもあと少しだろう。

最も水晶連山は、いつでも白さを失う事はない。山脈には水晶のような永久氷壁がそびえ立っている。それを超えれば剣のように切り立った岩壁が続き、その後には塩の原が延々と続いている。更に奥地に進むと腐臭漂う毒の沼が広がり、溶岩が川となって流れている場所に出るという。

まさに冥府のような場所であり、邪悪の怪物たちはここから湧き出てくると人々は信じている。シーグもそう思っていたのだが、魔境に住んでからそれが間違いであると気づいた。

ドラゴンや巨人といった怪物たちだけが、水晶連山を住処としている。正確には、神々にさえ例えられるような特殊な存在でしか住めない厳しい場所なのだ。

なぜなら、怪物達も食べなければ生きてゆけない。血肉をもった生物が、勝手に湧いてくるという事はないのだ。水晶連山は食料に乏しく、食欲旺盛なゴブリンやワイバーンが暮らすには不向きなのである。

水晶連山を背後に臨み、ワイバーンの巣穴の近くにあえて隠れ家を作れば、通常の森よりもはるかに安全な暮らしが約束される。

存在自体がすでに脅威である人物は、魔境の脅威を利用して快適に暮らしていた。そのような人物と共に、シーグは４度目の冬を迎えようとしていた。

収穫してきた食材をどう加工して保存しようか。そんな事を考えながらシーグは隠れ家に帰ってきた。

樹齢千年を軽く超える巨大な樹木は、城砦さながらに巨大な枝葉を伸ばしている。その根元で押しつぶされたようなボロ家、それがシーグの住居だ。入り口は小さいが、部屋は木の中にまで続いていてかなり広い。

食物が満載した籠を背負ったまま、シーグは扉の取っ手に手を伸ばす。その時、パシリと火花が散ってシーグは思わず手を引いた。

「油断したな、阿呆めが」

心底楽しそうな、それ故に苛立ちをもたらす笑い声。上を見ると、巨木の幹につけられた窓からロディウスが顔をのぞかせていた。灰色のローブに身を包み、胸まで伸びる髭をたらした白髪の老人。手には節くれだった樫の杖。どこからどう見ても魔術師である。

シーグは敵意を隠さずに、師匠をにらみつける。そうすると、更に楽しそうな表情を浮かべるのだ。だからシーグは怒りを抑えて、無表情を装った。

「魔術を食らっておいて、自分の心配をせんのだな」

当てつけるような言い方。それで、シーグは自分に起こる変化に気づいた。体がゆっくりと薄くなってきているのである。

「さて、死ぬか生き残るか」
ロディウスは、杖をシーグに突きつけて宣言した。
「星見の座、ガレフに昇れ。１００数えるまでに、戦闘の準備を整えよ」
シーグは返事もせずに、言葉を最後まで聞く事なく動き出した。
まずは、目の前を扉を蹴り破り部屋の中に入る。籠を背中から落として、中から加工せずに食べられる果物や木の実だけを掴み取ってポケットに詰め込んだ。次に、水筒を掴み取って腰のベルトにつるす。こんな事もあろうかと、常に満タンにしておいたのだ。そして、窓際で干しておいた革鎧に手を伸ばす。剣は常に腰につけているので問題ない。
「なんだ、準備が整ったのか」
どういうわけか、耳元でロディウスが残念そうに呟く声が聞こえてきた。
丁度１０を数えた時、シーグは目の前が真っ暗になるのを感じた。
思ったとおりだ、ロディウスが予告どおりに試練を課すはずがない。いつでも何処でも、相手の度肝を抜かずにはいられないのだ。
だから、星見の座ガレフへたどり着くのも、ただの旅というわけには行かない。何か仕掛けが施されているのだろう。
シーグの予想は的中していた。気づいたときには、魔境の森の奥深くでゴブリン達に囲まれていたのである。

外伝　死の道を行く－3　狂騒開始

＊

『死の道』を奥へと進みながら、シーグは警戒を怠らない。
ゴブリンの住処を突き進むことは危険だ。なぜなら、数を増やすほどにゴブリンは凶暴になる。そして、そのゴブリンを倒して――同士討ちも含めて――も脅威は去らない。魔境地帯において満ち満ちる血の匂いは、別の強大な怪物を呼び寄せる事になるからだ。
たとえば、こんな話がある。ゴブリン討伐を目的とする騎士隊が魔境深くまで踏み込んだのだ。
万全の陣備えを行い、最強の騎馬隊を投入し、大規模な攻城兵器まで持ち込んだ討伐隊は見事に全滅した。ゴブリンから始まった戦いはオーガを呼び寄せ、次に巨大な蝙蝠や狼の群れとなった。昼夜問わずに行われた死闘の最後には、飛来したドラゴンがすべてを焼き尽くす事で終わりを告げる。
人が群れをなして魔境に踏み入るとき、怪物たちも結集するのだ。
ゴブリンはその前兆に過ぎない。そのために魔境の番人という別名までついている。少数で人里に迷い出てきたゴブリンと、魔境の中心で群れるゴブリンを同じに考えてはいけないのだ。
それを知った上でシーグはゴブリンの住処を突き進まざるを得なかった。
周囲は相変わらず薄暗いままだが、空を見上げると太陽らしき黄色い光が、鉛色の雲と瘴気と枯れた木々の間から見える。
先ほどまで行く手に見えていたガレフは、今では右手に臨む位置になっていた。街道はガレフに向かって直進しているのではなく、大きく迂回している。いずれ森の中を突き進まなくてはならなくなるだろう。
だが、森の中はゴブリンの巣窟となっているはずである。今も、

ぞろぞろと集まってきたゴブリン達が再びシーグを包囲しようとしていた。数は、見えるだけも軽く２０体。大柄の戦士程度には手ごわいと認識されているようである。

その時、シーグは脳裏に引っかかるものがあって、足を止めた。

ガレフは、一枚岩が空に向かって突き立っている。しかも、もろい砂岩ではなく強固な岩肌であることが遠目にも分かる。周囲を見回してみると、森のあちこちに巨大な岩があった。よくよく調べてみると、それは地面の下から張り出しているのだ。

岩はちょっとした家くらいの大きさがある。周囲の土を蹴ってみると、土は固い。そうとう早い段階で岩に行き当たるようである。

周囲を見渡してみれば、ガレフが近づくほどに木々の丈は低くなってきている。怪物の性質、特にゴブリンが好む場所を考えてみると、森の中が危険だと勝手に決め付けるのは、早合点ではなかったか……。

その時、耳を塞ぎたくなるような絶叫が森の中に響いた。グゥオーという、空気を揺るがすような大音声。

オーガだ。

それを聞いて、ゴブリン達は一瞬だけ怯えるようだったが、すぐに活気付いてきた。

オーガは人間に似た怪物であるが倍は巨大である。全身筋肉質で猫背であるために、ずんぐりむっくりとして見える。見た目の通りに怪力で、何でもかんでも食べる。強靭な肉体と鈍い痛覚が脅威であり、胸をめった突きにしても動きは衰えない。首を落とすまで、痛みなど感じないように動き回るのだ。

動きはノロマといっても差し支えはないが、尽きる事のない体力を持っている。

馬を相手に競争すると最初は当然引き離す事ができるが、昼夜問わずに走り続けていずれは追いついてしまうのだ。

そして、オーガとゴブリンの組み合わせは最悪である。

ゴブリンは犬以上に鼻が利き、オーガに馬が逃げた方向を伝える。

そして、腹が減るとオーガは同行者のゴブリンを食ってでも追跡を続けるのだ。翼でも生えていない限り、逃げ延びる事ができるはずがない。

戦闘においては互いに感化しあって、戦意を高揚させる。猪のように一直線に敵に向かうオーガを見て、ゴブリンは自分まで無敵になったように勘違いする。オーガのほうでも、周囲で歓声を上げるゴブリンに影響されて我を忘れるのだ。指がなくなろうとも、腕が落ちようとも。関係なしに息が絶えるまで戦い続ける。それはもはや狂気や狂騒というべきだ。

「逃げるか」

騎士ならば絶対にしない判断を、シーグは真っ先に選んだ。まともに戦って勝てる敵ではなく、勝った所で成果もないからだ。

再び響くオーガの叫び声は、さっきよりも近くなっている。２０体のゴブリンたちは、それが合図でもあるかのように一斉にシーグに向かって殺到した。

手に手に木切れや、石斧を持っている。武器がないものは石を握り締めて投げつけてきた。狙いは大半が外れていたので、シーグが避けるには問題ない。真っ先にシーグに駆け寄ったゴブリンの後頭部を陥没させるだけに留まった。

何体かは殺到する仲間たちに押しつぶされて倒れる。しかし、もはや仲間同士で争う様子もなく一丸となってシーグに襲い掛かってくる。

恐るべき突撃を、シーグは手近にあった岩に駆け上る事で回避した。勢いあまったゴブリン達は、岩に正面衝突して動かなくなる。

シーグは岩を当然乗り越えて反対側に逃げたはずだ。そう考えて、岩の下で待ち受けるゴブリンたち。しかし、シーグはいつまでたっても降りてこない。不思議に思ったゴブリンは、鼻をひくつかせた。そして、匂いを追ってはるか遠くを逃げて行くシーグを見つけたのだ。

シーグは大岩の上から木に飛び移り、そのまま枝から枝を渡って

逃げた。そして、遠く離れた場所に着地したのである。
後ろを振り返ったシーグは、押し合い圧し合いしながら走ってくるゴブリンを見て肩をすくめた。戦う以前の問題であり、仲間同士でぶつかり合っているのだ。お互いに足をもつれさせたり、捕まりあったりして次々と脱落してゆく。実際に追いついてきているのは、先頭にいる5体だけだ。
生まれ変わる事があっても、絶対にゴブリンだけは嫌だと思った。もっとも、怪物の暮らしを実際に見てみて、憧れを抱いた事など一度もないが。
行く手にも次々とゴブリンは現れる。少なく見ても５０体以上。シーグは数えるのも面倒になってきた。だいたい、オーガの咆哮で気持ちが高ぶっているゴブリンたちだ。完全武装の英雄達が待ち構えていても関係ないに違いない。
背後から轟音がして、木々をへし折りながらオーガが街道に飛び出してきた。頭がやたらと大きく、髪と髭は伸び放題。大きな口に肉食獣のような鋭い歯。全身筋肉質で盛り上がった肩の筋肉は首を隠すほどだ。
腰は曲がっており丸く腹が突き出ていて、裸同然の格好に申し訳程度の腰布をつけている。肌が岩壁のように見えるのは、垢や土が層になって固まっているからだ。その上にカビやコケが生えていて、羽虫がたかっていた。
足元にはその衝撃で吹き飛ばされたゴブリンが痙攣している。こんな酷い目にあっていながら、どうして一緒に戦おうなどと言う気持ちが生まれるのか検討もつかない。
怒涛の勢いで石畳を砕きながらオーガは近づいてくる。荒れた道をものともしないオーガ。シーグは街道沿いに進む事をあきらめて、森の中に飛び込んだ。
木の上から武器を振り下ろしながら飛び掛ってくるゴブリン。しかし、シーグは走る速度を落とさず走り抜けるだけでよかった。目測を誤ったゴブリンは、シーグの後方で地面に叩きつけられ、後か

らやってきた仲間に踏みつけられた。
森の中は思った以上に走りやすかった。石畳が剥がれて、乱れに乱れた街道よりもむしろ走りやすいくらいだ。シーグは生い茂る茂みの中から目ざとく獣道を見つけ出すと、背後に迫るゴブリンから更に逃げた。
一枚岩の山や丘が聳え立つ場所は、地面に広く岩盤が横たわっている証拠なのだ。それが、年を経るごとにゆっくりと隆起してゆくのだという。ガレフもまた、そんな風にして出来上がったのだ。
いつだったか、魔術師の女の子が誇らしげに話してくれた。聞きもしないのに勝手にまくし立てられて、覚えるつもりもなく聞き流していたつもりなのに鮮明に覚えている。
誰からも期待されていた彼女を、狂気の縁に追い落としたのが自分だからか。
後悔に捕らわれている暇はない。獣道の先に5体のゴブリンが待ち構えていた。しかし、冷静に観察するとキョロキョロと周囲を見回している。オーガの咆哮に気分を高揚させても、孤立してしまっては臆病に戻ってしまうようだ。
剣を片手にまっしぐらに走ってくる人間は、番犬をはるかに超える脅威であるらしい。ゴブリン達は目をつぶって、石斧を振り下ろす。シーグはそのゴブリンの肩を踏み台にして飛び越すと更に先を急いだ。
背後に鳴り響く轟音。何かが木っ端微塵に砕ける音と、メリメリと木が折れる嫌な音が続く。背後を振り返ると、オーガが森の中に入ってきていた。
茂みを踏みつけ、枝葉を散らし、時には木をへし折って一目散に追いかけてくる。オーガが文字通りに切り開いた道を、ゴブリンたちの群れが続く。考えてやっているとは思えないが、抜群の連携だ。
困った事に、人間にとって歩きやすい道はオーガやゴブリンにとっても同様だったのである。
空気を震わせる怒号と、地面を揺らす足音と共にオーガは、目を

真っ赤にして迫ってくる。
　詩人たちが子ども達の恐怖を煽るにはもってこいのシーンだ。それだというのに、まるで人事のように冷静になってゆく。いつ何を仕掛けてくるか知れない陰湿な師匠に比べれば、魔境の怪物の単純さには安心感さえ感じる。
　しかし、このまま逃げ続けても、追いつかれてしまうだけだ。身軽で素早いといわれた事はあるが、馬よりも速く走れるわけではない。
　オーガの場合、ゴブリンと違って木の上が安全とはならない。岩を投げてくるか、木そのものを倒してしまうだろう。オーガの怪力と、ゴブリンの圧倒的なまでの数。それらを前にして小手先の剣術などものの役に立たない。
　オーガが一歩踏み出す事に木々は折れ、岩は砕けて飛び散っている。それらは当然のことながら、後方にいるゴブリンにたびたび直撃するのだ。３０を超えるゴブリンがすでにオーガの巻き添えを受けて倒れているだろう。そして、道行に広がる血の匂いは新たな怪物を呼び寄せるのだ。
　つまり、戦っても逃げても絶望的。万事休す。これがシャトランジ（王取り将棋）なら、すでに勝負ありというところだ。
　人事のように考えていると、森の向こうから鼻を突くような腐臭が漂ってきた。その時、シーグは脳裏に閃く事があった。

外伝　死の道を行く－４　弱者の戦術

＊

人が森に手を入れておきながら放置し、しかも怪物が住み着いた場所は決まって陰惨になる。シーグの行く手に広がる場所がまさしくそれだ。

砕け散った石畳が積み重なり、あちこちに小さな水溜りを作っていた。水溜りの底で落ち葉が沈み、鼻も曲がるような腐臭を放っている。本来は雨水が集まって小さな川を作っていた場所のはずだが、今では一面がよどんだ泥の沼地に変わっていた。

雨で流された石畳の欠片が集まってきて、流れを塞いでいるからだ。木々も水に流されてゆく石畳の破片に傷つけられたり、根元の土が削り取られてボロボロになっている。雨の時には流れない水がこの一面に溜まるのだろう。シーグの胸の辺りまで水に浸かった跡が見られた。これでは、どんな草木もまともに育ちようがない。わずかなコケが岩にこびり付いている程度だ。

「このようにして、森は滅んでゆく。魔境を広げているのは怪物かもしれないが、最初にきっかけを作るのは人間だ。だから魔境の縁で森を拓き、国を構えるのはそれだけで責任がある」

ロディウスはそう言っていた。レイザークはその責任を果たせずに滅んでしまったのだと。レイザークの公子であるシーグを責めていた。当時は苛立つだけだったが、実際にこの景色を別の感情が胸にこみ上げてくる。

しかし、オーガとゴブリンの迫ってくるので、感傷的な気分になっている暇などない。

「ったく。考え事する暇もないのか」

シーグは舌打ちしながら呟いた。

背後ではオーガがぬかるんだ地面足を取られながら、もたもたと

ついて来る。ゴブリン達も頻繁に足を滑らせながらも、懲りずに確実に進んできた。

だが、シーグは泥の中に飛び石のように突き出している石畳を飛び移りながら距離を空けてゆく。その時、瓦礫が崩れる派手な音がした。オーガが泥に足を滑らせたのだ。オーガの尻の下敷きになって、哀れなゴブリンは泥の中にめり込んでいる。

案の定、この地形はオーガとゴブリンにとって、歩きにくい場所であるようだ。早く逃げてしまおうと考えた瞬間、シーグは背筋にゾッとするものを感じた。

振り返るとオーガは手近にある木を引っ張っていた。木はオーガと同じほど大きかったが、根元まで朽ちていては雑草と変わらない。オーガは大きく振りかぶると木をシーグ目掛けて投げつけたのだ。唸りを上げて飛んでくる巨大な塊。風圧だけでもよろめきそうになる。

もっとも、狙いはいい加減だった。シーグの頭上をはるかに越えて跳んで行き、土と泥と石の欠片を跳ね上がる。顔の前に手をかざして守っていると、オーガはすでに次の木を引き抜いていた。投げ上げられた木は、シーグの少し右側に落ちた。どんどんと狙いが正確になってきている。

大型の投石器並みの飛距離に破壊力。非常識な怪力の持ち主は接近しなくても、獲物を潰す手段を持っている。

次に投げられた木は地面を転がりながら迫ってきた。ガラガラと音を立てながら、石畳を砕いて迫ってくる。飛び上がって木は避けたものの、石つぶてが飛んでくる。拳よりも大きな石が当たり、腕が痺れてしまっている。木の直撃を受けなくても、ただの皮鎧だけでは防ぎきれない。

それに足元がすっかり破壊されていて、道が出来ている。整地された道をゴブリンが悠々と進んでくるのだ。攻撃だけではなく、同時に進路の確保までやっている。

本当に何も考えずにやっているのか、それとも自分にツキがない

だけなのか。足を滑らせて、よろめいたシーグを見るとゴブリン達は喝采を上げた。

オーガは4本目の木を引き抜いて投げつける。石畳が粉砕され、渇いてこびり付いていた土を巻き上げる。視界が、もうもうと立ち込める土煙に覆われてしまった時、シーグは一か八かの勝負に出る事を決めた。

オーガはご満悦であった。

ちょこまかと逃げる人間に、5本目の木を投げつけたからだ。そのうち、あの人間はぺしゃんこになるだろう。

ここには、投げるものが山ほどある。いちいち、やかましく喚くゴブリンを投げる必要が無いのはいい。ゴブリンは投げるときにうるさいし、いちいち暴れるので狙いが定まらないのだ。

枯れ木や岩は動かないし、ぶつかった時に大きな音を立てて砕け散る。それが、オーガにはとても面白かった。

喜んで、6本目の木に手を伸ばすと腹がグゥーと鳴った。足元に手を伸ばすと、ゴブリン達はワッと悲鳴を上げて逃げ出した。どうやら、腹の音を聞かれてしまったらしい。

仕方がないので、近寄ってきた奴を食おう。ゴブリンは食べる分にはいい。口の中に入れる分にはいくら暴れようとも関係ないからだ。

そう考えていると、土煙の向こうからやってくる影があった。

オーガは無造作に手を伸ばすと、何かがポトリと落ちる音がした。不思議に思って、手を戻していると赤いものがドクドクと流れている。指の数が少ない……気がする。

今度はうまく立っていられなくなって、オーガは手を突いた。引き抜いた木を杖代わりにして体を支えると、ずるりと滑った。こちらの手を目元に持ってゆくと、なんと丸い。指がすべて無くなっている。

一体何が起きたのか。オーガの鈍い頭では、理解するのに時間が足りなかった。

土煙の中で動き回る影にオーガは顔を寄せる。その瞬間、粉塵の中から白銀の光が煌いた。眉間に軽い衝撃を受けた後、オーガの視界は真っ暗になった。

しばらく時間がたって、土煙が完全に晴れた時。ゴブリン達は呆然として、オーガを見ていた。オーガは巨大な手足と頭から大量の血をドクドクと流し、痙攣していたのであった。

外伝　死の道を行く－5　平穏は災厄の前兆

＊

ゴブリンの追跡を完全に振り切った所で、シーグはようやく足を止めた。

後方は騒がしくなっていた。遠目には点にしか見えないが、翼を持った怪物が集まってきている。流されたゴブリンとオーガの血に引かれて、腹をすかせた魔境の生物が集まってきているのだ。

ひときわ大きな蝙蝠のような怪物はワイバーンに違いない。もしも、隠れ家の近くに住んでいたワイバーンだとしたら、ずいぶんと遠出をしてきている事になる。最も、怪物の区別などつくはずが無いが。

シーグは流れる汗を拭いて、息を整え、水筒を取り出して口につける。食欲は無かったが、ポケットの中に突っ込んでいた木の実を取り出してかじる。その間も、足を止めずガレフに向かって速足で歩く。

保存に向いた木の実はパサパサしていて、硬くて苦かった。もっと甘い果物を探しておけばよかったと後悔したが、冬がようやく去ろうとしている今ではそんな果物を見つける事は難しい。だったら、せめてハチミツだけでも……。

考えても意味が無い。シーグは木の実を口の中に入れた。食えるものがあるだけマシだと思わなければ。何よりも水をたくさん持ってきたのは正解だ。魔境地帯の水などを飲めば、無事でいられるか分からない。

「本当に、運がよかったな……」

シーグは先ほどの戦いを思い返して、独り言を呟いた。

沼地を見つけたまではよかったが、オーガの怪力があそこまで非常識だとは思っていなかった。もっとも、むやみやたらと木を投げ

つけてくれたからこそ、土煙が巻き上がったのだ。
それが姿を覆い隠すと同時に、ゴブリンの鼻を無力化してくれた。だから、オーガに攻撃を加えた上で逃げ延びる事ができたのだ。
もしも、雨のすぐ後で泥が渇いていなかったら。もしも、木が引き抜けないほどに根が張っていればどうなっていたか。あるいは、オーガ自分から無防備に手を伸ばしてくれなければ、手と足の指を切断する事はできなかっただろう。
シーグは鞘に収めたショートソードを見た。手入れを欠かさず鏡のように磨いているが、刃こぼれを起こしており、先端はわずかに欠けている。オーガの指や頭蓋骨は、鉄鎧並みの強度があるようだ。
「攻撃した方がこれだからな」
シーグはため息混じりに呟いた。
呆れるほど強靭さを持つ怪物。人間は哀れなほどに戦闘力で大きく劣る。武装は人間が怪物と渡り合うために不可欠な条件だ。たとえば、巨大な剣、騎馬の勢いを生かしたランス、近寄らずに攻撃できる弓。
しかし、自分が使う武器はナイフとショートソードときている。こんな貧弱な武装では、怪物どころか家畜相手にも遅れをとりそうな気がする。
「魔術の武器なら違うのかな」
鉄の持つ鋭さと強度をはるかに超える金属を持つ剣。魔術によって、更に強化がなされており鉄板さえも紙のように引き裂くことが出来るという。更に呪文を唱えれば燃え上がり、雷撃を放つ剣さえあるらしい。
ロディウス・アクテは山を吹き飛ばす小手をレイザークの建国王に、空を切る剣をメティスの建国王に与えた。巷ではそんな伝説が流れている。おそらく詩人が脚色したデマに違いない。山や空を破壊できなくても、今の状況をもっと楽に出来るだろう。
しかし、ロディウスは魔術の武具どころか、剣や鎧さえも与えて

くれない。今もっている武具は、魔境の縁で集めた色々な素材と交換して、商人からようやく手に入れたものだ。

それに、魔術師に弟子入りしたというのに、魔術を一切教えてくれない。ロディウスと実戦まがいの組み手。命がけの模擬戦を通して魔術師と戦う方法を学んでいるだけだ。そもそも、才能が無ければ魔術師にはなれないとロディウスは言い張っている。

「貴様は自分に才能の欠片でもあると思っているのか、たわけめ。下らない事を考える暇があったら、せめてガリッポソの体を人並みにする事を先に考えたらどうだ、ああん？」

無いものねだりをすれば、ようやく自分の中で育ちつつある自信まで木っ端微塵にされるだけだ。ロディウスの毒舌は鋭くてしつこいのでタチが悪い。

シーグは剣を鞘に収めて、水筒をベルトに吊るした。とりあえずの脅威は潜り抜ける事ができたのだ。

オーガは倒れて、ゴブリンの追跡はない。そして、ギャーギャーと渇いた泣き声を放つ怪物は沼地の上だけを飛んでいる。返り血を浴びてもいないから、血の匂いを振りまきながら怪物を寄せ付ける心配もない。つまり、『血の経路』はうまく断ち切れた事になる。

いつの間にか、目指すガレフもほとんど全貌を見る事が出来るようになっていた。近づくにつれて、岩盤質の地面は更に多くなってくる。そびえたつ木よりも丈の低い茂みが多くなっている。

ガレフは魔境の象徴、死の道の果てに立つ冥府の入り口、レイザーク王国の巨大な墓標である。晴れた日の空、遠くにそびえたつ石柱見るたびに人々は魔境地帯の恐怖におののく。そして、王国の未来を占っていた場所が瘴気に覆われているのを見て、レイザークは滅んだのだと再確認するのだ。

魔境地帯の中枢に足を踏み入れているというのに、魔境ならではの陰惨な光景がむしろ少なくなっている。この矛盾にシーグは戸惑いを感じていた。

空を覆う瘴気も薄くなってきていて、太陽も明るい光を投げかけ

てくる。空気は清浄で風は心地よく、植物も乾いた血の色ではなく、本来の緑色に戻っていた。まだ相当に青いが食べられる果実まで実っている。

ここが魔境地帯である事を忘れてしまうほどの静寂。

いや違う。ここは魔境に沈む前のレイザーク。なつかしい故郷の姿そのままなのだ。このままガレフの向こう側に行けば、王都が昔のままの姿で残っているのではないか……。

シーグは自分の頭に拳を叩きつけ、思い切り髪の毛をかき回した。歯を食いしばって、深いため息を吐き、深呼吸のように息を吸い込む。

馬鹿馬鹿しい。一体何を考えているのか。

オーガを切りつけた時の感触はまだ残っているし、靴についた泥も間違いなく沼地をぬけたときについたものだ。そして、今朝のロディウスが見せた底意地の悪い笑みも覚えている。

陥落する城砦、逃げ惑う人々、背中につきたてられる刃、恩人の死、狂気の末に眠る少女。

それらの記憶が幻であるはずは無い。幻だったというのなら、この四年間の修行は一体なんだったのか。

シーグは気を取り直して、ガレフを見上げた。強大な石の柱は、太陽の光を受けて地上に巨大な影を残している。ガレフの周囲は岩盤が張り出していて、環状に木が生えていない。改めて周囲を観察したシーグは違和感を感じた。

あまりにも穏やか過ぎる。

魔境地帯で静かさは災難の前触れ。ロディウスはそう言っていた。確かにその通りだ。この数日間、ずっと平和だと思ったらこの有様である。あのジジイも静かなときには何かをたくらんでいるに違いない。

シーグは近くにあった巨大な岩を調べた。地面から生えるように突き出ていて、屋根のように張り出している。雨風を防ぐには理想的な形だし、奥も深そうだ。5体程度のゴブリンなら住んでいても

不思議ではない。そう分析していると、わずかな匂いが鼻についた。獣よりも、むしろ不潔な人間に近い。これは、肉食でも草食でもなく雑食の動物が放つ匂いだ。魔境においては、つまりゴブリンの事である。

つい最近までここに住んでいたのだ。それがどうして急に引越しをする事になったのか。魔境地帯とはいえ、異様なまでに集結していたゴブリン。寄り集まって生きる事が習慣となっているとはいえ、あまりにも多すぎた。それに、これほどに豊かな場所であるのに鳥の鳴き声が全く聞こえてこない。

数をなして群れる怪物は、強大な一体の怪物を恐れて逃げてゆく習性がある。丁度ロディウスの隠れ家のように。ガレフの周辺も同じ状況になっているとは考えられないか。

シーグはガレフの頂上をにらみつける。

頂上まで登れ、とロディウスは言っていた。ゴブリンの群れの中に放り込んでおいて、目的地には強大な怪物が住んでいる。いかにも陰険ジジイが好みそうな状況だ。

外伝　死の道を行く－６　星見の座の脅威

＊

ガレフの真下に差し掛かったシーグは、今までの違和感が間違いではなかったと気づいた。

周囲の岩肌には、雪が降ったのかと錯覚するほどに真っ白に鳥の糞が積もっている。目を凝らして糞を見てみると、比較的新しいものも混じっている。つまり、鳥達が姿を消したのはこの2、3日の間ということだ。

石の階段は、岩の塔の周囲を何周も回りながら頂上まで続いている。螺旋階段は、あちこちが崩れてしまっていた。特に3周目と4周目は人一人がかろうじて通れるほどの幅しかない。

とにかく、怪物の正体はオーガではない。あの巨体が通るにはこの階段は狭すぎる。シーグは気を引き締めて階段をのぼっていった。

最初の1周目で森の木々と同じほどの高さまで登る。まだ太陽は天頂まで昇っていない。傾いた日の光に照らされたガレフは、岩盤質の地面に巨大な影を落としている。まるで、森の中に立つ日時計のようだ。

2周目には、岩の裂け目に鳥の巣を見るようになった。しかし、鳥達の姿はない。鳥はしたたかな生き物で、都市だろうが野山だろうが何処にでも住みつく。怪物の巣の真上にさえ巣を作ることがある。怪物の視線にさらされようが、手も爪も届かない場所ならば、平気で雛たちに餌をやり続けるのである。

ここに住んでいる怪物は、鳥達の生活を脅かすことが出来る存在だろう。この状況が妖魔の正体を見極めるヒントになるはずだ。すくなくとも、人と同じような特徴を持つゴブリンではない。

3周目。時折崩れる足場を気にしながら進む。

落石によって崩れているようで、陥没している階段の真上には岩

が剥がれたような跡がついていた。
　下に広がるの岩の平原の中にばらばらになった骨が集まっている場所を見つけた。骨はバラバラになっていたり、異様な方向に足や首が曲がっていたりする。
　そのうち幾つかは人間のものだ。遺品である剣や鎧がバラバラに砕けて散らばっている。そして、他の骨からはやけに長細い顔、発達した四本の足を確認できた。
　馬だ。
　階段から落ちたのだろうか。いや、馬が鎧を着た人間を乗せて階段を昇るはずがない。それに、階段から落ちたにしては離れすぎている。これは、空を飛ぶ怪物に吊り上げられて、地面に落とされたためなのだ。捕まえた亀を空から岩に叩きつけて、殻を砕く海鳥の話を聞いた事がある。それを甲冑を着た人間で行ったのだろう。
　そして、あの鎧はレイザークの隣国、オースピニルの騎士のものだ。旅人が絶えて久しい魔境地帯に人と騎馬の死体があるのは、長距離を移動して狩りをするタイプに違いない。
　これほどまでに道の悪い場所に住み、鳥を追い払う。間違いなく怪物自身も翼をもっているのだ。
　国境など関係なしに、長距離を翼で翔ける怪物に共通の弱点。そこを突く事ができれば勝機はある。だが……。
　シーグは、ショートソードの柄を握り締めた。もしも、硬い鱗を持つ怪物なら、攻撃を当てても跳ね返されるだけかもしれない。いや、もはや戦うか逃げるかを選択する段階では無いのだ。
　不安定な足場のガレフ、そして森に逃げ込むためには岩場の道を走り抜けなくてはならない。翼を持つ怪物に本気で追いかけられたら逃げられない。
　ここまでくればやる事は一つ。頂上まで登り詰めて怪物を退治するか、逃げ出して怪物の餌になるかだ。
　ならば、迷うまでも無い。シーグは即座に決断すると歩を進めて、４周目に差し掛かった。

再び骨の積もる一角を下に臨む場所に来る。そこで、石段の裂け目に引っかかった羽を見つけた。手にとって詳しく調べてみる。

腕の長さほどに巨大で、雪のように白い。相当巨大な怪物だ。しかし、羽根が生えているなら、表皮が硬い鱗という事はない。そこに漬け込めば、勝機は十分にある。羽根は大きさこそ違うが、ワシに似ていた。それで馬を襲うとくれば。

シーグは脳裏に閃くものがあった。その条件をすべて満たす怪物に一種類だけ心当たりがある。

怪物の正体は――

その時、空気の流れが変わった。首筋が針でつつかれたようにチクチクと痛む。シーグは剣を抜き、迫る敵に備えて体勢を低くした。バッサバッサと風を乱す翼の音が近づいてくる。そして、螺旋階段の向こう側から、ワシの頭と翼とカギ爪、ライオンの胴をもった怪物が飛び出してきた。

グリフォンだ。

馬さえも軽々と持ち上げる巨大なカギ爪と、槍のように尖った巨大なクチバシ。上空から勢いをつけて繰り出される攻撃は、すべてが一撃必殺の威力を秘めている。

だが、攻撃は必ず近距離、こちらの剣も届く距離まで降りてくる。例えばドラゴンのように、空から一方的に炎の息を浴びせられる心配はない。

勢いをつけて滑空してきたグリフォンを、シーグは岩壁を背にする事で対応した。手前で急に勢いをなくしたグリフォンに対して、シーグは素早い踏み込みと同時に漸撃を加える。攻撃は尾羽をわずかにかする程度だった。グリフォンは翼を羽ばたかせて上空に逃れる。

ならばと、グリフォンは真上から急降下して爪を閃かせる。しかし、上から下に落ちるだけの単純な攻撃。シーグは、繰り出される爪を寸前でかわして剣を構える。正確には、落ちてくるグリフォンの前にかざして腰を踏ん張った。

腕にズシリと来る確かな手ごたえ。グリフォンの爪は前足ごと宙を飛んだ。グリフォンはたまらず、翼を羽ばたかせて空中に逃れていった。

怪物に共通の弱点は、重すぎる体ゆえに攻撃が直線的で力任せになる事だ。

こちらは自分の持ち味である素早さを生かし、本来欠点となると小柄さを逆用する。人の長所である知恵を生かし、正確に怪物の弱点を突くのだ。

こちらの足場は不安定だが、岩壁を背にすればグリフォンにとっても戦いやすい地形ではない。猛禽類は開けた場所で獲物に向かって一直線に滑空し、突撃の勢いをそのままに空へと戻る。

だから、獲物の背後に障害物があれば、勢いは殺されてしまうのだ。そして急な方向転換が求められる場合、巨大な体は仇になる。

己の力量を知り、場所を選び、戦法を考える。そうすれば脆弱な人間であっても、屈強な怪物と戦う事は不可能ではない。

シーグを油断ならない獲物だと考えたのか、グリフォンはゆっくりと飛び回っている。まるで、獲物を狙うライオンのようだった。しばらくすると、グリフォンは上空へと飛んでいった。

逃げたのだろうか。シーグは不思議に思って、ガレフの頂上を見上げた。グリフォンはガルフの岩肌を、負傷していない方の前足でつかんで、翼を羽ばたかせている。

一体、何をしているのだろうか？

しばらく見つめていると、グリフォンは爪で岩をくりぬいた。岩は真下にいるシーグ目掛けて真っ直ぐに落ちてきたのである。

シーグは背筋に冷たいものを感じて走り出した。背後で巻き起こる轟音と衝撃。逃げるシーグを追いかけて、グリフォンは先回りをして次々と岩を落として来た。狙いが外れても、螺旋階段を砕く衝撃に足をとられそうになる。ガレフの頂上近くは全体的に岩が緩んでいたのだ。４週目と3周目の階段が崩壊していた理由はこれである。

しかし、シーグは頂上目指して一目散に階段を駆け上がった。やがて、背後は静かになり追跡はなくなった。不思議に思ったが、考えてみれば追いかける必要など無いのだ。

なぜならば、シーグが走っているのはガレフの周囲を取り巻く螺旋階段。グリフォンは、一周して戻ってくるシーグを待ち構えていた。片方しか残っていないカギ爪で大岩を持って、シーグの正面に現れる。

猛禽類にとって絶好の位置関係。しかも、相手は飛び道具を持っているのだ。だからといって、足を止めれば狙い撃ちになる。背中を見せて逃げるのは問題外だ。

ならば、答えは一つ。

シーグはグリフォンに向かってまっしぐらに階段を駆け上がった。滑空してくるグリフォンが真正面に迫る。恐怖が体中を駆け巡るが、それも一定を超えると全身が急に軽くなってくる。

「一撃必殺、神速果断――」

呪文のように呟くと、体の隅々まで力がみなぎってきた。その瞬間、恐怖は闘志へと変化する。そして、精神を削り取るような緊張感が、洞察力を増すのだ。グリフォンの羽が風になびき、羽ばたきによって砂埃が舞う。シーグはその一瞬一瞬の出来事を、まるで絵画を見ているかのように捉える事ができた。

だから、グリフォンがカギ爪から岩を離すのもその数瞬前に気づく事ができた。あれを放り投げればグリフォンは再び空に逃げるだろう。

ならば、勝機は――

「恐怖の向こう側にある！」

シーグはショートソードを槍の様に構えて、突撃した。すると、グリフォン急に翼を羽ばたかせて体勢を崩した。その後に、投げつけられた岩が肩を掠めるほどの近くを通り過ぎてもシーグは前進をやめない。石のつぶてが頬に傷を作ったが、目を閉じることなく、グリフォンに殺到した。

グリフォンは空に逃れようと翼を動かす。しかし、階段を駆け上がったシーグは地面を蹴り、次に岩壁を蹴ってグリフォンと同じ高さに至る。そして、全身をぶつけるようにして翼の付け根に深々とショートソードを突き立てたのである。

耳をつんざく様なグリフォンの悲鳴、ガラガラと音を立てて岩壁を転がってゆく大岩。それらの轟音に怯む事も無く、シーグは柄まで埋まったショートソードをグルリと一回転させた。刃が肉を巻き込み、体の内部をズタズタに引き裂く。

グリフォンは鋭いクチバシでシーグを貫こうと首をかしげた。シーグは剣を離して体を落下させたが、矢の様に放たれる鋭い突きはそれよりも素早い。

シーグは体をクルリと回転させると、突き刺した自分のショートソードの柄に向かって蹴りを放った。当然落下の速度は速くなり、グリフォンのクチバシは空を裂く。

受身を取って転がったが、ここは階段の上。背中をハンマーで何度も殴られたような衝撃が走るが、シーグにはそれが人事のように思えた。戦闘の緊張感で痛覚が麻痺しているのだ。剣を失ったシーグは腰のベルトからナイフを抜いて両手に構える。

一方、大きく体勢を崩して階段の上に立つグリフォン。こちらも怒りのあまりに痛みなど忘れているようだ。自らの命を投げ捨てても、相手を殺そうという怪物の本能をむき出しにシーグをにらみつけている。

バサバサと翼を羽ばたかせ体勢を立て直したグリフォンは、シーグに襲い掛かってきた。翼とクチバシ、片方のカギ爪と自らの体。すべてを攻撃に鬼気迫る決死の突撃。圧倒的な体重で圧し掛かり、なだれ込む勢いでシーグに迫ってくる。

しかし、シーグの研ぎ澄まされた洞察力はグリフォンの隙を速やかに発見し、同時に攻撃に移った。

両手からほとんど同時に投げつけられたナイフは、グリフォンの両目に見事に突き刺さったのだ。そして、通路一杯に体を広げて襲

い掛かってくるグリフォンから逃れるため、シーグは階段から飛び降りた。

視覚を失い、狂騒に捕らわれたグリフォンは螺旋階段を一直線に進んでいったが、当然道は途切れる。グリフォンは空中で体勢を立て直そうと羽ばたくが、大きく右――傷ついた翼の側――に傾く。その後、鳥ならではの甲高い鳴き声を上げて落ちていった。しばらくしてから、地面に激突する鈍い音が聞こえてきた。

グリフォンは、今まで自分が食らった獲物達と同じ運命を辿ったのだ。

外伝　死の道を行く－7　ひたむきさの行方

＊

シーグはガレフの岩壁につかまったまま、落ちて行くグリフォンを見届けた。

ズシーンという、巨大な怪物が地面に激突した振動はガレフ全体を揺らしたように思える。戦いには勝利した安堵感で全身が脱力して溶けてゆきそうだった。しかし、ここで力を抜けばガレフの下に真っ逆さま。グリフォンと同じ運命を辿る事になる。

シーグはゆっくりと、しかし確実にガレフの岩壁を伝って螺旋階段へと戻った。そして、階段の上に腰を下ろす。戦いに没頭した後は、決まって疲労感が突き上げてくる。

頭の中が無くなってしまったのではないか。そう思える空虚感がある一方で、このまま横になってしまいたいと思うほどに頭が重く感じる。太陽はまだ南の空へと昇ってゆく最中。まだ、朝といってもいい時間帯だ。それなのに、今すぐに眠ってしまいたいほどに疲れている。それに、強く打った背中が今になって痛くなってきた。

一息ついていると、チチチ、と。何かの鳴き声が聞こえてきた。

疲労の極にあっても、シーグの鍛え抜かれた戦士の本能は一瞬のうちに戦闘体勢を整えた。今は剣も持っていない。腰のベルトに刺したナイフだけで戦える相手ならばいいが――。

周囲に油断なく視線を走らせながら、泣き声の正体を探る。

鳴き声はどんどんと大きくなってゆく。数も一つや二つではない。耳を澄ましていたシーグは突然緊張を解いた。そして、ナイフをベルトに戻す。

それと同時に、森の中からガレフに向かって一斉に鳥たちが飛び上がったのだ。グリフォンに怯えて、逃げ去っていた鳥たちが帰ってきたのである。

魔境らしからぬ風景に見とれていると、肩にちょこんと小鳥が乗った。ピーピーと可愛らしい鳴き声を上げて、シーグの頬を突きまわす。くすぐったさに顔を背けると、小鳥は素早く反対側の肩に乗り移ってしつこくクチバシで突いてくるのだ。

続いて、頭の上やかざした手の上にも鳥が次々と乗ってくる。競って鳴き声を上げる様子を見ていると、感謝でもしているかのように思えた。

「何をバカな事を……」

シーグは思わず呟いて首を左右に振った。

鳥が人間に感謝するはずがない。ここは人の姿が絶えて久しい魔境の中枢。無人島に住む鳥が、人の姿を見て逃げないのと同じなのだ。小鳥にとっては、シーグなど羽を休める木の枝にしか見えてないのだろう。それともさっき食べた木の実の匂いがまだ残っているのかもしれない。

現実的で冷めた事を考えながらも、シーグは悪い気分はしなかった。小鳥達をまとわりつかせたまま、螺旋階段を昇っていった。

ガレフの空気は清浄で、太陽の光は明るく、風は心地よい。眼下に広がるのは一面の森だ。死の道を走っていたときは、始終空が曇っていたのに、どういうことなのだろうか。

考えてみたが、答えは分からない。

だが、レイザークの人々は星見の座はこの世で最も空に近い場所と言っていた。この世の穢れから最も遠い聖地なのだよ。

太陽が輝くうちは緑の絨毯が広がり、夜になれば星の天幕が空を覆うのだと。そう詩人たちはガレフから見る下界の美しさを頻繁に詠っていた。

王都の玉座の間には、ガレフから見える景色の絵があった。今シーグの目の前に広がっているのは絵と同じ、詩人たちが詠っていた風景そのままである。しかし王国は滅び、国土は魔境に沈んだはずだ。どうして、何も変わらずにいられるのだろうか。

美しい光景に見とれながら、歩いているうちに7周目の終端に差

し掛かった。そこでシーグはピタリと足を止めた。目付きを険しくしたシーグを恐れて、肩に止まった鳥は空に逃げてゆく。

ガレフの頂上にはロディウスがいたのだ。座るに手ごろな岩に腰を下ろし、集まってくる鳥たちに木の実をやっていた。それは、今朝シーグが収穫してきたものである。

いいたい言葉を呑み込み、苛立つ気持ちを抑えながら、シーグは勤めて無表情を装った。そして、何気ない様子で歩いてゆく。

「クソジジイめ、こんな所で何をしている」

ロディウスはポツリと呟いて顔を上げた。表情をピクリと動かしたシーグを見つめながら、更に口を開く。

「不肖の師匠に言いたい事があるのではないか？」

「別に何もありません」

呑み込んだ言葉を先に言われて、シーグは憮然とした。

「文句の一つもないとは、試練が簡単すぎたかな。ワシも耄碌（もうろく）したものよな」

ロディウスは、猫背になって弱々しく咳き込んでいる。

「だったら、俺も（・）未熟者ですね。何度も死んだと思いましたから」

シーグは頑なまでに礼儀を保ったまま答えた。

「つまり、ワシの耄碌が原因で自分が死に掛けたとそう当てつけているのか？」

「・・・・・・」

シーグが黙っていると、ロディウスは楽しそうにクックックと嫌らしく笑った。そして、手に持った木の実を離れた場所にばら撒いた。鳥達は周囲に散らばった木の実を追いかけて散ってゆく。

「ワシは耄碌しておらんぞ」

「だったら、俺もきっちり試練を果たせたわけですね」

「残念ながらな。一人前であると認めぬわけにはゆくまい」

当てつけに対して、ロディウスが悪態を吐かない。日ごろからは考えられない反応に、シーグは警戒を強めた。そして、その予感は

外れてはいなかった。
「だが、一人前になった程度で、生き残れると思っているのか。お前はシージ・ペリラス（命取りの座）なのだぞ。貴様のために喜んで墓穴を用意しようとする奴等が溢れかえっている」
「産まれた時からそうですから」
今更言われなくても分かっている。と、シーグは心の中で付け加える。
「貴様がこの世に存在している以上、退治しようと集まってくる輩は山ほどいる。正義を勘違いするアホウ共の手に掛かるのが望みか？」
「そうならないように、鍛えていただきました」
「ほう、そんなに強くなったのか？」
「速くはなりました。特に逃げ足が」
「なるほど――」
「ガリッポソのクソガキにはそれ位しか取り得がありませんので」
師の言葉をさえぎって、シーグはぶっきらぼうに言った。ロディウスは薄笑いを浮かべたまま、再び群れてくる鳥達を見ていた。いつの間にか、シーグの周囲からは鳥がいなくなっていて、ロディウスの周りにだけ集まっている。
シーグがその事に気づいた途端、ロディウスは人を試す時特有の品定めをする目つきになった。
「暴言を吐くのは構わんが、我を忘れるのは感心できんな」
「敵を貶（おとし）める時は、味方を誉めるときよりも慎重になれ。そうでしたね」
「足元をすくうにしても、本音を引き出すにしても、自分まで浮き足立っていては意味が無い。まあ、よかろう。貴族どもには十分通じるだろうからな。もう、自由にするがいいぞ」
「え？」
シーグが間の抜けた声を出すと、ロディウスは間抜けを見る目つきで深々とため息をついた。修行の身にあるうちは、許可なく魔境

地帯から出る事を禁じられていたからだ。「自分の教えを受けたものが、未熟なまま勝手にうろつくのは我慢ならん」それがロディウスの言い分なのだ。

ロディウスは楽しそうに髭を撫でて、何か考え込んでいた。ろくでもない事を考えている証拠だ。シーグは何を言われても驚くまいと身構えた。

「お前の幼馴染に危機が迫っておる」

シーグが思わず目を見張ったのを、ロディウスは満足げに見ている。してやったりという表情だ。

「天空の水盤。そこを封土とする見者、サフィリア・フェルナンディ。彼女はメティオ・スマッシャー（隕石の強撃）につけねらわれておるのだ」

「・・・・・それが、いきなり自由をくれる理由なのですね」

「未熟を売り物にしていれば、厄介ごとのほうが遠ざかるとでも本気で思っているのか。人の世は非情であり、世界は悪意に満ち満ちておる。何だって、自分だけは特別に幸運だと信じられるのだ？」

それはロディウスの口癖だ。レイザークの廃墟で初めて会ったとき、最初に聞いた言葉でもある。だから、シーグは言い返す言葉をあらかじめ考えていた。

「しかし、無情でもなければ、悪意だけが存在しているわけでもないでしょう。世の中には、まっとうな情意が失われたとは思えません」

「なるほどな。それでは、サフィリアを狙う輩は自分たちがまっとうだと考えておるのかも知れんな」

「誰なんですか？」

シーグは押し殺した声で聞いた。すると、ロディウスは身震いをしておどけて見せた。

「怖い目でにらむな。ワシが仕向けたわけではないぞ」

「誰ですか？」

しつこく食い下がると、ロディウスは恐れるように身震いをする

ふりをした。その後、やけに楽しそうに口を開く。
「正確には個人ではなく、メティスの魔術師7人組だ。拠点、すなわち封土に引きこもり守る事が常であった魔術師とは違い、自ら打って出る異色の集団よ。今までに幾人もの魔術師を封土ごと破滅させておる」
「具体的にはどんな風に戦うのです？」
「自分で調べようとは思わんのか。あきれ果てた小僧だな」
ロディウスはほとんど面倒くさそうに投げやりに言った。
それに聞いた所で本当の事を言うとは限らない。と、シーグは心の中でつぶやいた。ロディウスが一度こういう態度を取れば、何をしようと口を割る事は無い。
「分かりました。自分で調べる事にします」
シーグは無愛想に呟いて、すぐに出発しようと歩き出した。しかし、すぐに我に返ってロディウスに向き直る。
「師匠、今日までありがとうございました」
「貴様に師匠などと呼ばれると虫唾が走るわ！　大体、ワシを師と呼べるほどに貴様が何かを学んだとは思えん」
「それでは――」
深く頭を下げ言葉を続けようとした矢先、杖の先で強かに額を突き挙げられた。
「おだてれば、何から何まで手取り足取り教えてくれると思っておるのか？　それに上っ面だけの感謝など、苛立たしいだけだぞ」
痛む額を押さえながらも言うシーグに対し、ロディウスはどこまでもそっけない。さすがのシーグも腹が立ってきた。とは言うものの、自分が鍛えられたのは事実だ。その恩に対して、何らかの感謝を示したい。このまま立ち去る事はシーグには出来なかった。
「恩義の押し売りの変わりに、一つ良い事を教えてやろう」
ロディウスはわざわざシーグの目元ギリギリに杖を水平に振った。
「これが墓標の上から臨む、冥府の入り口の姿か？」
「いいえ、そうは思えません」

「噂話を信用して、レイザークがおぞましい姿に変貌したと思い込んでおったのだな？」
「はい」
「自分の故郷にそんな勘違いが出来るとは正気とは思えん」
「そうかもしれません」
シーグ半ばいい加減に答えた。それを見て、ロディウスはつまらなさそうに言葉を止めた。
「ですが、何故なのですか。どうして、レイザークは魔境に沈まずにいられるのです」
「国が一つ出来て滅んだくらいで世界がどうにかなるものか。しかも、まだ4年程度の時間しかたっておらんのだ。レイザークが出来る前から、この世界には魔境があったし、人の住む場所もあったのだ。見よ！」
ロディウスは杖で、ガレフの眼下に広がる景色を指し示した。正確には、森の中に走る幾筋もの淀んだ色の帯だ。街道に沿って瘴気は広がり、森が枯れていっている。そして、街道から遠い場所ほど正常な森が続いていた。
まるで傷口が開いてゆくように、人の手が入った場所から魔境の進行が始まっているのだ。
「レイザークは魔境に沈んだ。しかし、国土のすべてがゴブリンやオーガの寝床になったわけではない」
「では、魔境の進行をとどめる事ができると？」
「しかし、このまま放置すれば酷くなる一方だ。傷口が広がり、やがて腐り行くように魔境に沈むであろう。一度傾いたバランスを戻すのは不可能に近い」
シーグが希望的な言葉を口にすると、ロディウスはすぐに悲観的な意見を言った。バランスを崩している点では、サフィリアの狂気も同じだと、口にはしないがそう例えているのだ。
だから諦めろと。
この人は始終そうなのだ。楽観的な人間を悲愴な気持ちにさせ、

決意をするものの意志を覆し、威張り散らす権力者を貶(おとし)めずにはいられない。

ここから、更に辛らつな毒舌が放たれる事だろう。シーグは心の準備を整えた。

「産まれの凶事、狂気の治癒、魔境の災厄。お前が立ち向かうものには形が無い」

予想通りにロディウスは朗々と不吉を語りだした。

「その正体は、毒のようであり、呪いのようであり、病のようでもある。事あるごとにお前をむしばみ虐げるだろう。そして困難は常に瘴気のように蔓延する。道行きは険しく、果てしなく、お前を道づれにしようとする者は絶える事が無い。一度の勝利がささやかであり、更なる災難の前触れに過ぎない事を思い知らされるばかりになのだぞ」

彫りの深い顔に浮かぶ表情は険しい。背筋を真っ直ぐに伸ばした堂々とした姿勢で、眼下に広がる風景を一望している。おりしも強風が吹き荒れて、ロディウスのローブを大きくはためかせる。

「それでも行くのか？」

言い終わると、ロディウスは目にも止まらぬ素早さで杖を突き出した。槍の切っ先のように鋭い杖の石突が喉元にあてられる。シーグはロディウスをひたと見据えたまま、ゆっくりとうなずいた。ロディウスは、ゆっくりと杖を引く。

「ならば、ひた向きでなければならん。困難のうちにあろうとも立ち上がり、悪意に包まれてもまっとうな人間であり続けよ。道は閉ざされ、天意に見放されたように見えても、人の意思によって希望に至るだろう」

シーグは眉をひそめて、ロディウスを見つめた。

「その表情では、どうせ半分も意味が分かっておらんな？」

「・・・・・・」

ロディウスは自分の眉をチョンチョンとつついている。図星を突かれてシーグは黙り込むしかなかった。

「そうやって、眉毛が一本に繋がっている時には、いくら考えた所で意味が無いな。だいたい、人の名前を一度で覚えた試しはないし、数を数えさせれば間違いだらけだった」

シーグが憮然として黙り込んだので、ロディウスは無遠慮に大爆笑をした。好き放題に勝手に言わせおこうと思って、シーグは目を逸らした。

「しかし、覚えの悪い人間が事をうまく運ぶ事もあるし、不可能と言われていた事が適う事も無いわけではないぞ。この死の道を走り抜け、ガレフにたどり着いた時の心を忘れるな」

呟きの後に、ガレフにいた鳥たちが一斉に空に羽ばたいていく。振り返ると、ロディウスの姿はすでに消えていた。

ガレフの周囲には様々な様々な色の鳥達が、群れをなしている。太陽の光に照らされながら、塔を取り巻くようにして飛んでいるのだ。まるで色とりどりのリボンが、ガレフを取り巻いているようだった。風は心地よく、空には雲ひとつない。

ガレフから見える光景が未来を示すと人々は言う。それが真実である事をシーグは願わずにいられなかった。

外伝　死の道を行く　―あとがき―

ロディウスの出す最後の試練をシーグが乗り越える話でした。

この後に、天空の水盤へと旅立ってゆきます。本編が始まる時とは、装備が違う、というか無い。天空の水盤への到着前に、もうひと悶着起きる予定なのですが、完成はいつになるか不明です。

シーグが鳥や自然のことに詳しかったり、レイザークの現状についてシーグが理解していることは本編でも出てきますね。

今回の話は戦ってばかりでした。

オーガ、ゴブリン、グリフォン。

ファンタジー世界では有名な怪物であり、神速果断のシャープネスの中でも度々登場する予定です。

ＴＲＰＧでも、これら怪物相手にどれだけ戦えるかで自分のキャラクターのレベルが上がったのか、プレイヤーとしての判断力が養われたのかを知るための基準となっていました。

圧倒的な数、強い腕力と生命力、飛翔能力。

四方八方から襲い掛かられては不利であり、人間はあくまで人間にすぎない。敵が手のとど家内場所から攻撃しようとする。

相手が本能だけで動いている存在でも、人間にとってはどれをとっても脅威となります。リアルに作られたゲームルールでは、単純にレベルだけで押し切ることが難しくなってゆきます。
装備なり、対応なりを考えていないと、高レベルのキャラクターでも危うい目にあってしまうんですね。

どちらかといえば、逃げと不意打ちが目立ったシーグ君でしたが、本編では、色々と変わってゆきます。

……あんまり変わってないかな？（笑）

作者としては、キャラクターの成長を楽しみながら書いています。読み手の皆さんに、キャラクターの成長が伝わることを祈りつつ、執筆を続けてゆきたいと思います。

2部ー24　グリム・リーパー（前書き）

割り込みで登録すると、更新リストに載らないし、お気に入りの方には新着情報が反映されないようです。
その一方で、ネット更新チェックには反映されてしまう。

スパムよろしく、携帯にメールが連打されても迷惑でしょうから、しばらくこのままにしておきます。
更新日時を変更せず、話数を「移動」できる機能がほしいところですね。

2部ー24　グリム・リーパー

＊

「くそ、どうなっているんだ」
濡れた服を蹴り飛ばしてライスは怒鳴った。着替えたばかりのズボンの裾に水滴が飛び散る。その後、八つ当たり気味にマントをつかむと、苛立たしげに身に着けた。
護民官の一人が驚きに目を丸くしている。ライスは部下の前では温和で知的な隊長を演じているからだ。立場によって態度や言動は変えるのは当然だと、ライスは胸を張っていう。だから護民官長として、ここまで無防備に荒れたことは一度もないのだ。
「あ……」
我に返ったライスは護民官をみつめたまま、しばらく動かなくなった。上司の間の抜けた表情を見て、まだ若い護民官はポカンと口を開けている。
「現状を報告してほしい。これから、どう動けばいいんだ？」
ベクターが聞くとライスは口元を押さえて、背筋を伸ばした。
「住人の避難を手伝いにゆけ」
ライスの言葉に、１０代も半ばの護民官は見てはいけないものを見たかのように、逃げ出すようにして部屋から出て行った。
「護民官からの報告によればオーガは合計１０体。ゴブリンを引き連れて動いている。アビシャルホルドを中心に８方位へ移動しているようだ。避難する人間を尻目に、まるで地区を包囲するようにだ」
「怪物の動きとは思えませんな」
ロイドはうなり声を上げる。彼はとっくに着替え終わっていた。几帳面な彼の性格を現すように、濡れた服も綺麗にたたんでいる。
怪物を閉じ込める結界は、巨大な魔方陣を必要とするので王都に数箇所しかつくれない。集中して配置する必要があるので、開放さ

れた怪物が同士討ちになる問題が残されていた。だから、サモニング（召還）の系統の使い手が、数体を魔術によって呼び出して支配するのが限界だった。それが軍隊のように統率された動きをしている。オーガもゴブリンも組織だった動きとはまるで無縁の怪物である。

「ライス、８方向といったな。ならば、ここにも向かっているのだな」

「オーガ３体とゴブリンの群れがまっすぐ向かっている」

「到着までの時間は？」

「……しまった！」

ライスは叫びながら、勢いよく扉を振り返った。と、同時に建物の外から悲鳴が上がる。

ベクターが扉を開けて外に出ると、子どもと女性の甲高い悲鳴が巻き起こっていた。

はるか前方で、建物の屋根が空を飛んでいる。３０歩ほど前方で、見当違いの方向に飛んでいったが人々を恐怖に陥れるには十分だった。数名の護民官と、民間人が通りを避難している途中であり、建物を壊しながら直進するオーガたちの群れと鉢合わせとなったのだ。

轟音と共に正面にある建物の壁が吹き飛ぶ。新たにできた道からオーガが顔をのぞかせ、ゴブリンたちが雪崩のように迫ってくる。

普段は臆病なゴブリンも、オーガが一緒にいると途端に好戦的になる。オーガも、周囲で騒ぎ立てるゴブリンに感化されて凶暴になる。怪物の中でも最悪の組み合わせなのだ。オーガとゴブリンが現れた戦場は間違いなく大混乱となり、秩序だった行動が意味をなくす。

女たちは悲鳴を上げ、子どもは声も鳴く立ち尽くし、男は震えながらも怪物に立ち向かおうとする。しかし、長剣やナイフで立ち向かえる相手ではない。

オーガが、半壊した建物を蹴り飛ばしながら進むうちに、何体かのゴブリンが踏み潰され、瓦礫の下敷きになった。それでも、ゴブ

リンは全く気にせずに殺到してくる。オーガを止めない限り、この暴走は止まることはない。しかしオーガまでの距離は５０歩、通常の魔術の射程外だ。

だから、ベクターは杖を掲げ、片方の手でバックルを握り締めた。３色の光がベクターの全身から放たれる。エンハンスの紫、サモニングの橙、エンチャント黄、はひも状となり、互いに絡みあってゆく。魔術師にしか見えない幻想的な光が織り成したのは、人の背丈ほどもある巨大な刃である。交じり合った光は白い炎のように吹き上がった。

ベクターは刃の穂先に触れて、腕へと指を這わせた。紫色の光の紐が腕から全身へと伸びてゆき、体中に力が満ちてゆく。ベクターは大きく振りかぶり、槍投げの要領で杖を投げつけた。

杖はバリスタ（大型の固定弓）から放たれた矢のように、一直線に飛んでゆく。狙いは外れずに、魔術の刃はオーガの胸に突き立った。しかし、屈強なオーガはわずかに揺らいだだけである。５０歩の距離を離れるうちに、魔術の刃が細っていたからだ。杖はオーガの胸に突き刺さったままである。

オーガは苛立たしそうに手近にある石の壁を力任せにむしり取って持ち上げる。殺意に満ちた視線がにらみつけるのはベクターだった。周囲には悲鳴を上げる人々が何人もいる。フィーリアの一つを投げつけてしまったベクターには、大きな魔術は使えない。

歯噛みするベクターの背後で、魔術の気配が急速に高まっていった。黄、紫、橙の光がロイドのかざした杖に収束する。そして、魔術師にさえ捉えることのできない無色の魔力が吹き抜けていった。

ロイドの魔術の直撃を受けて、オーガが大きく体勢を崩してしりもちをついた。ゴブリンたちの断末魔の悲鳴が通りにこだました。

殺到するゴブリンの群れを打ち払うように、ロイドは杖を横なぎに払った。魔力はベクターと人々の間を通り過ぎゴブリンたちの真っ只中で、竜巻となって発動した。ゴブリンたちは壁に打ち付けられ、空高く放り投げられる。そうでありながら、ベクターたちには

そよ風さえも届かない。魔術制御の見事さに、ベクターは目を奪われていた。

「今ですぞ！」

ロイドの声にベクターは我に返った。オーガが立ち上がろうとしている。

まだ、体に残るエンハンスの魔術を足に集中させる。一飛びで人々の頭上を跳び越え、2階のテラスを蹴りゴブリンの群れを飛び越えた。最後にはサモニングの系統で空間を操り、オーガの目前に水鳥のように舞い降りる。

オーガは怒りの咆哮を上げて、強引に拳を突き出してくる。ベクターはかわすと同時にオーガに向かって殺到し、身長に倍する高さを軽々と跳躍してオーガの肩に飛び乗った。そして、胸に突き刺さったままの杖を手に、再び魔術を発動させた。

オーガは体内で発生した魔力の刃に、通りを揺るがすような絶叫を上げる。しかし、それも長く続かなかった。ベクターが杖を横なぎに払い、オーガの首ごと肩を切断してしまったからだ。

ゴブリンもいつの間にか全滅していた。あるものは首をはねられ、あるものは手足を失っている。どの傷口も鋭利な刃物で切断されたようだが、血がほとんど流れていない。完成された風の魔術は、音も無く速やかに命を奪う。風切りの刃の切断面はひどく平らで血もほとんど流れないので、ばらばらにされた作り物の人形を連想させる。何十ものゴブリンの死体が転がっているはずなのに、陰惨さがなく現実味を感じさせない。いずれ覚めるであろうグリム（悪夢）であるかのように。

ベクターは杖を取り戻し、白い炎のように轟々と吹き上げる刃を消し去った。ロイドの見事な魔術と比べるとなんと不安定なのだろうか、とベクターは悔やんだ。

ロイドは５０歩の距離を離れていながら全く威力を失うことはなく、更に風上に向かって風を飛ばす。発動する場所さえも自在に操り、魔術師の視野によっても捉えることができなくなる。

魔術の弱点を消し去るのがトリプル・ステイシスである。つまり、壁を背にしたところで意味が無いのだ。フェイルリレイであのまま戦っていれば、確実に負けていたに違いない。

これほどまでに魔術を巧みに操れるものは、メティスの中では片手で数えられるほどしかいない。

ロイドは疲れ果てた様子でうつむいている。単純な疲労ではなく、いやな記憶を思い出させてしまったからだろう。ロイドは内戦時に王から離反した魔術師をことごとく暗殺し、王都のグリム（悪夢）と恐れられたからだ。

ベクターがライスの元に戻るころには、護民官もようやく混乱を収拾して指示を待てる状態になっていた。

「このまま、西へ逃れてくれ。湖まで出るんだ」

ライスは護民官たちに新たな指示を出している。民衆も不安な表情を浮かべながら、怪物たちの様子をなるべく見ないように一箇所に集まってきている。

「湖に船を待機させておくよう手配する。皆はそれに乗って――」

ライスはここで言葉をとめて、片手で顔を覆った。湖上も決して安全ではないと気づいたのだろう。言葉に詰まるライスに、ロイドが耳打ちする。

「船の件はなしだ。湖に沿って、学園地区に避難してほしい。フェルナンディ所属の学院を臨時の避難所とし、魔術師と護民官の守りをつける」

ライスが張りのない声で言い返したために、人々の表情からは不安が消えない。護民官たちも、表情の暗い護民官長をいぶかしげに見ている。

「怪物の群れが再びこちらに向かっている。ゆっくりしている暇はありませんぞ。一刻も早く避難してくだされ」

ロイドが人々に向かって声を上げる。

「学園地区へ逃げてくだされ、向こうからも援軍が来ますぞ」

ロイドの具体的な指示に人々はようやく動き出した。護民官が民

衆を誘導しながら、西へ向かって進んでゆく。
　ライスは表情を曇らせながら、イヤリングに向かって指示を飛ばしている。学園地区からの援軍について、ロイドに指摘されてようやく気づいたのだろう。
　あちこちに散った部下からの連絡を受け取り、戦場となる地区を把握するのが護民官長としての役目である。怪物の移動と住人の避難を鉢合わせにしてしまうとは初歩的なミスだ。何手もの先を読み、幾重にも策をめぐらせるライスらしくない。
「ライス、2体のオーガとゴブリンの群れは、まだこちらに向かっているのか？」
「南側の近いほうから片付けよう。そうすれば、南西への逃走経路を作ることができるからな。そうすれば、学園地区への避難も増援もやりやすくなる」
　明快とはいえない頼りない口調だ。指示を出すというよりは、口に出すことで自分自身の考えを確認しているように見える。普段のライスは寡黙で無表情を装っている。的確で短い命令で集団を掌握することに長けている。気の知れた人といる時や、追い詰められた時だけ言葉が多くなるのだ。今は明らかに後者である。
　平静を装っていても、レティシアやシンシアの様子が気になるのだろう。彼女たちの無事を知れば、ライスもいつものキレを取り戻すだろうに。
　クルアハン地区では、瘴気のような霧が漂い、路地が複雑に入り組んでいるために空は狭い。ここからでは、サ・フィールの様子を知ることはできないのだ。

2部ー24　グリム・リーパー（後書き）

ライスは、騒ぎを収めるが、騒ぎの中心にもなる人。という、感じですね。

一人になったり、落ち込んだりすると、意外ににもろい人かも。

いじりやす……じゃなくて、成長が楽しみな人です。

2部ー25　神速の閃光

一直線に走るサ・フィールの運河の上空をワイバーンは滑空していた。途中で運河に停泊している船に攻撃を加えては上空へと去ってゆく。そのたびに、倒れてきたマストに橋が破壊され、転覆した船が運河をふさぐ。鋭いカギ爪を建物に振るうこともあり、運河から南北に伸びる主道もどんどんとふさがれてゆく。道が寸断され、頭上からは頻繁に石や木が落ちてくるので、人々の避難は一向に進んでいない。

たった3体のワイバーンの出現によって、サ・フィールは大混乱に陥っていた。

宿屋は門戸を広く開けて逃げ惑う人々を受け入れ、雑貨屋は荷物を外に放り出して入り口にバリケードを作っている。勇気のある男たちは、逃げる事もそっちのけに下敷きになった人々を救出していた。

だが、ワイバーンは下界の混乱をあざ笑うように上空で大きく旋回し、崩れたかけた建物に向かって滑空していった。翼の音は遠くから響く悲鳴やすすり泣きを連想させ、泣き声はさびた鉄をすり合わせたいやな音に似ている。空の死神があらわれたとき、死を連想させる風音が満ちる。そして、恐怖に引きつる人々の悲鳴、警戒を呼びかける怒鳴り声をワイバーンの翼の羽ばたきがかき消してゆく。

ワイバーンは歓喜の雄たけびをあげ、恐怖で我を忘れ空を見上げるしかできない一団の魂を刈り取るため、死神の鎌を振り下ろした。

その時、一直線にカギ爪の振り下ろされる場所に自ら飛び込んだものがいた。光が弧を描きワイバーンのカギ爪が大きく宙を飛ぶ。痛みに暴れるワイバーンの尾が鞭のように振り上げたられたが、支えを失った旗のように空に飛んでゆく。地に伏すほどの体勢からの切り上げる一閃が、ワイバーンの尾を根元から切り落としたからだ。

ワイバーンは大きく傾いたが、なんとか体勢を持ち直して空に逃れるために翼を羽ばたかせる。

シーグはシャープネスを引き戻してた。突撃の勢いを落とさずに、瓦礫となった石壁に足をかけ3段飛びの要領で屋根の上に駆け上がった。着地と同時に駆け出して、高度を増してゆくワイバーンと併走する。ほとんど垂直にもたれ掛かったマストを踏み台にして駆け上がり、舞い上がろうとしているワイバーンの横手から飛び掛った。シーグとワイバーンが空中が交差する時、シャープネスの刀身が陽光を跳ね返した。

ワイバーンの頭が宙を飛び、盛大な水しぶきを建てて運河に着水した。シーグは空中で一回転してから船の残骸に軽やかに着地する。

急いで空に逃れようとしたのが仇になったのだ。猛禽類のように地上すれすれを滑空していれば、いかにシーグが俊足であったとしても追いつくことはできなかっただろう。

「あと2体……」

シーグはつぶやくと、暴れまわっているワイバーンをにらみつけた。黒い影が舞い降りるたびに轟音が聞こえてくる。サフィリアが生まれた時につくられ、サフィリアが育った町が破壊されている。

「急に走り出すものだから、驚いたよ」

突然の声にシーグはぎょっとした。いつの間にか、ジェイナスが背後に立っていたからだ。

ナイト・ロード卿は神出鬼没。軍勢を率いて、王都のあらゆる場所に姿を現す。その上、気配を消すのもアイフェ並みであるらしい。暗殺にこれほど向いた能力も無いだろう。

「君が角を曲がって見えなくなって、ようやく追いついたと思ったら、ワイバーンが倒されている。幻覚の魔術にでもかけられた気分だね」

ジェイナスは水路に浮いているワイバーンを物珍しそうに見ている。

「呑気に見物している場合ではないでしょう」

「瓦礫の下敷きになった人は救出しておいたよ。動けないものは遠くへ運んだし、自力で動けるものはシンシアが誘導している」
ジェイナスは優しげな口調で周囲を見渡す。瓦礫の下敷きになっていた人がいつの間にかいなくなっていたのだ。
「君を頼りにしているが、一人で戦えとは言っていない。少しは協力させてくれないか？」
「……」
穏やかになだめられて、シーグは一度剣を鞘に収めた。
「離れたまま倒す方法はありますか？」
「今の私には無いね。アクアランスも撃つことはできない。避難が終了する気配も無いな」
「では、接近戦を挑みます。ナイトロードの力があれば、俺を移動できますよね」
2体のワイバーンは一度攻撃を中止し、空へと飛び上がった。石造りの建物や船を攻撃したためにカギ爪が折れているし、翼もぼろぼろになってしまっている。だが、自らが傷つくことを恐れもせずに攻撃を繰り返しているのだ。
「空中戦は危険なんだけどね」
ジェイナスはぼやくように言いながらシーグの腕に触れた。すると、体の中身が全部吸い出されるような、吐き気を催す感触と同時に視界が暗転した。頭を殴られた後のようにふらつき、地面がなくなったように足元の感覚が無くなる。
隣でジェイナスが何かを言っているが、耳元で羽虫が飛び回っているような音しか聞こえない。平衡感覚がおかしくなっている。シーグは倒れそうになる感覚には逆らわず、素直に膝を突き地面に手を付いた。地面の位置を確認して体勢を維持する。
「そうそう、体は3点以上で支えればいい」
ぼんやりと見え始めた視界に、ジェイナスが微笑みながら立っている。
「たいした回復力だ。急なテレポートには、慣れていないとは卒倒

することもあるんだよ」

周囲には広い空が広がっている。どこかの屋根の上だろうか、と思いながら徐々に下に視線を戻すがいつまでたっても地面も壁も見えない。目端にメティスの高い塔がようやく見え始めた。自分の靴が見えた頃にようやく、眼下に広がるサ・フィールの町並みと暴れまわるワイバーンの姿を捉えることができた。ここは２０階以上の高さがある。だが、浮いているのではない。足元にはしっかりとした感触がある。

「そして、下を見た途端に落っこちることも少なくないのさ。君は両方とも合格だね、満点と言ってもいい」

ジェイナスはひげを引っ張りながら、楽しそうにシーグを見下ろしている。評価を下す教師の物言いに、シーグは苛立ちを感じた。

「戦術書に曰く、戦場では高所に陣取るべし」

ジェイナスは教師の口調で宣言した。戦術書が語っていたのは、丘や城壁の上に陣を敷くことであり、空中に行けという意味ではなかったはずだ。更に言うなら、この距離では剣も魔術も射程外である。

「ロディウス老師は、この記述に対してなんと言っていたかね？」

「これから倒す相手を見下すのは楽しくて仕方が無い……、と」

「他にもあっただろう？」

言葉に詰まったシーグをジェイナスは意地悪く促す。

「何とかと煙は高いところでバカを見る。舞い上がったアホウは救いがたいし、落下するアホウは救うにも値しない、とも」

「アホウにはなりたくないな」

ジェイナスは懐から一握りの小石を取り出すと、無造作に投げ捨てた。バラバラと落ちていく小石に杖を向け、ジェイナスは短くつぶやく。すると、小石は一抱えもある岩に変化し、眼下で町を襲うワイバーンの上に降り注いだのである。

運河の上空を飛んでいたワイバーンは全身に岩の直撃を受けて大きくよろめいた。しかし、滑空しながらゆっくりと体勢を立て直し

つつある。
「さすがに硬いな。その上に打たれ強い。どうしたものかな？」
ジェイナスは困った様子で、わざとらしく問いかける。
「打撃や突撃は有効ではありません。確実に部位を切り落とす斬撃で勝負を決めるべきです」
「だよね。じゃあ、ワイバーンの首が伸びてきたら切ってほしい。頼むよ」
ロディウスと同じでいきなり無茶を言う。正直腹が立ったが、ジェイナスがワイバーンが接近する機会をつくってくれたのは事実だ。
「分かりました。しかし、ワイバーンが落下した時に町の被害がでます」
「この区画の避難は済んでいる。元々人が少なかったんだけどね。安心して戦いなさい」
早口に言った後、ジェイナスはシーグの腕を杖でついた。すると、シーグの視野に色とりどりの光がうつる。シンシアがかけてくれたのと同じ、魔力探知の魔術である。
足元には十字の模様がゆっくりと回転しながら浮かんでいた。シーグとジェイナスが立っているものとあわせると合計で7つある。
「んで、この小便色には見覚えのあるだろう」
ジェイナスは着ているローブ――十字模様と同じ色――をこれ見よがしに叩きながら続けた。
「並列展開式、多層十字結界。ルパートも使っていた防護魔術だよ。マードックの輝かしい色彩を放つ、一族秘蔵の秘術なんだな」
嫌みったらしく言ってから、ジェイナスはくすくすと笑った。
「ジェイナス導師、俺は別に――」
「はいはい、話しは後でいいから。おやおや、ワイバーンが2体ともこっちに来たね」
ワイバーンは一直線にシーグたちの足元に迫る。もう一体は大きく迂回しながらゆっくりと、しかし確実に近づいてくる。
足場が不安定な場所での空中戦。長引くほどこちらの不利になる

のは明白だ。

2部ー25　神速の閃光（後書き）

ベクター、ロイドに続いてシーグも無双状態になってます。

ワイバーンは一章、ゴブリンは外伝で出てきます。

シャープネスを手に入れる以前のシーグの苦戦振りと比べると、今は段違いの戦闘力になってますよ。こと、戦闘に関してはもうヘタレじゃない、ですよね？

2部－26　魔術師の天敵

「そう、前のめりになりなさんな」

ジェイナスは気楽に言ってから、足元に迫るワイバーンを杖で指す。すると、3つの十字が重なってワイバーンの鼻先で動きを止めた。魔術師ならぬワイバーンは、真正面から十字に激突してしまう。上昇する勢いをそのまま受けて、ワイバーンは痛みに身をよじって進路を外れていった。

3つの十字は明るい光を放ってから、空中に溶けるように消える。

「まずは前方の敵だ。君は左の翼を攻撃してほしい」

水平の高さに昇ったもう一体のワイバーンが一直線に襲い掛かってくる。ジェイナスは杖を剣のように振り下ろし、3つの十字を縦一列に並べた。無造作に直進したワイバーンは右の翼が十字に引っかかり、空中で半回転する。シーグはわずかに身をよじり、剣を横なぎに払うだけで、翼の先端の鋭い突起を切り飛ばすことができた。

ジェイナスは足場を下げると共に上昇させて、落下してゆくワイバーンから逃れた。

「いい場所を狙う。あそこを無くしてはうまく飛べない。人間の手で言えば親指にあたるからね」

ジェイナスは呪文を唱えながら、空中を杖で指し示した。足場であり、壁でもある6つの十字が現れて、シーグたちの周囲を取り囲んだ。

「有利な戦場を設定するのが魔術師の闘い方だ。距離を開けながら、一手ずつ確実に積み重ねて優位を確保するんだよ」

ジェイナスはここで、肩をすくめた。

「とはいうものの、あまり期待しないでくれ。リーガル・バックラーほどの強度もなければ、展開も遅い。3枚並べても、10歩の距離で受け流すのが精一杯なんだ」

つまり、攻撃はシーグの役目だといいたいのだ。2体のワイバー

ンはキリモミ状態になりながらも体制をたて直した。ゆっくりと高度を上げながら、再び挟み撃ちになるように散開する。

「このままでは挟み撃ちだね」

ジェイナスはわざとらしく顔をしかめている。

「いえ、一体ずつ仕留める好機です」

「なら、突撃だ」

ジェイナスは隣の十字に乗り移った。そして、翼を傷つけたワイバーンの下へとすべるように移動する。一方、シーグの乗った十字は上空へと舞い上がっていった。

上下へと分かれた標的を見比べて、戸惑っている。それもそのはず。縄張りを独占し、いつも標的には上空から襲い掛かるばかりのワイバーンがこんな形で空中戦を挑まれることなどありえないからだ。

かくして勢いを失ったまま、下にいるジェイナスに向かって舞い降りる。ジェイナスは余裕の笑みを浮かべながら、杖を振り上げる。４つの十字がワイバーンの動きを完全に受け止めた。それだけでなく、両翼と両足の動きを封じて、空中に縫い付けてしまったのだ。

残る一つの十字は、逃れようとよじるワイバーンの首元の横にすべるように移動した。ジェイナスが言ったとおりにシーグの前に首が無造作に伸びてきたのである。シーグはシャープネスを大上段に構え、落下の勢いを生かして一刀の元にワイバーンの首を切断した。その後、あつらえたように配置された十字に着地する。

「言うことなしだね。さて、残るは一体だ」

ワイバーンに背を向けたジェイナスはパチンと指を鳴らす。するとワイバーンの動きを封じる十字が消滅する。その時、シーグは目の端に赤色の光がうごめくのを捕らえた。

あれはガリウスとの決闘で見たことがある。ブラスト（噴出）の系統。炎の属性、効果範囲は環状。

火球の魔術だ。

シーグは条件反射で飛び降りると、ジェイナスの背中に飛びかか

る。そして、老人の腰に手を回すと足場となっている十字の下にもぐりこんだ。

その瞬間、耳を劈く轟音と共にワイバーンが大爆発を起こした。爆風を受けて十字の放つ光は大きくゆがみ、ガラスの砕け散る音共に四散する。シーグとジェイナスは空中に放り出されてしまった。

しかし、ジェイナスが杖で円を描くと落下速度は瞬く間に遅くなり、足元に橙色の床が広がってゆく。しかし、光の色はにごり不安定にゆれていた。ジェイナスがひどく消耗しているためだ。

「……油断したよ」

いつでも余裕の表情を浮かべている老人が、苦しげにうつむいている。魔術の床も泥の上に立っているように頼りない。最後の一体となったワイバーンが不吉な風切り音と共に迫ってくる。それなのにジェイナスはうつむいたままだ。戦闘中に味方さえもからかう老人らしくない。つまり、今は自分が戦うしかないのだ。シーグはシャープネスを構えた。

「死ぬと同時に爆発するよう、火球の魔術を仕掛けていたんだね」

ワイバーンはシーグたちの遥か上空へと舞い上がっていく。一つ覚えの単純な攻撃だが、身動きが取れない今では脅威以外の何者でもない。今までの優位は、高度が対等かそれ以上であったからである。

それにワイバーンの上から覆いかぶさるような攻撃は落下の勢いを生かすと同時に、倒された時でさえ相手を爆発に巻き込むことになるだろう。

「圧倒的に不利だが、せめて足場を作る。数は三つが限界だ」

「ワイバーンを遮るように、身長の高さほどの差をあけて配置してください」

「一度踏みしめれば砕けるような代物だよ。攻撃を止めることはできない」

「かまいません」

何かを言いかけたジェイナスだが、口を閉じて杖を軽く振る。す

ると、シーグの思い描いていた場所に明るい光の板が現れた。大きさは手のひらほどで、湖に写る月よりも頼りない。そして、大きな影がシーグたちに覆いかぶさる。

ワイバーンは太陽を背に上昇を止めたからだ。逆行を浴びて、漆黒の影となった空の死神はシーグたちに狙いを定め、頭上から襲い掛かってきたのである。

さすがのジェイナスも恐怖の表情を浮かべていた。シーグの体にも戦慄で体が熱くなっていったが、同時に頭の中は急速に冷めてゆく。戦士としての訓練の賜物が、絶望することを許さないのだ。

ワイバーンはわずか一体。自分の手にはシャープネスがある。たとえ、爆発するとしてもベクターほど厄介な相手であるはずが無い。

シーグはカギ爪を振り下ろすワイバーンに向かって自ら飛び上がる。ジェイナスの用意してくれた一つ目の足場にのり、腰ダメに力を蓄える。パキパキと薄氷を踏むような感触が足に伝わってくる。ロディウスの訓練と全く同じだ。

空中で動きを止めたシーグに、死神のカギ爪が迫る。シーグは身をよじるが、完全に回避が間に合わず背筋に爪を受けた。奇しくも、天空の水盤で受けた傷跡を斜めに裂くように赤い筋が刻まれた。しかし、戦闘時の常として痛みは全く感じない。シーグは、二枚目の足場を蹴って首元に迫る。ワイバーンは翼を羽ばたかせ、シーグを吹き飛ばそうとする。しかし、シャープネスの一撃の前には、ワイバーンの翼など羊皮紙と変わることはなかった。シーグは左手でワイバーンの破れた翼を引っつかみ、更に体を押し上げた。そして、返す刀でワイバーンの首に付け根を槍のように串刺しにしたのだ。そして、体全体を大きくひねると共に落下する勢いを剣にのせる。ワイバーンは首から胴にかけて完全に切断され、空中で大きく体勢を崩してゆく。シーグはワイバーンの死体を蹴って、3枚目の足場に着地した。しかし、その瞳はいまだに戦いの色を失ってはいない。

ワイバーンの心臓で湧き上がる魔術の気配。見るからに危険な赤色の光は間違いなく火球のものだ。ジェイナスは自らに向かって落

ちてくるワイバーンを諦めた表情で、微笑さえも浮かべて見上げていた。

シーグは3枚目の足場を踏み込んだ勢いで、ワイバーンに向かって下降した。体全体を槍としてシャープネスを穂先として、赤色の光が持つ色のひずみに向かってまっしぐらに突っ込んだのである。

爆発を予感させる光の収縮。しかし、赤色の光はろうそくをかき消すように消え去ってしまった。シーグはワイバーンの体を蹴って、ジェイナスの隣に着地する。空の死神は加速しながら地上に向かって落ちていったのである。

「ディスペル（解術）……いや、不発させたのか？」

ジェイナスは目を険しく寄せて、シャープネスの刀身を見つめた。

「魔術は発動するまではただの光の塊。発動する前につぶせば、魔術は中断される。そうですよね？」

「だが、核が見えるのは未熟な魔術師の場合だ。私には何も見えなかったが……」

ジェイナスは「ああ」と小さくつぶやき、大きくうなずいた。

「色覚異常のなせるわざだな。常人には不可視の魔術の核も、君には丸見えか。まさに魔術師の天敵だね。今回の戦法は老師の指導の賜物かな？」

「薄氷を渡る事もしましたから」

「空中戦の訓練も万全なわけだ」

力なくつぶやいたジェイナスの言葉に呼応するように、足元がパキリと音を立てた。ジェイナスの魔術が限界なのだ。

「すまないね。空中に引っ張り出しておいて、このザマだ。君の前途に止めを刺すことになってしまった」

「いえ、俺が無茶を言ったせいです」

戦闘の興奮が冷めてゆき、死が目前に迫ってくるのを実感する。さほど強くない風だと言うのに胸の中が妙に寒くて、空虚さが広がってゆく。

リーザはきっと悲しむに違いない。戦いになるたびに目には動揺

が走り、皆が無事だったと分かれば心底安心していたから。
シンシアと別行動になってよかった。だけど、責任感の強い子だから、この事でひどく傷つくことは間違いないだろう。
アイフェはどうしているだろうか。一緒に組み手の訓練をすると約束したが、戻ってきた後に。
サフィリアは……。
シーグは、血がにじむほどに唇をかみ締めた。ワイバーンに裂かれた背中の傷よりも、唇よりも胸がシクシクと痛む。
狂気の原因が消えれば、目覚めるかもしれない。毒のようであり、呪いのようであり、病のようであるのがシージペリラスなのだから。
落胆した心を表すように、足元がスッとなくなる。空がやけに広く青く見えた。

2部ー27　スペルエンハンス

「あ、よっこらしょ」
ジェイナスは合いの手を打って気楽につぶやいた。すると、カカトに固い感触が触れる。脱力しきっていたシーグは尻餅をついてしまった。
「うん、中々の出来だ。硬く、平坦で、透き通っておる。安定した形状と色は、魔術の安定を示すものだ。床として傑作と言ってもよい」
足元には相当広範囲に薄い黄色の床が広がっている。
「……」
「うーむ、最もシーグ君にはこの傑作にさえ、色のひずみが見えてしまうのだろうな。生涯最高の作品だと言うのに、残念なことだ」
「あの……」
「異なる感覚や感性による、多方面からの分析。それこそが短所を取り除き、長所を生かして発展するための方法だ。統一された見解を持つ相違のない集団では停滞が起こるのみだよ。シーグ君はどう思う？」
「魔術が使えないんじゃないですか」
「魔術を使えないものを魔術師とは呼ばんよ？」
批判のために口を開きかけたシーグを、ジェイナスは杖を目前に掲げることで制した。
「剣で思い切り打ち合った後に手がしびれるだろう、あれと同じさ。ただし、痺れるのはこっちだがね」
ジェイナスは自分の頭を指先で突いた。
「手の痺れと同じく、一呼吸ごとに加速度に回復してゆくのだよ」
「……」
「とはいうものの、老人ゆえに無茶はできんて、ゴッホゴホ」
無言のままのシーグから目をそらし、ジェイナスは哀れっぽく咳

き込んでいる。
「頭じゃなかったんですか？」
問いには答えずに、わざとらしく咳払いを繰り返すジェイナス。
シーグが無視していると、急に耳元を押さえて真剣な表情になった。
「ああ。そうだね、上から見ているからよく分かるよ。タイミングはこっちが指示するから待っていなさい」
ジェイナスは咳をするのを止めて、サ・フィールの運河に停泊する船をじっと見ている。また、自分をからかうつもりかと思ったが、目線は視線とジェイナスを追ってしまう。
すると船の甲板を覆っていた布が取り払われ、巨大な紋様が姿を現した。五ぼう星と十字を組み合わせた紋様はアビシャルホルドの塔で見たものと同じである。
「召還の魔方陣！」
「大正解」
ジェイナスは杖で空中に二重丸を書いた。その周囲に、花びらを思わせる曲線を注意深く描いている。
「ラスティーの使っていたものと同じです。闇狼を呼び出すのでは？」
シーグの問いに、ジェイナスは空中に三角を描いた。
「それにしては大きいし、構造が平面すぎる。いいかいシーグ君、魔法陣にも特性がある。立体の魔方陣は異界に属する怪物。平面の陣形は常世に属する肉体を持った怪物を召還するに向くんだ。私が思うに、一体の巨大な怪物を呼び出すものだ」
「呼びだされる前に、倒すべきです」
ジェイナスは空中に三重の丸を描いた後、『よくできました』とルーン文字で描いた。杖の先から光がほとばしり、きらきらと輝く文字が空中に長い間残っていた。魔術を使うのに不自由がないのは確かだ。
そうしている間にも、魔方陣は明るい光を帯び始めた。召還が始まる前触れだ。

「ジェイナス導師！」
「あー、あー。ペンダントの機能を検査中。おー、レティシアだね。聞いてくれよ、最近の若い者は、どうも気が短くていけないねえ」
シーグの完全に背中を向けて、ジェイナスは殊更に声を張り上げて話す。
「言っておくけど、君のことを言っているのはないよ。君はいつでも落ち着いていて、聡明で美人ときている。私があと４０歳は若ければ、絶対に放っておかなかったよ。そこは笑うところじゃあない。酷いな、私はいつだって女性に関しては真剣なんだよ？」
ジェイナスは真剣そのものの口調で話している。魔方陣の放つ光強くなり、次第に四本の足と巨大な翼をもつ怪物へと変化してゆく。ワシの頭と翼とカギ爪、ライオンの胴をもった怪物に、シーグは見覚えがあった。
グリフォンである。
「ジェイナス導師！」
シーグが急かすと、ジェイナスは体全体でため息をついた。
「まだ早い。合図するまでじっとしていなさい」
いかにもやる気のなさそうな声でシーグに手を振る。そうこうしているうちに、船の魔方陣は、更に輝き始め今度は一抱えほどの小さな光をいくつも生み出してゆく。グリフォンは翼を羽ばたかせゆっくりと上昇してゆくのだ。
再び抗議しようとしたシーグは思わず言葉を飲み込んだ。ジェイナスがロディウスそっくりの薄笑いを浮かべていたからである。
「クロスボウ隊、一斉掃射」
ジェイナスの掛け声と共に、川沿いに並ぶ宿屋や通りからクロスボウの台車を押した護民官が飛び出した。上空にまで響き渡るグラークの掛け声と共に、グリフォンに向かって一斉に矢の雨を降り注がせた。２０を超える矢が雨のごとく降り注ぎ、グリフォンは猛禽類の甲高い悲鳴を上げた。湖上で戦った時よりも更に二回りは巨大なクロスボウから放たれる矢は、むしろ槍と呼んだほうが相応しい

威力がある。グリフォンは、大きく体制を崩して船に落下する。その衝撃で、船そのものが大きく傾き転覆してしまった。

しかし、すでに魔方陣から飛び出した光は空中に飛びながら、像を結んでゆく。そして、一抱えもある真っ黒なカラスへと姿を変えたのだ。耳障りな泣き声を上げたカラスたちは漆黒の瀑布となってクロスボウを構えた人々にむかって一斉に突撃したのだ。

弓と違って、クロスボウは次の矢を装てんするのに時間がかかる。ましてや、槍のごとき巨大な矢は小さな標的の場合にはあだになる。成す術もなく襲撃を受けるかと思ったがクロスボウの台車を放棄して、整然と退却する。建物にも速やかに木戸が閉じられていった。事前の命令が行き届いてたのは疑いない。

「さぁ、仕上げだ」

ジェイナスが穏やかに言うと、耳を劈く轟音と共に金色の光が空をなぎ払って行った。空に巨大な弧を描く黄金の軌跡に焼き尽くされ、あるいは衝撃に吹き飛ばされて、カラスたちは残らず運河に落ちていった。

魔術師の雷撃には違いないが、天空の水盤の戦いでサフィリアが使ったものよりも壮絶な威力。湖上のロング・レンジ・ギムレットさえも凌ぐ射程を持っている。

「これが、アクアランスですか？」

「いんや、違うよ。チェイン・ライトニングとスペル・エンハンサーが協力したのさ」

「シンシアと、セーラ・クラウディア？」

「おや、珍しい。一度で人の名前を覚えるなんて。あーゆー儚いタイプが好みなのかな」

ジェイナスはカラカラと笑いながら、シーグのほうを見ようともせずに勝手に決め付けている。

グラークを先頭にして護民官たちが転覆した船に乗り込んでいった。しかし、それはむしろ戦闘と言うよりは救助活動を言うほうが正しかった。

「さて、戻るとしようか」
ジェイナスは突然シーグの胸に杖を押し当てた。完全な不意打ちであったために、シーグはまともにうけて完全によろめいた。咳き込みそうになったとたん、視界が暗転する。ジェイナスがテレポートを使ったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3546e/

（旧）神速果断のシャープネス～（新）にて、改良版連載中～

2010年10月10日20時34分発行